
HERO's EPISODE ~ ヒーローズエピソード ~

ケン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HERO's EPISODE〜ヒーローズエピソード〜

【Nコード】

N2504S

【作者名】

ケン

【あらすじ】

八神 はやての幼馴染である『天川 統夜』が学園と戦場で大暴れする物語である。

しかし彼が追っている管理局の闇は世界を歪みつつある・・・歪みを破壊する為に蒼穹の死神・・・天川 統夜は戦い続ける。

龍の骨さんの小説であるBSAA学園と気力少年ダイチ！俺と四人の探偵と気力修行！、たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！に出ているキャラ、真王さんの作品であるリリカル銀魂 S t r i k e r s ！銀女神鎮魂歌！の一部のオリキャラ、黒龍さんの

作品であるリリカル銀魂ライダーに出ているキャラ、鳴神 ソラさんの作品である大乱闘スマッシュハーツブラザーズ出張版に出ているキャラが参戦しています。

主人公設定（前書き）

初めて執筆しますがよろしくお願ひします。
主人公設定ですがどうぞ！！

主人公設定

名前：天川 てんかわ 統夜 とつや

性別：男

種族：人族（仮）

容姿：肩まである金髪に蒼い瞳をし一見女に見える顔立ち

身長：175cm

年齢：16歳

魔力光：蒼

魔力：AAA（測定不能）

気力：AAA（測定不能）

霊力：AAA（測定不能）

（ ）内は潜在能力時

魔術式：レイヴ式

デバイス：アブソリュートエターナル（アーマードデバイス）

武器：合体剣

性格：少々熱いところと軽い戦闘狂だが無慈悲で冷酷な一面を持つ

趣味：ギャンブル

好きなもの（事）：焼き魚、パチンコ、牛丼

嫌いなもの（事）：理不尽な事

詳細：はやての幼馴染でなのは達と共に「PT事件」や「闇の書事件」を解決した青年。

種族は一切不明で異常な魔力と気力を持ち特殊な蒼い炎である『蒼炎』が使える。

闇の書事件後ははやてと共に管理局に入り特殊部隊に入ったが5年後にとある事件が起こり脱退及び辞職している。

現在は何でも屋及び管理局の違法研究施設を潰す仕事をしており、何も無い時は幼馴染である文乃、千世、希と一緒にストレイキャッツで働いている。

裏の事は文乃達は知らずストレイキャッツのオーナーである乙女だ
けは知っている。

主人公設定（後書き）

主人公設定がチートですが敵もチートになる可能性がありますので
ご容赦お願いします。

デバイスと武器、乗り物設定（前書き）

主人公が使う武器とデバイス、乗り物です。よろしくお願ひします。

デバイスと武器、乗り物設定

デバイス：アブソリユートエターナル（アーマードデバイス）

形状：赤と青が混ざった白いアーマー

待機状態：折り畳み式の蒼の携帯電話

搭載システム：BIES、FLS、MBS、MMS、オーシャンシステム搭載。

備考：管理局が開発した試作型アーマードデバイス。バリアジャケット一体型として開発されたものである。

現在は統夜の手によって強奪され改良されている。

武装は10翼の青い機動ウイング「アブソリユートウイング」

各ウイングに一基ずつ設けられたフライヤーと呼ばれる自律コントロール型の砲台「アブソリユートドラグーン」

腹部に大出力ビーム砲「カリドウス」がありBIESからのエネルギー供給により威力と連射性能は向上している。

左右の掌底に内蔵された短射程のビーム砲の「パルマフィオキーナ」これは主にゼロ距離戦闘時にその真価を発揮する。

左右の膝々爪先間に設けられたビームブレイドで攻撃する「グリフオンビームブレイド」

低出力と高出力の切り替えと連射が可能な二丁のライフル「アブソリユートライフル」

両肩にブーメランのように使えるビームソード「フラッシュエッジ」

アブソリユートウイングの右側に柄のみ収納されている刀身がエネルギー状の大剣「アブソリユートザンバー」

アブソリユートウイングの左側に折り畳み式の高出力ビーム砲が収納されている「アブソリユートランチャー」

両腰にはレールガン「クスフィアス」クスフィアスの上に一本ずつあるビームソードになるグリップ「アブソリユートサーベル」

「^{フラスター}BIES」はIESの出力を強化したシステム。

インフィニティーエナジーシステム

IESとはロストテクノロジの一種。無限の魔力を供給するものであり、カートリッジシステムよりも遙かに上の力が出す事も可能なシステムである。

フライヤーリンクシステム

「FLS」はアブソリュートドラゴンと呼ばれるフライヤーを自由自在に操る事が可能なシステム。

マッハブーストシステム

「MBS」は足や背中に備わっているブースターを限界まで使用できるシステム。

マッハミラーシステム

「MMS」は自分の残像を映し出す幻惑機能を持つシステムでMBSと連動する事が可能。

「オーシャンシステム」は色が赤と青が混ざった白いアーマーから青と白が混ざった真紅のアーマーに変化し攻撃力と機動性、出力が上がるシステム。

管制人格は女性で主に忠実な性格。

武器：合体剣

詳細：背丈より長い両刃の長剣、背丈より長い片刃の長剣が二本、片刃のショートソード二本、やや刀身が短い片刃の長剣の計6本で構成されている武器。

合体機構が備わっており背丈より長い両刃の長剣をベースに全て合わせる、片刃の大剣へと変わる。

状況に応じて使い分ける事が出来る。2〜3本だけを組み合わせ使用することもできる（ただしベースとなる背丈より長い両刃の長剣は必須）。

無銘だが兵装術式を編み込まれている為に恐ろしい程の切れ味と威力を誇る。

普段は愛用のバイク『バハムート』に収納されている。

名前：バハムート

形状：蒼の大型バイク（FFACのフェニルをイメージしたもの）

備考：ある武器職人が作った統夜専用の大型バイク。前輪両横に武

器を収納出来るスペースが有る。

普段の合体剣は分離し収納されている。

最大速度は300km。

デバイスと武器、乗り物設定（後書き）

まあ・・・こんな感じですがどうかよろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

最初は主人公と夜明け前より瑠璃色なの主人公が出てきます。
プロローグって短い方がいいのか分からないけど・・・宜しくお願
いします！

プロローグ

10年前に『開門』と呼ばれることとなるある遺跡から発見された2つの扉の解放により、神族が住う『神界』と魔族が住う『魔界』と呼ばれる二つの世界が現代の『人間界』と繋がった。そこは人間界にとって空想上の存在だったはずの『魔法』によつて支配された世界であり、その事実は物理法則で支配された人間界に住まう人々を驚愕させた。その後は三世界との交流を経て最終的に”三種族共存”の道を歩むことになり、やがて『神界』と『魔界』の住人たちが人間界へと移り住むようになる。

だが魔法は同様に、世界を混乱させた。魔法を使った犯罪が起こっても、各国は対処できなかつたからだ。

質量兵器の使用を禁じロストロギアを取り締まる時空管理局の介入により対処が出来た。

大昔に月に渡つた人々が作つたスフィア王国。数百年前に月と地球の戦争が起きたが、現在も地球との関係は冷え切っている。

歪んだ世界を破壊するべく立ち上がった蒼き戦士の物語が始まる・

月が見える夜の街で・・・

スバアンツ！

「ギヤアアアアア！！！」

人間ではない生物が少年が持つ大剣で真っ二つになつて絶命した・

？「よつと・・・」

肩まである金髪に蒼い瞳をした一見女に見える顔立ちの少年が大剣を片手に歩いていた・・・

彼の名は天川 統夜てんかわ としや・・・この物語の主人公である・・・

統夜「最近多くなつたな・・・悪魔や吸血鬼・・・」

大剣を背中に納めた。

いい満月だ・・・

？「こつちも終わったぜ。統夜」

統夜「遅いぜ。達哉！」

統夜が少年に呼んだ名前は朝霧 達哉。彼とは数年前に知り合い二人で夜の異端退治や何でも屋をしていた。

達哉「これからが大変になるな・・・」

使用した日本刀を鞘に収めた・・・

統夜「合体剣と『アレ』だけじゃ対処しきれないぜ」

合体剣を分離し停めてある黒い大型のバイクの前輪両横に武器を収めるスペースに全て収納した。

達哉「デバイスが必要になるな・・・そろそろ帰らないと・・・」

統夜「乗れよ」

バイクに乗っていた統夜が達哉に乗るように促した・・・

達哉「すまないな」

統夜「気にするなよ。振り切るぜ!!」

フルスロットルで発進した後達哉を朝霧邸へ送った後自宅へ帰宅した。

何でも屋である統夜の運命の歯車が動きだす・・・そして自分に隠された真実も・・・解明されるだろう。

プロロ・グ（後書き）

次の話からSHUFFLE!や迷い猫のキャラが登場します!よろしくお願ひします!

第一話「学校生活は恐怖とカオスになる事もある」(前書き)

統夜「さあ!! 始まるぞます!! 俺たちの物語が!!」

達哉「頑張るぜ!!」

稟「ああ!!」

文乃「統夜! まともに始めなさいよ!!」

希「いやあ・・・HERO'S EPISODE 第一話・・・始まる」

第一話「学校生活は恐怖とカオスになる事もある」

第一話「学校生活は恐怖とカオスになる事もある」

ジリリリリリッ！

天川邸と呼ばれる屋敷の一室から目覚まし時計の音が聞こえた。
ジリリリリリッ！

統夜「zzzzzz・・・」

我らが主人公である統夜は目覚ましを聞いていないのか熟睡していた。

これは仕方がないと思う。夜に異端狩りや何でも屋の仕事等をして
いるから・・・

バアンッ！

突然ドアが開かれ腰まである金色の髪に青い瞳をした綺麗な顔立ち
をした女性が部屋にやって来た。

？「兄さん！朝です。起きてください！！」

統夜「zzzzzz・・・」

呼びかけにも応答なし・・・

？「仕方ありません・・・」

部屋にあった辞書を手に持ち・・・

ヒュンッ！ドカッ！

落として頭にヒットした。

統夜「痛っ！？誰だ！！」

？「私ですけど？兄さん・・・」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

凄い威圧感で統夜に言った。

統夜「すまん・・・鮮華・・・」

少女の名は鮮華と言っらしい。

統夜は直ぐにベッドから起きた。

鮮華「朝ごはんが出来てますから着替えたら来てください」

統夜「へーい」

鮮華がリビングへ行った後制服に着替え洗顔し・・・朝食を食べた。

統夜「食った食った・・・さて・・・乗れ！鮮華」

家から出てバイクで登校する気だ・・・流石の鮮華も・・・

鮮華「はあ・・・分かりました。誰かさんのせいで遅刻しそうになりそうですけどね」

呆れながら兄に文句を言いながら統夜の後ろに乗った・・・遅刻しては元もこうもないからだと思う

統夜「出発進行！！」

フルスロットルで発進した。

途中で犬の散歩してた爺さんやランニングしてた中年のおっさんが驚いた顔をしていたそうなの・・・

「我は……親衛隊のマグナム酒井なり！」
統夜「ん？」

親衛隊と呼ばれる野球服に頭が可哀想なぐらいに禿げた男がいた。

統夜「まあいいや……どけ。タコ……てか親衛隊なら遠慮はないぜ!!」

バイクのスロットルを引き絞り更に速度を上げ、グングンと男との距離が縮まると前輪を上げた。

ドガア!

親衛隊である男の体が宙に舞う。それと同時にバイクで階段を一気に飛び降り宙に舞い追撃として親衛隊の顔面を蹴り飛ばしお星様にした。

統夜「イイツヤホッオー!! 決まったぜ!!」

声を高らかに上げて浮遊感を楽しんだ後に、バイクを横に倒し地面を滑りながら着地した。

統夜「楽しかったな。またやりたいぜ」

鮮華「人を轢いてるんですか!？」

後ろの妹様が統夜に文句を言っていた。

? 「統夜!？お前何してるんだよ!？」

? 2 「ひゃう!？」

? 3 「ちよつと!アンタ!？何朝から物騒なことしてんのよ?!」

? 4 「ビツクリするじゃない!!」
? 5 「にゃあ・・・物騒・・・」

男を跳ねた事などさっぱり罪悪感など持たずに良い笑顔でいる統夜の横に黒髪の青年が三人の女子を連れて慌ててやってきた。

統夜「いや〜面白く清々しい朝だな、稟、楓、文乃、千世、希」

彼の名は土見 稟。統夜の知り合いであり親友でもある。

稟「ああ、良い朝だなんて違うだろ!? 人を跳ねたんだぞ!？」

統夜「親衛隊の事か? 気にするな・・・俺は気にしない・・・」

文乃「アンタねえ・・・」

彼女は芹沢 文乃・・・統夜の幼馴染でありストレイキャッツで働いている少女。

千世「そうよ! 梅ノ森の執事であるアンタが犯罪を犯したら名誉に傷がついてしまうのよ!!」

文乃の隣にいるチビツ子・・・梅ノ森 千世は同級生であり文乃と同じくストレイキャッツで働いている。

千世「誰がチビツ子だ!!」

統夜「おいおい・・・大丈夫か? 千世。そんな時は親衛隊をこいつで轢いた後ガトリングとショットガンを用いてゼロきよ・・・」

笑いながらバイクを擦りながら言つと・・・

文乃「二回死ね!! 外道!! てか相変わらず過激ね!!」

楓「お、落ち着いてください・・・」

希と一緒に文乃を宥めている少女芙蓉 楓。稟の幼馴染。ちなみに芙蓉家は稟の居候先である。

希「にやあ・・・文乃、落ち着く・・・」

統夜「そうだぞ。俺は未来を切り開く為に行動している」

猫みたいな髪型をしている霧谷 希・・・文乃達と同じくストレイキャッツで働いている。

文乃「何が未来を切り開くよ・・・それはアンタの願望じゃない！」

千世「バイクに乗らないで私のへりに乗りなさい！」

統夜「あゝ悪いけどパスな。こいつは相棒みたいなもんでね。へりフライトは好きだがな・・・んじゃ先行くぜ」

ブロロロ・・・

愛機であるバハムートで鮮華を乗せて走り去った。

統夜達に通っているバーベナ学園ではバイク登校は禁止されているがそんな自由気ままな統夜は平然と破っているのは言うまでもない。

学園に着き・・・

統夜「よう。遅いぞ。土見夫婦、文乃、千世、希」

稟達を教室の扉前で待っていた。ちなみに鮮華は違うクラスである為いない。

稟「おい！？さり気無く夫婦って言わなかったか！？」

統夜「気のせいだ……」

楓「稟君と夫婦……稟君と……//」

文乃「大丈夫？」

統夜「心配するな。文乃よ……いつもの事だ。それより奴がいつものように待っている……」

扉の前に人影があつた。

稟「またか……」

統夜「てな訳でこれでやつちまおう。稟！」

足に力を込めながら稟が扉を開けた瞬間……

？「楓ちゃん！文乃ちゃん！千世ちゃん！希ちゃん！俺様の胸にようこ……ドガア！！……ガフツ！！」

眼鏡を掛けた男子生徒が現れたが統夜の蹴りで吹き飛んだ。

その後頭部を掴み腹部をコークスクリューをかました後教室の外へ投げ飛ばした。

統夜「ふう……ミッションコンプリート！！」

楓「それはやり過ぎじゃ……」

文乃「あんな変態にはああいうのがいいのよ！」

？「流石文乃ちゃん、緑葉君にはそれがいいのですよ」

千世「おはよう。麻弓」

麻弓「おはようなのですよ千世ちゃん」

千世が声をかけた少女……麻弓「タイム、千世と同じ貧乳生で右目が赤、左目が青色のオッドアイが目印である。」

樹「流石だね・・・統夜・・・でも俺様は諦めないからね!!」

ポロポロにされ帰還した変態メガネもとい緑葉 樹が言っていた。

統夜「ふむ・・・生きていたか・・・某元第1ファイレギュラーハンター隊長並にしぶといな・・・今度は細かくバラバラに切り刻んでやるっ」

達哉「おはよう。統夜。またやらかしたな・・・」

グラウンド側の窓ガラスが割られた所を見てため息をつきながら挨拶をした。

翠「うわぁ・・・また派手にやったね・・・」

菜月「うんうん・・・」

統夜「何故お前らはノーマリストなんだろう・・・そんなんじゃハジケ魂を得られんぞ」

達哉の幼馴染である鷹見沢 菜月とクラスメートの遠山 翠が苦笑いしていた。

達哉「いや・・・いらないから・・・」

統夜「そうか・・・」

すると・・・
ガラッ!

紅女史「席に着け!出席をとるぞ」

統夜達の担任である紅薔薇 撫子・・・通称紅女史が来て席に着いた。

紅女史「天川……またやらかしたな……」

統夜「紅女史……これはあくまで樹排除の為であって……今度は暗殺を遂行しようと考えています」

統夜……教師になに暗殺なんて言葉使ってるの……

紅女史「はぁ……もういい……」

万年外道に付き合っていたら頭と胃が持たないと思ったのは今日だけではないのは事実だが……

時間が過ぎ昼になり屋上に来ていた。

統夜「今日も平穩っていいよな」

達哉「そうだな……って現実逃避をするのを止めよう」

統夜、達哉、稟はラバーズによるあーんをされていた。

樹「統夜、達哉、稟、殴っていいかい？」

統夜「やれるもんならやってみな」

そんなやり取りをしている間に……

その頃……

隊員「隊長……配置完了いたしました！」

デバイスらしきを持った不審な男が隊長らしき人物に報告をしてい

た。

隊長「そうか・・・我々の目的は天川 統夜及び朝霧 達哉の抹殺だ」

隊員「了解しました。他の者は？」

隊長「殺せ・・・目撃者はあつてはならん！」

平穩が崩れ去りバーベナ学園で戦いが始まるうとしていた。

第一話「学校生活は恐怖とカオスになる事もある」(後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

文乃「何で昼食に訳の分からない連中が来るのよ!? しかも統夜と朝霧の抹殺って何? てかアンタ達そんなに強かったの?」

文乃「まあ・・・後で説明してもらうんだから!! 覚悟してなさいよ!! 統夜!!」

文乃「次回のタイトルは『蒼穹の死神と瑠璃の軍神の力』 テイクオフ」

第二話『蒼穹の死神と瑠璃の軍神の力』（前書き）

統夜「ついに俺達の武勇伝が見れるな」

達哉「ああ。そうだな」

統夜「死神の絶滅タイムだ・・・ありがたく思え」

凜「（敵が可哀想になるのは気のせいか？）」

楓「あはは・・・HERO'S EPISODE第二話始まります」

第二話『蒼穹の死神と瑠璃の軍神の力』

あーん大会をやっている途中で

統夜「（なあ・・・達哉よ・・・分かるか？）」

何かの気配を感じたのか達哉に念話で呼び掛けた。

達哉「（ああ・・・5〜6人だぞ。管理局か？）」

統夜「（お礼参りにしちや少なくともないか？あいつらは権力と手柄の事しか考えない馬鹿達の集まりだが少人数で勝てるとは思わんだろ
う）」

統夜と達哉は訳あつて時空管理局と敵対しており違法研究所の襲撃やロストロギアを奪い返す等の行為をしている。

管理局はAAAランクの魔導師を20人派遣したが振り返ちに遭い上層部の数名を殺害している。

だが統夜と達哉は真面目に働いている局員達を手加減して見逃している。

ブウウウン・・・

統夜「（来たか・・・）」

達哉「（ああ・・・）」

統夜と達哉の二人は急に立ち上がり皆も不思議に思い見ようとして学園の周りの異変に気付いた。

文乃「ちよつと！？これは何！？」

最初に言葉を発したのは文乃だった。それにつられて皆も慌てだす。

翠「一体何なの!？」

麻弓「緑葉君もいなくなってるし・・・」

鮮華「一体何が・・・兄さん？」

菜月「達哉？」

二人は真剣な表情で空を見ていた。皆もつられて見ると30人程度
の人が杖や武器を持って宙に浮かんでいた。

稟「何だ?お前達は?」

隊長「我々はそのにいる天川 統夜と朝霧 達哉の抹殺を命じられ
たのだ」

統夜「おいおい〜人違いだぞ おっさん 僕ちゃん泣いちゃうぞ
(キラッ)」

人違いと某歌姫のようなポーズをしたが当然の結果は・・・

隊長「(何故か一瞬ドキツとしたが・・・)ふん!一瞬で異変を勘
付いている時点でバレバレだ」

誤魔化せられず失敗に終わった。

女性陣「(緊張感無いの?)」

女性陣は統夜のアクションにツツコミを入れてたそうなの。

統夜「俺らが正しいんじゃない?」

隊長「その通りだ・・・目撃者は0にしておきたいのでな」

隊長らしき人物がそう言った瞬間・・・

統夜「やれるもんならやってみろや・・・」

達哉「お前たちじゃ俺達には勝てない」

殺気を出し戦闘態勢に入り・・・

統夜、達哉「心装！」

統夜「蒼雷六爪！」

達哉「氷河月華！」

統夜は六本の鞘付の日本刀、達哉は刀身が鞘付の長刀を具現化させ

・

それぞれ日本刀、長刀を鞘から抜いた。

統夜「いざ！！」

達哉「推して参る！！」

隊員「数で奴等を倒すのだ！！」

隊員2「オオオオオオーツ！！」

隊員の攻撃を刀で全て防ぎながら・・・

統夜「ハッ！テメエら如きじゃ勝てねえよ！！」

シュンツ！ズバババツ！

一人を瞬速で切り捨てた後・・・

統夜「MAGNUM STEP！！」

その次に三刀を右手の指の間に入れ、自分のいる敵全てを踏み込みにより凄まじい突き技で巻きこみ薙ぎ倒した後

統夜「CRAZY BLUE!!」

蒼炎を刀身に纏わせた刀を右、左、右、左、右、左、右、左、左右同時の順に振るい前方にステッピンしながら左右から内に挟むように切り裂きフィニッシュした。

隊員「く、くそお・・・」

統夜「テメエらじゃ無理だ。諦める・・・」

達哉「このまま終わらせる。霧槍 突晶撃！」

刀で創った氷の上にサーフボードのように乗っかって突進し隊員達を吹き飛ばした後刀で切り払い・・・

隊員「な、何！身体が凍る!?!」

隊員達の身体が凍り始めた。

達哉「そうだ・・・俺の心装は全てを凍て尽くす・・・」

隊員4「ならば!?!」

ボオウ!!

多数が炎の魔力弾を一斉に発射し命中させたが・・・

達哉「この程度か・・・雪華塵」

絶対零度の防御壁を用いて防いだ後すぐさま移動し居合いによる斬撃を連続で繰り出しその後真上に斬りつけ

達哉「霧槍　突晶撃！！」

刀で削った氷の上にサーフボードのように乗っかって突進し隊員達を吹き飛ばした後刀で切り払った。

凜「（統夜に達哉・・・一体何者なんだ？）」

自分の親友の強さに驚いていた。無理も無い蒼炎や氷を出した剣技を見れば一目瞭然である。彼女達も同じく驚いていた。

文乃「（統夜・・・アンタは一体・・・）」

統夜の幼馴染である文乃はそれ以上に驚いていた。

数分経ち隊長以外の隊員は倒されていた。

統夜「後はアンタだけだ・・・」

隊長「ぐ・・・流石『蒼穹の死神』に『瑠璃の軍神』と言っべきか・・・だが我らは退く訳にもいかんだ！！」

杖に魔力を注ぎ始めた。

達哉「そうか・・・なら・・・」

統夜「待て・・・達哉・・・こいつとは一対一でやらせてくれや」

達哉「統夜・・・分かった・・・負けるなよ」

統夜「誰に言っただ？」

達哉「それもそうだな」

達哉に苦笑しながら前に出て蒼炎と雷、魔力、気力を刀に収束させ足元に円形の中に剣十字架が描かれている未知の魔術式が展開された。

隊長「（何だ！？こいつの魔術式は！？ミッドチルダ式でもなくベルカでもない・・・一体何の術式だ？）行くぞ！！はああああ！！！！」

統夜が展開した魔術式に驚きながらもチャージを完了させ収束砲を放ち

統夜「Chaos Dragon！！」

前方に刀を突き出し収束した蒼炎と雷、魔力、気力を放出し収束砲を押し返し直撃させた。

雷で黒焦げになり蒼炎で焼かれながら隊長格の男はこう告げた。

隊長「俺達は・・・捨て駒・・・だがいいものが見れた・・・貴様の未知なる魔術式をな・・・」

達哉「教えてくれ・・・お前達は時空管理局なのか？」

隊長「そんな腐敗した組織とは違う・・・我らは全てを統一せし存在・・・天川 統夜・・・朝霧 達哉・・・たった今・・・貴様らの地獄の道が開かれた・・・フフフフ・・・ハハハハ！！！！」

気になる言葉を言い残し炭になった。

統夜「全てを統一せし者か・・・（管理局や『あいつ』の他に敵が現れたみたいだな）」

二人は心装を解除しその後封鎖領域も解除された。

統夜達が戦い終え放課後になった。昼休みの後かなり質問攻めを喰らったが統夜と達哉がいつか話すと言って一旦止めたがいつまでも言わないままではいけないというのは分かっている。

統夜「転校生ね・・・まあ・・・俺には関係ないけど・・・ホントあいつって凄い奴かもな」

達哉「ああ・・・学園の情報源ってやつじゃないのか？」

統夜「近い内にあいつらに言おう・・・今までやってきた事をさ・・・いつまでも隠しきれないぞ・・・分かるだろ？」

達哉「ああ・・・だが・・・麻衣や姉さんは・・・」

統夜「んなもん大丈夫だ。堂々と言えば許してくれる」

達哉を論しながらバイクを走らせながら言いそれぞれ帰路へついた。

第二話『蒼穹の死神と瑠璃の軍神の力』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

千世「私の執事にあんな力があつたなんて驚いたわ！！絶対洗いざらい吐かせてやるんだから覚悟しなさいよ！！」

千世「次回は転校生二人が来るわ。本当に驚きよね」

千世「次回のタイトルは『親馬鹿と真実と決意』テイクオフよ！！」

魔法設定（前書き）

魔力や気力、心装に関する設定です。

魔法設定

魔力は魔法を扱う際に必要不可欠で魔力量が多いければ多いほど強い魔法が使える。

気力は主に身体能力に影響を及ぼす力である

心装しんそう

詳細：己の心で創った武器であり、切れ味や強度、破壊力はその人の心に比例して強くなるが、心が弱いと脆くなり、破壊されるとその者の精神は崩壊してしまう武器である。

心装の形状は人それぞれであり、属性を極限まで極めると心装という武器が扱えるようになるが大量の魔力を消費するため、扱える人は少ない。

心装：蒼雷六爪そうらいろくそつ

形状：六本の鞘付の日本刀

詳細・能力：統夜が扱う心装。

能力は刀身に蒼炎と雷を宿し斬る事ができ魔力や気力、霊力を込める事も可能だが六本同時に使うと大幅に魔力を食う。
強大な力を使う故か燃費が悪い為偶にしか使わない。

心装：氷河月華ひょうがげっか

形状：刀身が瑠璃色の鞘付の長刀

詳細・能力：達哉が扱う心装。

能力は冷気を操る能力で氷系の魔法が扱える事が可能。

魔法設定（後書き）

先に掲示しておくべきだったのですが遅れて申し訳ありません。

第三話『親馬鹿と真実と決意』（前書き）

統夜「ついに親馬鹿王が来るのかよ・・・」

達哉「まあまあ・・・稟も大変苦労しそうだよな」

統夜「確かに・・・あの人は頼りになるけどな・・・普段から見ればダメ親だ」

シア「あ、あはは・・・HERO'S EPISODE第三話始まるっす」

第三話『親馬鹿と真実と決意』

謎の集団の奇襲から翌朝・・・

統夜「やはり一人での登校は淋しいぜ・・・」

珍しく徒歩で一人淋しく登校していた。無理もない昨日の襲撃事件でやや混乱しているのだから

統夜「俺の予想が当たればあの二人かもしれん・・・ん？待てよ・・・これはチャンスじゃね？」

何かを企みながら学校を目指した。

ガラッ！

統夜「おはよー野郎共・・・ってあれ？」

ドアを開けると男子生徒がいなかった。

麻弓「おはよう天川君。男子なら転校生を見に行っていないわよ」

統夜「ふーん・・・転校生ねえ・・・そんなに女に飢えているのか・・・分らんものだ。なあ稟？」

興味なさそうに言いながら稟に問いかけた。

稟「まあな・・・」

麻弓「顔写真を入手したけど二人とも二人の写真見る？」

愛用のデジカメを手にしながら二人にそう言った。

統夜「いやいい・・・ホームルームで見れるんだから」
稟「そうだな」

麻弓「ほほう・・・天川君は文乃ちゃんという幼馴染にお世話してもらい・・・土見君は楓という幼馴染にお世話してもらってる人は余裕ですか？」

その言葉に反応したのか・・・

文乃「な、べ、別に好きでこいつのお世話してるんじゃないからねっ！！」

楓「麻弓ちゃん！私が稟君のお世話をしているのは、私が好きだからで・・・」

幼馴染ズは正反対な意見を言っていた。

達哉「おはよう。統夜」

統夜「おはようさん。お前も興味無いだろう？」

達哉「何が？」

統夜「転校生の話だよ」

達哉「転校生か・・・それに関連するのか来週に月からホームステイが来るんだよ」

統夜「スフィア王国か・・・ここは唯一地球と月を結ぶ街『英都』えいとだからな・・・珍しい資源があるから行きたいものだ・・・」

達哉と挨拶をした後朝霧家に月のスフィア王国からホームステイが来る話をしていた。

達哉は深刻な表情をしていた。姉であり保護者である穂積 さやかは達哉が『瑠璃の軍神』である事と危険な事をやっている事を知らない。

いずれ話さなくてはいけないと思っているが中々勇気が必要で悲しむんじゃないかと思いきやこんでしまう・・・大切な人達が受け入れてくれる事を信じて・・・

統夜「お前さ・・・大丈夫だ。俺を信じなさい。・・・菜月や麻衣ちゃん、さやかさん、翠を守る力がお前にはあるんだ・・・」
達哉「ああ・・・そうだな・・・前向きに考えよう」

紅女史「席に着け。ホームルームを始める」

話している間に紅女史が来て席に着いた。

紅女史「特に男子！気持ちにはわからなくてもないから、今回は見逃してやるが・・・こんどやったらイエローカードだからな！」

クラツカーやカメラを構えている男子が大半だった。殆ど聞いていないのが現状だ。

紅女史「はあ・・・もういい・・・二人とも入ってきなさい」

ガラッ！

紅女史の言葉と共に教室のドアが開いた。それと同時に男子達の拍手と、クラツカー、口笛が教室に響く。歓喜のあまり、泣きながらばんざいしている奴もいる。が・・・入ってきた二人を見て全員硬直した。

「お!？」

?1「あつはつはつはつは！いやあ、なんか面白そうじゃねえか。人間界の学校もよお」

入ってきたのは筋肉質でがっしりした和服の神族の男性と

?2「うん。若く美しいお嬢さんがいっぱい若返ってしまいそうだね」

すらりとした長身の魔族の男性の二人だった。

稟「麻弓あの人達か？確かに極上の美形だと思うけど、美少女って話じゃなかったっけ？」

振り返りながら聞くと、麻弓は全力で首を左右に振る。どうやら違
うらしい。すると・・・

統夜&達哉「おいしいiiiiiiii!!!!やっぱりアンタらiiiiiiiiiiii
!!!!!!」

二人同時に叫んだ。

稟「（知り合いなのか？）」

?「ん？おお！統夜殿に達哉殿じゃねーか!!」

?2「本当だね。統ちゃんに達哉君じゃないか」

入ってきた二人が統夜と達哉を見て手を振っていた。

統夜「何でアンタらがいるんだよ!?神王ユーストマに魔王フォー
ベシイ!!」

魔王「いや・・・統ちゃん・・・これには深い事情が・・・」

統夜「だから統ちゃんって呼ぶな!!何で達哉だけ君付け!?はっ
・・・もしかアンタにそんな趣味が!?!」

魔王「それは無いからね！？君って女性みたいな顔立ちだから・・・その・・・」

神王「あゝ・・・もういいか？」

統夜「もういいよ・・・」

魔王「もう大丈夫だよ。神ちゃん」

神王「で、まー坊。どの坊主がそうだった？」

魔王「ほら、あの子だよ。神ちゃん」

神王「どれどれ・・・なるほど中々の面構えじゃねえーか」

神王と魔王の二人は稟の方へ外来用のスリッパをパタパタ鳴らしながら近づいた。

神王「ま、シアの事をよろしく頼むぜ！稟殿！！」

稟の背中にバシバシと力強く叩く。まあ咳き込んだが仕方が無い。

魔王「私からも宜しく頼むように言っておくよ。ネリネちゃんを宜しく、稟ちゃん」

稟の手を握りながら神王と同じような事を言っていた。

稟「は、はぁ・・・」

ズキズキと痛む背中を丸めながらその人の顔を見る。何を言っているのかわからないって感じになっている。

神王「おいおいまー坊。やっぱり男が大事なのは力だよ“力”！」

いきなり右手を神王に握られ、ぐいっと引っ張られた。

魔王「わかってないなあ!“誠実”こそ、女性を幸せに出来るんだよ?”」

そして左手を魔王がとり、やっぱりぐいっと引っ張った。

凜「え?あの、ちょっと……」

突然の展開にどうしていいかわからずオロオロしていると……
がらっ!

「お父さん!!」

教室のドアが豪快に開き大声と共にイスが勢いよく飛んできた。長身の男性はしゃがんでかわしたが、和服の男性は死角だったのだから、見事に直撃する。

統夜「ク、ククク……本当に笑えるわ……」

一人だけ優雅に笑っていた。

?1「何してるんですか!?まったくもう!!!!」

?2「本当に!」

ドアの所に二人の女の子達がいた。

統夜「あらら……『本命』が来たようだね」

そう統夜が本命と言った瞬間……

『う、うおおおおおおお!!!!!!!!!!』

男子の絶叫が上がった。やかましい限りだが

紅女史「静かにせんか！！静かにせんと天川の実戦を受けさせるぞ！！」

そう言った瞬間黙った。極悪な強さを誇る奴と戦ったら死ぬのは目に見えている。

紅女史「ゴホン！さあ、二人とも自己紹介をして・・・」

静かになったのを見計らって言った。

シア「リシアンサスです。神界からやって来ました。ちょっと長い名前だと思しますのでシアって呼んでください」

ネリネ「あのネリネと申します。魔界からやって参りました。よろしければリンと呼んでください」

神王「俺はシアの父親で神王つてのもやっている。よろしくな！」

魔王「私の名はフォーベシイ。ネリネちゃんの父親で魔王というのもやっている。ぜひ見知っておいてくれたまえ」

シアとネリネの挨拶の後に親馬鹿二人が紹介したが

紅女史「お二人は結構です」

こめかみに青筋をたてて、紅女史が“きっぱり”と言い放つ。そりやそりだ・・・

楓「あの・・・撫子先生・・・今、とても信じられないような言葉を聞いた気がするんですけど・・・神王と魔王というのは・・・」

楓が手を上げて、困惑した顔で席を立ち紅女史に質問をした。

紅女史「えーまあ・・・そうゆう事だ。非常に信じられないことではあるが、この二人はそれぞれ神界、魔界の王の立場にある方だ。そして転校生二人はその娘さんだ」

溜息をつきながら説明した。

紅女史「で・・・だ・・・つつちー」

稟「はい？」

紅女史「この二人の面倒をお前に任せる」

稟「ちょ、ちょっと待ってください。何で俺なんですか!？」

統夜「だっってお前目当てで二人が来たんだし」

魔王「統ちゃんの言うとおりだね。稟ちゃんはネリネちゃんとシアちゃん。二人の婚約者候補に選ばれたのだよ」

統夜「しつこいな!!アンタは!!!?ま、頑張れや・・・」

魔王にツッコミを入れた後稟にささやかなエールを送った。

神王「ま、はつきり言っちゃえば、神界、魔界の時期王候補ってわけだな。どっちがほしいんだ？」

稟「ちょ、ちょっと待ってください。何でそうゆうことになっているんですか!？光栄なことなのでしょうが、正直なぜ俺が選ばれた理由がわからない!？」

魔王「君達は子供の頃に出会っているのだよ、たった一日ことではあるけどね」

ネリネ「あ、あの、お父様・・・そのことは・・・」

稟「・・・出会って・・・?」

魔王「幼い頃の出会いとそのときに生まれてしまった淡い恋心・・・二人はその思いの炎を弱めることなく再会できる日を心待ちにして

いたのだよ」

魔王が手作りと思われる紙芝居をしながら懇切丁寧に説明をしていた。

魔王「もちろん、あの頃と違ってネリネちゃんの胸は立派に成長したけどね」

ネリネ「お父様!!!」

魔王様がニコニコしながらネリネの肩を叩き、ネリネは顔を朱に染める。

神王「おい、まー坊!!!うちのシアだってなあ、まだ発展途上だがこれからでかくなる可能性があらあ!!!」

シア「お父さん!!!もう、いいから帰って!!!」

イスで一回どついてから、シアが神王様の背中をぐいぐい押す。神王はむっつと口を尖らせる。

統夜「(神界のプリンセスってプロレスラーとかなれそうな気がするのは気のせいかな?)」

神王「いや、しかしだなシア」

魔王「じゃ、ネリネちゃん。パパも帰るからね」

ネリネ「はあ」

紅女史「さっさとお引取りください!!!」

両王は二人でドアまでいくと一度振り返る。

魔王「まあ詳しいことは本人達に聞くなり思い出すなりしてみてください」

れたまえ。それでは、ネリネちゃんとシアちゃんのこと、よろしく頼むよ、稟ちゃん」

そして出て行った。

達哉「嵐だったな・・・」

菜月「うん・・・」

麻弓「楓〜!?!?何で気絶してるの!?!?!?」

気絶している楓を揺さぶっていた。

統夜「いや〜久し振りだな。王女様」

シア「本当に久し振りだね。統夜君」

ネリネ「お久し振りです。統夜様」

文乃「ちよつと!統夜!どうやって二世界のお姫様と知り合いになったのよ?」

千世「そうよ!どんな裏技使ったのよ!!」

統夜「まあまあ・・・それも含めて説明するよ。簡単に出来る説明じゃないから・・・」

質問責めや追いかけてこ(稟限定)などが終わり昼食はシアとネリネを誘って昼食を食べ授業を受け放課後になった。

統夜「今日は災厄の日だよな。稟」

関係者たちを集め何処かへ連れて行くこととしていた。

稟「そうだな・・・で、何で俺らを集めて何するつもりなんだ?」

統夜「そうだな・・・ネリネ、お前の家でいいか?魔王に用があるし」

ネリネ「お父様にですか？構いませんけど・・・」

統夜「んじゃ決まりだな。俺達の事知りたいたんだろ？早い内に打ち明けた方がいいと思つてな」

凜「そうか・・・いいのか？達哉」

達哉「麻衣達を不安にさせない為にも早い内に教えておいた方がいいと思うからね」

魔王の屋敷に着き・・・

凜「やっぱり・・・隣だったか・・・て事は・・・」

シア「左側は私の家だよ」

統夜「良かったな。これでお前は不自由ないな」

凜「それはどういう意味だ？てか俺を弄つて楽しいか？」

統夜「楽しいに決まつてるじゃないか・・・三人の内誰かと一緒に夜を過ごす時は声を掛けるよ？撮影してやるから」

凜「せんでいい!!！」

シア「り、凜君が望むなら・・・／／／」

ネリネ「凜様が望むなら・・・／／／」

楓「ポ・・・／／／」

統夜「これでいいのだ」

凜「良くないわ!!！」

統夜「まあ・・・お前が直ぐにやると思つてないから・・・そこら辺は大丈夫だ」

ピンポンッ！

統夜「魔王さんはいますか？」

魔王「統ちゃんかい？ちよっと待つててくれないかい？」

統夜「ほい」

インターホンを押した後魔王が出たが怒りを抑えながら返事をした。
ガチャッ

ネリネ「ただいま戻りました」

魔王「おかえり。ネリネちゃん。稟ちゃんと統ちゃん達と一緒にだったのかい？」

ネリネ「はい。何か話があると言っていましたので・・・」

魔王「なるほど・・・ここだと何だから・・・中へ入りなさい」

魔王に言われて中へ入った。

神王「おっ！稟殿に統夜殿じゃねーか」

神王もリビングにいた。

魔王「神ちゃんも呼んだ方がいいと思っただからね」

統夜「役者が揃った・・・説明するよ・・・最初は何が知りたい？」

文乃「アンタが蒼穹の死神と呼ばれてると蒼い炎や突然現れた六本の刀、魔法みたいなものは何？」

統夜「俺から最初に説明するけど・・・構わないか？」
達哉「構わない」

統夜「蒼穹の死神と呼ばれてるのは裏世界での俺の通り名だ。蒼い炎は俺特有の力で肉体を燃やしたり精神を攻撃する事が可能な炎」

統夜から説明をし自分の通り名である事と自分の力を説明した。

希「統夜は死神には見えない・・・」

千世「反則的な炎ね・・・でも危険な事をしたのよ！！」

統夜「すまない・・・突然現れた俺の六本の刀や達哉が使ってた長刀は心装と呼ばれる心の武器だ。具現させるのにかなり時期が必要でおいそれとは使えない」

文乃「何で使えないのよ？」

統夜「魔力を大幅に消費するんだよ。文乃が魔法みたいなものって言うってたが完全に魔法だ」

菜月「じゃあ・・・達哉や天川君が使ってたのは？」

統夜「あれはれっきとした剣術だ。魔法と組み合わせたものは魔剣術と呼ばれている」

ネリネ「あの・・・お父様・・・人族に魔法は扱えるのですか？」

魔王「統ちゃんも達哉君以外の人族には難しいね・・・何しろあの二人の魔力が大きすぎる」

神王「魔法ありでも無しでも統夜殿と達哉殿に勝てる奴はいねえ・・・これだけは言える」

魔王「しかし・・・心装か・・・私達のような魔力のある者でも厳しいね・・・」

両王は真剣な表情でそう言っていた。

文乃「アンタが神界と魔界の王様達と知り合いなのよ？」

統夜「便利屋の仕事で2、3度護衛した事があったから」

文乃「だからあの時いなかったのね・・・」

麻弓「天川君の足元に展開されたものは何なのですか？」

統夜「アレは魔術式だ。ミッドとベルカに分かれているが俺が使用したのは『レイヴ式』と呼ばれているものだ。達哉。よろしく」

達哉にバトンタッチした。

達哉「レイヴ式は統夜にしか扱えない術式で俺が使っているのはミッドチルダ式と古代ベルカ式の両方だ」

麻衣「あの・・・お兄ちゃん・・・」

朝霧 麻衣・・・達哉の妹で英都バーベナ学園高等部一年生の少女が達哉に質問をした。

達哉「何だ？」

麻衣「お兄ちゃんがあの人に言ってた『時空管理局』って何？」

達哉「それは・・・」

神王「それは俺らが教えてやる」

達哉「えっ・・・？」

神王と魔王が割り込んだ。

神王「時空管理局ってのは質量兵器の根絶を掲げ犯罪を取り締まり裁く所だ」

魔王「要するに警察や軍隊、裁判所が一つになってるのが正しいかな」

神王「だが一つだけおかしいのが二つだな」

魔王「一つは質量兵器だけが恐ろしいと二つ目はロストロギアを強制的に接収する所だね」

統夜「いや・・・四つだ・・・三つ目は違法的な人体実験や人造生命体の研究・・・」

達哉「四つ目は真実を隠し欲望の為なら平然とその世界の街や味方をも消す・・・」

魔王「そうだったのかい・・・」

神王「俺的に思うには魔法と質量兵器は同じだ。人を平然と消す力がある・・・クリーンなものなんかじゃねえ・・・」

統夜「そして俺と達哉は時空管理局のある特殊部隊にいたが・・・俺と達哉、知り合い以外は味方である『時空管理局』に殺された・・・」
女性陣「!?!」

嘘だと思っていた・・・犯罪等を取り締まる時空管理局が・・・同じ味方に殺されるなんて思った事が無いから・・・

達哉「本当だ・・・2年前だね」

魔王「それって最大のテロ事件って書いてあつたけど・・・」

統夜「それは違う・・・任務中に重犯罪組織と戦っている最中に俺達の部隊ごと魔導兵器・・・アルカンシエルを二発撃つた・・・」
文乃「何でアンタ達が殺されなくちゃいけないのよ!!おかしいわよ!こんなの!!」

涙ながらに統夜に言った。

達哉「管理局の上層部は俺達の部隊の強さに恐れてたのさ・・・真実を世間にはばらされるのを恐れていたのもある・・・」

希「にゃあ・・・酷い・・・そんな理由で・・・」

稟「真面目に管理局の為に働いている人達を何だと思っているんだ!!」

千世「許せないわ・・・」

魔王「流石の私も許せないね・・・人の命を何とも思っていない・・・」

神王「傲慢で腐ってやがるな・・・」

文乃「でも・・・その事・・・乙女さんは知ってるの?」

都築 乙女・・・統夜の保護者かつ姉のような存在で助ける事を優

先にする女性。

統夜「ああ・・・1年前に倒れてた俺を助けて貰ったのさ・・・姉さん・・・このような事を言ってたんだ・・・」

文乃「何よ？」

統夜「おかえりなさいってな・・・」

文乃「あの人らしいわね・・・鮮華を何とかしなさいよ」

統夜「ああ・・・鮮華・・・」

鮮華「・・・」

統夜がやってきた事や時空管理局の悪事を聞いて黙っていた。

統夜「・・・駄目な兄貴だよな・・・実の妹に隠し事って」

すると・・・

鮮華「・・・」

統夜に泣きながら抱きついていていた。

統夜「鮮華・・・すまなかった・・・」

鮮華「・・・いえ・・・いいんです・・・教えてくれて・・・兄さん一人で背負い込まないで・・・一人はいや・・・」

菜月「達哉は平気だったの？」

達哉「怪我したから病院に入院したよ。その後地球に帰り麻衣や姉さんにこっぴどく怒られたよ・・・」

統夜とは違い半年後に地球に帰り平和に過ごし剣を振るう事は無かった。統夜と再会する日までは・・・

麻衣「当たり前だよ！とても心配したんだから！」

統夜「お前達は大丈夫なのか？俺や達哉は……」

鮮華「兄さん達は信じるものがあることと隠していた事を教えて貰いましたから……大丈夫です」

文乃「アンタ馬鹿じゃないの？そんな事で手の平返すと思う？」

達哉「え？」

千世「そうよ。アンタ達は管理局に比べたら可愛いもんじゃない」

希「にやあ……統夜は優しい……」

統夜「お前ら……」

凜「教えてくれてありがとうな……統夜、達哉。お前達の味方だ」

楓「はい。私もです」

シア「カエちゃんと同じっす」

ネリネ「本当に許せないのは時空管理局です」

亜紗「統ちゃん達を食い物にして捨てるなんて許せない」

時雨 亜紗……統夜達の一つ上の先輩で料理部に所属している。

カレハ「そうですわ。」

カレハ……統夜達の一つ上の先輩で亜紗と同じく料理部に所属している。

麻弓「流石の私も時空管理局の悪事が許せないのですよ」

麻衣「私はお兄ちゃんの味方だから」

菜月「教えてくれてありがとう。達哉。私達が助けてあげる」

翠「私も朝霧君の味方だよ」

達哉「皆……ありがとう……」

統夜と達哉の二人は受け入れてくれた事によって自然に笑い帰る場

所や大切な人達を守る決心がより強くなった。

己の進む道と信念を持つ英雄・・・HEROのエピソードはまだス
タート時点・・・

闇や歪みがある時・・・破壊者という名のHEROは必ず現れる。

第三話『親馬鹿と真実と決意』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

希「にゃあ・・・統夜が全て教えてくれて良かった・・・でも悲しい・・・」

希「にゃあ・・・次回は急展開・・・三人のエースと蒼穹の死神がぶつかり合う・・・」

希「次回のタイトルは『再会と運命』テイクオフ・・・」

第四話『再会と運命』（前書き）

なのは「ついに私達の出番!!」

フェイト「そうだね。なのは!」

なのは「目指すは人気キャラランキング第一位!!」

統夜「（いや・・・それはありえないだろう・・・StSとかスバルが主だったようなもんだし）」

はやて「ほな。HERO's EPISODE第四話。始まるで」

第四話『再会と運命』

第四話『再会と運命』

時空管理局の本局では・・・

？「クロノ君が呼び出すなんて珍しいね」

？2「そうだね」

？3「せやな。けど早く終わるやろ」

クロノ「いや・・・早く終わる問題ではない・・・なのは、フェイト、はやて」

クロノと呼ばれた青年が険しい表情でトリプルエースである・・・
なのはとフェイト、はやてと呼ばれた少女に言った。

フェイト「どういう事？」

クロノ「『蒼穹の死神』と言えば分かるか？」

なのは、フェイト、はやて「!？」

クロノ「地球の英都と呼ばれる場所で蒼穹の死神を見掛けたという情報が入った。君達と守護騎士、僕、ユーノが行く事になった。準備が整い次第行く」

その頃・・・

統夜「今日は一人での仕事か・・・」

何でも屋を主に仕切っているのは統夜一人だけであり達哉は協力者であり正式なメンバーではない。

普段統夜一人で仕事をこなし管理局の違法研究所の壊滅やロストロギアを奪い返す等の事は少なくとも無い。

暇な時は洋菓子店「ストレイキャッツ」で手伝いをしている。

統夜「さて・・・歪んだ実験を破壊しに行くかね」

ブロロロロロ・・・

とある次元世界である荒れ果てた大地をバハムートで走らせていた。

統夜「〜」

歌を歌いながら目的地である違法研究施設へ到着し護衛の魔導師を
轢いた後降りた。

バハムートの前輪両横からそれぞれ刀身の長さや形が違う6本の剣
の中から背丈より長い両刃の長剣と刀身が背丈より長くギザギザが
入った片刃の長剣、やや刀身が短い片刃の長剣の三本を取り出した。
両刃の長剣の刀身にギザギザが入った片刃の長剣を合体させて大剣
にしやや刀身が短い片刃の長剣の二刀流にし

統夜「三十六煩惱鳳！！」

剣を持った左腕を右手で支えるようにして構えてから、一気に剣を
振り抜くことで前方に螺旋状に回転する真空波を飛ばし鉄の扉を破
壊した。

騒ぎに駆け付けけた研究員の一人を捕まえ違法実験を止めるように言
ったが聞き入れず適当な機材に頭をぶつけさせ気絶させ手当たり次
第破壊していた。

統夜「ここかな」

最後の部屋を開けるとそこには幼い子供達の死体が横たわり白衣を

着た中年男性が統夜に目を向けた後すぐさま逃げようとしたが直ぐに捕まった。

統夜「テメエが……こここの所長か？」

所長「そ、そそそそ……そうだが……き、きき君は一体何しに来たのかね?!」

統夜「テメエらがやってた研究を頼んだのは時空管理局で間違いないな？」

所長「そ、そうだ!! 助けてくれ!! 命だけは助けてくれ!! この通りだ!!」

統夜「そうだな……絶望を味あわせてからだ……」

ポオオオ……

右拳に蒼炎を纏わせ顔面を思い切りぶん殴った。

すると蒼い炎は顔だけでなく身体全体に広がり所長は発狂し出し精神が崩壊したかのように虚ろな目になり倒れてしまった。

子供達の死体を両手で抱えて施設から出た後の処理を忘れないように爆破した。

死体は安らかに眠る事が出来るように地球の山地に統夜が火葬して埋めた。歪んだ世界の被害者を救えなかった悲しみを込めて……

地球の英都では……

なのは「ここに蒼穹の死神が現れたのかな？」

フェイト「もし統夜が生きていたら……何とかなったのにな……」

なのは「フェイトちゃん!!」
フェイト「ご、ごめん! はやて……そんなつもりで言ったんじゃない……」

はやて「ええんよ……統夜でも何とかなるか分からへんのやし……」

「でも・・・きつと何処かで生きてると信じとる・・・」
「フェイト」はやて・・・」

「はやて」もうこんな時間や！集合場所へ行くで」

なのは「はやてちゃん・・・」

「フェイト」二年前の事をまだ引き摺っているのかな・・・」

なのは達は二年前の事件を知っており、統夜が生死不明になった事を聞いたはやては大号泣し声を上げて泣いてしまった。

幼馴染で大好きな人の死を受け入れたくないのもあつてか一時心を閉ざしがちになった。

尚クロノやユーノは何か裏があると思い調べようとしたが事件に関するデータ等が全て消去されていた。

はやてが立ち直るのにかなり時間が掛り元に戻ったが統夜に関する事になると絶対生きていると言い張り情緒不安定になる事がある。

「はやて」シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、何か分かったか？」

守護騎士ヴォルケンリッターであるシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラに問いかけた。

シグナム「いえ・・・」

ピンクのポニーテールをした女性・・・烈火の将シグナムは申し訳なさそうに答えた。

ヴィータ「ここに蒼穹の死神がいたのかな？」

赤い髪を三つ編みにした少女・・・鉄槌の騎士ヴィータは不思議そうに答えた。

シャマル「そうね・・・クロノ提督とユーノ君は書類関係で遅れてくるし・・・私達で頑張らないと・・・」

肩まである金髪の女性・・・湖の騎士シャマルは困惑した感じで答えた。

「ザフィーラ」そうだな・・・」

蒼い毛並みをした狼・・・守護獣ザフィーラは冷静に答えた。

すると・・・

ブウウウウン・・・

突然空間が裂け人間サイズの黒い布を覆った顔が骸骨で死神の鎌を手にした異形が出て来た。

その後布を被った異形が5体現れた後空間の裂け目が無くなった。

なのは「な、何なの!?!」

フェイト「はやて。どうするの?」

はやて「皆、デバイスを起動や!! シヤマル! 封鎖結界頼んだで!」
シヤマル「は、はい!!」

なのは達はデバイスを起動させ異形・・・即ち悪魔に勝負を挑もうとしたが・・・

「イヤツホーーーーーッ!!!!」

誰かの叫び声と共にフード付きのマントをした人物が悪魔を何かで切り裂き滅した後死神風の悪魔を六つの切り傷を残して消滅した。

なのは「す、凄い・・・」

フェイト「一瞬で・・・」

はやて「終わらせてもうた・・・」

なのは「あ、貴方は一体・・・誰なんですか?」

?「俺か?俺は『蒼穹の死神』と呼ばれている者だ・・・そして・・・」

フード付きのマントを取りなのは達は大きな衝撃を受けた。

統夜「歪みを破壊する者・・・天川 統夜だ・・・」

夜天の主 八神 はやては蒼穹の死神と呼ばれた初恋の人と2年振りの再会を遂げた。

第四話『再会と運命』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

はやて「何でや！？何で統夜は管理局を憎み敵対せなあかんの！！
訳を教えて！！」

はやて「嘘や・・・管理局が統夜を殺しそうとしたなんて・・・何
かの間違いや！！！！」

はやて「次回のタイトルは『本当に信じるもの』テイクオフや」

第五話『本当に信じるもの』（前書き）

文乃「お帰りなさいませ。御主人様。今日は3人を冥土にお連れいたしましたわ」

楓「あのぉ御威光にひれ伏していただけませんかぁ？」

統夜「まずい！？文乃と楓が壊れた！？やべえぞ！！」

はやて「無茶をしてもうて・・・」

リン「HERO'S EPISODE 第五話始まりますです」

第五話『本当に信じるもの』

第五話『本当に信じるもの』

はやて「統夜・・・本当に君なんか・・・？」

なのは達は騒然と驚き動揺していた。無理も無い・・・生死不明だった仲間が生きていた事に・・・

統夜「ああ・・・紛れもなくな・・・本当に久しぶりだな・・・はやて・・・皆」

フエイト「統夜！生きてたなら何で連絡をしなかったの！！はやては統夜が生死不明と聞いて崩壊寸前になったんだよ！！」

統夜「すまない・・・俺が目覚めた場所は管理局が知らない世界だったから出来なかった・・・」

グイータ「統夜・・・あたしの聞き違いかもしれないかもしれねーが・・・蒼穹の死神と聞こえたんだが本当なのか？」

統夜「ああ・・・本当だ・・・蒼穹の死神・・・天川 統夜だよ・・・管理局の闇という歪みを破壊する為に・・・」

はやて「何でや・・・何でそんな事するんや！？大勢の管理局員を殺し、管理局の保管物を盗んで・・・そんなのテロリストやないか！？」

シグナム「貴様は自分が何をしているのか本当に分かっているのか？！」

統夜「ああ・・・分かっているさ・・・管理局の反逆者だ。決して悪ではない・・・」

シグナム「ふざけるな！！それだけの事をしでかしている奴が悪でない筈が無い！！」

統夜「それを言うなら、管理局は自分の利益や欲望の為にははやてや達哉のような平和のために真面目に働いてる人たちを食い物にし、

利用し尽くし、危険だと感じたら殺して死を隠す。これは誰が何と言おうと悪だ！！こんな奴らは許せないんだよ！！」

統夜は蒼い折り畳み式の携帯電話を取り出す。

統夜「このままでは世界は歪む・・・だからこそ管理局を破壊する！！」

なのは「統夜君！何で私達と戦わなくちゃいけないの？！」

統夜「これが俺が本当に信じているものだからだ！！」

シグナム「そうか・・・なら言葉はいらん！！、力づくで取り押さえるぞ！！」

統夜「そうこなくちゃな・・・絶対的なる永遠の翼・・・アブソリユートエターナル！！セットアップ！！」

折り畳み式の蒼の携帯電話が光り出し赤と青が混ざった白いアーマーを纏い背部に10翼の青い機動ウイングを装備した姿になった。時空管理局から奪いし試作型アーマードデバイス・・・絶対的なる永遠という名のアブソリユートエターナルはどのデバイスよりも高性能だからだ。

なのは「な、何なの？あのデバイス・・・見た事が無い・・・」

フェイト「バリアジャケット一体型のように見えるけど・・・」

統夜「さて・・・やるとするかねえ・・・」

背部の機動ウイングである「アブソリユートウイング」の右側に柄のみ収納されている刀身がエネルギー状の大剣「アブソリユートザンバー」を取り出して構えた。

フェイト「天川 統夜・・・大量殺人を始めその他諸々の容疑で逮捕します」

統夜「やれるもんならね・・・何故俺と達哉が管理局に反逆し憎む理由・・・知りたいか？」

はやて「当たり前や！！何で統夜は管理局を反逆し憎むんや！！？」
なのは「何故こんな事をしたの！？」

フェイト「なんか訳があるの！？もし理由があるんなら管理局はちやんと話しを聞くよ！」

統夜「（いい感じに食いついてきたな・・・悪いと思うが痛い目遭つてから全てを知って貰うぜ・・・）だったらよ・・・お前ら全員デバイスを非殺傷設定を切つて尚且つ本気で来い・・・」

はやて「な、何やて？！」

統夜「お前らは管理局に言われるがままに戦う走狗なんかじゃ俺には勝てねえ・・・敵を倒すのはいつも自分の意志で戦場に立つ人間だ・・・リミッター無しかつ非殺傷設定オフでかかつて来いよ！」

本当はやりたくない。だがはやて達は統夜の言動を見て一目で分かった。やらなきゃやられる。絶対にやられる。

はやて「戦いたくない・・・でもな統夜ががそこまで言うならやつてやるうやないか！！」

統夜「よく言つた・・・はやて・・・5分生き延びれたら真実を教えてやるよ」

なのは「行くよ！！全力全壊を見せてあげるの！！」

なのはは周囲に桜色のスフィアを展開しフェイトは金色のスフィアを展開し始めた。

シグナムとヴェータは統夜にデバイスであるレヴァンティンとグラードファイゼンで攻撃しようとしたがアブソリユートザンバーで押し返し低出力と高出力の切り替えと連射が可能なライフル「アブソリユートライフル」を発射した。

その後に10翼の青い機動ウイング「アブソリユートウイング」か

ら一基ずつ設けられたフライヤーと呼ばれる自律コントロール型の砲台を射出しオールレンジ攻撃を仕掛け各自攻撃を中断し回避した。

なのは「ビット!? デイバイイン・・・バスター!!!」
フェイト「プラズマ・・・スマツシャー!!!」

なのはとフェイトはそれぞれ自分の得意技である魔力をチャージし砲撃を統夜に向けて放った。

統夜「そうこなくてはな!!!」

アブソリユートウイングの左側にある折り畳み式の高出力ビーム砲を取り出した後腹部から大出力ビーム砲「カリドウス」を一斉発射しデイバインバスターとプラズマスマツシャーを相殺し大きな爆発音が起きた。

その際にはやては距離を取りデバイスであるシュベルトクロイツを掲げ詠唱を唱えてヴィータは金鎚を巨大化・・・ギガントフォルムに変化させシグナムは長剣から弓・・・ボーゲンフォルムに変化させていた。

はやて「ごめんな・・・来よ、こ白銀はくぎんの風、天よりそそぐ矢羽となれ・・・」

ヴィータ「轟天爆碎!!!」

シグナム「翔けよ!!! 隼!!!」

統夜「さっきのはフェイクか! 『ブオンツ!!!』!?!」

シヤマル「逃がさないわよ! 統夜君!!!」

ザフィーラ「いくら貴様でも破れはしまい!!!」

統夜「くっ!!! 戒めの鎖に鋼の軛か!?!」

避けようとしたがシャマルのクラーウルヴィントによる拘束魔法とザファイラの広域拘束魔法で拘束された。

シャマル「今よ！！はやてちゃん！シグナム！ヴィータちゃん！」

はやて「フレース・・・ヴェルグ！！」

シグナム「シュツルムファルケン！！」

ヴィータ「ギガントシュラク！！」

ヴィータが巨大な金鎚で殴った後シグナムが魔力の矢を放ち、放たれた矢は音速の壁を越えて爆炎と衝撃波が発生した後はやてが超長距離砲撃魔法を放ち大爆発が起きた。

ヴィータ「やったか？」

シグナム「そうだといいがな・・・」

はやて「・・・」

なのは「終わったの・・・？」

すると・・・

シュンツ！ザシュザシュツ！

シャマル「っ!？」

ザファイラ「なにっ・・・!？」

シャマルとザファイラが突然斬られ無傷の統夜がそこにいた。

はやて「シャマル!？ザファイラ!？」

ヴィータ「う、嘘だろ!？」

シグナム「馬鹿な・・・」

統夜「種明かしとして教えてやる・・・マッハミラージュマクスダーストシステム MMSとMBSを使ったのさ・・・」

フエイト「MMSとMBS・・・？」

統夜「シャルが捕えたのがMMSを起動した俺の残像でMBSは先程の攻撃の回避とシャルとザフィーラを斬った時に使ったのさ・・・単純に言えばより素早く動けるってやつだ。よく頑張ったと言いたいかな・・・」

シグナム「貴様っ!!」

二人を傷つけた統夜に怒りレヴァンティンを長剣に変えカートリッジをロードした後刀身に炎を纏わせ・・・

シグナム「紫電・・・一閃!!」

統夜に一閃しようとしたが先程シャルとザフィーラに使ったビームソードになるグリップ「アブソリュートサーベル」で受け止めた後、膝と爪先間に設けられたビームブレイドで攻撃する「グリフォンビームブレイド」を回転蹴りの要領で切り裂き吹き飛ばした。

統夜「いつの間にか弱くなったな・・・シグナム・・・」

ヴィータ「てんめえええ!!!!」

シグナムを落とされた怒りでギガントフォーム状態のグラーファイゼンで殴り飛ばそうとしたがアブソリュートザンバーで受け止めた。

ヴィータ「何でだよ・・・何であたし達・・・はやての敵になったんだよ!!!!」

統夜「誰も好き好んで敵になった訳じゃない!!管理局の闇という歪みを破壊する為に俺はこの道を選んだ!!誰にも言われず・・・俺自身の意思で!!」

ヴィータ「だからって・・・納得出来ねえよ!!一緒に戦った仲間じゃねえか!!」

統夜「奴らは従わない者や自分より力のある者を淘汰し切り捨て・
・やがて世界を殺す!!お前達が本当に何を信じ何のために力を振
るっている?!管理局か?それとも自分の権力の為か?!それがお
前達管理局が求めているものなのか?!」

ヴィータ「あ、あたしは・・・あたしはああああ!!!」

統夜「この・・・馬鹿野郎!!!」

混乱状態でグラーファイゼンを巨大化させギガントシユラクを発
動させたが統夜は右手だけで防ぎ右の掌底に内蔵された短射程のピ
ーム砲の「パルマファイオキーナ」で破壊した後蹴り飛ばし気絶させ
た。

なのは「やつぱり・・・お話だけじゃ駄目みたいだね・・・」

統夜「話だけで解決出来るのならデバイスや武器は存在しない筈だ・

・・・」

フェイト「そうだよね・・・でも・・・」

統夜「真実が知りたいのなら・・・力を示せ!!!ここで決着^{けり}をつ
けてやる!!!」

はやて「・・・せやな・・・リイン!ユニゾンや!」

リイン「はいです!」

ユニゾンデバイスであるリインフォース?(ツヴァイ)とユニゾン
し髪の色がベージュ色、瞳が蒼に変化した。

なのは「これが私達の・・・」

フェイト「全力・・・」

はやて「全壊や!!!」

なのははレイジングハートを槍状に変化させ、フェイトはバルディ
ツシュをAEのアブソリュートザンバーと同じ半実体化した魔力刃

を持つ大剣に変化させた。

三人はそれぞれ魔法陣を展開し魔力を収束し始めた。

統夜「来い！！お前達の力を見せてみる！！」

レイヴ式を前方へ展開しアブソリュートザンバーに蒼炎と魔力を収束し始めた。

シューイイイイン・・・

なのは「スターライト・・・」

フェイト「プラズマザンバー・・・」

はやて「響け終焉の笛！ラグナロク！！」

統夜となのは、フェイト、はやてはそれぞれ収束し終え・・・

統夜「ブルーブレイズシューティングブレイカー！！」

ポオンツ！ゴパアアアアア！！！！

統夜は蒼炎を纏った収束砲を放ち・・・

なのは、フェイト、はやて「ブレイカー！！」

ジュツ！×3ゴパアアアアア！！！！×3

なのははピンク、フェイトは金、はやては白銀の収束砲を放ちブルーブレイズシューティングブレイカーとぶつかり合い光に包まれた。

統夜「はあああああ！！！！」

なのは「やああああ！！！！」

フエイト「はあああああ！！！！」
はやて「ぐうううう！！！！」

やや時間が経つにつれなのは達の収束砲が押しつつあった。

統夜「ぐっ・・・流星はエースなだけはあるがまだまだあああああ
あ！！！！！！」

己の魔力を上げグングンとトリプルブレイカーを押し返し直撃し大
爆発が起きた。

ドオオオオン・・・

なのは、フエイト、はやて「きゃあああああ！！！！」

統夜「これが蒼穹の死神の力だ・・・」

大爆発したのを見て呟いた。すると・・・

?「うぐっ・・・とう・・・や・・・」

統夜「！！はやて・・・」

なのはとフエイトは倒れていたが八神 はやてが立っていた。しか
しその様はバリアジャケットはぼろぼろであちこちが欠け落ち焦げ
た後があり、シュベルトクロイツを杖によやく立っているといっ
た満身創痍そのものといった有様であった。しかし、その目は未だ
戦意を失ってはいない。

統夜「あの砲撃に耐えたというのか!?流星は・・・夜天の王・・・
八神 はやて・・・」

はやて「統夜・・・まだや・・・まだ・・・」

統夜が時計を見ると笑みを浮かべはやては困惑していた。

はやて「統夜？」

統夜「お前達の勝ちだ・・・五分経ち立っていたのはお前だけだ・・・約束通り真実全部を教えてやる・・・」

はやて「そうか・・・無駄や・・・無かったんやな・・・」

統夜「おやすみ・・・はやて・・・」

眠ってしまったはやてをお姫様抱っこで抱え、なのはとフェイト、ヴォルケンリッターを天川家に転移して帰った。

はやて「ん・・・」

はやてが目を覚ますと、そこは自分がよく知っている部屋だった。

はやて「統夜の家・・・ここに来たの久し振りやな・・・」

はやてが懐かしむように周りを見ながら上体を起こすと体が悲鳴を上げた。痛いのが我慢して右側を見ると、隣の布団にはなのはが寝ていた。

はやて「なのはちゃん！」

更に奥の布団にはシャマルが寝かされていた。さらに、はやての左隣には狼形態のザフィーラが眠っていて、そしてその奥にはシグナムが眠っている。それだけではない。眼前には向かって左からヴィータ、フェイトが寝かされ全員が所々包帯を巻かれていた。

はやて「統夜が治療してくれたんかな？」

ガチャツ

その時部屋のドアが開いた。

希「にやあ・・・目覚めた・・・」

希がはやて達の様子を見に来た。

はやて「貴方は・・・？」

希「霧谷 希・・・統夜が呼んで治療を手伝った・・・」

はやて「統夜・・・が？」

希「(コクリ)」

希は首を縦に振った後ガチャツ。再びドアが開き統夜が入ってきた。

統夜「具合はどうだ？はやて」

はやて「最悪や・・・可愛い幼馴染相手に手加減してほしかったで・・・」

統夜「それは無理な相談だ・・・あれでも力出してたぞ？」

はやて「そうなんか？」

統夜「ああ・・・他の皆が目を覚ましたらリビングへ行くぞ。真実を教える為にな・・・」

はやて「そうか・・・」

統夜「そんな顔をするな。はやては笑ってる方がいいんだから」

はやて「あ、ありがとな・・・／／／」

はやての頭を自然に優しく撫で、はやては真っ赤になった。

希は何故か不機嫌になった。

統夜「どうした？」

希「何でも無い……」

ここだけ鈍感なのが統夜である。

数時間後……はやて以外のメンバーは目を覚ましリビングへ移動していた。

リビングには統夜と達哉、神王、魔王がいた。

希は気を利かせてくれたのか自分の家へ帰った。

神王「んじゃ自己紹介だ。俺の名はユーストマ。神界で神王つてもやっている」

統夜「神王をお菓子のおまけ程度にしか思っていない親馬鹿です」

神王「おい！？それは酷くないか?!」

魔王「まあまあ……私の名はフォーベシィ。魔界で魔王というもしているから見知っておきたまえ」

統夜「この人も魔王をお菓子のおまけ程度にしか思っていない親馬鹿です」

魔王「統ちゃん?!酷くないかい!?!」

統夜「酷くないわ!!俺は一応やっておくか……俺は天川 統夜 蒼穹の死神と呼ばれている」

達哉「俺は朝霧 達哉。瑠璃の軍神と呼ばれている」

神王と魔王は自己紹介したが統夜の毒舌に抗議したがスルーされ、念の為統夜と達哉も自己紹介をした。

なのは「(ねえ……あの人達って神界と魔界の王様なんだよね?)

「フェイト」(うん……しかも統夜は毒舌してたし……)」

はやて「……………」
シグナム「(そこだけ変わらん…………)」
ヴィータ「(はやて…………統夜をずっと見てるな…………)」
シャマル「(それは仕方が無いわ…………統夜君をずっと好きだったんだから)」

なのは達は念話で親馬鹿と統夜が両王に対する態度等の事で話していた。

はやて「どうも…………私は時空管理局特別捜査官をしている八神はやてと申します」

なのは「私は時空管理局武装隊戦技教導官をしている高町 なのはと言います」

フェイト「私は時空管理局執務官をしていますフェイト・テストロツサ・ハラオウンです」

シグナム「シグナムと申します」

ヴィータ「ヴィータです…………」

シャマル「シャマルと申します」

ザフィーラ「ザフィーラだ…………」

はやて達はそれぞれ自己紹介を両王(親馬鹿)にした。

統夜「お前達は俺らの事を何処まで知っている？」

はやて「統夜が二年前の事件で生死不明になったって事だけや」

なのは「そして…………朝霧君と一緒に管理局最強である特殊部隊『ソルジャー』に入った…………」

フェイト「それが二年前に犯罪組織と戦い壊滅した…………」

フェイトの言葉を聞き統夜はかなり真剣な表情になってこう言った。

統夜「その二年前の事件は違う……俺達が管理局を憎み破壊する理由である……真実はこうだ……」

（二年前）

統夜「なあ……本当にSSS級犯罪組織『ウータイ』との戦争で英雄になれるかな？達哉、明久」

達哉「さあな……」

明久「僕もなりたいたいけど……生き残る方が大事だし……」

二年前の統夜と達哉が同じ仲間だった吉井 明久と一緒に戦艦の中で雑談をしていた。

その時黒いコートを羽織り膝裏まである銀髪に腰には刀身が身の丈をはるかに超える長刀を差している長身の青年が入ってきた。

統夜「よう。イグニス隊長。今日こそ俺が英雄になれる日として何か無い？」

イグニス「そんなものは無い……少しは落ち着け……そんなんだからお前は『子犬の統夜』と呼ばれるんだ……」

統夜「おい！それどういう意味だよ」

イグニス「子犬のように落ち着かない……それだけだ。実力は認めているがな……魔力強化無しでやれる桁外れな身体能力と三人のEースを凌駕する魔力を持つお前をな……」

統夜「はやてや文乃が自慢できるような英雄になれるかも」

達哉「はあ……隊長。もうそろそろ時間ですか？」

イグニス「ああ……今日でこの大きな戦争を終わらせる……いいな……」

統夜、達哉、明久「了解……」

その後統夜と達哉、明久、イグニスは他の隊員を連れて地上へ降り

た。

統夜「月牙天衝!!!」

刃先から超高密度の魔力と気力を放出することを斬撃そのものを巨大化させて飛ばしウータイの兵士たちを吹き飛ばしていた。

達哉「凍氷斬!」

冷気が籠った斬撃を一人一人迅速に切り捨て機動性を活かして翻弄していた。

明久「はあ!!!」

刀で一人一人峰打ちしながら倒していた。

イグニス「八刀一閃!」

瞬速の斬撃を兵士たちに見舞っていた。

ウータイ兵「く……くそ……こんなに強いとは……予想外だ!!!」

ウータイ兵が強過ぎるソルジャーを見て絶望的になっていた時一つの戦艦が突然やって来た。

統夜「増援か?」

イグニス「いや……それは聞いてない」

統夜とイグニスは困惑したが直ぐに集中しウータイ兵と戦った。

戦艦内

艦長「頃合いだな。ソルジャーという爆弾を利用しウータイを完全に消滅させるぞ。アルカンシエルの準備をしる」

オペレーター「そ、それでは・・・味方であるソルジャーが巻き添えになります!!」

艦長「構うものか。強過ぎる化け物共は人にあらずだ。やれ!!手柄は私の物だ!!英雄になれるのだ!!」

艦長の非道的な言葉に洪々従いアルカンシエルをソルジャーとウータイが戦っている場所とウータイの本拠地へ発射した。

統夜「おい!!何でアルカンシエルが発射されてんだよ!？」

達哉「嘘だろ?!」

明久「え・・・?」

イグニス「総員急いでアルカンシエルから離れろ!!」

イグニスの号令で戦場から直ぐに撤退しようとしたが間に合わなかった者達は消え辛うじて逃げ切れた者は統夜と達哉、明久、イグニスの四人だけだった。

その四人はバラバラに散ってしまいどうなったのかは不明だ。

統夜「・・・・・・・・」

辛うじて逃げ延びた統夜はアルカンシエルの影響で重傷を負い気絶していた。

その後・・・

科学者「この少年は見事なものだな・・・『イグニスコピー』・・・いや・・・『ルシファー』の力に適応しておる!!」

助手「しかし・・・よろしいのですか?こんな事をして・・・我々は管理局・・・ソルジャーの生き残りを保護しては我々の立場はありませんか!!」

科学者「ふん!歪んだ管理局を破壊するにはイグニスに匹敵する・・・いや・・・それすら凌駕する潜在能力を持つ天川 統夜の力が必要だ!!」

助手「博士!!」

科学者「破壊するのだ!!全ての歪みを!!この狂った世界を!!無限の可能性を持つ男よ!!」

統夜は科学者らしき人物によって回収され何らかの実験をされ眠っていた。

〈現代〉

統夜「アルカンシエルを撃たれ突然吹き飛ばされた後の事から地球で乙女姉さんに助けて貰うまでの一年間の記憶が無いんだ」

なのは達は信じられない程に驚いた。

管理局の為に戦ったソルジャーをウータイごと爆弾代わりにさせられた事に・・・傲慢で腐り切っていた管理局に、なのは達は管理局への信頼を失うと同時に一体何を信じればいいのか分からなくなってきたしまった。

だがはやてはそれ以上に許せなかった・・・黒い感情・・・それは管理局への憎しみだ・・・大切な人を殺そうとした事への・・・

統夜「だが・・・」

シグナム「だが?」

統夜「頭の中に『破壊するのだ！！全ての歪みを！！この狂った世界を！！無限の可能性を持つ男よ！！』という言葉が離れないんだ・
・
」

なのは達は真実を聞き考えなくてはいけない・
・
本当に信じるもの・
・
本当に大切な事とは何なのかを・
・

第五話『本当に信じるもの』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

乙女「は〜い。統夜の姉で保護者の都築 乙女です」

乙女「統夜が時空管理局を憎むのは当たり前だと思うよ。信じていたものに裏切られてしまったんだから・・・」

乙女「統夜の真実を聞いた彼女達は新たな決意と行動に出る」

乙女「次回第六話『本当に大切な事』 テイクオフ」

番外編『イメージジOP』（前書き）

初めてになるイメージジOPです。ネタバレもありますが・・・どうぞ！

番外編『イメージOP』

HERO'S EPISODE イメージOP 深蒼

場面1（統夜と袂を分かったイグニスが淡い翠の光が露わになっている場所で大剣と長刀がぶつかり合う）

場面2（文乃やはやて、千世、希が背中を向けている統夜に視線を移していた。次に炎を灯した二槍を持つ真紅の青年が管理局員を倒している場面が映し出される）

場面3（統夜に何かできる事を考えながら夜空を眺めているはやて）

場面4（達哉やなのは、フェイト、シグナム、ヴィータがそれぞれ敵と戦っている）

場面5（月人居住区で統夜と真紅の青年が六刀と二槍がぶつかり合う）

場面6（はやて達を守り歪んだ世界を破壊する為に剣を満月の夜に振るう統夜）

場面7（稟や様々な人達が現れそれぞれ帰るべき場所や大切な存在がいる事を再確認する戦士たち）

場面8（力を解放し・・・突如背中から5対10翼の漆黒の翼が生え髪の色が蒼が掛った金髪、瞳の瞳孔が縦になり真紅に変化した統夜が背中の右部分に巨大な漆黒の片翼を展開したイグニスと再度ぶつかり合い大爆発を起こし光に包まれる）

番外編『イメージOP』（後書き）

初めてですが徐々に頑張り上手になりたいと思っています。では！

第六話『本当に大切な事』（前書き）

なのは「皆のアイドル高町　なのはだよ」

統夜「は？何を言ってるんだ？」

フェイト「さあ？」

リン「他人じゃないような気がします・・・」

シグナム「HERO'S　EPISODE第六話始まるぞ」

第六話 『本当に大切な事』

第六話 『本当に大切な事』

なのは「……………」

フェイト「……………」

はやて「……………」

神王「お前らはどうするつもりだ？いずれお前達も用済みとされて消えるのがオチだぞ？」

魔王「神ちゃんの言う通りかもね……もし統ちゃんから聞いた真実を知ったら君達は間違いなく消される……時空管理局によつてね……」

真実を隠し権力にしがみ付き傲慢な管理局の上層部ならやりかねないと思つた両王はなのは達に釘をさしておいた。

91

はやて「なあ……統夜……私達は一体何を信じればええんや？今の話を聞いて……怖いんよ……管理局は絶対正義やないんか？」

統夜「何を信じればいいかは人それぞれだ……それは分からん……」

はやて「……昔は良かったなあ……」

統夜「ああ……なのは達に会い闇の書事件を解決した事か……それは善と悪の二通りしかなかった……だがそれは本当では無い」

はやて「私はどうしたらええんや？統夜みたいに世界の歪みを破壊する為に争いで解決しても憎しみしか残らへん……怖くないんか？」

統夜「はやて……俺は何もしないより何かをして恨まれる方がいい……闇の書事件の時の俺やヴォルケンリッターの皆は『本当に

信じるべきもの』があると信じ、『本当に大切な事』だと思つてはやてを助けようとしてなのは達と戦つたんだと思つぜ？」
はやて「……………!!!」

はやてははつとしてシグナム達の方を見る。主人であるはやてがシグナム達の思いを無駄にしているのか？本当に大切なものを信じた彼女達の思いを……

シグナム「主……」

はやて「統夜……なのはちゃん、フェイトちゃん、シグナム、ヴィータ、シヤマル、ザフィーラ、リン……私、決めたで……」

はやては統夜達に宣言する。

はやて「向こうが悪で世界を歪ませてるなら私達はその歪みを破壊する悪になる。人々からどんなに恨まれようが憎まれよう構わへん！例えそいつらが来てもぶち殺したる!!!」

統夜「それがお前の本心か？」

はやて「うん。蒼穹の死神である統夜と共に歪んだ世界を破壊する。嘘だらけの世界を真実の世界に変える為に!!!」

なのは「私の持つ魔法で歪んだ世界を破壊する!!!」

フェイト「私の本当に信じるものと大切なものの為に戦う……私も仲間になる!!!」

シグナム「天川の言う事が正しかった……弱かった理由が何となく分かる気がする……済まなかったな……統夜……主。私も共に参ります!!!」

ヴィータ「私もなるぜ!!!はやてや統夜を騙して泣かせる野郎は叩き潰し歪んだ世界を破壊してやるんだ!!!」

シヤマル「私もよ。はやてちゃんの決意を無駄にはしないわ!!!」
ザフィーラ「私もだ……盾の守護獣たるもの、主を守らねばなる

まい!!」

魔王「良かったね。統ちゃん・・・仲間が増えて・・・」

統夜「ああ・・・」

神王「安心しな。俺達がバックアップぐらいはするぜ」

魔王「そうだね・・・私達も出来る限り協力はするよ」

統夜「これからが大変だと思うけど皆で頑張つて行こう・・・」

その後なのは達は管理局を退職する手続きを始め統夜と両王は新たな部隊を考案していた。

そう・・・世界の歪みを破壊する部隊を・・・

統夜「本当に会えてよかった・・・」

はやて「それは私もや・・・死んだと思った時はめっちゃ悲しかった・・・でもこれから一緒や・・・ん・・・／／／」

はやてが統夜に抱きついた後統夜の唇にキスをした。

咄嗟的だったのか統夜は固まり、なのはとフェイト、シグナム、ヴィータは顔を真っ赤にし、ザフィ-ラは啞然とし、シヤマルは何故か凄惨な笑顔になり、達哉と両王はニヤニヤしながら見ていた。

なのは「はやてちゃん・・・大胆・・・／／／」

フェイト「うん・・・恋はいつでもハリケーンってやつかな?／／／」

シグナム「これは・・・／／／」

ヴィータ「大胆だな・・・てか見せつけるんじゃないよ!!!／／／」

ザフィ-ラ「・・・」

シヤマル「はやてちゃん・・・大胆にやって・・・」

達哉「良かったな」

神王「そうだな」

魔王「そうだね〜一段落したし・・・宴でもやらないか？」

神王「おう!!」

両王「宴だー!ー!ー!」

親馬鹿は宴の準備をした。

はやては頬を赤く染めながら爆弾発言をした。

はやて「プハア・・・一緒に戦う仲間でありここに住んでええですか?旦那様?／／／」

統夜「別に構わないが・・・お前は何て事するんだよ!!俺のファーストを・・・はっ!?!／／／」

真つ赤にしながらはやてに言ったが既に遅くはやては喜んでいた。

はやて「私が最初や〜」

魔王「これはめでたいね」

神王「そうだな」

はやてに抱きつかれた統夜は両王をいつか殺すと誓いながらも宴が始まった。

尚はやては統夜デレである為

翌朝の学校・・・

達哉「大丈夫か？」

統夜「これが大丈夫に見えたら・・・お前の頭がおかしい・・・」

稟「何があつたんだ？」

統夜「何も聞くな・・・」

文乃「希から聞いたけどはやてが来たんだってね？」

統夜「あ、ああ・・・」

文乃「何かしたんじゃないでしょうね・・・？」

ギロリと文乃が統夜を睨んできた。逆にキスされたり一緒にお風呂に入ったり、ベッドの中に侵入された事があった。

統夜「シテナイヨ・・・ボク・・・シラナイヨ・・・」

突然片言になって答えたが文乃の怒りが上がったのは言うまでも無かった。

文乃が何か言おうとしたが紅女史が教室に入り自分の席に戻った。

紅女史「え〜・・・このクラスに三人の転校生が来る」

樹「三人とも美少女ですよね？」

紅女史「お前の感覚はどこから来ているんだか・・・まあいい・・・入って来い」

三人の少女が教室に入って来た。

統夜「マジか・・・」

達哉「ご愁傷様・・・」

三人の少女というのがなのはとフェイト、はやてだったのだ。

なのは「高町なのはです、よろしくね〜」

フェイト「フェイト・T・ハラオウンです、よろしく／＼」

はやて「八神はやてや、よろしゅうお願いします」

男子達「ヒヤッハーツ！！やったぜー！！！！女神達はまだ存在したー！！！！」

紅女史「ええい！！静かにしろ！！！！」

紅女史が暴徒化になりそんな男子達を見て一喝するとクラス全体が静かになった。達哉だけ心の中で笑っていて統夜は放心状態になっていた。

紅女史「はぁ・・・一時間目は自習にする・・・麻弓で仕切ってくれ・・・」

麻弓「はいなのですよ」

そう言い残し紅女史は教室を出た。

麻弓「質問なのですよ好きな人はいますか？」

この時麻弓の質問で混沌が起きるとは誰もが予想はしていなかった。

なのは「うーん・・・いないね・・・」

フェイト「私も・・・」

はやて「統夜や」

男子達「天川ー！！貴様かああああ！！ぶるああああああ！！！！」

樹「同志達よ！！武器を取れ！！今こそ天川 統夜を葬り去るのだ
く・・・ブオンツ！！」あべしっ！！・・・」

樹の顔面にははやてによって投げられた教壇の角が当たって気絶した。

はやて「誰を葬り去るやて？」

はやてがブラックスマイルで男子達に問い掛けた。あまりの恐怖に男子達だけでなく女子達も震えていた。

某狂オシキ鬼に勝てるんじゃないかと男子達は思ったそんな・・・

男子達「い、いえ何でもありません!!!」
はやて「ん〜」

統夜「僕達は・・・何で・・・こんな所へ来てしまったんだろう・・・」

文乃「ちよつと！何やってんのよ!!」

もう一人の幼馴染である文乃が統夜とはやてを引き離していた。

達哉「平和だな」

なのは「にはは・・・」

フェイト「統夜デレ・・・恐るべしだね・・・」

三人は我関せず見守っていた。

かつて管理局のエースだった三人は新しく生まれ変わろうとしていた。

第六話 『本当に大切な事』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

ネリネ「はやてさんって恐ろしいですね・・・お父様から聞いた恋はいつでもハリケーンなのですかね？」

ネリネ「何でリムちゃんが来たんでしょう？しかも女の人と一緒に・・・」

ネリネ「次回は『嫉妬って本当に怖いな』 テイクオフ」

第七話『嫉妬って本当に怖いな』（前書き）

カッタービングだぜ！俺！！

統夜「ああ・・・Z E A Lか」

はやて「でも最初の話を見てへんやろ？」

ぐぬっ！録画したからいつか見る！！

亜沙「あはは・・・HERO'S EPISODE第七話始まるよ」

第七話『嫉妬って本当に怖いな』

第七話『嫉妬って本当に怖いな』

時が過ぎ昼休みになった頃・・・

統夜「（何でこうなったんだろう・・・）」

教室にて統夜の右側に文乃、左側にはやて、その前に千世と希が座っていた。

四人の共通点は負のオーラのものを放っていた。それ故文乃達に近づく者達はいなかった。

四人の負のオーラの中心に座っている統夜は冷や汗をダラダラ流していた。正直に言うと居心地が悪い。

私・・・天川 統夜は何故このような事になったのでしょうか・・・あつ・・・また人が倒れた・・・昼飯タイムなのに食が進んでいない人がいる。

無理も無いよな・・・負のオーラを放たれちゃ・・・この四人がいたらミュータントやコズミックビーイングに勝てそうな気がする・・・うん・・・

これってフェイトや親馬鹿二号（魔王）が言ってた恋はいつでもハリケーンってやつかな？

そんな中達哉だけは笑みを浮かべていた。

稟「達哉・・・助けなくていいのか？」

達哉「統夜のああいう事って全然無いからな。これから面白くなりそうだから放っておいた方がいい」

稟「それ絶対楽しんでるよね!？」

菜月「知らない間に変わったね・・・」

翠「朝霧君にああいう所があったんだね・・・」

今の状況を楽しんでいる達哉に稟は怒鳴った。

なのはやフェイト、楓、シア、ネリネ、麻弓は統夜達の修羅場に恐怖を感じていた。

樹「統夜・・・いい気味だね」

クククと笑う変態メガネがいたが気にしない。

文乃「まさか・・・はやてがここまで統夜が好きだなんて予想外よ・・・昔は普通だったのに・・・」

千世「統夜!この女は何?!」

希「にゃあ・・・正直に・・・」

はやて「なあ・・・統夜・・・文乃ちゃんは兎も角二人は誰や?」

統夜「(逃げたい・・・)梅ノ森 千世と霧谷 希です・・・はい・・・」

はやて「そうか・・・でも幼馴染であるうちが優先や!」

文乃「それは私も入ってるわよ!べ、別に統夜が盗られるのが嫌とか言ってるんじゃないからね!!!」

千世「主である私が優先よ!」

希「私が優先・・・」

統夜が席からゆっくりと立ちあがり・・・

統夜「なあ・・・俺邪魔みただし向こう行っていい?」

はやて「却下や。統夜!」

文乃「逃げるな!」

千世「アンタの事で話してるんだからここにいなさい!!」
希「ここにいる・・・」

四人は統夜に叫びながら無理矢理座らせた。

流石の『蒼穹の死神』も四人の修羅には勝てなかった。

再び四人は白熱した口論が始まった。

ふと統夜は達哉の方を見る。統夜が困っている顔を見て笑いを堪えながら楽しそうに見ている。

あの馬鹿・・・仕返しをしてやると達哉を睨みながらそう思った。

はやて「統夜は私と一緒にお昼を食べるんや!!」

文乃「再会したばっかなのに何よ？その変わりようは!？私と一緒によ!!」

千世「私よ!!」

希「私・・・」

中々終わらない口論に終止符を打つ為・・・はやては自分が優先であると共に勝負に出た。

はやて「私は昨日、統夜の唇・・・ファーストキスをした挙句一緒にお風呂に入り一緒に寝た事があるで」

統夜「おii!!何を言ってるんだお前は!？」

慌てて統夜は叫んでしまった。

楓「・・・／／／」

シア「大胆つす・・・／／／」

ネリネ「凄いです・・・／／／」

菜月「大胆・・・／／／」

楓とシア、ネリネ、菜月は真っ赤になり、麻弓ははやてにこう質問をした。

麻弓「ど、どんな・・・味だったの？」

はやて「統夜の味・・・病みつきになりそうな味や・・・」

翠「何か・・・エロい感じが・・・」

統夜「おい！？余計な事を言わないでほしいね！！麻弓！！」

文乃は火に油を・・・

文乃「な、わ、私は統夜に着替えてる所を見られた！！！！」

少し赤くなりながら爆弾発言をした。

統夜「アレは事故だ！！」

なのは「にやははは・・・これはO H A N A S H Iが必要かな？」

なのはは流石にと思ったのかO H A N A S H Iをしようと考えていた。

統夜「お前ら何恥ずかしい事を言ってるんだ！！」

これ以上はマズイと思ったのか止めようとしたが・・・

希「にやあ・・・お風呂上りに統夜に裸を見られた・・・」

トドメとばかりに希が言い放った。

樹「は、はははは・・・統夜・・・殴っていいかい？全力全壊で地

球が壊れるくらいに！！！」

統夜「テメエは黙ってる！！！！てか大胆過ぎるにも程があるだろう！！！！」

怒鳴った後、統夜はチラツと周りを見た。

男子達は嫉妬を込めた眼差し、女子からは軽蔑の眼差しを統夜に向けていた。

無理も無い・・・希の裸や文乃が着替えてる所を見た。はやてと一緒に風呂に入り、一緒に寝たあげくはやてのファーストキスを奪った。皆の頭の中では統夜はエロス大王、ラッキースケベであると認識された。

凜「流石の俺でも無いぞ・・・」

統夜「うるせえ！！お前も一緒だろうが・・・楓の着替えてる所や裸を見てる癖に・・・」

凜「おい！！俺を巻き込むな！！てか・・・しかも現在系！？」

統夜「達哉も同類だ・・・妹である麻衣ちゃんの裸や着替えてる所を見てた癖に・・・」

達哉「そつだぞ！俺も巻き込むな！まあ・・・事故ではあるが・・・はっ・・・！！！！」

二人は後ろを見た瞬間・・・シアとネリネ、菜月、翠から黒いオーラが放たれた。

そして親衛隊が何処から現れ・・・

樹「殺れ！！」

樹の号令と共に襲い掛かったが統夜達は逃げ始めた。

その後に黒いオーラを纏ったシアとネリネ、菜月、翠も追いかけて始めた。

達哉「お前のせいだぞ!!」
統夜「お前の思い通りにされてたまるか!!一人だけ笑いやがって!!」

放課後

統夜「マジで疲れた．．．でも達哉と稟．．．ご愁傷様．．．そしてざまあみる．．．」

親衛隊から逃げ切ったのはいいが稟と達哉は椅子と魔力弾、しゃもじを用いた制裁を喰らってしまった。

統夜「本当に居心地が悪かった．．．さて．．．ゲーセンでSSF？AEをやるかな．．．ん？おい．．．」

ゲーセンへ行こうとしたが途中で知っている女性を見掛け声を掛け歩いていった。

?「ん？統夜ちゃん？今、学校の帰り？」

統夜「まあね。で．．．その娘．．．誰なんだ？乙女姉さん」

乙女「ん．．．分からないわね．．．」

乙女と呼ばれた女性は少し困惑した表情で言い統夜は銀髪のツインテールをし猫のぬいぐるみを手にした少女に顔を向けて質問をした。

統夜「君は誰を探してるのかな？」

?「．．．ネリネ．．．知ってる．．．?」

統夜「ネリネか．．．知ってるよ」

乙女「良かったわね」

統夜「名前・・・知らないの？また留守にしたんじゃないよね？」

乙女「あ、あはは・・・後で分かるから行こう」

統夜「了解つと・・・はあ・・・」

乙女と少女を魔王の屋敷まで案内し始めた。

家の門の前で箒を持って掃除しているネリネを見掛けた。

ネリネ「あ、統夜様。どうかなさいましたか？」

統夜「君の知り合いが会いたいと言って案内してた所だよ。ほらこの娘だよ」

統夜の視線を辿った先の銀髪のツインテールの女の子を見て驚いた。

ネリネ「リムちゃん!？」

魔王の家に入った統夜達はリムちゃんと呼ばれた娘の事を魔王に教えて貰った。

尚この時に乙女は魔王に自己紹介している。

統夜「人工生命体？」

魔王「そう・・・魔界と神界とが協力して作り上げた最強の魔力の持ち主・・・それがこのプリムラさ」

乙女「不思議ね・・・」

魔王「まあ・・・統ちゃんの魔力には及ばないけど・・・気を付けておくれよ。最強の魔力は持っているが・・・困った事にその制御が全く出来ない。暴発したら英都は余裕で消滅するよ」

統夜「おいおい・・・にしても・・・何故人工生命体を作ったんだ？」

魔王「とある魔法を研究する為・・・『ユグドラルシル計画』の為

にね・・・どうしても強大な魔力が必要なんだよ。それで、皆違った方法によるものではあつただけど人工生命体は全部で三体作られた。過去の二体は制御しきれずに終わってしまった・・・念の為聞くけど・・・統ちゃん・・・君は今の話を聞いて軽蔑しないかい？」

統夜「（つまり死んだ・・・か・・・？）する訳無いだろ・・・アタラを信じてるんだから」

魔王「ありがとう・・・プリムラはその中で一番年下の三号体さ。あまり他の者と付き合おうとしないんだがネリネちゃんだけには多少なついている」

乙女「でもなぜそのプリムラちゃんがここに？」

魔王「それは本人が一番聞いてみるのが一番だろうね。プリムラ」

魔王はプリムラと呼ばれた少女に顔を向けて答えるように言った。

プリムラ「・・・りに会いに来た・・・どんな人なのか・・・会ってみたかった・・・ずっと・・・話聞いてたから・・・」

ネリネ「リムちゃん・・・」

統夜「ちよつといいかな？」

魔王「何だい？」

統夜「プリムラをどうするんだ？」

魔王「しばらく私達の家に住まわせてみよう。また施設へ戻らなければならなくなるだろうけど・・・うーん・・・あつ・・・そっだ・・・統ちゃん！可愛いペットを一人飼ってみないかい？芸は出来ないけど、芸は出来ないけどトイレはしつけ済みだよ」

プリムラを自分の隣に呼び、肩を掴み“さあさあ”と言いながら、まるでお買い得商品のように進めていた。

統夜「うーん・・・」

乙女「いいんじゃない？」

統夜「え……？でもな……」

どうするか迷っている

魔王「（君の家に住ませる理由はただ一つ……管理局にプリムラを悪用される可能性があるからだ……稟ちゃんには悪いけど……いいかな？）」

統夜「（いいよ……奴らにそんな事をさせてたまるか……）いいですよ。プリムラは俺達で預かります」

魔王との小声での交渉で了承した。

統夜「俺は天川 統夜。よろしくな。プリムラ」

乙女「私は都築 乙女よろしくね〜 プリムラちゃん」

統夜と乙女はプリムラに自己紹介をした。

乙女はプリムラをハグしプリムラは無表情だった。

統夜「さて……帰りますか……どうもお邪魔しました」

乙女「お邪魔しました」

魔王「また遊びに来てくれたまえ」

ネリネ「また遊びに来てくださいね」

そして天川家に戻った。

はやて「私は天川 はやてや。よろしゅうな」

統夜「八神だろ……はあ……」

はやて「いずれなるからええやん」

鮮華「私は天川 鮮華……統夜兄さんの妹です」

シグナム「シグナムだ。よろしく頼む」

ヴィータ「ヴィータだ。よろしくなプリムラ」

シャマル「シャマルよ。よろしくねプリムラちゃん」

ザフィーラ「ザフィーラだ・・・」

リン「リンフォース？です。よろしくお願ひしますです。プリムラちゃん」

プリムラ「はやて・・・鮮華・・・シグナム・・・ヴィータ・・・シャマル・・・ザフィーラ・・・リンフォース？・・・使用人？」
統夜、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リンフォース？「断じて違ちがいます」（うです）」

統夜とシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、リンフォース？はツツコミを入れた。

はやて「私はどっちかと言うと妻やな。本当にお久し振りです。乙女さん」

乙女「本当ね、何年振りかしら？」

はやては乙女と久し振りの再会で色々な話をしていた。

一人・・・天川家に新たな家族が出来た。

第七話『嫉妬って本当に怖いな』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

なのは「プリムラちゃんは可愛いね〜でも高い魔力を持つてるから・
・管理局に狙われないように注意しないと・・・」

なのは「統夜君とシグナムさん、ヴィータちゃんが次元世界で管理局の上層部と繋がっている犯罪組織の壊滅の依頼を受けた・・・その時に管理局の魔導師数名と共に舞い降りた黒いアーマーを纏った少女が街を殲滅した」

なのは「そして管理局の上層部の強硬派は独立部隊を結成し歪みと混沌が広くなりつつあった。」

なのは「次回『更なる混沌と歪み』テイクオフ」

第八話『更なる混沌と歪み』（前書き）

桃香達にイメージジOPを渡した後の場面・・・

統夜「死ぬかと思った・・・」

はやて「自業自得や！」

統夜「もし桃香に当たったら終わってたぞ？」

いよいよ・・・歪みと混沌を撒き散らす存在が現れる・・・

ヴィータ「HERO'S EPISODE 第八話始まるぜ」

第八話『更なる混沌と歪み』

第八話『更なる混沌と歪み』

統夜「……………」

シグナム「……………」

ヴィータ「……………」

現在三人はアーマー、バリアジャケットを展開してとある次元世界の上空を飛行していた。

（二時間前）

統夜「管理局の上層部と繋がっている犯罪組織がここの世界に？」

男「ああ……まあ……俺達情報屋も管理局の上層部のやり方に反対していてね……ハッキングやクラッキングをして手に入れたんだよ」

男はノートパソコンを起動させ管理局の上層部と繋がりのある犯罪組織がいる次元世界の情報を統夜に見せた。

次元世界を飛び回っている情報屋というのは便利で信頼も厚くハッキングやクラッキングはお手の物の人物が主にいる。

男「依頼内容は『管理局の上層部と繋がりのある犯罪組織の壊滅』だ……」

統夜「その依頼引き受けた……しかし……この世界は歪みつつある……」

男「そうだな……反管理局主義や思想への弾圧や虐殺も行われているからな……」

統夜「いつになったら終わりが来るのか・・・心配だ」
男「ああ・・・んじゃ俺はこれで・・・依頼料は後日振り込んでおく」

アブソリュートエターナルにデータをコピーした後情報屋の男はそのまま転移して消えた。

（現在）

ヴィータ「本当に信用していいのかよ？その情報は・・・」
統夜「嘘かもしれないってか？まあ・・・そうだよな・・・」

街にある犯罪組織がいるポイントへ着きヴィータは情報屋の情報を疑い統夜に言った。

ヴィータ「もし嘘だったらアイス奢れよな！」

シグナム「あれじゃないのか？」

シグナムの視線を辿ると・・・犯罪組織のアジトらしきものが見えていた。

統夜「そうここだ・・・」

アブソリュートエターナルにコピーされた情報と今の場所と照らし合わせたものを二人に見せた。

ヴィータ「あ、本当だ・・・」

統夜「だろ・・・？」

シグナム「さっさと片付けるぞ」

統夜、ヴィータ「おう！！」

統夜はアブソリュートザンバー、ヴィータはグラーフアイゼン、シグナムはレヴァンティンを手にして中へ入った。

戦闘員「何だテメエらは？」

ズバア！！ブツシャアアアア

統夜「お前達を倒す者だ」

アブソリュートザンバーで下からの斬り上げてから言った。

ヴィータ「恨みはねえけどよ・・・」

シグナム「悪いが壊滅させてもらおう！！」

ヴィータは右手の指の間に小さな鉄球を生成しハンマーヘッドで撃った後グラーフアイゼンを一発カートリッジロードしハンマーヘッドの片方が推進剤噴射口に、その反対側がスパイクに変形した形態ラケーテンフォルムにした後・・・

ヴィータ「ラケーテンシユタイゲン！！」

推進剤噴射口を噴射させ自分の身体を横回転しながら上の方向へ移動しながら戦闘員の顎に目掛けてヒットさせて浮かせた。

その後にスパイクの部分で数回連打した後カートリッジロードし再び推進剤噴射口を噴射させ勢いのある横回転し・・・

ヴィータ「ラケーテンメテオ！！」

急降下するように横回転した為勢いが増し近くにいた戦闘員が吹き

飛んだ。

ヴィータ「へっ……コンボってやつが出来たぜ……」

ラケーテンフォームからハンマーフォームに変形させ倒していた。

シグナム「ヴィータのやつ……コンボは私に合わん……が……
試してみるか……飛龍一閃を応用した技を……」

シグナムはただ単に長剣で一撃一撃斬り伏せていた後レヴァンティンを一発カートリッジロードをしシユランゲフォームにした後空へ飛翔した。

その後に鞘に納め魔力を圧縮後、シユランゲフォームの鞭状連結刃に魔力を乗せた斬撃を素早く連続で振りかざした。

シグナム「蛇龍乱閃!!」

鞭のように激しく振りかざし戦闘員を吹き飛ばしていた。

統夜「んじゃ……即終わらせる為に……」

アブソリユートドラグーンを全て自分の周りに射出した後アブソリユートザンバーをアブソリユートウイングの右側に納めた。

その次にアブソリユートライフルの二丁を両手で持ちアブソリユートドラグーンとカリドウス、両腰にあるレールガン「クスフィアス」の一斉発射準備をした。

統夜「ターゲット……マルチロック……行けえ!!!」

二丁のアブソリユートライフルとアブソリユートドラグーン、カリ

ドウス、クスファイアスの一斉発射・・・ハイマツトフルバーストを見舞って戦闘不能にした。

ヴィータ「本当に恐ろしい性能だよな・・・それ・・・」

シグナム「全くだ・・・管理局も恐ろしいものを作ったものだ・・・」

統夜「そんじゃ・・・リーダー格を連れていくか・・・」

ハイマツトフルバーストの巻き添えで犯罪組織の長は気絶していた。すると・・・リーダー格を連れて真実を知ろうとした瞬間五つのビームがリーダー格の男の胸に突き刺さりそのまま死亡した。

シグナム「誰だ!!」

管理局員「俺達ですよ。元管理局員のシグナム、ヴィータ」

少女「・・・」

杖を持った管理局員二人と背部に砲門がついた丸いフライトユニットが付いた黒い強化装甲を纏った少女が現れた。

ヴィータ「テメエら・・・何だよ・・・それ・・・」

管理局員2「ああ・・・これ？お前らを消す為の玩具さ。ギャハハ!!」

管理局員は統夜達を嘲笑いながら言った。

統夜「アブソリュートエターナルと同じ・・・それに何だ・・・この感じは・・・？」

管理局員「おい・・・お前・・・そいつはアブソリュートエターナルじゃねえか!!」

管理局員2「誰かに盗まれたって話だったが・・・ここで見つかる

とはなあ……」

統夜「そうだが……お前らは犯罪者を殺す集団になったのか？」

管理局員「俺達は絶対正義だから犯罪者を殺してもいいんだよ。常に正しいのは俺達と『あのお方』だ！！」

管理局員2「そうだな。んじゃ……おい！奴等を殺せ」

管理局員の一人が少女に統夜達を殺すように命令をした。

少女「……了解……」

少女は胸部の3連装大口径ビーム砲を発射し統夜達は回避し建物を破壊した。

統夜「威力が半端じゃねえぞ！！」

管理局員「ギャツハツハツハ〜どうよ！これが『デストロイ』の力よ！！！」

管理局員2「『生きた兵器』は凄いな〜あつ……お前ら守護騎士も似たようなもんだったな〜」

ヴィータ「テンメエエエ！！！」

シグナム「貴様！！！」

自分達を生きた兵器などの嘲笑い発言をした管理局員に怒りを露わにした。

管理局員2「だってそうだろ？プログラムだし……お前の主を『

生きた兵器』にしたらよりおも……『ザシュッ！！』……」

……」

管理局員「なつ……！？」

管理局員の一人の首が切断され落ちた。驚く管理局員の目線にシグ

ナム以上に怒りを露わにした統夜がいた。

統夜「お前達管理局員は予想以上に腐ってるな……」

管理局員「ま、まままま……まさか……貴様は……蒼穹の死神……！」

統夜「テムエら管理局の上層部は地獄行き決定だ……！」

その後管理局員の腹部を斬って殺した後少女が……

少女「破壊する……」

丸いフライトユニットから20門内蔵されている熱プラズマ複合砲を発射し無差別に攻撃し始めた。

ヴィータ「何だよ！？あれ！？」

シグナム「火力が半端じゃないぞ……」

統夜「止めるぞ……この街が滅ぶ前に」

カリドウスを発射したが両腕でビームシールドで軽々と防いだ。

ヴィータ「嘘だろ……！」

少女「……」

胸部の3連装大口径ビーム砲と五指先端にあるビーム砲の同時発射を仕掛けた。

シグナム「なら物理攻撃だ」

レヴァンティンをシュランゲフォルムにし連結刃で斬り裂こうとしたが……

少女は軽々と避けシグナムを殴り飛ばそうとしたが鞘で防いだが罅が入ってしまった。

シグナム「何という力だ……」

統夜「なら……」

アブソリュートザンバーを居合の構えにした。

シグナム「(何をやる気だ?)」

統夜「(シグナム……俺の攻撃の後に紫電一閃を放ってくれ……
ヴィータはギガントフォルムで……ギガントシュラクを……)」

シグナム「(お前の作戦に賭けてみよう……)」

ヴィータ「(ああ……やってみようぜ。早めにやんねえと……
こっちがやばい……)」

統夜「獅子……一進!!」

電光石火の居合いで胸部の3連装大口径ビーム砲の部分を切り裂き使用不能にした。

少女が怯んだ後シグナムがレヴァンティンをシュベルトフォルムにし一発カートリッジロードし刀身に紫色の焰を灯し……

シグナム「紫電……一閃!!」

紫電一閃で胸部を切り裂いた。

ヴィータがグラーフアイゼンを2発カートリッジロードしハンマーヘッドを巨大な角柱状のものに変形させたギガントフォルムで……

ヴィータ「ギガント……シュラク!!!!」

ドゴオ！！

背中部分を殴り丸いフライトユニットと砲門を砕き吹き飛ばした。

統夜「これで・・・武装の半分は使えないな・・・」

シグナム「もしあれが管理局で量産されれば洒落にならんぞ・・・」

ヴィータ「同感だ・・・はやてやなのは、フェイトでも苦労すると思っぜ・・・」

統夜は普通だがシグナムとヴィータは疲れていた。

その時少女が立ちあがった。

ヴィータ「またか!？」

統夜「待て・・・何か様子がおかしいぞ」

少女は突然倒れ激しい痙攣を起こした。

少女「アアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

少女は唾液を垂れ流しながら発狂し眼の下に隈のようなものができ始めた。

シグナム「何だ!？」

統夜「おそらく禁断症状だ!」

そして少女はしばらくすると動かなくなった。

ヴィータ「眠った・・・のか・・・?」

統夜「いんや・・・もう死んでる・・・」

統夜は少女に近づき脈をとり脈が無かったので死んでしまった事を
ヴィータに言った。

シグナム「これが・・・管理局の正義なのか!!」

ヴィータ「こんなのって無いよな・・・」

統夜「ああ・・・」

統夜は少女の瞳を閉じさせ黒い十字架を拾った。

ヴィータ「お前・・・それをどうするつもりだ？」

統夜「一つあれば弱点とか分かるかもしれないから・・・」

シグナム「そうか・・・撤退するぞ・・・」

管理局の歪みを感じた三人は地球へ戻った。

その頃時空管理局本局では・・・

肩まである紫色の髪に金色の瞳をした綺麗な顔立ちをした女性が上
層部の連中を集めていた。

？「皆さん・・・ここに集まったのは他でもありません。今話題に
なっている・・・『蒼穹の死神』と『瑠璃の軍神』、『紅蓮の猛虎』
の三人の手によって我が研究施設が壊滅され、ロストロギアが奪取
されているのはご存知ですか？」

悲しそうな表情をしながら演説をしていた。

セイラ「彼らの存在が反管理局主義や思想を持つ人達の希望になっ
てしまいました・・・このままでは全次元世界の平和と秩序が崩壊
してしまいます・・・この私・・・セイラ＝シュトラウトに力を貸
してください!!」

悲しそうな表情から真剣な表情に変わり

セイラ「我々・・・秩序の為に独立部隊『セントクルセイダーズ』
を結成する事をここに宣言致します！！反管理局主義や思想を滅ぼ
し我らの正義を見せるのです！！」

上層部達はセイラに賛同し大きな拍手の音が聞こえたのは言うまで
も無かった。

この時世界の歪みは偽りの正義と秩序によって混沌と共に大きくな
りつつあった。

第八話『更なる混沌と歪み』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

フィーナ「時空管理局というのは本当に歪んでいるわね・・・」

フィーナ「ここが地球の英都・・・私達のホームステイ先は・・・と・・・」

フィーナ「そして天川 統夜は新たな剣を手に入れる」

フィーナ「次回『新たなる剣と月からのお姫様』テイクオフ」

オリキャラ&デバイス設定（前書き）

オリキャラとデバイスです。

第二次Zが待ち遠しいぜ！！

統夜「エクシアが使いたいぜ・・・」

はやて「私はストフリや」

どうぞ！！

オリキャラ&デバイス設定

名前：セイラ^{II}シュトラウト

性別：女

種族：人族

容姿：肩まである紫色の髪に金色の瞳をした綺麗な顔立ち

身長：155cm

スリーサイズ：B81/W56/H79

年齢：不明

魔力光：紫

魔力：測定不能

気力：測定不能

魔術式：ミッドチルダ式

性格：聖母のような微笑を絶やさない温和で思慮深い性格だが本性は自己中心的でヒステリック

趣味：世界の支配、ロストロギア収集

好きなもの（事）：コーヒー

嫌いなもの（事）：自分の意に従わない人間、無能

詳細：時空管理局の大將に上り詰め強硬派が設立した独立部隊『セイントクルセイダーズ』の総大將。

天川 統夜やイグニス、朝霧 達哉、吉井 明久の運命を狂わせた『ウータイ戦争終結』にてアルカンシエルを放つように指示させた張本人。

味方に対して聖母のように接してくるが敵に対しては無抵抗の相手でも切り捨てる等冷酷非道な一面を持つ。

本性が露わになった時は血管が浮き出、口元が激しくゆがんだその顔やヒステリックな言動は、聖女とはほど遠いものになっている。

魔導師としての腕も超一流で自分こそ全次元世界の統治者に相応しい人間だと強く思い込んでおり、自分以外の他者を見下している。

デバイス：デストロイ（アーマードデバイス）

形状：背部に砲門がついた丸いフライトユニットが付いた黒い強化装甲

搭載システム：B I E S搭載。それ以外のシステムは搭載していない
待機状態：黒い十字架

備考：管理局の独立部隊『セントクルセイダーズ』が開発した強化人間用のアーマードデバイス。

目的は破壊や殺戮用に造られている為攻撃力は高く量産されている。武装は背部の砲門から発射される長射程大出力ビームキャノンで最強の武装である「アウフプラー・ドライツェーン」

丸いフライトユニットから20門内蔵されているビーム砲で平面全方位にあらゆる敵や建造物を薙ぎ払う威力を持つ熱プラズマ複合砲「ネフェルテム」

胸部の3連装大口径ビーム砲「スーパースキュラ」、両腕に砲門が付いた籠手式のフライヤービーム砲「シュトゥルムファウスト」五指先端にあるビーム砲で攻撃する「5連装スプリットビームガン」背部フライトユニットに装備された魔力ミサイルランチャー。両腕と背部には陽電子リフレクタービームシールドを搭載している。

管制人格は存在しない

オリキャラ&デバイス設定（後書き）

現時点でのデストロイは試作段階で量産はまだやっておりません。

第九話 『新たなる剣と月からのお姫様』 (前書き)

第二次ゼーツト!!

統夜「イエー!!!」

はやて「イエー!!」

千世「イエー!!」

統夜とはやて、千世は馬鹿騒ぎしていた。

達哉「うるせえええええ!!!」

フィーナ「ちよつと達哉落ち着いて! HERO'S EPISODE
E 第九話始まるわ」

第九話 『新たなる剣と月からのお姫様』

第九話 『新たなる剣と月からのお姫様』

統夜達が任務を終えた頃月から地球へシャトルが向かっていた。

？「姫様、見てください。地球が大きく感じます」

メイド服を着た少女が地球を見て興奮していた。

？「ミア、少しは落ち着きなさい」

ドレスを着た少女がミアと呼んだメイドを窘めていた。

？「確かに綺麗ね・・・」

統夜「何故俺らが呼ばれたんだ？」

達哉「護衛だよ」

統夜「お前で充分だろうが・・・徹夜で『ドライバー』の設計をしてたんだから・・・」

麻衣「まあまあ・・・」

？「そうよ。統夜君。貴方と達哉君の二人なら余裕よ」

統夜「あー・・・そうでやんすねえ・・・さやかさん」

さやかと呼ばれた女性に元気が無い声で返した。

月人居住区の空港に達哉と統夜、さやかの三人が待っていた。

統夜「で・・・誰が来るんだよ？ああ・・・お姫様だったな・・・最近ではお姫様バーゲンセールでも流行ってるのか？」

達哉「まあ・・・トラットリアで何か奢るから」

統夜「絶対だぞ？」

さやか「もうすぐ来るわよ」

暫らくすると一隻のシャトルが降りて来た。

フィーナ「皆さん、ご苦労様です。スフィア王国王女フィーナ・フ
アム・アーシユライトです。」

ミア「姫様のお世話をさせてもらっています。ミア・クレメンティ
スです。」

統夜「ど〜も。俺は天川 統夜です。好きな食べ物は牛丼とピザ、
焼き魚で趣味はギャンブルです」

達哉「お前・・・それ要求してるよね？！てか失礼だろ?!」

さやか「達哉君！」

達哉「ご、ごめん・・・姉さん・・・俺は朝霧 達哉です。よろし
くお願いします」

統夜「そうだぞ」

さやか「貴方が原因よ・・・統夜君・・・ホームステイ先へ行きま
しょう」

フィーナとミアを連れて朝霧家へ向かった。

統夜「姫様は護衛無しで来るってどんな神経してるか疑っちゃうよ
ね」

フィーナ「希望でしたので・・・」

達哉「そうだったのですか・・・」

さやか「統夜君・・・フィーナ様にあんまりタメ口や軽はずみな事
は謹んでね」

フィーナ「いいのよ・・・さやか・・・彼の言うとおりよ・・・」
統夜「ヒュウ 話の分かる姫様で良かったぜ。胸の大きい女性はこ
うでなきゃ」

フィーナ「っ・・・！？／／／／」

ゴスツ！

統夜「いてっ！？」

達哉「いい加減にしる・・・月のお姫様にセクハラしたらどんな事
が起こるか・・・想像が出来ない・・・」

達哉が統夜に拳骨制裁をした。

統夜「んで・・・初登校はいつだ？」

フィーナ「明日からです」

フィーナの言葉を聞いた瞬間・・・

統夜「（達哉・・・奴が行動を起こす前に制裁するぞ）」

達哉「（合点承知の助）」

月のお姫様を変態から守る為に念話で話していた。

無理も無い・・・月と地球の関係は大昔の戦争で冷え切った状態
あるため下手な行動が出来ないのだ。

次の日

統夜「よう。達哉。今日は早いな」

達哉「まあな・・・」

麻弓「天川君。ビッグニュースがあるのですよ」

統夜「何だ？ビッグニュースって？」
千世「留学生が来るのよ！」

千世がそう言った瞬間統夜と達哉、菜月の三人は黙ってしまった。

文乃「どうかしたの？」

統夜「うん・・・俺ら・・・」

達哉「その留学生の事・・・」

菜月「知ってるよ・・・」

翠「嘘!？」

はやて「何でや？」

統夜「昨日出掛けてたって言っただろ？」

フェイト「そう言えば・・・言ってたね・・・」

なのは「もしかして凄い人だったりして・・・」

統夜「それホームランだ・・・」

チャイムが鳴り紅女史が入って来た。

紅女史「席に着け。HRを始める」

生徒達は席に着いた。

紅女史「皆にいい知らせがある。今日からこのクラスに留学生がやって来る。紹介するが特に男子・・・騒ぐなよ？」

男子達を睨み釘を刺した。

紅女史「よし。では入りなさい」

教室の扉が開きフィーナが現れた。

フィーナ「皆さん、はじめまして。スフィア王国王女、フィーナ・ファム・アーシュライトです。短い期間ですが、よろしく願います。」

男子一同「（俺達にも春が来た！！！！）」

女子一同「（ま、負けた）」

はやて「（ん？そう言えば・・・）」

文乃「（凄い事を言ったような・・・）」

クラス一同「王女！？しかも、スフィア王国の！？」

フィーナ「はい」

紅女史「落ち着け。確かにフィーナ様はスフィア王国の王女だが本人の希望もあつて王女と言う立場ではなく一生徒として見て欲しいそうだ。だから仲良くしてやってくれ。分かっているな？緑葉？」

樹「分かっていますよ。紅女史」

紅女史は樹に釘を刺したが・・・

樹「前世のこ・・・『ドグシャツ！！』・・・」

口説こうとしたが統夜の強烈な回し蹴りを喰らって気絶し・・・

はやて「統夜。窓は開けたで」

統夜「ポーンと！！」

はやてが開けた窓に樹を投げ飛ばした。

フィーナ「あ、あの・・・大丈夫なのですか？」

統夜「いいいいいい」

はやて「気にしないでいい気にしないでいい」

フィーナは統夜とはやてを見て唾然としていた。その後麻弓主催の質問大会が行われた。それからフィーナの周りには生徒で一杯だった。

生徒1「フィーナ様は大使館で住まわれているのですか？」

フィーナは達哉の方を見る。

達哉「（言っちゃ駄目です！）」

フィーナ「（分かりました）」

達哉とフィーナは、アイコンタクトをした。しかし・・・

菜月「今は、達哉の家に住まわれているんですね。」

菜月がうっかり暴露してしまった。

その時統夜は大笑いしていた。

男子生徒1「朝霧！貴様！」

男子生徒2「早くも手を出したのか!？」

達哉「出してない!！」

達哉は菜月を見た後、大笑いしている統夜を睨んだ。

菜月「（ごめん!）」

男子生徒3「皆の者！武器を持って!！」

男子生徒一同「うおおおお!！」

統夜「骨なら拾ってやるぞ」

逃げる達哉を男子生徒達は追いかけ始めた。

統夜「まあ……いずれ分かる事だったし……悪くないぜ」
菜月「そうかな……」

数分後

統夜「御苦労」

達哉「その前に助ける」

統夜「馬鹿言うな……めんどくさい。んな事よりフィーナさんや・
・今日の昼は屋上で食べないか？」

フィーナ「ええつと……」

達哉「悪い……今日は学食なんだ」

統夜「そうか……」

フィーナ「すみません……」

統夜「気にすんなよ。行つて来いご両人」

フィーナ「でも、いつかはご一緒させてもらうわ」

統夜「楽しみにしてるぜ」

昼休みになり……

統夜「やっと完成したぜ……俺のドライバー……」

屋上で昼ご飯を食べながら喋っていた。

なのは「ドライバー？」

統夜「ドライバーデバイスだよ……なのは」

はやて「何やそれ？」

統夜「簡単に言えば動物や戦闘機等を模した自立支援型のデバイス
だ」

フェイト「へえ……」

学校が終わり家に帰った。
その後何者かの通信があり指定された場所までバハムートで走らせていた。

統夜「一体誰なんだろうな・・・」

指定された場所に着いた。

統夜「おい。来てやったぞ！」

「ここだ」

突然男の声が聞こえ振り向くと・・・

統夜「クロノ・・・」

後ろにクロノがいた。

クロノ「統夜・・・生きていたのか？」

統夜「ああ・・・この通りな・・・で・・・何の用だ・・・？」

クロノ「今の管理局を止めてくれ・・・」

統夜「は？どういう事だ？」

クロノ「・・・今の管理局はやり方が過激になってきている・・・
新たな独立部隊・・・『セントクルセイダーズ』によって・・・」

統夜「お前がそれを言うとは・・・ここまで歪んでしまったか・・・
ここにいて大丈夫なのか？」

クロノ「大丈夫だ・・・ここ最近・・・僕や母さん、ユーノのよう
な人達は立場が危うくなってきた・・・今のうちに君にこれを
託したい・・・」

蒼い剣十字架のネックレスを統夜に渡した。

統夜「これは……」

クロノ「ロストロギアであり……デバイス……ガーディアンデバイス……君の剣になる『サーディオン』だ」

統夜「何故これを……俺に？」

クロノ「そのデバイスの詳細は分からないが……君なら扱え……歪んだ管理局を断ち切れる事を信じている……そして……フェイトの事を頼む……」

統夜「了解……シスコンだな……アンタは……」

クロノ「うるさい……また会える事を信じている……」

クロノはそう言った後消えた。

統夜「サーディオンに……セントクルセイダースか……」

蒼い剣十字架のネックレスを月の光に照らして見つめていた。

第九話 『新たなる剣と月からのお姫様』 (後書き)

今回のHERO'S EPISODEは

エステル「新たなデバイスを手に入れた天川 統夜さん・・・一気に二つを手に入れましたね」

エステル「日曜の夜・・・月人居住区で蒼き光と紅き光がぶつかり合う」

エステル「次回『紅蓮絶槍』 テイクオフ」

デバイス設定2 (前書き)

統夜の新たなデバイスです。どうぞ！

デバイス設定2

デバイス：アブソリユートブラスター（ドライバーデバイス）

形状：蒼い重戦車

待機状態：蒼い龍が描かれた黒いカード

搭載システム：BIES、DCS、HCS、ドライバーコネクタシステムウエポンテレポートシ

ステム、エナジーフィールドシステム搭載

管制人格は男性で冷静沈着な性格をしている

備考：大破したデストロイをアブソリユートエターナルのサポートとして開発されたドライバーデバイス。

ドライバーデバイスとは動物や戦闘機などの乗り物を模した自律型支援サポートデバイスの役割を持ち使用者にアーマーに変形して纏わせる事も可能になっている。

武装は両肩の上に長射程大出力可動式2連装ビームキャノンである

「ブラスターキャノン」

胸部の3連装大口径ビーム砲「ブラスタースキュラ」両脛の部分には五連装式魔力ミサイルランチャー「ブラスタースプリット」

転送される武装は以下の通りである。

マガジン式の六発のHCS搭載した遠距離狙撃に適した長銃身を持つスナイパーライフル「ブラスターズナイパー」

大型魔力ビーム砲でより強力な砲撃を行うバーストモードに移行する事が出来る「ブラスターバズーカ」

ブラスタースキュラと直結する事により強力な砲撃を放つ事が出来る。

「DCS」とはドライバーコネクタシステムドライバーデバイスのパーツがアーマーとして纏わ

れるシステム。

「HCS」とはハイパーカートリッジシステムカートリッジシステムの発展型で、一発のカートリ

ッジで普通のリボルバー式カートリッジの六発分の魔力を引き出すことが出来るシステム。

「ウエポンテレポルトシステム」とは武器や道具を転送する為のシステム。

「エナジーフィールドシステム」とはIEESのエネルギーを利用した防御フィールドを発生させるシステム。

デバイス：エターナルブラスター（ドライブアーマードデバイス）
形状：赤と青が混ざった白い重装甲アーマー

備考：アブソリュートエターナルとアブソリュートブラスターがドラバーコネクトシステムで合体したドライブアーマードデバイス。攻撃力と防御力、出力は数段増しているが重装甲なのか機動力が下がっている。

使える武装とシステムは全て使用可能。

デバイス：サーディオオン（ガーディアンデバイス）

形状：刀身が蒼く輝き柄が黒色の大剣

待機状態：蒼い剣十字架のネックレス

搭載システム：MIEES、サンクチュアリシステム搭載。フォーム変化無し

備考：クロノが統夜に託したガーディアンデバイス。

ガーディアンデバイスとはアルハザードや古代ベルカ時代に存在されたものでインテリジェントやアームド、ストレージの原点であり性能は高性能なデバイス。

使用者はかなりの技量を求められる為使い手を選ぶデバイスでもある。

「MIEES（マキシмумインフィニティーエナジーシステム）」とはロストテクノロジーであるIEESをアルハザード独自のシステムで出力はBIEESを遥かに超えた出力を誇る。

「サンクチュアリシステム」とは風を用いた特殊結界を発生させ相手の特殊魔法等を無効にするシステム。

管制人格は女性で優しい性格。

デバイス設定2（後書き）

我ながらいいものに仕上がりましたよ。

第十話『紅蓮絶槍』（前書き）

いよいよ・・・蒼紅一騎打ちが始まる・・・

カレン「私達としては迷惑ですけどね・・・」

さやか「まあまあ・・・HERO'S EPISODE第十話始まります」

第十話 『紅蓮絶槍』

第十話 『紅蓮絶槍』

フィーナが来て、クロノからサーディオンを貰ってから数日が経ち、
統夜は夜の月人居住区を歩いていた時

？「すみません」

統夜「ん？」

振り向くとそこには明るい紫色の髪をした女性が立っていた。

？「すみません。礼拝堂はどこにありますか？」

統夜「礼拝堂か？その道を・・・って・・・送ろう」

説明しようとしたが夜のせいもあるのか女性はよく分からなかった
みたいなので送る事にしようとした。

？「いいのですか？」

統夜「ああ。構わないよ。君みたいな可愛い娘一人を夜道に歩かせ
ちゃいけないでしょ？」

？「あの・・・可愛いだなんて・・・そんな・・・ごほんっ・・・
すみません。よろしくお願いします」

統夜は女性を礼拝堂まで連れて行く。
数分して礼拝堂前に着いた。

統夜「ここだ」

？「ありがとうございます。助かりました」

統夜「気にするな」

エステル「そう言えば、まだ自己紹介してませんでしたね。私は、エステル・フリージアと言います」

統夜「俺は天川 統夜だ。よろしくな」

エステル「天川さんですね。覚えました」

統夜「それじゃ俺はこの辺で」

エステル「おやすみなさい。あなたに、神のご加護があらんことを。」

┌

そして統夜は礼拝堂を後にした。

次の日

統夜「なあ・・・達哉さんや・・・」

達哉「何だ？」

統夜「実はよ・・・昨日礼拝堂まで送った子がいてな」

達哉「まさかフラグを立てたのか？止めておけよ？命に関わるかもしれんのだから」

統夜「んな訳あるか・・・また会えないかなって」

フィーナ「そんなに会いたいなら次の日曜に会えばいいのでは？」

達哉「ああ！アレか。でも、信者じゃない者が参加してもいいのか？」

フィーナ「いいんじゃない？」

達哉「そうか、なら一緒に行くよ」

フィーナ「そうね。私も会って見たいものね」

統夜「俺も行こう。ってか二人はいつからタメ口するようになったんだ？」

フィーナ「昨日からよ」

達哉「そっちの方が家族っぽいからな」

統夜「そうか。その方がいい。変わらなかつたら意味が無い」

そして日が過ぎ日曜になった。

統夜「多いな」

達哉「そうだな」

礼拝堂の中に入りたくさんの人数を見て驚いていた。

統夜「あの娘だよ」

達哉「司祭さんだね」

司祭の仕事をしているエステルを見て言った。

達哉「静寂の月光か・・・」

お祈り等を終えた後探索していた。

すると・・・

達哉、エステル「うお（きゃっ）！！」

歩いている最中にエステルとぶつかってしまった。

達哉「すみません！大丈夫ですか？」

エステル「いえ、こちらこそ・・・」

エステルは達哉の服を見て固まる。

エステル「・・・地球人の人が、ここに何か用ですか？」

達哉「友達と一緒に来ただけです・・・」

エステル「そうですか・・・」

達哉「俺は朝霧 達哉と言います。あなたの名前は？」

エステル「・・・エステル、エステル・フリージア」

達哉「エステルさんか・・・ん？エステルさんは統夜を知ってますか？」

エステル「天川さんがどうかしましたか・・・ちょっと待って下さい。地球人の貴方が天川さんを知っているという事は・・・」

達哉「統夜も地球人・・・かな。かなり変わってるけど」

エステル「そんな・・・」

達哉「地球人・・・嫌いですか？」

エステル「月では、地球人に良い者は居ないと教えられていましたから・・・」

達哉「そうですね・・・勘違いしないでください・・・確かにそういう人はいるかもしれませんが全員が全員そうじゃないから」

エステル「そうですねようか？」

達哉「はい」

エステル「なら、天川さんの事を少し教えてもらえませんか？」

達哉「統夜の事を？何で？」

エステル「な、何でもいいでしょ！／＼」

少々赤くなつて慌てだした。

達哉「いいですよ」

達哉は微笑しながら簡単に説明した。

達哉「という感じです」

エステル「ありがとうございます。それでは」

礼を言つてエステルは去つた。

達哉「そう言えば・・・俺は統夜の事知らないな・・・異常な身体

能力や魔力の事とか・・・」

夜の月人居住区にて・・・

統夜「ここにまで来てしまったか・・・」

両刃の長剣を片手に悪魔等を切り裂いていた。
すると右腕の部分に氷になっている異形が現れた。

統夜「今度はあいつかよ・・・はぁ・・・悪魔狩りも大変だぜ・・・」

┌

魔力を刀身に収束しようとした瞬間・・・

真紅の服を着た肩まである黒髪に赤い瞳をした少々カッコいい顔立ちをした青年が手にしている刀身が銀色で常に紅蓮の炎に包まれ柄の部分が真紅の二槍で・・・

？「おおおおおおお！！！！でりゃあ！！！！」

悪魔の氷を爆炎で溶かし一気に二槍で切り裂き消滅させた。

統夜「ほお・・・」

？「お前は・・・誰だ？」

統夜「人に教える時はまずは自分からだろ？」

遊輔「俺は桜木 遊輔だ」

統夜「桜木 遊輔か・・・俺は天川 統夜だ・・・」

それぞれ自己紹介を終えた瞬間統夜がこう言った。

統夜「なあ・・・あんた勝負しないか？」

遊輔「何故だ？」

統夜「アンタの力が見たい・・・それで充分か？」

遊輔「いいぜ。だが勝つのは俺だ!!」

統夜「言ってる！心装には心装だ。心装・・・蒼雷六爪!!」

自分の心装である六本の鞘付の日本刀を具現化させ結界を張った。

遊輔「それじゃあ・・・」

統夜「行くぜ!!」

雷を纏った刀と炎を纏った二槍が激しくぶつかり合い衝撃波が発生した。

その後一刀と二槍の激しい剣劇が繰り広げられた。

統夜「チツ・・・ちつたあ・・・やるようだな」

遊輔「お前こそ!!統夜!!」

統夜「遊輔え!!」

遊輔「烈火!!」

遊輔は二槍の連続突きを一刀のみで防いだが遊輔の力もあってか少々ダメージを負ってしまった。

統夜「一つの槍なら分かるが・・・二つの槍は厳しいな・・・なら俺は・・・」

一刀を鞘に納めその後、指の間に挟んで片手に三振りずつ、両手合わせて六振りの刀を一気に鞘から抜いて構えた。

統夜「Are you ready? Guy?」

遊輔「まるで・・・龍の爪・・・」
統夜「Let's Party!!」

蒼雷六爪の真の使い方である六爪流で遊輔の二槍とそれ以上に激しい剣劇が繰り広げられた。

地上での剣劇の後二人は上空へ跳び空中での激しい剣劇が繰り広げられた。

お互い防御を取らずただただ攻撃だけをしていた。

統夜「中々やるな!!遊輔!!この俺に六爪を出させたのがお前が初めてだ!!」

遊輔「俺もだ!!このような強い者と戦えた事に!!」

統夜「龍牙天衝!!」

片手の三刀で月牙天衝を応用した斬撃を出した。
威力は一刀の月牙天衝を上回るが遊輔は負けじと二槍で防いだが完全に防ぎきれずダメージを負った。

遊輔「くっ・・・」

統夜「楽しもうぜ!!この時間はお前に貸し切りだ!!」

遊輔「ああ!!紅蓮竜巻!!」

紅蓮の炎状の竜巻を統夜に向けて放ったのを見て

統夜「蒼天衝!!」

蒼い炎の衝撃波で防いだ後遊輔は二槍を統夜の前の地面に刺した後・

遊輔「紅蓮脚!!」

炎を纏った回し蹴りで統夜を吹き飛ばそうとしたが・・・

統夜「んな単純な攻撃に当たるか。この馬鹿!!」

左手の三刀で防ぎ右手の三刀で・・・

統夜「龍牙飛翔斬!!」

龍牙天衝の斬り上げ版で遊輔を吹き飛ばし瞬速で移動する瞬歩で遊輔の前まで移動し地面に叩き落とした。

遊輔「ふっ・・・」

統夜「タフだな・・・お前・・・そうでなきゃ楽しめないぜ!!」

その頃・・・統夜と遊輔の戦いを見ていた女性がいた。

エステル「（一体・・・何が起きているというの？あれは・・・天川さん・・・？）」

統夜を見た後笑っている表情に固まってしまった。

エステル「（何で・・・笑っていられるの？それにあの人（遊輔）も・・・同じ・・・）」

何故エステルがここにいるかという理由は統夜達の激闘の音で起きてしまい現在に至る。

エステル「・・・」

彼女はこの時最初の蒼紅一騎打ちの目撃者になることも知らなかった。

統夜達の視点に戻る。

統夜「ライジングドラゴン!!」

統夜は蒼い雷を纏った六刀の飛ぶ斬撃を放ち

遊輔「紅蓮飛閃!!」

遊輔は紅蓮の炎を纏った二槍の斬撃を放ち相殺し再び激しい剣劇が行われた。

統夜「はあああああ!!!!」

遊輔「おおおおおお!!!!」

ガガガガガキキキキインツ!!ドオンツ!!

勝負が決まらず統夜と遊輔はお互い下がった。

統夜「そろそろ・・・決着つけようぜ？」

遊輔「ああ・・・お互いそろそろ限界だ・・・」

統夜「そうだな・・・見せてやるぜ・・・死神の力をな!!」

統夜は右の三刀に蒼炎、左の三刀に雷を纏わせ、遊輔は二槍の刀身に紅蓮の炎を纏わせ赤いオーラを纏い・・・

統夜「蒼炎龍雷・・・」
遊輔「紅虎・・・」

統夜と遊輔は同時に駆け抜け抜け距離が近くなった瞬間・・・

統夜「六閃!!」
遊輔「轟焰槍!!」

互いに技を放った瞬間光が発生した一瞬にして消えて、背中向き合って立っている統夜と遊輔がいた。

統夜「こいつは・・・」
遊輔「相打ちか・・・」

そう言つて二人同時に倒れた。

二人はこの時から好敵手であり相棒になる事は予想もしなかった。

第十話『紅蓮絶槍』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

さやか「・・・統夜君と遊輔君って子は似た者同士じゃないかな？」

さやか「倒れた彼らは礼拝堂で目が覚め・・・謎の少女が二人の前に現れる」

さやか「次回『ロストテクノロジー』テイクオフ」

オリキャラ紹介2 (前書き)

遊輔のプロフです。どうぞー!!

オリキャラ紹介2

名前：桜木 遊輔さくらぎ ゆうすけ

性別：男

種族：人族（仮）

容姿：肩まである黒髪に赤い瞳をした少々カッコいい顔立ち

身長：176cm

年齢：16歳

魔力光：紅蓮

魔力：AAA（測定不能）

気力：S（測定不能）

（ ）内はリミッター解除時

魔術式：古代ベルカ式

心装：爆炎二槍ばくえんにそう

性格：熱血漢かつ天然な性格

趣味：スポーツ

好きなもの（事）：甘いもの

嫌いなもの（事）：管理局、卑怯な戦い

詳細：次元世界を転々と旅をしながら傭兵をしている青年。

天川 統夜と同じく時空管理局と敵対しており違法研究施設の襲撃やロストロギアの奪還（持ち主がいた場合は返還してる）をしている。

心装を使い魔力変換資質である炎を用いた魔法、白兵戦、体術を用いて戦う。

戦闘能力は天川 統夜に匹敵する程の力を持ち『紅蓮の猛虎』と呼ばれている。

自分の志である「世界中の人々を笑顔にする」を自分なりに見つけ戦い続ける覚悟はある。

心装：爆炎二槍ばくえんにそう

形状：刀身が銀色で常に紅蓮の炎に包まれ柄の部分が真紅の二槍
能力・詳細：遊輔が使用する心装。

能力は炎を纏わせ飛ばしたりする等自由自在に操る能力を持つ。

オリキャラ紹介2（後書き）

彼らの活躍をご期待ください。では！

第十一話『ロストテクノロジー』（前書き）

統夜「行くぞ！遊輔！」

遊輔「来い！統夜！！」

それぞれ心装を展開しぶつかり合おうとした瞬間・・・

エステル「天罰！！」

ガンガンッ！！

本の角で二人の頭を殴って気絶させた。

フィアッカ「HERO'S EPISODE 第十一話始まるぞ」

第十一話『ロストテクノロジー』

第十一話『ロストテクノロジー』

統夜と遊輔の激闘が終わった翌朝の学校にて

達哉「おはよう。今日は統夜は休みなのか？」

稟「いや・・・俺は知らん。芹沢さんは何か知ってる？」

文乃に聞いてみた。

文乃「知らないわよ。家に行ったらはやてから統夜はいないって言うってたし・・・何やってるのよ・・・あいつは・・・」

はやて「心配や・・・心配や・・・」

麻弓「そう言えば知ってる？ 昨晚に月人居住区にクレーター等が出来た事件を・・・」

麻弓の言葉を聞いた瞬間・・・

達哉「（あ・・・あいつしか考えられん・・・）」

なのは「（トラブルメーカー・・・だね・・・統夜君）」

フェイト「（人間を超えた戦いをするから被害も大きいんだから・・・自重してほしい・・・）」

はやて「（統夜は死んでへんやろうな・・・一人になるのは嫌や・・・）」

達哉となのは、フェイト、はやては誰かという事が分かってしまった。

無論文乃達も何となく分かってしまったがフィーナは知らない。

その頃・・・

統夜「ここは・・・」

月人居住区の礼拝堂で目が覚めた。

その後、エステルが入って来た。

エステル「気が付きましたか？天川さん」

統夜「礼拝堂か？」

エステル「はい。そうです。聞きたい事があるのですけど宜しいですか？」

統夜「構わないよ」

エステル「貴方が出してた蒼い炎や雷、六本の刀は何ですか？」

統夜「蒼い炎や雷は俺の力で六本の刀は心装と呼ばれるものだ」

エステル「心装？」

エステルは真剣に聞き心装の事を質問をした。

統夜「自分の心の武器・・・魔力等を駆使して具現化させる武器だ。

俺やそこで寝ている遊輔、達哉が使える」

エステル「地球人というのは凄いですね・・・」

統夜「達哉はともかく俺や遊輔は違うかもしれんぞ？」

エステル「どういう事ですか？」

統夜「異世界の人間かもしれんつてやつだよ・・・」

エステル「異世界・・・神界や魔界のような世界ですか・・・？」

統夜「まあね・・・他に何が知りたい？」

エステル「そうですね・・・何故貴方は戦うのですか？」

統夜にとって厳しい質問をしてきた。

統夜「そうだな．．．歪んだ世界を破壊する為．．．だな。月と地球のわかだまりが起こっている所等を破壊する事だ」

エステル「貴方は．．．本当に大丈夫なのですか？そのような事をして．．．」

統夜「ああ．．．大丈夫だ．．．恨みや憎しみを背負う覚悟は出来ている．．．」

エステル「そうですねか．．．これ以上は深くは問いません。ありがとうございます。貴方の事が少し分かりました」

統夜「そうか．．．幻滅した？こんなクールガイが悪さしてる事に」
エステル「してませんよ。貴方のような優しい人に幻滅なんて．．．」

朝食は食べますか？

統夜「いただきます」

遊輔「いただきます」

いつの間にか遊輔が起きた。

遊輔「おはようございます。え〜っと．．．」

エステル「エステル・フリージアです」

遊輔「エステルさん、ありがとうございます」

統夜「遅れたがおはよう。エステル」

二人は遅くなりながらも挨拶をした。

エステル「では朝食を作つて来ますので．．．大人しくしててください。貴方は怪我人なのですから」

統夜、遊輔「はい」

エステルは部屋から出て行った。

遊輔「お前は歪みを破壊する為に戦っているのか・・・」

統夜「そう言うお前は？」

遊輔「俺は『世界中の人々を笑顔にする』事だ」

統夜「その考えは悪くないな・・・だが今は・・・」

統夜、遊輔「时空管理局の歪みを破壊する事だ」

統夜「お前はこれからどうするんだ？」

遊輔に問い掛けた。

遊輔「俺は・・・」

統夜「俺と組まないか？実力的に一緒だし・・・どうだ？」

遊輔「そうだな・・・いいだろう。何故か気が合いそうだしな」

その後エステルが朝食を持って部屋に入り朝食を食べ始めた。

おいしそうに食べている統夜をエステルが見てたのは言うまでも無い。

統夜「うーん・・・ここにいていいのかな」

遊輔「さあな・・・エステルさん・・・お前に夢中っぱいし。いい奥さんになったりして」

統夜「ブーッ！！！！おい！！ここ最近会ったばかりでそこまではならんだろ！？」

遊輔「ありえる話かもしれないよ？」

統夜「そうか・・・心に留めておこう・・・後ろに立っている奴・・・用があるんだろ？」

？「ほお、私に気付いたか」

統夜と遊輔が後ろを振り向くと金髪の少女がいた。

統夜「お前は何者だ？何故その娘の身体を借りている？」

ファイアツカ「その事も気付いたか。私の名は、ファイアツカ。過去より生きる者。そして、この子はリース」

統夜「で・・・何の用だ？」

ファイアツカ「何・・・一つ目は世間話だ・・・今の月と地球。どう思う？」

遊輔「戦争が起きるな・・・」

ファイアツカ「何故だ？」

統夜「月も地球もまだ、敵対しているのが一部居る。ソイツ等が反乱か何かしでかすと俺は思う・・・」

ファイアツカ「そうだな。お前の言うとおりの月も地球も一部だがまだ、よく思っていない者が多い・・・もし再び戦争が起これば人類は滅びる・・・」

統夜「どういう事だ？」

ファイアツカ「修羅と呼ばれる異世界の来訪者が来るかもしれないからさ・・・前の戦争で月と地球に攻撃を仕掛けて来た」

遊輔「修羅・・・？」

ファイアツカ「戦いを求める存在さ・・・それともう一つは・・・」

統夜がかけている蒼い剣十字架のネックレスを見てこう言った。

ファイアツカ「ロストテクノロジーとは知っているか？」

統夜「ああ・・・IESのようなものの事か？」

遊輔「分らん・・・」

ファイアツカ「まあな・・・その他にも人格投射法や光学迷彩だな・・・擬人化システムやお前が言ってたIES、大昔に作られたデバイスのシステム系統もロストテクノロジーに入る」

統夜「サーディオンもそうなのかな・・・知り合いがロストロギア

つて言つてたし・・・」

ファイアツカ「サーディオンと言うのか・・・話を戻すが月のテクノロジーはオイディプス戦争で大半失っている・・・」

遊輔「????」

遊輔はチンプンカンプンで二人についていっていない。

統夜「最もファイアツカが警戒するのは何だ？」

ファイアツカ「『禁忌の遺産』だ・・・戦争に使われたデバイスや武器、兵器などを指すものだ」

統夜「禁忌の遺産・・・ありがとう。お陰で助かった」

ファイアツカ「そうか。お前達は怪我を治せ・・・行動はそれからだ」

ファイアツカは振り返り歩きだした。

統夜「何故俺達にだけ重要な事を話した？」

ファイアツカ「お前達なら止められると思つたからだ・・・じゃあな・・・」

そしてファイアツカは消えた。

その頃・・・

スフィア王国では・・・

?「ククク・・・この力さえあれば地球人も滅ぼせる・・・そしてあの忌々しい平民出身の国王を消し去りこの国の王となる!!!アーハッハッハ!!!」

男はドクロのマークがついている腕輪を見て狂ったかのように笑っ

ていた。
管理局以外にもスフィア王国に歪みが現れてしまった。

第十一話『ロストテクノロジー』（後書き）

次のHERO'S EPISODEは

ヴィータ「あいつ・・・月人居住区でエステルって人と一緒にいる
事をはやてにばれたら殺されるぞ・・・」

ヴィータ「やっぱ・・・あたし達のやり方は間違ってたのかな・・・
こついう事されるのを分かってたのによ・・・」

ヴィータ「次回『闇の書事件の復讐者』テイクオフ」

第十二話「闇の書事件の復讐者」(前書き)

エステル「一つ聞いていいですか？」

統夜「何だ？」

エステル「貴方の蒼い炎は再生とかしますか？」

統夜「それは無い」

エステル「某海賊王を目指す男が主人公の漫画に出てくるものと期待してましたのに・・・」

統夜「あのね・・・」

プリムラ「・・・HERO'S EPISODE第十二話・・・
始まる・・・」

第十二話「闇の書事件の復讐者」

第十二話『闇の書事件の復讐者』

礼拝堂で療養をしていた統夜と遊輔は・・・

統夜「暇だ・・・」

遊輔「そうだな・・・」

暇を持って余っていた。

統夜「エステルって俺にだけ優しいよな・・・てか過保護だよな？
これじゃあ・・・」

遊輔「それはお前に惚れてるんだよ・・・何でお前だけ優遇される
んだ？」

統夜「知らねえよ・・・後の事が怖い・・・」

遊輔「ま、頑張れ・・・」

するとエステルが部屋に入って来た。

エステル「ちゃんと大人しくしていましたね」

右手には分厚い本が握られていた。

統夜「誰だって大人しくはするよ・・・それがある時点で・・・」

分厚い本に目を向けながら言った。

エステル「貴方は超が付く程の規格外ですからね・・・」統夜『

と桜木さんは」

統夜「あはは・・・怪我を治す事に専念するよ・・・あれ・・・いつの間に・・・？」

自分の呼び方に気が付いた統夜はエステルに問い掛けた。

エステル「な、何だっついていいでしょ！貴方は呼び捨てで言ってるからいいじゃないですか」

統夜「別にかまわないけどさ。英都はいいところだろ？」

エステル「まだ・・・完全に見てませんから・・・」

統夜「なら一緒に行かないか？」

エステル「えっ？」

統夜「色々な所を見回るつてのは悪くないと思うぜ」

統夜の突然の誘いに驚いてしまった。

エステル「（これは・・・デート・・・？）」

統夜「ん？どうかしたか？」

エステル「何でもありません！」

統夜「そうか。俺の事を知りたいいい機会と思ってるが・・・」

遊輔「（これって鈍感だよな？）」

遊輔は一人だけそう思ったような。

その頃・・・

はやて「統夜は一体どこにいるんやろ・・・」

なのは「帰ってきたらいたりしてね」

フェイト「自由気儘っていうのはいいけど・・・心配する身にもな

ってほしいよね」

文乃「全くよ」

千世「全くその通りよ」

希「……………」

はやて達が学校からの帰り道だった。

？「アンタが八神 はやて？」

腰まで伸びた赤い髪に瑠璃色の瞳をしており可愛い顔立ちをした女性のはやて達の前に現れた。

はやて「うちやけど、何か用があるのですか？」

はやてが前に出て聞こうとした瞬間

？「やっと……見つけた!!」

はやてを見るなり紅い十字架のネックレスを取り出し刃がビームで出来た紅い鎌に変化させた。
その後はやてに斬りかかろうとしたがなのはとフェイトがデバイスを起動させて防いでいた。

文乃「一体何なの!？」

はやて「貴方は誰なんですか？」

咲夜「私は相川 咲夜……アンタと守護騎士に復讐する者よ!!」

物凄い殺気と憎悪を燃やしながらプロヴィデンスを構えた。

文乃「なっ!？」

はやて「私達に・・・復讐・・・？」

なのは「何故はやてちゃんや守護騎士を復讐をするの？」
フェイト「理由を言って!!！」

咲夜「私から姉さんを奪っておいて・・・」

そう言う咲夜は顔を涙で濡らしながら叫んだ。

咲夜「あんた達が姉さんのリンカーコアの魔力を奪ったせいで姉さんの魔力は戻らなくて、姉さんは生き甲斐だった人助けが出来なくなつた挙句、一年後には自殺したのよ!!！私の・・・たった一人の家族を!!！」

大鎌から刀身が真紅で柄が黒い長剣に変化させた。

咲夜「だから私はあんた達、夜天の主とその守護騎士達に復讐を誓つたのよ!!！」

咲夜ははやてに斬り掛つた。

なのは「アクセルシューター!!！」

はやてに近づかせないように桜色の魔力スフィアを咲夜に向けて発射した。

咲夜「無駄なんだよ!!！」

桜色の魔力スフィアを長剣で斬り払いなのはに近づこうとしたが

なのは「デイバイン・・・」

レイジングハートのカートリッジを一発ロードした後ディバインバスターを放とうとするが

咲夜「遅いんだよ!!」

咲夜は心を読む事が出来るレアスキルを使いなのはの動きを読み

咲夜「灼熱一閃!!」

一回ロードカートリッジした後擦れ違いざまに灼熱の炎を宿した刀身でなのはを斬りつけ落とした。

なのは「ぐ……(嘘……何で……)」

フェイト「なのは!?許さない!!」

バルディッシュのカートリッジを一回ロードした後大鎌形態であるハーケンフォームにし

フェイト「ハーケンスラ……」

咲夜「だから遅いんだよ!!」

プロヴィデンスのカートリッジを一回ロードした後

咲夜「灼熱十閃!!」

フェイトが攻撃しようとしたが、それよりもフェイトに十回の連続斬りを放ち落とした。

はやて「なのはちゃん……フェイトちゃん……」
文乃「嘘……」

千世「ありえない……」
希「速過ぎる……」

はやて達が信じられない顔をする

咲夜「これでお終いよ」

咲夜がはやての目の前に現れ、プロヴィデンスを振りかぶり、はやてを斬ろうとした。

はやて「!？」

はやては反射的に目を閉じた。その時……

ガキーンッ!!

咲夜「邪魔が入ったか!!」

統夜「えらい派手にやってるな……」

咲夜の剣を統夜が両刃の長剣を使い防いでいた。

はやて「統夜……」

文乃「アンタ何処に行ってたのよ!？」

千世「心配掛けたんだからね!!」

統夜「来るのが遅れてすまない……んで……どうなってる?」

咲夜「そこをどけ!!」

統夜「やだね。はやてはやらせない……」

咲夜「奴によって家族を奪われた!」

統夜「どういう事だ?」

はやてがそんな事をしてないと信じ聞いてみた。

はやて「闇の書事件の復讐者……その時にお姉さんを失ったそうやて……」

統夜「そうか……薄々と分かっていたことだったが……今とは……」

咲夜「私は八神 はやてと守護騎士を殺して姉さんの無念を晴らす！！」

統夜と咲夜は同時に駆け抜け剣のぶつかり合いをしていた。

統夜「そんな事してもアンタの姉さんは戻ってこない！！」

咲夜「知ったような口で姉さんを語るな！！」

統夜「ああ……そうかい！」

咲夜を吹き飛ばした後蒼い龍が描かれた黒いカードを取り出し

統夜「アンタの歪みを破壊する……アブソリュートブラスター……起動！！」

蒼い重戦車が現れた。

はやて「戦車……？」

文乃「重そうな戦車ね」

統夜「ドライバーコネクト！」

蒼い重戦車から蒼いアーマーとして統夜に纏われた。

咲夜「そんなこけ脅しに通用しない！！フレイムソード！！」

無数の炎の剣を展開し発射し、統夜は五連装式魔力ミサイルランチャー「ブラスタースプリット」で迎撃した。

統夜はウエポンテレポートシステムを利用し大型魔力ビーム砲であるバズーカ「ブラスタバズーカ」を装備し・・・

統夜「ブラスタバズーカ・・・直結・・・」

胸部に直結させてチャージを始めた。

咲夜はそうはさせないと攻撃を仕掛けた。

咲夜「フレイムソード!!」

統夜「エナジーフィールドシステム起動」

炎の剣で攻撃したが統夜がエナジーフィールドシステムで発生させた防御フィールドによって防がれチャージが完了し

統夜「発射!!」

強力な砲撃を発射した。

咲夜「バーニングスマッシュャー!!」

炎の砲撃で対抗したがすぐに押された衝撃で吹き飛びプロヴィデンスが中破してしまった。

その後アブソリュートブラスターを解除した。

咲夜「くそ・・・予想外の強さね・・・退くのも兵法の一つ・・・いつか私達の恨みをその身で受けなさい!!」

そう言って転移で消えた。

統夜「恨みか……」

はやて「今まで何処行つてたん？」

統夜「月人居住区の礼拝堂だよ」

はやての質問に答えながらなのはとフェイトの所へ移動した。
その後

遊輔「お〜い！」

遊輔がやって来た。

統夜「おお……丁度良かった。この人を運べ」

統夜はフェイトを抱えながら今来た遊輔になのはを運ぶように言った。

遊輔「酷い怪我だな。何があつたんだ？」

統夜「復讐者が来た。訳ありだね……」

遊輔「復讐は何も生まないのにな……」

はやて「あの……君は誰や？」

はやてが遊輔に問い掛けた。

遊輔「俺は桜木 遊輔。旅人をやっている。よろしくな」

サムズアップと笑顔ではやて達に答えた。

はやて「悪くない笑顔やな」

文乃「少々暑苦しいけどね……」

千世「少し馬鹿そうな感じもありそう・・・」
希「でもいい人・・・」

遊輔の印象はまあまあだったそう。

はやて「礼拝堂・・・そこで泊まったんか？」

統夜「ああ・・・」

遊輔「その司祭さん・・・エステルさんだけ？綺麗だった」

その言葉をはやてが聞いた瞬間目が鋭くなった。

はやて「統夜・・・ちよ〜つと・・・聞きたい事があるんやけど・・・」

統夜「何だ？」

はやて「エステルさんと何か発展とか無いよな？」

統夜「う〜ん・・・エステルは俺の事名前で呼んでたな・・・」

遊輔「しかも・・・一緒に英都を見回りに行くとか言ってたよな？」

統夜「エステルは何も知らないしね・・・」

はやて「そうかそうか・・・家に帰ったらゆ〜くりゆ〜くりゆ〜
つくりつ〜！お話を聞かせて貰うで？」

文乃「私も聞きたいわ〜」

千世「私も」

希「にやあ・・・私も・・・」

統夜「（逆らったら怖いな）は・・・はい・・・」

遊輔「災難だな・・・相棒・・・」

そして家に帰るとはやて達のお話で統夜はボコボコにされたのは言
うまでも無かった。

ちなみに新たに遊輔が居候してきてより賑やかになった。

第十二話「闇の書事件の復讐者」(後書き)

今回のHERO'S EPISODEは

菜月「何か・・・はやてには色々な事情があったんだね・・・」

菜月「プリムラちゃんがいなくなっちゃった。簡単に見つかったが・・・それには理由があった」

菜月「そしてプリムラちゃんが心を開き感情を取り戻そうとした時カナと呼ばれる少女が現れた時・・・背中に赤字で『自在』、両肩の側面に白い字で『魂』と書いてある黒いコートを着た男が介入する」

菜月「次回『プリムラとカナ』テイクオフ」

オリキャラ紹介3 (前書き)

咲夜の詳細です。どうぞ!!

オリキャラ紹介3

名前：相川 あいかわ 咲夜 さくや

性別：女

種族：人族

年齢：20歳

容姿：腰まで伸びた赤い髪に瑠璃色の瞳をしており可愛い顔立ち

身長：168cm

スリーサイズ：B92/W56/H89

魔力光：薄い紅い色

魔術式：ミッドチルダ式、古代ベルカ式の両方

使用デバイス：プロヴィデンス（アームドデバイス）

魔力：EX

気力：EX

性格：明るいが、時に冷酷になる

趣味：歌を歌うこと、踊ること、ハッキング

好きなもの：音楽鑑賞、アクセサリ

嫌いなもの：傲慢な人、嘘をつくこと

詳細：8年前に起きた「闇の書事件」の被害者の妹。年齢が9歳も違う姉が何者かに襲われリンカーコアを抜き取られ、魔力の回復ができなくなり、その一年後に自殺した。

そして大好きで誰よりも優しくかった姉を死に追いやった夜天の書の主と守護騎士に復讐をする為に旅をしている。

裏世界や管理局からはプロヴィネンスで憎悪の炎の鎌を使い、相手を斬り燃やすことから「紅の死神」と呼ばれている。

魔力変換資質『炎』を所有している。

また、レアスキルを所持しており、能力は心を読むことが出来る。

デバイス：プロヴィネンス

形状：刃がビームで出来た紅い鎌

待機状態：紅い十字架のネックレス

搭載システム：リボルバー式6発のカートリッジシステムを搭載。
フォーム変化はある。

第一形態は刃が炎で出来ているハーケンフォーム

第二形態は刀身が真紅で柄が黒い剣になるブレードフォーム

第三形態は刀身が闇と炎が混ざったエネルギー状の大剣になるザン
バーフォーム

詳細：咲夜が管理局にハッキングし、バルディッシュ・アサルトと
レヴァンティンのデータを基に作ったデバイス。

バリアジャケットははやてのバリアジャケットが赤くなった感じの
姿。

管制人格は女性で無口な性格。

オリキャラ紹介3 (後書き)

炎の女性ってカッコイイですね。何故か・・・

第十三話『プリムラとカナ』（前書き）

いよいよハジケリストが出てくる！！龍の骨さん、ありがとうございます

統夜「おおっ！！やったぜ！！」

遊輔「よっしゃ！酒を飲もうぜ！！」

達哉「俺らはかなり苦労するかな・・・」

稟「HERO'S EPISODE第十三話始まります」

第十三話『プリムラとカナ』

第十三話『プリムラとカナ』

統夜「プリムラがないだ？」

鮮華「はい・・・朝食の時には起きるのですが」

統夜「その前に出て行ったか」

家の何処にもプリムラがない事を統夜に話していた。

統夜「朝の散歩には掛り過ぎるよな・・・ちょっと探してくるよ」

そして家から出てプリムラを探しに行った。

統夜「（早朝だから危ない事にはならないが・・・何処に行ったんだ？うん・・・）楓の家に行こう」

芙蓉家へ移動した。

統夜「残念だ・・・いなかった」

楓に聞いてみたがいなかった。

ネリネ「おはようございます」

統夜「おはよう。朝から精が出てるね、あ、そうだ。ネリネ、プリムラを今朝見掛けなかったか？」

ネリネ「リムちゃんですか？いいえ・・・」

統夜「何か朝から黙って出掛けたまま帰って来ないんだよね．．．でも散歩なら探してもすれ違いになるしな．．．」

ネリネ「公園とか．．．どうでしょう？」

統夜「公園？プリムラは公園が好きなのか？」

ネリネ「あ、いえ．．．この時間だとお店はまだ閉まっていますから．．．」

統夜「成程．．．俺らよりプリムラとの付き合いが長いだけはあるよね」

ネリネ「そんな事は無いですよ」

統夜「んじゃ俺はプリムラを探しに行くからまたな！」

ネリネ「はい」

ネリネに礼を言って走り出した。

ネリネ「（過ぎた時間がどんなに長くても心の距離が近いとは限らないですよ．．．）」

公園に着いてプリムラを見つけた。

統夜「プリムラ！」

プリムラ「統夜．．．」

統夜「お前．．．こんなとこで何をやってんだ？こんな時間に一人で．．．」

プリムラ「．．．違う．．．」

統夜「違う？何かあるのか？」

プリムラ「何も無い．．．だけど．．．私は．．．まだ．．．ここにいる．．．」

統夜「そうか．．．なら．．．お前が帰るまで俺もここにいる。これならいい」

プリムラ「．．．帰る」

プリムラは立ち上がって公園から出た。
統夜もその後を追った。

統夜「全く俺がいなかったらお前……ずっとあそこにいるつもりなのか？」

プリムラ「違う……お姉ちゃんに……会いたかった……」

統夜「お姉ちゃん？ネリネの事か？だったら家に……」

プリムラ「違う……リコリス……リコリスお姉ちゃんに……会いたかった……待ってれば来てくれるかなって……」

統夜「(リコリス……)」

プリムラ「……でも……お姉ちゃん……来てくれない……」

統夜はプリムラを家まで連れて帰った後学校へ行った。

その後もリコリスの存在とプリムラの行動が気になっているのか授業に集中できず放課後まで続いていた。

店員「ありがとうございますー！！」

統夜は帰り道のデパートで何かを買って出て行った。

統夜「プリムラに何か買ってやる事して無かったな……さて……あの親馬鹿コンビが話すかどうか……聞いてみようかな」

自分の家に帰ると

神王「おう！統夜殿！遅えじゃねえか！どっかで寄り道か？」

魔王「お帰り 統ちゃんお邪魔してるよ」

鮮華「お帰りなさい。兄さん」

玄関先で両王がお茶を飲んでいた。
鮮華が苦笑いしている。

統夜「何してるんだよ!? こんな玄関先で!!」

神王「何って・・・プリムラの事で話があるから寄せてもらったんだぜ?」

統夜「プリムラ?」

魔王は真剣な表情になり

魔王「そうだよ。プリムラの事でとても大切な話があるんだ」

統夜「(まさか・・・本題であるリコリスに?)」

魔王「これから私の言う事を驚かず聞いてほしい・・・実はね・・・
統ちゃん・・・プリムラは・・・」

統夜「プリムラは?」

魔王「明日からバーベナ学園に通うのでよろしく頼むよ」

神王「こっちもなー」

魔王が幼稚園の服と帽子を手にして言った。神王はランドセルを手
にしていた。

統夜「さて・・・何故突然そんな話が?」

両王が手にしているものをスルーして次の話題に入った。

魔王「この前の検査で一つ興味深い結果が出たんだよ」

統夜「え?」

魔王「プリムラは規格外の魔力を持った人工生命体だけどその制御
は全く出来ていなかった。それが多少ではあるものの制御している
兆しを見せた」

統夜「兆し？」

魔王「話し合った結果、こちらの世界での人間との接触が原因じゃないかという話になってね・・・ならばもっと大勢の人間と接触する機会を作ってみようという事になったのさ」

統夜「なるほど・・・」

魔王「まあ・・・統ちゃん達には急な話ですまないけどね」

統夜「なら・・・魔王・・・俺もプリムラの事で一ついいですか？」

魔王「何だい？」

統夜「リコリスって知ってるか？」

神王、魔王「!？」

両王は驚いた。何故その事を知っているかのように・・・

統夜「知っているんだな・・・」

神王「統夜殿・・・そいつをどこから聞いた？」

鮮華「あ、あの・・・私・・・お茶を淹れてきます！」

鮮華はお茶を淹れる為リビングへ戻った。

淹れたお茶を置いて三人だけにした。

はやて「何か重要な事なんか？」

鮮華「それは分かりませんが・・・」

リビングにて・・・

統夜「プリムラが言ってたよ・・・リコリスはもういないって・・・あいつが感情を出さない理由・・・そこにあるんじゃないかって・・・」

魔王「あの子はね・・・感情を出さないんじゃない無く出せないんだ・・・」

」

神王「お、おい・・・まー坊・・・」

魔王「構わないさ・・・統ちゃんには知っておいてもらった方がいいと思う・・・いや・・・知るべきだ・・・あの子の為にも」

神王「・・・そうかもしれねえな・・・」

統夜「俺はプリムラが感情が無い訳じゃない・・・それは流石の俺も分かる・・・元からあじゃないのモナ」

魔王「前にも言った通り『ユグドラルシル計画』で造られたのは三体・・・なら他の二体は今何処にいるのか？そもそも何故に三体いるのか・・・」

神王「元々無茶な話ではあったのさ。ネリツ子クラスの魔力でさえ制御出来る奴なんかほとんどのいない」

統夜「他の二人は死んだんだよな・・・」

魔王「・・・生命体が造られた理由はね・・・長持ちしないのが分かってたからなんだ・・・生命体が作られたのもう二十年も前になる・・・作り方は至って簡単・・・強化しただけ・・・魔族の中から一人を選抜しその力を特殊な方法で無理矢理に引き上げた」

神王「そして・・・あっさり暴走した・・・溢れ出した高密度の魔力は単純な力の塊となつて施設を一つ丸ごと壊滅させた。破壊なんて生易しいもんじゃねえ・・・消滅だ。死体どころか塵一つ残らなかつた」

魔王「本来ならそれで実験は中止になるべきだつたんだけど・・・そうする訳にはいかなかつた・・・だから次の二号体は違った方法で作られた。複製・・・元々強大な魔力を持った魔族の遺伝子を改造し強大な魔力を持たせ育てた・・・人間界の言葉でいうならクローンというやつだね」

統夜「（プロジェクトFで生まれたフェイトみたいなものか・・・）」

魔王「途中まではかなり順調だったけどね。やっぱり失敗した・・・やはり強力すぎる魔力に耐え切れず・・・死んだ・・・」

神王「こつちの世界と同じでな。俺らの世界でもクローン技術は完成していない・・・途中で終わる事は分かっていた。だが・・・これはある意味予定調和でもあったのさ・・・だからこそ三号体を用意しておいた」

魔王「それがプリムラ・・・その作り方は・・・生産・・・強大な魔力とそれを制御出来るだけの肉体的キャパシティー・・・二つを併せ持った者をゼロから作った。統ちゃんは作りだされたという事が何を意味するか分かるかい？」

統夜「ただ生まれて来た訳じゃない・・・つまり・・・プリムラには両親がいない。故に親の愛情を知らない・・・だろ？」

魔王「正解だよ。替えのない実験体である彼女が外に出れる筈もない。友人すらもない。結果・・・感情というものを知らずに育ってしまった。プリムラが知っているものはただ一つ唯一の家族ともいえる存在・・・あの子にとっての姉・・・二号体」

統夜「まさか二号体が・・・リコリス・・・」
魔王「その通りだよ。あの子が持ってた又イグルミはね・・・リコリスが一度だけこの人間界に来た時に買って行ったお土産なんだよ・・・だからあの子は猫に興味を持った。そしてその姉が大好きだった一人の人間にも同じように興味を持った」

統夜「だから・・・稟に会いたいと言って魔界から出た理由か・・・」
魔王「そういえば・・・過去に一度だけプリムラが施設を抜け出した事があった・・・その時にプリムラを連れて帰ってきたのがリコリスだったね・・・確か・・・」

そして統夜は立ち上がり・・・

魔王「プリムラを探しに行くのかい？」

統夜「ああ・・・妹みたいなもんだしな・・・それに・・・渡したいものがある」

魔王「渡したいもの？」

統夜「ああ。んじゃ行ってくる」

傘を持ってプリムラがいるであろう公園へ向かった。

ザーツ……

傘をさし歩いてプリムラに近づいた。

統夜「何やってんだ？夏に近いからって雨にびしょ濡れになり過ぎるのは厳禁だぞ」

プリムラ「統夜……」

統夜「でもさ……」

傘をしまい一緒に濡れた。

統夜「たまには雨に濡れるってのも悪くは無い……濡れた男は力ツコイイって言うしな」

プリムラ「リコリス……いない……」

統夜「ああ……いないよ……もう何処にもな……」

プリムラ「何処にも……いない……」

統夜「ハッキリ言うが……俺はリコリスじゃない……リコリスなんてなれない。俺は『天川 統夜』だから！お前の誇れる兄貴分だ！」

プリムラ「てんかわ……とうや……？」

統夜「そうだ……今更リコリスなんて探してもいない……もう会えない……もういない……だから今日からは俺が迎えに来る」

プリムラ「迎え……に……？」

するとプリムラの表情が徐々に変わり出した。

統夜「ああ。俺がお前を迎え入れる。ずっとお前を受け入れてやる。リコリスじゃない。リコリスにはなれない。リコリスはもういない。・リコリスは一人のままでの未来を望んでいない。・」
プリムラ「未来。・？」

統夜「だから『天川 統夜』で我慢しろ。お前が一人でいる必要なんてない。はやてや文乃、千世、希。・皆がいる。・」
プリムラ「とう。・や。・が。・迎え。・に。・」

プルプルと震え

プリムラ「。・。あ。・。あう。・。ああ。・。あああああああああああ！！！」

今まで我慢してたのか言葉にならない声をあげて統夜に抱きついて泣いていた。

プリムラ「もうやだ！一人はやだ！私を見て！私と一緒にいて！寂しいのはもうやだ！！」

統夜「ああ。・一人にはしない。・だから。・一緒に帰ろう。・」

プリムラを優しく抱きしめて言った。

その時。・。・

？「プリムラ。・。アンタの帰る場所は地獄だよ」

黒髪で肩までかかったセミロングと藍色の瞳、ツンとし整った顔立ちをした少女がサブマシンガンの先に刃がついているものをプリムラに向けて

ドガガガガガ・・・

問答無用で放ったが統夜がプリムラを抱えて上へ飛翔していた。

統夜「何をする・・・お前は何者だ？」

カナ「私の名は・・・カナ。そのプリムラと神王、魔王の命を奪う者・・・認めて貰えなかった者の苦しみは貴方には分からない・・・」

統夜「どういう意味だ？」

カナ「本来なら人工生命体の三号体になる筈だった・・・」

統夜「何だと!？」

プリムラ「私と・・・同じ・・・」

カナ「無駄話はお終い・・・ダークネスショット!」

ドガガガガ・・・

闇属性の弾を乱射したが魔力弾を飛ばして相殺しバックステップして間合いを取った。

統夜「止める!!!カナ!過去に囚われるのは止める!!!」

カナ「うるさい!!!知ったような口を!!!私は許さない!私を認めなくてれなかつたあいつらを!!!」

統夜「カナ・・・お前・・・(咲夜と言い・・・カナも・・・か・・・)」

カナ「滅べ!オメガゲトラクション!!!」

統先に魔力と魔力とも気力とも違う力・・・霊力が圧縮されたものが統夜とプリムラに向かって放たれた瞬間・・・

？「マイティ真拳奥儀 ヴイクテム・サンクチュアリ！！」

掛け声と共に突風が発生しオメガデトラクションが消滅した。

カナ「なっ……」

統夜「（今の技は魔力や気力、霊力を感じなかった……）」
プリムラ「……」

背中に赤字で『自在』、両肩の側面に白い字で『魂』と書いてある
黒いコートを着ている青年が現れた。

カナ「何者よ！アンタは！」
？「えっ？誰かいるの？」

青年が後ろを振り返った。

カナ「アンタよアンタ！！」

零斗「ん？ああ……俺か……俺の名は北郷 零斗……俺の名
は北郷 零斗……俺の名は北郷 零斗……なのか？」

統夜、プリムラ、カナ「（いや……そこは分からないから……）」

カナ「んじゃ……北郷 零斗……」
零斗「気安く呼ぶな！！」

零斗はカナに怒鳴った後二丁ベレッダをカナに向けて発射したが避
けた。

統夜「うわ……プリムラ……少し下がっててくれないか？」
プリムラ「うん……」

統夜「心装……蒼雷六爪……」

・ プリムラを下がらせ、六つの日本刀を具現化させ鞘から一刀抜き・

統夜「月牙天衝！！」

手加減した月牙天衝をカナに放ち吹き飛ばした。

零斗「あいつ・・・手加減したな？」

月牙天衝を放った統夜を見ていた。

カナ「ぐ・・・」

ビルドカツツエ（カナ、ここは引きましよう）

カナ「何を言って・・・」

ビルドカツツエ（戦力に差があります、ここは一時引いて態勢を立て直しましょう）

カナ「・・・わかった」

先程までの気性は無く、冷静さを取り戻して何処かに転移していった。

統夜「お陰で助かったよ。零斗」

零斗「気安く呼ぶな！！」

統夜「はいはい・・・今はカナの事を両王に聞かんと・・・」

零斗「俺も一緒に行つていいか？」

統夜「別にかまわんが・・・」

零斗「よっしゃ！一緒に腐敗した管理局を潰そうぜ。ハジケでな」

とても心強い北郷 零斗を連れて神王と魔王の所へ移動した。

彼もまた歪んだ世界を破壊する為の英雄である。

第十三話『プリムラとカナ』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

フィアツカ「プリムラと呼ばれる少女は彼の手により変革したか・
・だがあの男（零斗）は意味不明だ」

フィアツカ「カナと呼ばれた少女の事を聞き出した二人は動き出す」

フィアツカ「今回は『ただ認めて貰いたくて』テイクオフ」

オリキャラ&デバイス設定(前書き)

カナとデバイス設定です

オリキャラ&デバイス設定

名前：カナ

性別：女

種族：魔族（人工生命体）

年齢：16歳

身長：162cm

スリーサイズ：B85/W54/H86

容姿：黒髪で肩までかかったセミロングと藍色の瞳、ツンとしているが整った顔立ち

性格：冷静と狂気の二面性を持っている

魔力：SSS

気力：SS

霊力：SSSS

魔力色：黒

使用デバイス：ビルドカッツェ（アームデバイス）

魔法：ミッドチルダとベルカ式の両方

詳細：プリムラが誕生する前に同じ技術で作られた人工生命体。

しかし、魔力、霊力が桁違いであり、その力を恐れた魔王と神王に認められず、後に誕生したプリムラが第三号体になってしまった。

処分されそうになりかけたところで謎の男に助けられ、そして自分を認めない二人とプリムラを倒し、最強の生命体であることを証明するために魔法、霊術、武術を習った。

そしてその男を殺害しデバイス「ビルドカッツェ」を強奪し、プリムラ、神王、魔王、そしてシア、ネリネ、稟を殺すために三世界中を探し回っている。

魔力変換資質『闇』を持つ。

通り名は「漆黒の墮天使」

デバイス：ビルドカツエ

形状：サブマシンガンの先に刃がついているもの

待機状態：黒い十字架のネックレス

搭載システム：EES搭載。フォーム変化無し

詳細：カナが使う銃剣型のデバイス、性能はレイジングハート、バルディッシュなどのデバイスを上回る。

バリアジャケットは漆黒のロングコートを羽織っており、その下の上には黒のノースリーブを着ていて、下は黒の革製のショートパンツを履いている。

オリキャラ&デバイス設定(後書き)

こんな感じに仕上げました。

投稿キャラ設定（前書き）

龍の骨さん。どうもありがとうございます。

未熟な自分ですが北郷 零斗君を使わせて頂きます。

投稿キャラ設定

名前：北郷 零斗ほんごう れいと

容姿：髪の色が水色で顔と髪型は恋姫無双の北郷 一刀に似た顔立ち

身長：175cm

年齢：17歳

流派：マイティ真拳

使用武器：二丁ベレッダとコルト・パイソン

性格：かなりハジけている性格

備考：マイティ真拳と呼ばれている流派を世に広める為、放浪の旅にの最中に、管理局の腐敗の噂を聞いて、統夜達に出会う。

マイティ真拳を使用し統夜の真の種族を唯一知っている者であるが統夜やはやて達には黙っている。

因みに統夜と一緒にボケたりハジけたりしており達哉や稟の苦労度数が大幅に上がった事は言うまでも無い。

常にマイティコートを着ている。

マイティコート

特徴

黒いコートで、背中に赤字で『自在』と書いており、両肩の側面に白い字で『魂』と書いてある。

投稿キヤラ設定（後書き）

初めての一年上の男が来ましたね。統夜達は16ですし・・・

龍の骨さん・・・今後ともよろしくお願いします。

第十四話『ただ認めて貰いたくて』（前書き）

零斗「俺って重要な役割とかあるの？」

ああ。戦闘以外にもある。マイティ真拳に興味を惹かれつつある。

零斗「おお〜」

統夜と遊輔、零斗なら三大将ならぬ英都の三英雄になれると信じている。

カナ「HERO'S EPISODE第十四話始まるよ」

第十四話『ただ認めて貰いたくて』

第十四話『ただ認めて貰いたくて』

カナの襲撃の後に神王と魔王の所へ向った。

統夜「邪魔するぜ」

零斗「おじゃまんぼ〜」

プリムラ「お邪魔します」

統夜と零斗は芙蓉家に入り込んでいた。

何故芙蓉家かというと・・・

神王、魔王「は〜はっはっはっは!!」

一旦家に戻ったが既に帰っており、この二人の事だからとこんな事やってるんだなという考えで来ていた。

稟「統夜、今日はどうしたんだ？」

統夜「今日はそこで酒飲んでる馬鹿親コンピに用がある」

楓「神王様と魔王様に・・・ですか？」

統夜「ああ・・・」

零斗「俺は北郷 零斗。よろしく。零斗と呼んで構わん」

稟「俺は土見 稟だ。よろしくな。零斗」

楓「私は芙蓉 楓と言います。よろしくお願いします。零斗さん」

稟と楓の二人が零斗に自己紹介すると

零斗「気安く呼ぶな——っ!!」

お約束の如く叫んだ。

凜「えええ——!!?!?」

プリムラ「話が進まないよ」

零斗「つとと・・・悪い・・・統夜」

統夜「ああ。分かっている。両王達に聞きたい事がある」

真剣な表情で酒を飲んでいる両王に聞く。

神王「何でい?統夜殿」

魔王「何だい?統ちゃん」

統夜の真剣な表情に酒を飲むのやめて聞く事にした。

統夜「プリムラに姉はいますか?」

両王「!?!」

魔王「な、何を言ってるんだい統ちゃん、プリムラに姉なんて・・・」

プリムラ「カナは・・・お姉ちゃん・・・?」

神王「何でプリムラがカナの名前を知ってるんだ!?!」

魔王「神ちゃん!」

魔王の声に神王がしまったという顔になっていた。

両王「・・・」

統夜「話してくれるよな・・・こっちは出会ってるんだから」

魔王「分かったよ・・・統ちゃん・・・」

それから魔王はカナの事を話した。

魔王「カナはね．．．プリムラと同じ技術で生まれた人工生命体なんだよ．．．」

プリムラ「!？」

魔王「本当なら彼女が三号体になる筈だったんだけど．．．」

零斗「だけど、どうしたんだ？」

魔王「彼女は力が強すぎた、だからあの時は危険という事で処分する事になったんだよ．．．」

神王以外「!？」

統夜「何でそんな事をしたんだ!! カナは認めてもらえなかった事でアンタらを狙い．．．現にプリムラに襲い掛かった!!」

魔王「そんな事があったのかい．．．恨まれても仕方がないんだよ．

．．．あの子を処分しようとしてしまったんだから．．．」

神王「．．．．．」

後悔したような顔を魔王と神王はしていた。

統夜「アンタらが進めていた『ユグドラシル計画』の目的は．．．大方予想がついている．．．命．．．だろ？」

魔王「その通りだよ．．．統ちゃん。命を蘇生させる魔法の為にね．．．でも．．．」

統夜「でも？」

神王「統夜殿が言ってた管理局のやり方と同じだ．．．考えは違えど．．．」

魔王「リコリスやプリムラ、カナは．．．娘のように思っている．．．言い訳にしか出来ないけど．．．」

統夜「俺はありとあらゆる次元世界を回ったが．．．命を蘇生させるという奇跡に近い魔法は存在しなかった．．．もしそれを使用するにはプリムラやカナの魔力では足りない．．．」

零斗「俺は魔法とか分からないけどさ・・・命の研究より大事な事があるんじゃないのか？」

零斗は両王に問い掛けた。

魔王「大事な事？」

統夜「命の研究の前に精一杯頑張り生きる事だ・・・色んな人と笑ったり、泣いたり、怒ったり、喧嘩したりするってのも悪くは無いんじゃないのかな。命は何にだって一つだ・・・軽々と蘇生させると本当の命のあり方なんて壊れてしまい歪んでしまう・・・」

神王「そうだな・・・それに頼ってしまうと・・・命のあり方が歪んでしまう・・・」

魔王「命の大切さが無ければ・・・そこで腐敗した管理局と同じになってしまう・・・統ちゃん・・・君に頼みたい事があるんだが・・・いいかな？」

統夜「何だよ？」

魔王「ユグドラルシル計画の中止を手伝ってくれないかい？そこにいる零斗君も・・・歪んだ計画を破壊する為に」

統夜「ああ。いいぜ」

零斗「構わないぜ。その前に・・・」

統夜「カナを止めてからな・・・それが終わったらな・・・」

神王「んじゃ・・・終わったらまー坊んとこに来てくれ」

魔王「頼んだよ」

統夜と零斗、プリムラは玄関から出て行った。

統夜「さて・・・フェイトを呼ぶか」

零斗「それなら任せろ。マイティ真拳奥儀 フェイト召喚！」

ワームホールが発生しフェイトが現れた。

フェイト「あれ・・・統夜・・・どうしたの？」

統夜「フェイト・・・早速で悪いがカナって子を説得するんだ」

フェイト「何で私なの？」

統夜「同じ立場だった人なら出来るかもしれんって事だ」

フェイト「分かった」

プリムラ「頑張るよ」

統夜「行くぜ」

時間は少し遡り、カナはというと・・・

カナ「はあ・・・はあ・・・出来た・・・」

息も絶え絶えになり、何かを手に持っていた。

カナ「ビルドカツエ・・・いいえ、ライン、ラインゴトヴィダホルング、いくよ」

ライン「はい」

そう言っただけカナはビルドカツエをパワーアップしたデバイス「ラインゴトヴィダホルング」を持って英都へ再び向かっていった。

そして数分後英都近くの海岸の上空まで来た時にカナは移動を止めた。何故かという・・・

カナ「貴方・・・」

カナの目の前にはアブソリュートエターナルを纏った統夜が立っていた。

統夜「カナ・・・」

カナ「何か用？私の狙いはプリムラと神王、魔王の三人よ」

統夜「駄目だ・・・三人は殺させない」

カナ「じゃあ私を倒すの？」

統夜「お前を止めに来た・・・このままだとお前が歪んでしまう・・・」

統夜は首を横に振った。

カナ「もうとつくに歪んでるよ・・・」

カナの周りに勾玉のような物が六つ出現した。

カナ「ファイヤ」

すると勾玉は統夜に向かったがアブソリュートライフルで相殺した。追撃とばかりにカナはワームシックスという空間を操って魔力弾を飛ばす攻撃を放った。

統夜「くっ・・・」

辛うじて避けたが完全に避けなかった。

攻撃しない統夜にカナは・・・

カナ「何で・・・攻撃しないの・・・」

統夜「何故だろうな・・・」

カナ「何を世迷言を！！死ね！オメガデトラクション・カオス！！」

強化されたオメガデトラクションを統夜に放ったが水色の砲撃と金色の砲撃で相殺された。

統夜「零斗・・・フェイト・・・」

零斗「何をしてるんだ？お前は・・・何故迷っている？」

統夜「分からない・・・カナをどうしたらいいのか分からないんだ・・・」

零斗「フェイトとプリムラはカナを説得しろ！！」

フェイト「分かった！」

プリムラ「お姉ちゃん！」

フェイトと零斗、プリムラが飛んでいた。

因みに零斗はマイティ真拳の無空術を自分とプリムラに掛けていた。

プリムラ「やめて！お姉ちゃん！」

カナ「プリ・・・ムラ？」

プリムラ「そうだよ、カナお姉ちゃん・・・」

カナ「何しに来たの？あなたを殺そうとしてる私に何の用？」

プリムラ「一緒に統夜の所に行こうよ」

カナ「統夜？」

プリムラ「あの人の事だよ」

プリムラが統夜を指して言った。

フェイト「誰にだって辛い時はあるよ・・・」

カナ「貴方は？」

フェイト「私はね・・・ある人の代わりに作られたクローンなの」

統夜以外「えっ・・・」

フェイトの素性を知らなかった統夜以外の皆は目を丸くしていた。

フェイト「でもね、私を必要としてくれる人達に出会って、私は生

きる意味を見つucker事が出来たの、だから今度はあなたの番だよ」

微笑みながらフェイトはカナに言った。

最後に統夜はカナにこう説得した。

統夜「カナ・・・君は俺と同じかもしれない・・・」

カナ「何故それが分かるの？」

統夜「俺は時空管理局と呼ばれる組織にいた・・・大切な人を守る為・・・英雄になる為に・・・」

カナ「・・・」

統夜「俺は時空管理局という存在は絶対正義な存在と信じていた・・・二年前の事件が起こる前は・・・」

カナ「二年前の事件・・・」

統夜「ウータイ戦争でアルカンシエルを放たれ俺達の部隊を爆弾代わりにされた・・・お前と同じ・・・力が強過ぎ・・・危険という理由で・・・」

カナ「貴方も私と同じじゃない・・・復讐したいだけの・・・」

統夜「確かに憎んだ・・・だが・・・管理局全体を壊してしまったらそれこそ本末転倒だ・・・それじゃ誰も認めてくれない・・・」

カナ「・・・」

統夜「だからさ・・・お前も一緒に来い！」

真剣な表情でカナに言った。

プリムラ「カナお姉ちゃん、私の周りにはこんなにいい人ばかりいるの、だからカナお姉ちゃんにもいてほしいの・・・私のたった一人のお姉ちゃんだから・・・」

涙を流しながらカナと一緒に来て欲しいと言うプリムラ。

カナ「でも・・・私には・・・」

三人の説得により涙を流すカナ。しかし・・・

カナ「私には認めてくれる人がいないのー！ー！！」

ライン（ファブニールシステム起動）

カナ「うわあああああ！！！！」

ライン（ダークネス・レクイエム）

ファブニールシステムを起動したラインにより力が増大したカナの周りに異常なほどの力が収束していった。

統夜「あの馬鹿！！」

零斗「おい！統夜！！」

統夜は一気にカナの所まで瞬速で突っ込んでいった。

カナ「来ないでー！ー！！」

カナがダークネス・レクイエムを放つ直前、統夜は叫んだ。

統夜「俺が認めてやる！！」

カナ「！！？」

カナは手を止め、統夜を見た。

カナ「今・・・なん・・・て・・・？」

統夜「俺が認めてやる！お前の存在全てを認めてやる！お前の側にいてやる！だから復讐なんて止める・・・カナ・・・」

カナ「グスツ・・・ヒツク・・・う、うわああああん」

カナは統夜の言葉に心が響いたのか抱きついて泣き始めた。統夜はそんなカナを受け止め、頭を優しく撫でていた。するとカナに変化が起きた。先程まで持っていたラインが白く光り元のビルドカツツエの姿に戻っていた。そしてカナ自身にも変化が起き、先程までの異常な力は消えて普通よりも強いが安定したものにへと変わった。

数十分後

零斗「いや〜・・・お前は凄いわ・・・蒼穹の死神でも人の子なんだな」

統夜「あのね・・・こんな可愛い娘に復讐は似合わないと思っただけさ・・・」

零斗「フラグマスターは恐ろしいな・・・」

零斗はフェイトを元の場所まで戻し統夜と一緒に魔王の屋敷へ移動した。

統夜は泣き疲れたカナを起こさないようにお姫様抱っこして歩いていた。

そして魔王の家に着くと両王が待っていた。

魔王「速く終わったね・・・統ちゃん、零ちゃん」

零斗「マイティ真拳は無敵だからな」

統夜「まあな・・・カナについて話がある」

統夜は先程までの事を二人に話した。

魔王「そうかい・・・また統ちゃんに助けてもらったね・・・」

統夜「気にするな。カナを俺の家に置いていいですか？」

魔王「統ちゃんに任せるよ」

統夜「ありがとう」

プリムラ「良かったね。カナお姉ちゃん」

神王「さて・・・ユグドラシル計画を中止させる仕事だな」

統夜「ああ・・・」

零斗「その前に・・・マイティ真拳奥儀 サイコーブ」

プリムラと眠っているカナを統夜の家まで転送させた。

魔王「マイティ真拳・・・凄いね・・・」

神王「ああ・・・転移するぜ！」

統夜達は魔界に転移しユグドラシル計画を中止させた。

中には反発する研究員数名がいたがあまりの傲慢な態度に統夜と零斗は蒼炎とマイティ真拳で黙らせたのは言うまでも無い。

中止したお陰でプリムラとカナを縛る鎖は壊された。

そして・・・新しい家族が増えた。

第十四話『ただ認めて貰いたくて』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

魔王「いや〜・・・本当に統ちゃんのお陰で救われたよ・・・今度は稟ちゃんとネリネちゃんを結ばせる依頼を考えようかな」

魔王「今回は統ちゃんとエステルちゃんとのデートか・・・」

魔王「そして占い師に出会い奇妙な事を言う」

魔王「次回は『月と地球』 テイクオフ」

番外編『イメージED』（前書き）

一段落しましたので地球と月の絆編のイメージEDを作ってみました。

番外編『イメージED』

HERO'S EPISODE イメージED『With you』

場面1（月の光に照らされた夜空が映し出される）

場面2（統夜が真紅の月に照らされ風車が回っている場所、遊輔は夜の火山近く、零斗は夜の街のビルの上にそれぞれ立っている）

場面3（フィーナは好きなのに達哉と距離を置いている）

場面4（大剣であるサーディオンに下から順に敵であるイグニスやセイラ、ユルゲンが現れる）

場面5（達哉とフィーナが手を取り合い共に走り出す）

場面6（ユルゲンとの戦いで髪の色が銀色、瞳の瞳孔が縦になり色が真紅に変化した形態・・・第一の覚醒である吸血鬼化になり妖怪にしか出せない妖力で蹴散らす）

場面7（真紅の月に照らされて眠っている統夜とはやての小指に赤い糸で結ばれている）

番外編『イメージED』（後書き）

でも達哉とフィーナの試練は結構大変だと思えますが・・・頑張っ
ていきたいと思えます。

第十五話『月と地球』（前書き）

はやて「統夜とのデート・・・羨ましい・・・行きたい・・・」

遊輔「これは恋はいつでもサイクロンだな」

零斗「これは恋はいつでもサイクロンジョーカーエクストリーム・・・

・ヤンデレならオーガがダークキバだろ」

達哉「HERO'S EPISODE第十五話始まるぞ」

第十五話 『月と地球』

第十五話 『月と地球』

統夜「やばいぜ・・・」

我らが主人公 天川 統夜は急いで着替えていた。
何故かというトエステルと英都と一緒に見回る事を約束したからだ。

統夜「約束を破っては男が廃る!!」

プリムラ「お兄ちゃん。慌てるけどどうかしたの？」

統夜「今日はお兄ちゃんは用事があるから。急いでいるんだ。朝ご飯は作っておいたから食べててくれ」

起きてきたプリムラが慌てて出掛けている統夜を見掛け問い掛けた。
朝ご飯を指して玄関へ向かい家を出た。

プリムラ「行ってらっしゃい」

統夜「ぬおおおおお!!」

統夜は全速力で待ち合わせ場所である公園へ全速力で走っていた。
今の統夜の服装は仮面ライダーWに出ている左 翔太郎が着ている
服装である。

統夜「悪い！待ったか？」

エステル「いえ・・・今来たばかりですし」

統夜「良かった・・・」

公園に着いて私服姿であるエステルと会った。

エステル「最初は・・・何処に行きますか？」

統夜「そうだな・・・木漏れ日通りはどうだ？」

エステル「そこに行きましょう」

統夜「決まりだな。買い物とかも重要だしね」

木漏れ日通りへ案内した。

エステル「多いですね」

統夜「そうだな。色んな所から集まる・・・月人や神族、魔族が交わる・・・」

エステル「月人も・・・ですか？」

統夜「ああ。それだけこの街は愛されてるんだよ。名前の由来が英雄の集まる都・・・それが英都」

エステル「なるほど・・・」

統夜「ささ・・・お嬢様。行きますよ」

エステル「ふふ・・・本当に面白いですね。統夜は」

二人はフローラや洋服店等を見て歩いていた。

エステル「次はあそこに行ってみたいです」

統夜「ゲーセンか・・・いいねえ」

二人はゲーセンの中に入った。

統夜「これをやってみないか？」

統夜が指差したのはBLA BLUE CO T I N U M S H
I T? だった。

エステル「これ・・・ですか? いいですよ」

エステルはお金を入れてゲームを始めた。

エステル「このキャラクターでやってみましょう」

金髪で刀を持っている青年・・・ジ ・キサ ギを選択して始めた。

統夜「わお・・・こいつはバランスがあるんだよね」

エステル「頑張ってみます」

上手とは言えないがギリギリ勝ち進んだが10ステージのキャラも倒しエンディングを迎えた。

エステル「興味深いゲームですね」

統夜「だろ? 俺や達哉も結構やるんだよね」

エステル「そうなのですか」

統夜「次は・・・英都の象徴である英都タワーに行かないか?」

エステル「是非行ってみたいです」

統夜「はぐれない様に・・・」

統夜はエステルに手を差し出した。

エステル「何ですか?」

統夜「手を握っておいた方がいいと思ってね。まだ初めてなんだし・・・嫌だった?」

エステル「い、いえ・・・/ / /」

エステルは少々赤くなりながらも統夜の手を握り英都タワーを目指した。

その頃・・・

遊輔とはやて達はリビングにいた。

はやて「遊輔君、統夜は何処に行ったんや？」

遊輔「あいつか？うん・・・」

プリムラ「お兄ちゃんなら外へ出掛けたよ。用事が出来たとかで・・・」

遊輔「用事？ああ・・・エステルさんとデートだ」

遊輔のうっかり発言ではやては黒いオーラを出していた。

遊輔「まあ・・・大丈夫だろう」

プリムラ「う、うん・・・そうだね・・・」

鮮華「兄さんの事ですから大丈夫でしょう」

はやて「デート・・・そうかそうか・・・ちよつと外へ出るわ・・・」

遊輔「おゝい・・・それは駄目だろう？」

はやて「あ？」

はやてに止めるよう言ったが鋭い目で睨まれた。

遊輔「いえ大丈夫です・・・行つてください」

すぐさま土下座してはやてを行かせた。

流石の遊輔でも恋する幼馴染を止める事が出来ないようだ。

シグナム「桜木よ・・・お前の行動は正しい・・・」

場面が変わって・・・

二人は英都タワーの最上階にいた。

統夜「ここは夜になると絶景になるぜ」

エステル「本当に綺麗ですね」

最上階から望遠鏡で街を眺めていた。

それから適当に回って降りた。

統夜「そろそろ昼か・・・」

エステル「そうですね・・・お弁当作って来たのですけど食べます？」

統夜「うん。食べる食べる」

その時・・・

「君・・・もしかして統夜？」

茶髪の少年が統夜とエステルの前に現れた。

統夜「えっ・・・お前・・・明久か？」

明久「うん。君は死んだかと思ったよ！」

明久と呼ばれた少年は統夜に言ったがエステルの前だと知らずによりしくない発言をした。

統夜「この馬鹿！エステルの前でそれを言うな！」

エステル「あの・・・統夜・・・そちらの方は？」

統夜「こいつは吉井 明久・・・見ての通り馬鹿正直者だ」

明久「僕は馬鹿じゃないよ！って・・・どうも・・・はじめまして・・・吉井 明久です」

エステル「エステル・フリージアです」

明久「もしかして・・・統夜・・・フリージアさんって月人？」

統夜「ああ・・・」

明久「そうなんだ」

統夜「お前・・・今何をしてるんだ？」

明久「僕は文月学園で学園生活を送ってるよ」

エステル「・・・」

エステルは明久が言っていた言葉が気になっていた。

エステル「あの・・・吉井さん。一ついいですか？」

明久「何でしょうか？」

エステル「貴方が言ってた・・・統夜が死んだかと思ったというのはどういう事ですか？」

明久「そ、それは・・・」

統夜の方へ顔を向けるが・・・

統夜「（無理だ・・・）」

明久「（そ、そんな・・・）この事は・・・内密に出来ますか？」

エステル「はい。大丈夫です」

明久はウータイ戦争やその時に自分の特殊部隊が裏切り仲間が散り散りになり壊滅させられた事を話した。

その時エステルの中で時空管理局は地球人より最低と思ったそう。

統夜「他人のロストロギア・・・まあ・・・凄い力があるものを奪い取ったり、人を捕まえて違法実験をしている・・・」

エステル「本当に最低な組織ですね・・・」

統夜「一部だがね・・・」

エステル「どういう事ですか？」

統夜「管理局の上層部がやっているだけって事さ・・・前にも言った通り・・・世界の歪みを破壊する為に俺は戦っている・・・」

エステル「それが・・・管理局の上層部の破壊・・・」

明久「まだ・・・戦ってたんだ・・・」

統夜「まあな・・・そうじゃなきゃ・・・世界は変わらん・・・」

明久「僕の話はこれで終わり・・・二人の邪魔をしちゃ悪いから・・・これで・・・」

明久が去った後

統夜「んじゃ・・・気を取り直してお昼ご飯にしようか」

エステル「はい」

ベンチに座って食べ始めた。

統夜「礼拝堂で食べた時も思ったけどエステルの料理はおいしいよな」

エステル「そ、そうですか？（頑張った甲斐がありました・・・）」

統夜「うん。いいお嫁さんになれるぞ」

エステル「お、おおおお、お嫁さん！？／／／／」

エステルは顔を真っ赤にし呂律が回らなくなった。

統夜「どうかしたか？」

エステル「な、何でもありません！！」

統夜「ま、いいけど・・・月と地球さ・・・俺達みたいに仲が良くなればいいのにな・・・」

エステル「そうですね・・・ですけど・・・厳しいですよ」

統夜「現状はね・・・その中に地球に興味のある月人や月に興味がある地球人がいるかもしれん・・・」

統夜は食べながら喋るとエステルがコツつと小突いた。

エステル「食べながら喋ってはいけません。食べ終わってから喋りなさい」

エステルが姉で統夜が弟みたいな感じになっていた。

統夜「は〜い。ん？あれって達哉とフィーナじゃん」

エステル「えっ・・・朝霧さんとフィーナ姫!？」

二人は偶然達哉とフィーナが一緒にデートしている所を見掛けた。

統夜「俺の思ってた通りか・・・」

エステル「何がです？」

統夜「フィーナ姫は朝霧 達哉に恋してるのだよ!!」

エステル「そ、それはありえませんか！フィーナ姫には婚約者が・・・

あ・・・」

統夜「どういう事だ？」

エステル「彼女にはユルゲン、フォルクリューゲルと呼ばれるスフィア王国親衛隊長と呼ばれる人が婚約者なのですから」

統夜「凄い人なんだな・・・」

エステル「ですが・・・地球の事を思っていないません」

統夜「そうか・・・その男が歪みにならなければいいかな・・・」

エステル「そうですね・・・」

統夜「でも恋には身分とか関係ないぜ」

すると・・・

「その通り！！」

突然カメラマンらしき老人が現れた。

エステル「あ、貴方は？」

高野「ワシは高野 武という者だ。司祭さんに『蒼穹の死神』天川

統夜」

エステル「えっ・・・？」

統夜「何故・・・知っている・・・？俺の通り名を・・・」

高野と呼ばれた老人に鋭い視線を向けた。

高野「こう見えてもワシお前さんと同じ次元世界を旅をしているのでな。管理局の腐敗を二人で潰していると聞いていたぞ」

統夜「まあな・・・」

高野「『蒼穹の死神』と『瑠璃の軍神』、『紅蓮の猛虎』、『マイティ真拳継承者』がこの街・・・英都に集結している・・・」

エステル「たつた二人で・・・」

高野「話を戻すが・・・お姫様は軍神に惚れとる」

エステル「もしかして・・・朝霧さんは・・・」

統夜「瑠璃の軍神だ・・・」

高野「では二人の様子を追うのでまた！！」

高野は二人の後を追った。

占い師「そこのお二人・・・いいですか？」

統夜「あん？」

エステル「何ですか？」

占い師をやっている老人らしき人物が二人の前にやって来た。

占い師「ワシは・・・見ての通りの占い師・・・」

統夜「何の用だ？」

占い師「地球と月はやがて戦いの道を選ぼうとしている・・・」

エステル「なっ・・・」

統夜「エステル、そんな世迷言を信じるな」

エステル「す、すみません・・・」

占い師「信じるか信じないかはお主ら次第・・・金髪の若いの・・・世迷言だと思つて聞いてくれ」

統夜は信用していない目で老人を見ていた。

占い師「お主は近い内に月の王国で力の大妖に目覚め・・・禁忌の遺産を使う存在を倒し月と地球の絆の再生が始まる・・・」

統夜「力の大妖・・・」

エステル「統夜が人間じゃないみたいな言い方ですね・・・」

占い師「占いじゃからの・・・ほっほっほっほ・・・」

占い師はそれだけを言つて去つて行った。

そしてあれこれ過ぎ夕方になり物見の丘公園に来ていた。

エステル「大丈夫ですか？」

統夜「まあ・・・大丈夫だ・・・エステルはどう思う？」

エステル「何がですか？」

統夜「達哉とフィーナの関係だよ」

エステル「正直・・・反対ですね・・・ですが・・・フィーナ姫の

「ご意思も大事ですから」

統夜「なるほど・・・俺は即賛成だな。応援してやりたい・・・でもな・・・大変だと思っぜ・・・」

エステル「友達思いですね」

統夜「そりゃな・・・送るよ」

統夜はエステルを礼拝堂まで送った後家に帰ったが・・・

はやて「お帰り・・・統夜・・・エステルさんのデートは楽しかったかな？かな？」

家の前でバリアジャケットを纏いリインとユニゾンした状態のはやてが待っていた。

統夜「あ、あの・・・どうしてその事を・・・つかデートした覚えが無いが・・・」

はやて「遊輔君が教えてくれたんよ」その後統夜を探したけど全然見つからなくてな」ここで待ってたんよ」

統夜「遊輔ええええ！！あいつ絶対殺す！！」

遊輔への恨み事を言った後ははやてが判決を下した。

はやて「それじゃ逝こうか」

魔力を収束し古代ベルカ式の魔法陣を展開していた。

統夜「（ラグナロクだ・・・俺・・・終わったぜ・・・）」

はやて「何か言い残す事は？」

統夜「優しくしてください・・・」

はやて「却下や ベッドの上でならええけどな！！響け終焉の笛・・・」

・ラグナロク！！」

ラグナロクを喰らい統夜はボロボロになった。
ハーレムはかーなり難しい。

第十五話『月と地球』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEでは

麻弓「いや〜・・・本当に残念なのですよ。天川君・・・」

麻弓「期末試験という名の戦いに勝った我らは海と山の両方楽しめる場所へ赴いた」

麻弓「そしてフィーナさんが朝霧君に告白をするのですよ」

麻弓「次回は『夏の休暇』テイクオフなのですよ」

第十六話『夏の休暇』（前書き）

樹「……………」

二人の漢女によって樹は死んだように寝ていた。

麻弓「これで問題解決なのですよ」

統夜「うんうん」

リス「HERO'S EPISODE・・・第十六話・・・始まる」

第十六話『夏の休暇』

第十六話『夏の休暇』

期末試験を終え終業式を終えた時の事だった。

神王、魔王「稟殿（稟ちゃん）！！！」

稟「なんですか？それと不法侵入で訴えますよ」

神王「実は・・・」

魔王「話があつてね・・・」

いつになく真剣な顔の王達がいた。

稟「何でしょう？」

魔王「稟ちゃん・・・」

神王「稟殿・・・」

そして、2人が言った言葉とは・・・

神王、魔王「海に行こうぜ（行こうじゃないか）！！」

稟「え〜つと・・・お疲れ様でした」

唐突だったので訳が分からなくなっていた。

帰ろうと思った瞬間神王に肩を掴まれた。

神王「まあ・・・待てや稟殿」

魔王「スルーは駄目だよ」

稟「唐突だったので・・・リクエストしていいですか？」

魔王「いいとも。稟ちゃんは何処に行きたいんだい？」

稟「海もいいですけど、山にも行きたいと思ひまして」

神王「山もいいな」

魔王「よし！じゃあ両方楽しめる所を貸し切ろうじゃないか！」

神王「という訳だ稟殿、友達も大勢連れて来てくれ」

魔王「そうだね、綺麗どころは多い方がいいしね」

稟「はあ・・・じゃあ・・・統夜や達哉達にも声を掛けておきます」

魔王「お願いね、稟ちゃん」

神王「行こうぜ、マー坊」

魔王「わかったよ、神ちゃん」

そう言い残し、2人の王は飛び出していった。

稟「さて・・・統夜達に連絡しておくか」

稟は統夜達に連絡していた。

それから二日後・・・

芙蓉家の前にて・・・

稟「こんなにいたかな？」

参加者は以下の通り

男性チーム

天川統夜、桜木遊輔、北郷零斗、朝霧達哉、土見稟、緑葉樹、鷹見
沢仁、鷹見沢左門、神王、魔王、ザフィーラ（狼形態）の計11名
（男性限定）

女性チーム

芹沢文乃、梅ノ森千世、霧谷希、天川鮮華、フィーナ・ファム・ア
ーシュライト、ミア・クレメンティス、朝霧麻衣、鷹見沢菜月、遠

山翠、リースリット・ノエル、エステル・フリージア、リシアンサス、ネリネ、芙蓉楓、時雨亜紗、プリムラ、カレハ、ツボミ、麻弓、タイム、カナ、高町なのは、フェイト、T、ハラオウン、八神はやて、シグナム、ヴェータ、シャマル、リインフォース？、都築乙女、紅薔薇撫子の計29名（女性限定）
総計40名なり

遊輔「多いな！知らない人もいるかもしれないから俺の名は桜木遊輔！よろしくな！」

笑顔とサムズアップで自己紹介をしていた。

稟「よろしくな」

フィーナ「個性があるわね・・・」

シア「うんうん・・・」

ネリネ「シアちゃんのお父さんの若い版って感じがします・・・」

二世世界と月のお姫様は苦笑していた。

稟「それにしても・・・誰がこいつを呼んだ？」

樹「愚問だね稟、俺様がこんなイベントを見逃す筈がないじゃないか」

稟「・・・」

樹「それに今回は物凄い美人揃いだからね、天国かと思ったよ」

仁「そうだね」

菜月の兄でありトラットリア左門に働いている鷹見沢 仁は樹に賛同していた。

その後菜月のしゃもじが飛んできたのは言うまでも無かった。

左門「全く仁は・・・」

仁や菜月の父親でありトラットリア左門のマスターの鷹見沢 左門
は溜息をついていた。

達哉「そう言えば・・・統夜は？」

稟「零斗もないぞ」

魔王「皆、今回は貸し切りバスでの移動だから・・・それにしても
・・・遅いね・・・」

魔王がそう言った瞬間バス二台が超高速でこちらに来ていた。
しかも運転しているのが・・・

統夜「この勝負・・・貰ったあ！！！！」

零斗「はっ！させるかよ！！！！」

この二人だった。

統夜と零斗以外「おiiiiiiiiiiii！！！！何をやってるんだあああ
ああああ！！！！！！」

そしてバスが到着し・・・

統夜「俺、ただいま参上！！」

零斗「降臨・・・満を持して・・・」

二人がバスから降りた瞬間・・・

文乃「何が・・・」

エステル「俺、ただいま参上！！ですか！！！！」

文乃とエステルが統夜に蹴りと分厚い本で統夜と零斗に攻撃した。

統夜、零斗「ぐぼあ!!」

神王「凄い速さできたな!」

魔王「うんうん。それじゃあこのバスに乗って」

統夜と零斗以外「えっ・・・マジで・・・」

この二人が運転するバスはとんでもない事になりそうというのは言うまでも無かった。

統夜が運転するバスには・・・

鮮華、文乃、千世、希、はやて、エステル、カナ、プリムラ、魔王、シア、ネリネ、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リンフォース?、リースリット、ミア、仁、乙女の計20名
零斗が運転するバスには・・・

遊輔、達哉、稟、神王、樹、左門、フィーナ、麻衣、菜月、翠、楓、亜沙、カレハ、ツボミ、麻弓、なのは、フェイト、紅女史の計18名

統夜サイド・・・

統夜「お前ら!! 全力で振り切る覚悟を決めるよ!!」

はやて「おおおおお!!」

カナ「おー!!!」

プリムラ「YEAH!!!」

ヴィータ「おおー!!!」

ネリネ「リムちゃん・・・大幅に変わりましたね・・・」

魔王「いい方向へ成長してるから大丈夫なんじゃないかな?」

統夜「この旅行で思い出を作ろうゼエーット!!!!」

はやて、カナ、プリムラ、ヴィータ「ゼエーット!!!」

文乃「うるさいわよ!!」

シア「まあまあ・・・ふみちゃん」

エステル「テンションが上がってますね・・・」

零斗サイド・・・

零斗「お前ら!!全力でハジケる覚悟を決めるよ!!」

遊輔「おお!!」

達哉「おい!?何でハジケる必要がある!?」

稟「おかしいだろ!？」

フィーナ「ハジケって何なのかしら？」

麻衣「フィーナさんは知らない方がいいと思いますよ・・・」

菜月「うんうん・・・」

零斗「この旅行でハジケた旅行を作ろうぜ!!」

達哉「無理に近いだろ!？」

それぞれバスに乗ったのを確認して・・・

統夜「んじゃ・・・ライディング・・・デュエル・・・」

零斗「アクセラレーション!!」

最初からバスを飛ばして目的地の旅館まで走り出した。

とある曲がり角では・・・

統夜「ぬおおおおお!!!!」

文乃「きゃああああ!!!!」

ネリネ「きゃああああ!!!!」

ミア「ひゃああああ!!!!」

零斗「ハジケええええ!!!!」

麻衣「いやああああ!!!!」

楓「キュ・・・」

なのは「きゃあああああ！！！！」

速度を落とさずドリフトをしていた。

統夜「やるな！」

零斗「そつちこそ！！」

まだまだバスチェイスが続いていた。

統夜「ここは……」

はやて「クリアマインドや！」

カナ「己の限界を超えた境地……」

プリムラ「アクセルシンク口を！！」

文乃「何か凄い事になってるんだけどおおおお！！！！！！」

零斗「ここは……」

遊輔「バーニングソウルだ！！」

神王「荒ぶる魂を見せてやんな！！零斗殿！！」

フィーナ「何で旅行で……バスの移動でこんなハイスピードな事が起こるの！？」

紅女史「誰かこいつらを止めろおおおお！！！！！！」

紅女史の叫びが木霊した。

統夜と零斗のバスの速度が限界を突破した。

統夜「アクセルシンク口オオオオ！！！！」

零斗「バーニングソウル！！！！」

千世「いやああああああ！！！！！！」

フェイト「もういやああああああ！！！！！！」

シャマル「ひゃああああああ！！！！！！」

菜月「誰か助けてええええええ！！！！！！！！！！」

限界を超えた速さのまま旅館の駐車場へ着いた。
結果は同着である。

統夜「またか……」

零斗「でも……」

統夜、零斗「己の限界を超えた速さを会得したあああああ！！！！」

統夜と零斗は抱き合いながらバックが爆発した背景が写ったそんな
・
・

文乃「何が……己の限界を超えた速さを会得したあああああ！！！！」

千世「こっちは……恐怖を感じたのよ！！」

希「にゃあ……でも……気持ちよかった……」

フィーナ「ミアが気絶してるのよ！！！！」

ネリネ「気持ち悪いです……」

神王「いやゝはっはっはっは！！流石は統夜殿と零斗殿だな！！」

魔王「うんうん」

一緒に乗って来た人達はカンカンだった。

旅館に書かれた名前は『永遠亭』と書かれていた。

凜「何処かで聞いた事のある名前だよな？」

統夜「気にしたら負けだ。入ろうぜ」

統夜の一言で一同は旅館へ入りチェックインした。

女将「本日より四日間、皆様方の貸し切りなのでどうぞゆっくりと

「過ぎてくださいませ」

そう言い残し、女将は旅館の奥の方へと姿を消していった。
部屋割りをクジで決めていた。

部屋割りの結果は・・・

一組・・・統夜、はやて、文乃、エステル

二組・・・千世、希、プリムラ、カナ

三組・・・達哉、フィーナ、ミア、菜月

四組・・・稟、楓、シア、ネリネ

五組・・・亜沙、カレハ、ツボミ、翠

六組・・・なのは、フェイト、麻弓、リース

七組・・・神王、魔王、樹

八組・・・ヴォルケンリッター、鮮華、乙女

九組・・・遊輔、零斗、仁、左門

十組・・・紅女史

に決まった。

部屋に入り荷物を置いて30分後・・・

神王、魔王「うゝみだゝ!!!」

ザザーンッ!!!

魔王「ほら、捕まえてごらん神ちゃん」

神王「待てよ、マー坊」

その光景を見ていた一般市民の方々は引き気味だったのは言うまでもない。

統夜達は・・・

統夜「うん。あの二人の荷物だけは別にしようぜ」
遊輔「異議なし」

零斗「俺は別にいいけどな」

達哉「よく無いだろ!？」

稟「全くだ・・・」

零斗「俺も真似て・・・うゝみゝ!!!」

零斗はハジケ魂を解放して海に向かって叫び飛びこんだ。

統夜「んじゃ・・・文乃達を待ってるか・・・」

樹を鋼鉄の鎖で縛った後砂浜に頭だけを残して埋めながら言った。

統夜「達哉、シヨットガン持つてるか？」

達哉「持ってねえよ!!!ここで殺すな!!!」

統夜「使えん奴め・・・稟、チエーンソーとか持つてるか？」

稟「無いわ!?物騒過ぎるぞ!!!」

遊輔「彼女達を笑顔にするにはこいつは燃やした方が・・・」

稟「おiiiiiiii!!!それは本当に止めてくれええええ!!!」
「」

しばらくすると・・・

水着に着替えた女性陣が出て来た。

はやて「どうや?統夜。似合う?」

文乃「何ジロジロ見てるのよ。二回死ね!」

千世「この私の水着姿にメロメロされなさい」

希「にゃあ・・・似合う?」

エステル「あ、あの・・・似合いますか?」

カナ「どう?統夜」

プリムラ「どうかな？お兄ちゃん」

統夜「似合っているぞ。皆」

楓「あの・・・どうですか？」

シア「どう？稟君似合う？」

ネリネ「あの・・・どうでしょうか？稟様／＼」

稟「う、うん・・・とても似合ってるよ」

フィーナ「あの・・・どうかしら・・・達哉？／＼」

菜月「頑張ってみたんだけど・・・どうかな？」

麻衣「どうかな？お兄ちゃん」

翠「どうかな？朝霧君」

達哉「うん。皆よく似合っているぞ」

その後統夜と天川ラバーズの皆はビーチバレー等を楽しみ・・・

稟と土見ラバーズは統夜と同じくビーチバレーをして楽しんでいた。

達哉と朝霧ラバーズは・・・

フィーナ「楽しいわね。達哉」

達哉「そうだな。フィーナ」

海に入り水浴びをしていた。

麻衣「フィーナさんってお兄ちゃんの事好きなのかな？」

菜月「うん・・・好きでも・・・大変じゃないかな？」

翠「難関だね・・・」

達哉とフィーナの様子を見てそう言った。

その時麻衣が達哉とフィーナに気を利かせるようにこう言った。

麻衣「お兄ちゃん、私達、統夜さん達とビーチバレーしてくるから」

達哉「ああ。分かった。気を付けてな」

達哉とフィーナを二人きりにさせて統夜達の所へ行つた。

フィーナ「（気を利かせているのかしら？でも……）」

達哉「どうかしたか？フィーナ」

フィーナ「い、いえ……何でも無いわ。あそこの岩場に行かない？」

達哉「構わないよ」

二人は岩場へ向かった。

達哉「綺麗だね」

フィーナ「そうね……月には海が無いから……」

達哉「月人の皆が地球を好きになつてくれたら……」

フィーナ「達哉……」

達哉は空と海を見ながら呟いていた。

達哉「一緒に取り合い地球と月の人がお互い笑い合えるように……『絆』を再生出来れば……」

フィーナ「達哉……貴方に話したい事があるの……いいかしら？」

フィーナは何かを決心したかのように真剣な表情で達哉を見て言った。

達哉「いいよ」

フィーナ「今から言う事を真剣に聞いて」

達哉「分かった」

フィーナ「私……フィーナ・ファム・アーシュライトは『瑠璃の

軍神』である朝霧 達哉が好きです」

達哉「え・・・何故・・・俺の・・・通り名を・・・？」

フィーナ「さやかから聞いたわ・・・貴方が腐敗した時空管理局の上層部と戦っている事も・・・」

達哉「姉さん・・・でも・・・俺は・・・」

フィーナ「達哉は正しい事の為にしているのでしょう？だったら自信を持ちなさい・・・私は貴方の優しさに惹かれたのよ・・・何かを思う気持ちに・・・」

達哉「ありがとう・・・フィーナ・・・」

フィーナ「貴方と一緒になら・・・大丈夫・・・私には・・・貴方がいるわ・・・」

瑠璃の軍神と月の姫が分かり合った瞬間であった。

零斗「（おめでとさん。お二人とも）」

海の中で二人の様子を見ていた零斗であった。

後は地球と月の間にある歪みを破壊し絆を再生させるだけ・・・

第十六話『夏の休暇』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

零斗「達哉とフィーナ姫が告白したな。これから大変だと思つが頑張ってくれ」

零斗「旅行の最終日の夜に旅館の隣にある村が燃え俺達はかつて統夜や達哉が所属していた部隊の隊長と出会う」

零斗「奴は俺のマイティ真拳や統夜の剣術では敵わなかつた・・・
本当の化け物なのか・・・」

零斗「次回『決別』テイクオフ」

第十七話『決別』（前書き）

神王「命運尽きたな！滅び去れ！」

魔王「分の悪い賭けは嫌いじゃない！」

左門「流派 東方不敗は王者の風よ！！！」

統夜「わあゝ・・・凄いな」

鮮華「あはは・・・HERO・S EPISODE第十七話始まり
ます」

第十七話 『決別』

フィーナから達哉への告白が終わり翌朝・・・

統夜「・・・・・・・・」

はやて「・・・・・・・・」

文乃「・・・・・・・・」

エステル「・・・・・・・・」

私・・・天川 統夜は三人の美少女に囲まれて眠っております。
左にははやて、右にはエステル、その隣に文乃が寝ております。

樹や親衛隊、何処かの異端審問会の連中が見たら嫉妬に狂っている
のかもしれない。

世界よ・・・俺は幸せを得ていいのですか？

統夜「でも・・・悪くないかな・・・大切な人達と一緒にだから・・・」

すると・・・

カナ「統夜、朝ご飯、一緒に・・・・・・・・」

カナが扉を開けて固まりプルプルと震え

統夜「こ、これは・・・その・・・」

カナ「天誅ーっ！！」

カナは問答無用で魔力の籠った拳で統夜を殴り飛ばした。

統夜「やっぱ不幸だぁー！！！」

カナに吹き飛ばされた後朝飯を食って山へ移動していた。

統夜「自然にふれ合うつて悪くないな」

うーんと背伸びしながら満喫していた。

はやて「なあ・・・エステルさん、一つええか？」

エステル「何ですか？」

はやてがエステルに問い掛けた。

はやて「エステルさんは統夜の事好きなんか？」

エステル「な、ななな何を言っているのですか?! / / /」

はやて「どうなんや？」

はやての真剣な表情で言った。

エステル「好きですね・・・自由気ままで誰かの為に何かをやっている所が好きになりましたね・・・」

はやて「そうか・・・でも負けへんよ？」

エステル「ふふ・・・お互いに・・・ですね。ですけど・・・」

はやて「少し鈍感やけどな・・・無理に攻めたらあかんしな・・・」

エステル「そこは同意します」

統夜が満喫していると金髪で猫耳型の帽子を被った少女が近づいていた。

統夜「お前・・・フィアツカじゃなく・・・リースの方か？」

リース「(コクツ)」

リースと呼ばれた少女は首を縦に振った。

統夜「んで・・・お前も自然の満喫か？」

リース「・・・そんな所・・・月とは違う・・・」

統夜「そりゃそうだ・・・地球はどうだ？」

リース「普通・・・旅行のバスの運転も普通・・・」

統夜「あ、あははは・・・そうか・・・」

苦笑いしていた。

その後リースは何処かへ行った。

統夜「不思議な娘だな・・・フィアツカとリース・・・か・・・」

山での自然を満喫した後天川ラバースと一緒に散歩していた。

旅館の最終日の夜になったその時・・・

村人「な、何故・・・ぐはっ！」

何者かの手のよって村人たちが殺された。

その頃・・・

統夜「何だ・・・この感じは・・・」

稟「どうしたんだ？」

統夜「いや・・・ちよつと隣の村まで行ってくる！！」

旅館で誰かの気配を感じたのか統夜は外へ出て隣の村へ行った。

統夜「この魔力の感じは……まさか……」

そう考えていると達哉と零斗、遊輔が現れ一緒に走っていた。

統夜「お前ら……どうして……」

三人に問い掛けた。

達哉「俺も嫌な予感がしたんだよ……」

零斗「俺もだ」

遊輔「急ぐぞ」

三人は隣の村へ辿り着いた。

統夜「こ、これは……」

遊輔「酷い……」

零斗「一体誰が……」

達哉「まさか……」

村全体が燃え住民が全て皆殺しにされていた。

すると黒いコートに黒いズボンを穿き膝裏まである銀髪に翡翠色の瞳をした整った顔立ちの青年が銀色の刀身が青年の身長を超え柄が黒色の長刀を左手で握っていた。

？「久し振りだな……統夜……達哉……」

達哉「イグニス……隊長……」

統夜「……」

イグニスと呼ばれた青年は統夜と達哉を見て言った。

統夜「イグニス・・・何故こんな事をした!!!」

イグニス「何の事だ？」

統夜「惚けるな!!!何故・・・村人達を殺した!!!答える!!!」

イグニス「ふっ・・・そんな事か・・・何の取り柄も無い奴ら等・・・生きるに値はしない・・・」

零斗「そんな理由で殺したのか!？」

遊輔「外道が・・・」

統夜と達哉、零斗、遊輔は戦闘態勢に入った。

イグニス「統夜・・・何故お前は『人間側』にいる・・・」

統夜「何が言いたい・・・」

イグニス「地球と月の戦争・・・人類同士の戦争をしている人間共に価値が無いとしか思えんが何故だ・・・」

統夜「確かに・・・だが・・・やり直そうとしている奴等もいる!!!そして・・・お前の仲間にはならない!!!」

イグニス「残念だ・・・同じ『人外』なのにな・・・」

イグニスは一瞬で統夜達に近づき大剣、二槍、銃、刀のぶつかり合いが始まった。

一撃が速く重い為押されてしまい四人はバックステップし間合いを取った。

統夜「イグニス・・・憧れ・・・信頼してたのに・・・でやあ!!!」

零斗「マイティ真拳奥義 バーストストリーム!!!」

統夜は斬撃、零斗は蒼い砲撃を放ったがイグニスの横に薙ぎ払う一閃で斬り裂いた。

その後遊輔と達哉が上から奇襲した。

遊輔「大烈火!!!」
達哉「氷瞬間!!!」

炎の槍の連続突きと氷の瞬速連続斬りを仕掛けたが全て見切られた。イグニスには防いだ後達哉を瞬速の一閃をして燃えている建物の中へ吹き飛ばし斬撃を遊輔の方へ飛ばした。

遊輔「ファイアウォール!!!」

炎の壁を展開するが軽々と破られ直撃を喰らった。

イグニス「これが・・・『堕天使』・・・『ルシファー』の力だ・・・いくら貴様らでも俺には勝てん・・・」

統夜「ああ・・・そうですか!!!」

統夜は魔力と気力、霊力、蒼炎を刀身に収束し始めた。

その隙に零斗は上へ勢いよく飛びあがった。

零斗「全力でやってやるぜ!!!マイティ真拳奥義 パトリオットキック!!!」

統夜「蒼牙天衝!!!」

零斗はイグニスの首に目掛けて勢いのあるキックを放ち、統夜は蒼炎に包まれた月牙天衝を強化した斬撃を放った。

二人の攻撃で爆発が起きどうなっているのか分からなかった。煙が晴れると・・・

イグニス「中々いい攻撃だが・・・まだまだだな・・・」

統夜の斬撃を自分の武器である滅正で防ぎ、零斗の蹴りを片手で足を掴んでいた。

その後零斗を統夜に向けて投げ飛ばし一閃して吹き飛ばした。

統夜「くそっ……」

達哉「強い……」

遊輔「強過ぎる……」

零斗「俺のマイティ真拳が通用しねえとは……」

四人はイグニスの猛攻でボロボロになっていた。

イグニス「これで……終わりだ……」

丸く中心部には十字架が描かれている魔法陣を展開し始めた。

イグニス「シャドウフレア!!」

巨大な闇と炎の属性を融合した炎を統夜達に放ち大爆発を起こした。煙が晴れると統夜達は倒れていた。

イグニス「……」

統夜達の方へ歩き始めた。

すると誰かが起きあがり攻撃を仕掛けた。

イグニス「ほう……流石と言うべきか……」

統夜「……」

統夜がイグニスに攻撃を仕掛けたが滅正に防がれた。

統夜「アンタを・・・信じてたのに・・・尊敬してたのに・・・何でだよ!!」

月牙天衝を放とうとするがイグニスには統夜の腹部を滅正で刺した。

イグニス「ふん・・・粹がるな・・・真の力に目覚めていない奴が・・・図に乗るな!!」

統夜「がつ!!」

更に深く刺した。

統夜「・・・・・・・・」

イグニス「見込み違いか・・・」

ドクンツ!

突然統夜の周りから魔力と気力、霊力でもない力が溢れて出した。

イグニス「何だ?」

統夜の髪の色が金髪から銀髪へ変化し始めた。

イグニス「何が起きている・・・まさか目覚めたのか!!」

瞳を開けると瞳孔が縦に変化し色が真紅に変化していた。

零斗「(アレは・・・一体何なんだ・・・?)」

今日が覚めた零斗は統夜の突然の変化に驚いていた。刺された滅正から自力で出た後大剣を手にした。

尚刺された傷は直ぐに再生されていた。

統夜「うおおおおおおお！！！！！！」

制御が出来ていないのかイグニスに斬撃を仕掛けたが直ぐに避けられたが斬撃の威力が比喩物にならない程のものになっていた。

イグニス「所詮は制御が出来ていないもの……」

イグニスは滅正の刀身に魔力と気力を込め……

イグニス「八刀魔閃！！」

瞬速の斬撃を統夜に喰らわせた。

統夜は再び立ち上がったが突然髪の色と瞳が通常に戻って気絶した。

イグニス「これからが面白くなりつつあるな……楽しみにしているぞ……統夜……」

イグニスは何処かへ転移して消えた。

零斗「急がねえと……」

零斗は統夜と遊輔、達哉を担いで瞬間移動して旅館へ戻った。

旅館に戻ると……

零斗「神王のおっちゃん！！」

零斗が神王のいる部屋へ来て呼んだ。

神王「何でい・・・零斗殿」

零斗「統夜と遊輔、達哉を助けてくれ!!」

零斗の言葉を聞いた後三人の容態を見て真剣な表情になった。

神王「こいつは・・・まー坊達の助けが必要になるぜ・・・皆を呼んでくるぜ」

神王は魔王達を呼んで統夜達を治療した後部屋に寝かせた。
その後宴会場に来ていた。

はやて「統夜達に何があつたんや？零斗君・・・」

はやては零斗にそう言った。

零斗「俺はあまり知らないが・・・統夜と達哉の知り合いが村を燃やし虐殺をしていた」

エステル「それは・・・誰のですか？」

零斗「イグニス・・・」

なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッター「!?!」

イグニスの名前をなのは達は聞いた瞬間驚き始めた。

はやて「生きてたんか・・・せやけど・・・何故統夜が憧れ・・・信頼していたイグニスが・・・」

零斗「地球と月の戦争・・・人類同士で争う人間共に価値が無いと思われたんだろう・・・俺の推測だが管理局の腐敗にも関連しているんじゃないか？」

フィーナ「・・・」

ミア「姫様……」

フィーナ「無理も無いわね……。そう思われては……。彼は元凶で
ある人類を憎み狂い始めた……」

エステル「でも……。全てを滅ぼしていい訳ではありません……」
魔王「そのイグニスに勝つたのかい？」

魔王の言葉に……

零斗「負けたよ……。俺のマイティ真拳や統夜や達哉の剣術、遊輔
の二槍が通用しなかった……。ルシファアの力にな……」
乙女、樹、左門、仁、紅女史以外「!？」

この中で最も強い四人が負けてしまった事に驚きを隠せずにいた。

樹「ちよつといいかい？」

零斗「何だ？」

樹「俺様達は管理局の事を知らないんだけど……。教えてくれない
かい？」

零斗「おっちゃん達、喋っていいよな？」

神王「構わないぜ」

魔王「構わないよ。むしろ知っておいた方がいい……」

零斗は知らない人達の為に管理局の上層部の腐敗を教えた。
知らない人達は怒りを覚えた。

フィーナ「最低ね……。真面目に働いている人達を食い物にするな
んて……」

零斗「今眠っている統夜と達哉は管理局に殺されかけた……」

左門「なっ……。タツと統夜が……」

仁「一番信じていた組織に……。酷いよね……」

樹「本当に最低な組織だね」

紅女史「呆れてものが言えんな・・・」

知らない人達も怒りを露わにしていた。

フェイト「ちよつといいかな」

フェイトが零斗に質問をした。

零斗「何だ？」

フェイト「何で零斗達は助かったの？」

零斗「それは・・・統夜のお陰だ・・・」

はやて「統夜の？」

零斗「ああ・・・あいつの隠された力によって救われたようなもんだからな。俺から一ついいか？」

はやて「何や？」

零斗「あいつは本当に何者なんだ？」

千世「あいつは天川 統夜でしょ・・・それ以上でもそれ以下でも無いわ」

零斗「質問を変えよう・・・あいつは本当に『人間』なのか？」

文乃「一体・・・何が言いたいのだよ！！アンタは！！」

零斗の質問に文乃が声を荒げた。

魔王「それは私も疑問に思った事だよ・・・」

神王「俺もだ・・・プリムラの魔力を凌ぐなんて・・・人族にはいないからな・・・」

魔王「はやてちゃんは何か知らないかい？」

魔王がはやてに質問をした。

はやて「小さい時やけど・・・母親らしき人物が統夜と鮮華ちゃんを連れて来たぐらいしか覚えてへんよ」

魔王「その母親は？」

はやて「二人を置いて姿を消した」

魔王「そうか・・・」

すると・・・

統夜「随分と俺の事を喋っているな・・・」

部屋で寝ていた統夜が現れた。

エステル「もういいのですか？」

統夜「ああ。零斗・・・お前が言ってた事・・・まだ探している途中なんだ・・・真実を・・・」

零斗「お前も知らないなら・・・いつか・・・これで話はお終い。解散、解散つと」

零斗の号令でそれぞれ解散し眠りに着いた。

零斗「・・・」

皆が眠っている最中に零斗だけが起きて統夜達がいる部屋に気付かれずに来ていた。

零斗「（統夜・・・悪いが・・・見せて貰うぜ・・・マイティ真拳奥義・・・解析の魔眼・・・）」

眠っている統夜を解析し始めた。

すると・・・零斗の目に真紅の人影と背中から5対10翼が生えている銀色の影、背中から5対10翼の蝙蝠状の翼が生えた漆黒の影の三つが映し出された。

零斗「なるほど・・・肉体的に俺らとは明らかに違う・・・異常な身体能力や魔力もこれらが原因か・・・これは俺だけの秘密にしておくぜ・・・」

解析の魔眼を解除した後静かに部屋から出た。

翌朝になり帰る準備をしていた。

統夜が運転するバスには・・・

遊輔、達哉、稟、神王、樹、左門、フィーナ、麻衣、菜月、翠、楓、亜沙、カレハ、ツボミ、麻弓、なのは、フェイト、紅女史の計18名
零斗が運転するバスには・・・

鮮華、文乃、千世、希、はやて、エステル、カナ、プリムラ、魔王、シア、ネリネ、ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラ、リンフォース？、リースリット、ミア、仁、乙女の計20名

統夜「んじゃ・・・」

統夜、零斗「カットビングだぜ！！俺！！」

統夜、零斗以外「いやあああああ！！！！」

バスを飛ばして帰った。

運転している最中に・・・

統夜「（イグニス・・・アンタは敵だよ・・・歪んだアンタを倒すのは俺だ・・・）」

かつて憧れ・・・信頼した男と袂を分かち決別したのであった。

第十七話『決別』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

亜沙「統ちゃん・・・辛い過去があるんだね・・・そして信じていたものに裏切られ・・・憧れてた人と決別するなんて・・・」

亜沙「零ちゃんがフィーナちゃんの親衛隊隊長にて反地球主義のユルゲンって人と勝負を挑むみたい」

亜沙「マイティ真拳って何なんだろう・・・」

亜沙「次回は『零斗対親衛隊隊長』テイクオフ」

オリキャラ紹介4（前書き）

イグニスの詳細設定です。

オリキャラ紹介4

名前：イグニス

性別：男

種族：墮天使

容姿：膝裏まである銀髪に翡翠色の瞳をした整った顔立ち

身長：197cm

年齢：25歳

魔力光：銀

魔力：測定不能

気力：測定不能

魔術式：ルシファー式

性格：冷静かつ勇敢で、意志や責任感が強い性格だったがやや狂気に駆られている

趣味：特に無い

好きなもの（事）：特に無い

嫌いなもの（事）：管理局、人間

詳細：天川 統夜達がかつて所属していた時空管理局最強の特殊部隊「ソルジャー」元隊長。

部下や仲間思いであり『英雄』と呼ばれるほどの戦闘能力を持ち管理局の中で最強だった。

二年前における『ウータイ戦争』によって裏切られた事と自分が墮天使である事を知った事により腐敗した管理局と元凶である人類を見限り憎み始める。

ルシファー式・・・この魔術式は墮天使の血を引く者にしか出来ない魔術式で魔法の威力が高く、広範囲から接近戦まで色々なものがある。

魔法陣は丸く中心部には十字架が描かれているもの。

武器：滅正

形状：銀色の刀身がイグニスの身長を超え柄が黒色の長刀

詳細：イグニスが扱う武器。

刀身に術式兵装が組み込まれており魔力や気力を流す事により斬撃の威力を上げる事が可能。

オリキャラ紹介4（後書き）

イグニスイメージ基はFF？に出ているあのお方です。

第十八話 『零斗対親衛隊隊長』（前書き）

今回は統夜の出番無い・・・

統夜「えっ・・・」

てな訳で今回は零斗がメインです。

ミア「HERO'S EPISODE第十八話始まります」

第十八話 『零斗対親衛隊隊長』

イグニスとの戦いから数日経ったある日の事だった。

零斗「流石は達哉だ・・・フィーナ姫の告白を受けるとは・・・褒美にロケランを放ってやるっ」

零斗の手にはロケランがあった。

達哉「せんでいい！！危険過ぎるだろ！！」

達哉のツッコミにより零斗はロケランをしまった。

零斗「嫌か？」

達哉「当たり前だ」

零斗「そうか・・・なら・・・お前とフィーナ姫のエッチシーンを撮影する許可を・・・」

達哉「止める！！絶対にするな！！」

零斗「残念だ・・・『軍神と月姫のラブラブ注入』が出来たものを・・・」

達哉「凍え死にたいのか！？お前は！！」

零斗「他には・・・麻衣ちゃんとなら・・・『お兄ちゃんラブラブ注入』・・・菜月なら『私のパスタたべて』・・・ミアちゃんなら『愛のあふれるメイド調教計画』とか・・・」

達哉「いい加減にしろ！！テメエは18禁ネタを言って楽しいか！！」

零斗「わははっ！！」

？「おや、朝霧殿じゃありませんか・・・」

達也が零斗に怒鳴ると後ろから貴族らしい服を着た男が達哉に声を掛けた。

達哉「ユルゲン……卿……」

零斗「誰？」

達哉「フィーナの許嫁で……月の親衛隊隊長をしているユルゲン卿だ」

ユルゲン「はじめまして。ユルゲン・フォン・クリューゲルと言います。陛下の親衛隊隊長をしています。どうぞ、よろしく」

そう言つて、零斗に手を差し出すユルゲン

零斗「止めておくれ。アンタ……地球人が気に入らないのに無理に笑顔を作らない方がいい」

ユルゲン「そうですか……では、お言葉に甘えて……」

ユルゲンは、手を引っ込めて態度を変える。

ユルゲン「貴様のような小僧に触られるのは気分を害する。」

達哉「やっぱりな……」

ユルゲン「何故貴様らはそう平然としている？」

達哉「アンタの演技はお見通しなんでね……」

零斗「アンタ、凄い嫌そうな顔をしているしな……いん ん野郎」

ユルゲン「地球人の癖に……この私を侮辱するつもりか!!」

零斗「最初に侮辱してきたのはアンタだろ？これでお相子だ」

ユルゲン「ふんっ……大体姫も、何時になつたら月に戻られるのだ？月と地球が共存する理由は無いのにな」

達哉「ッ！あんた……」

零斗「待て……達哉。ユルゲンさん」

達哉を制した後ユルゲンに声を掛けた。

ユルゲン「何だ？」

零斗「アンタ・・・親衛隊隊長をやってるんだよな。良かったら俺と勝負しないか？」

ユルゲン「フンツ！何故、貴様のような地球人と・・・」

零斗「おやおや・・・もしかして怖いのか？地球人に負けるのが怖いんだ」所詮は・・・いきん・たし野郎なんだ・・・」

ユルゲン「貴様・・・よかろう・・・やってやろう」

零斗「そうこなくちゃな」

ユルゲン「（フンツ！私が、こんなガキに負ける訳は無いが、痛めつけてやる！）」

零斗の挑発のせいかユルゲンはムキになり受ける事にした。

こうして・・・マイティ真拳使いとスフィア王国親衛隊隊長の対決が決定した。

英都バーベナ学園の武道場では・・・

零斗とユルゲンの二人が見合っていた。

紅女史「審判は私がする・・・北郷のルールにより倒れた方が負けとする！！」

丁度学園にいた紅女史に審判を頼んだ。

ユルゲン「武器と防具はいらないのか？地球人」

零斗「いんや・・・必要無い。俺の武器はハジケだからな！！」

ユルゲン「（コイツ・・・舐めやがって・・・）」

零斗は何も構えず、ユルゲンは木刀を構えた。

紅女史「始め!!」

ユルゲン「全力で行く!」

ユルゲンは、上段からの斬撃を放つ。

零斗は上段からの斬撃をひらりとかわしていた。

ユルゲン「ツ!・・・やるな・・・地球人」

零斗「自己紹介がまだだったな・・・俺は北郷 零斗・・・マイテイ真拳の継承者だ!!」

零斗は右ストレートを放つがユルゲンはそれを木刀で防いだ。

零斗「行くぜ!マイテイ真拳奥義!イガグリの雨!!」

突然上からイガグリの雨がユルゲンに振り掛ったが木刀で全て切り払った。

零斗「甘いぜ!!」

最後のイガグリが降って来ると思ったが大きな石がユルゲンの頭に直撃した。

ユルゲン「グググ・・・貴様・・・」

零斗「はははは油断大敵じゃないのか」

ユルゲンは防具に救われたのか立っていた。

零斗とユルゲンの試合を見ている達哉と紅女史は・・・

紅女史「凄いな・・・あの二人は・・・」

達哉「ええ・・・流石は近衛隊隊長ですが・・・まだまだ甘いですね」

紅女史「北郷のマイティ真拳・・・全然分からん・・・」

零斗のマイティ真拳は統夜以外は見た事無いので理解できないのは当たり前である。

零斗「行くぜ！！マイティ真拳奥義！！巨大化！！」

ユルゲン「何！？巨大化だと！？」

零斗の身体が小さくなり、花くらいの大きさになった。

ところがユルゲンに蹴っ飛ばされて元に戻った。

その隙にユルゲンは零斗に木刀の連続叩きを始めた。

ユルゲン「フハハハハハ！！！！どうだ！！地球人！！所詮マイティ真拳は遊びだ！」

ユルゲンが大きく高らかに笑っていた。
だが・・・

零斗「ふう・・・危なかったぜ・・・」

零斗の手にはいつの間にか樹を手にしていた。ユルゲンの攻撃をもろに喰らったのでボロボロになっていたのは言うまでも無い。

紅女史、達哉「ええええええええー！！！！？いつの間に！
！？！？しかも身代りにしてるし！！！」

紅女史と達哉のツッコミが炸裂した。

零斗「なら・・・こっちの番だ！！マイティ真拳奥義！！樹ソード
無双乱舞！！」

樹「ぎゃああああああ！！！！」

樹の足を持ってユルゲンに斬撃や突き、叩くなどの攻撃をしてダメ
ージを喰らわせた。

この技を使ったのか樹の身体はそれ以上にボロボロになった。

ユルゲン「地球人は・・・外道の集まりか！！」

零斗「違う！！ハジケの集まりだ！！」

達哉「それ絶対違うだろおおー！！！！！！！！！！」

ユルゲンの答えにボケた零斗にツッコミを入れた。

零斗「行くぜ！！俺の必殺技を受けやがれ！！」

ユルゲン「必殺技だと？ふん・・・くだらん・・・」

零斗は樹の頭部を掴み始めた。

樹「な、何をする気なんだい！？零斗！！」

零斗「行くぜ！！樹マグナム！！」

樹「ぎゃああああああ！！！！！！！！！！」

樹を勢いよく投げ飛ばした。

ユルゲン「くっ・・・」

ユルゲンはそれを回避し樹は武道場の壁に激突した。

零斗「樹いーーーーー!! テメエ・・・よくも!!! 樹を!!!」

樹をやったのをユルゲンのせいにして怒りを露わにした。

達哉「いやいやいやいや・・・やったのはお前だからね!!!」

またまた達哉のツツコミが炸裂した。

零斗「お前のような痛みが分からんような月人は・・・マイティ真拳奥義!!!」

零斗はユルゲンの方へ走り出したがユルゲンは好機だと思い木刀を振るったが避け面を外させた。

ユルゲン「な、何をする気なんだ!?!」

零斗「暗黒物質ダクシュート!!!」

黒い謎の物体らしきものをユルゲンの顔面にぶつけた。

ユルゲン「!!!?!?!?!?!?!?!?!?!?!」

言葉にもならない程の声を叫びながら苦しみ出した。

5分後ユルゲンは気絶し倒れた。

そして倒れたユルゲンを残してその場を後にした。

零斗「勝ったぜ・・・そしてスッキリした!!!」

達哉「俺は知らないからな・・・」

零斗「何とかなるだろう・・・それに・・・あの野郎は統夜の言葉

で言うのなら『歪み』だろうし」

達哉「そうかもしれないが・・・」

零斗「フィーナはユルゲンじゃなく・・・お前を選んだ・・・月と地球が共存できるという未来の可能性に・・・もう出来ているんだろ？覚悟を・・・」

達哉「ああ。俺はこの後フィーナと一緒にカレンさんの所へ行くよ」

達哉は零斗と分かれ、家に帰った。

マイティ真拳の使い手に出来る事は一つだけ・・・地球と月の絆の再生を見届ける事・・・

第十八話 『零斗対親衛隊隊長』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

ミア「うわゝ．．．とんでもない事をしちゃいましたね．．．」

ミア「達哉さんは姫様と一緒に大使館へ行きカレンさんの所へ行きました．．．カレンさんの他に統夜さんもいたのです」

ミア「統夜とカレンさんが出した試験の内容は一週間後に実戦で気力少年と戦う事．．．大丈夫でしょうか．．．」

ミア「本来なら姫様がカレンさんなのに．．．どうしてでしょうか？」

ミア「次回は『軍神VS気力使い』テイクオフ」

第十九話 『軍神VS気力使い』（前書き）

今回の話に龍の骨さんの小説である気力少年ダイチ！俺と四人の探偵と気力修行！のキャラがゲスト参戦するゼーツト！！

統夜「おお〜」

そして達哉と対決する相手でもある。

カレン「HERO'S EPISODE第十九話始まります」

第十九話 『軍神VS気力使い』

第十九話 『軍神VS気力使い』

零斗がユルゲンに勝った頃、月大使館に統夜と秘書服を着て眼鏡を掛けた女性と話をしていた。

？「フィーナ姫は達哉君に告白をした・・・と・・・？」

統夜「うん。ユルゲンじゃなく達哉を選んだ・・・そりゃ・・・反地球の奴と一緒にいたら歪んでしまうぜ。カレンさん。分かるだろ？」

カレンと呼ばれた女性にそう答えた。

カレン「歪み・・・つまりは戦争が起きると・・・？」

統夜「そう・・・何も知らず聞かず・・・分かり合おうともしない事は俺は認めない・・・」

カレン「ですが・・・フィーナ姫は・・・スフィア王国の王女・・・達哉君は地球の・・・一階の学生にすぎません。彼に何が出来ると？」

統夜「身分とかで縛られちゃお二人が可哀想だぜ？命短し・・・人よ・・・恋せよ！！ってな・・・俺はあの二人の可能性に賭けている・・・」

お互い真剣な表情で話し合っていた。

カレン「口では何とでも言えます」

統夜「あいつなら・・・どれだけ傷ついても・・・這いつくばっても・・・絶対にフィーナと同じ道を歩く・・・『瑠璃の軍神』は伊

達じゃないぜ」

カレン「貴方は友達思いますが・・・現実を見てください・・・」
すると大使館の一室のドアのノックの音が聞こえた。

カレン「来たようですね。開いておりますよ」

ドアが開かれると達哉とフィーナが入って来た。

達哉「統夜・・・お前・・・何でここに？」

統夜「ちよつとした討論会さね・・・覚悟は出来たみたいだな？」
フィーナ「ええ」

二人は覚悟を決めていた。

達哉「お願いします」

カレン「私が、お二人の関係を認めたとしてどうなると？私は、只の武官にすぎないのでよ」

フィーナ「そして同時に父様と亡き母様の良き家臣でもあるわ」

そして、フィーナは立ち上がる。

フィーナ「私達と父様を取りなす事が出来るのは、カレンを置いて他に居りません。」

カレン「王族とその一員たるうとするあなたが・・・気安く頭を下げる物ではありません」

カレンも立ち上がる。

カレン「ご存知でありましょうが、月と地球の関係は良好とは言え

ません。そのような状態で、地球に留学した王女が・・・地球人を将来の伴侶として選んだと知ったら、月の民はどう考えるでしょうか？」

達哉「そ、それは・・・」

カレン「考えて無かったとしたら、実にお粗末な覚悟ですね」

統夜「ただの恋愛結婚だったら気が楽なだけだな・・・」

フィーナ「言い過ぎよ！カレン」

カレン「国民への王家の信頼は崩れ、貴族は王家と地球の密約を主張する事でしょう。そうすれば、スフィア王国は割れ混乱に乗じて、地球の政治的介入も・・・」

フィーナ「それは今、この場に置いて関係の無い事よ！」

カレン「そうなる可能性は極めて高く。つまり、それらの事も視野に入れての覚悟かと説いているのです。曖昧の覚悟しか示せないと言つのならば、家臣としてお二方の関係などだと認める訳にはいきません！」

フィーナ「ッ！」

カレン「あなた方の選択が、自身の近きし者達を不幸にするものだったとしても進んで行けるのですか？」

すると、達哉はフィーナの手を握る。

フィーナ「達哉・・・」

達哉「出来ないと思います。」

フィーナ「ッ！」

達哉「俺は無力でフィーナだけじゃなく、みんなも愛してます。だから、王家がどういった物なのかも解っていませんから」

カレン「ならば、この話しは此処までのようですね」

統夜「・・・・・・・・・・」

統夜は三人の話を真剣に聞いていた。

確かに月と地球の関係は良好では無い・・・地球人と結婚した事は・・・国民への王家の信頼は崩れ・・・国が割れてしまう可能性は極めて高い。

この二人は違う・・・と確信をしていた。

達哉「でも、フィーナやみんなと一緒になら・・・フィーナ達が側に居れば、どんな困難であろうと絶対に乗り越えられます。みんなとなら最高の未来を迎えられる。それが俺の絶対に揺るがない覚悟です」

フィーナ「達哉・・・」

カレン「それでは・・・達哉さんに試験を課し、その結果で判断させて貰います」

達哉「試験・・・ですか？」

カレン「私と統夜君が推薦する『気力使い』の人物と実戦で戦ってもらいます」

達哉「気力使い・・・？」

統夜「要するに・・・気力・・・気功術に長けている奴だ。まあ・・・

・戦闘能力は・・・お前より上じゃないかな」

カレン「獲物は自由。期日は、一週間後。時間と場所は、追って連絡します」

フィーナはテーブルを叩いて二人に反論した。

フィーナ「ふざけないで！！達哉より強い相手を選ぶなんてどうかしてるわ！！何よりも・・・実戦なんておかし過ぎるわ！！」

統夜「だから一週間空けてるんじゃないか・・・実戦じゃなきゃ意味が無い時もあるんだよ・・・それが本当の覚悟じゃないのかねえ・・・」

カレン「どうぞ、受けるも受けなくてもご自由に」

フィーナ「見損なったわ。カレン、統夜」

達哉「俺はやるよ。フィーナ」

フィーナ「達哉!？」

達哉「確かに・・・俺じゃその気力使いに勝てるか負けるかは分からない。でも、俺は逃げない。だから、心配しないで」

そして、フィーナは渋々了承した。

達哉「では、カレンさん。俺達は、これで」

統夜「んじゃ俺は迎えに行くから・・・帰るわ・・・」

カレン「ええ。気を付けてお帰り下さい」

統夜と達哉、フィーナの三人は大使館を後にした。

統夜は達哉達と分かれた後気力使いと呼ばれた人物を迎えに行くため英都港に来ていた。

?「いや・・・『蒼穹の死神』からの依頼を受けて来たんだけど・・・何処にいるんだ?」

背中には中国刀を背負っている少年が港にいて統夜を待っていた。

統夜「悪い悪い待たせたな少年ダイチよ」

龍の骨さんの小説である気力少年ダイチ!俺と四人の探偵と気力修行!の主人公であるダイチに声を掛けた。

ダイチ「今来たばかりだから大丈夫だ。それよりも・・・」
統夜「ああ・・・俺の家に泊まらせてやる・・・早く乗れ」

バハムートの後ろにダイチを乗せて家へ帰った。

その頃・・・リビングには、朝霧ラバーズ全員が揃って、試験の内容を話した。

麻衣「そんなの酷い!!」

菜月「天川君とカレンさんが推薦する気力使って凄く強いんですよ?」

さやか「それで?達哉くんは、諦めるの?」

達哉「まさか・・・例え勝ち目が無くても、俺は諦めないよ」

翠「だけど・・・」

さやか「頑張つて。勝つてね。達哉君」

麻衣「お姉ちゃん!?!」

菜月、翠「さやかさん!?!」

さやか「達哉君を信じるわ。そしてカレンと統夜君は達哉君の可能性を信じてると思うの・・・」

達哉「でも、今回の一件で姉さんに凄く迷惑が掛かるかもしれない。ごめん」

謝る達哉の頭をさやかは撫でる。

達哉「ッ!」

さやか「良いのよ。だって、家族でしょ」

麻衣「そうだよ。私、お兄ちゃんの事応援してるから!」

菜月「私も」

翠「私も」

達哉「ありがとう・・・皆・・・」

フィーナはと言つと・・・

ミア「姫様！どうして、出て来て下さらないのですか！姫様！」

フィーナは、帰って来てから直ぐに部屋に閉じこもって居た。

翌朝・・・

達哉「はっ！ふっ！」

移動しながら竹刀を振るっていた。

菜月「速いね・・・」

翠「今の朝霧君で勝てない人って・・・どれだけの化け物かって言いたい・・・」

菜月「同感・・・」

麻衣「ミアちゃん・・・フィーナさんは？」

ミア「タベから、部屋に籠りつきりなんです」

麻衣「そうなんだ・・・」

ミア「私・・・どうすれば・・・」

フィーナ「皆、おはよう」

ミア「ッ！・・・姫様！」

振り向くとフィーナが立っていた。

フィーナ「ミア、昨日はごめんなさい。でも、もう大丈夫よ。達哉・・・私に何か出来る事は無いかしら？」

達哉「そうだね・・・一回フィーナと勝負をしてみたい・・・」

達哉とフィーナの勝負が始まるうとしていた時・・・

零斗「おお・・・やってるやってる」

遊輔「これは二人の試練だからね」

麻衣「皆さんはどうしたんですか？」

遊輔「達哉が修行をしてるって統夜から聞いたから」

零斗「遊輔と同じくだ。頑張れよ。達哉」

達哉「ああ」

遊輔「フィーナさん。一ついいですか？」

始める前に遊輔はフィーナに声を掛けた。

フィーナ「何でしょう？」

遊輔「達哉には本気でやらないと意味がありません」

フィーナ「言われずとも分かっています」

達哉とフィーナは竹刀を構えた。

零斗「始め!!」

先に動いたのは、フィーナであった。

フィーナ「ヤアッ!」

達哉「ッ!」

フィーナ「ッ!？」

フィーナの放った斬撃を達哉は瞬速で流してフィーナの面を捕らえていた。

菜月「う、嘘!？」

翠「何が何だか、解らなかつたよ」

ミア「速過ぎます・・・」

遊輔「どうでした？」

フィーナ「速過ぎて・・・見えなかったわ・・・」

遊輔「瞬速な速さで相手を翻弄し倒す・・・それが『瑠璃の軍神』と呼ばれているが故だ」

零斗「そして達哉は実戦経験を持ち魔法や剣術も出来る」

フィーナ「予想以上ね・・・」

達哉「大丈夫？フィーナ」

フィーナ「大丈夫よ。達哉・・・それよりも、続けましょう」

フィーナは、離れ竹刀を構える。

フィーナ「今度は負けない！」

達哉「ああ！」

その後、朝霧家からは竹刀がぶつかり合う音が響いていた。

一週間が経ち月大使館に達哉とフィーナ、カレン、統夜達、朝霧ラバーズが来ていた。

カレン「どうも、ギャラリーが多いですね」

達哉「すみません。カレンさん・・・」

カレン「統夜さん・・・例の気力使いは？」

統夜「ああ・・・彼なら・・・既に来てるよ」

統夜がそう言った瞬間フィーナ達女性陣が悲鳴を上げた。

フィーナ「今、お尻を触つたのは誰！？」

ミア「誰ですか！？／／／」

女性陣はお尻を手で押さえ赤くしながら言った。

統夜「ダイチ・・・お前つて奴は・・・」

達哉の前にダイチが突然現れた。

ダイチ「悪い悪い・・・月のお姫様のお尻の感触を確かめたくて・・・」

統夜「お前・・・試合の後生きているのか心配でたまらん・・・」

統夜が視線を女性陣に移しダイチに対して怒りを露わにしていた。

ダイチ「心配するな。俺は死なん」

統夜「（もし・・・稟のラバーズとなのは、フェイトにやらかした瞬間・・・命・・・無いと思うな）始め！！」

達哉「心装・・・氷河月華・・・」

鞘付の長刀を具現させ居合いの構えをとった。

ダイチ「刀か・・・面白いな！お前、名前は？」

達哉「俺は朝霧 達哉だ」

ダイチ「俺はリュウ・ダイチ・・・最強の気力使いになる男だ！！」

ダイチは背中から中国刀を取り出した。

二人は真っ向からぶつかり合い剣劇が始まった。

達哉「流石は気力使いつてところか・・・」

ダイチ「まだ見せてないぜっと！」

刀身に気力を込め衝撃波と共に達哉を吹き飛ばした。

その後身体を一瞬だけ気力で強化させた後中国刀の刀身に気力を込めた斬撃を放った。

達哉「チツ・・・氷翔剣！」

斬撃を交わし剣状の氷を飛ばして牽制しようとしていた。

その後瞬速な動きでダイチを翻弄するが激しい剣劇が繰り広げられていた。

観客サイド

統夜「スピードだけじゃ・・・勝てるもんも勝てないのだよ・・・」
フィーナ「達哉が負けそうな言い方ね・・・」

統夜「姫様・・・俺はそんな言い方はしてないぜ」

麻衣「お兄ちゃん・・・」

ミア「達哉さん・・・」

菜月「達哉・・・」

翠「朝霧君・・・」

カレン「・・・・・・」

達哉対ダイチサイドに戻り・・・

達哉「つ、強い・・・」

ダイチ「お互いにな・・・行くぜ！！天火星秘技・流星閃光！！」

達哉に超高速で無数の突きを一点に打ち込ませ直撃させた。

達哉「グハツ・・・」

血を吐き跪いてしまった。

フィーナ「達哉！？もう止めさせて！！」

麻衣「これ以上やったらお兄ちゃんが死んでしまうよー！！」

統夜「フィーナ・・・麻衣・・・あいつの覚悟を最後まで見届ける・

・・・（達哉・・・見せてみる・・・お前の力を・・・）」

試合を最後まで見届けるように統夜は言った。

ダイチ「天火星！稲妻炎上破！」

気力で炎と稲妻を呼び達哉を吹き飛ばした。

ダイチ「これで生きてたら・・・化け物だよな・・・」

すると・・・ボロボロの達哉が立ち上がり歩き始めた。

目は未だ戦意を失っていないかった。

達哉「・・・・・・・・」

ダイチ「本当に生きてたよ」

達哉は居合いの構えをして魔力と気力を収束し始めた。

ダイチ「気力・・・」

ダイチが攻撃しようとした瞬間達哉が駆け抜けすれ違つ形で通り過ぎた。

そして長刀を鞘に納めた。

ダイチ「ぐっ・・・こいつは・・・」

ビキビキビキ・・・カキーンッ！

達哉「氷河・・・瞬閃・・・」

ダイチが氷漬けになり勝負が決まった。

統夜「勝負あり！！勝者達哉！！」

統夜が宣言する。

達哉「はあ・・・はあ・・・はあ・・・勝った・・・」

菜月「や、やった・・・」

麻衣「お兄ちゃんが・・・」

翠「勝った・・・」

カレン「見事でした。達哉さん」

達哉「カレンさん」

カレン「まさか、貴方より強い相手に勝つとは予想外でした」

フィーナ「では、私達の交際を・・・」

カレン「始めから認めるつもりでした」

達哉「ヘッ!？」

カレン「実は判断する所は、勝ち負けでは無かったのです」

達哉「と言うと?」

カレン「達哉さんは、この一週間。毎日練習をしましたね。一回も

妥協せず」

達哉「はい」

カレン「私は、一回でも妥協したりしたら認めるつもりはありませんでした。ですが、あなた方は諦めずに協力があった。そこが、判断点でした」

フィーナ「では・・・達哉が負けても・・・」

カレン「認めてました」

達哉「そ、そんな」

カレン「フフッ」

そして、カレンはフィーナの方を向き……

カレン「私は、これから月に帰り、ライオネス陛下に達哉さん達の事を話します。そう……」

カレンは、達哉達を見て言った。

カレン「フィーナ様の婚約者と、その愛する者達の事を」

達哉「カレンさん……ありがとうございます！」

カレン「お礼は、いりません。それでは」

そう言つて、カレンは去つて行つた。

達哉達は、その後ろ姿を見送つた。

統夜「ここからだな」

ダイチの氷を溶かしてヒーリングで回復させていた。

フィーナ「そうね……」

達哉「ああ……」

達哉はフラツとした瞬間フィーナが肩を貸してくれた。

達哉「ありがとう……そしてお疲れ様……」

フィーナ「帰りましょう」

達哉「ありがとう……リュウ・ダイチ……」

達哉達は大使館を後にした。

数分後・・・

ダイチ「いてててて・・・俺は・・・」

統夜「負けたよ・・・達哉に・・・」

ダイチ「そうか・・・でも悪くない敗北だ・・・」

統夜「で・・・どうするんだ？」

ダイチ「お前の家で休んだら帰るよ・・・一步最強の気力使いへの道が歩めた・・・」

統夜とダイチは家へ戻った。

翌朝になりダイチは統夜に見送られ帰った。

その頃・・・スフィア王国では・・・

カレンとライオネスが、フィーナ達について話しをしていた。

ライオネス「報告書は、読んだが…カレンそなたは、気は確かか？」

カレン「勿論です」

ライオネス「相手は、名も知れぬ平民だぞ。それに、フィーナ以外にも花嫁は、居るとな」

カレン「身分の面では、確かに問題はあります。ですが、人として非常に好ましいかと」

ライオネス「・・・」

黙るライオネスを余所に、カレンは報告を続ける。

カレン「フィーナ様に似て、率直で誠実。そして、諦める事無く前にと進みます」

ライオネス「フィーナと気が合うとなれば、そうゆう事になるうよ。しかし、地球人との結婚を月の民や、貴族達が納得いくわけ無かる

う。それに既に、フィーナにはユルゲンと言う許嫁もいるのだぞ？」
カレン「無礼な事と承知して申し上げます。私には、ユルゲン・フ
オン・クリューゲル卿が姫のパートナーとしてふさわしいとは思
えませんが」

ライオネス「何？」

ユルゲン「これはこれは。カレン・クラヴィウス殿」

カレン「ッ！？」

振り向くと、そこにはユルゲンが立っていた。

ライオネス「接見中であるぞ。ユルゲン」

ユルゲン「失礼しました。陛下。ですが、カレン殿が帰られている
と聞き逸る気持ちを押さえられませんでした」

一礼をして、ユルゲンは、カレンの隣に立つ。

ユルゲン「地球でのフィーナ様のご様子は、如何でしょうか？」

カレン「お代わりございません」

ユルゲン「そうですか。所で、姫は未だに、あの地球人の家でお住
まいを？」

カレン「陛下。今日は、これにて失礼させて頂きます」

ユルゲンの質問をカレンは、無視をした。

カレン「ですが、私は決して、諦めません」

ライオネス「少し下がって、頭を冷やせ」

カレンは、一礼した後部屋を出て行った。

ライオネス「聞いておったのか。」

ユルゲン「そのつもりは、無かったのですが」

そして、ユルゲンは跪く。

ユルゲン「申し訳ありません。どうか、カレン殿を責めないで下さい。全ては、私が未熟が為。しかし私は、フィーナ姫の伴侶として成るべくこれからも精進する所存であります」

ライオネス「ユルゲン。今の言葉、忘れるが無いぞ。それにしても、長く私の側に居たカレンが、何故この様な無謀な事を」

ユルゲン「・・・」

ユルゲンは、黙ってライオネスの言葉を聞いていた。

宮殿の通路を歩いているカレンは、地球に帰るべく移動をしていた。

カレン「（ユルゲン・フォン・クリューゲル・・・彼は、一筋縄ではいかない・・・だけど、私はフィーナ様の為・・・引いては月王国の民の為・・・月の歪みを断ち切る為・・・）・・・ッ！」

気が付くと、カレンの前には、数名の兵士が居た。

兵士「カレン・クラヴィウス地球駐在部下。あなたを、反逆の容疑で、拘束させて頂きます。」

カレン「ッ!？」

振り向くと、更に数名の兵士が、カレンを囲んでいた。

カレン「（ユルゲン・・・まさか、こんな強引な手に打って出るなんて・・・）」

そして、カレンは兵士達に連れていかれた。

ユルゲンという月の歪みは徐々に大きくなりつつあった。

第十九話 『軍神VS気力使い』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

麻衣「お兄ちゃんがダイチという人に勝っちゃった・・・これ以上嬉しい事は無いよ」

麻衣「私達はお兄ちゃんと一緒に物見が丘公園の頂上付近で休んでいた時リースちゃんが襲い掛かって来た。一体どうして・・・？」

麻衣「そしてフィアツカちゃんの真実が語られる」

麻衣「今回は『過ちは繰り返させない』テイクオフ」

第二十話『過ちは繰り返させない』（前書き）

こっからシリアスになるかも・・・しれない・・・

統夜「月と地球は分かり合おうとしている・・・」

遊輔「そして歪みを破壊する・・・」

零斗「月と地球の絆は再生される・・・」

稟「HERO'S EPISODE第二十話始まります」

第二十話『過ちは繰り返させない』

第二十話『過ちは繰り返させない』

達哉達は物見が丘公園の頂上付近で休んでいた。

フィーナ「綺麗ね・・・」

不意にフィーナが景色を見て呟いた。

達哉「そうだね・・・ここは英都一だからね」

菜月「英都のデートスポットにもなった事もあるし」

翠「でも・・・ここからだよね」

麻衣「頑張つてね。お兄ちゃん」

達哉「ああ。月と地球の絆の再生の始まりだ・・・」

フィーナ「そうね・・・」

さやか「達哉君・・・統夜君に似てきたよね・・・」

達哉「フィーナ「ッ！」」

何かの視線を感じて、感じた方を見る。そこには、リースが立っていた。しかし、その瞳は違って、赤かった。

フィーナ「あなたは・・・」

フィーナ以外「リース（ちゃん）!?!」

達哉「リース、こっちに・・・」

達哉は違和感を感じた。それはフィーナも同じだった。

麻衣「もお！何やってるの？リースちゃん、コッチにおいでよ」

麻衣が、リースを連れて来ようとする。すると・・・

リース？「・・・・・・・・」

リースは、右手を差し出し手には、強力なエネルギーが、収縮されていった。

達哉「麻衣！？」

麻衣「えっ？」

達哉は瞬速で麻衣に追い付いたのと同時にリース？からエネルギー球が放たれた。

スガーン！

一同「達哉くん！？」

煙が晴れると無傷の二人の姿があった。

達哉「大丈夫か！？麻衣！」

麻衣「う・・・うん」

達哉「リース・・・何でこんな事を・・・」

リースの服装が変わった。

リース？「朝霧達哉。フィーナ・ファム・アーシュライト。それに・・・その他の婚約者」

翠「ちよっと！その他って、酷くない？」

菜月「翠！ツツコム所違う！」

菜月と翠が、漫才をやっている事を余所に、リース？は話し続けた。

リース？「私は、お前達が結ばれる事を認めない」

達哉「リース、何を・・・」

リース？「私は、これまで監視を続けてきた」

達哉「監視？俺達をずっと、見張っていたと言うのか。何の為にそんな・・・」

リース「これが、最後だ。フィーナ姫の事は、諦める」

達哉「そんな事、出来る訳がない！」

リース？「諦めないか・・・愚かな選択だというのが何故分からん？」

達哉「それはお前が決める事じゃない！！」

リース？「では、貴様を排除しよう。」

すると、さっきの衝撃でゴナゴナになったレンガ等が、宙に浮き達哉に襲い掛かった。

達哉「ハッ！」

達哉は瞬速の動きで軽々とかわす。

朝霧ラバース「達哉（お兄ちゃん）！？」

リース？「動くな」

朝霧ラバース「ッ！？」

リース？「私は、貴様達を傷付けるつもりは無い。朝霧達哉を排除すれば、目的は達成する」

フィーナ「そのように、言われて私達が、達哉を見殺しにするとでもおもったのですか？」

菜月「私達を、甘く見ないでよね！」

達哉「みんな！逃げるぞ！」

達哉は魔力弾を作り出し地面に叩き付けて砂煙を発生させてその場を逃げ出した。

その頃・・・

統夜「あの娘・・・リースが行きそうな所は知らないのか？」

エステル「分かりません・・・教会には住んでいたのですが・・・」

統夜はエステルをバハムートの後ろに乗せて走っていた。

統夜「繁華街とか・・・いそがかもしれないから・・・当たってみるか」

エステル「お願いします」

繁華街の方へ走らせていた。

公園の森の中・・・

さやか「嘘でしょ？どうしてリースちゃんが・・・」

達哉「恐らく・・・二重人格で月からの刺客じゃないかな」

フィーナ「達哉の言う通りね・・・」

達哉「チィ！」

達哉は皆の前に立ち防御魔法を展開する。

すると木の葉達が達哉達に襲いかかってきた。

達哉「みんな！逃げるんだ！」

菜月「でも、達哉は……」

達哉「俺は、大丈夫だから。早く！」

さやか「嫌よ！」

達哉「姉さん！」

さやか「私はリースちゃんに聞きたい事があるから」

達哉「でも……皆を危険に遭わせたく……」

麻衣「そうしたら、お兄ちゃんが危険だよ！」

翠「そうだよ。あの子の狙いは、朝霧くんなんだよ！」

達哉「だけど……」

フィーナ「達哉。みんなの気持ちは、変わらないわ」

朝霧ラバーズは、達哉を見つめる。

達哉「みんな……分かった」

達哉達は森を抜け広場へ出た。

しかし達哉以外は疲れ果てている。

達哉「リース！聞こえているんだろ！リース！」

達哉は、見えないリースに話し掛ける。

達哉「止めてくれ！どうして何だ？君が、こんな事をするなんて、信じられないんだ！」

さやか「リースちゃん……貴方はこんな事をするような子じゃないわ！」

達哉「リース！」

すると、空間が揺らぎそこから、リースが現れた。

リース？「私は、リースリットでは無い」

達哉「リースじゃ・・・無い？」

リース？「私の名は、ファイアッカ・・・」

フィーナ「ファイアッカ？」

ファイアッカ「私は、リースの体を借りて存在している」

言っている意味が分かっていたいなかった達哉達にリース・・・ファイアツカは続けた。

達哉「体を？君は、一体・・・」

ファイアツカ「かつて、月と地球で戦争があった。戦いは、熾烈を極め双方に甚大な被害と、そして、消えない悲しみを残した。残した筈だった」

ファイアツカの言っている事は、まるで、戦争を経験したような口調であった。

リース「知っているか？お前達は、戦争が終結した本当の理由を」
達哉「本当の・・・」

フィーナ「・・・理由？」

ファイアツカ「そうだ」

達哉「双方のトップが和平を・・・」

ファイアツカ「やはり・・・忘れてしまっていたのか。」

一同「えっ!？」

ファイアツカ「人は、忘れてしまう。悲しみ・・・苦しみ・・・何もかも。そして、また同じ過ちを繰り返す。だが、私は忘れない。私は・・・」

そして、ファイアツカは口を開いた。

ファイアツカ「私は、ロストテクノロジーの管理者であり・・・戦争で傷付いた人が生み出した思念体なのだから」

一同「ッ!？」

フィーナ「ロストテクノロジーの管理者・・・戦争で傷付いた人の・・・思念体？だから、あなたは、戦いが始まる前にそれを止めようと言っの？」

ファイアツカ「そう。それが、私の使命。しかし、今また、月の姫と地球人が結ばれて」

すると、リースが手を振ると風が起き、達哉達を襲う。

ファイアツカ「双方が、再び接近する事を私は、認めない!」

達哉「止めるファイアツカ!俺達は、戦争を起こしたりなんかしない!」

ファイアツカ「過ちは、必ず起こる。そう、あの時のように。再び・・・

・異世界からの来訪者・・・修羅が訪れる・・・」

達哉「修羅・・・?」

フィーナ「だからと言って、人を信じようとしないのでですか!」

達哉「フィーナ・・・」

ファイアツカ「私は、何度も裏切られてきた」

フィーナ「月と地球が、お互いを知ろうとすれば、相手を傷付けれる気持ちも無くなる」

フィーナが言った後二人の人影が現れた。

統夜「そう・・・俺とエステルが分かり合えたようにな」

エステル「統夜がいたからこそ私は変わった・・・」

統夜とエステルの二人だった。

ファイアツカ「理想論だ。それに、全ての者が、そなた達と同じな訳がない」

フィーナ「理想が、あるから未来を信じられるのよ！それに、人全てが、同じな訳がない！だから、お互いを知る必要が有るのよ！」

ファイアツカの言葉に統夜は怒った。

統夜「いい加減にしろよ！！この馬鹿！！」

ファイアツカ「馬鹿・・・だと・・・？」

統夜「ああ・・・テムエの妄想が正しいと本当に思っているのか？本当に達哉を消したらそれでいいと思ってるのか？どうなんだ？リース！！」

ファイアツカ「・・・・・・・・・・」

ファイアツカは黙ったままだった。

さやか「答えて・・・」

フィーナ、さやか、エステル「リース（ちゃん）！」

リース「ッ！？」

ファイアツカの中で、リースの心が、揺らいでいた。

ファイアツカ「（狼狽えるでは無い。リースリット！）」

リース「ッ！」

ファイアツカ「人と人が近付けば、必ず衝突する」

フィーナ「その通りよ。でもそれは、必ず乗り越えられる」

エステル「私と統夜がそうであったと同じ様に、月のみんなも乗り越えられる」

達哉「ッ！」

達哉は、今までの事を思い出していた。

達哉「そうだ。そうだよ！こんなのは、間違っている！」

ファイアツカ「……………」

達哉「君が……本当の平和を望むなら、人と一緒に歩み、困難にぶつかり、それでも、人を信じて進しか無い！そうやって行くしか無いんだ！」

ファイアツカ「……………」

すると、風が止んだ。

ファイアツカ「……………」

しかし、ファイアツカは、更に、手を翳す。

すると、レンガが崩れ、中に埋まっていた巨大なコードが生きてるかのように動く。

統夜「チツ！月牙天衝・防壁之陣！！」

心装を展開し月牙天衝の防壁版として達哉達を守り

統夜「九頭龍閃！！」

九つの斬撃で巨大なコードを全て斬り伏せた。

ファイアツカ「お前は……邪魔をするというのか……」

統夜「当たり前だ……友達を殺させるような真似をさせるか……俺が味わった事を彼女らに味わせたくない！！」

フィーナ達を見てそう言った。

ファイアツカ「だが私の使命は……」

統夜「させないぜ……」

統夜が瞬歩で近づきファイアツカの両腕を掴む。

ファイアツカ「離せ!!」

統夜「お前は過ちを繰り返し……歪ませたいのか!! 腐敗した管理局のように!!」

ファイアツカ「過ちを繰り返さない為に……これしかないのだ……」

?「(待つて)」

ファイアツカ「ッ!!」

すると、ファイアツカの中に居たリースが、ファイアツカに話し掛ける。

ファイアツカ「(リースリット……)」

リース「(もう止めて。ファイアツカ様)」

ファイアツカ「(何を言っても無駄だ。私は、朝霧達哉を排除する)」

リース「(これからもずっと、悲しみ続けるの?)」

ファイアツカ「(悲しむ? 私が?)」

リース「(ファイアツカ様は、悲惨な戦争を繰り返さないと言った。

それは、人を愛しているからだ。もう少し……もう少しだけ時間が欲しい。私は、ずっと、達哉達を見てきた。達哉達なら、きつ

と作り出す事が出来る……もう、ファイアツカ様がこんな事をしなくてもいいようなそんな世界を)」

統夜「リースもああ言ってるしどうだ?」

ファイアツカ「……私の使命は、変わらない!」

統夜「お前ねえ……」

ファイアツカ「だが・・・貴様達に猶予を与える」

達哉「猶予か・・・」

ファイアツカ「月で、カレン・クラヴィウスが拘束された」

さやか「カレンが？」

ファイーナ「まさか、私達の事で？」

ファイアツカ「・・・」

ファイアツカは、黙ったまま頷いた。

ファイアツカ「今、月と地球は、帰路に立っている。平和か戦争かの

一同「ッ！」

ファイーナ「そんな・・・」

ファイアツカ「悲しい戦争を繰り返さないのが、我が使命。忘れるな」

そう言つて、ファイアツカは、リースと変わった。

リース「ごめんなさい」

そう言つて、リースはその場を後にしようとした。

統夜「リース！」

統夜が呼び止めた。

統夜「何かあつたら俺の家に来い！相談するぜ」

リース「・・・」

リースはその場を後にした。

その後達哉は突然倒れてしまった。

朝霧ラバーズ「達哉（お兄ちゃん）！？」

統夜「心配するな・・・気を失ってるだけだ・・・ダイチとの戦いのダメージが残った状態で無茶しやがって・・・」

フィーナ「もう2度とあなたに無茶をさせたくない・・・」

そして、フィーナは月を見る。

フィーナ「行かなければ。私が」

麻衣「フィーナさん？」

フィーナ「みんな、達哉をお願い」

エステル「フィーナ様！・・・どちらへ？」

フィーナ「月に向かいます」

菜月「フィーナ1人で！？そんな無茶だよ！」

フィーナ「大丈夫。話し合いをしに行くだけだから。その間、達哉の事よろしくね」

そう言つて、フィーナは走り出した。

統夜「運ぼうか・・・」

達哉を背負い朝霧家へ向かった。

その後達哉を部屋に寝かせた。

統夜「で・・・行くのか？」

フィーナ「ええ・・・」

玄関を通ると何時もの服を着たフィーナがいた。

フィーナ「（あなたはきつと、私の事を怒るでしょうね。でも・・・」

」

フィーナは、達哉の頬を撫でる。

フィーナ「行くわ」

さやか「お送りしましょう」

フィーナ「ありがとう。さやか」

ミア「姫様、準備が整いました！」

すると、ミアが降りてくる。

フィーナ「ミア。あなたは、此処に残りなさい」

ミア「しかし・・・」

フィーナ「貴方には私達の帰るべき場所で待っていてほしいの・・・」

」

ミア「姫様・・・」

フィーナ「大丈夫よ。必ず、戻って来るわ」

ミア「・・・はい。お気をつけて」

麻衣「フィーナさん、もう行っちゃうんですか！統夜さんの話だと
もうすぐで、お兄ちゃんは・・・」

目に涙を溜めて麻衣が話す。

麻衣「ッ!？」

すると、フィーナは麻衣の鼻を摘む。

フィーナ「行ってきます。達哉の事、お願いね。麻衣」

麻衣「はい」

フィーナ「みんなも、お願いね」

菜月「任せてよ！」

翠「大丈夫！」

そして、フィーナとさやかは、空港まで向かって行った。

統夜「後は・・・準備をするだけかな」

バハムートに跨り起動させた。

エステル「何処へ行くのですか？」

統夜「学園だよ。ちよつとした大仕事を・・・ね」

エステル「大仕事・・・ですか？」

統夜「ああ・・・」

突然エステルが統夜の後ろに乗った。

エステル「私にも手伝わせてください」

統夜「人数が多い方が速く済む・・・頼むよ」

エステル「ありがとうございます」

そして学園へ走らせて行った。

これから起こそうとする事全てを知ってもらおう為の準備を・・・

第二十話『過ちは繰り返させない』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

カナ「ファイアツカの襲撃で倒れてしまった。達哉はどうなるのか分からないね」

カナ「そして月に戻ったフィーナは父であり王であるライオネスと話をした」

カナ「ライオネスは自分の過去を思い出す。そして目が覚めた達哉は統夜とカレンと共に月の歪みであるユルゲンを倒す為に・・・動き出す」

カナ「次回は『月世界への出撃』 テイクオフ」

第二十一話 『月世界への出撃』 (前書き)

スフィア王国に戻ったフィーナはスフィア王国の歪みを断ち切る事が出来るのか？

それは誰も分からない・・・

仁「HERO'S EPISODE第二十一話始まるよ」

第二十一話 『月世界への出撃』

第二十一話 『月世界への出撃』

数時間後、フィーナは月に戻った。

ユルゲン「お帰りなさいませ、フィーナ様。しかし、些か少し早いお帰りで、しかし私は、姫のご帰宅を心待ちにしておりますが」
フィーナ「志半ばでの帰国は、本意ではありませんが、父様に火急の用が出来たので」

ユルゲン「それはそれは・・・」

急いでいるフィーナを余所に、ユルゲンは気にしている様子は無かった。

ユルゲン「しかしながら、姫も長旅でお疲れでしょう。まずは、サロンでお茶でも・・・」

フィーナ「火急の用があると言いましたが」
ユルゲン「ッ！」

ユルゲンの誘いをフィーナは即答で断った。

ユルゲン「これは、失礼しました。」

ユルゲンは道を空け、フィーナは、王である父の元に向かった。
ユルゲンは、そんなフィーナを見続けていた。

ユルゲン「（こんな僅かな時間で何が、有ったと言うのだ？）」

そして、フィーナが居なくなると・・・

ユルゲン「アレの完全を急がせろ」

兵士「ハッ！」

ユルゲン「（まあ、いい。どんなに足掻こうと、私が王になることは決まっている。そして、王となり『禁忌の遺産』と『闇の力』で、地球人を滅ぼしてやる！）」

ライオネスの自室にフィーナが入って来た。

ライオネス「何用かフィーナ？帰国の報告は、受けてはいないが」
フィーナ「予期していたのではないのですか？カレンの件について」
ライオネス「？」

フィーナの問いにライオネスは、分かっていなかった。

フィーナ「（やはり、父様は、カレンが拘束されている事をご存知でない。となれば・・・）用向きは、カレンと同じ。そう言えば、分かってくれるでしょうか？」

ライオネス「地球人との婚姻の件か？何故、お前達はその若者に拘めるのか、他の星の平民で、しかも、婚約者が複数いる奴だぞ！」

フィーナ「生まれた星や身分や婚約者の数は、何の問題になりましようか。私達のパートナーには、朝霧達哉を於いて他にはおりません」

ライオネス「ッ！」

ライオネスは、今の言葉を聞いて、ある女性を思い出した。
しかし、直ぐに気を取り直す。

ライオネス「ユルゲンでは無く、その男こそが、伴侶に相応しいと

？」

フィーナは、静かに頷く。

フィーナ「彼となら、今の月と地球の緊迫した状態を打開し、絆を再生させ、双方に幸福な未来をもたらすでしょう」

フィーナの言葉は、続いた。

フィーナ「その手に、どんな困難が待っていても彼が共に居る限り、私は決して諦めません。彼を・・・達哉を愛していますから！」

暫く、2人は見つめ合う。

ライオネス「愛しき娘よ。お前が思っている程政治は、浅くなく。また、思っている以上に人の闇は深い。愛があれば、乗り切れる物では無く、むしろ愛すればこそ、苦しむ事もある。コレを見るが良い」

すると、ライオネスは、右肩を見せた。そこには、酷い古傷があった。

フィーナ「それは!？」

ライオネス「知つての通り、僕は、平民から王族へと迎え入れられた。女王の伴侶として相応しくなるよう努力してきたが、それでも暗殺の危機は一度や二度では無かった。影に日に当たりや風当たりは強く、それはセフィリアにも向けられた。内に敵を抱えたまま、セフィリアは国政にも、地球との交流にも尽力したが、ついにはその人道が故に、若くして・・・僕と結ばれなければ、セフィリアはもっと・・・」

身分の低い者が王になる事を良く思っていない人がいる事を含めて
フィーナに言った。

フィーナ「父様・・・」

フィーナは、ライオネスの言葉を聞きながら、涙を溜めていた。
ライオネス「王では無く、父として言おう。僕は、同じ苦しみをフ
イーナにも、味わって欲しく無いのだ」

フィーナ「・・・」

ライオネス「お前が、選んだのだ。良き若者なのだろう。だから、
尚更だ。愛が深ければ深い程、失った時の傷は深く、その苦しみは、
何時しか月と地球にも深刻な影響を及ぼすだろう」

フィーナ「ッ！」

フィーナは、先程のフィアツカとの騒動を思い出した。

フィアツカ「（達哉・・・）」

体を抱きしめ、涙を堪えるフィーナ。

ライオネス「久方振りに戻ったのだ。自室にて、今一つ冷静に考え
てみるのだ」

そして、フィーナは部屋を後にした。

フィーナが部屋を後にした後、ライオネスは、ビデオを見ていた。
映像にはフィーナに似た人物とカメラマンである高野が映っていた。

ライオネス「セフィリアよ。フィーナは驚く程、お前に似てきたぞ」

ライオネスは、1人呟いた。
そう、映って女性こそが、フィーナの母であり前女王、セフィリアであった。

ライオネス「どんな困難に当たろうと、決して諦めない・・・か。
そう言えば昔、似たような事を言ったのは誰だったかな？」

そう言っつてライオネスは、昔の事を思い出していた。

―回想・剣道場―

ライオネスは1人の女性と試合をしていた。

女性「やああつ！」

女性が、攻める。

ライオネス「ッ！」

しかし、それを捌くライオネス。
そして、女性が振り返ったと同時に面を入れる。
女性は、そのまま尻餅を付いた。

ライオネス「良い勝負だったね。」
女性「はい。ですが、次は負けません！」

その言葉を聞いたライオネス（昔）は、微笑み女性を起こした。
そして、女性が面を取る。

ライオネス「なあつ!？」

その顔を見たライオネスは、驚いた。
ライオネス「セ、セフィリア様！」

そう、勝負していた女性は、セフィリアであった。

セフィリア「今日こそ、勝てると思ったのに。」

ライオネス「し、知らぬ事とはいえ、失礼しました！」

ライオネスは、慌ただしく謝る。

セフィリア「同じ学院の生徒と言うのに、失礼ですわ？私は、あなたを存じ上げてるのに。」

少し、ふてくされた顔をするセフィリア。

ライオネス「そ、そのような意味で申し上げたのではございません。」

セフィリア「ウフフツ！冗談ですよ。また、お相手して下さいね。」

見るとそこには、笑顔の彼女がいた。

セフィリア「王宮ではもう、高野先生ぐらいしか私の相手は出来ませんから。」

ライオネス「／／／」

その笑顔に見とれていたライオネスであった。

学院廊下にてセフィリアは様々な男達と歩いていた。すると窓を眺めていたライオネスを見つける。

セフィリア「あっ！ライオネス！」

ライオネス「ッ！」

セフィリア「ウフフ」

セフィリアは、笑顔で手を振る。

ライオネス「あ・・・」

ライオネスは手を振り替えそうとしたが止めて一礼をした後、その場を後にした。

セフィリア「あ・・・もう」

そんなライオネスを見て、セフィリアは頬を膨らませた。

？「ん？」

その後ろで、帽子をかぶった男性がいた。

教師1「居たか！」

教師2「いや、こつちには

？「ッ!？」

すると、男性は鞭を取り出し、その場から逃げるように居なくなつた。

中庭にて・・・

生徒1「セフィリア様ー！」

生徒2「危ないですー！」

生徒3「降りて下さいー！」

中庭にある一本の木に、セフィリアは天辺まで登っていた。

セフィリア「ヤッホ〜！あつ。ライオネスー！」

そして、ベンチに座っていたライオネスを見つけ声を掛ける。

ライオネス「ん？」

ライオネスは、声がした方を見る。すると、木の天辺にいるセフィリアを見つけた。

ライオネス「ええっ！？」

すると、セフィリアが立っている枝が折れる。

セフィリア「キャアアアアアツ！」

ライオネス「ツ！？」

落ちるセフィリアを見たライオネスは、直ぐさま落下地点に行き、セフィリアを受け止める。

ライオネス「姫様。今後、こういった危険な事は、なさらぬように」

セフィリアを下ろして、ライオネスは言った。

そして、一礼をしてその場を後にする。

セフィリア「ライオネス・・・」

セフィリアは、ライオネスを見送る事しか出来なかった。

道中にてライオネスは顔を真っ赤にしながら歩いていた。

？「やるな。若いの」

声が見ると、そこには1人の年寄りと若者がいた。

ライオネス「あなたは・・・」

年寄り「褒美に良いものを見せてやるぞ。」

そう言つて、ビデオカメラを見せる。そこには、入浴中のセフィリアの映像であつた。

ライオネス「こ、こ、こ、これ、コレは!?!?!」

ライオネスは、再び顔を真っ赤にする。

年寄り「ダビングしたテープをプレゼントしてやるぞ」

若者が、テープを取り出す。

ライオネス「け、結構です!」

ライオネスは、走つて逃げていった。

年寄り「なんとゆう純情。助手、ダビングしたテープを奴の部屋に
ほおり込んでおけ!」

助手「はい、師匠!」

助手と呼ばれた若者は、元気に返事をした。

その近くの草村には、先程の帽子をかぶつた男性が、隠れていた。

男性「ふん」

教師「こつちに、逃げた筈だ!」

男性「なっ！」

そして、直ぐさま男性は、その場から逃げ出した。

劇場にてライオネスは、何故かセフィリアの生活が上映されている劇場に来ていた。

男性「良い顔で笑う姫さんだな。」

男性2「そうだな・・・」

突然、後ろから帽子をかぶった男性とマントをした男性が現れる。マントをした男性の顔は現在の統夜に似ていた。

ライオネス「君達は？」

男性「まあ、それはそれで、置いていて」

ライオネス「僕に何か用かい？」

男性2「お前は何故彼女・・・セフィリアに告白しない。分かり合おうとしない？」

男性「おいおい・・・ストレート過ぎ・・・ちよつとしたお節介をしたくなつてね。お前みたく何もしないで諦める奴が嫌いだね」

ライオネス「なっ！どうして、君にそんな事を言われなければいけないんだ？」

男性「だからお節介だつただる？」

ライオネス「変な男だな。君は」

男性「良く言われる」

そして、男も映像を見る。

男性「あの姫さんに惚れてるんだろ？早くとつつまかえないとどこか遠くに行つちまうぞ」

ライオネス「無理だよ」

即答で答えるライオネス。

ライオネス「身分が違う」

男性「何だ。それだけか」

ライオネス「え!？」

男の言葉にライオネスは、驚く。まさか、身分と言う理由が『ただ、そんだけ』で片付けてしまっているからだ。

男性「生まれた星が違うならともかく、手を伸ばせばそこに居るお姫様だろ?俺なら、その程度の困難で諦めたりしないね」

男性2「身分に囚われるな・・・お前の信じるべきものに従え」

そして、男性二人は立ち上がる。

男性「じゃあな」

男性2「頑張れよ・・・」

二人はその場を立ち去った。そして、ライオネスは二人を見送るしか出来なかった。

ライオネス「諦めない・・・そして僕の信じるべきもの・・・か」

そしてライオネスは、覚悟を決めたような顔をした。

過去を思い出していたライオネスは、自分の道を導いてくれた男を思い出した。

ライオネス「そうだ。彼らだ・・・何処の誰とも知らぬ学院の生徒・・・あれ以降、一度も姿を見せなかったが、どうしておるのか」

そして、ライオネスは、セフィリアが映っている画像を見る。

ライオネス「セフィリアよ。儂を恨んでおるのか？お前の夢の妨げになったばかりか、娘の夢も壊そうとしているこの儂を」

すると、扉が叩かれる音がする。

ユルゲン「私です。陛下」

扉を叩いた主は、ユルゲンであった。

そして、ユルゲンを入れたライオネスは、驚きの報告を聞く。

ライオネス「何だと！？カレンが！」

ユルゲン「静止する我が兵士を打ち倒し、戦闘機で逃走したそうです」

ライオネス「馬鹿な。カレンが・・・」

ユルゲン「フツ・・・」

ライオネスが、苦悩する中ユルゲンは、不適な笑みをした。

その頃・・・朝霧家では・・・

あの後、目覚めた達哉は、部屋の電気も付けないうまま、ベットに座っていた。

そこに、さやかを除くラバーズが入ってくる。

麻衣「お兄ちゃん……」

菜月「達哉！」

そして、菜月が近付く。

菜月「みんな、あんたの事心配してるんだからね。きっと、フィーナだって。」

達哉「ッ！」

フィーナの名を聞いた達哉は、険しい顔をする。

達哉「そんな事は、分かっている」

菜月「達哉？」

達哉「だから、フィーナは一人つきりで、月に帰ったんだ」

達哉の体は、震えていた。

達哉「菜月、俺はね……怒ってるんだ」

一同「えっ？」

達哉「ずっと、フィーナには言ってきた筈なのに！俺達は、家族だつて！1人で何でもしようとしなくて！周りを頼れつて！一緒に戦おうつて！なのに、結局……俺の声は全然フィーナには届いていなかったんだ。俺が……弱いから……俺に、フィーナを助けるだけの力が無いから！フィーナを助けられず……何が……『瑠璃の軍神』だ……」

?1「その通りです」

?2「そうだね」

?3「そんな事も分からなかったのか……」

一同「ッ！」

ドアには統夜とカレン、肩まである黒髪に翠の瞳をし整った顔立ちで黒いサングラスを掛けている人物の三人が立っていた。

達哉「統夜！それにカレンさんも・・・」

カレン「陛下への説得を不調に終わった事を先ず、お詫び申し上げます」

ミア「それじゃ・・・」

達哉「フィーナは・・・フィーナは今、どうしているんですか!？」

ビリー「簡単な自己紹介だけしておこう。僕はビリー・ヒューレー・フィーナ姫は監禁程度で自室にいる。危害は一切無いよ」

ビリーと呼ばれた男の言葉を聞き一同は安堵の笑みを零した。

翠「朝霧くんが、弱いつて？」

カレン「言葉の不足を許して下さい。達哉さん。あなたは弱い。ですが、それはフィーナ様も同じなのです」

達哉「えっ!」

菜月「フィーナが・・・」

カレンの言葉を聞いた一同は、驚きの顔をした。

菜月「フィーナも・・・弱い?」

統夜「そう・・・達哉は戦闘能力が高いが総合的に弱い・・・力と言うのはただ単に相手を倒すだけじゃない・・・」

カレン「統夜君の言葉通りと・・・あなた方は、言わば6人で1人。共にある事で、誰にも叶わぬ力を発揮します。先日の試験で私は確信しました」

達哉「6人で・・・1人・・・」

統夜「ああ・・・それを『絆の力』って呼ぶんだぜ」

カレン「なのに、私は、致命的なミスをしました。6人全員の謁見

が叶わぬ限り、何の意味もないと言つのに。達哉さん、皆さん。私と一緒に来てくれませんか？私は、反逆者の汚名を着せられ、皆さんの命も絶対の保証もありません。それでも、来て下さいますか？」麻衣「はい！」

菜月「行くに決まっていますよ！」

翠「私達は、6人で1人！」

達哉「ずっと、小さい時に、フィーナと約束したんです。今、やつとその約束を果たせます！行きます。月へ。今度こそ、俺からフィーナに合うために」

統夜「この娘も連れてってやりなよ」

統夜はミアに目を向けて言った。

ミア「私も・・・達哉さんの事が好きですから・・・そして・・・姫様のお世話係でもありますから」

ピリー「カレンちゃんの言うとおり・・・良い青年だ」

カレン「そうですね。それとちゃん付けは止めてください」

達哉「でも、姉さんは？それに、月までどうやって・・・」

統夜「んなもん・・・転移で行くんだよ」

達哉「その手があったか・・・」

統夜「おいおい・・・んじゃ・・・行くか」

玄関前には、さやか他に、菜月の家族が集まっていた。

統夜「さて・・・と・・・」

統夜は転移の準備を始めた。

仁「ガツンと、やって来い！達哉くん。皆」

左門「まあ、何だ。気を付けてな」

達哉「仁さん・・・親父つさん・・・」

統夜「行くぜ・・・達哉・・・月の歪みを破壊しによ!!」

達哉「ああ・・・再生・・・そして・・・変革させるんだ・・・」

統夜達は転移した。その様子をリースは、空から見ていた。

フィアツカ「（見届けるか？リースリットよ）」

リースの中に居るフィアツカが、話し掛ける。

フィアツカ「（未来を託した若者達の行く末を）」

リース「はい。フィアツカ様」

スフィア王国の格納庫に統夜と達哉、カレン、朝霧ラバーズが転移してきた。

カレン「此処は・・・第三ブロック？」

統夜「距離的に厳しいからな・・・」

達哉「でも、まずは、フィーナを探さないと」

カレン「此処からなら、近いです」

達哉「よし！それじゃ・・・」

統夜「アブソリユートエターナル!!」

達哉「心装・・・氷河月華!!」

統夜はデバイス、達哉は心装をそれぞれ展開した。

統夜「お前らを傷つけさせないぜ」

達哉「頼む!!」

達哉達は、フィーナの部屋に向かって、走っていた。すると・・・

兵士1「そこのお前達！止まれ！」

見回りをしていた兵士に見つかった。

達哉「ッ！」

達哉は、一気に加速して兵士の懐に入る。

兵士1「なっ！？」

達哉「すみません」

達哉は、兵士に峰打ちを入れた。

そして、兵士は倒れる。

達哉「ふう」

カレン「安心するのは、早いでしょう。恐らくコレで我々の事が知られたでしょう」

統夜「なら、急ぐしかないな」

達哉達は、再び走り出した。

玉座の間にはライオネスにユルゲン他、多数の貴族達がいた。

兵士2「報告します！」

貴族1「失礼な！今、会議中だぞ！」

兵士2「申し訳ありません。しかし、緊急の知らせです。」

ライオネス「何事だ？」

兵士「先程、第三ブロック付近にて、不審者を目撃したとの情報を得ました。」

一同が、ざわめき始める。

兵士2「更に、その中には、カレン・クラヴィウス殿も居たそうです」

ライオネス「何と！カレンが！？」

貴族2「あのカレン・クラヴィウスがだと！？」

貴族1「しかし、あ奴は、地球に出向したのでは……」

慌ただしくなる一同。

ライオネス「静まれ！」

ライオネスの一喝で、静かになる。

ライオネス「とにかく、あの者には聞きたい事が有る。出来るだけ、無傷で捕らえよ」

ユルゲン「しかし、陛下。彼女は、国の裏切り者。然るべき処置は、必要かと」

ライオネス「しかし……」

ユルゲン「恐らく、カレンと一緒に、不法侵入者も居ます。地球人の可能性も捨て切れません」

ライオネス「……そなたに、任せる」

ユルゲン「御意に（フツ。どうやって、侵入したかは知らんが、裏切り者には死を。そして、我が願いを叶える為に）」

フィーナの部屋に、ユルゲンが入ってきて、カレンが戻って来たとの報告を受ける。

フィーナ「カレンが…」

ユルゲン「はい。恐らく、彼等も。」

フィーナ「そんな…」

ユルゲン「あの者達が、どうやって侵入してきたのかは解りませんが、潜伏中のあの者達をあなたの名で投降させて頂きたい。さすれば、彼等の安全は、私が保証します。無論、手引きした罪も不問としましょう」

フィーナ「何を、企てるの？」

ユルゲン「未来の夫として、妻の憂いを断ち切るうとしてるんですよ」

フィーナ「クツ・・・」

ユルゲン「フフツ」

ユルゲンは、勝ち誇った顔をした。

フィーナ「（私は、一体どうすれば）」

すると、フィーナはある言葉を、思い出す。

統夜「（お前はお前の信じるべきものに従え・・・そしてお互いが決めればいい）」

フィーナ「ッ！」

それは過去に統夜がフィーナに言ったセリフだった。

フィーナ「（私は・・・ううん。私達は・・・）」

すると、フィーナの顔が変わる。

ユルゲン「(何だ?急に表情が……)」
フィーナ「(ありがとう……統夜。大切な事を思い出させてくれて)」

フィーナは、心の中で統夜にお礼を言う。

フィーナ「彼等の行動の責……私も負いましょう。そして、今一度、父様に私の気持ちを伝えます。達哉や、みんなと共に」

ユルゲン「いえ、フィーナ様にはもう暫く、この部屋でおくつろぎ頂く故」

フィーナ「それは、臣下を越えた文の発言よ」

ユルゲン「どの道、その気持ちは、陛下には届きません。いずれあなたも、私が正しい事に、理解して下さる筈」

そして、ユルゲンは部屋を出て行くとする。

ユルゲン「月と地球が、共に歩もうとする事は、不可能なのですよ」

ドア付近で立ち止まり、ユルゲンは言った。

フィーナ「いいえ。私は、父様を信じていますから。それに……月の歪みを断ち切ってみせます」

ユルゲン「クッ！」

そして、ユルゲンは部屋から出て行く。

ユルゲンは、ドアにロックを掛けた。

しかし、フィーナは落ち着いた表情であった。

フィーナ「高野先生。何時まで、そこにいらっしやるのですか?」

高野「なんじゃ。バレとったのか」

すると、天井から高野とその助手が現れる。

高野「そりやつ！」

助手「グハツ！」

高野は、天井から綺麗に降りたが、助手は着地に失敗した。

フィーナ「高野先生。やはり、カレンの側には…」

高野「ああ。『蒼穹の死神』と『瑠璃の軍神』にお嬢ちゃん達じゃな」

フィーナ「そうですか」

高野「いや〜。ようやく、フィーナ嬢ちゃんも動いてくれるか」

フィーナ「高野先生。私、達哉達と一緒に父様に会いに行きます。

月と地球の平和の為に」

高野「うん。助手！」

助手「はい。師匠！」

すると、助手は一本の剣を高野に渡す。

高野「よし…！」

そして、高野は剣を持ちながら膝を着いた。

高野「さあ。切り開かれよ。スフィア国王女フィーナ・ファム・アーシュライトよ！」

そして、フィーナは剣を受け取り、扉を切り裂く。

フィーナ「今、行くわ。達哉、みんな！」

そして、フィーナも動き出した。

その頃英都バーベナ学園にて・・・

樹「全く、零斗の奴。俺様にこんな作業をさせて・・・」

樹は、文句を言いながら作業を続ける。

樹「でも、コレを見たら、一騒動起きそうだな。」

樹の前には、巨大なモニターがあった。樹は、そのモニターに幾つものコードを付ける作業をしていた。

零斗「これでよしと・・・」

遊輔「んじゃ・・・皆を呼ぼうぜ」

零斗「ああ・・・（統夜・・・達哉・・・頑張れよ）」

遊輔と零斗は生徒達をグラウンドへ呼びに行った。

達哉達は、人目を避けながら移動をしていた。

カレン「人目を避けての移動は、此処で限界です。」

達哉「ビリーさんの情報だとフィーナは自室に居るんですよね？」

カレン「恐らくは・・・此方です」

そして、一同は移動を開始しようとする。

兵士1「ッ!」

すると、兵士達が現れる。

兵士1「見つけたぞ！地球人め！」

兵士2「やっちまえ！」

そして、兵士達が襲い掛かってきた。

統夜「ここは任せる・・・ターゲット・・・マルチロック・・・い
けえー！！」

兵士達をマルチロックしアブソリュートドラグーンを射出し全武装
の一斉発射であるハイマツトフルバーストで兵士達を気絶させた。

達哉「悪い！」

菜月「早く行こ！」

達哉「ああ」

達哉達は、走り出した。

リース「・・・・・・・・」

そして、その後ろにはリースが居た。

リースの後ろには、兵士達が倒れていた。

フィアッカ「（此処より先は、我等が立ち入る場では無い）」

フィアッカが、リースに話しかける。

リース「達哉・・・みんな・・・頑張つて」

リースは、走って行く達哉達の背中を見送った。

フィーナ達はユルゲンの後を追っていた。

フィーナ「急ぎましょう！ユルゲンの動きが気になります」

高野「こんな時は、本音を優先させてはどうじゃ？」

フィーナ「はい。私は、達哉に会いたい」

高野の質問に即答で返すが、走るのを止めないフィーナであった。

ライオネスは、ユルゲンの提案に耳を疑った。

ライオネス「艦隊を出撃させるだ！？」

ユルゲン「セフィリア様の治世以来、我々は地球に譲歩しすぎました。我々の本当の力を、今こそ見せ付ける時です」

一部の貴族達「オオオオオ！」

一部の貴族達が、ユルゲンの提案に賛成していた。

ライオネス「あくまでも、我々の意思を示すだけ。戦う訳では無いのだな？」

ユルゲン「勿論です」

ユルゲンの提案を渋々、了承するライオネスであった。

地球の大統領オフィスでは・・・

秘書「月が、動き出しました！」

大統領「宇宙軍艦隊を展開。全艦隊に通告。決して、此方からは撃たないように。」

?1「大丈夫だよ。彼等が、居るから」

大統領「しかし・・・」

?2「そうだけ。何せ、統夜殿が居るんだからな」

?1「その通りだとも。統ちゃんが居るから大丈夫」

大統領「神王様・・・魔王様・・・」

魔王「まっ。後は、信じるしかないね」

3人は、窓から空を見上げた。

魔王「（統ちゃん・・・死なないでくれよ・・・君には帰るべき場所と待っている人達がいるのだから・・・）」

スフィア王国の通路では・・・

カレン「もう間も無いです。達哉さん」

達哉「（フィーナ。もう直ぐ会える！）・・・ツ！」

すると、達哉達は走るのを止めて止まった。

フィーナ「・・・・・・・・」

達哉達の目の前には、フィーナ達が居た。

達哉「フィーナ・・・」

フィーナ「達哉・・・みんな・・・ツ!？」

すると、達哉はフィーナの鼻を掴む。

達哉「此処に来るまで、一杯考えたよ。一人で月に行った君に、怒ろうか呆れようか嘆こうか……」

そして、指を離す。

達哉「でも……やっと会えた！」

達哉は、喜びを顔に出した。

フィーナ「ッ！」

フィーナの目に、涙が溜まる。

フィーナ「達哉……達哉！」

そして、フィーナは達哉に抱き付く。

朝霧ラバース「フィーナ（さん、様）姫様！」

そして、ラバースもフィーナに近付いた。

達哉達は、玉座の間の前に立っていた。

高野「状況は、最悪じゃ。全ては、お前達に掛かっていると
いい」

達哉「みんな。離れるなよ」

朝霧ラバース「はい」

そして、達哉は心装を解く。

統夜「行つて来い！達哉。未来を切り開け……！」

達哉「ああ」

高野「行けい！皆の者！」

達哉達は扉を開いた。

月と地球の運命を賭けた対話が始まるうとしていた。

第二十一話『月世界への出撃』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

樹「ふい〜・・・作業が終わったのはいいけど・・・とんでも無い事にはなるよね」

樹「王座の前で達哉達は国王や貴族達を説得をしいい方向へ行くがある一人の男が本性を露わした」

樹「そして悪魔の兵器を出したが直ぐに抑えられたが・・・本当の切り札である『禁忌の遺産』を起動させる」

樹「今回は『禁忌の遺産』 テイクオフ」

第二十二話『禁忌の遺産』（前書き）

果たして月と地球は分かり合えるのか・・・

ファイナ「HERO'S EPISODE第二十二話始まるわ」

第二十二話『禁忌の遺産』

第二十二話『禁忌の遺産』

高野「上手くいくといいがの……」

統夜「まあな……あのさ……」

高野「何じゃ？」

統夜「月に『悪魔』って存在するの？」

高野「そんなもんおりやせんよ。それがどうかしたのか？」

統夜「いや……妙な胸騒ぎがしてさ……」

達哉達は、ライオネスが居る所まで歩いて行った。

フィーナ「お話しがあって参りました。」

ライオネス「謹慎の身でありながら話したと！」

フィーナ「はい。今が、月と地球の大事であればこそ。私達のお言葉をお聞き下さい。」

ライオネス「……その者が、カレンも認めたと云う男か？」

ライオネスは達哉を見る。

達哉「お初にお目に掛かります陛下。私は、朝霧達哉。フィーナの……」

フィーナ「私達のパートナーです！」

フィーナの言葉に、大臣達がざわめく。

大臣1「地球人が、パートナーだと!？」

大臣「姫には、ユルゲン殿が・・・」

高野「ボソツ（やれ。助手）」

高野が、皆に聞こえないくらいの声で呟いた。

その頃・・・

学院のグラウンドには、夜だとううのに生徒と教師で埋まっていた。すると、グラウンドに設置された巨大なモニターが達哉達を映し出した。これは、高野の助手が送り出している映像であった。

樹「さあ、みんな!今から、地球と月の存亡を賭けた大事な場面だよ!」

紅女史「おい、緑葉!これは、まさか!？」

樹「その通りだよ紅女史」

樹は、モニターを見る。

樹「達哉は今、とんでもない事をしようとしてるのさ!」

零斗「見せてくれよ・・・達哉・・・」

王座の間

フィーナ「私は今、月と地球が直面している未曾有の危機をなんとかしても回避したいと思います。その為に月艦隊の即時撤退及び連邦政府との和解。そして、両国の無条件でも国交正常化を提案します!」

大臣1「国交正常化ですと?」

大臣3「馬鹿な!」

フィーナ「難しい事では、ありません。お互いが、向き合い手を差し出す。ただ、それだけの事ではありませんか！」
ライオネス「この騒ぎを起こした一員たるお前達が、それを言うのか」

フィーナ「勿論。私達は、その責から逃れる事はしません」

達哉「両国の友好の為、生涯と身命を捧げる事こそ。私達の最大の責任と心得てます」

ライオネス「過去にも、同じ志を持った者が、幾人と居た。それでも交流が叶わなかったのは、理解しておろう」

フィーナ「・・・オイディプス戦争ですね」

ライオネス「不思議と昔の事を忘れる者も多い。だが、過去の傷跡に苦しみ忘れぬ者達も確かに居るのだ！両国の交流は慎重を期さなければ、新たな争いの火種ともなりかねない！我等は、同じ過ちを繰り返す訳にはいかんだ！」

統夜「そいつは違うぜ」

一同「ッ！」

いつの間にか統夜がラバーズの後ろに居た。

ライオネス「そなたは？」

統夜「俺は天川 統夜・・・月と地球の絆の再生を望む者だ」

ライオネス「何故、そなたは、そのように思うのだ？」

統夜「んなもん達哉がやってくれるさ・・・」

統夜は達哉の方を見る。

達哉「・・・・・・・・」

達哉は、無言の了承をする。

達哉「私達は、地球で1人の少女と出会いました。『人は忘れるからこそ同じ過ちを繰り返す』彼女は、そう言っていました」

フィーナ「月と地球が接近すれば、両者が激突し、再び争いが起きると」

達哉、フィーナ「でも、私達はそう思いません」

達哉「どれほど傷付き苦しむとも、傷は必ず癒えます。忘れるのでは無く、同じ過ちを繰り返さないよう乗り越える事で・・・」

フィーナ「過去は、変えられません。でも、希望に満ちた未来を作り上げる事は、出来ます！」

ライオネス「・・・・・・・・」

そんな2人を見たライオネスは、昔の自分達を思い出していた。

フィーナ「お願いです！過去を恐れるあまりに、未来を否定しないで下さい！」

ライオネス「何故、そこまでして地球との交流に未来を託す！その者を、パートナーとして迎えたい為か？」

フィーナ「いえ、それだけではありません」

フィーナは、手を胸に添えた。

フィーナ「遠く古に、我々の故郷であったあの蒼き星が・・・地球が愛おしいからです。幼い頃に達哉と出会い・・・そして、再び巡り会えて・・・町や学院には、心優しい人達が居て、私を見守り支え優しく包み、数々の素敵な思い出をくれた。そんな地球と・・・そこに住まう人々を私は、とても愛おしく思います」

バーベナ学園では・・・

学生達「オオオオオ！」

親衛隊「フィーナ様ー！！！」

グラウンドでは、かなりの盛り上がりをしていた。

樹「俺様、その言葉が聞けただけで、天国に行きそうだよ！」

麻弓「だったら、行かせてあげようか？」

フィーナ「この幸せを愛しい王国の皆にも知って欲しいのです。そして、素晴らしい未来を描いて欲しいのです」

ライオネス「それが、お前が地球で暮らし得た物か？」

フィーナ「はい。夢半ばにこの世を去った母様・・・その夢は、何時しか私の夢となりました。共に、夢を叶えたいパートナーやパートナーを支える者達と私は、月と地球の未来を切り開きたいのです！」

ライオネス「理想だな。そして、理想には常に敵が付きまとう物だ」
達哉「だからこそ、私達はこの場に参りました。夢見た未来を共に歩み戦い！そして、命に代えても、フィーナやみんなを護る為に！」
ライオネス「・・・」

達哉「だからこそお願いします。どうか、俺とフィーナ。そして、みんなの仲を認めて下さい！」

フィーナ「愛する者と生きる幸せをどうか許して下さい」

朝霧ラバーズ「お願いします！」

達哉達は、頭を下げた。

すると、拍手する者が1人居た。

ユルゲン「なかなか、楽しめました。ですが、茶番はこれまでにしましょう」

すると、ユルゲンが前に出て来た。

ユルゲン「陛下。フィーナ様が、これ以上毒されない以上我等はし
かるべき行動に出るべきかと」

ライオネス「黙っておれ！」

ユルゲン「いいえ」

ユルゲンは、ライオネスの言葉を無視した。

ユルゲン「これまでしてきた地球への生温い態度も……もはや限
界。この上は武力による制裁が必要かと」

一同「ッ!？」

すると、一部の大臣達がユルゲンに近付いた。

ライオネス「どうゆう事だ!ユルゲン!」

ユルゲン「今こそ、地球を滅ぼし……我等が、真の平和を手に入
れる時……と言う事ですよ」

大臣1「馬鹿を言え!そうなれば、地球側とて黙ってははいまい!」

大臣2「あの悲劇の戦争を繰り返すつもりか?今度こそ、双方が滅
びるぞ!」

ユルゲン「いや、我々にはコレがあります」

そう言つて、ユルゲンはとある物を見せた。しかしそれは、月と地
球にとって悪魔の姿であった。

ユルゲンが、見せた物はかつての戦争に使われた最悪の兵器……

『メテオホール』であった。

ライオネス「メテオホール!?建造を禁じられた悪魔の兵器が何故
!??」

ユルゲン「クリューゲル家の力を持つてすれば、内密に建造する事

など容易な事。だが、もう隠すつもりも無い！」

すると、兵士達が突入してくる。

そして、達哉達だけでは無く、ライオネス達までも拘束する。

ライオネス「ユルゲン！」

ユルゲンは、ライオネスに銃口を向ける。

ユルゲン「貴様等の戯れ言も此処までだ。素晴らしき未来が広がるのは、このユルゲンの前途のみよ！」

遂にユルゲンの本性が露わになった瞬間であった。

達哉達「ッ！」

ライオネス「自分が、何をしているのか分かっているのか？ユルゲンよ！」

ユルゲン「無論だ。平民上がりの王にかしづくだけでも屈辱だと言うのに。その娘は、愚かしくも地球との国交を望み・・・地球人をパートナーに迎え入れようとは・・・もう、我慢の限界だ」

麻衣「何故そこまで、地球を拒むのですか！」

ユルゲン「地球人の小娘には、分かるまい。常に、圧倒的な存在感で月の民を見下す・・・あの凍えるがごとき、蒼き星の恐怖を！」

菜月「でも、月の人にとつても地球は、故郷の筈でしょ？」

統夜「何故そうやって拒み・・・恐れ・・・分かり合おうとしない！！」

ユルゲン「ならば、何故戦争が起きた？互いが、得体の知れない物として恐れたからだ！」

フィーナ「それはきつと、勇気が無かったからよ」

ユルゲン「何？」

フィーナ「触れ合えば、暖かい血の通った人間だと地球が包み込むような温もりに満ちた星だと解るもの」

達哉「地球人だって、そうさ。月は何時も、ほのかな光りで見守ってくれてる。優しい星だと解っていた筈なのに」

フィーナ「だから、私達で成し遂げて見せる。誰もが、僅かな勇気を生み出せるように」

ユルゲン「フンツ！小娘が、生意気な口を！平民共に、支持されている貴様は、生かしておくつもりだったが、気が変わった」

すると、ユルゲンは銃口をフィーナに向ける。

ユルゲン「まあいい。全ての罪は、地球が被ってくれる」

ユルゲン「フンツ！」

高野「やれやれ、お前さんも不運じゃな。本来の用途とは違うが、役にたったわ。助手！」

助手「はい。師匠！」

すると、ユルゲン達の一部始終の映像が移しだされた。

ユルゲン「コ、コレは!？」

カレン「アナタの逆行行為が、全宇宙に筒抜けとゆう事ですよ。ユルゲン」

ユルゲン「ツ!？」

すると、カレンと助手が現れる。

カレン「今です！」

統夜、達哉「ああ!!！」

統夜達はユルゲンの部下に目掛けて瞬速で移動した。

部下達「ツ!!！」

統夜「悪いが・・・」
達哉「眠って貰います」

ユルゲンの部下達は、何もする事が出来ずに倒れて行った。

ユルゲン「そ、そんな馬鹿な!？」

ライオネス「カレン!」

カレン「遅れて申し訳ありません。陛下」

そして、カレンの部下達が来てユルゲン達を連行し始よとした時

ユルゲン「これで勝った気になるな!!」

統夜「見苦しいぞ・・・ユルゲン・・・」

カレン「頼りの切り札も、部下が抑えました。何が出来ると言つのですか?」

ユルゲン「貴様らに・・・『禁忌の遺産』の力を見せてやろう!!」
ライオネス「禁忌の遺産だと!？」

ユルゲンがドクロのマークがついている腕輪を掲げた。

ユルゲン「起動せよ!!ターンギャザーよ!!!!」

ユルゲンに光に包まれ背部に黒いパックが着いた銀色の強化装甲を纏った姿になった。

統夜「アーマードデバイス!？」

達哉「何なんだ・・・アレは・・・」

カレン「あれは一体・・・」

統夜達はユルゲンのデバイスを見て驚きを隠せずにいた。

ユルゲン「このアーマードデバイスはな！月のマウンテンサイクルから掘り出したものだ！！」

ライオネス「マウンテンサイクルで掘り出したものだと言うのか！？」

統夜「なあ・・・おっさん・・・禁忌の遺産やらマウンテンサイクルの事を教えてくれないか？」

ライオネス「手短に言おう・・・かつて戦争等に使われ強過ぎ・・・禁じられし・・・忌まわしき・・・武器やデバイスと呼ばれる兵器に当たるものだ・・・マウンテンサイクルはデバイスや兵器などが眠る『生きた遺跡』だ」

統夜「なるほどな・・・早く逃げた方がいいぜ・・・アンタら・・・」

統夜はライオネス達に言った。

ユルゲン「まずは貴様からだ！！」

右手にエネルギーを纏ってフィーナに攻撃を仕掛けようとしたが統夜が右手のパルマフィオキーナで対抗した。

フィーナ「統夜！？」

統夜「速く逃げる！！お前ら！！」

ユルゲン「ふんっ！！消える！！シャイニングフィンガー！！」

右手のパルマフィオキーナを使えないように破損した後統夜を吹き飛ばした。

その隙にラバーズやライオネス、カレン達は避難し始めた。

統夜「がっ・・・！？」

達哉「統夜！？テムエ！！」

心装を展開し装甲を斬ろうとしたが片手で防がれた。その後達哉を吹き飛ばした。

ユルゲン「貴様さえいなければ・・・私の計画は上手くいったものを！！」

統夜「貴様は・・・月人ではない・・・」

達哉「アンタは歪んでいる！！」

ユルゲン「ふんっ！死ぬ前に教えてやろう・・・このターンギャザーにはMIES（マキシマムインフィニティーエナジーシステム）が搭載されている！！貴様らに勝ち目はない！！」

背部からビームライフルとビームバズーカの二丁で統夜と達哉に狙いを絞り連射した。

二人は違い過ぎる火力にただ避けるしかなかった。

バーベナ学園では・・・

はやて「統夜・・・」

文乃「必ず・・・帰って来なさいよ・・・」

千世「お願い・・・勝って・・・」

希「帰って来て・・・」

エステル「神様・・・お願いします・・・統夜をお助けください・・・」

プリムラ「お兄ちゃん・・・帰って来てくれるよね？」

カナ「帰って来るよ・・・だから一緒に待とう」

統夜を愛する人がユルゲンと戦っている画面を見ながら祈っていた。

統夜「切り札を使うぜ・・・アブソリユートブラスター・・・」

アブソリユートブラスターを起動させた。

統夜「ドライバーコネクト・・・」

アブソリユートブラスター（ドライバーコネクト・・・イグニツシ
ヨン）

重戦車が追加装甲としてコネクトされ赤と青が混ざった白い重装甲
アーマーになった。

統夜「エターナルブラスター・・・」

アブソリユートザンバーを取り出し魔力と気力、霊力、蒼炎を収束
し始め居合いの構えをとった。

ユルゲン「何だか知らんが・・・終わりにしてやる・・・」

ユルゲンは掌からエネルギーを出しビームソードにし構えた。

統夜はユルゲンの方へ駆け抜けた。

統夜「蒼牙獅閃！！」

機動性を活かしユルゲンの腹部に一閃しダメージを与えたが・・・
装甲はみるみる内に新品の状態になった。

達哉「ば、馬鹿な・・・」

統夜「堅い装甲を斬った筈だ・・・」

ユルゲン「この装甲は月のルナチタニウムとナノスキンの組み合わせである……」

統夜「……自己修復機能……か……」

ユルゲンが纏っていた頭部、^{バイザー}両腕、両肩、胸部、背部、腰部、両足の9パーツを分離させていた。

ユルゲン「行け！！ブラディ・シージ！！」

ビームや弾等が飛んでくるオールレンジ攻撃を仕掛けた。

ユルゲンの空間認識能力のせいか完全に避けきれずに二人はダメージを負った。

統夜「こいつは……どうだ！！」

ブラスターバズーカを転送してもらい左手で持ち右手に並列合体させたアブソリュートライフル、アブソリュートドラグーンを射出し、ブラスターキャノン、ブラスタースキュラ、カリドウス、ブラスタースプリット、クスフィアスの一斉同時発射をユルゲンをロックオンした。

統夜「こいつもオマケだ！！オーシャンシステム起動！！」

アーマーの色が青と白が混ざった真紅の重装甲アーマーに変化し攻撃力と機動性、出力が上がった状態でハイマツトフルバーストを超えた一斉発射に高電圧を加えたものをユルゲンに喰らわせた。

直撃の後に大きな爆発が聞こえた。

高野「ちとやり過ぎじゃないか？」

統夜「はあ……はあ……」

オーシャンシステムを解除させていた。

達哉「やった……のか？」

統夜「分かん……これは……」

統夜の目にはドクロのマークがついている腕輪……待機状態のラインギャザーが落ちていた。

煙が晴れると多少ボロボロのユルゲンが立っていた。

統夜「どんだけ頑丈なんだよ……」

ユルゲン「やってくれたな……地球人……遊びは終わりだ!!
我が力……見せてやる!!」

ユルゲンの身体が光に包まれ地響きが起きた。

フィーナ「一体何が……」

光が収まるとユルゲンが背中から1対2翼の白い翼、下半身は四足の獣、右手に槍、左手に盾を装備した異形に変化した。

ライオネス「これは……」

統夜「『帰天』をしゃがったな……」

達哉「何だ……それは……?」

統夜「人が何らかの儀式で人外……悪魔の力を得るって事さ……」

達哉「そんな事が……」

統夜「MIESに耐えきれた理由も分かるってもんだ……」

もう一度オーシャンシステムを起動しアブソリユートサンバーを構

えた。

達哉は居合いの構えをとった。

ユルゲン「終わりだ!!」

口から収束砲を放ち二人は真つ向から立ち向かった。

統夜「うおおおおお!!」

達哉「はあああああ!!」

統夜はエナジーフィールドと共に防いでいたが密度が高いのか突破され達哉は防壁を張るが統夜と一緒に勢いよく吹き飛ばされた。吹き飛ばされたショックで達哉は意識を失った。

統夜「まだまだあ!!」

所々破損しダメージを負っているのにアブソリュートザンバーで攻撃しようとしたが左手の盾で防がれてしまった。

そして右手に持った槍で統夜を串刺しにし勢いよく壁にぶつけた。

ユルゲン「フハハハハハ!!」

王宮から離れている場所で

フィーナ「い、いやあああああ!!!!達哉あああ!!!!」

ミア「達哉さん?!」

麻衣「お兄ちゃん!」

菜月「達哉!」

さやか「達哉君?!」

翠「朝霧君!」

バーベナ学園では・・・

はやて「う、嘘や・・・統夜・・・あ・・・ああ・・・うあああ
あああ！！！！」

映像を見たはやてはガツクリと膝をついて涙を流して泣いていた。

鮮華「兄さああああん！！！！」

文乃「嘘よね・・・嘘だつて言つてよ！！！！」

千世「うああああん・・・統夜あああ！！！！」

希「・・・」

エステル「統夜あああ！！！！」

プリムラ「うああああん・・・お兄ちゃんが・・・お兄ちゃんが・・・」

カナ「嘘よ・・・ね」

はやてと同じく映像を見て鮮華達もそれぞれ泣いていた。

王宮では・・・

大破したエターナルブラスターが分離しそれぞれ待機状態になり統夜は意識を失った。

第二十二話『禁忌の遺産』（後書き）

今回のHERO'S EPISODEは

文乃「悪魔になったユルゲンの猛攻に万事休すの統夜と達哉・・・」

千世「その時二人の助っ人が乱入する」

希「でも・・・形勢は変わらない・・・」

エステル「その時占い師の言葉にあった『力の大妖』に目覚め・・・」

プリムラ「蒼きガーディアンデバイス・・・サーディオンを起動させる」

カナ「そして月の歪みであるユルゲンを倒す」

はやて「地球と月の絆の再生が始まる」

はやて、文乃、千世、希、エステル、プリムラ、カナ「今回は『再生』テイクオフ」

第二十三話『再生』（前書き）

遂に月と地球の決着がつく!!

統夜「HERO'S EPISODE第二十二話始まるぜ」

第二十三話『再生』

第二十三話『再生』

悪魔となったユルゲンは二人の元へ完全に止めを刺そうとしている時……炎が飛んできた。

ユルゲン「誰だ!!」

炎を放った相手に向かって叫んだ。

遊輔「俺達だ!!」

零斗「ちと……やり過ぎじゃねえのか? テメエ……」

遊輔と零斗だった。

二人はかなり怒っている。

ユルゲン「貴様が……あの時の礼をしてやろう!!」

翼をはばたかせ二人の所へ一瞬で移動し右手の槍で薙ぎ払おうとしたが……

遊輔「ぐっ……」

零斗「チィ……」

二槍と銃で防いでいたが分が悪い。

ユルゲン「貴様はそう簡単に死なれては困る……」

零斗「ああ……そうかい!!」

銃で撃ちユルゲンは左手の盾で防ぎ右手の槍の衝撃波を放とうとしたが遊輔の焰の斬撃で相殺された。

遊輔「悪魔の類だな」

零斗「しかも・・・上級か・・・最上級じゃないのか・・・マイティ真拳奥義！！カイザーウエーブ！！」

蒼い巨大なエネルギーの塊を放ち・・・

遊輔「紅蓮薙ぎ！！」

紅蓮の焰の斬撃をユルゲンの背中に移動して飛ばした。

ユルゲン「ふん・・・効かん！！」

ユルゲンにダメージは少ししか喰らわなかった。

遊輔「あんな化け物・・・どうする？」

零斗「そうだな・・・（統夜・・・ここで終わるお前じゃ無いだろ・・・見せてみる・・・お前の本当の『種族』の力を！！）」
ユルゲン「喰らえ・・・サンダガ！！」

上空から雷を降らせたが二人は辛うじて避けた。

遊輔「魔力も半端じゃない・・・」

零斗「何としてでも・・・倒すぞ。行くぜ！マイティ真拳奥義！ヒールロー召喚！！」

零斗が手を上に上げた瞬間銀色のオーロラが出現した。

その中から二人の少年が現れた。

ダイチ「ここは・・・何処だ？」

？「さあ？」

一人はダイチだがもう一人は髪がツンツンしている少年だった。

遊輔「ダイチは分かるが・・・あの少年は誰だ？」

たけし「俺は竜崎 たけしだ」

たけしという少年とダイチは遊輔達と合流した。

ユルゲン「地球人のガキ二人増えた所で何になる・・・」

たけし「うるせえ！この化け物野郎！地球人を舐めるな！超力変身！」

ダイチ「お前のような歪んだ野郎は気力使いであるダイチが成敗してやる！気力転身！オーラチェンジャー！」

たけしは両手に付いているパワーブレスのスイッチを起動させてオーレッド、ダイチは右手に付いているオーラギャザーのキーを展開させ、垂直に立てた左手のオーラスプレッダーに差し込んでリユウレンジャーという赤き戦士に変身した。

その後、遊輔と零斗、ダイチ、たけしの四人はユルゲンに攻撃を仕掛け戦い始めた。

その頃・・・

統夜「俺は・・・死んだのかな・・・」

統夜は精神世界にて彷徨っていた。

統夜「文乃・・・千世・・・希・・・エステル・・・プリムラ・・・カナ・・・そして・・・はやて・・・俺はどうすればいい？」
？「種族の力を解き放て・・・」

統夜の前に真紅の人影が現れた。

統夜「種族の力？」

？「そうだ・・・お前は知らないだろうが・・・一回だけ目覚めさせたことがある・・・」

統夜「一回だけだと？」

？「ああ・・・だがその形態はお前自身で確かめる・・・」

統夜「言われずとも分かっている・・・どうすればいいんだ？」

？「俺と戦い・・・そして勝て・・・そうすれば覚醒する・・・」

真紅の人影が統夜の姿に変わった。

その後統夜は実体化し真紅の人影も実体化した。

統夜「んじゃ・・・勝負しようぜ」

統夜は六本に分かれた合体剣を全て合体させた大剣を構えた。

真紅「ああ・・・俺を倒し乗り越え・・・覚醒しろ！！」

真紅は赤い合体剣を具現化させて大剣にして構えた。
そして二人はぶつかり合い剣劇が始まった。

統夜「はあああああ！！！！」

真紅「おおおおおお！！！！」

ドガガガガガ！キキキインツ！！

剣劇は真紅が勝ち統夜が吹き飛ばされた。

その後に真紅は足を振り上げ魔力や気力、霊力でも無い力を物理的な力に変換し統夜に追加ダメージを与えた。

真紅「これが種族・・・力の大妖・・・バンパイア・・・吸血鬼の力だ・・・お前が今まで生きてこれたのは吸血鬼のお陰だ・・・」

統夜「吸血鬼・・・だと？」

真紅「そうだ・・・吸血鬼の特徴は妖力がある事だ・・・妖力を力に変換する能力・・・強靱な肉体・・・治癒能力を持つ」

合体剣の刀身に妖力を込め・・・

真紅「紅牙天衝！！」

妖力で力に変換した月牙天衝を放ったが統夜は剣で受ける事をせず避けた。

真紅「いい判断だ・・・」

統夜「はあ！冥撃刀勢！！」

下へしゃがみ足払いした後、体を深く沈めた後、軸足を次々と切り替えながらの高速回転移動による強烈な連続斬りを浴びせた。

だが・・・真紅を斬ったのは残像であったためカウンターとして妖力の衝撃波を喰らってしまった。

統夜「くそっ・・・強い・・・」

真紅「妖力にも使いようがある・・・」

統夜「俺はあんな歪んだ野郎ユルゲンを倒さなきゃいけないんだ……」

真紅「それは何の為だ？」

統夜「月の歪みを破壊し地球と月の絆を再生の為だ」

真紅「人類を一つにする……いい心掛けだ……だが……」

合体剣に妖力を込め瞬歩で移動し瞬速の連続斬りを統夜に行いフィニッシュとして右脚に妖力を込め蹴り飛ばした。

統夜「ガハッ！……」

真紅「それだけでは駄目だ……今お前が大切にし……守りたいものは何だ？」

統夜「大切にし……守りたいもの……俺は……」

統夜は自分を大切にしてくれているはやてや文乃、千世、希、エステル、プリムラ、カナの顔を浮かんだ。

そして統夜は立ち上がり大切なものを守る事を思い出し表情が変わった。

真紅「ふっ……来い!!」

統夜「ああ!!」

統夜は真紅の斬撃についてきたのか互角になった。

統夜「一番抜けてたぜ……歪んだ世界を破壊する事だけでは無く……大切な人達を守り抜く事だ」

真紅「中々やるな!」

統夜は刀身に魔力と気力を収束し始め

統夜「幻夢零!!」

合体剣から超巨大な衝撃波を2段重ねで放ち真紅に直撃させた。

真紅「ぐふっ……」

統夜「おおおお!!!蒼牙天衝!!!」

蒼炎の月牙天衝を追加攻撃をして放った。

真紅「くっ……本当の強さを見せたか……」

統夜「思い出させてくれてありがとう……」

真紅「気にするな……俺達は一心同体……主であるお前に教える義務がある……」

統夜「最後の1撃で決着を着けないか？」

真紅「お互いが全ての力を全てぶつけた方が勝ち……か……い
いだろう……」

2人はお互いの力を頂点まで高めていった。

統夜は合体剣に魔力と気力、霊力、蒼炎、雷を収束し……

真紅は合体剣に魔力と気力、霊力、妖力、蒼炎、雷を収束させた。

二人は収束した後駆け抜けた。

統夜、真紅「はああああー!!!」

2人は最後の1閃を同時に放ち……

統夜、真紅「……」

背を向けたままの状態になった。

勝負は……

統夜「くっ……」

片膝をつく統夜……

真紅「ふっ……カハッ!!?」

血を吐き、倒れる真紅……

統夜「俺の勝ちだ」

真紅「見事だ……これなら完全に『吸血鬼』の力が扱える……」

統夜「お前……」

真紅「お前は俺との戦いで大切な事を思い出した……誰かを守る事こそ……本当の強さだ……歪みを破壊する事も大事だが……もつと大事なことである誰かを守る事を忘れるな……」

統夜「吸血鬼……」

真紅「頑張れよ……あと……の……り……ん……ぞ……」

その言葉を最後に真紅は消えていき統夜の中へと入っていった。

統夜「ありがとう……もう一人の俺……」

真紅に礼を言っ立ち上がった。

統夜「待ってるよ……ユルゲン……」

それを最後に統夜は現実世界へ戻った。

その頃……

遊輔「ぐっ……」

零斗「防御だけは堅いな……」

ダイチ「あいつは化け物かよ……」

たけし「反則だぜ……」

ユルゲン「ククク……もうお終いか？なら楽にしてやるぞ……」

地球人共！！」

遊輔達は苦戦していた。

ユルゲンが魔力を収束しようとした瞬間顔面に誰かの蹴りが入り吹き飛んだ。

たけし「えっ……」

零斗「遅いぜ……この馬鹿が……」

統夜「悪い悪い。ちよつと昼寝したら遅くなった……」

蹴りを入れたのはさっきまで倒れていた統夜だった。

ユルゲン「この死に損ないが！！」

統夜「あいにく俺は大切な人達がいる……二度も墓穴に入ってた

まるか……見せてやるぜ……ユルゲン……『本当の化け物』

の力をな！！」

バーベナ学園では……

はやて「統夜……生きてた……良かった……本当に良かった……」

……」

文乃「うん……だけど……」

千世「本当の化け物の力って……」

エステル「まさか・・・力の大妖じゃないでしょうか？」
はやて「どういう事や？」
エステル「詳しくは分かりませんが統夜を占った占い師が口にしてた言葉です」

統夜が生きてた事に喜びを見せたが発言した本物の化け物の力に動揺してしまった。

統夜「これが化け物の力・・・吸血鬼の力だ！！はあああああ！！！！」

徐々に魔力と気力、霊力、新たな力である妖力が解放され地響きが起きた。

すると統夜の髪の色が銀髪に変化し瞳の瞳孔が縦になり瞳の色が真紅に変化した姿になった。

フィーナ「あ、アレは・・・一体・・・」

麻衣「吸血鬼・・・」

ミア「凄すぎます・・・」

菜月「あれが本当の天川君・・・」

さやか「凄い・・・」

翠「凄いしか言葉に出来ない・・・」

朝霧ラバーズは統夜の姿を見て驚いた。

ライオネス「カレン・・・吸血鬼は存在してたんだな・・・」
カレン「そのようですね・・・」
高野「ほう・・・」

ライオネス達も驚きを隠せずにいる。

零斗「すげえ……」

遊輔「吸血鬼……（やはり統夜も……）」

たけし「カッコいい……」

ダイチ「威圧感を感じるぜ」

近くにいた零斗達四人も驚きを隠せずにいる。

ユルゲン「（ば、馬鹿な……）」

統夜「吸血鬼だけじゃないぜ……今の俺なら扱える……」

蒼い剣十字架のネックレスを手にして……

統夜「集いし願いが……新たに輝く星となる……光さす道となれ……起動せよ！！サーディオン！！」

刀身が蒼く輝き柄が黒色の大剣に変化した。

ユルゲン「図に乗るな！！地球人がああああ！！！！」

統夜はサーディオンの刀身に妖力を込め左手にある盾ごと斬った。

統夜「何故地球と月の絆の再生を邪魔をする……」

ユルゲン「決まっている……圧倒的な存在感で月の民を見下しているからだ！！」

統夜「そうか……その傲慢を……破壊する！！」

ユルゲン「抜かせえええええ！！！！」

右手に持っている槍で攻撃したがサーディオンの一閃で破壊された。

その後にユルゲンの顔面に妖力の籠った蹴りで吹き飛ばした。

統夜「お前は強い……だが……本当に大切な事を見失っているお前では……勝てない」

サーディオンの刀身に四力（魔力と気力、霊力、妖力）を込め赤く染めた。

その後にサークルの中に蝙蝠が描かれた魔法陣を展開しユルゲンを拘束し始めた。

ユルゲン「ぐっ……何故とれん!!」

そして駆け抜けユルゲンに近づき……

統夜「ブラッドスラッシュ!!」

胴体に強力な一閃をした。

ユルゲン「ば、馬鹿……な……」

ユルゲンはそのまま倒れてしまった。

倒れたシヨックなのか悪魔の力は完全に無くなり人間の状態に戻った。

達哉「や、やったな……統夜……」

今気が付いた達哉はゆっくりと起き上がった。

統夜「ふう……」

吸血鬼化を解除した。サーディオンを待機状態に戻した。
その後、カレンが部下に命じてユルゲンを連行した。

高野「お見事じゃぞ・・・英雄殿」

統夜「は？英雄・・・まさか・・・」

高野「そうじゃ・・・お前さんの力は全宇宙に見せてユルゲンを倒してしまった」

統夜「覚悟はしてたんだけどね・・・」

後悔している事はない様子で言った。

ライオネス「天川 統夜君・・・スフィア王国を救ってくれてありがとう・・・」

？「（流石は『冥界』きつての最強である『三大冥王』の内の二人の間に出来た青年か・・・）懐かしい奴等がいるな」

突然謎の男が王宮に入ってきた。

達哉「なっ!？」

麻衣「えっ!？」

さやか「あなたは!？」

ライオネス「そなたは!？」

この4人は、声の主と正体を知っていた。

達哉「親父!？」

麻衣「お義父さん!？」

さやか「千春さん!？」

そう。その男は達哉と麻衣の父親である朝霧 千春であった。

千春「久しぶりだな」

達哉「どうして、親父が・・・」

千春「いや・・・遺跡を冒険したら異世界であるミッドチルダへ飛ばされてしまったな。親切な魔法使いに手伝ってここに帰ってこれた」

ミッドチルダに飛ばされていたのだった・・・

ライオネス「おお。そなたは・・・」

千春「ん？ライオネス！久しぶりだな。立派に王様やってるか？」

麻衣「え！？お義父さん、ライオネス陛下と知り合いだったの!？」

千春「ちよいと、昔にお節介をな」

零斗「和んでる最中で悪いけど・・・」

達哉「ああ・・・俺らマジでやばい・・・」

その後統夜達はスフィア王国の病院内で入院した。

入院してから二日が経った。

統夜「終わった・・・いや・・・始まりだ・・・」

すると部屋のドアが開きビリーが入って来た。

ビリー「すっかり良くなっているようだね」

統夜「まあな・・・何か用か？伝説のデバイスマスター・・・ビリー・ヒューレーさん」

ビリー「知っていたのかい・・・君にプレゼントだ」

タッチパネル式の蒼い携帯電話と蒼い龍が描かれた黒いカード、ドクロのマークがついている腕輪を渡した。

統夜「まさか・・・アブソリュートエターナルの改良型・・・なのか？」

ビリー「そうだよ。今の君なら扱える様に大幅に改造したから」

統夜「ありがとう・・・」

ビリー「気にしない気にしない」

すると待機状態のターンギヤザーが光り出し蒼い十字架が描かれた腕輪に変化した。

ビリー「ほうほう・・・君用に進化したようだ・・・興味深い・・・」

統夜「こいつは・・・ターンギヤザーじゃねえ・・・こいつは蒼き牙・・・『セイクリッドファンゲ』だ」

ビリー「いい名前だ・・・アブソリュートエターナルの改良発展型は『フォーチュンエターナル』、アブソリュートブラスターは『フォーチュンブラスター』だからよろしく」

統夜「凄いものになってるんだろぅな・・・」

ビリー「さて・・・僕はお暇するよ」

ビリーは部屋から出た。

その後にはやてと文乃、千世、希、エステル、プリムラ、カナが入って来た。

統夜「おお・・・スフィア王国までよく来れたな」

文乃「何が・・・」
おお・・・スフィア王国までよく来れたな」よ

！！」

千世「私達・・・見てたのよ・・・」

はやて「無茶をして・・・死にかけて・・・」

エステル「吸血鬼というものに変化して・・・」

プリムラ「死んだかと思ったよ」

カナ「全くよ・・・」

統夜「本当にごめん・・・」

はやて達に謝罪した。

はやて「でも・・・一番驚いてるのは統夜が吸血鬼やという事や・・・」

統夜「地球人でも月人・・・神族、魔族じゃないしな。怖いだろ？」

エステル「怖くありませんね」

はやて「全く怖くないで」

文乃「アンタが吸血鬼でも怖くもないわ」

千世「私の下僕なのだから怖くないわよ」

希「にやあ・・・吸血鬼でも統夜は統夜・・・」

プリムラ「お兄ちゃんが吸血鬼でも怖くないし」

カナ「人外な所を見ても驚かないし」

統夜「皆・・・ありがとう」

自分を好きになってくれた人達に感謝していた。

はやて「終わったな・・・」

統夜「何を言ってるやがる・・・はやて・・・終わりじゃねえ・・・始まりだ」

エステル「そうですね。月と地球の絆の再生が始まります」

統夜「だが俺はまだ戦う事を止めんぞ」

文乃「管理局の闇を破壊するんでしょ？アンタの事だから・・・」

統夜「ああ・・・速く終結させたいものだ・・・誰が君達を連れて来たんだ？」

プリムラ「魔王」

プリムラが即答した。

統夜「あの親馬鹿二号は・・・ま、いつか・・・」

カナ「統夜はいつ退院なの？」

統夜「明日だ。迎え頼むわ。零斗や遊輔、ダイチの三人も同じく明日で退院だから・・・達哉はちと掛る」

エステル「分かりました」

そして翌朝になり統夜達は地球へ帰った。

月と地球の絆を再生させ一つになるのは近い内に実現するであろう。

第二十三話『再生』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

はやて「ようやく終わったな・・・地球と月の争いが・・・」

はやて「時が過ぎ・・・二年生になろうとした時統夜に撫子先生から文月学園へ行くように言われた・・・って何でや!？」

はやて「裏にはバ・ベナ学園の理事長と文月学園の学園長と同意であったため断れなかった。一体何が目的やろう・・・」

はやて「次回は『文月学園』テイクオフ」

第二十四話『文月学園』（前書き）

統夜は新たなフラグを立てる・・・

統夜「おい!？」

ダイチ「いいんじゃないか」

たけし「そうだよ。統夜さん」

遊輔「HERO'S EPISODE第二十四話始まるぞ」

第二十四話『文月学園』

第二十四話『文月学園』

ユルゲンとの戦いが終えて数か月が経ったある日・・・

統夜「・・・・・・・・」

バーベナ学園とは違う学園の教室の前に来ていた。

統夜「（文月学園・・・か・・・）」

それは今から約二週間前の事だった。

統夜「転校・・・か？」

紅女史「ああ・・・この理事長とお前が転校する学校の学園長と話があつてな・・・」

紅女史から職員室に呼び出されていた。

統夜「何故俺なんだ？」

紅女史「お前は・・・今の立場を分かっているか？」

統夜「月と地球を救った英雄・・・？」

紅女史「ああ・・・あちらの学園長がイメージアップになるかもしれんって考えがあつた・・・」

統夜「はあ・・・それって断る事出来ないよね？」

紅女史「当たり前だ・・・学園だけじゃなくあちらの学園にも多大

な迷惑になる」

統夜は断ろうとしたが紅女史が念を押して釘をさした。学園のトップが話し合った結果であるのか断れなかった。

紅女史「あつちに行く制服と教科書、行くクラスは後日郵送されるから・・・迷惑を掛けるなよ」

統夜「はい」

最後に自由気ままな統夜に釘をさした。

そして現在に至る。

統夜「（Aクラスか・・・）」

先生「では・・・転校生を紹介しますので入って来てください」

そして先生らしき人物の声が聞こえたので統夜はドアを開いた。開けて中を見ると大型スクリーン（電子黒板）、リクライニングシート、システムデスク等が設置されており教室とは思えない設備を見た瞬間廊下へ戻り扉を閉めた。

統夜「すみません・・・教室間違えました。Aクラスって何処か教えてくれない？高橋先生」

高橋先生「ここで合ってます。ですから入って来てください」

統夜「えっ・・・マジかよ・・・」

再度教室に入った。

高橋先生「皆さん・・・今日から私達Aクラスに転校してきた・・・」

統夜「お、おい！！ちよつと！！？」

屋上へ連れて行かれた。

統夜「一体・・・何の用だよ・・・」

？「久し振りね・・・統夜」

茶髪の少女が統夜にそう言った。

統夜「久し振り・・・？もしかして・・・木下 優子か？！いやゝ
久し振りだなゝ」

木下 優子と呼ばれた少女に嬉しそうな感じで言った。

優子「久し振りね・・・」

統夜「そうだな・・・近い内にはやてと文乃、秀吉と一緒に遊びに行かないか？」

優子「突然ね・・・考えておくわ・・・はやてと文乃とは久し振りに会うから・・・一つだけ聞かせていい？」

統夜「構わないぜ」

優子「アンタ・・・何で・・・あんな事をしたの？スフィア王国で・・・」

優子が突然震えだし今にも泣きそうな感じで言った。

無理も無い高野と助手が放送していたものを全員が見ているのだから・・・

統夜「月の歪みを破壊する為と・・・大切な者達を守る為に戦った・・・」

優子「貴方が・・・瀕死になった時・・・おかしくなりそうだった・・・夢なら醒めてほしかったと・・・」

統夜「優子・・・」

優子「でも・・・生きてて・・・本当に・・・良かった・・・」

優子は統夜の胸に顔を埋めるように静かに泣いた。

統夜は優しく優子を抱きしめた。

統夜「（泣き虫のとこだけ変わらないな・・・）教室へ戻ろうか？」

優子「うん」

優子は泣き止み統夜と一緒に教室へ戻った。

その後二人はクラス一同からどんな関係なのか質問攻めになった。

二人の返答は・・・

統夜、優子「幼馴染だ（よ）！」

そう答えた。

統夜「試験召喚戦争？」

優子「ここ文月学園独自のものよ」

統夜「要するにテストの点数で戦うもんだろ？」

優子「その通りよ。戦い方は『召喚獣』を用いて戦うの」

昼休みになり一緒に昼ご飯を食べながら文月学園のシステムを教え
ていた。

統夜「魔具か何かを使うのか？」

優子「化学とオカルトと偶然によって完成した『試験召喚システム』

によって召喚されるの。召喚者をデフォルメした姿の分身が召喚獣になるの」

統夜「そしてテストの点数はHPとなり・・・それが0点になると終わるようになっていくのか・・・戦闘システムは大体分かった」

優子「教師の展開する『召喚フィールド』でしか召喚出来ない。そして召喚獣を呼ぶ時は『試獣召喚』『サモン』よ。何か分からない事ってある？」

統夜「召喚獣って物理的な干渉とかあるのか？」

優子「あるわよ。でもそれは観察処分者と先生達にしか無いわ。言い忘れてたけどテストの教科は現代国語、古典、数学、物理、化学、日本史、世界史、現代社会、英語、保健体育の10教科に加えそれらの合計した「総合教科」の11教科が対象よ」

統夜「なるほど・・・試験召喚システムに対応した学力試験か・・・」

優子「でも通常のテストとは異なって点数上限が存在しなく、時間内であれば無制限に問題を解くことが出来る。成績優秀者の目安としては『1科目につき400点以上』が基本的な事になってるから」

統夜「それなら面白いよな」

優子「統夜の事だから代表クラス・・・ううん・・・それすら凌駕しそうな点数を叩き出しそうよね・・・」

統夜「代表って霧島 翔子の事か？」

違う場所で食べている翔子を見てそう言った。

優子「そうよ。貴方って・・・勉強とか得意そうだし・・・Aクラスのスの切り札にもなるわ」

統夜「おいおい・・・召喚獣の操作技術がものを言わせる時だつてあるんだ・・・あんまし点数に過信するもんじゃない」

優子「そうだったわね・・・ごめんなさい・・・」

統夜「召喚獣の操作技術と高い点数の二つがあつてこそ発揮する・・・」

・俺は操作技術はまだまだだ・・・だが・・・」
優子「操作技術を最高のものにする・・・でしょ？」
統夜「その通り」

昼ご飯を食べ終え次の授業の準備をした。

統夜はリクライニングシートで昼寝をしようとしたが優子に速攻で叩き起された。

優子には逆らえず準備をし始めた。

吸血鬼の統夜でもはやたと文乃、優子、秀吉の幼馴染には勝てないのである。

統夜「昼飯食つたら必ず昼寝はする派なのにな・・・」

優子「だからって寝ないの・・・学業や運動が優秀なのに・・・はあ・・・ほら・・・さつさとやる」

母親にどやされる息子みたいな光景に見えたのは言うまでも無い。

？「あはは・・・優子が母親みたいだね」

翔子「羨ましい・・・」

？「代表？」

翔子「私も・・・雄二とああいう風にやってみたい・・・」

？「ああ・・・なるほど」

緑のベリーショートでボーイッシュな容姿の少女と翔子が二人のやり取りを見ていた。

翔子「愛子・・・私達も急がないと・・・」

愛子「うん。そうだね」

愛子と呼ばれた少女と翔子も次の授業の準備を始めた。

彼はここで新たな仲間達との絆を結び管理局の闇という名の歪みを破壊する・・・

第二十四話『文月学園』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

秀吉「文月学園に統夜が転校してくるとは・・・驚きじゃのう・・・

」

秀吉「何故か明久は統夜の事を知っておるのじゃろうか・・・」

秀吉「次回は『Fクラスへようこそ』テイクオフじゃ」

第二十五話『Fクラスへようこそ』（前書き）

統夜「なあ……アンタは十字架を模したトンファーとか使わないのか？」

翔子「使う……雄二が浮気した時に……」

統夜「なら一回使ってみなよ」

トンファーを翔子に渡した瞬間……

翔子「アステロイドビジョン!!」

三体に分身しながら走り込んだ。

統夜「ええ!?!」

瑞希「HERO'S EPISODE第二十五話始まります」

第二十五話『Fクラスへようこそ』

第二十五話『Fクラスへようこそ』

統夜「よく寝た・・・」

上半身を起こし背伸びをし朝日を眺めていた。
自分の横に目を向けて

統夜「はやて・・・朝だぞ」

はやて「ん・・・」

日常の如く自分の横で寝ているはやてを起こしていた。

統夜「(慣れつつ怖いよな・・・)」

はやて「おはよう。統夜」

統夜「おはよう。はやて」

二人は起きてそれぞれ顔を洗い、朝食の用意をしていた。

はやて「文月学園はどうや？」

統夜「バーベナとは大違いだ・・・あそこの教室の設備は半端じゃないぜ・・・」

はやて「例えば？」

統夜「大きな電子黒板やリクライニングシート、システムデスク・・・個人用に冷蔵庫やノートパソコンとかが支給される・・・」
はやて「高級ホテルやないよね？」

本当に教室かと驚いたはやてだった。
そりゃそうだ・・・普通なら黒板とチョーク、普通の机と椅子のセ
ットなのだから・・・

鮮華「ドツキリじゃありませんよね？」

プリムラ「ホテルしか言い表せないよね・・・」

カナ「うんうん・・・」

統夜「俺だって疑ったよ・・・まあ・・・優子がいたから助かった
けど・・・」

はやて「優子って木下 優子？」

統夜「ああ。Aクラスに所属しているよ」

はやて「優子ちゃん・・・元気にしてるかなあ・・・」

統夜「元気にしてるよ」

朝食を食べ終え鞆を持って玄関から家を出た。

はやて「統夜・・・」

統夜「何だ？」

はやて「フラグ立てはあかんよ？」

統夜「おいおい・・・優等生と立つ訳無いだろ・・・んじゃ行って
くる」

はやて「行ってらっしゃい」

自分の愛機であるバハムートに乗って文月学園へ走り出した。
家から文月学園の距離はバーベナより少し長い為バイクで登校して
いる。

統夜「ひゅ・・・やっぱりバハムートの速さは病みつきになるぜ」

行く途中途中で文月学園の生徒を見掛けたが敢えて気にせず走り出

した。

統夜を見掛けた生徒達は驚いていたのは言うまでも無かった。

統夜「ライディング登校はスリルがあつていいよな」

文月学園に着き駐輪場にバハムート置き移動しようとした時・・・

？「天川・・・貴様・・・バイクで登校をしていたのか？」

スーツを着た男性教師が統夜の前に現れた。

統夜「ああ。そうだけ。鉄人・・・西村」

西村「先生が抜けているぞ！」

統夜「あゝ・・・そうでしたね。西村先生」

西村先生と呼ばれた男性の質問に飄々と答えていた。

普通なら青ざめ冷汗をかいて黙ってしまうのだが統夜だけは違いのほほん且つ飄々とした感じで答えていた。

西村「月と地球を救った英雄として自覚を持つてほしいがな・・・」

統夜「生憎・・・俺は自由気ままにやる方なんでね」

西村「吉井といい・・・坂本といい・・・何故問題児が増える？」

鉄人の言葉を聞いた瞬間統夜は質問をした。

統夜「吉井って・・・吉井 明久の事か？」

西村「そうだが・・・知り合いか？」

統夜「ああ・・・親友であり・・・同志だ・・・」

西村「そうか・・・バイクでの登校だが・・・特別に許可をしてやってもいいぞ」

統夜「マジで？」

西村「条件は補習と召喚獣の基本操作を徹底的にさせてやる」

統夜「そりゃありがたいこつて……」

鉄人に礼を言つて教室へ向つた。

統夜「おはよ〜さ〜ん」

優子「おはよう。統夜。今日、バイクで登校してたでしょ？」

統夜「まあな……もしかして……不味い？」

優子「不味いに決まつてるでしょ！」

統夜「安心しろ……あのバハムートの燃料なら永久機関を組み込んでるから切れる事は無い」

優子「そつちじゃない！」

優子はバイク登校が不味いと思つたのか統夜に注意をしていた。

愛子「君のバイクつて燃料いらなんだね」

愛子が統夜に声を掛けた。

統夜「確か……工藤 愛子だったな……その通りだ」

愛子「それつて何処に売つてるの？」

統夜「地球では手に入らん代物だ」

優子「スフィア王国？」

統夜「違う世界としか言えん……授業が始まるぜ」

そう言つて自分の席へ着いて授業の準備をしていた。

時が過ぎ昼休みになった。

統夜「なあ・・・優子」

優子「何？」

統夜「秀吉は何処のクラスなんだ？」

優子「Fクラスよ。一緒に行く？代表とかも行ってるし」

統夜「ああ」

統夜と優子はFクラスの教室へ向かった。

統夜「ボロくね？」

Fクラスの教室を見ての一言がそれだった。

優子「成績が最低な人達が行くクラスだからね・・・」

統夜「てか勉強出来なくね？環境が悪いしか感じられん・・・」

優子「入るわよ」

Fクラスの中に入った。

？「おっ・・・姉上ではないか。隣にいるのは・・・もじゃ・・・
と、ととと・・・」

優子と同じ顔をし男子の制服を着た女性？が優子に声を掛けた。

統夜「落ち着け・・・秀吉」

秀吉「すう・・・はあ・・・すうー・・・はあー・・・」

秀吉と呼ばれた女性？は深呼吸をして落ち着きを取り戻した。

秀吉「何故統夜がここにおるのじゃ？」

統夜「訳ありでな・・・一緒に飯を食わないか？屋上で」
秀吉「構わんぞ。ちよつと待つておれ・・・明久、坂本、土屋、姫路、島田。一緒にお昼食べぬか？」

Fクラスにいる人達に声を掛けた。

明久と呼ばれた青年は統夜を見て驚いた。

明久「な、何なんで統夜がここにいるの!？」

統夜「訳ありだ。馬鹿」

秀吉「知り合いか？」

統夜「ああ・・・」

? 「明久の知り合いが月と地球を救った英雄とは・・・案外世界は狭く感じるな」

? 2 「・・・確かに・・・」

? 3 「吉井君のお友達って有名人ですよ」

? 4 「意外よね」

赤い髪をした青年に寡黙な少年、ピンク色の髪をした少女、大きな黄色いリボンで束ねられたポニーテールの少女が意外そうな顔で咳いていた。

統夜「お前らは？」

雄二「俺はFクラス代表の坂本 雄二」

康太「土屋 康太・・・」

瑞希「私は姫路 瑞希と言います。よろしくお願いします」

美波「ウチは島田 美波。よろしくね」

統夜「俺は天川 統夜。明久とは友人だ」

雄二達はそれぞれ自己紹介を済ませて屋上へ移動した。

雄二「しっかし・・・お前のダチは凄いやな」

明久「そうだね」

統夜「まあ・・・バーベナからこっちへ転校されてきたがな・・・
この事はあまり分らん・・・」

明久「ねえ・・・統夜・・・一ついい？」

屋上で昼ご飯を食べながら話をしていた。
これから言う明久の言葉が嵐を起こす。

統夜「何だ？」

明久「フリージアさんとのデートは上手くいったの？」

統夜「おい！？何故エステルの話が出てくる！？まあ・・・一緒に
街を歩いたり手作り弁当を食べたりしたな」

統夜の発言に優子と秀吉の二人は黒いオーラを纏い始めた。

二人の黒いオーラに明久や雄二、康太、瑞希、美波の五人は恐怖の
あまり青ざめ冷汗を出してガタガタ震えている。

優子「ねえ・・・統夜・・・」

統夜「な、何だ・・・優子」

秀吉「エステルという女性は一体誰じゃ？」

二人の顔は笑っているが目が笑っていない状態で尋問した。

統夜「(テメエ！明久！何恐怖のズンドコに陥れようとしてんだよ
！！)」

明久「(いや・・・気になって・・・)」

統夜「(気になってじゃねえよ！！そんなに俺を殺したいか！！優
子と秀吉の恐ろしさを知らんからそんな事が出来るんだよ！！)」

明久「（幼馴染なの？）」

統夜「（ああ！それと・・・明久・・・放課後屋上で話があるから・・・逃げるなよ？）」

明久「（僕を殺すの！？）」

統夜「（んな訳あるか！！大事な話だ！！）」

統夜と明久は念話でやり取りをしていた。

優子「ねえ・・・聞いているの？」

統夜「は、はい！聞いております。サー！」

秀吉「誰なのじゃ？」

統夜「エステルは・・・月人居住区の礼拝堂の司祭さんだよ」

優子「なるほど・・・」

秀吉「・・・」

瑞希「月人ですか？」

統夜「ああ。そこのお前・・・康太は変な考えを持たない方がいいぞ」

康太に釘をさしておいた。

表情からして何かをしでかすと思ったからだ。

明久「ムツツリー二ならやりかねない・・・」

雄二「全くだ・・・」

優子「さて・・・」

秀吉「やるとするか・・・」

優子と秀吉は突然統夜の腕を掴んで連行した。

明久「可哀想な統夜・・・」

雄二「哀れ・・・」

瑞希「怖かったです・・・」

美波「天川・・・お気の毒に・・・」

連行された統夜は・・・

統夜「おい！二人とも！！この関節は曲がら・・・ぐわあああああ
ああ！！！！！！」

嫉妬に狂った幼馴染二人の制裁を喰らっていた。

放課後の屋上にて・・・

統夜と明久の二人がいた。

明久「一体何の用だよ」

統夜「単刀直入に言おう・・・明久・・・俺達と一緒に管理局の闇
を破壊しないか？」

明久「・・・・・・・・・・」

統夜が言った内容に黙ってしまった。

因みに統夜は鉄人の補習を終えている。

明久「確かに・・・管理局のやり方は許せないけど・・・時間をく
れないかな」

統夜「構わん・・・お前の事だ・・・雄二達を巻き込ませたくない
んだろ？」

明久「うん・・・迷ってるんだ・・・正直言つと・・・」

統夜「お前は信じるべきものに従え・・・」

そう言った後ドアの方へ視線を向けた。

統夜「康太、いるのは分かってるんだ。出てきたらどうだ？」
明久「えっ？」

いきなりドアから康太が現れた。

明久「ムツツリーニ!? どうして・・・」

康太「お前達が気になった・・・」

統夜「そうか・・・ただ観察しただけじゃないだろ？」

康太「ああ・・・俺も参加する・・・管理局の闇を破壊する為に・・・」

統夜「知ってたのか・・・」

康太「俺も元時空管理局員・・・やり方が許せない・・・」

統夜と明久の二人は康太が元管理局員だという事に驚いた。

明久「意外だよ・・・」

統夜「そうだな・・・」

康太「明久・・・答えを速めに出せ・・・そうでなければ・・・大切なものを失う・・・」

康太はそれだけを言って消えた。

明久「ムツツリーニ・・・」

統夜「俺だって・・・秀吉や優子を巻き込ませたくない・・・それぐらい分かってる・・・」

明久「なのはさんやフェイトさん・・・君の幼馴染であるはやてさんと戦わなくちゃいけないんだよ?! 僕が一番心配してる所だよ」

明久の言葉にふつと笑った。

統夜「その心配は無い・・・彼女達は俺達の味方だ」

明久「えっ？」

統夜「俺達の真実を教えたからな・・・それともう一つある・・・」

真剣な表情になってこう告げた。

統夜「イグニスが俺達の敵になった・・・」

明久「あの人・・・敵・・・嘘だよな？」

自分達の隊長であるイグニスが敵になった事に動揺していた。

統夜「嘘なものか・・・俺と達哉はこの目で見たんだから・・・あ

いつは・・・俺達が知ってるイグニスじゃない・・・」

明久「・・・」

統夜「奴を放置すれば全てが滅ぶ・・・」

明久「だから僕に力を貸せと・・・」

統夜「そうだ・・・奴らは徐々に腐敗している・・・同志が必要なんだ」

明久にそれだけを言って屋上を後にした。

明久「僕は・・・」

ただ一人で迷い考えていた。

自分に何が出来ると・・・

第二十五話 『Fクラスへようこそ』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

瑞希「天川君と吉井君がお友達というのがビックリしました」

瑞希「二世界の王様と月の王様が天川君達に用があるみたいです。
何の話でしょうか・・・」

瑞希「次回は『結成！蒼穹の騎士団』^{ブルーナイト} テイクオフ」

第二十六話『結成！蒼穹の騎士団（ブルーナイツ）』（前書き）

いよいよ統夜達の新たな部隊が結成される！

たけし「HERO・S EPISODE第二十六話始まるぜ」

第二十六話 『結成！蒼穹の騎士団（ブルーナイツ）』

第二十六話 『結成！蒼穹の騎士団』
ブルーナイツ

統夜と明久の話し合いから翌朝

明久「・・・・・・・・」

Fクラスの教室の窓から景色を元気無さそうに見て眺めていた。

雄二「どうしたんだ？明久のやつ」

瑞希「元気がありませんね・・・」

美波「元気が無いわね」

康太「・・・・・・・・」

秀吉「一体どうしたんじゃろうな」

五人は心配しているのかただ見ていた。

ムツツリーニだけは違っていた。明久は迷っていると確信していた。

Aクラスでは・・・

統夜「（フォーチュンエターナル・・・明久は答えを出すと思うか？）」

フォーチュンエターナル（出すと思います。彼も貴方と同じく・・・共に戦う道を選ぶと思います）

統夜「（そうか・・・）」

タッチパネル式の蒼い携帯電話が点滅しながら答えていた。

時間が過ぎ帰りの時間になった時
明久と康太は駐輪場に来ていた。

統夜「答えは出たって感じだな・・・」

明久「うん・・・何も変わらない事は嫌だから・・・理不尽な理由で犠牲になる人達を出させないように・・・」

康太「行こう・・・」

統夜「そうだな・・・乗れ」

統夜の後ろに明久と康太がバハムートに乗りある場所へ移動した。

明久「一体何処に行こうと言うのさ？」

統夜「新たなる部隊の本拠地さ」

康太「新たなる部隊？」

統夜「神界と魔界、スフィア王国がバックアップしてくれる部隊さ」

明久「なるほど・・・」

数分後経つと大きな建物の前に着いた。

バハムートから降りて三人は中へ入った。

明久「随分と大きいよね」

康太「・・・」

統夜「まあな・・・」

ある部屋へ入ると達哉と遊輔、零斗、ダイチ、たけし、なのは、フ
エイト、はやて、ヴォルケンリッター、ビリー、神王、魔王、月王
がいた。

達哉「明久！久し振りだな！」

明久「達哉こそ！」

達哉と明久は再会して挨拶をしていた。

零斗「仲間に出会えたな」

ダイチ「そうだな」

たけし「仲間っていいもんだからな」

魔王「再会の所悪いけど・・・もういいかな？君達を呼んだ理由は他でもない・・・重要な話だ・・・」

二世世界の王と月王は真剣な表情になり一同は真剣になり聞き始めた。

神王「二世世界と月王がお前達・・・新たに結成される反管理局部隊のバックアップをする・・・」

月王「その部隊名は『蒼穹の騎士団』だ」
ブルーナイツ

魔王「何故今かと言うと・・・月王・・・お願いできるかな？」

月王「うむ・・・ユルゲンとの戦いを覚えているかね？」

統夜達に問い掛けた。

統夜「ああ・・・それがどうかしたのか？」

月王「ここ最近になって管理局と呼ばれる集団がロストテクノロジーとマウンテンサイクルを引き渡せという強引な手段を使ってきたのだ」

達哉「その管理局員は俺が撃退したが・・・」

統夜「ライオネスのおっちゃんとフィーナは管理局に狙われたら溜りもない・・・」

達哉「おい！何故そう言い切れる？」

月王「教えてくれないか？」

達哉と月王は統夜に問い掛けた。

統夜「月王と月のお姫様・・・そしてロストテクノロジーの関係者でありマウンテンサイクルの管理者だからだ」

零斗「奴等は権力と手柄の為なら手段を選ばないからな」

遊輔「あいつらこそ全次元世界の癌細胞と言っても過言じゃない」

月王「なるほど・・・管理者である我らを消そうと？」

統夜「ああ・・・」

ダイチ「現に俺らも命を狙われてるし」

たけし「ロストロギアを持ち特殊な力を持つてるとい理由で」

ダイチとたけし以外「!？」

ダイチとたけしの言葉に驚く一同。

逮捕なら分かるがロストロギアを所有し特殊な力を持つ小さい子供の命を狙っている事に・・・

なのは「そんなのって・・・」

フェイト「管理局は完全に歪んでいる・・・」

はやて「命を何やと思もつてるんや!!」

明久「あいつらおかしいよ・・・」

康太「酷いな・・・」

それぞれ管理局に対して怒りを露わにしていた。

統夜「だから一刻も早く終わらせよう」と?

魔王「その通りだよ」

神王「頑張れよ!お前らに全てが掛ってるんだからな!」

月王「私達も出来る限り協力する」

月王は立ち上がり始めた。

統夜「もうお帰りです？」

月王「ああ……達哉君……頼めるかね？」

達哉「はい」

達哉も立ち上がり月王と一緒にスフィア王国へ転移した。

魔王「話はこれでお終いだよ。それじゃ……」

両王も帰って行った。

統夜「アンタは帰らないのか？」

ビリー「この本拠地のオーナー兼デバイスマイスターだからね」

ビリーの発言に一同は驚き始めた。

その後に達哉が戻って来た。

統夜「まあ……んな事だろうと思ったよ」

ビリー「早速だが遊輔君に達哉君。君達のデバイスが完成したから取りに来てくれ」

遊輔「分かった」

達哉「分かりました」

遊輔に白い宝石が埋め込まれた真紅の十字架、達哉に白い宝石が入った瑠璃色の十字架を渡した。

ビリー「遊輔君のは『クリムゾンフレイム』達哉君のは『ラピスブレイブ』だよ」

統夜「ほう……ネオアーマードか？」

ビリー「その通り。早速だが模擬戦やってみようか？テストも兼ね

て地下訓練場でね。誰からやる？」

統夜「俺と遊輔がやる。異論は無いよな？」

遊輔「ああ」

統夜と遊輔は地下訓練場へ移動した。

統夜「お前と戦うのは・・・月人居住区以来か？」

遊輔「ああ・・・今度こそ勝つ」

統夜「ま、頑張りな」

統夜はタッチパネル式の蒼い携帯電話、遊輔は白い宝石が埋め込まれた真紅の十字架を取り出しそれぞれ自分のデバイスの名を呼んだ。

統夜「永遠の祝福を願う翼・・・フォーチュンエターナル・・・セ
ットアップ!!」

遊輔「紅蓮の焰の魂・・・クリムゾンフレイム・・・セットアップ
!!」

統夜は赤と金が混ざったの白いアーマーを纏い、遊輔は金と銀が混
ざった真紅のアーマーを纏っていた。

会場のスクリーンにて・・・

はやて「改良されたんやな・・・」

ヴィータ「統夜と遊輔・・・蒼と紅って感じがするよな」
達哉「・・・」

零斗「好敵手って感じだな」

ダイチ「くう・・・俺だって統夜と戦いたいぜ」
たけし「俺もだ!」

シグナム「止めておけ・・・統夜と渡り合えるのは桜木と北郷の二

人だけだ・・・」
シヤマル「そろそろ始まるわ」
明久「・・・・・・・・」

地下訓練場に戻る・・・

統夜「ハッ！」

遊輔「ハッ！」

統夜は刀身が蒼色の片刃の大剣「フォーチュンザンバー」、遊輔は真紅の刀身の片刃の大剣「フレイムザンバー」での剣劇が始まった。何回か打ち込んだ後統夜は銃身が二つあるライフル「エターナルシューター」を放ち遊輔に直撃させた。

統夜「ひゅっ・・・出力が高いな」

遊輔「中々いい手だな！行けよ！！フレイムファンク！！」

両腰のバインダーから片方に五基ずつ計10基の爪を模した小型飛行ビーム砲を射出し統夜にオールレンジ攻撃を仕掛けた。

統夜もそれに対抗するかのよう背部にある10翼の青い機動ウイング「フォーチュンウイング」から強化型フライヤー「ネオドラグーン」を射出し相殺した。

統夜「同じフライヤーを積んでるか・・・だが甘いぜ」

ネオドラグーンを射出したフォーチュンウイングから蒼いエネルギーを放出して翼を形成した「エターナルフェザー」から光の弾を連続射した。

遊輔「面白くなったな！」

一対二翼のウイング「クリムゾンウイング」から真紅のエネルギーを放出して翼を形成した「クリムゾンフェザー」で防御していた。その後両肩にある特殊兵装「バーニングクレイモア」から魔力ベアリング弾を発射した。

統夜は機動性を活かし避けた後両腕の籠手「エターナルフィスト」掌の部分から輻射波動砲を発射させ相殺した後胸部から高出力魔力ビームを使用する殲滅用武装「拡散構造相転移砲」を放ち遊輔にヒットさせた。

遊輔「高機動性タイプって厄介だよな……」

フレームファンクを収納しフレームザンバーを右手に持って襲い掛かった。

統夜はそれを避けフォーチュンウイングの左側に収納されている銃身が上下に2つあり長身ランチャー「フォーチュンランチャー」を取り出しエネルギーと実弾の二つを交互に発射した後フォーチュンザンバーで斬ろうと襲い掛かった。

遊輔はフレームザンバーで防いだ後右肩部分に収納し右腕の部分に装備された大型杭打ち機「クリムゾンブレイカー」を前方へ構えた。

遊輔「ハイパーカートリッジ……フルロード」

クリムゾンブレイカーのハイパーカートリッジをフルロードし始めた。

それを見た統夜は右腕に光を収束させていた。

遊輔「これで……」

統夜「決める!!!」

遊輔はエネルギーを収束させたクリムゾンブレイカー、統夜は右腕のエターナルフィストの掌の部分からパルマファイオキーナの強化版「インパルスシャイン」の強大なエネルギーのぶつかり合った。そしてエネルギーが消えると・・・

統夜「やつぱ・・・」

遊輔「決着着かずか・・・」

二人は立っていた。

そしてデバイスを待機状態に戻し上へ移動した。

観戦者サイド・・・

ビリー「初めてとは思えないね」

達哉「凄いな・・・」

零斗「だが統夜はドライバーとサーディオン、セイクリッドファングを使つてないから分らんぞ」

たけし「サーディオンってあの時の？」

零斗「ああ・・・あいつの切り札みたいなものだからな」

ダイチ「凄い力があつたよな・・・てかあいつがMIEESを使用したら誰だつて勝てないだろ」

なのは「凄い・・・」

はやて「凄いな・・・統夜は・・・」

ビリー「次は・・・達哉君と・・・ダイチ君でいいかな」

ダイチ「よっしゃ！」

たけし「くそ・・・残念・・・」

たけしは残念がり達哉とダイチは地下訓練場へ移動した。

達哉「久し振りに戦うな・・・」

ダイチ「ああ！今度は負けないからな！！」

達哉は白い宝石が入った瑠璃色の十字架を取り出した。

ダイチ「来な！！」

達哉「月を照らす瑠璃色の光・・・ラピスブレイブ・・・セットアップ！！」

達哉が光に包まれると赤と白が混ざった瑠璃色のアーマーを纏った姿になった。

観戦者サイド

統夜「始まるか・・・」

零斗「剣士対剣士か・・・」

明久「どっちが勝つんだろう・・・」

遊輔「そこは分からん・・・」

統夜「だがパワーならダイチが上だが・・・」

遊輔「なら達哉は負けるんじゃないか？」

統夜「当たらなければ駄目だ・・・」

二人が戦おうとしている画面を見ていた。

ダイチ「騎士みたいだな。気力転身！オーラチェンジャー！」

ダイチは右手に付いているオーラギャザーのキーを展開させ、垂直に立てた左手のオーラスプレッダーに差し込んでリユウレンジャーに変身した。

達哉「そうだな・・・リュウレンジャーか」

達哉は左腰にある刀身が瑠璃色の両刃の長剣「ブレイブカリバー」を鞘から抜いて構えダイチは中国刀を構えた。お互いが構えた瞬間剣のぶつかり合いが始まった。

達哉「氷風閃！」

冷気のある鎌鼬で攻撃を仕掛けたがダイチは気力を光に変えて投げつけ相殺した。

ダイチ「やるな！」

達哉「（この出力・・・高いな・・・）」

観戦者サイド

統夜「達哉・・・アーマードに慣れてないな」

零斗「お前と違うんだから・・・お前や遊輔、達哉のIESはブラスターか？」

統夜「いや・・・OIESだ」
オメガインフイニティーエナジーシステム

はやて「何やそれ？」

統夜「出力はMIESの出力レベルの6割以上でよりピーキーなものになり出力が高くなっている代物さ」

明久「それって本当に凄いよね」

統夜「何を言ってるんだ・・・明久・・・お前でも扱えるだろうが・・・」

明久「確かに・・・僕は魔法が使えるけど・・・」

統夜「んなもん・・・慣れだ慣れ」

康太「恐ろしいな……」

二人は剣劇を始めダイチが押し始めた。

ダイチ「天火星稲妻炎上破!!」

刀身に炎で燃え上がらせ達哉に一閃をしようとしたが……

達哉「氷河月閃!」

これを待つてたかのように氷属性の斬撃で相殺し水蒸気が発生した。

ダイチ「くそっ!これが狙いだっただのか!？」

ダイチはすぐさま行動を起こそうとしたが一瞬の内に達哉に吹き飛ばされてしまった。

ダイチ「(こいつ……速いんだっとな……)」

空中で受け身をとった後剣を構えた。

ダイチ「天火星秘技・流星閃光!!」

超高速で無数の突きを一点に打ち込み始め達哉に攻撃を仕掛けたが直撃する筈の達哉の姿がぶれた。

ダイチ「分身か!？」

達哉「その通りだ!!」

達哉の声の後にダイチを瞬速で一閃した。

ダイチ「くそ……ん？待てよ……」

ダイチは何かを考え手のひらから炎を灯した。

ダイチ「炎上破！！」

炎を達哉に向けて放った。

達哉は氷の斬撃を飛ばして水蒸気を発生させた。

達哉「無駄だ！」

ダイチ「無駄なもんか！」

ダイチは気力を使つて姿を眩ました。

達哉はダイチに攻撃を仕掛けたが全て外れ水蒸気が晴れた瞬間ダイチの姿が無かった。

達哉「一体どこに……」

達哉がそう言った瞬間背中に強力な衝撃が走り吹き飛んだ。

ダイチ「はあ……はあ……やったぞ……」

眩ましたダイチが達哉に攻撃を仕掛け吹き飛ばしていた。
達哉は辛うじて立ち上がった。

ダイチ「やべ……俺も……駄目だ……」

ダイチが倒れたと同時に達哉も再び倒れた。

観戦者サイド

遊輔「勝負あつたな」

統夜「引き分けだな」

倒れた達哉とダイチを上へ運んだ。

模擬戦から数分後

明久「これからよろしく。僕は吉井 明久」

康太「土屋 康太・・・」

零斗「俺は北郷 零斗だ。零斗で構わん」

たけし「俺は竜崎 たけし。たけしでいいよ。明久さん、康太さん」

ダイチ「俺はリュウ・ダイチ。ダイチでいいぜ。明久、康太」

明久と康太は零斗とたけし、ダイチと自己紹介をしていた。

統夜「ここって確か宿みたいなものだよな？」

零斗「ああ。俺とダイチ、たけし、ビリーさんはここに住むからな」

統夜「そうか。んじゃ・・・俺達は帰るわ・・・」

零斗「またな」

零斗とダイチ、たけし、ビリー以外の一同はそれぞれ帰路へついた。

明久「はやてさんが統夜の家に同棲してるなんて・・・」

統夜「まあな・・・」

はやて「大好きな人やからな」

明久「秀吉と木下さんが聞いたら嫉妬で怒り狂いそうな気がする・・・」

「
統夜「それ本当に起こりそうだから止めて……」

念の為明久に釘をさしておいた。

なのは「にやはは……」

フェイト「怖いを通り越すけど……」

明久「それじゃ……僕達はこれで……」

康太「また学校で……」

明久と康太は別れて帰った。

統夜「いよいよ始まるな……」

なのは「うん……」

フェイト「正しい方へ変革させる為の……」

はやて「第一歩や」

統夜達は新たな部隊を結成し腐敗した管理局を破壊する決意をするのであった。

第二十六話『結成！蒼穹の騎士団（ブルーナイツ）』（後書き）

今回のHERO'S EPISODEは

たけし「新たな部隊を結成し管理局の腐敗を破壊する決意を固めた俺達」

たけし「管理局の違法研究施設を破壊した俺と統夜さんに管理局の白い騎士が襲い掛かって来た」

たけし「白い騎士は怒りを露わにしていた。反管理局である蒼穹の騎士団には意地があるんだ！！」

たけし「次回は『管理局の白き騎士』テイクオフ」

投稿キャラ設定2（前書き）

ダイチとたけしの詳細です。どうぞ！

投稿キャラ設定2

名前：リュウ・ダイチ

性別：男

種族：人族

容姿：髪型と顔立ちは『爆丸バトルブローラーズ』の空操弾馬に似ている。背中には中国刀を背負っている。

身長：140cm

年齢：16歳

性格：明るくて活発だが、かなりのスケベ。その反面、猫を助けたりするという優しい一面がある。

趣味：気力の修行

好きなもの(事)：スケベな本とDVD

嫌いなもの(事)：管理局

詳細：統夜の友人であり最強の気力使いを目指している少年。

達哉との試練以前に五つの天宝来来の玉が刃の面についている中国刀を手に行っている事と魔法に近い技を持つ為管理局から命を狙われている。

かなりのスケベである為様々な女性陣から軽蔑されている。

新たな部隊「蒼穹の騎士団」の一員となり統夜達と共に戦う決意をする。

名前：竜崎 たけし(りゅうざき たけし)

性別：男

種族：人族

容姿：髪はツンツンし顔は『メタルファイトベイブレード』の鋼銀河に似ている

身長：120cm

年齢：13歳

性格：元気で明るいが、生意気な所がある。

趣味：アクション映画の鑑賞

好きなもの(事)：アクション映画

嫌いなもの(事)：管理局

詳細：零斗にダイチと共に召喚されてしまった少年。

将来の夢はハリウッドのアクションスターになること。その為、空手と器械体操を習っている。

特殊な剣であるスターライザーと両手に付いているパワーブレスのスイッチを起動させて超力変身するオーレッドで戦う。

特殊な力を持っているが故か管理局の上層部『セイントクルセイダーズ』に命を狙われている。

新たな部隊「蒼穹の騎士団」の一員となり統夜達と共に戦う決意をする。

投稿キヤラ設定2（後書き）

龍の骨さん。どうもありがとうございます。

これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

デバイス設定3 (前書き)

統夜の新たなデバイス『フォーチュンエターナル』、遊輔のデバイス『クリムゾンフレア』、達哉のデバイス『ラピスブレイブ』の詳細です。

デバイス設定3

デバイス：フォーチュンエターナル（ネオアーマードデバイス）

形状：赤と金が混ざったの白いアーマー

待機状態：タッチパネル式の蒼い携帯電話

搭載システム：OIES、DCS、ドルイドシステム、プリズムエフェクトシステム、FLS、MBS、MMS、エターナルガイストシステム、フォーチュンオーシャンシステム搭載。

備考：ユルゲンとの戦いで大破したアブソリュートエターナルを改修したネオアーマードデバイス。

装甲には「マシンセル」と呼ばれる特殊金属と月にしか存在しないレアメタル「ルナチタニウム」を使っておりOIESと連動し自己修復機能を持ち頑丈になっている。

武装は頭部にバイザー搭載型ヘッドギア「エターナルヘッド」

背部に10翼の青い機動ウイング「フォーチュンウイング」

フォーシュンウイングに一基ずつ設けられた強化型フライヤー「ネオドラグーン」

ネオドラグーンを射出したフォーチュンウイングから蒼いエネルギーを放出して翼を形成した「エターナルフェザー」

両腕にはブースター付のワイヤー式アンカー「ブースターハーケン」と攻防に使えるエネルギー発生装置「ブレイズルミナス」と掌の部分にパルマファイオキーナの強化版「インパルスシャイン」と輻射波動機構の二つの切り替えが可能な「エターナルフィスト」

胸部には高出力魔力ビームを使用する殲滅用武装「拡散構造相転移砲」とカリドウスを強化した「スーパーカーリドウス」の切り替えが可能な「プリズムカリドウス」

両膝から両足にはグリフォンビームブレードを強化して射撃にも対応した「プラズマゼットブレード」

銃身が二つある高出力と低出力の切り替えが可能な連射式の二丁の

ライフルで直列合体や並行合体も可能な「エターナルシューター」
両腰にはクスフィアスを強化した「スーパークスフィアス」スーパークスフィアスの上に一本ずつある刀身がブレイズルミナスで形成された刃を発生させるグリップ「エターナルサーベル」
フォーチュンウイングの右側に蒼い刀身にエネルギー発生装置がある片刃の特殊大剣「フォーチュンザンバー」
フォーチュンウイングの左側に収納されている銃身が上下に2つあり実弾のBモードとエネルギーのEモード、銃身先端が変形し最大出力のXモードの三種類の切り替えが可能な長身ランチャー「フォーチュンランチャー」
フォーチュンランチャーのXモード時の銃身にエターナルシューターを左右に並列合体し威力があるEXモードが存在する。
両肩にフラッシュエッジの出力を上げて投擲以外にも接近戦用にも調整された「ネオフラッシュエッジ」
オメガインフイニティエナジーシステム
「OIEES」はMIEESを解析しMIEESの出力レベルの6割以上でよりピーキーなものになっている。
「ドルイドシステム」は相手のデバイスの長所と短所から使用者の癖まで様々な情報と分析してバイザーに表示する。
「プリズムエフェクトシステム」は「拡散構造相転移砲」専用のシステムで、大気中の水分を集めてプリズム状に凝固するシステム。これにより「拡散構造相転移砲」を広範囲に魔力ビームを乱反射させて長距離且つ広範囲の標的を撃つ事が出来る。
「エターナルガラストシステム」は「エターナルフェザー」専用のシステムでエネルギー翼から凝縮された光エネルギーの雨を放ち機動性の向上及びジャミング機能が付いている。
「フォーチュンオーシャンシステム」はオーシャンシステムを改良したシステムで赤と金が混ざったの白いアーマーから蒼く輝いた蒼いアーマーに変化に変化し攻撃力と出力、機動性が大幅にアップする。

管制人格は以前と同じ

デバイス：クリムゾンフレイム（ネオアーマードデバイス）

形状：金と銀が混ざった真紅のアーマー

待機状態：白い宝石が埋め込まれた真紅の十字架

搭載システム：OIES、ドルイドシステム、FLS、HCS、プリズムエフェクトシステム、アンプテイトシステム、クリムゾンガイストシステム、バーニングオーシャンシステム搭載

備考：フォーチュンエターナルの基本データを参考にした遊輔専用
に開発されたネオアーマードデバイス。

装甲にはルナチタニウムとマシセルを使用しており頑丈で自己修復機能を持つ。

武装はバイザー搭載型ヘッドギア「クリムゾンヘッド」

背部に一对二翼のウイング「クリムゾンウイング」クリムゾンウイングから真紅のエネルギーを放出して翼を形成した「クリムゾンフエザー」

右肩部分に収納されている真紅の刀身にエネルギーフィールドが展開出来る片刃の特殊大剣「フレイムザンバー」左腕の部分に銃身が二つ付いた高出力と低出力の切り替え、連射が可能なハンドガン「フレイムハンド」

右腕の部分にHCSを消費した数だけ威力が増す装填式6式HCS搭載大型杭打ち機「クリムゾンブレイカー」

両肩に魔力を炸裂鉄鋼弾に変換する機能を備えた近距離用炸裂鉄鋼弾発射機構6基（片方3基ずつ）と大型ブースター4基（片方2基ずつ）を一体化させた特殊兵装「バーニングクレイモア」

両腰のバインダーから五基ずつ計10基の爪を模した小型飛行ビーム砲を展開し先端部にビームサーベルを形成して貫く事も可能な強化型フライヤー「フレイムファンゲ」

両脚と爪先にエネルギー状の刃が発生する隠し腕が装備され蹴りと連動した使用が可能な武装「ソードマニピュレーター」

胸部から「拡散構造相転移砲」と高出力ビーム砲の「カリドウス」

の二つの切り替えが可能な「プリズムカリドウス」

「アンプテイトシステム」とは相手の防御や結界等を破る為のシステムで全ての武装に対応している。

「クリムゾンガイストシステム」とはクリムゾンフェザー専用のシステムでエネルギー翼から凝縮された光エネルギーの雨を放つ事や防御が可能で機動性がアップする。

「バーニングオーシャンシステム」とはアブソリュートエターナルのオーシャンシステムを応用したシステムで金と銀が混ざった真紅のアーマーから赤く輝いた真紅のアーマーに変化し攻撃力と出力、防御力が大幅に上がる。

管制人格は女性で明るく活発な性格。

デバイス：ラピスブレイブ（ネオアーマードデバイス）

形状：赤と白が混ざった瑠璃色のアーマー

待機状態：白い宝石が入った瑠璃色の十字架

搭載システム：OIES、ドルイドシステム、MBS、MFS、フロストバイトシステム、ラピスオーシャンシステム搭載

備考：スフィア王国が達哉専用開発したネオアーマードデバイス。装甲はルナチタニウムとマシセルを用いており自己修復機能を持つ。

主な武装はバイザー搭載型ヘッドギア「ラピスヘッド」

背中に盾としての機能を持つ耐四力のマント「ラピスマント」

左腰に鞘付の刀身が瑠璃色の両刃の長剣「ブレイブカリバー」

両腕にはブースター付のワイヤー式アンカー「ブースターハーケン」が備わっており掌に輻射波動機構が備わっている籠手「ラピスマームズ」

両脚には「プラズマゼットブレイド」

「フロストバイトシステム」とは氷属性の力を引き出し武装をヒットさせた相手を徐々に凍らせる事が可能なシステム

「ラピスオーシャンシステム」とはアブソリュートエターナルのオ

ーシャシステムを参考にしたシステムで赤と白が混ざった瑠璃色のアーマーから輝いた瑠璃色のアーマーに変化し機動性と出力、攻撃力を上げる事が可能。

管制人格は女性で厳しい性格。

デバイス設定3 (後書き)

これからの敵は厳しくなりますのでよろしくお願いします。

第二十七話『管理局の白き騎士』（前書き）

美波「私、軍師になる！」

明久「いや・・・片眼鏡掛けて言われてもね・・・」

瑞希「そうですね。いくら同じ声優のキャラでも・・・」

秀吉「難しいぞい」

雄二「HERO'S EPISODE第二十七話始まるぜ」

第二十七話 『管理局の白き騎士』

第二十七話 『管理局の白き騎士』

？「失礼します」

管理局本局のセイラの執務室に茶色の短髪で緑色の瞳をし整った顔立ちをした青年が入って来た。

セイラ「貴方が本日から我が部隊『セントクルセイダーズ』に・
・」

浩次「はっ！本日から転属しました。閃導 浩次一佐です」

セイラに敬礼をして自己紹介をした。

セイラ「閃導 浩次一佐・・・私からの贈り物です」

金色の宝石が埋め込まれた白い腕輪を浩次に渡した。

浩次「これは？」

セイラ「貴方の力になる・・・アーマードデバイス・・・『ジャツ
ジナイト』よ」

浩次「ありがとうございます」

セイラに感謝した。

その後にセイラは真剣な表情になり任務を与えた。

セイラ「これから貴方にはこの世界に行ってもらいます」

空間モニターを表示させあるこれから赴く次元世界の情報を教えた。

セイラ「私達管理局の研究施設を守護をお願いしたいのです」

浩次「理由は・・・蒼穹の死神・・・ですか？」

セイラ「そうです・・・そのお陰で私達も困っているのです。もしこのまま放置すれば反管理局勢力は多くなり秩序が崩壊してしまいます・・・」

浩次「了解しました。もしそうならば管理局は崩壊してしまいますからね・・・」

セイラ「今から行ってもらえますか？」

浩次「今からですか？大丈夫です。失礼しました」

浩次は敬礼した後執務室から出て行った。

セイラ「いい駒が来ましたね。私が全次元世界の支配者となる為に・・・」

？「おや・・・誰かが来てたのですか？」

緑色の短髪に紫色の瞳をした整った顔立ちをした少年が執務室の中に入って来た。

セイラ「カシムですか・・・私の駒がね・・・」

カシムと呼ばれた少年に笑みを浮かべて言った。

カシム「そうか・・・それは楽しみですな」

セイラ「私の意に従わない人間はいませんよ」

カシム「（愚かな人間だ・・・）」

その頃・・・

統夜「行くぜ・・・たけし」

たけし「ああ。今回は大きな研究施設か・・・」

統夜「そうだ・・・ロストロギアもある」

統夜とたけしの二人は大きな違法研究施設の前に来ていた。

統夜「さつさとやるか」

たけし「行くぜ！超力変身！」

たけしは両手に付いているパワーブレスのスイッチを起動させてオーレッドに変身し、統夜は心装を展開して研究施設の扉を破壊して中へ入った。

研究員「何だ？貴様らは！ここは『セントクルセイダーズ』の研究施設だぞ！」

統夜「それがどうした！」

たけし「実験された人達を助けに来たんだ！！大人しくしてろよ！」

刀とスターライザーの峰打ちで研究員や魔導師達を蹴散らしていた。その後二手に分かれて片っ端から潰し始めていた。

統夜「さて・・・終わらせるとするかね・・・」

部屋を一つずつ訪れ研究員たちを眠らせ実験途中の人間達を連れ去ったり強奪されたロストロギアの回収をしていった。しばらくして統夜とたけしは研究所の前にて合流した。

統夜「収穫はあったか？」

たけし「ああ。この人だけは何とか・・・」

たけしの両腕に腰まである黒髪に赤い瞳をした綺麗な顔立ちをした女性が抱えられていた。

たけし「統夜さんは？」

統夜「この娘とロストロギアだ。後でロストロギアの持ち主に返還するぞ」

統夜の右手に布で包まれた背中まである銀髪に琥珀色の瞳をした可愛らしい顔立ちの少女、左手にロストロギアを手にしていた。

たけし「分かった。それじゃ一旦帰ろう」

統夜「ああ」

転移の準備をしようとした瞬間二人に向かって砲撃が襲い掛かった。

統夜「チツ・・・」

たけし「わっ!？」

増援として管理局の魔導師を率いた浩次が現れた。

浩次「遅かったか・・・」

統夜「ん？」

たけし「またかよ・・・」

浩次は破壊された研究施設を見た後統夜とたけしの二人に怒りを露わにして睨みつけた。

浩次「何故このような事をする！テロリスト共！！」

統夜「何故このようなの？はっ、お前らんとこの違法研究施設を壊して何が悪い？」

たけし「そうだ！ただ魔力が高い人達を無理矢理連れて実験しやがって！！」

統夜とたけしは浩次に反論した。

浩次「確かにこのような事はしているが・・・僕は管理局の中から変えていく！！貴様らテロリストを認めない！！」

金色の宝石が埋め込まれた白い腕輪を取り出し

浩次「裁きの剣にて裁かれよ！ジャッジナイト！セットアップ！」

浩次が光に包まれた後金が混ざった白いアーマーを纏った姿になった。

たけし「本腰を入れて来たのかよ・・・」

統夜「たけし・・・お前達だけでも逃げる」

たけし「統夜さん！？」

統夜「ボソボソ・・・（戦闘が起きた時に生きてるこいつらやロストロギアに何かが起これば水の泡になる）」

たけし「ボソボソ・・・（あくまで俺達は違法研究施設で実験になった人達の救出とロストロギアの奪還・・・）」

統夜「ボソボソ・・・（時間稼ぎはするつもりさ・・・5分・・・だ）」

たけし「ボソボソ・・・（分かった）」

小声で相談した後統夜はレイヴ式の魔法陣を展開し救出した人と口

ストロギアを魔法陣の上に置いた。

統夜「さて……やるとするかね」

たけし「ざっと……6人ぐらいだから……手短に終わらせる」

統夜は蒼い龍が描かれた黒いカードを取り出したけしはスターライザーを構えた。

統夜「フォーチュンブラスター！起動！」

蒼い龍が描かれた黒いカードを指で上へ弾き飛ばした瞬間蒼い高機動戦闘機に変化した。

統夜「上に乗って戦え……」

たけし「分かった」

たけしはフォーチュンブラスターの上に乗って上空の魔導師達と戦い始めた。

魔法陣を発生させ刀身が銀色の長剣「ブラスターロング」と刀身が銀色の短剣「ブラスターショート」の二つを取り出して浩次と対峙していた。

浩次「はあ！」

統夜「……」

浩次は高周波振動の機能がある二振りある鞘付の長剣「ナイトカリバー」で統夜に斬り掛ったが統夜は二刀で防いだ。

統夜「中々じゃないか。でもさ……」

妖力を込めた蹴りで浩次を吹き飛ばした。

浩次「くっ……」

統夜「まだ甘いんじゃないか？」

右手にライフルである「ナイトシューター」を持ち最大出力で放った。

統夜は避けようとせず二刀を手にして防いだ。

浩次「そんなに彼女達を逃がしたいのか……」

統夜「ああ……お前ら管理局にとっては実験動物なんだろうが……彼女達は人間だ!!お前達が平然と実験していい訳が無い!!」

たけしサイド

たけし「行くぜ!!」

フォーチュンブラスターの上に乗った状態でスターライザーで管理局の魔導師達を切り裂いていた。

魔導師「ぐっ……舐めるな!!」

魔力弾を放つが足場であるフォーチュンブラスターが避けた。

その後なたけしが上へ跳んだ後魔導師に必殺の一閃をした。

フォーチュンブラスターはたけしを拾って地上へ降りた。

統夜「（もうそろそろだな……）」

妖力の斬撃を飛ばすが浩次はナイトアームズに搭載された陽電子リフレクターで防いだ。

統夜「デストロイと同じか・・・」

浩次「逃がさない・・・セイントオーシャンシステム起動！」

金が混ざった白いアーマーから白く輝いた白いアーマーに変化した。

統夜「オーシャンシステム!?!」

浩次「行くぞ！」

一対二翼のリフター型バックパック「ジャツジユニット」の右部分にある折り畳み式の砲台「ジャツジブラスター」を展開した。

統夜「(あの砲撃は不味い・・・) たけし!! 撤退するぞ!!」
たけし「わ、分かった！」

二人は急いで魔法陣の中へ入った。

浩次はナイトシューターをジャツジブラスターと合体させて発射した。

統夜「チツ！」

自動的に転移魔法が出来るようにした後魔法陣から出た。

たけし「統夜さん!?!」

統夜「あの砲撃はオーシャンシステムによって攻撃力が上がっている・・・無防備の俺達は確実に直撃を喰らう！」

オーシャンシステムの事を知っている統夜なら恐ろしさを知っていた。

フォーチュンブラスターをドライバーコネクトしアーマーとして纏

わせ左腕にある盾の先に連結剣状のヒートロッドが仕込まれブレイズルミナス発生装置がある特殊盾「ブラスターロッド」に四力を込めて防ぎ始めた。

統夜「はあああああ！！！」

浩次「消える！！テロリスト共！！！」

その後たけし達は転移して消えた。

統夜「後は……」

砲撃を防ぎながら転移の準備をし始めた。

浩次「チツ……」

たけしを逃がした事に相槌を入れながらも力を入れ始めた。

統夜「よし……いつせえーの！！！」

一瞬だけ吸血鬼化になり砲撃を吹き飛ばした後すぐさま転移して消えた。

浩次「なっ！？」

自分の攻撃を吹き飛ばした事に驚いてしまった。

その後自分の砲撃を避け統夜を探そうとしたがロストしてしまった。

浩次「くそ……今度こそは……」

その頃……たけしは……

たけし「何とか帰ってこれた・・・」

零斗「随分といい収穫をしたな」

たけし「零斗さん・・・そうだな・・・」

無事に転移出来たたけしは救出した人達を空いている部屋へ運んだ。実験された人達をすぐさま零斗がヒーリングで治療した。

零斗「んで・・・統夜は？」

たけし「管理局の白騎士の砲撃を防いだ後帰って来ると思う」

零斗「そうか・・・今は・・・彼女達の目覚めを待つだけだ」

たけし「そうだ・・・ロストロギアを持ち主の所へ返してあげよう」
零斗「そうだな・・・」

零斗はたけしと一緒に瞬間移動をしてロストロギアを持ち主へ返しに出掛けた。

その頃統夜は・・・

統夜「いつて・・・俺とした事が・・・」

転移の時にデバイスを待機状態にし本拠地の前に移動する筈が上空へ転移してしまいそのまま落ちて教会の屋根を突き破り地上へ降りてしまった。

？「ねえ・・・君・・・そこどいてくれない？」

腰まである桜色の髪を赤いリボンで結び瞳の色は緑色で可愛い部類の綺麗な顔立ちをした少女が統夜に声を掛けた。

彼女と出会った時から自分自身の運命が変わる事を統夜は知る事は

無
か
っ
た。

第二十七話『管理局の白き騎士』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

ダイチ「いよいよ管理局も本気になりつつあるな」

ダイチ「何で統夜だけフラグが立つんだよ!!! え? これは運命? 認めたまるかー!!!」

ダイチ「あいつなんか・・・はやてや文乃、優子、秀吉にやられちまえばいいんだあー!!!」

ダイチ「次回は『運命の出会い』テイクオフ」

第二十八話『運命の出会い』（前書き）

雄二「やああああってやる!?!」

翔子「雄二が・・・私と結婚を・・・?」

雄二「いや・・・何となく言いたくなって・・・って何でそうなる!?!」

康太「・・・・・・・・HERO'S EPISODE第二十八話・・・
始まる」

第二十八話 『運命の出会い』

第二十八話 『運命の出会い』

統夜「あの……ここは？」

？「使われてない教会」

統夜「間違えたか……」

そう言っただけ立ち上がった。その時少女がムツとして怒った。

？「ここはお花があるの。そして貴方は空から降って来た。ビツク

リ」

統夜「花のお陰か……」

そう言っただけ床の一部がはがれ地面が露出し花が咲いている花畑からどいた。

統夜「君、名前は？俺は天川 統夜。統夜でいいよ」

エアリス「私、エアリス。エアリス＝シルフィード」

エアリスと呼ばれた少女は笑顔で統夜に自己紹介した。

エアリス「本当に凄いやね。上から落ちて……怪我も無い……」

統夜「ま、色々と訳があるのさ。君は命の恩人だしな……お礼しない……」

うーんと考えながら言った。

エアリス「別にいいよ」

統夜「いいや・・・そうはいかない。そうだ。デート一回ならどう？」

エアリス「何それ・・・バツカみたい」

呆れた口調で言ったが内心は半分驚き半分嬉しそうだった。

統夜「そうだよな・・・」

エアリス「君の事よく知ってるよ。月と地球を救った英雄さん」

統夜「知ってたのか・・・」

エアリス「名前を聞いてピンと来たんだもん」

お花を見て分かりきったように答えた。

統夜「そうか・・・エアリスは花屋か何かやっているのか？」

エアリス「うん。アルバイトだけど・・・統夜もお花、好き？」

統夜「まあね・・・純粹な頃に戻れるって感じで」

少し照れた感じで言うとエアリスは少し笑っていた。

統夜「おかしいか？」

エアリス「ううん。統夜は面白い人だなって」

統夜「そっか・・・いつもここに來ているのか？」

エアリス「うん。ここの地面に咲く花は綺麗だから・・・」

統夜「確かに綺麗だな。エアリスも」

エアリス「もう・・・そう言う統夜も綺麗だよ」

お返しとばかりにエアリスは笑顔で答えた。

統夜「顔？」

エアリス「それもあるけど瞳と髪」

統夜「そつちもか・・・」

エアリス「統夜に聞きたい事があるんだけどいいかな？」

エアリスが突然統夜に質問をした。

統夜「何？」

エアリス「統夜は何をやってるの？」

統夜「俺？学生兼何でも屋かな」

エアリスに応えた。

母親に対して素直な気持ちを出す感じで・・・

エアリス「学生と何でも屋・・・両立してるね。偉い偉い」

統夜の頭を優しく撫でていた。

統夜「でも・・・今はある組織と戦う事に集中してるかな・・・俺は・・・歪みを破壊する為に・・・」

エアリス「その歪みを破壊したら本当に『皆が笑顔になる』の？」

統夜「えっ？」

エアリスの突然の言葉にキョトンとしていた。

エアリス「だって・・・貴方・・・悲しそう・・・何かに裏切られて・・・押し潰されそうで・・・」

統夜「俺は・・・悲しくない・・・」

エアリス「皆が笑顔になるって言うのは統夜も含めて成立するの・・・」

統夜「エアリス・・・でも・・・これは誰かがやらなくちゃいけな

「い事だから・・・」

エアリスに笑顔で答えた。

管理局に裏切られ悲しみで一杯なのに無理をしているかのように・

・

エアリス「でも・・・一人であまり背負わない方がいいよ・・・君が壊れてしまいそうで・・・」

統夜「エアリス・・・ありがとう・・・少しは楽になった」

自然とエアリスに笑顔で感謝していた。

統夜「エアリスの家ってここから近いのか？」

エアリス「うん。見送らなくても大丈夫だから」

統夜「そっか・・・番号とメアド教えてくれるかな？やっぱ・・・初対面だし・・・駄目・・・だよな・・・」

番号とメアドを知りたい統夜に対してエアリスは・・・

エアリス「いいよ。友達・・・あまりいないから・・・」

少しさびしそうな表情だったが即答で教えてくれた。

統夜「ありがとう。エアリスに色んな奴らを紹介するから」

エアリスに感謝しながら番号とメアドの交換をしていた。

そして二人は教会から外へ出た。

統夜「またな」

エアリス「また会えるといいね」

二人はそれぞれ帰路へついた。

その頃・・・

ロストロギアの返還を終えた零斗とたけしは本拠地へ戻っていた。

少女「ここ・・・は・・・？」

たけし「ここは俺の部屋だよ・・・ええと・・・」

管理局の違法研究施設で助けた腰まである黒髪に赤い瞳をした綺麗な顔立ちの少女が目を見ました。

ルイス「ルイス・・・」

たけし「ルイスさん・・・か。いい名前だね。俺は竜崎 たけし。よろしくな。ルイスさん」

ルイス「たけし・・・」

たけし「何？」

ルイス「ありがとう・・・」

ルイスと名乗った少女がたけしに感謝の言葉を述べた。

たけし「困った時はお互い様だよ」

ルイス「そう・・・私は自由・・・」

たけし「そうだね・・・ルイスさんはどうするの？」

ルイス「ここに住む・・・たけしが守ってくれそうだから・・・」

たけし「えっ・・・（もし・・・メイメイや桂花がここに来てルイ

スさんを見たら・・・俺、死ぬかも・・・）」

ルイス「駄目・・・？」

上目遣いでたけしを見ていた。
たけしはうーんと考えていた。

たけし「（統夜さんならばやてさんや文乃さん、エステルさんに殺されそうだし・・・零斗さんは・・・何となく危ないからNGで・・・ダイチさんは・・・絶対に駄目・・・ルイスさんが危ない）」

三人に頼ろうと考えたが余計な騒ぎが起こりそうだから止めにした。
たけしの結論は・・・

たけし「いいよ」

たけしの答えに・・・

ルイス「ありがとう・・・」

たけし「気にするなって（もうヤケだ・・・やあああってやるぜ！！）」

ルイスは感謝していた。

たけし「ご飯一緒に食べようか」

ルイス「はい」

たけしとルイスは食堂へ移動した。

零斗サイド

零斗「うーん・・・この少女をどうするか・・・」

自分の部屋のベッドに背中まである銀髪に琥珀色の瞳をした可愛らしい顔立ちをした少女を寝かせていた。

？「……………」

零斗「可哀想にな…………こんな子供まで利用するなんてな…………」

零斗は少女を見て管理局のやり方…………セイントクルセイダーズのやり方に怒りを覚えていた。

零斗「(管理局の白い騎士か…………俺は独立部隊である『セイントクルセイダーズ』にしか興味ねえよ…………そいつらは絶対に許さねえ…………)」
？「……………」

少女は起き上がり零斗を見た。

零斗「気が付いたか」

？「ここは…………」

零斗「俺のハジケ部屋だ」

？「ハジケ…………？」

無表情だったがハジケが何なのか興味を持ちだした。

零斗「そうハジケだ。無口で無表情だったらこの先やっていけないぞ。名前は何て言うんだ？」

アイリ「アイリ…………」

零斗「アイリか…………俺は北郷 零斗。よろしくな」

アイリと名乗った少女は零斗に挨拶をした。

その後に零斗はアイリに簡単な自己紹介をした。

アイリ「ありがとう・・・」

零斗「助けたのは俺じゃなく統夜だが・・・看病したのは俺だが・・・」

アイリ「統夜・・・？」

零斗「一緒に管理局を潰している仲間だよ。お腹すいたろ？マイテイ真拳奥義・・・ご飯サモン！」

手の平からステーキ定食が現れた。

アイリ「本物？」

零斗「ああ。たくさん食べるのじゃ」

アイリは嬉しそうに食べ始めた。

零斗「・・・」

何故か零斗は嬉しそうな表情をしていた。

その頃天川家では・・・

優子「・・・」

秀吉「・・・」

はやて「・・・」

リビングにて幼馴染三人がソファに座っていた。時間が経っても喋らなかつた。

すると限界だったのか優子が口を開いた。

優子「はやて・・・一つ聞いていいかしら？」

はやて「何や？優子ちゃん」

優子「何故はやては統夜の家にいるのかしら？」

こめかみをピクピクさせながら笑顔ではやてに質問をした。

はやて「それは勿論・・・一緒に住んでるからや」

はやての爆弾発言に優子と秀吉から黒いオーラが出て来た。

リビングへ来たプリムラとカナは一目散と撤退した。

秀吉「今さっき来た二人もかの？」

はやて「せやな・・・魔王さんとの頼みと二人の希望で住んでるかな」

優子「魔族か・・・一緒に住んでるといふ事は・・・もう・・・先越されてる！？」

冷静だったが内心はかなり焦っていたのは言うまでも無かった。

同棲してる事は一手二手越されているに等しいのだから・・・

はやて「まあ・・・ここには数ヶ月住み・・・尚且つ統夜のファーストキスを奪いました」

はやての爆弾発言により二人のオーラが徐々に黒くなった。

二人は見た目から普通通りだが内心は嫉妬で狂いそうになっていた。

はやて「そして・・・一緒にお風呂に入ったり・・・背中を流したりしてもろうつたな」

優子「・・・・・・・・」

秀吉「・・・・・・・・」

優子と秀吉の黒いオーラが段々と濃くなりつつあった。

はやて「そして・・・たまぐにやけど一緒に一つのベッドで寝た事があるで」

最後の発言に二人の嫉妬が限界突破した。

優子「あいつ・・・そんな事までやってもらったんだ」

秀吉「妬ましい限りじゃの」

ふふふと笑いながらそう呟いていた。

それを見たはやては大汗を掻いていた。

はやて「でも最初は私やからな」

余裕の表情で二人に言った。

優子「でも・・・負けないんだから!!」

秀吉「そうじゃ!」

優子と秀吉が宣言すると玄関から物音が聞こえた。

統夜「ただいま」

噂をすれば共通の大好きな人である統夜が帰って来た。

はやて「おかえり」

統夜「ただいま。はやて。優子と秀吉・・・何故ここに？」

二人に気が付き疑問に思った。

優子「今日貴方が学校を休んでたからノートのコピーとプリントを届けに来たのよ」

統夜「ありがとな」

笑顔で優子の頭を優しく撫でていた。

撫でられている優子は気持ちよさそうになり赤くなった。

それを見たはやてと秀吉は統夜の耳を引っ張った。

統夜「いでででで!!?」

はやて「・・・・・・・・・・」

秀吉「ふん・・・・・・・・」

二人は拗ねてそっぽを向いた。

統夜「ごめんごめん・・・・・・・・」

はやてと秀吉の頭を優しく撫でていた。

二人も優子同様に気持ちよさそうに赤くなったのは言うまでも無かった。

優子「統夜・・・本題に入るけど・・・はやてとキスしたり・・・一緒に寝たり・・・お風呂に入ったって・・・本当？」

統夜「ああ・・・・・・・・」

統夜の答えに・・・

優子「ずるいじゃない!!」

統夜「え？」

秀吉「そうじゃそうじゃ！ワシは男じゃが……一緒に入りたい！」
統夜「これは……どうすれば……んむ……」

統夜が悩んでいると優子がキスをしてきた。

優子「こ、これは……初めてなんだからね！責任取りなさいよ／／」

顔を赤くし人差し指を統夜に向けて言った。

秀吉「あ、姉上!?!いきなりはずるいのじゃ!!ん……／／／」

優子に続いて秀吉もキスをした。

秀吉「ワシの初めてを貰ったのじゃから責任を取ってほしいぞい」
はやて「いや！秀吉ちゃんは男の子やから！無理や！」

秀吉「う……じゃが……何とかなる！」

統夜「責任取るよ……いつか……」

優子「明日、学校で」

秀吉「またの」

しばらくして二人は帰って行った。

統夜「嵐だったな……」

はやて「せやね……（強敵出現やな……負けへんで……）」

統夜「どうした？」

はやて「ううん。何でもない。どやった？違法研究施設は？」

統夜「二人助けられた。途中で管理局の白騎士に遭遇したが何とか

なっ
た」

浩次の異名を聞いてはやては驚いた表情になった。

はやて「セイントクルセイダースも本格的になったなあ……」

統夜「そりゃ……蒼穹の騎士団は反管理局勢力だからな。今日の飯は何かな？」

はやて「今日は……豚の生姜焼きとご飯、味噌汁の組み合わせや。待っててな」

はやてはエプロンを着けて台所へ移動した。

統夜「（俺自身の幸せは……はやて達と一緒にいる事だ……）」

エアリスから言われた事を思い出していた。

彼はどう変わるのかは誰も分からない……

第二十八話『運命の出会い』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

たけし「俺・・・メイメイや桂花に見つかったらボツコボコだ・・・
だが俺は逃げない！どんな結果になろうと！！」

たけし「統夜さん達が授業中に英都港に異変が起きた」

たけし「港に駆けつけるとフィアツカが危険視していた異世界からの来訪者・・・修羅が現れた」

たけし「次回は『修羅降臨』テイクオフ」

オリキャラ紹介5（前書き）

浩次とルイス、アイリの詳細です。どうぞ！

オリキャラ紹介5

名前：閃導せんどう 浩次こうじ

性別：男

種族：人族

容姿：茶色の短髪で緑色の瞳をし整った顔立ち

身長：176cm

年齢：17歳

魔力光：白

魔力：AAA（測定不能）

気力：SS（測定不能）

（ ）内はリミッター解除時

魔術式：近代ベルカ式

デバイス：ジャッジナイト（アーマードデバイス）

性格：愚直なまでの素直な性格

趣味：スポーツ

好きなもの（事）：散歩

嫌いなもの（事）：反管理局

詳細：時空管理局に所属する青年。

独立部隊『セイントクルセイダー』に自ら志願し統夜達反管理局勢力に対抗する為に転属した。

階級は一佐で戦闘能力は統夜や遊輔、零斗らと互角に戦えるほどである。

内部から管理局を変えていこうとする考えを持っている。

名前：ルイス

性別：女

種族：人族

容姿：腰まである黒髪に赤い瞳をした綺麗な顔立ち

身長：155cm

スリーサイズ：B85/W56/H84

年齢：15歳

魔力光：黒

魔力：不明

気力：不明

性格：明るく活発だったが今は心を閉ざしがちになっている

趣味：絵を描く事

好きなもの(事)：景色を見る事

嫌いなもの(事)：管理局、実験

詳細：たけしによつて管理局の違法研究施設から救助された少女。

魔力素質があつたという理由で無理矢理連れて来られ実験台にされ軟禁されていた所をたけしに救われている。

何故かたけしにしか心を開かず統夜達には心を開かない。

名前：アイリ

性別：女

種族：人族

容姿：背中まである銀髪に琥珀色の瞳をした可愛い顔立ち

身長：149cm

スリーサイズ：B80/W52/H82

年齢：15歳

魔力光：琥珀色

魔力：測定不能

気力：測定不能

性格：無口で寡黙な性格だったがハジけた性格に変わる

趣味：零斗と一緒にハジける事

好きなもの(事)：ハジケ

嫌いなもの（事）：管理局、実験

詳細：統夜によって管理局の違法研究施設から救出された少女。
ルイスと同じで魔力素質があったという理由で無理矢理連れて来られ実験台にされ軟禁されていた所を統夜に救われている。

零斗と関わる事によって無口で寡黙な性格からかなり明るくハジけた性格に変わりつつある。

オリキャラ紹介5（後書き）

三人は関わる事がありますので見守ってください。

デバイス設定4 (前書き)

浩次が使用するジャツジナイトの詳細です。どうぞ！

デバイス設定4

デバイス：ジャツジナイト（アーマードデバイス）

形状：金が混ざった白いアーマー

待機状態：金色の宝石が埋め込まれた白い腕輪

搭載システム：BIES、MBS、MFS、セイントオーシャンシステム搭載

備考：ジャツジクルセイダーズが浩次専用として開発されたアーマードデバイス。

アブソリュートエターナルの基本データを基にしている為性能は高い。

武装は背部に砲身とウエポンラックがある一対二翼のリフター型バツクパツク「ジャツジユニット」

ジャツジユニットのウエポンラックにある高周波振動の機能がある二振りある鞘付の長剣「ナイトカリバー」

アウフプラー・ドライツェーンを応用したジャツジユニットの右部分にある折り畳み式の砲台「ジャツジブラスター」

ジャツジブラスターを発射するにはナイトシューターを合体させる必要がある。

両腕には攻防に転用できる陽電子リフレクター発生装置とハーケンブラスター、掌の部分にパルマフィオキーナがある籠手「ナイトアームズ」

右手にノーマルモードと最大出力のバーストモードの切り替えが可能なライフル「ナイトシューター」

両脚には「グリフォンビームブレイド」

「セイントオーシャンシステム」はアブソリュートエターナルのオーシャンシステムを応用し金が混ざった白いアーマーから白く輝いた白いアーマーに変化し攻撃力と機動性、出力が上がる。

管制人格は女性で浩次に忠実な性格。

デバイス設定4（後書き）

元ネタはランスロットコンクエスターですかね。コードギアスのKMFってカッコイイのがありますし・・・

第二十九話『修羅降臨』（前書き）

蒼穹の騎士団・・・五霸天王に挑む・・・その結末は！

翔子「HERO'S EPISODE第二十九話・・・始まる」

第二十九話 『修羅降臨』

第二十九話 『修羅降臨』

文月学園に徒歩で登校し教室へ向いクラスメイトに挨拶をしていた。

統夜「おはようさくん」

優子「おはよう。統夜。今日もバイク登校？」

統夜「今日は歩きた。何か嫌な予感がしてね・・・」

優子「ふ〜ん・・・嫌な予感・・・ねえ・・・」

その頃異世界にて

？「地球か・・・」

黒髪の短髪に真紅の瞳をし強面な顔立ちをした大男が部下らしき人物が写した地球を見ていた。

？2「そうだね・・・蒼穹の死神に瑠璃色の軍神、マイティ真拳継承者、紅蓮の猛虎、超力戦士、気力使いの戦士が一番厄介だ」

肩まである銀髪に紫色の瞳をし整った顔立ちをした青年が呟いた。

？3「我らが赴くのか？」

肩まである赤い髪に翡翠色の瞳をした整った顔立ちをした青年が意見をした。

? 「ああ・・・我らの力を奴等に見せる・・・蒼穹の死神・・・奴は面白い・・・」

? 4 「たった一人で腐敗した管理局に挑むとは・・・無謀過ぎるな・・・」

肩まである水色の髪に黒い瞳をした綺麗な顔立ちをした女性が呆れた口調で言っていた。

? 5 「でもこいつ・・・戦闘能力と頭脳は半端じゃないっぽいし・・・戦ってみたいよ」

腰まである金色の髪に真紅の瞳をした少し幼さを残した顔立ちをした少女が嬉しそうに言った。

? 2 「彼こそイレギュラーかもね・・・月の戦いで悪魔になったユルゲンを圧倒した・・・」

? 「ほう・・・」

? 3 「面白い・・・」

? 4 「では・・・」

? 5 「行こうか」

五人は地球へ転移を始めた。

その頃・・・

統夜「(何だ!?この気配は・・・)先生、気分が悪いんで・・・保健室へ行ってきました」

授業中だったので先生に保健室へ行く事を伝えて教室から出てそのまま外へ出た。

統夜「一体何だ・・・この気配は・・・」

異変が起きている場所へ向かう途中で遊輔と達哉、零斗、ダイチの四人がやって来た。

統夜「お前ら・・・何故・・・」

遊輔「俺も嫌な予感がしてな・・・」

零斗「強い力を感じてな・・・」

達哉「急ごう」

ダイチ「ああ」

五人の戦士は異変が起きている場所である英都港まで辿り着いた。

統夜「港か・・・あれか・・・」

海方面へ視線を移すと空間に割れ目が入っていた。すると割れ目が徐々に広くなり五人の男女が現れた。

統夜「誰だ？アンタらは」

？「我らは修羅界から来た異邦人だ」

統夜「修羅だと!？」

達哉「フィアツカが言っていた勢力か・・・」

統夜と達哉の二人は驚いていた。

彼女が言っていた修羅が目の前にいるのだから・・・

?2「彼女・・・ああ・・・あの思念体か・・・」

統夜「何が目的だ？」

？「我らは全次元世界を統一させ・・・強い世界にする為だ！」

統夜「強い世界に・・・か・・・」

ダイチ「おいおい・・・大丈夫かよ・・・」

統夜「いや・・・奴らは本気だ・・・それなりの力を持つ」

五人の男女を見てそう言っていた。

デューク「我が名はデューク・・・ごはてんのつ五霸王の長にして修羅界の霸王なり！！」

服装が上に真紅のワイシャツを着て下に黒い長ズボンを穿き、両手に黒い生地フィンガーレスグローブ、両足に真紅の足具をそれぞれ身に着けた、黒髪の短髪に真紅の瞳をし強面な顔立ちの青年が名乗った。

ルアフ「僕はルアフ・・・五霸王の一人にして『智将のルアフ』と呼ばれている」

服装が白いスーツに両手に黒いフィンガーレスグローブを嵌めた、肩まである銀髪に紫色の瞳をし整った顔立ちの青年が名乗った。

レイヴン「我が名はレイヴン・・・五霸王の一人にして『閃光のレイヴン』と呼ばれている」

服装は真紅の中華服で真紅のフィンガーレスグローブを嵌めた姿をした、肩まである赤い髪に翡翠色の瞳をした整った顔立ちの青年が名乗った。

ミリア「私の名はミリア・・・五霸王の一人にして『氷槍のミリア』

ア』と呼ばれている！」

服装は上に水色のノースリーブを着て、下に白いロングスカートを着き黒い靴下や靴を身に付けており、肩まである水色の髪に黒い瞳をした綺麗な顔立ちをした女性が名乗った。

イリア「私はイリア。五霸天王の一人にして『疾風のイリア』と呼ばれているよ」

最後に上に翠色のへそ出しノースリーブを着て下に翠のビキニパンツを着き、黒いニーソックスとダークブラウンのブーツを身につけた、腰まである金色の髪に真紅の瞳をした少し幼さを残した顔立ちをした少女が名乗った。

五人の自己紹介を聞いた統夜達は驚きを隠せずにいた。
無理も無い。修羅界の主力である五霸天王全員が来たのだから・・・

零斗「おいおい・・・最後のは変態じゃねえか」

イリア「アンタ・・・いい度胸よね・・・マイティ真拳継承者！」

零斗「俺は本当の事を言っただけだぜ」

イリア「私はこいつをぶちのめす！」

イリアは零斗を指名し・・・

ルアフ「やれやれ・・・僕は彼（遊輔）を・・・」

ルアフは遊輔を指名し・・・

レイヴン「私は彼をダイチ・・・」

レイヴンはダイチを指名し・・・

ミリア「私は次期月王と戦う」

ミリアは達哉を指名し・・・

デューク「我は貴様だ・・・天川 統夜!!」

デュークは統夜を指名した。

五人が戦う相手を決めて戦い始めた。

零斗VSイリアサイド

零斗「先手必勝!マイティ真拳奥義!竜巻旋風脚!」

先手必勝として超高速回転をした回し蹴りをイリアに攻撃したがイリアは風の防壁を張って吹き飛ばした。

その後にイリアが拳を構え零斗に向って疾風の如く駆け抜けた。

イリア「滅神轟撃拳!!」

裏拳を放った後気力とは違う覇気を纏った乱舞攻撃を見舞った後斜め上に向かって飛び蹴りを放った。

零斗はダメージを受けながらも空中で受け身をとって対策を考えていた。

イリア「滅神拳の標的にして殺してやるんだから感謝しなさいよ」

零斗「それは御免だな!(滅神拳・・・こいつは油断出来ないな・・・

・」

イリアは気力を用いた砲撃を放ったが零斗は回避し反撃に出た。

零斗「マイティ真拳奥義！ヒートドライブ！」

零斗の右手から炎が出現しその後に物凄い速さで突進しイリアを吹き飛ばし燃やした。

イリア「中々やるじゃん！」

イリアにヒットしたがダメージは少なかった。

零斗「五霸天王は伊達じゃないか・・・」

その後零斗とイリアは拳と蹴りのぶつかり合いが始まった。

遊輔VSルアフサイド

遊輔「おおおお！！！」

心装でルアフの攻撃を防いでいた。

ルアフ「攻撃力と打たれ強さは中々だけど・・・」

己の武器である間接剣を鞭のように見えない速さで振るった。遊輔は身体を回転し二槍の炎の渦で防御し突進を仕掛けた。

遊輔「紅蓮二閃！」

二槍の斬撃を放とうとしたがルアフは軽々と避けた。

遊輔「くっ・・・素早い！」

ルアフ「確かに君のパワーなら僕も危ういけどね・・・」

遊輔の弱点を分かり切ったかのように微笑んでいた。

遊輔「烈火！！」

超高速の二槍の突きを放ったがルアフは間合いをとり間接剣を振るって防いだ。

ルアフ「なるほど・・・速さもそれなりに備わってるか・・・」

遊輔「まだまだ！！」

遊輔の二槍とルアフの間接剣の剣劇が始まった。

ダイチVSレイヴンサイド

ダイチ「はぁ！」

レイヴン「むん！」

激しい拳のぶつかり合いが始まった。

レイヴンは間合いをとり気力と覇気、炎を纏った拳でダイチを吹き飛ばした。

ダイチ「（い、今の攻撃・・・見えなかった・・・こいつ・・・化け物か！？）」

レイヴン「その程度か？ 気力使い・・・」

レイヴンは閃光に近い瞬速の拳の連撃を放ったがダイチは気力で身体強化をして辛うじて回避したが数回攻撃に掠っていた。

ダイチ「（達哉以上に速い・・・だがやるっきゃねえ！！）天火星秘技・流星閃光！！」

中国刀を手にしてレイヴンに超高速で無数の突きを一点に打ち込ませ直撃させようとしたが残像であった為避けられてしまった。

その後にレイヴンは気力の纏った拳でダイチの腹部に直撃させた。

ダイチ「グハツ・・・」

左手で腹部を抑えながらも瞳に闘志だけは消えていなかった。

レイヴン「ほう・・・」

ダイチ「まだまだ！！行くぜ！ 気力転身！ オーラチェンジャー！」

ダイチは右手に付いているオーラギャザーのキーを展開させ、垂直に立てた左手のオーラスプレッダーに差し込んでリユウレンジャーに変身した。

ダイチ「ここからが本番だぜ！！」

拳を構えたままレイヴンへ向かい激しいぶつかり合いが始まった。

達哉VSミリアサイド

ミリア「あの小僧ダイチではあの方には勝てない」
達哉「どういう意味だ？」

刀と氷の槍の鏢競り合いが行われていた。

ミリア「レイヴンは天川 統夜と戦っている修羅王デューク様に匹敵する力を持っているからだ」

達哉「何だと!？」

ミリア「だが分からん・・・何故あの小僧を指名したか・・・」

達哉「さあな!俺はアンタを倒す!」

刀に冷気を収束し始めバックステップして鏢競り合いを中断した。

達哉「ブリザードウェイブ!」

地面に刀を刺し氷で出来た波を発生させミリアに襲い掛からせた。

ミリア「甘い!氷槍乱舞!」

身体を高速回転させながら氷の槍を打ち出し相殺させた。

達哉「伊達じゃないか・・・」

ミリア「・・・」

達哉とミリアは同時に瞬速で駆け抜け抜け所々で剣と槍のぶつかり合いをしていた。

統夜VSデュークサイド

統夜「天神轟覇衝！」
デューク「覇皇衝覇！」

統夜は手から四力の衝撃波を出し、デュークは手から覇気の衝撃波の激突が始まった。

統夜「こいつ……」
デューク「ほう……やるな……だが！」

デュークの覇皇衝覇が押し始め統夜を吹き飛ばした。

統夜「ぐ……霸王は伊達じゃ無いな……」

地面に落ちた後直ぐに起き上がった。

デューク「天神拳か……貴様の天神拳など……我の覇皇拳には及ばぬ！」

統夜「あんまし上から目線から見ると痛い目見るぜ……霸王さん！」

拳の連撃をお互いぶつかり合い始めた。
ぶつかり合う度に衝撃が発生していた。
そして拳の連撃はデュークが押し始め……

デューク「むんっ！」

覇気のある拳で統夜に直撃させた。

統夜「ぐはっ！」

デューク「そんなもので我に挑むつもりだったのか？見せてみる……」

・お前の力を……」
統夜「うるせえ……見せてやるよ……大猿野郎……」

零斗VSイリアサイド

零斗「くそっ！速い！？」

イリア「遅い遅い！！」

零斗はイリアの速さについてこれずただ防御しているだけだった。そのお陰でダメージが蓄積している。

零斗「（手はある……）……」

目を閉じ防御の構えをとった。

イリア「もう諦めたの？弱いわね」

風のある拳で零斗に攻撃を仕掛けた。
その瞬間零斗は目を開けて拳を掴んだ瞬間合気道の要領でイリアを地面に叩き落とし拳を鳩尾に直撃させた。

零斗「マイティ真拳奥義……心眼 葛落とし！！」

イリア「ぐ……合気道か……」

直撃を受けたが辛うじて立ち上がった。

遊輔VSルアフサイド

遊輔「焰牙天衝突!!」

統夜が使用している月牙天衝を応用した斬撃を焰の突きでルアフに攻撃を仕掛けた。

ルアフ「段々と僕について来ているね・・・だけど・・・」

刀身に闇の覇気を込めて瞬速で振るい瞬発力を利用した勢いで相殺した。

遊輔「やるな!」

ルアフ「力押しだけじゃ僕には勝てない・・・覚えておくんだね。そろそろ・・・決着がつく頃だと思わないか?」

遊輔「どういう意味だ?」

ルアフ「気力使いとレイヴンの対決さ・・・彼じゃ役不足もいい所だよ・・・」

ダイチVSレイヴンサイド

ダイチ「つ、強い・・・」

レイヴン「・・・」

ダメージを受けているダイチに対しレイヴンはダメージを受けていなかった。

レイヴン「お前はまだ自分の力を目覚めさせていない・・・」

両腕に気力と覇気を込めて炎を纏い始め・・・

レイヴン「紅蓮衝撃波!!」

ダイチに向って瞬速に突撃して左腕で掴み、右腕で殴り飛ばした。

ダイチ「グハツ……こ、こいつ……」
レイヴン「……………」

達哉VSミリアサイド

達哉「ダイチ!？」

ミリア「余所見をしている余裕はあるのか？」

冷気を纏った蹴りが襲い掛かってきたが達哉は辛うじて避けた。

達哉「くそっ！」

斬撃を飛ばした。

ミリア「迷いのある斬撃など！」

覇気の籠った拳で相殺した。

ミリア「今の貴様を屠っても意味が無い……」

統夜は髪の色が銀髪に変化し瞳の瞳孔が縦になり瞳の色が真紅に変化した姿……吸血鬼化に変化した。

デューク「ほう……そうでなくては面白くも無い……はぁ!！」

デュークは黄金の闘気と覇気を放出し拳を構えた。

統夜「行くぜ!!!」

四力を最大限まで放出し右拳に収束し始めた。

統夜「こいつで決着を着けてやる!!!」

デューク「来い!!!」

統夜とデュークは同時に駆け抜け拳をぶつけ大きな光のある衝撃波が発生した。

光で姿が見えなく状況が分からなかった。

そして人影が光の衝撃波から飛び出し吹き飛ばされた。

デューク「中々いい攻撃だった・・・」

光の衝撃波が収まるとデュークだけが立っていた。

統夜「ぐ・・・」

先程光の衝撃波から飛び出し吹き飛ばされたのは統夜だった。
尚吸血鬼化は強制的に解除されている。

デューク「退くぞ・・・ルアフ、レイヴン、ミア、イリア・・・」

デュークはルアフ達を召集した。

そして四人は集まった。

ルアフ「もう終わりかい？」

デューク「ああ・・・」

イリア「こいつ（統夜）に止めを刺しておいた方がいいんじゃない？」

ミリア「イリアの意見に賛成だな・・・」

デューク「待て・・・こやつは生かしておく・・・」

ミリア「しかし！」

ルアフ「まあ・・・彼らはまだ弱い・・・脅威にはならない」

レイヴン「そうだな・・・」

デューク「我らに対抗しなくては面白くも無い・・・久方ぶりに楽しめた」

転移の準備を始めた。

デューク「天川 統夜よ！！貴様を屠る時は天の高みへ目指した時だ！！そして我を超えてみせよ！！」

立ち上がった統夜に対し右拳を上へかざし誇り高く宣言した。

そして五人は転移して消えた。

統夜「修羅・・・あいつらが来たんじゃない・・・修行するしかねえな・・・」

遊輔達の所へ移動した。

統夜「大丈夫か？」

遊輔「ああ・・・」

零斗「何とかな・・・」

ダイチ「あいつら・・・異常じゃない・・・」

達哉「フィアツカが修羅を恐れた理由が分かったような気がする・・・」

五人は集まった。

尚ダイチは達哉に肩を貸してもらっている。

零斗「マイティ真拳奥義・・・ヒーリング」

統夜達をヒーリングして回復させた。

その後五人は歩き始めた。

遊輔「俺からの提案・・・いいか？」

統夜「何だ？」

遊輔「俺達・・・本格的な修行をした方がいいんじゃないかって・・・」

達哉「いい案だな・・・だが・・・」

ダイチ「学校休む事か？んなもん気にするな」

統夜「そうそう・・・明日から実行しよう」

零斗「場所はどーするんだ？」

統夜「集合場所は本拠地・・・明久とたけしも参加させる・・・」

歩きながら今後について打ち合わせをしていた。

達哉「それで行こうか・・・」

零斗「賛成だな」

ダイチ「反対はしない。修行しなかったら今度は生きてないしな・・・」

遊輔「俺も賛成だ」

達哉と零斗、ダイチ、遊輔は賛成していた。

そしてその後五人は別れて学園へ戻った。

第二十九話『修羅降臨』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

明久「何とか修羅は撤退したけど・・・本当に強いね・・・」

明久「僕達は学園を休み不思議な駄菓子屋へ着いた。ここでやるの？」

明久「次回は『これはおふぎですか？いいえちゃんとした修行場です』テイクオフ」

修羅の詳細(前書き)

修羅の詳細です。どじろどじろ！

修羅の詳細

『修羅』

詳細：かつて月と地球の戦いに介入した異世界の勢力。
強い者が弱い者を支配する弱肉強食の世界で、頂点に立つ者は『霸王』と呼ばれている。
中に五霸王ごはてんのうと呼ばれる五人の実力者がいるが統夜や遊輔、零斗に匹敵する強さを誇る。

修羅族というのは修羅界にいる戦闘種族を指す。

名前：デューク

性別：男

種族：修羅族

容姿：黒髪の短髪に真紅の瞳をし強面な顔立ち

身長：198cm

年齢：不明

魔力光：金

魔力：測定不能

気力：測定不能

覇気：測定不能

性格：威風堂々で誇り高い性格

趣味：拳を鍛える事

好きなもの（事）：特に無い

嫌いなもの（事）：弱き者

詳細：修羅の世界を支配し頂点に立っている霸王。

圧倒的な戦闘能力を持つだけでなくカリスマ性も備わっている。

全次元世界を強くするため、ただ敵を屠るのではなく、一度は自分

の元に降伏するように勧告し、有能な戦士や魔導師はたとえ仇敵であつたとしても自分の下に受け入れるという、器量も兼ね備えている。

服装は上に真紅のワイシャツを着て下に黒い長ズボンを穿き、両手に黒い生地フィンガーレスグローブ、両足に真紅の足具をそれぞれ身に着けた姿をしている。

名前：ルアフ

性別：男

種族：修羅族

容姿：肩まである銀髪に紫色の瞳をし整った顔立ち

身長：173cm

年齢：不明

魔力光：紫

魔力：測定不能

気力：測定不能

覇気：測定不能

性格：穏やかな性格だが非情な手段も厭わない冷徹な性格

趣味：読書

好きなもの（事）：策を巡らせる事

嫌いなもの（事）：デュークを侮辱する輩

詳細：修羅の世界の戦士にしてデュークの親友であり修羅界の天才軍師。

デュークとは違い関節剣を使用した剣術を使う。

デュークの不在は残りの五覇天王と修羅界の兵士達へ指揮する事がある。

修羅界では『智将のルアフ』と呼ばれている。

服装は白いスーツに両手に黒いフィンガーレスグローブを嵌めた姿をしている。

名前：レイヴン

性別：男

種族：修羅族

容姿：肩まである赤い髪に翡翠色の瞳をした整った顔立ち

身長：190cm

年齢：不明

魔力光：真紅

魔力：測定不能

気力：測定不能

覇気：測定不能

性格：冷静沈着だが少々熱い部分がある

趣味：強き者と戦う事

好きなもの(事)：特に無い

嫌いなもの(事)：信念無き輩

詳細：五覇天王の一人にして炎の力と気力、覇気を用いて戦う戦士。

修羅界ではNo.2の実力者でデュークに匹敵する力を持つにもか

かわらず、霸王デュークに絶対的な忠誠を誓っている。

気力と覇気に関してはかなりの使い手である。

修羅界では『閃光のレイヴン』と呼ばれている。

服装は真紅の中華服で真紅のフィンガーレスグローブを嵌めた姿を

している。

名前：ミリア

性別：女

種族：修羅族

容姿：肩まである水色の髪に黒い瞳をした綺麗な顔立ち

身長：164cm

スリーサイズ：B87/W58/H88

年齢：不明

魔力光：水色

魔力：測定不能

気力：測定不能

覇気：測定不能

性格：自分や他人にも厳しい性格

趣味：強い者と戦う事

好きなもの（事）：特に無い

嫌いなもの（事）：軟弱な輩

詳細：五霸天王の一人にして氷の力を持つ女戦士

敵には容赦しないが、自身に従うものには寛容であり、その美貌もあいまつて修羅内でも信奉者が多い。

氷を用いた戦闘能力は高く修羅界の中で五本の指に数えられるほどである。

修羅界では『氷槍のミリア』と呼ばれている。

服装は上に水色のノースリーブを着て、下に白いロングスカートを穿き黒い靴下や靴を身に着けた姿をしている。

名前：イリア

性別：女

種族：修羅族

容姿：腰まである金色の髪に真紅の瞳を少し幼さを残した顔立ち

身長：152cm

スリーサイズ：B76/W54/H77

年齢：不明

魔力光：翠

魔力：測定不能

気力：測定不能

覇気：測定不能

性格：明るく好戦的な性格

趣味：戦う事

好きなもの（事）：強い奴

嫌いなもの（事）：弱い奴、風を乱す奴

詳細：五霸天王の一人にして風の力を持つ女戦士。

戦闘スタイルは滅神拳と呼ばれる拳法を使い風を斬撃や防壁等に転用する等操る事が出来る。

風を操る事から修羅界では『疾風のイリア』の異名を持つ。

服装は上に翠色のへそ出しノースリーブを着て下に翠のビキニパンツを穿き、黒いニーソックスとダークブラウンのブーツを身につけた姿をしている。

修羅の詳細（後書き）

五人以外の修羅族も出ると思いますがよろしくお願いします。

第三十話『これはおふさげですか？いいえちゃんとした修行場です』（前書き）

フェイト「身の程を知れ!!」

なのは「フェイトちゃん!？」

はやて「似合いですぎやな・・・」

リン「HERO・S EPISODE第三十話始まります」

第三十話『これはおふざけですか？いいえちゃんとした修行場です』

第三十話『これはおふざけですか？いいえちゃんとした修行場です』

統夜サイド

修羅が撤退し家に帰るとある巻き物をリビングで見っていた。

統夜「（天神拳を完全に会得するには時間が必要だ・・・今の俺達じゃ霸王には勝てん・・・）」

デュークと戦い自分に何が必要なかを考えていた。

統夜「（吸血鬼の力をフルに扱う事も頭に入れておかないといけないな・・・）」

デューク戦で吸血鬼化が通用しなかった事を振り返った。
今のままではデュークに勝てないと思ったからだ。

はやて「何の巻き物や？」

はやてが麦茶が入ったグラス二つを乗せたおぼんを手にしてグラスを置いた後統夜の隣に座った。

統夜「天神拳と呼ばれる流派の巻き物だ。まだ最初しか覚えてないが・・・」

はやて「何かあったんか？」

はやては統夜の事はお見通しなのか質問をしていた。

統夜「修羅が来た……」

はやて「修羅？」

統夜「リースリット……フィアツカが最も警戒していた異世界からの勢力だよ。修羅王デュークに吸血鬼化が通じなかった」

はやて「何やて!？」

はやては驚いていた。

無理も無い現在における統夜の最強形態が通用しなかったのだから・

・

統夜を知るはやてはこのまま引き下がらないと思っている。

はやて「修行始めるんやろ？」

統夜「ああ……このまま終わる俺じゃないぜ……」

はやて「私も付き合っついで」

統夜「えっ？」

はやてが修行に付き合っつ事に驚いていた。

はやて「統夜と一緒にいたいだけという生半可な事やない……一緒に強くなりたいんや……心と身体を……」

はやての真剣な表情で言った。

迷いと決意の籠った瞳で……

統夜「はやて……覚悟をしてみたいだな……」

はやて「ずっと統夜やシグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラに守られては駄目なんや……私自身の手で統夜や皆を守りたい……」

はやての覚悟と決意に統夜は・・・

統夜「分かった・・・厳しいかもしれんが・・・頑張れるか？」

はやて「勿論や」

統夜「許す・・・」

はやてを修行に付き合う許可をとった。

はやて「おおきに」

統夜「但し条件がある」

はやて「条件？」

統夜「シグナム達・・・ヴォルケンリッターを連れて行く事だ」

はやて「シグナム達を？」

統夜「いずれヴォルケンリッターも必要とされる時が来る・・・主だけ強くなつてはな・・・」

はやて「ええよ」

統夜の修行にはやてとヴォルケンリッターが加わる事が決まった。

達哉サイド

達哉は自分の部屋で考え事をしていた。

達哉「今のままじゃ・・・ミリアには勝てない・・・本気を出していなかった・・・」

スピードは達哉が上だがパワー面では統夜や遊輔、零斗、ダイチに及ばない為弱点になりつつあった。

パワー不足だけじゃなく防御力即ち打たれ強さも低い事も自覚して

いた。

達哉「ブランクがあるって……辛いよな……」

そう呟いているとドアが開きフィーナが入って来た。

フィーナ「どうかしたの？達哉」

達哉「考え事をね……」

フィーナ「考え事？」

達哉「明日学校休んで修行しようと考えているんだ……」

フィーナ「何があつたの？授業を抜けた後に……」

達哉「数ヶ月前にフィアツカが言つてた修羅と呼ばれる勢力が現れた……」

フィーナ「修羅……」

修羅と聞いて一瞬驚き真剣な表情になった。

その後疑問に思つた事があつた。何故月と地球の戦いに現れなかつた事に対して……

達哉「今の俺じゃ勝てなかつた……」

フィーナ「でも……諦めずに勝つのでしょうか？達哉は」

フィーナは微笑んで達哉に問い掛けた。

達哉「ああ……皆を守る為に力をつける為に……」

フィーナ「頑張つてね。私……私達は達哉を信じてるから」

遊輔&零斗&ダイチサイド

遊輔「今の俺達で勝つ事は難しいな・・・」

零斗「ああ・・・変態娘イリテには何とか勝てたが・・・」

ダイチ「レイヴンって奴は俺は勝てなかった・・・」

たけし「修羅って恐ろしいな・・・」

遊輔「まあ・・・ダイチはお気の毒だな」

零斗「あいつは俺か統夜、遊輔にしか対応出来ん・・・」

本拠地で修羅の詳細をたけしに教え対策を考えていた。

零斗「だが・・・修行をすれば何とかなると思っぜ？」

ダイチ「そうだな・・・」

遊輔「自分の弱点を探し克服するようにな・・・」

遊輔達は弱点を克服する為に修行案を考えていた。

零斗「俺達の敵はセントクルセイダーズだけじゃない・・・」

遊輔「修羅が加わった以上・・・厳しくなりそうだから・・・」

ダイチ「徹底的に頑張らないとな・・・」

たけし「ああ・・・」

修羅という新たな勢力が増えた事に対し改めて気合いを入れ始めた。

時が過ぎ翌朝・・・

統夜「集まったか？」

遊輔「ああ」

零斗「大丈夫だ」

本拠地の前に統夜、遊輔、達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久、な

のは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィ
ーラ（狼形態）の計14名が集まっていた。

達哉「はやても参加するのか？」

はやて「勿論や」

統夜「咲夜の件もあるからな・・・んじゃ・・・行くぞ」

統夜一同はある場所へ移動した。

数分後一同は駄菓子屋である『斉藤商店』の前に着いた。

達哉「おい・・・」

統夜「何だ？」

達哉「これはふざけてるのか？」

達哉が額に青筋を浮かべ統夜に問い掛けた。

統夜「いいや・・・ふざけてないぞ」

零斗「統夜・・・いくらなんでもふざけ過ぎだろ？」

ダイチ「そうだぞ」

突然統夜が某魔装少女のコスプレをし、零斗はプレートアーマーと
ガントレットが特徴の某ネクロマンサーのコスプレをし、ダイチは
黒いマントを羽織り某吸血忍者のコスプレをしていた。

明久「お前らもふざけてるだろうー!!」

明久がツツコミをしていた。

ツツコミ役の方が達哉に稟、明久の三人になったのは言うまでも無
かった。

たけし「うおおおーっ！俺もやるぜ！」

たけしは某アウトドア系の吸血忍者のコスプレをしていた。

達哉「お前もやるなーっ！！」

たけしのコスプレに対して怒鳴ってツッコミをした。

その時・・・

？「うるさいですよ・・・今何時だと思っているんですか？」

肩まである白髪に黒い眼をした顔立ちでいつも帽子を被っている男性が店の中から現れた。

達哉「す、すみませんでした・・・」

統夜「何をしてるんだよ」

零斗「近所迷惑だろ？」

ダイチ「次期月王らしからぬ行動だな」

たけし「そっだそっだ」

達哉は統夜達四人の言いたい放題に耐え謝罪していた。

尚統夜達四人は元の格好に戻っていた。

その頃蒼穹の騎士団の本拠地寮では・・・

？「ここにたけしがいるのね」

？2「そっよ」

黒いロングヘアの少女と猫耳フードを被った少女の二人が本拠地

寮の前に来ていた。

？「管理局に狙われてるたけしが所属している・・・」

？「蒼穹の騎士団の本拠地・・・」

そして二人は中へ入った。

入ると誰もいなかった。

そう・・・ここに住んでいる零斗や遊輔、ダイチ、たけしは斉藤商店へ修行に出掛けているのだから・・・

？「あれ・・・いないね。桂花・・・」

桂花と呼ばれた猫耳フードを被った少女に問い掛けた。

桂花「そのようね。メイメイ」

メイメイと呼ばれた黒いロングヘアの少女に言った。

メイメイ「何処に行ったんだろ？」

桂花「とりあえず・・・たけしが来るのを待ちましょう」

メイメイ「そうね。でも・・・いやな予感が・・・。。。。してるね・・・」

メイメイの視線にはルイスがいた。

ルイス「誰・・・？」

メイメイと桂花の二人を警戒していた。

知らない二人は管理局の追手と思ったそうなの・・・

メイメイ「私はメイメイ」

桂花「私は桂花。貴方はこの住人？」

メイメイと桂花の二人はルイスに自己紹介をした。

ルイス「私はルイス・・・うん・・・この住人・・・」

メイメイ「たけしってここに住んでる？」

ルイス「うん・・・ここに住んでる・・・」

メイメイ「案内して」

ルイス「分かった・・・」

二人をたけしの部屋へ案内した。

メイメイ「ここがたけしの部屋か」

たけしの部屋の中へ入った。

その後ルイスは座った。

桂花「貴方・・・一ついいかしら？」

ルイス「何？」

桂花は疑問に思ったのかルイスに質問をした。

桂花「貴方が住んでいる部屋は何処なの？」

ルイス「ここ・・・たけしと一緒に住んでる・・・」

それを聞いた二人は・・・

メイメイ、桂花「な、何ですってー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

二人の絶叫は本拠地全体に響いたそうなの……
その後の二人は黒いオーラが出ていたのは言うまでも無かった。

斉藤商店サイド

たけし「何か……嫌な予感が……」

統夜「どうした？たけし」

たけし「寮に帰ると……怖い事が起きそうな気がするんだ……」

佐助「私はここの店主である斉藤 佐助と言います。どうぞよろしくお願ひします」

佐助は自己紹介をした。

達哉「俺は朝霧 達哉と言います」

遊輔「俺は桜木 遊輔」

零斗「俺は北郷 零斗。よろしくな」

ダイチ「俺はリュウ・ダイチ」

たけし「俺は竜崎 たけし」

明久「僕は吉井 明久です。よろしくお願ひします」

なのは「私は高町 なのはと言います。よろしくお願ひします」

フェイト「私はフェイト」
「T」
「ハラオウンと言います。よろしくお願ひします」

はやて「私は八神 はやてと言います」

シグナム「私はシグナムです」

ヴィータ「私はヴィータだ」

シャル「私はシャルと言います」

ザフィーラ「ザフィーラだ……」

統夜以外知らない人達はそれぞれ自己紹介をした。

佐助「皆さん。よろしく願いしますね」

統夜「修行空間を使いたいんだけどいいかな？」

佐助「構いませんよ」

統夜「それと・・・例の道具を14ぐらい借りたい」

佐助「構いませんよ。それと・・・頼んでおいたものも出来上がり
ました」

佐助と打ち合わせをした後統夜は飴玉らしきものを貰った。

統夜「なのは」

なのは「何、統夜君」

統夜「こいつを修行前に飲んでおけ」

飴玉をなのはに渡した。

佐助「では・・・皆さん。準備は出来ましたか？」

佐助は統夜達に問い掛けた。

統夜「ああ」

遊輔「勿論」

達哉「望む所です」

零斗「より強くなってやるぜ」

ダイチ「出来てるぜ」

たけし「ああ」

明久「大丈夫だ」

なのは「はい」

フェイト「大丈夫です」

はやて「覚悟は出来てるで」

シグナム「望む所だ・・・」

ウィータ「修行上等！」

シヤマル「覚悟は出来ています！」

ザフィーラ「とうに出来ている・・・」

佐助「では・・・行きますよ」

中に入り装置を弄ると光り出した。

そして佐助は扉を開けるとそこには莫大に広い大地だった。

統夜達は中へ入ると佐助は重しらしきものを置いた。

佐助「では皆さん・・・『一年間』の修行を頑張ってくださいね」

そう言つて佐助は空間部屋から出た。

達哉「どういう意味だ？」

統夜「この空間は外の世界と時間の流れる早さが異なり、ここでの1年は外の世界の時間の1日と同じになる」

零斗「なるほど・・・お前は入った事あったのか？」

統夜「ああ・・・ユルゲンとの戦いから一週間後に佐助さんと知り合つて・・・修行空間でやったが・・・一ヶ月ぐらいしかもたなかった・・・」

ダイチ「この重力でなら一ヶ月は厳しいよな・・・外の世界の10倍あるぜ」

ダイチは納得していた。

統夜「根を上げるなよ？」

遊輔「誰が上げるかよ・・・」

統夜と遊輔がバチバチと火花を散らしていた。

はやて「厳しいけど頑張るで・・・」
なのは「その前に・・・」

なのはは統夜から渡された飴玉を飲み込んだ。
飲み込んだ後電撃が走ったかのような痛みがきて膝を着いた。

なのは「ぐ・・・ああ・・・んくっ・・・んあっ・・・」
フェイト「ちよっと！？なのはは何を渡したの?!」

フェイトは統夜に怒鳴って問い掛けた。

統夜「なのはが無茶して負った大怪我と俺との戦いで受けたダメージを一気に無くす薬だ・・・」

ヴィータ「でも無茶苦茶だろ!!」

統夜「このままだとなのはは無茶をする・・・お前らが一番分かっている筈だ」

ダイチ「でも・・・いやらしい響きになりそうだな・・・」

統夜「ダイチ・・・スケベ心を無くす修行したらどうだ?」

統夜の視線にはフェイトとはやて、シグナム、ヴィータ、シャマルがダイチを睨んでいる場面が映っていた。

ダイチ「今は・・・抑えよう・・・命は誰だって惜しい・・・」

しばらくしてなのはは立ち上がった。

統夜「気分はどうだ?」

なのは「軽くなった。ありがとう。統夜君」

なのはは笑顔で統夜に感謝していた。

零斗「さて・・・分担を決めるぞ」

蒼穹の騎士団の副リーダーにして参謀役である零斗が分担をした。統夜と零斗、達哉とダイチ、明久と遊輔、たけしとヴォルケンリッター、なのはとフェイト、はやての組み合わせで修行が始まった。

統夜「零斗と修行か・・・」

零斗「お互い強くなるうぜ」

達哉「ブランクを取り戻す・・・」

ダイチ「新たな技を作り・・・基本的な事からやり直す・・・」
明久「よろしくね。遊輔」

遊輔「お互い強さの高みまで目指そうぜ」

たけし「強くなって皆を守るようにするぞ」

シグナム「竜崎・・・よろしく頼むぞ」

ヴィータ「覚悟しとけよ」

シャマル「一緒に頑張りましょう」

ザファイラ「手加減はせんぞ」

なのは「頑張らなきゃ・・・」

フェイト「乗り越えよう」

はやて「せやな・・・一緒に進むと決めたんや・・・」

それぞれ重しである鎧を装着して違う場所で修行を始めた。

尚重しである鎧の重さは違い50キロ（統夜と遊輔）、30キロ（零斗とダイチ）、20キロ（達哉と明久、たけし）であり、女性陣の鎧の重さは15キロである。

佐助「一年後が楽しみですね・・・皆さんの・・・」

佐助は店の中で一生懸命頑張っている統夜達を期待していた。

第三十話『これはおふざけですか？いいえちゃんとした修行場です』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

ヴィータ「ようやく始まった地獄に近いあたし達の修行……」

ヴィータ「魔法も大事だけど身体能力向上も大事だしな……」

ヴィータ「統夜が天神拳の会得と吸血鬼化での生活が始まった。あたし達は技の威力の向上と魔力消費をどうするかだな……」

ヴィータ「次回は『天神拳』テイクオフ」

第三十一話『天神拳』（前書き）

利光「ふむ・・・」

稟「どうかしました？」

利光「いや・・・君を見てると何故かいいチームが出来そうだなと・・・」

高橋「そうですね。いつその事やってみますか？」

稟「だから・・・何のチームだよ!？」

魔王「HERO'S EPISODE第三十一話始まるよ」

第三十一話 『天神拳』

第三十一話 『天神拳』

統夜は始めから吸血鬼化になった。

零斗「いきなり飛ばしてるな・・・ゆっくりしようぜ」

統夜「この形態を寝る時以外慣らしておく修行だ」

零斗「何か意味があるのか？」

零斗は疑問があつたのか訪ねた。

統夜「吸血鬼の力を引き出す為にな・・・」

零斗「なるほど・・・他にもあるんだろ？」

統夜「天神拳・・・修羅が使つてた滅神拳と似た流派と同じやつを
会得する・・・『真霸奥義』もな・・・」

零斗「あの^{イシヤ}変態娘が使つてた拳法か・・・始めようぜ。吸血鬼化の
お前と闘つてみたかつたしな」

統夜は右拳を前に出した構え、零斗は左手を前に出して構えた。

二人は一斉に駆け抜け拳と拳のぶつかり合いから始まった。

達哉&ダイチサイド

達哉「はっ！」

訓練用の刀を振るいながら動いていた。

ダイチ「まずは慣らすか」

ダイチは今の環境に慣れる為ランニングをしていた。
まだ始まったばかりである為最初からコツコツとやっていた。
レイヴンに負けた事を悔みより自分を強くする為に・・・

遊輔&明久サイド

遊輔「烈火！！」

訓練用の二槍で突きを明久に攻撃を仕掛けた。

明久「わっ！わっ・・・いきなり！？」

ギリギリのところ木刀で防いでいた。
こっちはバトルをしている最中だった。

たけし&ヴォルケンリッターサイド

たけし「・・・・・・・・」

シグナム「今は慣らすしか無いな・・・」

ヴィータ「ああ・・・統夜や遊輔は異常過ぎるぜ・・・」

シャマル「10倍の重力に50キロの鎧で動いてるものね・・・」
ザフィーラ「恐るべきだな・・・」

たけし達はランニングをしていた。

尚ザフィーラは人型になっており走っている。

たけし「俺・・・統夜さんを目標に強くなってみるよ」
シグナム「ほう・・・統夜をか・・・」
ヴィータ「面白そうだな。ここでは・・・技の威力向上とスピード強化を中心にやろう」
たけし「分かった」

たけし達はスピードを上げていた。

なのは&フェイト&はやてサイド

なのは「ここは重いね・・・」
フェイト「統夜が根を上げた理由が分かる気がする・・・」
はやて「・・・」

たけし達と同様に慣れる為にランニングをしていた。

その頃・・・

優子「・・・」

文月学園では優子は統夜が来ていない為やや不機嫌だった。

優子「優子・・・愛しい天川君がいないから・・・」
翔子「罪な男・・・天川・・・」
優子「（統夜・・・一体何をしているのよ・・・昨日から様子がおかしかったし・・・）」

内心では統夜の事を心配していた。

Fクラスの教室では・・・

瑞希「吉井君・・・今日は学校休みですね・・・」

美波「アキ・・・どうしたんだろう？」

雄二「ムツツリーニ・・・何か知らないか？」

雄二は知っていきそうな康太に問い掛けた。

康太「・・・・・・・・」

首を横に振って知らないと意思表示を見せた。

本当は知っているが敢えて伏せた。

瑞希や美波に心配かけさせたくない明久を考慮しての事だった。

秀吉「統夜も学校に来ておらんしの・・・」

雄二「（統夜と明久の二人が・・・あいつら知り合いで仲間みたいな感じだったな・・・何かありそうだな・・・）」

雄二は二人が同時に休んだ事で統夜と明久の関連が気になっていた。

修行空間に戻る・・・

三ヶ月が過ぎ統夜と零斗は今日もバトルして修行をしていた。

統夜「轟波天神拳！」

零斗「甘いぜ！！」

統夜は素早い拳の連打を零斗に攻撃を仕掛けようとしたが拳の連打

で相殺された。

その後統夜はバックステップした後気で造った双龍で零斗に直撃させ上に飛ばしていた。

零斗「日に日に強くなっていくな・・・だが・・・俺も強くなっていくぜ！」

統夜「それは確かにな・・・来いよ」

零斗「行くぜマイティ真拳奥義！瞬獄殺！！」

統夜「天神拳・・・絶獄殺！！」

零斗と統夜は一瞬で駆け抜け無数の連打を同時に叩きこみ始めたが全て相打ちで終わり弾かれてしまった。

零斗「ぐっ・・・（吸血鬼化つてやっぱ恐ろしいぜ・・・妖力等を物理的な力に変換しちまうなんてよ・・・）」

統夜「本当に凄い奴だな・・・」

零斗「そうだろ？（まあ・・・残り二つの『魔の血』をどう扱えるかが楽しみだな・・・）」

零斗は上空へ跳び始めキックの準備に入った。

零斗「行くぜ！パトリオットキック・・・」

統夜「させるかよ！」

統夜は攻撃をさせまいと上へ跳び攻撃を仕掛けたが零斗の姿が消えてしまった。

統夜「残像?!」

零斗「外れを引いたな！」

反対側にいた零斗がパトリオットキックを統夜に向けて直撃させようとしたが……

統夜「確かに引いたな……だが！」

妖力を纏った右脚でパリオットキックを防ぎ零斗を地面に叩き落とした。

統夜「今回は俺の勝ちだな……」

零斗「ああ……後少しだったのにな……」

統夜「まあな……」

達哉&ダイチサイド

達哉「俺のスピードについてこれるようになったな！ダイチ！」

ダイチ「いつまでも変わらないんじゃないじゃ進歩が無いからな!!」

二人は動きながら訓練用の剣で剣劇をしていた。

ダイチ「達哉こそパワーをつけたな!!」

達哉「ああ！弱点を克服してこそだからな!!」

達哉は魔力と気力を刀身に収束させ、ダイチは気力を刀身に収束させた。

達哉「凍牙氷刃!!」

達哉は巨大な氷の刃を高速で飛ばし……

ダイチ「炎上牙!!」

ダイチは巨大な灼熱の焰の刃を飛ばし大きな衝撃波が生まれた。

ダイチ「ぐぐ……」

達哉「負けないぜ……」

お互い押し始めていた。

だが炎と氷では炎が優勢になってきた。

達哉「くそっ！」

押され始め直撃を喰らった。

ダイチ「炎の気力のお陰で助かったぜ……」

達哉「以前より火力が増したな……今回は俺の負けだ……」

今回はダイチが勝ったようだ。

ダイチ「最初はここの環境に慣れないといけなかったからな……」

達哉「そうだな……一つ質問いいか？」

ダイチ「何だ？」

達哉はダイチに質問をした。

達哉「ダイチに大切な人とかいるのか？」

ダイチ「突然何だよ……ああ……いるぜ……大切な人が……
恋人がな」

達哉「そうか……今は何をしているんだ？」

ダイチ「偵都ヨコハマで探偵をしているよ……もしあそこに留ま

つておけば管理局の連中がやって来て巻き込まれる可能性があるからな……」

ダイチは修行空間の上に視線を向け、黒いロングヘアに緑色の探偵服を着ている少女を思い浮かんでいた。

達哉「後悔してるんじゃないのか？」

ダイチ「してないと言えば嘘になる……修行を終えたら会いに行くよ」

達哉「そうしろよ。大切な人を守る事こそ……だからな……」

ダイチ「ああ」

達哉「しかし……意外だな……」

達哉が深刻そうな表情になった。

ダイチ「何だよ？」

達哉「スケベなダイチに彼女がいた事に……」

ダイチ「それはどういう意味だよ?!」

達哉「そのまんまの意味だ」

ダイチは怒っていたが達哉は冷静に返していた。

ダイチ「まあいいか……修行を再開しようぜ」

達哉「ああ」

二人はそれぞれ修行を再開し始めた。

遊輔「おおおおお！！！」

明久「はああああ！！！」

二槍と剣の剣劇が行われていた。

遊輔「中々いい感じになっただが・・・」

明久が力負けし弾かれ・・・

明久「くっ・・・」

遊輔「まだまだ！！！」

吹き飛ばされたが・・・

明久「ウインドムーブ！」

遊輔の追撃を回避するため風を利用した移動魔法で間合いを取り魔力弾を発射した。

遊輔「紅蓮弾！」

炎の弾で相殺した。

明久「貰った！風刃一閃！」

風を纏った剣で一閃しようとしたが・・・

遊輔「甘い！紅蓮突！」

二槍の強力な突きで防がれた。

明久「中々やるね。遊輔！」

遊輔「ああ。そっちもな！今まででいい方だぞ」

明久「今度こそ一勝したいからね・・・」

修行にて遊輔との戦いで一勝も得ていなかった。

重力10倍と50キロある鎧を着ている遊輔にハンデがあるのに対し勝てないでいた。

遊輔「そうか」

明久「修行で得た技を出す・・・」

魔力と気力を最大限まで収束した後遊輔へ駆け抜けた。

遊輔「正に疾風の如くか・・・」

二槍を構え迎撃しようとしたが避けられた。

その後、明久が素早い動きで遊輔を何回も乱れ斬った。

遊輔は防ごうとしたが反応が遅れ直撃を喰らった。

明久「風刃・・・乱舞の太刀・・・これが・・・僕の・・・」

そう言つて剣を置いて横になった。

遊輔「こいつは・・・俺の負けだな・・・」

遊輔も横になった。

明久「僕・・・遂に一勝を得た・・・」

遊輔「そうだな・・・明久・・・一ついいか？」

明久「何？」

遊輔「明久は何の為に戦っているんだ？」

明久「僕は姫路さんや美波・・・友達を守る為だよ」

瑞希と美波の顔を思い浮かべながら答えた。

遊輔「そうか・・・いい答えだ・・・」

明久「そうかな・・・？」

遊輔「ああ・・・」

たけし&ヴォルケンリッターサイド

たけし「やつぱ強いぜ・・・」

シグナム「そつちもな・・・」

ヴィータ「伊達に修羅場を潜って来ただけはあるな」

たけしはスターライザー、シグナムはレヴァンティン、ヴィータはグラーフアイゼンを構えて戦っていた。

シグナム「外の世界の10倍の重力に重し付きでよくやる・・・」
たけし「行くぜ！」

スターライザーを上段構えにし駆け抜け抜けシグナムがレヴァンティンで一閃しようとしたがそれを防いだ。

その後突きを放とうとするがヴィータに止められてしまう。

シャマル「よく頑張っているわね・・・」

ザフィーラ「ああ・・・竜崎は凄い存在になりそうだな・・・」

シヤマルとザフィーラはたけしを大きく評価していた。

魔力も無い少年がここまでやるとは思ってもいなかったからである。ヴィータは小さな鉄球を放つ技であるシュワルベフリーゲンで牽制しようとしたがたけしはスターライザーで全て切り払いヴィータの懐へ移動し突きを放とうとした。

たけしの突きがヴィータに当たる寸前シグナムがレヴァンティンをシュランゲフォルムにしてスターライザーの突きを弾いていた。

ヴィータ「助かったぜ・・・シグナム・・・」

シグナム「気にするな・・・もし竜崎に魔力があれば負けていたのかもしれないぞ？」

ヴィータ「そうかもしれないねえな・・・」

たけし「超力ニードル!!」

たけしはスターライザーを両手で構えた状態で空中にジャンプした後、そのまま一直線に落下しながらシグナムとヴィータを突き刺し始めた。

二人はベルカ式魔法陣を展開して相手の攻撃を受け止める魔法防衛であるパンツァーシルトで防ごうとしたが突破されてしまいヒットしてしまい吹き飛んでしまった。

たけし「やったぜ・・・」

シグナム「今回は我々の負けだな・・・」

ヴィータ「オーレッド有りだったら変わってたかもしれないな」

シグナムとヴィータの二人は負けを認めた。

たけし「やった・・・」

たけしは疲れたのか横になった。

無理も無い・・・必殺技の使用や環境のせいでもあるのだから・・・
シグナム「だが我らもつかうかしてはもらえんな・・・」
ヴィータ「ああ・・・あたしらも強くならなきゃ・・・セントクルセイダースや修羅には勝てねえ・・・」

管理局の歪みであるセントクルセイダースに戦いと強者を求める
異世界の来訪者の修羅の事を考えていた。
その他にもイグニスのような人物や新たに出現する勢力が出てくる
可能性の事も考えていた。

なのは&フェイト&はやてサイド

なのは「デイバイン・・・」

レイジングハートの杖先に魔力を収束し発射しようとしていた。

フェイト「同じ手は通用しないよ！なのは！」

なのは「それはどうかな？エッジ！！」

デイバインバスターを発射する為に収束した魔力を刃に形成し体当たりをフェイトにヒットさせようとした。

フェイトはソニックムーブで回避した。

フェイト「考えたね・・・」

はやて「統夜の影響って恐ろしいな・・・」

フェイト「一番影響してるのはやてなのに・・・」

はやて「そうか？夜天天衝破！」

はやてはシュベルトクロイツで統夜が使う月牙天衝を自分なりに応用した砲撃をなのに向けて発射した。

なのは「元々剣術の技なのに・・・でもね・・・デイバインバスターの防御バリエーション・・・デイバインプロテクション！」

デイバインバスターを防御重視した防壁で防いだ。

はやて「あちゃ〜・・・お互い強くなってるな〜」

なのは「そうだね・・・はやてちゃんは私達の中で一番努力してたからね・・・」

フェイト「修行ばかりで様々な事を覚えてしまうよね」

一時訓練を止めた後三人で話し合っていた。

はやて「ほんま・・・統夜が一ヶ月おれんかった理由が分かったわ・・・」

なのは「重力でね・・・」

フェイト「もし・・・外の世界で戦ったらスピード・・・速かったりして・・・」

なのは「ソニックフォームにならなくても余裕かもしれないね」

実際そうなるだろう・・・速さが売りのフェイトがより速くなるのだから・・・

はやて「でも・・・夜天天衝破は統夜の月牙天衝には劣るけど・・・威力はいい方や」

なのは「はやてちゃんが統夜君にとって・・・最強の嫁になりそうだね」

フェイト「身体能力も高くなったし・・・」

はやて「そ、そうかな？／＼／」

頬を赤くしていた。

そりゃ統夜の嫁と言われればそうなるよ・・・

なのは「（はやてちゃんは統夜君の支えにならないとね・・・）」
フェイト「（そうだね・・・管理局の歪みを破壊するって・・・それなりの悲しみとかを受けるからね・・・）」

なのはとフェイトははやてに内密で念話で話していた。

はやて「どうかしたんか？」

なのは「ううん・・・何でも無いよ」

修行して八ヶ月目になった。

統夜と零斗が修行している場所から龍状の気功波が上へ飛んでいた。

零斗「完成したな・・・真覇奥義を・・・」

ポロポロになった零斗が地面へ落ちた後呟いていた。

その後に統夜が地面に着地していた。

因みに統夜も零斗同様ポロポロになっていた。

統夜「ああ・・・『覇氣』も身につけられた・・・」

零斗「修羅の奴らが使ってる力か・・・天神拳と滅神拳のルーツは同じだからな・・・今の統夜は魔力と気力、霊力、妖力、覇氣の五つが扱えるか・・・」

統夜「それらを纏めて『五気』と呼ぶか……」

零斗「俺もそれらを覚えれたかな……霸気を……」

統夜「マイティ真拳か……」

統夜と零斗は自分たちが得たものを話し合っていた。

統夜は天神拳の真霸奥義と霸気、零斗は霸気を用いたマイティ真拳が使用可能になった。

・
だが二人はいずれ知るであろう……霸気の『本当の使い方』を・

そして外の世界で一日が経った。

佐助「そろそろ一年は経つ頃ですね……どんな感じになったのしょう」

するとドアが開いた。

中から統夜達が出て来た。

統夜「いいものが得られたぜ……」

髪が背中辺りまで伸び、身長も伸びた統夜……

達哉「ああ……」

髪が肩辺りまで伸び、身長も伸びた達哉……

遊輔「強さの高みを見て来たぜ……」

髪が背中辺りまで伸び、身長も伸びた遊輔……

零斗「俺のマイティ真拳が更なる強さまで高まった……」

髪が背中辺りまで伸び、身長も伸びた零斗……

ダイチ「地獄から帰って来たぜ……」

髪が伸び、身長が伸び遅くなったダイチ……

たけし「誰かを守る為に強くなった……」

身長が伸び遅くなったたけし……

明久「後悔しないように必死で取り戻した力を見せれる……」

髪が肩辺りまで伸び身長も伸び遅くなった明久……

なのは「全力全壊の修行で色々なものを得た……」

フェイト「自分の持つ長所を活かし……弱点を克服が出来た」
はやて「最愛の人と共に歩く為に……」

身長とスリーサイズが変化しナイスバディになったなのはとフェイト、はやての三人……

因みにはやての髪は背中辺りまで伸びている。

シグナム「主を守る為に剣を強くした……」

ウィータ「過酷な環境の中でやれるだけの事はやった……」

シャマル「そうね……私達は変わった……」

ザフィーラ「主を守る守護獣として限界以上に鍛え上げた……」

ヴォルケンリッターは容姿が変わらなかったが瞳には闘志が宿っていた。

佐助「皆さん・・・強くなりましたね・・・」

統夜「ああ・・・ありがとう・・・」

統夜は蒼穹の騎士団のリーダーであり代表として佐助に頭を下げて感謝していた。

佐助「いつでも遊びに来てくださいね」

統夜「ああ。そんじゃ・・・帰ろつか？」

一同「ああ（はい）（分かった）」

修行を終えた統夜達は佐助に礼を言った後それぞれ帰路へ着いた。

統夜「雰囲気変わったな。はやて」

はやて「そういう統夜こそ・・・一つええか？」

統夜「何だ？」

はやて「一緒に私と一緒に出掛けへん？新しい服とか買いたいし・・・
・どうかな？」

はやての約束事に・・・

統夜「構わないぜ。明日丁度休みだし・・・行くつぜ」

即答でOKを出した。

はやて「（統夜とデートや・・・明日が楽しみや・・・）」

はやては嬉しそうな表情になっていた。

なのは「(嬉しそうだね。はやてちゃん)」
「フェイト」(統夜が好きだからね・・・病的なレベルだけど・・・)

なのはとフェイトは念話で話していた。

第三十一話 『天神拳』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

メイメイ「過酷な修行だったね。たけしが遅しくなってるね」

メイメイ「明日から統夜さんとはやてさんがデートに行くね。色々な人と出会うけど何とかなると信じてるね」

メイメイ「次回は『死神と夜天の王のデート』 テイクオフね」

第三十二話 『死神と夜天の王のデート』（前書き）

文乃の無双乱舞を喰らった統夜と遊輔はベッドで寝ていた。

統夜「ツンデレ無双乱舞・・・恐るべし・・・」

遊輔「ああ・・・」

達哉「お疲れさん・・・」

ダイチ「HERO'S EPISODE第三十二話始まるぞ」

第三十二話 『死神と夜天の王のデート』

第三十二話 『死神と夜天の王のデート』

はやて「くくく」

自分の部屋で嬉しそうに鼻歌を歌いながらどんな服を着ていいのか迷っていた。

はやて「やっぱ・・・これがええかな？」

服装は上に赤いノースリーブ状のハイネックシャツを着て、下は濃い蒼のワンピーススカートと黒いニーソックスを穿いた姿で鏡を見ていた。

最終的に今の服装で決めて部屋から出た。

はやて「統夜く準備できたで〜」

統夜「んじゃ・・・行くか」

統夜の服装は上が蒼いロングTシャツを着て、下は黒いデザインデニムパンツにウオレットチェーンを付けた姿になっている。

二人は玄関から出た。

統夜「最初は・・・何処行く？」

はやて「まずは・・・映画館へ行きたい」

はやての要望により映画館へ行く事にした。

映画館へ着くとそこには……

統夜「何でこいつらがいるんだ？」

明久と瑞希、美波、翔子、雄二がいた。

明久「あつ……統夜だ」

瑞希「こんにちは。天川君に……ええと……」

統夜を見た明久と瑞希は挨拶したが初めて出会うはやてにどう対応すればいいのか困っていた。

はやて「私は八神 はやて。よろしゅうな。はやてでええよ」

瑞希「分かりました。私は姫路 瑞希と言います。瑞希で構いませんよ。はやてちゃん」

美波「私は島田 美波。美波でいいよ」

はやて「私の事もはやてでええよ」

はやては瑞希と美波の二人に自己紹介し仲良くなっていた。

統夜「何でお前らがいるんだ？」

明久「姫路さんと美波の約束だね……」

統夜「なるほど……あつちは……何だ？」

鎖に繋がれた手枷をした雄二と鎖を両手で握りしめている翔子を見て言った。

他の人から見れば何かのプレイだと思われるのは言わないのが吉だ・

翔子「天川に吉井……」

雄二「統夜に明久よ・・・男とは・・・無力だ・・・」

翔子と雄二は統夜と明久に気が付いた。

翔子「・・・雄二・・・どれが見たい？」

雄二「早く自由になりたい・・・」

翔子「じゃあ・・・『戦争と平和』」

雄二「おい！？それは7時間4分あるだろ！？」

翔子「二回見る」

雄二「統夜に明久！俺を助けてくれ！」

雄二は統夜と明久に懇願していた。その表情はまるで絶望の中で希望を見つけた人間のようなだった。

翔子「雄二・・・浮気の現行犯・・・」

雄二「おい待て！これのどこを見ればそういう風に映るんだ！？」

そんな雄二の言葉などどこ吹く風とばかりに、翔子は十字架型のトンファーを取り出しボクシングスタイルの構えをとった。

翔子が手にしてる十字架型トンファーを見た統夜は冷や汗を掻いていた。

雄二「おい！？そんなもんどこで手に入れやがった！つーか俺の話
を聞け！」

翔子「天川が売ってくれた・・・」

雄二「統夜ぁー！っ！！！」

明久「・・・」

明久は驚愕な事実には驚くしかなかった。そりゃそうだ・・・自分の親友が武器をクラスメートに売っている事に驚かない人間はいない。

トンファーを手にした翔子は徐々にテンションが上がり・・・

翔子「いづくよ〜コロナアッパー！メテオダイブ！！」

雄二「ちょよ！？それは明らかに声優ネタじゃ・・・あべし・・・ぐがががが・・・」

斜め上に飛び上がりながらトンファーを振り上げながらアッパーを雄二に繰り出した後、腕を斜め下に叩きつけて地面に叩きつけた。その後翔子はトンファーをしまうと元の状態へ戻り雄二の襟を掴んだ。

翔子「学生二枚・・・二回分・・・」

店員「はい学生一枚、気を失った学生一枚、無駄に2回分ですね」

その後ボロボロの雄二を連れて中へ入った。

明久「ねえ・・・統夜・・・」

統夜「言わなくても分かるぞ・・・」
はやて「憧れるな〜」

瑞希「仲のいいカップルですよね」

美波「憧れるよね〜」

目をキラキラさせたはやてと瑞希、美波の言葉に引いてしまった。

統夜「えっ何これ！？あれの何処が仲がいいの！？あれの何処に憧れるの！？」

統夜は大汗を流しながらツッコミをした。

明久「それじゃ・・・僕らはあっちで観るから・・・」

明久達はアニメ系の映画を観に行き、統夜とはやては特撮系の映画を観る事にした。

『シヨ カーを倒すまでは・・・仮 ライダーは死なん!!』

統夜「カァ・・・やっぱカッコいいぜ・・・」

はやて「統夜はこういうのが好きやもんな」

統夜とはやての二人はほのぼのとして特撮の映画を満喫していた。

統夜「次は何処行く？」

はやて「次は・・・最近出来た洋服屋へ行こう」

統夜「いいぜ」

はやてに手を握られ洋服屋へ移動した。

統夜はこの時洋服屋に来た事に後悔する事になろうとは思わなかったであろう・・・

はやて「さ、着いたで」

統夜「・・・」

はやて「入るで。統夜」

統夜「ごめん・・・無理・・・」

はやて「何でや？」

統夜「だって・・・ここ」

統夜は店を見た。

そこに書かれているのは”恋する乙女専門の店 ラブハリケーン”
だったのだ。

はやて「何か不満なところがあるんか？」

統夜「俺は男だよ？」

はやて「分かつとるよ。それとも・・・私と一緒に入るのが嫌なん
か？楽しみにしてたのに・・・」

はやては上目遣い＋涙目で統夜に懇願していた。

流石の統夜も弱いのか・・・

統夜「行くよ・・・」

はやての懇願に負けて一緒に中へ入って行った。

はやて達・・・統夜ラバーズには弱い統夜であった。

統夜「色んなもんがあるんだな・・・」

中を見て様々な下着や洋服を見て呟いた。

女専門の店の中に入ったのは初めてなのかキョロキョロと見回して
いた。

はやて「統夜。これはどうや？／／／」

はやてが頬を赤く染め蒼い布地が小さい下着を手に使っていた。

それを見た統夜は顔を真っ赤にしてしまった。

統夜「ちよっと・・・派手じゃないか？／／／」

はやて「そ、そうかな？これならどうやろうか？／／／」

二人は下着を選んだ後服を見始めた。

統夜「（はやて・・・胸・・・大きくなったんだな・・・）」

そんな事を考えながらはやてと一緒に似合う服を探していた。
もしこれを文乃達が見たら痛い目に遭う可能性は高い。(特に統夜
が・・・)

はやて「こづいづのはどうや?」

上が白いへそ出しのノースリーブ、下が裾の部分にヒラヒラが付いている膝から15センチのミニスカートに黒いガーターベルトを身に着けたはやてが試着室から出て来た。

統夜「似合ってるね。可愛いくらいに・・・／／／」

流石の統夜も顔を真っ赤にし素直な感想を述べていた。

はやて「おおきに・・・他のと一緒に会計するわ・・・／／／」

はやては元の服へ着替えた後レジへ服と下着を持って移動した。

統夜「(俺は・・・何となくけど・・・少しずつ変わっていったような気がする・・・)」

様々な人と出会い、色々な事を経験したのかそう感じていた。

はやて「統夜、行くで」

統夜「分かった」

レジを済ませ店から出ると明久と瑞希、美波が一人の少女に追いか
けられていた。

統夜「あいつら・・・何してるんだか・・・あの娘では明久を捕えられる事は出来んよ・・・」
はやて「せやね」

助ける気は無くはやてと一緒に歩いた。
その時・・・

「統夜じゃない？」

誰かに声を掛けられた。
後ろを振り向くと・・・

統夜「エアリス・・・」

エアリス「もしかして・・・デート？」

統夜「そうだけど・・・」
はやて「・・・」

少しだけ黒いオーラを出していた。

エアリス「その娘は？」

はやて「私は八神 はやてや。一体統夜とどういう関係や？」

はやての問いにエアリスは・・・

エアリス「うん・・・命の恩人かな？教会で花を育ててる時に・・・空から降って来たの」

はやて「いつや？」

エアリス「先週ぐらいかな」

はやて「先週・・・帰りが遅かったなあ・・・確か・・・」

統夜「言っておくが何もしてないぞ・・・？」

はやて「まだ・・・？」

エアリス「お礼としてデート一回って言って番号とメルアドを交換してもらったね」

はやて「なるほど・・・今は私と統夜はデート中や」

エアリス「今からするつもりは無いよ。楽しんできてね」

エアリスは笑顔で返し歩き去った。

はやて「不思議な娘やな・・・」

統夜「ああいう娘なんだよ・・・母親みたいで・・・」

はやて「せやな・・・」

統夜の言葉に同意見なのかそう返していた。

統夜「次は・・・飯食おうか」

はやて「うん」

二人はレストランに入ると・・・

文乃「あっ！統夜！！」

千世「元気にしてた？」

希「にやあ・・・髪・・・伸びた？」

文乃と千世、希の三人と出くわしてしまった。

統夜「（どうする？）」

はやて「（とりあえず・・・逃げるで）」

二人は荷物を自分の家へ転送して逃げ出した。

文乃「待ちなさい！」

千世「逃がさないわよー！」

希「待つて……」

文乃達は注文せず統夜とはやてを追いかけた。

統夜「今日は厄日か?!」

はやて「さあ？」

統夜とはやての二人は走っていた。

エステル「あれは……統夜にはやて……待つてください」

通り過ぎた際にエステルが眩き、気になったのか追いかけ始めた。

統夜「今日は女難の日か？」

プリムラ「お兄ちゃんだ！」

カナ「統夜」

今度はプリムラとカナも追いかけ始めた。

統夜「デートしてたのがよっぽど嫌なのかねえ……」

はやて「今日は何の日やる？」

すると……

秀吉「姉上……あれは統夜じゃないかの？」

優子「しかも……はやてと一緒に手を繋いで走ってるわね」

木下姉妹?にも見つかってしまった。

その後文乃達と一緒に統夜とはやてを追いかけ始めた。

統夜「げっ・・・秀吉に優子もか!?!」

はやて「どないするん?」

統夜「決まっている!!」

はやて「ふにやつ?!」

はやてをお姫様抱っこで抱え異常な身体能力を活かし建物の上へ跳んで移動した。

文乃「くっ・・・逃げられた・・・」

カナ「前より上がってない?」

エステル「吸血鬼というのは厄介ですね・・・」

秀吉「もしかして・・・文乃ではないか?」

文乃「そうよ。貴方・・・秀吉に優子?」

文乃は秀吉と優子を見てそう言った。

優子「久し振りね。統夜とはやてがデートしてたみたいだったし」

秀吉「雰囲気が変わったのう・・・いつの間にか・・・」

千世「アンタ達・・・誰?」

優子と秀吉を知らない千世が問い掛けた。

優子「私は木下 優子」

秀吉「ワシは木下 秀吉じゃ。よろしく頼むぞい」

優子「言っておくけど秀吉は男だから・・・」

優子は知っている文乃以外に秀吉が男である事を教えて自己紹介をした。

千世「意外ね・・・私は梅ノ森 千世。よろしくね」

希「私は霧谷 希・・・」

エステル「私はエステル・フリージアと言います」

プリムラ「私はプリムラ。よろしくね」

カナ「私はカナ。よろしくね」

千世達5人は自己紹介をしていた。

その後8人は喫茶店『フローラ』で話し合った。

優子「エステルさんが言ってた吸血鬼って月の戦いで見せたものだったのね・・・」

秀吉「あの姿はちとインパクトがあつたがのう・・・」

文乃「でも吸血鬼になつても統夜は統夜よ」

千世「そうね・・・」

カナ「でも・・・」

エステル「短い間に雰囲気が変わりましたよね・・・」

優子「それは分かるわ・・・」

統夜「ラバースの皆さんは統夜について話し合っていたとき・・・数十分後話し終えフローラから出て二人を探し始めた。」

統夜「大丈夫か？」

はやて「うん・・・嫉妬って怖いもんやな・・・」

統夜「改めて思い知つたよ・・・」

統夜達はレストランで食事をとった後ショッピングをして物見の丘公園に行きベンチで座っていた。

はやて「統夜とデートしたの・・・初めてやね・・・」
統夜「そうかな？」

はやて「そうや。任務等で統夜と一緒にいる事が無かったからな・・・」

少し寂しそうな表情で呟いていた。

そんなはやてを統夜は自分の方へ抱き寄せた。

はやて「と、統夜？／＼／」

統夜「悪かった・・・しばらくこうさせてくれ・・・」

その頃・・・

康太「ここにいる・・・」

秀吉「すまぬの。ムツツリーニ」

康太「・・・気にするな・・・それじゃ・・・」

統夜ラバーズの皆さんはムツツリーニこと康太に協力してもらい物見の丘公園まで来ていた。

案内した康太はすぐさま帰った。

文乃「不思議な奴ね」

カナ「ムツツリーニって・・・あれよね？ムツツリスケベ」

プリムラ「そんな感じがするよね」

エステル「見つかりました」

統夜とはやてを見掛け茂みの中へ隠れた。

文乃「（何いい雰囲気出してるのよー！！）」

千世「（そんなに胸の大きい娘が好きかー！！）」

希「（羨ましい・・・）」
エステル「（私も一緒にいたい・・・）」
プリムラ「（お兄ちゃんの馬鹿く！！）」
カナ「（羨ましいく！！）」
優子「（私だつていたいわよ！！）」
秀吉「（もしワシが正真正銘の女じゃったらああなっていたんじゃ
ろうか？）」

それぞれ黒いオーラを出して睨んだり、羨望に満ちた目で二人を見ていた。

統夜「大丈夫か？」
はやて「うん。もう大丈夫や」

抱き寄せるのを止めて空を眺めた。

統夜「（これから始まったな・・・）」
はやて「（あつちから見ればテロリストやけどな・・・）」
統夜「（だが・・・必要悪であり誰かがやらなければ・・・世界は
変わらない・・・いや・・・変わらなければならぬ・・・犠牲が
出ても立ち止まる事は許されない・・・例え・・・どんな手段を使
おうとも・・・卑怯と罵られようと勝つしかないんだ）」
はやて「（せやな・・・その為ならそれ以上の悪になる・・・流し
た血を無駄にしない為に・・・）」
統夜「（だからこそ・・・俺達は立ち上がった・・・『世界の歪み』
を破壊する為に・・・はやて・・・それでも進むか？）」

念話にて統夜の問いに困惑したはやては瞳を閉じた後再び開け笑み
を浮かべ・・・

はやて「（共に進むで。統夜と共に・・・）」
統夜「（ありがとう・・・はやて・・・）」

二人はベンチから立ち上がった。

統夜「いつまで茂みの中にいるつもりだ？文乃に千世、希、エステ
ル、プリムラ、カナ、優子、秀吉」

はやて「えっ？」

すると・・・茂みの中から文乃達が出て来た。

はやて「もしかして・・・見てたんか・・・？」

エステル「ええ・・・見てましたよ」

統夜「大方・・・康太に協力してもらったな？秀吉」

秀吉「と、当然じゃ！！」

文乃「楽しかったかしら？」

笑顔だが目が笑っていない文乃が問い掛けた。

文乃が素直じゃないと分かり切っている統夜とはやて、優子、秀吉
は苦笑していた。

文乃「な、何がおかしのよ？」

統夜「いんや・・・別に」

はやて「何でもないで」

優子「気にしたら負けよ」

秀吉「そうじゃぞ」

統夜「そんじゃ・・・帰ろうか」

統夜「ラバーズ」はい（うん）（分かった）（分かりました）」

統夜とラバーズは一緒に帰った。

時間は夜になり・・・
統夜の部屋では・・・

統夜「本当にいいのか？」

はやて「抜け駆けと思われるかもしれへんけど・・・統夜の全てを
知りたいんや・・・」

統夜「はやて・・・」

二人は唇を重ね合わせ、舌を絡ませる。

統夜「ん、くちゅくちゅレロレロ／／／」

はやて「ん、くちゅくちゅレロレロ／／／」

統夜ははやてをベッドに押し倒し、服を脱がせ自身も脱ぐ。
こうして二人は、熱く愛し合った。

数時間後・・・

プリムラ「お兄ちゃん、朝・・・だ・・・よ・・・」

プリムラがドアを開けると、布団で裸姿の統夜とはやてが寝ていた。
しかもはやては統夜の腕に抱きついていていた。
これを見たプリムラはワナワナと震え・・・

プリムラ「抜け駆けなんてズルい！！」

その後プリムラは残りの統夜ラバーズを集めた。
ラバーズの皆さんは黒いオーラを出していた。

第三十二話『死神と夜天の王のデート』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

零斗「いや〜・・・統夜は遂に捨てたか〜良かった。良かった」

零斗「後は・・・達哉だけだ・・・どんなものにしようかな〜」

零斗「偵都ヨコハマからダイチの恋人であるエリーがダイチと再会を果たした」

零斗「管理局独立部隊であるセントクルセイダーズがヨコハマに襲撃を仕掛けて来た。それは畏だと知らず・・・」

零斗「今回は『狙われた文月学園』テイクオフ」

第三十三話『狙われた文月学園』（前書き）

美波「ねえ・・・」

希「何？」

美波「あの娘みたいな事はしないわよね？」

希「????？」

西村「HERO'S EPISODE第三十二話始まるぞ！」

第三十三話『狙われた文月学園』

第三十三話『狙われた文月学園』

統夜「おらよつと・・・」

ダイチ「やるな！」

ダイチの部屋でP 3でBLA BLUE CO TINUM
SHITをやっていた。

統夜「隙あり！」

統夜が使っているキャラ「ラ ナ」がダイチが使っているキャラ「ラチ」を転倒させた後コンボを見舞わせて一気に終わらせ勝った。

ダイチ「少しは手加減しろよ！連続技なんて・・・汚いぞ！！」

統夜「コンボをしないと俺には勝てんぞ」

かなり悔しがっているダイチが余裕のある統夜と言い合いをしている。

そこにダイチの部屋から呼び鈴がなった。

ダイチ「誰なんだろう？」

統夜「どうせ・・・婦人警官とかじゃねえの？」

ダイチ「お前・・・一体どんな目で俺を見てるんだ？」

統夜「変態だろ？」

ダイチ「変態ではない！スケベだ！」

統夜「同じだろうが・・・」

言い合いをしながらダイチはドアを開けた。

ダイチ「は〜い・・・どちら様でしょうか・・・」

ドアの前に黒いロングヘアに緑色の探偵服を着ている少女がいた。

？「ダイチ君。久しぶりだね」

ダイチ「エリーじゃないか。元気にしてたか？」

彼女はエルキュール・バートン・・・通称であるエリーはダイチと再会した。

エリー「うん。元気だよ。ダイチ君は？」

ダイチ「元気だよ。話は中で話そう」

エリーを中へ入れた。

統夜「遂に・・・ダイチは犯罪を・・・」

ダイチ「いきなりそれ?!彼女は俺の恋人のエルキュール・バートンだよ!犯罪者を見る目で見るの止めてくれない?!」

統夜「ええ〜・・・嘘だ〜・・・お嬢ちゃん・・・何か変な事されてない?」

エリー「ええと・・・私とダイチ君は・・・一緒にベッドで熱く愛し合いました」

それを聞いた統夜は待機状態のフォーチュンエターナルを手にし警察に電話をしようとしていた。

ダイチ「止めるおーっ!!!」

統夜「誰かがこの業を背負わなくてはいかんだ。それを分かるん

だよ!!ダイチ!!」

統夜が通報するのを大汗を掻いて必死に止めようと頑張っているダイチだった。

エリーは特殊能力であるトイズを用いて統夜を投げ飛ばした。

統夜「ぐげっ!」

エリー「私は自分の意思でダイチ君が好きになったんです!!」

ダイチ「エリー・・・ありがとう」

直ぐに統夜は復活した。

統夜「んで・・・ダイチとエリーはこういう風に知り合ったんだ?」

気になったのかダイチとエリーに質問をした。

ダイチ「偵都ヨコハマにいた頃だったかな・・・エリーがチンピラ達に絡まれててな・・・」

エリー「その時にダイチ君が助けてくれたのです」

ダイチ「お姫様抱っこして逃げ切り・・・名前を名乗らずに去ったな・・・」

エリー「この出来事のお陰でダイチ君が好きになりました」

ダイチとエリーの二人は懐かしむように言った。

その話を聞いた統夜は・・・

統夜「なるほど・・・男らしいじゃないか。ダイチ」

ダイチ「まあな・・・」

エリー「そして・・・一緒に過ごし・・・一緒に熱く愛し合いました。ダイチ君の全てが知りたかったから・・・」

統夜「自己紹介が遅れたな・・・俺は天川 統夜。よろしくな」

統夜はエリーに自己紹介をした。

エリー「私はエルキュール・バートンと言います」

統夜「エルキュールか・・・偵都ヨコハマは特殊能力であるトイズ、怪盗や探偵が活躍する都市の事かい？」

エリー「はい。そうです」

統夜「今は大探偵時代だっけか？」

エリー「はい」

ダイチ「エリー・・・黙ってヨコハマから出て行ってごめん・・・」

突然ダイチがエリーに謝罪した。

エリー「気にしないでください・・・ダイチ君は私達を守る為に出て行ったのでしょうか？」

ダイチ「ああ・・・そうだ・・・巻き込まない為に・・・」

エリーは気にしていなかった。

ダイチの事を分かり切っているような・・・

統夜「なあ・・・もしかして空を飛んで手に杖を持った連中とかがヨコハマに来たのか？」

エリー「はい・・・私達を無理矢理保護しようとしていました・・・ダイチ君が撃退しましたが・・・」

統夜「奴等の目的はトイズか・・・」

エリー「それがどうかしましたか？」

統夜「それは・・・俺とダイチが倒すべき敵・・・管理局独立部隊『セイントクルセイダーズ』の仕業だからだ」

ダイチ「俺はその時・・・管理局の事を知らなかったから・・・管

理局を倒す為にヨコハマから出て行き統夜と出会ったんだよね……

統夜「そうだな……いきなり乱入してたよな」

統夜とダイチは懐かしむように話していた。

エリー「それ以降来なくなりましたが……二度とやって来ないという保障は出来ません……」

統夜「奴等は手段を選ばずに来るからな……トイズを己の物にしようと思っていたとは……」

ダイチ「そんな時はヨコハマを守るさ……俺とエリーが大好きな街なんだからな！」

すると……エリーの携帯から着信音が鳴り始めた。

ポケットから携帯を取り出して出る。

エリー「ネロちゃん。どうしたの？」

ミルキイホームズの一人である譲崎　ネロからだった。

ネロ「緊急事態だ！杖を持った連中がヨコハマにまたやって来たんだよ……！」

エリー「な、何だつて……！」

ネロ「あいつらの目的は『トイズ』だ……！エリーは英都にいるんだつたよな？」

エリー「うん。今はダイチ君と一緒にいるよ」

ネロ「あのスケベとか！？あの野郎……急にいなくなりやがって……とにかく英都なら奴等も来ないだろう……！」

エリー「ちよつと……ネロちゃん……」

エリーが言い切る前にネロは電話を切ってしまった。

統夜「どうしたんだ？」

エリー「緊急事態が起きました……」

エリーは統夜とダイチに杖を持った集団がヨコハマに襲撃してきた事を話した。

統夜「あいつらの目的は『トイズ』か！」

ダイチ「行こうぜ！統夜」

統夜「ああ」

エリー「あの……」

エリーが統夜とダイチに何かを言おうとしていた。

統夜「何だ？」

エリー「私も……連れて行ってください……」

ダイチ「ごめん……エリー……管理局の集団は魔法を使うんだ……君に何かあったら……」

統夜「確かに……エルキュールがヨコハマに戻ったら奴等の思うつぼになる……」

エリー「友達を置き去りにはしたくないんです！ダイチ君！統夜さん！お願いします！」

エリーが二人に頭を下げた。

統夜とダイチは……

統夜「いいよ……但し……必要以上に相手しない事……いいね？」

ダイチ「あいつらは俺達に任せろ」

統夜とダイチは承諾し三人はヨコハマへ転移した。

偵都ヨコハマでは・・・

ネロ「あいつら・・・しつこいぜ・・・」

シャロ「そうですね・・・」

コーデリア「一体何なのよ・・・あいつらは!!」

リング状になっているピンクの髪とリボンが特徴的でピンク色の探偵服を着たシャーロック・シェリンフォードと金髪に水色に近い探偵服を着たコーデリア・グラウカは息を切らしていた。

ネロ「トイズがあるからつていきなり拘束されてたまるかよ!!」

ネロはいきなり拘束してくる管理局に対し憤慨して叫んでいた。

コーデリア「ネロの言葉には一理あるわね・・・」

シャロ「トイズは戦う道具じゃ無いのに・・・」

三人は再び走り出した。

シャロ「きゃっ!!」

シャロが走っている最中に転んでしまった。

その時管理局員がシャロを捕まえた。

ネロ「シャロ!!」

コーデリア「シャロ!!」

管理局員「ようやく捕まえたぞ・・・お前らもこっちへ来い！」

杖をシャロに向けて叫んだ。

ネロ「汚ねえぞ!!」

コーディネリア「自分が何をしているのか分かってるの?」

管理局員「俺達管理局は正義だ・・・お前らは俺らに従えばいいんだよ!!」

シャロ「(念動力なら・・・でも・・・)」

自分のトイズである念動力は軽いもの・・・1キロ程度しか動かす事しか出来ない。

シャロ「だけど!!」

管理局員「んあ・・・何じゃこりゃあ?!」

管理局員が突然浮き出し始めた。

管理局員「くそお!!お前か!!」

シャロは隙を見てネロ達の元へ逃げ出した。

管理局員は地面に落ちた。

管理局員「テメェら・・・痛めつけてから拘束してやるぜ・・・」

ネロ「何故僕達・・・トイズを持つ人達を狙うんだ?」

管理局員「お前らが知る必要は無えよ!!」

管理局員は指で鳴らすと上空から管理局員がゾロゾロと出て来た。

コーディネリア「数が多過ぎる・・・」

管理局員「観念しろや・・・」

杖をシャロ達に向けた瞬間・・・

「炎上破！」

炎の砲撃が複数の管理局員に直撃した。

シャロ「えっ・・・」

ネロ「あのスケベか？」

コーディネリア「ダイチ君？」

シャロの後ろから・・・

ダイチ「その通り！！」

ダイチが現れシャロとネロ、コーディネリアのお尻を触っていた。

シャロ「ひゃあっ!?!」

ネロ「スケベ!?!?」

コーディネリア「きゃっ!?!?」

触られた事により可愛らしい声を上げた。

統夜「何馬鹿をやってるか・・・」

エリー「ダイチ君・・・後でお話があるから・・・逃げないでくださいね？」

統夜は呆れエリーは黒いオーラを纏いダイチに話しかけていた。

ダイチ「はい……」

統夜「（おかしいな……普通なら……白い騎士やデストロイを派遣する筈だが……）ダイチ……早めに終わらせるぞ」

ダイチ「ああ」

統夜「君達は下がっててくれ……ここからは……俺達のお仕事だ！」

統夜はフォーチュンエターナルを纏い上空にいる魔導師2人を銃身が二つある二丁のライフルであるエターナルシューターを早撃ちで撃ち落とした。

その後統夜は上空へ飛翔し背部に10翼の青い機動ウイングであるフォーチュンウイングから強化型フライヤであるネオドラグーンを全て射出し、ネオドラグーンが全て放出されたフォーチュンウイングが蒼いエネルギーを放出して翼を形成したエターナルフェザーの連携で撃ち落としていた。

ダイチ「おらおら!!」

ダイチは魔力弾等を回避しながら中国刀で地上にいる管理局員達をバツバツと薙ぎ倒していた。

ダイチ「これでラスト！」

地上にいる最後の一人である管理局員を峰打ちで倒した。
ミルキイホームズ達は……

シャロ「凄い……」

ネロ「速過ぎる……」

エリー「ダイチ君……前より強くなってる……」

コーデリア「でもこれでお終いな」

統夜とダイチの圧倒的な強さに驚愕していた。

統夜「（呆気なさすぎる・・・）」

ダイチ「どうかしたのか？」

統夜「ダイチ・・・これは不自然だと思わないか？」

ダイチ「何が？」

統夜「普通ならトイズ等を狙う場合は主力部隊を展開する筈だ・・・
ダイチ絡みでもエースぐらいは出て来る筈だ」

ダイチ「気のせいじゃないのか？」

管理局員の一人がゆっくりと起き上がった。

管理局員「まんまと掛ったな・・・お前の言う通り・・・俺達は囷・
・・・本命は『文月学園』だ・・・」

管理局員はそれだけを言うと撤退した。

文月学園というワードを聞いた統夜は驚愕な表情をしていた。

統夜「やはり謀られたか！！」

ダイチ「どういう事だ？」

統夜「俺達をおびき寄せる為の罠だって事だ・・・あんまし手応え
無かっただろ？」

ダイチ「言われてみれば・・・文月学園には・・・」

統夜「明久一人だけだ・・・零斗や遊輔、達哉、たけしは別の任務
でない・・・デストロイや白騎士相手に敵しい・・・」

ダイチ「速く行こう・・・文月学園へ・・・お前の友達や大事な人
がいるんだろ？」

統夜「ああ・・・だが・・・」

ダイチ「エリー達も連れて行く。ヨコハマに管理局が再び来たら大

変だろ？」

統夜「分かった・・・近くまで転移するぞ」

統夜はレイヴ式の魔法陣を展開した後座標を固定し転移を開始した。

その頃文月学園では・・・

魔導師「・・・・・・・・」

デストロイを纏った強化魔導師達が学園前に来ていた。

Fクラスサイド

雄二「何だ？あいつらは・・・」

明久「（あれは・・・デバイス・・・）」

瑞希「ロボットみたいですよね」

美波「何しに来たんだろ？」

秀吉「おかしな集団じゃのう・・・」

明久達は窓からデストロイの集団を見ていた。
しばらくするとグラウンドに浩次が現れた。

浩次「文月学園学園長である藤堂 カヲルに告ぐ。我々時空管理局
独立部隊セイントクルセイダースに『試験召喚システム』並びにそ
れらに関する道具等の提供を要求する！」

浩次の言葉に・・・

藤堂「甘いねえ・・・ガキ共・・・アンタら腐った管理局に提供す

るものは何一つないさね」

メガホンを片手に浩次に返した。

浩次「我らを侮蔑するか？」

藤堂「アタシは事実を言ったままでさね・・・」

浩次「なら・・・力づくで分からせるまでだ！やれ！！」

DESTROIYを纏った強化魔導師達が一斉に攻撃を学園に向けて発射した。

藤堂「言う事を聞かない者には罰をか・・・高橋先生！ガキ共の避難を頼んだよ！」

高橋「分かりました」

学園長室にいた高橋女史に生徒達を避難させるよう指示を下した。

藤堂「さて・・・見せておくれ・・・吉井 明久・・・アンタの実力を・・・」

学園のある部屋では・・・

竹原「これでいいのかね？」

文月学園の教頭である竹原が誰かと話していた。

カシム「そうです。貴方は学園長の失脚と文月学園の転覆を狙っているのですから・・・これぐらいはしないと・・・」

カシムだった・・・

竹原「私はどうすればいいのかね？」

カシム「そうですね・・・僕について来てください」

竹原とカシムは何処かへ消え去った。

明久「止めるお!!！」

Fクラスの窓から飛び降りてデストロイの集団と浩次がいるグラウンドまで走り戦い始めた。

雄二「あの馬鹿!あの集団に一人で倒すつもりかよ?!」

瑞希「吉井君!!無茶です!!」

美波「アキ!!」

秀吉「早くせんと巻き添えを喰らうぞ!!」

雄二「そうだな・・・姫路に島田・・・あいつを・・・あの馬鹿を信じようぜ・・・」

雄二は瑞希と美波を論じ一緒に避難し始めた。

浩次「中々やるようだな!!」

明久「何故試験召喚システムを狙うんだ!!」

浩次「僕達管理局の秩序と正義の為だ!!」

ライフルであるナイトシューターをノーマルモードで明久に向けて発射したが直ぐに避けた。

明久は浩次に近づき魔力の籠った拳で攻撃しようとしたが強化魔導

師達が浩次を守るように背部の丸いフライトユニット熱プラズマ複合砲であるネフェルテムを発射した。攻撃を一時中断しネフェルテムを避けた。

明久「(数が多過ぎる・・・なら・・・黒いアーマーの連中から倒すに限る!)」

浩次を諦めデストロイを纏った強化魔導師を片っ端から倒し始めた。

浩次「そうはさせるか!」

浩次の妨害もあってか中々数が減らなかった。

瑞希「吉井君・・・」

美波「アキ・・・」

体育館で明久の無事を祈っていた。

明久「キリが無い・・・」

明久にはデバイスが無く強化魔導師を数人倒したが数が多かった。すると突然明久の隣に人影が現れた。

明久「ムツツリーニ!」

康太「・・・話は後・・・これを使え・・・お前の新たな剣・・・ネオドライバーデバイス・・・アストラルフリーダムだ・・・」

突然現れた康太は真紅の宝石が埋まったオレンジ色の十字架を渡し

た後消えた。

明久「ありがとう・・・ムツツリーニ・・・僕はこれなら・・・戦える・・・自由なる剣・・・アストラルフリーダム・・・セットアップ！！」

アストラルフリーダムを起動させるとオレンジと真紅が混ざった高機動戦闘機に変化した。

明久「（確かドライバーって確か・・・）ドライバーコネクト！！」
アストラルフリーダム（ドライバーコネクト・・・イグニッション・・・）

オレンジと真紅が混ざった高機動戦闘機がアーマーとなり明久に纏われた。

浩次「くっ・・・デバイスか！」

明久「吉井 明久！アストラルフリーダム・・・大切なものを守る！！」

スラスターを吹かし浩次達の方へ駆け抜けた。

観察処分者であり・・・大切なものを守る戦士の反撃が今始まった。

第三十三話『狙われた文月学園』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

達哉「俺達がいけない間にセントクルセイダースがやって来るとは・
・油断してしまったな・・・」

達哉「新たな剣を手にした明久は浩次とデストロイを蹴散らしたが
刺客である三姉妹が増援としてやって来る・・・」

達哉「三姉妹に苦戦する明久に蒼穹の死神と気力使いが武力介入す
る！」

達哉「次回は『観察処分者の決意』テイクオフ」

第三十四話『観察処分者の決意』（前書き）

新たなる剣を手に入れた観察処分者は何を見る？

美波「HERO'S EPISODE第三十四話始まるよ」

第三十四話 『観察処分者の決意』

第三十四話 『観察処分者の決意』

アストラルフリーダムをドライバーコネクトし纏った明久が立っていた。

ミッドチルダ式の魔法陣を展開しその中から大型ライフルであるアストラルライフルを取り出した。

浩次「やはり一筋縄ではいかないか・・・全力で行く！」

ジャッジユニットのウエポンラックにあるナイトカリバーを二刀取り出し構えた。

明久は移動しながらアストラルライフルを右手に持ち低出力発射し動きを止めながらデストロイの武装を両脚にあるプラズマゼットブレイドで破壊した。

その後左手で左腿にあるグリップを取り出しエネルギー状の刃を生らせて瞬速で強化魔導師達を蹴散らしていた。そのまま一気に倒そうとしたが・・・

浩次「させるか！」

ナイトカリバーで斬り掛るが明久が左手に持つアストラルサーベルで防がれた後両腰と腰裏には砲台が上下に二つあり二基ずつ計六つある強化型フライヤーであるアストラルドラグーンを射出し浩次にオールレンジ攻撃を仕掛けた。

明久「行け！」

浩次「くっ！」

浩次がバックステップした後明久はアストラライフルを高出力発射と胸部にある拡散構造相転移砲、アストラドラグーンの同時攻撃で直撃させた。

明久「（凄い出力だ・・・いける!）」

浩次「ぐわああ!!!」

明久「文月学園から去れ!!!」

浩次「ふざけるな!我らにも意地がある!試験召喚システムを明け渡せ!」

明久「あれは皆のものだ!お前達が奪っていいものじゃない!」

ナイトシューターを最大出力のバーストモードで発射したが明久はアストラライフルを高出力発射しバーストモードのナイトシューターが負け直撃しようとした瞬間・・・
ピンク色の髪をした女性が現れ刀身と柄が銀色の片刃の大剣と刀身が銀色で柄が金色の長剣の二刀で防いでいた。

明久「増援か!」

?「へえ・・・あの子・・・強そうね」

?2「いいではないですか・・・姉様」

?3「やつとシャオ達の出番ね。あんた（浩次）はさっさとどいたら?邪魔だし」

オレンジが混ざった桜色のアーマーを纏ったピンク色のロングヘアの女性、漆黒が混ざった桜色のアーマーを纏った肩まであるピンク色の髪の女性、真紅が混ざった桜色のアーマーを纏ったリング状になっているピンクの髪の少女の三人が現れた。

浩次「くっ・・・貴様ら・・・」

明久の攻撃で立ち上がった後撤退した。

？「さして・・・あいつらがなくなった事だし・・・」

？2「彼を倒して試験召喚システムの奪還・・・本当に嫌な仕事ですよね・・・」

？3「シャオだつて嫌だよ・・・強奪紛いな事に加担したくないし」
？1「それじゃ・・・始めるわよ」

三人はそれぞれ武器を構え駆け抜ける準備を始めた。

雪蓮「雪蓮・・・シユベスターファング？・・・行くわよ！」

蓮華「蓮華・・・シユベスターファング？・・・行きます！」

小蓮「小蓮・・・シユベスターファング？・・・行つくよ！」

雪蓮は刀身と柄が銀色の片刃の大剣であるシユベスターバスターで明久に斬り掛ったがアストラルサーベルで防いでいたがアストラルシールドにブレイズルミナスを発生させてシユベスターバスターを押しした後バックステップした。

明久の行動を見た蓮華は背部に大型魔力ブースターが搭載されている円型の大型バックパックであるシユベスタープラットから一基につき砲身が二つある計十基ある強化型フライヤーであるシユベスタードラグーンを全て射出しオールレンジ攻撃を仕掛けた。

ビームの雨を全て回避しながら三人にアストラルライフルを低出力で連射した後アストラルドラグーンを計6基全て射出しシユベスタードラグーンに対応したが・・・

明久「これなら！」

小蓮「いい手だけど・・・」

雪蓮「甘いわよ！行きなさい！ファング！！」

小蓮は右肩に装備されている武装コンテナ兼用シールドであるシュベスターシールドから発射される魔力ミサイルのシュベスターズプリットを発射し・・・

小蓮の攻撃と同時に雪蓮は両腰のバインダーから4基ずつ計8基の爪を模した小型飛行ビーム砲を展開し先端部にビームサーベルを形成して貫く事も可能な強化型フライヤーであるファングを6基射出しオールレンジ攻撃を仕掛けた。

明久「（この人達・・・あいつより強い・・・）」

アストラルライフルを封印魔法陣の中へ封印し両手にアストラルサーベルを手にしてシュベスターズプリットを斬り払いファングを回避したが・・・

雪蓮「まだあるのよ！」

バインダーにあったファング2基を射出し油断した明久に直撃しようとした瞬間ファングが魔力砲で消されてしまった。

すると魔力砲を放った張本人である統夜が明久の隣にやって来た。

明久「統夜！一体何処に行ったんだよ！」

統夜「ヨコハマで管理局と戦ってた・・・今は・・・」

雪蓮と蓮華、小蓮を見て・・・

統夜「蹴散らすぞ！」

明久「うん！」

統夜はフォーチュンザンバーと右手にエターナルシューターを左手

に持ち、明久はアストラルサーベルを両手に移動し始めた。

蓮華「そんなもので！」

銃身が長い高出力ビームライフルであるシュベスターライフルを統夜に向けて狙い撃とうとしたが避けられ、統夜はフォーチュンザンバーを振るうが蓮華は回避した。

雪蓮「はあ！！」

雪蓮がシュベスターバスターで統夜に斬り掛ろうとしたが避けられ明久がアストラルサーベルで鏢競り合いに入った。

小蓮「頂き」

両腕にある籠手であるシュベスターアームズの下部に接続されている高出力と低出力の切り替えが可能なハンドガンのシュベスターハンドで明久を狙い撃とうとしたが統夜の蹴りで吹き飛ばされた。

小蓮「きゃあ！」

蓮華「シャオ！」

統夜「貰った！」

瞬歩を用いてフォーチュンザンバーで蓮華のアーモードである右肩の上に強力なビーム砲を放つ砲台が装着されているシュベスターメガランチャーを使わせないように切断し叩き落とした。

雪蓮「お前！！」

シュベスターバスターで斬りかかろうとするが避けられ明久のアス

トラルライフルの攻撃に当たってしまった。

雪蓮「何っ!?!」

統夜はフォーチュンザンバーを収納しネオドラグーンを全て射出しフォーチュンウイングを蒼いエネルギーを放出して翼に形成させたエターナルフェザーにしエターナルシューターを両手に装備した。

統夜「これで!」

ネオドラグーンとエターナルフェザーからの光の弾、胸部からのスパーカリドウス、両腰にあるクスフィアスを強化したスパークスフィアス、エターナルシューターの最大出力発射の一斉攻撃を三人に向けて発射した。

雪蓮「チッ!」

蓮華「くっ!」

小蓮「きゃっ!」

雪蓮は回避しながらシュベスターバスターを盾代りにして防御し、蓮華と小蓮は機動性を活かし回避した。

蓮華「流石は蒼穹の死神・・・」

小蓮「凄いつてレベルじゃないよね」

雪蓮「一筋縄じゃないわね・・・」

統夜の強さに冷や汗を流していた。

統夜「何故力のあるアンタらが奴等に手を貸す?」

明久「裏切られるのがオチだぞ!」

雪蓮達は武器を収納し撤退の準備をした。

統夜「何の真似だ？」

雪蓮「これ以上貴方達と戦ったら文月学園全体に被害が来るでしょう？それに・・・貴方と戦うなら違う場所で戦いたいし」

蓮華「姉様・・・確かに・・・」

小蓮「これ以上あいつらに手を貸す必要無いし」

雪蓮「そういう事・・・だけど今は管理局とは協力関係になってる

けどね・・・またね〜蒼穹の死神・・・天川 統夜君」

小蓮「じゃあね〜」

雪蓮達は転移して消えた。

明久「あの人達・・・何か事情があるかもしれないね・・・」

統夜「ああ・・・」

明久「雪蓮さん達は何の為に・・・」

統夜「万が一の時に康太に手伝わせるさ・・・」

明久「そうだね。ムツツリー二なら・・・」

統夜「さて・・・避難している体育館へ移動するか・・・」

二人はデバイスを待機状態に戻し移動しようとした瞬間・・・

藤堂「その必要はないさね」

学園長である藤堂がグラウンドに来ていた。

藤堂以外にもダイチとミルキイホームズ、雄二、瑞希、美波、康太、秀吉、翔子、優子も来ていた。

明久「ババアに・・・雄二、姫路さん、美波・・・」

統夜「ダイチやミルキイホームズ、秀吉、優子も来ていたのか・・・」
優子「統夜が纏っている鎧や今の人達の事・・・説明してもらおうわよ？」

瑞希「吉井君ですよ」

明久「分かってるよ」

統夜達は学園長室へ移動し始めた。

雄二「明久と統夜・・・お前達は何者なんだ？」

統夜「俺は天川 統夜。それ以上でもそれ以下でもない」

明久「僕は吉井 明久・・・ただの観察処分者だよ」

統夜と明久の答えに雄二は憤慨した。

雄二「お前らふざけるな！！本当の事を教えろ！！」

秀吉「統夜も本当の事を教えてほしいのじゃ！」

優子「そつよ！」

このままだと埒が明かない事を悟ったのか素直に答え始めた。

統夜「分かったよ・・・俺と明久は元時空管理局特殊部隊『ソルジヤ』の生き残りさ・・・」

明久「試験召喚システムを狙ってた人達は時空管理局と呼ばれた人達だよ」

統夜「優子が言ってた俺達が使ってたのはデバイスだよ」

優子「デバイス？」

デバイスを知らない人達は？を出していた。

統夜「ああ。魔力を持つ者にしか起動できないものであり俺が使用していたのはバリアジャケット一体型のアーマードデバイス、明久が使用していたのは動物や乗り物等を模した自立支援型のドライバードデバイスだ」

瑞希「じゃあ……あの黒い鎧を着ていた人達もアーマードデバイスというのを……？」

統夜「そうだ。だがあいつらは強化された人間だ……」

ダイチ「俺らはその強化人間を見た事無いんだけど……どんなものなんだ？」

ダイチの質問に統夜は深刻な表情になって前にシグナムとヴィータと同行し戦った事を話した。

詳しい事は第八話『更なる混沌と歪み』を見る事をお勧めします。

明久「酷い……」

雄二「人間のする事じゃねえな……」

ダイチ「命を何だと思っているんだ！」

康太「……酷い……」

秀吉「外道なやり方じゃのう……」

瑞希「酷すぎます……」

美波「こんなのって……あんまりじゃない……」

翔子「外道……」

優子「最低ね……」

シャロ「酷過ぎる……」

ネロ「卑劣ね……」

エリー「もし私達……トイズも……」

コーデリア「ならないとは言い難いわね……」

藤堂「私の方が小さく見えるよ……」

明久達は怒りを覚え藤堂は怒りを通り越して呆れていた。

優子「一つ気になったけど・・・何故試験召喚システムを管理局は狙っているの？」

統夜「恐らく召喚獣の技術を自分達のものにしそして・・・それらを応用しフィードバック・・・物理干渉能力・・・テストの点数では無く魔力値に変換した召喚獣を生み出そうという魂胆だろう」

藤堂「召喚獣の力は手強いからね・・・腐敗した管理局が考えそうな事だねえ・・・」

藤堂は呆れた感じで溜息をついた。

雄二「管理局って悪い奴らの集団だな」

統夜「それは違うぞ」

康太「本当の敵は時空管理局の中にいる・・・」

明久「時空管理局独立特殊部隊セントクルセイドズ・・・」

秀吉「ムツツリーニ！？お主知っておったのか？！」

秀吉は康太が予め知っていた事に驚いていた。

雄二「お前らに聞いたかったんだけど・・・」

明久「何？」

雄二「何故お前らソルジャーは復活しなかったんだ？」

雄二が統夜と明久に質問をした。

統夜「お前ら・・・この事は他言無用で頼むぞ？」

雄二「分かっている・・・」

統夜「よし・・・あんまし言いたくないが・・・俺と明久・・・ソルジャーは俺達の強さを恐れた管理局によって犯罪組織ごと壊滅させられたからだ・・・」

統夜と明久、康太以外「!？」

ダイチ達は驚いていた。管理局の為に戦った統夜や明久達が犯罪組織ごと爆弾代わりにさせられた事に・・・
瑞希と美波、秀吉、優子は涙を浮かべてしまった。

康太「・・・それを実行したのが・・・セイラII シュトラウト・・・
セントクルセイダースの総大将・・・」

雄二「そいつが黒幕か・・・」

統夜「ああ・・・驚かないな・・・康太が元管理局員だという事に・・・」

雄二「一々驚かねえよ・・・」

明久「僕や統夜は無事だったけど・・・」

統夜「俺達の話は以上だ・・・」

統夜と明久は一呼吸しリラックスした。

秀吉「のう・・・統夜・・・一ついいかの？」

統夜「何だ？」

秀吉が突然質問をしてきた。

秀吉「統夜と明久がやろうとしている事は・・・管理局・・・セントクルセイダースの壊滅か？」

統夜「そうだ・・・奴らがいる限り・・・世界の歪みは破壊されない・・・」

優子「それって本当の戦争よね？もしそうだったら統夜はセントクルセイダースの人達の家族から恨まれる事になるのよ？それでもいいの？」

統夜「ああ・・・俺は何もしないより何かをして恨まれる方がいい・・・」

．．それだけだ．．．」

フツと笑ってそう答えた。

瑞希「吉井君も．．．そうなんですか？」

明久「うん．．．姫路さんがAクラスと戦った時に．．．こう言っていたよね？」私、このクラスの皆が好きなんです、人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」って．．．」

瑞希「はい。言いましたね」

美波「それがどうかしたの？」

明久「僕や統夜のような平和の為に一生懸命に働いている人達を一部の人間が食い物にしたり用済みとして消される事を認める訳にはいかないんだ．．．それじゃあ．．．本当に報われない．．．誰も．．．」

雄二「明久．．．お前．．．」

明久は悲しみに満ちた表情になって言った。

統夜「お前達はどうするんだ？ミルキイホームズに優子、秀吉、雄二、姫路、島田、霧島は」

初めて真実を知った彼女達に問い掛けた。

シャロ「何も役に立たないかもしれませんが．．．協力します」

ネロ「僕も協力する。だけどスケベには協力しない」

エリー「私も協力します」

コーデリア「トイズを食い物にしようとしている奴等を許すわけにはいかないから協力するわ」

優子「統夜を騙し殺そうとした奴等を許さないから協力するわ」

秀吉「ワシもセントクルセイダーズを許すわけにはいかんのじゃ．

「・・・じゃから協力するぞい」

雄二「俺もやるぜ。悪知恵であいつらに一泡吹かしてやるぜ」

瑞希「私も吉井君に協力します！」

美波「私もやるわ」

翔子「雄二が協力するなら・・・やる・・・」

全員が協力する意思を見せた。

統夜と明久、ダイチが右手を差し出し・・・

統夜、明久、ダイチ「ようこそ！！反管理局組織・・・蒼穹の騎士団へ！！」

ミルキイホームズと優子、秀吉、雄二、瑞希、美波、翔子は正式に蒼穹の騎士団へ加入した。

藤堂「・・・決まったようだね」

統夜「ああ・・・」

藤堂「突然だけど明日から二週間休校入るから・・・そのつもりでダイチとミルキイホームズ以外「えっ？」

藤堂「ちよつとした事さね。二週間後は英都バーベナ学園へ行っておくれ」

統夜達にバーベナ学園へ行くよう言った。

その後統夜達は学園長室から出て行った。

誰もいない学園長室では・・・

藤堂「これからが面白くなりそうだねえ・・・ま、頑張りな・・・ガキ共・・・未来を切り開く為に・・・」

藤堂は一人で笑っていた。

二週間後に起こる事を予想しながら・・・

その頃管理局の本局では・・・

セイラ「試験召喚システムの奪還が失敗したのですか?!」

管理局員「は、はい!それと・・・重要な事が・・・」

セイラ「何ですか?」

管理局員「元ソルジャーである天川 統夜と朝霧 達哉、吉井 明久の三名が生存している事が判明しました・・・」

セイラ「な、何ですって!!?」

セイラは三人が生きている事という衝撃を受け驚愕していた。

無理も無い・・・手柄の為と自分の意に従わない可能性、何より自分の目的である全次元世界の統治者になる事の邪魔にしかならなかったのだから・・・

セイラ「そうですか・・・ご苦労様です・・・下がっていいですよ」

部下は敬礼した後執務室から出て行った。

しばらくしてセイラの顔は血管が浮き出、口元が激しく歪んだ顔に変化し机を叩き憤慨していた。

セイラ「おのれええええ!!忌々しい奴等が生きていたとは!!朝霧 達哉と吉井 明久はどうだっていい・・・奴・・・天川 統夜の存在だけは許す訳にはいかん!!奴がいる限り私の計画が歪んでしまう!!」

後の起こる統夜達の策で自分が今まで築き上げたものが崩壊し犯罪者として追われる事になるとは言うまでも無かった。

第三十四話『観察処分者の決意』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

桂花「ようやく終わった文月学園の戦闘・・・管理局の連中って馬鹿ばかりなの？これだから・・・」

桂花「てか私以外に恋姫キャラが出てるし！？ま、いつか・・・」

桂花「私と坂本が考えた策・・・それは・・・全次元世界に公表し管理局とセントクルセイダースを二つに分断させる事・・・」

桂花「作戦中にセントクルセイダースが通信施設へ攻撃を始めた」

桂花「今回は『偽りの秩序の崩壊』テイクオフ」

第三十五話 『偽りの秩序の崩壊』（前書き）

雪蓮と蓮華、小蓮に続き恋姫からゲストが来ます。

統夜「誰だろう?」

零斗「さあな・・・」

遊輔「HERO'S EPISODE第三十五話始まるぞ」

第三十五話 『偽りの秩序の崩壊』

第三十五話 『偽りの秩序の崩壊』

文月学園の襲撃から翌朝の本拠地寮の会議室にて統夜と遊輔、零斗、ダイチ、明久、雄二、康太、なのは、フェイト、はやて、桂花が話し合いをしていた。

桂花「難しいわね・・・セントクルセイダースだけを叩くと言うのは・・・管理局の内部だし・・・」

桂花は右手を額に乗せて悩んでいた。

統夜達も桂花同様何かを考え悩んでいた。

統夜「なあ・・・桂花さんや・・・一ついいか？」

妙に肌がツヤツヤしている桂花に問い掛けた。

桂花「何？」

統夜「たけしはどうした？普通なら一緒に出てくる筈なのに・・・」

桂花「たけしは・・・徹夜明けで寝てないからグッスリ眠っているから・・・」

統夜「（絶対違うな・・・）そうかい・・・」

桂花のハッキリしない答えに統夜は追求せず何らかの策を考え始めた。

遊輔「難しいな・・・」

桂花「（力で叩くのでは無く・・・情報で叩く・・・情報・・・）」

そうよ！」

しばらく時間が経つと桂花が何かを閃いたようだ。

はやて「どないしたんや？」

桂花「アンタ達蒼穹の騎士団が今まで調べた事を全次元世界に広めるのよ！」

雄二「お前も同じ考えか・・・だがこれでは生温い・・・」

桂花「どこが生温いのよ！」

雄二が桂花の考えに異論を唱えた。

雄二「それを演説する奴はどうするんだよ？それなりの人物じゃなきゃ・・・」

フェイト「クロノか母さん・・・三提督とか」

統夜「神王に魔王・・・月王・・・管理局の事に詳しい人物で影響のある人物・・・いたぜ・・・一人だけ・・・」

一同「えっ？」

統夜「全次元世界から称えられている聖女がな・・・」

はやて「聖女・・・」

零斗「俺も聞いた事があるぜ。その人なら大丈夫じゃないか？」

遊輔「お前・・・知り合いなのか？」

統夜「何でも屋の仕事でな・・・」

遊輔「なるほど・・・」

明久「希望があるね！」

全員が賛成したようだ。

雄二「後は証拠となるものを公表すればいいだけだ・・・」

統夜「ああ・・・高野の爺さんも手伝ってくれるしな」

すると天井から人影が降りて来た。

高野「呼んだかね？」

降りて来たのはカメラマンである高野だった。

統夜「噂をすれば来たな・・・」

高野「いよいよじゃな」

統夜「ああ・・・」

明久「ねえ・・・統夜・・・ムツツリーニはどうしたの？いないんだけど・・・」

康太がいない事に気が付いた明久が疑問に感じた。

統夜「康太ならある任務に就かせてある・・・さて・・・俺も動くかな・・・遊輔達はしばらくしてミッドチルダのある通信施設へ来てくれ」

遊輔「分かった」

統夜は立ち上がると別の仕事で転移して消えた。

なのは「いよいよだね・・・」

フェイト「うん・・・」

はやて「セイントクルセイダースが逆賊となる日が・・・」

それぞれ立ち上がり何らかの準備を始める為退室した。

腐敗した管理局を叩く為の・・・

その頃本局では・・・

浩次「・・・・・・・・」

統夜や明久に何故勝てないのか考えていた。
それ故にイライラしていたのであった。

雪蓮「（アンタみたいな奴が敵う相手じゃないっての・・・）」

蓮華「（確かに・・・力量が違うのに・・・）」

小蓮「（嫉妬つてみつともな〜い）」

雪蓮と蓮華、小蓮の三姉妹は浩次から離れたテーブルでお茶を飲みながら念話で話していた。

雪蓮「（アンタ達・・・セイントクルセイダーズは嫉妬集団と思っ
てしまうわね・・・自分達が常に上で正しいという考えを改めない
限り滅ぶのも時間の問題ね・・・）」

浩次を冷ややかな目で見つめていた。

浩次「（奴等は何故力を持ちながら僕達と一緒に歩もうとはしない
んだ？試験召喚システムもそうだ・・・僕達はそれらを取り締まる
義務があるんだ・・・セイラ大将が求めた秩序の世界の為に・・・）」

統夜やたけし、明久への嫉妬の影響なのか徐々に傲慢なものに変わ
ってしまっている。

？「浩次君。どうしました？」

腰まである黒髪に黒い眼をした少女が浩次に声を掛けた。

浩次「千秋か・・・ちよつと考え事をね・・・」

千秋と呼ばれた少女に優しく答えた。

雪蓮「(栗川 千秋・・・確か頭でつかち君の幼馴染だったわね・・・そして私達の監視役・・・)」

千秋は雪蓮達をチラッと見た後浩次に話しかけていた。

浩次「どうかしたのか？」

千秋「まだ捕まらないですね・・・蒼穹の死神は・・・彼らのお陰でどれだけの人達が・・・」

千秋も統夜達・・・蒼穹の騎士団に対して怒りを露わにしていた。

小蓮「(いい気味じゃん・・・そっちは違法研究やロストロギアを奪取してる癖に・・・)」

蓮華「(全くだ・・・だが・・・)」

雪蓮「(時が来た瞬間・・・借りを利子付けて返してやるわ)」

とある次元世界の教会の中にて・・・

統夜「ご協力感謝するよ」

？「いえ・・・大丈夫ですよ・・・今じゃなきや・・・関係無い管理局の人達が可哀想です・・・」

肩まである銀髪に小柄な体型の少女と協力する話をしていた。

統夜「アンタじゃなきや・・・全次元世界は納得しないだろうしな・
・・聖女・・・・月ちゃん^{ゆえ}」

月「へう・・・私が・・・聖女だなんて・・・出来る限りの事はや
つてみます」

統夜と月は立ち上がりミッドチルダへ転移した。

遊輔「こんなものでいいかな」

雄二「後はムツツリー二が何かをやらかすだけだ」

明久「うん」

零斗「後は統夜が演説する人物を待つだけ」

ミッドチルダにある巨大な通信施設で機材を組み込んでいた。

統夜「よお！待たせたな。連れて来たぜ」

月「皆さん・・・はじめまして・・・月と申します」

明久「吉井 明久と言います。よろしく願います」

零斗「北郷 零斗と言います。よろしく願います」

ダイチ「リュウ・ダイチと言います。よろしく願います」

雄二「坂本 雄二と言います。よろしくな」

高野「高野じゃ。よろしく頼むぞい」

月は自己紹介をした後明久達は丁寧で紹介して返した。

すると・・・クロノと明るい茶髪を束ねている青年、翠色の髪をし
た女性が入って来た。

明久「クロノさんに・・・ユーノ・・・リンディさんまで・・・ど
うして・・・」

クロノ「明久・・・君も生きていたとは・・・」

ユ一ノ「今は・・・」

リンデイ「演説を成功させる事に集中しなさい」

明久「分かりました」

統夜「俺達は出るとするか・・・雄二と明久・・・後は頼んだぜ」

明久「分かった」

雄二「任せろ」

統夜と遊輔、零斗、ダイチの四人は部屋から出た。

零斗「万が一の場合として通信施設の防衛か・・・」

ダイチ「そうだな・・・」

統夜「そろそろ・・・演説が始まるぞ・・・」

突如次元世界中の市井のテレビ、街頭スクリーンに突然のノイズが
かかり、画面が砂嵐状に変わる、同時に街中がざわつき始める。

砂嵐が晴れると着物姿に銀髪の少女が映し出されていた。

ざわめきから少女の出現により喜びに満ちた雄叫びが響いた。

月「突然の無礼をお許してください・・・私は月と申します。全ての
次元世界に住んでいる皆さん・・・聞いてください。時空管理局が
設立されて早75年になります。彼奴らがこれまで世界の秩序を守
護して来た功績はあまりに大きい・・・ですが・・・彼らは裏では
正義の名を騙り、違法な研究を行っていました・・・これを見てく
ださい」

月は高野と助手、明久、雄二に合図を出し違法な研究やとても人道
的と言えない実験、強化人間の実験等をスクリーンへ表示させた。
全次元世界だけではなく本局にも例外なく曝され、事情を知ってい
る高官たちはありえない事態にうろたえた。

無理も無い・・・機密書類や機密データ等が全て白日の下に曝され

たのだから・・・

本局では・・・

高官「何だこれは！？強化人間計画に関する機密書類ではないか！
！」

高官2「早くこの映像を消せ！」

部下「む、無理です。何者かによってコンピュータが効かないので
すよ！！！」

本局にいる高官達は真っ青になり混乱していた。

康太「・・・・・・・・」

仕掛けた犯人である康太は本来の任務に戻った。

浩次「な、何だ・・・これは・・・」

雪蓮「何ってアンタ達がやった事でしょ？よくこんな事をして恥ず
かしくないの？ねえ？」

蓮華「人の道を踏み外しているな」

小蓮「シャオだったら絶対抜けてるよ」

雪蓮達が批判的な事を言うと千秋が黒い刀身の片刃の長剣が雪蓮の
首筋に突き付けられていた。

雪蓮「まあ怖い」

千秋「それ以上侮蔑するなら許しませんよ」

雪蓮「あゝはいはい・・・」

黒い刀身の片刃の長剣をどかしながら言った。

雪蓮「(中々やるじゃない)」

街では・・・

一般市民「こんな事を管理局がしていたのかよ・・・」

一般市民2「外道じゃないか・・・」

混乱する世界。あるものは管理局のあまりに非道な所業に泣き崩れ、あるいは怒る。

月「己の利益の為、次元世界の平和と治安を守る為に真面目に働く人達を食い物にし、利用しつくし、ましてや力が強過ぎるという理由で殺して世界から忘れ去ろうとする。これは誰がなんと言おうと悪です。二年前に起きた事件を知っていますか？時空管理局に存在した特殊部隊ソルジャーと犯罪組織であるウータイとの戦争を・・・

┌

本局

月の演説を聞いたセイラは浩次達に統夜達がいる通信施設へ行かせるよう指示した。

セイラ「おのれ・・・何故私の邪魔をする！！小娘！！」

管理局からジャックしようにも康太の裏工作で機材が全て駄目になっている為手を打つ事が出来なかった。

通信施設前……

統夜「来たな……通信施設内への侵入と破壊されないように注意な」

遊輔、零斗、ダイチ「分かった!」

統夜が上を見ると浩次と千秋、雪蓮、蓮華、小蓮の五人が現れた。

統夜「俺と遊輔は三姉妹、零斗は白い騎士、ダイチは女を頼む」

統夜はフォーチュンブラスター、遊輔はクリムゾンフレアを起動させ雪蓮達の方へ向かい、零斗は浩次、ダイチは千秋の方へ向かった。

統夜「ドライバーコネクト!」

フォーチュンブラスター（ドライバーコネクト……イグニッション）

雪蓮「今度はドライバーね……」

遊輔「行くぞ!」

統夜はすぐさまドライバーコネクトし刀身がエメラルドの長剣のソードモードと刀身を折り畳み銃身を展開したライフルモードの切り替えが可能な複合兵装「ブラスターソード」を構え、遊輔はフレイルムザンバーを手にし戦い始めた。

零斗「そんなに真実をばらされるのが嫌なのか?セイントクルセイダーズさん」

浩次「お前達テロリストの好き勝手にはさせない!」

零斗「おゝお……騎士じゃ可哀想だから犬がお似合いじゃないか?」

零斗は拳を構え、浩次はナイトカリバーの二刀を構え一斉に駆け抜けた。

ダイチ「わお・・・胸がでかい人が相手か・・・」

千秋「リユウ・ダイチ・・・貴方を殺します」

ダイチ「そう簡単にはいかないぜ」

ダイチは中国刀、千秋は黒い刀身の片刃の長剣型のアームドデバイス「カラドボルグ」を手にし剣劇が始まった。

月「その戦争の真実は管理局の上層部がアルカンシエルでソルジャーを爆弾代わりにしウータイごと壊滅させました・・・手柄の為・・・権力・・・ソルジャーへの恐れていたという理由で・・・管理局の為に信じ大切な人達を守り・・・一生懸命に頑張っている人達をそんな理由で消していい筈がありません！！結果は・・・その人達は真実を隠蔽してしまいました。これで本当の秩序なのかと思う皆さんはどう思いますか？」

統夜達が戦闘している間にも月の演説は続いていた。

映像にはソルジャーとウータイの戦争しているものが映し出されていた。

一般市民「あいつら管理局は嘘つきの集団なのか？」

一般市民2「一体どうなるんだ？」

戦争の真実を知った一般市民は管理局に不信と怒りを露わにしていた。

統夜「アンタらが管理局にいるってが不思議で堪らん・・・」

雪蓮「好きで協力してる訳じゃないしね」

ソードモードのブラスターソードとシュベスターバスターの剣劇が始まりしばらくすると鏢競り合いになっていた。

遊輔「アンタはこの戦いに意味があると思っっているのか！」
蓮華「無いわ・・・けど・・・今は戦うしかないのよ!!」

シュベスタードラグーン10基全てを射出し遊輔に向けてビームを
発射したが回避した。

遊輔は回避した後フレームファンングを全て射出しビームを出し相殺
した。

小蓮「甘いよ!」

その隙にシュベスターシールドからシュベスタースプリットを発射
したが・・・

遊輔「バーニングクレイモア!!」

両肩から炸裂鉄鋼弾を発射してシュベスタースプリットを相殺し、
蓮華は両腰にあるグリップを取り出しブレイズルミナスで出来た刃
を形成した「シュベスターサーベル」、小蓮はハートの形を模した
二つのチャクラム「シュベスターチャクラム」を取り出し白兵戦で
遊輔に挑んだ。

零斗「おいおい・・・やっぱ役不足じゃないのか？」
浩次「チツ・・・テロリスト風情が!!」

余裕である零斗に対し浩次が手にしていたナイトカリバーの刃が刃
毀れしていた。

浩次は零斗相手に分が悪過ぎる・・・相手はマイティ真拳継承者であるのだから・・・

零斗「行くぜ！マイティ真拳奥義！ホワイトブロー！！」

零斗の右拳が煙状のものに変化し浩次に向けて正拳突きを放った。

浩次「魔力変換資質か！？プロテクト！！」

防壁魔法を展開したがあっさりと突破されて直撃を喰らった。

零斗「マイティ真拳は常に進化し続ける・・・何も変わらねえお前とは違うんだよ・・・」

ダイチ「よっ！ほっ！はっ！」

千秋「くっ！（重い！これ以上受け続けると・・・）」

剣劇はダイチの方が圧倒的に有利になり千秋が持つカラドボルグに罅が入り始めた。

ダイチ「貰ったあ！！」

中国刀を振るわず蹴りで千秋を吹き飛ばした。

女の子を斬る訳にいかないのか蹴りに切り替えた。

千秋「カラドボルグ・・・フルドライブ・・・ボルグフォーム！」

長剣から刀身がドリルのような螺旋状の長剣であるボルグフォームへ変化させた。

千秋「全力で行きます！！スパイラルソニック！！」

螺旋状の魔力風を発生させダイチの方へ特攻を掛けた。

ダイチ「受けて立つぜ・・・天火星秘技・流星閃光！！」

特攻を掛けた千秋に修行でパワーアップした超高速で無数の突きをカラドボルグの一点に集中させて破壊した。破壊した余波で千秋にもダメージを負わせた。

千秋「ガハツ・・・そ・・・そんな・・・」

ダイチ「俺は殺し合いしに来たんじゃないっての・・・演説を続けさせたかっただけだよ・・・」

カラドボルグが壊された事にショックを受けている千秋に呆れた感じと言った。

月「皆さん管理局全てが悪であるという誤解はしないでくださいね・・・私達の真の敵は管理局という名の隠れ蓑を利用し・・・偽の情報で欺き・・・腐敗と歪みへと墮落させた存在・・・その存在は・・・」

画面にセイラや管理局の上層部にいる高官達、管理局員が映し出されていった。

セイラ「や、止める・・・」

執務室で唾然とした様子で止めるよう祈ったが無駄だった。

月「セイラ」シュトラウトが率いる『セントクルセイダース』こそが私達の真の敵です！彼らは自分達が定めたものが真実であるという名の元に人体実験や違法な研究・・・ロストロギアの強奪・・・その上、他国の主権を無視するばかりか、自らの法を振りかざし、平和の為という名目で一国の首都等を平然と消滅しました・・・これらは本当の平和ではありません・・・ましてや秩序に程遠く犯罪者と変わりありません・・・それでは・・・時空管理局で次元世界の平和と治安の維持の為、真剣に働いている人達への冒涇です。私たち一人一人は無力かもしれませんが・・・だからこそ・・・蒼穹の騎士団と呼ばれる希望に満ちた組織がいます。魔法等の力とは・・・魔法の使えない人や力の無い人達を守る為にあるものだと思じています。最後に・・・私達のような人々を誰しもが『みんな違ってみんな良く素直に分かち合う』と言い張れる世界を邪悪と決めつけ・・・欺こうとする 세인트クルセイダースの皆さんにこの言葉を送ります・・・来世で頑張ってください・・・」

高野達は最近有名になりつつある蒼穹の騎士団のシンボルである蒼い剣十字架が描かれたマークを映像に移した。月は演説をし終え映像は元の状態へ戻った。

浩次「撤退だ・・・僕達の負けだ・・・」

雪蓮「（これなら・・・）」

蓮華「分かった・・・」

小蓮「はい」

千秋「・・・」

管理局からの連絡を受けた浩次は千秋を抱え雪蓮達に撤退の号令を出した後そそくさと撤退した。

統夜「演説成功だな・・・」

遊輔「ああ・・・」

零斗「俺達の大勝利だ・・・」

ダイチ「これなら・・・犠牲者は減る・・・」

突然クロノから連絡が入った。

統夜「どうした？」

クロノ「彼女の演説のお陰でセントクルセイダーズだけを分離させる事に成功した。だが・・・戦力は大半持つて行かれセイラ自身も行方不明になったが・・・」

統夜「しばらくは行動できないだろう・・・全次元世界の犯罪者だからな」

クロノ「そうだな・・・皆、中へ戻ってくれ」

統夜「了解」

クロノから戻るよう指示された後直ぐに通信施設の中へ戻った。

統夜「やったな！」

明久「うん！」

雄二「あのお嬢ちゃんのお陰だ」

月「いえ・・・大した事はしていませんから・・・」

統夜「影響力は高いからね・・・」

リンデイ「本当にありがとう・・・月さん・・・」

月「どういたしまして・・・」

ユーノ「セントクルセイダーズは犯罪勢力として追うけど・・・

大半奪われたから・・・困った・・・」

統夜「なぐに・・・だからこそ俺達がいる・・・リンデイさん・・・

三提督にこう伝えて・・・『俺達は歪みを破壊し未来を切り開く』

つてな・・・」

リンデイ「分かったわ・・・そう伝えるわ。私達は戻るわね。セイ

ントクルセイダースをどうするか・・・」

リンディとクロノ、ユーノは本局へと転移して消えた。
今ここに偽りの秩序が崩壊された瞬間であった。

統夜「さて・・・お送りしますよ」

月「はい。よろしくお願いします」

統夜と月はとある次元世界の教会へ転移で消えた。

月「これからも頑張ってくださいね」

統夜「分かってるさ・・・本当にありがとう・・・」

月「これだけ言わせてもらえますか？」

統夜「何だ？」

月は真剣な表情になってこう言った。

月「大切な人達を泣かせないでくださいね・・・それだけは絶対に
してはいけません・・・」

統夜「分かってるさ・・・」

それだけ答えて転移して自分の家へ戻った。

月「英雄達の物語・・・ヒーローズエピソードの始まりですね・・・」

┌

一人になった教会で月は一人で呟いた。

第三十五話『偽りの秩序の崩壊』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

たけし「ようやく元気になった・・・月さんのお陰で管理局とセントクルセイダースに分離した」

たけし「統夜さんとエアリスさんが初めて出会った教会へ赴いたはやてさんはエアリスさんと出会い話をしていた時にセントクルセイダースの魔導師が襲い掛かって来た」

たけし「次回は『星の力と古代種』テイクオフ」

オリキャラ紹介6（前書き）

千秋の詳細です。

オリキャラ紹介6

名前：栗川くりかわ 千秋ちあき

性別：女

種族：人族

容姿：腰まである黒髪に黒い眼をした少し幼さが残っている顔立ち

身長：163cm

スリーサイズ：B87/W56/H82

年齢：17歳

魔力光：青

魔力：EX

気力：EX

魔術式：古代ベルカ式

デバイス：カラドボルグ（アームドデバイス）

性格：明るく優しい性格

趣味：剣を磨く事、デバイスの調整

好きなもの（事）：子供達と遊ぶ事

嫌いなもの（事）：姑息な人

詳細：浩次と同期に入り管理局に務めている。現在はセントクルセイダーズに所属し雪蓮と蓮華、小蓮の監視役。

頭が良い為優秀で毎回の任務が終えた後でも反省をして努力をする一面を持つ。

実力は管理局のエースにも引けを取らない強さを持ち、幼い頃から訓練をしているので魔力や気力が高い。

オリキャラ紹介6（後書き）

セントクルセイダーズ側ですのでよろしくお願いします。

デバイス設定5（前書き）

統夜のフォーチュンブラスターと雪蓮達が使っているシュベスターシリーズ、千秋のアームドデバイスの詳細です。

デバイス設定5

デバイス：フォーチュンブラスター（ネオドライバードバイス）

形状：蒼い高機動戦闘機

待機状態：蒼い龍が描かれた黒いカード

搭載システム：T I E S、D C S、マナペンタクルシステム、ウエポンサモンシステム、E C S搭載

備考：フォーチュンエターナルと同時期にアブソリュートブラスターを改良したネオドライバードバイス。

装甲とフレームにはフォーチュンエターナルと同じくルナチタニウムとマシンのセルの組み合わせのものを使っており自己修復が可能になっている。

ドライバークネクト時の武装は左腕には盾の先に連結剣状のヒートロッドが仕込まれブレイズルミナス発生装置がある特殊盾「ブラスタールロッド」

右腕には刀身がエメラルドの長剣のソードモードと刀身を折り畳み銃身を展開したライフルモードの切り替えが可能な複合兵装「ブラスタールソード」

背部には機動力を向上させる一対二翼の大型ウイング「ブラスタールウイング」

封印魔法陣の中にある武装はマガジン式の遠距離狙撃に適した長銃身を持つスナイパーライフル「ブラスタースナイパー」

刀身が銀色の長剣「ブラスタールロング」刀身が銀色の短剣「ブラスタールショート」

「T I E S」とはO I E SとB I E Sの中間に当たるI E Sで、出力はO I E Sに劣るがB I E Sより十倍高く安定性も高くなっている。

Tは「トルク」の意味を持つ。

「マナペンタクルシステム」とは持ち主の扱う魔術式の魔法陣を自

在に発生させるシステムで、これによりドライバーも魔法を扱える事が出来る様になり、単体での戦術の幅を広げたり、戦闘力を上げるを上げる事に成功している。

「ウエポンサモンシステム」とは武器の一部を専用の魔法陣に封印することで自由自在に取り出せる事が可能なシステムでブラスタースナイパーとブラスターロング、ブラスターショットを収納している。

「エナジーカートリッジシステム E C S」とはロードだけではなくIESを利用しカートリッジを補給し味方に与えるシステム。
管制人格は以前と同じ。

デバイス：エターナルブラスター^{ネオ}N

形状：赤と金が混ざったの白いアーマーに蒼い追加装甲が纏われたアーマー

備考：フォーチュンエターナルとフォーチュンブラスターがドライバークネクトしたドライバードデバイス。

ブラスタースナイパーはフォーチュンウイングの外側にコネクトされフォーチュンエターナルとフォーチュンブラスターの武装を全て扱えウエポンサモンシステムの中に収納する事が可能。
機動性が更に向上されている。

デバイス：シュベスターファンク？（ネオアーマードデバイス）

形状：オレンジが混ざった桜色のアーマー

待機状態：オレンジ色の宝石が埋まった桜色の腕輪

搭載システム：OIES、FLS、アンプテイトシステム、ラインコネクトシステム、シュベスターオーシャンシステム搭載

備考：フォーチュンエターナルの基本データを基に開発された雪蓮専用ネオアーマードデバイス。

主な武装は右肩部分にある刀身と柄が銀色の片刃の大剣「シュベスターバスター」

左肩部分に刀身が銀色で柄が金色の長剣「シユベスターカリバー」
背部にある翼前縁部フレームからブレイズルミナスで形成されたエ
ネルギー翼を展開する事ができ特攻が可能になる「シユベスターウ
イング」

両腕に攻防に転用出来るブレイズルミナス発生装置と掌の部分に重
力破を放つ事が出来るグラビティインパクトと輻射波動機構が備わ
った籠手「シユベスターアームズ」

両腰のバインダーから4基ずつ計8基の爪を模した小型飛行ビーム
砲を展開し先端部にビームサーベルを形成して貫く事も可能な強化
型フライヤー「ファンゲ」

両脚はプラズマゼットブレイドにブレイズルミナス発生装置を組み
込んだ「ブレイズゼットブレイド」

「ラインコネクトシステム」とはシユベスターファンゲ?の背部に
コードを接続し供給するシステムでシユベスターメガランチャーの
威力を上げる為に使われている。

「シユベスターオーシャンシステム」とはオレンジが混ざった桜色
のアーマーから桜色のアーマーに変化し攻撃力と機動性、出力が上
がるシステム。

管制人格は存在しない。

デバイス：シユベスターファンゲ?（ネオアーマードデバイス）

形状：漆黒が混ざった桜色のアーマー

待機状態：漆黒の宝石が埋まった桜色の腕輪

搭載システム：OIES、ドルイドシステム、FLS、プリズムエ
フェクトシステム、シユベスターオーシャンシステム搭載

備考：フォーチュンエンターナルの基本データを基に開発された蓮華
専用ネオアーマードデバイス。

主な武装はバイザー搭載型ヘッドギア「シユベスターヘッド」

背部に大型魔力ブースターが搭載されフライヤー十基を待機させる

事の出来る円型の大型バックパック「シュベスタープラット」

シュベスタープラットから射出される一基につき砲身が二つある計十基ある強化型フライヤー「シュベスタードラグーン」

右肩の上に強力なビーム砲を放つ砲台が装着されている「シュベスターメガラUNCHャー」

銃身が長く連射が可能な高出力ビームライフル「シュベスターライフル」

胸部に拡散構造相転移砲と加粒子砲である「ハドロン砲」の切り替えが可能な「プリズムハドロン」

両腰の左右に一つずつあるブレイズルミナスで形成された刃を発生させるグリップ「シュベスターサーベル」

両腕に防御用の陽電子リフレクター発生装置と掌の部分に炎の衝撃波を放つフレイムインパクトと輻射波動機構が備わった籠手「シュベスターアームズ」

「シュベスターオーシャンシステム」を搭載しており漆黒が混ざった桜色のアーマーから桜色のアーマーに変化し防御力と出力が上がるシステム。

管制人格は存在しない。

デバイス：シュベスターファンク？（ネオアーマードデバイス）

形状：真紅が混ざった桜色のアーマー

待機状態：真紅の宝石が埋まった桜色の腕輪

搭載システム：TIEES、ドルイドシステム、プリズムエフェクトシステム、ジャミングフラッシュシステム、ラインコネクトシステム、シュベスターオーシャンシステム搭載

備考：フォーチューンエターナルの基本データを基に開発された小蓮専用ネオアーマードデバイス。

武装は頭部にバイザー搭載型ヘッドギア「シュベスターヘッド」

背部に粒子を広範囲に散布することでジャミングを行う事が出来る

バックパック「シュベスターステルス」

両腕にブレイズルミナス発生装置があり掌の部分にシャインインパルスと輻射波動機構が備わっている籠手「シュベスターアームズ」
シュベスターアームズの下部に接続されている高出力と低出力の切り替えが可能なハンドガン「シュベスターハンド」

両腰にはハートの形を模した二つのチャクラム「シュベスターチャクラム」

右肩に装備されている武装コンテナ兼用シールド「シュベスターシールド」

シュベスターシールドから発射される魔力ミサイル「シュベスタースプリット」

「ジャミングフラッシュシステム」は全体から真紅の光を放出させ敵の特殊システムを出せないようにするシステム。

「ラインコネクトシステム」を搭載しておりシュベスターファンゲ？の背部にコードを接続し供給するシステムでシュベスターメガランチャーの威力を上げる為に使われている。

「シュベスターオーシャンシステム」とは真紅が混ざった桜色のアーマーから桜色のアーマーに変化し機動性と出力を上げるシステム。管制人格は存在しないがその代わりに学習機能搭載型AIが搭載されている。

デバイス：カラドボルグ

形状：黒い刀身の片刃の長剣

待機状態：黒い指輪

搭載システム：六発まではいる装填式HCS、ストリームリフレクトシステム搭載。フォーム変化あり

第一形態が片刃の長剣になるソードフォーム

第二形態は片刃の剣が二つになるツインフォーム

第三形態は連結刃になるシュランゲフォーム

第四形態は実剣が二つに割れて鏢になり、そこからエネルギー状の

巨大な刃を形成するザンバーブレイカーフォーム

フルドライブ形態は片刃の長剣から刀身がドリルのような螺旋状の長剣になるボルグフォーム

詳細：レヴァンティンとバルディツシュザンバーのデータを基に開発されたデバイス。

性能は千秋自身の手で何度も改良されているためどのデバイスにも引けを取らない。

フルドライブ形態の刀身は回転する事も可能になっている。

「ストリームリフレクトシステム」は自分にくる遠距離攻撃の流れを攻撃した者への流れにするシステム。防御が少し苦手な千秋の為につけられたもの。

管制人格は男性で陽気な性格。バリアジャケット姿は黒いノースリーブのハイネックシャツに黒いミニスカートを履いた姿で上から黒いマントを羽織っている。

デバイス設定5（後書き）

デバイス設定って案外大変です・・・

第三十六話『星の力と古代種』（前書き）

桂花「私達は巨乳達をぶっ壊す!!」

美波「てか何で私もそれに加担しなきゃなんないの?!」

桂花「貴方が胸の小さい貧乳だからよ。膝の関節があらぬ方向に曲がろうとして・・・ギャアアアア!!痛い痛い!!」

美波「言いたい事は分かってるからいいの!!」

桂花「ギブギブ!!」

千世「HERO'S EPISODE第三十六話始まるんだよ」

第三十六話 『星の力と古代種』

第三十六話 『星の力と古代種』

朝霧家のお風呂にて・・・

達哉「フィーナ・・・気持ちいいか？」
フィーナ「ええ・・・達哉・・・」

二人は一緒にお風呂に入っており背中を流していた。

フィーナ「あん・・・ふぁ・・・」
達哉「ごめん・・・」

達哉がフィーナの背中を洗っていた。
しかも二人とも顔が真っ赤になっていた。

統夜「おおおお！！本番かあゝ！！」
明久「フィーナ姫って大胆だね」
康太「・・・・・・・・・・」
雄二「凄いな・・・・・・・・」

注意ですが只今の時間はお昼時間です。

本拠地にあるリビングに設置されたホームシアター並みのテレビに映る達哉とフィーナが一緒に入浴している場面を見て興奮する統夜と明久、雄二、刺激が強過ぎたのか康太は鼻血を出し大量出血で倒れていた。

統夜「達哉が胸を洗い出した・・・そのまま・・・」

優子、秀吉「止めんかああああ！！！！／／／」
統夜「ぐわああああ！！！！」

統夜は突然やって来た優子と秀吉にサブミッション攻撃を喰らい・

美波「熱血・・・」

瑞希「ダブルパンチ！！」

明久「グツハア！！」

明久は美波と瑞希による鉄拳制裁が下された。

雄二「ぐおおおおお！！！！」

翔子「雄二は見ちゃ駄目・・・」

雄二は翔子の目潰しを喰らい両手を目に当てて倒れていた。

統夜「優子に秀吉！何て事するんだよ！！ここからが本番だったのに・・・」

優子「知らないわよ！！何てものを見るのよ！！」

秀吉「一体何なのじゃ！！あのビデオは！！！！／／／」

秀吉は顔を真っ赤にしながらDVDデッキを指した。

統夜「いや・・・達哉とフィーナの入浴シーンだけど？」

瑞希「いつの間に撮ったんですか？それって盗撮ですよね？」

統夜「中々いいのが録れてたよ！そこでエッチするのかと思いきや・
・・・」

明久「そこが残念だね」

優子「お風呂場でそんなもの求めたらマズイ事になるわよ！！！！」

統夜と明久のボケにツッコむ優子だった。

統夜「あいつは平等に愛してるからいいが……」

明久「友達を思いやる一環だよ」

康太「……大丈夫だ……高野師匠は凄い……」

雄二「続きが見たかったが……雄二？」……冗談だ……」

優子はDVDデッキからDVDを取り出した。

優子「これは私が没収して処分するからそのつもりで……」

統夜「ええ……弄りネタが……」

秀吉「何か言うたかの？」

統夜「いえ……何でもありません……」

優子「さて……統夜を制裁……もといお説教を始めましょうか……」

統夜は優子と秀吉に、明久は瑞希と美波の二人に、雄二は翔子による制裁が始まった。

その頃……

はやて「一人での散歩は悪くないな」

統夜ラバース筆頭にして夜天の主である八神 はやてが一人で散歩をしていた。

色々眺めながら歩いていると寂れた教会に気付き好奇心で中へ入った。

はやて「ここって使われてないんやな・・・あつ・・・」

キヨロキヨロと教会の中を見て歩いてみるとエアリスに気が付いた。はやてからは不思議で訳が分からなく油断が出来ない娘と認識されている。

エアリスも気が付いたのか手を振っていた。

エアリス「八神さ〜ん！」

はやてはすぐさまエアリスの元へ歩んだ。

はやて「エアリスちゃんは何してるん？」

エアリス「花を育ててるの」

床の一部がはがれ地面が露出し花が咲いている花畑に水をやりながらそう答えた。

エアリス「自己紹介がまだだったね・・・私はエアリス」シルフィード。エアリスでいいよ」

はやて「私の事もはやてでええよ。綺麗な花やなあ・・・」

エアリス「ここだけ綺麗に咲くの。枯れる事は全然無いから」

はやて「凄いなあ・・・エアリスちゃんはお花が好きなんか？」

エアリス「うん。大好きだよ。はやては？」

はやて「私も好きやで。心が和むしなあ・・・」

花畑を見ながら笑っていた。

すっかり仲が良くなっていた二人だった。

エアリス「統夜ってはやての幼馴染なんだ」

はやて「うん。何でもこなせる完璧超人に見えるけど・・・」

エアリス「けど？」

はやて「どんな事でも一人で抱えてしまい一人で解決しようとする所かな・・・」

エアリス「悲しそうな顔をしてるよね・・・」

はやて「せやな・・・信じていた者達に裏切られてるしな・・・」

はやては少し悲しそうな表情で呟いていた。何かの気配を感じたのか後ろにある扉の方へ振り向いた。

エアリス「はやて？」

はやて「エアリスちゃん・・・ちよつと待っててな」

はやては真剣な表情になって扉の方へ歩き始めた。

扉を開けると管理局員・・・セイントクルセイダースの魔導師数人が立っていた。

はやて「何や・・・偽りの秩序を掲げてる犯罪集団かいな・・・」

魔導師達を見て冷めた目で見て呆れていた。

魔導師「貴様も犯罪者だろう・・・蒼穹の死神と同じく・・・」

はやて「あんなあ・・・夜天の書の持ち主というだけで犯罪者で・・・頭がおかしいんちゃうか？もつとつくに知ってるんやで・・・統夜から・・・夜天の書を改悪した事を・・・たまたま選ばれた持ち主の私のせいにされてもなあ」

魔導師2「ふん・・・まあいい・・・我らの目的は『星の力』と『古代種』の確保だ」

はやて「（星の力と古代種は何やる・・・今は・・・）ここから先は通さへんで」

扉の前に立つたはやてがデバイスを起動させ杖を槍のように構えた。

魔導師「先にいる古代種の捕獲を邪魔しないでもらおうか……」

魔導師達は杖を構え魔力を収束し始めた。

そうはさせないとシュベルトクロイツを槍のように突きで一人を黙らせた。

魔導師「おのれ！」

はやて「私らが育った英都に傷つけるのは許さへんで！」

魔導師達を睨み杖を構えていた。

魔導師「そんなもの……我らには関係ない……真なる秩序と正義は我にあり！」

魔力弾ははやてに向けて発射したが、はやてはそれを避けず魔力障壁を張り防いだ後

はやて「ブラッディダガー！」

血の色をした実体化する鋼の短剣を具現させ魔導師達に向けて放ち直撃させた後黒い翼を羽ばたかせて飛翔し上へ来るよう誘導を仕掛けた。

魔導師「以前より強くなっている……気を引き締めて掛れ!!」

魔導師達も飛翔し攻撃を仕掛けた。

はやて「（簡単に引っ掛かてるわ……）ほな……シュテルン……

」・

古代ベルカ式の魔法陣を展開し魔力を両脚に収束し始めた。

魔導師「貴様の攻撃は既に見切っている！」

魔導師達ははやてに襲い掛かったが・・・

はやて「キラービーアサルト！！！」

両脚に収束し終えた瞬間速い動きで魔導師達を翻弄し飛び蹴りを見舞い最後に魔導師の一人をフランケンシュタイナーの要領で地面に叩き落とした。

魔導師「ば・・・馬鹿な・・・」

はやて「私をなめたらあかんで・・・」

魔導師2「それはどうかな？」

後ろを振り返るともう一人の魔導師がエアリスに杖を突きつけ人質にとっていた。

はやて「エアリスちゃん！？」

エアリスが人質に取られていた事に驚いていた。

はやて「卑怯やと思わないんか？」

魔導師2「俺達の存在は絶対正義だ・・・何をやっても許されるんだよ！！！」

魔導師は後ろに下がりがながら撤退しようとしていたが誰かとぶつか

った。

はやてはその人物を見て笑みを浮かべた。

はやて「あんさんの負けやで」

魔導師2「何を言ってるやが・・・」

後ろを見ると統夜がいた。

統夜「こいつはいただけないなあ・・・」

瞬歩を用いてエアリスを直ぐに救出した後覇気を纏った蹴りで魔導師を蹴っ飛ばして気絶させた。

統夜「これは一体どういう事だ？」

はやて「実は・・・」

はやては統夜にセントクルセイダーズの魔導師が古代種であるエアリスと星の力を狙っている事を説明した。

星の力という単語を聞いた統夜は深刻な表情をしてしまった。

統夜「エアリス・・・古代種は一体何なんだ？」

エアリス「・・・教えるけど・・・内密にお願いできるかな？こればかりは・・・」

はやて「ええよ・・・女の子に秘密ぐらい一つや二つ当たり前や」

統夜「構わない」

統夜とはやて、エアリスの三人は教会の中へ入った後統夜は遮音結界を張った。

エアリス「古代種というのは・・・かつて・・・この地球にいた現

在の人間とは異なる種族なの・・・そのせいかな魔力も高いの・・・」
統夜「異なる種族か・・・でも魔力は大きく感じないが・・・リミッターを掛けてるのか？」

エアリス「うん・・・私の場合は封印しているかな。今の人達に会ったの・・・久しぶりで怖かったから・・・」
はやて「どういう事や？」

エアリスは衝撃的な事実を統夜とはやての二人に話し始めた。

エアリス「私・・・小さい頃・・・お母さんと一緒に管理局に実験台と研究材料という理由で拉致されたの・・・その後脱走したけど・・・」

はやて「お母さんも一緒に逃げたんか・・・」

エアリス「逃げ切れたのはいいけど・・・お母さんは脱走中に亡くなって・・・」

はやて「ご、ごめんな・・・」

エアリス「地球に戻った後はシルフィード家に養女として引き取られたの・・・」

統夜とはやての二人は管理局のせいでさんざんな目に遭った話を聞いて驚きを隠せずにいた。

古代種という理由で母娘を拉致していた管理局・・・セイントクルセイダーズに対する怒りは大きくなった。

エアリス「私からもいいかな？」

エアリスは統夜に質問をした。

統夜「何だ？」

エアリス「統夜は星の力を知ってるの？」

統夜「まあ・・・少しだけな・・・惑星の源と呼ばれている名称で地球以外に火星や木星にも存在している謎の力しか分からん」

そうエアリスに答えた。

エアリス「そうなんだ。けど管理局・・・セントクルセイダースはそれだけで狙わない・・・」
はやて「どういう事や？」

エアリス「星の力の真の力は星の大きさや死んだ者の数によるが蓄えられた知識や力は膨大になり時空を操る事が可能になり・・・癒す力にもなるからだよ」

統夜「奴らなら手に入れたい力だろうが・・・」
はやて「もし・・・それらを奪われたら・・・」

エアリス「この地球は滅びる」
統夜、はやて「!？」

二人は驚いた表情になり始めた後深刻な表情に切り替えた。

もし奴等の好きにさせれば罪のない人々が住んでいる地球が崩壊するからだ・・・

統夜「ふむ・・・セントクルセイダースもいいが・・・修羅も考えないといかん・・・」

はやて「速く終わらせたいのは分かるけどな・・・」

統夜「それに・・・奴等の居場所が分からん・・・無闇に行動する訳にはいかん・・・」

統夜とはやては次からどうするのか話し合っていた。

エアリス「大変だね・・・」

はやて「そうやね・・・けど・・・エアリスちゃんが一番大変な目

に遭ってきてるやないか……」

突然はやてはエアリスに優しく抱きしめた。

エアリス「え……」

はやて「私も昔は一人ぼつちやった……けど……今は違う……
友達や恋人が出来た……エアリスちゃんも一緒や……私が友達
になってあげる……せやから……泣いてええんや……」
エアリス「う、うああああ……」

小さい頃に辛い事しか遭ってきて純粋な友達がいなかったエアリス
ははやての言葉に響いたのか今まで我慢してきたのか涙を流し泣き
始めた。

はやて「よしよし……」

統夜「(辛かったんだな……)」

その後エアリスは泣き止み教会から出ようとしていた。

はやて「そう言えば……統夜は昼から何処に行ってたんや？」

統夜「ちよつとな……」

エアリス「？」

そう言つて扉を開くと二人の修羅が待ち構えていた。

そう……優子と秀吉の二人である。

統夜「げえっ！？関羽！！」

優子「誰が関羽よ！！」

はやて「優子ちゃんに秀吉ちゃん。何があつたんや？」

優子「統夜は……吉井君と土屋君、坂本君の四人でいやらしいD

VDを見てたのよ・・・」

はやて「何やて？」

エアリス「それはいただけないよ」

優子「はやて達に教えた瞬間はやてとエアリスは黒いオーラを纏い始めた。」

この時統夜の味方が0になったのは言うまでも無かった。

優子「お説教しようとした瞬間逃げ出しちゃってね・・・現在まで至る訳よ・・・」

秀吉「それじゃ・・・統夜の家まで行くぞい」

はやて「せやね・・・エアリスちゃんも行くやろ？」

エアリス「勿論」

はやて「ほな行こうか」

統夜を四人で逃がさないように家まで連行され制裁とお説教のフルコースを喰らってしまった。

第三十六話『星の力と古代種』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

優子「統夜はいつからはっちゃけたのかしら・・・まあいいわ・・・
そこが私の好きな所だから・・・」

優子「何もする事が無かった統夜達は英都を散歩していた時背中に
右だけの片翼が生えた集団が降りて来た」

優子「その集団を見た統夜と背中に右だけの片翼が生えた集団が何
らかの反応を示した・・・一体どういう事なのかしら・・・」

優子「今回は『複製された墮天使』 テイクオフ」

オリキャラ紹介7（前書き）

エアリスの詳細です。どうぞ！

オリキャラ紹介7

名前：エアリス^{II}シルフィード

性別：女

種族：人族（古代種）

容姿：腰まである桜色の髪を赤いリボンで結び瞳の色は緑色で可愛い部類の綺麗な顔立ち

身長：164cm

スリーサイズ：B84/W57/H85

年齢：16歳

魔力光：桜色

魔力：不明

気力：不明

性格：明るく大胆で積極的

趣味：花を育てる事

好きなもの（事）：花

嫌いなもの（事）：特に無い

詳細：統夜が浩次との戦闘の際逃げ延びた先である英都にある寂れた教会で出会った少女。

古代種^{セトラ}とは現在の人間とは異なる種族。遙か昔はたくさん存在したが、現在はほとんど絶滅したとされている。

とある魔法が使える為か管理局に狙われている。

普段は花屋さんとして働いており生計を営んでいる。

オリキャラ紹介7（後書き）

彼女は重要な人物になるかもしれませんのでよろしくお願いします。

番外編『超力戦士の一日』（前書き）

早速ですがネタバレも含まれるイメージOP2を流します。

HERO'S EPISODEのイメージOP2「Sherette World」

最初に綺麗な青空が映った後に明久、たけし、ダイチ、零斗、達哉、遊輔、統夜の順に映される。

英都の街並みの場面に映りHERO'S EPISODEのタイトルが現れる。

修羅界から来た五霸王と対峙し猛攻撃を喰らうが明久とたけしがイリヤに襲い掛かり、ダイチと零斗、達哉がレイヴンとミア、ルフに襲い掛かり、統夜と遊輔の二人がデュークに襲い掛かり大きな衝撃波を発生させた所が映し出される。

バハムートで道路を走っている統夜、公園で修行している遊輔、トラットリアで働いている達哉、恋人であるアリスと一緒にいる零斗、スケベな事をして女性から追われているダイチ、メイメイと桂花、ルイスと一緒に街を歩いているたけし、試験召喚戦争を行っている明久が映される。

統夜はサーディオン、遊輔は新たなデバイスであるガーディアンデバイスであるペンドラゴブレイド、達哉は心装である氷河月華、零斗は拳、ダイチは中国刀、たけしはスターライザー、明久はアストラルカリバーをそれぞれ手にし上へ掲げる所が映し出される。

統夜の第二の覚醒である背中から漆黒の10翼の翼が生え、髪の色と瞳の色が白く輝く銀髪に翡翠色の瞳に変化する真ルシファーに変身し統夜ラバーズが統夜を下から見つめている所が映し出される。

統夜達7人の他になのはやフェイト、はやて、ヴォルケンリッター、メイメイ、桂花、アリスが夕暮れの荒野を走っている所が映し出される。

修羅兵とセントクルセイダースの戦闘員に囲まれている蒼穹の騎士団だったがなのはとフェイト、はやてのトリプルブレイカーで全てを蹴散らす場面が映し出される。

稟や樹、土見ラバーズ、雄二、瑞希、美波、翔子・・・統夜達蒼穹の騎士団に協力する面々と華琳と星が映し出される。

セントクルセイダースである浩次と千秋、セイラの三人が映し出される。

謎の少年であるカシムと裏切った竹原、咲夜、黒い短髪に青い眼をして整った顔立ちをした謎の人物『マガキ』が映し出される。

佐助と神王、魔王、月王が映し出される。

セントクルセイダースに手を貸している蓮華と小蓮が映し出される。

風吹く中統夜と雪蓮が見つめ合っている所が映し出されている。

倒すべき敵であるセイラ、マガキ、カシム、イグニス順に映し出される。

セントクルセイダースの本拠地らしき場所で魔導師達を統夜と遊輔、雪蓮、蓮華、小蓮の五人はデバイスを起動させて蹴散らしている場面が映し出される。

統夜は光の果てに平和を祈るエアリスを手で掴もうとするが掴めない場面が映し出される。

最後に明久、たけし、ダイチ、零斗、達哉、遊輔、統夜の順に回るように映った後統夜ラバーズと達哉ラバーズ、たけしラバーズ、明久ラバーズ等全員が現れて映し出される。

番外編 『超力戦士の日』

番外編 『超力戦士の日』

統夜とダイチ、明久の三人とセントクルセイダースの戦い、セントクルセイダースが管理局と分離されるまでの話である。

たけし「統夜さんから借りたGジェネワールドは楽しいや・・・」

PSPで統夜から借りたGジェネワールドをやっていた。

たけし「やっぱ・・・ダブルオークアンタとストフリは最強だな」

ルイス「・・・・・・・・」

ルイスはたけしに寄り添っており大きい胸がたけしの腕に当たっている。

そのせいかたけしの顔は少し赤くなっている。

たけし「あの・・・ルイスさん・・・当たっているんですけど・・・」

ルイスにそう言うと・・・

ルイス「たけしになら当たっても構わない・・・」

こんな答えが返ってきた。

ルイス「結構強くなったね・・・」

たけし「まあな・・・これ・・・統夜さんのデータを引き継いでる

んだけどね・・・これが異常過ぎるんだよ・・・ダブルオークアンタとストフリ、ウイングゼロカスタムが・・・」

ルイス「異常・・・」

すると突然ドアが開きメイメイと桂花の二人が入って来た。しかも二人は機嫌が悪い。

メイメイ「ちょっとルイスさん！たけしにそんな無駄な脂肪を当てないでほしいね！！」

桂花「そうよそうよ！！胸がでかいからってやって良い事と悪い事があるでしょ！！」

二人はルイスの胸に対して怒っていたようだ。

たけしはすぐさまセーブした後PSPの電源を切った。

ルイス「気が付いたらこの大きさだった・・・」

ルイスの答えに二人の怒りは大幅に上がったのは言うまでも無かった。

たけし「二人ともどうしたんだ？」

メイメイと桂花の二人に聞いてみた。

メイメイ「私と一緒にデートするね」

桂花「私と一緒にデートしなさい」

メイメイはたけしの右腕を引っ張り、桂花はたけしの左腕を引っ張り始めた。

たけし「いでででで!!!」

メイメイ「桂花!引つ張つてゐる左腕を離すね!」

桂花「メイメイこそ引つ張つてゐる右腕を離しなさいよ!」

お互い引つ張りながら言い争いをしていた。引つ張られてるたけしは痛がつてるが・・・

ギヤーギヤー言い争いをしているとルイスの髪が突然ゆらゆらと逆立ち怒りのオーラが出ていた。

ルイス「二人とも・・・」

メイメイ「何ね!ヒッ!」

桂花「何よ!ヒッ!」

ルイスの怒りのオーラが怖かったのか一斉に離しルイスに土下座して謝った。

余程怖かったのかな・・・

メイメイ、桂花「ごめんなさい。ごめんなさい」

たけし「落ち着いてくれ。ルイスさん・・・俺は大丈夫だから・・・
そうだ・・・一緒に買い物へ行こうか?」

たけしはルイスを宥めて落ち着かせ怒りのオーラは無くなった。
もしたけしが止めなかつたら部屋は全壊していたであろう・・・

ルイス「買い物・・・?」

たけし「そう・・・買い物」

メイメイ「ルイスさんの着る服が無かつたらこつちも困るね」

桂花「そうね・・・ナドレ状態になったら・・・ああ・・・ヴェー
ダ・・・私は・・・って言ってしまうわ・・・」

メイメイと桂花の二人は賛成していた。
前にルイスが全裸でたけしと一緒に寝た事がありメイメイと桂花のフルボッコタイムがあったのは言うまでも無かった。

たけし「それに・・・ルイスさんも変わらなくちゃいけないよ。色々な人達と交流したり街を見回るのはいい事だし・・・」

メイメイ「それは賛成ね。外に出ない事は身体に悪いね」

桂花「そうと決まれば行くわよ」

たけしとメイメイ、桂花、ルイスの四人は寮から出て英都の街へ繰り出した。

たけし「最初に・・・服屋さんだな」

メイメイ「服は最初の方がいいね」

桂花「服選びは私達に任せなさい」

たけしの提案で服屋へ行く事が決まり移動し始めた。

ルイス「たけしも一緒・・・」

たけし「えええええーっ!!?!?ここ女の子専門だよ?!」

着いた先である女の子専門の服屋を前に顔を赤らめて叫んだ。

ルイス「だって・・・不安だから・・・」

メイメイ「初めてだから大目に見るね」

桂花「たけしは変な事をしないから大丈夫よ」

たけし「普通なら『待った方がいいね』じゃないの!?俺にとって刺激が強過ぎるかもしれないのに・・・」

メイメイ「何事も経験が必要ね。カップルで入っている人もいるね」

メイメイの視線にカップルで一緒に入っているのが映っていた。

たけし「しょうがない・・・一緒に入ろう・・・でも戦力外という事だけは覚えておいてね・・・」

ルイス「分かった・・・」

たけしは渋々と了承し四人は中へ入った。

ルイス「多い・・・」

たけし「それは俺も同感だ・・・」

ルイスが下着を見ながら呟いた。

メイメイ「巨乳は勝ち組なのかね・・・」

桂花「諦めちゃ駄目よ！私達貧乳組にも勝ち目はある筈よ！！」

メイメイと桂花の二人はルイスの胸に嫉妬を抱いていた。

たけし「あはは・・・」

二人のやり取りに対して苦笑いしか出来なかった。

ルイス「たけし・・・これはどう？」

たけし「どれどれ・・・黒だねえ・・・でも・・・こっちは赤くなりそうだねえ・・・」

某海軍大将の黄猿さんの格好をしたたけしが黒のブラとパンツ姿のルイスを見てやや恥ずかしがっていた。

そりゃそうだろう・・・巨乳の人には慣れてないから・・・

桂花「ぐはっ！何と言う破壊力なの・・・」
メイメイ「桂花ーっ！！傷は浅いね。しっかりするね！」

ルイスの身体に負けたのか倒れてしまった桂花を介抱しているメイメイがいた。

たけし「桂花・・・頑張ろうよ・・・」

たけしは元の格好になり桂花にそう言った。

ルイス「・・・・・・・・・・」

次は服を選び白いワンピースの他に黒いゴスロリ服、オレンジのノースリーブにベージュのミニスカ、白いニーソの組み合わせの服を試着し購入した。

無論たけしのお金で払いましたとき・・・

たけし「女の子の服って高いんだな・・・」

メイメイ「何言ってるね。普通ね」

たけし「そういうものか？」

桂花「いい勉強になったでしょ？」

服屋から出て元気になった桂花が質問をした。

たけし「まあな・・・」

ルイス「たけし・・・メイメイ・・・桂花・・・ありがとう・・・」

たけしは桂花に感謝し、ルイスはたけしとメイメイ、桂花の三人に感謝していた。

たけし「飯はどうする？」

携帯を取り出し時間を見て呟いた。

メイメイ「中華料理がいいね」

桂花「私も賛成よ」

たけし「そうだな・・・そこにしようか。ルイスもどうだ？」

ルイス「中華料理・・・食べてみたい・・・」

たけし達四人はたけしが知っている中華料理店へ歩き始めた。

たけし「俺は・・・ラーメンとチャーハンでいいかな」

メイメイ「私はチャーハンだけでいいね」

桂花「私はラーメンでいいわ」

ルイス「私は三倍麻婆豆腐を・・・」

ルイスが食べるものにたけしは青ざめた。

メイメイ「どうしたね？」

たけし「いや・・・何でも無い・・・ルイスさん・・・食べてみれば分かるから・・・」

ルイス「分かった・・・」

たけし達は自分達が食べるものを注文した。

しばらくすると・・・たけしにラーメンとチャーハン、メイメイにチャーハン、桂花にラーメン、ルイスに真っ赤な麻婆豆腐が来た。

真っ赤な麻婆豆腐を見たたけしとメイメイ、桂花は滅茶苦茶辛そうだなと思ったそうなの・・・

たけし、メイメイ、桂花、ルイス「いただきます」

それぞれ食べ始めた。

ルイス「おいしい・・・」

たけし「ええええーっ！辛くないの？」

ルイス「大丈夫・・・あーん・・・」

三倍麻婆豆腐とは某中華料理店の激辛麻婆豆腐に匹敵するほどの辛さを誇り食べる人はあまりいない。

レンゲで麻婆豆腐をすくいたけしに差し出した。

たけし「えっ・・・（ここはどうすれば・・・）」

ルイス「駄目なの・・・」

涙目で上目遣いでたけしを見つめていた。

メイメイ「ルイスさん。ずるいね！たけし。私のチャーハンの一口あげるね」

メイメイも負けじとレンゲでチャーハンをすくいたけしに差し出した。

桂花「二人ともずるいわよ！たけし。私のラーメンも食べなさい」

レンゲにラーメンの麺を入れてたけしに差し出した。

たけし「（これって達哉さんが言ってたあーん大会なのかな・・・）」

あーん・・・」

三倍麻婆豆腐とチャーハン、ラーメンを食べた。

尚三倍麻婆豆腐を食べたたけしは汗が大量に流れたのは言うまでも無かった。

たけし「おいしいよ（三倍麻婆豆腐の辛さは伊達じゃない・・・）」

その後それぞれ自分達が注文した料理を食べ始めた。

たけし、メイメイ、桂花、ルイス「ごちそうさまでした」

食べ終えたけしがお金を払った。

ルイス「おいしかった・・・」

外をキョロキョロと見ながら呟いていた。

桂花「ルイス・・・珍しいのは分かるけど・・・自重しなさい」

桂花がルイスに母親のように注意していた。

たけし「しょうがないよ・・・ルイスさんはこんな賑やかな街に慣

れてないんだからさ・・・適当にショッピングして帰ろうぜ」
メイメイ「うん」

その後たけし達は色々な店へ行きショッピングをし寮へ帰った。

メイメイ「皆の者・・・準備は出来たね？」

桂花「勿論・・・」

ルイス「・・・出てる・・・」

夕方になりメイメイと桂花、ルイスの三人がリビングに集まっていた。

メイメイ「これよりたけしを賭けたゲームを始めるね。ガンダム無双3で撃墜数を競うものね！一位の者がたけしと一緒に風呂に入る権利と寝る権利が与えられるね」

メイメイはPS3の電源を入れディスクを入れた。

メイメイ「誰から行くね？」

ルイス「私・・・」

最初はルイスだった。選んだ機体はガンダムDXだった。

ルイス「・・・・・・・・」

メイメイ「やるね・・・」

桂花「広域殲滅型は恐ろしいわ・・・」

DXで敵の攻撃を避けながらビームサーベル斬りコンボ等を用いて敵指揮官機を倒しクリアした。

ルイスの撃墜数は459だった。

メイメイ「次は私ね！」

メイメイはダブルオーライザーを選択した。

ダブルオーライザーで突進し近接攻撃で相手に攻撃した後ダッシュ攻撃を数回攻撃していた。

桂花「強いわね・・・でも・・・」

ルイス「撃墜数が少ない」

メイメイ「まだまだね！」

SP攻撃であるライザーソードを見舞ったが撃墜数は増える事は無くこのまま敵指揮官機を倒してクリアした。

メイメイは墓穴を掘った事に後悔してしまったようだ。

メイメイ「撃墜数は・・・399ね・・・ダブルオーで行ったのが致命的だったね・・・」

桂花「次は私の番ね・・・ここはユニコーンで行くわ」

ユニコーンガンダムを選択し複数の敵にコンボした後ビームマグナムの連射で撃墜数を稼ぎSPゲージが溜まった瞬間、SP攻撃であるビーム・トンファー乱撃を見舞いフィールドを奪取した。

桂花「押し通るのよ！」

メイメイ「ユニコーンは汚いね！」

ルイス「ずるい・・・」

桂花「何よ！作者^{ケン}だってガンダム無双3でよくユニコーン使って無双してたわよ！」

メイメイ「作者ぁーっ！！！」

手強いステージとかでよく使っていました・・・

この調子で撃墜数はルイスの撃墜数を超えフィールドを全て制覇した後敵指揮官機を倒しクリアした。

桂花「撃墜数は・・・686機ね・・・勝ったわ・・・」

メイメイ「素直に負けを認めるね・・・」

ルイス「メイメイの言う通りに負けを認める・・・」

この勝負は桂花の勝利が決まった。

運命のお風呂の時間になった頃・・・

たけし「今日は疲れたな」

大浴場の脱衣場で服を脱ぎ中へ入ると真っ赤になり固まった。
何故なら・・・

桂花「待ってたよ。たけし。一緒にお・ふ・ろ・に入ろう」

たけし「（ここで逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ逃げちゃ駄目だ・・・）
いいよ・・・」

バスタオルを巻いた姿の桂花がいたのだから・・・

たけし「（何か久し振りだよ・・・桂花と一緒に入るのは・・・）
」

そう思いながらたけしは桂花と一緒に洗いっこした後湯船に浸かった。

たけし「気持ちいいよな・・・」

桂花「遅しくなったわね・・・たけしの身体・・・修行したのでし
よ？」

たけし「軍師は何でもお見通しだね・・・その通りさ・・・桂花と
メイメイ、ルイスを守る為に・・・」

桂花はたけしの身体を見て修行していた事が見抜かれていた。
その後二人はお風呂からあがりたけしの部屋へ戻った。

桂花「たけし・・・今日は一緒に寝るわよ」

たけし「分かった」

桂花「ん、くちゆくちゆレロレロ／／／」

たけし「ん、くちゆくちゆレロレロ／／／」

たけしと桂花はキスをし二人は服を脱ぎ熱く愛し合い眠った。

その頃・・・

メイメイ「ルイスさんはずっと一人ぼっちだったんだね・・・」

ルイス「うん・・・でもたけしやメイメイ、桂花がいるから寂しくない・・・」

メイメイ「私達は友達であり恋のライバルね！寂しい思いはさせないね」

メイメイとルイスは一緒に一つのベッドで寝ていた。

セイントクルセイダーズを管理局から分離する作戦当日の朝・・・

桂花「うん・・・良く寝たわ・・・」

肌がツヤツヤになった桂花は服を着始めネコミミフードを被った後たけしの部屋から静かに出た。

桂花「（絶対・・・分離させてみせる・・・偽りの秩序を崩壊させる！）」

そう心に誓い統夜達が集まっている会議室へ赴いた。

番外編『超力戦士の一日』（後書き）

今回のリクエストは龍の骨様からの作品です。

自分はリクエスト作品を書く事が初めてでしたので緊張しました。

次回からは本編です。

HERO'S EPISODEのイメージ2「Real Force」

太陽が輝いている青空が映り大草原で幼い頃の統夜とはやて、文乃、優子、秀吉が映される。

秀吉、優子、文乃、はやて、統夜の人影が順に映し出される。

待機状態のフォーチュンエターナルを見てポケットの中に入れて準備が出来た統夜、シュベルトクロイツを首から下げ制服に着替え鞆を持ち準備が出来たはやて、制服に着替え準備が出来た文乃、時計を見ながらそれぞれ制服に着替え準備をしている優子と秀吉が映し出される。

登校中に統夜とはやて、文乃、優子、秀吉が出会い白い扉に手を掛け無限に広い夕焼けの空が映し出され物見の丘公園に五人が立っている所が映し出される。

場面が切り替わりそれぞれ木の側に鞆と待機状態のフォーチュンエターナルとフォーチュンブラスター、シュベルトクロイツがシートの上に置かれている。

カメラの準備が出来たのか現代の優子が統夜とはやて、文乃、秀吉に声を掛け五人は背景にお花畑が見える所で統夜を中心にそれぞれポーズした所が映される。

第三十七話『複製された堕天使』（前書き）

西村「私と一つになろうではないか!!」

明久「嫌だぁーっ!!」

雄二「てか声優ネタやってんじゃねえよ!!」

福原「HERO'S EPISODE第三十七話始まります」

第三十七話『複製された堕天使』

第三十七話『複製された堕天使』

英都の街を統夜と遊輔、達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久の七人が歩いていった。

統夜「このメンツで歩くの初めてじゃね？」

零斗「そうだな・・・」

ダイチ「てかこの中で彼女いないの・・・遊輔だけじゃね？」

ダイチの一言で遊輔は固まった。

統夜「ダイチ・・・あんましそういう事を言うもんじゃない。可哀想だろ？」

達哉「そうだぞ」

零斗「俺もいるけどな」

たけし「俺も」

明久「僕も」

ダイチ「統夜と達哉、たけし、明久はラバーズ持ちだもんね・・・特に多いのが統夜・・・俺にフラグマスタースキル寄越せ」

遊輔「・・・・・・・・」

ダイチは統夜にフラグマスタースキルという訳の分からないものを寄越すように言った。

遊輔は七人の中で自分だけ彼女がいない事にコンプレックスを抱いていた。

遊輔よ・・・君に春が訪れるさね・・・

零斗「お前じゃ無理だろう」

達哉「お前・・・学園でスケベな事してるし・・・学園内では嫌われている方向になっているのに・・・」

統夜「そんなものを身につけてフラグ立たせてみる・・・エルキユールにぶつ殺されるのがオチだぞ？」

たけし「女の子って怖い所があるからね・・・」

明久「そのエルキユールさんに霧島さんの性格にする装置で変えたらどうなるかな？」

明久のとんでもない一言に統夜は青ざめ大汗を流していた。

統夜「間違い無く・・・ダイチは死んでいる・・・目潰しやアイアンクロー・・・スタンガン等によって・・・」

零斗「そんなに恐ろしいのか・・・霧島って娘は・・・」

明久「まあね・・・雄二に一途だし・・・」

統夜「映画館へ行った時なんて鎖に繋がれた木製の枷をさせてたから・・・」

ダイチ「それは俺でも嫌だな・・・」

翔子の恐ろしさを知ったダイチは青ざめ大量の汗を流していた。

もし自分の彼女であるエリーが翔子並のヤンデレになればダイチの命は危ういのだから・・・

零斗「一回やってみようか？」

統夜「見てみたいしな・・・」

明久「バイオレンスな光景が見れると思うよ・・・」

ダイチ「本当に止めて！！いや・・・本当に止めてください！お願いします！」

実行しようと考えている零斗と統夜、明久に土下座してまで懇願し

た。
よっぽどヤンデレ化になったエリーが怖いと見た。

たけし「話変わるけどさ・・・やっと俺とダイチさんは管理局から命を狙われる事は無くなったんだな」

統夜「ああ・・・これは三提督とクロノ、リンディさんのお陰だよ。それに・・・狙うように指示したのはセイラだし」

達哉「今後はどうするんだ？こっちは学園休みだし・・・」

統夜「そっちなもか・・・あの学園長・・・何を考えてるのやら・・・」

すると突然街を覆う様に封鎖結界が展開された。

零斗「!?・・・何か来るぞ!!」

何かに気付いた零斗が言った途端、七人の前に・・・

?「・・・・・・・・」

10人以上いる背中に右だけの片翼が生え頭部にフルフェイスの仮面を被った魔導師の集団が空から降りて来た。

突然統夜は謎の集団を見ると何かの反応を示した。

統夜「(何だ・・・一体・・・あの集団と俺に何の関係がある・・・)」

零斗「どうかしたか？」

統夜「いや・・・何でも無い・・・ダイチにたけし・・・念の為変身しておけ・・・」

ダイチ「わ、分かった!超力変身!」

たけし「分かった!気力転身!オーラチェンジャー!」

たけしはオーレッドに変身し、ダイチはリュウレンジャーに変身した。

統夜「行くぜ・・・サーディオーン！」

遊輔「行くぞ！クリムゾンフレイム！」

達哉「行くぞ・・・ラピスブレイブ！」

明久「行くよ！アストラルフリーダム！」

統夜はサーディオーン、遊輔はクリムゾンフレイム、達哉はラピスブレイブ、明久はアストラルフリーダムを起動させた。

統夜「行くぜ！」

統夜の号令とともに謎の集団の所へ駆け抜けた。

遊輔「今までの雑魚とは違うな・・・でもな・・・負ける訳にはいかねえんだ・・・」

フレイムザンバーで応戦しながらフレイムファンクを全て射出し魔導師を翻弄した。

遊輔「ちよいさあ！！」

両脚と爪先にエネルギー状の刃が発生する隠し腕が装備され蹴りと連動した使用が可能な武装「ソードマニピュレーター」で魔導師を切り裂き右腕にある杭打ち機で魔導師の腹部に当て吹き飛ばした。

遊輔「大した事ないな・・・っと・・・まだいたんだっただな・・・」

遊輔は増援としてやって来た片翼が生えた魔導師達を相手にしていた。

零斗「こいつら・・・一体何なんだ？」

拳で魔導師と打ち合っていた。

零斗「（こいつは普通の魔導師じゃねえ・・・イグニスって野郎と何かが同じだ・・・でも弱いぜ！）マイティ真拳奥義！アイスタイム！！」

両手で一人目の魔導師に手で触れ凍らせた後・・・

零斗「こいつも持って行け！！八尺瓊勾玉！！」

親指と人差し指で作った輪から、無数の光の弾丸を発射し魔導師達を一掃した。

達哉「神斬！」

ブレイブカリバーを居合の構えをした後魔導師をすれ違い様に高速の居合いで斬りつけて倒していた。

達哉「（動きを止める・・・）フロストバイトシステム・・・起動！氷陣！」

体を横に1回転させて、居合いを行い目の前に冰山を発生させて魔導師達の動きを封じた後・・・

達哉「瞬斬！」

動きを封じられた魔導師達を切り伏せた。

ダイチ「今までの魔導師達より強いけどさ……だけど！！天火星
！稲妻炎上破！！」

中国刀で魔導師達を斬りながら間合いを取り、気力で炎と雷を呼び、
炎と雷の同時攻撃をした後にもう一回炎を放ち黒焦げになった。

ダイチ「威力上がったね？」

以前より技の威力が格段と上がっている事に驚きながらも戦いに集
中していた。

ダイチ「行くぜ行くぜ！！」

中国刀と如意棒のツーハンドで魔導師達を切り裂き当てていた。

たけし「質は前よりも上がってるけど……俺達も強くなってるん
だ！！」

スターライザーで魔導師達を斬った後上へ高くジャンプした。

たけし「超力チョップ！！」

空中から勢いよくチョップし直撃させた後スターライザーから光線
を他の魔導師達に向けて攻撃し直撃させた。

たけし「一気に行くぜ！！」

スターライザーの刀身に超力を込め始め・・・

たけし「秘剣超力ライザー!!!」

魔導師を強力な一閃をした。

明久「こいつら・・・動きが速い・・・なら・・・」

アストラルライフルを精密狙撃で片翼を狙いながらアストラルドラグーンを射出しビームを放ちオールレンジ攻撃を仕掛けた。

魔導師「・・・・・・・・」

魔導師は勘付いたのかアストラルドラグーンのビームを回避していた。

明久は予想通りとニヤリと笑っていた。

明久「そうならばこっちの攻撃も当たるよね!!!」

魔法陣から長身ライフル「アストラルオクスタン」を左手に持ちアストラルライフルの二丁で実弾をアストラルオクスタン、高出力威力をアストラルライフルから発射しドラグーンを避ける事に専念している魔導師達は直撃し炭になった。

その後アストラルライフルとアストラルオクスタンを封印魔法陣の中へ入れた後鞘付の刀身が緑色で柄が赤いバスタードソード「アストラルカリバー」を取り出した。

明久「後は白兵戦でやるだけ!!!」

搭載されてあるMBSを起動させアストラルカリバーで魔導師達を

乱れ斬りを行った。

統夜「何処かの野郎と思っただが・・・拍子抜けだぜ！」

サーディオンの魔導師達を斬り捨てていた。

統夜「（一体何だったんだ・・・さっきの反応は・・・）チッ・・・まだ来るのか！」

サーディオンの刀身に五気を収束し・・・

統夜「霸牙天衝・滅！！！」

五気を纏った月牙天衝で魔導師達を全て蹴散らした。
終わったのか封鎖結界が解除された。

零斗「終わったな・・・」

統夜「ああ・・・」

遊輔「一体何なんだ？」

達哉「セントクルセイダースの差し金じゃないのか？」

ダイチ「それにしても片翼って一体何なんだ？」

たけし「さあ？」

明久「念の為一人だけ回収しよう」

統夜「そうだな。その前に顔を拝見するか」

魔導師が被っていたフルフェイスの仮面を取ると統夜と遊輔、達哉、零斗、明久の五人はフルフェイスの仮面の下の素顔に驚愕した。
何故ならイグニスと同じ顔なのだから・・・

零斗「偶然か？」

たけし「こつちも同じ顔だぜ」
ダイチ「こつちもだ」

たけしとダイチも他の魔導師達のフルフェイスの仮面を取り素顔はイグニスと瓜二つだった。

零斗「雑魚だったか・・・徐々に奴に近くなったら・・・取り返しがつかなくなるぞ・・・」

統夜「ああ・・・」

達哉「一体誰が・・・」

遊輔「さあな・・・」

明久「イグニスの偽者を作るなんて・・・一体誰が・・・」

統夜「さあな・・・とりあえず・・・寮へこいつを運ぶぞ」

魔導師を担ぎ統夜達は転移で寮へ戻った。

寮へ戻ると髪の色が桃色の少女が寮の前にいた。

零斗は彼女を知っているのか声を掛けた。

零斗「アリス！」

アリス「零斗!!!」

アリスと呼ばれた少女は零斗の所へ駆けつけ抱き合った。

統夜「え〜・・・お知り合い？」

零斗「知り合いも何も恋人同士だ」

統夜「マジカ!？」

達哉「それを言うならマジか? だろ・・・」

零斗に彼女がいる事に驚いていた。

アリス「アリス・チェンバースです。よろしくね」

統夜「俺は天川 統夜。よろしくな」

遊輔「俺は桜木 遊輔。よろしく」

達哉「俺は朝霧 達哉。よろしくね」

ダイチ「俺はリュウ・ダイチ。よろしくな」

たけし「俺は竜崎 たけし。よろしく」

明久「僕は吉井 明久。よろしくね」

統夜達はアリスに自己紹介した後中へ入った。

零斗「よくここって分かったな」

アリス「零斗・・・よくここに住んでるって情報があったから・・・」

零斗「すまなかったな・・・腐敗した管理局の元凶であるセイント
クルセイダーズを倒す為に統夜達と協力してるんだ」

アリス「名前を聞いて思い出したんだけど・・・蒼穹の死神と紅蓮
の猛虎、瑠璃の軍神の三人がいるじゃない!？」

零斗「そうだな・・・統夜・・・シャルさんはどれぐらいで来る
?」

統夜「もうすぐ来る」

解剖をシャルに頼む為携帯で呼んでいたのだった。

するとシャルが寮の中へ入って来た。

シャル「統夜君。どんな用件なのかしら?」

統夜「こいつの解剖をお願いしたい。医学的な事はさっぱりでな・・・」

魔導師の一人をシャルに渡した。

シヤマル「分かったわ・・・出来る限りの事はするわ・・・」

シヤマルは白衣を着て解剖室へ移動し解剖を開始した。

統夜「お前・・・アイリにどう説明するんだ？」

零斗「あ・・・しまった・・・てかお前んとこで保護しろよ!!」

統夜「でもお前に懐いてるだろ？」

アリス「零斗・・・」

零斗「落ち着いてくれ・・・説明するから」

アリスが黒いオーラを纏いそうになったが零斗はアリスを落ち着かせた。

直ぐに零斗はアイリの事を話した。

アリス「そんな事が・・・酷いよね・・・」

零斗「ああ・・・あいつらは正義の為と言った・・・これは既に正義じゃない・・・無理矢理連れ・・・実験する時点だな・・・」

統夜「俺達蒼穹の騎士団は腐敗したセイントクルセイダースを討つ為に行動している・・・手を貸してくれるか？」

アリス「零斗がいるなら私も入る」

零斗「アリス・・・」

アリスも零斗と共に闘う為蒼穹の騎士団へ加入した。

しばらくするとシヤマルが深刻な顔をして戻ってきた。

統夜「どうだった？」

シヤマル「外部から人ならざる者の血が入れられた形跡があったわ・・・」

零斗「外部からだって？」

シャマル「元々一般人だった人にイグニスの血を注射されてるの……」
統夜「奴はルシファー……この魔導師の事はコピールシファーと名付けた方がいいだろう」
ダイチ「なあ……イグニスって奴……強いのか？」

イグニスの強さを知らないダイチが質問をしてきた。

零斗「まあな……俺らの想像を遥かに超えている強さを持つてる」
統夜「それ故に奴は英雄と呼ばれていた」

ダイチ「マジかよ……」
たけし「なるほど……」

シャマル「けど……オリジナルじゃない為……戦闘能力は低いわ……今の段階の話だけど……」

統夜「そうか……一体誰が……」
零斗「今考えても仕方が無い……コピールシファーに関する情報を持つ輩が現れた時に吐かせればいい」

零斗は適切な判断を出した。

零斗の言葉で今考えてもしょうがないからだ……証拠不十分で誰が一体何の為にやったのか分からないからだ。

その頃とある時空世界では……

セイラ「私達を受け入れてくれてありがとうございます」
？「いえいえ……気にしないでください……困った時はお互い様です……」

セイラと黒い短髪に青い眼をして整った顔立ちをした青年が話し合っていた。

マガキ「僕の名前はマガキと言います・・・以後よろしく願います」

セイラ「私はセントクルセイダーズの長をしています・・・セイラと申します」

セイラとマガキと呼ばれた青年はお互いに自己紹介をし本題に入り始めた。

マガキ「貴方の目的は？」

セイラ「私達の目的は私が統一し真なる秩序の世界を築き上げる事です。貴方達は？」

マガキ「僕達はですか・・・そうですね・・・とある世界の進出の為と言っておきましょう・・・」

セイラ「胡散臭い答えですが・・・信用に値しますね」

マガキ「それでは・・・」

セイラ「はい・・・私達は物資と技術を・・・」

マガキ「こちらからはデータと資金を出します」

セイラ「お互いいい関係を築こう」

互いに握手を交わしセイラは謎の男マガキと同盟を結んだ。

セイラ「(マガキ・・・果たしてどれだけ使えるか・・・用が済み次第消しますが・・・)」

マガキ「(いい手駒が手に入った・・・彼らの技術は興味深い・・・)」

同盟は結んでも互いに本音は利用することしか考えていなかった。

マガキ「そちらには私の部下を数人派遣します」

セイラ「こちらからはデバイスデータを全て提供します」

マガキ「それは助かります・・・イグニスと呼ばれたソルジャーの血を利用したコピールシファーはいかがでしたか？」

セイラ「驚きましたね・・・これなら彼ら・・・蒼穹の騎士団と修羅に勝てますね」

マガキ「ですが・・・これはほんの序の口・・・我らには『C計画』がありますから・・・ふふふ・・・」

果たしてマガキが言う『C計画』とは・・・一体・・・

第三十七話『複製された堕天使』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

アリス「やっと零斗と出会えたよ・・・本当に良かった・・・」

アリス「夜天の書の主であるはやてちゃんに復讐を企む相川 咲夜
ははやてちゃんに挑戦状を受け取った」

アリス「力を上げて心を読むスキルを持つ咲夜の前に打つ手が無
くなつた時死神が介入する」

アリス「次回は『復讐の果てに』テイクオフ」

投稿キャラ設定3 (前書き)

アリスとメイメイの詳細です。どうぞ！

投稿キャラ設定3

名前：アリス・チエンバース

性別：女

種族：人族

容姿：髪の色が桃色で恋姫の桃香に似た顔立ち

身長：165cm

スリーサイズ：B95/W48/H70

年齢：17歳

性格：天然で明るいが、ちよつぴりわがママを言うこともある

趣味：少女漫画を読むこと

好きなもの(事)：零斗と一緒にいる事

嫌いなもの(事)：零斗を侮辱する輩

詳細：零斗の恋人にして一緒に旅をしている少女。

零斗と恋人で肉体関係でもある。

二本の刀が武器で戦う剣術スタイルが主である。

零斗と同じく管理局のやり方に不満を感じており統夜達が結成した

部隊『蒼穹の騎士団』に入った。

零斗と同じくボケ役である。

名前：メイメイ

性別：女

種族：人族

容姿：黒い髪のロングヘアで恋姫の明命に似た顔立ち

身長：119cm

スリーサイズ：B79/W50/H80

年齢：13歳

性格：明るく優しい性格

趣味：三国志の小説を読む事

好きなもの(事) : 猫

嫌いなもの(事) : 特に無い

詳細 : たけしの幼馴染であり恋人。

突如行方不明になったたけしを桂花と一緒に探す旅に出た。

現在はたけしと再会し四人で一緒に寮で暮らしている。

中国拳法を習っており強さはたけしの二番目である。

投稿キャラ設定3 (後書き)

龍の骨さん。ありがとうございます。

第三十八話 『復讐の果てに』（前書き）

シャロ「あっ・・・見つけましたよ！」

利光「何かな？」

シャロ「ストーンリバーにラットですね！」

明久「僕と久保君は違うよ！？逃げるよ！久保君！」

利光「分かった！吉井君！」

シャロ「待ちなさいーい！！！」

エリー「HERO'S EPISODE 第三十八話 始まります」

第三十八話 『復讐の果てに』

第三十八話 『復讐の果てに』

はやて「ふう……こんくらいでええやろ……」

天川家の掃除をし終え冷たい麦茶を飲んでいた。

普段なら統夜と一緒にいる筈のだが何でも屋の仕事でないのだ。

はやて「何でも屋って難しそうやなあ……」

庭の外を窓から眺めてそう呟いた。

はやて「あつ……突然曇ってきた……雨が降るかもしれへんな……
・幸い洗濯物は干してないからええけど……」

突然曇ってきた空を見ていた。不吉な事が起こる可能性を示しているかのよう……
すると……シグナムが突然やって来た。

シグナム「主！」

はやて「どないしたんや？シグナム」

シグナム「主宛にこれが来ておりました……内容は……ご覧のとおりです……」

シグナムは血相を変えて何らかの手紙をはやてに渡した。

はやて「どれどれ……！？そ、そんな……」

手紙を読み始めた瞬間驚きの表情になり青ざめてしまった。
内容としてはこう書いてあった。

『夜天の書の主である八神 はやてへ・・・お前の知り合いである
芹沢 文乃と木下 優子、木下 秀吉の身柄を預かった。返してほ
しくは指定する場所へ一人で来い。守護騎士とユニゾンデバイス等
を連れてきた場合は三人の命は無いと思え・・・私と一騎打ちをし
てもらおう為にな・・・私が受けた憎しみを受けるがいい・・・
相川 咲夜』

はやて「文乃ちゃんや優子ちゃん、秀吉ちゃんが・・・咲夜さん・・・
こないな事してもお姉さんは報われへんで・・・」
シグナム「どうするのですか？」

はやて「一人で行く・・・シグナム達は間違った事をした・・・主
として・・・家族の長としてケジメをつけに行くんや・・・罪を償
うというのはその人の為に精一杯頑張つて堂々と胸張って生きる事
やと思うんや・・・ほな・・・行って来るさかい・・・」
シグナム「ご武運を・・・」

はやては待機状態のシュベルトクロイツを首から下げ玄関へ行き指
定の場所まで移動した。

指定の場所である英都港では・・・

咲夜「後は八神 はやてを待つのみ・・・」

待機状態のプロヴィデンスを手にしていた。

文乃「アンタ！何でこんな事をするのよ！..!」

咲夜「決まっているじゃない・・・八神 はやてをこの手で倒す為

よ！」

優子「アンタがはやてを倒しても・・・何も報われないわよ!!」

秀吉「何故はやてに対して憎しみを抱くんじゃ!!」

咲夜「私のたつた一人の家族を奪ったからよ・・・」

文乃「お姉さんの復讐でしょ・・・」

優子「はやてがアンタのお姉さんを・・・」

秀吉「じゃが・・・こんなことしても・・・何も解決しない!!」

バインドで縛られている文乃と優子、秀吉の三人がいた。

秀吉「それに・・・お主は下手じゃのう・・・」

咲夜「何ですって？」

秀吉「ワシは演劇部に所属しておつての・・・お主は嘘をついておる」

咲夜「嘘をついているですって？私の姉を死に追いやった八神はやてをこの手で倒す事に偽りは無い!!」

咲夜は秀吉の言葉に憤慨して叫んだ。

優子「秀吉・・・」

秀吉「こんな事しても・・・お主のお姉さんは喜ばないと分かっておるのじゃろ？」

咲夜「うるさい!うるさいうるさいうるさい!!」

秀吉の言葉に対しムキになっていた。

本心を秀吉に悟られるのが嫌なように・・・

咲夜「来たか・・・」

三人に掛けてあったバインドを解いた。

文乃「何で・・・」

咲夜「貴方達に用は無いから・・・」

咲夜の前にバリアジャケットを纏ったはやてが来ていた。

はやて「咲夜さん・・・」

咲夜「気安く私の名前を呼ぶな！本当に一人で来たようね・・・」
はやて「そうや・・・家族がやらかした罪は消えへん・・・けどな・・・倒される訳にはいかへんのや！」

シュベルトクロイツを構えるはやて。

咲夜「そう・・・私の憎しみを受けなさい！！」

プロヴィデンスを起動しバリアジャケットを纏い大鎌を構えた。

文乃「・・・・・・・・・・」

優子「・・・・・・・・・・」

秀吉「・・・・・・・・・・」

三人は巻き込まれないように離れた。

はやて「ブラッディダガー！」

牽制としてブラッディダガーを放ったが咲夜はレアスキルである心を読む能力を持つ為軽々と避けた。

はやて「厄介やな・・・」

咲夜「でもね・・・回避だけじゃないのよ！」

大鎌から長剣へ変化させた。

咲夜「灼熱一閃！」

刀身に灼熱の炎を纏った斬撃を放ったがはやては回避したが咲夜ははやてが避けた先でミドルキックを見舞った。

はやて「げほっ！がほっ！」

咲夜「まだその程度の痛みじゃ済まないわよ」

プロヴィデンスを振るうがシュベルトクロイツで打ち合い始めた。

はやて「はああー！」

シュベルトクロイツを薙刀の要領で振るったが心を読まれ中々当たらず所々バリアジャケットの部分が斬られたり防がれたりしていた。

咲夜「前よりは強くなったけど・・・まだまだよー！」

長剣を峰打ちではやてにヒットさせた。

はやて「ぐ・・・まだや・・・まだやれる！」

咲夜「そこなくては・・・私の憎しみは消えない！」

二人の打ち合いはより激しくなった。

文乃「はやて・・・押されてるわね・・・」

優子「先を読まれてるみたいで・・・防がれたり避けられたり・・・

」

秀吉「反則ではないか!!」

遠くから見ていた文乃達はただ見てるだけしか無かった。

それと同時にただ見てる事しか出来ない自分が情けなく感じていた。

はやて「はぁ・・・はぁ・・・」

咲夜「いくら力をつけても・・・アンタの動きや考えは筒抜けなのよ!..!」

はやてのバリアジャケットが所々破れ焦げ、咲夜のバリアジャケットは無事でダメージは全然受けていなかった。

すると・・・雨がポツポツと地面に降り始めた。

はやて「そうか・・・これならどうや!」

雨が降り始めたにも関わらず古代ベルカ式の魔法陣を展開し魔力を両脚に収束し始め、速い動きで咲夜へ向かった。

咲夜「何っ!?!」

何処から来るのか分からない為咲夜は翻弄され飛び蹴りを喰らい最後にはやてのフランケンシュタイナーの要領で地面に叩き落とされた。

はやて「シユテルンキラービィアサルトや・・・」

咲夜「軌道が読めなかったわ・・・狸女・・・」

はやてはダメージを負い疲れが出て膝をついてしまった。

咲夜「でも・・・勢いが無かったら駄目よね・・・」

ダメージを負っていないのか立ち上がりミッドチルダ式を展開し始めた。

咲夜「フレイム・・・」

炎の魔力砲を放とうとしたが文乃と優子、秀吉の三人が手を広げ邪魔をしていた。

咲夜「そこをどきなさい！！」

文乃「嫌よ！」

優子「はやてがどれだけ寂しい思いをしたかも知らないアンタにやらせない！」

秀吉「幼馴染をやらせる訳にはいかんのじゃ！！」

はやて「文乃ちゃん！優子ちゃん！秀吉ちゃん！逃げてや！！危ない！！！」

はやては逃げるように三人に言った。

咲夜「もういいわ・・・貴方達も一緒に殺すわ！！フレイムスマッシュャー！！！」

ミッドチルダ式の魔法陣を展開し炎の魔力砲を発射した。

はやて、文乃、優子、秀吉「！！？」

彼女達が当たる寸前風の結界が発生し炎の魔力砲が掻き消された。

咲夜「何っ！？」

はやて「なんや？」

文乃「何が起きたの？」

優子「何なの？」

秀吉「何じゃ？」

五人は突然張られた風の結界に驚いていた。

「ヴィクテム・サンクチュアリの力はお前の魔法攻撃を無効にする結界だ……」

男の声が聞こえた瞬間風の結界が解除されはやたと文乃、優子、秀吉の四人は後ろを振り向くと右手にサーディオンを持った統夜がいた。

咲夜「貴方……何故八神 はやてを庇うの？」

統夜「庇うのではなく守るだ……ここからは俺が相手になる」

咲夜「貴方が？」

統夜「ああ……俺は闇の書事件ではやて達についてた事あった……」

咲夜「何だと……」

統夜の言葉を聞いた咲夜の反応は怒りに満ちた顔をして睨みつけていた。

統夜「だが……夜天の主だからという理由で狙っていい訳が無い……それに……過去に囚われて戦うのはもう止める……」

統夜の言葉を聞いた瞬間、咲夜の中で何かが切れた。

咲夜「貴方に何が分かるの!!!! たった一人の家族を失った私の気持ちを持ちを!!!!」

咲夜はそう叫びながら、空へと逃げる統夜を追い掛けて行った。

はやて「統夜……」

文乃「大丈夫かしら……」

優子「大丈夫よ。統夜はきっとあの人を助けるわよ」

秀吉「家族のいない者の気持ちを知っている故かの……ワシらは統夜を信じて待つのみじゃ」

はやて達は屋根のある場所へ移動した。

空に上がった統夜と咲夜は戦闘を始めていた。

心を読む力がある咲夜だったが怒り心頭のせいか充分に発揮出来ずにいたのか打ち合いが行われていた。

咲夜「この……!!」

統夜「……」

咲夜の怒りの攻撃をサーディオンで軽く流していた。

咲夜「プロヴィデンス!!」

プロヴィデンス（ザンバーフォーム）

咲夜はプロヴィデンスを刀身が闇と炎が混ざったエネルギー状の大剣になるザンバーフォームに変化させた。

統夜「勝負を決めるつもりか……いいだろう……」

レイヴ式の魔法陣を展開し魔力を収束し始めた。

咲夜「貴方だけは許さない……人の気持ちも知らないで……家族を失った者の気持ちなんて……」
プロヴィデンス（カートリッジ、フルロード）

カートリッジ6発全てロードした後ミッドチルダ式の魔法陣を展開し魔力を収束し始めた。

咲夜「ダークフレイム……」

統夜「シューティングブレイズ……」

統夜、咲夜「ブレイカー!!!!」（ザンバー!!!!）」

二人は魔法を一齐に放たれ凄まじい勢いでぶつかり合い……

咲夜「そ、そんな馬鹿な……」

統夜「……」

自分の最大の魔法を相殺されたことに動揺した咲夜であった。

統夜「……」

それを見るなり、統夜は咲夜に近付いていった。

咲夜「ひっ!!?!?……プロヴィデンス!!」

プロヴィデンス（フレイムソード）

統夜が近付いて来るのを見ると、咲夜はなんだか怖くなったのか炎の剣を統夜に飛ばしていき……

統夜「ぐっ!!」

統夜に何本かの炎の剣が刺さり血を流していた。
しかし……

統夜「……………」

それでも統夜は咲夜に近付いた。

咲夜「な、なんで……」

統夜を見て、咲夜は震えて泣き出してしまった。

統夜「……………」

そして、統夜が咲夜の前に立つと……

咲夜「い、いやああー！！……っ!？」

咲夜が悲鳴を上げそうになったが、統夜がその瞬間に咲夜の頬をぶつた。

その行動に咲夜は頬を押さえながら、統夜を見た。

統夜「いい加減にしろよ……この馬鹿……」

統夜は血塗れの身体で咲夜に怒鳴りつけた。

統夜「いいか……元々シグナム達はな……はやてを救いたかつたから……あんな行動をしたんだよ……」

咲夜「え……?」

統夜の言葉に咲夜は自分の耳を疑った。

統夜「はやてはな．．．シグナム達には．．．戦うなって．．．言
つてたんだよ．．．それでも．．．あいつらはな．．．はやてを救
う為にやったことなんだよ．．．」

咲夜「．．．．．」

統夜「それに．．．お前の姉さんは一体何の為に魔法を使った？」

咲夜「それは．．．人を助ける為に．．．はっ．．．」

咲夜は姉が魔法を使っている目的を思い出し、今の自分がやっている事と比較しはつとしていた。

統夜「今の貴方は魔法で人を傷つけている．．．はやてを殺しても
貴方の姉さんは喜ばない．．．俺はやて、文乃は家族がいなく寂
しい思いをしてきた．．．貴方の気持ちがかかるから．．．俺自身
を鬼にしてまで戦った．．．辛い事や悲しい事を全ての世界にいる
人達は抱えて生きているんだ．．．」

咲夜「貴方．．．」

統夜「それに．．．貴方のお姉さんは．．．貴方の心の中に生きて
いる．．．姉さんが喜ぶ事と言ったら．．．貴方自身が本当の笑顔
で精一杯生きる事だよ．．．」

咲夜「姉さんが私の心の中で．．．」

統夜「そくだ．．．姉さんとの絆がある限り．．．心の中に生きて
いる。貴方がお姉さんの存在を忘れない限り．．．」

咲夜「ぐすつ．．．う、うわああああん．．．」

咲夜は身体を張って大切な事を教えてくれた統夜の胸の中で泣き始
めた。

咲夜が泣き始めたと同時に雨が止み夕方になった。

統夜「さて．．．戻るか．．．」

咲夜「ええ……」

二人は下へ戻ると統夜はふらつき始めた。

咲夜「大丈夫？」

統夜「ちと血が足りないくらいかな……傷の再生は終わったが……」

すると……

はやて「統夜！」

文乃「ようやく終わったわね」

優子「本当に大丈夫？」

秀吉「所々切り傷があるようじゃが……」

はやて達が駆けつけた。

咲夜「八神 はやて……」

はやて「咲夜さん……貴方のお姉さんを死に追いやった事は許される事ではありませんが……私は……精一杯生きて償おうと思っ
つています」

咲夜「その言葉は本当のようね……嘘偽りも無い……それに……
ずつと貴方や守護騎士を恨んでも仕方が無いから……」

優子「貴方……」

秀吉「お主はどうするつもりじゃ？」

咲夜「彼の家に住むわ……私に身体を張って大切な事を教えてくれた人だから……」

咲夜の言葉を聞いた瞬間……

はやて「（またフラグ立てたな・・・）」

文乃「（フラグ野郎・・・）」

優子「（どんなお仕置きがいいかしらね）」

秀吉「（どうしようかの～）」

はやて達4人は黒いオーラを纏い始めた。

咲夜「これからもよろしくね。統夜」

咲夜は久し振りに笑顔で統夜に言った。

統夜「あ、ああ・・・こちらこそ・・・」

はやて「何デレデレしてるんや！」

文乃「さっさと帰るわよ！」

優子「無茶をして・・・心配してる身にもなりなさいよ！」

秀吉「統夜に何かあったらワシらは・・・」

統夜「すまない・・・さあ・・・帰るぞ・・・」

六人は英都港から家へ帰った。

はやて「統夜・・・一つええか？」

統夜「何だ？」

はやて「私と咲夜さんの一騎打ち・・・シグナムから聞いたんか？」

統夜「いや・・・シャマルからだ・・・それに・・・俺達の独断が

いけなかったんだ・・・」

帰る途中ではやてはどうして統夜が指定場所である英都港に来た事を質問していた。

空を見て自分達がやって来た過ちを思い出しながら答えていた。

文乃「統夜……」

優子「本当に不器用ね……自分一人で背負う所だけは変わらない・
……」

秀吉「全くじゃ……」

統夜「あはは……善処するさ」

幼馴染達に指摘されながら家へ歩いた。

蒼穹の死神が紅の死神の復讐の憎しみを破壊し和解へ導き分かり合
う事が出来たのであった。

第三十八話『復讐の果てに』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

ダイチ「本当にあいつはフラグマスターだ！！そうに違いない！」

ダイチ「しかも大きな乳を持つ人だ・・・くっそ！！羨ましい限りだ・・・」

ダイチ「霸王と竜王の牙が眠る遺跡の噂を聞いた統夜と遊輔の二人は中国にある遺跡へ赴いた」

ダイチ「狙っているのは二人だけじゃ無かった。セントクルセイダースと修羅の三つ巴で戦い始めた」

ダイチ「激戦の中蝶々型の仮面を付けた女性が統夜と遊輔の援護をし・・・霸王と呼ばれた者の魂と竜王の牙が目覚める」

ダイチ「次回は『霸王少女と華蝶仮面と竜王の牙』テイクオフ」

第三十九話 『霸王少女と華蝶仮面と竜王の牙』 (前書き)

なのは「ヴィヴィオ」

美波「なのはママ」

フェイト「なのはが壊れた!？」

瑞希「美波ちゃんもです!」

ユイ「HERO'S EPISODE 第三十九話始まるよ」

第三十九話 『霸王少女と華蝶仮面と竜王の牙』

第三十九話 『霸王少女と華蝶仮面と竜王の牙』

咲夜との和解を経て翌日

中国にある遺跡から赤い光と蒼い光が点滅していた。
ここの遺跡に中国語でこう書かれていた。

『蒼き霸王の魂と紅蓮の竜王の牙ここに眠りし』

その頃・・・

統夜「本当なのか？康太」

遊輔「中国にな・・・」

康太「・・・ああ。それと・・・統夜に頼まれた情報も入手した」

本拠地寮で統夜と遊輔、康太の三人が話し合っていた。
以前統夜から頼まれた事を康太は教えた。

統夜「なるほど・・・そういう事だったのか・・・」

遊輔「道理であいつらに渋々手を貸していた訳だ・・・」

康太「・・・弱みである人質を捕られれば・・・あの三姉妹も従ってしまうのは目に見えている・・・」

遊輔「セントクルセイダーズに秩序と口にする資格は無い・・・」

康太「・・・中国へ行くのか？」

統夜「ああ・・・俺と遊輔の二人で行く。遺跡の調査ぐらい・・・大丈夫だろう」

康太「・・・お前達だけなら大丈夫だろう・・・」

統夜「んじゃ・・・行く準備するか」
遊輔「ああ。またここだな」

統夜は本拠地寮から出て遊輔は自分の部屋で荷物の準備をした。

統夜「鮮華にはやて・・・今から中国行ってくるから留守番よろしく」

鮮華「何を言ってるんですか！？兄さん！！いきなり中国へ行くつて・・・」

はやて「何か事情があるんか？」

統夜「まあ・・・康太から得た遺跡を調査しに行くだけだから」

家に帰って来た後鮮華とはやてに伝えた後自分の部屋へ移動し荷物を纏めていた。

統夜「中国か・・・どんな遺跡か楽しみだ」

咲夜「何処か行くの？」

統夜「中国の遺跡に・・・って咲夜さん！いつまでその格好でいるの！？」

白いワイシャツだけ着た咲夜が統夜に声を掛けた。

統夜は咲夜の格好に顔を赤くしていた。下は下着だけなのだから・・・

咲夜「今起きたばかりだからね・・・中国の遺産・・・頑張ってね男の子」

赤くなりながらも荷物を纏めて終えた統夜を見送った。

今の彼女ははやてを憎んでいた頃とは少しずつ変わろうとしていた。

天川 統夜という存在が彼女を変えたのだから・・・

統夜「さて……行くか」

遊輔「ああ……」

荷物を持ち空港へ向かい中国行きの飛行機で飛び立った。

遊輔「お前……咲夜さんと和解したんだってな」

統夜「そうだ」

遊輔「もし……お前が和解せず殺していたらお前を見限っていたぜ……あの人……凄く悲しそうだったからな」

統夜「まあな……俺やはやて、文乃と同じ感じがしたから……」

遊輔「蒼き霸王に紅蓮の竜王の牙ねえ……」

統夜「俺達は遊びに行く訳じゃないから……自由時間ぐらいやるよ」

遊輔「よっしゃ！ありがとう」

数時間経ち中国の空港へ到着した後適当な旅館を探し歩きチェックインした。

統夜「俺はちと遺跡への道を調べておくから……お前は自由行動だ」

遊輔「分かった」

統夜は遺跡へ行く為の道のりを調べる為待機状態のフォーチュンエターナルを利用したインターネットで調べ始め、遊輔は旅館から外へ出た。

遊輔「結構店が多いな……」

街をチラチラと見て眩きながら歩いていた。

すると・・・

遊輔、？「ぐわっ！（きゃ！）」

喫茶店の角を曲がると突然誰かと激突してしまった。

遊輔「ご、ごめん・・・大丈夫・・・夫・・・」

遊輔は相手の顔を見た瞬間驚いてしまった。

？「大丈夫よ。貴方・・・も・・・」

こちらも遊輔同様に驚いていた。

遊輔「君は・・・確か・・・」

蓮華「蓮華よ・・・紅蓮の猛虎・・・桜木 遊輔」

遊輔「俺の事は遊輔でいいよ」

蓮華「遊輔・・・ちよつと・・・話をしない？」

遊輔「別に構わないけど・・・」

遊輔とぶつかった蓮華は周囲を見つつ言った。

蓮華「そう・・・あそこの喫茶店で話をしましょう」

二人は遊輔が先程通った喫茶店へ歩いた。

蓮華「遊輔は数々の次元世界を旅をして傭兵等をしていたのね・・・

」

遊輔「まあね・・・」

蓮華「一ついいかしら？」

遊輔「何かな？」

蓮華「貴方が戦う理由は何かしら？」

蓮華の質問に遊輔は・・・

遊輔「全ての人々の笑顔を守る為だよ。戦っても守りたいものややらなければいけない事があるから・・・」

蓮華「真っ直ぐね・・・羨ましい程に・・・」

蓮華は遊輔が戦う理由と真っ直ぐさにそんな事を思っていた。

遊輔「蓮華は？」

蓮華「私・・・私達は・・・」

遊輔「人質を捕られてるんだろ？」

蓮華「！？・・・そうよ・・・ 세인트クルセイダースによって・・・逆らう事も・・・脱退する事も許されない・・・」

康太からの情報である捕らわれている人質の為に戦っている事を教えていた。

指摘された蓮華の表情は悲しげな表情になっていた。自分と姉の雪蓮、妹の小蓮の三人はセイラ達セントクルセイダースの手駒にされやりたい放題扱き使われているのだから・・・

遊輔「俺が助けてやる！君の本当の笑顔が見たいから・・・」

蓮華「本当に・・・信じていいの・・・？」

遊輔「ああ。俺の志である『世界中の人々を笑顔にする』に誓って・・・」

蓮華「今は信じる事は出来ないけど・・・期待してるわ・・・遊輔・・・帰る前に一つ教えてあげるわ」

蓮華は勘定を取り立ち上がりこう言い出した。

遊輔「何だい？」

蓮華「今噂されている遺跡にセントクルセイダースがやって来るわ・・・蒼き霸王の魂と紅蓮の竜王の牙を我が物にしない為に・・・」

遊輔「ありがとう。君は優しいね」

蓮華「そ、そうかしら・・・おほん・・・貴方達・・・蒼穹の騎士団は全次元世界の希望なのだから・・・」

それだけを言って遊輔が飲んだ珈琲代と一緒にお金を払って出て行った。

遊輔「蒼き霸王の魂に・・・紅蓮の竜王の牙をあいつらに渡してたまるかよ」

残りの珈琲を飲み干し喫茶店から出て行き旅館へ戻った。

統夜「よし・・・やっと終わった・・・」

部屋で遺跡へ行くルートを調べ終えた統夜は背伸びをしていた。

遊輔「帰ったぜ！終わったか？」

遊輔が旅館の部屋に戻ってきた。

統夜「たった今だが・・・」

遊輔「そうか・・・セントクルセイダースが今から向う遺跡にやって来る情報を入手した」

遊輔は蓮華からの情報を統夜に教えた。

統夜「それ・・・誰から教わった？」

遊輔「それは・・・悪いけど言えない・・・」

情報源である蓮華の事は伏せた。

統夜「信用できるのか？」

遊輔「ああ・・・信じてくれ・・・」

遊輔の答えに統夜はふっと笑いこぼした。

統夜「分かっているよ・・・まあ・・・誰にだって秘密にしたい事はあるさ・・・早速行くぞ」

遊輔「ああ」

統夜と遊輔の二人は旅館から出た後バスを使って遺跡に近い場所まで降りた後徒歩で遺跡まで歩き始めた。
しばらく歩くと二人は遺跡へ辿り着いた。

統夜「ここが噂の遺跡か・・・」

遊輔「確かにそれっぽいが・・・」

遺跡のあちこちを調べ始めた。

すると空から魔力弾が統夜達に向かって放たれたが咄嗟に魔力障壁を張ったので無事だった。

統夜「本当に来たし・・・」

遊輔「やっている事は泥棒だな」

空へ視線を移すと黒と桃色が混じったアーマーを纏った千秋とジャツジナイトを纏った浩次、複数のコピールシファーがいた。

遊輔「お前達だったのか・・・あの集団を送ったのは・・・」

浩次「そうだ・・・強化人間だけではお前達では対処出来ないからな・・・元ソルジャーの隊長であり最強の英雄のイグニススの血を利用したコピールシファーを作り出した」

統夜「そうかい・・・秩序を大事にする馬鹿は力を欲し・・・命を何とも思わない奴は本当に哀れだな・・・今まで信じ・・・戦った奴等はさぞ無念だろうな・・・」

千秋「口を慎みなさい！！貴方達蒼穹の騎士団・・・混乱に陥れたテロリストの分際で！！」

自分達セントクルセイダースを侮蔑されたのか千秋は憤慨して統夜に向って叫んだ。

統夜「（遊輔・・・分かっているとは思いますが・・・心装でやるぞ・・・）

心装・・・蒼雷六爪！！」

遊輔「（分かった・・・遺跡を傷つけるなって事だろ？了解）心装・・・爆炎二槍！！」

千秋の叫びを無視しながら念話で話した後統夜は六本の鞘付の日本刀、遊輔は真紅の二槍を具現させた。

統夜「遊輔・・・イカレ馬鹿二人（浩次と千秋）は俺が引き受けた。お前はコピー達を頼む！」

遊輔「分かった！」

統夜は浩次と千秋の方へ、遊輔はコピールシファーの所へ移動し始めた。

千秋「天川 統夜・・・貴方の存在が全ての発端・・・覚悟してください！この・・・パーシヴアルで貴方を討ちます！」

浩次「君のやり方では何も変わらない！」

浩次はナイトカリバーの二刀流、千秋は背中から刀身にエネルギーフィールドを発生させる事ができる巨大剣「ホーリーカリバー」を取り出し構えた。

統夜「本腰を入れて来たかよ・・・だがな・・・こっちも同じだ」

六刀の内二刀を鞘から抜き刀身に覇気を込めて浩次のナイトカリバー二刀流と千秋が振るうホーリーカリバーと打ち合いが始まった。

浩次「(何だ・・・こいつの力は・・・)」

千秋「(だけど・・・負ける訳にはいかない・・・私達の理想郷の為にも!!)」

遊輔「オラオラオラオラ・・・オラア!!!」

上空にて両手で槍を振るいコピー達と戦っていた。

遊輔「とは言え・・・最低限だけでは厳しいな・・・だが・・・やらなければいけない」

コピー達が魔力弾や魔力砲を炎の砲撃で被害が出ないように相殺し襲い掛かって来るコピーを蹴散らしていた。

まだ調査中であり遺跡を壊しては元もこうも無いのだから・・・

浩次「まともに打ち合っではこちらが持たん・・・」

千秋「遠距離で攻めましょう！」

浩次と千秋は打ち合いを一旦中止しバックステップで距離を取った。その後浩次はナイトシューターをノーマルモードで、千秋は左腕に装備された輻射波動が使用可能になる徹甲砲撃左腕で輻射波動砲をそれぞれ発射した。

統夜「チッ！」

二刀に蒼炎を灯し二人の攻撃を回避せず遺跡に被害が出ないように防壁を張り相殺した。

千秋「防ぎましたか・・・ですが攻撃は緩めませんよ」

千秋は両腿部分から強力なエネルギー弾丸を放つ「ハドロンシューター」で統夜に向けて発射した。

その攻撃を回避せず防御に回し、浩次はナイトカリバーで斬り掛つたが統夜は妖力を込めた蹴りで上空へ吹き飛ばした。

浩次「くっ・・・」

千秋「ですが・・・ある事が分かりました」

浩次「何？」

千秋は冷酷な笑みを浮かべ浩次に耳打ちした。
突然空間が歪み始めた。

浩次「何だ？」

歪んだ空間からボロボロの道着を着た男達が現れた。

修羅兵「ここか・・・俺達修羅も制圧するぞ!!」
修羅兵2「応!!」

霸王デュークが率いる修羅の兵隊が現れたのだ。

遊輔「これじゃ・・・三つ巴だ・・・」

コピーを倒し終えた遊輔は地上へ降りた。

浩次「何だ・・・こいつらは・・・」

千秋「好都合ですね・・・」

統夜「こいつらと修羅・・・どう対抗すりゃいいんだよ・・・」

統夜がどうすればいいのか悩んでいると・・・

?「はーっはっはっは!はーっはっはっは!」

突如笑い声が遺跡に木霊した。

浩次「誰だ!!」

千秋「あそこです!!」

浩次と千秋は後ろを見た。

そこには蝶々型の仮面を付けた女性がいた。

?「そこにいるセントクルセイダーズと悪党共に問う!多数の人数で遺跡を守ろうとする戦士達を虐め・・・漁夫の利を狙おうとするその二人(浩次と千秋)は何が楽しいか?」

浩次「何・・・」

華蝶仮面「真なる正義の華を咲かせる為に、美々しき蝶が悪を討つ・

・偽りの秩序で全次元世界の民を欺き支配しようなどと・・・見
苦しい事甚だしい！美と正義の使者・・・華蝶仮面・・・推参！！」
華蝶仮面と名乗った女性は下へ降り統夜達の所へ移動した。

統夜「か・・・華蝶仮面・・・」

遊輔「味方みたいだが・・・」

華蝶仮面「蒼穹の死神に紅蓮の猛虎よ・・・手を貸そう・・・お主
たちは偽りの正義を語る愚か者を相手し・・・私は修羅と呼ばれる
存在と戦う」

統夜「構わないが・・・一つだけ条件がある・・・」

華蝶仮面「分かっておる・・・遺跡を傷つけるな・・・だろう？承
知している」

統夜と遊輔は浩次と千秋を相手に・・・華蝶仮面は修羅達を相手に
戦い始めた。

統夜「アンタらの考えは小さいな・・・三つ巴で俺達を倒そうなん
て・・・人としてどうよ？」

浩次「貴様らテロリストにどんな手段を使っても倒さなくては
いけない事がある！」

統夜は浩次が放つナイトシューターを蒼炎弾で被害が出ないように
相殺していた。

遊輔「自分の手を汚さずにやるのがお前達のやり方か！」

千秋「そういう事になりますね・・・ですが貴方達だからこそやら
なければならぬのです。存在意義も認める訳にはいきませんから
ね」

遊輔「そうやって・・・自分達が正しく・・・他はどうなってもい

いという考えじゃ・・・本当の笑顔でいられる世界が崩壊されてしまふ・・・」

千秋「今の世界に必要なのは秩序・・・全次元世界は私達セントクルセイダーズによって統治されてこそ・・・本当の平和が成り立つのです」

遊輔は二槍を振るいながら千秋のホーリーカリバーと打ち合っていた。

千秋「埒が明きませんね・・・エンペラーシステム・・・起動」

パーシヴァルに搭載されてあるエンペラーシステムと呼ばれるシステムを起動させた。

すると遊輔の動きを先読みするかのようには回避し右腕部分に装備された巨大な四本のクローをエネルギー防御装置であるブレイズルミナスで形成されたドリルで攻撃する「ブレイズドリル」で遊輔に攻撃した。

遊輔「避ける訳にはいかない！」

炎の防壁を張るが・・・

千秋「無駄ですよ」

ブレイズドリルで遊輔の防壁を軽々と突破し直撃させ遺跡の壁に激突させた。

浩次「セントオーシャンシステム起動・・・」

ジャッジナイトを金が混ざった白いアーマーから白く輝いた白いア

「マーに変化させMBSとMFSを駆使して統夜を翻弄しナイトカリバーで斬り掛ったが統夜の二刀で防がれた。

次の手としてジャツジユニットの右部分にあるジャツジブラスターにナイトシューターを合体させ発射しようとしていた。統夜は発射させないと攻撃を仕掛けようとしたが千秋の妨害で止める事が出来なかった。

千秋「そうはさせませんよ・・・貴方達の動きはお見通しです」
浩次「ジャツジブラスター・・・発射!!」

ジャツジブラスターを最大出力で発射した。

統夜「こうなったら・・・サーディオン!」

心装を解除しサーディオンを起動させ風の防御結界を張り始めたが・
・

千秋「無駄です!」

ホーリーカリバーにエネルギーフィールドを発生させてサンクチュアリシステムで発生させた結界を破壊しようとしていた。

統夜「それはこちらの台詞だ!」

千秋「そんなに遺跡が壊されるのが嫌ですか・・・私達の目的は蒼き霸王の魂と紅蓮の竜王の牙が目的なのですから・・・こんな遺跡・
・価値も無いのですから」

千秋の自分勝手な言葉に統夜はキレた。

統夜「ふざけんな!!どんな遺跡だろうとな・・・昔の人が一生懸

命頑張り・・・生きた証・・・魂が染みついた場所なんだよ・・・
テメエらみたいに自分勝手な奴等が簡単に壊していいものじゃない
んだぞ!!!!」

サーディオンのMIE Sの魔力エネルギーを出し風の防御結界を更
に強固なものにし二人の攻撃を防ぎきった。

それと同時に遺跡に地響きが起き始めた。

統夜「な、何だ？」

? (わ・・・め・・・た・・・)

突然統夜の頭の中に少女の声が聞こえて来た。
それと同時に統夜は蒼い光に包まれた。

統夜「ここは・・・」

? 「遺跡の異空間よ・・・」

統夜の前に髑髏の髪飾りを付けた金髪のツインテールの少女がいた。

統夜「さっき俺の頭の中に声を掛けたのは君だったのか・・・」

? 「そうよ・・・私を目覚めさせたのは貴方？」

統夜「あ、ああ・・・君は・・・」

少女の覇気に驚きつつも少女に質問をした。

華琳「それはまず自分からでしょ・・・まあいいわ・・・私は・・・
蒼き霸王・・・華琳よ。貴方は？」

統夜「俺は・・・天川 統夜・・・君が蒼き霸王だったとは・・・」

華琳「ええ・・・貴方達の戦いのお陰で眠りから覚めてしまったわ・・・」

華琳と名乗った少女はため息をついていた。

華琳「ここに来れたのは貴方が初めてよ……」

統夜「そうか……」

華琳「貴方は何の為に戦うの？」

華琳は統夜に問い掛けた。

統夜「俺は……大切な人達を守り……負の連鎖という名の歪みを破壊する為に俺は戦っている……」

統夜の問いに……

華琳「面白い答えね……なら……この私が貴方を見届けてあげるわ。め、目を閉じなさい」

統夜「分かった」

統夜は言われた通り目を閉じた。

華琳「我……蒼き霸王である華琳は汝と契約を結ばん……」

何らかの呪文を唱えた後統夜にキスをした。

千秋の攻撃をもろに受けた遊輔は立ち上がった。

遊輔「うぐぐ……はあ……はあ……俺はやらなくちゃいけない事があるんだ……！」

地響きと共に遺跡の中から真紅の剣十字架のネックレスが出現し遊輔の方へ向って飛び出した。

(ようやく巡り合う事が出来ました・・・)

真紅の剣十字架のネックレスから女性の声が聞こえて来た。

遊輔「これは・・・一体・・・」

ペンドラゴブレイド(私の名前は・・・大いなる竜王の炎刀であるペンドラゴブレイドと申します)

遊輔「ペンドラゴブレイド・・・だって・・・まさか・・・紅蓮の竜王の牙ってペンドラゴブレイドの事だったのか」

千秋「遂に現れましたか・・・いただき・・・うぐっ!!」

ペンドラゴブレイドを奪おうとしたが急な頭痛に襲われてしまい下がった。

708

ペンドラゴブレイド(その通りです。貴方に問います・・・私こと・・・ペンドラゴブレイドで貴方は何を為しますか?)

遊輔「俺は大切な者達を守り・・・出来るか分からないけど・・・世界中の人々を笑顔にする為に・・・」

ペンドラゴブレイド(それだけを聞ければ充分です・・・貴方は真つ直ぐなお人ですから・・・唱えてください・・・私を使う為に・・・)

遊輔「竜王の牙の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見よ! 起動せよ!! ペンドラゴブレイド!!」

真紅の剣十字架のネックレスが真紅の唾の部分が竜の頭で口から刀身を出しているかの様な紅く輝いている太刀へ変化した。

遊輔がペンドラゴブレイドを起動したと同時に蒼い光の繭が硝子の

ように碎け散り統夜が現れた。
統夜の持つサーディオンと遊輔が持つペンドラゴブレイドが共鳴し始めた。

統夜「サーディオンが共鳴している……」

遊輔「これも……ガーディアンデバイスなのか……」

浩次「何故……奴等に限られる！！テロリストの分際で！！」

統夜と遊輔に対し憤慨していた。

華琳（本当に哀れね……このような凡愚に選ばれる筈が無いじゃない……宝の持ち腐れね……）

統夜の中にいる華琳は浩次と千秋に対し冷やかな目で見ていた。

統夜「まだ分からないのか……自分達が中心に回っている勘違いの連中は選ばれない！！改めない限り」

憤慨する浩次に指差して決定的な一言を言った。

遊輔「借りを返してやるぜ……」

統夜と遊輔、浩次、千秋は遺跡から転移して消えた。

華蝶仮面「二人が選ばれたか……霸王と紅蓮の竜王の牙に……」

修羅兵を辛うじて全滅させた華蝶仮面が呟いていた。

統夜「ここなら……遠慮なくやれるぜ。遊輔！」

遊輔「おう！！」

統夜はサーディオンを、遊輔はペンドラゴブレイドを手にし浩次と千秋に向った。

千秋「いい気に・・・ならないでください!!」

浩次「行くぞ!」

二人も駆け抜けた。浩次は統夜に目掛けてナイトカリバーの二刀を振るうがサーディオンの一閃で折られた余波でダメージを負い、千秋はホーリーカリバーで遊輔に目掛けて振るうが炎を纏った一閃でパーシヴァルの武装の中で強度を誇るホーリーカリバーが枯れ木の様に叩き折られそのままの勢いで斬られ気を失った。

浩次「千秋!」

急いで千秋を抱えた。

統夜、遊輔「俺達が・・・ガーディアンだ!!」

浩次「また失敗か・・・だが・・・いつか僕達がお前達を倒す!」

浩次と千秋は転移して消えた。

その後二人は遺跡の方へ戻った。

華蝶仮面「お前達のお陰で遺跡はほぼ無傷になった」

統夜「まあ・・・遺跡つて過去の人が生きた証だし」

遊輔「そして色々な人が頑張った場所でもあるし・・・壊す訳にはいかないでしょ」

華蝶仮面は去る準備をしていた。

統夜「また共に戦えるのか？」

華蝶仮面「お主達が大切な者達を守る心と歪みを破壊する信念がある限り共に戦えるだろう。さらば！」

華蝶仮面は空へ跳び去って行った。

統夜「華琳・・・出てきていいぞ」

統夜の身体の中から華琳が出て来て実体化した。

遊輔「精霊か何かか？」

華琳「そんなものよ・・・彼と契約した事だし」

遊輔「統夜・・・お前・・・幼女趣味もあつたのか・・・」

統夜「んな訳無いだろ・・・蒼き霸王の魂である華琳・・・」

遊輔「冗談だ。紅蓮の竜王の牙・・・ペンドラゴブレイド・・・」

華琳「二つを手に入れた・・・これからよろしく頼むわね。統夜に・・・」

遊輔「桜木 遊輔だ」

華琳「遊輔ね・・・私の名前は華琳・・・よろしく頼むわね」

統夜と遊輔は夕焼けで輝いた遺跡に頭を下げてお礼した後、華琳と一緒にその場を後にした。

新たな仲間と力と共に・・・

第三十九話 『霸王少女と華蝶仮面と竜王の牙』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

零斗「蒼き霸王の魂って華琳だったんだ・・・遊輔の新たなガードイアン・・・ペンドラゴブレイドか・・・」

零斗「英都バーベナ学園が・・・文月バーベナ学園へ変わり合併し生まれ変わった」

零斗「俺達は様々な出会いをし・・・ハジケ青春を目指す・・・」

零斗「次回は『新たな学園・・・その名は文月バーベナ学園!!』
テイクオフ」

第四十話『新たなる学園・・・その名は文月バーベナ学園!』(前書き)

フィーナ「達哉さんは渡しません!」

月「剣鎧護法!」

優子「どこのまらほ!」?

秀吉「姉上。HERO'S EPISODE第四十話始まるぞい」

第四十話 『新たなる学園・・・その名は文月バーベナ学園!』

第四十話 『新たなる学園・・・その名は文月バーベナ学園!』

統夜「いよいよ・・・久し振りの学園生活が始まるか・・・」

華琳「楽しみね」

鮮華「何でいるのですかね・・・」

華琳「暇だからよ」

統夜と鮮華、はやて、カナ、プリムラの五人で登校していたのに華琳がいつの間にかいたのか驚く面々。

因みに中国から帰って来た時に天川家に住んでいる人達には自己紹介を済ませてある。

華琳とキスで契約したのがはやてにばれ制裁を喰らったのは言うまでも無かった。

統夜「精霊つて案外暇なんだな・・・飯も食うし・・・」

華琳「当然よ・・・学校に興味があるの。さあ行かせなさい」

華琳の自分勝手さに頭を抱えていた統夜であった。

鮮華「(兄さん・・・災難ですね)」

はやて「(災難やな・・・)」

プリムラ「(可哀想なお兄ちゃん・・・)」

カナ「(ご愁傷さま・・・)」

統夜と華琳以外の四人は統夜に同情していた。

統夜「分かったよ・・・」

華琳「それでいいのよ・・・そのまま待ちなさい」

華琳が光に包まれるとちびキャラ（デフォルメ）化し統夜の頭の上に乗った。

鮮華「ええー！ーっ！？！？そんな事も出来るの！！？」

はやて「でも可愛いからええでー！ーっ！！」

プリムラ「はやてお姉ちゃん！？」

カナ「速く学校へ行こうよ」

統夜「そうだな・・・」

華琳「そうよ。いきなちやい」

統夜達はそのまま学校へ行つた。

色々な人から変な目で見られたが・・・

凜「久しぶりだな統・・・夜・・・」

楓「趣味ですか？」

シア「生きてるよ？」

ネリネ「でも可愛いですね」

学園の掲示板の前でバツタリと凜と土見ラバーズに出会った。

統夜の頭の上に乗ってる華琳たんを見れば驚きと嬉しさ半分だろう。

・

達哉「おはよう。統夜に凜」

フィーナ「おはようございます」

麻衣「おはようございます」

菜月「おはよう」

翠「おはよう。皆」

達哉と朝霧ラバーズにも出会った。

達哉「お前・・・それ・・・趣味か？」

統夜「亡き者にされたいのか？」

稟や土見ラバーズと同じ反応だった。

達哉「冗談だ・・・」

文乃「統夜。お・・・はよう・・・」

千世「統夜・・・何・・・そのちっちゃい人形・・・」

希「趣味・・・？」

華琳「しちゅれいな・・・誰が人形よ・・・」

文乃「ええ?! 喋った!？」

千世「不思議な生き物ね!？」

希「にゃあ・・・驚いた・・・」

三人娘は華琳たんが喋った事により驚いていた。
その後掲示板に貼られてあるクラス表を見始めた。

統夜「え〜つと・・・クラスは・・・俺は・・・一緒だぜ」

カナ「鮮華ちゃんも一緒だね」

はやて「うちもや。優子ちゃんと秀吉ちゃんも一緒や」

文乃「私や千世、希も一緒ね」

達哉「明久や雄二も一緒だぜ」

稟「違うクラスか・・・」

統夜「まあ・・・そんな事言っな・・・たまにちよつか・・・遊び
に来てやるからよ」

稟「おい・・・ちよつかいって言い掛けたろ？」

統夜「気のせいだ。俺らは教室へ移動するから」

統夜達は稟と土見ラバースと分かれ2 - Aの教室へ入った。

統夜「よおおおおし！！皆でハジケるぞおおお！！！！」
はやて、カナ「おおおおお！！！！」

統夜「と言いたいが・・・明久や雄二が来ていない・・・」

そう言つて待つてた時・・・

瑞希「きゃあああああ！！！！」

教室へ入つて来た瑞希の悲鳴が聞こえた。

美波「待ちなさい！！変態！！」

ダイチ「俺が何をしたつて言うんだ！！」

美波「あんた！私のお尻と瑞希の胸とお尻を触つたでしょ？この変態！！！！」

ダイチ「変態では無い！！スケベだ！！」

美波「どつちも同じでしょ！！」

美波がスケベ行為を働いていたダイチを追いかけ回していた。

達哉「懲りない奴だな・・・」

統夜「てか一緒だし・・・」

文乃「この先が不安・・・」

統夜はダイチの所へ駆けつける。

統夜「まあまあ・・・島田に姫路よ・・・ダイチのスケベは始まった事じゃないんだし・・・ほら・・・謝れ・・・」

ダイチ「いい乳でした・・・ごめんなさい」

美波「てか全然反省してないんだけど!？」

瑞希「私の胸を触っていいのは・・・吉井君だけですから」

頬を赤く染めた瑞希の爆弾発言により統夜は大笑いしてしまった。

逃げそびれたダイチは美波のプロレス技を喰らってしまった。

統夜「明久・・・幸せ者だな・・・」

明久「おはよう・・・統夜・・・頭に人形を乗せて・・・趣・・・
危ない!!雄二ガード!!」

教室へ入って来た明久に統夜は殴ろうとしたが一緒に登校してきた
雄二を盾にして防いだ。

雄二「明久・・・テメエ・・・」

明久「喰らえ!雄二マグナム!!」

雄二「ぐわああああ!!!!」

雄二を統夜に向けて投げ飛ばした。

統夜「甘いぜ・・・根元ガード!!」

文月学園の元2 - Bクラス代表である根元を盾に防いだ。

根元「貴様・・・」

統夜「まだ息の根があったか!!喰らえ!根元マグナム!!」

根元「どわああああ!!!!」

根元を明久に向けて投げ飛ばしたが軽々と避けられてしまった。

統夜「よくも根元を!!」

明久「よくも雄二を!!」

文乃「いやいやいやいや・・・これはどう見たって・・・アンタ達が悪いからね!!」

統夜と明久の行動にツツコミを入れた。

優子「おはよう・・・何これ!？」

秀吉「何があつたのじゃ!？」

教室へ入って来た木下姉妹?は教室の現状に驚いた。

統夜「ハジケの時間だ・・・」

明久「おはよう。秀吉。木下さん」

瑞希の格好をした統夜と美波の格好をした明久が挨拶をしていた。

優子「いつの間に着替えたのおおお!!!!!!」

優子のツツコミが炸裂した。

秀吉「やはり姉上のツツコミが無いと駄目じゃのう」

統夜「某ラッキースターの人みたいだな」

明久「中の人ネタは駄目だよ」

なのは「おはよう!カオスになってるね・・・」

フェイト「うん・・・」

なのはとフェイトが教室へ入って来て現状に苦笑いしていた。

瑞希「何だか・・・このクラスは面白いクラスになりそうですね」

美波「だといいけどね・・・」
遊輔「皆おはよう！！！」

遊輔は元気のある挨拶をした後教室の中へ入った。

遊輔「何じゃこりゃ！？」

カオス空間と化した教室を見て驚いていた。

華琳「あきにゃいわね・・・」

統夜の頭の上にいる華琳たんは一人呟いた。

零斗「皆の者！！ハジケているか！！」

教壇の上から突然零斗が現れた。

達哉「出たな！ハジケの感染源！！」

零斗「感染源とは失礼な！！」

達哉と零斗は言い合っていた。

翔子「賑やか・・・」

愛子「結構楽しくなるよね」

利光「そのようだね・・・吉井君・・・君も変わってしまったね・・・」

康太「一枚500円・・・」

利光「買った！！」

Aクラスの面々がカオス空間に変化した教室を見てそれぞれ感想を

述べていた。

その後眼鏡を掛けた男子生徒久保 利光は康太から美波のコスプレをした明久の写真を10枚買っていた。

零斗「木下 秀吉よ・・・お前は統夜と堂々とイチャイチャ出来る女の子になりたいか？」

秀吉「ワシは・・・なりたい・・・じゃが・・・出来ないのじゃ！」

零斗「ふ・・・安心しろ・・・その為に俺がいる・・・ちよつとくすぐりたいぞ・・・マイティ真拳奥義！！性別フォームトランス！！」

零斗は白い光を灯した両手で秀吉に手を触れた。

秀吉「あれ・・・何も起きないのじゃが・・・」

零斗「いずれ分かる！では！」

零斗はそれだけを言って自分の教室へ移動した。

達哉「あいつ・・・一体何しに来たんだ？」

統夜「さあ？」

遊輔「お前・・・それ・・・華琳ちゃんか？」

統夜「遊輔だけだよ・・・分かってくれるのは・・・」

零斗が何をやりたかったのか不思議に思った主要陣三名・・・すると秀吉に変化が起き始めた。

秀吉「うぐつ・・・んん・・・くう・・・」

優子「秀吉！？大丈夫！？」

秀吉の身体が熱くなり身体が変化しようとしていた。
秀吉の発している声で鼻血を出し倒れている約一名いたが・・・

統夜「文字通り本物の女性になるのか!?!」

明久「なっっちゃうの!?!」

雄二「作者は一体何を考えているんだ!?!」

瑞希「原作崩壊してますよね!?!」

美波「既になってるわよ!?!」

幼馴染と元Fクラスの面々が秀吉の変化に驚いていた。

秀吉の胸の膨らみが瑞希や咲夜並に変化しシャツのボタンが飛び変化に伴う苦しみは治まった。

秀吉「ワシ・・・本物の女性になれた・・・」

優子「そうね・・・でも・・・何で・・・私より胸が大きいのよ!?!」

秀吉「はっはっはっは・・・それは姉上の心の狭さがえい・・・姉上・・・そっちには関節は曲がら・・・ギブギブ!?!」

妹へ変化した秀吉の胸に嫉妬した優子は秀吉に関節技を見舞っていた。
た。

その後折檻された秀吉をカナが治療魔法を使って回復させた。

秀吉「ありがとうなのじゃ・・・カナ」

カナ「大丈夫だよ・・・しっかし・・・大きくなったね」

秀吉「そうじゃな・・・これは素直に喜べるの」

秀吉の発言に怒りを露わにした千世と美波、優子は秀吉に襲い掛かろうとするが、千世は文乃、美波は明久、優子は統夜が抑えた。

千世「離せえええ！！あの裏切り者は絶対に許す訳にはいかないのよおお！！！！」

美波「離しなさい！！アキ！！あの裏切り者に制裁を下すのを邪魔しないで！！！！」

優子「双子でこんなに差がある事を認める訳にはいかないのよ！！」

元男で胸が瑞希や咲夜並の大きさになり女性に転換した秀吉の姿に怒りの嫉妬を抱いていた。

文乃「怒りで殺さないで！！」

明久「だからつて殺しちや駄目だよ！！」

統夜「気持ちは分かるけど落ち着いてくれ！！」

文乃と統夜、明久の三人は青ざめて大量の汗を流しながらも、暴走している千世と美波、優子の三人を抑えるのであった。

華琳「胸ぐらいで嫉妬するにやんて・・・はじゅかしくないのかしら？」

笑みを浮かべて言い出す華琳たんの言葉に千世と美波、優子はさらに暴れ出して怒りを露わす。

統夜「ちよつと！？何火に二ト口をぶち込むような事を言うの！？華琳！？」

統夜は大汗を流して華琳たんにツッコむ。

達哉「本当に災難だな」

雄二「全くだ・・・不思議な・・・「ブスリ」・・・ぐおおおおお
お！！目が・・・目があーっ！！」

翔子「雄二は見ちゃ駄目……」

秀吉の胸を見ようとした瞬間翔子の目潰しによって痙攣していた。

達哉「え〜つと……」

翔子「坂本 翔子……」

達哉「雄二……いつの間に結婚したの？」

雄二「違うわ！こいつは霧島 翔子……俺の幼馴染だ」

翔子「いずれなるのに……」

雄二「何でここにいるんだ？」

翔子「私……雄二と一緒にのクラス……」

翔子の一言により固まってしまった。

そりゃそうだ……一番怖い嫁さんが一緒にいるのだから……
すると……教室に高橋女史が入って来た。

高橋「一体……これは……おほん……皆さん……席に着いてください」

統夜達生徒は席に着いた。

高橋「この2 - Aの担任になる高橋 洋子です。よろしくお願います。天川君……貴方の頭の上に乗っているのは趣味ですか？」

高橋女史は統夜の頭の上に乗っかっている華琳たんを見て達哉や稟明久から言われた事を言った。

その後統夜達は自己紹介を始めた。

高橋「皆さん……今から全校集会がありますから体育館に集合してください」

統夜達は教室を出て体育館へ移動した。

体育館へ着くと生徒達はガヤガヤと騒いでいた。

紅女史「ええい！！静かにしろ！！」

久し振りに出た紅女史の一喝で皆は黙った。

統夜「（流石紅女史だな・・・）」

遊輔「（そうだな・・・）」

達哉「（同感・・・）」

なのは、フェイト、はやて、カナ「（あはは・・・）」

念話で会話をしていた。

紅女史「それでは・・・これより全校集会を始める。まずは新しい学園長の挨拶から・・・どうぞ！」

ステージに上がった元文月学園の理事長である藤堂 カヲルがステージに上がり挨拶をした。

藤堂「私が英都バーベナ学園と文月学園が合併した文月バーベナ学園の学園長の藤堂 カヲル。よろしく頼むよ。ガキ共。長いのはかったるいから簡潔に言っよ。色んな種族との交流や今から学ぶ魔法学を頑張りな・・・以上」

それを最後にステージを降りた。

紅女史「では・・・次に各界の王と月王の言葉をどうぞ」

今度は二世界の親馬鹿王と月王がステージに上がっていた。

三名の王達を見て生徒一同と教員達は言葉を無くしていた。

無理も無い・・・神王は某キングのと呼ばれたDホイラーの格好、魔王は某アクセルシンク口を教えた謎のDホイラーの格好、月王は某イノベーターの格好にそれぞれなっていたのだから・・・

フィーナ「（お父様ぁーっ！！！！）」

月王の娘であるフィーナは自分の父親であるライオネスの格好にツッコミを心の中で入れていた。

神王「俺はユーストマ、シアの父親をしていて、神王なんてのもやっっている」

魔王「私はフォーベシィ、ネリネちゃんの父親で、ついでに魔王もやっている」

月王「私はライオネス・テオ・アーシュライト、フィーナの父親で、スフィア王国の国王をやっている」

英都バーベナ学園の生徒は慣れているが、文月学園の生徒達は啞然としていた。

統夜「（あれが二世界と月の王だ）」

明久「（全然イメージが違うよね・・・達哉・・・これだけ言わせて・・・）」

達哉「（何だ?）」

明久「（あんなのにはならないでね）」

念話で明久が達哉に月王みたいな親馬鹿にならないでほしいと言っていた。

神王「稟殿！！シアの事ヨロシク頼むぜ！！荒ぶる魂でシアを押し倒して子供を儲けてもいいんだぜ！！」

魔王「神ちゃん抜け駆けは良くないよ！稟ちゃん、ネリネちゃんと素晴らしい思い出を築いてくれたまえ。そして・・・己の限界を超え・・・ネリネちゃんの子供を見せておくれ！今のネリネちゃんは食べ頃だよ！！」

月王「フィーナ、達哉君を誘惑し孫を見せてくれ・・・来るべき対話の為に・・・」

神王と魔王は稟に、月王は達哉とフィーナにそれぞれ言葉を送っていた。

それを聞いたシアとネリネ、フィーナは顔を真っ赤にしていた。

シア「稟君なら・・・私・・・押し倒されても・・・／／」

ネリネ「私も・・・稟様なら・・・いつ食べられても・・・／／」

フィーナ「お。お父様！！って来るべき対話って何ですか！！／／」

因みに統夜と遊輔、零斗、ダイチ、明久の五人はお腹を抱えながら大笑いしていた。

聞いていたモテない男性陣は嫉妬に満ちた目で稟と達哉を睨んでいた。

西村「天川、桜木、北郷、リュウ、吉井！！静かにせんかあ！！」

統夜「だって・・・鉄人・・・こんなに面白い事は滅多にないよ？」

桜木「そうそう・・・笑ってしまうよね」

零斗「弄りのネタになるし」

ダイチ「あ・・・腹が痛てえ・・・」

明久「静かにしろと言っても無理な相談ですよ。鉄人」

文乃、優子、秀吉「すみません、すみません、すみません」

統夜達五人に注意した西村先生に文乃と優子、秀吉は頭を下げて謝っていた。

西村「全く・・・確かにあんな発言で笑ってしまうのは事実かもしれんな・・・」

西村先生は明後日の方向を見て呟き後にした。

はやて「おもしろいな」

華琳「そうね・・・ビデオと呼ばれるものでさちゅえいちてみてみちやいわね」

麻弓「私も参加したいのですよ」

康太「・・・」

稟と土見ラバーズの閨と達哉と朝霧ラバーズの閨をビデオに収めようと計画していた。

魔王「それじゃ・・・頑張つてね。稟ちゃん」

神王「頑張れよ!!!稟殿!!!」

月王「頑張つてくれ・・・ファイナ・・・達哉君」

二世界と月の親馬鹿・・・王達はステージから降りた。

その後再び学園長がステージに上がった。

藤堂「言い忘れてたけど・・・明後日・・・この学園で『バーベナ無双大戦』を行うよ」

学園長の言葉に生徒一同（一部を除く）は驚きの声を上げていた。

西村「静かにせんかあ!!」

西村先生の一喝で黙った。

藤堂「ルールは二チームに分かれてのサバイバルバトル・・・関ヶ原みたいに東軍と西軍になるからそのつもりで・・・東軍には天川と北郷、リュウがメイン、西軍には桜木と朝霧、吉井がメインになる。詳しい事はホームルームで詳しいプリントを配るから心配ないさね」

藤堂はルールと主なメンバーを言った後ステージから降りた。

統夜「へえ・・・楽しそうだな・・・」

遊輔「ああ・・・」

零斗「負けねえぜ・・・」

明久「こつちも負けないよ」

ダイチ「達哉！絶対負けないぜ」

達哉「チーム戦だつて事を忘れるなよ」

六人はやる気満々になっていた。

あれから全校集会が終わり生徒達は教室へ戻った。

教室でHRをしていると・・・

高橋「このクラスに転校生が来ます。入って来てください」

高橋女史に言われて入って来たのは・・・

エステル「失礼します」

シャロ、エリー「失礼します」

ネロ「げ・・・スケベがいる・・・」
コーディネリア「まあまあ・・・」

エステルとミルクィホームズの皆さんだった。

彼女達が入って来たのか男子達のテンションは異常に上がり始めた。

高橋「それでは・・・自己紹介をお願いします」

エステル「私はエステル・フリージアと言います。よろしくお願
いします」

シャロ「私はシャーロック・シエリンフォードと言います。よろし
くお願いします」

エリー「私はエルキュール・バートンと言います」

ネロ「僕は譲崎　ネロ・・・よろしく・・・」

コーディネリア「私はコーディネリア・グラウカ。よろしくね」

それぞれ自己紹介を終えた後質問タイムが始まった。

愛子「質問は皆好きな人とかいる？」

愛子の質問には・・・

エステル「天川　統夜です」

エリー「ダイチ君です」

エステルとエリーが即答で答えた。

須川「天川　統夜とリュウ・ダイチを亡き者にするぞぉー！！」
明久「駄目だよ！？須川君！？その言葉を言っちゃ！？」

元Fクラスの須川　亮が統夜とダイチに向けて攻撃をしようとした

瞬間・・・

はやてと文乃、千世、希、カナ、エステル、優子、秀吉が須川をボコし始めた。

須川「ぐわああーっ！！」

明久「須川君！？」

華琳「ばきやね・・・そうなるこちょをりきやいちてないのきやしら・・・」

華琳たんが一人で溜息をついていた。

その頃・・・

先生「今日から転校してきた・・・」

アリス「アリス・チェンバースです。よろしくね」

先生「北郷の隣に座りなさい」

アリス「はあゝい」

アリスが零斗の隣に座った。

零斗「一緒だな」

アリス「うん」

因みに零斗とアリスは亜沙とカレハの二人と一緒にのクラスである。

それから時間が過ぎ放課後・・・

統夜「いやゝ・・・今日は面白い全校集会だったなあゝ」

遊輔「うんうん」

ダイチ「親公認でスケベな事が出来るのが羨ましいぜ・・・」

零斗「その時は俺達がお前達のエッチシーンをビデオに納めてやる」
明久「弄りネタになるしね」

五人が楽しそうに笑っていた。

稟「人事みたいに言いやがって・・・」

達哉「零斗！？絶対それ止めろよ!？」

統夜「気にするな・・・あれ・・・変態(樹)は？」

稟と一緒にいる変態が見えない為周りを見回した。

稟「あゝ・・・それなら・・・西村先生の鬼の補習を受けてるよ」

稟の言葉に明久と雄二、康太、秀吉、瑞希、美波は顔を青ざめた。

明久「鉄人の補習か・・・恐ろしいものを受けてるね」

雄二「可哀想な奴・・・」

康太「・・・哀れ・・・」

秀吉「そうじゃのう・・・」

瑞希「お気の毒ですね」

美波「うんうん・・・」

元Fクラスの面々がそれぞれ言つと・・・

麻弓「ああいう変態は毎日補習受けるといいいのですよ」

統夜「それは確かに・・・」

その頃・・・

樹「何で俺様はこんな目に遭うんだい!？」

西村「つべこべ言うな！！お前を趣味が勉強。尊敬するのは二宮金次郎という理想的な生徒へしてやるから覚悟しておけ！！」
樹「嫌だあ~~~~っ！！」

学校の補習室で樹は鬼の補習を受けている最中だった。

零斗「完全な女になってどうだ？秀吉」

秀吉「最高じゃ！これなら統夜とそれ以上一緒にいられる。ありがとうなのじゃ」

麻弓「ムキ~~~~っ！！脂肪の塊が憎いのですよ~~~~！！」

麻弓は女性化した秀吉の胸に嫉妬していた。

統夜「不思議だな・・・普通なら・・・優子並の大きさになる筈なのに・・・」

零斗「恐らく・・・女性ホルモンが強過ぎたんじゃないか？」

統夜「そうか・・・ダイチ・・・触ったら・・・分かってるよな？」

ダイチ「い、イエッサーツ！！」

秀吉の胸を触ろうとしていたダイチに釘を刺しておいた。

ダイチの後ろで黒いオーラを纏ったエリーが睨んでいたので止めざるを得なかったが・・・

亜沙「ねえ・・・皆知り合ったんだからさ、親睦会も兼ねてフロラでも行かない？」

皆「賛成！」

亜沙の言葉に皆は賛成しフロラへ移動した。

遊輔「不思議だな」

達哉「俺は久し振りだ……」

統夜「そうだな……」

零斗「全くだ……」

ダイチ「どうなるやら……」

明久「地獄だ……」

雄二「翔子は少食だし何とかなるがな……」

稟「絶望だ……」

女性陣が食べているパフエ、ケーキ、デザート類の食器の数が半端じゃなかった。それに引き替え統夜達男性陣は水しか飲んでなかった。

統夜「各ラバース持ちが支払う……何か久し振りだよな……」

達哉「もしたけしが俺達と同じ年だったら……」

ダイチ「苦しんでたかもね……」

その頃本拠地寮では……

たけし「このっ！」

メイメイ「負けないね！」

桂花「やるじゃない！」

ルイス「負けない……」

たけし達はリビングでWi-Fiで大乱闘スマッシュブラザーズXをやっていた。

麻弓「甘くておいしいのですよ〜お代わりなのですよ〜」

ネリネ「麻弓さん、それ10杯目じゃ……」

翔子「凄い……」

美波「ウチでもそこまで食べきれないわ……」

瑞希「異常ですね・・・」

麻弓が食べているパフェの量に驚いていた。

はやて「統夜。水だけでええんか？」

統夜「今日は節約しようと思ったんだ・・・」

はやて「なら・・・一口だけあげるで」

統夜「へ？」

食べていたショートケーキをフォークで一口分切った後統夜に差し出そうとしたが自分の口の中へ入れた。

統夜「おい！？新手のイジメか？んむっ！」

ツッコミを入れようとした瞬間はやてが統夜の口にキスし口移しでケーキを食べさせた。

頭の上に乗っていた華琳たんは不機嫌になり始めた。

はやて「ふふ・・・どうや？」

統夜「お、おいしいです・・・」

はやての行動を見た女性陣は顔を真っ赤にしていた。

文乃「統夜！私のアイスパフェ食べなさい！」

優子「わ、私のケーキも食べてもいいわよ！」

秀吉「わ、ワシの抹茶アイスも食べるかの？」

千世「わ、私のケーキをあげるから口移しさせなさい！..！」

希「にやあ・・・私のアイス食べて・・・」

プリムラ「お兄ちゃん。私のチーズケーキ食べて」

カナ「私のチョコケーキも食べて」

エステル「わ、私のパフェもど、どうですか？」

幼馴染ーズとラバーズの皆さんが一斉にスプーンを統夜に差し出していた。

稟「頑張れ……」

シア「りくん君、私のも美味しいよお」

ネリネ「あの、稟様？よろしければ私のも……」

楓「り、稟君、私も食べて下さい！」

稟「ちよ、楓！？微妙に言い間違えてるから……！」

楓「あう／＼／」

亜沙「楓ったらだいたくん！」

カレハ「まままあ」

麻弓「特ダネゲットなのですよ」

稟にあくんしようとする土見ラバーズと楓の言い間違いで場が大混乱になっていた。

達哉「俺も人の事言えないな……」

フィーナ「達哉……口を開けて」

麻衣「お兄ちゃん、口を開けて」

菜月「達哉、口をあくと開けて……／＼／」

翠「朝霧君。あくんして」

達哉は朝霧ラバーズにあくんをされていたのは言うまでも無かった。

明久「ムツツリーニイイイ！！誰か！救急車を……！」

明久の場合は鼻血を大量に流している康太を介抱していた為あくん大会は出来なかった。

雄二「ぬおおおおお!!!?」
翔子「雄二は見ちゃ駄目・・・」

雄二は翔子の目潰しを喰らって痙攣していた。

遊輔「それ以上に賑やかだ」

なのは「にやはは・・・そうだね・・・」

フェイト「はやての大胆な行動からヒートアップしたけどね・・・」
鮮華「あれが未来の義姉というのが不安ですが・・・」

遊輔となのは、フェイト、鮮華は静かに見守っていた。

零斗「楽しくいかないとな」

アリス「零斗、パフェ食べさせてあげるからあくんして」
零斗「おう」

零斗とアリスはバカップルみたいにあくんをして楽しんでいた。

エリー「ダイチ君。アイスを食べさせてあげるから口を開けて・・・」

ダイチ「あくん・・・」

ダイチはエリーからパフェが入ったスプーンを差し出されあくんして食べていた。

シャロ「大胆だね」

ネロ「あのスケベには勿体無い・・・」
コーデリア「でもいい方向じゃないかしら?」

シャロとネロ、コーデリアはダイチとエリーを見守りながらデザートを食べていた。

結局親睦会はあくん大会に変貌しそのまま終了した。懐が寂しくなったのは言うまでも無い。

統夜達男性陣はこれをキツカケにバーベナ無双大戦を頑張る事を決めたそうな……

第四十話『新たなる学園・・・その名は文月バーベナ学園！』(後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

アリス「二つの学校が合併したからより楽しくなりそうだね」

アリス「いよいよ・・・バーベナ無双大戦が始まる・・・私は零斗と同じ東軍だけど・・・頑張るよ」

アリス「次回は『激闘文月バーベナ学園(前編)』 テイクオフ」

第四十一話 『激闘文月バーベナ学園（前編）』（前書き）

いよいよバーベナ無双大戦が始まる・・・

コメディア「HERO'S EPISODE 第四十一話 始まります」

第四十一話 『激闘文月バーベナ学園（前編）』

第四十一話 『激闘文月バーベナ学園（前編）』

全校生徒が東軍と西軍に分かれてそれぞれ集合していた。

藤堂「ルール説明を行うよ。一つ目は陣地として生徒会室や食堂、特殊な教室、自分達の教室等を奪い合うサバイバルバトル形式。二つ目はデバイスや武器、試験召喚獣等を用いる事が可能。三つ目は試験召喚獣を用いて戦い戦死した者は即失格となる」

学園長がマイクでルール説明を行っていた。

藤堂「勝ったチームには金一封と如月グランドパークのプレミアムチケットが貰え・・・負けたチームは・・・『暗黒物質と混汁、マスモデウス活け漬の焼酎を混ぜたシャルドリンク』を飲んでもらう。以上」

不気味な色をした混汁が入っているビンとオレンジ色の液体に巨大な毛がもじやもじやと生えていて悪魔のような爪が生えている以下にも殺戮的な蜘蛛が酒の煮漬けされたものが入っている巨大なビンが置かれていた。

藤堂「混汁というのはマムシの生き血、鳥の生肉ミンチ、炭酸水、イカ墨、蛸墨、ハブの生き血、豚の血、マヨネーズ、それに様々な野菜の汁を大量に調合して混ぜ合わせた特製ドリンクでマスモデウス活け漬の焼酎に入ってるマスモデウスはかなり凶暴でどんな物でも捕食する殺戮昆虫だよ。食べられるがかなり不味くて、上手い具合に調理しないと食べれない昆虫食材であり、焼酎なんかしたら

かなりの悪臭が広まって飲む前でも吐き気がする究極の不味い虫だから・・・頑張つて勝つ事だね」

内容を知った生徒一同は顔を青ざめ大声で叫んでいた。よくそんなの捕獲出来たなと呟いた人もおつたそうな・・・

生徒「あの・・・質問です」

藤堂「何さね？」

一人の生徒が手を挙げて質問をしていた。

生徒「あの・・・昼に食堂を使う事なんですけど・・・自分は西軍なのですが・・・もし東軍の陣地だった場合はどうなるんですか？」

藤堂「西軍の生徒は利用出来ない仕組みさね。昼の時は近くのコンビニを利用してもいいさね」

生徒は納得したようだ。

飯抜きでやったら学園で極悪的な強さを誇る統夜や遊輔、零斗、達哉、ダイチ、明久に挑むのは自殺行為に等しいのだから・・・

東軍サイド

統夜「俺達は絶対に勝つぞ!!」

殆どの生徒は体操服だったが統夜は上に蒼のハイネックシャツを着て、下に黒のズボンを穿き左足を包む腰から垂れ下げた腰布を着けた服装になっていた。

鮮華「はい!!」

はやて「せやね。負けたら死に近いからね・・・」

文乃「あんなの飲める訳無いじゃない！」

優子「あんな悪夢・・・二度とゴメンよ！」

秀吉「ここで死ぬ訳にはいかんのじゃ!!」

シヤマルの猛毒物質の恐ろしさを知っている統夜達6人は負ける訳にはいかないと思いを込めていた。

零斗「そんなに恐ろしいのか・・・」

ダイチ「さあ？」

プリムラ「もしかして・・・ネリネ並の兵器？」

統夜「プリムラ・・・それはまだ優しい方だ・・・」

愛子「本当に不味いの？それって・・・」

優子「飲んだら・・・あの世に行くわ・・・」

優子は遠い目をして愛子の質問に答えていた。

翔子「でも・・・今は・・・金一封と如月グランドパークのプレミア
アムチケットの為に戦う事を優先して・・・」

優子「そうね！何としてでも優勝するわよ！統夜・・・東軍代表で
ある貴方から何か言ったら？」

統夜「分かった。お前ら！確かに・・・罰ゲームは怖い・・・だが
！これだけは言わせてくれ・・・ひたすら前へ進め！！何があるう
とも全てを統一するんだ!!」

東軍「おおおおお!!」

東軍には統夜、零斗、ダイチ、鮮華、はやて、文乃、千世、希、プリムラ、カナ、エステル、優子、秀吉、翔子、愛子、アリス、シヤロ、エリー、ネロ、コーディアの計20名が主なメンバーで構成されている。

西軍サイド

明久「どうしよう・・・僕達・・・死にたくないよ！」
達哉「俺だつてそうだ！」

遊輔「あんな不味いドリンクは飲みたくない・・・」
なのは「にはは・・・シャルさんのドリンクは誰だつて飲みたくないよ・・・」

フェイト「絶対飲みたくない!!」

雄二「混汁とマスモデウス活け漬けの焼酎って・・・黒神さんのネタだよな!？」

明久「何でも作者が許可を貰ったらしいよ。より楽しくする為に・・・」

雄二「作者あーっっっ!!」

雄二が怒りの形相で何かを叫んでいるが気にしない。

美波「アキ・・・絶対勝つわよ！」

瑞希「美波ちゃんの言う通りです!如月グランドパークのプレミアムチケットが掛っているんですから!!」

美波と瑞希は如月グランドパークのプレミアムチケットを手に入れる為に燃えていた。

遊輔「皆!確かに罰ゲームは怖い・・・だが・・・皆の力があれば勝利を掴めると信じている・・・だから手を貸してくれ!!」

西軍「おおおおお!!!」

西軍には遊輔、達哉、明久、雄二、稟、フィーナ、菜月、麻衣、翠、

瑞希、美波、シア、ネリネ、楓、亜沙、カレハ、麻弓、利光、美春、根元、樹の計21名が主なメンバーである。

藤堂「準備はいいかい？そんなじゃ・・・バーベナ無双大戦・・・始まるよ！！」

学園長の号令から大きく壮絶な戦いが始まった。

ダイチ「行くぜ・・・」

中国刀に気力を込め・・・

ダイチ「天火星！稲妻炎上破！！」

炎と雷を呼び、炎と雷の同時攻撃をした後にもう一回炎を放ち西軍の一部を黒焦げにした後走った。

ネリネ「今の魔法ですか！？」

達哉「いや・・・あいつは気力使いと呼ばれる一種だ・・・」

稟「反則だろ！？あんなの？！」

優子「島田さん！！今の内に古典で試験召喚戦争を申し込むわ！！」

シャマルドリンクが嫌なのか美波に試験召喚戦争を申し込むとしたが・・・

美春「そうはさせませんわ！お姉様！速く行ってください！ここは美春が食い止めますから！！」

縦ロールをツインテールにした少女・・・清水 美春が割り込んで来た。

美波「今はアンタに任せるわ！」

美波は急いで校舎の中へ走り始めた。

優子「西村先生！承認許可をお願いします」

西村「試験召喚戦争・・・始め！！」

その後担当の先生である西村先生が召喚フィールドを発生させた。

優子「速攻で片付けてやるわ！試験召喚獣・・・サモン召喚！」

優子がデフォルメした姿に西洋鎧が装着され右手にランスを持った召喚獣が召喚された。

美春「望む所ですわ！試験召喚獣・・・サモン召喚！」

美春がデフォルメした姿にグラディウスを手に口リカ・セグメントタを身につけたローマ兵風の装備された召喚獣が召喚された。

木下 優子 古典 367点

VS

清水 美春 古典 167点

優子「速攻で倒す！」

優子の召喚獣が速攻で美春の召喚獣を倒した。
その後召喚フィールドは消えた。

西村「戦死者は罰ゲーム!!」

西村先生が混汁とマスモデウス活け漬の焼酎が入ったペットボトルを取り出しコップの中に二つとも入れて混ぜ始めた。

その後美春に混汁とマスモデウス活け漬の焼酎が混ざったものを無理矢理飲ませた。

美春「ゴババババババ?!!?!?!?!」

飲んだ美春は顔を青ざめて倒れてしまった。

その後学園長からの放送が入った。

藤堂「あー・・・言い忘れてたけど・・・試験召喚戦争で敗者になった者は混汁とマスモデウス活け漬の焼酎のどちらかを飲んでもらうからね。素行の悪い者には二つを混ぜ合わせたものを飲んでもらうけど」

それだけ言って放送を終了した。

元文月学園の生徒は大騒ぎをしたのは言うまでも無かった。

優子「(勝って良かった・・・あんな不味いドリンク・・・二度と飲んで堪えますか!!)」

優子は目の前にある恐怖で涙を流しながら統夜達と合流する為に走り出した。

明久「僕達文月学園側は不味いじゃん!?!」

雄二「最悪なパターンだな!?!」

明久「僕はデバイスと魔法が使えるし・・・」

それを聞いた雄二は怒りの形相で明久を睨んだ。

雄二「テメエ！！何お前とムツツリー二だけデバイスと魔法が使えるんだよ！！」

瑞希「そうです！」

美波「そうよ！アキ！」

明久「それは仕方ないよ・・・でも・・・なるべく強い相手には会わない方がいい・・・」

康太「・・・統夜と零斗、ダイチの三人は要注意・・・」

雄二「ここで負けたら翔子と強制的に如月グランドパークへ連れて行かれてしまう・・・何としても阻止しなければ・・・」

美波「いや・・・負けたらうちらは死が待ってるよ?!」

明久は待機状態のアストラルフリーダムを取り出し

明久「アストラルフリーダム・・・セットアップ」

アストラルフリーダムを起動させた後ドライバーコネクトして纏った。

雄二「これがデバイスか・・・頼りにしてるぜ」

明久「うん・・・」

明久達元Fクラスチームは移動し始めた。

食堂前にて・・・

統夜「オラオラオラ!!」

フォーチュンエターナルを纏いネオドラグーンやエターナルフェザ―、拡散構造相転移砲を駆使して西軍にいる連中を次々と倒していた。

はやて「ブラッディダガー!」

はやては統夜の援護としてシュベルトクロイツを起動しブラッディダガーで次々と倒していた。

プリムラ「え〜いつ!!」

カナ「はあ!!」

プリムラとカナは拳に魔力を纏い吹き飛ばしていた。

統夜「うっし・・・陣地ゲット!」

統夜達は食堂を陣地として手に入れた。

文乃「速いわね・・・」

千世「これならあのドリンクを飲まずに済むわね」

希「でも・・・油断できない・・・」

エステル「そうですね」

秀吉「ワシは試験召喚獣を持っておるからの・・・正直姉上や霧島が味方で本当に助かったぞい・・・」

統夜「確かにそうだな・・・そうならないように俺達がいる事を忘れるな」

秀吉「う、うん・・・」

優子「やっと着いた・・・」

優子は統夜達と合流していた。

統夜「どうだった？」

優子「あつちには姫路さんと島田さん、土屋君のようなエキスパートがいるから厳しいかな」

統夜「優子・・・この指揮はお前に任せる」

優子「ちょ!?! 一体何処へ行くのよ!?!」

統夜「姫路んとこだ! あいつとは試験召喚戦争で戦ってみたかったからな! 安心しろ! こいつを出しておく!」

フォーチュンブラスターを起動させた。

統夜「ブラスター・・・こいつらを頼んだぜ」

フォーチュンブラスター（了解しました）

統夜は明久達を探しに行った。

文乃「全く・・・一人で行っちゃうんだから・・・」

はやて「せやからフォーチュンブラスターを置いて行ったんやろうな・・・」

優子「シャマルドリンクは嫌・・・混汁とマスモデウス活け漬けの焼酎も嫌・・・」

生徒会室では・・・

零斗「おいおい・・・弱過ぎるぜ・・・」

零斗達は西軍の連中を片付けていた。

翔子「強過ぎる……」

愛子「強いですね。北郷先輩は……」

アリス「零斗が一番強いもん」

零斗「まだ始まったばかりだ……気を引き締めて行けよ……」

シャロ「はい」

エリー「ダイチ君……大丈夫かな？」

ネロ「大丈夫だろ」

コーデリア「今の私達はあのようなドリンクを飲んだら……探偵人生は終わってしまうわ……」

零斗達は生徒会室を陣地として手に入れた。

学園のグラウンドでは……

ダイチ「うひょ……凄い触り心地ですな」

シア「キヤア！」

ネリネ「ひゃあ!？」

楓「キヤ！」

亜沙「何処触ってるのよ!？」

カレハ「駄目ですわ!？」

麻弓「いい加減にするのですよ!！」

ミルキイホームズ達と分かれたダイチは土見ラバーズのお尻や胸を触りながら稟や樹、親衛隊と戦っていた。

親衛隊「おのれ!？リュウ・ダイチ!？我らのプリンセスに不埒な真似をしおって!！」

ダイチ「悔しかったらここまでおいで」

ダイチは一人の親衛隊の顔面を蹴った後次々に襲い掛かる親衛隊達を峰打ちで黙らせていた。

稟「強過ぎるな……」

樹「全くだね……恐るべき相手だよ……」

ネリネ「覚悟しなさい……!」

怒りの形相で特大な魔力弾をダイチに向けて放った。

ダイチ「ぎゃあああああ!……ふう……無敵の盾のお陰だぜ……」

樹を盾にして防いでいた。

そのお陰か樹は黒焦げになっていた。

ネリネ「ええええええええ!?!?!?そんなのありませんか!?!」

稟「(やつぱ……あいつ……統夜や零斗と同類だ……)」

視聴覚室にて……

達哉「ここは制圧したな……」

素手だけで東軍を蹴散らし視聴覚室を制圧していた。

フィーナ「でも半々ね……」

菜月「東軍には……天川君に北郷先輩……女の敵リュウ・ダイチがいるからね……」

麻衣「うんうん……」

翠「あの時はね・・・」

尚ダイチは朝霧ラバーズだけでなく土見ラバーズにも嫌われている。

音楽室にて・・・

遊輔「呆気なさ過ぎるな・・・」

なのは「遊輔君が強過ぎるんだよ」

フェイト「うんうん・・・」

遊輔となのは、フェイトが音楽室を制圧していた。

主なメンバーは大きな教室や場所をそれぞれ確保し陣地にしていた。
だが・・・まだ始まったばかり・・・本当の戦いはこれからである。

第四十一話 『激闘文月バーベナ学園（前編）』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

統夜「姫路・・・瑞希・・・アンタと試験召喚戦争で戦いたかったぜ・・・」

瑞希と試験召喚戦争で勝負を申し込んだ。

瑞希「私も・・・貴方と戦ってみたくなりました・・・」

明久「姫路さん!？」

ダイチ「へえ・・・凄いな。こんな力・・・見た事無いぜ」

凧の眠る力に興味津々なダイチ

根元「ぐわあああ!!!止めるおおお!!!」

罰ゲームに苦しむ面々・・・

利光「次回は『激闘文月バーベナ学園（中編）』テイクオフ」

第四十二話 『激闘文月バーベナ学園（中編）』（前書き）

次々と傷つき・・・倒れて逝ってしまう仲間達・・・

優子「縁起でも無い事言わないで!？」

愛子「あはは・・・HERO'S EPISODE 第四十二話始まるよ」

第四十二話 『激闘文月バーベナ学園（中編）』

第四十二話 『激闘文月バーベナ学園（中編）』

統夜ははやて達と分かれ単独で明久達を探し始めていた。

異端審問「天川 統夜・・・これより処刑を行う・・・」
統夜「行け！ネオドラグーン！」

FFF団と呼ばれる変な組織が統夜に襲い掛かったがネオドラグーンを全て射出しオールレンジ攻撃で黙らせた。

統夜「うぜえんだよ・・・この馬鹿共が・・・」

高橋「手加減なしですね・・・天川君・・・」

統夜「そう？それくらいしないとあいつら分からないでしょ？」

背負われている高橋女史が統夜のやり方に冷や汗を掻いていた。

何故高橋女史がいるのかは明久を探す途中で偶然見つけたからだ。

雄二「今の音は何だ？」

明久「恐らく統夜の攻撃だよ」

明久の言葉で雄二と瑞希、美波の三人は顔を青ざめた。

雄二「よりによってあの野郎か・・・俺の人生・・・終わった・・・」

明久「霧島さんと一緒に行くのがそんなに嫌？」

雄二「当たり前だ！！」

瑞希「プレミアムチケットが・・・」

美波「ウチの夢が・・・」
康太「・・・・・・・・来る・・・・・・・・」

康太の言葉と共に異端審問や親衛隊がゴミのように吹き荒れると高橋女史を背負った統夜がやって来た。

統夜「よう・・・明久」

明久「統夜・・・」

統夜がやって来た瞬間明久は瑞希と美波を守るように前へ出た。

雄二「何しに来たんだ？」

統夜「決まってるだろ・・・姫路・・・瑞希・・・アンタと試験召喚戦争で戦いたかつたぜ・・・」

雄二「姫路を潰す魂胆か・・・悪いが・・・俺達は・・・」

雄二は逃げるように提案すると・・・

瑞希「待ってください！」

瑞希が待つように言った。

雄二「姫路？」

瑞希「その勝負・・・受けます！私も・・・貴方と戦ってみたくありませんでした・・・」

明久「姫路さん！？」

瑞希「この勝負で賭けに出ます！もし天川君を失格にさせれば・・・こちらが有利になります」

雄二「確かに賭けだな・・・あいつは文月学園の生徒で召喚獣も持っている・・・操作は姫路が上だ・・・経験でやるしかない・・・」

いいだろう・・・頼んだぜ」

瑞希「はい。頑張ります」

統夜「決まりだな」

統夜「科目はどうする？」

瑞希「数学で勝負を申し込みます！」

統夜「上等！！んじゃ・・・高橋女史・・・頼みます！」

先程降ろした高橋女史に承認許可を申請した。

高橋「承認します！試験召喚戦争・・・始め！」

許可をし試験召喚フィールドが展開された。

瑞希「試験召喚獣・・・サモン召喚！」

西洋風の鎧に巨大剣を装備した瑞希のデフォルメ版の召喚獣が召喚された。

統夜「楽しく行こうぜ・・・試験召喚獣・・・サモン召喚！」

新鬼武者に出てくる灰燼の蒼鬼の服装で右手に大剣、左手に刀を装備した統夜のデフォルメ版の召喚獣が召喚された。

姫路 瑞希 数学 423点

VS

天川 統夜 数学 450点

明久「統夜が僅かに上だよ!？」

雄二「あいつ・・・頭が良かったのかよ!？」

美波「絶望がまた増えたあああ!!!」

康太「・・・・・・・・」

統夜の点数を見て絶望していた。

瑞希「頭良かったんですね・・・」

統夜「アンタに勝つ為にな・・・こつちも必死なんだ・・・」

統夜、瑞希「勝負!!」

召喚獣はお互いが持つ大剣と刀の二刀流と巨大剣のぶつかり合いから始まった。

統夜「はあ!」

瑞希「やあ!」

左手に持つ刀で斬りかかろうとしたが避けられ巨大剣の一閃が来たが回避していた。

統夜「中々やるな・・・」

瑞希「私も・・・あのドリンクだけは絶対に飲みたくありませんから・・・吉井君と生きて結婚したいですから!!」

統夜「俺だつて死にたくないわ!! あんなドリンク飲んだらあの世行きじゃ!!」

召喚獣の戦いは中々いいものだが台詞のせいで台無しになりつつあった。

誰だつてあのドリンクを飲みたくないだろう・・・

明久「（よく思ったけど・・・）」

雄二「あのドリンク・・・姫路の料理並だよな？」

美波「（それ・・・うちも思った・・・）」

康太「（・・・恐るべき兵器）」

四人は心の中で失礼な事を思っていた。

本人にそんな事は言わないでね・・・

統夜「よっ!!」

瑞希の熱線を避け飛び蹴りを放ちヒットさせた後空中へ移動した。

瑞希も上へ上がり統夜に斬りかかろうとしたが二刀と巨大剣の剣劇が始まった。

統夜「やっぱアンタは強いぜ・・・」

瑞希「短時間で召喚獣の操作をものにしてるなんて・・・驚きです・・・」

統夜「優子や鉄人のお陰さ・・・伊達に努力してないぜ!!」

剣劇の勝負は瑞希が勝ち統夜は吹き飛ばされた。

統夜「巨大武器故か・・・こっちも腕輪の能力・・・使わせてもらうぜ・・・ブラッドカイン!!」

統夜の召喚獣に装備されている腕輪が光り出し髪の色と瞳が吸血鬼化と同じものに変化した。

瑞希「吸血鬼みたいですね・・・」

統夜「行くぜ!!」

刀身が真紅に点滅した大剣と刀で猛攻し瑞希にヒットさせていた。

すると瑞希からピンク色のスフィアが抜け統夜の中へ吸収した。

雄二「あいつの召喚獣の能力は自分の点数が減る代わりに自分の攻撃をヒットさせた相手の召喚獣の点数を奪う能力か!？」

明久「反則だ!？」

美波「反則じゃない!？」

康太「…………でも諸刃の剣でもある」

雄二「ああ…………自然と点数が減っている…………強大な力の代償にはうってつけか…………」

雄二達は統夜の腕輪の特殊能力に驚愕していた。

だが瑞希は統夜の猛攻をただ受ける訳にはいかないので回避に専念した。

時間で統夜の点数を0にする為である。

統夜「強大な力にリスクはつきものだが…………姫路相手には使わざるを得ないからな!！それに…………時間稼ぎをさせる訳にはいかないなあ!！」

大剣を背中に背負い、刀を鞘に納めた後、高速移動して瑞希の所へ移動した。

瑞希は警戒しながら巨大剣を構え一閃するが間一髪で回避され蒼いの爪のようなもので頭部を掴まれると…………

統夜「蒼に…………喰われるお!！」

蒼い光の柱が発生し瑞希は為す術も無く飲み込まれた。

その結果瑞希の点数は0点になった。

高橋「勝者!天川 統夜!」

試験召喚戦争は統夜が勝った。
その後西村先生がやって来た。

西村「戦死者は罰ゲームだ……どれがいい？」
瑞希「混汁を……」

瑞希はコップに入った混汁を選び嫌そうだったがそこを我慢して飲み干した。

明久「姫路さん!？」
瑞希「吉井君……いえ……明久君……大好きでしたよ……」
それだけ言っただけで静かに倒れた。

明久「姫路さあーん!!統夜ああーっ!!」
瑞希に混汁を飲ませた原因を作った統夜にアストラルカリバーで切り掛り外へ押し出した。

雄二「おい!明久!」
美波「今のアキに言っても無駄よ!瑞希は気を失ってるだけだし……」
康太「……達哉か遊輔の所へ合流しよう」
雄二「そうだな……」

雄二達は瑞希を背負いこの場を後にした。

同時刻……

ダイチ「ふっふっふ・・・行くぜ！緑葉マグナム！」

気力で強化した樹を稟に向けて投げ飛ばした。

稟「うわっ！危ない！！」

緑葉マグナムを辛うじて避けると残りの親衛隊に直撃し爆発が起きた。

ダイチ「よくも緑葉を！この悪魔め！！」

亜沙「いやいやいやいや！！どう見たって君が悪いでしょ！？」

亜沙は樹を酷い目に遭わせたダイチにツッコミを入れた。

麻弓「ハジケリストってやっぱり興味深いのですよ」

シア「楽しくていいよね」

楓「麻弓ちゃん！？」

ネリネ「シアちゃん！？」

ハジケリストに興味を持ち始めた麻弓とシアに楓とネリネは青ざめてしまった。

ハジケ感染は何としてでも阻止しなければいけないと思ったからである。

稟「俺は・・・どうしても倒す・・・」

ダイチ「お前・・・強そうに見えるもんな」

稟「俺は統夜や達哉のように強くは無い・・・」

ダイチ「力じゃないよ・・・心だ」

稟「心・・・？」

ダイチ「そんじゃ・・・やろうぜ！」

ダイチが稟に殴り掛って来た。

稟は辛うじて避けパンチを繰り出したが

ダイチ「甘いぜ！」

軽々と避け右ストレートを放ち稟の右頬ヒットさせた。

稟「ぐ……」

ダイチ「俺に見せてくれよ……神にも悪魔にもなれる男の力をさあ……」

稟とダイチは拳と蹴りを互いにぶつかつたが稟はダイチに敵わず全て避けられ攻撃を喰らってしまった。

倒れてもまだ立ち上がった。

稟「ぐ……はあ……はあ……」

ダイチ「（何かこいつ……引つ掛かるんだよな……気力はあるんだが……ん？麻弓って奴がないが……ま、いつか……）」

稟は再び拳の連打を放つたがダイチは涼しい顔で回避していた。

ダイチ「（ちよつと試してみるか）お前じゃ俺には勝てねえよ……俺思っただけどさ……何でお前みたいなの『弱虫』で『見かけ倒し』が神にも悪魔にもなれる男な訳？信じられないんだけど？」

ダイチの言葉にキレたネリネが超巨大な魔力球をダイチに向けて放つた。

魔力球を気力を込めた足で上へ蹴り上げた。

ダイチ「可愛い顔して怖い事するね……」

ネリネ「稟様を侮辱する者は例え貴方でも許しません!!」

ダイチ「うわぁ〜……怖いね……おい……お前は女の子に守られっぱなしでいいのか？」

飄々と答えた後真剣な表情で稟に問い掛けた。

稟「違う……俺は……皆を守りたい……今は……勝つ事だけに優先する！」

無鉄砲な動きでダイチに特攻する形で向って行った。

ダイチ「（気持ちだけは認めるぜ）はい。ガラ空きだぜ!!」

ダイチは稟のタックルを避けた後上へ跳び……

ダイチ「炎破流星蹴り!!」

右脚に気力の炎を纏った蹴りで稟に直撃させた後吹き飛ばした。

シア「稟くん!?!」

ネリネ「稟様!?!」

楓「稟君!?!」

亜沙「稟ちゃん!?!」

カレハ「稟さん!?!」

離れた場所で見っていたシア達は声を上げてしまった。

ダイチ「悪いが……俺も負ける訳にはいなくてね……一方的かもしれないけど……」

麻弓が見当たらないのかシアは疑問に思った。

楓「何でも・・・リュウ・ダイチ君を倒す裏技を閃いたのでですよ
と言って何処かへ行ってしまいました」

ネリネ「裏技・・・（なるほど・・・そういう事ですか）」

ネリネだけは麻弓が言っていた裏技が何か分かっていたのだ。

ダイチ「意識が無いのに力だけは凄いな！」

ダイチと稟は拳の連打の打ち合いをしていた。

ダイチ「（こいつ・・・俺並の気力を持つてるじゃねえか・・・それに魔力・・・扱えてないのが幸いだっただな・・・）」

制御しきれれていないのが分かったのか打ち合いを中断し距離を置き中国刀を構え駆け抜けた。

ダイチ「統夜の技を盗みアレンジしたものを受ける！！炎夢零！！」

中国刀から超巨大な炎の衝撃波を2段重ねで放ち稟に直撃させた。
すると髪と瞳の色が元の色に戻り気を失った。

ダイチ「はあ・・・はあ・・・こいつは・・・反動が凄いな・・・」

統夜が繰り出す必殺技に驚いていた。
すると・・・

エリー「ダイチくん・・・」

ダイチの彼女であるエリーが現れた。
何故か瞳が虚ろなものになり黒いオーラを纏っていた。

ダイチ「何か嫌な予感が・・・」ど、どうしたんだ？」

エリー「麻弓つて人から聞いたよ・・・私がない間にスケベな事をしていたんだねえ」

ダイチ「な、ななな何の事かな」

冷や汗を掻いて誤魔化していた。

エリー「誤魔化しても駄目だよ・・・動かぬ証拠もあるから・・・」

麻弓のデジカメラからプリントアウトした土見ラバーズの胸やお尻を触っていた写真をダイチにつきつけた。

ダイチ「あ、あはは・・・今は大会中だよ？」

エリー「そんなの関係ありません！！サア・・・カクゴシテクダサイネエエ！！」

ダイチ「ちきしょう！！これを狙っていたのか！？」

ダイチは急いで逃走した。

逃げるダイチをヤンデレ化したエリーは追いかけ始めた。

麻弓「これで何とかなったのですよ」

その後に麻弓がやって来た。

ネリネ「やりましたね」

シア「罰が当たったっす」

ダイチに一矢報いた後ネリネとカレハは稟に治療魔法を掛け始めた。

優子「来ないでええええ!!!」

根元「くっ！俺だつて死にたくないんだよ!!!」

シヤマルドリクや混汁、マスモデウス活け漬けの焼酎が嫌なのかいきなり試験召喚戦争を仕掛けて来た根元と勝負をしていた。

この時点で優子のキャラ崩壊は確定だが・・・

根元「今回ばかりは卑怯な手を使わせてもらうぜ!!!大将である天川がいなければこつちのもんだ!!!」

根元の召喚獣が優子の召喚獣に攻撃を仕掛けたが避けられた。

優子「怖い者は無くさないと・・・」

ランスで根元を踏み倒した後メツタ刺して0点にした。

西村「戦死者は罰ゲーム!!!」

根元「ぐわああああ!!!止めるおおお!!!」

西村先生が現れ混汁とマスモデウス活け漬けの焼酎を混ぜたものを逃げようとする根元に無理矢理飲ませた。

根元「ぐぼぼぼぼぼぼぼぼぼ!!!?!?!?!?!?!?!?!?!」

皮膚の色が白く顔色が青くなり泡を吹いて倒れた。

優子「もう嫌あ……」

秀吉「姉上……ワシだつて嫌じゃ……あんな飲み物を飲みたくないものじゃ……」

ブラスター（大丈夫だ。マスターは戻つて来る）

はやて「私だつて嫌や……」

零斗達は何らかの作戦を立てていた。

零斗「多いな……面白い事を考えた……」

アリス「面白い事？」

零斗「試験召喚獣の使いから一時的だが……ギャラクシー娘へ変革させる……」

アリス「おお……！いいね」

零斗の考えに賛同していた。

零斗「霧島……ちよつとくすぐつたいぞ」

翔子「……？」

零斗「マイティ真拳奥義……！覚醒ギャラクシー娘……！」

零斗は白いオーラを纏つた手で翔子に触れると頭にリス耳、お尻からリスの尻尾が生え、体操着からブレイブルーに出てくるマコト＝ナナヤの服装に変化した。

翔子の両手に十字型のトンファーが装備された。

ネロ「うおいいいいいい……！！それ……明らかに声優ネタだよな……？」

今の翔子の格好を見てツッコんだ。

零斗「当たり前だぁーっ!!!しかも・・・性格も変わる!!!」
ネロ「それじゃキャラ崩壊しちゃうだろ!!!」

零斗「ギャーギャー喧しいぞ〜何処かの発情期か?コノヤロー」

翔子「霧島 翔子〜いっくよ〜」

十字型のトンファーを振るって西軍の連中をバツバツと殴り飛ばしていた。

愛子「霧島さんをキャラ崩壊させていいの?」

零斗「作者は以前に霧島を声優ネタ使ってたし」

翔子のキャラ崩壊が見逃した君は三十二話『死神と夜天の王のデパート』を見よう。

愛子「あはは・・・そうなんだ・・・」

零斗「そんじゃ・・・行くぞ〜」

零斗達は次の陣地を制圧する為に進み始めた。

グラウンドにて・・・

明久「統夜はここで討つんだ・・・今日ここで!!!」

統夜「何訳の分からん事を言ってるんだ?この馬鹿が!!!」

明久と統夜がデバイスを起動させて戦っていた。

アストラルカリバーとフォーチュンザンバーの打ち合いをしながらアストラルドラグーンとネオドラグーンをそれぞれ射出しオールレンジ攻撃対決をしていた。

だが統夜はエターナルフェザーからレーザーを右肩部分に直撃させ
怯ませた後右脚のプラズマゼットブレイドで装甲に傷をつけて吹き
飛ばした。

明久「くっ……」

アストラルライフルを封印魔法陣から取り出し精密狙撃で統夜を狙
い撃とうとしたが全て回避された。

ネオドラグーンを全て収納した統夜はフォーチュンウイングの左側
から銃身が上下に2つある長身ランチャー「フォーチュンランチャ
ー」を取り出し構えた。

統夜「EモードのEはいい感じのEだけ」

フォーチュンランチャーから魔力エネルギーを発射するEモードで
明久に向けて発射した。

明久「なら……こっちも!!」

アストラルライフルを封印魔法陣の中へ収納し、別の封印魔法陣か
ら銃身が上下に二つあり長身ライフル「アストラルオクスタン」を
取り出した。

その後魔力エネルギーを発射するEモードでフォーチュンランチャ
ーのEモードのエネルギーを相殺し爆発音が聞こえたと同時に互
いフォーチュンランチャーとアストラルオクスタンの撃ち合いが始
まった。

明久のアストラルフリーダムは統夜が持つフォーチュンエターナル
と遊輔が持つクリムゾンフレイムの基本データを元になっている為一
部の武装が似ている。

統夜「そんなんで俺には勝てないぜ!!」

明久「それでも・・・僕は姫路さんの仇を討つ!!」

統夜「いや・・・死んでねーし・・・」

明久「統夜が勝たなければこうはならなかったんだ!!」

統夜「うるせえ!! あんな飲み物飲んだら俺ら死ぬわ!？」

フォーチュンランチャーとアストラルオクスタンの撃ち合いは引き分けになり明久は背部には魔力スラストを搭載したバックパック装備「アストラルユニット」の左右に主翼ウイングを砲身側面に設け、1門ずつ接続された高出力魔力ビーム砲「アムフォルタス」を両脇に抱える形で発射した。

アムフォルタスを銃身先端が変形し最大出力のXモードのフォーチュンランチャーで相殺した。

その後明久はアストラルサーベル、統夜はエターナルサーベルの鏢競り合いが始まった。

二人の戦いでグラウンドには幾つものクレーターが出来たのは言うまでも無かった。

明久「ぐく・・・」

統夜「おらよつと!!」

統夜が勝ちエターナルサーベルを収めた後フォーチュンウイングの右側から蒼い刀身にエネルギー発生装置がある片刃の特殊大剣「フォーチュンザンバー」を取り出し右手に持って明久に斬り掛った。だが明久は右腕に装着されてあるアクチュエータ式の大きな鋏「スタッグビートルクラッシャー」で挟んだ。

明久「弾けるお!!」

スタッグビートルクラッシャーに搭載された輻射波動機構を起動さ

せてフォーチュンザンバーを爆砕し統夜にダメージを与える事が出来た。

統夜「そう簡単には行かないか・・・一気に勝負を決めるか・・・」
明久「僕もそう思った所だよ!!」

統夜「フォーチュンオーシャンシステム・・・」

明久「ジャッジオーシャンシステム・・・」

統夜、明久「起動!!」

二人はそれぞれに搭載されているオーシャンシステムを同時に起動させた。

統夜のフォーチュンエンターナルの色が赤と金が混ざったの白いアーマーから蒼く輝いた蒼いアーマーに変化し、明久のアストラルフリーダムの色がオレンジと真紅が混ざったアーマーからオレンジに輝いたオレンジ色のアーマーに変化した。

二人は超高速で戦うハイスピードバトルを繰り広げた。

統夜「イヤツホオオオ!!」

明久「ハアアアア!!」

超高速で移動しながら統夜はエンターナルサーベルの二刀流、明久はアストラルサーベルの二刀流で打ち合っていた。

統夜「行け!ネオドラグーン!」

明久「行け!アストラルドラグーン!」

ネオドラグーンとアストラルドラグーンのオールレンジ対決を始めたが数なのかアストラルドラグーンが全て撃ち落とされた。

明久「チツ・・・」

統夜「まだまだだぜ！！」

エターナルサーベルでの超高速斬りを決め前へ押し間合いを取った。その後、明久から間合いを取り、周囲にネオドラグーン、両手にエターナルシューター、エターナルフェザー、両腰にあるスーパークラスファイアス、胸部にあるプリズムカリドゥスのうちスーパークリドゥスの一斉発射を明久に放ち直撃させた。

明久「負けた・・・ね・・・」

明久はそれだけ言うと地面に落ちアストラルフリーダムは待機状態に戻った。

統夜「悪いな・・・明久・・・」

オーシャンシステムをオフにした後マシンスルで修復されたフォーチュンザンバーをフォーチュンウイングの右側に収納した。

統夜「さて・・・このまま制圧に入るか」

統夜は西軍が制圧している陣地を奪取し東軍の陣地にする為に動いた。

第四十二話 『激闘文月バーベナ学園（中編）』（後書き）

今回のHERO'S EPISODEは

エリー「ニガサナイヨ・・・ダイチクン」

ダイチ「怖いよおおお！！！！！！」

麻弓の策略でヤンデレ化したエリーから逃げているダイチ

零斗「でりゃあああ！！！！！！」

達哉「うおおおお！！！！！！」

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！私の未来の為に負けてくれへんか？」

なのは「絶対嫌だ！」

フェイト「あんなドリンクを飲んで堪りますか！！！！」

零斗とはやては達哉となのは、フェイトのチームと戦い・・・

翔子「どっかーん！雄二ー！いっくよー」

雄二「翔子！？」

幼馴染の変貌に驚きを隠せない雄二・・・

統夜「俺とお前・・・戦う運命にあるようだな・・・」

遊輔「ああ・・・」

再び蒼紅一騎打ちが学園で行われる。

はやて「次回は『激闘文月バーベナ学園（後編）』 テイクオフや」

第四十三話 『激闘文月バーベナ学園（後編）』（前書き）

いよいよ決着の時が来る・・・果たして東軍か・・・西軍・・・ど
ちらが勝つのか・・・

フェイト「HERO'S EPISODE第四十三話始まります」

第四十三話 『激闘文月バーベナ学園（後編）』

第四十三話 『激闘文月バーベナ学園（後編）』

統夜と明久の勝負が決まった頃・・・

ダイチ「チクシヨオオオオ！！！！！」

自分に迫り来る西軍の連中をバツバツと薙ぎ倒しながら何かから逃げるように走っていた。

エリー「ニガサナイヨ・・・ダイチクン」

ダイチはヤンデレと化したエリーから逃げていた。

ダイチ「怖いよおおお！！！！！」

エリー「フッフ・・・」

エリーは自分に迫り来る西軍の連中達を蹴散らしながら追いかけていた。

利光「君は・・・」

ダイチ「どけえええ！！！」

利光はダイチに声を掛けた瞬間エリーのオーラに当てられ気絶した。直ぐ出て来て退場してしまうとは・・・哀れ・・・

統夜「雑魚はすっ込んでろ！！！」

常村「くそっ！」

夏川「馬鹿な！？」

統夜はソフトモヒカンの常村と坊主頭の夏川の常夏コンビを物理で勝負を挑み勝利していた。

因みに統夜に不得意な科目は存在しない。

西村「戦死者は罰ゲーム！」

常村「ぐわああああ！！！」

夏川「ぎゃああああ！！！」

混汁とマスモデウス活け漬けの焼酎を混ぜたものを無理矢理飲まされ根本と同じように皮膚の色が白く顔色が青くなり泡を吹いて倒れた。

華琳「随分と面白い事をしているわね・・・」

突然華琳が統夜の前に現れた。

統夜「華琳・・・何しに来たんだよ？」

華琳「ちよつとした助言よ・・・速く制圧しなさい。今の人達はただ前の敵だけに集中している筈・・・そこを突くのよ」

華琳の助言で統夜はふと気が付き笑みを浮かべ・・・

統夜「（はやてにプリムラ、カナ・・・お前達は今すぐ西軍の陣地を制圧しに行け・・・俺は達哉や遊輔達・・・主なメンバーと戦う・・・その隙に制圧してくれ。俺は姫路と明久を倒した）」
はやて、プリムラ、カナ「（了解）」

はやてとプリムラ、カナに念話で指示を出した。

華琳「さあ・・・行くわよ」

統夜「ああ」

統夜と華琳はすぐさま行動を起こした。

はやて「行こうか」

プリムラ「うん」

統夜から念話で指示された事と瑞希と明久に勝った事を鮮華達に教えていた。

カナ「でも・・・ここからバラバラになって行った方がいいよ」

優子「そうね・・・どうするの?」

はやて「ブラスター・・・文乃ちゃんと千世ちゃん、希ちゃんにつかせて・・・リムちゃんは優子ちゃん、秀吉ちゃん、カナちゃんはエステルさん、鮮華ちゃんであえかな?」

文乃「構わないわ。はやてはどうするの?」

はやて「違う場所へ移動するわ。ほな・・・お互い頑張ろうな」

一同「はい(ええ)」

はやて達は三手に分かれて西軍の陣地を制圧する為に行動し、はやて自身は達哉がいる所へ向かった。

その頃ミルキイホームズ達と分かれ単独で行動してた零斗は・・・

零斗「でりゃあああ!!!!」

達哉「うおおおお!!!!」

単独で行動していた達哉と戦っていた。

零斗は拳、達哉はブレイブカリバーで打ち合っていた。

達哉「手強い相手を潰すに限るな！」

零斗「それはこっちの台詞だ！」

互いの目的は同じであった。

零斗「瑠璃の軍神だろうが・・・俺のマイティ真拳には勝てない！」

零斗は構え白いオーラを纏い始めた。

達哉「そう簡単にはやらせないぜ！」

ブレイブカリバーを居合の構えにして零斗に向けて駆け抜けた。

零斗「マイティ真拳奥義！マイティレポート！」

達哉の攻撃をレポートで避け回し蹴りを放ったが、達哉はブレイブカリバーで防ぎ右脚のプラズマゼットブレイドで零斗を切り裂いた。

その後拳と剣の打ち合いが始まった。

はやて「やっぱり戦っていたなあ・・・」

はやてがやって来た。

なのは「一人で来たんだね・・・はやてちゃん」

フェイト「三手に分かれて制圧・・・上手く行くと思う？」

はやて「上手く行くと信じてる……」

はやての前に遊輔と分かれたなのはとフェイトの二人が現れた。

はやて「一つだけ言わせてくれへんか？」

なのは「何？」

はやて「なのはちゃん！フェイトちゃん！私の未来の為に負けてくれへんか？」

なのは「絶対嫌だ！」

フェイト「あんなドリンクを飲んで堪りますかー！！」

即座にデバイスによる魔法大戦が始まった。

なのは「アクセルシューター！」

フェイト「プラズマランザー！」

なのはは桜色のスフィア、フェイトは金色の小さな槍ではやてに攻撃を仕掛けた。

はやて「ブラッディダガー！」

二人の攻撃を相殺した後シュベルトクロイツで横薙ぎしながら魔力で強化した連続蹴りを放った。

なのは「くっ……」

フェイト「前より強いのは分かってたけど……」

二人は防壁を張ったが衝撃が来た分のダメージは防げなかった。

はやて「まだまだいくでー！」

なのは「こつちも負けなよ！」

戦いを続行していた。

雄二「何じゃこりゃ!？」

雄二達は倒れている数に仰天していた。
すると翔子と愛子、シャロ、ネロ、コーデリアと出くわした。

翔子「どつかーん!雄二!いつくよ」

雄二「翔子!？」

幼馴染の変貌に驚きを隠せない雄二だった。

美波「どうなってるの?!」

康太「……異常だ」

愛子「色々と事情があるって事……それより……吉井君はいないみたいだね」

雄二「ああ……あの馬鹿は統夜と戦っている最中だ」

優子「吉井君なら負けたわよ。統夜に……」

後から優子とプリムラ、秀吉がやって来た。

その事を聞いた雄二と美波、康太は驚愕してしまい声が出なかった。

翔子「それじゃ〜試験召喚戦争を始めるよ〜と言いたいけど……
邪魔な人達はご退場だよ〜」

ドドドとやって来る西軍のメンバーを見据えパンチをする姿勢を長くし力を溜めていた。

雄二「な、何をやる気なんだ!？」

翔子「ビッグバンスマッシュ!!!」

西軍メンバー「ぎゃああああ!!!」

オーラ状の巨大な腕を具現化させてパンチを繰り出し一気に西軍の人達を吹き飛ばし気絶させた。

翔子「雄二、次は雄二の番だよ」

雄二「俺は逃げる!!!」

雄二は今の翔子から逃走した。

雄二からして見れば恐怖以外何物でもないから・・・

翔子「逃がさないよ」

雄二を追いかけた。

愛子「性格変わっても思いだけは変わらないね、ムッツリー二君・君の得意な保健体育で勝負を申し込もうか？」

康太「・・・望む所・・・」

保健体育の先生がいた為試験召喚フィールドが発生した。

愛子「試験召喚獣・・・サモン召喚!」

康太「・・・サモン召喚!」

愛子の召喚獣はセーラー服姿で大きな斧を装備した愛子のデフォルメ版、康太の召喚獣は小太刀二刀流を装備し忍者装束姿をした康太のデフォルメ版がそれぞれ召喚された。

愛子「今度は負けないからね。ムツツリー二君！」
康太「……………」

工藤 愛子 保健体育 502点

VS

土屋 康太 保健体育 580点

愛子「努力したんだけどな……でも！」

康太「……………加速」

愛子「させないよ！」

康太の加速攻撃を紙一重で見切って大斧で小太刀二刀流の攻撃を防いだ。

康太「!?……………やる」

愛子「試験召喚獣の強さは点数だけじゃない事を今教えてあげる」

大斧と小太刀二刀流の激しい打ち合いが始まった。

優子「戦い方を変えたわね」

秀吉「土屋との戦いで負けたからの……そうせんと……姉上……」

優子「それ以上言わないで……」

優子は青ざめた顔をしてこれ以上言うのを止めさせた。

康太「……………くっ……………やる！」

愛子「そりゃね……………努力は怠っていないよ！！」

打ち合いは愛子が有利になった瞬間一撃で決めようと大斧で康太に目掛けて振りかざした。

その時康太は瞬速の動きで回避し……………

康太「……………加速」

康太がそう呟いた後ブレて、愛子の召喚獣が静かに倒れた。

愛子「でも……………悪くない負け方だったよ……………」

西村「戦死者は罰ゲーム！！」

愛子「混汁でお願いします……………」

混汁を選び飲んだ。

愛子「優子に秀吉ちゃん……………後は……………頼んだよ……………」

そう言つて静かに倒れた。

優子「愛子おーっ！！！！」

涙を流して愛子の名前を叫んだ。

愛子さんは気絶してるだけだから……………

優子「よくも……………絶対殺つてやる！！」

秀吉「姉上！ここはワシに任せるのじゃ！」

優子「秀吉！？何か策があるの？」

秀吉「ムツッリーニ対策がある。譲れないものはこちらにもあるの

じゃ！某ガンダムマイスター曰く『ナドレの時とは違い・・・自らの意思で・・・その姿を晒そう！』じゃ！」

秀吉は体操服の上着を脱ぎ瑞希や咲夜並のメロンが詰まっているライトグリーンのビキニブラ姿を晒した。

それを見た康太は・・・

康太「・・・・・・・・我が生涯に・・・・・・・・一片の・・・・・・・・悔いなし・・・・・・・・」

鼻血を大量に出して倒れた。

秀吉「工藤よ・・・安らかに見守ってくれ・・・」

美波「私一人になった・・・でも・・・木下あ！！アンタは私が討つんだ・・・今日ここで！！西村先生！試験召喚戦争を行います！教科は数学でお願いします」

まだいた西村先生が承認し試験召喚フィールドを展開し始めた。

美波「試験召喚獣・・・・・・・・召喚サモン！」

美波がデフォルメした姿に軍服を着てサーベルを装備した召喚獣を召喚した。

秀吉「試験召喚獣・・・・・・・・召喚サモン！」

秀吉がデフォルメした姿に袴を着て薙刀を装備した召喚獣を召喚した。

島田 美波 数学 256点

V S

木下 秀吉 数学 200点

美波「嘘っ!? だけど・・・討つんだ!! ここで!!」

秀吉「ワシも頑張ったからの・・・島田よ・・・お主・・・怖いのが・・・」

優子「助太刀するわ! 召喚!^{サモン}」

優子も召喚し秀吉に助太刀した。

島田 美波 数学 256点

V S

木下 秀吉 数学 200点

&

木下 優子 数学 324点

美波「木下 秀吉だけは討つ!!」

サーベルをぶん回して突撃し始めた。

秀吉「させるか!」

突撃を回避し薙刀を振るった。

優子「二対一って言うのは卑怯だって言いたいけど・・・倒すしか方法は無いのよ!」

ランスを手にし突きを放った。

美波「何の!」

秀吉の胸に対する嫉妬のお蔭なのか二人の攻撃を回避し秀吉の懐へ移動した。

美波「巨乳なんて・・・滅べばいいのよおおー!!!」

サーベルの連続刺しで秀吉の召喚獣の点数を0にした。

美波「やった・・・うちは遂に・・・やり遂げたああー!!!」

優子「何が・・・遂に・・・やり遂げた・・・よ!!!周りを見ない島田さん・・・貴方の負けよ」

ランスの一突きで油断した美波の召喚獣を倒した。

西村「戦死者は罰ゲーム!!」

秀吉「姉上・・・ワシは逝く・・・今までありがとうなのじゃ」

秀吉は混汁を選び飲み干した後優子にそう言って静かに目を閉じた。

優子「秀吉いいい!!!!いやああああ!!!!」

美波「先生・・・うちも混汁を・・・」

西村「残念だが混汁は無理だ・・・マスモデウス活け漬けの焼酎しか飲めない」

美波はそれを聞いて顔を青ざめ絶望した表情になってしまった。

美波「そ、そんな・・・飲みたくないけど・・・いただきます!!」

勇気を持ってマスモデウス活け漬けの焼酎を一気飲みした。

美波「ごばあ！（これ・・・瑞希の料理並に危険度があるわ・・・それに・・・この戦いで得たものがあつた・・・それは周りを見て戦う事・・・私情だけで戦ったら酷い目にあっちゃつた・・・お父さん・・・お母さん・・・葉月・・・先逝くうちをお許してください」

美波は泡を吹いて倒れてしまった。

プリムラ「次へ行こう！」

優子「うん！」

秀吉と愛子を背負い次の陣地へ移動した。

ダイチ&雄二サイド

ダイチ「わあああああ!!!殺されるうううう!!!」

雄二「お前もか!？」

雄二はダイチと会いエリーと翔子の魔の手から逃げていた。

エリー「ニガサナイ・・・」

翔子「逃がさないよ」

ダイチ「怖いものを感じる!」

雄二「翔子が二人いるみたいだな!？おい!？」

二人の逃走劇はまだ続いていた。

文乃「やっと終わったわね・・・」

千世「何とか・・・陣地が取れた」

希「にやあ・・・ブラスターのお陰・・・」

ブラスター（気にする事は無い。マスターから君達を守る事を遂行したまでだ）

文乃達は陣地を何とか制圧していた。

ネリネ「ドライバー自体に魔法が使えた事に油断してしまいました・

・・・」

シア「残念つす・・・」

楓「そうですね・・・」

亜沙「汚いにも程があるでしょう!？」

カナと鮮華、エステルサイド

カナ「行けえ〜!」

魔力砲撃で陣地の主である人物を倒して制圧していた。

エステル「やりましたね」

鮮華「そうですね」

カナ「エステルさんの作戦のお陰だよ」

フィーナ「はあ・・・はあ・・・強過ぎるわ・・・」

エステル「申し訳ありません・・・私もあのようなドリンクは飲みたくないですから」

菜月「わぁ・・・物凄くいい笑顔」

麻衣「魔王ならぬ魔妃だね・・・」

翠「朝霧君・・・大丈夫かな・・・」

エステル「さて・・・カナさん・・・ここは任せました」

カナ「何処へ行くの？」

エステル「決まっています・・・統夜の所へ・・・」

それだけを言っただけでエステルはグラウンドへ走り去った。

統夜サイド

統夜「一気に行くぜ！ブルーバレッターゼフレア！！」

指定した空間に蒼炎の爆弾を設置した後西軍のメンバーがやって来た瞬間爆発させ蒼い爆炎で蹴散らしていた。

統夜「そんなんでこの俺と渡り合おうなんて1000年早いぜ！」

華琳「本当に怖い事するわね・・・」

二人は次へ歩こうとした瞬間炎の斬撃がやって来た。

統夜「つと・・・やっぱ遊輔か・・・」

炎の斬撃を避けペンドラゴブレイドを右手に持った遊輔がいた。

遊輔「お前を倒すにはそれなりの相手がいる・・・」

統夜「そりゃご尤もな意見だ・・・明久じゃ俺には勝てなかった・・・
華琳・・・」

華琳「分かっているわ・・・」

統夜はフォーチュンエンターナルを解除しサーディオンを起動させ華琳とユニゾンした。

統夜「俺とお前・・・戦う運命にあるようだな・・・」
遊輔「ああ・・・」

統夜と遊輔のガーディアンがぶつかり始めた。

統夜「腕が上がったな!!」
遊輔「そっちもな!!」

大剣と太刀の剣劇が始まり校舎が地響きが起き始めた。

統夜「やっぱお前じゃなきゃ面白くないぜ!!」
遊輔「俺も感謝している・・・またお前と戦える事に!!」

二人はグラウンドへ出て戦いの場を移した。

統夜は蒼い炎の魔力弾を出し牽制したが遊輔の紅蓮の炎の魔力弾で相殺された。

統夜「最高のPartyにしようぜえ!!」

遊輔「ああ!!」
統夜「蒼牙天衝!!」

蒼炎を灯した月牙天衝を放った。

遊輔「紅蓮天衝!!」

紅蓮の炎を灯した月牙天衝で相殺した。

その後お互い斬撃をぶつけ合い剣劇を繰り広げた。

統夜「攻撃性能だけはそつちが上か・・・パワータイプのペンドラゴブレイド・・・だがまだまだだな」

刀身に五気を収束し始めた。

遊輔「それはどうかな？ヒートギャザーシステム起動！」

ペンドラゴブレイドに周囲の熱や露散した魔力を吸収し刀身が燃え上がった。

遊輔「我が紅蓮の炎よ・・・全てを切り開く牙となれ！！」

魔力と気力を刀身に収束し始めた。

統夜「覇牙天衝・・・」

遊輔「焰牙天衝・・・」

統夜、遊輔「斬！！」

二人の斬撃で大きな衝撃波が生まれた。

衝撃波が起きている最中に放送が入った。

藤堂「あゝ・・・東軍が全て制圧したから・・・よって東軍の勝ちだよ。罰ゲームは西軍に決定」

西軍一同「そんなあゝゝゝ！！！！」

それだけ言っただけで放送を切った。

統夜「ぐ・・・互角か・・・」

引き分けになっても統夜と遊輔は斬り合っていた。

遊輔「お前は五気・・・俺は魔力と気力、炎だからな・・・」

統夜「九頭龍閃！」

遊輔「烈火斬！！」

統夜は唐竹、袈裟斬り、右薙ぎ、右斬上げ、逆風、左斬上げ、左薙ぎ、逆袈裟、刺突の9方向へ同時に斬撃を仕掛け、遊輔は太刀の瞬速連続斬りで相殺した。

遊輔「冷や冷やする・・・」

統夜「こっちも負ける訳にはいかないんでな・・・」

統夜はサーティオンを、遊輔はペンドラゴブレイドを強く握り締め駆け抜け勝負を決めようとしたその時・・・

エステル「天罰！！」

統夜、遊輔「ぐはあ！！」

いつの間にか駆けつけたエステルが統夜と遊輔の頭に分厚い本で殴り気絶させた。

エステル「もう勝負は終わりましたから行きますよ！」

気絶した統夜を引き摺ってこの場を後にした。

達哉「俺達の負けか・・・」

零斗「そうだな・・・」

はやて「やっと終わった・・・」

なのは「ドリンクは嫌ああ！！！！」

フェイト「絶望よ……」

戦っていた達哉達はボロボロになり床で横になっていた。

アリス「勝った……」

シャロ「私達の勝ちです！」

エリー「やりましたね」

ネロ「やったね！」

コーデリア「そうね」

優子「ぐすつ……私達……勝てて良かった……」

プリムラ「泣かないで……優子お姉ちゃん……」

ダイチ「……」

後から合流したアリスとミルキイホームズは喜び、ぶわつと涙を流し嬉し泣きしている優子をあやしているプリムラがいた。

結局エリーに捕まったダイチはエリーにボロボロにされゲツソリとやつれてしまっていた。そのせいかエリーの肌がツヤツヤになっているのは言うまでも無かった。

シア「絶望つすね……」

ネリネ「そうですね……」

楓「罰ゲームが……」

亜沙「僕達……終わったね……」

カレハ「残念ですわ……」

フィーナ「言い訳はしないわ……」

菜月「うん……」

麻衣「素直に負けを認めよう……」

翠「残念……」

土見ラバーズと朝霧ラバーズは悔しがり……

文乃「やったわ！」

千世「ようやく終わったわね！」

希「嬉しい……」

カナ「金一封とプレミアムチケットは私達のもの！！」

文乃と千世、希、カナ、鮮華は喜びを分かち合っていた。

雄二「俺達は負けた……」

翔子「私達の勝ち……これでいける……」

雄二「嫌あああ！！！」

元に戻った翔子は雄二とデートに行ける事を嬉しがっていた。

雄二は絶望した表情になっていた。

数分後生徒達は集められ閉会式が行われた。

藤堂「よく頑張ったね……東軍の総大将である天川 統夜は前に出てきておくれ」

統夜は前に立ち賞状とトロフィー、賞金、プレミアムチケットが渡された。

藤堂「さて……敗者にとっては地獄のシャマルドリンクを飲んでもらおうよ」

それを聞いた西軍の生徒達は顔を青ざめた。

巨大な入れものの中に不気味でドス黒く巨大な毛がもじやもじやと生えていて悪魔のような爪が生えている以下にも殺戮的な蜘蛛が入った飲み物があった。

藤堂「さて・・・これらはシャマルというまず・・・素晴らしいドリンク作りが愛情を込めて作ったもんだから・・・残すんじゃないよ？（下手したらアタシでも死ぬ事になるからね・・・）」

西軍の生徒達にシャマルドリンクが手渡されていた。

但し・・・一部ペットボトルの人達がいる。

シャマルドリンクが入ったペットボトルを手渡されたのは明久と雄二、根本、美春、常村、夏川、樹の計7人である。

統夜は飲むのを止めて逃げようとする根本と美春、夏川を重力バインドで捕えシャマルドリンクを無理矢理飲ませ、零斗は明久と雄二に無理矢理飲ませ、ダイチは常村と樹に無理矢理飲ませた。

西軍生徒一同「どいあぶあふでいあぶあ—————！！！」

爆発的な不味さに誰もが意味不明な絶叫を上げて倒れて気絶した。

統夜「よっし！スッキリしたぜ〜！！」

零斗「そうだな」

ダイチ「楽しかったな」

三人は爽快に笑い合いバーベナ無双大戦は見事終了した。

はやて「二枚しか無いな・・・プレミアムチケット・・・」

優子「どうするの？」

はやて「霧島さんに渡すで・・・何故か楽しくなりそうだし」

優子「はやてが自ら手放すなんて・・・珍しい」

はやて「だって・・・霧島さんは坂本君と一緒にの方がええと思うてな・・・」

優子「なるほど・・・」

はやてと優子の話し合いの結果翔子にプレミアムチケットを渡した。因みにその後で賞金は東軍で山分けして解散した。

統夜「楽しかったな」

はやて「そうやね」

文乃「疲れたけどね・・・」

千世「ねえ・・・何処かで食べに行かない？」

希「にやあ・・・それはいい考え・・・」

プリムラ「何処がいいかな・・・」

カナ「統夜の家で高級寿司とか頼んで飲み食いするっていろいろのほどう？」

エステル「それはいい考えですね」

優子「今日はパーッと騒ぎましょう」

秀吉「戦いに勝ち抜いた褒美としては悪くないのう・・・」

華琳「おもちちりよいわね・・・私もしゃんかさしえなしゃい」

統夜「俺ん家か・・・いいんじゃないか」

統夜と統夜ラバーズは天川家へ行った後高級寿司等を注文しシャンパンなどを飲み宴を始めた。

因みに咲夜と初めて出会う千世と希、エステルは統夜に尋問をしていた。

その後鮮華が帰って来てヴォルケンリッター達と一緒に宴に参加した。

深夜まで続いたのか統夜と統夜ラバーズはリビングでぐっすり眠っていたのは言うまでも無かった。

幸い明日と明後日は休日である。

第四十三話 『激闘文月バーベナ学園（後編）』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

秀吉「やっと終わったのお・・・遂に・・・」

秀吉「高町が何やら桜木に対して何故か顔を赤くしていたのお・・・
これは恋か？」

秀吉「次回は『なのはの恋の成就大作戦の始まり』 テイクオフじゃ」

デバイス設定6（前書き）

明久のアストラルフリーダムと千秋のパーシヴァル、遊輔のガーデ
イアンであるペンドラゴブレイドの詳細です。どうぞ！

デバイス設定6

デバイス：アストラルフリーダム（ネオドライバーデバイス）

形状：オレンジと真紅が混ざった高機動戦闘機

待機状態：真紅の宝石が埋まったオレンジ色の十字架

搭載システム：OIES、DCS、ドルイドシステム、プリズムエフェクトシステム、FLS、MBS、MFS、マナペンタクルシステム、ウエポンサモンシステム、ジャツジオーシャンシステム搭載備考：フォーチュンエターナルとクリムゾンフレイムの基本データを基に開発された明久専用ネオドライバーデバイス。

装甲とフレームにはルナチタニウムとマシンセルが使われており自己修復機能がある。

ドライバーコネクト時の武装は頭部にバイザー搭載型ヘッドギア「フリーダムヘッド」

背部には魔力スラスターを搭載したバックパック装備「アストラルユニット」

アストラルユニットの左右に主翼ウイングを砲身側面に設け、1門ずつ接続された高出力魔力ビーム砲「アムフォルタス」

ちなみに使用する場合は両脇に抱える形で使用する。

アムフォルタスの砲身と同軸上に設置された連射性に優れた魔力ビーム砲「フォルティス」

胸部に高出力魔力ビーム砲「拡散構造相転移砲」

左腕には対魔力コーティングを施し、2門の小型魔力ビーム砲とブレイズルミナス発生装置を内蔵したシールド「アストラルシールド」
右腕にはアクチュエータ式の大きな鋏で切断特化されブレイズルミナス発生装置や放射波動機構が備わった「スタッグビートルクラッシュャー」

両腿に収納されたエネルギー状の刀身を形成することが可能なグリップ「アストラルサーベル」

両腰と腰裏には砲台が上下に二つあり二基ずつ計六つある強化型フライヤー「アストララルドラグーン」
両脚には「プラズマゼットブレイド」

封印魔法陣に収納されている武装は精密狙撃、低出力連射、高出力威力、多目的実弾の切替が可能な多目的大型ライフル「アストラルライフル」

銃身が上下に二つあり実弾を発射するBモードと魔力エネルギーを発射するEモードの二つの切り替えが可能な長身ライフル「アストラルオクスタン」

鞘付の刀身が緑色で柄が赤いバスタードソード「アストラルカリバー」

「ジャツジオーシャンシステム」とはアブソリュートエターナルのオーシャンシステムを基にしており色はオレンジと真紅が混ざった高機動戦闘機がオレンジに輝いたオレンジ色の高機動戦闘機に変化し攻撃力と機動性、出力が高くなる。
管制人格は女性で明久に忠実な性格

デバイス：パーシヴァル（ナイトアーマードデバイス）

形状：黒と桃色が混じったアーマー

待機状態：黒い宝石が入ったピンク色の十字架のネックレス

搭載システム：TIES、ストライクブレイクシステム、エンペラ
ーシステム搭載

備考：千秋の改造案を基にセントクルセイダースがカラドボルグを改造したナイトアーマードデバイス。ナノマシンを入れている為
自己修復機能を持ち突破力が驚異的になっている。

武装は背中に装備されている刀身にエネルギーフィールドを発生させる事ができる巨大剣「ホーリーカリバー」、右腕部分に巨大な四本のクローをエネルギー防御装置であるブレイズルミナスで形成されたドリルで攻撃する「ブレイズドリル」

両腿部分から強力なエネルギー弾丸を放つ「ハドロシユーター」、

左腕には輻射波動が使用可能になる徹甲砲撃左腕が付いており照射したり波動砲としても使える。

「ストライクブレイクシステム」は強固な結界、防御魔法を突破するシステムで破壊も可能。

「エンペラーシステム」を搭載しており未来予測の為に付けられており千秋用にセッティングされている。

管制人格はカラドボルグのものを使っている。

デバイス：ペンドラゴブレイド（ガーディアンデバイス）

形状：真紅の唾の部分が竜の頭で口から刀身を出しているかのような
紅い紅く輝いている太刀

待機状態：真紅の剣十字架のネックレス

搭載システム：M I E S、ヒートギャザーシステム搭載。フォーム
変化無し

備考：中国の遺跡から発掘されたガーディアンデバイス。

サーデイオンと同時期に開発され竜の牙で作られている為、最大の
攻撃力を誇り炎の使い手にしか扱えないようになってる。

性能はサーデイオンやセイクリッドファンクと同等の性能を誇る。

魔力によって空間転移と呼ばれるテレポートのような移動系特殊魔
法を可能にさせる軽々と出来るが無闇に使用する事は出来ない。

「ヒートギャザーシステム」とは周囲の熱や露散した魔力等のを吸
収し己の炎の力に変換し攻撃力を増加させるシステム。

管制人格は女性で真面目な性格。

デバイス設定6（後書き）

ペンドラゴブレイドは黒神さんから許可を貰いそれらを元にガーデ
イアン化しました。

以後応援よろしくお願いします。

第四十四話 『なのはの恋の成就大作戦の始まり』 (前書き)

西村「ソロモンよ!!! 私は帰って来た!!!」

高橋「夢と現実を月で・・・繋げば・・・夢と現実・・・ムーンサルト・・・アタック!!!」

明久「ラアアーーーーー!!!!!!」

利光「無限拳ーーーーっ!!!」

雄二「俺はやらないぞ・・・」

瑞希「HERO'S EPISODE 第四十四話 始まります」

第四十四話 『なのはの恋の成就大作戦の始まり』

第四十四話 『なのはの恋の成就大作戦の始まり』

六年前

なのは「……………」

管理局に入っていた頃のなのははある事件で重傷を負い病院で入院していた。

常人離れた内容のハードトレーニングや頻繁な実戦への参加などの無茶を続け、当時の技術力ではカートリッジシステムは不安定な物であり、体への負荷を無視して自身の限界値を無理やり引き出すエクセリオンモードの使用などがそれに拍車をかけた事もあった。そのせいか今まで溜めてきた無茶と負担のツケがまわり、任務中の僅かな反応の遅れから瀕死の重傷を負ってしまったのだ。

事件当時

なのは「う…………ぐ…………」

瀕死の重傷を負い倒れてしまっていた。

蜘蛛を連想させる機械兵器らしきものがなのはに止めを刺そうとした瞬間…………

？「オウラアアア！！！」

炎を纏った斬撃が機械兵器を破壊し燃やし尽くされたのだ。

？「これは・・・重傷だ・・・誰かいないのか？」

赤い服を着た少年はなのはを見て周りを見回した瞬間

ヴィータ「でりやああああ！！！」

突然怒りの形相をしたヴィータが赤い少年にグラーフアイゼンで襲い掛かった。

？「何をする！？それに・・・彼女を酷い目に遭わせたのは俺じゃない！」

ヴィータ「うるせえ！！なのはをこんな目に遭わせやがって！！！」
？「今はそれ所じゃないだろ！！なのはって娘の手当てが先だろ！！！」

二槍でグラーフアイゼンを防ぎながらヴィータに言い聞かせた。

ヴィータ「わ、分かったよ・・・だがテメエの事は信用した訳じゃねえからな・・・」

やや落ち着いたヴィータと赤い少年はなのはを急いで病院へ運んだ。

入院先の病院

なのは「私・・・空を飛ぶ事・・・歩く事も出来ないのかな・・・」

医者から空を飛ぶ事と歩く事は不可能になると言われベッドで涙を流していた。

すると・・・

赤い少年「お邪魔します」

なのはを助けた赤い少年が病室へ入って来た。

なのは「君……は……」

? 「名乗る程も者じゃないよ」

なのは「あの時……助けてくれてありがとう……」

? 「偶然だよ。君は何故泣いてたんだい？」

なのは「実は……空を飛ぶ事と歩く事も出来ないって言われて……」

なのはは赤い少年に全て話した。

? 「君はまだ何もしていない……諦めない心と気合を持ってリハビリすればきつと良くなる!」

なのは「本当?」

? 「ああ……時間がある時に君のリハビリに付き合ってあげるから」

なのは「本当?」

? 「勿論」

なのはと赤い少年の二人だけの約束をした。

その後半年間過酷なりハビリを赤い少年の付き合いのお陰で何とか乗り越えて回復した。

退院前

? 「やったね」

なのは「ありがとう。君のお陰だよ。一つ……いいかな?」

? 「いいよ。ここまで頑張った君の頼みならいいよ」

なのは「君の本当の名前が知りたい・・・君だけじゃ・・・いけないと思うから・・・」

なのはの真剣な願いに・・・

遊輔「分かったよ・・・俺の本当の名前は・・・桜木 遊輔・・・俺も君のお陰で『世界中の人々を笑顔にする』という志を本当に実現出来る可能性をくれて・・・」

なのは「遊輔君か・・・その・・・『世界中の人々を笑顔にする』事・・・頑張つてね」

なのはは満面の笑顔で答え・・・

遊輔「いい笑顔だね。また会えるといいね」

それだけ言つて遊輔は何処かへ去つた。

なのは「ありがとう・・・遊輔君・・・」

現代

なのは「(やつと完全に思い出した・・・でも遊輔君・・・覚えてるかな・・・容姿も変わってたし・・・)」

教室の机で遊輔の事を考えていると・・・

はやて「なぐのはちゃん」

なのは「ひゃあ!？」

はやてが背後からなのは胸にタッチしたのは可愛い声を上げた。その後一緒にいたフェイトが引き剥がした。

はやて「むむ・・・恋に悩んでたやる？」

なのは「えっ！？そ、そそそんな事は・・・／＼／」

モジモジと赤く染め教室にいる統夜や明久と話している遊輔を見ていた。

遊輔を見たのはを見逃さなかったはやては目を光らせた。

はやて「遊輔君やる？うんうん・・・統夜には及ばへんけどいい線はいつてる・・・ただの一目惚れやないやる？」

フェイト「本当？なのは！」

なのは「う、うん・・・」

なのはは六年前の事件と遊輔がりハビリに付き合ってくれた事を全て話した。

はやて「なるほど・・・私らがおらん時にか・・・そういや・・・ヴィータが「赤い奴には感謝するが信用してないからな」とか言ってたのを思い出したわ・・・」

フェイト「でも・・・私達と出会ったのなら何か反応がある筈だよな？」

はやて「時が流れると容姿も変わり始めるからな・・・直ぐに思い出すのは難しい話やる・・・ほら・・・稟君とシアちゃん、ネリネちゃんみたいな感じじゃ」

フェイト「なるほど・・・なのは！フェイトだよ！」

はやて「もしなのはちゃんが遊輔君と一緒にになったら紅白カップルになりそうやな」

それを聞いたなのははボンツ！と顔が真っ赤になりしどろもどろになった。

なのは「はわ・・・あわ・・・わ、わわわ・・・私・・・頑張ってみるよ」

はやて「その意気やで」

フェイト「じゃあ・・・二人でデートに誘ってみたらどうかかな？」

なのは「で、デート!?!」

はやて「そ、デート　その後に夜のベッドで・・・」

フェイト「はやてええええ!!!!!!/!/」

先を言おうとしたはやてが顔を真っ赤にしたフェイトが怒鳴った。

はやて「フェイトちゃん・・・折角いい所やったのに・・・」

フェイト「濡れ話は駄目!!!いい!!!」

フェイトは額に青筋を浮かべて言い切った。

はやて「はい・・・」

フェイト「全く・・・なのは。アタックだよ」

なのは「う、うん!」

なのはは遊輔の所へ歩き出した。

なのは「あ、あの・・・遊輔君!」

遊輔に声を掛けた。

遊輔「何かな?なのはちゃん」

話を中断し身体をなのはの方へ振り向いた。

なのは「い、いいい、休日に一緒に……二人で……デートしない？」

勇気を振り絞ってデートの誘いをした。

遊輔の答えは……

遊輔「いいよ」

いいよと即OKしたようだ。

なのは「あ、ありがとう……／＼／＼」

顔を真っ赤にしてそそくさと自分の席へ戻った。

統夜「良かったな。遊輔」

明久「うんうん。雄二も遊輔みたいに見習えばいいのにね」

遊輔「ここで断ったら駄目だろ」

統夜「まあ……そうだが……遊輔……後は頑張れよ……」

遊輔「ああ……」

後ろを振り向くと……

異端審問会「異端者……桜木 遊輔……被告は2-Aのクラスでありながら世界の理に反する行動をとった……諸君……これは事実には相違ないか？」

異端審問会2「相違ありません」

異端審問会「よし……判決……有罪！死刑！！」

黒覆面と黒マントを着用した集団がそれぞれ得物を持ち遊輔に襲い掛かったが・・・

遊輔「バーニングメテオ！」

灼熱の炎で出来た魔力弾で異端審問会の連中を黒焦げにした。

雄二「馬鹿な奴らだな・・・魔法が使える遊輔に勝てる訳ないだろうが・・・」

康太「・・・前に稟にやった所・・・ネリネの逆鱗に触れ魔法の餌食にされていた」

雄二「どうせ・・・あいつに死刑って言ったんだろう？」

康太「・・・」

首を縦に振った。

雄二「やっぱし・・・」

そして約束の休日・・・

遊輔「・・・」

なのはより先に待ち合わせの場所に来ていた。

遊輔「なのはちゃん・・・二人つきりになるの・・・六年振りかな」

そう口ずさんでいると・・・

なのは「遊輔くん」

なのはが遊輔の元へ走って来た。

なのは「待った？」

遊輔「大丈夫だよ。何処から行こうか？」

遊輔となのはは歩き始めた。

ある四人が陰から二人を見守っていた。

統夜「始まったな」

はやて「せやね」

フェイト「どうなるか楽しみだね」

ユーノ「うん」

統夜とはやて、フェイト、ユーノの四人だった。

何故ユーノが居るかと言うと前日に統夜がなのはは遊輔に恋してる事を教えたからだ。

その事を知ったユーノは号泣し天川家で一緒に飲み真実を受け入れ見守る決心を決めた。

ユーノ「遊輔ならなのはを任せられると信じてるから・・・」

統夜「大丈夫なのか？その・・・」

ユーノ「何度も言わせないで・・・大丈夫だよ。僕は」

統夜「ならいいがな・・・」

はやて「二人とも早く来ないと見失うぞ」

統夜とユーノは急いではやて達の所へ移動した。

その頃・・・

恭也「……………」

違う場所からなのはの兄である高町 恭也が憎しみが籠った目で遊輔を見ていた。

何故恭也がいるのかと言うと前日の事だった。

高町家の道場にて……

恭也「これは本当なのか？」

康太「……………勿論……………」

康太はなのはが遊輔に好意を抱いている事と休日にデートする事が決まった事を教えていた。

恭也の反応は……

恭也「これは万死に値するぞおおお！！！！桜木 遊輔えええええ！！！！」

予想通り怒り狂っていた。

康太「……………妨害……………してみたいと思わないか？」

恭也「勿論だ！あの男を……………殺す！！」

康太と恭也は遊輔となのはのデートを妨害する為に計画を立て始め現在に至る。

恭也「（覚悟しろよ……………」

異端審問会「我らは……………強大な悪魔を呼んだ気がするのはいかのせいか？」

恭也の他に異端審問会の連中もいた。
本人達は逃げたかったが恭也に逆らうのが怖いのか逃げ切れなかつた。

第四十四話『なのはの恋の成就大作戦の始まり』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

フェイト「なのはのりハビリに遊輔が関わっていた事にビックリしたよ」

フェイト「デートは順調に見えたけど・・・親衛隊や異端審問会の人達が妨害してきた」

フェイト「なのはと遊輔の恋路を邪魔する者は馬に蹴られて地獄に落ちたらいいのであります」

フェイト「今回は『デートの邪魔をする奴はシスコンでも許されないのは常識』テイクオフ」

第四十五話『デートの邪魔をする奴はシスコンでも許されないのは常識』(前書)

遂になのはの恋は成就・・・するののか？

零斗「HERO・S EPISODE第四十五話始まるぜ」

第四十五話『デートの邪魔をする奴はシスコンでも許されないのは常識』

第四十五話『デートの邪魔をする奴はシスコンでも許されないのは常識』

遊輔となのはのデートを邪魔しようとしている恭也と異端審問会の姿があった。

恭也「どのように血祭りにしていかが悩んでしまっな・・・」

両手に小太刀を手にし笑みを浮かべていた。

異端審問会「（恐るべし・・・）我らは早速行動に入ります」

恭也「分かった・・・抜かるなよ」

異端審問会は行動に入った。

その頃遊輔となのはは・・・

なのは「ゆ、ゆ・・・遊輔君とは久し振りだね」

遊輔「・・・直ぐに思い出すべきだったと自分で恥じてるよ」

なのは「でも・・・忘れてなくて本当に良かった」

喫茶店で話をしていた。

統夜達は・・・

統夜「いい雰囲気じゃん」

ユーノ「遊輔は外見から見ると熱血馬鹿に見えるけど・・・純粹なんだね」

統夜「何事も一生懸命だしな」

気付かれないように喫茶店から見守っていた。

なのは「次元世界の旅って面白そうだね」

遊輔「面白いのもあるけど辛い事もある。なのはちゃんも一回旅を試してみる？」

なのは「機会があれば行ってみたいね。その前に・・・」

遊輔「何かな？」

なのは「ちゃん付けで呼ぶのを止めてほしいかな・・・子供じゃないんだから・・・」

遊輔「わ、分かった・・・な・・・なのは・・・」

なのは「宜しい」

遊輔となのはの楽しい会話が始まって一時間後、喫茶店から出た。すると喫茶店の前に親衛隊の連中がゾロゾロといた。

親衛隊「桜木 遊輔え！！高町 なのはとデートするとはあ！！言語道断！！」

親衛隊2「許すまじ！！」

親衛隊3「貴様を処刑する！！」

親衛隊4「ヒヤッハッ！！破壊してやんよお！！」

親衛隊が魔力弾と得物を構え襲い掛かろうとしたが・・・

遊輔「虎炎拳！」

右手に炎を込めた拳で親衛隊の腹部に直撃させた。

遊輔「紅蓮旋風脚!!」

足に炎を纏わせて超高速回し蹴りで蹴散らし

遊輔「アンダー・・・バーストフレア!!」

地面に魔法陣を展開し残りの親衛隊を爆炎で蹴散らし吹き飛ばした。尚吹き飛ばされた親衛隊の人達は黒焦げになりお星様になった。

遊輔「多数で介入し何も考えていないお前達は恥を知れ!!」

なのは「(遊輔君・・・カッコいい・・・)」

遊輔の活躍で顔が少し赤くなった。

陰で見ている統夜達は・・・

統夜「派手にやりやがったな・・・」

はやて「せやな・・・遊輔君となのはちゃんのデートを邪魔する者は自業自得やで」

統夜「樹とか出てきそうで怖いよな」

一方恭也達は・・・

恭也「そう簡単にはいかないか!!」

樹「それが遊輔だからね」

康太「・・・」

恭也と親衛隊の隊長である樹、恭也に情報を提供し妨害する計画を

共に立てた康太の三人がいた。

恭也「今から次の作戦を始める」

樹「遊輔となの・・・高町さんのデートを妨害し」

康太「・・・・・・試練を成就させる・・・」

樹「ムツツリーニ・・・君は意味不明な事を言わなかったかい？」

康太「・・・・・・気のせいだ」

康太には考えがあつた。

なのはの兄である恭也に情報を教え異端審問会や親衛隊を嚇け遊輔となのはのデートを妨害する。

二人のデートを妨害するというのはフェイクであり自分なりに遊輔のイメージアップの為にやらかした事なのだから・・・

康太「（・・・・・・遊輔・・・頑張れ・・・）」

康太は明後日の方向を見ていた。

遊輔「今の・・・無いよな・・・」

なのは「うん・・・」

遊輔となのはは映画館で泣けるラブストーリーの映画を見ていた。

その後映画館から出てレストランへ移動した。

遊輔「またか・・・」

常村「よお！桜木い！！」

夏川「その女を置いて行け！！」

レストランへ向かう途中でチェインソーやガトリングを装備した常

夏コンビに出くわした。

陰では・・・

恭也「ククク・・・これなら勝てないだろう」

樹「いくら魔法が使えても武器を持った常夏コンビには・・・」

康太「・・・」

常夏コンビを睨けた三人がいた。

遊輔「とりあえず・・・」

なのは「退いてもらえないかな？」

遊輔は右手に灼熱の炎、なのはは指先に桜色の魔力を収束し始めた。

夏川「発射する前にやってやんよお!!」

常夏コンビは襲い掛かったが一コンマの差か灼熱の炎と桜色の魔力砲が発射され常夏コンビの二人は直撃を喰らった。

常夏コンビ「オヴェーーーーッ!!」

気持ち悪い声を上げ黒焦げになりお星様になった。

遊輔「早く行こうか。また襲い掛かってくるかもしれないから」
なのは「うん!」

二人は走ってレストランへ向かった。

統夜「これはガトリングを奪って零距离でぶっ放せばいいものを・・・」

はやて「二人を足で踏み倒した後にチェンソーで斬首もあるで
フェイト」（二人とも外道でDSだよ!!!）」

陰で見守っていた統夜とはやての危険な考えにフェイトは心の中で
突っ込んだ。

ユーノ「早く行こう!」

統夜「ああ」

統夜達は追跡を開始した。

恭也「何故なのはは奴を庇うんだ!？」

常夏コンビの心配はしてなくなのはの行動に驚きを隠せずにいた。

樹「次は俺様が出ますから康太は・・・あれ・・・いない・・・」

康太がいる方へ振り向くといなかった。

恭也「まあいい・・・任せるぞ!」

樹「了解!」

樹は何処かへ移動した。

遊輔「一体何だろうな・・・あいつら
なのは「さあ?」

遊輔となのははレストランで昼食をとった後ウィンドウショッピング

グをしていた。

統夜「よう。康太。自主トレか？」

康太「……そんな所だ……」

統夜「親衛隊や常夏コンビ喉けたのお前だろ？」

康太「……分切り切っているとは……驚きだ」

統夜「そりやな……で……誰と組んでいる？」

康太「……高町 恭也と緑葉 樹……」

統夜「やっぱりな……遊輔のイメージアップ作戦って所か？」

康太「……ああ」

統夜は単独で康太とビルの屋上で話していた。

その後統夜と康太はビルの屋上から消えはやて達と合流した。

恭也「己え……何処がいいんだ!？」

ドス黒いオーラを纏い片手にあんぱんを食いながら愚痴りながら二人を追跡していた。

異端審問会の人達はで払っており恭也ただ一人だけだった。

遊輔「綺麗だな」

なのは「英都港から見る海ってこんなに綺麗って知らなかった」

遊輔となのはは英都港にある海が見える公園から海を眺めていた。

なのは「海が見える公園でフェイトちゃんと再会し友達になれた場所でもあるんだ」

遊輔「二人が分かり合えた場所か……いい思い出のある場所だね」

陰では・・・

統夜「ロマンチックだな」

はやて「ロマンチックやね」

フェイト「いい雰囲気が終わってくれると嬉しいね」

ユーノ「遊輔はいい奴だぁ〜任せられるよ」

統夜達は静かに見守っていた。

ただユーノ一人だけ号泣していたが・・・

海を眺めていた遊輔となのはに樹と雄二、全員黒覆面と黒マントを着用した集団である異端審問会の連中が立っていた。

遊輔「樹に雄二・・・何しに来たんだ？」

樹「それは勿論・・・君をカツコ悪くさせる為と・・・」

雄二「お前の幸せをぶち壊す為に介入した！！」

異端審問会「異端者・・・桜木 遊輔・・・被告は2-Aのクラスでありながら再び世界の理に反する行動をとった・・・有罪・・・即死刑！」

それぞれ得物を手にして駆け抜ける準備を始めた。

遊輔「俺の勝手だろ・・・」

なのは「待つて・・・遊輔君。坂本君だけ即退場させるクリーンな方法があるから」

雄二「俺を・・・だと？」

なのは「そ」

携帯電話を取り出しある人物へ電話を始めた。

なのは「もしもし霧島さん・・・坂本君が浮気して私に襲い掛かるうとしているの・・・場所は・・・英都港だから・・・」

今にも襲われそうな感じの口調で電話相手である翔子に告げた後突然通話が切れた。

霧島という言葉に雄二は青ざめた。

雄二「おいしいいい!!!?お前・・・その何処がクリーンだあ!!何捏造してんだよあ!!!」

なのはにツツコミした後ドス黒いオーラを纏った黑夜叉・・・翔子がやって来た。

翔子「雄二・・・浮気は許さない・・・」

雄二「げえ!?翔子お!?!」

翔子「覚悟・・・出来てる?」

翔子は右手にスタンガン、左手に釘バットを手にし雄二に襲い掛かった。

襲い掛かって来る翔子から雄二は脱兎の如く逃げ出した。

翔子「逃がさない・・・」

雄二「ちきしょおおー!!!」

なのはは逃げ出した雄二を見た後バリアジャケットを展開しレイジングハートを起動させて魔力を収束し始めた。

なのは「さて……皆……O H A N A S H I I してお寝んね
しよっか」

樹「あ、あの……話し合いましたよ！」

なのは「だから言ってるじゃない……O H A N A S H I I だ
って……」

樹「文字が違うんだけどおおお!!！」

なのは「にはははは」デートを邪魔する人達にはそれくらい丁度
いいのよね デイバイーン……バスター!!！」

樹と異端審問会の連中にデイバインバスターを放ち黒焦げにした。

その後遊輔の手を握った後何処かへ跳び去った。

統夜「何処へ行くんだろう？」

はやて「屋上で告白するんちゃうか？」

ユ一ノ「どうする？」

統夜「俺達はこちらまで……これ以上は野暮ってもんだ……」

はやて「分かった……ほな……帰ろうか」

陰で見守っていた統夜はこれ以上見守っても野暮と感じたのか家へ
帰った。

遊輔「ちよつと強引だね……」

なのは「にははは……ごめんね……二人つきりで話したい事が
あったから……」

遊輔となのははビルの屋上にいた。

遊輔「二人つきりで話したい事？」

なのは「うん……実は……」

なのはが遊輔に何かを言おうとした瞬間・・・
空から何かが降って来た。

なのは「な、何なの？」

遊輔「・・・・・・・・」

遊輔はなのはを守るように前へ出た。

そこには・・・恋姫の左慈ならぬ白装束姿の恭也がいたのだ。

なのは「お兄ちゃん!？」

遊輔「もしかして・・・・・・・・なのはのお兄さん？」

恭也「ようやく会えたな・・・桜木 遊輔! 馴れ馴れしくなのは
の名を呼ぶとはどういうつもりだ？」

遊輔「えつと・・・・・・・・それは・・・・・・・・その・・・・・・・・」

なのは「恋人だよ!！」

遊輔が躊躇っているとなのはが先に答えた。

恋人という言葉聞いた恭也は怒りのオーラを露わにし小太刀二刀
流を構えた。

遊輔「あの・・・お兄さん? 何故・・・小太刀二刀流を・・・」

恭也「馴れ馴れしくお兄さんと呼ぶな!! お前の実力を確かめさせ
て貰う!！」

なのは「お兄ちゃん・・・シスコンだから・・・気を落とさないで
ね」

遊輔「ああ・・・なのは・・・悪いけど・・・少し離れてくれな
いか？」

なのは「分かった」

なのはは直ぐに離れた。

遊輔「心装・・・爆炎二槍!!！」

刀身が銀色で常に紅蓮の炎に包まれ柄の部分が真紅の二槍を両手に持ち構えた。

それを見た恭也は遊輔から炎で燃え盛っている虎のオーラが見えたのか笑みを浮かべた。

なのは「（遊輔君・・・紅蓮の炎に包まれた虎みたい・・・お兄ちゃん・・・笑ってる・・・）」

なのはからも見えていた。

恭也「こちらから行くぞ!!！」

恭也は素早く動いて右手に持っている小太刀を袈裟に振るうと・・・

遊輔「はっ!!！」

遊輔は軽くかわし出す。

恭也「（何!?!）」

余裕でかわせるかのようにかわされて驚く恭也だが、そのまま左手に持った小太刀を遊輔の首にめがけて振るう。

恭也「せええい!!！」

遊輔「はっ!!！」

これも軽々と避けられた。

その後に恭也は連続攻撃をして遊輔を攻めるが、遊輔は軽くかわして二槍で防ぐ。

恭也の剣術『小太刀二刀御神流』はかなり強力で、しかも恭也は超一流の剣術家でもあり、おそらくは世界でも指よりの実力者である事は確かである。

しかも先ほどからの連激は無駄な動きもなく避ける事も防ぐ事も難関なはずなのだが、遊輔は軽くかわしたり捌いていたりする。

恭也「（こいつは怒りのままで勝てる相手じゃない・・・冷静になるんだ・・・）」

恭也はこのままでは遊輔には勝てない事を覚えたのか怒りを抑え冷静になり二刀の小太刀を構えた。

その後後ろへバックし・・・

恭也「御神流・『斬』！」

先ほどとは比べ物にならない速さで、目にも止まらぬ速度で右手に持った小太刀が遊輔の首元に振り下ろした。

遊輔「はっ！」

遊輔は素早く回避した。

恭也「何!？」

『御神流』の一つである『斬』を初見でかわした遊輔に恭也は驚いた。

恭也「(馬鹿な！基本動作の中の初步技とはいえ、御神流の1つをも交わすとは……)」

これで恭也は確信した。

遊輔の身体能力が異常なまでに高い事を……
それでも恭也は引かず遊輔を攻める。

恭也「ならば！御神流『虎乱』！」

御神流の技の1つ。二刀の小太刀から放つ連撃が炸裂するが遊輔は流石にかわせないと判断したのか全てを二槍で防ぐ。

なのは「遊輔君……凄い……お兄ちゃんの剣をことごとく交わして防いでいる……」

遊輔の強さはなのはも知っているが何度見ても驚きだす。

蒼穹の死神の異名を持つ天川 統夜に匹敵する戦闘能力は伊達じゃないのだ。

遊輔「中々やるな……」

恭也「いい気になるなよ……」

すると恭也は思いつきり先ほどとは違う大きな構えをする。

恭也「小太刀二刀御神流・奥義之極み『閃』！……紅蓮の虎……
お前を殺す！」

遊輔「ちよつと待って！？俺にはまだやるべき事があるから殺されるのは勘弁かな！」

ツッコむ遊輔をよそに突如恭也の姿が消えた。

いや、余りの速さに眼が移らないのである。
そして神速の領域の速さで遊輔に気づかれないと判断して素早く2
つの小太刀を同時に神速の速さで振るった。
だが……

恭也「なん……だと……?」

奥義を放った恭也自身は驚いた。

2つの小太刀は同時に振ったが、遊輔は二槍をクロスにして二つの
小太刀を防いだのである。

遊輔「今度は俺からの反撃だ！」

遊輔は二本の小太刀を放すように力強く弾き返すと恭也はその衝撃
で後ろに思わず後退した。

その隙に左手に持った槍で横薙ぎを放った。豪快で力ある斬撃に恭
也は何とか防いでいた。

遊輔「行くぞ！烈火!!」

二槍の連続突きを恭也に浴びせた。

恭也「ぐううう!!? (何だ!?!この突きの威力と速さは!?!)」

恭也は小太刀を×の形にクロスさせ烈火を防いでいた。

遊輔「おおおお……でりゃあ!!」

二槍の大きな突きの衝撃で恭也を吹き飛ばした。

恭也「ぐはあ！」

恭也は倒れた。

遊輔「凄い剣術だった……だが……俺を倒したければ統夜やマイトイ真拳継承者、瑠璃の軍神並の神速剣術使いじゃなきゃ倒せない……」

なのは「遊輔君凄い」

なのはが遊輔に褒めるとそれが聞こえたかのように恭也が起き上がり殺気が増大する。

恭也「もう抑えきれん！！命の欠片も残さん！！！！」

遊輔「どんだけえーっ！！！！？」

怒りを露わにし冷静さを無くしていた。さらに勢いを増して恭也の連撃が遊輔に襲う。

先ほどよりは威力があるが動きにムラが出てきた。荒っぽいがかなり厄介な為遊輔も舌打ちする。

恭也「貴様に妹は渡さん！」

遊輔「その気持ちは分かるけど……」

心装を突然解除した。

なのは「遊輔君！？」

突然の解除になのはは驚いた。

恭也「貴様……馬鹿にしているのか？」

遊輔「・・・・・・・・」

恭也の連撃をかわしながら拳に炎を纏わせた。

遊輔「周りを見ていないアンタは・・・・これで・・・・」

神速級の速さで拳を振るい恭也の二刀の小太刀を破壊し顎を捉え・

・

遊輔「頭を冷やせええええええ!!!」

恭也「ごふあああああああ!!!!」

恭也を上空へ殴り飛ばした。その後降って来て気絶していた。

遊輔「悪いな・・・・こうでもしないと・・・・駄目だった気がしてな
・・・・・・・・」

気絶した恭也に対して言うと康太が突然現れた。

遊輔「康太?」

康太「・・・・・・・・彼は帰す・・・・遊輔・・・・中々良かった・・・・」

それだけを言つて康太は恭也を連れて高町家に送つた後帰つた。

遊輔「なのは・・・・言いたい事つて何かな?」

なのは「私・・・・遊輔君の事が好き!好きなの!」

遊輔「お、俺の事を!?!?!」

なのは「うん。六年前から・・・・遊輔君・・・・カッコ良かったから
・・・・・・・・」

なのはは遊輔の腕に抱きついた。

遊輔「ありがとう・・・なのは・・・」

遊輔となのはは腕に抱きついたまま帰った。

なのは自身は満足そうであった。

その頃・・・雄二は・・・

雄二「ここなら大丈夫だろう・・・」

本拠地寮の中にいた。

零斗「雄二・・・こんなところで何をやってるんだ？」

雄二「俺は翔子に追われてな・・・」

零斗「なるほど・・・そうかそうか・・・」

零斗はニヤリと笑みを浮かべ・・・

零斗「マイティ真拳奥義！霧島 翔子召喚！」

翔子を召喚した。

翔子「雄二・・・見つけた・・・」

雄二「テンメエエエ！そんなにして俺を殺したいか！？」

零斗「何を言う・・・お前と霧島の追いかっこは面白さがあるからいいんだよ。ささやかな俺からのプレゼントだ。霧島トークン召喚！」

地面から翔子のトークンが召喚された。

雄二「おいしいいい！！！！その何処がささやかなプレゼントだ
！！！！」

雄二が零斗にツツコミを入れた後再び翔子から逃亡した。

翔子、翔子トークン「逃がさない・・・」

翔子と翔子トークンは逃げる雄二を追いかけた。

零斗「雄二よ・・・お前は霧島 翔子から逃げているから愚かなの
だ・・・逃げているからこそ同じ過ちを繰り返し・・・苦しむ・・・
雄二・・・これが絶望だ・・・」

某絶望の番人のデュエリストのコスプレをした零斗が一人で呟いて
いた。

第四十五話『デートの邪魔をする奴はシスコンでも許されないのは常識』(後書

次回のHERO'S EPISODEは

メイメイ「なのはさんに恋人が出来たね。遂に実ったね」

メイメイ「雪蓮達三姉妹は統夜達に決闘を申し込んできたね」

メイメイ「三姉妹と対決する統夜と遊輔、明久の三人・・・お互い譲れないものがある中・・・答えを出す」

メイメイ「次回は『閃光の嵐』テイクオフね」

番外編『ドキッ！女だけの総集編ティータイム』（前書き）

統夜「これ・・・絶対・・・某軽音部のアレだよな!？」

うん。そうだよ。面白そうでいいじゃん

統夜「しかもさり気無く恋姫のもパクってるし・・・」

そんじゃ総集編始まるよ

統夜「聞けえええええ!!!!!!!!」

番外編『ドキッ！女だけの総集編ティータイム』

番外編『ドキッ！女だけの総集編ティータイム』

はやて「え〜・・・今からHERO'S EPISODEの総集編を始めようと思います」

本拠地寮のリビングでお茶を飲みながら号令をしていた。

はやての号令が終わった後ははやて達は騒ぎ始めた。

現在リビングの中にいるのははやて、文乃、千世、希、プリムラ、カナ、エステル、優子、秀吉、咲夜、華琳の計11名である。

文乃「今まで思った疑問があるわ・・・」

千世「なんで・・・タイトルがHERO'S EPISODEなんだろうって・・・」

文乃と千世は今まで思っていた疑問をはやてに質問した

はやて「これは作者さんがな〜・・・Another Century r y s Episodeシリーズを参考にしたものらしいで」

華琳「作者はAnother Century Episodeシリーズ全部集めてるわよ」

はやてが即答で答えた後華琳も答え出した。

HERO'S EPISODEはリリカルなのはをベースにSHUFFLE!、迷い猫オーバーラン、夜明け前より瑠璃色な、バカとテストと召喚獣、真・恋姫十無双のクロスオーバー作品である。

主人公である天川 統夜が仲間と共に管理局の闇や様々な敵勢力と

戦い、学園では大暴れする物語で龍の骨さんの作品からはゾンビゲームシリーズとBSA学園に出ているマイティ真拳の使い手である北郷 零斗と気力少年ダイチ！俺と四人の探偵と気力修行！のリユウ・ダイチ、たけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！に出ている竜崎 たけしがレギュラーとして出演する。

華琳「シリアスだけじゃなくギャグも取り入れているのね」

文乃「なるほど・・・」

カナ「統夜は第一話からぶっ飛んでるよね・・・」

プリムラ「うん・・・」

エステル「そうですね・・・」

優子「統夜は昔からああよ」

秀吉「わんぱく小僧じゃったからの・・・」

華琳「へえ・・・」

第一話の親衛隊を統夜がバハムートで轢いている場面が映されそれぞれ感想を述べていた。

咲夜「管理局を憎んでるって人物に見えないわね」

はやて「せやね・・・表には出さないからな・・・」

プリムラ「学校の屋上の戦い・・・凄いね」

カナ「六爪流の統夜と氷剣術の達哉・・・か・・・」

エステル「明らかなの統夜は筆頭ですね」

華琳「それを言うなら朝霧は軍神よ」

第二話で統夜と達哉の二人が謎の集団に対し六爪と刀で戦っている場面が映されていた。

エステルの言っている事は間違いは無いが・・・

リビングにフィーナとミア、麻衣、さやか、菜月、翠がお茶とお菓
子を持参していた。

フィーナ「お邪魔するわ」

ミア「お邪魔します」

麻衣「お茶とお菓子を持ってきました」

さやか「お邪魔します」

菜月「総集編か・・・懐かしいものが出てきそうだね」

翠「やつほ」

フィーナ達朝霧ラバーズは座り始めた。

フィーナ「達哉はほぼ軍神ね・・・」

フィーナの言葉に残りの朝霧ラバーズも首を縦にコクコクと振っていた。

はやて「次は・・・これやな・・・」

第五話にて夜の英都で統夜となのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッターが対峙している場面が映された。

その後ヴォルケンリッターはアブソリュートエターナルを纏った統夜に落とされた。

なのは「やつぱり・・・お話だけじゃ駄目みたいだね・・・」

統夜「話だけで解決出来るのならデバイスや武器は存在しない筈だ・・・」

フェイト「そうだよな・・・でも・・・」

統夜「真実が知りたいのなら・・・力を示せ！！ここで決着けりをつけてやる！！」

はやて「・・・せやな・・・リイン！ユニゾンや！！」

リイン「はいです！！」

統夜となのは、フェイト、はやての四人は収束魔法を放ち勝負を決めようとしていた。

結果は統夜が押し勝ち大爆発し煙が晴れるとなのはとフェイトは倒れておりはやてだけが立っており統夜が約束した勝負に勝利した。その後はやて達を自分の家へ転移し治療した後統夜から管理局を憎む理由と真実を教えた。

秀吉「最初は統夜と敵対しておったのか・・・」
はやて「せやな・・・」

優子「統夜は戦いの末・・・はやてを取り戻した・・・」
フィーナ「一緒だった幼馴染を取り戻した統夜は凄いわね・・・」
華琳「少し甘いかしらね・・・でも有能な力を持つ者達を自分達の勢力にするのはいい事よ」

統夜ラバースと朝霧ラバースは統夜を称賛していた。

第六話で真実を知ったなのは達は統夜と達哉と共に戦う決意をした。そこまでは良かったがはやては統夜の初めてのキスを奪った後一緒にお風呂に入った。

その翌日になのはとフェイト、はやての三人がバーベナ学園に転校してきた。

これらを見たはやてを除く統夜ラバースは黒いオーラを纏い朝霧ラバースは真っ赤にしていた。

文乃「分かってるけど・・・嫉妬で狂いそうだわ・・・」

千世「これがメインヒロインの待遇!？」

希「にやあ・・・差があり過ぎる・・・」

プリムラ「ズルイよ!!」

カナ「これって・・・幼馴染でも許されるの!？」

エステル「天罰が来ますように・・・」

優子「こんなのって許される筈が無い!!」

秀吉「限度というものを知らんのかのお・・・」

咲夜「やはり勝負するべきかしらね・・・」

華琳「羨ましいにも程があるわよねえ・・・」

フィーナ「凄いわね・・・」

ミア「ここでもある意味凄いです・・・」

麻衣「フラグ立てマスターは伊達じゃない？」

菜月「てか・・・はやてが積極的でしょ・・・」

翠「積極的にやるべき事を教えてくれたよね・・・」

はやて「あ、あはは・・・次に移るで・・・」

はやては笑って誤魔化し次の場面であるプリムラが初登場する第七話で親馬鹿魔王であるフォーベシイからプリムラを預かっていた。その後統夜達はそれぞれ自己紹介していた。

プリムラ「あの時のはやてお姉ちゃんは凄かったね・・・」

優子「これはメインヒロインでもやり過ぎでしょ・・・」

秀吉「幾らなんでも駄目じゃる・・・」

優子と秀吉の言葉にはやてと優子、秀吉を除く統夜ラバーズはコクコクと俯いていた。

フィーナ「次は私の初登場ですね」

フィーナが初登場する第九話でホームステイ先である朝霧家へ案内された。

次の日にスフィア王国の王女として初登校した日は大変だった。達哉に口止めされていたホームステイ先を菜月がうっかり口にしてしまい男子生徒達に追いかけていた。

そして学校の終わりに統夜はクロノと出会いサーディオンを入手し

た。

フィーナ「最初は緊張したわね・・・」

優子「てか・・・人を窓から捨てるっていうのはおかしくない!？」

はやて「何言ってるんや・・・緑葉君みたいな輩は捨てた方がクリンヤ」

華琳「どうせやるなら首チヨンパか足で首を抑えつけ刀で斬首が相応しいわ」

プリムラ「そこは零距离ガトリングだよ」

カナ「チエーンソーでミスト ティンキックをやるべきだよ」

優子「首チヨンパと斬首は怖すぎるわ!! 零距离ガトリングとミスト ティンキックはグロテスクを生むわよ!!」

優子は華琳とプリムラ、カナの発言にツッコんだ。

はやて「この時にサーディオンを統夜は手にした・・・」

次の場面に移ろうとした時なのはとフェイトが参加した。

なのは「やつほぐはやてちゃん」

フェイト「総集編に参加しに来たよ」

はやて「ほな・・・適当に座って・・・」

なのは「うん」

フェイト「分かった」

はやて「確か・・・エステルさんと遊輔君の初登場やな」

エステルとフラグが立つ事と遊輔と戦う蒼紅一騎打ちが行われる第十話を見た。

夜の散歩でエステルと出会い案内した後達哉やフィーナに相談しエステルに会う為日曜に礼拝堂へ向かった。

夜の月人居住区で悪魔を退治した統夜は遊輔と出会い六爪と二槍がぶつかり合い激闘が行われていた。

激闘の末統夜と遊輔は相打ちの形で引き分けとなった。

エステル「あれは何度見ても凄いですね・・・」

秀吉「天覇絶槍じゃの・・・遊輔は・・・」

なのは「にやはは・・・二人の力は次元が違うかもしれないね・・・」

「さやか「月人居住区にクレーター等が出来たの・・・あの二人が原因なのね・・・」

さやかは笑っているが目が笑っていなかった。

はやて「(うわあ・・・怖いね・・・)次は・・・ロストテクノロジージャな」

第十一話である統夜と遊輔がエステルがいる礼拝堂で目が覚め助けられている所を見ていた。

世界の歪みを破壊する為に戦う統夜と遊輔は手を組み、リースの身体を借りたフィアツカが禁忌の遺産とロストテクノロジーについて説明していた。

フィーナ「この時からユルゲンは手にしていたのね・・・禁忌の遺産を・・・」

エステル「現在は統夜が手にしていますが・・・デバイスに関する事は後にしましょうか・・・」

はやて「この話でフラグが立つとは・・・なあ・・・次！」

第十二話である統夜を名前で呼んでいるエステルと咲夜の初登場を見ていた。

はやてに復讐を望む咲夜に挑んだのはとフェイトの二人だったが心を読むレアスキルによって落とされはやてを斬ろうとした瞬間統夜が割り込み防いでいた。

咲夜の歪みを破壊する為に統夜は戦いを挑みドライバーであるアブソリュートブラスターを纏い撤退させた。

咲夜「あの時ははやてを憎んでいたわね・・・」

秀吉「心を読むレアスキルってズルイの・・・」

菜月「反則でしょ・・・」

翠「チートだよ・・・」

千世「そして胸が大きい・・・」

咲夜「いや・・・胸が大きい関係無いわよね!?!」

千世の胸発言にツツコンだ。

アリスがリビングにやって来た。

アリス「やつほ」

はやて「アリスちゃん。いらっしやい」

アリス「招待してくれてありがとう」

はやて「次の話でカナちゃんと零斗さんが出るんやつたな」

第十三話で家にいなくなったプリムラを探しに行った統夜。ネリネからの情報で公園に来てプリムラを見つけた。

プリムラが口にしていたりコリスが気になったのか家に来ていた神王と魔王に聞いてみた。

魔王からユグドラシル計画で作られた人工生命体三体の事を話し始めた。

話を聞いた統夜はプリムラがいる公園へ向った。

統夜「ああ。俺がお前を迎え入れる。ずっとお前を受け入れてやる。

リコリスじゃない。リコリスにはなれない。リコリスはもういない。
・リコリスは一人のままでの未来を望んでいない・・・
プリムラ「未来・・・？」

統夜「だから『天川 統夜』で我慢しろ。お前が一人でいる必要なんてない。はやてや文乃、千世、希・・・皆がいる・・・」
プリムラ「とう・・・や・・・が・・・迎え・・・に・・・」

プルプルと震え

プリムラ「・・・あ・・・あう・・・ああ・・・ああああああ
あああ！！！」

今まで我慢してたのか言葉にならない声をあげて統夜に抱きついて泣いていた。

プリムラ「もうやだ！一人はやだ！私を見て！私と一緒にいて！寂しいのはもうやだ！！」

統夜「ああ・・・一人にはしない・・・だから・・・一緒に帰ろう・・・」

その後プリムラのプロトタイプであるカナが襲撃しマイティ真拳の使い手である零斗の介入でカナを撤退させた。

プリムラ「お兄ちゃんのお陰で今の私がいる・・・」

カナ「不思議な人だよね・・・」

アリス「零斗カッコイイ」

文乃「マイティ真拳・・・自由自在の流派って恐ろしいわね・・・」

第十四話でカナの事を両王から聞いた統夜と零斗、プリムラは助っ人としてフェイトと一緒に英都近くの海岸の上空でカナを説得しな

がら戦っていた。

統夜とプリムラ、フェイトの説得で涙を流したカナ・・・その後に暴走しカナの所へ瞬速で突っ込んでいった統夜がこう叫んだ。

統夜『俺が認めてやる！お前の存在全てを認めてやる！お前の側にいてやる！だから復讐なんて止める・・・カナ・・・』

カナは統夜の言葉に心が響いたのか抱きついて泣き始めた。その後フェイトは帰り、カナを引き取る事を魔王に頼み、即OKしてくれた。

統夜と零斗は両王と共にユグドラルシル計画を中止させた。

カナ「統夜のお陰で助かったよ・・・今でも感謝してるよ・・・」
華琳「私の見る目に狂いは無かったわ・・・」

アリス「この時点で統夜君に達哉君、遊輔君、零斗の四人だね」

次の場面を見ようとした時瑞希と美波の二人がやって来た。

瑞希「お邪魔します」

美波「遊びに来たよ」

はやて「次は明久君が初登場する話やな」

瑞希「はい」

美波「アキの初登場だしね」

第十五話に統夜とエステルデートの途中で明久と再会し懐かしい話をしていた。

明久と別れた後昼食をとり高野というカメラマンと占い師に出会い物見の丘公園で話していた。

統夜はエステルを礼拝堂まで送った後家に帰ったがバリアジャケットを展開しリインとユニゾンした状態のはやてが統夜に向けてラゲ

ナロクで制裁していた。

これを見たはやてを除く女性陣は啞然としていた。

秀吉「これは流石に……」

優子「やり過ぎでしょ……」

瑞希「流石の私でもやりません……」

美波「魔法で制裁するなんてね……うちでも恐怖に感じたよ……」

瑞希「美波ちゃんは魔法が使えるじゃないですか……その他にも……」

・聖王モードや槍と呪術を駆使する近衛隊長並の力も……」

美波「ちよつと待って!? それ明らかに声優ネタよねえ!? うちでも聖王モードや呪術、ティ・ファイナーレとか使えないからね!?」

瑞希のボケに美波は大汗を流してツッコミを入れた。

麻衣「次は……恐怖の旅行だね……」

第十六話に海と山の両方が楽しめる旅行で統夜と零斗が運転するバスに恐怖しつつも旅館へ着いた。

各ラバーズの水着姿が映し出され遊んでいる統夜達。

そして岩場で達哉がフィーナに告白していた。

優子「やっぱ危険な事をしていたのね!?」

アリス「零斗凄〜い!!」

優子「危ないわよ!! あれは!?」

秀吉「よく運転出来たのお!!」

瑞希「スピード違反で捕まっちゃいますよ!?」

美波「極悪よね……あの二人に関わると……碌でもない事が起こるのは間違い無し……」

華琳「統夜は面白いわね……次の話は……」

第十七話の場面に移り統夜がはやてとエステル、文乃の三人と寝ていた。

これを見たカナによって制裁されその後統夜と統夜ラバーズは自然を満喫していた。

最終日の夜に燃えた村で統夜と遊輔、達哉、零斗の四人がイグニスと対峙し激闘が行われたが四人は手も足も出せずに敗北してしまった。

優子「チートじゃない！」

咲夜「確かにチートっぽいけど・・・あの男は英雄と呼ばれていた・・・優子・・・気持ちは分かるわ」

秀吉「じゃが・・・統夜と朝霧、明久の元上司じゃ・・・情に流されなければいいがのう・・・」

華琳「だけど・・・力の使い方を間違えればあの男は破滅するわ・・・」

アリス「零斗でも手が出せないって・・・上には上がいるもんだね・・・」

瑞希「最後の天川君・・・変化しましたね」

美波「流行ってるのかしら？」

はやて「次は・・・零斗君が主役の第十八話やな」

第十八話にて零斗とスフィア王国の親衛隊隊長ユルゲンの対決の場面が映っていた。

樹ソード無双乱舞や樹マグナムを駆使してユルゲンを追い詰めた後黒い謎の物体らしきものをユルゲンの顔面にぶつけ勝利を収めた。

フィーナ「汚いわね・・・」

ミア「限度があるでしょう・・・」

麻衣「お兄ちゃんの言ってる事が尤もだと思う・・・」

菜月「一步間違えれば外道だね・・・」

翠「怖い事するんだね・・・」

アリス「零斗カツコイイ」

優子「あれの何処がカツコイイの！？全然分らないんだけど！！」

優子がアリスのコメントにツッコミを入れた。

シャロ「お邪魔します」

エリー「お邪魔します」

ネロ「遊びに来たよ」

コーディネリア「お邪魔するわね」

シャロ達ミルクイホームズがリビングにやって来た。

はやて「という事は・・・次はダイチ君の初登場やな」

第十九話にてダイチと闘う試験を達哉に課したカレン。それから毎日試験本番まで諦めずに達哉は練習をしていた。

それから試験本番で達哉とダイチが戦い始め剣の打ち合いから始まり氷と炎のぶつかり合いの末達哉は勝利した。

月に帰還し月王に報告したカレンはユルゲンの手下である兵士達に拘束された。

シャロ「最初からスケベをやってたんですね・・・」

エリー「ダイチ君・・・スケベは許さない・・・」

ネロ「ちよつとおーっ！！エリー！！それは明らかに霧島の台詞に近いよね！？」

コーディネリア「あと一步のところだったわね・・・ダイチ君」

フィーナ「ダイチは・・・いつもあなの？」

シャロ「はい・・・女の子にスケベな事をいつもしています・・・」

咲夜「彼女がいるのに・・・よくスケベな事が出来るわよね・・・」
シャロ「全くです・・・次は・・・リースちゃんの襲撃ですね」

第二十話にて達哉と朝霧ラバーズに襲い掛かって来たファイアツカ。ファイアツカは自分自身の正体がロストテクノロジーの管理者であり戦争で傷付いた人が生み出した思念体という事を明かした。

達哉とフィーナの仲・・・月と地球が接近する事を認めないファイアツカに統夜とエステルが介入した。

統夜と達哉達の言葉が通じたのかファイアツカは猶予を与えカレンが拘束された事を伝えた後その場から去った。

はやて「自分勝手な娘やな」

フィーナ「ええ・・・でも彼女なりの考えでもあったのよ・・・」

はやて「分かつてる・・・だから統夜は介入しファイアカちゃんのやり方を認めなかった・・・」

咲夜「誰かを悲しませる結果を認める事は誰だつて納得しないわ」

菜月「次は・・・私達がスフィア王国へ行く話ね」

第二十一話にて統夜と達哉、朝霧ラバーズが脱出してきたカレンとピリーと共にスフィア王国へ転移した。

兵士を蹴散らしながら進む統夜達、達哉と再会する為動き出すフィーナ。

通路でやつと再会できた達哉とフィーナ。そして達哉と朝霧ラバーズは王座の前の扉を開けた。

優子「スケール大きいわね・・・」

秀吉「月と地球の運命が掛っているからの・・・」

なのは「本当に凄いいよね・・・」

フェイト「そこにいた達哉と統夜って凄いいよね・・・」

瑞希「次は・・・禁忌の遺産でしたね」

美波「（瑞希の料理も禁忌の遺産になるのは気のせいかな？）」

第二十二話にて達哉とフィーナの演説が行われた。

二人の演説が終わった後ユルゲンが拍手をし武力による地球を滅ぼす事を提案し悪魔の兵器であるメテオホールを見せていた。

統夜達を拘束し月王であるライオネスに銃口を向け本性を現した。その後高野の機転により逆行行為が全宇宙に筒抜けとなり、現れたカレンは統夜と達哉の合図と共にユルゲンの配下達を気絶させた。ユルゲンを追い詰めたつもりだったが禁忌の遺産であるターンギヤザーを起動させ統夜と達哉に戦いを挑んだ。

火力と装甲の堅さが違うターンギヤザーに苦戦していた統夜と達哉だったが戦いの末ターンギヤザーが待機状態になりユルゲンは最後の切り札である帰天を使い異形へ変化した。

異形に変化したユルゲンの力に統夜達は為す術も無く意識を失った。

はやて「あの戦いは思い出さたくない……」

はやての言葉に統夜ラバーズと朝霧ラバーズは首を縦に振り賛同していた。

華琳「恐ろしいわね……本当に……」

メイメイ「お茶会に参加するね」

桂花「お邪魔するわ」

ルイス「お邪魔します……」

たけしらバーズであるメイメイと桂花、ルイスがお茶会に参加した。

はやて「次はたけし君が出てくるんやったね」

フェイト「はやてがこのお茶会の司会者に見える……」

第二十三話にてボロボロになった統夜と達哉に止めを刺そうとしていた時遊輔と零斗の二人に妨害された。

二人の攻撃でも歯が立たず零斗はマイティ真拳奥義であるヒーロー召喚でダイチとたけしを召喚した。

桂花「たけしが出て来たわ！」

はやて「はいはい……黙るとき」

たけしはオーレッド、ダイチはリュウレンジャーに変身しユルゲンに攻撃を仕掛け戦い始めた。

統夜は精神世界で吸血鬼の力を持つ真紅の影と戦っていた。最初は真紅が優勢だったが大切な人達を守り抜くという一番大切な事を思い出した統夜が押し出し最後の一撃での決着の末勝利を得た。

真紅に勝利した統夜は現実世界へ戻りユルゲンに蹴りで吹き飛ばした。

統夜「あいにく俺は大切な人達がいる……二度も墓穴に入ってしまったるか……見せてやるぜ……ユルゲン……『本当の化け物の力をな!!』」

統夜「これが化け物の力……吸血鬼の力だ!!はあああああ!!」

統夜の髪の色が銀髪に変化し瞳の瞳孔が縦になり瞳の色が真紅に変化した姿……吸血鬼化に変化した後……

統夜「集いし願いが……新たに輝く星となる……光さす道となれ……起動せよ!!サーディオン!!」

吸血鬼に目覚めサーディオンを起動させた統夜はユルゲンを圧倒し

最後の一撃であるブラッドスラッシュで終わらせ勝利を得た。

その後達哉の父である千春がやって来て達哉と再会し、統夜達は入院が決定された。

統夜はビリーからアブソリュートエターナルの改良型のフォーチュンエターナル、アブソリュートブラスターの改良型のフォーチュンブラスター、ターニングザーを受け取った。ターニングザーを受け取った際、待機状態が蒼い十字架が描かれた腕輪に変化し名前をセイクリッドファングと名付けた。

ビリーが帰った後統夜ラバーズが病室へ駆けつけた。その後怒られた。

はやて「カッコイイわ」

瑞希「それは・・・はやてちゃんを含む統夜ラバーズの皆さんだけだと思えます・・・」

美波「吸血鬼の力はうちでも驚くよ」

フィーナ「あれは驚くわ」

メイメイ「吸血鬼って存在してたね！」

桂花「でも気になる事を心の中で言ってたわね・・・千春って人が・・・」

ルイス「三大冥王・・・」

華琳「気になるわね・・・」

翔子「・・・お邪魔します・・・」

雄二が大好きな翔子がお茶会に参加した。

はやて「そう言えば・・・優子ちゃんと翔子ちゃんが出てくるんやっただな」

優子「やっと出て来れたわ・・・」

優子はガッツポーズをして喜んでいた。

それを良しとしない秀吉と瑞希、美波から睨まれたのは言うまでも無かった。

優子「次行くわよ！」

第二十四話にてユルゲンとの戦いが終えて数ヶ月経ち統夜は二つの学園のトップから頼まれ文月学園の2-Aクラスに転校してきた。転校初日からAクラスから質問攻めが始まり優子が統夜の手を引っ張って屋上まで連れて行かれ再会した。

その後試験召喚獣や試験召喚戦争の仕組みを優子から教わりながら昼食を食べていた。

はやて「優子ちゃん・・・貴方も人の事言えへんで？」

優子「ぬぐっ・・・久し振りなんだからしょうがないじゃない！はやて達だって・・・一緒に統夜とご飯食べてるじゃない！」

はやて「それは否定せえへんよ」

文乃「と、統夜が食べたいと言ってるんだから仕方なく一緒に食べてるだけなんだからね！！」

秀吉「文乃・・・それは一緒に食べたいとしか聞こえんぞい・・・」

素直になれない文乃に秀吉は呆れ口調で呟いた。

瑞希「次は私達が出てきますね」

美波「うちの出番・・・そしてアキが再び出てくる話ね」

秀吉「遂にワシらの出番・・・」

翔子「雄二の出番・・・次の話に進む・・・」

第二十五話にて統夜は自分の愛機であるバハムートで登校し鉄人こと西村先生に見つかり説教を受けた。

昼休みになりFクラスの教室へ移動し秀吉と再会し明久と雄二、康

太、瑞希、美波と一緒に昼食を取った。

明久の発言で雰囲気がかオスになり始め木下姉弟の尋問が始まり制裁された。

放課後統夜は明久に管理局の闇を共に破壊しないかと誘ったが明久は時間をくれないかと返答された。

その後康太も統夜達に協力する意思を見せた後明久はただ一人考えていた。

瑞希「明久君・・・悩んでますね・・・」

美波「アキは天川や朝霧みたいに管理局・・・セントクルセイダーズを憎んでるっばいし・・・」

優子「自分達の人生を狂わせたからね・・・三人は・・・」

秀吉「そうじゃな・・・次は・・・蒼穹の騎士団が結成される話じやな」

翔子「・・・・・・・・」

瑞希「あの霧島さん・・・どうかしましたか？」

翔子「雄二・・・浮気は許さない・・・」

美波「この時間が終わったら坂本・・・生きていられるかな・・・」

第二十六話にて明久は考えた末統夜達と共に戦う決意をし康太と共に本拠地寮へ着き達哉と再会していた。

神王と魔王、月王がバックアップする組織である蒼穹の騎士団が結成され、遊輔と達哉はビリーから新たなデバイスを渡された。

最初の模擬戦で統夜はフォーチュンエターナル、遊輔はクリムゾンフレイムをそれぞれ起動しフォーチュンザンバーとフレイムザンバーの剣劇、ネオドラグーンとフレイムファングの撃ち合い、インパルスシャインとクリムゾンブレイカーのぶつかり合いで決めようとしたが決着が着かず引き分けになった。

次の模擬戦で達哉はラピスブレイブを起動し、ダイチはリュウレンジャーに変身し中国刀を構え剣同士の打ち合いが行われ氷と炎の技

比べの末ダイチの奇襲攻撃によりダメージを受け吹き飛び、攻撃を仕掛けたダイチが倒れたと同時に達哉も再び倒れ引き分けになった。

優子「統夜と桜木君・・・ハイスピードな戦いよね・・・」

エリー「今の時代はハイスピードバトルが流行ってますからね・・・」

秀吉「近い内に・・・召喚獣にハイスピードバトルを要求しそうじゃの・・・」

なのは「アーマードなら求められるかもね・・・」

エリー「あと一歩でしたね・・・」

はやて「今の時代はアーマードになりそうやな。とと・・・次は・・・白き騎士とエアリスちゃんの初登場やな」

第二十七話にて浩次がセントクルセイダースに転属しジャツジナイトを受け取っていた。

統夜とたけしは研究所へ殴り込みロストログアと実験体の奪還に成功していた。

その後、浩次と数名の魔導師が増援として現れ、統夜とたけしはそれぞれ戦い撤退したが、統夜だけたけしより遅く撤退した。為、教会の屋根を破り下に落ちエアリスと運命的な出会いをした。

桂花「流石たけし・・・正義を語る凡愚に立ち向かう所が素敵」

メイメイ「全く素晴らしいね」

瑞希「でも・・・その人から見れば・・・テロリストですよね・・・」

はやて「じゃあ・・・瑞希ちゃんはルイスちゃんやアイリちゃんのような娘が実験動物扱いしてええと思うんか？」

瑞希「そういう訳じゃ無いですけど・・・」

美波「あいつらは裏でこんな事をしている・・・アキ達はそんな歪んだものを破壊する為にテロに近い事を行っているのよ・・・」

瑞希「分かってても・・・辛いですね・・・見てる私達は・・・」

エアリスがリビングにやって来た。

はやて「エアリスちゃん。よう来てくれたな。適当に座ってええで」
エアリス「うん。分かった」

はやて「次は運命的な出会いの続きやな」

第二十八話にて統夜とエアリスは出会い色々な事を話し合っていた。無理をしている統夜を一目で分かっていたエアリスは『でも・・・一人であり背負わない方がいいよ・・・君が壊れてしまいそうで・・・』と忠告をした。

たけしはルイスと、零斗はアイリと一緒に過ごしていた。天川家でははやての連続した爆弾発言で木下姉弟は黒いオーラが段々濃くなりつつあった。

木下姉弟ははやてに宣言した後帰って来た統夜にキスをしていた。

フィーナ「ここまで見て思ったのだけど・・・統夜は確実にフラグを立ててるわね・・・」

はやて「それは言わんとして・・・フラグで思いついたんやけど・・・遊輔君や明久君に立つ可能性があるって言ってたで」

二人の名前が拳がった瞬間なのはと瑞希、美波は反応した。

なのは「それ・・・どういう事かな？作者さん・・・」

まあ・・・いずれ分かるから・・・とりあえず・・・デバイスは止めてね。

なのは「チツ・・・」

瑞希「ここは美波ちゃんの出番ですよ。魔法少女になってテイ・ファイナーレをやれば解決です」
美波「ちよつとおおお!!!またそのネタ!!!?」

瑞希のポケに美波は突っ込んだ。

はやて「次・・・修羅と修行やな」

第二十九話にて英都港に異変を感じた統夜と遊輔、達哉、零斗、ダイチの五人は修羅王デューク率いる五霸天王と対峙していた。最初は善戦していたが徐々に押され遊輔と達哉、零斗以外のメンバーは敗北し、デュークは立ち上がった統夜に対し右拳を上へかざし誇り高く宣言した後残りのメンバーを連れて撤退した。

第三十話と第三十一話にてデューク達修羅に敗北した統夜達はたけしと明久、なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッターを斉藤商店へ連れて行った。

重力が外の世界より十倍あり外の世界と時間の流れる早さが異なる空間に入った統夜達は修行をそれぞれ始めた。

統夜は吸血鬼化のフルパワーと天神拳の奥義の修得、遊輔は機動性とパワーの向上、達哉は素早さと弱点であるパワー面の向上、零斗はマイティ真拳の強化、ダイチは気力系とパワー、機動性の向上、たけしは身体能力と技の威力の向上、明久は機動性とパワーの向上、技の修得、なのはとフェイト、はやての三人は自分達の弱点の克服及び技の強化、ヴォルケンリッターは身体能力と技の威力の向上をそれぞれやり遂げた。

優子「修羅って桁違いね・・・吸血鬼の統夜が負けるなんて・・・」
エアリス「確かに強いね・・・」

エリー「ダイチ君を傷つけたレイヴン・・・許さない・・・」
フィーナ「ファイアツカが恐れる事だけはあるわね・・・」

なのは「本当に強いね・・・拳だけで戦う種族・・・修羅・・・」
はやて「せやけど・・・私達は負けない為・・・生き残る為に厳しい修行をした・・・」

瑞希「容姿が変わったのはあの空間にいた影響だったんですね」
美波「一日が一年ってどんだけって言いたくなるわよね・・・」
はやて「次は私と統夜のデートやな」

第三十二話にて統夜とはやてのデートが始まった。

最初は映画館で明久と瑞希、美波、後から雄二と翔子の二人に出会い、ハプニングの後統夜とはやては映画を見た。

映画館から出た統夜とはやては洋服屋へ行き際どい下着やセクシーな服等を購入した後エアリスと出会った。

エアリスと話をし別れた後統夜ラバーズに追いかけられていた。

物見の丘公園で休んだ統夜とはやては康太から情報を得たラバーズの皆さんと一緒に帰った。

家に帰った統夜とはやては熱く愛し合い、朝になり残りのラバーズに皆さんとも愛し合っていた。

はやて「ん〜・・・いい思い出や〜」

瑞希「か、過激です・・・／／／」

瑞希を始め・・・女性陣は顔を真っ赤にしていた。

美波「凄いわね・・・はやて・・・」

アリス「今思ってたけど・・・体験してない主要メンバーって遊輔君と明久君だけだよな。なのはちゃんと瑞希ちゃん、美波ちゃんはどうなの？」

なのは「ゆ、遊輔君がいいなら・・・／／／」

瑞希「えっ・・・あ、あの・・・明久君と合意の上で・・・／／／」

美波「う・・・うちもよ!!!／／／」

アリスの突然の問いになのはと瑞希、美波は顔を真っ赤にして答えた。

エリー「次は私達が出てくる話ですね」

第三十三話と第三十四話にてダイチはエリーと再会し、ネロからゼイントクルセイダーズが襲い掛かって来た事を教えヨコハマへ向かう統夜とダイチ、エリー。

シャロとネロ、コーデリアのピンチに統夜とダイチ、エリーが駆けつけゼイントクルセイダーズの魔導師達を蹴散らした。

蹴散らした魔導師は統夜達をおびき寄せる為の罠であり本命は文月学園である事を知った統夜はダイチとミルクィホームズを連れて文月学園へ転移した。

文月学園前にデストロイの集団と浩次が来ており明久は一人立ち向かい戦い始めた。苦戦していた時康太から新たなる剣でありネオドライバーデバイスであるアストラルフリーダムを受け取り起動させ身体に纏わせ反撃を始めた。

アストラルフリーダムを纏った明久は浩次達を圧倒したが雪蓮と蓮華、小蓮の三姉妹が増援として現れ逆転されかけた所を統夜が現れ共闘し雪蓮達は撤退した。

統夜と明久は学園長室で事情を知らない雄二達に自分達の経緯を教えた。話を聞いた雄二達は蒼穹の騎士団に協力した。

はやて「ふと思ったけど・・・恋姫無双シリーズで最初に出て来たの・・・桂花ちゃんやな。普通やったら桃香ちゃんか華琳ちゃん、雪蓮さんのどちらかなのにな・・・」

桂花「確かに・・・私は誇れるわね・・・ファースト・・・いい気分ね」

瑞希「明久君のデバイス・・・カッコイイですね」

美波「アキの過去は重かったわね・・・」

メイメイ「あのおばちゃん（セイラ）の顔が面白かったね」

優子「うんうん。統夜に殺される運命が待っているのにな・・・」

秀吉「次は・・・管理局とセントクルセイダースの分離じゃな」

第三十五話にて本拠地寮の会議室で統夜達はセントクルセイダースだけを叩くかをテーマに話し合っていた。

桂花の策である今まで統夜達が調べた事を全次元世界に広める事に同じ考えを持つ雄二は異論を唱えた。

統夜はある少女を閃き演説をする為ミッドチルダへ転移し準備を始めた。

月の演説が始まると浩次率いる部隊が現れ通信施設の前で戦いが始まった。

時間が過ぎ自分達の所業とセントクルセイダースの存在が暴露され月の演説が最後まで終わると浩次達も撤退をした。

優子「これで完全に叩けるわね」

はやて「苦労したで・・・」

秀吉「世論は蒼穹の騎士団に傾いているしの」

瑞希「明久君達は心置きなく叩けますね」

はやて「次は・・・エアリスちゃんとコピールシファアの話やな」

第三十六話にて散歩していたはやては寂れた教会の中へ入りエアリスと出会った。

直ぐに仲良くなりガールズトークを始めていた。トークが終わると気配を感じたのか後ろにある扉の方へ振り向き歩き扉を開けるとセントクルセイダースの魔導師数人がおりはやてに襲い掛かった。修行したはやてに敵わず不利になった時エアリスを人質にとったが後ろに統夜がおり直ぐに蹴り飛ばされ解放された。

エアリスは統夜とはやての二人に古代種と星の力を教えた。はやて

はエアリスを優しく抱きしめはやての言葉が心に響き泣き始めた。
第三十七話にて統夜と遊輔、達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久の
七人は街を歩いていると右だけの片翼が生え頭部にフルフェイスの
仮面を被った魔導師の集団が空から降りて来て襲い掛かって来た。
統夜達は謎の集団と戦い勝利を収めた。その後零斗はエアリスと再会
し、連れて来た魔導師をシャマルに解剖を頼んだ。イグニスと再会
入れられた事が解剖結果で分かった。
セイラは謎の人物であるマガキと同盟を結んだ。

エアリス「泣いた所はちよつと恥ずかしいかな・・・」
はやて「何を言ってるんや・・・そこも可愛いで」

はやてはエアリスを抱きしめ始めた。

千世「はやてつて・・・両性愛出来る方？」
エアリス「似た者同士？」

フィーナ「私と達哉の映像は高野先生が撮り統夜達が見てた事は許
せないわね・・・はやて・・・見てた統夜達はどつしたのかしら？」
はやて「統夜？勿論制裁したで」

エアリス「うんうん」
瑞希「明久君は拷問と美波ちゃんとの聖王モード無双乱舞でお仕置き
しました」

美波「ちよつと待て！！聖王モードはないからね！？何嘘をついて
んの！！？ただのお仕置きよ！！」

瑞希「無いんですか・・・がっかりです・・・」
華琳「何しているのよ・・・亞沙」

美波「亞沙言うな！！そこ・・・マミやヴィヴィオ、エリナと呼ば
うとしている瑞希となのは、エアリスさん・・・いい加減にしてほし
い・・・」

瑞希「ばれました・・・」

咲夜からの挑戦状を読み英都港に来たはやては文乃達三人を解放した咲夜と勝負を始めた。

心を読む咲夜が有利になったがはやてのシュテルンキラビアーサルトを決めたが少ないダメージしか与えて無く止めとしてフレイムスマツシヤーを放ったが統夜が張った風の結界であるヴィクテム・サンクチュアリによって防がれた。

家族のいない寂しさ者の気持ちを知る統夜は心を鬼にして咲夜の最大の魔法を相殺し近付こうと移動した時咲夜は怖くなったのかフレイムソードを放った。統夜は避けようとせず何本か身体に刺さり血を流してまで咲夜の所まで近づき大切な事を教え復讐に染まった咲夜の心を救った。

瑞希「感動モノですね・・・身体を張って・・・その人の心を救う・

・・・天川君は英雄ですね・・・」

美波「うんうん・・・家族のいない寂しさを知ってる天川だから出来る事・・・」

フィーナ「『そうだ・・・姉さんとの絆がある限り・・・心の中に生きている。貴方がお姉さんの存在を忘れない限り・・・』に感動したわ・・・」

シャロ「ぐすつ・・・良かったですね・・・」

エリー「天川さんは凄い方ですね」

ネロ「普段はハジケリストでジャンキーなのに・・・凄いよな・・・」

コーデリア「彼は蒼穹の死神じゃなく蒼穹の守護者が合っているわね」

統夜の身体を張った説得に感動していた。

咲夜「今は和解して共に戦う仲間よ」

千世「もし統夜が殺してたら許さなかつたわね・・・」

希「統夜は・・・優しい・・・」
華琳「次は・・・私の初登場と遊輔の新たな剣の話ね」

第三十九話にて統夜と遊輔の二人は康太から得た情報で中国へ向っていた。

中国に着き旅館でチエックインした後遊輔は自由時間で蓮華と出会い喫茶店で蒼き霸王の魂と紅蓮の竜王の牙をセントクルセイダーズが狙っている事を教えてもらった。

蓮華からの情報を基に統夜と遊輔の二人は遺跡へ着きコピールシフアーを率いた浩次と千秋セントクルセイダーズと遺跡を傷つけないように極力力を抑えて戦い始めた。

統夜は浩次と千秋の二人と戦い続け、遊輔がコピールシフアーを全滅した頃修羅界から修羅兵の部隊が現れ三つ巴になり統夜は悩んでいると華蝶仮面と名乗った女性が援護として現れ修羅の相手をした。戦っている統夜に蒼き霸王である華琳、遊輔に紅蓮の竜王の牙であるペンドラゴブレイドという新たな力を手に入れ浩次と千秋の二人を撃退する事に成功した。

なのは「・・・」

はやて「な、なのはちゃん・・・どうかしたんか？」

なのは「あの蓮華って娘・・・遊輔君の所に来そうな感じなの・・・」

はやて「気持ちは分かるけど・・・落ち着いて・・・な？」

黒いオーラを出しているなのはに脅えている女性陣を見て言った。

なのは「巨尻で皆のお嫁さんで第一位・・・ふふふ・・・」

華琳「私は二位だったけどね・・・」

なのは「あんなお尻の大きい娘がいいのかな・・・」

フェイト「遊輔・・・フラグを本格的に立てたら・・・スターライ

トブレイカーは確定だね・・・」

はやて「いや・・・デスペレード・デモンブレイカーやる・・・」

フェイト「それって黒神さんの・・・考えた技だよな？」

はやて「統夜はまあ・・・華琳ちゃんを迎え入れた時に制裁をやっておいたから大丈夫や」

フェイト「（なのはとはやて・・・鬼だね・・・）」

シヤロ「華蝶仮面が凄いですね」

アリス「あの人・・・結構有名だよ」

優子「本当に有名なの？アレが・・・」

秀吉「世の中には不思議じゃのう・・・」

はやて「ペンドラゴブレイドは黒神さんから提供されたものを基に作製したものやからな。遊輔君に向けたガーディアンにピッタシやっただからな」

黒神さん。本当にありがとうございます。

フェイト「作者が好きな七星神刀の一つだからね」

はやて「これからも応援よろしくお願いします。次は・・・二つの学園が合併する話やな」

第四十話にて久し振りに学園へ登校している統夜達はついて来た華琳はデフォルメ形態の華琳たんモードになり統夜の頭の上に乗った色々な人から変な目で見られたが気にせず学校へ行き稟や土見ラバーズ、達哉、朝霧ラバーズ、文乃、千世、希から趣味と言われた。その後掲示板に貼られてあるクラス表を見て統夜達は2-Aクラスへ移動した。

ダイチが瑞希と美波の胸やお尻を触って追いかけられたり、統夜と明久の二人が根本マグナムと雄二マグナムの撃ち合いやコスプレ、秀吉の完全女性化、秀吉の胸に嫉妬で怒り狂った千世と美波、優子を止める等のカオスが起きていた。

体育館で学園長の挨拶が終わった後両王と月王がコスプレし挨拶どころか稟と達哉、シア、ネリネ、フィーナにそれぞれ言葉を送り、学園長からバーベナ無双大戦を始める事を発表した。

それぞれ教室へ戻り、転校生としてエステルとシャロ、エリー、ネロ、コーデリアが2 - Aに、アリスは亜沙やカレハと同じクラスにやって来た。

放課後になり統夜達は亜沙の提案として親睦会を兼ねてフローラへ行ったが親睦会からあ〜ん大会に変わりそのまま終了した。

エリー「ダイチ君・・・姫路さんの胸やお尻、マ・・・美波さんのお尻を触ってた・・・」

美波「ねえ・・・マミって言いそうになったよね!？」

エリー「気のせいだよ。美波ちゃん」

フィーナ「あの時のお父様には驚いたわ・・・」

優子「この話から秀吉は女になってしまった・・・」

秀吉「ワシは満足してるぞい」

華琳「私の新たな形態も披露できたし・・・」

優子「私達のクラス・・・大半がハジケリストね・・・ツッコミリストになつてしまうのかしら・・・私・・・」

瑞希「大丈夫ですよ。某ラッキスターに出てくるツンデレツインテールさんみたいで良さそうで・・・」

優子「喧嘩売っているのかしら？姫路さん？」

額に青筋を浮かべて瑞希に対して言った。

瑞希「い、いえ・・・」

優子「ならいいけど・・・次は・・・バーベナ無双大戦ね・・・」

第四十一話〜第四十三話にてバーベナ無双大戦が始まった。勝ったチームは金一封と如月グランドパークのプレミアムチケットが貰え、

負けたチームは罰ゲームとして黒神さんの許可を得た混汁とマスモデウス活け漬の焼酎、暗黒物質を混ぜたシャマルドリンクを飲まなければいけないものだった。

バーベナ無双大戦が始まった瞬間ダイチの攻撃で西軍の一部を黒焦げにし脱落させ、優子は美春を試験召喚戦争で速攻倒し学園長から追加ルールとして混汁とマスモデウス活け漬の焼酎のどちらかを飲まなければいけなかった。

両チームはそれぞれ各場所を制圧しながら単独行動を取る者がいた。その間にも試験召喚戦争で負けた者達は混汁とマスモデウス活け漬の焼酎を飲み気絶する等の悲劇があった。

中ではダイチがヤンデレ化したエリーに追いかけられたり、翔子がマコト・ナナヤに変化する等のカオスが起ったが戦いの末統夜率いる東軍が勝利を収めた。

はやて「これは本当に楽しかったな」

優子「飲まなくて本当に良かった・・・」

フィーナ「あれは本当に地獄だったわね・・・」

負けた西軍に所属していた女性陣ははやて達を睨んでいたの言うまでも無かった。

瑞希「天川君が・・・頭良かった事に驚きでしたね・・・」

優子「そりゃね・・・元々良かったし・・・」

秀吉「不得意な科目は無いの」

美波「腕輪の能力がチートだった・・・そのお陰で瑞希は・・・混汁を飲む羽目になりアキは天川に戦いを挑んだ・・・結果・・・負けてしまったけど・・・」

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんの二人はきつかった・・・」
フィーナ「魔法無しでは厳しいという事だけは理解出来たわ・・・」

菜月「あれを飲むの・・・二度とゴメンだね」

翠「前より進化してたり・・・次は・・・なのはの話だね」

第四十四話にてなのはは六年前に重傷を負い自分のリハビリに付き合ってくれた遊輔の事を完全に思い出していた。

親友であるフェイトとはやてに相談した結果デートに誘うようアドバイスした。なのはは遊輔にデートの誘いを即答でOKした。

約束の休日になり統夜とはやて、フェイト、ユーノの四人は遊輔となのはのデートを見守っていた。だが康太からの情報でなのはの兄である恭也が異端審問会と一緒にデートの妨害しようと企んでいた。第四十五話にて遊輔となのはのデートは順調に進んでいる所に恭也と異端審問会は行動を始めていた。

喫茶店から出ると親衛隊の連中が出て来たが直ぐに撃退した後映画館へ行き映画を見終え出ると常夏コンビが現れ直ぐに撃退した。

常夏コンビを撃退した後海が見える公園へ行き海を見てみると樹と雄二、異端審問会の連中が現れなのははクリーンな方法で雄二を退場させ樹と異端審問会の連中にデイバインバスターを放ち黒焦げにした後遊輔をビルの屋上へ跳び去った。

なのはが告白しようとした時恭也が乱入し遊輔に勝負を申し込んだ。遊輔は恭也の剣をことごとくかわし防ぎ、小太刀二刀御神流・奥義之極み『閃』をも防いだ。その後反撃し恭也を吹き飛ばし倒した。嫉妬なのか恭也は起き上がり連撃を仕掛けるがかわされ遊輔の炎を纏った拳で殴り飛ばされ気絶した。

その後なのはは遊輔に見事告白した。

はやて「くうくう・・・良かったなあ」

なのは「うん。良かったよ」

フェイト「おめでとう。なのは」

なのは「ありがとう。フェイトちゃん！」

優子「最後の勝負って・・・言いたくないけど・・・分かり切ってるよね？」

華琳「そうね・・・次は・・・用語の説明をしようかしら」

はやて「せやね。最初は魔力と気力、霊力、妖力、覇気の説明やな」
魔力は魔法を扱う際に必要不可欠で魔力量が多いければ多いほど強い魔法が使える。気力は気功術等に使われる力で身体能力に影響を及ぼす力でもある。

霊力は式神召喚や陰陽術、霊術等を扱う際に必要不可欠な力で霊力量が多いければ多いほど強い陰陽術や霊術等が使える。妖力は妖怪の種族にしか無い力で妖術等を扱う際には必要不可欠。妖力量が多いければ多いほど強い妖術等が使える。

覇気とは気力の上位種にあたる力で誰もが扱える者では無く攻撃力や防御力の増強等に使われる。覇気には三つの本当の使い方があり基本的には防御の覇気だが攻撃に応用する事により、攻撃力を上げる事ができレアスキルによる特殊防御等を無効にする武装色、周りの声を聞く事が出来る見聞色、人の上に立つ王の資質を持った者だけにしか無く半端な気持ちの者を覇気で気絶させる事が出来る覇気色の覇気の三つがある。

覇気色の覇気は誰もが有るものではない。魔力と気力、霊力、妖力、妖力、妖力を一つに纏めたものは五気と呼ばれる。

尚覇気の本当の使い方統夜と零斗は知らない。

文乃「凄いわね・・・」

希「五気が扱える統夜はより凄いな・・・」

エステル「魔力と気力、霊力、妖力、覇気・・・全て扱えますからね・・・」

優子「でも本当の使い方は知らないのよね・・・」

秀吉「人間じゃないからの・・・」

アリス「零斗が覇気を扱えるなんて凄いな」

エリー「ダイチ君は気力に特化してますから・・・覇気も扱えそうな気がします」

メイメイ「たけしも気力と覇気が扱えるかもしれないね」
はやて「次は・・・七人の主要陣の紹介やな」

天川 統夜・・・元時空管理局特殊部隊ソルジャーの生き残りの一人。

ユルゲンとの戦いで吸血鬼の力と妖力が覚醒し勝利し月と地球を救った英雄になった。

修羅との戦いの後天神拳を全て習得し覇気を身に付け中国の遺跡で華琳と契約し力を付けつつある。

本当の種族が吸血鬼なのかは今のところ不明で種族に関しては謎に包まれている。本当の種族を握る鍵はルシファーと三大冥王の二つの用語である。

使用デバイスはフォーチュンエターナルとフォーチュンブラスター、サーディオン、セイクリッドファンゲ

桜木 遊輔・・・なのはの命の恩人にして次元世界を旅をしている青年。

時空管理局と敵対しており違法研究施設の襲撃やロストログアの奪還（持ち主がいた場合は返還してる）をしている。

月人居住区にて統夜と戦った後好敵手であり相棒として協力している。

自分の志である「世界中の人々を笑顔にする」を自分なりに見つけ戦い続ける覚悟はある。

中国の遺跡でペンドラゴブレイドにマスターとして選ばれ力を付けている。

使用デバイスはクリムゾンフレイムとペンドラゴブレイド

朝霧 達哉・・・元時空管理局特殊部隊ソルジャーの生き残りの一人。

統夜と共に時空管理局と敵対し違法研究施設の破壊を手伝っている。

現在は月のスフィア王国のフィーナ・ファム・アーシユライトと婚約者となり次期月王候補になっている。

七人の中では速さが折り紙つきで神速の域に達し氷系の魔法と剣術も伊達では無い。

使用デバイスはラピスブレイブ

北郷 零斗・・・放浪の旅をしているマイティ真拳継承者。

管理局の腐敗であるセントクルセイダーズの噂を聞いて統夜達と出会い共に闘う決意をする。

ハジケリストであり統夜や明久らと一緒にボケたりハジケたりしている為達哉や稟、文乃、優子のような常識人の苦労度数が大幅に上がったのは言うまでも無い。

実力は統夜や遊輔に匹敵する強さを持ち覇気が使え。

アリスとは恋人であり肉体関係を持っている。

マイティ真拳は色々な漫画やアニメ、ゲーム、ラノベ等の技が使え自由自在の流派である。

リュウ・ダイチ・・・統夜の友人であり最強の気力使いを目指している少年。

達哉との試練以前に五つの天宝来来の玉が刃の面についている中国刀である五星刀を手にしている事と魔法に近い技を持つ為管理局から命を狙われている。

かなりのスケベである為様々な女性陣から軽蔑されている。ミルキイホームズの一人であるエリーとは恋人同士で肉体関係になっている。

右手に付いているオーラギャザーのキーを展開させ、垂直に立てた左手のオーラスプレッダーに差し込んでリュウレンジャーに変身する事が出来る。

竜崎 たけし・・・零斗によって召喚された少年で将来の夢はハリ

ウツドのアクションスターになること。その為、空手と器械体操を習っており戦闘能力は高い。

特殊な剣であるスターライザーと両手に付いているパワーブレスのスイッチを起動させて超力変身するオーレッドで戦う。

特殊な力を持っているが故か管理局の上層部『セントクルセイダーズ』に命を狙われている。

幼馴染であるメイメイ、桂花、ルイスの三人とは恋人である。番外編である『超力戦士の一日』で桂花と肉体関係を持った。

吉井 明久・・・元時空管理局特殊部隊ソルジャーの生き残りの一人。

二年前にセイラの陰謀で起きたソルジャーとウータイ壊滅の事件で生き延びたが信じていたものに裏切られた事によりショックを受けた。

統夜や達哉と同じくセントクルセイダースに対し憎しみを持つ。統夜や達哉には及ばないが戦闘能力は高い。

当初は戦うのを拒んでいたが瑞希や美波を守る為に統夜達と共に戦う決意をする。

使用デバイスはアストラルフリーダム

はやて「凄いな」

美波「てか・・・天川が扱うデバイスの数多くない!？」

秀吉「主人公じゃからしょうがないじゃろ・・・」

優子「統夜の本当の種族を握る鍵は・・・ルシファーと三大冥王・・・か・・・」

メイメイ「凄いな」

瑞希「明久君は私達の為に戦う決意をしてるんですね」

フィーナ「達哉は氷系統が得意なのは分かってたけど・・・」

麻衣「かき氷作れそうだね」

菜月「達哉に頼んだら絶対泣くわよ・・・」

エリー「ダイチ君も凄いです」
はやて「ほな・・・四人のデバイス紹介やな」

フォーチュンエターナル・・・アブソリュートエターナルの発展型のネオアーマードデバイス。装甲にはルナチタニウムとマシンセルが使われ自己修復機能を持つ。

IESはOIESが使われており出力が上がり機動性も上がっている。

武装はエターナルヘッド、フォーチュンウイング、ネオドラグーン、エターナルフェザー、エターナルフィスト、プリズムカリドウス、エターナルシューター、プラズマゼットブレイド、スパークスファイアス、エターナルサーベル、フォーチュンザンバー、フォーチュンランチャー、ネオフラツシュエッジ

フォーチュンブラスター・・・アブソリュートブラスターの発展型のネオドライバードデバイス。装甲にはフォーチュンエターナルと同じルナチタニウムとマシンセルが使われ自己修復機能を持つ。

火力重視から高機動近接用として改良され機動性重視になった。使用IESはOIESとBIESの中間に当たるIESで、出力はOIESに劣るがBIESより十倍高く安定性も高くなっているTIESが使われている。

武装はブラスターロッド、ブラスターソード、ブラスターウイング、ブラスタースナイパー、ブラスターロング、ブラスターショット

サーディオオン・・・クロノが統夜に託したガーディアンデバイス。ガーディアンデバイスとはアルハザードや古代ベルカ時代に存在されたものでインテリジェントやアームド、ストレージの原点であり性能は高性能なデバイス。

使用者はかなりの技量を求められる為使い手を選ぶデバイスでもある。

M I E Sと呼ばれるオメガを超える出力を誇るI E Sと相手の特殊魔法等を無効にするシステムのサンクチュアリシステムが搭載されている。

セイクリッドファンゲ・・・ユルゲンが使用していたターンギャザーが統夜専用に進化したアーマードデバイスウエポンドライバータイプ。

アーマードデバイスウエポンドライバータイプとはアーマーから何らかの武器に変形するものである。

性能はサーデイオンとペンドラゴブレイドに匹敵する。

搭載システムはM I E S、アーマーリンクシステム、オートムーブシステム、ウエポンドライバーシステム、マックスドライブシステム
武装はシャイニングブレイカー、セイクリッドランチャー、セイクリッドサイト、シャイニングサンダー、セイクリッドブラスター、ファンゲブレード、バトルスクランダー、ブラディ・シージ、セイクリッドマックス

詳しい詳細は後ほど

クリムゾンフレイム・・・フォーチュンエターナルの基本データを参考にした遊輔専用開発されたネオアーマードデバイス。

装甲にはルナチタニウムとマシセルを使用しており頑丈で自己修復機能を持つ。高火力と攻撃特化である為やや装甲は重装甲になっている。使用I E SはO I E S。

武装はクリムゾンヘッド、クリムゾンウイング、クリムゾンフェザー、フレイムザンバー、フレイムハンド、クリムゾンブレイカー、バーニングクレイモア、フレイムファンゲ、ソードマニピュレーター、プリズムカリドウス

ペンドラゴブレイド・・・中国の遺跡から発掘されたガーディアンデバイス。

サーデイオンと同時期に開発され竜の牙で作られている為、最大の攻撃力を誇り炎の使い手にしか扱えないようになっていた。

性能はサーデイオンやセイクリッドファンクと同等の性能を誇る。現在は遊輔がマスターとして選ばれている。

M I E Sと周囲の熱や露散した魔力等のを吸収し己の炎の力に変換し攻撃力を増加させるヒートギャザーシステムを搭載している。

尚ペンドラゴブレイドの元ネタは黒神さんの作品である『リリカル銀魂』Striker's『攘夷戦争鎮魂歌』に出てくるアーサア・K・ソルドウナイトが使っていたガウシエンデバイスである。そのペンドラゴブレイドはアーサアからスバルに渡っており使われている。

ラピスブレイブ・・・スファイア王国が達哉専用開発したネオアーマードデバイス。

装甲はルナチタニウムとマシンセルを用いており自己修復機能を持つ。使用I E SはO I E S。

武装はラピスヘッド、ラピスマント、ブレイブカリバー、ラピスアームズ、プラズマゼットブレイド

アストラルフリーダム・・・フォーチュンエターナルとクリムゾンフレイムの基本データを基に開発された明久専用ネオドライブデバイス。

装甲とフレームにはルナチタニウムとマシンセルが使われており自己修復機能がある。

フォーチュンエターナルとクリムゾンフレイムの長所が合わさったものであり機動性も高い。使用I E SはO I E Sである。

武装はフリーダムヘッド、アストラルユニット、アムフォルタス、フォルティス、拡散構造相転移砲、アストラルシールド、スタックビートルクラッシュャー、アストラルサーベル、アストラルドラグーン、プラズマゼットブレイド、アストラルライフル、アストラルオ

クスタン、アストラルカリバー

なのは「うわぁ・・・凄いね・・・」

優子「てか・・・統夜のアーマード・・・種運命の自由と運命、正義、ヴァイスリッター・・・ガンダムとスパロボ関連が多いわね・・・」

なのは「遊輔君のは・・・鋼鉄の孤狼にアルケーが混ざってるね」
瑞希「明久君のは・・・武装多いですね・・・戦闘機からアーマーに変化して纏う・・・種運命に出てくるセイバーとビルガー、ファルケンですね」

フィーナ「達哉のラピスブレイブは・・・ヴァイサーガがベースね」
美波「MIESって本当に凄いよね・・・」

はやて「サーディオオンとペンドラゴブレイド、セイクリッドファンクの三つしか確認されてないやからなあ・・・」
エステル「性能も大幅に違いますからね」

女性陣は四人のデバイスの詳細に驚いていた。

はやて「次は・・・面白いものがあるなあ」

ママ「ものお　てに流れてくる主題歌が流れて双子の姉のコスプレをした明久と双子の弟のコスプレをした統夜、正体不明のミニチュアシユナウザー犬の着ぐるみを着た雄二が映し出された。
統夜と明久、雄二は振り付けをしながら歌い始めた。

歌い終わると映像は終了した。

はやて「・・・・・・・・」

文乃「・・・・・・・・」

優子「・・・・・・・・」

咲夜「・・・・・・・・」
瑞希「・・・・・・・・」

はやてと文乃、優子、咲夜、瑞希は大量の鼻血を出していた。

美波「ええーっ！っ！！本当に大丈夫！！？」

瑞希「あれは・・・・・・・・とんでもない破壊力です・・・・・・・・ふふふ・・・」

はやて「せやな・・・・・・・・お持ち帰りしたいわ・・・・・・・・」

文乃「・・・・・・・・可愛い・・・・・・・・」

美波「うおiiiiiiii！！！！？狼少女のまさかのキャラ崩壊！！？」

優子「あれは・・・・・・・・反則よ・・・・・・・・」

咲夜「一緒に抱いて寝たいわ・・・・・・・・」

翔子「雄二・・・・・・・・可愛い・・・・・・・・」

美波「（何か・・・・・・・・やりたい放題だよね・・・・・・・・）」

しばらくしてはやて達は回復した。

はやて「このHERO・S EPISODEで質問をくれたのは世紀末雑魚さんがはじめてやったな・・・・・・・・本当にありがとうございます」

優子「次は感想で支配者さんからはファンになったって書かれてたわね・・・・・・・・統夜は・・・・・・・・リリカル銀魂の銀さんに似てる・・・・・・・・確かに似てるわね」

秀吉「龍の骨さんはキャラを提供しいつも見てくれて感想を出しているの。本当にありがとうございます」

文乃「黒神さんからはペンドラゴブレイドや混汁等のネタの提供、感想を貰ったわね。本当にありがとうございます」

カナ「龍の骨さんと世紀末雑魚さん、黒神さん、支配者さん、酸欠帝さん、White Sealさん、イブニングゼロさん・・・・・・・・本当に感想ありがとうございます」

はやて「これからもメインヒロインである私・・・八神 はやてが出ているHERO'S EPISODEをよろしく願いします」
文乃「ちよつと待てや・・・そのメインヒロインって言うのは凄い腹が立つんだけど・・・」

優子「女性陣の中で一番出番のある余裕の発言かしら？」

カナ「凄いムカつくんだけど・・・」

プリムラ「調子に乗っちゃ駄目だよ？」

しばらくお待ちください・・・

はやて「すみませんでした・・・各ラバースの皆さんが印象に残った話はなんですか？」

フィーナ「私は統夜と咲夜の対決で復讐の心を無くした所が素晴らしかったわ」

瑞希「私は月と地球の絆の再生が凄かったです。二人が分かり合いユルゲンと言う歪みを破壊し絆の再生が特に・・・」

はやて「私は・・・フィーナちゃんと一緒に。家族のいない寂しさを分かる統夜は身体を張って説得した所が良かったで」

アリス「バーベナ無双大戦かな。色々な人との対決し賞金が貰えた所が・・・」

エリー「私は・・・天川さんとなのはさん達の対決ですね。かつて一緒だった相手と戦わなくちゃいけない辛さを殺してるものを感じました」

メイメイ「管理局とセントクルセイダースの分離が良かったね。自分達のやってきた事は無駄じゃないという事が証明された気分が良かったね」

はやての問いにそう答えた。

はやて「本編は次から再開されますので・・・これからも『HER

O・S EPISODE「ヒーローズエピソード」をよろしくお願ひします」

フィーナ「悪を凍て尽くす達哉の活躍も期待しててね」

アリス「零斗のマイティ真拳が炸裂するよ」

瑞希「ギャグもありますので期待しててください。そして明久君の活躍を楽しみにしてください」

エリー「ダイチ君と私達ミルクィホームズも活躍するかもしれないので期待してください」

メイメイ「たけしの超力が悪という名の歪みを破壊するのを楽しみにしててね」

なのは「紅蓮の炎で全てを焼き尽くす遊輔君の活躍も期待しててね」
はやて「ほな・・・お開きにしようか。今までありがとうな」

はやての号令で解散した。

これにて放課後ティータイムならぬ女だらけの総集編ティータイムは終了した。

番外編『ドキッ！女だけの総集編ティータイム』（後書き）

後書きにて……

統夜「さて……」

あるDVDをある場所へ転送した。

達哉「お前……何を転送した？」

統夜「お前と達哉ラバーズのエッチシーンの動画を龍の骨さんと黒神さん、世紀末雑魚さん、支配者さんに送った」

達哉「あんななんばしよつとねーっ！！！」

統夜「いいじゃねえか……減るもんじゃないし。そして色んな人から弄られる」

零斗「そうだそうだ」

雄二「統夜……明久……何で俺が犬の着ぐるみ着て振り付けやらなくちゃいけないんだよ！！」

雄二が統夜と明久に怒鳴った。

二人は……

統夜「お前は霧島の犬みたいなものだろ」

明久「霧島さんに素直にならないからこうなるんだよ」

当然の様に答えた。

雄二「テメエら・・・殺す!!」

キレた雄二が襲い掛かるうとしたが・・・

統夜「少し黙っておけ」

指でパチンと鳴らし蒼炎で雄二を燃やして黙らせた。

統夜「そんじゃ・・・お開きにするか・・・」

零斗「そうだな・・・」

遊輔「これからもよろしくな」

第四十六話 『閃光の嵐』 (前書き)

統夜「なあ……明久よ……」

明久「何？」

統夜「文月学園ってさ……スパロボ学園とか作れそうだよ……
声優ネタで……」

明久「それは言わないで……」

高橋「HERO'S EPISODE 第四十六話 始まります」

第四十六話 『閃光の嵐』

第四十六話 『閃光の嵐』

とある街にあるホテルの部屋に雪蓮達三姉妹がいた。

蓮華「どうするのですか？」

雪蓮「あいつらがマガキ達に手を貸した今・・・既に見切りをつけるわ」

蓮華「そんな事したら・・・冥琳はどうなるのですか！？姉様にとってはかけがえの無い人でしょう!？」

雪蓮「分かってるわよ・・・けど・・・私達三人では助けられない・・・それに・・・居場所も分かってないのよ？」

セイントクルセイダーズに人質として囚われている冥琳の事について話し合っていた。

雪蓮達三姉妹と冥琳は離れ離れになっており居る場所が掴めないでいた。

蓮華「分かっていますが・・・」

雪蓮「蒼穹の騎士団に賭けるわ・・・あの中に・・・土屋 康太がいる・・・」

小蓮「あの情報のエキスパートねえ・・・」

蓮華「具体的にどうするのですか？」

雪蓮「こうするのよ・・・ボソボソ」

雪蓮は蓮華と小蓮にしか聞き取れない小声で作戦を話した。

蓮華「なるほど・・・」

小蓮「それならいいんじゃない」

雪蓮「それじゃ・・・早速始めるわよ」

雪蓮達は早速ある作戦を開始した。

その頃・・・

統夜「全然居場所が掴めないか・・・」

本拠地寮の中に統夜と遊輔、明久の三人が康太から得た情報を見つめていた。

明久「ムツツリー二でも見つけれないなんて・・・」

遊輔「そう言うな・・・康太だって頑張っているんだ・・・それに・・・」

統夜「誰かを捕えればいい事だ」

すると・・・

突然手紙が統夜達三人の前に転送された。

明久「何だろう?」

遊輔「とりあえず・・・開けるか?」

統夜「ああ」

統夜は手紙の封を開け中身の手紙を読み始めた。

統夜「え〜つと・・・何々・・・蒼穹の騎士団へ告ぐ・・・我らは決闘を申し込む。そちらが勝てばセントクルセイダーズの情報

を与え共に戦う事を約束しよう。そちらが負ければ蒼穹の騎士団及び協力者は捕虜になって貰う・・・受けるか受けないかはそちら次第・・・受けるのであれば三人で指定された無人島に来い」

明久「畏・・・かな？」

遊輔「だが・・・こつちも情報がほしい・・・」

統夜「俺も遊輔の意見に賛成だ・・・例え・・・畏だとしても・・・捕虜にすればいいだけの話だ・・・」

明久「分かった・・・指定された場所へ行こう」

統夜と遊輔、明久の三人は指定された場所へ転移した。

指定された場所まで来た統夜と遊輔、明久の三人は周りを見回していた。

明久「ここでいいのかな？」

遊輔「誰か来るぞ」

統夜達の前に・・・

雪蓮「よく来たわね」

蓮華「・・・」

小蓮「本当に来たんだ」

雪蓮と蓮華、小蓮の三人が現れた。

統夜「アンタ達か・・・」

遊輔「・・・」

明久「文月学園に現れた人達だ・・・」

雪蓮「素直に来てくれて・・・本当に感謝してるわ」

統夜「その前に聞きたい事がある？」

統夜は雪蓮に問い掛けた。

雪蓮「何かしら？」

統夜「この手紙を送ったのはアンタ達か？」

送られた手紙を雪蓮達に見せた。

手紙を見た雪蓮はふっと笑い・・・

雪蓮「そうよ・・・私達は卑怯な真似はしないわ・・・何処かの組織とは違ってね・・・」

統夜「そりゃご尤もだ・・・始めようぜ」

統夜はフォーチュンエンターナル、遊輔はクリムゾンフレイム、明久はアストラルフリーダム、雪蓮はシュベスターファング？、蓮華はシュベスターファング？、小蓮はシュベスターファング？を起動した。

統夜「俺は長女の方を・・・遊輔は次女・・・明久は末っ子を頼む」
遊輔、明久「了解」

統夜は雪蓮、遊輔は蓮華、明久は小蓮の組み合わせの戦いが始まった。

戦いが始まった時から雲行きが怪しくなり始めた。

遊輔サイド

遊輔はフレイムザンバーを右手に持ち蓮華が射出してきたシュベスタードラグーンのオールレンジ攻撃を回避していた。

遊輔「オールレンジか・・・なら・・・行け！フレイムファング！」

両腰のバインダーから10基の爪型フライヤーであるフレイムファングを全て射出し10基のシュベスタードラグーンとの撃ち合いが始まった。

蓮華「やるわね・・・遊輔・・・でも甘いわ」

蓮華はフライヤーの操作をフルに活用してフレイムファングを撃ち落とし銃身が長く連射が可能な高出力ビームライフルのシュベスターライフルで的確に遊輔を狙い撃った。

シュベスターライフルからのビームを回避しながら遊輔はフレイムガンバーを構え得意である白兵戦で挑もうと突撃をしたが・・・

蓮華「ビームの雨で形成される防御壁を忘れて貰っては困る！」

シュベスタードラグーンを巧みに操りビームの雨の防御壁を形成し近づかせないようにした。

その後シュベスタープラットにシュベスタードラグーンを収納した後右肩の上にある砲台であるシュベスターメガランチャーを発射した。

遊輔「オールレンジに高火力の組み合わせか・・・」

上空へ飛翔し回避しフレイムガンバーを左手に持ち替えて右腕にあるクリムゾンブレイカーを構えた。

蓮華「貴方の力はそんなものじゃないでしょう？」

遊輔「うおおおおお！！！」

バーニングクレイモアに搭載されてある大型ブースター4基を噴射し突撃をしクリムゾンブレイカーで撃ち貫こうとした。

蓮華は遊輔のクリムゾンブレイカーをブレイズルミナスで形成された刃を発生させるグリップであるシュベスターサーベルの二刀流で防いだ。

蓮華「くっ……パワーだけは……そっちが上のようね……」
遊輔「そっちは機動性と火力だね……」

お互いそのままの体勢で押し合い始め……

遊輔「はあ!!」

両脚と爪先にエネルギー状の刃が発生する隠し腕が装備されているソードマニピュレーターを蹴りでシュベスターサーベルの片方を弾き飛ばし……

蓮華「しまった!?!」

遊輔「はあ!!」

左手に持ったフレームザンバーで装甲を斬って前へ蹴り飛ばした。

蓮華「やるわね……まだ!」

蓮華は機動性を活かし間合いを取った。

明久サイド

明久「君が相手か・・・」

小蓮「シャオをあの人のように甘く見たら駄目だよ」

明久はアストラルライフル、小蓮はシュベスターハンドを用いて撃ち合いを始めた。

何度か撃ち合いをした後明久はアストラルサーベル、小蓮はシュベスターチャクラムを用いて打ち合いが行われたが・・・

明久「はあ！！」

鏢競り合いの状態で右脚のプラズマゼットブレイドを用いた蹴りを仕掛けたが・・・

小蓮「やるじゃん・・・でもね・・・」

右手に持ったシュベスターチャクラムだけで鏢競り合いし左手に持ったシュベスターチャクラムでプラズマゼットブレイドを防いだ。

その後右肩にある武装コンテナ兼用シールドのシュベスターシールドから発射される魔力ミサイルのシュベスタースプリットを発射し直撃させた。

明久「ぐわっ！」

小蓮「性能だけじゃシャオには勝てないよ」

両手にシュベスターチャクラムを手にして明久に向った。

明久「行け！！アストラルドラグーン！！」

両腰と腰裏から砲台が上下に二つあり二基ずつ計六つある強化型フライヤーであるアストラルドラグーンを全て射出し小蓮に向けて攻

撃を仕掛けたが・・・

小蓮「甘いよ〜シユベスターステルス!!」

ピンク色の粒子を広範囲に散布しアストラルドラグーンをジャミングし使用不能にさせた。

明久「フライヤー封じか・・・」

封印魔法陣からアストラルライフルとアストラルカリバーを取り出し真つ向からぶつかり合い始めた。

明久はアストラルカリバーの刀身に魔力を込め小蓮を前へ飛ばしアストラルライフルを連射モードで発射しながら間合いを取り始めたが小蓮は右へ回避した。

二人はハイスピードで動きながらアストラルライフルとシユベスターハンドでの撃ち合い、アストラルカリバーとシユベスターチャクラムの鏢競り合いが行われた。

火花が散る鏢競り合いに決着が着かずお互い間合いをとる形でバツクステップした。

小蓮「強いね・・・でも・・・え〜っと・・・」

明久「僕の名は吉井 明久・・・」

小蓮「明久・・・か・・・よく見ればいい男じゃ無い・・・」

それを聞いた明久は青ざめた。

そりゃそうだろう・・・フラグ成立になるのかもしれないのだから・・・

もし成立したら瑞希と美波の怒りはとてつもなくセイラと戦ってた方が数十倍マシと明久は必ず言うだろう・・・

明久「そ、それは・・・どうも・・・」

小蓮「もしシャオが勝ったら・・・私の下僕になりなさい」

明久「僕が勝つたら・・・知っている事を教えて貰うよ・・・」

再び明久と小蓮はハイスピードの撃ち合いを繰り返した。

統夜サイド

統夜は雪蓮とハイスピードバトルを繰り返していた。

蒼い刀身にエネルギー発生装置がある片刃の特殊大剣のフォーチュンザンバーと刀身と柄が銀色の片刃の大剣のシュベスターバスターの鏢競り合いで火花を散らしていた。

雪蓮「わお・・・やるじゃない」

統夜「そりゃどうも・・・」

勝負が決まらないのか統夜は後ろへスライドするように下がりフォーチュンウイングからフライヤーであるネオドラグーンを十基全て射出しオールレンジ攻撃を雪蓮へ仕掛けた。

雪蓮「フライヤー対決ね・・・行け！！ファンゲ！！」

両腰のバイナダーから爪を模した強化型フライヤーのファンゲを八基全て射出しネオドラグーンと撃ち合いを始めた。

統夜「行け！！」

蒼いエネルギーを放出して翼を形成したエターナルフェザーから蒼い光の弾を発射しファンゲを破壊しようとしたが全て避けられた。

雪蓮「残念・・・ファングの操作はこれでも上手いのよ・・・ね！」

自分の勘でネオドラグーンをファングで全て撃墜した後右の掌から重力波を放つグラビティインパクトを収束し統夜に攻撃を仕掛けたが、スラスターを利用し回避された。

統夜「（短時間でドラグーンを落とされるとは・・・だが後少しで修復される間・・・どうするか・・・）」

フォーチュンザンバーをフォーチュンウイングの右側に収納し両手にエターナルシューターを手にし、右手に持っている方は連射し、左手に持っている方は高出力発射した。

統夜「まだまだあるぜ・・・」

胸部から高出力魔力ビーム砲の拡散構造相転移砲を発射した後エターナルシューターを連射しながらMBSを利用した移動を始めた。

雪蓮「チツ！フォーチュンエターナルは元々射撃タイプのネオアーマード・・・」

回避したが拡散構造相転移砲だけは回避出来ず左肩部分にある刀身が銀色で柄が金色の長剣のシュベスターカリバーが破壊された。

雪蓮「速い！？」

統夜「とっておきのコンバットパターンだ！！」

エターナルシューターの連射弾が雪蓮にヒットしたのを確認した後

いつの間にか背後から両腰の強化型レールガンであるスーパークスファイアスを連続発射した。

雪蓮「くっ!」

統夜「そして復活したネオドラグーンの雨を喰らいな!」

残骸化したネオドラグーンがマシンセルで自己修復し雪蓮にオールレンジ攻撃を仕掛けた後ネオドラグーンを全て収納しエターナルシユーターを並列合体させ最大出力で発射したが・・・

雪蓮「最後のは当たってやる訳にはいかないわね!!」

上空へ飛翔しエターナルシユーターのビームを回避した。

回避したのはいいが所々ダメージを負っていた。

統夜「あいつら二人じゃ無理なものも分かるわ・・・アンタ・・・本気出してないだろ?」

雪蓮「あら・・・分かつちゃった?」

統夜「そりゃな・・・次女と三女もそうだ・・・」

雪蓮「そういう貴方達もじゃないかしら?お互いさ・・・」

突然雪蓮が微笑み始め・・・

雪蓮「本気を出して戦おうよ・・・そうじゃなきゃ・・・楽しめないでしょ?」

今までにない動きでシユベスターバスターで統夜に近づき斬り掛つたが、統夜は咄嗟に両腰にあったエターナルサーベルで防いだ。

その後スーパーカリドウスを目晦ましとして発射し間合いをとりエターナルサーベルを納めフォーチュンザンバーを取り出し剣劇が始

まった。

遊輔サイド

蓮華「私も・・・そろそろ・・・本気を出させてもらっわ・・・シユベスターオーシャンシステム・・・起動!!」

シユベスターオーシャンシステムを起動し漆黒が混ざった桜色のアーマーから桜色のアーマーに変化し自身のリミッターを解除した。高機動でかく乱しながらシユベスターライフルで狙い撃ちしながら胸部から拡散構造相転移砲を発射し直撃させた。

遊輔「前より速い・・・だが・・・装甲が頑丈なのが取り柄のクリムゾンフレームだ・・・」

頑丈だった為ダメージは軽微であった。

蓮華「パワーと防御重視って訳ね・・・緩めないわ!!」

シユベスターオーシャンシステムの影響で出力が上がったシユベスタードラグーンのアールレンジ攻撃を仕掛けながら胸部からハドロン砲を発射した。

遊輔「くっ!!」

フレームザンバーをシールド代わりにシユベスタードラグーンのアールレンジ攻撃を避け胸部からスパーカリドウスと左腕の部分に銃身が二つ付いたフレームハンドの高出力発射の同時発射でハドロン砲を相殺した。

遊輔「バーニングオーシャンシステム・・・起動!!」

バーニングオーシャンシステムを起動させ金と銀が混ざった真紅のアーマーから赤く輝いた真紅のアーマーに変化させた。

蓮華「ようやく見せたわね・・・」

遊輔「ああ・・・仕掛ける!!」

バーニングクレイモアに搭載されてある大型ブースター4基とクリムゾンウイングを展開しスラスターを噴射し超高速の特攻を仕掛けた。

蓮華「後の事を考えていないのか!!回避する事と防御を!!」

遊輔「蓮華ちゃん・・・俺は分の悪い賭けっというのは・・・嫌いじゃないぜ・・・」

シュベスターライフルとシュベスタードラグーン、右肩の上にあるシュベスターメガランチャー、胸部からハドロン砲の一斉同時発射を遊輔に放ち爆発が起きた。

爆発の煙が収まると多少ポロポロになっても勢いはそのまま突進を続け懐へ入ると右腕にある大型杭打ち機であるクリムゾンブレイカーで胸部にある拡散構造相転移砲とハドロン砲の切り替えが可能なプリズムハドロンを破壊した後・・・

蓮華「しまった!？」

遊輔「まだまだある!!」

破壊した直後に吹き飛ばされた蓮華に左腕にあるフレイムハンドで連射した後両肩にあるバーニングクレイモアから近距離用炸裂鉄鋼

弾を発射しシユベスタードラグーンとシユベスターライフルを破壊した後右手にフレイムザンバーを手にし蓮華の首に突き付けた。

蓮華「……これは……私の……完敗ね……武装も破壊されちゃ……何も出来ないわ……」

遊輔「そうだね……これは……俺の勝ちだ……」

蓮華「でも……雪蓮姉様と戦っている天川 統夜は危険かもね……」

遊輔「どついう意味だ？」

オーシャンシステムを解除しデバイスを待機状態に戻した遊輔が蓮華に問い掛けた。

蓮華「私達三姉妹は『虎』の力を持っているから……」

遊輔「『虎』の力……」

虎の力について考えながら遊輔は統夜と雪蓮の戦いを見始めた。

明久サイド

明久と小蓮はハイスピードで撃ち合いと鏢競り合いの二つを繰り返してやっていた。

明久「このままじゃ……埒が明かない……ジャツジオーシャンシステム……」

小蓮「シユベスターオーシャンシステム……」

明久、小蓮「起動!!」

明久と小蓮はそれぞれのオーシャンシステムを起動させアストラル

フリーダムはオレンジと真紅が混ざったアーマーからオレンジに輝いたオレンジ色のアーマーに変化し、シュベスターファング？は真紅が混ざった桜色のアーマーから桜色のアーマーに変化した。

小蓮「いつけえー！！！」

右腕の籠手であるシュベスターアームズから輻射波動砲を放ったが明久は機動性を活かして宙返りをしながら回避しアムフォルタスを両脇に抱えて発射した。

その後封印魔法陣からアストラルオクスタンを取り出し突進する形で駆け抜けた。

小蓮「真っ向勝負か・・・受けて立つよ！！！」

右腕にあるシュベスターハンドを連射しながら明久の方へ向かった。

明久「Bモードはバカの意味じゃないよ！！！」

アストラルオクスタンから実弾を発射しシュベスターハンドの連射ビームを相殺した後Eモードに切り替えてマシンガンの要領で連射した。

小蓮「まだまだ・・・」

左腕にあるシュベスターハンドで高出力ビームを発射した。

高出力ビームが来るのを見た明久は拡散構造相転移砲で相殺しアストラルオクスタンを左手に持ち封印魔法陣からアストラルライフルを取り出し右手で持ち精密狙撃で撃ち小蓮ヒットさせた。

明久「MBS・・・MFS・・・起動！」

MBSとMFSを起動させて目にも見えない速さで動き始めた。

小蓮「速い!?!」

アストラルライフルで所々へ移動しながら狙い撃ち、高出力で発射した後封印魔法陣の中へ収納しアストラルオクスタンを実弾で発射するBモードで発射し、魔力エネルギーで発射するEモードで連続しながら高出力で発射した。

正確だった為全ての攻撃が直撃した。アストラルオクスタンを封印魔法陣の中へ入れ、もう一つの封印魔法陣を展開し刀身が緑色で柄が赤いバスタードソードのアストラルカリバーを取り出し駆け抜けた。

小蓮「黙って受けるシャオじゃないよ!?!」

シュベスターシールドからシュベスタースプリットを発射したが全て回避され明久のアストラルカリバーの一閃を受けてしまった。

小蓮「きゃあ!?!」

明久「ゴメンね・・・小蓮ちゃん・・・これは・・・勝負だから・・・負ける訳にはいかないんだ!?!」

ジャツジオーションシステムで上がった機動力とMBS、MFSを駆使し疾風の如く駆け抜け駆けアストラルカリバーですれ違いに何度も乱れ斬った。

明久「風刃・・・乱舞の太刀!?!」

アストラルカリバーを鞘の中に収めた。

小蓮「見えない速さが・・・仇になっちゃったね・・・」

そう呟いた後瞳を閉じ気を失った。

明久「・・・・・・・・」

自然に落ちる小蓮を抱えて地面に着地し統夜と雪蓮の戦いを見始めた。

統夜サイド

統夜「（まだ力を隠しているな・・・）」

雪蓮「（へえ・・・流星は『力の大妖のヴァンパイアの力』を持つだけはあるわね）」

二人はハイスピードで動きながらフォーチュンザンバーとシュベスターバスターの鏢競り合いが行われていた。

ギンギンと火花が散っており一歩も譲っていなかった。

二人の表情は笑っていた。互角に戦える存在に・・・

統夜「何笑ってんだ？」

雪蓮「貴方も人の事言えないわよ？」

鏢競り合いの後離れた。

統夜「フォーチュンオーシャンシステム・・・」

雪蓮「シュベスターオーシャンシステム・・・」

統夜、雪蓮「起動！！」

統夜のアーマーが赤と金が混ざったの白いアーマーから蒼く輝いた蒼いアーマー、雪蓮のアーマーがオレンジが混ざった桜色のアーマーから桜色のアーマーにそれぞれ変化した。それぞれのオーシャンシステムを起動させた瞬間二人は見えない速さで動きながら剣と剣のぶつかり合いを始めた。

統夜「龍炎斬！」

フォーチュンザンバーから龍を模した蒼炎の斬撃を放った。

雪蓮「虎空斬！」

シユベスターバスターから白い斬撃を放ち相殺した。

右手にシユベスターバスター、左手にシユベスターカリバーの二刀流に構えた。

雪蓮「行くわよ」

統夜「させん！」

フォーチュンザンバーを両手で構え刀身に五気を収束し始めた。

雪蓮「何をするのか知らないけど・・・」

統夜「覇幻零！！」

幻夢零の強化版として神速の動きで超巨大な衝撃波を2段重ねで特攻を仕掛けた雪蓮に放ちシユベスターバスターとシユベスターカリバーを破壊して吹き飛ばした。

統夜「こいつなら・・・何とか・・・」

この勝負は統夜の勝ちに見えたが・・・

雪蓮「やっぱ・・・楽しいわあ！！天川 統夜！！」

統夜「何だと・・・さっきの一撃を・・・」

雪蓮「確かに危うかったわ・・・」

シユベスターファング？を待機状態に戻し銀色の指輪を取り出した。

統夜「？」

雪蓮「見せてあげるわ・・・『虎の牙』と『瞬速の虎の力』をね・・・

」

統夜「・・・」

雪蓮「全てを斬り裂きし・・・虎の牙よ・・・ここに現れん！！起動せよ！！ライガーファング！！」

銀色の指輪から刀身が銀色で柄が金色の鞘付の長剣に変化した。

その後雪蓮の髪の色が白く輝いた銀髪、瞳の色が翡翠色、頭の上から白い毛並みの虎の耳、腰から白い毛並みの虎の尻尾を生やした姿に変化した。

雪蓮の変化が終わると同時に雨が降り出しゴロゴロと雷の音が鳴り始めた。

統夜「妖怪・・・か？」

雪蓮「そのまさかよ・・・力の大妖であるヴァンパイアの貴方・・・瞬速の大妖である虎の妖怪・・・見せてあげるわ！！」

いつの間にか統夜の懐へ移動しライガーファングを居合い斬りで統夜に直撃させた。

統夜「ガハッ！（は、速い・・・）」

雪蓮「まだまだ行くわよ！！」

神速で振るったが統夜は辛うじて避けるしか無く・・・

雪蓮「動きが遅いわね・・・」

右手に妖力を込め統夜を切り裂き吹き飛ばした。

遊輔＆蓮華サイド

遊輔「速過ぎる・・・」

蓮華「私達三姉妹は虎の妖怪の力を受け継ぎし者・・・完全に覚醒している姉様に勝てる見込みは無いわ・・・」

統夜と雪蓮の戦いを見て遊輔は啞然としていた。

遊輔「・・・」

蓮華「貴方も『人外』なのだから・・・驚く必要は無いわ」

蓮華の言葉に遊輔は目を見開いて驚き始めた。

遊輔「！？・・・な、何故・・・それを・・・だが・・・」

蓮華「いずれ分かる事よ・・・」

明久サイド

明久「は、速い・・・それに・・・あれは・・・ガーディアン・・・」

？」

小蓮「そうよ・・・あれはガーディアンデバイス・・・ライガーフ
アング・・・私達三姉妹の宝だよ・・・」

先程目覚めた小蓮が明久の疑問に答えた。

明久「宝・・・」

小蓮「姉様は唯一力に目覚めている・・・私達はただけど・・・
明久「・・・」

統夜サイド

統夜「こいつは・・・速い・・・（速く慣れている・・・）」

雪蓮「ほらほらあ！！貴方もヴァンパイア化してガーディアンを起
動させなさいよお！楽しめないでしょう！！」

神速の斬撃を放ち統夜にダメージを与えながら笑っていた。

統夜「（確かに・・・彼女の言うとおり・・・それしか残された手
は無い・・・）」

雪蓮の猛攻によりボロボロになり膝をつき倒れそうになったが辛う
じて立ち上がった。

統夜「見せてやるぜ・・・ヴァンパイアの力をな！！」

髪の色が銀髪に変化し瞳の瞳孔が縦になり瞳の色が真紅に変化した
姿である吸血鬼化になりフォーチュンエターナルを待機状態に戻し
サーディオンを起動させた。

雪蓮「こうでなきゃ・・・楽しめないわ!!」

統夜「行くぞ!!」

吸血鬼化になっても攻撃はかわされたが・・・

統夜「チツ・・・と思ったか？ブルーバレッテゼ・・・フレア！
！」

空間に設置した蒼炎の爆弾を爆発させ雪蓮を怯ませた。

雪蓮「空間と炎の融合魔法！？でも雨が降ってきたのは残念ね!!」
統夜「それは・・・どうかな!!」

妖力を刀身に込めて振るい物理的な力に変換した斬撃を放った。

雪蓮「流石は力の大妖ね!!」

統夜「まだまだ・・・グラビティスラッシュ!!」

超重力が付加された斬撃を放ったが雪蓮は超重力の防壁を張った。

雪蓮「私も重力の属性も扱えるのよね!!」

統夜「そいつはいい・・・事だ!!」

強力という属性を刀身に込め広域型の衝撃波で吹き飛ばした。

雪蓮「やるじゃない!!」

大剣と長剣の神速の剣劇が始まった。

一撃一撃が大きく二人の周囲から衝撃波が打ち合う度に発生した。

統夜「九頭龍閃!!」

剣劇の中で唐竹、袈裟斬り、右薙ぎ、右斬上げ、逆風、左斬上げ、左薙ぎ、逆袈裟、刺突の9方向同時の斬撃を仕掛けた。

雪蓮「烈空閃!!」

妖力を込めた神速の連続斬りで全て防いだ。

防いだと同時に雪蓮はボックスステップし長剣と鞘に納め居合いの構えをとり魔力と気力、妖力を収束し始めた。

雪蓮「瞬速の虎の牙・・・味あわせてあげるわ・・・」

神速で移動しながら太刀筋の目視すら不可能な連続斬りを統夜に見舞いその後飛び上がってから斬撃を見舞った。

刀身が血に染まったライガーファングを鞘に納めた。

雪蓮「瞬虎牙閃!!」
しゅんこがせん

統夜「こいつは・・・異常に速い・・・」

雪蓮「いくら貴方が力の大妖でも・・・瞬速の剣捌きは見切れないわ・・・」

血まみれで倒れている統夜を見て言った。

雪蓮「雨が降るの嫌になるわね・・・不吉な事が起きそうで・・・」
統夜「確か・・・に・・・な・・・」

さつき受けた傷を徐々に治しながら立ち上がった。

雪蓮「う……嘘……何処にそんな力があるの!? 吸血鬼の……力……かしら?」

統夜「ああ……二度も墓土に足を入れる訳にはいかないのと……そして……」

はやて達……自分を愛してくれている人達を思い浮かべふつと笑った。

統夜「大切な人達を泣かせず……守りたいから……側にいたいから……だから……ここで終わる訳にはいかねえんだよ!!!」

五気を身体から出し始めた。

それを見た雪蓮は驚きを隠せずにいた。

雪蓮「(天川 統夜……蒼穹の死神じゃなく蒼穹の守護者ね……)」

統夜「はああああ!!!」

先程とは違う今までにない速さで大剣を振るい始めた。

雪蓮「くっ!! (今までのより速く重い!!!)」

鞘から抜き防いでいたが押され始めた。

統夜「蒼連斬!」

一閃の後に目にも止まらぬ速さの連続斬りを行い雪蓮はただ防ぐ事しか出来なかった。

雪蓮「(何が統夜に……)」

雪蓮は知らない。統夜が何故ここまでやれるかを・・・仲間や愛する人達を守りたいという思いがあるからである。

雪蓮「くっ！」

統夜の斬撃による衝撃で吹き飛んだ。

統夜「・・・見せてやるぜ・・・アンタに・・・俺のとおき・・・剣技をなあ！！！」

サーディオンの刀身に五気を収束し始めた。

統夜「全てを断ち切る！！！」

雪蓮の周囲を神速の動きで飛び回りながら連続で神速の斬撃を繰り出し、最後に真上から五気の籠った一閃をしフィニッシュした。

雪蓮「カハッ！」

統夜「これが・・・俺の切り札・・・超究武神破斬だ・・・」

統夜が言い終わると雪蓮は静かに倒れ元の姿に戻った。

統夜「大丈夫か？」

雪蓮「ええ・・・やっぱ・・・強いわね・・・」

統夜「誰かを守りたいという思いがあったからだ・・・」

雪蓮「そう・・・負けたわ・・・」

二人はそれぞれのデバイスを待機状態に戻した。その後遊輔達が駆けつけた。

遊輔「やったな・・・」

統夜「ああ・・・」

蓮華「大丈夫ですか？姉様」

雪蓮「大丈夫よ・・・」

蓮華は雪蓮に手を差し伸べ起こし肩を貸し支えた。

雪蓮「約束通り・・・セントクルセイダースの情報を与え共に戦う事を誓うわ・・・」

統夜「それは本拠地でな・・・怪我を治す事が第一だ・・・」

雪蓮「そうね・・・」

統夜達は雨降る中本拠地寮へ帰った。

その頃・・・

セントクルセイダース本拠地にて浩次と千秋がある人物達を待っていた。

浩次「君が・・・同盟を結んだ所から来た・・・」

タイガ「タイガ・ダイチだ・・・」

髪の色と瞳の色、顔立ちがダイチに似た少年が浩次と千秋に名乗った。

浩次「（タイガ・ダイチ・・・リュウ・ダイチと何か関係がるのか？）」

千秋「これからお互い世界を作る為に戦いましょう」

タイガ「弱く浮かれているお前らがか？ハッ・・・笑わせるなよ・・・」

・聞いたぜ？お前ら天川 統夜達・・・蒼穹の騎士団に負け続けているじゃねえか」

浩次「何だと？」

浩次が怒りを露わにしタイガに何かを言おうとした瞬間・・・

? 「待て・・・タイガ・・・ここで揉め事を起こすな・・・」

? 2 「タイガの言う通りテメエら虫けらがいきり立つなよ!!」

? 3 「同盟相手に無礼な事を言うものじゃない・・・」

? 4 「俺は別にいいけどな」

? 5 「俺は血が見れりゃいいけどな」

? 6 「ふん・・・」

六人の人物がやって来た。

タイガ「分かったよ・・・」

スレッド「ならいい・・・俺はスレッド・・・『混沌六天王』の一人だ・・・」

スレッドと名乗った腰の辺りまである赤い髪を一つに束ね黒い瞳をした整った顔立ちをした青年が自己紹介をした。

チップ「俺はチップだ！覚えておけや！」

チップと名乗った肩まである銀髪で蒼い瞳をした整った顔立ちをした青年がぶっきらぼうに紹介した。

シエン「俺はシエンだ・・・」

シエンと名乗った肩まである赤髪に金色のメッシュを入れた感じに

青い眼をした顔立ちをした青年が無愛想に紹介した。

デュオ「俺はデュオ。よろしくな」

デュオと名乗った肩まである茶髪で藍色の瞳をした整った顔立ちをした青年が陽気に紹介した。

エディ「俺はエディ・・・覚えておけ」

エディと名乗った肩まである黒い髪に金色の瞳をした顔立ちをした青年が適当な感じで紹介した。

ハザル「俺はハザルだ」

ハザルと名乗った肩まである緑色の髪に蒼い瞳をした整った顔立ちをした青年が興味無さそうに紹介した。

浩次「あ、ああ・・・よろしく頼むよ」

千秋「よろしくお願いします」

デュオ「セイラとマガキ様から命令があったから伝えるな」

浩次「命令？」

スレッド「この基地に赴き防衛しろ・・・」

デュオ「俺達からの饞別もあるから安心しろ」

黒い水晶玉を浩次に渡した。

浩次「これは？」

デュオ「対天川 統夜の兵器さ・・・上手く使ってくれよ」

千秋「分かりました。今から準備をして任務に就きます」

浩次と千秋が任務の準備をする為部屋から出て行った。

チップ「馬鹿な奴らだぜ……」

スレッド「そう言うな……マガキ様は面白い事を考える……」

エディ「アレ使い後悔するあいつらの顔が見てみたいぜ」

デュオ「タイガ。お前もあいつらの監視を兼ねて同行しろ」

タイガ「分かった」

タイガは部屋から出て行った。

タイガ「（リュウ・ダイチ……俺は貴様が五星刀を持つ事を認めない……貴様を殺す為なら何だって利用してやる!!!）」

キーホルダー型のキバエンブレムと左腕に装着されたキバスプレッダー、右腰から愛剣である白虎真剣を取り出した。

タイガ「（俺は……貴様を許さない……）」

本拠地寮では……

康太が戻り統夜達にある情報を教えていた。

雪蓮「冥琳はそこにいるのね？」

康太「……ああ……」

統夜「あいつらが雪蓮達に教えなかったのは反乱を防ぐ為だったとは……」

人質として囚われている冥琳がいる場所を教えていた。

遊輔「速い方がいいよな」

雪蓮「そうね・・・明日はどうかしら？」

統夜「構わない・・・明日行くメンバーはどうする？」

冥琳がいる場所へ行くメンバー決めを考えていた。

雪蓮「私達三人は絶対行くわよ」

統夜「雪蓮達三姉妹と俺・・・」

遊輔「俺も行く」

統夜「後は・・・」

ダイチ「俺も連れて行ってくれ！」

ダイチが自ら申告をした。

統夜「その表情からして・・・スケベじゃないようだな」

ダイチ「何故か胸騒ぎがするんだ・・・頼む・・・」

統夜「まあ・・・いいだろう・・・俺達六人で行く」

行くメンバーは統夜、遊輔、ダイチ、雪蓮、蓮華、小蓮の六人が決まった。

雪蓮「集合場所はここで・・・私達はここで泊まるから」

統夜「分かった。解散するとするか・・・」

統夜達は解散しそれぞれ帰路へ着いた。

次の戦いに向けて休む為に・・・

第四十六話『閃光の嵐』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

ダイチ「雪蓮達三姉妹と決着をつけた統夜達」

ダイチ「康太が入手した情報で人質である冥琳が居る場所へ向かった俺達……」

ダイチ「閃導 浩次と栗川 千秋、俺の双子の弟……タイガ・ダイチが待ち構えていた」

ダイチ「俺はタイガから統夜のある事実を知った……『蒼いイレギュラー』と『イグニスコピー』を……」

ダイチ「次回は『紅の美周郎の奪還』 テイクオフ」

投稿キャラ設定4（前書き）

龍の骨さんが考えたタイガ・ダイチの設定を投稿します。

投稿キャラ設定4

名前：タイガ・ダイチ

性別：男

種族：人族

容姿：髪や瞳の色、顔立ちがダイチと同じ

身長：140cm

年齢：16歳

気力：測定不能

性格：冷酷非道

趣味：特に無い

好きなもの(事)：修行

嫌いなもの(事)：リュウ・ダイチ

詳細：ダイチの双子の弟であり、キバレンジャーに変身する少年。五年前、鳳統の元で気力修行をするが、免許皆伝の証として五星刀がダイチへ授かれ、ダイチを憎んでいる。鳳統によってロシアへ飛ばされ、ロシア軍で屈辱を味わいながら修行し、非情で冷酷になった。

ダイチを殺す為なら組織や軍を利用してまで手段は選ばない。現在はマガキ達と手を組んでいる。

マガキはダイチを憎む闇に興味を持ち自由に泳がせている。

投稿キャラ設定4（後書き）

気力少年ダイチ！を拝見しタイガを出したらどうなるか楽しみな俺でした。

第四十七話『紅の美周郎の奪還』（前書き）

いよいよ人質解放の戦いと統夜の真実の一部が分かる。

アリス「HERO'S EPISODE第四十七話始まるよ〜」

第四十七話 『紅の美周郎の奪還』

第四十七話 『紅の美周郎の奪還』

統夜は白い空間にただ一人ポツンと立っていた。

統夜「ここは何処だ……」

白い空間を見渡していると

『天川 統夜よ……』

統夜の前に白衣を着た老人らしき人影が語りかけてきた。

統夜「誰だ？」

『ワシの最高傑作にして……イグニスコピーの完成体よ……』

統夜「だから……アンタは誰だ！！イグニスコピーとは一体何だ！！！」

『壊せ！！愚かなる世界を……人間を……破壊せよ！！この狂った世界を！！行け！！無限の可能性を持つ男……天川 統夜よ！！！！』

統夜「待て！！アンタは……一体……うぐ……ぐわあああああ！！！！！！」

去りゆく老人を追いかけてようとしたが突然頭痛が起き頭を抱えて膝をつき苦しみ出した。

そして統夜のヴィジョンに無残な形になった人間達の死体、何らかのプロジェクト、恐怖に染まった隊長格の青年、イグニスが映し出されブラックアウトした。

統夜「……………」

目を開け見回すと自分の部屋だった。

統夜「またあの夢……か……」

ベッドから起き部屋から出て朝食を食べ始めた。

華琳「行くのかしら？」

統夜「ああ……身体は問題ねえ……華琳……行きたいのか？」

華琳「ええ……貴方は私のパートナーよ……当然じゃない」

統夜「分かったよ……」

食べ終え華琳と共に本拠地寮へ向かった。

遊輔「いよいよか……」

雪蓮「ええ……」

蓮華「後は……天川が来るだけ……」

小蓮「土屋には感謝だね」

ダイチ「ああ。あいつは凄い奴だぜ」

本拠地寮の前に統夜以外の基地へ行くメンバーが揃っていた。

統夜「悪い悪い。待ったか？」

雪蓮「大丈夫よ。その娘は？」

統夜「華琳って娘だ」

華琳「よろしく頼むわね」

統夜「座標……確認……転移開始！」

七人が入る程の大きさの魔法陣を展開した後座標を固定し転移を開始した。

その頃・・・

? 「その話は本当なのか？」

? 2 「僕は嘘はつかない主義でね・・・」

基地にある牢屋にて黒い長髪で眼鏡を掛けた女性は黒い髪に黒い外套を身につけ体を覆い隠している黒尽くめの青年と話していた。

? 2 「彼ら・・・君の仲間はどこへ来る・・・君は安心して待つているといいよ・・・冥琳・・・」

冥琳と呼んだ女性にそう言った後後ろへ振り向き去ろうとしていた。

冥琳 「待て！何故貴様はそれを知っている！一体何者だ！！」

剣 「僕の名は・・・剣咲 剣・・・呪われし放浪者だよ・・・いずれ会つだろう・・・」

剣咲 剣と名乗った青年はそれだけ言い残し消えた。

冥琳 「呪われし放浪者・・・剣咲 剣・・・」

指をあごの部分に置いて考えていた時・・・
警報音が鳴りだした。

『警報・・・この基地に何者かが侵入した・・・ただちに迎撃せよ・

・・繰り返す・・・」

アナウンスが聞こえた。

冥琳「こういう事か・・・待っているぞ・・・雪蓮・・・蓮華様・・・
・小蓮様・・・」

冥琳が捕らわれている基地の前に転移した統夜はデストロイを纏った強化人間、コピールシファー、四足型の機動兵器等がゾロゾロと出て来た。

雪蓮「わお・・・派手なお出迎えね」

統夜「ああ・・・さて・・・こいつを使うか・・・」

蒼い十字架が描かれた腕輪を取り出し・・・

統夜「蒼き牙・・・セイクリッドファンゲ！セットアップ！！」

セイクリッドファンゲを起動させて蒼いアーマーを纏い華琳とユニゾンした。

遊輔「ペンドラゴブレイド・・・セットアップ！」

ペンドラゴブレイドを起動させて真紅の唾の部分が竜の頭で口から刀身を出しているかの様な紅い紅く輝いている太刀を手にした。

雪蓮「大暴れして取り返すわよ！！シュベスターファンゲ？・・・
セットアップ！」

蓮華「はい！シュベスターファンゲ？・・・セットアップ！！」

小蓮「一気に借りを返してやるよ〜シユベスターファンゲ?・・・
セットアップ!!!」

雪蓮達はデバイスを起動させアーマーを纏い始めた。

ダイチ「振り切るぜ!!!」

五星刀を構えた。

統夜「さて・・・行くか・・・蹴散らして助けに行こうぜ・・・」

統夜達が行く準備をした瞬間ビームの砲撃が来たが直ぐに回避した。
目の前を見ると浩次と千秋、ダイチに似た少年のタイガ・ダイチの
三人が現れた。

統夜「あいつらと・・・ダイチ?」

遊輔「だが・・・違う気配だ・・・」

ダイチ「タイガ・・・何故お前が・・・セントクルセイダーズに
・・・?」

ダイチは驚愕した表情でタイガに問い掛けた。

その問いにタイガは・・・

タイガ「セントクルセイダーズ・・・何で俺がそんな弱小組織に入
らなくちゃいけないんだ?俺は『冥界』の『混沌』に所属している・
・・・貴様を殺す為にな!!!」

ダイチ「冥界の混沌・・・だと・・・?」

タイガ「ああ・・・ダイレンジャーに変身できるのはお前だけじゃ
無い!!!」

左腰にあった白虎真剣を上に向けて、懐からキーホルダー型のキバエ
ンブレムを取り出し・・・

タイガ「気力転身！キバチエンジャー！！！！！」

左腕のキバスペレッダーに差し込み、白い光に包まれる。

光が晴れ、キバレンジャーになり、落ちてくる白虎真剣を手取る。

タイガ「キバレンジャー！叫新星！タイガ！」

ダイチ「キバレンジャーだと・・・気力転身！」

五星刀を地面に刺しオーラギャザーを展開させ

ダイチ「オーラチエンジャー！！！」

左腕のオーラスプレッダーに差し込み、赤い光に包まれる。

光が晴れ、リュウレンジャーになった。

ダイチ「リュウレンジャー！天火星ダイチ！」

五星刀を抜き構えた。

浩次「天川 統夜・・・お前の相手は・・・」

千秋「私達です！」

浩次と千秋の二人が統夜に襲い掛かった。

統夜「チツ！遊輔に雪蓮！蓮華！小蓮は先に行け！！ここは俺とダ
イチが引き受ける！！！」

遊輔「分かった！道を作ってやるぜ！！轟焰修羅斬！！！」

ペンドラゴブレイドの刀身に灼熱の炎を収束させ巨大な焔の斬撃を放ちコピールシファーや強化魔導師達を燃やし尽くした。その後遊輔と雪蓮、蓮華、小蓮の四人は移動し待ち構えている機動兵器と戦い始めた。

タイガ「(第一段階は上手く行ったな・・・後は奴等があれを天川統夜に当てれば・・・『蒼きイレギュラー事件』の再現が出来る・・・) 殺し合おうぜ・・・リュウ!!!」
ダイチ「生憎そんなもんは願い下げだ!!!」

五星刀と白虎真剣の打ち合いが始まった。

浩次「何故ここが分かったんだ?」

統夜「俺らのここには優秀な情報屋がいてね・・・人質は遊輔達に任せるとするかね・・・」

千秋「そうはさせません! 貴方達に好き勝手にはさせません!」

統夜「駄々っ子のレベルがまた上がったか?」

二人の攻撃を避けながら両肩端に一本ずつ収納されてあるロッドを手にし直列合体させ、刀身が銀色の大鎌のセイクリッドサイトに変化させた。

セイクリッドサイトを振るい浩次と千秋を切り裂こうとしたがナイトカリバーとホーリーカリバーで防がれた。

浩次「(何て・・・強いんだ・・・)」

千秋「(このままでは・・・)」

二人は押され地面に叩き落とされた。

遊輔サイド

遊輔達四人は機動兵器を撃破した後襲撃してきた強化魔導師やコピールシファーを薙ぎ倒していた。

雪蓮「それが中国の遺跡で発見されたペンドラゴブレイドか？」

ファングを射出し強化魔導師を串刺しにしながらシュベスターバスターでコピールシファーを斬っていた。

蓮華「使いこなしているわね・・・遊輔」

シュベスタードラグーンを全て射出しオールレンジ攻撃を仕掛けた後胸部からハドロン砲を発射し殲滅していた。

小蓮「凄い」

シュベスターシールドからシュベスタースプリットを発射しながら右腕のシュベスターアームズの掌から輻射波動砲を発射し機械類を蒸発させた。

雪蓮「こんなに歓迎されるのは・・・悪くないわね・・・楽しめるからいいけどね・・・」

蓮華「一気に蹴散らしましょう」

小蓮「うん！」

雪蓮「ランチャーフォーメーション・・・オーシャンで・・・」

蓮華「遊輔！陽動をお願い！！」

遊輔「分かった！」

雪蓮達三姉妹はそれぞれのアーマードをオーシャンシステムで桜色に変化させた。

蓮華は右肩の上にあるシュベスターメガランチャーを展開し、雪蓮と小蓮の二人はコードを取り出し蓮華の背後に接続しチャージを始めた。

遊輔「こつちだぁ!!」

コピーや強化魔導師達を蓮華達の射程内へ誘い出した。

蓮華「後少し・・・」

チャージの時間が後少しで終わりつつあった。

遊輔「くっ！多いな・・・」

大量のコピーと強化魔導師の相手は遊輔でも分が悪かったが何とか持ちこたえていた。

遊輔の耳に機械の音が聞こえた。

蓮華「チャージが完了したわ!!直ぐに離れて!!」

チャージが完了しターゲットを大量のコピールシファー達にロックオンした。

遊輔「頼むぜ・・・」

上へ飛翔し射程外へ出た。

雪蓮「蓮華！トリガーを引いて！」

蓮華「はい！！ドライシユベスター・・・ギガランチャー・・・発射！！」

極太の魔力砲を発射し大量のコピールシフアーと強化魔導師達を飲み込み施設の扉を破壊した。

しばらくして砲撃の光は止み終えオーシャンシステムを解除した。

雪蓮「さっ・・・冥琳を助けに行くわよ」

蓮華「はい」

雪蓮を先頭に四人は基地の中へ入った。

統夜サイド

浩次と千秋は遊輔達に中へ入られた事により追おうとしたが統夜に阻まれた。

華琳（ぶ男にしてはいいけど・・・こんな組織に忠誠を誓うなんて凡愚ね・・・）

統夜とユニゾン中の華琳は浩次と千秋に対し冷やかな目で見ていた。

浩次「はあ！！」

ナイトシューターで統夜に撃つたが・・・

統夜「チツチツチツ・・・まだまだ甘い・・・明智君・・・」

セイクリッドファングの装甲に傷が入っていなかった。

浩次「ば、馬鹿な……」

統夜「ま、現実を認めて投降する事を勧めるがね……セイントクルセイダーズにいても何にもならないよ？」

浩次「僕達はあの人を信じている……それを……君達……蒼穹の騎士団が混乱させた!!」

統夜「混乱ねえ……俺は間違った管理局を正したに過ぎん……聞くけどさ……力を恐れているという理由で消すセイラは正しいのか？管理局を信じ……一生懸命頑張って戦ってた人達に対して……悲しみを広げた秩序は憎しみを呼ぶ……それが分からないのか!!」

千秋「彼女は正しい事をしたまです……貴方達ソルジャーは身体能力だけで倒せる集団……魔力もずば抜けて高い……いい部隊と同時に危険と不安要素の塊でもあるのです……いつ自分達に牙を剥くか……手柄を取られるんじゃないかと……」

統夜「そんな身勝手な理由で滅ぼし……ある人物が憎みだした……」

ある人物とはイグニスノ事でアルカンシエルの悲劇によって人間全てを憎みだした。

浩次「君達の存在を許す訳にはいかないんだ!!」

統夜「んな身勝手なやり方でどんだけの人達が悲しみ……憎み……涙を流したか知っているのか!!!？」

浩次と千秋、セイラ……セイントクルセイダーズの身勝手なやり方に改めて思い怒りを露わにして叫んだ。

千秋「分かりませんね……私達のやり方は正しい……それだけ

です……なのに……貴方達は秩序を乱している……」
華琳『自己中ね……自分達が正しくないと思っただら悪と決め付け
る……恥ずかしくないのかしら？』
浩次「何だ……まさか……ユニゾンデバイスとユニゾンしてい
るのか?!」

統夜の中から華琳の声が聞こえた浩次は驚愕な表情をしていた。

統夜「正確には霸王の魂だな……これが……」

千秋「何故……」

華琳『理由は簡単よ……貴方達の視野と思考の幅が狭く器が小さ
いからよ。さ、統夜……頑張りなさい』

統夜「了解!」

右腕の籠手にある掌から強力な光を発生させた。

浩次「なら……」

右手のパルマファイオキーナで対抗しようとしたが千秋が手で制した。

千秋「ここは私に任せてください（貴方はあの道具を使ってくださ
い）」

浩次「分かった（隙を見せたら使う）」

念話で話しながら左腕にある徹甲砲撃左腕を統夜に向って移動し輻
射波動とシャイニングブレイカーの激突が始まった。
そして浩次は隙を窺う為チャンスを見計らっていた。

ダイチサイド

ダイチとタイガの激しい剣劇を終えた後タイガはバックステップで下がる。とチラツと浩次と千秋の二人を見ていた。

ダイチ「余所見とはいいい度胸しているな！」

タイガ「これから始まるショーの前にいい事を教えてやろう・・・リユウ・・・」

五星刀の斬撃を白虎真剣で受け止めていた。

ダイチ「何だと？」

タイガ「俺は貴様を殺すよりある男から面白い事実を聞いた・・・」
ダイチ「ある事実？」

タイガ「貴様なら知っているだろう？『蒼いイレギュラー事件』を・・・」

ダイチ「！？まさか・・・あの惨劇をするつもりか！？」

蒼いイレギュラー事件の言葉を聞いたダイチは驚きを隠せずにいた。

タイガ「まさか・・・『真犯人』がお前の仲間にいるじゃないか・・・ほら・・・」

タイガが見た先に統夜が映っていた。

ダイチ「ま・・・まさか・・・統夜・・・だと言いたいのか？」

タイガ「そのまさかさ・・・『イグニスコピー』の最高傑作にして最強のスーパーソルジャー・・・素体がいいだけにな・・・」

ダイチ「イグニス・・・だと・・・？」

タイガ「最強の存在にして最強の英雄・・・イグニス・・・ルシフアーの血をな！！」

ダイチ「なっ!!?」

イグニスという名前と統夜がイグニスコピーの改造実験を受けていた事に驚きを隠せずタイガに隙を与えてしまい斬撃を喰らってしまった。

ダイチ「ぐわっ!!」

タイガ「リュウ・・・貴様は後回しだ・・・俺は『任務』を遂行する・・・これでも混沌でな・・・」

ダイチ「何だと・・・」

タイガは統夜の方へ駆け抜けた。

ダイチ「させるか!!」

タイガを追いかけた。

遊輔サイド

雪蓮「こっちよ」

迷路のようになっていた基地の中を走っていた。

遊輔「本当に合ってるの?」

蓮華「姉様の勘は人一倍凄いから・・・」

遊輔「あはは・・・そうなんだ・・・」

しばらく走っていると牢屋の前に着いた。

雪蓮「冥琳〜！！助けに来たよ！！」

冥琳「その声は雪蓮か！！？」

雪蓮の声に反応した。

雪蓮「直ぐに助けるから待ってて」

シユベスターバスターの剣技で牢屋の扉を切断した。
すると・・・雪蓮は冥琳の顔を見た後抱き合った。

雪蓮「冥琳・・・会いたかった・・・」

冥琳「私もだ・・・雪蓮・・・蓮華様と小蓮様もお元気で良かった・・・」

蓮華「冥琳・・・私も会いたかったわ・・・」

遊輔「あ〜・・・あの〜・・・感動の再会で悪いんだけど・・・脱出しない？」

遊輔が悪いと思いつつも割り込み脱出をするように言った。

冥琳「それもそうだな・・・」

すぐさま基地から脱出を始めた。

統夜サイド

統夜「真つ向から挑むのはな・・・」

シャイニングブレイカーで押し始め

統夜「悪くは無いが・・・ちと力を入れるべきだったな!!」

左腕にある徹甲砲撃左腕を破壊し千秋の左腕に大火傷を負わせ吹き飛ばしそのせいかパーシヴァルが待機状態になった。

千秋「ぎゃあああ!!」

統夜「悪いな・・・」

セイクリッドサイトで左腕を抑えている千秋に目掛けて振るおうとしたが・・・

タイガが統夜の背後から白虎真剣で切り裂いた。

タイガ「この役立たずが・・・さつさとやれ!!」

浩次「わ、分かった・・・」

デュオから渡された黒い水晶玉を統夜に向けて投げようとしていた。

ダイチ「させるか!!」

タイガ「邪魔はさせんぞ!!リュウ!!」

浩次に攻撃を仕掛けようとしたがタイガに妨害され・・・

タイガ「ここで貴様は大人しくしている!!叫新星乱れやまびこ!!」

破壊音波で統夜とダイチは耳を抑え苦しむ。

ダイチ「うわぁーーーーーやめてくれえーーーー!!!!!!耳があ
ーーーー!!!!!!」

統夜「チツ・・・音波系統か!?耳がおかしくなりそうだ!!!!」

タイガ「さて……これで準備は整った……今の内にやれ!!」

タイガの合図で浩次は黒い水晶玉を統夜に向けて投げドス黒い光に包まれた。

統夜「ぐわあああー！ー！！！！」

ダイチ「い、一体……」

タイガ「言っただろ？シヨ一の始まりだと……」

被害が来ないようにダイチを掴み移動していた。

浩次「やった……」

千秋「これで彼は……」

浩次と千秋は喜びを分かち合っていた。

黒い光が収まると統夜は気を失い倒れていた。

タイガ「ククク……」

ダイチ「何がおかしい？」

タイガ「あいつらのおめでたい頭がおかしいんだよ……実際の殺しを知らず……又ク又クと育った奴等に……」

浩次と千秋の二人を見て言った。

タイガ「騎士とは程遠く……愚かな奴ら……さて……そろそろだな……」

統夜の方を見ると起き上がっていた。

統夜「……」

五気を徐々に高め始めセイクリッドファンクを再起動させた。

浩次「ば、馬鹿な・・・」

千秋「た、タイガさん！！一体どういう事ですか？！！」

混乱する中タイガに憤慨した様子で怒鳴ったがタイガは無視していた。

ダイチ「タイガ・・・お前・・・いや・・・お前達は一体何を企んでいる！！」

タイガ「直に分かる・・・」

タイガがキバレンジャーを解除し後ろを振り返ると大きな鋏を持った黒い巨大蟹がいた。

タイガ「アシュタロンか・・・」

アシュタロン（タイガ様・・・時間です）

タイガ「覚えておけ・・・貴様が五星刀を使う事を・・・へらへらし師匠に認められている貴様を・・・絶対に！！」

それだけ言い残しアシュタロンと共に転移で消えた。

統夜「・・・・・・・・」

目を開けると目つきが鋭くなり尋常でない殺意を曝け出した。

統夜「よオやく・・・出られたぜエ・・・」

二人を見ると笑みを浮かべ両肩の端にあるロッドを合体させ大鎌の

セイクリッドサイトを手にした。

浩次「な、何だ……」

千秋「……………」

人が変わった統夜に脅えていた。

統夜「さアて……面倒だア……こいつを使うぜエ!!」

突然背部に巨大な一対二翼の真紅の翼があり機動力上昇と相手を切断する事が出来るバトルスクランダーとは別に漆黒の10翼の翼が生え、髪の色と瞳の色が白く輝く銀髪に翡翠色の瞳に変化した。

浩次「いく……」

統夜「遅えよ!!」

ナイトカリバーを構え駆け抜けようとした瞬間統夜の持つセイクリッドサイトによって切断され強力な蹴りで吹き飛ばされた。

浩次「ぐふっ！」

統夜「まだまだあ!!ちつと楽しませろやあ!!」

セイクリッドサイトを左手に持ち右手の掌からシャイニングブレイカーを出し止めを刺そうと駆け抜けた。

浩次「(ここまでか……)」

統夜「終わりにしてやんよお!!テメエの人生をよおおお!!!!」

右手のシャイニングブレイカーを振りかざし止めを刺そうとした瞬間何かが浩次の前に遮り貫かれた。

千秋「は、速く・・・逃げて・・・」

腹部を統夜に貫かれた千秋だった。

統夜「テメエかよ・・・まあ・・・いいけどよオ！！溶断破碎！！」

貫いたままで爆発させ下半身が無くなり上半身だけが残り飛ばされた。

浩次「あ・・・ああ・・・」

統夜「よオク飛んだな！！オイ！！」

浩次「貴様は・・・やり過ぎだ！！」

統夜「ああん？戦いになあ・・・」

歩法である刹那で駆け抜け拳と蹴りによる瞬速の連打を見舞いセイクリッドサイトで左肩から左腕を切断し・・・

統夜「やり過ぎなんて・・・」

五気を収束した拳で腹部を殴り・・・

統夜「ある訳ねえだろうがぁー！！！！！！！！」

強烈な蹴りで吹き飛ばした。

ダイチ「（あれが・・・タイガが言っていた・・・蒼いイレギュラー事件を起こし・・・イグニスコピーの実験台にして最高傑作の統夜・・・）」

殺しを楽しんでいるように凶悪な笑みを浮かべている統夜に恐怖を感じていた。

遊輔サイド

遊輔「後は統夜達を助けるだけ……」

遊輔達5人は基地から出た。

雪蓮「ちよつと……あれ……」

遊輔「何だ……これは!!?」

蓮華「うつ!?!」

小蓮「キヤアアアア!!」

冥琳「何だこれは……」

統夜達の所へ向かう途中下半身を失い内蔵も潰れ血だらけで横たわっている千秋を見つけた。

遊輔「これは……一体……」

千秋「……あ……貴方達……」

遊輔達を見て喋った。

遊輔「喋らなくていい……」

雪蓮「……何があったの?」

千秋「私……達……ぐはあ!!」

冥琳「もう喋るな……」

千秋「……いえ……そういう……訳にはいきません……」

私達は……天川……統夜……の尋常でない力で……こうな

りました・・・」

遊輔「何だと!？」

冥琳「何故そうなった？」

冷静に千秋に問い掛けた。

千秋「それ・・・は・・・同盟先である混沌六天王から受け取った・・・黒い水晶玉を・・・当てた事・・・から始まりました・・・私達・・・は・・・天川・・・統夜を倒すアイテムと・・・聞いて・・・」

千秋の言葉を聞いて冥琳は目を顰めていた。

雪蓮「冥琳？」

冥琳「お前達は・・・混沌六天王に利用されていたのだ・・・天川統夜の覚醒の為に・・・」

遊輔「そんな事って・・・あるのかよ!!」

蓮華「・・・酷過ぎる・・・」

千秋「・・・彼を・・・止めて・・・くだ・・・さい・・・この・・・まま・・・では・・・」

遊輔「分かっている・・・君と彼を捨て駒のようにしたあいつらは絶対に許さない・・・」

千秋「・・・私は・・・あの人を・・・最後まで信じて・・・いました・・・それが・・・こんな形になるなんて・・・」

涙を流しながら語り始めた。

もし離反して統夜達と共に闘う道があった筈なのに・・・
楽しい事等をして迎えたかった。

千秋「本当は・・・生きたかった・・・秩序のある・・・世界・・・」

で・・・・・・・・・・」

この一言を言い終えると瞳を閉じ手が力無く落ちた。

栗川 千秋は若くしてこの世を去った。

遊輔「行こう・・・・」

雪蓮「ええ・・・・統夜を止めに・・・・」

遊輔達はすぐさま統夜の方へ向かった。

浩次は逃げようとしたが瞬速の動きをした統夜にすぐさま捕まりポロボロになっていた。

統夜「どうよお！！命を擦り減らされる気分つてのはよお！！！！」

浩次「がはあ！！」

統夜「おらあ！！面白いジョークを言ってみるよオ！！閃導 浩次
くうううん！！！！」

セイクリッドサイトで切り刻みながらセイクリッドランチャーを拡散型で放ち武装やアーマーを破壊していた。

統夜「すぐにくたばったあの女の所へ送ってやるから安心して死ねやあああ！！！！」

セイクリッドサイトを収納した。

胸部から灼熱の炎を放つセイクリッドブラスターの中心部分から刀身が銀色の柄が漆黒の両刃の長剣ファングブレードが出現した。

ファングブレードの刀身に五気と蒼く黒い蒼炎を収束させ一閃した。

浩次「ガハア!!!」

胸部から大きな傷跡ができ血が溢れ出し蒼炎に燃やされて倒れた。

統夜「おゝおゝ・・・綺麗な血の噴水に蒼炎の達磨が出来たぜ・・・ん？」

目先には遊輔と雪蓮、蓮華、小蓮、冥琳の五人が映っていた。

遊輔「遅かったか・・・」

統夜「遅い？テメエ自身が止めを刺したかったのか？あの女のように」

雪蓮「貴方・・・一体何者？」

統夜「俺は天川 統夜だぜえ・・・」

遊輔「生きていた・・・何故あそこまでやる必要があるんだ？」

遊輔の問いに統夜は笑いだした。

統夜「あん？戦いにやり過ぎは無いんだよ・・・下半身を吹き飛ばしたらいけないって誰が決めた？テメエか？」

遊輔「何を言っても無駄だな・・・お前を止める・・・そうしなきゃ・・・はやてさんが悲しむ・・・」

雪蓮「（ちよつと華琳！統夜を止められないの!?)」

華琳「（無理よ・・・ユニゾンしても止まらない・・・）」

遊輔と雪蓮はペンドラゴブレイドとライガーファングをそれぞれ起動させて構えた。

統夜「いいぜえ・・・丁度ゴミニつにうんざりしていた所だ・・・」

フアングブレードを構えた。
一生懸命戦った浩次と千秋の事をゴミ呼ばわりした事に怒りを覚えた遊輔達……

ダイチ「俺も……あいつを止める……」

リュウレンジャーに再び変身したダイチは遊輔達の所へ移動し五星刀を構えた。

遊輔「あの形態は一体何だ？」

ダイチ「ルシファアの力だ……イグニスコピーの実験体にして最高傑作で生まれたからしい……」

遊輔「何だと!？」

雪蓮「今は統夜を正気に戻すわよ!！」

遊輔「分かった」

三人は一斉に剣を振り統夜を斬ろうとしたがフアングブレードで防がれ……

統夜「遅くて欠伸が出るぜえ!!!」

フアングブレードを神速で振るい三人を地面に叩き落とすように吹き飛ばした。

遊輔「ぐあ……!」

雪蓮「な、何なの……これは……」

ダイチ「つ、強い……」

統夜「楽しいなあ〜手応えがありそうだぜ」

遊輔と雪蓮は速く立ち上がり、先程の戦いでダメージを受けたダイチは二人より遅く立ち上がった。

ダイチ「天火星秘技・流星閃光！！！」

雪蓮「烈空閃！！」

ダイチは超高速で無数の突き、雪蓮は妖力を込めた神速の連続斬りを仕掛けた。

統夜「こいつはア・・・防げないと思ったかアアア！！！」

フアングブレード一つだけで二人の剣技を防いだ。

二人は機会を狙っていた。そう・・・

遊輔「もう一人いる事を忘れるな！！」

ペンドラゴブレイドの刀身に灼熱の炎を纏わせた遊輔が駆け抜けた。

遊輔「焰牙天衝・・・」

ダイチと雪蓮はお互い強力な一閃を放った後離脱した。

遊輔「斬！！」

統夜に灼熱の一太刀を浴びせた。

統夜「グハッ！」

血を吐きダメージを受けてしまった。

遊輔「流石のお前でもこれは回避できなかったようだな・・・」
統夜「中々楽しめるじゃねえか・・・ぐ・・・ぐわああああ！！！！」

フアングブレードを握り締め遊輔達に向って駆け抜けようとした瞬間頭を抱え苦しみ始めた。

遊輔「何だ？」

ダイチ「今がチャンスだ！」

右拳に気力を収束し頭痛で苦しんでいる統夜の方へ駆け抜けた。

ダイチ「これで・・・正気に・・・戻れええええ！！！！」

統夜「グオツ！！！！？」

気力を収束した拳で統夜の顔面を殴り飛ばしユニゾンしていた華琳と分離し気を失わせた。

その頃・・・

明久「統夜達上手くいつてるかな？」

零斗「人質救出ならお茶の子さいさいだろう」

達哉「何より彼女達が味方になって助かったよ」

明久達は屋上で昼食を食べながら統夜達を心配していた。

はやて「人質を捕えてたなんて秩序を守る組織とは思えへん行動やな・・・」

なのは「全くだよ・・・」

カナ「真面目に働いている管理局員を騙してる時点で駄目だね」

統夜達に協力している人達は首をコクコクと振ってはやての意見に賛成していた。

美波「試験召喚システムの強奪・・・」

フィーナ「マウンテンサイクルの強奪行為・・・」

エリー「ダイチ君やたけし君の命を狙った行為・・・」

プリムラ「完全に犯罪行為だね・・・」

アリス「その話は終わりにして食べよう」

零斗「そうだな・・・後そこにいる奴・・・出てこい」

誰かの気配を感じたのか声を掛けた。

剣「流石はマイティ真拳の継承者だね・・・」

冥琳と話をしていた黒ずくめの青年・・・剣咲 剣が現れた。

達哉「・・・・・・・・」

明久「・・・・・・・・」

達哉と明久は立ち上がり女性陣を守るように身構えた。

零斗「何の用だ？」

剣「なに・・・ちょっとしたお節介だよ・・・無限の可能性の力にして・・・全てを制し切り開く力を持つ北郷 零斗・・・」

零斗「お前はその口ぶりからして・・・マイティ真拳を知っているのか!？」

剣「そうだよ・・・何せ・・・マイティ真拳継承者と戦った記憶がある・・・」

零斗「何・・・だと・・・」

剣「率直に言おう・・・君は何故天川 統夜の本当の種族を知っていないながら彼に協力するんだい？」

統夜の本当の種族という言葉にはやて達統夜ラバーズは耳をピクリと反応した。

剣の問いに・・・

零斗「統夜の本当の種族？初耳だな・・・何故協力するかって？仲間だからに決まってるじゃねえか」

剣「そうか・・・」

零斗に対し笑みを浮かべた後ミルクィホームズを見始めた。

シャロ「な、何ですか？」

剣「特殊な力にして・・・超能力・・・特異な力を持つ君達が珍しいからさ・・・」

ネロ「それはトイズの事を言っているのかよ？」

コーディリア「貴方は一体・・・」

剣「そうだね・・・僕は剣咲 剣だ・・・この世界はいずれ激動の渦に巻き込まれる・・・トイズも例外ではない・・・」

剣は後ろを振り向いた。

はやて「ちよつと待って・・・」

剣「何かな？」

はやて「統夜の本当の種族を知っているんか？」

剣「まあね・・・『三大冥王』のうち二人の血を受け継いでいる・・・それしか言えないよ」

そう言い終えた後疾風の如く消えた。

零斗「剣咲 剣・・・」

明久「一体何者なんだ？」

康太「・・・・・・・・・・」

達哉「帰りに本拠地寮へ行こう」

その後急いで昼食を食べ始めた。

ダイチの攻撃を受けた統夜は意識を取り戻していた。
因みに5対10翼の漆黒の翼は無くなり髪と瞳の色は元の色に戻った。

統夜「俺は・・・」

ダイチ「正気に戻ったな」

雪蓮「良かった・・・」

遊輔「目が覚めたか・・・」

統夜は周りを見始めた。

統夜「なあ・・・あの二人は？」

遊輔「栗川 千秋はお前が殺し・・・閃導 浩次は分からないが・・・」

統夜「そうか・・・俺は完全に思い出した・・・空白の一年間の記憶を取り戻した・・・何をしていたのか・・・」
ダイチ「イグニスコピーの実験台の影響で新たな人格が生まれたのか？」

統夜「ああ・・・今から三年前になるかな・・・」

三年前・・・

シュウ「ここに・・・コード・・・『蒼いイレギュラー』がいるのか・・・」

藍色の短髪に黒い眼をした整った顔立ちをした青年・・・九条 シユウ（くじょう しゅう）が山奥にある廃工場へ歩き出した。

廃工場へ着き扉を開け歩きながら周りを見回した時肩まである金髪に蒼い瞳をした少年を見つけた。

彼の気配を感じたのか少年・・・天川 統夜がいきなり殴り掛って来た。

シュウ「な・・・いきなり殴り掛るなんて・・・」

統夜「でりゃあ！！！」

蹴りを放ったが避けられ壁を破壊してしまった。

シュウ「パワーはそちらの方が上のようだな・・・」

統夜はシュウの方へ歩き出した。

シュウ「反撃開始と行くぞ！！！」

統夜の方へ駆け抜け拳を用いて殴り合いを始めた。

統夜の拳を避けながら反撃のタイミングを窺っていた。

シュウ「はあ！！！」

ハイキックを放ち統夜は受けようとしたが受け止めきれず吹き飛ば

された。

吹き飛ばされた統夜は起き上がり再び殴り掛ったが全て避けられた後腕を掴まれ上へ投げ飛ばされ天井へ激突させた。

統夜「ぐわあ!!」

シュウ「フツ・・・何!？」

統夜が笑みを浮かべている事に驚いていた。

統夜「ハツハア!!」

右手から魔力スフィアを出しシュウに向けて攻撃したが魔力で強化された拳で防がれた。

その後統夜は右ストレートを放ちシュウは左拳でぶつけ衝撃波が発生しお互いバックステップして間合いをとった。

統夜「オラアアア!!」

今までより速い拳の連打を仕掛けた。

シュウ「(今までより速い・・・)」

拳の連打を避けながらバックステップをして後ろに下がった後上にある障害物に飛び移った。

統夜はそれを追うように上の障害物に飛び移った。

シュウ「はあ!!」

剣型のストレージデバイスを起動させ構え、統夜は魔力で形成した剣を具現化させた。

二人は剣での打ち合いを始めた。

統夜「楽しいなア・・・おい!!!」

シュウ「楽しんでる・・・戦いは遊びじゃない事を教えてやる！
！おりゃあああああ!!!」

渾身の一閃を放ち統夜の魔力剣を砕いた。

統夜「チツ・・・」

シュウ「もう一撃!!!」

上段斬りを仕掛け終わらせようとした瞬間統夜は笑みを浮かべて駆け抜けた刹那・・・シュウが剣を手にした左腕が千切れ飛んだ。

シュウ「ぐおおおお!!!」

左肩を抑え顔を歪ませていた。

統夜「ククク・・・楽しもうぜエ!!!」

シュウ「ぬ・・・ぐががが・・・」

今の統夜に恐怖し顔を歪んでいた。

その後シュウが手にした剣を手にして滅多斬りとタコ殴りの交互を瀕死になるまで繰り返しをし吹き飛ばしていた。

統夜「返すぜエ!!!」

剣をシュウの腹部に勢いよく刺した後傷だらけの頭を掴み始めた。

統夜「最高傑作だなアア!!!おい!!!」

頭部を破壊する為力を入れ始めた。

統夜「クククク・・・ヒャアーハハハハ！！！！うぐっ！ぐお・・・
ぐわあああああ！！！！」

笑いだした瞬間シュウの頭部を離し激しい頭痛なのか両手で抱え苦しみ始めた。

シュウ「い、今だ・・・ぐおおおおお！！！！」

魔力を右拳に収束させ捨て身の拳で統夜の頭部に目掛けて殴り飛ばした。

シュウ「これで・・・おわ・・・」

統夜に攻撃を当てた後シュウは力尽きて死亡した。

統夜「それから誰かの手によって地球へ送り飛ばされ乙女姉さんに助けられた・・・」

ダイチ「それが・・・『蒼いイレギュラー事件』・・・お前の空白の一年間・・・」

浩次「うぐ・・・正気・・・に・・・なったな・・・」

全身に大火傷を負った浩次が意識を取り戻した。

統夜「アンタ・・・喋らなくていい・・・」

浩次「僕は・・・僕達は・・・自分達が入っていた組織こそ正しいと信じ・・・疑わなかった・・・」

ダイチ「だけど・・・裏切られた・・・タイガと混沌の策略によつて・・・貰ったアイテムは統夜を覚醒させる為だった・・・」

浩次「君達に聞きたい・・・君達は何の為に戦っている・・・？」

統夜「人それぞれだ・・・大切な人を守る為・・・とかな・・・」

浩次「そうか・・・天川 統夜・・・君に頼みがある・・・」

統夜「何だ？」

浩次「僕はもう永くない・・・僕のジャツジナイトと千秋のパーシヴァルを託す・・・僕達の魂を・・・意思を・・・誇りを・・・」

統夜「分かったから・・・もう喋るな・・・」

浩次「最後に・・・僕達は・・・間違つてたのかな・・・所属する組織を」

雪蓮「そうね・・・」

浩次「手厳しい・・・僕の名は・・・閃導 浩次・・・」

自分の名前を教えた後目を閉じ動かなかった。

統夜「浩次・・・お前達の魂と意思、誇りは・・・受け継ぐ・・・

それが・・・お前達に対しての罪滅ぼしだ・・・」

待機状態のパーシヴァルとジャツジナイトを手にして浩次の亡き骸の前で誓った。

華琳「・・・」

遊輔「あいつらを駒のように捨てた混沌は絶対に許さねえ・・・」

ダイチ「戻る前に・・・」

統夜「分かっている・・・」

千秋と浩次の亡き骸を火葬して墓を建て本拠地寮へ転移して戻った。寮に戻つてもしばらく誰も話そうとはしなかった。

数時間後本拠地に零斗と達哉、明久、はやて、康太が来た。

零斗「遊輔・・・彼女が・・・」

遊輔「人質にされていた冥琳さんだ・・・」

零斗「そうか・・・あつちで何があつた？」

遊輔「実は・・・」

基地で冥琳を助ける事に成功したがデュオから貰ったアイテムで統夜が豹変し浩次と千秋の二人を殺めてしまった事、統夜がイグニスコピーの実験体である事等を話した。

その後零斗は黒ずくめの青年剣咲 剣が現れた事を教えた。

零斗「あの二人は統夜の覚醒の為の餌として利用していたのか・・・」

達哉「絶対許せない・・・」

明久「ダイチに弟がいたなんてね・・・」

遊輔「そつちには剣咲 剣が現れたのか・・・」

零斗「俺のマイティ真拳やトイズの事を知ってたし・・・」

統夜はソファーに座り自分の両手を見ていた。

自分の夢に出て来た謎の科学者、イグニスコピーを受けた事、シユウや数々の犯罪者等を躊躇なく殺害した事、浩次と千秋を死なせてしまった事を思い出していた。

統夜「これが・・・本当の俺なのか・・・本当の俺って奴なのか・・・」

はやて「本当の俺がどうかしたんか？」

隣に座つたはやてが問い掛けた。

統夜「空白の一年の記憶を取り戻したのさ・・・」
はやて「空白の一年間？」

統夜「ああ・・・俺がイグニスコピーの実験台としてな・・・」
はやて「何やて!？」

統夜がイグニスコピーの実験された事に驚愕していた。

統夜「そのお陰か・・・星の力とルシファー、もう一つの人格を得てしまったがな・・・」

はやて「統夜は大丈夫なんか？」

統夜「大丈夫だ・・・俺は・・・奴のようにはならない・・・」

自分の拳を握りしめた。

袂を分かち・・・上司であり友でもあったイグニスとは違うと自分の心に・・・

はやて「統夜は本当の種族とか・・・興味ある？」

突然の質問に・・・

統夜「無いと言えば・・・嘘になるな・・・いずれ分かる事だボチボチと探すさ・・・セントクルセイダースを倒した後で・・・」
はやて「私達も力になるからな」

華琳「（統夜の本当の種族・・・興味あるわね・・・）私も探すわ・・・何も知らないで暴走されるこっちの身にもなりなさい」

統夜「すまないな・・・」

はやて達統夜ラバースも協力する気マンマンだった。

本当の種族が分かった時は彼女達は受け入れてくれるだろう・・・

零斗「え〜と冥琳・・・だっただけ？ 一ついい？」

零斗は冥琳に質問をした。

冥琳「何だ？」

零斗「セントクルセイダースの本拠地って知ってる？」

本題であるセントクルセイダースの場所を訪ねた。

冥琳「知っているが・・・あそこは艦隊やコピールシファー、強化魔導師達がいる・・・それに・・・普通の転移では難しい場所にある・・・」

零斗「そうか・・・」

雪蓮「まあ・・・何とかなるでしょ」

冥琳「雪蓮・・・あのね・・・戦艦が無ければ難しいわ・・・」
達哉「そうか・・・厳しいな」

セイラ達がいる場所へ行くには戦艦が必要になると聞いた零斗達は愕然としていた。

統夜「無いものはしょうがないだろ・・・」

ダイチ「打つ手無しか・・・」

はやて「残念や・・・」

統夜も残念そうな表情をしていた。場所が分かったのに戦艦が無ければ何も出来ない事に・・・

その頃・・・

マガキ「上手く成功しましたか・・・」
タイガ「ああ・・・あいつらは死んだし・・・凄い力だよ・・・
イグニスコピー・・・いや・・・『ルシファー化』は・・・」
マガキ「イグニスコピーの最高傑作ですからね・・・それに・・・
もう一つの人格があつた事に驚きを隠せませんね・・・」

タイガがマガキに報告をしていた。

統夜の力を見たマガキとタイガの二人は笑みを浮かべていた。

マガキ「弱者である二人の排除はセイラさんの頼みでもありません
しね・・・」

タイガ「奴も用済み・・・だろ？」

マガキ「ええ・・・」

マガキ率いる混沌は次の計画を立てようとしていた。

第四十七話『紅の美周郎の奪還』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

達哉「統夜の過去は辛いな・・・あの事件さえ無ければこんな事にはならなかった・・・」

達哉「セイラ達セントクルセイダーズの場所が分かったが戦艦が無いら事に悩む俺達・・・」

達哉「スフィア王国にいる月王から連絡が入り新品同然の戦艦をマウンテンサイクルから発掘された事が伝えられた」

達哉「今回は『決着を着ける場所へ』 テイクオフ」

第四十八話 『決着を着ける場所へ』 (前書き)

遊輔「コード麒麟!!」

なのは「遊輔君!？」

蓮華「声が似てるわね」

シグナム「他人の様な気がしないのは気のせいか？」

リン「HERO'S EPISODE第四十八話始まるです」

第四十八話 『決着を着ける場所へ』

第四十八話 『決着を着ける場所へ』

冥琳を救出して翌日・・・

統夜「戦艦ねえ・・・」

遊輔「どうするんだよ・・・」

達哉「どうする？」

明久「悩むよね・・・」

ダイチ「誰かに造ってもらおう？」

零斗「デバイスマイスターはいるが戦艦は無理だ・・・造れたとしても時間かかるぞ？」

康太「・・・大問題」

昼休みの時間に七人は学園の屋上におり座っていた。

統夜「もし手に入れたとしても・・・誰が動かして管制すんだよ・・・」

零斗「自動操縦だったらいいけどな・・・」

ダイチ「武装に波動砲とかあつたらいいよな」

達哉「希望を持つのはいい事だが・・・」

明久「核ミサイルも搭載したら文句無しだよな」

達哉「おiiiiiiii!!!それは人として終わってる!!!?」

明久の台詞にあつた単語の核ミサイルにツッコミを入れた。

統夜「ま、どうするか・・・たけしも一緒になってから話し合おう」

零斗「そうだな」

ダイチ「もし戦艦を手に入れたら誰を艦長にするか決めない？」

統夜「それは本拠地でな・・・お前の事だ・・・女艦長じゃなきや嫌だとか言いたいんだろ？」

ダイチ「当たり前だ」

統夜はダイチの言葉に呆れて溜息をついた。

分かり切っていた事でも呆れるのは仕方が無い。

達哉「それじゃ・・・放課後本拠地でな」

統夜達七人は立ち上がりそれぞれ教室へ戻った。

時間が過ぎ放課後・・・

統夜「たけし・・・お前は戦艦をどうした方がいいと思う？」

本拠地寮にてたけしを入れた八人で話し合った。

たけし「うーん・・・買うか管理局に協力して貰うってのは駄目・・・
だよな」

統夜「現在俺達蒼穹の騎士団と管理局は敵対してんのよ？戦艦を貸してなんて・・・無理にも程がある・・・」

たけし「だよな・・・造るとしてもそれなりの時間が必要だし・・・」

達哉「月に頼む・・・ん？待てよ・・・っ！？」

月に頼もうとした時何かを閃いたのか勢いよく立ち上がった。

零斗「達哉？」

達哉「可能性がある場所ならあるぞ。月にある場所……」

統夜「月にある場所……まさか……マウンテンサイクルか!？」

零斗「マウンテンサイクル？」

マウンテンサイクルを知らない遊輔と達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久、康太は頭に?マークを浮かばせていた。

マウンテンサイクルとはかつて戦争等に使われ強過ぎた遺産である禁忌の遺産であるデバイスや兵器などが眠る『生きた遺跡』の事である。

統夜「ターンギャザー……セイクリッドファンクが眠っていた遺跡の事だ。ロストロギアとかが入っているかもしれん……」

達哉「希望が見えたな」

零斗「ああ」

遊輔「月に救われたな」

ダイチ「感謝だな」

たけし「あるといいな」

明久「そうだね」

康太「……奇跡が起こると嬉しい……」

するとピリリリと音が鳴り始めた。

統夜「誰から通信だ？」

管制室へ移動し応答した。

統夜「はい。こちら蒼穹の騎士団……」

月王「おお……君は天川君!良かった……君達に伝えなくてはいけない事がある」

通信してきた人物は月王だった。

統夜「伝えたい事？」

月王「うむ・・・実は・・・マウンテンサイクルで発掘していた者達がとんでもないものを掘り当てたのだ」

統夜「とんでもないもの？」

月王「戦艦だ」

戦艦という単語に統夜は驚愕した。

何故なら自分達の戦艦になるのかもしれないのだから・・・

統夜「・・・」

月王「どうかしたのかね？」

統夜「実は・・・俺達・・・蒼穹の騎士団の旗艦を探していたのですよ」

月王「そうだったのかね・・・今日から月へ行っても遅くなるだろうから明日来てほしい。それと・・・」

統夜「それと・・・？」

月王「達哉君にフィーナとラブラブしてるかを伝えておいてくれ」

親馬鹿な事を言うのと切られた。

管制室から出てリビングへ向かった。

達哉「誰からだった？」

統夜「月王だよ。皆にいい知らせがある」

零斗「何だ？」

統夜「マウンテンサイクルから戦艦が掘り出された」

これを聞いた一同は・・・

遊輔「よおおつしやああああ!!!!」

達哉「やった・・・」

零斗「やったぜ・・・」

ダイチ「ラッキーだぜ」

たけし「奇跡だああ!!!!」

明久「本当に運がいいね!」

康太「・・・奇跡・・・」

遊輔達六人は喜び出した。

自分達が求めていた戦艦が見つかったのだから・・・

統夜「今日は遅いから明日来てほしいってよ・・・達哉に伝言がある」

達哉「伝言?」

統夜「フィーナとラブラブしているか・・・以上・・・」

達哉「あ、ありがとうございます・・・」

伝言を聞いた達哉は苦笑いするしか無かった・・・

零斗「愛されてるな」

遊輔「全くだ」

ダイチ「月王公認でエッチが出来る男・・・」

たけし「信頼されてるね」

明久「凄いよね」

統夜「お〜い・・・康太・・・大丈夫か?」

康太「・・・」

康太は想像したのか大量の鼻血を出して倒れていたのを統夜が起こしていた。

統夜「とりあえず・・・明日ここで待ち合わせな」
一同「了解」

統夜達一同は解散しそれぞれ帰路へ着いた。

翌朝

統夜「よし・・・揃ったな」

本拠地の庭に統夜と遊輔、達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久、康太の八人が集まっていた。

全員揃ったのを確認し終えた後魔法陣を展開しスフィア王国へ轉移した。

兵士「お待ちしておりました」

予め月王に轉移する場所を教えていた為兵士がお出迎えをしていた。

達哉「ありがとうございます」

兵士「では・・・こちらへ・・・」

統夜達をマウンテンサイクルのある場所まで案内した。

統夜「ここがマウンテンサイクル・・・」

達哉「神秘的な所だな」

遊輔「不思議だ」

零斗「デバイスや様々なものが眠っている場所か・・・」

ダイチ「凄い場所だな」

たけし「凄いぜ……」

明久「お目にかかれない場所だね」

康太「……確かに……」

一同は宇宙服を着て統夜達は感動を覚えた。
滅多に見れない可能性があるからだ。

兵士「こちらです」

マウンテンサイクルを案内した後戦艦を安置してある施設へ移動し
宇宙服を脱ぎ元の私服へ着替えた。

兵士が手でガレオン船を模した戦艦を指した。

統夜「これが……」

遊輔「海賊船だな……」

達哉「俺達の旗艦になるのか……」

零斗「これって……よく見りゃ海賊戦隊ゴーカイジャーのメカに
ソックリだよな」

兵士「では中へ……」

戦艦の中へ入りブリッジへ移動した。

兵士「この戦艦の名前はスペースバンガード……戦艦型のロスト
ロギアです。動力はMIES（マキシマムインフィニティーエナジ
ーシステム）を用いています。ですからエネルギー量は無限に供給
されます」

達哉「それにしても……真新しい……」

統夜「恐らく空間と時間の魔法が施されていたんだろう……劣化
しないように……」

零斗「それなら説明がつかない」

兵士「まだ発掘されたばかりですので・・・どうされます？」

統夜「使わせてもらう・・・月王によるしく言っておいてくれ・・・

兵士「了解しました。システムの復旧は・・・」

統夜「俺達がやるよ・・・」

兵士「分かりました・・・では・・・」

兵士は統夜達に敬礼をした後去った。

統夜「始めようぜ。スペースバンガード・・・起動!!」

スイッチを押しシステムを起動させた。

ナビィ『はじめまして・・・私はナビィと申します。システムを起動します・・・発進を行いますか?』

起動させた後女性の声が聞こえた。

統夜「いんや・・・現状を維持しつつ全システムの復旧作業を行ってくれ・・・俺達は細かい作業と点検をするから」

ナビィ『了解』

その後復旧作業と点検は順調に進んでいた。

零斗「これで何とかなるな・・・後は・・・どうする?」

統夜「連れていく人物か・・・俺達八人に・・・なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッター、カナ、咲夜、華琳、雪蓮、蓮華、小蓮を連れていくか」

遊輔「そうだな。後は・・・」

統夜「問題・・・無いかな」

たけし「策を考える人も必要だぜ。桂花と冥琳さんの二人を……」
康太「……情報管制も大事」
統夜「決まりだな」

システムの復旧と点検を終えブリーフィングルームで話し合っていた。

話し合いで決まった行くメンバーは統夜、遊輔、達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久、康太、なのは、フェイト、はやて、ヴォルケンリッター、カナ、咲夜、華琳、雪蓮、小蓮、桂花、冥琳の計23名。その後統夜達はブリッジに移動した。

統夜「ナビィ……時空転移は可能か？」

ナビィ『可能です』

統夜「そうか……発進シーケンスを開始しろ」

ナビィ『了解……発進シーケンスを開始します』

施設の扉が開き始めた。

統夜「行こうぜ」

ナビィ『了解』

その言葉をスイッチにスペースバンガードが飛び立った。

零斗「やったな」

達哉「ナビィ……月王陛下に通信を入れたい……」

ナビィ『了解……』

ナビィは通信を月王へ入れ始めた。

月王『達哉君……既に戦艦を起動させたのかね？』

達哉「はい。俺達は飛び立って地球へ移動しています・・・この戦艦でセイントクルセイダーズの本拠地へ移動し戦いを終わらせませう」
月王「そうか・・・私からの頼みを聞いてくれるかね？」
達哉「はい」

月王「生きて・・・ここに帰って来てくれ・・・君達のお陰で月と地球の絆が再生されつつある・・・君は私にとって・・・息子なのだから・・・」

これを聞いた達哉は・・・

達哉「はい！必ず帰って来ます！」

月王「健闘を祈るよ・・・」

月王との通信を切った。

零斗「待ちに待った・・・大気圏突入だぜ！！！」

種運命の歌姫のコスプレをした零斗が騒いでいた。

ダイチ「イエーイ！！！」

某銀河の妖精のコスプレをしたダイチも騒いでいた。

明久「も～～～～ふざけないでよ～～」

某超時空シンデレラのコスプレをした明久が零斗とダイチを止めていた。

達哉「お前らあああ！！！！何やってるんだあああ！！！！そして明久！！お前もふざけている！！！！」

ふざけている零斗とダイチ、明久に怒鳴ってツッコんだ。

統夜「凄いな・・・ビームフィールドを展開しての大気圏突入か・・・
ナビィ・・・突入後英都港へ通常転移してくれ」

大気圏突入した後・・・

ナビィ『了解・・・転移開始・・・』

スペースバンガードは英都港へ転移した。
一同はスペースバンガードから外へ出た。

統夜「ナビィ・・・光学迷彩・・・オン」

ナビィ『了解』

スペースバンガードは光学迷彩を使い透明になった。

零斗「さて・・・俺達は一回解散して二時間後ここに集まるぞ」
零斗以外「ああ」

一同はそれぞれ解散した。

遊輔サイド

遊輔「いよいよ・・・最終決戦か・・・」

解散した後ただ一人で管理局と敵対していた頃を思い出しながら歩い

ていると・・・

なのは「遊輔くん!!!」

なのはが走って遊輔の所まで来た。

遊輔「なのは。今日は一人？」

なのは「うん。どうかしたの？」

遊輔「実は・・・今から二時間後にセントクルセイダーズとの最終決戦を始めるんだ」

なのは「ついに・・・管理局を歪ませた元凶と・・・」

遊輔「なのは・・・君も参加する？」

なのは「うん。これは私達の問題でもあるから・・・」

遊輔の問いに即答した。

セントクルセイダーズは管理局から生まれた存在である為なのは達エースも決着をつけるつもりだったのだ。

遊輔「管理局の闇として具現化されたセントクルセイダーズは許せない・・・か・・・」

なのは「そうだね・・・」

遊輔「彼女を放置すればするほど・・・本当の笑顔でいられる世界が無くなる・・・」

セイラ達セントクルセイダーズを放置すれば秩序という名の歪みと混沌により新たな悲劇が起きるのは間違い無い。

時空管理局の名前を利用し全次元世界の支配を企むセイラは許される筈も無いだろう・・・

なのはは満面の笑みになり・・・

なのは「決戦前に甘いもの食べに行く？私のおごりで」

遊輔「いいのか？」

なのは「勿論 行こ」

遊輔「ああ」

二人はフローラへ移動した。

フローラへ着いた後稟と土見ラバーズに出くわした。

稟「遊輔じゃないか。今日はデートか？」

遊輔「まあ・・・そんな所だな。そっちもだろ？」

シア「どうもつす」

ネリネ「こんにちは。遊輔様」

楓「こんにちは。桜木君」

遊輔「こんにちは。あれ・・・時雨さんとカレハさんは一緒じゃないのか？」

稟「あの二人は・・・入れば分かるよ」

遊輔達は中へ入るとそこには制服姿の亜紗とカレハが接待していた。

亜紗「いらつしゃい。稟ちゃんに遊ちゃん」

カレハ「いらつしゃいませ。稟さん。遊輔さん」

二人に遊輔の反応は・・・

遊輔「どうも」

普通に接していた。

亜紗「遊ちゃん・・・反応がつまんない」

遊輔「まあ・・・予想はしていたから・・・」

稟「俺は驚いたがな・・・」

テーブルへ座りデザート類を注文した。

遊輔「決戦前に甘いものを食べるっていい事だ」

稟「セントクルセイダースだったっけ？」

遊輔「ああ。管理局を・・・世界を欺いた元凶セイラ＝シュトラウトとの決戦が・・・」

シア「ファイトっす」

ネリネ「気をつけてくださいね」

楓「何も出来ませんが・・・頑張ってください」

なのは「頑張つて・・・ここに生きて帰ってみせるよ」

亜紗「ご注文のデザートだよ」

特大のパフェが遊輔の所にきた。

遊輔「こ、これは・・・」

亜紗「私からのおごり。頑張つて勝つてね」

なのは「にやはは・・・これを出されたら・・・勝つしか無いね」

遊輔「ああ。この戦い・・・絶対勝つぞ」

カレハ「まままあ 遊輔さんとなのはさんが・・・」

亜紗「カレハへ戻つて来て」

遊輔「あはは・・・いただきます」

特大パフェを食べ始めた。

達哉サイド

解散した後自宅へ戻っていた。

達哉「いよいよだ・・・」

自分達の運命を狂わせたセイラ率いるセントクルセイダーズとの最終決戦の前に瞑想をしていた。

最終決戦前なのかいつもより真面目に取り組んでいた。しばらくして瞑想を終え目を開けた。

達哉「これで・・・俺・・・俺達は・・・報われる・・・」

待機状態のラピスブレイブを右手で手にしていた。

すると盗み聞きしていたのかフィーナ達・・・朝霧ラバーズが入って来た。

達哉「皆・・・」

えへへと笑っていたラバーズに対して笑顔で迎えた。

フィーナ「行くのね」

達哉「ああ・・・」

ミア「必ず戻って来てください・・・これからやる事がたくさんありますから・・・」

達哉「分かってるよ。やりたい事をやれないまま終わるのは誰だつて嫌だしね・・・」

麻衣「頑張ってるね」

菜月「皆・・・待ってるから・・・」

さやか「信じてるわよ。達哉君がここに帰って来てくれる事を」

翠「朝霧君・・・ううん・・・達哉君。待ってるから・・・必ず戻って来てね」

達哉「皆・・・ああ・・・必ず・・・ここに・・・戻って来るよ」

決意のある真剣な表情になって答えた。

自分が必要とし・・・愛してくれる彼女達の所へ戻る為に・・・

ミア「皆さん。お茶会をやりませんか？」

フィーナ「いいわね」

達哉「賛成だよ。丁度喉が渴いたから」

ミアと麻衣はお茶と茶菓子の準備をする為に台所へ移動し、達哉とフィーナ以外のメンバーはリビングへ移動した。

達哉「月王様からの伝言もあった・・・」

フィーナ「お父様から？」

達哉「『生きて・・・ここに帰って来てくれ・・・君達のお陰で月と地球の絆が再生されつつある・・・君は私にとって・・・息子なのだから・・・』ってね・・・」

フィーナ「それを聞いたら絶対に帰って来なくちゃいけないわね」

達哉「そうだね。さ、リビングへ行こうか」

フィーナと一緒にリビングへ向かった。

零斗サイド

解散した後公園で遊輔から聞いた統夜の異変を思い出していた。

旅館で統夜の種族を調べ知っている為予想は出来たが驚きを隠せずにいた。

零斗「（真紅の人影は・・・吸血鬼だったが・・・背中から5対10翼が生えている銀色の影であるルシファー・・・背中から5対1

0翼の蝙蝠状の翼が生えた漆黒の影は知っているが・・・教えるべきではない・・・が・・・三大冥王とは一体・・・」

学園の屋上で会った剣咲剣が言っていた事を思い出していた。

零斗「（だが・・・吸血鬼でも・・・ただの吸血鬼じゃ無いのは分かっているがな・・・あれは・・・遥かに凌ぐ力を持っている・・・統夜以外に・・・鮮華もだろうな・・・）」

いずれ分かる事だとしても統夜と鮮華の為にならないとして教える訳にはいかなかった。

「だ〜れだ？」

突然零斗の目が背後から誰かの両手で防が真っ暗になった。

零斗「アリスだろ？」

アリス「一発で分かるなんて流石零斗〜」

零斗の恋人であるアリスだった。

アリス「何か考え事？」

零斗「ちよつとな・・・」

アリス「天川君の事でしょ？あの黒ずくめの人・・・剣咲剣だったっけ？零斗のマイティ真拳を知ってたし」

零斗「今は・・・セントクルセイダーズとの最終決戦に集中だ・・・」

アリス「いよいよか・・・」

零斗「俺のマイティ真拳で・・・偽りの秩序を打ち砕く!!!」

右拳を空へ掲げた。

アリス「流石継承者だね」

零斗「アリス・・・アイリと一緒に俺が帰って来る場所で待っててくれ・・・」

アリス「一緒に行きたかったけど・・・零斗の頼みなら大丈夫だよ」

零斗「ありがとう。さて・・・公園の草むらで寝るとするか」

アリス「私が膝枕してあげる」

零斗「悪いな」

二人は草むらへ移動しアリスに膝枕されて眠り始めた。

ダイチサイド

ダイチ「色んな事があったな・・・セントクルセイダースの息がかかった連中に追われた頃を思い出すぜ・・・」

寮の屋上で空を見上げながら思い出していた。

ダイチ「もし俺一人だったらここまで来ていなかっただろうな・・・」

仲間のありがたさを感じていた。

そのお陰で絆を築く事も出来ずエリーとの再会も果たせずにしたのかも知れないからだ。

ダイチ「この戦いを終わらせたら・・・スケベな事をやりたいな・・・リスクはかなり高いが・・・バーベナ無双大戦の追いかっこは恐怖を感じた・・・」

スケベな事をやらかしヤンデレ化したエリーに追いかけられた事がトラウマになったようだ。

ダイチのスケベは変わらないと思う。何故なら注意しても止まらないからだ。

ダイチ「女性化した秀吉や咲夜さん、姫路さんのおっぱい・・・揉みたいなく大きいし・・・いい形してそうだから・・・」

呆けているとハンマーがダイチに襲い掛かった。

ダイチ「おわっ!?!? 敵襲か!?!?」

回避し後ろを振り返ると・・・

エリー「ふふふ・・・」

ハンマーを片手に担いでいたエリーがいたのであった。

ダイチ「も・・・もしかして・・・今さっきのを・・・聞いておりました?」

エリー「はい。そうですよ・・・私以外の女の子にスケベするのは止めてくれないと・・・」

ダイチ「止めてくれないと・・・?」

エリー「ウルトラアルゼンチンバックブリーガーとギャラクティカマグナム、チエーンドライブ、暗黒地獄極楽落とし、ハルマケドン、冥恫豪波動をお見舞いします」

ダイチ「ええええええええ!!!? 超強力な技のフルコース!? しかも人間じゃ出来ない技が入ってるよ!?!?」

超強力な必殺技に冷や汗を流してツツコミを入れた。

エリー「大丈夫です・・・愛の力があれば何とか出来ます」

ダイチ「あ、あはは・・・そうか・・・よくここだって分かったな・・・」

エリー「ダイチ君の事なら分かりますよ」

ダイチ「エリー・・・」

エリー「セントクルセイダーズと戦うの？」

ダイチ「最終決戦だ。重要な人物はセイラだけ・・・」

エリー「帰って来るよね？」

エリーの問いに・・・

ダイチ「帰って来るよ。もう・・・エリーを一人にはさせない・・・これだけは本当だ」

真剣な表情でエリーを見つめて答えた。

エリー「ダイチ君・・・」

ダイチ「まだ・・・俺達にはまだやるべき事があるからな・・・一緒に街へ行くか？」

エリー「うん」

ダイチとエリーの二人は寮の屋上から出て街へ出掛けた。

たけしサイド

桂花「最終決戦ね・・・」

たけし「うん。メイメイ・・・ごめんな・・・桂花だけ連れて行く

ような事をして・・・」

たけしは申し訳なさそうにメイメイに謝罪していた。

メイメイ「気にする事ないね。ルイスと一緒にたけし達が帰る場所を守る義務と待つ義務があるね」

ルイス「・・・大丈夫・・・たけし・・・頑張つて・・・」

メイメイとルイスの二人は気にしていなく笑顔で答えた。

たけし「ああ。ルイスさん。ありがとう。俺達は・・・頑張つてここに帰つてみせるよ」

たけしも二人に笑顔で返答した。

桂花「セイントクルセイダースが滅びた後が問題ね・・・」

たけし「問題・・・管理局は戦力持つてかれちゃったんだ・・・あつちに」

桂花「セイントクルセイダースは元々時空管理局の特殊部隊・・・セイラ達に参与している上層部や局員全てが逮捕されるのも時間の問題・・・」

たけし「全次元世界は管理局への信頼度は・・・ゼロに近いつて事か・・・」

管理局の監督不行き届けとセイラ達の裏工作で全次元世界を欺き違法行為等で信頼度は低くなっていた。

違法行為や味方を爆弾代わりにしたセイラ達セイントクルセイダースが管理局を歪ませていたのだから・・・

桂花「修羅にイグニス、混沌が控えている・・・管理局の再建は・・・

・時間が掛る・・・」
たけし「だろうな・・・」

桂花とたけしは顔を顰めていた。

たけし「再建している間は俺達がやれば問題無しだろ」

メイメイ「そうね・・・だけど・・・」

桂花「セントクルセイダーズに閥与していた人数によるけど・・・」

たけし「そこだよな・・・本拠地が分かった今・・・あいつらを叩けば管理局の腐敗は止まる・・・もう・・・ルイスさんのような人が生まれる事が・・・無くなる」

メイメイ「そうね。新しい管理局が白くリセットしスタートの準備をする役割が・・・蒼穹の騎士団・・・」

たけし「ああ。さて・・・皆で昼寝しようか」

三人に問い掛けたがいよいよと即答し四人で昼寝を始めた。

明久サイド

明久「いよいよ決着だね・・・ムツッリニ」

康太「・・・そうだな・・・歪みを破壊する時が来た」

明久と康太の二人は広場のベンチに座っていた。

明久「これで・・・僕達は・・・」

待機状態のアストラルフリーダムを空にかざしていた。

明久「もう・・・僕達のような人達が犠牲にならない時代が来る・・・嘘だらけの世界で犠牲になる人達が・・・」

康太「・・・・・・・・管理局が再生される・・・」

康太も空を見上げていた。

明久「もし僕が生きていなかったら・・・瑞希や美波、雄二、ムツツリー二、秀吉と出会ってなく今の僕が無かった・・・」

愛する人や友達に感謝していた。

康太「・・・・・・・・共に頑張ろう・・・姫路と島田の為に・・・」

明久「うん。僕には帰るべき場所があるんだ・・・」

康太「・・・・・・・・そろそろ来る頃だ・・・」

明久「誰が？ってムツツリー二!？」

横を振り向くと康太がいなかった。

その後瑞希と美波の二人がやって来た。

明久「瑞希・・・美波」

瑞希「明久君!」

美波「アキ!」

明久「どうして・・・ここに?」

美波「土屋がここにいる事と戦いに行く事を教えてくれたのよ・・・アキ・・・行くの?」

美波の問いに明久は真剣な表情になり・・・

明久「行くよ・・・そして・・・ここに戻って来る・・・」

そう答えた。

美波「そう……」

瑞希「美波ちゃん……約束ですよ……ここに戻って来て下さい……」

明久「瑞希と美波のお陰で……今の僕がいる……誰かを守りたいという思いがあるから……」

瑞希と美波を優しく抱きしめた。

瑞希「あ、明久君……?」

美波「あ、アキ……?」

突然抱きしめられた事に困惑した表情になっていた。

明久「突然でゴメン……ここに戻って来るよ……帰るべき場所は……ここだから……」

しばらく抱きしめるのを終えると三人はベンチに座った。

瑞希と美波の顔はリンゴのように真っ赤になったのは言うまでも無かった。

瑞希「いきなり抱きつくなんて……そこらへんも……お馬鹿さん……ですね……」

美波「そうよ……でも……嫌じゃ……無かったわよ……絶対に帰って来なさいよ!」

明久「分かってるよ」

三人はベンチで話し合っていた。

統夜サイド

英都港からストレイキャッツへ向い奥の部屋でオーナーである乙女と話し合っていた。

乙女「記憶……戻ったの？」

統夜「ああ……イグニスコピーとしての記憶が……あの人格を……ルシファーを抑えきれなかったから……悲劇を起こした俺はイレギュラーだ……」

乙女「……」

統夜「力に飲み込まれた俺自身が許せない……」

乙女「統夜ちゃん……」

統夜「だが……俺は……変わる……変わらなければ過ちを繰り返してしまう……悔んばかりだと……」

乙女「その通りよ……自分が背負った罪を忘れてはいけないわ……」

シリアスな話を一旦終わりにして次の話題に入ろうとしていた。

統夜「この戦いが終わったらどうするかね……自分探しをやるかするかね……」

乙女「自分探し……いいじゃない？」

統夜「だな……長かった……だが……これでカタがつく」

乙女「頑張ってね」

統夜「おう。さて……出るとするかね」

奥の部屋から出るとはやて達統夜ラブズが揃っていた。

統夜「はやてにカナ、咲夜さん、華琳……丁度良かった……最

終決戦に参加頼むわ……」

はやて「と言うと……戦艦手に入れたんか？」

統夜「スフィア王国にあるマウンテンサイクルから発掘されたものがね……」

エステル「スフィア王国のマウンテンサイクルによくありましたね……」

統夜「俺も正直驚いた……しかも……搭載されてたのがサーデイオンとセイクリッドファンクに搭載されているMIESと同じだよ」

咲夜「ロストログアね……完全に……」

カナ「MIESが搭載されている時点でそうなるでしょう……」

文乃「サーデイオンとセイクリッドファンクを使いこなしている統夜は……」

千世「ロストログア使いね……」

希「にやあ……でも……フォーチュンエターナルとフォーチュンプラスターを主に使っている……」

統夜「使い慣れているからな……」

優子「見ない内に人から離れてるわよね……」

秀吉「統夜といい……明久といい……周りの男達は規格外じゃろっか……」

統夜「一部だけな……最初は……俺と達哉の二人だけで活動していたが……」

達哉と共に行動していた最初の頃を思い出していた。

統夜「はやて達、遊輔、零斗、ダイチ、たけし、明久という仲間に出会えた……」

敵対していたはやて達の戦い、遊輔との一騎打ち、零斗との共闘、ダイチとの再会、たけしとの共闘、明久との再会を思い出していた。

プリムラ「お兄ちゃんとはやてお姉ちゃん達は帰って来るよね？」
統夜「ああ。帰って来るさ」

はやて「帰ってくるで」

カナ「大丈夫よ」

咲夜「生きてここに戻って来るわ」

華琳「大丈夫よ・・・私達は勝って戻って来るわ」

プリムラの問いに自信満々でそれぞれ答えた。

最終決戦前なのかいつもより気合いが入っていたのは言うまでも無いだろう。

エステル「自信満々ですね・・・」

統夜「そうじゃなきゃ・・・な？」

はやて「せやな・・・」

華琳「そうね・・・」

文乃「・・・絶対に・・・帰って来なさいよ・・・アンタがいないと・・・面白い日常が無くなるのは嫌だから・・・」

統夜「おう」

文乃の素直じゃない言動にはやてと優子、秀吉は苦笑していた。

秀吉「素直じゃないのう・・・そこが・・・のう？姉上」

優子「私も人の事言えないけど・・・素直じゃないわね」

文乃「うるさいわね・・・いいでしょ・・・」

統夜「そういう事しておくよ。この戦いで青空のように蒼に染めて終わらせるとしますかね・・・本日も青天なりってな感じではやて「しばらくしたら行くこうか？」

統夜「そんな時は俺が案内するよ。驚くぞろ戦艦を見たら・・・」
はやて「分かった」

統夜「ここでケーキを食べて頑張るか」

統夜達はストレイキャッツでケーキを食べ始めた。

最終決戦前であるのにも関わらず祝勝会みたいに騒いでいた。

お茶会が終わりはやてとカナ、咲夜、華琳を除く統夜ラバーズと乙女が笑顔で英都港へ行く統夜達を見送っていた。

解散して二時間後統夜達本拠地へ赴くメンバーが英都港へ集まっていた。

統夜「集まったな」

雪蓮「ええ」

フェイト「これで決着着くね……」

統夜「まあな……ナビィ、光学迷彩オフ！」

ナビィ『了解……光学迷彩オフ』

透明だったのがガレオン船を模した戦艦が出現した。

フェイト「海賊船で本拠地へ赴くって……」

シグナム「マトモじゃない気がするの……気のせいかな？」

ヴィータ「カッコいいな。これは……」

シャマル「独特感があるわね……」

ザフィーラ「贅沢は言えん……」

リイン「カッコいいです」

冥琳「これが戦艦型ロストロギアとは……」

スペースバンガードを見て驚愕と困惑していた。
形状が海賊船なのだから当然であるが……

統夜「さて・・・中へ入るぞ」

一同はスペースバンガードの中へ入った。

統夜はブリッジへ、それ以外は格納庫やブリーフィングルーム等へ移動した。

統夜「ナビィ、発進準備させてくれ」

ナビィ「了解・・・」

スペースバンガードを発進準備させるとブリッジからアナウンスを流し始めた。

統夜「ブリッジより各員に報告する・・・」

格納庫

統夜「セントクルセイダーズとの戦いに終止符を打つ時が来た・・・」
遊輔、たけし、桂花「・・・」

通路A

統夜「今まで色々な事があったが・・・これで終わりにする・・・」
零斗、ダイチ、明久「・・・」

整備室

統夜『彼らを倒し……』

カナ、咲夜、華琳、雪蓮、蓮華、小蓮、冥琳「……………」

ブリーフィングループ

統夜『生きて帰ろう……』

なのは、フェイト、はやて、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフ
イーラ、リイン「……………」

通路B

統夜『俺達の帰るべき場所である英都に……』

達哉、康太「……………」

ブリッジ

統夜『俺達を待っている人達がいる世界へ!!』

ナビィ『スペースバンガード……システムオールグリーン……
火器管制及び生命維持システム……問題無し……いつでも発進
可能です』

統夜『スペースバンガード……発進!!』

スペースバンガードを発進させセイラ達セントクルセイダースと
の最終決戦が遂に始まるうとしていた。

第四十八話 『決着を着ける場所へ』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

雪蓮「遂にやって来たわね・・・冥琳を人質にした事とこき使ってくれたお礼を返す時が・・・」

雪蓮「案の定・・・冥琳が言った通り・・・強化魔導師の大群や艦隊が待ち構えていた」

雪蓮「だけど・・・私達は勝つ為に来たのだから・・・」

雪蓮「今回は『ツケを返す時』テイクオフ」

スペースバンガードの詳細(前書き)

スペースバンガードの詳細です。

スペースバンガードの詳細

戦艦『スペースバンガード』

形状：ガレオン船を模した戦艦

詳細：月のマウンテンサイクルから発掘された戦艦型ロストロギア。動力にはサーディオンやペンドラゴブレイド、セイクリッドファングに搭載されてあるMIEESが搭載されておりエネルギー量は無限に供給される。

ワン・マン・ディレクションシステムを搭載しており誰かが一人いれば操艦可能。

この戦艦はオイディプス戦争で使われる事無くマウンテンサイクルの中に埋まっていた。空間と時間の魔法が掛けられており永い年月が経っても劣化する事は無かった。

スフィア王国の人達によって発掘された後蒼穹の騎士団の旗艦となった。

船体全体をMIEESを用いたビームシールドで覆うことで高い防御力を誇り、時空間転移が可能。

光学迷彩機能とジャミング機能、ステルス機能を持つ。

武装はバルカン砲とミサイルポッドを各所に装備されていて、全包囲にも攻撃可能。

主翼にある高出力ビーム砲「バンガードフリート」。エネルギーフィールド発生装置が搭載されている衝角部分には突進攻撃に用いる刃「バンガードラム」

正面艦首に内蔵されている超重力波破壊攻撃をする「グラビティブラスト」

AIであるナビィが搭載されており管理が自動化されている。

スペースバンガードの詳細（後書き）

行けない次元世界へ赴く時に使われます。

第四十九話『ツケを返す時』（前書き）

本拠地へ赴く時統夜達蒼穹の騎士団に強力な味方が現れる。

遊輔「HERO'S EPISODE第四十九話始まるぞ」

第四十九話『ツケを返す時』

第四十九話『ツケを返す時』

スペースバンガードを発進させた統夜はブリーフィングルームへ向かった。

統夜「さて・・・集まったのはいいが・・・遊輔・・・災難だな・・・」

遊輔「ああ・・・」

ブリーフィングルームに着いた瞬間雪蓮が統夜にくっ付き、頬を赤らめた蓮華が遊輔の腕を組んでいた。

そのお陰かはやとカナ、咲夜、華琳の四人は黒いオーラを纏い統夜を鋭い目で睨み、なのはは黒いオーラを纏い遊輔と蓮華を睨んでいた。

五人から出ている黒いオーラに冷や汗を流し震えていた。

明久「あはは・・・災難だね」

小蓮「~~~~」

小蓮に抱きつかれた明久は苦笑いしていた。

統夜「お前はいいよな・・・姫路と島田にバレたらどうなる事やら・・・」

二人の名前を聞いた明久は青ざめた。

もし二人にバレたらロリコンの烙印を押され制裁される恐れがあるからだ。

遊輔「生きているだろう・・・」

統夜「ロリコン明久・・・暁に死すってか？」

明久「誰がロリコンだよ！！それに・・・僕は死なないよ！って・・・ブリッジにいないくていいの？」

明久の発言にハツとして一同は統夜の方へ顔を向けた。

統夜「ワン・マン・ディレクションシステムがあるから自動操艦出来る」

ヴィータ「何だ・・・そのワン・マン・ディレクションシステムって」

ヴィータの質問に・・・

統夜「殆どの事が自動で出来るシステムだ。セイクリッドファンクに搭載されているオートムーブシステムの戦艦版と思えばいいが・・・欠点がある・・・」

ヴィータ「なるほど・・・欠点？」

冥琳「細かい作業が出来ない所は手動でやらなければいけない所か？」

冥琳が欠点をズバツと指摘して答えた。

統夜「その通り・・・完璧じゃないんだ・・・これが・・・」

冥琳「だから・・・補佐が必要になる・・・か・・・それと・・・

雪蓮と蓮華様・・・離れた方が・・・」

雪蓮「ぶっ・・・いいじゃない・・・『好きな人』に抱きついたら不満があるの？」

冥琳「なら・・・八神とカナ、相川、華琳をしてみる・・・蓮華様

は高町の方をご覧になってください」

雪蓮ははやとカナ、咲夜、華琳、蓮華はなのはの方を見て冷や汗を掻き離れた。

嫉妬と黒いオーラを放っているはやて達に雪蓮は勘が告げているのか離れる事を選択した。

雪蓮「（こ、怖いわね・・・）」

蓮華「（そ・・・そうですね・・・）」

はやて「統夜・・・ミーティングが終わったら・・・ちよつと・・・お話ししような」

カナ「逃げたら・・・」

咲夜「明日は・・・」

華琳「無いわよ」

なのは「遊輔くん・・・この後お話ししよう」

統夜、遊輔「はい・・・」

仕方なく返事をした。

これらを見た明久は合掌していた。

そりゃそうだろう・・・ラバース持ちの宿命と感じているのだから・・・

達哉「（ご愁傷さま・・・）」

零斗「（統夜・・・遊輔・・・頑張れよ・・・）」

ダイチ「（死ぬなよ・・・）」

たけし「（生き延びてくれ・・・）」

明久「（僕は・・・いずれバレるんだ・・・）」

康太「（・・・頑張って生き延びる・・・）」

達哉達六人の男性陣は統夜と遊輔の無事を心の中で祈った。

統夜「話を戻すが・・・作戦内容は・・・俺と達哉、明久の三人とそれ以外のメンバーと二つに分ける」

零斗「お前と達哉、明久・・・お前達三人と俺達を分けた・・・いいんじゃないか？」

遊輔「大方予想はつくが・・・」

ダイチ「セイラとの決着をする側と雑魚を片付ける側だろ」

たけし「終わったらそっちに行くから」

統夜「頼んだぜ。あのセイラはアレでも実力のある奴だから・・・何を企んでるか分からんしな」

たけし「後は戦艦で誰が残るか・・・」

桂花「私が残るわ。戦闘に不向きだし・・・細かい弾幕やレーダー探知をしなくちゃいけないから」

冥琳「私も残ろう」

作戦会議の結果統夜と達哉、明久の三人で形成されたセイラ討伐組、遊輔達で本拠地の周りにいる雑魚を片付ける組、スペースバンガードに残る組の三つに分けた。

作戦内容に反対する者は誰もいなく統夜と達哉、明久はセイラという因縁を断ち切る事に協力した。

はやて「ほな・・・行こうか・・・」

カナ「うん」

咲夜「ええ」

華琳「覚悟しておきなさい・・・」

統夜「セイラを殺す前に俺は・・・終わりそうな気が・・・」

作戦会議が終わり解散した後はやてとカナ、咲夜、華琳の四人は統夜を引き摺って何処かへ移動した。

なのは「遊輔君・・・お話しよう・・・」

なのはは遊輔の襟を掴んで何処かへ移動した。

五人の制裁に統夜と遊輔の悲鳴が聞こえたのは言うまでも無かった。

はやて「そういう事やったんか・・・戦いでなあ・・・なのはちゃ
んも頑張りや」

なのは「うん・・・蓮華ちゃんとは中国で出会って一目惚れしてい
たなんて・・・不覚をとったの・・・」

ポロポロになつた統夜と遊輔を引き摺ってブリッジへ移動した。

雪蓮「大丈夫？」

統夜「これで大丈夫に見えたら・・・貴方の目は節穴だよ・・・」

ブリッジにいた雪蓮にツツコミを入れた。

蓮華「遊輔・・・大丈夫・・・」

なのは「ごめんなのは分かるけど・・・ちょっと嫉妬心が出ちゃっ
て・・・てへっ」

遊輔「いや・・・ちょっとじゃ・・・いえ何でも無いです・・・」

なのはにツツコもうとしたがなのはのオーラに当てられ撤回した。

白い悪魔状態のなのはに遊輔は黙るしか無かった。

彼女なら核の炎に包まれ荒れ果てた世界で霸王になれるだろう・・・
あくまで可能性の話だが・・・

明久「災難だったね」

統夜「ははは・・・英都に帰ったらお前は二人の般若にやられる事
を祈ってやる」

遊輔「戦いの中でフラグが立ってどうなのって言いたくなる……」
零斗「マイティ真拳奥義！ヒーリング！」

零斗は修羅場で受けたダメージを受けた統夜と遊輔にヒーリングを掛け回復させた。

統夜「さて……時空転移するか……ナビィ！」

ナビィ『時空転移を始めるのですか？』

統夜「ああ。 세인트クルセイダーズの本拠地へ転移だ！」

ナビィ『了解』

夕焼けの空を背景にしているスペースバンガードはその場から姿を消した。

세인트クルセイダーズ本拠地

セイラ「来ましたか……どうやって知ったのかはどうでもいいですが……大量の兵士達の前にひれ伏し……秩序の元に散りなさい」

執務室にてレーダーに反応しモニターを映し不敵な笑みを浮かべた。

セイラ「天川 統夜……貴方の存在はあってはなりません……」

円柱型の巨大タワーである本拠地の周りには何万という戦艦や強化魔導師、コピールシファーやらがうようよといた。

セイントクルセイダーズの本拠地から少し離れた場所にスペースバ
ンガードは出現した。

統夜「着いたな・・・」

ブリッジの中で呟いた。

するとピリリピリリという着信音が聞こえた。

ナビィ「あちらの建物から通信が入っています。繋ぎますか？」

統夜「繋げ」

通信を繋げると肩まである紫色の髪に金色の瞳をした綺麗な顔立ち
女性・・・セイラがモニターから現れた。

セイラ「蒼穹の騎士団の皆さま・・・一体どのような用件で来たの
ですか？」

統夜「アンタをぶちのめしに来た・・・その前に・・・アンタに質
問をしたい」

セイラ「構いませんよ」

統夜「アンタは・・・閃導 浩次や栗川 千秋のようなアンタを信
じていた魔導師達をどう思う？」

統夜の質問にセイラは・・・

セイラ「そうですね・・・私にとっては手駒みたいなものです。彼
らの代わりはいくらでもいますし・・・」

セイラの答えに統夜達は怒りを覚えた。

統夜「そんな奴の為に死んだ浩次と千秋はさぞ浮かばれんな」

セイラ『そんなのは私には関係ありません・・・私の為に働き死ぬ事は当然なのです・・・それが新たなる秩序に繋がります。故に口ストロギアのようなものも全て私のものなのです』

セイラの言葉に統夜を含む一同は呆れていた。

単なるワガママにしか聞こえないのだから・・・

統夜「で・・・そんなワガママで俺達の部隊を壊滅させ手柄を横取りし隠蔽したってか・・・器の小さいババアだな」

はやて「醜いババア。醜く死んでや」

雪蓮「俗物ババア。地獄に落ちろ」

遊輔「陰険小物ババア。さっさと死ね」

なのは「ヒステリッククソババア。光になってとつとと死ね」

蓮華「俗物ババア。討たれて死ね」

零斗「ヒスババア。己の罪を数えて死ね」

統夜「お前の身勝手な行いで地獄に落ち全てを失い狂った者達の怒りと悲しみ・・・じつくり味わって死ぬといい」

統夜達の言葉にセイラの顔の血管が浮き出、口元が激しく歪んだものに変わった。

セイラ『控えろ！！小物風情が！！貴様らのような危険因子が高貴なる私に向かつて・・・貴様らは生かしては帰さん！！』

統夜「本性をついに現したか・・・薄々分かってたけどさ・・・」

セイラ『天川 統夜！！貴様の存在そのものが罪だ！！』

はやて「何が存在そのものが罪や！！アンタの存在が罪やないか！！」

統夜の存在自体が罪と聞いたはやては怒りを露わにしセイラに怒鳴りつけた。

セイラ『黙るがいい！！犯罪者八神 はやて！！天川 統夜に属する者は全て犯罪者だ！！魔法による秩序を乱す悪魔め！！』
なのは「悪魔は貴方です！！魔法だけが全てじゃありません。その考えは古いんです！！」

遊輔「アンタの歪んだ考えで世界は悲しみに満ちる・・・それが分からないのか！！」

零斗「お前のような奴に好き勝手されたら本当に終わってしまう」
セイラ『ふんっ！魔法が全てを制する！！それ以外で制されては私によって作られる秩序が崩壊される！！貴様らはここで朽ち果てるがいい！！』

それだけ言い通信が一方的に切られた。

統夜「さて・・・甲板へ移動しようぜ」
遊輔「ああ」

統夜達一同は甲板へ移動した。

統夜「いよいよ決戦が始まる・・・さっさと行くか？」
一同「おう！（はい！）（うん！）」

統夜の一言でそれぞれ武器とデバイスを起動、変身を始めた。

デバイス組「セットアップ！」

ダイチ「気力転身！オーラチェンジャー！！」

ダイチは右手に付いているオーラギャザーのキーを展開させ、垂直に立てた左手のオーラスプレッダーに差し込んでリユウレンジャーに変身し・・・

たけし「超力変身!!」

たけしは両手に付いているパワーブレスのスイッチを起動させてオーレッドに変身した。

統夜「フォーチュンブラスター・・・ドライバーコネクト」

フォーチュンブラスター（ドライバーコネクト・・・イグニッション）

フォーチュンエンターナルを纏った状態でフォーチュンブラスターとドライバーコネクトした。

尚ブラスターウイングはフォーチュンウイングの外側にコネクトされ、それ以外のパーツは追加装甲として纏われた。

統夜「華琳!」

華琳「分かっているわ」

華琳が統夜の身体の中に入りユニゾンした。

統夜「行くぜ!」

統夜達はセントクルセイダースの本拠地へ向かおうとした瞬間一隻の戦艦が大きな爆発音と共に轟沈した。

遊輔「何だ?!」

統夜「さあな・・・それと・・・なのはとフェイト、シグナム、ヴィータ、咲夜さん。これを・・・」

ECSを用いてカートリッジを補給したのはとフェイト、シグナム、ヴィータ、咲夜・・・カートリッジシステムのデバイスを使う人にカートリッジを渡した。

シグナム「すまないな・・・」

ヴィータ「相手の数が多いからな・・・助かるぜ」

なのは「ありがとう」

フェイト「これぐらいあれば大丈夫・・・ありがとう」

咲夜「助かるわ」

統夜「必要だと思つてな・・・あれは・・・」

轟沈した戦艦の一部が落ちた場所から踵まで届くまでの紅色のロングヘアに赤い瞳をしアルカナハートに出てくるシャルラッハロートの服を着た女性が歩いてきた。
その後統夜達は甲板から降りた。

「セントクルセイダーズの戦艦って頑丈かと思いきや・・・普通ね」

統夜「あ、あの・・・どちら様でしょうか？」

「まず人に聞くときは自分からつて親から言われなかったかしら？」

統夜「生憎・・・親の顔を知らずに育つたもんだから・・・言い訳しても駄目だ・・・俺は天川 統夜。蒼穹の騎士団のメンバーだ」

シャル「私はシャル・ノイシュバンシュタイン・・・蒼穹の騎士団・・・聞いた事があるわ・・・反管理局組織・・・天川 統夜・・・だっけ？」

統夜「ああ」

シャル「貴方の噂は聞いてるわ・・・蒼穹の死神・・・はっ！」

右腕をを槍状の触手に変化させて統夜に襲い掛かるが

統夜「ふっ！」

神速の動きで五気を纏わせたブラスターソードを振るい防いだ後軌道を逸らした。

シャル「悪くないわね・・・戦闘能力が一番高いのは伊達じゃないわね・・・」

統夜「（危ねえ・・・）試したね？」

シャル「ええ。何故このような事が出来るのかは聞かないのね」

統夜「知りたいのは山々だがな・・・こっちは 세인트クルセイダーズとの最終決戦だからね・・・終わったら聞くよ」

シャル「最終決戦・・・私も参加していいかしら？それと同時に・・・蒼穹の騎士団に入ってもいい？」

シャルの突然の入隊に一同は驚き始めた。

統夜「んっ・・・いいんじゃないね」

遊輔「味方が増えるなら構わないよ」

達哉「俺も賛成だ」

零斗「俺も」

ダイチ「ナイスバディの貴方なら歓迎です」

たけし「構わないぜ」

明久「大丈夫だよ」

雪蓮「面白そうだからいいんじゃない？」

華琳『そうね・・・』

はやて「ええんやないか？」

大半のメンバーが賛成をしていた。

シャル「嬉しいわね。あいつらを倒せばいいの？」

遊輔「ああ。統夜と達哉、明久の道を作る為に雑魚を片付けるのを手伝ってほしい」

シャル「分かったわ」

魔力を放出し呪文を唱え始めた。

零斗「そんじゃ・・・俺も・・・マイティ真拳奥義・・・」

両手を高く掲げ膨大なエネルギーを放出し圧縮を始めた。

シャル「七つの星に裁かれよ・・・グラン・シャリオ七星剣！！」

上から七つの巨大な光の玉が降り注がせ強化魔導師やコピールシフアーを蹴散らした。

零斗「銀河爆砕・・・ギャラクシアンエクスプロージョン！！」

両腕を打ち合わせ膨大なエネルギーを爆発させ銀河の星々を破壊する程の威力のある光で大量の強化魔導師やコピールシフアー、戦艦を飲み込ませた。

シャル「行きなさい！」

零斗「派手な道を作ったぜ！」

道が切り開かれた事によって統夜と達哉、明久の三人は本拠地へ突入した。

強化魔導師「行かせない・・・」

強化魔導師の一人が追いかけてようとすると炸裂鉄鋼弾と桜色のスフ

イア、ビットの攻撃に直撃し倒れた。

遊輔「そう・・・」

なのは「簡単に・・・」

蓮華「通すと思うか？」

ゾロゾロと敵兵がやって来た。

雪蓮「わお・・・息がピッタシじゃない？冥琳くそっちはどう？」

強化魔導師やコピールシファーをシュベスターバスターで斬り倒しながら冥琳に通信を入れた。

冥琳「ああ。順調だ。弾幕を張っている」

雪蓮「でき～・・・スペースバンガードに主砲ってある？」

冥琳「あるには・・・あるが・・・」

雪蓮「私達のお礼として一発ぶつ放して」

冥琳「それも悪くないな・・・少し時間が掛る・・・」

雪蓮「早めにね」

そう言っつて通信を切った。

スペースバンガードのブリッジ・・・

冥琳「ナビィ・・・使える武装はどんなのがあるんだ？」

ナビィ「バンガードフリートとバンガードラム、グラビティプラストです」

冥琳「ふむ・・・ナビィ・・・グラビティプラストのチャージを始めておけ」

ナビィ『了解』

冥琳「次は・・・テストロツサ、シグナム、ヴィータ・・・お前達三人は多くの敵を引きつけてくれ」

ナビィにグラビティブラストのチャージを指示した後、フェイトとシグナム、ヴィータの三人に通信を入れ戦艦を含む空を飛べる敵兵を多く引きつけるよう指示した。

ヴィータ『ぶっ潰したら駄目なのか？』

冥琳「余計な体力を使うかもしれないからだ」

シグナム『そう言うな・・・奴らは多い・・・』

フェイト『分かりました。やってみます』

冥琳「頼んだぞ」

そう言つて通信を切った。

桂花「本当に凄いわね」

カタカタとキーボードを打ち込みながらリアルタイムで戦っている遊輔達の様子が映されていた。

冥琳「ああ・・・後は彼女達に期待するのみだ」

本拠地前の外

フェイト「数が多い・・・」

プラズマランサーを大量のコピールシファーや強化魔導師に向けて飛ばして引きつけていた。

ヴィータ「だな・・・体力が持たねえ可能性があるって理解出来たぜ・・・」
シグナム「そうだな」

グラーフアイゼンやレヴァンティンを振るいながらコピールシファ―達を引きつけていた。

フェイト「これぐらいでいいかな？」

シグナム「我らは退避だ」

ヴィータ「傾合いだしな」

スペースバンガードの射程内であり真正面まで引きよせ退避を始めた。

スペースバンガードのブリッジ

冥琳「傾合いだな・・・グラビティブラスト・・・発射!！」

ナビィ「発射」

スペースバンガードの正面艦首から超重力波を発射しコピールシファ―と強化魔導師、戦艦を一掃し大爆発を起こした。

桂花「えげつないわね・・・悲しいけど・・・これ戦争なのよね・・・」

冥琳「ガンダムネタを言ってる暇は無いだろう？」

桂花「何となく言ってみただけよ。大分数が減ったわね」

モニターに映っている敵の数が徐々に減っていた。

シャル「やるわね……」

両腕を刃物などに変化させて軽々と倒していた。

シャル「螺旋の如く駆け抜ける……」

右腕を巨大ドリルに変形させ魔力を収束しパワーのフラグメントを入れ始めた。

シャル「スパイラルタイフーンクラッシュャー!!!」

巨大ドリルを超高速回転させコピールシファーや強化魔導師を貫通しながら戦艦を撃沈させた。

シャル「向こうも……決着着くといいわね」

腕を元の形にした後統夜達が向った本拠地を眺めていたシャルだった。

本拠地の中では……

統夜「邪魔だ!ゴラァ!!!」

右手にソードモードのプラスターソード、左手にフォーチュンザンバーの二刀流で配備していた強化魔導師やコピールシファーを切り刻み蹴散らしていた。

達哉「はあ！！」

ブレイブカリバーを用いた居合斬りでコピールシファーを倒していた。

明久「喰らえ！！」

アストラルカリバーを手にし風の刃で強化魔導師を斬り捨てていた。

統夜「行こうぜ」

統夜の言葉と共にセイラのいる部屋へ向いドアを蹴破って入った。

セイラ「貴様ら・・・天川統夜・・・朝霧達哉・・・吉井明久・・・

」

蹴破って入って来た統夜と達哉、明久の三人を睨み始めた。

統夜「来てやったぜ・・・クソババア・・・そして・・・」

一息入れ・・・

統夜、達哉、明久「俺（僕）達が天に代わってお前に天誅を下す！

！」

セイラの手によって運命を狂わされた者達の戦いが始まるうとしていた。

第四十九話『ツケを返す時』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

明久「やっとクソババアと決着がつけれるよ」

明久「やっと始まった僕達とセイラの戦い……だけど……」

明久「セイラが使うドライバーデバイス……レムレースの力によつて苦戦してしまう……」

明久「次回は『因縁の決着』テイクオフ」

第五十話『因縁の決着』（前書き）

やっと始まった因縁の対決・・・

セイラはドライバーデバイスであるレムレースを見せる・・・

全ての世界を支配しようとするセイラを止める事は出来るのか？

シャル「HERO・S EPISODE 第五十話始まるわ」

第五十話『因縁の決着』

第五十話『因縁の決着』

統夜達がセイラの部屋に突入した頃・・・

遊輔「大分数が減ったな・・・」

右手にペンドラゴブレイドを手にし右肩に担いでいた。

零斗「そんじゃ・・・終わったら援護に行こうか」

遊輔「構わないぜ。集団リンチにはなるが・・・」

零斗に話しかけられた後ペンドラゴブレイドを構え炎を収束し始めた。

遊輔「我が紅蓮の炎の牙を受けよ！！サーベイジファング！！！」

ペンドラゴブレイドを地面に刺し広域に炎の牙を発生させてコピールシファー達を燃やし尽くし黒焦げにした。

零斗「マイティ真拳奥義！！プロトンキャノン！！！」

巨大なキャノン砲を担ぎ大量の強化魔導師達を一掃した。

フェイト「はやて！」

バルディツシュザンバーでコピールシファーの大軍を前方へ吹き飛ばした。

はやて「分つとる！！スピンドライブ・・・スマツシャー！！」

反対側から両脚に魔力で強化しドリルのように回転させ滑り込むような蹴りを放った後脚を宙に蹴り上げて飛び上げた。

なのは「これがラスト・・・」

エクセリオンモードのレイジングハートをはやての攻撃で上がったコピールシファアの腹部に当て・・・

なのは「衝撃の絶槍・・・ディバイン・・・インパルス！！」

零距离の魔力衝撃波で吹き飛ばした。

なのは「んっ・・・上出来かな」

フェイト「これで魔砲だけじゃないって言い張れるね」

はやて「それは私もやな。蹴り技に興味を持ち始めたからな・・・」

片付け終えた三人はハイタッチしていた。

ダイチ「決めるぜ・・・」

五星刀を構え一気に駆け抜け抜け強化魔導師の腹部に一閃した後、別方向からも超高速で移動し先程腹部に再び同じ場所へ一閃しそれらを連続で繰り返した。

ダイチ「天火星秘技・流星乱舞！！」

同じ箇所にも何度も斬撃を喰らわせ倒した。

ダイチ「（天火星秘技・流星閃光をアレンジしてみたが・・・少しキレが無いな・・・）」

はじめてやる新たな必殺技を決めたダイチだったが少しキレが無い事を感じた。

たけし「おりゃあああ！！！」

スターライザーでコピールシファーを斬り伏せていた。

たけし「これでえ！！！」

スターライザーの刀身を超力を込め始め・・・

たけし「秘剣超力ライザー！！！」

強化魔導師を強力な一閃で斬り倒した。

たけしが斬り伏せた瞬間セントクルセイダーズの兵隊全てが全滅した。

本拠地

セイラ「天誅を下すだと？誰に向かって口を利いている！！私は全次元世界の統治者になるものぞ！！！」

統夜達の言葉に憤慨して怒鳴る。

統夜「お前のような人の命を何とも思わず・・・」

達哉「綺麗事で世界を歪ませ・・・」

明久「私利私欲で全てを不幸にする・・・セイラ〓シュトラウト！
！貴様にだ！！」

三人の言葉にセイラは・・・

セイラ「黙れ！！この私に対し無礼な！！」

統夜「これは聖女じゃなく魔女だな」

達哉「綺麗事を唱えるだけで・・・どう工夫し・・・どう行動するかをやらないエゴイストに統治者という大役は任せられない」

セイラ「黙れ！！死に損ないのソルジャーが！！私はセイラ〓シュトラウト！！法と秩序、魔法で世界を統治及び管理するものだ！！」

セイラの言葉に統夜はため息をついた後・・・

統夜「俺達の人生を狂わせたっていうのが・・・こんな支配欲とエゴの塊とは・・・もうたくさんだ！！セイラ〓シュトラウト！！今

までお前が騙し滅ぼした人達の怒りを受ける！！」
セイラ「ええい！！黙れえ！！」

紫色の魔力砲を統夜達に向け発射し扉を破壊した。

これを見た三人は驚きを隠せずにいた。

これでも魔導師としての腕は超一流であるのだから・・・

統夜「でりゃあ！！」

達哉「はあ！！」

明久「はっ！！」

統夜と達哉、明久の三人はブラスターソード、ブレイブカリバー、アストラルカリバーで斬り掛るが・・・

セイラ「甘いわ!!」

右手だけでミッドチルダ式の魔法陣の形をした鉄壁のような防御壁を展開し統夜のブラスタースードと達哉のブレイブカリバーを受け止めながら明久のアストラルカリバーの斬撃を左手でミッドチルダ式の魔法陣の形をした鉄壁のような防御壁を展開し防いだ。

セイラ「バーストフォース!!」

両手に展開した防御壁から衝撃波を出し三人を吹き飛ばし壁に激突させた。

統夜「伊達じゃないってか・・・」

達哉「全くだ・・・」

明久「倒せば・・・全てが終わる・・・」

統夜達三人は立ち上がった。

セイラ「ふん・・・まだ立っていたか!貴様らに見せてやろう・・・」

レムレースの力を・・・」

漆黒の宝珠を取り出した。

セイラ「真なる統治者の力を見よ!!レムレース・・・セツトアツプ!!」

レムレースを起動させ漆黒の宝珠から漆黒の山羊とライオンの双首で胴体が山羊に尻尾の部分が蛇の合成獣に変化した。

統夜「ドライバーか・・・」

セイラ「ドライバーコネクト!!」

レムレース（ドライバーコネクト・・・イグニッション・・・）

胸部は山羊の頭、腹部は蛇の頭、腰部はライオンの頭がコネクトされ残りのパーツは全身にコネクトされる形で纏われた。

統夜「行け!!ネオドラグーン!!」

明久「アストラルドラグーン!!」

二人はそれぞれ強化型フライヤーを射出しオールレンジ攻撃をセイラ仕掛けたが両腕に装備された大型ドリルを模した籠手のディメンシヨンドリルから小型ドリルミサイルを発射され全て落とされた。

達哉「氷連槍ひれんそう!!」

瞬速で近づき上に斬り上げると共にセイラを氷結させ、追加攻撃として居合いで払い飛ばしセイラを凍らせた氷塊をスライドダウンさせ部屋の壁を破壊し外へ出した。

統夜「さて・・・外へ行くか」

統夜達三人は外へ出た。

セイラ「おのれえ・・・舐めた真似を・・・」

自力で氷塊を碎き脱出した。

統夜「身体能力と気力も使い道ってね・・・」

統夜達三人がセイラに向って攻撃しようとした瞬間・・・

セイラ「そうはさせるかあああ！！！！デイメンションフォール！！！」

セイラを中心にエネルギーを放射し統夜達を吹き飛ばした。

デイメンションフォールを受けた統夜達に異変が起きた。

統夜「何だ・・・これは・・・力が・・・半減してやがる・・・」

達哉「デバイスの出力も半減している」

明久「性能や僕達の身体能力も・・・」

何とか立てたが力が半分しか出せない状況になっていた。

先程セイラの攻撃であるデイメンションフォールを受けた事により三人の力がダウンしたのだ。

セイラ「レムレースに搭載された相手の能力や魔力、デバイス性能等を半分以下に強制的に封じ込める力があるハーフシールシステムには敵うまい」

統夜「ずるいな・・・」

セイラ「ふん！三人がかりで掛って来た貴様ら愚民共にそんな事を言う資格は無い！！！」

統夜「そうかい！！！」

統夜は駆け抜け抜けフォーチュンザンバーの刀身に五気を収束し斬撃を放とうとしたが・・・

セイラ「今の貴様など・・・直ぐに終わるわ！！！」

ソニックムーブを利用しデイメンションドリルを用いたラッシュで技を放とうとしたフォーチュンウイングとブラスターウイングの右

翼を破壊し装甲にダメージを与え右腕のデイモンシヨンドリルから魔力砲を放ち吹き飛ばした。

統夜「ぐわああああ!!!!」

華琳「きゃあああ!!!!」

普段ならこうはならないのだがレムレースのハーフシールシステムによって全ての力が半分以下になっている為軽々とダメージを受けてしまった。

セイラ「今の貴様ら等!!敵では無いわ!!」

達哉「何が・・・」

明久「敵では無いわ!!だ!!」

達哉と明久は今の状態でおける力を出しセイラの懐へ移動しブレイブカリバーとアストラルカリバーを振りかざしたが全て回避され・

セイラ「消え失せる!!死に損ないの異物共!!」

両腕のデイモンシヨンドリルで二人を殴り飛ばした後、先端部から収束魔法を放った。

セイラ「私の存在こそ絶対的なる真実だ!!そう・・・私が定めたものが真実なのだから!!」

高らかに宣言した時

「お前を倒せばその真実はどうなるんだ？」

セイラ「私を倒す?面白い事を言う奴がいるな!!」

セイラがそう返し振り向いた瞬間二人の拳が顔面に直撃し、誰かの蹴りが顎にクリーンヒットし吹き飛んだ。

セイラ「グウオツハ!!」

遊輔「どうだ？痛みは？」

零斗「テメエだけはどうかあつても許せねえ……人を騙し歪んだエゴで悲しませるテメエを……」
はやて「アンタだけは絶対に許さへんで……」

セイラの顔面に拳を見舞ったのは遊輔と零斗の二人で蹴りを顎にクリーンヒットさせたのははやてだった。

ダイチ「速いぜ……零斗」

たけし「遊輔さんもだけど……」

なのは「にはは……」

フェイト「これで決着がつくんだ……管理局の歪みが破壊される……」

遊輔達に遅れてダイチ達がやって来た。

セイラ「次々と蛆虫共がゾロゾロと!!」

奇襲によって受けたが立ちあがっていた。

遊輔「あれ……統夜は？」

零斗「達哉と明久もいないぞ」

二人はキョロキョロと見回すと離れた場所で三人が倒れていた。

零斗「あの統夜まで倒されるとは・・・」
遊輔「どんな方法でやったのかは知らんが・・・」
ダイチ「やるしかないよな」
たけし「こいつを倒せば終わるんだ!!!」
はやて「せや・・・ここで終わらせるんや!!!」
なのは「永遠に頭を冷やさせてやる!!!」
フェイト「覚悟しろ!!!」

それぞれ武器を構えセイラに向って行った。

一方スペースバンガード周辺では・・・

シャル「本当に戦艦って疑いたくもなるわね。貴方達はいいの？主だけ行かせて・・・」

シグナム達ヴォルケンリッターに質問をしていた。

シグナム「統夜がいるから大丈夫だ。あの男には主が必要だからな・・・」

ヴィータ「それもそうだ」

シヤマル「私達ははやてちゃんと統夜君を信じていますから」

ザフィーラ「主に危害を加える輩は死神の鎌が待っている・・・」

統夜とはやてを信頼しているかのようにしっかりと答えた。

本拠地の外では・・・

零斗「流石は大将ってか・・・」

七人はセイラと戦い始めていた。

セイラ「北郷零斗にリュウウダイチ、竜崎たけし！！貴様らの存在が最大の罪だ！！死を以って償え！！」

零斗「魔法無しでここまでやられて怒り出したか・・・だがな・・・」

ダイチ「それは俺達も・・・」

たけし「同じく怒ってるんだあああ！！！！！！」

セイラ「小癩な！！」

拳と五星刀、スターライザーの猛攻にセイラは押され始めた。

遊輔「フレイムファンゲ！！」

なのは「アクセルシューター！！」

10基の爪を模した小型飛行ビーム砲と桜色の光のスフィアのコーポでオールレンジ攻撃を仕掛けた。

フェイト「雷空牙^{らいくづが}！！」

雷で出来た三日月状の斬撃を飛ばし

はやて「フリーズ・・・ベルグ！！」

白銀の砲撃をセイラに向けて発射した。

セイラ「チィ！！」

衝撃のある防壁を展開して間合いを取った後ディメンションドリル

から小型ドリルミサイルを発射しフレイムファンクとアクセルシューターを撃ち落とした。

咄嗟に雷空牙とフレズベルグを避けた後七人の中心部へ移動し魔力を収束し……

セイラ「羽虫が……これを喰らい苦しむがいい!! デイメンションフォール!!」

自分を中心にエネルギーを放射し遊輔達七人を巻き込ませて攻撃した。

遊輔「ぐわあああ!!!!」

零斗「こいつは……不味いな……」

ダイチ「ちきしょう……」

たけし「これは……」

なのは「きゃあああ!!!!」

フェイト「何て力だ……」

はやて「きゃあああ!!!!」

諸にデイメンションフォールを受けダメージを負った後統夜達三人と同じく全ての力が半分以下になった。

だが遊輔達七人は敵兵と戦い体力を消耗している為厳しい……

セイラ「余計な力を使わせてくれたな……貴様らもここでお終いだ……」

統夜「誰……が……お終いだ?」

所々血を流していた統夜が立ち上がりセイラの所へ来た。

セイラ「馬鹿な……貴様らにまだそんな力が……だが私に勝て

る要素は無い!!」

統夜「それはどうかな？零斗!!俺達を元の状態に戻す奥義はあるか？」

辛うじて立ち上がった零斗に問い掛けた。

零斗「ああ・・・あるにはあるが・・・こっちは体力少ないが・・・
一人が限界だ・・・行くぜ・・・マイティ真拳奥義!!エスナ!!」

統夜を包み込むように全ての力を半減するステータス異常を掻き消した。

統夜「行くぜ・・・フォーチュンオーシャンシステム起動・・・星
鳳剣・・・召喚!!」

アーマーの色を変化させ刀身と柄が蒼く輝く星のような七つの宝玉
が埋め込まれた美しい長剣を具現させ右手に持ち構えた。

その後髪の色が銀髪に変化し瞳の瞳孔が縦になり瞳の色が真紅に
変化した姿である吸血鬼化に変化した。

統夜「ようやくテメエを完全に叩きのめす事が出来るぜ・・・」

星鳳剣の刀身に燃え盛る紅蓮の炎を集中させた後マシンセルによつ
て修復したフォーチュンウイングの魔力スラスターを噴き出すと同
時に刃の背面からも吹き出し駆け抜けた。

セイラ「おのれえ!!調子に乗るなあああ!!!!」

両腕のデイモンシヨンドリルから小型ドリルミサイルを統夜に向け
て大量に発射し直撃させ煙が出て来て状況が分からなくなった。

煙の中から多少ボロボロになっているが止まる勢いは無かった。

統夜「大紅蓮斬^{だいくれんざん}!!!」

セイラに突進しレムレースの装甲を破壊し灼熱の炎で燃やし尽くし本拠地へ吹き飛ばした。

セイラ「ぎゃあああああ!!!」

統夜「これが・・・華琳の・・・力だ・・・」

星凰剣を消し吸血鬼化を解除し座り込んだ。

零斗の力でセイラから受けた異常は消されてもダメージは回復しておらず体力を消耗していた。

達哉「やった・・・」

明久「これで・・・終わった・・・」

遊輔「あれが・・・霸王の魂の力・・・」

零斗「けどよ・・・これで終わりだ・・・」

ダイチ「ああ・・・」

たけし「長かった・・・」

なのは「これで変わる・・・」

フェイト「悲しみがこれ以上増えない世界へ・・・」

はやて「また・・・統夜に助けられたな・・・」

達哉達は辛うじて立ち上がり座っている統夜の元へ駆けつけ喜びあった。

だが・・・

セイラ「おのれえ・・・愚民風情が・・・この全次元世界を支配するこの私を倒したつもりか？」

全身に大火傷を負い所々から血が出ているセイラがやって来た。
一同は驚きを隠せずにいた。統夜の一撃と紅蓮の炎で大火傷したのだから……

統夜「執念だけは褒めてやるぜ……だけど……その状態でどう倒す？」

セイラ「貴様らを倒す手段はこれだ……使いたくは無かったが……
・相手が貴様らなら話は別だ……」

懐からソフトボール状の形をした紫色の球と小さいひし形の蒼い宝石9個を取り出した。

統夜「そのひし形の蒼い宝石は……まさか!!!？」

なのは「ジュエルシード!？」

フェイト「何でセイラが!!!？」

ジュエルシードを見て驚く統夜となのは、フェイトの三人。

ジュエルシード事件を知っているはやてや遊輔達も驚きを隠せなかった。

セイラ「そして絶望し……滅びるがいい!!」

紫色の球が紫色の光が照らされセイラの中へ取り込まれ消え9個のジュエルシードはセイラの体内の中に入り変化が起き始め地震が起き始めた。

セイラの頭から悪魔状の角が生え全身に禍々しい刻印が浮き出て背中に巨大な一對二翼の漆黒の翼が生え皮膚の色が紫色に変化した。
変化し終え回復し再生された。

セイラ「フハハハハハ！これが・・・ロストロギア『ダークエビル』の力だ！！」

ロストロギア『ダークエビル』の力でパワーアップし異形に変化したセイラに一同は驚くしかなかった。

真正正銘の悪魔になったセイラに打つ手はあるのか？それは誰も分からない・・・

第五十話『因縁の決着』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

シャル「結局自分の力じゃなくデバイスやロストロギア頼り・・・
そうしないと勝てないのかしら？」

シャル「悪魔になったセイラに状況が不利に陥った統夜達・・・目
には目を・・・闇には光・・・統夜と遊輔、はやての三人は不利な
状況で新たな力が覚醒され偽りの秩序を掲げる悪魔を討ち滅ぼす」

シャル「次回は『Break the Chain』テイクオフ」

第五十一話 『Break the Chain』 (前書き)

統夜と遊輔、はやての三人が新たな力を覚醒しセイラとの決着が着く。

はやて「HERO'S EPISODE 第五十一話始まるで」

第五十一話 『Break the Chain』

第五十一話 『Break the Chain』

ロストロギア『ダークエビル』と9個の『ジュエルシード』を取り込み異形に変化したセイラを見た統夜は・・・

統夜「完全に『人』を捨てたな」

セイラ「フハハハハ！何とでも言え！！」

統夜「何故お前が・・・ジュエルシードを持っている？」

9個のジュエルシードについて聞いてみた。

セイラ「冥土の土産に教えてやろう・・・この9個のジュエルシードは失われし都・・・アルハザードで発見されたものを剣咲剣という男からダークエビルと共に貰い受けたものだ！！」

零斗「これは・・・あの漆黒野郎が関わっていたのか！！」

謎の男である剣咲剣が関わっている事に統夜とダイチ以外のメンバーは驚きを隠せずにいた

セイラは突然フェイトの方へ顔を向けた。

フェイト「な、何？」

セイラ「フェイト！！T！！ハラウン・・・お前の母親であるプレシア！！テストロツサには感謝しないとイケない・・・」

フェイト「？何故・・・母さんの名を・・・感謝とは・・・どういう意味？」

セイラの訳の分からない言葉に理解が出来なかった。

何故母親であるプレシアに感謝するのかを・・・

セイラ「死んだ娘・・・アリシア」テストロツサを生き返らせる為にジュエルシードを偽者であるフェイト」テストロツサに集めさせる・・・だが・・・天川統夜と高町なのはの二人の介入によって混乱は大きくなった」

はやて「統夜？」

統夜「まあ・・・成り行きでな・・・フェイト側についたのだよ・・・」

セイラ「管理局にいた頃の私にとっては・・・最高の気分だった・・・ジュエルシードを全て我が物にしようと・・・」

セイラの言葉に統夜となのは、フェイト・・・ジュエルシード事件の関係者達は怒りを込めセイラを睨んでいた。

事件解決よりジュエルシードを我が物にしようとする欲望に優先しているからだ。

統夜「そこから完全に間違ってるじゃねーか・・・何処かで行方不明になっているプレシアやアリシアが哀れになってくるぜ・・・」

セイラ「私の言葉や行動・・・全てが真実だ！！常に！！」

統夜「そんなアンタの考え・・・リンディさんとクロノには筒抜けだったと思うぜ・・・アンタらとは違う場所へ保管していたから・・・」

なのは「あゝ・・・分かる気がする」

統夜の言葉になのはは納得していた。

セイラのやり方に反対しているリンディならセイラ達にジュエルシードのようなロストロギアを渡す筈が無かったからだ。

三提督の命令でもあった為迂闊に手が出せないのである。

セイラ「己えええええ！！リンディ！！ハラオウンめ！！この私による法と秩序が支配する世界が気に喰わないか！！」

フェイト「そんな自分勝手な法と秩序を母さんは危険視したんだよ！！」

セイラ「黙るがいい！！犯罪者でありアリシア！！テスタロツサの人形風情めが！！この私に意見するとは・・・身の程を知れ！！」

セイラがフェイトを人形風情という言葉に統夜は怒りを露にした。

統夜「黙ってる・・・一生懸命生きているフェイトを人形呼ばわりするんじゃないか！！犯罪者はテメエの方だ！！全ての人を不幸にし騙し・・・命を道具として見てるお前が！！死んだ浩次や千秋の為に・・・俺は・・・俺達が倒す！！行くぜ！！皆！！辛いかもしれないが・・・頑張ってくれ」

フェイト「統夜・・・」

統夜の号令と共に一同は攻撃態勢に入った。

統夜と遊輔、ダイチ、たけしの四人はフォーチュンザンバーとサーディオンの二刀流、ペンドラゴブレイド、五星刀、スターライザーをそれぞれ手にしてセイラに向かって駆け抜けた。

セイラ「小賢しい！！」

ドス黒い小型ドリルミサイルを大量に発射した。

遊輔「焰刀修羅破！！」

ダイチ「邪魔だ！！」

遊輔とダイチは焰の斬撃を飛ばしドリルミサイルを相殺しようとしたが力が半減されている為二人掛りで何とか相殺出来る事に成功し

た。

統夜「覇牙……」

たけし「超力……」

統夜とたけしの二人はセイラの懐へ移動し五気と超力をそれぞれの武器に収束させ……

統夜「連閃!!」

たけし「連斬!!」

セイラに連続斬りを仕掛けたがパワーアップしたセイラに挑んだが統夜のは全て防がれたけしの力が半減しているのかたけしの剣捌きが直ぐに見切られ蹴り飛ばされてしまった。

統夜「たけし!?!」

なのは「統夜君!! 離れて!!」

なのはの声で直ぐ離れた。

なのは「力は半減されたけど……諦めない……絶対に……カ
ートリッジ……フルロード!!」

残りのカートリッジをロードした後マガジンを交換し魔力を収束し始めた。

明久「ジャツジオーシャンシステム起動……」

アーマーの色をオレンジに輝いたオレンジ色に変化させアムフォルタスを両脇で抱え自分が持つ魔力と気力を収束し始めた。

はやて「三人の砲撃なら通常する筈や……」

シュベルトクロイツに魔力を収束していた。

零斗「こつちも無理してやるしかねえか……マイティ真拳奥義……」

セイラ「させると思うか？」

なのは達の砲撃を阻止する為行動に入ろうとした瞬間……

達哉「それはこつちの……」

フェイト「台詞だ!!」

今いける速度で移動しながらなのは達の時間稼ぎを始めた。

ブレイブカリバーに冷気を込めセイラの足元を凍らせ、バルディッシュザンバーで一刀両断しようとしたが半減した力である為拘束と斬撃は失敗した。

達哉「まだまだあ!!」

フェイト「それでも時間を稼ぐ!!」

セイラ「今の貴様らは力が半減された分際で!!」

達哉「それがどうした!!」

フェイト「システムやロストロギアに頼ったお前に言われたらおしまいだ!!それに……私達を……甘く見るな!!」

後ろから統夜と遊輔、ダイチがセイラの背中に一閃を見舞わせた。

セイラ「ぬぐつ!!」(徐々に私のシステムから解除される前に倒す

必要があるな・・・」

統夜「俺達も忘れたら困るぜ」

すると斬られたセイラの背中中の傷が再生された。

統夜「ジュエルシードの影響か!？」

セイラ「その通りだ・・・私は不死身の身体を手に入れた・・・貴様らに勝ち目は無い!!」

統夜「出たよ・・・その台詞・・・っと・・・達哉、フェイト! 離れるぞ」

達哉とフェイトに離れるよう促した後遊輔とダイチの二人と一緒にセイラから離れた。

なのは「スターライト・・・」

明久「シューティングウインド・・・」

はやて「響け・・・終焉の笛・・・ラグナロク!!」

零斗「電撃・・・」

なのはと明久、はやての三人はそれぞれ魔力を収束、零斗は右足を前に出し、腰を低くし、両手首を合わせて電撃を集中させ終え・・・

なのは、明久、はやて「ブレイカー!!!」

零斗「聖自在波!!!」

なのはと明久、はやての三人の収束砲撃、零斗の強力な電撃が一つに収束され極太の砲撃に変化しセイラを飲み込ませた。

統夜「やったか？」

光が収まると黒焦げで大ダメージを受けたが破損したレムレースと一緒に新品のように再生した。

なのは「これでも・・・再生するなんて・・・」

セイラ「フハハハハ！無駄だ！！貴様らの攻撃は通用せんわ！！全次元世界を統べるこの私に！！」

統夜「そんな妄言は聞き飽きた！！」

サーデイオンとフォーチュンザンバーで斬り掛ろうとセイラへ向った瞬間・・・

セイラ「羽虫よ・・・消え失せよ！！」

背中の翼を羽ばたかせデイメンションドリルを展開して闇の力が込められている小型ドリルミサイルを発射し、

統夜「ネオドラグーン！！」

セイラ「無駄だあ！！」

統夜がネオドラグーンを射出しようとしたがセイラが一瞬で懐に潜り込み、ドリルで殴りかかり、止めとしてエネルギーを集中したビームを発射し吹き飛ばした。

統夜「ぐわあああ！！！！」

今の攻撃を受けサーデイオン以外の武装は使用不可になり所々から血が出て倒れてしまった。

統夜「奴にどう勝てば・・・」

その直後華琳と強制的に分離されてしまい気を失ってしまった。

セイラ「フハハハ！！今度は貴様らだ！！ディメンションメールシユトローム！！」

セイラを中心に時空の渦を発生させて遊輔達を巻き込ませる形で攻撃し時空の渦が収まると統夜以外のメンバーはダメージを受け気を失ってしまった。

その後統夜の方へ移動し完全なる止めを右腕のディメンションドリルで串刺しにしようと振るった。

キーンという音が聞こえ統夜への串刺しは防がれた。

セイラ「誰だ？」

シャル「蒼穹の騎士団の新人よ」

シャルが右腕を剣に変えて防いでいたのだ。

セイラ「面白い能力だな・・・その力を私の為に使え！」

シャル「それは・・・お断りよ！！」

刃物に変化した右脚で蹴りを入れて両腕ごとドリルを切断し使えなくした。

セイラ「無駄だ！！」

切断された両腕が引っ付き再生した。

シャル「戦い甲斐があるけど・・・デバイスのシステムやロストロギアに頼りっぱなしの卑怯者は好きにはなれないわ」

セイラ「何事も結果がすべてだ！！そして・・・私の行動は真実に

繋がる！！」

シャル「はぁ・・・本当に哀れね・・・自分の殻に閉じこもって・・・
こういう事知ってるかしら？」

セイラ「何だ？」

シャル「心は最初から卵・・・やがて雛から成鳥へ変わる・・・貴方はまだ卵のまま・・・」

セイラ「それがどうしたと言っただけ！！」

シャル「古いものに囚われ・・・自分が常に正しいという考えを持つてる貴方は閉じこもって考えを改めようとしないう・・・変わろうとしない時点で負けが確定する・・・」

セイラ「この私に敗北は無い！！奴等を見る！！」

腕を広げながら倒れている統夜達を見渡して言った。

それを見たシャルは呆れていた。

シャル「世界は自分中心に回らない・・・可能性を信じない者は痛い目に遭う・・・」

両腕の手甲から三本の虎の牙を具現化させて構えた。

セイラ「何をほざくかぁぁぁ！！！！」

シャル「はぁ！！」

セイラの攻撃を軽々と避け右腕をアッパーの要領で振り上げ首筋を切り裂いた。

だが傷は直ぐに塞がった。

シャル「（天川統夜・・・貴方はここで終わる人なの？真の力を出せずに・・・）ジュエルシールドを全部取り出すしか無いわね」

気を失っている統夜をチラッと見た後駆け抜けた。

セイラ「させると思っか？」

目からビームを発射しシャルの腹部を貫いた。

シャル「残念だけど・・・それでは死ねないわ。トランス・・・ドリルアーム」

右腕をドリルに変化させてセイラの腹部を貫き始めた。

セイラ「ぐわあああ!!!!小癩なあああ!!!!」

シャル「・・・パワーもあるようね・・・」

シャルを蹴ってバックステップで下がり貫かれるのを防いだセイラ。

シャル「どうするかな・・・」

統夜の精神世界の中・・・

空は一つも雲が無く青空で下は草原が広がっていた。

統夜「（俺は・・・あのババアのイカサマで・・・）」

セイラの卑怯な手段とデビル化の力によって敗北してしまい拳を握りしめていた。

統夜「（これでは・・・誰も守れず・・・真実を知らずに終わるか・・・）」

そう考えていると・・・

「よおく・・・よおく来たなア・・・」

統夜「っ!？」

突然発せられた声が聞こえ後ろを振り返ると背中から漆黒の5対10翼の翼が生え、髪の色と瞳の色が白く輝く銀髪に翡翠色の瞳をした統夜がいた。

統夜「お前は・・・」

ルシファー「ああ・・・俺ア・・・ルシファーだ・・・イグニスコーピーで生まれたもう一つの人格だ」

統夜「お前が・・・」

浩次や千秋、シユウのような人を残虐に殺害した人格を睨んだ。
この人格のせいで蒼いイレギュラー事件が生まれたのだから・・・

ルシファー「ああ・・・けどなあ・・・後悔は無いぜえ・・・これは戦いで敵を倒しているにしか過ぎねえからよオ・・・」

統夜「・・・」

ルシファー「・・・俺の行動理念を教えてやる・・・」

統夜「どんなものだ？」

ルシファー「狂った世界を破壊する事だ・・・無論世界を狂わす連中もなア!!身分や秩序という下らねえもんで縛りつけるもの等も破壊する・・・それが俺だア・・・」

統夜「・・・」

ルシファー「だがなア・・・後悔してねエゼ・・・」

統夜「そうか・・・これからは俺が引き継いでやる!！」

咄嗟の不意打ちでルシファーの腹部を貫き蒼炎で燃やし尽くし始め

た。

ルシファー「テメエ・・・何しやがる!？」

統夜「何・・・お前も狂わせているからだ・・・絶望し・・・取り込まれる!！」

ルシファー「・・・テメエ・・・なら・・・真ルシファーを扱えるだろうなア・・・」

統夜「真ルシファー?」

ルシファー「ああ・・・素質のある奴ならなれるもんだア・・・お前だけのルシファーもなア・・・お前の言う通り・・・狂わせている一人かもな・・・」

統夜「お前・・・わざと・・・」

ルシファー「俺は近い内自然に消えちまう可能性があったからな・・・あの二人の攻撃シュウとタイチによつて・・・」

ルシファーなら統夜の攻撃を避ける事が出来たのだが最初から取り込まれる事を選んだのだ。

それだけを言い残しルシファーは燃やされ粒子に変化して統夜の中へ取り込まれた。

遊輔の深層世界・・・

紅蓮の炎に包まれた夕焼けの丘で倒れていた。

遊輔「俺は・・・そうか・・・あいつに・・・」

燃え盛る丘から立ち上がると歩き始めた。

遊輔「(蓮華・・・俺の力を知っているみたいだな・・・)」

三姉妹との戦いの時に聞いた蓮華の言葉を思い出していた。

遊輔「（いかんいかん・・・俺はまだ『死神』の力を恐れているのか・・・）」

自分の力である死神に対して恐れていた。

生まれた時から自分がどのような種族かを知っていたが自分を好きになったのはや蓮華には話していなかった。

遊輔「（今のままでは・・・力を出さずに終わってしまう・・・）」

すると・・・

「お前はそのまま終わるのか？」

背中から四対八翼の真紅の翼が生え髪の色が真紅、瞳の色が金色で
紅いライダーズジャケットを羽織った青年がいた。

遊輔「貴方は・・・」

死神「俺は死神・・・貴様の中に眠っている存在よ・・・」

遊輔「俺の中に・・・」

死神「時に・・・お前は何を悩んでいる？」

死神が遊輔に質問をした。

遊輔「俺は・・・死神の力を完全に制御できるのか分からなくて・・・

・
死神「馬鹿者おおお!!!」

弱気な発言が気に喰わなかったのか遊輔を上空へ殴り飛ばした。

死神「馬鹿者があー！！そんな弱気でどうする？どんなものも熱血でやり通す・・・それが桜木遊輔だろう？死神だろうと・・・熱血と気合で制御しろおー！！」

その後遊輔に説教をし始めた。

遊輔「死神・・・」

死神「貴様がそんなんでは女子二人を守れぬ！！それでいいのか？今こそ！侵略すること火の如く！！」

遊輔「よくない！！死神いい！！！！」

死神「遊輔えええ！！」

遊輔「しいにがぁみいい！！！！」

死神「遊輔えええええ！！！！」

遊輔と死神は殴り合いを始めた。

最初は殴り合いから始まったもの・・・遊輔が死神にドロップキックをしたり、死神が遊輔の両脚を掴んでジャイアントスイングをしていたが拳での殴り合いが主となっていた。
しばらくして・・・

遊輔「はあ・・・はあ・・・」

死神「いい拳だ・・・」

丘の上で二人して大の字で横になっていた。

死神「今の貴様なら使えるだろう・・・お前に・・・好敵手がいる筈だ・・・」

死神の言葉に遊輔は笑みを浮かべた。

好敵手である蒼き死神・・・統夜を・・・

遊輔「ああ。ありがとうお館様」

死神「お館様？」

遊輔「ああ。そっちの方がいいと思ってさ・・・」

死神「面白い奴だ・・・頑張って来い！！」

死神が遊輔に重なり光に包まれた。

はやての深層世界

銀色の光で輝いている雲や空に浮かんでいる島に囲まれた・・・正に天国のような世界だった。

雲の上で倒れていたはやては起き始めた。

はやて「ここは・・・天国・・・？」

身体を起こし周りを見回して驚いていた。

自分が戦っていた場所とは遥かに違うからだ。

はやて「綺麗やなあ・・・」

空島を眺めて感動を覚えた。

すると真逆の方角からパアアという音と共に白く輝いている銀色の光を感じると背中から5対10翼の純白の翼が生え長さが膝裏まである白く輝いている銀髪に銀色の瞳をし白いワンピースを着た女性立っていた。

はやて「あの貴方は・・・？」

エンジェル「私は・・・エンジェルと申します・・・貴方の眠って

いる力・・・天使の血を引く子孫・・・」
はやて「は？私に・・・天使の力が・・・」
エンジェル「はい・・・貴方はご存知ありませんが・・・眠っているのです・・・堕天使に匹敵する力が・・・聖なる力を持つ種族の力を・・・」

エンジェルの説明ではやては天使の力にチンプンカンプンになった。だが真剣に聞いていた。

はやて「堕天使・・・イグニスや統夜の持つ力に対する力・・・それが天使・・・」

エンジェル「その通りです・・・貴方はこの力で何を望みますか？」

エンジェルの問いにはやては・・・

はやて「私の愛する人や仲間を守りたい・・・どんな苦難が来ても・・・守り切る・・・誰一人失いたくない！！！」

エンジェル「その心と想いは本物ですね・・・夜天の書の主に選ばれ・・・守護騎士に愛され・・・現実を受け入れている・・・最後までやり通す事を信じています」

エンジェルは笑みを浮かべはやての中へ入り光に包まれた。

現実世界にて・・・

シャル「（覚醒したようね・・・）」
セイラ「っ！？何だ？」

突如ゴゴゴゴと大気が揺れるのを感じたシャルとセイラの二人はあ

る方角を見始めた。

そこは統夜と遊輔、はやてが倒れた地点であり、統夜がいる地点から蒼、遊輔がいる地点から紅蓮色、はやてがいる地点から白銀の光が空に向って柱となって伸びている。

セイラ「何だとお!!そんな馬鹿な!!」

シャル「言ったでしょ?甘く見たら負けると・・・」

シャルは笑いながら三人を見てから離れた。

蒼と紅蓮、白銀の光の柱はガラスの破片のように統夜、遊輔、はやての周囲に落ち、粒子状になって砕け散っていった。

統夜「・・・・・・・・」

統夜の姿が背中から漆黒の5対10翼の翼が生え、髪の色と瞳の色が白く輝く銀髪に翡翠色の瞳に変化していた。

遊輔「・・・・・・・・」

遊輔の姿が背中から四対八翼の真紅の翼が生え髪の色が真紅、瞳の色が金色に変化していた。

はやて「・・・・・・・・」

はやての姿が背中から5対10翼の純白の翼が生え髪の色が膝裏まで伸び、白く輝いている銀髪に銀色の瞳に変化していた。

セイラ「そんな・・・こけ齧しが通用するかああああ!!」

遊輔「それはどうかな・・・」

ペンドラゴブレイド（ハーフシールシステムが解除されました）

ペンドラゴブレイドを手にし刀身に紅蓮の炎を灯し・・・

遊輔「紅蓮天衝斬！！」

瞬速で移動し桁違いの威力のある斬撃をセイラに浴びせ燃やした。

統夜「今度は・・・」

はやて「私達や！！」

統夜がサークルの中に蝙蝠が描かれているヴァンパイア式の魔法陣を展開しセイラを拘束した。

セイラ「己え！！離せえ！！」

統夜「その拘束は妖力でしか破壊出来ない！！ウエイクアップ・・・

」

はやて「フィーバー！！」

統夜とはやての二人はそれぞれの翼を羽ばたかせ上空へ移動した。

セイラ「ぐぬぬぬ・・・」

魔力を通しても破壊出来なかった。

統夜「ルシファードークムーン・・・」

はやて「エンジェリックサン・・・」

統夜、はやて「ブレイク！！」

統夜は両脚に黒い天使の翼状のエネルギー、はやては両脚に純白の

天使の翼状のエネルギーを纏い飛び蹴りを一斉に放った。

統夜「うおおお!!!!」

はやて「はああああ!!!!」

二人が纏った翼状のエネルギーがセイラに連撃を浴びせ吹き飛ばした。

セイラ「フハハハハ!!!無駄だ!!!」

セイラの身体が三人から受けた傷が全て防がれた。

統夜「なら・・・取り出すか・・・」

サーディオンを構えた瞬間脈を打ち始め光り出した。

統夜「これは・・・」

サーディオン（我がマスターよ・・・進化しようとしています・・・
真のサーディオンへ・・・）

統夜「真のサーディオンだと？」

サーディオン（お呼びください・・・セイヴァー・ロード・サーディオンと・・・）

統夜「ああ・・・集いし星の輝きが、新たな進化の扉を開く。光さす道となれ!!生来せよ!!セイヴァー・ロード・サーディオン!!」

大剣から刀身が蒼く輝いた蒼で鍔の部分に宝珠を入れられる穴の開いた柄が銀色の長剣と九つの宝珠が嵌められている蒼い腕輪へ進化した。

セイラ「何だ！？それは！！」

統夜「お前を倒す剣でありガーディアンに進化形態・・・ロードガーディアンデバイスだ！！」

セイラ「ロードガーディアン・・・だと！！私は認めん！！そのよ
うなものは！！」

統夜達の覚醒で零斗達は目を覚まし三人の姿に驚愕していた。

零斗「目覚めたか・・・統夜・・・」

達哉「ロードガーディアンデバイス・・・セイヴァー・ロード・サ
ーディオン・・・」

ダイチ「あの三人・・・変わり過ぎだろ・・・」

たけし「あのババアを圧倒してるぜ」

明久「頑張れ！！」

なのは「遊輔君・・・あの形態は・・・」

フェイト「はやても変わっている・・・」

華琳「あれが統夜のか・・・」

セイラ「これでも喰らえ！！」

セイラが収束魔法を三人に向けて発射したが統夜は落ち着いた様子
で腕輪にある9つのうち銀色の宝珠を取り出し刀身が蒼く輝いた蒼
で柄が銀色の長剣の鍔の部分にある穴の部分に銀色の宝珠を嵌めこ
み・・・

統夜「ロード防御！！」

長剣から巨大鉄扇に変化し砲撃を防ぎ、その後仰ぎ跳ね返し直撃さ

せ・・・

銀色の宝珠を取り出すと長剣に戻り、腕輪に戻すと漆黒の宝珠を鐔の穴の中に嵌め込んだ。

統夜「ロード爆砕！」

統夜の右手に巨大な籠手が装着された。

統夜「遊輔・・・ドでかい一撃出来るか？」

遊輔「無論・・・」

統夜「はやて！弾幕よろしく！！！」

統夜と遊輔が突撃を仕掛けた後、はやては白銀の弾幕魔法を放った。

セイラ「チィ！！イレギュラー風情がああ！！！」

はやての弾幕に負けダメージを負い始めたが直ぐに再生された。

懐に統夜と遊輔が接近し・・・

統夜「獄絶・・・」

遊輔「咲焰・・・」

統夜は右手に五気を収束させ蒼炎の温度を4000度まで高め、遊

輔は刀身に灼熱の焰を収束し・・・

統夜「炎掌拳！！」

遊輔「牙衝突！！」

統夜は4000度ある蒼炎の掌底をセイラに直接叩き込む攻撃、遊輔は灼熱の焰と衝撃のある突きを二人同時に放ち直撃させレムレー

スを完全破壊し吹き飛ばした。
その後腹部からジュエルシールド9個が出て来た。

セイラ「ぐぐぐ．．．おのれ．．．おのれえええ！！！！このよう
な愚民共に負ける事はありません！！！」

魔力と気力を高め自力で再生した。

ジュエルシールドの力に頼っていたのか再生速度は遅い。

統夜「絶望し受け入れる．．．ロード極限！！！」

巨大な籠手から長剣に戻し金色の宝珠を鏢の穴に嵌め込み金色の光
を纏った長剣に変化した。

統夜「遊輔．．．はやて．．．ここからは俺に任せてくれ．．．」

遊輔「構わないぜ」

はやて「構わへんよ」

統夜「よし．．．見せてやるぜ．．．セイラ！！常に進化し続ける
俺達の力を！！ヴァンパイアルシファー．．．解放！！！」

背中から漆黒の5対10翼の翼が生え、髪の色と瞳の色が白く輝く
銀髪に翡翠色の瞳になった姿から背中から5対10翼の漆黒の翼が
生え髪の色が蒼が掛った金髪、瞳の瞳孔が縦になり真紅に変化した
ものに変化した。

真ルシファーと吸血鬼の二つ同時解放形態であるヴァンパイアルシ
ファーへ変化した。

セイラ「貴様さえ．．．貴様さえいなければ！！！！！」

セイラの目からビームが発射されたがロード極限の一閃により掻き

消された。

統夜「終わりにしてやるぜ・・・アンタの絶望を・・・俺に見せる！！」

セイラ「ほざけええええ！！！！」

セイラの魔力が籠った拳の連続突きを軽々と避け・・・

統夜「極閃斬」

瞬速より速い連続斬りで両腕を切り刻み・・・

統夜「覇幻零！！」

五気のある超巨大な衝撃波を2段重ねで放ちセイラに直撃させ前へ吹き飛ばした後瞬速の歩法である刹那で移動し・・・

統夜「紫電龍閃！！」

シグナムの紫電一閃をアレンジし蒼炎を纏ったサーディオンで上へ振り上げ一閃し上空へ打ち上げた後上へ飛翔し蒼炎を収束し始めた。収束させながら遊輔と達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久、なのは、フェイト、ヴォルケンリッター、康太、冥琳、アリス、稟、雄二、翔子、ミルキイホームズ、雪蓮達三姉妹、たけしラバーズ、稟ラバーズ、明久ラバーズ、朝霧ラバーズ、はやてを除く統夜ラバーズ、浩次、千秋、はやての順に顔を思い浮かべていた。

統夜「下らぬ幻想を抱いて・・・」

収束が完了し・・・

統夜「滅せよ!!!!!!」

セイラ「ガハッ!!!」

セイラの側頭部を蒼炎が籠った拳で穿ちつつ地に叩き付けた。

今の攻撃でダークエビルがセイラの身体から飛び出し砕け散った。

セイラ「何だ・・・この炎は消えんぞ!!!」

蒼炎がセイラの全身を燃やし始めた。

統夜「その炎は消えん・・・貴様の精神を・・・俺の蒼炎が絶望へと誘う・・・」

セイラ「ギャアアアアア!!!止めるおおお!!!」

悲鳴とは比べ物にならないくらい叫び出し苦しみ出した。

しばらくして蒼炎で燃えているセイラからスフィアらしきものが現れ・・・

統夜「崩壊したか・・・」

絶望に染まりきり精神が崩壊され廃人になったセイラを見ながらスフィアを取り込ませヴァンパイアルシファーを解除した。

尚蒼炎は精神が崩壊しきつた瞬間自然に消えた。

遊輔「やったな」

はやて「凄かったな」

死神化と天使化を解除した遊輔とはやての二人がやって来た。

遊輔「セイラは・・・死んだのか？」

統夜「まさか・・・廃人だ・・・」

はやて「廃人つて・・・まあ・・・ええけどな」

統夜「今まで人を騙し汚い事をやって来た罪だ・・・死より悲惨な形で破滅させた方がいいだろう」

統夜達三人は零斗達を担いでスペースバンガードへ乗り込んだ。

はやての容姿にヴォルケンリッターは驚いたそうなの・・・

統夜「終わったな・・・」

はやて「うん」

統夜「サーディオオンとセイクリッドファンク以外のデバイスをメンテさせるか・・・」

スペースバンガードのブリッジでコンソールを叩きながら発進準備をしていた。

その後発進し時空転移しこの場を後にした。

本拠地から少し離れた場所・・・

カシム「ご苦労様・・・セイラ」シュトラウト・・・君の役割もね・・・そして・・・」

一緒に来ていた竹原の顔を見て・・・

カシム「君も役目御苦労・・・」

竹原「それは・・・どういう・・・『パン！』・・・」

後ろから心臓の部分を撃たれ即死した。

カシム「あつけない最期だね・・・ご苦労様・・・『桜木響輔』」

桜木響輔と呼んだ瞬間背中まであるボサボサした黒い髪に紅い瞳をし整った顔立ちだが髭を伸ばしている男が現れた。

響輔「まあな・・・それより大将・・・あの女も消すか？」

カシム「その必要は無いよ。彼女は廃人だ・・・残りの余生を送らせるのも悪くは無い」

響輔「違えねえや・・・」

カシム「君の弟が覚醒したみたいだね・・・」

響輔「ほう・・・やっとか・・・これからの戦争が楽しみだぜ・・・」

響輔は竹原の遺体を焔で炭にしカシムと共に消えた。

スペースバングードのブリーフィングルーム

零斗「お前は真ルシファーとヴァンパイアルシファー、遊輔が死神化、はやてが天使化・・・凄いな・・・」

統夜達の力について話し合っていた。

遊輔「済まなかった・・・黙ってて・・・」

なのは「ううん・・・遊輔君だって言いたくない事だってある筈だよ」

蓮華「死神とはな・・・私は驚かん・・・」

遊輔「ありがとう・・・」

遊輔ラバーズの皆さんから見れば問題は無かったようだ。

シグナム「主が天使の力を・・・」

ヴィータ「遠くから見ただけど綺麗だったぜ」

シャマル「リンちゃんとユニゾンしたらより凄くなるわね」

はやて「あはは・・・でも過信したらあかん・・・シグナム・・・

ヴィータ・・・シャマル・・・ザフィーラ・・・リン・・・一緒に強くなっていくこうな」

ヴォルケンリッターは笑みを浮かべ・・・

シグナム「はい」

ヴィータ「おう」

シャマル「ええ」

ザフィーラ「御意」

リン「はいです」

そう答えた。

シャル「吸血鬼と真ルシファアの二つの同時解放って・・・興味あるわね」

統夜「まあな・・・転生者である貴方も凄いいけど・・・」

スペースバンガードでシャルが転生者という事を教えて貰っていた。改造生命体である事も知っているがシリアスな雰囲気になったのは言うまでも無かった。

シャル「まあね・・・蒼炎で絶望へ誘う貴方も凄いわ」

華琳「貴方のセイヴァー・ロード・サーディオンもね」

咲夜「本当に進化させちゃうなんてね・・・」

カナ「これからどうなるんだろう？」

統夜「セントクルセイダースに関わった連中は逮捕されるだろう」
セイラを倒した翌日から本局はリンディヤクロノを始めとする管理局員が調査を始めセントクルセイダースに関わった幹部達やそれらに付き添っていた局員ら全員逮捕された。

リンディヤクロノ達以外にもミッド行政府、並びに各世界の調査者達が本局内部を調査した所、セントクルセイダースの息が掛っている連中が使途不明金や横領などが本局内部で多発していた事や様々な事件の偽情報を流していた事等も判明し全ての者達を捕まえた所逮捕された人数は合計で千人以上になった。

これらの事が起き調査に当たっていた者達や各管理世界の代表達も全員が顔を青褪めさせたのは当然の結果である。管理局の名を騙り名を汚したセントクルセイダースは最低最悪の組織として語り継がれるだろう。

これを機にセントクルセイダースは完全に崩壊し管理局は伝説の三提督を中心に次元犯罪者の逮捕と裁判を主にした組織へと再編を始めた。二度と過ちを犯さないように・・・

セントクルセイダースを倒した蒼穹の騎士団は世界の英雄とミッドチルダを始め各次元世界から称えられた。

尚セントクルセイダースの本拠地の側で倒れていた大将であるセイラは一生精神病院に収監されるという形で破滅した。

一週間後・・・

統夜「よっし・・・んな感じでいつかな」

真つ昏間の英都港にある建物で何らかの作業をしていた。

統夜「後はスペースバンガードを入れるだけと・・・」

そう・・・スペースバンガードを入れる海沿いに倉庫を建てていたのだ。

神王と魔王がセントクルセイダース崩壊記念として港に倉庫を作ってくれたのだ。

統夜「親馬鹿には感謝ってね・・・しばらくはサーディオンとセイクリッドファンクだけ・・・」

スペースバンガードに乗り発進させ倉庫の中へ入れた。
スペースバンガードから降り倉庫から出るとはやてが待っていた。

統夜「やっと終わった・・・」
はやて「ご苦労様」

統夜「これから始まるな・・・管理局の再編が・・・」
はやて「クロノ君からの情報やと・・・しばらくは動けん・・・
蒼穹の騎士団頼みになるって言ってたで」

統夜「上等だ・・・これから・・・自分探しすっかな。どんな事があっても・・・前に進もう・・・」
はやて「うん。一緒に進もう・・・」

統夜とはやての二人は走り出した。どんなことがあっても前に進むという気持ちを忘れずに・・・
セントクルセイダースとの戦いは終わった・・・だが・・・デューク率いる修羅とマガキ率いる混沌、カシム、響輔、イグニスという敵が残っている。

彼ら・・・蒼穹の騎士団の戦いはまだ終わっていない・・・

『打倒セイントクルセイダース篇・完!』

第五十一話『Break the Chain』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

零斗「遂に終わった・・・セントクルセイダースとの戦い・・・良かったぜ・・・」

零斗「久し振りの学園生活でハジケまくっている統夜に我慢の限界を突破した優子は遂にキレた。ハジケっておかしいか？」

零斗「策としては俺やダイチのようなハジケ連中から遠ざける事から恐ろしい教育が始まった」

零斗「次回は『優子の統夜改造計画』テイクオフ」

デバイス設定7 (前書き)

レムレースとセイクリッドファンク、セイヴァー・ロード・サーデ
イオンの設定です。

デバイス設定7

デバイス：レムレース（ドライバーデバイス）

形状：漆黒の山羊とライオンの双首で胴体が山羊に尻尾の部分が蛇の合成獣

待機状態：漆黒の宝珠

搭載システム：DCS、ハーフシールシステム、ストライクブレイクシステム搭載

備考：セイラが管理局のデバイスデータを基に開発させたドライバーデバイス。

性能は高性能で装甲はナノマシンによる自己修復機能を持つ。

ドライバーコネクト時は胸部は山羊の頭、腹部は蛇の頭、腰部はライオンの頭がコネクトされ残りのパーツは全身にコネクトされる。

コネクト時の武装は自分を中心にエネルギーを放射し能力半減の効果を持つ「デイメンションフォール」

自分を中心に時空の渦を発生させて敵を巻き込む「デイメンションメールシュトローム」

両腕に小型ドリルミサイルの発射機構を持った大型ドリルを模した籠手である「デイメンションドリル」

「ハーフシールシステム」とは武装である「デイメンションフォール」専用のシステムで一定時間相手の能力や魔力、デバイス性能等を半分以下に強制的に封じ込めるシステム。

管制人格は男性でセイラに忠実な性格。

デバイス：セイクリッドファンング（アーマードデバイスウエポンドライバータイプ）

形状：蒼いアーマー

待機状態：蒼い十字架が描かれた腕輪

搭載システム：MIES、アーマーリンクシステム、オートムーブ

システム、ウエポンドライバーシステム、マックスドライブシステム搭載

詳細：ユルゲンが使用したターンギャザーが統夜専用に進化したアーマードデバイスウエポンドライバータイプ
アーマードデバイスウエポンドライバータイプとはアーマーから何らかの武器に変形するものである。

装甲はナノマシンとのよく馴染んでおり自己修復機能が進化し四力耐コーティング機能が備えられており頑丈になっている。

武装は両手の籠手のシャイニングフィンガーの攻撃力を強化された「シャイニングブレイカー」掌からビーム砲やビームソード、ビームファンクになる事も可能。

両肩に装備されている高出力と低出力の切り替えができ拡散攻撃も可能な砲身「セイクリッドランチャー」

両肩端に一本ずつ収納されてあるロッドを直列合体させ刀身が銀色の大鎌になる「セイクリッドサイト」

シャイニングブレイカーに雷エネルギーを集中させ放射する広範囲攻撃型とエネルギーを凝縮した一点集中攻撃型が出来る「シャイニングサンダー」

胸部から灼熱の炎を放つ「セイクリッドブラスター」セイクリッドブラスターの中心部分から出現する刀身が銀色の柄が漆黒の両刃の長剣「ファンクブレード」

背部に巨大な一対二翼の真紅の翼があり機動力上昇と相手を切断する事が出来る「バトルスクランダー」

^{バイザー}頭部、両腕、両肩、胸部、背部、腰部、両足の9パーツが分離してオールレンジ攻撃をする「ブラディ・シージ」

アーマーの周りに強力な電磁界を形成し強化推進剤を発火させ出力を上昇させ突撃する「セイクリッドマックス」

「アーマーリンクシステム」は「ブラディ・シージ」専用のシステムでアーマーから9パーツに分離したものを自由自在に操りアーマーを再装着が出来るシステム。

「オートムーブシステム」とはアーマードなどを自律行動させるシステム。使用者から分離しても性能が下がらないようになっていいる。「ウエポンドライバーシステム」を搭載しておりセイクリッドファングの場合はアーマーから巨大なバスターキャノン砲になる「セイクリッドジェノサイダー」

「マックスドライブシステム」とはセイクリッドマックス専用のシステムでアーマーの出力を上昇させ限界突破した機動力を得るシステムだが制限時間があり一定時間出力が下がる。

管制人格は存在しないが学習機能があるAIが搭載されている。

デバイス：セイヴァー・ロード・サーディオオン（ロードガーディアンデバイス）

形状：刀身が蒼く輝いた蒼で鍔の部分に宝珠を入れられる穴の開いた柄が銀色の長剣と九つの宝珠が嵌められている蒼い腕輪

待機状態：蒼い剣十字架のネックレス

搭載システム：MIES、サンクチュアリシステム、レイヴスキルシステム搭載。フォーム変化無し

備考：セイラ戦で覚醒した統夜専用として変化したロードガーディアンデバイス。

ロードガーディアンデバイスとは唯一無二のガーディアンデバイスで性能はガーディアンデバイスを凌駕する。

フレームの強度と出力は変わっていない。

八属性元素の力を持つ虹色の宝珠「エレメント」高速移動を駆使する空色の宝珠「ライダー」様々な銃器や射撃戦を得意とする水色の宝珠「ガンナー」

様々な剣術を得意とする桜色の宝珠「ソードマスター」衝撃をコントロールする白色の宝珠「インパクト」様々な格闘術を駆使する真紅の宝珠「グラップラー」

魔力や気力等を通して爆破させる漆黒の宝珠「エクスプロージョン」様々な防御術を駆使する銀色の宝珠「ガードナー」己の力を極限ま

で高める金色の宝珠「エクストリーム」

「レイヴスキルシステム」とはフォーム変化に代わるもので九種類の宝珠「スキルマテリア」を嵌める事でそれに合った形状に変化して、それぞれの力を宿すシステムである。

管制人格は以前と同じ。

デバイス：ロード八種

形状：背中に装着される六つの腕の先端は左右対称に銃、爪、刀の形を模しているバックパック

詳細：サーディオンにエレメントを嵌める事により変化したデバイス。

焰や雷、水、氷、風、光、闇、土の八つの属性の力を発する事が可能。

デバイス：ロード機動

形状：刀身が銀色の大鎌

詳細：サーディオンにライダーを嵌める事により変化したデバイス。攻撃速度を上げ魔法などを素早い動きで行う事が可能になった。

デバイス：ロード射撃

形状：銀色の二丁の大型拳銃

詳細：サーディオンにガンナーを嵌める事により変化したデバイス。銃撃戦が得意になり五気を弾丸に込め撃つ事や収束砲撃能力強化が可能。

デバイス：ロード剣聖

形状：刀身が銀色の鞘付の日本刀

詳細：サーディオンにソードマスターを嵌める事により変化したデバイス。

剣術に適しており斬撃能力が上がる。

デバイス：ロード衝撃

形状：巨大なパイルバンカー

詳細：サーディオンにインパルスを嵌める事により変化したデバイス。
遠くから杭を発射し衝撃波を発生させる事が可能になっている。

デバイス：ロード格闘

形状：ブースター付の足甲

詳細：サーディオンにグラップラーを嵌める事により変化したデバイス。
大気を吸収し、それを踝の辺りから繰り出してあらゆるものを切り

裂き吹き飛ばす。ホバリングで飛行したり、空中で加速することも可能。

デバイス：ロード爆砕

形状：右手に装着される巨大な籠手

詳細：サーディオンにエクスプロージョンを嵌める事により変化したデバイス。
籠手から放たれる灼熱の火炎であらゆるものを溶解・焼滅させる力

を持つ。力をためて掌抵を繰り出すことで、大爆発を引き起こすことも可能。

デバイス：ロード防御

形状：銀色の巨大鉄扇

詳細：サーディオンにガードナーを嵌める事により変化したデバイス。
ありとあらゆる攻撃を防ぎ鉄扇で仰ぐ事で相手の砲撃などを跳ね返す事が可能。

す事が可能。

デバイス：ロード極限

形状：金色の光を纏った長剣

詳細：サーディオンにエクストリームを嵌める事により変化したデバイス。

己の力とデバイス性能が大幅に上がりどのデバイスのフルドライブ形態を凌駕する程の力を秘めている。

デバイス設定7（後書き）

やり過ぎた感があるかもしれませんが後悔はしてません。

番外編『空飛ぶ戦隊ものってカッコイイよな』（前書き）

これは本編とは違うトーク溢れるギャグとネタバレが含まれています。
そしてゲストが出ます。

ハヤト「HERO'S EPISODEの番外編始まるよ」

番外編 『空飛ぶ戦隊ものってカツコイイよな』

番外編 『空飛ぶ戦隊ものってカツコイイよな』

統夜「え〜・・・やっとセイラのクソババアを倒した記念と五十話突破記念トークです」

はやて「いや〜・・・終わったな〜」

統夜「だな。ゲストを早速呼ぼう。鳥人少年 ハヤトの主人公にして・・・レッドホークに変身して戦う・・・大鷹ハヤト君！」

上空に飛んでいるジェットホークと呼ばれる飛行機から黒髪の爽やかショートの少年の大鷹ハヤトが二人の前に降りて来た。

ハヤト「よろしくお願いします」

統夜「いや〜・・・バードニングウェーブを求めてレッドホークに変身とは・・・中々素晴らしいじゃないか」

はやて「うんうん。技術も高い事はいい事や」

ハヤトは二人に褒められ照れていた。

ハヤト「統夜さん達も凄いいじゃないか。統夜さんは真ルシファーと吸血鬼化、ヴァンパイアルシファー、遊輔さんは死神化、はやてさんは天使化という力に覚醒して・・・」

統夜「まあ・・・はやてのは先祖返りらしいが・・・」

はやて「そのお陰で身体能力も上がったし・・・」

ハヤトに称賛され統夜とはやての二人は笑みを浮かべ頬を指で擦りながら照れていた。

統夜「鳥人少年　ハヤトの元の作品であるトレンディが溢れている
ジェットマンについて語り合おうか」

ハヤト「はい！と言いたいけど・・・はやてさんの格好は何ですか
！！！！」

いい返事の後に顔を赤くしはやての格好にツッコミを入れた。

はやて「何かおかしい所でも？」

ハヤト「あるよ！！」

今のはやての格好は狸の耳としっぽの付いた、布地の少なめな、いやらしい衣装になっている。

生のお腹を腹包みと見立て、しっぽで生お尻を隠すところは可愛らしいのがいい。

ハヤト「しかも・・・烈火竜さんのネタじゃないですか！！」

統夜「安心しろ・・・作者は許可を取ってある。おっぱい怪盗はや
ポンは可愛いだろう？」

ハヤト「それはそうだけど・・・！！」

烈火竜さん。ありがとうございます。

はやて「ジロジロ見んといて・・・！！」

ハヤト「す、すみません・・・」

統夜「すまんすまん・・・可愛くてな・・・ジェットマンの話だよ
な？」

はやてをジロジロ見つめた後冷静になって統夜は話を戻した。

ハヤト「はい」

統夜「最初から五人じゃ無いんだよな……」

ジェットマンの設定資料を見ていた。

ハヤト「僕とソラの二人だけだったし……」

統夜「天堂竜と大空雷太だけって感じだな……ポジションとしては」

ハヤト「そうだね」

統夜「鹿鳴館香と早坂アコのポジションは遙と葵、結城凱のポジションは黒羽ハヤブサだな。俺から見れば……だが……しかし意外だった……」

ハヤト「何が？」

はやて「天堂竜さんが聖チエリーヌ学園の先生になってた事に……元スカイフォース隊員から先生に転職は驚いたで」

統夜とはやての二人はレッドホークだった竜が先生になっていた事に対して驚きを隠せずにいた。

ハヤト「僕も驚いたけどね」

統夜「さて……ジェットマンの武器に移ろうか」

統夜とはやて、ハヤトの三人は違う場所へ移動した。

目的地へ着くと秀吉が待っていた。

ハヤト「ちょっと待てー！ーっ！ー！ー！」

統夜「何だ？」

ハヤト「秀吉さんの格好おかしくない!？」

秀吉の格好にツツコミを入れた。

秀吉「失礼な・・・ワシは秀吉じゃないヒデベえじゃ」
ハヤト「なに銀魂の『ヅラじゃない桂だ』みたいな言い方してんの！？」

秀吉の格好はまどマギに出てくるキュウベエの耳を模した帽子を被り白いヌーブラビキニと白いビキニパンツの組み合わせの衣装にキュウベエの尻尾でお尻を隠している。

秀吉「細かいのお・・・それはさておき・・・ジェットマンの標準装備の紹介じゃ」

はやて「最初はクロスチェンジャーやな。ジェットマンに必須なアイテム・・・右腕用のエンブレムフォーメーションと左腕用のコレスポンダーから成り立ってるもんな」

統夜「コレスポンダーはジェットマシンを合体させる為に必要なマシコントロールキー・バードロックを搭載されてる」

ハヤト「僕とソラの二人しか持ってないよ」

統夜「ジェットウイングを省いて・・・次はバードブラスターだ。

秀吉！」

秀吉「了解じゃ！」

ハヤト「これは基本装備のレーザー銃だね。バードブラスターにブリンガーソードを合体させた強力なレーザー銃・・・ジェットハンドカノンになるし・・・って何をしようとしているの？！」

秀吉が指でパチンと鳴らすと十字架に常夏コンビと根本、樹、美春の五人が磔されていた。

磔された五人を見てハヤトはツツコミしながら絶叫した。

統夜とはやて、秀吉の三人が白いレーザー銃で一斉に五人に向けて放った。

常村「ぎゃああああ！！！！」

夏川「やり過ぎだろおおお!!!」

根本「貴様らああ!!!」

樹「俺様ってこんな役ばっかりいいいい!!!」

美春「痛いです!!!この豚や・・・ぎゃああああ!!!」

五人が無抵抗に撃たれた。その内の一人である美春が統夜に向つて豚野郎と口にしよとした瞬間はやてと秀吉の二人のバードブラスタアのレーザーが直撃し黒焦げにした。

はやて「黙つとき・・・」

秀吉「黙つておるのじゃ」

ハヤト「貴方のラバース・・・怖いね・・・てか酷いよね!？」

統夜「あ、あはは・・・次は・・・プリンガーソードだ」

ハヤト「変身しなくても使えるのがポイントだね」

刀身が銀色の剣を手にし根本を斬り始めた。

根本「ぎゃああああ!!!」

統夜「このようにバツサリと斬れます」

ハヤト「君は本当に絶望の番人にしか感じない・・・」

はやて「ウイングガントレットだな」

ハヤト「パンチ力を上げる基本装備だね」

はやては右腕に白いナックルパーツを装着し重力制御装置で最大である150Gの衝撃波があるパンチを樹に浴びせた。

樹「本当にこんな役ばっかしいいいいい!!!」

重力の衝撃波を受けた樹は涙を流していた。

もしはやてが天使化しパンチを見舞ったら終わっていたのだから・・・

ハヤト「南無……」

秀吉「次は……ビークスマツシャーじゃな」

紅いレーザー銃を手にした。

ハヤト「粘着ゴキブリが出て来た時に新しく作られた第二の光線銃だね」

統夜「逃走する敵を追尾するモーションチェイサー機能を搭載しているからこそ粘着ゴキブリは負けた……」

はやて「ビークスマツシャーはバードブラスターと合体させたらレーザーライフルのスマツシュボンバーになるしな」

統夜「試しに撃とう」

統夜は楽しそうに五人に向かってビークスマツシャーを撃ち始めた。

常夏コンビ、根本、樹。美春「ぎゃあああああ……!!!!」

ハヤト「何してんの!?!?てか女の子一人いるんだよ?!」

統夜の行動にツツコミを入れた。

統夜「気にするな……俺は気にしない……こいつがいるから明久と島田はデートが出来ないのだよ……」

ハヤト「だからって……そこまでやるう!?!?」

はやて「彼女はギャクキャラだからやりたい放題やし」

秀吉「その通りじゃ」

統夜「ふう……スッキリしたぜ……」

ハヤト「……」

ビークスマツシャーで撃ち終えた後ハヤトは黒いオーラを纏った。
磔にされた五人は何処かへ転送された。

統夜「どうしたんだ？」

はやて「どないしたんや？」

秀吉「どうしたのじゃ？」

黒いオーラを纏い始めたハヤトに恐る恐る声を掛けた。

ハヤト「いい加減にしてえーっ！！」

統夜とはやて、秀吉の三人に怒鳴り始めた。

統夜「は、ハヤト？」

ハヤト「皆・・・正座して・・・」

ハヤトの一言で統夜達三人は素直に正座した。

ハヤト「ジェットマンの基本装備の紹介してるのに！！皆真面目に紹介してよ！！あの五人を的にして撃ったり・・・斬ったりして・・・」

統夜「いや・・・その・・・」

はやて「出来心で・・・」

ハヤト「出来心？」

はやての出来心を聞いたハヤトは黒いオーラを出した。

ハヤト「ジェットマンに変身して僕が直々に武器を使って指導しようかな。出力全開で・・・」

秀吉「それは勘弁してほしいのじゃ・・・」

冷や汗を掻き青褪めながら土下座した秀吉。

統夜「これらの武器って・・・質量兵器だからな・・・ミッドで変身し使ったら御法度だから気を付けるよ」

統夜達三人は正座から立ち上がり始めた。

ハヤト「ミッドチルダには行けないから・・・大丈夫だよ」
はやて「なら安心や」

秀吉「統夜とはやて・・・ワシはここで退場するぞい」

統夜「おう。お疲れ様」
はやて「お疲れ様」

秀吉は歩きだし退場した。

統夜「次はメカニックだな」

赤いバギーの模型に照明ライトが照らされた。

ハヤト「ジェットストライカーだね。竜さんが使ってた・・・時速500キロで水素を燃料としたハイドロプラズマエンジンが搭載され・・・ブースターにより30mのジャンプが可能。武装はロケットランチャーとボデイ先端に2門の機銃は凄いやね」

統夜「でもハヤトが乗るんじゃない？」

ハヤト「そうかもね・・・いつ本編で乗れるか・・・」

統夜「あゝ・・・」

本編の話になって暗くなりかかったが・・・

ハヤト「途中から必殺バズーカ砲になるファイヤーバズーカに変形するんだよね。大気中から吸収したイオンとジェットマン5人のエネルギーを融合してプラズマ化した光弾プラズマブレッドは摂氏150万度の火の鳥となって敵を捕らえ粉碎する」

統夜「五人揃わないと威力が低下するのが弱点なんだよね・・・最終決戦ではオートコントロールでの発射が出来るように改造されたのはいいが・・・ラディゲが破壊しやがった・・・ラディゲ死ね！この最低野郎！！」

はやて「人の邪魔はつかして・・・自分自身を助けた女の人や竜さんの恋人を殺害した事は一番最低だな」

ラディゲに対し毒舌を吐く統夜とはやての二人だった。

ハヤト「そこだけは同意だね・・・けど・・・バイラムの戦士としての誇りはあり仲間意識はあったみたいだよ。てか死んでるから・・・」

統夜「誇りと仲間意識だけは認めるよ。次は・・・ジェットスピーダーだな」

ジェットストライカーへの照明が消え青いバイクと黒いバイクの模様に照明ライトが照らされた。

ハヤト「全然使われてないけどね・・・アコさんはジェットパンサーの荷台に乗って、凱さんは自分のバイクを使用する事が多いし」
統夜「使用頻度が少ないかね・・・武装はミサイルランチャーで時速360キロって・・・俺のバハムートより速い・・・」

自分の愛機であるバハムートがジェットスピーダーより遅い事に小さいショックを受けていた。

はやて「大丈夫や・・・大丈夫」

ハヤト「そ、そうだよ！テクニックで補えばいいんだよ」

統夜「そ、それもそうだな。次はジェットパンサーだな」

元氣を取り戻しジェットスピーダーへの照明が消え黄色いピックアップトラックの模型に照明ライトが照らされた。

統夜「これは雷太さんと香さんが乗るピックアップトラックだな。

ベース車はトヨタ・ハイラックスでライトは赤外線等を発するスキヤナーになっている・・・ハイパーガスタービンエンジン搭載で時速400キロか・・・」

はやて「荷台にプラズマガトリング砲を装備している為アコさんが乗車する事もある。力強さを感じるわ」

ハヤト「これはソラが乗りそうだね」

統夜「イエローオウルだからな・・・次行くか」

三人は別の部屋へ移動した。

部屋に着くとロボットや基地、飛行機の模型が飾られていた。

これらを見たハヤトは分かっていた。

ハヤト「これは・・・」

統夜「おっと・・・慌てるな。ジェットマンの巨大口を説明する人物は呼んである」

右手の指でパチンと鳴らすとISに出てくる篠ノ之 東のコスプレをしたなのはとDOG DAYSに出ているリコッタ・エルマールのコスプレをしたフェイトが現れた。

ハヤト「なのはさぁーん！！フェイトさぁーん！！幾らなんでも駄目だろ！！？同じ声であつても！！」

はやて「気にしたらあかんよ」

はやてははやポンからBLAZBLUEに出てくるレイチエル＝アルカードのコスプレに着替えていた。

ハヤト「貴方もじゃないですか!!」

フェイト「あはは・・・こうしないと出番が無いから・・・説明入るよ。最初は・・・レッドホークが搭乗しているジェットマシン一号機のジェットホークだね」

赤い戦闘機が映し出された。

ハヤト「俺が乗って来たものです。武装は2門のプラズマホークカノンです」

なのは「ジェットイカロスでは頭を含めた上半身、イカロスハーケンでは先頭部になり、ジェットイカロスとイカロスハーケンの両形態は合体時コアパーツとなって他の四機はホークに合体するのが特徴だね」

ハヤト「そうなりますね」

フェイト「ジェットホーク以下5機のジェットマシンが装備しているプラズマホークカノンやその他のビーム系の武器の効果音は東映さんが製作に携わっていた「トランスフォーマーシリーズ」の1作目「戦え!超ロボット生命体 トランスフォーマー」において登場したスタースクリームの武器のナルビームの効果音をはじめ敵勢力のデストロン軍団が使う武器の効果音として随所に使われていたものと同じなんだよ。次はこれだね」

レッドホークから黒い戦闘機が映し出された。

フェイト「ブラックコンドルが搭乗するジェットマシン二号機の子

エツトコンドル。ジェットイカロスの右足、イカロスハーケンでは中心部右側、グレートイカロスでは左腿になる。武装はコンドルバルカンだね。重力波発生装置を機首に内蔵され・・・ジェットホークのプラズマホークカノンと同時に発射するダブルジェットビームという合体技があるの」

なのは「ライバル同士の連携が為せる技だね」
ハヤト「ハヤブサと連携技になる可能性もある・・・か・・・」

コンドルになるかもしれないハヤブサとの連携技を想像していたハヤトだった。

統夜「いつか出来るんじゃないやね？分からんけど」

なのは「はい。次・・・イエローオウルが搭乗するジェットマシン三号機のジェットオウルだね」

ジェットコンドルから黄色いV-TOL戦闘機が映し出された。

フェイト「高出力の機体でジェットイカロスとグレートイカロスの右腕、イカロスハーケンでは右翼部になり・・・100トンの物体を持ち上げるマジックハンドで岩を落とす岩石落しで攻撃するのが主だね」

なのは「イエローオウルにうってつけだよね」

はやて「力強さを感じるしな」

ハヤト「ソラが乗って来たし・・・専用機になるよ」

統夜「頑張ってほしいものだ」

なのは「次行ってみよ」ホワイトスワンの搭乗機であるジェットスワン！！」

ジェットオウルから白い戦闘機が映し出された。

何故かなのはのテンションが上がっていた。

その理由をフェイトは聞いてみた。

フェイト「なのは……何でテンションが上がっているの？」

なのは「そりゃ……私の色が来たからだよ！！白い……白鳥のように綺麗な……」

フェイト「そう……なんだ……（もし黒神さんや真王さん、支配者さん、龍の骨さんが聞いたらどんな反応するかな……）」

なのは「フェイトちゃん？何か失礼な事を言わなかった？」

フェイト「気のせいだよ。ジェットスワンは策敵能力に優れた機体でジェットイカロスの左足、イカロスハーケンでは中心部左側、グレートイカロスでは右腿になり……高性能リーダーとスワニーパルサーを装備しているのが特徴だね」

統夜「ラストだな……ブルースワローが搭乗するジェットスワロー……！！」

ラストとしてジェットスワンから青い戦闘機が映し出された。

なのは「運動性能に優れ……ジェットイカロスとグレートイカロスの左腕、翼が盾のウィングシールドになり……イカロスハーケンでは左翼部になる。武装としては翼を分離して飛ばすウィングカッターだけかな」

フェイト「ジェットイカロスになってラゲムとの戦いで左腕よく切り落とされるよね」

なのは「にやはは……これはお約束だよ」

統夜「皆さんのお待ちかねの合体ロボットが来るぞ……！！」
ハヤト「遂に来た……！！」

なのは「じゃじゃ〜ん！！五つのジェットマシンが合体した巨大ロボのジェットイカロスだよ〜」

人型ロボットと巨大戦闘機の模型に照明ライトを照らした。

統夜達一同はジェットイカロスを見て感動を覚えていた。

なのは「凄いよね〜もしジェットイカロスにレイジングハートがあったらラゲムにスターライトブレイカーをぶっ放したいよね〜」
フェイト「なのはああああ！！！！一体どれだけラディゲ嫌いなもの！？」

なのはの物騒な考えに大汗を流し青褪めながらツツコンだ。

なのは「え〜・・・だつて・・・竜さんの恋人や自分を助けた女性を殺す最低伯爵は大嫌い・・・作者も嫌つてたし」

ハヤト「武器は厚さ5mの鋼鉄板を切り裂く2本の投げ短剣ジェットダガー、薙刀のジェットランサー、ジェットランサーとジェットダガーを合体させたトライランサー、20m四方の鋼鉄の固まりを切断する斧のイカロスアックス、戦車を一撃でたたきつぶすハンマーのイカロスマグナ、電流も流せる巨大分銅のイカロスクラッシュャー、ジェットスワローの主翼が変形した盾のウィングシールド、マッハ2の速度で放つロケットパンチのショットパンチャー、刀身に対消滅プラズマを放出して敵を切り裂く剣のバードニックセイバーだね」

はやて「バードニックセイバーでの必殺技は凄かつたな〜」

統夜「合体！スクラムウイングで合体し・・・合体！ジェットスクラムでは巨大戦闘機のイカロスハーケンに合体する。最初はこの形態に合体していたものだね。因みに必殺技はマッハ15で火の鳥となつて敵に体当たりするジェットフェニックスだ」

はやて「ジェットイカロスから変形も可能で最終決戦で見せてくれたけど・・・ジェットフェニックス弾かれたな・・・」

なのは「バードニックセイバーは・・・五回ぐらい折れたり溶かされたりしてるけどね・・・左腕は五回切り落とされたりしてるし・・・」

ハヤト「バイオ次元獣を単体では倒せなかつたし……」
統夜「次は……ジェットガルーダだな」

ジェットイカロスに照明ライトが照らされたまま頭部が鳥の頭を模した人型ロボットと鳥型巨大戦闘機の模型に照明ライトを照らした。

なのは「鳥型の大型戦闘機のバードガルーダから変形するの。裏次元世界デイメンシアの戦士達が建造したロボットなの」

統夜「バイラムの連中でも操れてしまうもんな。そこが欠点だな」
ハヤト「ミサイル型のガルドバルカン、翼の超振動ブレードで敵を切り裂くウイングスラッシャー、敵を氷付けにするダイヤブリザードなど。ロボット時の武器は胸から放つ熱線ビームのガルーダバースト、稲妻状の破壊光線ガルドビーム、右足で繰り出す飛び蹴りのブーストキッカー。目の部分に透視システムのガルドサーチャーを装備しており……必殺技は両腕のカギ爪にエネルギーを集めて敵を切り裂くガルーダクローは強力だね」
統夜「そうだな。セミマルを倒す為にやって来たが……」
はやて「グレートイカロスが登場する訳やな」

二体を照らした照明ライトは消え、ジェットイカロスとジェットガルーダが合体したロボット「グレートイカロス」の模型に照明ライトが照らされた。

なのは「ジェットイカロスとジェットガルーダが「合体！グレートスクラム」のコールで合体する超巨大ロボ……グレートイカロスだよ」

フェイト「ジェットマンとデイメンシアチームが共同改造を行い合体可能になり……お約束である二号ロボが一号ロボの追加装甲の形式にはならず、ジェットイカロスは一回分離、イカロスの頭部と胴体部（ジェットホーク部分）をガルーダの胴体部で包み、そこにイ

カロスの両手足、ガルダの両手足の順で合体する仕組みになっている。従来のスーパー合体ロボに見られたプロポーシヨンの崩れは大幅に減っているのが見られる……」

ハヤト「早く動かしたいな……」

統夜「五人集めたらな……先の先だろう……武装は頭部からはグレートビーム、胸の円形部からはブレードビームを発射する。胸のエンブレムから発する超高压光線バードメーザーが必殺技だ。小田切長官がジェットガルダに最終決戦で乗り六人が搭乗していた……自らやって来る長官は凄いと感じた……」

ハヤト「そうですね……真っ先にこれが出てきたら直ぐに終わりそうだ……」

フェイト「あはは……次はイカロスハーケンとバードガルダが合体した超巨大戦闘機のハイパーハーケンだね」

苦笑いしながらグレートイカロスの隣にあるイカロスハーケンとバードガルダが合体した超巨大戦闘機「ハイパーハーケン」の模型に照明ライトが照らされた。

統夜「ハイパーハーケンは光速に近い……あの巨体で……憧れるよね」

はやて「イカロスハーケンとバードガルダが『合体！ハーケンスクラム』のコールで合体した超巨大戦闘機やからな」

なのは「武装はポディ下部2門の砲身から強力破壊ビーム・ハイパーバスター。必殺技は亜光速で敵に体当たりするハイパー・G・アタック」

統夜「セイヴアー・スター・ドラゴンのシューティングプラスターソニックと似たようなものだな」

ハヤト「遊戯王ネタは自重……」

フェイト「これは乗ってみたいね。次元を飛び越える能力を持ち光速に近い速さのあるハイパーハーケンに……」

はやて「フェイトちゃんは速さに特化しとるからな」

ハヤト「僕も乗ってみたいですね。いつか・・・」

なのは「ラストのロボットのテトラボーイだよ」

ジェットイカロスとジェットガルダのサポート用に開発された3号ロボであるテトラボーイの模型に照明ライトが照らされた。

ハヤト「ニューロコンピュータ内蔵の自動操縦ロボで、すばやい動きによる攪乱戦法を得意なサポートロボだね」

統夜「「テトラフォーメーション!」、または「変形!テトラバスター」のコールで4連装バズーカ砲のテトラバスターに変形するのに驚いたね」

なのは「ジェットイカロスかジェットガルダが保持した状態で放たれる超強力プラズマタキオンビームは強力だよ」

フェイト「バードメーザーに取り込んで放つ戦法でベロニカを破つたし・・・救われてるよね」

統夜「だな・・・これでメカに関連したものは紹介終えたな・・・」

なのは「私達の出番は終了になるね」

フェイト「中々楽しめたであります」

なのはとフェイトと別れ最初にハヤトが降りて来た場所へ移動した。

はやて「フェイトちゃんもノリ始めたな」

統夜「どうせなら無限フロンティアEXCEEDのネージュの・・・」

「統夜・・・全身の骨を壊されたいか?」いえ・・・何でもありません・・・」

黒いオーラを纏ったはやての睨みに統夜は黙ってしまった。
これらを見たハヤトは震えていたの言うまでも無かった。

ハヤト「（怖いな・・・）」

ハヤトが降りて来た場所へ移動しそこにあつた椅子に座り始めた。

統夜「次は快盗天使ツインエンジェルについてだな」

ハヤト「あれ・・・バイラムは・・・」

統夜「鳥人少年　ハヤトに出てくるのか？壊滅してるのに・・・基地はどうすんだよ・・・バイロック無いんじゃない駄目だ」

ハヤト「壊されたもんね・・・ツインエンジェルに出てくる主なキヤラ紹介・・・お願いします」

気を取り直して紹介に入った。

統夜「最初は水無月　遙・・・レッドエンジェルに変身する少女。

趣味はネコグッズ収集としましまパンツ収集・・・文乃のしましまパンツを取りそうで怖いな・・・レッドエンジェル時の必殺技は高速回転しながらキックするエンジェルトルネード・・・スト？のルーフアウスのトルネードキックを想像してしまっただが・・・いっか・・・」

ハヤト「なのはさんと同じ声だし・・・もし・・・なのはさんがしましまパンツ収集という趣味に入ってしまったら・・・」

統夜「史上初変態なのはが誕生してしまう・・・黒神さんや真王さんのなのはも真っ青になる程の・・・」

はやて「なるわなあ・・・しましまパンツを収集する趣味に入った変態・・・」

ハヤト「なのはさんに殺されますよ？」

統夜「だな・・・作者・・・本当に実行すんなよ？」

合点承知の助・・・

んな事したらなのはファンに喧嘩売ってしまうがな・・・

統夜「なつた理由は……天使の像や天使の涙を秘密結社ブラック
フアンドから取り戻す……か……」

はやて「ブラックフアンドにいるナイン・ヴァイオレットはシャマ
ルの声に似とるよなあ」

統夜「しかも妹役だし……」

ハヤト「次は……神無月 葵さんだね。趣味が秘蔵本の収集と激
辛のカレーライスチャレンジ……夏にやると余計暑くなりそうだ
ね……」

統夜「おつとりとした性格で成績優秀……全国模試トップクラス
の学力を誇るがお嬢様故か……天然ボケな一面もあるか……」
はやて「ブルーエンジェルに変身して遙ちゃんと一緒にツインエン
ジェルとして活躍している……か……必殺技は得意の弓を使っ
たエンジェルアロー……」

統夜「鳥人少年 ハヤトの舞台である聖チエリーヌ学院にハヤトが
転校し……ソラと仲良くなりツインエンジェルと出くわし……
ハヤブサと出会う……頑張れよ」

ハヤト「はい！」

統夜「その意気だ……本編の先に出てくる人物とリュウレンジャ
ー、オーレッドを出すか……」

ハヤト「誰か出るんですか？」

統夜「ああ。入っていいぞ」

統夜の合図で少々火傷と焦げた跡があるダイチ、たけし、赤みがか
った銀色の髪を腰まで伸ばして紫色の瞳をした綺麗な顔立ちを
した少女が入って来た。

ダイチ「お前が大鷹 ハヤトだな。俺はリュウレンジャーに変身す
るリュウ・ダイチ……よろしくな！俺の事はダイチと呼んでもい
いから」

たけし「俺は竜崎たけし。オーレッドに変身するからよろしく。たけしで構わないよ」

メアリ「私は古手川　メアリ。よろしくね」

ハヤト「僕は大鷹　ハヤトと言います・・・よろしくお願いします。ダイチにたけし、メアリ閣下」

閣下という言葉にメアリが反応した。

メアリ「私は閣下じゃないわよ」

ハヤト「す、すみません・・・声が似ていたので・・・」

直ぐに謝った。

統夜はダイチを見た。

統夜「ダイチ・・・お前・・・閣下のお尻や胸を触ったな？」

ダイチ「よ、よく分かったな・・・失敗してこのザマだ・・・」

統夜「炎と雷には気をつけないと・・・死ぬぞ？後・・・エルキユールのヤンデレトリガーに気を付ける」

エリーのヤンデレトリガーを聞いたダイチは青ざめた。恐怖ものなのだから・・・

メアリ「統夜・・・あんた・・・私の事・・・閣下って呼んだでしょ？」

統夜「うん。レオ閣下でしょ？」

メアリ「よし・・・いい度胸ね・・・そこに直りなさい!!」

炎と雷を出して統夜に向けて飛ばした。

咄嗟にレイヴ式の魔法陣を展開して防いだ。

はやて「でもなあ・・・閣下の格好をしてる時点で・・・」

メアリの服装はDOG DAYSのレオン・ミシエリ・ガレット・デ・ロワの服装なのだから・・・

メアリ「何で私は・・・」

はやて「しょうがないて・・・本編でそれ以上弄られるんやから・・・」

統夜「そうだぞ」

メアリ「よく無いわ!!それは何・・・閣下と連呼される訳!?!それで弄られる訳?!」

はやてと統夜に怒鳴ってツツコンだメアリだった。

ハヤト「ジェットマン・・・ダイレンジャー・・・オーレンジャー・・・それぞれの主人公が集結したね」

ダイチ「そうだな」

たけし「奇跡に近いよね」

ハヤトはダイチとたけしの二人と話していた。

ダイチ「気力少年ダイチ!俺と四人の探偵と気力修行!の主人公である俺・・・リュウ・ダイチ・・・」

たけし「たけし伝説!クリスタルと三国志と超力パワー!の主人公である俺・・・竜崎たけし・・・」

ハヤト「鳥人少年　ハヤトの主人公である僕・・・大鷹ハヤトを・・・」

ダイチ、たけし、ハヤト「よろしくお願いします」

龍の骨さんの作品である気力少年ダイチ!俺と四人の探偵と気力修

行！とたけし伝説！クリスタルと三国志と超力パワー！、鳥人少年
ハヤトの宣伝をしていた。
主人公からの宣伝は大きいからね・・・

メアリ「その内ダイチとたけしを参加させてるのね」

統夜「そうだ」

はやて「こつちも頑張らんと・・・」

メアリ「このDVDを持って来たけど・・・見る？」

統夜「ああ」

統夜はメアリからDVDを受け取りデッキの中に入れ再生しようとした瞬間・・・

「それは待つて貰おうか？」

腰まである銀髪に金色の瞳をした顔立ちでDOG DAYSのレオンの戦闘服を着た女性と腰までの黒髪のポニーテールに赤い瞳をした顔立ちでハイスクールD×Dの女子制服を着た女性の二人が来た。

レオン「私の名はレオン」バステットだ。先の話になると思うが蒼穹の騎士団の指導役になって天川統夜を始めとしたメンバーを鍛えてやるから覚悟しておけ」

ユウカ「私の名前はユウカ・カザキリよ。よろしくね」

レオンとユウカは統夜達に挨拶をした。

統夜「よろしくな。俺は天川統夜だ」

はやて「八神はやてと申します」

ハヤト「大鷹ハヤトです。よろしくお願ひします」

ダイチ「リュウ・ダイチです。よろしくお願ひします」

たけし「竜崎たけしです。よろしくお願ひします」
メアリ「古手川メアリと言います。よろしくお願ひします」

統夜達もそれぞれレオンとユウカに自己紹介をし始めた。
自己紹介をし終えた時レオンとユウカはチラツと統夜を一目見て笑
みを浮かべていた。

統夜「どうかしたのか？」
レオン「気にするな」

ユウカ「気にしたら負けよ。再生させなさい」

ユウカに言われDVDを再生した。

映像には蒼いパーカーを着て下は黒い長ズボンを穿き、七ヶ所（胸
部、両肩、両腕、両足）に真紅のプロテクターを装備した魔道騎士
服・・・バリアジャケット型ネオアーマードデバイス『アドヴァン
スメサイア』を纏った統夜がシャルと模擬戦をしていた。

次は学園にメアリが転校し弄られる罅が始まる映像が映された。

統夜が背中まで伸ばした黒髪と右が琥珀、左が紫色のオッドアイを
持ち、凛々しさを含んだ端正な顔立ちをしている青年・・・『紅神
忍』の二人が廃棄された研究施設の前で戦い始めていた。

紅神忍との戦いで背中から羽の形が機動ウイング状のものに変化し
た五対十翼の翼が生え髪の色が白銀に輝いた銀髪、瞳の色が銀色に
変化した姿と紅のマントを羽織り髪が銀髪、瞳が真紅、瞳孔が縦に
なり漆黒の間よりも深く美しい妖力を放出した姿、百人に一人の割
合でしか発現出来なく人の上に立つ王の資質を持った者だけにしか
無い『霸王色の覇氣』に目覚める映像が映し出された後終了してし
まった。

これらを見た一同（レオンとユウカを除く）は啞然としていた。

統夜「何じゃこりゃ・・・」

はやて「凄いな・・・」

ハヤト「新しいデバイスと新たな力は凄い・・・」

ダイチ「本当に何者なのか疑いたくなるな・・・」

たけし「バージョンアップか・・・本来の姿かもしれないね」

メアリ「驚きね・・・」

レオン「ほお・・・これは興味深い・・・戦ってみたくなつたぞ・

・・・」

ユウカ「ええ・・・面白い力を持つてるわね」

映像を見て驚きと興味で一杯だった。

レオン「天川統夜に八神はやて、リュウ・ダイチ、竜崎たけし！！

セイントクルセイダーズを崩壊させたからつてたるんではいかなぞ

！！私達が本編でしつかりと鍛えてやるから覚悟しておけ！！」

ユウカ「私のも厳しいから覚悟しておいてね（黒笑）」

レオンの言葉に青ざめ、ユウカの言葉に悪寒が走ったのは言うまでも無かった。

統夜「さて・・・ハヤトにダイチ、たけし・・・変身してくれない？」

ハヤトとダイチ、たけしの三人に言った。

ハヤト「あ、は、はい。クロスチェンジャー！！」

右手首にはめているエンブレムフォーメーションのボタンを押し、ハヤトは赤い光に包まれレッドホークと呼ばれる赤い戦士に変身した。

ハヤト「レッド！ホーク！」

ダイチ「気力転身！！オーラチェンジャー！！」

オーラギャザーを展開させ左腕のオーラスプレッダーに差し込み、赤い光に包まれリュウレンジャーに変身した。

ダイチ「リュウレンジャー！天火星ダイチ！！」

たけし「超力変身！！」

両手に付いているパワーブレスのスイッチを起動させてオーレッドに変身した。

たけし「オーレッド！たけし！！」

変身した三人はそれぞれの構えをとった。

これらを見た統夜達はパチパチと拍手をした。

統夜「凄いね・・・素晴らしいよ」

はやて「うんうん」

メアリ「変身して戦うものはよく分からないけど・・・素敵ね」

レオン「興味深いな・・・是非戦いたいものだ」

ユウカ「弄り甲斐があるわね」

しばらくしてハヤト達は変身を解除し別れの時が来た。

統夜「頑張れよ」

ダイチ「負けるなよ」

たけし「何があっても頑張れよ」

ジェットホークに乗り始めたハヤトに激励を贈った。

ハヤト「何があっても頑張るよ・・・負けないように」

ジェットホークを発進させジェットマン基地だった場所であり自分の家へ帰った。

統夜「これからも頑張ってほしいね〜メアリ閣下とレオン、ユウカもだけど」

メアリ「また閣下って言ったでしょ!!!？」

統夜「声が一緒なんだから仕方ないだろ・・・さ、終わりにしようか」

メアリ「終わりにするな〜!!!」

統夜達が撤収する中・・・メアリの叫び声が木霊して終わった。

番外編『空飛ぶ戦隊ものってカッコイイよな』（後書き）

ステージ裏にて・・・

レオン「中々面白い連中だな」

ユウカ「そうね・・・主人公である天川統夜が弄り甲斐があるけど・・・」

レオン「けど？」

ユウカ「難しそうね。謎が多過ぎて・・・」

レオン「いずれ分かるだろう・・・楽しみにしておけばいい」

ユウカ「私達の出番・・・楽しみにしててね」

第五十二話 『優子の統夜改造計画』（前書き）

黒 「お姉様！！こんな所にいましたのね！！」

咲夜 「はぁ！？何を言ってるの！？人違いだつて！！」

黒 「私には分かりますの・・・貴方がお姉様だという事に・・・」

咲夜 「いい加減にしろおおお！！！！！！」

焰を黒 に浴びせた。

文乃 「HERO'S EPISODE第五十二話始まるわよ」

第五十二話 『優子の統夜改造計画』

第五十二話 『優子の統夜改造計画』

セントクルセイダースが崩壊して一週間が過ぎた頃・・・
文月バーベナ学園の2-Aクラスの教室の中で優子は頭を抱えていた。

何故なら・・・

統夜「ハッハッハッハ！！甘いぞ！！明久！！」

明久「中々やる・・・」

常村の両脚を両手で持って竹刀のように構えている統夜と夏川の両脚を両手で持って竹刀のように構えている明久が剣道をやっていた。何度も打ち合った為常村と夏川の二人はボロボロになっていたのは言うまでも無い。

常村「テメエら！！こんな事して許されるとでも思ってるのか！！」

夏川「吉井！！テメエ・・・ただで済むと思うなよ！！」

竹刀にされた二人の言葉を無視し激しい打ち合いを再開した。

はやて「そこや！！」

遊輔「そこを狙うんだ！！統夜！！」

ダイチ「いけえ！！明久！！」

秀吉「そこじゃあ！！」

カナ「頑張つて！！」

はやてと遊輔、ダイチ、秀吉、カナの五人は応援していた。

優子「何応援してんの！？あれ竹刀じゃないわよね？！常村先輩と夏川先輩だよね！？何で気付かないの？！」

応援しているはやて達に対し青褪めながらツツコミを入れていた。

シャロ「凄い・・・」

エリー「スタイリッシュです」

ネロ「その前に人を竹刀代わりにしてるよね！？」

コーデリア「中々いい試合ね・・・」

ネロを除くミルキィホームズも統夜と明久の試合に魅了されていた。

エステル「中々いい試合では無いでしょう！！」

文乃「誰か止めないといけないでしょうが！！」

エステルと文乃は二人の試合を見て怒鳴りツツコンだ。

フィーナ「あれは剣道と呼べるの？！」

菜月「達哉・・・止めた方がいいんじゃない？」

翠「そうだよ・・・あれはねえ・・・」

達哉「そうだな・・・」

見ていた達哉と達哉ラバーズは二人の試合を見て青ざめていた。試合を止めようと達哉が歩み出した。

達哉「お前らいい加減試合をや・・・」

試合を止めるよう言おうとした瞬間・・・

千世「ホワアアアア！！！」
希「・・・・・・・・」

まよチキ！に出てくる近衛スバルのコスプレをした千世とけいおんの中野梓のコスプレをした希の二人が達哉を蹴っ飛ばした。

達哉「グハツ！」

フィーナ「達哉！？」

蹴っ飛ばされた達哉を達哉ラバーズは介抱をし始めた。

千世「神聖なるハジケ剣道を止めるとは・・・・笑止千万！！」

希「・・・・止めたら・・・・駄目」

優子「おいしいiiiiiiii！！！！中の人繋がりのコスプレは不味いでしょおおおお！！！！！！てかハジケ剣道って何！？全然分からないんだけど！！！」

二人のコスプレとハジケ剣道に対し額に血筋を浮かべながら怒鳴りツッコミを入れた。

千世「竹刀や木刀等を用いずに・・・・ネギやゴボウ等を用いてどれだけ打ち合う剣道よ！！！」

希「にゃあ・・・・師範が来た・・・・」

希と千世が師範らしき人物へと顔を向けた。それにつられて見た優子は青ざめた。

師範が着物を着た瑞希だったからだ・・・・

優子「姫路さあああん！！！！戻って来てええええ！！！！」

美波「瑞希iiiiiiii！！！！お願い・・・・行かないでええええええ！！！！」

「!!」

ハジケリストの仲間入りになった瑞希にダバァ〜っど滝のような勢いで涙を流した優子と美波の二人であった。

瑞希「ヒヤツパー剣『常村』と変態剣『夏川』の打ち合いですか・

・」

優子「え・・・何そのヒヤツパー剣と変態剣って・・・」

千世「そんな事も分からないの？ハジケ剣道に伝わる伝説の剣よ！
！」

優子「分かるかああああ!!!!」

訳の分からない伝説の剣に対して叫びながらツツコンだ。

統夜「でりゃああああ!!!!」

明久「おおおおお!!!!」

常夏コンビ「いのでででで!!!!」

激しく打ち合い血が出ていた。

注意・・・常夏コンビから出てますから大丈夫です

優子「何処が大丈夫だああああ!!!!」

あいつらはこういう運命だから仕方が無い。

統夜「中々やるな!!」

明久「次の一撃で決着を着ける!!」

二人が一斉に駆け抜け背を向けたままの状態で立った。

瑞希「両者・・・引き分け!!」

師範であり審判をしていた瑞希が引き分けと言う判定を下した。
応援していた人達は盛り上がった。

統夜「いい試合だったな」

明久「うん」

瑞希「二人とも・・・よく頑張りました・・・これより終わりの儀を始めます」

気絶した常村を担ぎ・・・

瑞希「常村マグナム!!」

常村を窓から投げ飛ばした。

優子「えええええええ!!!!これが終わりの儀!?!ただの投げ飛ばしじゃない!!」

優子がツッコミ出してる最中に夏川を担ぎ・・・

瑞希「夏川マグナム!!」

夏川を窓から投げ飛ばした。

瑞希「スッキリしました」

優子「・・・・・・・・」

常夏コンビを投げてスッキリしている瑞希、投げ飛ばされた二人を見て笑っている統夜と明久のコンビを見て黒いオーラを出し震えて

いる優子がいた。

統夜「あり……これって……」

明久「火山噴火の予兆？」

二人は冷や汗を大量に流し青ざめた。

優子「本当に……いい加減にしろおーーーーー!!!!!!」

統夜達がふざけ過ぎた所為か、優子は怒りを露わにして大声で叫び、騒いでいた統夜達は黙ってしまった。

優子「皆……ここで正座!!!」

教室でふざけまくった統夜と明久、瑞希、はやて、遊輔、ダイチ、秀吉、カナ、千世、希を正座させた。

優子「皆……朝からふざけ過ぎよ!!!いつもいつも……過激な事して……真面目にやってよ!!!」

優子の怒声にビクツとなる統夜達……

統夜「いや……出来心と言うか……」

明久「刺激がほしかったんです……」

優子「ああん？出来心に刺激がほしかった?!それで本当に済むと思っっているのかしら?!」

統夜と明久はシュンとなった。

優子「貴方達は何故止めなかったの？」

はやて「あんな白熱した試合は止めたらあかんやろ」

遊輔「あれは凄かった・・・」

ダイチ「伝説の剣のぶつかり合いは見れないからな」

秀吉「姉上・・・あれは中々見れないものじゃぞ」

カナ「そうよ」

優子「あれの何処が凄いの？てか絶対に止めるべきでしょ！！」

観戦していたはやて達も黙った。

優子「千世と希、姫路さんも同罪だよ！！」

千世と希、瑞希の三人も黙ってしまった。

優子「全く・・・」

授業が始まるまで説教が続いた。

昼休みの時間になり・・・

統夜「おゝい・・・遊輔・・・ダイチ・・・一緒に・・・ゴヘッ
！」

遊輔とダイチに声を掛けようとした瞬間優子の飛び蹴りをクリティカルヒットし倒れた。

優子「あんな連中に関わるからハジケてしまうのよ・・・」

統夜を引き摺って自分の席へ戻され昼食をとった。

ただし優子の監視付きで・・・
統夜は試しにハジケようとした瞬間優子が即座に動き関節技を決められたの言うまでも無かった。

優子「何で毎回毎回・・・こんな行動をするのかしらね・・・」

統夜の行動に対し右手で額を抑えていた。
だがこれで終わりでは無かった・・・

帰り時間になり・・・

統夜「ようゝし・・・帰るとするか」

優子「待てや・・・」

統夜「ぐげっ・・・」

突然統夜の襟を掴んだ。

統夜「何だよ・・・」

優子「貴方・・・私達の家に泊まりなさい。徹底的に教育して真人間にしてあげるわ」

優子の言葉にメインヒロインであるはやてが反応した。

はやて「ちよつと待ちい！！何で優子ちゃんの家泊まらせるんや？！」

優子「キチンとした真人間にする為よ」

エステル「真人間・・・ですか・・・私も協力してもよろしいですか？」

優子「構わないわよ」

エステル「ありがとうございます。ですが・・・統夜が優子の家に

泊まるのは・・・」

文乃「反対よ!!」

千世「ハジケリストから真人間に変えようとするのは反対よ!!」

希「にゃあ・・・バランスが崩れる・・・」

カナ「これじゃ・・・物語が壊れるわよ!!」

秀吉「そうじゃぞ・・・姉上・・・ツッコミである姉上自らの仕事を奪う事になるのじゃぞ？」

統夜の嫁候補連合はそれぞれ反対していた。

統夜本人は自分の家で満喫できると思ったのかホツとした束の間・

優子「秀吉・・・後で覚えてなさい・・・貴方達・・・これが欲しく無いかしら？」

優子の懐から統夜の秘蔵写真を見せた。

統夜「おいおい・・・これらを見て・・・」

優子の策に呆れていたが・・・

結果は裏切られる形となる・・・

はやて「これは・・・手に入らなかった写真や無いか・・・」
エステル「くっ・・・賛成しないと手に入らない・・・そうですね？」

優子「そうよ。どうするの？」

手に入らなかった統夜の写真は欲しいのか・・・

はやて「しょうがないな・・・それで手を打つたる・・・」

はやて達嫁候補連合は納得してしまった。
それを見た統夜はガツクリと頂垂れた……物で釣られるとは思わ
なかつたからだ。

優子「成立ね」

いい笑顔ではやて達に統夜の秘蔵写真を渡した。

はやて「欲しかった写真や〜」

文乃「これは素直になれるわね……」

千世「コレクションが増えたわ」

希「……大事にとっておく……」

カナ「大事にするよ」

エステル「また増えました……」

それぞれ写真を受け取り笑顔になっていた。

統夜「終わった……」

優子「カナ。これはリムちゃんの分よ」

プリムラの分である封筒（中身は統夜の写真）をカナに渡した。

カナ「必ず渡すよ」

はやて「で……どれぐらい泊まらせるんや？」

優子「一週間よ」

はやて「一週間か……統夜……」

少し黒いオーラを出して統夜を見つめた。

はやて「もし・・・優子ちゃんか秀吉ちゃんに変な事したら・・・
どうなるか分かるな？」

統夜「は、ははははは・・・はいいいい！！！！」

大汗を流し青褪めながら返事をした。

逆らったら天使化でラグナロクなのだから・・・

はやて「よし」

統夜「ふう・・・優子・・・それって許可必要だよな？」

優子「勿論即OKしてくれたわ。それじゃ・・・また学校で・・・」

統夜「おiiiiiiii！！！！いいのかよ！！？」

優子と秀吉の二人は木下姉妹の両親に対しツッコミを入れていた統夜を連れて帰った。

遊輔「可哀想だな・・・」

なのは「うん・・・」

鮮華「無理がありますね」

ダイチ「ハジケない統夜で物語成立出来るのかな？」

エリー「さあ？」

達哉「これで俺の苦勞が報われる・・・」

フィーナ「嬉しそうね・・・」

明久「どうなるんだろう？」

瑞希「分かりませんね・・・」

美波「そうね・・・」

遊輔達は統夜の先と物語の未来を心配していた。

木下家のリビング・・・

統夜「久し振りだな・・・ここに来たの・・・」

優子「小学生以来じゃないの？」

統夜「そうかもな・・・」

闇の書事件以来木下家に来ていなかったのか懐かしく感じていた。

秀吉「辛いかもしれんが・・・頑張ってくれ・・・」

統夜「おう・・・」

優子「さて・・・私が考案した・・・『統夜を真面目に更生させよう計画』を実行するわよ」

統夜「なに・・・その・・・嫌な計画は・・・」

統夜の問いに優子は自慢げに答え始めた。

優子「ふっふっふ・・・よくぞ聞いてくれたわね・・・貴方のハジケを根絶させ・・・真面目へと変革させる計画よ!!!」

内容を聞いた統夜と秀吉は啞然としていた。

統夜「変革ね・・・」

秀吉「無理に近いじゃろ・・・」

BASARAに出てくる前田慶次のコスプレをした統夜とあかね色に染まる坂に出てくる綾小路華恋コスプレをした秀吉がいた。優子はそれを見逃さずコスプレをした二人に関節技を決めた。

統夜「ぐわああああ!!!」

秀吉「すぐ行動に出たのお!!!」

優子「このような・・・ふざけた事したら・・・こうするから・・・」

・そのつもりで・・・」

その頃・・・天川家では・・・

プリムラ「お兄ちゃんは優子のところへ行っちゃったの？」

はやて「せや・・・反対したけど・・・どうせ更生したのはええけど・・・ハジケリストに逆戻りがお約束や」

プリムラ「あゝ・・・それは確かに・・・あれがお兄ちゃんの普段だからねゝ」

リビングで統夜は更生してもハジケリストに逆戻りする予想をしながら話していた。

はやて「変な事したらラグナロクを放つと釘を刺しておいたから大丈夫やゝ」

はやての物騒な台詞にプリムラは青ざめた。下手をしたら夜天の王・・・夜天の天使の鉄槌は恐れられてるからだ。

時間が過ぎ深夜になった。

統夜「真面目ねえ・・・どんなのが真面目なのか分からないつつの・・・」

木下家の両親と久し振りに会い色々な会話をした。内容はスフィア王国に行った感想や木下姉妹と仲良くしている等である。

統夜「（本当の種族か・・・合宿中に調べてみるか・・・）」

そんな事を考えリビングのソファで眠りについた。

翌朝・・・

ソファから起き木下家の庭に移動し心装を展開し居合いの構えをとり瞬速の抜刀術を始めた。

セイラ達セントクルセイダースを倒したからと言って修練を怠る訳にはいかないのである。

統夜「うーん・・・まだまだかな・・・」

この後素振りを数十回終え心装を解除しリビングへ戻った。

秀吉「おはようじゃ。統夜」

統夜「おはよう。秀吉」

リビングにいた秀吉に挨拶をした。

秀吉「庭に出ていたが修行かの？」

統夜「まあな・・・こればかりはおふざけではやれん・・・」

秀吉「確かにの・・・」

二人は苦笑して話していると目が覚めたばかりの優子がやって来た。

統夜「おはよう優子」

秀吉「おはよう。姉上」

優子「おはよう・・・統夜、秀吉」

リビングに来た優子に挨拶をした後朝食を済ませ学校へ行こうと玄関から出た。

なのは「おはよう。鮮華ちゃん、はやてちゃん、カナちゃん、リムちゃん」

フェイト「おはよう。鮮華、はやて、カナ、プリムラ」

鮮華「おはようございます。なのはさん、フェイトさん」

はやて「おはよう。なのはちゃん、フェイトちゃん」

カナ「おはよう。なのは、フェイト」

プリムラ「おはよう。なのはお姉ちゃん、フェイトお姉ちゃん」

学校の門の前で鮮華とはやて、カナ、プリムラの四人はなのはとフェイトに挨拶をしていた。

鮮華「木下家に泊まった兄さんは絶対更生出来ないと思いますよ。

不可能の領域で無理があり過ぎです。無謀中の無謀と呼ぶべきです」

なのは「本当に無理と言っただね・・・」

フェイト「リバウンド確定だと思っよ」

はやて「やつぱなのはちゃんとフェイトちゃんもそう思うか」

カナ「難しいよね」

プリムラ「無理があるよね」

優子の『統夜を真人間に更生させる』計画は無理と判断していた鮮華達だった。

鮮華「私ですら出来ないものを・・・」

はやて「私らは分かり切ってるからええものの・・・優子ちゃんの前で言うのは禁句な」

なのは達に優子の計画は必ず失敗する事を本人の前で禁句にした。
すると・・・

統夜「おはよう」

優子「おはよう」

秀吉「おはよう」

三人が仲良く登校しはやて達に挨拶をした後・・・

親衛隊「天川統夜あああ！！天誅うううう！！！！！！」

親衛隊と異端審問会が統夜に襲い掛かったが・・・

統夜「はいはい・・・お前ら馬鹿はご退場」

右手の指でパチンと鳴らし蒼炎を用いた爆炎で親衛隊と異端審問会を燃やし始めた。

なのは「うわ・・・えげつない・・・」

フェイト「（いや・・・なのはだって・・・人の事言えないよ）」

なのはの言葉にフェイトは心の中でツッコんだ。

はやて「統夜！酷いで！やるんやったら零距离ロケランや！」

カナ「アサルトライフルで撃った後グルカナイフで滅多刺しだよ！」

プリムラ「ここはプロトンキャノンだよ！！」

フェイト「はやて達の方が酷いよおおおお！！！！！！」

はやて達の物騒過ぎる台詞にフェイトは青褪め大声で叫びツッコんだ。

その後教室に入り優子から・・・

優子「一週間私が指定する人物との会うのは禁止！！」

優子から手渡された紙を見ると統夜は青ざめた。

統夜「これ・・・厳しくね？」

優子が指定する人物・・・遊輔と零斗、ダイチ、明久の四人だけである。

優子「こうして貴方は真面目な人間になっていくの・・・ハジケや変態に関わるから駄目になるの・・・」

統夜「だ・・・だがな・・・」

優子「い・い・わ・ね？」

統夜「はい・・・」

ハジケに関して威圧を出して統夜に問い掛け承認させた。

ダイチ「変態では無い・・・スケベだ・・・」

フェイト「いや・・・似たようなものだから・・・」

ダイチの言葉にツッコミを入れたフェイトだった。

遊輔「これが本当の地獄だな」

なのは「神のご加護があらん事を・・・」

この後授業を真面目に受け遊輔達四人と関わらず優子の監視の元、

学園生活を送っていた。

二日目の帰りに天川家へ着替えなどの荷物を取りに寄って木下家へ帰った。

統夜「何かスッキリしないな・・・」

秀吉「統夜・・・辛いかもしれんが・・・頑張るのじゃ」

三日目・・・優子が指定した人物と関わってはいけない事とハジケ禁止のセットなのか徐々に精神的苦痛になり始めた。

ラバーズや指定されていないメンバーとの交流は許可されてる・・・優子の監視付きで・・・

偶にハジケようとしたが優子の関節技や飛び蹴りが炸裂したのは言うまでも無い。

はやてを始めとした統夜ラバーズの人達は心配していた。ハジケや親しい仲間との交流を禁止しているのだから・・・

ツッコミの才能を持つ次期月王である達哉ですら心配していた。

達哉「何か・・・やり過ぎじゃないか？いくらなんでも・・・」

フィーナ「そうね・・・真面目なのは一番だけど・・・統夜の真面目一番は不気味さを感じるわ・・・何かこう・・・ねえ？」

達哉「ああ・・・盛り上げ役がないとな・・・どうせ元に戻るだろう」

四日目・・・優子の教育の影響なのか徐々に真面目になりつつあった。

幼馴染であるはやてと文乃はいつもの統夜に戻ると信じていた。

はやて「わあ・・・成果出てるやないか」

文乃「これで何とかなるわね」

はやて「文乃ちゃんは素直やないなあ」

文乃「これでも素直よ」
はやて「はいはい」

文乃の台詞を軽く受け流したはやてだった。

五日目・・・完璧では無いがマジメリストになりつつあったが精神的にやや不安定になり始めた。

2-Aの人達にとっては平和に見えて平和では無いものになっていった。

いきなりハジケリストからマジメリストへ変わろうとしているのだから・・・

だが心の中では絶対戻るといふ思いがあったそうなの・・・

六日目と七日目は普通に過ごし地獄のような合宿を終えた。

統夜「終わった・・・」

優子「これでハジケリストにならないわ・・・」

精神的に疲れている統夜に対し優子はやり遂げた感のある清々しい笑顔になっていた。

秀吉「（絶対何らかの弾みで戻るじゃろ・・・）」

優子「来週学校でね」

統夜「ああ」

こうして統夜は自分の家へ帰った。

この時・・・秀吉の予感が来週の登校日に的中するとは知らなかっただろう・・・

登校日・・・

優子「これでマジメリストね・・・」

秀吉「そうじゃといいけどの・・・」

廊下を歩きながらマジメリストへ変化した統夜を想像していた。

優子「私の活躍で統夜も・・・」

教室の扉を開け入ろうとした優子は固まってしまった。

秀吉「どうしたのじゃ？姉上。おお・・・これは・・・やはり・・・」

木下姉妹が見たものは・・・

統夜「でりゃあ!!」

ダイチ「負けるかあ!!」

統夜とダイチはゴボウを手にしてフェンシングをやっている所だった。

優子「何でええええ!!!!」

先日まで真面目だった統夜がハジケリストに逆戻りしていた事に対し大声で叫び始めた。

零斗「あゝ・・・それは俺が説明しよう」

優子「出たな!!ハジケ感染源!!」

零斗「おいおい・・・先輩なんだからそれは流石に傷つく・・・」

優子「何で戻ってるのか説明してくれない？」

零斗「統夜はな・・・合宿を耐え・・・家に帰った・・・」

優子「ふむふむ・・・」

零斗「遊びに来た俺と遊輔、ダイチ、たけしがハジケたギャグで完全復活して現在に至る」

これを聞いた優子は・・・

優子「アンタが原因かいいいいいい！！！！！！」

零斗「ぐわああああ！！！！そっちには関節は曲がらないぞおおおお！！！！！！」

元凶である零斗に関節技を喰らわせた。

零斗「だが・・・この方が統夜らしいと思ってるんだろ？木下姉・
・あいつはああいうのが似合う・・・だからはやてや木下妹達が好きになったんじゃないか？」

零斗の問いに優子は考え・・・

優子「そうね・・・だけど・・・」

零斗「だけど？」

優子「ハジケリストにも限度があるでしょおおおお！！！！」

零斗「あだだだだ！！！！！！？」

関節技を強くし零斗は大声で叫び始めた。

鮮華「無理ですよ。ハジケリストの兄さんを真面目の道に戻すのは・・・無謀すぎです」

はやて「私の思った通りやな」

文乃「また騒がしくなるのね・・・はあ・・・」

千世「これが統夜だからいいんじゃない？」

希「にゃあ・・・こっちの方がいい」

エステル「切り替えが出来てる分いいと思いますね」

カナ「確かに・・・」

秀吉「そうじゃの・・・」

妹と統夜ラバーズの人達は元に戻った事に対し喜んでいた。

遊輔「やっぱこうじゃなきゃ面白くない」

達哉「そうだな・・・この方がしっくりと来る」

明久「うんうん」

雄二「こっちの方があいつらしいしな」

康太「・・・」

遊輔達男性陣はマジメリストからハジケリストに戻った統夜とダイチのフェンシングを見物した。

第五十二話『優子の統夜改造計画』（後書き）

今回のHERO'S EPISODEは

フェイト「ジュエルシード事件と一緒に組んでた私としては嬉しいかな・・・いつも真面目だと気が狂うし」

フェイト「ビリーさんが新しい技術であるIESの二基同調するシステムを開発していた」

フェイト「二基同調のシステムをフォーチュンエターナルとフォーチュンプラスター、パーシヴァル、ジャツジナイトを一つにしたデバイス『アドヴァンスメサイア』に搭載しテストを始める統夜・・・未知なる力を持つデバイスに統夜がどう扱うかが楽しみだね」

フェイト「次回は『ダブルインフィニティーエナジーシステム』テイクオフ」

第五十三話 『ダブルインフィニティーエナジーシステム』 (前書き)

はやて「大砲用意！」

翔子「アステロイドヴィジョン！」

稟「俺はボケないぞ」

明久「あ、あはは・・・HERO・S EPISODE 第五十三話
始まるよ」

第五十三話『ダブルインフィニティーエナジーシステム』

第五十三話『ダブルインフィニティーエナジーシステム』

本拠地の寮に一人の男が部屋で何かを開発していた。

ビリー「やはり・・・今の段階では二基同調は不安定になるか・・・なら安定し制御できるものも同時に開発しておこう」

彼の名はビリー・・・蒼穹の騎士団のデバイスマイスター。パソコンの液晶ディスプレイ画面とにらめっこしていた。

画面にはデバイスの名前なのか『アドヴァンスメサイア』が表示され様々なデータも表示されていた。

ビリー「幸いフォーチュンエンターナルとフォーチュンブラスターのIESの組み合わせでの同調率は高かったが・・・単体でのオーシヤンシステムは危険だ。後は武装をドライバー化して・・・」

フォーチュンエンターナルとフォーチュンブラスター、パーシヴァル、ジャツジナイトの武装を見てドライバー化かつ武装の強化の計画と共に『アドヴァンスメサイア』の作製に取り掛かった。

ビリー「統夜君はこれを扱えるか・・・楽しみだ」

未知なる力を秘めた『アドヴァンスメサイア』を統夜が完璧に扱える事を楽しみにしながら作製した。

二日後の学園の屋上にて

遊輔「そういや・・・フォーチュンエターナルとフォーチュンブラスター、ジャツジナイト、パーシヴァルはまだピリーさんに預かっている状態か？」

統夜「ああ。メンテをしてもらってる」

遊輔「あの人の事だ・・・改造したりしてな・・・」

屋上で統夜と遊輔の二人が話していた。

遊輔の予感は的中しているが・・・

統夜「改造ねえ・・・どんなものになるんやら」

遊輔「一つになったら重装甲になりそうだな・・・」

遊輔は全てを一つにした重装甲アーマードデバイスを想像していた。

統夜「うーん・・・どうなんかねえ・・・」

遊輔「お前の事だ・・・身軽で様々な戦術に合わせたものになっている事を祈るしかない」

統夜「あいつらのデバイスも一緒に戦うからな。ロードやセイクリッドフアングもな・・・」

遊輔「ロードで思い出したが・・・ガーディアンってどれぐらい存在しているのかな？」

ガーディアンについて統夜に聞いてみた。

統夜「俺のセイヴァー・ロード・サーディオン、お前のペンドラゴブレイド、雪蓮が所有するライガーフアング・・・強力故に使用者は限られている・・・」

ガーディアンデバイスは使い手を選ぶ為おいそれと誰かが使える代

物ではない。

遊輔「ガーディアンって全てMIEESなのか？」

統夜「そうなるだろ・・・お前のもそうだったんだし・・・ガーディアンの調査もやる価値がありそうだな」

遊輔「セイントクルセイダーズは崩壊したからいいかな。様々なものの調査も悪く無い」

チャイムが鳴り二人は屋上から教室へ戻った。

時間が過ぎ放課後・・・

統夜「よし・・・帰るか」

遊輔「本拠地寮へ寄るんだろ？」

統夜「ああ。はやて〜カナ・・・悪いけど俺は本拠地寮に用事があるから先に帰っててくれ〜」

はやて「ん・・・分かった」

カナ「気を付けて帰って来てね〜」

遊輔とはやて、カナの三人と別れた後一人で本拠地寮へ向った。

統夜「四つのデバイス・・・どう使いこなした方がいいのか悩むな・・・」

自分が最も使うフォーチュンエンターナルとフォーチュンブラスター、託されたパーシヴァルとジャッジナイトについて歩きながら考えていた。

統夜「ついてから考えるか」

自分の予想とは遙かに超えた事になる事を知らずに本拠地寮に着き中へ入った。

統夜「さて・・・あつ・・・いたいた。ビリーさん。俺のデバイスのメンテ終わりましたか？」

ビリー「ああ・・・ちよつと待つてくれないか？その椅子に座つて待つててくれ」

ビリーと出くわし椅子に座り始めた。

数分経つた後ビリーが何らかのアイテムを持って来た。

統夜「あれ・・・なに・・・これ・・・ディケイドと555に似たようなアイテムだよね！？俺のフォーチュンエターナルとブラスタ―、パーシヴァル、ジャツジナイトは！？」

タッチパネル式の蒼い携帯電話と蒼いバツクル、宝石が備わつた蒼いフィンガーレスグローブ、5枚のカード、白と黒の二丁の拳銃を見てツツコンだ。

ビリー「君のフォーチュンエターナルとフォーチュンブラスタ―、パーシヴァル、ジャツジナイトを改良したバリアジャケット型ネオアーマードデバイス・・・『アドヴァンスメサイア』だ」

ツツコンでいる統夜とは正反対にビリーは冷静に統夜の新たなデバイスである『アドヴァンスメサイア』の説明をした。

統夜「バリアジャケット型ネオアーマードデバイス・・・アドヴァンスメサイア・・・」

ビリー「そう・・・僕が新しい技術で君のデバイスを改造した・・・
新たなIES・・・『ダブルインフィニティーエナジーシステム DIES』を始めとした新たなシステムも

搭載されてある」

統夜「DIESSに・・・新たなシステムねえ・・・」

ビリー「君のはOとTの組み合わせのDIESS?だよ・・・そのバツクル・・・アドヴァンスバツクルを腰に当ててみてくれ」

ビリーに言われたまま蒼いバツクルを腰に当てベルト部が現れ腰に巻き付いた。

ビリー「その時に左右にハードポイントがある筈だ。右腰に白いリボルバー式の拳銃、左腰に黒いマガジン式の拳銃をセットするんだ」
統夜「こうか・・・」

その後右腰に白いリボルバー式の拳銃、左腰に黒いマガジン式の拳銃をセットした。

ビリー「一旦外して」

統夜「了解」

白と黒の双銃を外しアドヴァンスバツクルを外した。

ビリー「分かって来た?」

統夜「大体はな・・・四つのデバイスを一つに纏めたっていうのに驚いたよ」

ビリー「はははは・・・待機状態も工夫したからね」

ビリーは笑いながら答えた。

ビリー「起動方法も教えておくよ。まずは最初に宝石が備わったフィンガーレスグローブのエナジークリスタルを両手、アドヴァンスバツクルを腰に装着しベルト部にある左右のハードポイントに白と

黒の双銃のアドヴァンスフューラーをセット、蒼いタッチパネル式の携帯電話であるアドヴァンスフォンに起動コード「000」を入力してENTERを押すと「STANDING BY」という音声がかけた後、アドヴァンスバックルのバックル部にアドヴァンスフオンをセットする事により「COMPLETE」の音声が響いてバリアジャケットが展開される仕組みだよ」

ビリーの説明を真剣に聞いていた統夜は納得した。

統夜「分かった・・・本格的なテストをしたいけど・・・いいよな？」

ビリー「構わないよ。でも君の場合・・・相手がいた方がいいんじゃないか？」

統夜「そうだな・・・」

本格的なテストをするのに相手が必要と言われ考え始めた瞬間・・・

シャル「本格的な訓練・・・私が引き受けていい？」

シャルがいきなり来て話し掛けた。

話し掛けられたビリーは・・・

ビリー「構わないよ。君もいいよね？」

統夜「構わないぜ。宜しくな。シャルさん」

シャル「宜しくね」

統夜とシャルは地下の訓練施設へ移動した。

ビリー「彼女なら大丈夫だろう・・・」

二人が居なくなつた後静かに呟いた。

地下訓練施設に着いた二人は準備体操を始めた。

シャル「見せて貰うわ・・・貴方の新しいデバイスを・・・」

統夜「ああ・・・」

両手に手の甲の部分に蒼（右）と金（左）の丸い宝石を備えた蒼い生地フィンガーレスグローブの『エナジークリスタル』を嵌め、アドヴァンスバツクルを腰に装着しベルト部にある左右のハードポイントに白と黒の双銃の『アドヴァンスフューラー』をセットし、アドヴァンスフォンに起動コード「000」を入力してENTERを押すと「STANDING BY」という音声が響いた後・・・

統夜「ウェイクアップ・・・アドヴァンスメサイア!!」

アドヴァンスバツクルのバツクル部にアドヴァンスフォンをセットし「COMPLETE」の音声が響いて上には蒼いパーカーを着て下は黒い長ズボンを穿き、七ヶ所（胸部、両肩、両腕、両足）に真紅のプロテクターを装備したバリアジャケットを展開した。

シャル「バリアジャケット型のデバイスね・・・」

統夜「そういうこつた・・・」

統夜は両手にアドヴァンスフューラーを手にし、シャルは両手に魔力を収束し撃ち合いを始めた。

統夜「はあ!!」

シャル「はっ!!」

所々に移動しながら二人は双銃と魔力弾の激しい撃ち合いが続いていた。

統夜「フレイムアイスバレットオ！」

白と黒の双銃から炎と氷の弾丸を放ち両腰のハードポイントにセツトし刹那で駆け抜けた。

シャル「ゼムナスウォール！」

虚無属性の防壁を張り無効化し刹那に匹敵する速さで駆け抜けた。

統夜「天神連拳！！」

五気のある拳で小さいパンチやショートアッパーを繰り返したが・

シャル「そうはいかないわよ」

右手を大きな盾に変化させ防がれ・・・

シャル「居合い蹴り！！」

居合いの如く速い蹴りで統夜を蹴っ飛ばした。

統夜「ふう・・・やっぱ強いわ・・・」

シャル「カードは使わないの？」

統夜「そうだな・・・これを最初に使うか」

鷲が描かれたカードを取り出しアドヴァンスバツクルの中に挿入し
白い鷲型ドライバーを召喚した。

アドヴァンスイーグル（私はフォーチュンエターナルの管制人格だ
ったアドヴァンスイーグルです。宜しくお願いします。マイマスタ
ー）

統夜「フォーチュンエターナルの武装を受け継いだドライバーか・
・ドライバーコネクト・・・」

アドヴァンスイーグルとドライバーコネクトしアーマーとして纏っ
た。

シャル「射撃特化ね・・・」

背中から蝙蝠状の翼を生やし飛翔し統夜へ駆け抜けた。

統夜「おっと・・・」

胸部にあるAMコアから拡散構造相転移砲とカリドゥスの二つ同時
発射と銃身が上下に二つあり精密射撃と連射に特化した大型ライフ
ルのAMヴァリスの精密射撃の一斉発射をした。

発射した後機動力を大幅に向上させる為に魔力スラスタ―一基を搭
載し内側に四基の大型フライヤーラックが搭載されている20翼の
ウイング型バツクパツク装備のイーグルウイングで後ろへ下がった。

統夜「（以前より出力が高いな・・・だが不安定を感じる・・・オ
ーシャンシステムは使えんな・・・二基同調のは測りしれんが）」

AMヴァリスを連射しながら後ろへ下がった。

シャル「やるわね！」

AMヴアリスのエネルギー弾を右拳で弾きながら左手からデイバインバスター並の魔力砲を放った。

統夜「デイフェンドドラグーン！！AMドラグーン！AMバスタードラグーン！！」

腰裏に2基と両膝、両脛、両肩に装備されている計8基ある小型ブレイズルミナス発生装置を内蔵させた防御専門フライヤーのデイフェンドドラグーンと二門の砲台がある強化型フライヤーのAMドラグーン二十基、砲身が二門ずつあり破壊力がある両肩から発射する時に使われる砲台兼大型フライヤーのAMバスタードラグーン四基を射出した。

八基のデイフェンドドラグーンで魔力砲撃を防ぎAMドラグーン二十基とAMバスタードラグーン四基はシャルにオールレンジ攻撃を仕掛けた。

シャル「防御専用のフライヤーで防ぎながらオールレンジ攻撃か……」

オールレンジ攻撃を避けながら両腕を刃のある触手に変化させ神速で振るい全てのフライヤーを切り刻み使えなくした。

統夜「うわぁ……マジかよ……」

傷ついたシャルの腕は再生し元に戻った。

シャル「中々いい攻撃だけど……まだまだ甘いわよ」

周りに高密度の魔力スフィアを出現させ統夜に向けて発射した。

統夜「お互いな・・・」

イーグルウイングから蒼い光のエネルギーが放出されるAMネオフエザーから発射し魔力スフィアを相殺した。

その後左肩にあったフォーチュンランチャーを改良・発展させたAMランチャーを左手に持ちナイトシューターを改良・発展させた銃身が上下に二つある大型ライフルのAMブラスターを右手に持った。

シャル「フォーチュンエターナルの武装を発展させた鷲型ドライバは厄介ね・・・」

統夜「こいつは高機動殲滅型だ・・・やや不安定だが出力も上がっている・・・ターゲットマルチロツク・・・いけえ！！」

右手にあるAMブラスターからハドロン砲、左手にあるAMランチャーをEモードに切り替え、AMネオフエザーからは光の弾、胸部にあるAMコアから拡散構造相転移砲とスーパーカリドウス、両腰の部分にスーパークスフィアスを改良・発展した砲身が上下に銃身が二つある強化型レールガンのAMクスフィアスを一斉発射した。

シャル「高いけど・・・不安定な事も傾けてしまっわね・・・チャージする時間でね・・・」

背中から生やしている翼を羽ばたかせ両腕を刃状のものに変化させて一斉同時発射攻撃を避けながら細かい攻撃は刃状の両腕で捌いて防いだ。

シャル「（ああいうデバイスって・・・使って疲れないのかしら？）

」

その後統夜はAMランチャーを封印魔法陣の中に収納し、右手にAMブラスター、左手にAMヴァリスの二丁を手にし、シャルは両手から魔力を込めお互い移動しながらハイスピードの撃ち合いを始めた。

ビリーの自室にて・・・

ビリー「統夜君は面白いね・・・メサイアをこつも使いこなせているとは・・・」

リアルタイムで統夜とシャルの模擬戦を空間モニターで見っていた。

ビリー「二基同調の不安定を解決する『アドヴァンスライザー』をどの装備でやるか楽しみだね」

メサイアに改造した張本人は楽しそうに眺めていた。

自分の最高傑作であるアドヴァンスメサイアでどんな戦い方をするのかを・・・

地下訓練施設・・・

シャル「中々やるわね・・・」

統夜「そつちもな・・・」

二人の撃ち合いは中々着かずお互い距離をとっていた。

統夜はアドヴァンスイーグルをドライバーモードに変化させドライブカードに戻し隼が描かれたカードを取り出しアドヴァンスバック

ルの中に挿入し真紅の隼を召喚した。

シャル「新しいドライバー？」

統夜「ああ・・・アドヴァンスファルコンだ」

ファルコン（私はフォーチュンブラスターの管制人格だったアドヴァンスファルコンだ）

シャル「受け継がれてるのね・・・」

統夜「そういうこつた・・・ドライバーコネクト！」

アドヴァンスファルコンをドライバーコネクトし纏い、ブラスターソードを改良した小型シールド、折畳式刀剣、銃口が3連式の魔力ライフルを組み合わせた複合装備のAMソードを右腕にマウントした。

左腰にあるブラスターロングを改良・発展させた刀身を軸回転させグリップの角度を変えることでライフルモードに変形することが可能な長剣のAMロングブレイドとブラスターショートを改良・発展させた刀身の強度を上げ、エネルギーを刀身に上乘せして鞭の様に扱う事も可能な短剣のAMショートブレイドを取り出し二刀流にして構えた。

シャル「刀剣装備か・・・なら真つ向勝負と行きましようか・・・」

両腕を剣に変化させて統夜に向って駆け抜けた。

統夜「行くぜ！」

背部にある一対二翼の大型ウイング型バックパック装備のファルコンウイングを展開した瞬間、10枚のウイングとなり、小型ウイング内の小型魔力ブラスターから光の翼を発生させ駆け抜けるシャルの方へ向った。

AMロングブレイドとAMショートブレイドの二刀と剣状に変化させた両腕の打ち合いが始まった。

統夜「双竜閃光!!」

AMロングブレイドの刀身に妖力、AMショートブレイドに靈力を込め、その後蒼炎を灯した超高速の無数の突きを放った。ダイチの必殺技である天火星秘技・流星閃光を応用及び発展させた技でそれ相応の相手でなければ見切る事は不可能である。

シャル「チツ・・・(蒼い炎が出て来たわね・・・生きる全ての者を絶望へ誘う闇の炎・・・セイラ!! シュトラウトを精神崩壊させ魂を飲み込んだ炎)」

統夜の蒼炎の危険さに警戒し打ち合うのを止め高密度の魔力障壁を張り防ぎ・・・

シャル「吹き飛びなさい!」

障壁を張った状態で衝撃波を出し吹き飛ばした。

統夜「そう簡単にいかないか・・・」

シャル「蒼炎の恐ろしさは嫌でも分かるわ・・・」

統夜「そうかい・・・」

AMロングブレイドとAMショートブレイドの二つを収め、フォーチュンザンバーを改良・発展させたファルコンウイングのウイング部を鞘代わりに収めている一対の片刃の大剣のAMザンバーを二つ取り出した。

AMザンバーを並列接続させた巨大剣であるAMメガザンバーにし

て構えシャルの両腕とぶつかり合った。

シャル「いくつ剣があるのかしら・・・」

剣同士の打ち合いで発生した火花を散らせながら呟いていた。

統夜「ブラスターは剣を使った高機動近接特化だ・・・」

AMメガザンバーを左手だけに持ち替えた後右手にAMソードをラ
イフルモードにしチャージを始めた。

シャル「銃もあるのね・・・」

両脚をバツタのようなものに変化させて高く飛ぶ準備を始めた。

そうはさせないとライフルモードのAMソードから魔力ビームを発
射したがシャルの行動が速かったのかバツタのように高く飛んで回
避された。

シャル「もし安定していたら直撃を喰らってるわね」

統夜「(二基同調・・・DIESは今の技術では不安定だろうな・・・)
」

そんな事を考えているとバイザーに何かが表示された。

統夜「(アドヴァンスライザー?)」

ファルコン(ビリー殿がDIESの不安定を解消する為に開発され
たドライバーです)

突然ファルコンから念話で統夜に話した。

統夜「(何故最初から安全制御できるものを入れなかつたんだ?)」
ファルコン(今の技術では不可能だったからです。テストしても結果は不安定・・・フォーチュンエターナルとフォーチュンブラスタ
ーのIEESを使っておりますから・・・)

統夜「(元々シングルだったのを二基同調に組み込んだからな・・・
ピリーさんは安全制御装置を入れてあるアドヴァンスライザーを入
れてあると・・・)」

ファルコン(はい。これは一種のリミッター解除でアドヴァンスメ
サイアは100%の力を発揮しエターナルブラスターNを凌駕しま
す)

統夜「(へえ・・・いつちよ試すか・・・テストだし)」

ファルコン(全く・・・主は・・・いいでしょう・・・アドヴァン
スライザーは戦闘機が描かれたカードです)

統夜「(サンキュ・・・何事も挑戦ってね!!)」

ファルコンとの念話を終え戦闘機が描かれたカードをアドヴァンス
バトルの中へ装填し戦闘機型のドライバーを出現させた。

シャル「また新しいドライバー・・・一体いくつあるのよ」

統夜「五体だが・・・見せてやるぜ・・・アドヴァンスメサイアの
真の力を!!」

アドヴァンスライザー(ドッキングお願いします・・・)

統夜「おう!アドヴァンスライザー・・・ドッキング!!」

戦闘機であるアドヴァンスライザーが本体、ライトウイング、レフ
トウイング、武装に分離し始めた。

ライトウイングが右肩、レフトウイングが左肩、本体は背部、武装
はライトウイングとレフトウイングにある為ドッキングした。

統夜「(安定している・・・)」

ジェット型ヘルメットのファルコンバイザーに搭載されたバイザーに様々な情報が表示されていた。

統夜「（エクストリームオーシャンシステムか・・・）」
シャル「面白いわね」

アドヴァンスライザーとドッキングしたAF装備のメサイアを見て
笑みを浮かべた。

未知的な力を秘めているのかもしれないから・・・

シャル「見せて貰うわ」

統夜「行くぜ！エクストリームオーシャンシステム起動！！」

バリアジャケット及びドライバーの装甲の色が淡い翠色の光に包まれた蒼に変化し粒子が膨大に放出された。

シャル「綺麗ね・・・」

統夜「続き始めようぜ・・・」

AMソードをソードモードにしこちらに駆け抜けているシャルとぶつかり始め辺りが光に包まれた。

光に包まれたシャルは白銀の光に照らされた草原と真紅の洋館、漆黒の洋風の城がある世界にいた。

シャル「ここは・・・」

先程統夜と戦っていた筈なのに何故ここにいるのか訳が分からなか

った。

悩んでも仕方が無いので白銀の光に照らされた草原へ歩き出した。

シャル「この光は・・・全てを癒しそうな光ね」

「・・・・・・・・」

しばらく草原を歩いていると背中から羽の形が機動ウイング状の五対十翼の翼が生え髪の色が白銀に輝いた銀髪、瞳の色が銀色で、白い騎士服を着た青年が空に浮いているのを見た。

シャル「（統夜？かしら？あつ・・・・いなくなつたわ・・・・）」

上を見上げた瞬間直ぐにいなくなった。

その後草原から抜けると真紅の洋館の前に着くと異様な光景になっていた。

血を抜かれ死んだ人間や竜等の生物が横たわっており、何かに挑んだのか無残な姿になった人や異形の死体が転がっていた。

シャル「（ここで一体何があつたの？）ッ！？」

「・・・・・・・・」

そう考えていると何かの気配に気付き洋館の屋根の上に紅のマントを羽織り髪が銀髪、瞳が真紅、瞳孔が縦になっている紳士服を着た男性が見降ろしていた。

シャルはあの男を見ると理解した。彼らを葬つたのはあの男だと・・・

シャル「魔力でも気力でも無い・・・・妖力なのかしら？凄い力・・・

」

そう口にした瞬間紳士服の男は消えた。

シャル「（この世界は統夜の間違いのないわね・・・エクストリームオーシャンシステムの影響でこうなったのかしら・・・）」

洋館の中に入り紳士服の男を探したが全くいなかった為最後である漆黒の洋風の城へ向った。

シャル「白銀が真ルシファー、真紅がヴァンパイア・・・でも雰囲気と容姿はおかしかったわね・・・」

二人の人物と場所を思い出し、容姿と雰囲気、力等が統夜の解放形態時と違っている事に疑問を感じていた。

シャル「まあいいわ・・・考えても意味は無いわ・・・」

漆黒の城が見えた時足に何かとぶつかった。下を見ると人間の首が転がっていた。

何かで斬られたのではなく引き千切られていたのだ。周りを見渡すと幾つもの戦士や異形等の死体が無残な形で横たわっていた。

シャル「（何か戦争でもあったのかしら？それにしても・・・心臓を貫き、内臓や脳が露出させる程までやるかしら？）」

幾つものの死体が転がっている道を歩き開いていた門を通り城の中へ入った。

シャル「（ほとんど血だらけね・・・）」

誰一人と出会う事無く王室の中へ入ると先程見た無残な死体が横た

わっていた。

シャル「（またかしら・・・）」

溜息をついた後玉座に座っている背中から真紅の蝙蝠状の五対十翼の翼を生やし、髪の色と瞳の色が漆黒の髪に血のような赤い瞳、蒼と黒の混合色の鎧を着た褐色肌の男に目が入った。

「・・・・・・・・」

男はオーラを出しながらシャルを睨み始めた。

シャル「（一睨みで・・・何てオーラを出すのかしら？魔王みたいなオーラを・・・）」

オーラを当てられた事によりシャルは理解した城の周りや自分がいる王室にいる戦士達を無残な形で葬ったのはこの男だと・・・

シャル「（あれって何の力なのかしら？）」

統夜の力を考えていると光に包まれ消えてしまった。

統夜はエクストリームオーシャンシステムの影響でとある研究施設の部屋にいた。

統夜「ここは・・・一体・・・」

違和感を感じたが冷静さを取り戻し場所を確認しながら部屋から出た瞬間、キヤアアアという少女の悲鳴が聞こえた。

部屋を確認した統夜は直ぐに分かった。これは違法実験をしている研究施設だと・・・
急いで研究を止めさせるよう悲鳴をあげている場所まで走った。
走る途中研究員を見掛けたが統夜の姿が見えないのか素通りしていた。

統夜「（これは・・・誰かの過去か？）」

叫び声が出た部屋に着き中に透き通る様に入った。

統夜「なっ・・・！？これは・・・まさか・・・」

中に入ると統夜は目を見開き驚愕な表情になっていた。

少女「止めて・・・」

何故なら実験を受けていたのは幼き頃のシャルだったのだから・・・
実験されているシャルを見て理解した・・・これはシャルの夢だと・・・

科学者「素晴らしい！！神の遺伝子と無限に増幅させる力、肉体変質、骨格金属化の力を得た被検体S・Nの存在は素晴らしい！！」

幼きシャルに実験をしていた科学者が狂気に満ちた笑みを浮かべ叫んでいた。

これを聞いていた統夜は不愉快になり科学者を睨みつけていた。

統夜「何故そのような事を奴等は平然と出来る！！ふざけるなあああああ！！！！！！」

非道な実験に怒りを露わにし叫んだ後光に包まれた。

白い空間にて統夜とシャルの二人がいた。

統夜「今は・・・エクストリームオーシャンシステムの影響で・・・」

シャル「そのようね・・・メサイアは人々の意識を感応させ・・・お互いを分かり合うものなのかしら？」

統夜「そうだな・・・メサイアライザー・・・DIES?とアドヴァンスメサイアの真の力なのかもしれん・・・」

シャル「デバイスの概念あるのかしらね・・・メサイアに・・・」
統夜「さあな・・・」

それぞれの深層世界と過去を見た二人は話し終え現実世界へ戻った。光が収まると統夜に変化が起きていた。

ファルコンウイングとは別に羽の形が機動ウイング状の五対十翼の翼が生え、紅のマントを羽織り、髪の色が蒼が掛った金髪、瞳が瞳が真紅、瞳孔が縦になっているヴァンパイアルシファーと異なっている形態に変化していた。

統夜の形態を見たシャルは驚愕していた。統夜の精神世界で見た二人の容姿に似ているのだから・・・

シャル「面白いわね」

右腕を大剣状に変化させて統夜に振るったが神速の速さで避けられ、AMソードで切り裂かれた。

その後二人は移動しながら所々で打ち合いを数度行い始めた。

シャル「（以前より速く・・・重くなってるわね）」

統夜「行くぜ・・・」

アドヴァンスフォンを取り出しEアイコンを押し始めた。

『Exceed Drive』

AMソードに凝縮された魔力を込めシャルに切り裂こうと駆け抜けた瞬間・・・

突然元の形態に戻り気を失った。エクストリームオーシャンシステムも解除されメサイアも待機状態へ戻った。

シャル「突然の覚醒は負担が大きかったわね・・・エクストリームオーシャンシステムはまだまだね・・・」

気を失った統夜を担いで地下訓練施設を後にした。

夢の中・・・

統夜「ここは・・・確か・・・」

真紅「そうだ・・・夢の中だ・・・」

統夜「真紅・・・」

真っ白な世界で戸惑いながらも真紅と再会した。
いきなり出てきたが・・・

真紅「これだけ教えておく・・・吸血鬼の力の覚醒は始まりにしか過ぎない・・・」

統夜「始まりだと？」

真紅が言っている言葉が理解できなかった。
まだ自分に秘密があるかのように・・・

真紅「お前には『真祖』の力が宿っている・・・他の吸血鬼と比べ物にならない程の強さを持つ・・・」

統夜「『真祖』・・・恐ろしいな・・・」

真紅「それがお前の中に眠っている・・・それ故にお前の吸血鬼と真ルシファーは不完全・・・」

統夜「・・・」

真紅「その覚醒はお前が誰かを守りたいという想いで応えてくれるだろう・・・むっ・・・奴がいる・・・」

統夜「奴？」

統夜が？マークを出していると気配を感じ後ろを見ると背中から真紅の蝙蝠状の五対十翼の翼を生やし、髪の色と瞳の色が漆黒の髪に血のような赤い瞳、蒼と黒の混合色の鎧を着た褐色肌の男がいた。

統夜「あいつは？」

真紅「お前の力に関連する奴だ・・・気を付ける・・・」
「・・・」

男は直ぐに消えた。

統夜「何だっただんだ？挨拶か？」

真紅「そのようだな・・・だが気を付ける・・・奴は・・・魔王だ・・・」

真紅がそれだけを言うと統夜は現実世界へ戻ってしまった。

統夜「ここは・・・」

シャル「私の部屋よ」

目が覚めるとシャルの部屋のベッドだった。

シャル「単刀直入に言うわ。貴方・・・さっきの光で何を見たの？」

真剣な表情で見つめていた。

誤魔化す訳にはいかないと思い素直に話し始めた。

統夜「幼い頃・・・シャルさんが実験されている過去を・・・」

シャル「それを見て貴方はどう思った？」

統夜「怒ったさ・・・あのような実験を平然とする奴等がいた事に・・・転生者でもやっていい事と悪い事はあるだろうに・・・」

悲しそうな表情で答えていた。

シャル「優しいのね。私からも話すわ・・・貴方の深層世界に行きたわ。一つ確認してもいいかしら？」

統夜「何だ？」

シャル「ヴァンパイアルシファーになっってみて」

統夜「何だっけ突然・・・」

シャル「いいから・・・」

目を覚ましたばかりだがシャルに言われるがままヴァンパイアルシファーになった。

背中から5対10翼の漆黒の翼が生え髪の色が蒼が掛った金髪、瞳の瞳孔が縦になり真紅に変化した姿に変化した。

これを見たシャルは・・・

シャル「（あの時の姿は一体・・・）もういいわよ」

統夜「ふう……」

ヴァンパイアルシファアを解除した。

シャル「貴方の種族って何かしら？」

統夜「あんまり知らんが……吸血鬼と墮天使の混血ぐらいしか分からん……まあ……元々は吸血鬼だが」

シャル「どういう意味？」

統夜「イグニスコピーっていうプロジェクトで墮天使の血……イグニスの血を入れられ実験を受けたのさ……」

シャル「イグニス……確かウータイの事件で行方不明になってる……その人物の血を入れられるなんてね……」

統夜「それに……あいつは生きている……あの事件が奴を変えた……仲間を失わせ……全ての運命を狂わせたセイラによって……」

シャル「あのヒステリック……そんな事をしていたのね」

セイラの仕業だと聞くと呆れ溜息をついた。

彼女の起こした悲劇によって人間全てを憎むキツカケを作ったのだから……

統夜「腐敗した管理局の根源は人間にあると考える人間抹殺を企てているだろう……」

シャル「貴方は違うのね……」

統夜「確かに人間は愚かだ……だが……それは一部だ……恐れる事もあるかもしれんが……何事も受け入れ分かり合う心掛けが必要なんだ。嫉妬で自分と違うやり方を邪悪と決め付け……聞き入れず……受け入れず……駄々をこね分かり合おうとしない事はやつちやいけないんだ……」

シャル「何事も受け入れる……か……話を戻すけど……貴方

の本当の種族ってもう一つあるんじゃないかしら？」

統夜「もう一つ・・・か・・・それは俺も知りたい・・・が・・・自分で見つけるよ」

シャル「その方がいいわよ」

統夜の答えにシャルは笑みを浮かべた。

統夜「俺もまだ自分が何者なのか分からない状態だから・・・」

シャル「もう一つ聞いていいかしら？」

統夜「何かな？」

シャル「貴方の蒼炎ってどんな力を持つの？」

興味があるのか蒼炎について質問をした。

統夜「蒼炎は特異魔力変換資質の一種であり・・・肉体を燃やすだけでなく・・・精神を深い闇の中に閉じ込めてしまい絶望の淵へと追いやり・・・最終的には精神を崩壊させ、崩壊した精神はその魂と共に蒼炎に飲み込まれてしまう」

シャル「恐ろしい能力を持った炎ね・・・」

統夜「セイラが廃人になった理由も分かるだろ？崩壊した魂を修正し戻さない限り元に戻らない・・・まあ・・・戻す気はサラサラないけどね」

シャル「正に蒼い絶望ね・・・」

統夜の蒼炎の能力を聞いたシャルは啞然としていた。

ただ肉体を燃やすだけでなく精神も攻撃し絶望の淵に叩き落とし崩壊させ、崩壊した精神は魂と共に蒼炎に飲み込まれるのだから・・・

統夜「まあ・・・肉体だけを燃やす事と精神攻撃、悪夢等を見せる等の切り替えが可能だ・・・」

シャル「器用な炎ね．．．最初から？」

統夜「最初からだな．．．制御するのに時間は掛ったが．．．肉体と精神を燃やし崩壊させ魂を飲み込ませるモードの蒼炎はおいそれと使わん．．．精神が強い奴は少しの効き目．．．悪夢を見る程度だ」

シャル「その炎って本来なら悪役が使うのが常識じゃない？」

蒼炎を使う人材を指摘され統夜は苦笑いした。

統夜「まあ．．．そうだな．．．力は人の心次第で善にもなり悪にもなる．．．蒼炎は闇の焰．．．歪んだ欲望と狂気等に塗れた者に絶望を与える為に使う．．．私利私欲で相手の精神を崩壊し肉体を燃やす．．．全開の蒼炎はやらん」

シャル「そういうものかしら？」

統夜「絶望は弱者を陥れる為にあるものじゃない．．．欲望に塗れ．．．歪んだ存在を陥れる為にあるものだ．．．」

シャル「．．．．．」

統夜の話をしている内に興味を持ち出した。
彼が行う絶望に．．．

シャル「貴方の行う絶望．．．面白いわね．．．力の無い人からは希望になる．．．」

統夜「闇からも善は生まれる．．．光から悪が生まれるようにな．．．」

シャル「貴方自身にも興味を持ち出したわ。強さや人柄もね．．．」

それを聞いた瞬間統夜は冷や汗を大量に流し始めた。

シャル「どうかしたの？」

統夜「何でも無いよ。続けて……」

シャル「まあ……いいわ……許可無く私の過去を見た責任を取ってもらうわ」

統夜「そうだよな……エクストリームオーシャンシステムで過去を見てしまったから……」

シャル「私も仲間に入れて……」

統夜「何の？」

冷や汗はまだ流れていた。

返答次第では統夜の死亡フラグが来るかもしれないのだから……これって以前からか……

シャル「貴方のラバーズよ。貴方って面白そうだから」

統夜「そ、ソウデスカ……」

片言になっておりベッドから抜けてドアをノブを捻り開け出ようとした瞬間……

シャルに押し倒されてしまった。

シャル「何で片言なのかしら？それに……」

その先を言おうとした瞬間ドアが完全に開きその前には……

はやて「……」

笑顔だが黒いオーラを纏っているはやてがいた。

はやてを見て統夜は青ざめた。

統夜「あ、あははは……」

シャル「……来てしまったわね……」

流石のシャルもはやての黒いオーラに冷や汗を掻いていた。

はやて「統夜・・・シャルさんと何をしてるんや？怒ってないから言うてみ」

統夜「あはは・・・」

はやて「私はフラグを立てたり変な事してる事に関して怒ってないから・・・言うて・・・」

統夜「いや・・・完全怒ってるよね！？俺は押し倒されてんの！？」
はやて「怒ってないで・・・素直に言うて・・・優しくしてあげるから・・・」

統夜「実は・・・シャルさんが俺に興味を持ちラバーズの仲間入りを希望しました・・・以上です」

はやて「そうか・・・」

はやては笑顔のまま素直に答えた統夜の襟を掴み『お話し』を始めた。

『お話し』の最中に統夜の悲鳴と殴る音と蹴る音が聞こえて来たのは言うまでも無かった。

本拠地寮のリビングにて・・・

雪蓮「統夜の悲鳴が聞こえてきたわね・・・」

冥琳「ああ・・・あの男は凄いのか・・・分からなくなってきたよ・・・雪蓮は随分と余裕だけど・・・」

雪蓮と冥琳の二人は静かにお酒を飲んでいた。

雪蓮「文字通り余裕よ。こう見えて私仲良くなれるスキルは高い方

だから」

冥琳「お前と同じ年は相川とノイシュバンシュタインぐらいなものだ・・・飲み友達も増えて助かる」

雪蓮「残りは未成年だからね・・・弄り甲斐があるのは文乃と優子ね。素直じゃない所が面白い」

冥琳「あまり弄ってやるなよ？」

雪蓮「分かってるわよ」

文乃が住んでいる芹沢教会

文乃「（ゾクッ！）クシュンッ！・・・誰かが噂をしているのかしら？悪寒もしたけど・・・」

シャワーを浴びている時に悪寒がクシャミをしていた。

木下家のリビング

優子「（ゾクッ！）クシュンッ！」

秀吉「姉上？」

優子「誰かが噂してんのよ・・・悪寒もしたけど・・・」

秀吉「大方誰かが噂しておるやもしれんのお・・・」

優子「それもそうね・・・」

リビングでテレビを見ていた優子は文乃と同様、悪寒が来たと同時にクシャミをした。

『お話し』を終えた統夜とはやての二人はシャルの部屋に入った。

はやて「そういう事があつたんか．．．で．．．フォーチュンエターナルとフォーチュンブラスター、パーシヴァル、ジャツジナイトの四つは一つとなりバリアジャケット型ネオアーマードデバイスのアドヴァンスメサイアに改造されたんやな？」

統夜「ああ。普段の性能はエターナルブラスターNに匹敵する性能だが．．．真の力を解放したメサイアは未知数だ．．．」

シャル「アドヴァンスライザーとドッキングしないとDIEES？の不安定は解消されエクストリームオーシャンシステムが使える．．．それを使うと不思議な現象が起きるのが分かったわ」

はやて「デバイスで不思議な現象なあ．．．ロストログアみたいやな．．．どんなのや？」

シャル「精神の共鳴．．．人々の意識を感応させ分かり合う為のものかな。普通の魔導師じゃ扱えない代物だけは分かるわ」

はやて「無限の可能性を秘めてるなあ．．．」

エクストリームオーシャンシステムを聞いたはやては驚いていた。

不思議な現象を起こす事が出来るのだから．．．

統夜「次の話題に入るか．．．はやて、シャルさん．．．『黒騎士ネクサス』を知っているか？」

はやて「確かセイントクルセイダーズに参与している研究所を破壊し研究員を生かしたままにしている奴やろ？」

統夜「ああ」

シャル「疑問が一つだけあるわね．．．」

統夜「黒騎士ネクサスもセイントクルセイダーズを恨んでいるのなら本拠地に来る筈だ．．．」

はやて「せやな．．．でもスペースバンガード無いから無理やろ．．．」

シャル「流石の黒騎士も戦艦が無いから無理よね」

統夜「それもそうだな・・・」

三人は『黒騎士ネクサス』の事について話していた。

セイントクルセイダーズに参与している研究所を破壊している『黒騎士ネクサス』とは一体何者なのか？

その頃とある次元世界では・・・

「・・・・・・・・」

上に紅いシャツを着て、下に漆黒の長ズボンを穿き、その上から背中に白銀の狼のエンブレムが刻まれた半袖ロングコートを羽織り、首から銀の十字架のネックレスを下げ、両手に黒い生地フィンガーレスグローブを着け、両足にコンバットブーツを履き、右手首に特殊プレスレット、左腕にリストウォッチ型PDAを装着した背中まで伸ばした黒髪と右が琥珀、左が紫色のオッドアイをした青年が研究所を破壊し終えた所だった。

職員「お、お前は・・・『黒騎士ネクサス』！！」

「生きて自分の罪を見つめて償え・・・」

研究所を破壊した青年は研究所にいた職員達にそれだけを言い残し去った。

「（天川統夜・・・イグニス・・・お前達のような存在が俺のような実験台にされる人物が絶えない・・・）」

去る途中で青年は統夜とイグニスに対し憎しみがあるかのように心の中で呟いていた。

『黒騎士ネクサス』とは一体何者なのか・・・何故統夜とイグニスに対し憎しみがあるのか分からない・・・

とある次元世界の宿にて・・・

「セントクルセイダースを壊滅した蒼穹の騎士団は興味深いな。鍛え甲斐がありそんな面子ばかりだ・・・」

腰まである銀髪に金色の瞳をしDOG DAYSのレオンの戦闘服を着た女性が蒼穹の騎士団に関する情報を閲覧していた。

「そうね、蒼穹の死神に紅蓮の猛虎、瑠璃の軍神、マイティ真拳の後継者、気力使い、超力戦士、疾風の流星・・・特殊な戦士が集まっている組織は珍しいわ」

腰まである黒髪をポニーテールにし、赤い瞳をしハイスクールD×Dの女子制服を着た女性は銀髪の女性と一緒に情報を閲覧し妖しげな笑みを浮かべていた。

自分達を出会える日を楽しみにしながら・・・

「そうだな・・・元管理局のトリプルエース、守護騎士ヴォルケンリッター、白虎三姉妹、紅の美周郎、紅の死神、蒼き霸王、王佐の策師もいる・・・」

「有名な人達ばかりじゃない・・・」

銀髪の女性が述べた名前により蒼穹の騎士団に興味を持ち始めた。

尚白虎三姉妹は雪蓮達三姉妹、紅の美周郎は冥琳、紅の死神は咲夜、蒼き霸王は華琳、王佐の策師は桂花の事である。

「いずれ会えるだろう・・・」

銀髪の女性は笑みを浮かべ窓から夜空を見上げた。

強き者が多い蒼穹の騎士団と戦える日を楽しみにしながら・・・
この二人が一体何者なのかはいずれ分かる・・・

第五十三話 『ダブルインフィニティーエナジーシステム』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

たけし「わぁ・・・メサイアって00のダブルオーライザーだな・・・
・最後に辺って新たなキャラが出てくるブラフ？」

たけし「統夜さんのクラスに三人が転校してきた一人は蓮華さん、
二人は・・・見掛けない顔だね・・・」

たけし「俺達蒼穹の騎士団が有名って照れるよな・・・嬉しい限り
だぜ」

たけし「次回は『転校生がレオ閣下?!ガレット獅子団領は大丈夫
なの?』テイクオフ」

デバイス設定 8 (前書き)

アドヴァンスメサイアの設定です。

デバイス設定8

デバイス：アドヴァンスメサイア（ネオアーマードデバイス）

形状：魔道騎士服

待機状態：タッチパネル式の蒼い携帯電話、蒼いバツクル装備、寶石が備わった蒼いフィンガーレスグローブ、5枚のカード、白と黒の二丁の拳銃

搭載システム：DIE S?、ドルイドシステム、ECS、MFS、MBS、FLS、オートムーブシステム、アドヴァンスガイストシステム、プリズムエフェクトシステム、ウエポンドライバーシステム、ウエボンサモンシステム、マナペンタクルシステム、ストライクブレイクシステム、エンペラーシステム、エナジーオーラシステム、オーラコードシステム、エナジーインパクトシステム、ドライブカードシステム、ウィザードトレースシステム、エクストリームオーシャンシステム、エクシードドライブシステム搭載

備考：フォーチュンエンターナルとフォーチュンブラスター、パーシヴァル、ジャツジナイトを一つにしたバリアジャケット型ネオアーマードデバイス。
統夜の五気順応能力に対応しており五気の攻撃や防御が可能になっている。

標準装備は頭部にドルイドシステムに対応したバイザー内蔵型ヘッドギア「メサイアアイズ」

高性能なタッチパネル式の蒼い携帯電話「アドヴァンスフォン」

カードを装填出来る様に開閉式の装填口がある蒼いバツクル装備「アドヴァンスバツクル」

装着時は腰に当てることで収納されていたベルト部が腰に巻き付く仕様になっている。持ち運ぶ事や必要に応じて装着する手法を採用している。

その時に両腰の左右にハードポイントがありアドヴァンスフューラーをセットする事が出来る。

両手には手の甲の部分に蒼（右）と金（左）の丸い宝石を備えた蒼い生地フィンガーレスグローブ「エナジークリスタル」

ちなみにこの宝石はDIEESのコアユニットで、蒼はT、真紅はOとなっている。

ドライバー五体を粒子分解してカードとして再構築し隼とサイ、鷲龍、戦闘機が描かれた五枚のカード「ドライブカード」

待機状態時でも使用を可能にした白のリボルバー式の拳銃と黒のマガジン式の拳銃の組み合わせの双銃「アドヴァンスフューラー」

アドヴァンスフューラーは待機状態でもアドヴァンスバックルにウエポンサモンシステムを応用した特別な術式が編み込まれており収納する事が可能。

バリアジャケット姿は上には蒼いパーカーを着て下は黒い長ズボンを選び、七ヶ所（胸部、両肩、両腕、両足）に真紅のプロテクターを装備したものになる。

起動方法はまずエナジークリスタルを両手、アドヴァンスバックルを腰に装着しベルト部にある左右のハードポイントにアドヴァンスフューラーをセット、アドヴァンスフォンに起動コード「0000」を入力してENTERを押すと「STANDING BY」という音声が響いた後、アドヴァンスバックルのバックル部にアドヴァンスフォンをセットする事により「COMPLETE」の音声が響いてバリアジャケットが展開される仕組みになっている。

「DIEES?」とは二基のIEESを同時に搭載したものでそれぞれ独立した機関となっており、同時に稼働させながら別々の用途で使われる様に調整されている。ちなみに「D」は「ダブル」の略である。

尚DIE S?の組み合わせはOとTの組み合わせであり、DIE Sの組み合わせはOとBの組み合わせである。

「ウエポンドライバーシステム」とはセイクリッドファングのデータにあるウエポンドライバーシステムを参考にしておりドライバカードから実体化したドライバを武器に変化させるシステム。

「エナジーオーラシステム」とはエナジークリスタル専用のシステムで、DIE S?のエネルギーをオーラ状に宝石から具現化させる事が可能で攻防にも転用出来る。

「オーラコードシステム」とはエナジーオーラシステムと連動するシステムで、オーラ状に具現化したエネルギーを利用して武器にエネルギーを送り込んだり、様々な形状の結晶等を作り出す事が出来る。

「エナジーインパクトシステム」とはエナジーオーラシステムと連動するシステムで、オーラ状のエネルギーを掌に集束して打撃や砲撃等の攻撃手段としての使用が可能である。

「ドライブカードシステム」とはドライブカードをドライバに実体化させるシステムでオートムーブシステムを利用する事でドライバに指示を出せる様になっている。

「オートムーブシステム」を搭載しておりドライブカードから実体化したドライバを自由自在に操る為にある。

「エンペラーシステム」を搭載しており勝利する為に取るべき行動を予め使用者に見せるシステム。このシステムを使用するにはかなりの精神力が必要で下手をすれば、最悪、精神の負荷に耐え切れなかった自分自身の発狂や廃人化あるいは死亡といった事態をも招きかねないものになっている。

「ウィザードトレースシステム」とは使用者自身の持つ魔法の技を武装として組み込むシステム。

「エクストリームオーシャンシステム」とはフォーチュンオーシャンシステムをDIE S?専用に強化されたシステムでバリアジャケツト及びドライバの装甲が淡い翠色の光に包まれた蒼に変化し基

本性能が爆発的にアップする。

但しメサイアに搭載されているDIE S?の制御が不安定である為オーバーロードする恐れがあるので無闇に使う事は出来ない。

「エクシードドライブシステム」とはアドヴァンスフォンの画面にあるEのアイコンを押す事により全ての武装にIE Sの魔力エネルギーを圧縮してより強力な必殺技を放つことが出来るシステムでエクストリームオーシャンシステムと連動する事も可能。管制人格は存在しない。

デバイス：アドヴァンスファルコン

形状：真紅の隼

備考：フォーチュンプラスターをベースに改良された隼型ドライバーで、普段はドライブカードの一枚となっている。

他のドライバーを装備している場合は使えないが、手持ち型の装備なら使用する事が可能である。

武装は頭部にバイザー搭載されたジェット型ヘルメット「ファルコンバイザー」

ドライバー時は頭部を形成する。

背部に機動力を大幅に向上させる為に魔力スラスター一基を搭載した一対二翼の大型ウイング型バックパック装備「ファルコンウイング」

大型パーツの内部に小型ウイングが収納されており、展開すると合計10枚のウイングとなり、小型ウイング内の小型魔力スラスターからは光の翼を発生する。

ドライバー時は翼を形成する。

プラスターロッドを改良・発展させた左腕の部分には盾の先に連結剣状のヒートロッドが仕込まれ攻防に転用出来るブレイズルミナス発生装置と陽電子リフレクター発生装置がある特殊盾「ファルコンシエル」

ドライバー時は腹を形成する。

近・中距離戦闘に特化した七本の剣型装備「アドヴァンスセブン」
フォーチュンザンバーを改良・発展させたファルコンウイングのウ
イング部を鞘代わりに収めている一对の片刃の大剣「AMザンバー」
収納時に刃の部分が剥き出しになった状態となり、飛行中や突撃時
はすれ違い様に目標を切り裂くことも可能

AMザンバーの柄の部分合体させた両刃剣「AMロングザンバー」
AMザンバーを並列接続させた巨大剣「AMメガザンバー」

左腰にはブラスターロングを改良・発展させた刀身を軸回転させグ
リップの角度を変えることでライフルモードに変形することが可能
な長剣「AMロングブレイド」

ドライバー時は胴体の右側にコネクトされる。

右腰にはブラスターシヨートを改良・発展させた刀身の強度を上げ、
エネルギーを刀身に上乘せして鞭の様に扱う事も可能な短剣「AM
シヨートブレイド」

ドライバー時は胴体の左側にコネクトされる。

両肩のプロテクターにはネオフラッシュエッジを改良・発展させた
ダガーとソード、ブーメランの切り替えが可能なグリップ「AME
ツジ」

ドライバー時は足を形成する。

右腕にはブラスターソードを改良した小型シールド、折畳式刀剣、
銃口が3連式の魔力ライフルを組み合わせた複合装備「AMソード」
ドライバー時は胴体と尾を形成する。

ウエポンドドライバー時はアドヴァンスセブンがAMソードを中心に
合体し巨大な刀身になりファルコンウイングが鏢、残りのパーツは
柄になる巨大剣に変形合体する「ファルコンブレードブレイカー」
管制人格はフォーチュンブラスターの管制人格が使われている。

デバイス：アドヴァンスライノス

形状：緋色のサイ

備考：パーシヴァルをベースに改良したサイ型ドライバーで普段は

ドライブカードの一枚となっている。

他のドライバーを装備している場合は使えないが、手持ち型の装備なら使用する事が可能である。

武装はバイザー搭載型ジェット型ヘルメット「ライノスバイザー」
ライノスバイザーのヘルメット部分に刃状の角「ライノスホーン」
右腕にブレイズドリルを改良・発展させ貫通力と突破力を強化しブレイズルミナス発生装置があり装着式のドリル「ライノススパイラル」

使わない時は右肩にマウントされるか封印魔法陣の中へ収納される。
ドライバー時は頭部を形成する。

背部に機動力を大幅に向上させる為に折り畳み式の一对二翼のリフターがあり大型魔力ブースター1基と小型魔力ブースター2基、ウイングの内側に二つのウエポンラックを搭載したりフター型バックパック装備「ライノスウイング」

ライノスウイングの内側にあるホーリーカリバーを改良・発展させた二振りの刀身が緋色でエネルギーフィールド発生装置がある片刃の大剣「ライノスカリバー」

左腕に陽電子リフレクターとブレイズルミナスを一つにしたブレイズリフレクター発生装置があり先端部に輻射波動機構が備わった鋏に変形する開閉構造を持つ高硬度な複合兵装「ライノスシエル」

ライノスシエルに収納されているエネルギー状の刃を発生させる大鎌「ライノスサイズ」

胴体と腹、尻尾を形成する。

両肩と両脚の脛から衝撃波とインパルスシャインを放つ事が出来るブースター付の四角形の形をしたアンカーを放つ「インパルスハーケン」

ドライバー時は前脚と後脚を形成する。

ウエポンドライバー時はライノススパイラルがサイの頭がコネクトされた巨大ドリルに変形合体する「ライノススパイラルドリル」
管制人格はパーシヴアルの管制人格が使われている。

デバイス：アドヴァンスイーグル

形状：白い鷲

備考：フォーチュンエンターナルをベースに改良された鷲型ドライバーで普段はドライバーカードの一枚となっている。

他のドライバーを装備している場合は使えないが、手持ち型の装備なら使用する事が可能である。

武装はバイザー搭載型ジェット型ヘルメット「イーグルバイザー」
ドライバー時は頭部を形成する。

フォーチュンウイングを改良・発展させ、機動力を大幅に向上させる為に魔力スラスター一基を搭載し内側に四基の大型フライヤーラックが搭載されている20翼のウイング型バックパック装備「イーグルウイング」

イーグルウイングのフライヤーラックから射出される砲身が二門ずつあり破壊力がある両肩から発射する時に使われる砲台兼大型フライヤー「AMバスタードラグーン」

ドライバー時は翼を形成する。

イーグルウイングからネオドラグーンを改良・発展させた一基に二門の砲台があり攻撃力及び連射性を大幅に上げ、小型スラスターによる機動力強化を施した強化型フライヤー「AMドラグーン」

AMドラグーンを射出したイーグルウイングから蒼い光のエネルギーが放出される「AMネオフェザー」

ドライバー時は羽根を形成する。

フォーチュンランチャーを改良・発展させた魔力エネルギーを発射するEモードと実弾を発射するBモード、輻射波動砲を発射するMモード、最大出力のXモードの切り替えが可能なランチャー「AMランチャー」

XモードのAMランチャーの上下左右にAMバスタードラグーンとコネクトするハードポイントが装着されEXモードになる。

ドライバー時は翼の右側にコネクトされる。使わない時は左肩にマ

ウントするか封印魔法陣の中に収納する事が可能。

ナイトシューターを改良・発展させた銃身が上下に二つあり拡散構造相転移砲とスキュラ、輻射波動砲、ハドロン砲の四つを切り替えで放つ事が出来る大型ライフル「AMブラスター」

エターナルシューターを改良・発展させた銃身が上下に二つあり精密射撃と連射に特化した大型ライフル「AMヴァリス」

ドライバー時は翼の左側にコネクトされる。使わない時は右肩にマウントするか封印魔法陣の中に収納する事が可能。

胸部に二つの砲身がある拡散構造相転移砲とスーパークリドゥスの切り替えと二つ同時発射が可能なコア「AMコア」

両腰の部分にスーパークスフィアスを改良・発展させた砲身が上下に銃身が二つある強化型レールガン「AMクスフィアス」

ドライバー時は胴体を形成する。

腰裏に2基と両膝、両脛、両肩に装備されている防御力を大幅に向上させる為、攻撃手段を省いて計8基全てに小型ブレイズルミナス発生装置を内蔵させた防御専門フライヤー「ディフェンドドラグーン」

ドライバー時は足と尾を形成する。

ウエポンドライバー時はイーグルウイングと残りの武装とパーツが弓の形に変化させAMバスタードラグーンとAMランチャー、AMブラスター、AMヴァリスを変形合体し精密射撃に特化した巨大ボーンランチャーになる「イーグルバスターボーンガン」

管制人格はフォーチュンエターナルの管制人格が使われている。

デバイス：アドヴァンスドラゴン

形状：黒い西洋龍

備考：ジャツジナイトをベースに改良した龍型ドライバーで、普段はドライブカードの一枚となっている。

他のドライバーを装備している場合は使えないが、手持ち型の装備なら使用する事が可能である。

武装は頭部にバイザー搭載型ジェット型ヘルメット「ドラグバイザー」

背部にジャッジユニットを改良・発展させた攻撃力と機動力を大幅に向上させる為に魔力ブースター二基を搭載し、二つある高出力連射式魔力キャノン砲と片方8門ずつの魔力ミサイルを内蔵した武装パックを装備した一対二翼の大型ウイング型バックパック装備「ドラグアグリッサ」と片方8門の魔力ミサイルパック「ホーミングシユーター」

ドラグアグリッサにあるジャッジブラスターを改良・発展させた高出力連射式魔力キャノン砲「ドラグキャノン」

ドライバー時は胴体と翼を形成する。

ブラスタースナイパーを改良・発展させた精密狙撃能力を上げ高出力と低出力の切り替えが可能なスナイパーライフル「ドラグスナイパー」

ドライバー時は胴体の上にコネクトされる。

ナイトカリバーを改良・発展させた近・中距離迎撃用サーベル型連結剣「テイルサーベル」

ドライバー時は尻尾を形成する。

防御力を大幅に向上させる為に強度を高め、ブレイズルミナス発生装置と陽電子リフレクター発生装置を内蔵し、小型フライヤー8基と二門の小型ビーム砲が備わっている複合兵装「ドラグシエル」

ドラグシエルから射出されビームの刃で攻撃する8基の小型アタックフライヤー「クロービット」

両脚にプラズマゼットブレイドを強化した「ハイパーゼットブレイド」

ドライバー時は腹と足を形成する。

両腕にハーケンブースターを改良しプラズマフィールドを張る事が出来る三つ爪クロー型のブースター付のアンカーが付いている籠手「ドラグアームズ」

両脚の側面に機動性を大幅に向上させるタイヤ型チャクラム「スマ

ツシユホイール」

ドライバー時は手を形成する。

ウエポンドライバー時は銃身がドラグバスターキャノンとドラグスナイパーが三つの砲身として、残りのパーツと武装が巨大バスターキャノンに変形合体する「ドラグバスターキャノン」
管制人格はジャツジナイトの管制人格が使われている。

デバイス：アドヴァンススライザー

備考：アドヴァンスメサイア専用として新しく開発された戦闘機型ドライバーで、普段はドライブカードの一枚となっている。

他のドライバーと違い、他のドライバーが装備状態でもそのまま追加装備や単体での装備も可能である。

このドライバーは本体、ライトウイング、レフトウイング、武装の四つのパーツで構成されている。

これを装備する事によりメサイアのDIEES?を安定させ、通常よりも高い性能を引き出せる様になっている。装着時にエクストリームオーシャンシステムが使用可能になる。

装備によつて、装着される場所は異なるが機能は変わらない。

武装は本体にある二門の超小型魔力バルカン砲「スピリットバルカン」レフト及びライトウイングに10門ずつ内臓された小型魔力ミサイル「リトルスピリットスター」レフト及びライトウイングを利用して発動する「ライザーソード」の三つである。

上記の内、二つの武装は他の武装と異なりコンデンサーを設けられており、エネルギーはコンデンサー内に貯蔵されるようになってい
るが、ライザーソードを使用する場合は高密度のエネルギーを使わねばならない上、装備状態でしか使えない。

また、独立システムとして「ライザーシステム」を搭載している。

「ライザーシステム」とは、アドヴァンススライザー専用
に独立して搭載されたシステムで、メサイアに装備される事でドルイドシステムと連動し、情報分析やDIEES?の出力調整を人工知能が行う事

で統夜に負担を掛けないようにする他、戦闘中の状況をリアルタイムで統夜に伝える等の多目的機能を有している。

管制人格はないが、代わりに人工知能を搭載されており、簡単な言葉程度なら話せる。

第五十四話 『転校生がレオ閣下?!ガレット獅子団領は大丈夫なの?』

(前書き

恭也「くそっ!」

統夜「恭也さん・・・諦めたらどうすか?てか・・・シスコンを卒業しないと黒神さんに殺されちゃうよ?」

黒神さんの名前を出した瞬間顔を青ざめ震えだした。

統夜「(一体何をされたんだろ・・・あの人のお陰で作者はペンドラゴブレイドと極悪兵器のネタが入ったんだから・・・)」

なのは「にはは・・・HERO'S EPISODE第五十四話
始まるよ」

第五十四話 『転校生がレオ閣下?!ガレット獅子団領は大丈夫なの?』

第五十四話 『転校生がレオ閣下?!ガレット獅子団領は大丈夫なの?』

統夜がビリーからメサイアの説明をされている頃・・・

明久「一人で帰るのは久し振りかな」

学校を終え一人で帰っていた。

明久「セントクルセイダーズを倒し・・・日常を過ごしているっていいよね」

馬鹿が寄り道を満喫している時に・・・

「止めてください!!」

チンピラ1「いいじゃんか」

チンピラ2「俺らと一緒に遊ぼうぜ」

腰まである銀髪に空色の瞳をした少し幼さを残した顔立ちをした小柄の少女がチンピラ達にナンパをされていた。

明久「(ああいう奴らって平和になってもいるんだね・・・)」

ナンパをしているチンピラ達に対して呆れながらナンパされている少女の所へ歩き始めた。

明久「アンタら嫌がっている相手に対して恥ずかしく無いの?」

チンピラ1「ああん？何だデメエは？」

チンピラ2「おいおい・・・人族じゃねえか」

チンピラ達に声を掛けた明久が人族と分かって甘く見ていた。
相手は魔族のチンピラ達だったのだ。

明久「（魔族の二人か・・・魔法が使えるからって甘く見てるね）」

魔族のチンピラを見て溜息をついていた。

自分達は魔法が使えるという理由で甘く見ているからだ。

明久「彼女が嫌がつてるから止めたら？」

チンピラ1「お前・・・この娘の何？」

チンピラ2「関係無い奴はすっこんでろ！！」

明久「関係無いけど・・・お前達のような馬鹿はとっとお引き取りを」

明久の言葉に魔族のチンピラ達はキレて魔力弾を両手に収束し始めた。

発射させる前に腹部にボディブロー、もう一人に顎に目掛けてアッパ―して魔力弾は露散し発射される事は無かった。

明久「まだやる？」

明久の鋭い睨みにやられたチンピラ達は・・・

チンピラ達「す、すいやせんでしたぁーっ！！！！」

急いで退散した。

明久「全く・・・大丈夫だった？」

少女に声を掛ける。

「は、はい。助けられてありがとうございます・・・」

明久「ここ・・・英都ははじめて？」

「はい。私が住む家へ行く途中で先程の人達に絡まれて・・・ここ何ですけど・・・」

明久「なるほど・・・ここか・・・大丈夫だよ」

少女を目的地まで案内を始めた。

時間は掛ったが何とか目的地である少女の住む家であるマンションの下まで辿り着いた。

明久「ここでいいかな？」

「はい。本当にありがとうございます」

明久「気にしないで。困った時はお互い様って言うから・・・」

「あの・・・貴方は文月バーベナ学園の生徒ですか？」

明久が着ている制服を見て問い掛けた。

明久「うん。そうだけど。どうかしたのかな？」

「実は私・・・明日から文月バーベナ学園に転入するのです」

明久「だから・・・迷ってたんだね・・・また会えるかもしれないね」

少女が迷っていた理由を理解していた。

「そうですね」

明久「僕はこれで・・・それじゃ・・・」

「はい。お気を付けて」

明久は少女と別れて帰路へ着いた。

翌朝の学園の教室にて

統夜「こいつはやっぱり高性能だ」

蒼いタッチパネル式の携帯電話であるアドヴァンスフォンを操作していた。

達哉「それがアドヴァンスメサイアか・・・」

遊輔「しかもDIEES搭載型」

康太「・・・規格外・・・」

統夜「まあ・・・バリアジャケット型ネオアーマードデバイスで規格外の性能を誇る・・・セイクリッドファングとサーディオンの連携も出来る」

アドヴァンスメサイアの説明を聞いた達哉と遊輔、康太は驚きを隠せずにいた。

華琳「ほんちようにしゅぎよいわね（訳：本当に凄いわね）」

統夜の頭上にデフォルメ化した華琳がいた。

達哉「ちよつと待て！！何でいるの?!」

華琳を指差してツツコミを入れた。

統夜「連れて来た。霸王様も暇なんだよ」

遊輔「統夜のパートナーだからしょうがないだろ」

達哉「まあ・・・そういう事にしておく・・・」

統夜と遊輔の言い分に頭を右手で当てながら納得した。

統夜「そっぴゃ・・・明久は遅いな・・・」

遊輔「寝坊じゃないのか？」

明久について話をしようとした時扉が開き、明久本人が入って来た。

統夜「おっい・・・ギリギリだぞ」

明久「ごめんごめん」

統夜「まあいいけどさ・・・康太、今日は何かい情報無いか？」

康太「・・・転校生が来る・・・しかも三人・・・」

康太からの情報を聞いた統夜は冷や汗を掻いた。

何故か嫌な予感しか感じないからだ。

明久「珍しいよね」

統夜「まあ・・・何とかなるだろう」

遊輔「そうだな」

予鈴が鳴り統夜達は席に着き担任である高橋女史が入って来た。

高橋女史「今日から転校生が三人来ます。入って来てください」

高橋女史に言われて入って来たのは・・・

蓮華「失礼します」

最初に蓮華が入って来て・・・

「失礼します」

統夜、はやて、文乃、優子、秀吉「！！？」

二人目の転校生が入って来た瞬間、統夜とはやて、文乃、優子、秀吉の五人は驚きを隠せずにはいた。

「失礼します」

明久「（あ、あの娘は・・・）」

男子一同「うおおおおお！！！！！！」

三人目の転校生は明久がナンパから助け道案内した少女に驚愕していた。

三人の転校生が来た事により男子一同は騒ぎ始めた。

高橋女史「静かに！！名前をお願いします」

騒ぐ男子生徒を一喝させ蓮華達に名乗るよう促した。

蓮華「蓮華と言います。宜しくお願いします」

蓮華は名前を名乗った後頭をぺこりと下げた。

メアリ「古手川メアリです。宜しくお願いします」

赤みがかった銀色の髪を腰まで伸ばしていて紫色の瞳をした綺麗な顔立ちをした少女が名前を名乗り蓮華と同じように頭をぺこりと下げた。

早苗「成田早苗です。宜しく願いします」

昨日、明久が助けた少女が名前を名乗り先程の二人と同じように頭をぺこりと下げた。

高橋女史「転校生に対して質問はありますか？」

質問する機会を生徒達に与えた。

興味があるのか手を挙げている人が多かった。

ダイチ「はいはい!!!」

高橋女史「はい。ダイチ君」

手を挙げていたダイチを指名した。

ダイチ「古手川さんは閣下と呼ばれていましたか？」

メアリ「それは無いわよ。てか閣下って何？」

ダイチの質問が分からなかったのか問い掛けた。

ダイチ「閣下がDOG DAYSに出てくるレオンミシエリ・ガレット・デ・ロワと同じ声だからだ」

メアリ「私は古手川メアリ・・・閣下じゃないわよ!!!」

ダイチ「声が似てるから・・・それが嫌なら・・・グラマラスシャリーならぬグラマラスメアリはどう？」

メアリ「なに？そのグラマラスメアリって!?!それって私の身体を見て言ってるよね?!」

ニヤニヤして見ているダイチに対し怒鳴ってツツコンだ。

メアリ「何！？ガレット獅子団って？てか私その国の国王じゃないし！？」

瑞希の質問に対しツッコミを入れていた。

高橋女史「（感化されてるのかしら・・・）これで最後にします」

統夜「はい」

高橋女史「はい。天川君」

統夜「よっしゃあー！！」

最後の質問を任された統夜はテンションを上げて喜んでいた。

明久の方へ顔を向け黒い笑みを浮かべた。

統夜の黒い笑みを浮かべた顔を見た明久は青ざめ始めた。嫌な予感しか感じないからだ。

統夜「そんじゃ成田早苗さんに質問・・・好きな人・・・あるいは気になる人はいますか？」

統夜の質問に早苗は明久の方へ顔を向け赤らめ・・・

早苗「好きで気になっている人はいます・・・あちらの方です／＼」

明久「えっ・・・僕！？」

男子一同（統夜と遊輔、達哉、ダイチ、明久、康太、雄二以外）「よおおおー！！し！！吉井を殺す計画を立てるぞおおおー！！！！」

雄二「明久・・・お前・・・」

康太「・・・これは何とも言えない・・・」

瑞希「明久君・・・この後お話ししましょうね」

美波「どんな言い訳をするか楽しみね」

早苗が明久を指した瞬間男子達は嫉妬に狂い訳の分からん計画を立て始め、雄二と康太はジト目で明久に対し呆れていた。瑞希と美波は黒いオーラを出し明久を睨んでいた。質問をしこのような現状にした張本人である統夜は大笑いしていた。早苗は男子生徒達に対し不愉快を露わにしジト目で睨んでいたのは言うまでも無い。

明久「(統夜・・・このままでは済まさない!!)」
メアリ「(変わらないわね・・・そして・・・久し振りね・・・統夜)」

騒ぎの最中にメアリは大笑いしている統夜を見て笑みを浮かべていた。

特別な感情があるかのように・・・

高橋女史「(やはりこうなってしまうか・・・)空いている席に座ってください」

三人に座るように指示し授業を始めた。

一時間目の授業を終え休み時間になった後統夜と明久は廊下を走って逃亡しながらバトルを始めた。

蓮華「面白いクラスね」

なのは「にやはは・・・そうだね」

蓮華「これからもよろしくね。なのは」

なのは「にやはは・・・これからもよろしくなの。蓮華ちゃん」

休み時間の中蓮華となのはは握手をしていた。
お互いギリギリギリと力強く握っていた。

蓮華「(ファーストは私よ)」

なのは「(にやははは！そうはさせないよ！！)」

二人の表情は笑顔だが目が笑っていない。内心では誰が一番になるかという事を考えていた。

鮮華「お久しぶりです。メアリさん」

はやて「久しぶりやな」メアリちゃん」

文乃「元気にしてた？」

優子「本当に久しぶりね」

秀吉「また会えたの」

メアリ「ええ。久しぶりね。鮮華、はやて、文乃、優子、秀吉」

はやて「積もる話はお昼で詳しく話すから」

幼馴染達と再会し話し合っていた。

千世「新たな女出現？」

希「にやあ・・・大きい・・・」

カナ「流石閣下・・・というべきかな？」

エステル「閣下って・・・はあ・・・確かに大きいですね」

メアリについて話し合っていたが後に胸の話になったのは言うまでも無かった。

遊輔「あいつも災難だな」

達哉「全くだ」

ダイチ「胸の大きさを統夜の幼馴染部門だったら優子が確実に負けるよな。他のに比べて貧・・・『グシャッ！！』・・・」

ダイチが胸に関する事を口にした瞬間、剛速球レベルの速さで机が

ダイチにヒットし倒れた。
投げた相手は勿論・・・

優子「ふふふ・・・」

満面な笑顔の優子さんだった。

但し目が笑っていない。「次貧乳って言った奴殺す」というオーラが出ていたの言うまでも無かった。

今の惨状を見た遊輔と達哉は冷や汗を掻いていた。

明久「何て事言うのかな?!君は!?!」

統夜「何の事だ?」

明久「とぼけるなあ〜!!成田さんに対してとんでもない質問をした癖に!!!」

屋上にて明久が統夜に対し叫び出していた。

因みに華琳さんは統夜の頭の上で気持ちよさそうに眠っています。

統夜「ああ・・・その事か・・・別にいいんじゃないか?バレる事だし・・・予め知っておく事と後から知ってしまう事・・・どっちが怖いと思う?」

明久「それは・・・後からしか無いじゃないか・・・」

統夜「だろ?姫路と島田からのお話は恐怖だからね・・・てかあいづら二人は話し合ったら直ぐ分かってくれるって」

明久「だといいけど・・・」

統夜「何とかなるっての!行くぞ!」

二人は屋上を後にし教室へ戻った。

教室へ戻った時、統夜はメアリについてラバーズから問い詰められ、明久は瑞希と美波から早苗について問い詰められていた。

千世「さあ・・・統夜・・・話してもらおうよ」
瑞希「明久君もですよ」

ラバーズ達に説明する時がやって来た瞬間・・・

樹「統夜達の所に転校してきた三人は可愛らしいね」

緊張感の空気をぶち壊しにした樹が蓮華とメアリ、早苗に声を掛けナンパをしていた。

統夜「誰だ？この馬鹿を呼んだのは？」

皆に問い掛けたが首を横に振った。

奴は美少女いる所に現れる・・・そんな奴だからね・・・

樹「前世の頃から愛していました!!」

蓮華「嫌よ」

メアリ「お断りよ」

早苗「わ、私には・・・吉井様が・・・」

見事撃沈した樹だったが・・・

樹「明久・・・殴つていいかい？天地鳴動の叫びを上げる程の威力で!!」

明久に対し拳を握り締めた樹の言葉に反応した早苗が立ち上がった。

明久「成田さん？」

早苗「今・・・吉井様を殴ろうと言いましたね？」

彼女の周りから冷気が漂った。

統夜「（妖気を感じる・・・彼女は・・・）」

早苗から発する冷気に含まれている妖気を感知し何者なのか見当がついた。

樹「あ・・・これは・・・その・・・冗談で・・・」

早苗「私には冗談には聞こえませんでしたか・・・その拳は何ですか？」

樹「そ、それは・・・お、お許しを・・・」

早苗「駄目です・・・少し頭を冷やしてください」

樹に手を当てた瞬間見る見る凍て付き氷塊になった。

雄二「少しじゃないよな?!」

統夜「雄二も気を付けた方がいいんじゃないか？明久を侮蔑したら・・・あなる・・・」

雄二「言われなくても分かる・・・」

氷漬けされた樹を見て青ざめていた。

早苗「ふう・・・」

普段の雰囲気に戻り再び座り始めた。

一同はこう思った・・・早苗のような人を怒らせてはいけないと・・・

統夜「そっいゃ・・・弁当・・・」

弁当で思い出した瞬間空から何者が屋上へ降ってこようとしていた。そして氷塊を砕き着地した。

優子「一体何が起こったのおおお!!!」

統夜「何だろうな・・・」

煙が晴れると白で統一された服・・・鉄拳シリーズのリリのコスプレをした咲夜が弁当箱を手にして着地していた。

咲夜「格闘令嬢咲夜・・・参上」

優子「おいしいiiiiiiii!!! 幾らなんでもそれは無いでしょおおおお!!! てか格闘令嬢咲夜って何?! 声と一緒にだからって幾らなんでも不味いでしょ!!!?」

咲夜の格好に青褪め大声で怒鳴りツツコンだ。

統夜「弁当ご苦労さん」

咲夜「折角だし一緒に食べようか」

統夜「ああ」

倒れている樹は放っておいて昼食を食べ始めた。

統夜「メアリは俺とはやて、文乃、優子、秀吉の幼馴染だ。七年ぶりだよな・・・元気にしてたか？」

自分のラバーズ達にメアリの事について説明を昼食をとりながら始めた。

メアリ「ええ。貴方は随分と・・・変わったわね・・・女の子達と仲良くなって・・・」

はやて「統夜はフラグを立ててるからな・・・」
文乃「制裁されても文句は言えないけどね」
優子「一種の優しさと受け入れているわ」
秀吉「淒いのか淒く無いのかが分からないが・・・」
メアリ「そうよね・・・え〜つと・・・」

初対面の千世達に戸惑った。

千世「私は梅ノ森千世。千世でいいわよ。統夜の幼馴染がもう一人いたなんて・・・」

希「にやあ・・・意外・・・霧谷希・・・希でいい」

カナ「私はカナ。よろしくね。閣下」

プリムラ「プリムラです。よろしくね。閣下お姉ちゃん」

メアリ「よろしくね。私の事もメアリでいいわよ・・・つてちよい待ち・・・カナとプリムラちゃん・・・私の事・・・閣下つて言ったわよね！？てか・・・何処に座ってるのおおお！！！！」

黒いゴスロリ服を着て聖痕のクエイサーに出てくるカーチャのコスプレをしたカナは美春を椅子にして座っている所に対し怒鳴ってツッコミを入れた。

美春「何で・・・私が・・・」

カナ「何か明久に襲い掛かろうとしたとこを黙らせて現在に至るわ」
メアリ「いくら声が一緒だからって・・・不味いでしょ！！」
プリムラ「そうかな？」

そう言うプリムラも座り始めた。

ネリネ「リムちゃああああん！！！！それはやっつては駄目です！！！！」

美春の背中に座り始めたプリムラに対し叫んでいた。

凜「統夜達に感染してるよな……」

楓「そうですね……」

シア「カオスで一杯だよな……」

亜沙「でも賑やかでいいんじゃない？」

カレハ「亜沙ちゃんの言う通りですわ」

麻弓「賑やかでいいと思うのですよ」

凜達は苦笑しながら食べ始めていた。

エステル「私はエステル＝フリージアと言います。エステルで構いませんよ。古手川さん」

咲夜「私は相川咲夜。ここの学生じゃないからそこそこよろしくメアリ「私は古手川メアリと言います。こちらこそよろしくね。エステル、咲夜さん。統夜……貴方の頭の上にいるのは誰かしら？」

統夜の頭上でスヤスヤと寝ている華琳を指差した。

因みにメアリは咲夜のコスプレに関してはスルーした。

ツッコミすると疲れるからだ。

統夜「彼女は……おい……起きなさ〜い」

華琳をユサユサと揺らして起こした。

華琳「きよきよは……（訳：ここは……）」

統夜「屋上だよ。元の形態になつてくれ」

華琳「にゃんだか……わきやりゃにゃいけど……わきやったわ

（訳：何だか……分からないけど……分かったわ）」

起きて元の人間形態へ戻った。

華琳「私の名前は華琳よ。よろしく頼むわね」

メアリ「私は古手川メアリ。よろしくね」

華琳「面白いのが来たわね・・・賑やかになると思っから頑張りなさいな」

そう言っでデフォルメ形態に戻り統夜の頭上に座った。

統夜はメロンパンを華琳に手渡した。

華琳「しゅみやにやいわにえ（訳：すまないわね）」

メアリ「エステル・・・統夜っであんな事をやってるの？」

エステル「ええ。私は賑やかでいいと思っでいますよ。メアリ」

統夜達のやり取りを見て話していた。

明久達の食事風景は・・・

瑞希「ナンパされていた所を助けて貰ったのですか・・・」

美波「アキラしいわよね。困ってる人を見捨てず助けるっで・・・」

瑞希と美波は納得していた。

早苗「そして一目惚れしてしまいました・・・／＼／」

明久「そ、そうなんだ・・・」

瑞希「私は姫路瑞希と言います。よろしくお願ひします」

美波「私は島田美波。美波でいいよ」

早苗「私の事も早苗でいいですよ。瑞希さん、美波さん」

三人は直ぐに仲が良くなっだ。

雄二「古手川に蓮華、成田……とんでもないのが来たな……」
康太「……………確かに……………」

雄二と康太は明久のやり取りを見て呟いた。

統夜「それにしても……凄いな……成田は……雪女みたいな力を持つてるし」

早苗「そういう貴方もですよ。微量ですが妖気を感じます」

統夜と鮮華、蓮華、メアリを指差した。

統夜「俺と鮮華はヴァンパイアだし……」
鮮華「そうですね」

蓮華「私は虎の妖怪の力を持っているが……まだ目覚めていない……」
メアリ「……………」

統夜と蓮華はベラベラと喋っているがメアリは黙ってしまった。

早苗「力の大妖に瞬速の大妖ですか……」
瑞希「早苗ちゃんも妖怪なのですか？」

早苗「はい。冷気を操る妖怪……雪女です」

いずれバレると思ったのか素直に白状した。
それを聞いた一同は気にしなかった。

早苗「驚かないのですか？」

美波「神族や魔族がいる時代よ？吸血鬼だろうと雪女だろうと気にしないわよ。ねえ瑞希」

瑞希「はい」

早苗「本当にありがとうございます」

笑顔でお礼を言った。

統夜「雪女や動物系の妖怪か・・・メアリ・・・まさかと思うが妖怪の血が入っているのか？」

メアリ「・・・ええ・・・」

統夜「まあ・・・追求しないよ」

華琳「しようにえ（訳：そうね）」

メアリ「そう言えば貴方に聞きたい事があるけどいいかしら？」

統夜「何だ？閣下」

メアリ「閣下じゃない・・・メアリよ。アンタがセントクルセイダーズを倒したって本当？」

メアリの発言にセントクルセイダーズと戦ったメンバーは真剣な表情になり始めた。

統夜「ああ。それがどうかしたのか？何故奴らの事を？」

メアリ「ちよつとね・・・統夜・・・私と勝負して」

メアリからの挑戦状を・・・

統夜「構わないぜ」

即答で受けた。

明久「理由無しで簡単に引き受けちゃっていいの？古手川さん・・・未知数だよ？」

統夜「んなもん分かっている・・・だからこそ受けた・・・」

メアリの力に興味があるのかのように答えた。

はやて「統夜とメアリちゃんの対決・・・面白そうやな」

エステル「何を呑気な・・・」

優子「そうよ・・・」

はやての台詞にエステルと優子は溜息をつき呆れていた。

昼食を食べ終え次の授業の準備の為弁当を片付け屋上を後にした。

咲夜は家へ帰り、美春は正気に戻り屋上を後にした。

樹は放置されたが・・・

放課後になり統夜達は本拠地寮へ移動した。

統夜「なあ・・・一体何の集まりなんだろうな？」

達哉「さあ？」

遊輔「セントクルセイダースを倒した記念にパーティをやるとか？」

朝、それぞれの携帯にビリーから放課後に本拠地寮へ来るようにというメールを貰っていたのだ。

何をするのかは書かれていなかったが・・・

統夜「おいおい・・・って・・・何でついてきてるのかな？」

鮮華とはやてとカナ以外の統夜ラバーズ、明久ラバーズがいた。

鮮華「兄さんの戦い方に興味がありました」

文乃「アンタがやり過ぎないように監視する為よ」

優子「どんな戦い方をするのか興味があつて・・・」

秀吉「ワシもじゃ」

統夜「そうすか・・・」

ラバース達も統夜の戦いに興味があるようだ。

明久「瑞希達も？」

瑞希「はい」

美波「ただの話し合いなら邪魔にならないと思うし」

早苗「そうですね」

明久「そ、そうだといいね」

大量に冷や汗を掻いていた。

統夜「（死ぬ時は成仏してくれよ）」

遊輔「（骨は拾ってやる）」

達哉「（達者でな）」

零斗「（あの世で頑張れよ）」

ダイチ「（頑張れよ）」

五人は失礼な事を考えていると本拠地寮に着き中へ入った。

ビリー「よく来たね。ささ・・・こっちに来て座ってくれ」

統夜「分かった」

一同はビリーに言われて座り始めた。

遊輔「で・・・どんな事で呼んだんすか？」

達哉「ただ集まると書かれてたんですが・・・」

ビリー「君達・・・蒼穹の騎士団に教官が入る」

教官が入る事を聞いた一同は・・・

一同（統夜ラバーズの一部と明久ラバーズを除く）「な、なんだってええー！ー！ー！っ！！！！」

ビリーの言葉で統夜達は衝撃が走った。
いきなり教官が入る事に・・・

達哉「あ、あの・・・それって何人来るんですか？」

ビリー「二人だ。そろそろ来る頃だ」

康太「・・・・・・・・二人か・・・・・・・・」

カツカツと靴の音が聞こえ腰まである銀髪に金色の瞳をしDOG D AYSのレオンの戦闘服を着た女性と腰まである黒髪をポニーテールにし、赤い瞳をしハイスクールD×Dの女子制服を着た女性の二人が統夜達の前に来た。

統夜「メアリ・・・お前の閣下仲間がいたな」

メアリ「いい加減にして！！あの人に失礼でしょ！！」

達哉「お前ら静かにしろ！！」

メアリが額に青筋を浮かべ統夜に怒鳴っていた所を達哉が一喝し静かに黙らせた。

達哉「ビリーさん・・・その二人が・・・」

ビリー「そうだよ。お二方・・・自己紹介をお願いします」

レオン「うむ。私が蒼穹の騎士団の教官になるレオン」バステッドだ。よろしく頼むぞ」

ユウカ「私はそのお手伝いのユウカ」カザキリよ。よろしく頼むわね・・・・・・・・（ボソツ）豚共・・・・・・・・」

秀吉「気のせいじゃろうか・・・一瞬豚共って・・・」

優子「気のせいよ・・・そう信じたいわ・・・」

レオンとユウカの自己紹介を聞いた一同はレオンは熱血なイメージ、ユウカはDSなイメージとして認識された。

統夜「俺は天川統夜。蒼穹の騎士団のリーダーだ」

遊輔「俺は桜木遊輔。よろしくお願いします」

達哉「俺は朝霧達哉と言います」

零斗「俺は北郷零斗だ。よろしく頼むぜ」

ダイチ「俺はリュウダイチだ。よろしく頼むぜ」

たけし「俺は竜崎たけし。よろしくお願いします」

明久「僕は吉井明久と言います。よろしくお願いします」

主要陣七人がレオンとユウカに挨拶をした。

挨拶をしている統夜達を興味深そうにレオンとユウカは見ていた。鍛え甲斐のある人物として・・・

レオン「蒼穹の死神に紅蓮の猛虎、瑠璃の軍神、マイティ真拳継承者、気力使い、超力戦士、疾風の流星・・・興味深い故に鍛え甲斐があるな」

統夜達の通り名を口にして笑みを浮かべていた。

優子「蒼穹の死神って・・・」

はやて「統夜の通り名や。たった一人で管理局の施設を壊滅させた事により付けられたものや」

プリムラ「うわ・・・凄いな・・・」

秀吉「管理局とはいえ・・・セイントクルセイダースのじゃろ？」

はやて「せやな・・・」

統夜の通り名である蒼穹の死神を知らない優子達にはやてが教えていた。

瑞希「ほえ〜・・・凄いですね・・・」

美波「アキに通り名があつたなんて・・・」

早苗「驚きです・・・」

明久「ラバーズは驚きを隠せずにいた。

統夜「次からは本格的になるかもしれんからいい機会だな・・・」

華琳「修羅に混沌がいるのだから・・・油断してはいけないわね」

シャル「貴方のラバーズ・・・賑やかで楽しいわね」

鮮華「兄は影でフラグ立て男と呼ばれていますますがよろしくお願いします」

シャル「任せなさい」

鮮華はシャルに統夜の事をよろしく頼むよう頭を下げていた。

シャル「鮮華は統夜の実の妹？」

鮮華「はい。双子の一卵性ですが・・・」

シャル「て事は・・・吸血鬼？」

鮮華「はい」

雪蓮「何かやっている？」

鮮華「剣道をやっています」

剣道と聞いた雪蓮とシャルは・・・

シャル「剣道ね・・・よく兄と比較されるでしょ？」

雪蓮「確かに比較されるよね・・・統夜は月と地球を救った英雄・・・

・メカに強くプログラミングや情報処理能力が高く・・・剣術や体

術は高いし」

鮮華「そうですね・・・兄にいつも助けられてばかりで」

シャル「統夜つて妹思いなのね。鮮華・・・焦っちゃ駄目だよ。貴方は貴方らしくすればいいから」

鮮華「はい・・・」

鮮華の答えにシャルは冷静にアドバイスしていた。

統夜「今回は教官二人の挨拶だけですか？」

ビリー「まあ・・・そうだね・・・何かありますか？」

レオン「特に無い」

ユウカ「私も無いわね」

ビリー「何も無い為・・・終わりだね・・・」

教官二人からは何も無い為お開きになった瞬間・・・

統夜「地下訓練施設を使いたいのですがいいですか？メアリと戦う為・・・」

ビリー「構わないよ」

統夜「ありがとうございます。行くぜ。メアリ」

メアリ「ええ」

統夜とメアリの二人は地下訓練施設へ移動した。

二人の戦いが凄まじい戦いになる事に一同は予想はしなかった。

メアリの力が未知的な事も・・・

第五十四話 『転校生がレオ閣下?!ガレット獅子団領は大丈夫なの?』

(後書き

今回のHERO'S EPISODEは

ユウカ「やっと出て来れたわね。色々なキャラが出て来て・・・楽しくなりそうね」

ユウカ「天川統夜と古手川メアリの対決は見物ですわね」

ユウカ「吸血鬼と獅子の妖怪・・・どちらが勝つか・・・楽しみにしてますわ」

ユウカ「次回は『激突!白獅子対バンパイア』テイクオフよ。読まなかったらお置きして調教してあげるわ」

第五十五話『激突！白獅子対バンパイア』（前書き）

遅いと思いますが・・・HERO'S EPISODEのイメージ
声優を発表します。

天川 統夜・・・森田成一

天川 鮮華・・・日笠陽子

桜木 遊輔・・・神奈延年

カナ・・・平野綾

相川 咲夜・・・佐藤利奈

イグニス・・・森川智之

ルイス・・・かないみか

アイリ・・・能登麻美子

古手川 メアリ・・・小清水亜美

成田 早苗・・・阿澄佳奈

ユウカ「HERO'S EPISODE第五十五話始まりますわ」

第五十五話 『激突！白獅子対バンパイア』

第五十五話 『激突！白獅子対バンパイア』

地下訓練施設へ着いた二人は早速準備運動を始めていた。

五分後準備運動を終えた二人は・・・

統夜、メアリ「心装・・・蒼雷六爪（双竜轟焰轟雷）！！！」

統夜は六本の鞘付の日本刀、メアリは黒い鞘付の日本刀と白い鞘付の日本刀を具現化させた。

二人はお互い心装を展開していた。

モニター越しで見てたメンバーは・・・

達哉「あの娘も心装を・・・」

遊輔「心装使いつて訳か・・・」

フェイト「しかも・・・」

シグナム「二人とも刀だな」

はやて「私・・・不思議に思ったんやけど・・・何で統夜の刀は六本もあるんや？二刀流が限界な筈や・・・」

優子「残りは予備用のじゃない？」

遊輔「・・・・・・・・」

エステル「・・・・・・・・」

達哉とフェイト、シグナムは純粹に驚き、はやてと優子、秀吉は何故統夜の心装が六本の刀なのか疑問に感じていた。

六本の刀の真の使い方を知っている遊輔とエステルは黙って見始め

た。

統夜「まさか・・・お前も心装が使えるとは・・・」

メアリ「アンタや軍神、猛虎だけじゃないのよ」

統夜は六本の内一刀を抜き、メアリは黒い鞘から刃渡り3尺、真紅の刀身で白い柄の日本刀を抜き普通の焰とは違う灼熱の紅蓮色の焰に包まれ始めた。

お互い抜いた瞬間駆け抜け衝撃のある鏢競り合いから始まった。

統夜「特異魔力変換資質の類か・・・？」

メアリ「見ただけで分かるのね」

統夜「まあな・・・それはお前だけじゃないぜ！！」

統夜の刀の刀身から蒼炎が灯り鏢競り合い状態の二刀が光り始めた。

メアリ「へえ・・・」

鏢競り合いから瞬速の剣劇に移り始めた。

イメージ挿入歌「Naked arms」

統夜「絶望へ誘う蒼炎で狩らせてもらおうか！！お前の魂を！！」

メアリ「冗談は嫌われるわよ！！轟焔は炎が強化されたもの・・・

蒼炎には負けないわよ！！」

統夜「魂を狩るのは冗談だがな・・・」

やがて二人の剣劇は激しくなり始めた。

はやて「……………」

モニター越しで統夜を見つめていたはやては統夜の事をまだ知らない事に右拳を握り胸に置いた。

蒼炎の本当の力や心装に対して……

シャル「（まあ……あの娘を絶望へ誘う事はしないでしょ……）」

咲夜「（絶望へ誘う？どういう意味かしら？）」

蒼炎の力を知っているシャルはメアリを精神崩壊させる事はしないと考えていた。

咲夜はシャルの心を読み絶望へ誘うに対し意味が分からなかった。

統夜「でやあ！！」

剣劇は統夜が勝ち、メアリを前方へ押し出した瞬間、刀身に蒼炎と五気を収束し……

統夜「蒼霸天衝！！」

巨大な斬撃をメアリに向けて放ったが

メアリ「焰霸斬！！」

轟焰と五気を収束し蒼霸天衝を辛うじて相殺し防いだ。

統夜「……何らかの妖怪なのかは分かったが……覇気も使えるとは……」

メアリ「修行をしたからね・・・五気使いは貴方だけじゃ無いわ」

刃渡り3尺、金色の刀身で黒い柄の日本刀を白い鞘から抜き、金色の刀身から金色に輝いている雷に包まれ始めた。

右手に刃渡り3尺、真紅の刀身で白い柄の日本刀、刃渡り3尺、金色の刀身で黒い柄の日本刀の二刀流にして構えた。

メアリ「雷の強化型・・・轟雷・・・轟焰轟雷の力・・・とくと味わいなさい！！」

二刀から放たれる轟焰と轟雷の斬撃を放った。

統夜「（ありや普通の焰と雷じゃねえだろ！？）」

もう一本の刀を鞘から抜き、右手に持った刀の刀身に蒼炎を纏わせ轟焰の斬撃、左手に持った刀の刀身に雷を纏わせ轟雷の斬撃に対抗し始めた。

統夜「（威力は高いが・・・ただそれだけの話だ・・・）」

刀を横へ振るい轟焰と轟雷の斬撃を掻き消した。

これを見たメアリは突撃し瞬速の動きで左手に持った刀を弾き飛ばした。

右手の刀で統夜を斬ろうとしたが右手に二本の刀を指の間で挟み、左手に三本の刀を指の間で挟んだ状態で防いだ。

メアリ「なっ・・・」

統夜「焦るなっ・・・まだ始まったばかりだ・・・LIGHTNING FANG!!」

左手にある三刀の刀身に雷と妖力を纏わせメアリを上空へ上げた後、五本の刀を鞘に納め、メアリの攻撃によって弾かれた刀を手にし左腰の鞘に納めた。

再び右手の指で柄の部分を掴み三刀を左腰から抜きメアリに三つの斬撃を喰らわせた後三刀を鞘に納めて降りた。

メアリ「なるほど・・・そういう使い方・・・」

所々破けたが大したことは無かった。

統夜「ああ・・・だが・・・隠す必要はねえな！！Let's Show Time!!」

腕をクロスし指の間に挟んで片手に三振りずつ、両手合わせて六振りの刀を一気に鞘から抜いて構えた。

メアリ「なんて出鱈目な・・・」

統夜「Are you ready? Girl?」

モニターを見ていた遊輔とエステルを除く一同は統夜の型に驚きを隠せずにいた。

六本の刀を用いた六爪流という出鱈目に近いやり方で成立させるとは思いもしなかったからだ。

はやて「なんちゅう・・・構えや・・・ありえへん・・・」

シグナム「まるで龍の爪だな・・・」

ヴィータ「てかあんな構え無茶苦茶にも程があるだろ!!」

はやては統夜の六爪流に驚き、シグナムは統夜の六爪流に興味を持

ち、ヴィータは統夜の構えに対し無茶苦茶だと思いツツコミを入れた。

達哉「あれが真の使い方か……」

零斗「ほう……面白いな」

ダイチ「何て豪快な……」

たけし「俺でも真似出来ないな……」

明久「凄いとしか言えない……」

康太「……荒技だ……」

零斗達六人は興味津々と驚きの半分で見ていた。

レオン「ほう……ああやって使うのか。益々戦いたくなってみたぞ……」

ユウカ「正に蒼き龍ですわね」

レオンは六爪流を使う統夜に益々興味を持ち、ユウカは六爪流に対して関心していた。

優子「あんな出鱈目な構えってありえるのかしら？」

秀吉「二刀流が限界なのじゃが……」

プリムラ「あれは完全に防御捨てたって感じがするよね」

シャル「ん……本当に凄いわね」

咲夜「豪快でいいわね」

雪蓮「面白い発想ね」

瑞希「世界は広いですね……」

美波「言えてるわね……」

早苗「凄いとしか言えません」

各ラバーズ達も統夜の六爪流に驚きを隠せずにいた。

メアリ「ふふ・・・防御を捨てた型って嫌いじゃないわ」

統夜「そうか・・・ここからだ・・・Let's Party!!」

統夜の六爪流とメアリの二刀流の打ち合いが始まった。

打ち合いが始まってメアリが押され始め・・・

統夜「デイベインストライク!!」

なのはのデイベインバスターを応用し左手に持った三刀に魔力を纏わせ突進しメアリの二刀の攻撃を相殺した後、右手に持った三刀に纏わせ突進し魔力の衝撃波と一緒にダメージを与え前へ吹き飛ばした。

直撃は免れたメアリは立ち上がった。

メアリ「ただのこけ脅しかと思っただわ・・・」

二刀の刀身に轟焰と轟雷、五気を収束し始め・・・

メアリ「轟焰雷鳳波!!」

轟焰轟雷を纏った鳳凰を象った砲撃を統夜に向けて放った。

統夜「覇龍天衝!!」

覇牙天衝の強化版である右手の三刀の刀身に五気を収束させ三刀の巨大な斬撃で轟焰雷鳳波を相殺し煙が発生した。

煙が発生した後、二人は所々移動しながら刀のぶつかる音をしながら打ち合いを始めた。

メアリ「くっ……（なるしかないわね……アレに……）」

二刀で辛うじて六爪の斬撃を防ぎながら何かを考えていた。
統夜が六爪に構えてからメアリは不利になりつつあった。

統夜「六爪を出させたんだ……ちつとは楽しませてくれ。ライジングジェット!!!」

六爪の刀身に雷と魔力を纏わせ、瞬速の歩法である刹那でメアリの前へ移動し×字に切り裂こうとしたがメアリは二刀の刀身に轟焰轟雷を纏わせ防御しようとしたが間に合わなかったのか直撃は免れたが攻撃を受けてしまい吹き飛ばされてしまった。

メアリ「キャア!!!」

統夜「まだそんなものじゃないだろう？」

メアリ「ええ……こんなものじゃないわ……」

立ち上がった後二刀を鞘に納めた。

統夜「何のつもりだ？」

メアリ「見せてあげるわ……妖怪の力……『白獅子』の力をね!!!」

力を解放し白い光に包まれ始めた。

統夜「白獅子だと？（雪蓮以外に動物系の妖怪の力を持っていると
いうのか……!?!）」

白い光が硝子のように碎け散ると髪の色が銀髪、瞳の色が金色に変

化し、頭に猫の耳に似た銀色の毛並みの獣耳、お尻から銀色の尻尾が生えていた。

その後メアリは瞬速で移動し統夜を右拳で上へ殴り飛ばし、上へ跳び左手に妖力を込め切り裂き地面に叩き落とした。

統夜「（速い・・・それに攻撃力も高くなっている・・・）」

メアリ「甘く見たらいけないわよ」

統夜「（やっぱ・・・閣下に似てるわ・・・ありゃ・・・）そうか・・・」

六本の内五本の刀を鞘に納め一刀流に変えてメアリに向い一閃しようとしたがいつの間にか抜いた二刀の刀身の先だけで防いでいた。これを見た統夜は目を見開き驚きを隠せずに行った。

統夜はメアリの動きを見て速さは自分と同等かつ雪蓮並という確信が確実にあった。

メアリ「解放形態はこちらが経験は上よ!」

モニターを見ていた一同はメアリの解放形態に驚いていた。

遊輔「獅子の妖怪だな・・・」

零斗「猫科故に猫耳か・・・」

はやて「めっちゃ凄いやん・・・」

早苗「獅子の妖怪は厄介かもしれないよ」

早苗の言葉に一同は視線を早苗に集中させた。

はやて「どういう意味や?」

早苗「妖怪には雪を操る雪女や音と音波等を操るセイレーンのよう

な能力特化系、猫や犬、狼等の動物の力がある動物系、力の大大あるヴァンパイアのような異端系に分けられています」
瑞希「早苗ちゃんは雪女ですから・・・能力特化系・・・」
遊輔「雪蓮さん達三姉妹は虎の妖怪だから・・・動物系・・・」
はやて「統夜と鮮華ちゃんは吸血鬼やから異端系・・・」

早苗の説明が続いている間モニターには白獅子化したメアリに苦戦している所が映された。

早苗「動物系の妖怪の中にはヴァンパイアに匹敵する強さを持つものがいます・・・それに・・・メアリさんの場合は獅子ですから・・・肉食種の動物は凶暴性を増します」

秀吉「という事は・・・不味いんじゃないか?」

優子「秀吉・・・メアリは獅子の力を解放している・・・統夜はまだ吸血鬼に解放していない・・・言わなくても分かるでしょ?」

優子はモニターを見ながら秀吉に言った。

これを聞いた一同は統夜は解放形態になっただけでまだ勝負は分からないという雰囲気でもモニターに集中していた。

シャル「不安定の吸血鬼と白獅子か・・・統夜・・・これをどう乗り越えるか楽しみね」

レオン「確かに不安定を感じるな・・・」

シャル「貴方もそう思う?」

レオン「そうだ」

モニターを見ていたシャルの言葉にレオンは同調していた。

統夜「速さなら・・・こいつで行くぜ・・・真ルシファー解放!!!」

背中から漆黒の5対10翼の翼が生え、髪の色と瞳の色が白く輝く銀髪に翡翠色の瞳に変化した形態である真ルシファーに変化し今より速い動きをしメアリに向った。

メアリ「ルシファーか・・・楽しめそうね!!」

統夜「月牙天散!!」

メアリに向って巨大な斬撃を放った瞬間小さな斬撃に分散し襲い掛からせた。

小さな斬撃を二刀の刀身に轟焰轟雷を纏わせ全て切り払おうとしていたが統夜は真ルシファーの特長を活かした速さで移動しメアリに瞬速の一閃をし直撃させた。

一閃した後真ルシファーから髪の色が銀髪に変化し瞳の瞳孔が縦になり瞳の色が真紅に変化した姿である吸血鬼に変化させメアリに蹴りの衝撃波を放った。

メアリ「くっ・・・二度目の攻撃は当たらない!!」

衝撃波を横へスライドするように素早く避けた。

統夜とメアリはそれぞれ刀を鞘に納め肉弾戦に入った。

拳と拳のぶつかり合い、蹴りと蹴りのぶつかり合いによって衝撃波が発生した。

統夜「天神空円脚!!」

妖力と覇気を纏った右脚の連続蹴りでメアリの攻撃を相殺し空中に上げた後、空中回し蹴り、飛び蹴り、空中での連続蹴り上げの順に見舞った。

メアリ「くっ……中々やるわね！！轟焰牙衝拳！！」

ダメージを受けながらも両手の爪に妖力と轟焰を込め瞬速の連打を放った。

避ける事が出来ず防御に徹したが余波で腕などに切り傷と火傷が出来始めた。

統夜「強くなつたな……メアリ」

メアリ「アンタもね……楽しいわ……でも勝つのは私よ！！」

拳のぶつかり合いを何度かやった後、両者は刀を鞘から抜き火花を散らせながら鏢競り合いに入った。

鏢競り合いの最中に統夜は吸血鬼から真ルシファーに変化させバツクステップし刀を鞘に納め居合いの構えをし……

統夜「蒼嵐斬！！」
そうらんざん

前方の空間に瞬速の居合の嵐でメアリを引き付け切り刻んだ。

メアリ「くっ……（今の居合……全然見えなかった）」

統夜「まだ終わりじゃないぞ……蒼雷閃！！」

全身にダメージを負い血が出ているメアリに追撃として通常の刹那より速い移動で駆け抜け抜けた雷を帯びた刀で横に一閃し薙ぎ払った。

メアリ「真ルシファー……稀少種族の堕天使は本当に厄介ね。けど……『白獅子』だけじゃないわよ……死神化にも出来るわ」
統夜「混血か……メアリ……お前のように自分の種族を知っている奴が……羨ましいよ……それに比べて俺達兄妹は……」
メアリ「統夜……けどね……知らない方が幸せな時もあるの……」

」

メアリのような自分の種族を知っている存在を羨ましがっている統夜に対し目を閉じて論じた。

メアリ「もしアンタが・・・ジュエルシード事件や闇の書事件に関わらなかつたら・・・知りたい欲望は無かつたかもね・・・それと同時に・・・」

統夜「同時に・・・何だ？」

メアリ「管理局に力を恐れられ・・・嫉妬や憎しみの対象になるうとしている・・・結論から言うと私やアンタのような人間じゃ無い種族は嫉妬と恐怖の対象になる・・・心当たりあるでしょ？」

メアリから言われ浩次や千秋、セイラの事を思い出していた。

自分のような存在が浩次と千秋からは嫉妬と憎しみという感情から統夜達にこだわり、セイラからは自分にとって脅威と嫉妬、恐怖の対象になっていた。

統夜「何故そんな事を話す？それに・・・何故セントクルセイダーズに対し憎しみがある？」

メアリ「この戦いが終わつたら話すわ・・・」

統夜「そうか・・・メアリ・・・いい事を教えよう・・・力は心と考え方次第で変わる・・・憎しみだけではどんな試練も乗り越えられない・・・」

メアリからセントクルセイダーズへの憎しみを感じたのかメアリは戦いの後に話す約束をし、統夜は力は心と考え方次第と憎しみでは何も出来ない事を教えた。

メアリ「随分と変わったわね・・・セントクルセイダーズを憎み

倒したのかと思っただわ……」

統夜「憎しみはあつたが……憎しみは憎しみを呼ぶと悟った……今は誰かを守りたい……そして……何より……あいつらの笑顔を守る為に……戦っている」

メアリ「……………」

統夜の言葉を胸の上に右手を乗せ黙って聞いていた。

自分の幼馴染が憎しみを乗り越え誰かを守りたい想いと統夜ラブズの笑顔を守る想いを秘めている事を理解し納得した。

メアリ「見せてあげるわ……死神の力を!!」

メアリが真紅の光に包まれ、しばらくすると真紅の光が硝子のよう
に砕け散り白獅子の容姿から背中から三対六翼の真紅の翼が生え髪
と眼が真紅の髪に眼が琥珀色に変化した。

統夜「遊輔と同じ死神化か……」

メアリ「死神は冥界に生息している種族の一つよ」

統夜「へえ……そいつは興味深いこつて……」

二人は翼を羽ばたかせ飛翔しながら刀と刀の打ち合いが始まった。
墮天使と死神の戦いが始まった。

モニターを見ていた一同は……

遊輔「俺と同じ死神化……」

自分と同じ力を持つメアリに驚愕していた。

咲夜「あれが統夜の真ルシファア・・・」

カナ「速い・・・」

シグナム「あれが統夜の第二の覚醒・・・」

ヴィータ「墮天使の力はすげーな・・・間近で見ると・・・」

シヤマル「速さに特化した種族みたいね」

ザフィーラ「主の天使に対を為す墮天使か・・・」

リイン「凄いです」

真ルシファアを見た事が無いメンバーは関心と驚愕の半々でモニタ
ーを見ていた。

文乃「何なの・・・あれ・・・」

千世「背中から羽根が生えてる・・・」

希「にやあ・・・天使みたい・・・」

プリムラ「速過ぎて見えない・・・」

エステル「スピード特化みたいですね」

優子「吸血鬼だけじゃ無かったの!!」

秀吉「一体何回変化出来るんじゃないろうか・・・」

瑞希「二人とも凄いです・・・」

美波「人からかけ離れてるわね・・・てか・・・慣れ始めてるウチ

が怖い」

早苗「まあ・・・墮天使と死神の対決は見られませんからね・・・」

文乃達と明久ラバーズは真ルシファアと死神化に驚愕な表情になっ
ていた。

統夜ラバーズにとって真ルシファアは大きな衝撃になっていたのは
言うまでも無かった。

はやて「なっってしまったんか・・・」

鮮華「凄い・・・」

雪蓮「この後が面倒になりそうね・・・」

シャル「雪蓮の言う通り・・・どうなるか・・・分からないわね」

はやては統夜の真ルシファーに対し仕方が無いように呟き、鮮華は統夜とメアリの解放形態に目を奪われ、雪蓮とシャルの二人は溜息をついて先の事を考え項垂れた。

はやて「メアリちゃんが死神化か・・・」

自分の幼馴染であるメアリが死神化した事に対しては大きな衝撃を受けていた。

なのは「遊輔君と同じ解放形態を持ち・・・」

フェイト「冥界に生息する種族ってああいう事が出来るのかな・・・」

なのはは遊輔と同じ死神化が出来る事に驚き、フェイトは二人の解放形態に複雑な表情でモニターを見ていた。

達哉「本当に・・・凄い戦いだな・・・」

零斗「これはどっちが勝つても悪く無いな」

ダイチ「ああ・・・」

たけし「堕天使と死神・・・どっちが勝つか・・・」

明久「いい刺激になっていいよね」

康太「・・・人間にも可能性がある・・・上へ目指せれる・・・」

達哉達はいいい刺激になったのか心の底から熱くなり始めていた。

レオン「ルシファーに死神・・・面白い人材がいたものだな・・・」

ユウカ「冥界という世界にああいう種族がいるなんて素敵な場所ね」
レオンは真ルシファーと死神の力に興味を持ち、ユウカは冥界と住んでいる種族に興味を持ちながら観戦していた。

真ルシファーになった統夜と死神化になったメアリの戦いはお互い引いておらず凄まじい攻防を繰り広げていた。

統夜が斬ろうとすればメアリが防ぎ、メアリが斬ろうとすれば統夜が防ぐというものである。

そんな二人は悔しいという表情は無くただ自然に笑みを浮かべていただけだった。

メアリ「私の目に狂いは無いわ・・・」

統夜「そうか・・・お前の切り札がそれなら・・・俺はこいつを出す・・・ヴァンパイアルシファー・・・解放!!」

真ルシファーから背中から5対10翼の漆黒の翼が生え髪の色が蒼が掛った金髪、瞳の瞳孔が縦になり真紅に変化した姿であるヴァンパイアルシファーに変化した。

メアリ「・・・・・・・・」

真ルシファーと吸血鬼の二つ同時解放を目にしたメアリは驚愕の表情になっていた。

無理も無い・・・真ルシファーと吸血鬼の二つの力を持つヴァンパイアルシファーのような二つの種族の同時解放は稀にしか出来ず制御が難しいからである。

統夜「出来ないとも思ったか？吸血鬼と真ルシファーを制御する

事は造作もない」

メアリ「（死神と白獅子の同時解放形態は出来ない・・・けど・・・ここで諦めない！！）」

メアリは死神から白獅子に変化させ瞬速で駆け抜けた。

力と速さが特化された獅子の力ならヴァンパイアルシフアーに勝てると思っただろう。

メアリの思惑は大きく外れ、統夜はメアリの攻撃を軽々と避け腹部に妖力を物理攻撃に変換させた蹴りで見舞わせ前へ吹き飛ばし距離を取らせた。

メアリ「カハツ・・・」

統夜「お前の考えが通用するほどヴァンパイアルシフアーを甘く無
いぜ」

一旦刀を鞘に納め、六刀を鞘から一気に抜き六爪流にして構え刀身に蒼炎と雷、五気を収束し始めた。

メアリ「でも・・・私はこれで勝負を着ける！！」

もう一刀を抜き二刀流にし刀身の先を統夜に向け、五気と轟焰轟雷を収束し始めた。

二人は収束を完了させた瞬間駆け抜け始めた。

統夜「Chaos・・・」

メアリ「轟焰雷・・・」

そして二人が距離を縮め間合いが間近になった瞬間・・・

統夜「Barst Slash!!」

メアリ「双龍閃!!」

六爪と二刀の斬撃がぶつかり合い大きな蒼と真紅、金色の三つの混合色の光に包まれ爆発音が聞こえた。

二人の様子が全く見えずモニターを見ていた一同はゴクリと唾を飲み込み、見守り始めた。

しばらくして煙が晴れると背中越しに二人が立っていたが・・・

メアリ「・・・・・・・・」

メアリが静かに倒れてしまい勝負が決まった。

倒れた時に白獅子化は解除され元の姿に戻った。

統夜「こいつはヘビーだな・・・」

最後まで立っていたが座り始めヴァンパイアルシフアーと心装を解除した。

統夜「いい勝負だったぜ・・・あそこまでは思わなかった・・・」

気を失っているメア리를担いで上へ上がった。

レオン「あの二人は伸びるな・・・」

ユウカ「これからが面白くなるわね・・・」

二人の教官は統夜とメアリの戦いを見てそう呟いた。
可能性を見たかのように・・・

統夜「いや・・・・・・・・やっちゃった・・・」

雪蓮「やつちやつたわね・・・」
はやて「真ルシファーはアカンやる・・・」
シャル「説明しないと不味いわよ？」

シャルが顔をはやてとカナ、咲夜、華琳、雪蓮以外の統夜ラバーズに向けて統夜に言った。

彼女達から『本当の事を教える』というオーラが出ているのはいわないでおこう。

これを見た統夜は・・・

統夜「教えるしか無いな・・・蒼炎の事も含めて・・・」

やれやれとした感じでそう答えた。

統夜は零斗に頼んでメアリをヒーリングで回復させ、しばらくした後で説明を始めた。

統夜「最初は・・・真ルシファーからだな・・・セントクルセイドーズとの最終決戦に参加した人達にも教えておく必要がある・・・」

そして真ルシファーになったキツカケを言い始めた。

統夜「真ルシファーになったのは・・・イグニスコピーと呼ばれる実験で得た力だからだ・・・」

イグニスコピーの事を知っているはやてと遊輔、達哉、零斗、ダイチ、明久、雪蓮、華琳、シャル、蓮華、小蓮の十一人とレオン、ユウカ以外のメンバーは驚き衝撃を受けた。

特に知らない鮮華と統夜ラバーズは受けた衝撃が大きかったのは言うまでも無かった。

レオン「イグニスコピーを受けたから・・・ルシファアの力が扱えた・・・お前の妹は吸血鬼だけ・・・そうなのか？」
統夜「まあ・・・そうなりますかね・・・今んとこ判明してるのはそれだけです・・・俺達兄妹・・・自分がどんな種族なのかわまだ知らないもんで・・・」

レオンの問いに統夜は正直にそう答えた。

文乃「アンタが・・・そのイグニスコピーを受けたのっていつ頃なの？」

統夜「ソルジャーが壊滅した事件の直後だよ・・・あの時重傷を負っていてね・・・治療と同時に何処かの研究所で・・・イグニスの血・・・即ち墮天使の血を入れられ・・・未知のエネルギーである星の力を浴びる実験を受けた・・・」

ソルジャー事件を知っている人達は驚愕しながらも理解していたが驚きが大半を占めていた。

その内早苗一人だけ知らない為驚いていた。

統夜「その実験を受けて・・・乙女姉さんに助けられ・・・現在に至る・・・」

空白の一年間に起きた『蒼いイレギュラー事件』を話さずイグニスコピーを受けた事だけを教えた。

ラバーズにとつて『蒼いイレギュラー事件』を知らない方が幸せであるのかもしれない。

はやて「（星の力・・・確か・・・エアリスちゃんが言ってた・・・実験に使える程のエネルギーやったとは・・・）」

はやては手を顎に置きエアリスから教わった星の力について考え始めた。

フエイト「はやて？何か考え事？」

はやて「う、うん・・・まあ・・・そんなとこや・・・」

統夜「お陰で・・・使える術式はレイヴ式とヴァンパイア式、ルシファー式が使用可能になった・・・」

零斗「イグニスが使ってた術式か・・・ルシファーの血があれば出来るわな・・・そりゃ・・・」

メアリ「三つの術式が使えるって事ね・・・」

統夜「まあな・・・済まなかったな・・・真ルシファーの事を教える事を・・・」

何も知らない統夜ラバーズに頭を下げ謝罪した。

文乃「頭を上げなさいよ・・・真ルシファーだっけ？あんなもん気にして無いわ。一つ変身形態が増えたからって・・・」

千世「そうそう・・・アンタの非常識はもう慣れたから気にして無いわ」

希「にやあ・・・全然気にしていない・・・」

プリムラ「そうだよ。私も全然気にして無いよ」

エステル「吸血鬼であるうと墮天使であるうと・・・統夜は統夜です・・・」

優子「統夜が実験受けていた事には驚いたけど・・・気にして無いわね」

秀吉「全くじゃ・・・」

統夜「ありがとう・・・」

ラバーズに対して統夜は心から感謝していた。

本当にいい人達に出会えた事に対して・・・

レオン「うむ。いい娘達に出会えたものだな・・・」

シャル「そうね」

ユウカ「彼にあんな過去があつたとは・・・驚きましたわ」

転生者組は統夜達のやり取りを見て微笑んでいた。

統夜「次は・・・俺の蒼炎について教えておく・・・殆どが蒼炎の恐ろしさを知らないからな・・・」

シャルを除く蒼炎の力を知らない者達は興味があるのか聞く態勢に入った。

統夜「蒼炎は特異魔力変換資質の一つで・・・肉体を燃やすと同時に・・・精神を深い闇の中に閉じ込めてしまい絶望の淵へと追いやり・・・最終的には精神を崩壊させ・・・崩壊した精神はその魂と共に蒼炎に飲み込まれる」

これを聞いた一同はゾツとしていた。

もし蒼炎で燃やされたら精神崩壊され魂が統夜に飲み込まれるからだ。

遊輔「あの時・・・セイラから出たスフィアみたいなのが彼女の魂という訳か・・・」

統夜「そうだ。奴の精神を崩壊させ狩らせてもらった・・・二度とマトモな生活は出来ん・・・殺すより廃人にしてやった方がいい・・・仲間を捨て駒にし・・・自分が正しいと思う奴に相応しい最期だ・・・絶望してこそ面白い」

はやて「そ、そんな・・・恐ろしい事をしてたんか？」

なのは「幾らなんでも・・・酷いよね・・・」
フエイト「確かに・・・酷い事はしてたけど・・・最後は・・・ねえ？」

はやてとなのは、フエイトの三人はセイラを蒼炎で精神を崩壊させ魂を奪った事はやり過ぎだと思った。

統夜「じゃあ・・・聞くが・・・権力と地位に溺れ・・・全次元世界を欺き・・・仲間を捨て駒にし・・・女の風上にも置けないゴミ下衆のセイラを法で裁いた方が良かったのか？」

なのは「そ、それは・・・」
フエイト、はやて「・・・」

統夜の言葉になのは達は黙った。

レオン「私は天川のやり方が正しかったと思える。私達も奴のやり方を知っているからな・・・」

ユウカ「マトモな余生なんて・・・下衆で女の風上にも置けないゴミババアなんて廃人にして破滅させておくのがお似合いよ」

レオンとユウカの二人は統夜のやり方は正しいと思えた。

レオンは怒りを露わにし、ユウカは黒い笑みを浮かべていたが・・・

零斗「蒼炎をよく学校で使っているが・・・精神面は大丈夫なんだろうかな？」

真剣な表情をした零斗の問いに統夜は・・・

統夜「肉体だけを燃やす事と精神攻撃、悪夢等を見せる等の切り替えが可能だ」

そう答え、零斗達はホツとしていた。
もし切り替えが無かったら終わっていたのだから……

統夜「精神が強い奴は悪夢を見る程度で済む……結構気に入ってるぜ……この焰……権力に溺れた奴ら……歪んだ欲望を持つ奴ら等を絶望の淵に叩き落とす事が出来るんだからよ……」

笑みを浮かべながら言った。

遊輔「正に絶望の番人だな」

達哉「恐ろしいな……」

ダイチ「魂を飲み込むって……やばいじゃねえか……」

たけし「味方としては頼もしいけど……敵に回すと恐ろしいな……」

明久「その人の意思を破壊し……魂を奪うなんて……酷い……でも切り替えが出来る分いいけど……」

遊輔達主要陣でも蒼炎は恐ろしかった。

瑞希「人の魂を飲み込む焔って……酷すぎます!」

美波「アキや瑞希の言う通り恐ろしい炎ね」

小蓮「うんうん」

早苗「幾らなんでもやり過ぎです」

明久ラバーズは蒼炎の能力を批判していた。

精神を崩壊させ魂を飲み込む時点で恐ろしいと判断していたからだ。

はやて「私は……切り替えが出来るんやったらええけど……真の力を出す事には反対だな」

雪蓮「流石の私でも・・・恐ろしいと感じたわ」

はやてと雪蓮の二人の意見に残りの統夜ラバーズは首を縦に振って同意していた。

統夜ラバーズは蒼炎の真の力を出させる事には反対である。

はやて「統夜の考えている絶望には賛成やな・・・暴力を振るう輩に絶望を与える事は力の無い人にとっては希望に繋がるかもしれないし・・・」

だが統夜の考えている絶望に関しては賛成のようだ。

冥琳「蒼炎に関して一つ質問いいか？」

統夜「いいけど・・・何すか？」

冥琳「崩壊した魂を元に戻す事は出来ないのか？」

冥琳からの質問に・・・

統夜「難しいかな・・・精神は魂のプロテクトみたいなものだ・・・そのプロテクトが壊れると形が保てなくなり・・・蒼炎に飲み込まれ俺の力になる。一度喰らった魂を戻す事は不可能と考えればいい」

冥琳「そうか・・・お前が蒼炎で精神を崩壊させる相手は限られてるだろうし・・・すまん」

統夜「まあ・・・気にして無いよ」

統夜の答えにレオンとユウカは神妙な顔つきになっていた。

彼女達は転生者である為、統夜の蒼炎による精神崩壊と魂を飲み込まれれば転生が出来なくなる可能性があるのだから・・・

達哉「俺達や色んな人間を騙し、権力と地位にしがみついた報いだ・

「・・・あのゴミ人間にはお似合いだからいいけど」

零斗「まあ・・・下衆なクソババアが行動出来ないんだ・・・そこだけは感謝だな」

遊輔「ああ。人間の風上にも置けない奴にマトモな余生は贅沢すぎるしな」

ダイチ「外道なクソババアに相應しいかもな」

たけし「自分以外がどうなっても構わないババアがマトモな余生を送らせたらなあ・・・駄目でしょう」

明久「人の形をした化け物ババアの意味を破壊し魂を奪った事にはいいけどさ」

はやて「せやな。同じ女に生まれてたんが腹立つで・・・よく考えれば・・・セイラのクソババア相手やし」

なのは「うんうん。一つの事に拘る外道ヒステリックババアにやった事は反対しないけど」

フェイト「あんな奴が絶対正義ってどうかしているし・・・蒼炎で燃やし魂を奪った事に関しては・・・よく考えればやり過ぎじゃないよね」

達哉達は統夜がセイラにやった行動を咎めなかった。

蒼炎は恐ろしい力を秘めているが、管理局の誇りを汚し、泥を塗り、外道の限りをやり尽くしたセイラに相應しいものだと思ったのだから。

統夜「以上で蒼炎に関する説明は終わりだ・・・メアリ・・・何故 세인트クルセイダースに対して憎しみを抱いていたのか・・・教えてくれないか？」

メアりに理由を聞くとうとしたが・・・その前に・・・

早苗「少しいいですか？」

統夜「何だ？」

早苗「皆さんに特異魔力変換資質を教えておいた方がいいと思いまして……」

早苗の意見に統夜達は知った方がいいと思ひ賛同した。
その後早苗が皆の前まで移動した。

統夜「メアリもいいよな？」

メアリ「ええ……」

早苗「特異魔力変換資質とは魔力変換資質である『焰』と『雷』、『氷』、『風』、『光』、『闇』、『水』以外か強化された魔力変換資しちゅ……」

最後ら辺で嘔み涙目になったがそこで終わりにせず
微笑していた人がいたが気にしないでおこう。

早苗「魔力変換資質の事を指します。私は特異魔力変換資質である『紅氷』を所有しています」

統夜「俺の蒼炎と……」

メアリ「私の轟焰と轟雷が当て嵌まるわね」

はやて「なるほど……」

フェイト「特殊な力を持つたり強化されたもの、特殊なものを指すんだね」

理解が早い人がいるのかスムーズに進めている。

魔法知識が無い人もいるが……

早苗「天川さん……この紅氷に攻撃を当ててください」

両手から紅い氷で出来た塊を具現化させた。

統夜「いいぜ」

右手から蒼炎の弾を紅い氷に目掛けて発射した。
蒼炎の弾が紅い氷に着弾した瞬間、露散して消えた。

早苗「特殊な力のある蒼炎のような焔を無効化する力を持ちます」

統夜「天敵って感じたな・・・」

早苗「ですが・・・メアリさんのような強化された轟焔と轟雷には無効化は出来ません」

統夜「へえ・・・」

メアリ「万能だと思っただけど・・・」

早苗「万能なんてものじゃありませんよ・・・」

メアリの言葉に苦笑しながら返した。

プリムラ「特殊な力を持つ焔を無効化する氷・・・あり得ない話じゃ無いよね」

カナ「それなりに対抗できるのがいるって事ぐらい分かってちゃいたけど・・・」

瑞希「世界は広いですね・・・」

美波「うん・・・対抗できる力もある事もね・・・」

瑞希と美波のような魔力の無い人達は特異魔力変換資質の凄さに驚愕していた。

早苗「以上で特異魔力変換資質の説明を終わります」

統夜「説明が終わった所で・・・メアリ・・・」

メアリ「分かっているわ・・・私は闇の書事件の後に両親と一緒に引越し先で起きた出来事だったわ・・・」

何故セントクルセイダースに憎しみを抱いていたのか理由を言い始めた。

約八年前・・・

統夜達と一緒に英都にいたメアリだったが両親の都合で引っ越す事になった。

幼馴染である統夜とはやて、文乃、優子、秀吉の五人と別れてしまったがまた会えると信じていた。

メアリ「（統夜達に・・・また会えるわよね・・・）」

そう心の中で呟いていた。

引っ越し先の土地に慣れ始め・・・一週間が過ぎた。

彼女にとって忘れられない憎しみの始まりの記憶が刻まれる事になるとは予想もしなかったであろう・・・

メアリ「ここでのひなたぼっこは気持ちがいいわね・・・」

自分の家の近くにある小さな山にてメアリはひなたぼっこをしていた。

途中までここで出来た友達と遊んでいたが塾などがあるとかで一人になって現在に至る。

メアリ「帰らないと・・・」

ひなたぼっこを終え山から降り自分の家に帰ろうとした。

自分の家の方角から爆発音が聞こえ急ぐかのように走り始めた。

メアリ「はあ．．．はあ．．．はあ．．．っ！！？」

家に着くと家が瓦礫の山となって壊され自分の両親が血塗れの状態で倒れているのを見て目から涙が溢れ茫然としてしまった。

両親以外にも数名の人間も倒れていた。だが．．．倒れていた人物．．．正しくは顔に砕けた仮面と一体化し眼球が黒く一対二翼の蝙蝠状の翼が生えた異形であった。

メアリが来たのか多少ボロボロになっていた十数名の男と女一人が後ろを振り返った。

セイラ「生き残りか目撃者がいたとは．．．感心しませんね．．．」
魔導師1「やつとこさ．．．二人の化け物を始末したつてのに．．．今度はガキですか」

そう．．．八年前のセイラ率いる部隊だった。

メアリの両親に対し二人の化け物と呼んでいた事にメアリは我に返り睨みつけた。

セイラ「私達への協力を否定したあの二人には手間取りましたからね．．．残念ですが消すか私達の実験動物にするしかありませんね。私の定める秩序の為に．．．」

血塗れのバリアジャケット姿で杖型のストレージデバイスを構え杖先に魔力と気力を収束しメアリに狙いを定めた。
側にいた魔導師も魔力を収束し狙いを定めた。

メアリ「．．．．．」

狙いを定められているのにメアリは涙を流し始めピクリと動かなく

なった。

セイラ「死ぬ間に涙を流すとは・・・全く呆れますね・・・」

収束が完了し発射しようとした瞬間

メアリ「ガアアアアアア！！！！！！」

突然大きな咆哮を上げ始め地響きを起こし、頭に猫の耳に似た銀色の毛並みの獣耳、お尻から銀色の尻尾、背中から三対六翼の真紅の翼が生え、髪の色が真紅に掛った銀髪、瞳の色が右が金、左が琥珀色に変化した姿になり焰と雷を纏っていた。

これを見たセイラは構わず収束魔法を放ち爆発音が聞こえ煙が広がり始めた。

魔導師1「これでくたばってくれればいいんすけどね」

早く死んでくれたらいいという考えで下衆な笑みを浮かべていた。

セイラ「そうだといいですけどね・・・(三提督やリンディ「ハラオウン、クロノ」ハラオウンに好きにはさせん為に手柄を立て・・・それ以上の地位につかねば・・・私の理想郷が築けん！！)」

煙が晴れるとメアリがいなかった。

魔導師1「あれ・・・何処に・・・」

魔導師2「俺達の攻撃で死んだんじゃないのか？」

魔導師3「俺達はオーバースランクだからな。魔力が高い俺達の攻撃はヤバいからな・・・」

魔導師達は馬鹿笑いしていた瞬間、魔導師1の腹部に三つの大きな牙みたいなもので切り裂かれ息絶えた。

セイラ「何事ですか!?!?」

魔導師2「そ、それが・・・ぐわああああ!!!」

魔導師2がセイラに報告しようとした瞬間焔で燃やされ炭になった。残りの魔導師がメアリに襲い掛かり始めた。

魔導師達はメアリに向って魔力弾を一斉に発射しながら杖を槍術のように突く等の近接攻撃を仕掛けたが、メアリは背中から生えてある三対六翼の真紅の翼を羽ばたかせて上へ飛翔し回避した。右手から雷を出し魔導師達を一掃し黒焦げにした。

メアリ「・・・・・・・・」

地面に降り涙を流しながらセイラを睨みつけた。

メアリの涙を流している眼から『何故・・・こんな事をしたの?』という言葉が語りかけてきた。

これを見たセイラは額に血管を浮かべ怒りを露わにし始めた。

セイラ「貴様のような化け物風情がああああ!!!黙っていれば・

・いい気になって・・・大人しく塵となって消える!!!」

メアリ「・・・・・・・・」

セイラの叫びをスルーしメアリは近づき始めた。

てかセイラ達がやってる事は犯罪行為であり、振り返ちにあったのは自業自得である。

セイラ「そうはさせ・・・」

魔力弾を放とうとしたがいつの間にか来たメアリに顔面を焰を纏った拳で殴り飛ばし、雷の砲撃を放ったが・・・

セイラ「チィ！！」

殴られても魔力防壁を張り雷の砲撃を防ぎ、杖から収束砲撃を放ったが直ぐに避けられ間合いを取られ一方的に殴る蹴るの行動に入っ

た。
一方的に殴られ、蹴られたセイラはボロボロになり、全身血だらけになりデバイスも大破していた。

メアリの両親との戦闘で受けたダメージもあるのかそれ以上のダメージを負っている為動くに動けなかった。

メアリ「・・・・・・・・」

何も言わず拳をセイラに目掛けて振るおうとした瞬間・・・

セイラ「くっ・・・・・・・・」

カシム「やれやれ・・・・・・・・一人で何を無茶をやっていたのですか・・・・・・・・」

セイラの前に現在と全く変わらないカシムが突然現れた。

セイラ「あの娘を消す為だ・・・・・・・・」

カシム「そうですか・・・・・・・・（あの娘は今後の為に面白くなる・・・・・・・・死神と白獅子・・・・・・・・ふふ・・・・・・・・）」

メアリを見て笑みを浮かべ転移の準備を始めた。

セイラ「何故撤退する！！」

カシム「一応目的は達成されていますので・・・それに・・・無理をすれば貴方の計画はここで終わりますよ？」

カシムの言葉にセイラは黙るしか無かった。

そして二人は転移して消えた。

撤退したのかメアリは元の姿に戻り意識を失った。

メアリ「・・・・・・・・・・」

しばらくして意識を取り戻し両親の亡き骸を眺め涙を流し始め・・・

メアリ「う、うう・・・ああ・・・あああああああ・・・

！！！！！」

大きな声で泣き叫んだ。

家族と一緒に幸せに過ごしたかったという想いと共に・・・

現在

統夜「やっぱ・・・殺つとくべきだったか・・・」

はやて「何や・・・それ・・・本当にあのババアは最低やないか！

！！！」

文乃「下衆のやり方じゃない！！！」

優子「本当に最低ね・・・女の風上にも置けない屑ね！！！」

秀吉「あやつら・・・秩序と言っておきながら・・・こんな事をしておったとは・・・あやつは本当の人間の恥さらしじゃ！！！！！」

メアリの話を聞いた統夜は静かな怒りである時セイラを殺しておくべきと後悔し、はやてと文乃、優子、秀吉の四人はセイラを最低の

人間と評価し怒りを露わにしていた。

瑞希「本当に最低ですね・・・セイラという人は・・・」

美波「根本が小さく見えるわ・・・」

小蓮「早く抜けて良かったよ・・・あんな陰険卑劣外道ババアから・・・」

早苗「同じ女性として・・・何故いるのか不思議で堪りませんね」

明久「ラバーズも怒りを露わにしていた。

残りのメンバーもセイラを最低な外道と評価し怒りを露わにしていた。

統夜「で・・・その後は・・・」

メアリ「剣咲 剣という漆黒の服の男に導かれるがまま・・・斉藤 佐助と呼ばれる人の元で修行し、旅をし・・・現在に至るわ」

零斗「（あの野郎・・・前からいたのか・・・アイツは何がしたいのか訳が分からん・・・）」

零斗はメアリの話にあった剣咲剣の事を考えていた。

メアリに加担し、セイラに加担している等の行動をしている為何の目的があるのか訳が分からなくなっていた。

メアリ「そして・・・貴方達・・・蒼穹の騎士団がセントクルセイダーズを倒した事を聞いて・・・英都へ戻って来たの」

統夜「そうだったのか・・・真ルシファーに目覚めたのは・・・セイラとの戦いでな・・・」

遊輔「俺は君と同じ死神化に目覚め・・・」
はやて「私は天使化に目覚めた・・・」

セントクルセイダーズとの最終決戦で覚醒した事をメアリに教え

これを聞いた一同（例外を除く）は驚愕の表情になり大きな声で叫んだ。
たった三人で二世界を一日で滅ぼせ・・・セイントクルセイダースのような組織を一时间以内で全滅出来る力を持つ事を聞けば誰でも大きな反応はするであろう。

統夜「上には上がったもんだな・・・」

はやて「てかチートやる・・・私達もその類に入るかもしれへんけど・・・」

遊輔「凄いな・・・」

レオン「是非戦ってみたいものだ・・・三大冥王とやらに・・・」

統夜とはやて、遊輔は驚き、レオンのようなバトルマニアの人達は戦ってみたいと思ったそうな・・・

メアリ「名称だけで・・・何処にいるのか分からないわよ・・・」

レオン「それもそうか・・・」

残念そうな顔になっていた。

はやて「（三つの内・・・統夜の両親が当て嵌まる筈や・・・）」

メアリ「冥界に生息している死神は戦闘種族で・・・現在は絶滅した力を求めた稀少戦闘種族『魔獣族』とは敵対してたけどね・・・」

統夜「（あのババアが前線に出る程強かったのか・・・納得がいくな・・・異形か・・・奴はその時・・・強化人間以外に・・・何の研究をしていたんやら・・・調べてみる価値がありそうだな）」

死神に関する事を聞いている内に統夜はセイラが前線に出ていた事に納得していた。

メアリ「次は・・・白獅子だけど・・・力と速さを備え持った妖怪の一種で吸血鬼に匹敵する力を持っているわ・・・」

自分の力である白獅子の力を説明した。

一同はあのセイラが自ら戦いに来たのか理由が分かり始めた。

自分達の戦力にしようかと誘ったが両親は断固拒否したが、それを良しともしないセイラ達は排除したが、メアリの怒りに触れ壊滅寸前にまで陥った。

まあ・・・セイラ達のやってる事は自業自得になるが・・・

統夜「ルシファアの事も知っているよな？」

メアリ「ええ。墮天使は・・・戦闘特化した種族で・・・速さと吸血鬼並の再生能力を持つ・・・稀少戦闘種族でルシファー式と呼ばれる魔術式が扱えるのが特徴で・・・素質が高い者は・・・純血だろうと混血だろうと・・・素質が高い者は真ルシファーになれるの」
零斗「（だからイグニスは素早く動き尋常でない力を持っていたのか・・・）」

メアリからルシファアの説明を聞いた零斗は何故イグニスが尋常でない速さと力を持っていたのか理解が出来ていた。

統夜「冥界で思い出したんだけど・・・冥界の混沌って知ってるか？」

メアリ「ええ。七人で構成されている所ね・・・冥界を統べる冥王の部隊のね・・・」

ダイチ「いや・・・八人だ・・・」

統夜「メアリ・・・こいつの弟は冥界の混沌に入っているんだよ・・・ダイチを殺す為に・・・」

メアリに七人の所をダイチが八人と訂正し、統夜は新しく入った夕

イガがダイチを狙っている事をメアリに教えた。

その後、冥琳を助けた際に起きた出来事であるタイガが出て来た事と統夜が闇の力で無理矢理真ルシファーに変化し暴走し浩次と千秋を始末した事を知らない人達に話した。

この話を聞いた人達は一時とはいえ味方を残酷なやり方で切り捨てるマガキ達の非道なやり方に怒りを覚えた。

レオン「奴等の目的は天川の真の力かもしれんな・・・」

推測でマガキ達の目的を考えていた。

メアリとの戦いを見た限り統夜から不安定な所を感じたからだ。

レオン「天川・・・今のお前では・・・修羅や冥界の混沌、イグニスには勝てん・・・お前の知りたい真実を掴む前で終わりたくは無いだろ？」

統夜「ああ。てかあいつらは・・・想像以上に強いと踏んでるから・・・」

レオンからの問いに統夜は分かりきっていたかのように答えた。

今のヴァンパイアルシファーは強い部類だが未だ制御が完璧とは言えないのだ。

アドヴァンスメサイアの真の力であるエクストリームオーシャンシステムを発動させたメサイアライザー（メサイアにアドヴァンスライザーとドッキングした状態）も使いこなしていないのもある。

レオン「桜木遊輔・・・八神はやて・・・お前達にも言える事・・・解放形態があるからと言って気を抜くな！」

遊輔、はやて「は、はいっ！！！！」

大きく返事をした遊輔とはやての二人だった。

鮮華「あ、あの・・・レオンさん・・・」

レオン「何だ？天川妹」

突然の発言にレオンは反応した。

鮮華「私を鍛えてください！！いつまでも・・・兄に守られてばかりじゃ・・・いけないと・・・私も・・・誰かを守りたいんです！
！お願いします！！」

統夜「鮮華・・・」

はやて「鮮華ちゃん・・・」

統夜とはやての二人はレオンに頭を下げている鮮華をただ黙って見ているしか無かった。

二人だけでなく鮮華を知っている人達もただ黙って見てるしか出来なかった。

鮮華のお願いに・・・

レオン「いいだろう・・・厳しくなるかもしれんが・・・覚悟しておけよ」

鮮華「はいっ！」

レオンは許可を出し鮮華は元気よく返事した。

ユウカ「これでいいのかしら？」

統夜「鮮華はもう子供じゃない・・・それに・・・狙われる可能性もあるかもしれんすから・・・」

ユウカ「それもそうね・・・吸血鬼の力を出さずに終わったら・・・ねえ・・・素質は高い方だし」

鮮華を見ながらユウカの問いに統夜は目を閉じながら静かに答えた。

統夜「レオンさんに鍛えると同時に……蒼穹の騎士団に入るのか？」

鮮華「はい」

統夜「そうか……俺からは何も言う事は無い……これだけは言っておく……何があっても挫けるな……そして……受け入れる……」

鮮華「はい……」

戦士として……兄としてのアドバイスを鮮華に教えた。

これらを見ていた遊輔達は「妹想いだな」と思ったそうな……

同時刻とある次元世界にて……

マガキ「やはり……彼は面白いですね……」

セイラ達セントクルセイダースと組んでいた冥界の混沌の長であるマガキが椅子に座っており部下からの報告を聞いていた。

デュオ「そうっすね。まあ……あの小物……セイラでも役に立つもんですね」

マガキの前に混沌六天王とタイガが立っていた。

タイガ「真ルシファーに死神……それに……八神はやての……あの形態は何だ？真ルシファーに似てるんだが……」

報告を聞きセントクルセイダースとの最終決戦の映像を見ていた

タイガがはやての変化に疑問を抱いた。
タイガの疑問にスレッドが教えた。

スレッド「あれは・・・天使化と呼ばれるものだ・・・ルシファーに匹敵する力を持ち・・・光を司るものと思えばいい」
タイガ「なるほど・・・」

タイガに天使の力をルシファーに対を為すという事を簡潔に説明していた。

チップ「やつと俺達は・・・本格的に動けるぜ・・・」

チップは待っていたかのように残忍な笑みを浮かべていた。
戦いと殺しが生き甲斐かのように・・・

マガキ「チップの言う通りです・・・機は熟しました・・・全てを絶望へ誘い・・・魂を取りこむ蒼炎を持つ・・・天川統夜は僕の期待に応えてくれる・・・ユルゲンやセイラという存在を糧に覚醒し・・・吸血鬼の真の力と真なる魔王、霸王の素質が目覚めた時・・・君が戦ってきた存在は全て茶番となる・・・絶望と混沌の出会いが楽しみです・・・」

統夜の映像を見て狂気を孕んだ言葉を紡いでいた。

統夜の真の力に興味があり、何かを知っているかのように・・・

デュオ「それにしても・・・セイラに悪魔に変化させる・・・ダークエビルを渡しましたね」

そう口にしたデュオに対しマガキは笑みを浮かべた。

マガキ「あれは確かにロストログニアですが・・・僕が無数の悪魔の心臓と血を闇の力で融合させて作ったものですから・・・いいサンプルになっけてくれて良かったですよ」

セイラが使ったダークエビルに関する秘密が暴露された瞬間であった。

デュオ「あの女は俺達の思惑通りになり・・・デバイスデータと研究データを俺達は得た」

マガキ「利用価値だけではありませんね・・・デュオ・・・例の計画は順調ですか？」

デュオ「順調ですぜ。第一号体は超規格外なものになるのは必須です。基となった人物達が人物達だから・・・」

マガキ「ふふふ・・・我々の計画である『C計画』が本格的に動き出します・・・トイズ使いや気力使い、マイティ真拳継承者、超力戦士・・・彼らのクローンが完成するのも時間の問題・・・ふふふ・・・」

例の計画・・・C計画が順調であると知ったマガキは狂気を孕んだ笑みを浮かべていた。

本拠地寮では鮮華とメアリが加入を決めた後様々な話があった後解散した。

メアリ「待つて・・・統夜」

寮から出ようとしていた統夜を呼び引き止めた。メアリの声が聞こえたのか振り向いた。

統夜「何だ？」

メアリ「セイラを・・・セントクルセイダーズを・・・倒してくれてありがとう・・・」

メアリの言葉に統夜は「はあ・・・」とため息をついた後一息入れた。

統夜「俺は・・・あの馬鹿達が気に食わなかっただけだ・・・あの嘘を並べたクソババアに・・・通過点としては先ず先ずってとこだな」

メアリ「それでも・・・ありがとう」

統夜「気にするな・・・一つ言い忘れてたわ・・・はやて、文乃、優子、秀吉。ちょっと来てくれ」

照れくさそうに頬を指でポリポリと掻きながらはやて達幼馴染四人を呼び来させた。

文乃「何？」

統夜「俺達・・・まだ言つて無かった言葉あんだろ？」

優子「言つて無かった言葉・・・ああっ!!」

秀吉「姉上？ああ・・・まだ言つて無かったのう・・・」

統夜の言葉に優子と秀吉の姉妹は何かを思い出し、文乃も統夜の言葉で思い出した。

そして五人はメアリの方へ赴き右手を前に差し出し

統夜、はやて、文乃、優子、秀吉「おかえり（なのじゃ）。メアリ」

そう言った後、メアリは満面の笑みを浮かべ五人の手を握り・・・

メアリ「ただいま・・・皆・・・」

そう幼馴染の五人に感謝を込めて返した。

この時、集まっている彼ら六人が八年前の頃に戻った姿で集まっているかのように映って見えた。

第五十五話 『激突！白獅子対バンパイア』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

文乃「統夜とメアリの戦い・・・凄まじかったわね。メアリの過去にあいつらが関係してたなんて・・・」

文乃「土見と朝霧・・・二人の共通点と言えば・・・王候補・・・私にはあんまり関係ないけど」

文乃「今回は『月王候補と神魔王候補って親馬鹿になったら候補から王へランクアップされるっばくね？』 テイクオフ」

オリキヤラ紹介8（前書き）

メアリと鮮華の詳細を掲載します。

オリキャラ紹介8

名前：古手川 メアリ（こてがわ めあり）

性別：女

種族：死神と妖怪の混血

容姿：赤みがかった銀色の髪を腰まで伸ばしていて紫色の瞳をした綺麗な顔立ち

身長：168cm

スリーサイズ：B96/W57/H90

年齢：17歳

魔力光：赤

魔力：AA（EX）

気力：A（EX）

霊力：B（EX）

妖力：AA（EX）

覇気：B（EX）

（ ）内はリミッター解除時

魔術式：古代ベルカ式

心装：双竜轟焰轟雷そつりゅうほうえんこうらい

性格：明るく面倒見がいいが冷酷な一面を持つ

趣味：剣の練習、ひなたぼっこ

好きなもの（事）：スイーツ

嫌いなもの（事）：卑怯者、時空管理局

詳細：文月バーベナ学園に転校してきた少女で統夜の幼馴染の一人。闇の書事件まで英都に住んでいたが引越先でセイラが率いる管理局員に両親を殺された時に死神と獅子の妖怪の力に目覚め管理局員を殺害し家族を奪ったセントクルセイダースに憎しみを抱く。

剣咲剣の知り合いである斉藤佐助の修行の元で戦闘を身につけており、魔法も修得しているがまだ荒い所があり主に白兵戦と剣術、焰

と雷の魔法を好む。

修行の後旅をしながら蒼穹の騎士団の噂を聞き、リーダー格である統夜に再会する為英都へ久し振りに戻り文月バーベナ学園に転校してきた。

転校してからは統夜や遊輔、零斗、ダイチ、たけし、明久のような主要陣や各ラバーズのボケにツッコミ役&苦勞人の一人になる。

髪の色が銀髪、瞳の色が金色になり、頭に猫の耳に似た銀色の毛並みの獣耳、お尻から銀色の尻尾が生えてくる形態の白獅子化、背中から三対六翼の真紅の翼が生え髪と眼が真紅の髪に眼が琥珀色に変化する死神化の二つがある。

特異魔力変換資質である炎の強化型である『轟焰』と雷の強化型である『轟雷』の二つを持つ。

心装：双竜轟焰轟雷
ソウリウキョウエンキョウライ

形状：刃渡り3尺、轟焰に包まれている真紅の刀身で白い柄を持つ黒い鞘付の日本刀と刃渡り3尺、轟雷に包まれている金色の刀身で黒い柄を持つ白い鞘付の日本刀

能力・詳細：メアリの心装。轟焰と轟雷を自由自在に操る事が出来る事が可能。鞘に収束する事も可能で居合いの斬撃を強化出来る。また轟焰や轟雷を飛ばす事が可能。

名前：天川 鮮華
てんかわ あざか

性別：女

種族：吸血鬼

容姿：腰まである金髪に蒼い瞳をした綺麗な顔立ち

身長：165cm

スリーサイズ：B92/W56/H90

年齢：17歳

魔力光：真紅

魔力：不明

気力：不明

霊力：不明

妖力：不明

性格：お淑やかだが毒舌な所がある

趣味：シヨツピング、家事全般、剣道

好きなもの（事）：菓子全般

嫌いなもの（事）：管理局（苦手なだけ）

詳細：双子の一卵性で統夜の妹にあたる少女。

学園では成績優秀、才色兼備の優等生であり家事全般を完璧にこなす完璧超人。

統夜が管理局に入っている事を知っておりセイラによるアルカンシエルでソルジャー壊滅で行方不明になった時は涙を流し生きていると信じていた。

現在は統夜と一緒に過ごしており稟や達哉達と明るい日常を送っている。

吸血鬼の力と四力はあるが眠っており統夜と同じく兄妹揃って種族は吸血鬼しか判明されていない。

投稿キャラ設定5（前書き）

真王さんから投稿されたキャラの詳細を掲載します。

投稿キャラ設定5

名前：シャル・ノイシュバンシュタイン

容姿：踵まで届きそうな紅色のロングヘアに赤い瞳をした顔立ち
服：アルカナハートのシャルラツハロートの服

年齢：22歳

スリーサイズ：B92/W54/H83

体重：かじりとられた。

性別：女

種族：転生者

魔力光：赤黒

好きなもの：戦い、じゃれあい、花、強い奴、面白いこと、食い物
(特に肉)

嫌いなもの：つまらないこと、卑怯者

性格：若干戦闘狂な感じ

所持能力：魔導の心得(ランクEXクラス)、アンリミテッドエネルギー、武術の心得、モンスターソウル

スキル：ドツペルゲンガー(体を何でも変化できる)

詳細：前世では退屈過ぎて身勝手に転生した女性。しかしある研究者に捕まり研究の実験体となって不死身の体を手に入れてしまった(本人いわく、痛かったとのこと)。

体を変形させたりそれで攻撃したりも出来るようになった。元から得た能力はニードレスのフラグメント、ワンピースの悪魔の実、とあるの超能力全部だけである。なお彼女は食に関して通であるらしい(トリコ的に)(更にシャマパイのような兵器並の料理を平気で食べれると言っ胃袋を所持)。容体はアルカナハートの髪をおろしたシャルラツハロートをイメージ。

旅をしている最中にセントクルセイダースとの最終決戦に協力をしたと同時にそのまま加入している。

名前：レオン・バステット

容姿：腰まである銀髪に金色の瞳をした顔立ち

服：DOG DAYSのレオンの戦闘服

年齢：21歳

スリーサイズ：B91/W53/H83

体重：切られた跡がある

性別：女

種族：闘士姫（転生者）

魔力光：銀

好き：戦い、武器の手入れ、好敵手

嫌い：つまらないこと、卑怯者、デスワーク

性格：シグナムほどの戦闘狂

得意武器：いろいろ

スキル：戦闘魂（攻撃回数によって攻撃力が上昇）

武器形成（さまざまな武器を作ることが出来る）

詳細：幼き頃過激な戦闘派に育てられた転生者。そのせいか男勝りなしゃべり方が多く、強そうな奴を見かけたら構わず戦いを挑んで来ようとする（一応自重はしている様だ）。転生後は10tの重りを持ちあげるパワーと武器を形成する力を手にした。なお死んだ原因は山道で足を滑らせたらしい。

セントクルセイダースを崩壊させた蒼穹の騎士団の指導役として参加し統夜達を鍛える事となった。

潜在能力の塊である統夜達を鍛えるというもう一つの生きがいが出た事は言うまでも無い。

名前：ユウカ・カザキリ

容姿：腰まである黒髪をポニーテールにし赤い瞳をした顔立ち

服：ハイスクールD×Dの女子制服

年齢：21歳

スリーサイズ：B91 / W54 / H83

体重：潰れた…

性別：女

種族：魔族女王（転生者）

魔力光：黒

好き：紅茶、相手をいじること、攻め

嫌い：不細工な男（オタク的な）、料理が下手な人

性格：優しい人の様に見えるが、極が付くほどのサディスト。

得意武器：鞭、剣

スキル：女王様（隣接する敵男性キャラのステータスが下がる）

リス・フォーム
妖魔変化（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が

通常よりも上になる。飛行も可能）

サキュバスハート
妖魔の性欲（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手を襲わない）

リス・アップソーパー
妖魔吸引（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を変えらる）

詳細：生前男達によって犯されて殺された転生者。手加減というものを知らず、問答無用でたたきのめすと言っどさっぷりがある（生前でやられたせいかもしれないが…）。情報性が強いのか持ち前のノート（彼女曰くデスノート）で秘密をしゃべって屈辱を陥れようとする。メンバーの中では最も危険な奴である。

レオンと一緒に旅をしていたところに蒼穹の騎士団がセントクルセイダーズを倒した事を聞き、レオンと共に蒼穹の騎士団の教官をやる事になった。理由は面白そうという理由からである。

第五十六話 『月王候補と神魔王候補って親馬鹿になったら候補から王へランクアップ』

美波「おはよう。ゆのっち」

早苗「おはよう。宮ちゃん」

楓「おはよう。ゆのさん、宮子ちゃん」

優子「これ・・・ひまりスケッチじゃない！？明らかに中の人ネタよね?!」

メアリ「落ち着きなさい・・・優子・・・HERO'S EPISODE 56
ODE 第五十六話始まるわ」

第五十六話 『月王候補と神魔王候補って親馬鹿になったら候補から王へランクアップ』

第五十六話 『月王候補と神魔王候補って親馬鹿になったら候補から王へランクアップされるっぽくね?』

・ 統夜達がいつものように登校し下駄箱に靴を入れようとした瞬間・
下駄箱からバラバラバラと大量のファンレターが落ちて来た。

統夜「またか・・・」

遊輔「辛いもんだな・・・」

達哉「ああ・・・」

明久「あはは・・・しょうがないよ・・・」

これらを統夜達四人は苦笑いするしか無かった。

ファンレターが送られてきた事にそれぞれのラバーズは真っ黒なオーラを纏っていたのは言うまでも無い。

ダイチ「あれ・・・何で俺のは無いんだ?」

ファンレターが無いダイチの呟きに統夜は肩にポンと手を置き・・・

統夜「ダイチ・・・お前の変態行動に問題があるんだよ・・・」

ダイチ「俺は変態では無い!!スケベだ!!」

統夜「んなもん似たようなもんだろ・・・セクハラしてる事により・・・お前は女子から嫌われている・・・」

達哉「もし・・・ファンレターがあつたら・・・エルキュールはどんな反応をするか・・・俺の後ろを見てから答えろ」

達哉の背後に黒いオーラを纏っているラバーズを見てダイチは顔を蒼白し冷や汗を掻いた。
もしファンレターがあればエリーは黒いオーラを纏う可能性があるからだ。

ダイチ「まあ・・・そうだな。無い方がいいもんな」
統夜「だろ？」

統夜がダイチに納得させていると親衛隊と異端審問会がゾロゾロとやって来た。
彼らの視線は達哉に向けていた。

親衛隊「朝霧達哉！！今日も我らのプリンセスを一人占めにした罪を償ってもらうぞ！！」
異端審問会「判決・・・有罪・・・死刑・・・」

親衛隊と異端審問会はそれぞれ武器を手にし咄嗟に逃げた達哉を追いかけた。
彼らを蹴散らせる事は可能だが自分のラバーズを傷つける訳にはいかない為逃げる事を選んだ。

統夜「あらら・・・さて・・・行くぞ」
遊輔「ああ」
明久「そうだね」
ダイチ「可哀想に・・・」

統夜達はそれぞれラバーズと一緒に教室へ移動した。

統夜「こいつは・・・いつまで経っても変わらん・・・」

Aクラスに移動している途中で稟に抱きついている樹を苦笑いして見ていた。

鮮華「本当に気持ち悪いですね。近づきたくも無いですね。よく平然とそんな事出来ますね」

容赦ない毒舌を樹に浴びせた。浴びた本人は精神的ダメージを負い涙を流し始め稟から離れた。

稟「言い過ぎだよな!？」

楓「確かに・・・いつも教室のドアの前に待ち構えていますから・・・気持ち悪いは気持ち悪いですね・・・」

稟「楓・・・フォローになってない・・・」

楓「あつ・・・す、すみません・・・」

楓のフォローになって無い発言に稟はツツコミを入れた。

稟「あれ・・・達哉は？」

遊輔「あいつは追いかけられている」

稟「親衛隊と異端審問会か・・・嫌だよな」

稟も親衛隊や異端審問会に追われている為、達哉の気持ちがかかるのだ。

ネリネの前でやれば魔法の餌食になり終わるが・・・

統夜「あいつらを簡単に終わらせる方法はあるぜ？」

シア「どんなの？」

統夜「お前らなんか大嫌いと言えば・・・あいつら絶望させ・・・やる気を無くす。そうすれば稟は追いかけられる必要は無い」

それを聞いた稟と一緒にいた土見ラバーズは喜んでいた。

シア「それいいかもね」

ネリネ「はい。魔法で破壊するよりマシですし」

楓「そ、それは・・・あんまり・・・」

シアとネリネの二人は同意したが楓だけやや反対であった。

統夜「お前らの言葉はあいつらに聞くし・・・もし稟に何かあったらどうする？」

楓「それは・・・嫌ですね・・・稟君が傷付いたら・・・私・・・」

統夜の言葉に楓は渋々納得した。

楓は稟に何かがあると動揺し、過保護な所があるのだ。

統夜「んじゃ・・・またな」

稟達と別れAクラスの教室へ向い中へ入った。

明久「達哉と稟・・・可哀想だね・・・」

統夜「しょうがないだろ・・・二人とも王候補なんだし・・・」

遊輔「嫉妬も俺達以上に大きいし・・・」

ダイチ「稟は二世世界のプリンセス・・・達哉は月のプリンセス・・・だからな・・・」

統夜達四人が稟と達哉の二人について話し合っていた。

ダイチ「しっかし・・・シアはまあまあだけど・・・ネリネとフィーナは触り心地良かったな・・・胸の辺りが・・・」

ダイチの問題発言を聞いた統夜と遊輔、明久の三人は顔を蒼白させ冷や汗を流し始めた。

ダイチ「どうしたんだ？」

明久「ダイチ・・・後ろ・・・」

三人の様子がおかしかったのかダイチが問い掛けたが、明久に後ろを見るように言われ後ろを振り向くと顔を青ざめた。

シャロ「あはは・・・おはようございます」

ネロ「おはよう。天川、吉井、桜木、スケベ」

エリー「・・・」

コーデリア「おはよう。皆・・・ダイチ君・・・ご愁傷さま・・・」

シャロとネロ、コーデリアの三人は苦笑しながら挨拶をしていたが、エリーだけは違っていた。何故なら黒いオーラを出しダイチを睨んでいたのだから・・・

ダイチ「あ、あはは・・・これはその・・・」

統夜「正直な感想はいいが・・・教室で言うのは止めような・・・てかスケベな事を考えてるからマイナスになるんだよ」

エリー「さあ・・・ダイチ君・・・『OHANA SHI』をしましうね」

黒い笑みを浮かべたエリーは何か弁明しようとしたダイチの襟を掴み教室の外から出た。

はやて「アホやな」

なのは「変態スケベ・・・」

フィーナ「本当に救いようが無いわね」

樹ことジェラシーマスク97号を筆頭に親衛隊が稟を追いかけていた。

追いかけている理由はいつものように稟がシアとネリネ、楓という美少女に囲まれている妬みからである。

因みにラバーズや彼女持ちである統夜や遊輔、達哉、明久、零斗、ダイチも親衛隊や異端審問会に追いかけている。

稟「何が・・・嫉妬で狂った男達の代行者だ!!?」

稟の前にシアとネリネ、楓の三人がやって来た。

稟「シア、ネリネ、楓?」

突然来た三人に疑問を感じ走るのを止めた。

稟だけでなくジェラシーマスク97号率いる親衛隊も動きを止めた。すると彼女達は彼らに衝撃のある言葉を発する。

シア、ネリネ、楓「稟(くん、様、君)を傷つける人達は・・・大嫌いですっ!!!!!!」

それを聞いた親衛隊に電流が走り、顔を真っ青にし表情が絶望に染まり・・・

親衛隊「う、う、うわあああああああああああ!!!!!!
!!!!!!!!!!!!」

滝のように涙を流しながら直ぐに撤退した。
無論ジェラシーマスク97号もだが・・・

シア「大丈夫だった？稟くん」

稟「大丈夫だよ・・・ありがとう」

ネリネ「被害が少なくなつて良かったです・・・」

楓「無事で良かったです」

稟「そうだな・・・嫌いという言葉で撤退するとは意外だな」

シア達の嫌いという言葉は親衛隊に対して強力だなと稟は思ったそうな。

2・Aの教室では・・・

統夜「静かになつたな・・・」

アドヴァンスフォンを弄りながら呟いていた。

遊輔「最近の親衛隊って何故か稟一人だけ被害に遭つてるよな？」

統夜「俺達に喧嘩売って返り討ちにされるのを分かつてやる馬鹿はいないだろ・・・」

ダイチ「そうだな。稟って神魔王候補だからね（うゝん・・・あの力は不完全かな？）」

稟への親衛隊襲撃に対して統夜は呆れながら返答し、ダイチはバーベナ無双大戦で稟と戦つた時の事を思い出していた。

覚醒した状態の稟と戦つた事を・・・

統夜「んじゃ・・・今日の昼飯あいつも誘おうぜ。ただし・・・樹は駄目だ」

遊輔「それが妥当だな・・・」

ダイチ「全くその通りだ・・・おゝい・・・ゴリ・・・達哉・・・

お前もどうだ？」

達哉「ダイチ・・・今俺の事をゴリラと呼ばうとしたか？」

呼び掛けられた達哉が眉を寄せてダイチの言葉に疑問を感じ問い掛けた。

豆知識・・・達哉と銀魂に出てくる近藤は一緒の声の人がやっています。

ダイチ「気のせいだ。どうなんだ？」

達哉「ならいいが・・・大丈夫だ」

ダイチの言葉を信じ、OKした。

統夜「あいつら・・・お前と稟だけ容赦が無いな・・・先程稟を追いかけて回していた親衛隊は土見ラバースによって鎮圧したけど」

達哉「彼女達の言葉でだる・・・統夜と遊輔、ダイチ、零斗の場合は真つ向から叩きのめしてるだる・・・」

統夜「だってあいつらウゼえもん」

遊輔「まあ・・・程々にしてるがな」

ダイチ「嫉妬に狂った相手は痛い目に遭わせないと駄目っしょ」

統夜達三人の返答に達哉は「はあ・・・」とため息を吐き手を頭に当てていた。

彼らにはああしないと止まらなないと彼らなりに考えているのは分かっているが・・・

それから休み時間は終わり授業が始まった。

時間が過ぎ昼休みになりラバースと一緒に屋上へ

疲れたのか稟はグロッキー状態になっていた。達哉は何とも無いが・

・
・

統夜「災難だな」

遊輔「可哀想に……」

零斗「哀れな奴……」

ダイチ「親衛隊も出てくる事は無いんだし……」

明久「そうだね。異端審問会もだけど……」

統夜達五人は休み時間等にて親衛隊に追われていた達哉と稟に同情していた。

達哉「ありがとう……」

稟「早速食べようか……」

皆でいただきますを言おうとした瞬間「バアンッ!!」という音で勢いよく開いたドアに注目し親衛隊と異端審問会の連中がやって来た。

これらを見た統夜達は呆れていた。また返り討ちされるんだから無駄の一言と……そして、いつ復活したのかと……

親衛隊と異端審問会を引き連れた樹と常夏コンビが現れた。

統夜「おいおい……樹に常夏コンビよ……お前らの行動は無駄に等しいぞ」

樹「それはどうかな？俺様達は揺るがぬ絆の力で君達を倒し……

彼女達を取り戻す!!」

統夜「ちよつと待てええええええ!!揺るがぬ絆の力って……明らかに戦国BASARA3の家康のモットーだよね?!てか家康に対して謝れ!!嫉妬で形成されたものは絆の力とは言えねえよ!!」

突然統夜に蹴り飛ばされた樹の名前を叫んだ常夏コンビだった。

統夜「何・・・青春スイッチオンで宇宙キターみたいな言い方してんだテメエはよお！！！！仮面ライダーフォーゼが始まったんだから・・・気分を害する事を言わないでくれない？作者はすごい期待してんだから・・・」

お星様になった樹に対して言った。

統夜「ラバーズは統夜の行動は正しいと思っていた。

確かに格好はあれだけど・・・凄い気になるし・・・以上・・・作者の眩きでした。

統夜「因みに俺は龍騎、リュウガ、ファイズ、オーガ、ブレイド、カブト、ダークカブト、電王、キバ、ダークキバ、ディケイド、ダブル、アクセル、スカル、エターナル、オーズを好む」

ドゴォー！！

メアリ「誰がアンタの好きなライダーを聞くんてのよ！！しかも・・・ダークライダーも入ってるじゃない！！？」

統夜「ゴハア！！？」

統夜が好きなライダーを言い終えた後にメアリがツッコミを入れながら拳で統夜の頭に拳骨を入れて黙らせた。

常村「俺達は・・・受験生だ・・・それに比べて・・・王候補の前からは・・・何もせずに凄いものになれるのが許せないんだよ！！」
統夜「その気持ちはよおしく分かる・・・」

鮮華「ですが気持ち悪いです・・・はつきり言えば・・・」

夏川「朝霧は分かるが・・・何の取り柄も無く・・・力も無く・・・

学力も普通なへボな土見が特に許せないんだよ!!」

それを聞いたネリネの恐ろしさを知っている統夜達は顔を蒼白させ冷や汗を流し始めた。

夏川のは稟に対する侮辱はネリネの前ではタブーなのだ。その証拠にバチバチと魔力を放出している魔界のプリンセスがいた。

夏川「二世界のお姫様を口説いただけで王候補になれるって・・・俺達にも教えてほしいものだ。ん？どうしたんだ？お前ら？」

ガクガクブルブルと震えている常村と親衛隊、異端審問会を見て不思議に思ったが、ネリネの方を見ると顔を蒼白させ大量に汗を流し始めた。

統夜達は巻き込まれないように結界を張り始めた。

ネリネ「言い残す事はありませんね？稟様を侮蔑した事を後悔して消えなさい!!」

魔力弾を常夏コンビと親衛隊、異端審問会に目掛けて放ち光に包まれた後大爆発が起こり吹き飛んでしまった。

統夜達は吹き飛んだ常夏コンビ達を見て自業自得だなと思い呆れたそうな・・・

統夜「さて・・・馬鹿達がいなくなっただんでいただきま〜す」

親衛隊達がいなくなったのか食べ始めた。

零斗「稟・・・あいつらの言葉を気にするな」

ダイチ「そうだぜ。お前の優しさでシアやネリネ、楓、亜沙、カレハというラバーズがいるんだから」

統夜「確かに・・・二人の言う通りだが・・・王になったはなつたで・・・力も必要だぜ？」

達哉「統夜!!」

統夜「優しさや言葉だけで民はついてこない・・・月と違うんだぞ？神界と魔界の二世界の王つてのは・・・それなりの力と覚悟が必要だ」

零斗とダイチの言葉に賛同した統夜は力も必要という言葉に達哉は叱るが、月と違い、もし人族の稟が王になれば魔力のある神族や魔族がその座を狙う可能性は高い為力と覚悟が必要だと返した。

稟「(覚悟・・・か・・・)」

楓「稟君？」

稟「いや・・・あいつの言う事も最もだなと・・・」

ネリネ「確かに・・・稟様を良く思わない方はいると思います。魔力が無い人が王になる事に対して・・・魔力以外・・・気力は全ての種族が持つと聞きましたが・・・ダイチ様に聞きたいのですが・・・気力を使いこなすにはどれぐらい掛りますか？」

魔力が無い稟への対策として全ての種族が持つ気力を思い出したネリネは気力使いに長けているダイチに聞いてみた。

ダイチ「あゝ・・・結構掛るよ。気力は誰にでもあるけど・・・使えるのは難しいよ」

神妙な表情でネリネに答えた。

ダイチの言葉を聞いたネリネは残念そうな顔をしていた。

ダイチ「だけど・・・稟には気力を使える素質があるから・・・修行をすれば短期間で何とかなると思うぜ」

ネリネ「短期間とは・・・どれぐらいですか？」

ダイチ「一年〜二年ぐらい・・・稟は素人だから・・・完璧とは言えない・・・なあ・・・統夜・・・お前はどっ思っ？」

ネリネは一年〜二年と聞いて黙ってしまった。どんなものも基礎が無ければ意味を為さないのだから・・・

稟を鍛える事を統夜に問い掛けた。

統夜「何が？」

ダイチ「稟を修行させる事だけど・・・」

統夜「稟を？まあ・・・レオンさんとユウカさんに掛けあってみるが・・・あの人達の修行は結構ハードだけど・・・いいのか？」

稟にそう言った。

統夜の問いを聞いた稟は楓、シア、ネリネ、亜沙、カレハの順に見直し、目を一回閉じ直ぐに開けた。

稟「・・・ああ・・・今の俺じゃ何も出来ないと思うから・・・それに・・・」

統夜「それに・・・？何だ？要するにお前が好きな人達の為だろ・・・分かりやすいつての・・・」

麻弓「わ〜・・・土見君も自覚して来たのですよ・・・言葉に出してないけど」

楓達が好きと統夜に見抜かれた稟は顔を赤くし、麻弓はニヤニヤとして稟を見つめていた。

稟「統夜！！その先を言うな！！！！」

統夜「ははは・・・いいじゃないか・・・なあ？達哉さんや」

達哉「そうだな。悪くないぜ」

遊輔「そうだな」

零斗「王候補も鍛えないとな・・・神王のおっちゃんみたいに」
ダイチ「悪くないぜ」

明久「うんうん」

主要陣も稟の行動理念に賛同していた。

彼らも大切な人達がいるから分かるのだ。

稟「皆・・・ありがとう」

統夜「気にするなつて・・・そういや・・・メアリ・・・一つ聞き
たいんだけど・・・」

ご飯を食べているメアリに声を掛けた。

メアリ「何？」

統夜「冥界の王様つて冥王で合っているのか？」

メアリ「ええ。でも・・・冥界は特殊なのよ・・・どんな種族でも
冥王にはなれないわ」

統夜の問いにメアリは複雑な表情で答えた。

雄二「不思議なものだな・・・明久達から聞いたが・・・統夜・・・
大変だったな」

翔子「・・・特殊過ぎる・・・」

明久から事情を知った雄二と翔子は啞然としていた。

シア「冥界つて種族は限られているの？」

メアリ「ええ。太古の昔にいた稀少戦闘種族である『冥族』と呼ば
れる種族しか出来なかったの・・・」

ネリネ「その冥族と呼ばれるのは・・・どのようなものですか」
メアリ「別名『冥王族』と呼ばれる存在で・・・冥王の名を冠した能力を持つと言われていたの。冥王スキルと呼ばれる能力を・・・」
シャロ「それって・・・私達を持つトイズのようなものですか？」
メアリ「そうね・・・トイズはそれなりに知っているけど・・・似たようなものね」

冥族について昼ご飯を食べている人達に説明し、シャロが冥王スキルを自分自身が持つトイズと似たようなものなのかを聞いたが似たようなものだと言われ、メアリは答えて、トイズを持つミルクイホームズは納得した。

統夜「で・・・その冥族さんは生きてるのか？」
メアリ「太古の昔に滅びたわ・・・」

それを聞いた統夜は現在の冥界はどのような種族が統べているのか気になった。

統夜「冥族無しだったら・・・現在はどんな種族が統べているんだ？」

メアリ「悪魔の力を持ち・・・魔王の如く力の化身である稀少戦闘種族『魔族』よ」

明久「怖い種族だね・・・」

雄二「化け物過ぎるだろ・・・」

はやて「恐ろしい種族だな・・・」

ダイチ「(恐ろしい世界の手先になっていたのか・・・タイガ・・・」

零斗「・・・」

これを聞いた一同は冷や汗を掻いた。下手すればチート級と覚えて

しまう程の力を持っているのかもしれないのだから・・・
その内ダイチは冥界の混沌にいるタイガの事を考え、零斗は統夜を
見て何かを考えていた。

アリス「零斗？今統夜君を見てたけどどうかしたの？」

零斗「いんや・・・あいつでも冥王になれるんじゃないかなって思
つてさ・・・」

アリス「あゝ・・・聞いていれば冥界って・・・力で統べているっ
て感じがするし・・・でも統夜君は冥王にならないと思うよ」

零斗「それもそうか・・・」

統夜を見ていた零斗は冥王になれるんじゃないかなと思っていたが
アリスはならないと返した。

メアリ「これで冥界の王・・・冥王に関する事はお終いね」

統夜「ありがとう。いい勉強になったよ。勉強と言えば・・・達哉・
・・・月に関する勉強やってるか？」

達哉「おいおい・・・まあ・・・確かにやってるはやってるが・・・
難しいね」

フィーナ「将来月王になるのだから・・・弱音を吐かない」

統夜「やる事を終えたんだ・・・そっちに集中したらどうだ？学問
も大事ですぜ？次期月王様」

達哉「いや・・・まだ残ってるだろ・・・修羅と冥界が・・・」

それを聞いた統夜はフツと笑みを浮かべた。

統夜「そうだったな・・・イグニスもいるが・・・」

明久「止めないといけないね・・・あの人を・・・」

統夜「ああ・・・セイラの尻拭いをするっていうのは癪だけど・・・

」

はやて「せやな・・・私達もいる事を忘れたらあかんよ」

統夜「分かっている・・・やる事が多いぜ・・・」

鮮華「そうですね・・・私も頑張りますから・・・」

はやての言葉に肯定しながら答えた。

修羅王デュークと最強の英雄イグニス、混沌のマガキという存在を思い出しながら・・・

それから昼食を食べ終え次の授業の準備の為に屋上から出て行った。

放課後になり統夜と稟という久し振りの組み合わせで帰っていた。

統夜「久し振りだな」

稟「そうだな。楓達はスーパーに行ってるし」

統夜「主婦属性の人達はそんなもんだ・・・はやてやカナ、プリムラが当て嵌まるかな」

住宅街を二人で歩いていると一人の青年が現れた。

青年「見つけたぜ!!!土見稟!!!お前を殺せばハーレムが築かれるんだ!!!早速消える!!!」

速い動きで稟の懐に移動し拳にオーラを纏い攻撃しようとしたが・・・

統夜「はい!時間切れ!」

拳を受け止めた統夜は青年を地面に叩き落とした。

青年「貴様も・・・俺のハーレム計画を邪魔するつもりなのか!!!」

この世界に転生してシアとネリネ、フィーナという可愛い美少女を手籠めにしようと考えたのに・・・」

統夜「お前・・・俗に言う・・・転生者か？」

青年「そうだ！！今のだけじゃないぞ！！こんな事も出来る！！」

青年が突然大きな狼人間に変身した。

これを見て稟は驚いたが、統夜は全然驚いていない寧ろ呆れていた。

青年「どうだ？驚いたか？ワンピースに出てくるイヌイヌの実・・・モデル”狼”の力を！！」

統夜「いんや・・・呆れてるだけだ・・・」

青年「貴様あ！！この力の恐ろしさを見せてやる！！」

青年は突進し統夜に襲い掛かったが上へ跳んで避けられ壁に大きくぶつかり粉々に破壊した。

その後統夜を追うように上へ飛翔した。

粉々になった壁を見た稟は青ざめた。もし避け無かったらああなるんじゃないかと・・・

統夜「破壊力だけは認めてやるぜ・・・だが・・・」

空中で刹那で青年の懐へ移動し右拳に妖力を纏わせ顔を殴り地面に叩き落とした。

青年「ぐふっ！！」

統夜「力はあっても・・・戦闘経験が少ないガキじゃ倒せないぜ・・・神様から貰っても活かせないようじゃ・・・無理な話だ」

青年の方へ近づき右手を開き顔面に触れ・・・

統夜「干渉・・・破壊・・・虚無・・・消滅せよ・・・偽りの技能よ・・・」

そう呟いた瞬間青年は元の人間形態に強制的に戻った。
今の事態に青年はパニツクに陥った。

青年「な、何をしやがったああああ!!!」

統夜「お前は属性魔法を知らないようだから教えてやろう・・・俺が使ったのは稀少属性である干渉と破壊、虚無の三つの属性を魔力と霊力を用いて転生した際神から貰った能力を破壊し・・・無にしたのさ。ま、壊せない存在もいるがな」

それを聞いた青年は信じないのか先程やった狼人間に変身しようとしたが出来なかった。

統夜「あんましここの世界を甘く見たら死ぬぞ？噂じゃ・・・お前のような存在を輪廻させる『転生者殺しゼロ』が来るかもな・・・」
青年「な、なあ・・・元に戻してくれよお!!!？他の能力も試した事が無いのに!!!」

統夜「無理。無にした時点で戻せん・・・速く行動しないとやって来ちゃうよ〜」

統夜の即答に青年は顔を真っ青にしながら走って逃げたとさ・・・彼の行く末は転生者殺しに捕まって輪廻されたとかされなかったのか・・・それは彼のみが知る。

事が終え統夜と稟の二人は近くの公園に行き自動販売機でジュースを買って飲み始めた。

稟「お前がやった術って普通の人間や特殊な人間にも出来るのか？」

稟の問いに・・・

統夜「出来るっちゃ出来るけど・・・転生者用に考えた術だから・・・元々ある人のレアスキルやトイズ、実験で発現したレアスキルには0に近い。転生者のような神から貰ったスキル等は確実に消せる」
稟「なるほど・・・達哉から聞いたけど・・・新しく入った二人の教官には？」

統夜「難しい。無理だろ。相手が相手だし・・・それに・・・このような術はあんまし使わないようにしてんの。外道な転生者には使うけど」

統夜の言う通りシャルやレオン、ユウカのような転生者相手には厳しく、神から得たスキルを自分のものに行っている可能性がある為、確率は元々ある人のレアスキルやトイズ、実験で発現したレアスキルと同等に0の可能性がある。

仮に干渉出来たとしても一定時間の封印しか出来ない。

稟「そうなんだ・・・あのような転生者って出てくるのかな？」

統夜「さあな・・・分かったら？反神魔界の連中以外にお前を消す転生者もいる・・・神から貰ったもんをそのままにしてる奴よりそれを自分のものにする為に鍛える転生者は好きだ・・・すまん・・・話が変わってしまつて・・・今のお前は弱い・・・だけど・・・努力をすればするほど強くなる。彼女達を守りたいと想う心がある限り・・・何らかの苦勞してこそ人生は楽しい。俺だつて最初から強く無かつたんだし」

稟「統夜・・・」

統夜「一人で抱え込む事は決して強さとは言えん・・・自分に差し出される誰かの手を借りる事も大事だ・・・絆を否定し自分だけが一番凄く特別な存在と思つている時点でそいつの未来は破滅しか訪れない・・・ユルゲン「フォル」クリューゲルやセイラ「シュトラ

ウトのようにな」

統夜の話を知っている稟は徐々に変わっていきこうと決めたそうな・

稟「お前も最初から強かった訳じゃ無いんだな・・・」

統夜「まあな・・・最初はフェイトの足を引つ張ってたっけな・・・アルフに怒られた事が懐かしいや・・・」

ジュエルシード事件でフェイトとフェイトの使い魔で狼のアルフに協力していた頃を思い出し懐かし笑いをしていた。

稟「最初は負けが多かった？」

統夜「まあな・・・なのはや守護騎士ヴォルケンリッター達との出会いも経て・・・徐々に強くなり始めたのさ・・・自分一人で強くなった訳じゃないとね・・・」

稟の問いに苦笑しながら答え、出会いと自分一人で強くなった訳じゃない事を教えた。

稟「成長して現在いまがあるか・・・もう一つ聞きたいが・・・いいか？」

統夜「何だ？」

稟「あの転生者に対して言った『転生者殺しゼロ』というのは・・・」

統夜「ん・・・詳しい事は教えないけどあいつのような悪い転生者を倒す存在という事だけしか言えん」

稟「そうか・・・」

転生者殺しゼロの存在が気になったのか統夜に問い掛けたが簡潔に

説明されて終わった。

統夜「悪いな・・・おっ・・・もうこんな時間だ・・・お前の家に寄ってから帰るぞ」

稟「何でだよ？」

統夜「んっ・・・ちよつとな・・・」

統夜の考えに？を出しながらも芙蓉家へ帰った。

稟「ただいま」

統夜「お邪魔すつぞ」

ドアを開け玄関から入った。

楓「お帰りなさい。稟君。いらっしやい。統夜君」

稟「ただいま。楓」

統夜「お邪魔してるぜ。ここに親馬鹿二人いるだろ？」

楓「はい・・・います・・・」

楓に神王と魔王の二人がいる事を問い掛けたが苦笑している事を教えた。

いる事を聞いた統夜は分かりきっていたかのように笑みを浮かべた。

神王「おっ！稟殿に統夜殿じゃねえか！！」

魔王「お邪魔してるよ。稟ちゃん。統ちゃん」

稟「やつぱりいたんですね・・・おじさん・・・」

統夜「てかこの人達二人ここに居候させたらよくね？マジで」

稟は疲れたように呟き、統夜は神王と魔王の二人を居候させた方がいいと思ひ呟いた。

真剣な表情になった稟を見て両王も真剣な表情に切り替えた。

稟「俺・・・蒼穹の騎士団に入り鍛えたいのですが・・・どう思いますか？」

稟の言葉を聞いた両王は驚愕な表情に変わった。

魔王「どういう事だい？統ちゃん」

魔王に昼休みに決めた事と転生者と呼ばれる青年が稟に襲い掛かった事を話した。

神王「なるほどな・・・転生者が稟殿を襲い掛かって来たと・・・確かに統夜殿やネリツ子の言う通り・・・人族が王になる事に反対している連中にはいる・・・転生者は噂には聞いていたが・・・本当にいたとはな・・・」

魔王「そうだね・・・統ちゃんがいたから何とかなつたからいいけど・・・その転生者はどうしたんだい？」

統夜「魔力と霊力を用いた干渉と破壊、虚無を用いた魔法で神様から貰ったスキルを全て破壊し無にしたよ。あいつはどのみち・・・『転生者殺しゼロ』に捕まるがな」

神王と魔王は稟が王様になる事に反対している人達がいる事は否定しなかった。

魔王の問いに転生者にある神から貰ったスキルを消した事を答えた。『転生者殺しゼロ』の言葉を聞いた両王は神妙な顔つきになり始めた。

魔王「彼なら納得だ・・・」

稟「おじさん達も知っていますか？」

神王「ああ・・・転生者・・・悪さをする転生者限定だが・・・あいつらを輪廻させるのが目的だ」

魔王「彼だけじゃ動かない・・・彼以外にも仲間もいる・・・実際に見た事は無いんだけどね・・・彼らを」

魔王は苦笑しながら答えた。

統夜「知ってたんだ・・・で・・・どうするの？両王さん。俺は許可しているからいいけど・・・」

統夜に振った両王は笑みを浮かべこう言った。

神王「俺は構わないぜ！！」

魔王「そうだね。私も構わないよ。稟ちゃんが決めた道なんだから・・・頑張つてね」

稟「はい！ありがとうございます！！」

両王に頭を下げてお礼を言った。

その後統夜と稟の二人は教官であるレオンとユウカがいる寮へ移動した。

レオン「ほう・・・こいつが新しく入った・・・私の名前はレオン・バステッドだ」

ユウカ「噂の神魔王候補が入るとは・・・珍しいですわね。ユウカ・カザキリです。よろしく願いますわ」

稟「土見稟です。よろしく願います」

偶然レオンとユウカの二人が寮のリビングにいた為、お互い自己紹介をしていた。

尚事情は自己紹介の前に話し終えている。

レオン「私が教官だが・・・最初は天川達に鍛えて貰った方がいいぞ？私のハードな修行は今のお前では無理だ」

稟「それはどういふ・・・」

統夜「簡単に言えばお前のような普通のやつがやれないって事だ。だから俺達が指導するって感じた・・・」

レオン「その通りだ。最初は天川達・・・徐々に慣れ始めたら・・・私の修行にシフトする」

稟「分かりました。ありがとうございます」

ユウカ「私達以外に転生者がいたのは予想の範疇ね。転生者ネタって作者は大丈夫なのかしら？」

ま、まあ・・・そこらへんは大丈夫だと思う・・・多分・・・

レオン「そこは自信を持ってほしい・・・その転生者の神から貰ったスキルを干渉魔法で消滅させるとは・・・」

ユウカ「私達転生者にとってはチートかもしれないわね」

統夜「いや・・・教官二人には出来ないと思いますよ。ほら・・・スキルを自分のものにし・・・レベルが高いから・・・そもそもあれは霊力も必要ですし」

レオン「この世界はそういう属性を使ったものがあるのだな・・・

ユウカ「干渉以外に・・・空間や創造、破壊、虚無、封印、毒、時間、重力、幻影、音波のような稀少属性がある事に驚いたわ」

レオンとユウカの二人は属性魔法に驚きを隠せずにいた。

統夜「それらを扱えますがまだまだです」

レオン「今日はもう遅い・・・帰って休むといい。明日も学校だろ？」

稟「はい」

レオン達と別れた統夜と稟は寮から出た。

統夜「これから大変だな」

稟「これからよろしくな」

統夜「ああ。まあ・・・今んとこ忙しく無いから修行に入るけどね・・・」

稟がこれからよろしくという想いを込めて右手を差し出し、統夜はそれに応えるように右手で握手をした。

蒼穹の騎士団に土見稟が仲間になりました。

第五十六話 『月王候補と神魔王候補って親馬鹿になったら候補から王へランクアップ』

ネタバレ満載のイメージED3を先に流します。

イメージED3 『Wired Life』

黒い場面が光り出し蒼に染まった青空に変化する。

アドヴァンスメサイアを纏い右手にサーディオンを手にした統夜の画像が上へ流れるようにスライドされ、滅正を左手に持っているイグニス画像が下へ流れるようにスライドされる。

間奏が終わった後、統夜、イグニス、統夜（全てを解放した形態）、イグニス（真ルシファー）の順に喜怒哀楽等の表情が映し出される。ソルジャー時代に撮られた統夜とイグニスの写真が繰り返されるように下から上へ流し始めた。

黒いワーム状のトンネルを進む内に？、？、？と表示された後は遊輔、達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久、はやての順に蒼いラインが円を描くように引かれる。

左に顔を向けている紅のマントを羽織り髪が銀髪、瞳が真紅、瞳孔が縦になる吸血鬼を凌ぐ強さを持つ解放形態である真祖の統夜、背中から羽の形が機動ウイング状の五対十翼の翼が生え髪の色が白銀に輝いた銀髪、瞳の色が銀色になる真ルシファーの進化形態の煌天使の統夜、覚醒される背中から真紅の蝙蝠状の五対十翼の翼を生やし、髪の色と瞳の色が漆黒の髪に血のような赤い瞳に変化し、肌が褐色肌になる魔人化の統夜の順に左から映し出される。

その後にフェイトとエアリスの後ろ姿が映し出される。

右に顔を向けている普通のイグニス、背中の中右部分から片翼を生やした形態のルシファー化のイグニス、背中から五対十翼の漆黒の翼、髪の色が金髪、瞳の色が虹色の姿になる真ルシファーのイグニスの順に右から映し出される。

紺や水色等の青の系統のカラーが映し出される。

統夜の手に持たれたセイヴァー・ロード・サーディオン（ロード極限）、イグニスの手に持たれた滅正が映し出され、最後は向き合う形で映し出される。

その後に混沌を統べるマガキと謎に包まれたカシム、謎に包まれ目的が不明である剣咲剣が映し出される。

背中を向けている統夜、同じく背中を向けているイグニスのイラストが映し出され、その後背中越しの統夜とイグニスの画像が映し出された後二人は人影が変わる。

最後は紺や水色等の青の系統のカラーが統夜の持つ蒼炎に収束され消え画面が真っ暗になる。

今回のHERO'S EPISODEは

稟「俺と達哉は王様候補だけど・・・出来る事をやろう・・・あいつらの力になりたいから。」

稟「次は黒騎士ネクサスの話だな。その人物が文月バーベナ学園の生徒だったとは知らなかったな・・・」

稟「彼が何故統夜とイグニスを憎む理由が解明される」

稟「今回は『黒騎士ネクサス』 テイクオフ」

番外編 『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（前編）』 （前書き）

イブニングゼロさんの作品である魔導戦記リリカルなのはA n o t
h e r w o r l dとのコラボです。

地球によく似た別の世界で蒼穹の死神と翼の姫君が仲間と共に大暴
れする。

番外編 『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（前編）』

番外編 『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（前編）』

ある日統夜と遊輔、はやて、華琳の四人は魔王フォーベシイに突然呼ばれた。

何をするのかも言われてない為、碌でもない事なんだろうなと四人は思ったそうな・・・

親馬鹿の片割れである為故か・・・

魔王「いやぁ・・・よく来たね」

統夜「で・・・何の用なんだ？」

魔王「それはね・・・神界と魔界、月が共同で並行世界を旅する次元転移装置を開発し・・・試作型が完成したんだよ！！」

それを聞いた統夜以外の三人はポカンとしていた。

この親馬鹿の片割れは何を言っているのかと・・・だが・・・統夜だけは興味があるのか笑みを浮かべていた。

統夜「興味深いな」

遊輔「お前なあ・・・」

はやて「胡散臭いもんに時間を取るだけ無駄やで」

華琳「そうよ」

遊輔達三人は統夜の興味津々に対して呆れていた。

統夜「無駄なもんか・・・世界は無限に広がっているんだ・・・是非行ってみたい」

魔王「流石は統ちゃんだ。見学したいならついて来たまえ！！」

魔王は魔界で開発した試作型の次元転移装置の所まで案内を始めた。

統夜「で・・・何でお前らまでついて来るんだ？」

遊輔「万が一お前が行方不明になったら文乃さん達ラバーズに何て言えばいいんだ？」

はやて「わ、私は・・・統夜がおらんのは嫌やから・・・事故でいなくなったら・・・」

華琳「べ、別に貴方がいないと面白い日常が過ごせないからじゃないからね!!」

遊輔は統夜ラバーズの心配、はやてと華琳は統夜が心配でついて来たこと。

統夜「これか？」

例の装置は魔界にしか無い為、魔界へ転移し、研究施設の中へ入った。

研究員「これは・・・魔王様・・・何のご用でしょうか？」

魔王「例の装置を見たいと言う人がいてね・・・いいかな？」

研究員「構いません」

研究員の許可も取れたので次元転移装置の所へ移動した。

次元転移装置の所まで案内され、実物を見て一同は口があんぐりと開き、言葉に出来ない程驚いていた。

そりゃそうだ。二世界と月の技術の結晶なのだから・・・

統夜「装置というより大きな鏡だな」

統夜の言う通り形が大きな丸い鏡のようなものだった。

統夜「形はどうあれ・・・凄いとしか言えないな」

遊輔「全くだ」

はやて「神秘的なものを感じるで」

華琳「素晴らしいわね」

四人は装置を見て感動していたようだ。

魔王「近くで見た方がよりいいかもしれないよ。大丈夫だよ。何も起きないと思うから」

魔王の薦めで四人は近くに移動し始めた。

この時彼らは予想もしない事態に巻き込まれる事となった。

統夜「大きいな・・・」

遊輔「あの鏡の部分に入る仕組みなのかな」

はやて「あれってなんで出来てるんやるか？」

華琳「興味深いわね」

次元転移装置の鏡部分からブラックホールみたいな黒い球体が具現し始め、突然地響きが起き始めた。

近くで見ていた統夜達は突然の事で驚き、遠くにいた魔王は驚いたが、冷静になり何があったのか研究員に通信を繋げた。

魔王「一体何があった!？」

研究員「そ、それが・・・原因不明で・・・こちらから制御が効きません!！」

連絡を入れたが研究員が制御しようと試みたが全く通じなかった。

次元転移装置からバチバチと電流が走る音が聞こえ、装置へ引きつけられる用に吸い込まれそうになった統夜達であった。

統夜「一体何がどうなってるんだよおおお!!!」

遊輔「知るかああああ!!!」

はやて「試作型ってこういうのがお約束なんかな?!」

華琳「知らないわよおおお!!!」

四人は吸い込まれそうになったが全力で走り、統夜は真ルシファアになって華琳を抱え、遊輔は死神化、はやては天使化になり、力を入れて飛ばうとしたが全く進まなかった。

魔王は四人が心配で駆けつけ彼らを引き寄せる引力魔法を発動して補助に入った。

魔王「ぐっ・・・これは中々キツイね・・・」

乗り切ろうとしたが吸引力は強くなりつつあり魔王の魔法が無意味になっていた。

統夜「てか吸引力強過ぎじゃね!?!」

遊輔「お前の属性魔法で何とかならないのか?」

統夜「重力系統か空間系統ならいけるが・・・やってみよう」

華琳を片手で抱え空間と重力を混ぜ合わせた重力空間を作ろうとした矢先・・・

はやて「きゃああああ!!!」

統夜「へぶっ!!!」

徐々に強くなる吸引力に負けたはやてのお尻をモロ顔面に受けてし

まい、黒い球体の中へはやてと一緒に統夜と華琳は入りそうになつたが・・・

遊輔「くっ・・・」

右手にはやての足、左手に統夜の手を掴んで踏ん張り始めた。

引力のせいではやてのスカートがめくれ黒っぽい下着が見えたのは言うまでも無かった。

はやて「きゃあああああ！！！！み、見ないでええええええ！！！！」
遊輔「うおおおおお！！！！」

下着が見えても内心で煩惱退散しながら背中 of 翼を羽ばたかせ離れようとしたが吸引力が更に強くなり、近くにあつた柱が崩れ、遊輔の頭に運悪く当たり押し出される形で吸い込まれてしまった。

統夜「おiiiiiiii！！！！？そりやねえよ！！！！」

統夜達は黒い球体の中へ勢いよく吸い込まれてしまい、四人を完全に吸い込んだ後に球体は完全に消え、地響きも治まった。

魔王「彼らが・・・完全に吸い込まれてしまった・・・次元転移装置のチェックをしなくては・・・彼らの救出はその後だ」

一人になった魔王は声を漏らすと迅速に次元転移装置のチェックと共に原因を解明し始めたのであった。

統夜達を早く元の世界へ帰す為に・・・

その頃、地球に限り無く近い世界『アナザーアース』にある街沖繩

では・・・

エリー「おいしいわね」

赤毛の長髪に赤い瞳をした女性『エリー・ミスト・フォルティス・レイン』がかき氷をおいしそうに食べていた。

ブルース「暑い時にはビールが欠かせないな」

黒髪に青い瞳をした男性『ブルース・ファルガス』が呟いていた。

リーフ「・・・・・・・・」

青い短髪の男性の『リーフ・アストレイ』は空を見ていた。

エリー「どうかしたの？」

リーフ「何故か・・・何らかの出会いがありそうな気がするの・・・」

ブルース「出会い？」

ブルースがリーフが口にした出会いに対して疑問に感じていた。

エリー「出会いね・・・誰とだろ・・・」

誰かとの出会いを考えていたエリーだった。

統夜「ここは・・・」

遊輔「地球・・・か？」

はやて「それか・・・別の世界かもしれへんよ？」

華琳「並行世界かもしれないわね」

黒い球体に吸い込まれた統夜達は突然海が見えるビーチにいた。しかも四人は解放形態のままだったので宙に浮かんでいた。

統夜「もし地球だったら連絡出来る筈だ」

アドヴァンスフォンを取り出し達哉達に連絡を入れてみたが全然繋がらなかった。

はやて「どうやった？」

統夜「駄目だ・・・全く繋がらん・・・時空系列が違うのか・・・並行世界だからだと俺は思う」

華琳「思いつて・・・ん？統夜・・・前方から誰かが来るみたいよ？」

華琳に言われるがまま前を見ると青い髪の少女とオレンジ色の髪の少女、赤い髪の少年、白く小さい龍を連れているピンク色の髪の少女の四人が統夜達の方へ向っていた。

統夜「俺達が転移してきた事に感知してきたんだろうな・・・」

はやて「どうするん？」

統夜「コンタクトをとるしか無いっしょ」

そう話していると四人は統夜達の下までやって来た。

「な、なんで・・・」

「確かにはやてさんに似てるけど・・・髪の長さや色、身長は私達知ってるはやてさんとは全然違うわ」

「三人ともエリーさんと似たような翼が生えていますし・・・」

「一体何処から来たんでしょうか？」

四人が動揺している間に統夜達は地面に降り、解放形態を解除し、元の姿に戻った。

統夜「君らは一体何者なんだ？何故はやてを知っているのか」
はやて「せや・・・教えてくれへんかな？」

スバル「一応名乗っておきますね。時空管理局・港湾特別救助隊のスバル・ナカジマです」

ティアナ「同じく航空執務官補佐のティアナ・ランスターです」

エリオ「同じく自然保護隊のエリオ・モンディアルと・・・」

キャラ「キャラ・ル・ルシエです」

統夜とはやては自己紹介したスバル達の名前を聞いて怪訝な表情になった。

統夜「・・・エリオにキャラって・・・フェイトが保護してる子供の名前じゃないか！？」

はやて「(ナカジマって言うたら・・・ゲンヤさんの娘さんか何かかな?)」

スバル「どうかしましたか？」

統夜「いや・・・何でも無い。ここは一体何処なんだ？地球によく似た世界だけは分かるんだが・・・」

スバルと名乗った女性に何でも無いと誤魔化し、自分達が転移してきた世界の事を尋ねてみた。

ティアナ「ここは地球に近い世界の『アナザーアース』と呼ばれる世界です」

統夜「アナザーアース・・・別の地球って事か・・・」

遊輔「俺達とんでもない所へ来たみたいだな・・・」

はやて「せやね」

華琳「珍しい世界ね・・・」

ティアナと名乗った女性が答えた後、統夜達四人は彼女達四人に聞こえないようにボソボソと話し合っていた。

統夜「自己紹介が遅れたな・・・俺は天川統夜だ」

遊輔「俺は桜木遊輔です」

はやて「私は八神はやてと言います」

華琳「私は華琳よ」

スバル「とりあえず・・・どうする？ティア」

ティアナ「まあ・・・とりあえず・・・次元漂流者として私達が保護するしか無いわね」

スバル達に自己紹介を終えた後、統夜達を次元漂流者として保護するという事が決まった。

統夜「（管理局に保護されるとは・・・）」

遊輔「（まあ・・・セントクルセイダースのような事はしないだろう）」

管理局・・・セントクルセイダースに反逆した統夜と遊輔はスバル達は信用出来ると念話しながら思ったそうな・・・それから詳しい話をする為、近くの公園に移動した。

はやて「スバルさんやっただけ？私を知ってる理由って何なん？」

スバル「え〜つと・・・」

ティアナ「教える必要があるわね・・・簡単に言えば・・・貴方が時空管理局の機動六課の隊長をやっていたからです」

はやて「なるほど・・・並行世界の私やな・・・納得や・・・私・・・腐敗している管理局を辞めてるし・・・」
スバル達「えええええええーっ!!!!!!」

はやての爆弾発言を聞いた四人は声を上げて仰天してしまった。

そりゃ並行世界の部隊長だった人物が管理局を辞めているのだから・・・

統夜「無理も無いよな・・・てか・・・エリオとキャラってフェイトに保護されてるんだよな？」

エリオ「は、はい・・・そうですが・・・知っているんですか？」

統夜「まあな・・・ここは未来の並行世界と確信した・・・俺が知っているエリオとキャラはここまで大きく無いし・・・」

キャラ「という事は・・・過去から来たんですか？」

統夜「そういう事になるね」

驚きを隠せないエリオとキャラに質問したが統夜の推測が当たり、キャラから過去から来た事に対し肯定した。

ティアナ「で・・・管理局の腐敗で辞めたってどういう事ですか？」
はやて「普通でええって言ったのに・・・説明するな・・・あそこにいる統夜は元管理局員で特殊部隊に所属していた事から始まった・・・」

はやてが話そうとした時、二人の男性と一人の女性がやって来た。

エリー「その話・・・聞かせてくれない？」

そう・・・エリーとブルース、リーフの三人だった。

統夜「アンタらは……」

エリー「盗み聞きするような形でゴメンね。私はエリー・ミスト・フォルティス・レイン。よろしくね」

ブルース「俺はエリーの護衛をしている。ブルース・ファルガースだ」

リーフ「同じくエリーの護衛をしておる……リーフ・アストレイじゃ」

統夜「（何らかの護衛……お姫様か……何処かのお嬢様かな？）俺は天川統夜だ」

遊輔「俺は桜木遊輔。よろしく」

はやて「私は八神はやてと言います」

華琳「華琳よ。よろしく頼むわね」

エリー達が名乗った後、統夜達も名乗り始めた。

はやての名前を聞いたエリー達はスバル達四人と同じ反応を示した。今まで話した事をエリー達に教えた。

エリー「違う並行世界から来たのね……」

ブルース「しかも……過去から来たとは……こいつらが嘘をついているようには見えねえ……」

リーフ「腐敗した管理局を辞めているとは……醜態さを見れば当然かの……」

話を聞いたエリーは並行世界から来た事に驚き、ブルースは統夜達が過去から来た事に半信半疑で、リーフははやて達が自分と同じく腐敗した管理局を辞めた事に同情していた。

エリー「帰れる方法は無いの？」

統夜「無いが……諦めた訳じゃないぜ……何処かにある筈だ」

エリー「頑張つてね。はやて。話の続きだけど……」

はやて「構いませんよ」

はやては静かに語り始めた。

エリー達なら信頼出来ると信じて・・・

当時統夜は仲間である達哉と明久、憧れかつ上司のイグニスが最強の特殊部隊『ソルジャー』に所属していた。

オーバーSランクの集まりであり魔法だけじゃなく剣術や銃術、体術を用いたものを使い、気力を用いた気功術等を使うソルジャーは魔法主義である時空管理局にとっては恐怖であり妬みでしか無かった。

彼らの活躍は管理局の中で大きく憧れる人が多かったが魔法主義のベテランや上層部にはいい目で見られず野蠻としか見られなかった。そんな中犯罪組織ウータイとの戦いを終わらせる為に動いたソルジャーに悲劇が起きた。それはセイラの独断でアルカンシエルを発射しソルジャーを爆弾代わりにしてウータイを壊滅させた。

情報操作し嘘の情報を流したセイラが大手柄をとり、階級が大將に上がった。

ソルジャーは統夜と達哉、明久、イグニスの四人以外は死亡しており、その内生き延びた統夜は重傷を負いイグニスコピーの実験台を受けた。

この事件がキツカケでイグニスは変貌し全ての人類を憎み出し始めたのは言うまでも無かった。

セイラが大將になってからデバイス技術は大きく変化しアーマードデバイスとドライバーデバイスというタイプのデバイス開発を始め、過度な違法実験やロストロギア収集もやり始めた。

自分に従わない人間を無実の罪で犯罪者に仕立て上げたりやロストロギア強奪等をしている管理局によって苦しめられている各次元世界に希望と同時に管理局に絶望を与える蒼き死神が降臨した。

元ソルジャーの統夜の反逆によって違法実験を受けた人達が救出され、無理矢理強奪されたロストロギアや品物を奪還された。

統夜の他に瑠璃の軍神こと元ソルジャーの達哉も加わり二人で反管理局運動を行っていたが二人では限界がある為小規模な事しか出来ない状態なのだ。

統夜の活躍に管理局はなのはとフェイト、はやて、ヴォルケンリッターに召集をかけ、蒼穹の死神の調査を出没する英都で調査するよう命じた。

英都で調査していた時に統夜と再会し、戦いを始めた。彼が定められたルールを守り最後に立っていたのははやてが勝利を収め聞きかたつた真実を統夜から聞いて、管理局の腐敗に怒りを感じ信じていたものが一瞬で崩れ去った。

真実を知ったのははやて達は管理局を辞め、反管理局運動を行い、遊輔や零斗と言った仲間達が集まり始めた。セイラ率いるセイントクルセイダースと管理局の二つに分離させる事に成功した。

統夜は仲間達と共にセイラを倒し、セイントクルセイダースを崩壊させた。

セイラとの最終決戦で統夜は真ルシファールとヴァンパイアルシファール、遊輔は死神化、はやては天使化の力に目覚めた。

だが・・・彼らを倒したのはいいが修羅と冥界の混沌、イグニスと呼ばれる存在がいるのだから・・・

はやて「これが・・・私がいた世界の管理局と私達が行ってきた事の全てや・・・」

今までやった事を話し終えたのははやては顔を俯かせ悲しみが入り混じった表情をしていた。

今まで信じていたものに裏切られ、最愛する統夜が同じ管理局に殺されかけた話を思い出したのだろう・・・

リーフ「これでは・・・犯罪組織と変わりないじゃないか！！！管理局の為に戦っている者を食い物にし・・・爆弾代わりにするなど・・・」
ブルース「スターラルガより性質が悪いぜ・・・」
エリー「これは明らかに絶対正義じゃない・・・悪夢よ・・・人間のする事じゃないわ・・・」

エリー達三人は怒りの表情で声を出した。

自分達が狙われているスターラルガよりドス黒い組織になっていたとは誰も予想していなかった。

偽りの秩序で統夜達の人生を狂わせ、騙し、自分達の行動が常に正しいという考えにエリーは怒りで拳を震わせていた。

スバル「・・・・・・・・」

ティアナ「・・・・・・・・」

エリオ「・・・・・・・・」

キャロ「・・・・・・・・」

スバル達は同じ管理局員として彼女達のやり方に怒りを感じていた。味方であるソルジャーを爆弾代わりにし切り捨てる外道な行為や過剰な違法実験に手を染めている事は絶対に許されない行為だ。

自分のエゴで統夜達の人生を狂わせ、イグニスが人類全てを憎ませるキツカケを作り管理局の腐敗の原因ともなった。

最高評議会のやり方より酷く、自分達が解決した『JS事件』の首謀者であるジェイル・スカリエッティの方がマシだと思ったそうなの・・・

彼女の独断で自分の誘いを断ったメアリの両親を殺害するなど絶対正義の組織がやる事では無い。

エリー「貴方・・・辛く無いの？」

統夜「辛く無いと言えば・・・嘘になる・・・仲間を失い・・・全てを絶望に満ちた世界に塗り替えようと思った・・・それは間違いだから・・・」

ソルジャーの仲間を失った憎しみはあったが、そいつらは納得するのか？否、納得しない。何故なら死んだ仲間は自分の事を忘れずに生きる事が正しいと思ったからだ。

統夜「絶望は・・・悪党共に与えればいいだけさ・・・この焰でな・・・」

右手から蒼炎を出し直ぐ消した。

エリー「その焰は・・・」

統夜「俺の特異魔力変換資質である蒼炎さ・・・精神を崩壊させ崩壊した魂を蒼炎が飲み込む・・・絶望へ誘う焰さ」

蒼炎の恐ろしさを聞いたエリー達はゾツとした。

もし蒼炎で燃やされれば精神崩壊され魂を奪われ兼ねないからだ。

スバル「天川君と桜木君、はやてさんの変化は何ですか？」

はじめて見つけた時の形態について問い掛けた。

統夜「ん・・・あれは墮天使の力・・・真ルシファーだな」

遊輔「俺のは死神化だ」

はやて「私のは天使の力や」

三人の答えにスバル達四人は口をパクパクさせて驚きを隠せないでいた。

スバル「テイ、ティア・・・本当にとんでもない人達を保護しちゃったね・・・」

ティアナ「そ、そうね・・・はやてさんが天使の力に目覚めている事に驚きだけど・・・」

エリオ「死神って・・・黒いローブに顔が髑髏のやつですよね・・・」

キャラ「い、イメージとは違いますね・・・」

四人の反応は当然であるが統夜と遊輔、はやての三人は苦笑していた。

統夜「まあ・・・天使は兎も角・・・墮天使と死神は冥界と呼ばれる世界に生息する戦闘種族だ」

エリー「す、凄いわね・・・貴方達がいる世界ってチートな集まり？」

統夜「ん〜・・・そうだな・・・氷を使い瞬速な剣使いとアニメやマンガを使う流派を使う男、スケベな気力使い、真面目な超力戦士、戦闘能力が高い馬鹿という仲間がいる・・・」

墮天使と死神が冥界にいる事を簡潔に説明した後、エリーに自分達がいる世界にいる仲間の事を教えた。

エリー「色々な人がいるのね・・・」

統夜「ああ。大切な人達もいるからな・・・」

その頃・・・アナザーアースにある荒野にて・・・

「はあ・・・はあ・・・ゼロからやっと撒いたぜ・・・並行世界へ

逃げて来たのはいいが・・・ここは何処だ？」

金髪のソフトモヒカンにピアスを付けた男が突然現れた銀色のオーロラから出て来た。

ゼロと呼ばれた存在から逃げて来たのか息が上がっており、ここが何処なのか分からなかった。

この男が齎すものとは一体・・・何なのか・・・それは本人しか知らない。

統夜達は彼女達が泊まっている温泉旅館に来ていた。

最初は野宿で構わないと思っただが、保護されている身でアナザーアースに関する情報はゼロに近い為従うしか無かった。

ホテルに案内された後、スバル達を知るはやてと合流し、統夜達の世界にいるはやてと目が合い、自分よりスタイルがよく、髪が膝裏まで伸びている事に声を上げて驚いたような。

跳ばされた統夜達の事を教え、はやても承認した。

アイマスに出てくる765プロメンバーと出会った統夜達はツッコミが入れ、驚愕した。

自分達が知っているものが実際にいる事に混乱はするだろう・・・

統夜「ここは不思議な世界だ・・・」

ご飯を食い終え、月が輝いている夜空を外から眺めていると隣にエリーが現れた。

エリー「隣いいかしら？」

統夜「構わないぜ」

エリー「貴方と私・・・似てると思わない？」

統夜「翼を持っている事か？」

エリー「それもあるけど・・・管理局に・・・運命を狂わされていた事・・・」

翼を持っていると答えたが違い、管理局によって運命を狂わされていた事を答えた。

統夜「何らかの実験をされていたのか？」

エリー「ええ・・・管理局が関わっていたクーデターによって姉と一緒に連れ去られ・・・あるロストロギアの力を与えられるという違法な実験で・・・」

統夜「（彼女から発する力はそれが原因か・・・）あるロストロギア・・・どのような力を持つんだ？」

エリーから発した力に違和感があったのがロストロギアの力という事が分かり、どのような力を持つのか問い掛けた。

エリー「闇の力・・・力が一気に強化されるものよ」

統夜「闇の力・・・ねえ・・・」

エリー「驚かないの？」

統夜「俺・・・力の大妖のバンパイアと墮天使の力を持つてるから・・・墮天使はイグニスコピーと呼ばれる実験で手に入れた・・・元々は吸血鬼だったけど・・・」

エリー「嘘・・・吸血鬼って・・・イグニスって確か・・・貴方の上司よね？・・・っ・・・まさか!？」

イグニスコピーの言葉で何かが分かって来たのだ。

統夜「そう・・・純血の墮天使であるイグニスの血を入れられたのさ・・・お陰で実験を受けてから一年間の記憶を失った・・・今は思い出しているが・・・」

エリー「真ルシファーと呼ばれる形態は実験の影響だった訳ね・・・
実は私も記憶喪失なの・・・実験の影響で・・・」

統夜は自分がイグニスコピーを受けた事を教え、エリーは実験の影響で記憶喪失になった事を教えた。

統夜「思い出せるといいな・・・そして行方不明の姉と会える事も・・・」

エリー「ええ」

エリーの記憶が蘇る事と行方不明の姉に会える事が出来るように励ました。

統夜「一つ気になった・・・実験の後どうなった？」

エリー「なのは達に助けられたわ・・・それから『フォルティス・レイン王国』の王女として暮らし・・・仲間達と共に旅をして・・・現在に至るわ」

統夜「やはりお姫様だったか・・・」

エリー「分かったのね」

統夜「雰囲気だね・・・」

雰囲気でフォルティス・レイン王国の王女という事が分かっていたのか素直に答えた。

統夜「王女が仲間達と旅に出て大丈夫なのかよ・・・まあ・・・そ
ちの方が面白くていいと思うがな」

エリー「そこらへんは大丈夫よ。今の私の視野は狭かったから・・・
自分に尽くしてくれた一人の人間が一人で苦しんでいた事に気づいてあげられないかった思いをした・・・だから・・・世界を見て見聞を広めようと思ったの」

統夜「……………」

統夜は黙って聞いていた。エリーの覚悟と真っ直ぐな想いを感じたからだ。

エリー「旅の途中で仲間が出来て嬉しいかな。一時期とはいえ……
統夜と遊輔、はやて、華琳も仲間だよ」

統夜「ありがとう。帰れる方法を見つけてあいつらんとこに戻らないとな……」

エリー「あいつらんとこって……仲間達？」

統夜「それもあるが……俺の大切な人達だよ……」

照れくさそうに右頬を指で掻きながら統夜ラブズの事を思い出しながら答えた。

自分を心配させたくないという想いを……

エリー「……統夜ってフラグ立て上手？」

これを聞いた統夜は吹いてしまった。

統夜「な、ななな……何でそんな事聞くんだよ!!!」

急にこれを言われてしどろもどろになり顔を真っ赤にして怒鳴った。

エリー「大切な人達って……恋人候補って感じがしたから……
違うの？」

統夜「違うない……」

エリー「その人が揺れる言葉か……何らかの行動で興味を惹かれるんじゃないの？」

統夜「うっ……」

エリーが言っていた言葉に心当たりがある。
復讐の為に戦っていた頃のカナや咲夜を心が揺れる言葉で説得し救った事や雪蓮とシャルに興味を惹かれた事を思い出した。

エリー「はやてや華琳の嫉妬は大きかった？」

統夜「大きかったな・・・死の狭間に彷徨う程に・・・」

エリー「その・・・ごめん・・・」

遠い目をして答えた統夜にエリーはまずいと思ったのかただ謝るしか無かった。

エリーさんよ・・・これがラバーズ持ちの運命さ・・・

その頃遊輔達はスバル達と話をしていた。

尚HERO's EPISODEの世界のはやてははやて(H)、
魔導戦記リリカルなのはAnother worldの世界のはやてははやて(A)と記しておく。

スバル「アーマードにドライバー、ガーディアンはそちらの世界では主流になってるんですね・・・」

はやて(H)「ガーディアンはロストロギアみたいなものやけどな・・・統夜はアドヴァンスメサイア、セイクリッドファンク、セイヴァー・ロード・サーディオンの三つを所持し・・・遊輔君はクリムゾンフレイムとペンドラゴブレイドの二つや」

はやて(A)「違う六年前ってそんな種類のデバイスが開発されてたなんて・・・驚きや・・・」

リーフ「トイズに気力使い・・・神界、魔界・・・面白そうな世界じゃな」

ブルース「月に人が住んでるって・・・すげえな。冷戦状態だった

のを月と地球の絆を結んだってのは驚いたぜ」

遊輔達はスバル達にデバイスや自分達の世界にある事を簡潔に教えていた。

これを聞いたスバル達フォワード陣はアーマードとドライバーが主流になってきている事に驚き、リーフは魔法以外の気力やトイズ等のスキル、神界と魔界の二世界に興味を持ち、ブルースはスフィア王国に対し興味を持っていた。

彼らにとって未知的なものであるため当然だが・・・

遊輔「まあ・・・統夜のお陰でもあるけどね」

ブルースの言葉に遊輔は統夜のお陰と答えた。

ティアナ「もしアーマードとドライバーが私達の時代にあつたら変わっていたかもしれないわね」

遊輔「まあ・・・そうかもしれないけど・・・アーマードとドライバーは身体を鍛えなきゃ意味無いよ。対Gの訓練やドライバーとのコンビネーション・・・一般の魔導師が扱える代物じゃないんだよ・・・魔法だけが全てで身体を鍛えないという考えでは・・・使いこなせない」

これを聞いたティアナは黙ってしまった。

アーマードとドライバーは全ての魔導師でも使えると思ったのだが、遊輔の言葉を聞いて身体を鍛えなければ使えない事を知ってしまった。

遊輔の言う通りアーマードやドライバーは強い力を秘めているがただ魔法が使える人が簡単に扱える代物ではない。各武装のチェックやスラスターの調整、ブースターを使用する為Gが掛る為身体を鍛えなければ使い物にならないからだ。

ドライバーはアーマードと同じだが、コネクト前での連携戦術も大事である為それなりに頭を使うのである。

要するにただ魔法が使えるからというだけで、身体を鍛えずアーマードとドライバーを使えば起動中にてGに耐えれ切れず失神する可能性が高いからだ。

尚アーマードとドライバーはハイスピードな戦いを求める人向けになっている。

エリオ「確かに身体を鍛えないと・・・取り返しがつきませんからね・・・」

スバル「アーマードやドライバーはただ魔法が使える人が気安く使えるものじゃないんだね・・・」

キヤロ「そうですね・・・」

遊輔「魔法が使えるって甘い考えでアーマードやドライバーを使ったら・・・そのデバイスが可哀想だ」

遊輔の言葉にスバル達デバイスを使う人は同意見だった。

デバイスは一種のパートナーみたいなものであるからだ。

はやて（H）「常に訓練は欠かせないって事やな。私自身も天使の力を制御する為に・・・鬼教官^{レオンとユウカ}二人によく扱かれてるで・・・」

レオンとユウカの顔を思い浮かべながらそう答えた。

ブルース「そいつは・・・ご愁傷さま・・・と言いたいが・・・自分の力は自分で責任持ってコントロールしないとな」

リーフ「そうじゃな。制御出来ない力は暴力でしか無いからの・・・」

ブルースとリーフは同情しながらもはやてを激励していた。

はやて（A）「ハイスピードなものやな・・・アーマードとドライバー・・・」

華琳「拡散構造相転移砲や輻射波動機構・・・様々な兵器も搭載されているわ」

遊輔「まあ・・・バリアジャケット型アーマードなら大丈夫だけど・・・初心者であるけど・・・難しいんだよな・・・これが」

はやて（A）「あるんやったらそれを先に言っただけで・・・」
遊輔「柔軟性重視だから・・・強度はそこそただけだね。体術を使う人に最適なんだよ」

はやて（A）「き、厳しいな・・・」

はやて（A）は眉を寄せ難しい表情になって答えた。

はやて（H）「そーいや・・・スバルって・・・ほむほむに似てると思わへん？」

スバル「へっ？ほむほむって誰ですか？」

はやて（H）「魔法少女まどか マギカに出てくる暁美ほむらというキャラや。まあ・・・声だけ似てるけど・・・寡黙でクールには程遠いな」

ティアナ「もしスバルが寡黙でクールになっていたら世界が崩壊するかもしれないわね」

スバル「ちよつと！？ティアア！？それ酷く無い！？」

ティアナの言葉にスバルが涙目になり反論した。

遊輔達も笑ってしまった。

スバルに寡黙でクールは似合わないと思ったからだ。

その頃銀色のオーロラから出て来た金髪のソフトモヒカンにピアス

を付けた男が破壊された留置所に来ていた。

「よう。お前は……」

ヨーデル「ヨーデルだ。お前は何だ？」

創造主「まあ……『創造主』^{クリエイター}って奴だ。本名は忘れちゃったけど」

創造主と名乗った男にヨーデルは胡散臭い男だと信用出来なかったが、それなりの力はある事だけは感じた。

ヨーデル「何をしに来た？」

創造主「ん？あんたらを釈放して世界を支配するかな……ここだったら俺は最強だ……アンタの願いを叶えてやってもいいぜ？」

ヨーデル「ある女の力と知術の石を我々の手で管理する為に……我々の正義を！！」

ヨーデルの言葉を聞いた創造主は笑みを浮かべ

創造主「いいぜ。なら俺がアンタにいいものを与えてやる。クリエイト……」

創造主が何らかの呪文を唱えると、黒い十字架が十数個、タッチパネル式の蒼い携帯電話、白い宝石が埋め込まれた真紅の十字架、蒼い龍が描かれた黒いカード、真紅の宝石が埋まったオレンジ色の十字架、黒い宝石が入ったピンク色の十字架のネックレス、金色の宝石が埋め込まれた白い腕輪が具現化していた。

ヨーデル「これは……？」

創造主「こいつは俺がいた世界にあるアーマードデバイスをクリエイトしたものだ。デストロイにフォーチュンエターナル、クリムゾンフレーム、フォーチュンブラスター、アストラルフリーダム、パ

「シヴァル、ジャツジナイトというデバイスをな」

これを聞いたヨーデルは興味深そうに待機状態のデバイスを見つめていた。

かつて統夜が使っていたフォーチュンエターナルとフォーチュンブラスター、遊輔が使っているクリムゾンフレイム、明久が使っているアストラルフリーダム、死んだ千秋が使っていたパーシヴァル、死んだ浩次が使っていたジャツジナイトが複製創造された瞬間であった。

創造主「兵隊も用意しないとな・・・ちょっと待ってる」

創造主が血液が入っている試験管を取り出し、何らかの魔法陣を十数か所描き、血を一滴ずつ垂らすと血液から人へ形成され始めた。

ヨーデル「素晴らしい・・・しかも・・・魔力がある・・・」

創造主「強化人間と呼ばれる存在だがな・・・アンタはフォーチュンエターナルとフォーチュンブラスターを使え。その他は人形に使わせる」

ヨーデル「分かった」

創造主「（いい駒が出来たな・・・支配した後は奴を始末すれば問題無い。ゼロと蒼穹の死神さえいない世界で・・・俺はやってやる！！）」

笑みを浮かべているヨーデルを創造主は見下した感じで見つめ冷酷な事を考えていた。

番外編『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（前編）』（後書き）

統夜「後編へ続く前に・・・本編より前に新たなキャラが先に参戦する」

遊輔「ヒントはスクライド・・・凄いのが来たな」

統夜「てか・・・作者・・・コラボはじめてだったけど大丈夫？」

まあね・・・俺なりに頑張ってみた・・・後編では劇場版ライダーに新しいライダーが出てくるみたいに参加するから

統夜「オーズやフォーゼみたいにか？」

うん。後編もお楽しみに」

番外編 『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（後編）』（前書き）

エリー「ナイフで戦うって……」

空の境界に出てくる両儀式のコスプレをしてナイフを軽く振っていた。

ブルース「おいおい……白衣に両手につけたマイクロマニピュレーターってな……」

ブルースはとあるの木原一族の科学者の服装になって呆れていた。

リーフ「これは何とも……言えん……」

リーフはガンダムUCに出てくるフル・フロンタルの格好をし溜息をついていた。

キララ「これ……何処かの軍人の服です……けど……悪い気がしません」

BLAZBLUEに出てくるツバキ・ヤヨイのコスプレをしており、何故か喜んでいた。

統夜「おいいいいいい!!!全部中の人ネタじゃねえか!!!」

はははは……いいじゃないっすか。

エリー「蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（後編）が始まるわよ」

番外編 『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（後編）』

番外編 『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（後編）』

統夜「生き返るな……」

統夜達は旅館にある温泉に入っていた。

「君は……違う世界から来た人達だったよね？」

一緒に入っていた銀髪に赤い目をし獣のような耳と尻尾を生やした小柄な青年が統夜と遊輔に話し掛けて来た。

統夜「ああ。で……アンタは？俺は天川統夜……よろしくな」

遊輔「俺は桜木遊輔。よろしく」

二人は小柄な青年に自己紹介していた。

剣「僕は影原 剣。よろしくね。エリーから聞いたんだ」

統夜「あのお姫様か……いい仲間を持ったな」

ブルース「こいつは人間と狼の霊獣族のハーフでな……身体能力は人間より高いが……純血より下だ」

遊輔「へえ……混血か……でも鍛えれば純血と互角になれるかもよ？」

統夜「修行すれば混血故の欠点も無くなるぞ」

剣「そ、そうかな？」

剣が人間と狼の霊獣族のハーフとブルースから聞いて二人は驚かず

修行をすれば純血と互角になるとアドバイスを贈った。

ブルース「ま、やってみる価値はあるよな」

リーフ「そうじゃな。種族で甘く見ていると痛い目に遭う・・・」

ブルースとリーフの二人は仲良くなっている三人を見て笑みを浮かべていた。

剣「君はどんな種族？」

統夜「俺は・・・今んとこ・・・吸血鬼と墮天使の混血としか判明されてない」

剣「吸血鬼と墮天使の混血！？・・・ん？今のところって・・・」

遊輔「統夜は本当の種族を知らなくてな・・・俺は純血の死神だ」

剣「ええっ！！？死神い！！？僕は終わるの！！？」

統夜「んな訳無いだろ・・・死神は冥界に伝わる戦闘種族だ・・・お前の知ってる死神とは違う」

知っているブルースとリーフは黙っており、統夜が吸血鬼と墮天使の混血、遊輔が死神という事に剣は目を見開き獣耳と尻尾がピンと立ち身体を飛び上がる程驚いていた。

統夜「大丈夫か？無理も無いよな」

遊輔「ああ・・・」

剣「だ、大丈夫だよ。君達の世界・・・行ってみたいな・・・」

剣の言葉に統夜はこう言った。

統夜「行けたらな・・・知らんかもしれんが・・・俺達六年前の世
界から来たんだ・・・」

剣「ろ、六年前ええええええ！！！！」

統夜「一々驚くな。まあ・・・違う世界だからここと俺達の世界が繋がる可能性があるかもな」

驚いている剣に統夜は繋がる可能性がある事を教えた。
確率は0に近いが・・・

ブルース「俺達も驚いたが・・・もう慣れちゃった」

慣れたかのように笑いながら答えた。

剣「そうだ・・・僕達のやってる事に協力してもらえませんか？」

統夜「協力？」

剣「はい。765プロメンバーの護衛を・・・」

剣の依頼に統夜は・・・

統夜「いいぜ。ここでやる事無いし・・・恩返しもやらないと駄目っしょ」

即答で引き受けた。

聞いていた遊輔も統夜に同意していた。
すると・・・

「うにゃあああああ!!!」

何かに襲われたかのような女性の悲鳴が隣りである女湯から聞こえて来た。

統夜「これ・・・はやてだよな？」

遊輔「どっちのはやてなのか分からんな・・・」

聞こえて来た悲鳴に心当たりがあるのだが自分達の世界のはやてなのかエリー達が知っているのはやてなのか区別がつかなかった。

はやて（H）サイド

統夜と遊輔と別れて華琳と一緒に風呂に入っていた。

はやて（H）「気持ちええな〜」

華琳「そうね・・・」

はやては気持ち良さそうだったが、華琳ははやてのやや大きな胸と自分の胸を見比べ黒いオーラを出していた。

はやて（H）「どうかしたんか？華琳ちゃん」

華琳「な、何でも無いわよ！」

はやて（H）「何か・・・オーラが出とったから・・・ん？誰か来た見たいやな」

浴場にスバル達フォワード陣とはやて（A）、エリー、顔の左右に下がった空色の髪を三つ編み灰色の瞳をした少女、白髪に赤い瞳でウサミミをした女性、ティアナより濃いオレンジのショートヘアをした女性が入って来た。

スバル「先に入ってたんですね」

はやて（A）「（ま、負けた・・・もう一人の私に・・・）」

エリー「あら・・・」

「この人達が並行世界から来た人達ですか？エリー様」

「一人は知らないけど・・・髪が伸びスタイルが良くなったのはやて

さんだね」

「違う世界から・・・しかも過去から来たとは・・・」

はやて（A）ははやて（H）のスタイルを見て愕然とし、はやて（H）と華琳を知らない女性達は珍しそうに見ていた。

まあ・・・違う世界から来た自分に負けたらなあ・・・

華琳「誰かしら？」

エリー「はじめてだったわね。自己紹介しなさい」

キララ「私はキララ・フェルトレイヴと言います。よろしくお願ひします」

ヴィヴィアン「ヴィヴィアン・フルーレ・ミストレスだよ。よろしくね」

ミカーサ「ミカーサ・レギンレイヴ・水上月よ」

キララとヴィヴィアン、ミカーサと名乗った三人ははやて（H）と華琳に自己紹介していた。

華琳「華琳よ。よろしく頼むわね。あら・・・^{キララ}貴方・・・妖精か何かかしら？」

キララ「えっ・・・見ただけで分かるのですか？」

華琳「ええ。私はこう見えて霸王の魂と呼ばれている精霊でね・・・分かるのよ」

ヴィヴィアン「凄いね」

ミカーサ「何でもアリね・・・アンタ達の世界って・・・」

華琳とキララが話している所をヴィヴィアンとミカーサは見ながら温泉の中へ浸かった。

はやて（H）「まあ・・・何でもアリですが・・・厳しい世界でも

あります。デバイス技術が発達し・・・未知なる力を持つ人達がい
ますから・・・」

自分達が住んでいる世界にいる達哉や零斗を始めとした仲間達、ア
ーマードやドライバー、ガーディアンがある事を思い浮かべながら
ヴィヴィアンとミカーサに言った。

ヴィヴィアン「まあ・・・生半可な人達には合わないって感じがす
るよね」

エリー「そうみたいね」

ミカーサ「未知なる力ね・・・そこには何らかの種族とかいるの？」

ミカーサの問いを聞いたはやて（H）はこう答えた。

はやて（H）「少し長い耳が特徴の神族、神族より横に長い耳が特
徴の魔族、月に住んでいる人族を月人、冥界に生息している戦闘種
族の死神、速さと力に特化した稀少戦闘種族の墮天使、冥王になれ
る権利があり魔王の如く力の化身の稀少戦闘種族の魔人族、獅子や
犬の動物系統の妖怪、雪女のような自然や属性を操る妖怪、吸血鬼
のような異端系統の妖怪がいます」

種族を聞いた一同は驚愕していた。

もしそんな種族がたくさんいたら自分達を狙っている勢力であるス
ター・ラルガは勿論管理局を滅ぼせるのではないかと思ったそうな
・

すると剣の「ええっ！！？死神い！！？僕は終わるの！？」という
言葉が聞こえて来た。

はやて「あ・・・男湯に入ってる遊輔君は純血の死神やで」

ミカーサ「はあ！！？戦闘種族の死神なの！？アンタ達の仲間の一

人って」

キララ「み、身近にいましたね・・・」

ヴィヴィアン「死神って・・・不吉な存在なのに・・・不思議なものだね」

ミカーサは遊輔が死神という事に驚きながら声を上げ、キララとヴィヴィアンの二人は身近に戦闘種族である死神がいた事に苦笑していた。

エリー「でも面白いわ・・・様々な種族がいる事に・・・」

キララ「エリー様・・・その中に死神と堕天使、魔族、妖怪がいましたけど・・・」

エリー「全てが危険じゃ無い・・・そうでしょ？」

華琳「そうね」

エリーに言われ華琳は笑みを浮かべてそう答えた。

はやて（H）「あはは・・・どうかしました？未来の私・・・」

ワナワナと震えているはやて（A）に対し首を右に傾けて聞いてみた。

はやて（A）「何で・・・こつも違つんやあぁーっ！！！！身長とスリーサイズが！！」

自分のと別の世界から来たはやてと見比べて悔しがっていた。

エリー「はやて・・・」

はやて（H）「あ、あははは・・・育ってしまったもんはしゃあないやろ・・・」

はやて（A）「うちを慰めるとして・・・その胸・・・揉ませろお
おおおお！！！！！！」

暴走状態になったはやて（A）は温泉から出たはやて（H）を追い
かけ始めた。

はやて（H）「嫌やああああ！！！」

捕まらないように速く動いていた。

キララ「嫉妬してたんですね・・・」

エリー「この作者が改良させたんでしょう・・・」

作者に対して呆れ口調で言っていた。

ティアナ「可哀想なはやてさん・・・」

スバル「確かに変わってるよね・・・」

キャロ「今までより迫力がありますね・・・」

ティアナ達は黙って見守っていたが・・・

はやて（A）「無駄やく大人しく捕まっときい」

手をワキワキとさせながらはやて（H）に近づこうとしている。

これを見たはやて（H）は顔をニヤリと笑うと速い動きではやて（
A）の背後に移動し両腕で身体をホールドし・・・

はやて（H）「ええ加減に・・・しいいいやああああ！！！！！！
！！！！！！」

はやて（A）「うにゃあああああ！！！！！！」

はやて（A）にジャーマンスープレックスして気を失わせた。

はやて（H）「ふう〜・・・もう一人の私を変態にさせる訳にはいかへんしな・・・勘忍な」

エリー「雷を浴びせなくて済んだわね・・・」

スバル「あはは・・・」

はやて（H）のジャーマンスープレックスを見ていたエリーはレアスルインズ・ホルテックススキルである破滅の雷から発せられる雷を浴びせなくて良かったと思っただろうな。

はやて（A）の叫び声を男達を聞いて現在に至る。

キララ「怖いですね・・・」

はやて（H）「それぐらいせんとな・・・って温くなってる!!?」

キララ「あはは・・・ジャック・フロスト・・・氷の妖精ですから冷気で温泉が温くなりますから」

華琳「・・・納得はいくわね」

しばらくして温泉から出て、それぞれのメンバーは部屋に移動し眠りに入った。

それぞれが眠りについての間、統夜とはやて（H）の二人だけはまだ起きていた。

統夜「こっちと同じく管理局は悲劇を起こしていたな・・・」

はやて（H）「しかも六年後の世界や・・・エリーさんは大丈夫かな?」

エリーが心配なのか困惑な表情になって呟いた。

統夜「大丈夫だろう。彼女には仲間がいる……」

はやて（H）「そうやな……私達の世界……戻れたらええな……」

統夜「ああ……だが見つかるだろう……俺はそう信じてる。寝るぞ。俺達は剣から言われた護衛をやらなくちゃいけないんだからよ……」

はやて（H）に優しく言った後、二人は眠りについた。

翌朝、統夜達は旅館から出て移動用のバスに乗って765プロメンバーが行くロケ地へ移動していた。

中で別の世界から来た統夜達は珍しく見られ、質問攻めにあつた事は言うまでも無かつた。

ロケ地である浜辺に着き、それぞれ撮影の準備をしながら配置に付いていた。

統夜「順調に進んでるな」

遊輔「ああ」

765プロメンバーの撮影が上手く進んでいる事に安心していた。すると砲撃が放たれ照明と撮影機材が破壊され撮影は一時中止となった。

春香「な、何が……」

765プロメンバーの一人である天海春香が何が起こつたのかややパニック状態になっていた。

さっきの砲撃を知っているかのように統夜と遊輔、はやて（H）、華琳は何の砲撃かは知っていた。

そして砲撃を放つた連中が現れた。

ブルース「こいつが・・・」

リーフ「統夜達が言ってた・・・アーマードデバイス・・・」

統夜「デストロイ・・・」

キララ「さっきの砲撃を放った人が使っているデバイスですか？」

遊輔「ああ・・・だが・・・アナザーアースでデストロイは造れない筈だ。しかも・・・クリムゾンフレームにアストラルフリーダム、パーシヴァル、ジャツジナイトを纏っているぞ・・・」

キララがデストロイにやや脅えた感じで聞いてみたが、直ぐに答えアナザーアースで生産される事は無いと答えた。するともう一人の人物が上空から現れた。

エリー達は驚愕な表情で見えていたが、統夜だけはその人物が纏っているアーマーを見ていた。

ヨードル「また会ったな」

エリー「貴方・・・そのデバイスはどうしたの？」

ヨードル「とある創造主がくれたものさ。中々いい性能だ・・・捕まって貰うぞ。お前達の旅はここで終わりだ」

統夜が使っていたフォーチュンプラスターがフォーチュンエンターナルとドライバーコネクトしたドライブアーマードデバイスのエンターナルプラスターNを纏ったヨードルだったのだ。

統夜「終わる旅は何処にも無い・・・彼女の・・・エリー・ミスト・フォルティス・レインの旅・・・物語はまだ始まったばかり・・・仲間と共に歩み・・・全てを繋ぐ彼女たちの物語はここから続く・・・お前が止める権利は何処にも無い！」

エリー「統夜・・・」

ヨードル「貴様・・・貴様は一体何なんだ!!」

統夜の言葉が気に食わないのかヨードルは激昂していた。

そんな中アドヴァンスバツクルを腰に巻き、レイヴ式の魔法陣からアドヴァンスフューラーを取り出し、両腰のハードポイントに付け、両手に右手の部分が蒼色と左手の部分が金色の丸い宝石を備えた蒼い生地フィンガーレスグローブを嵌めていた。

統夜「異世界から来た戦士だ。覚えておけ！変身！」

アドヴァンスフォンに起動コード「000」を入力してENTERを押し「STANDING BY」という音声が響いた後、アドヴァンスバツクルのバツクル部にアドヴァンスフォンをセットする事により「COMPLETE」の音声が響き、バリアジャケットである上には蒼いパーカーを着て下は黒い長ズボンを穿き、七ヶ所（胸部、両肩、両腕、両足）に真紅のプロテクターを装備したものが展開された。

統夜に続いてエリー達もデバイスを起動していた。

遊輔「クリムゾンフレイム！ペンドラゴブレイド！」

アーマードであるクリムゾンフレイムとガーディアンであるペンドラゴブレイドを起動させた。

エリー「エンシェントプレイヤー！」

ブルース「アンセスターブルー！」

リーフ「フォルトレイヤー！」

キララ「ヴァレットミーク！」

それぞれデバイスを起動させ、エリーは真紅を基調としたカラーリングのソード、ブルースは手袋に回転刃が取り付けられた特殊なも

の、リーフはシンプルなサーベル、キララは真っ白な箒を装備していた。

スバル「ほへえ〜・・・カッコいい・・・」

エリオ「凄いですね・・・統夜さんは・・・」

ティアナ「アンタ達・・・見とれてないで行くわよ！」

デバイスを起動させ統夜のデバイスに見とれていたスバルとエリオにティアナは一喝入れた後、デストロイを纏った兵隊と戦い始めた。

剣「歩く武器庫って感じがするね」

ミカーサ「本当に厄介なものね。アーマードって」

ヴィヴィアン「でもさ・・・性能だけで決まるって流行らないですよ」

剣は手裏剣、ミカーサは拳、ヴィヴィアンは二丁拳銃型の魔導兵器『ケルベロス』を構えアストラルフリーダムを纏った兵士と戦い始めた。

統夜「さて・・・これぐらいやらせてもらうぜ・・・」

四枚のカードを取り出しアドヴァンスバツクルの中に挿入し隼とサイ、鷲、西洋龍を模したドライバーが召喚された。

統夜「さあ・・・絶望に染めようか・・・」

統夜はドライバー四体と共にパーシヴァルとデストロイ軍団に挑んだ。

はやて（H）「まさか・・・こんな形でもう一人の私と共闘出来る

なんて・・・」

はやて（A）「まあ・・・ええと思うけどな」

二人のはやてはジャツジナイトを纏った兵士に戦い始めた。

遊輔「お前にそれは扱えるかな・・・こいつはヘビーなんだよな・・・
・これがな・・・」

自分と同じクリムゾンフレイムを纏った兵士と戦い始めた。

エリー「行くわよ!!」

デバイスを起動させたエリー達はヨードルに戦いを始めた。

フォワードサイド

ティアナ「クロス・・・ファイア・・・シュート!!」
キャロ「フリード!!」

ティアナのクロスファイアシュートとキャロの竜であるフリードが放つ焔をデストロイにヒットした瞬間、ビームのシールドで無効化された。

ティアナ「嘘っ!!」

キャロ「何らかのシールドですね」

スバル「なら・・・」

エリオ「近接攻撃を・・・」

アタッカーであるスバルとエリオが間合いを短くさせデストロイに

向って直接攻撃しようとしたが、胸部にあるスーパースキュラと五指先端から発射する5連装スプリットビームガンの同時発射が二人に迫って来た為横へ緊急回避した。

スバル「黒いなのはさんみたいだ・・・」

エリオ「何か・・・なのはさんが使ったら似合いそうだ・・・」

ティアナ「そんな事言ってる場合？」

ティアナが二人を注意しているとデストロイを纏った兵士一人が倒されていた。

華琳「貴方達・・・デストロイは並大抵じゃなきゃ倒せないわよ」

自分の愛用武器である死神鎌『絶』を手にして厳しく論していた。

スバル「どうやって倒すの？」

華琳「ティアナとキャロの二人が仕掛けた後・・・貴方達がやるのよ。切り札・・・持つてるでしょ？」

華琳の言葉を聞いた四人は首を縦に振った。

五人が行動に入ろうとした瞬間銀色のオーロラが現れ一人の男が突進してデストロイ兵士をまた一人倒していた。

「ここは・・・あの人に言われて来て見ればドンパチ始まってな」

スクライドに出てくるカズマに似ているが前髪の所に朱のメッシュユが一線掛かっている青年が周りをキョロキョロと見回していた。

カズマ「ま、いつか・・・俺の名は天突あまつき カズマ・・・よろしく！

」

天突カズマと名乗った男は五人の制止を聞かずすぐさまデストロイ軍団へ突撃を始めた。

スバル「ちよつと！？無謀過ぎませんか！！？」

カズマのやり方に声を上げながら驚いていた。

スバル以外の三人も同じように驚いていたが華琳だけは違っていた。

キャロ「華琳さん？」

華琳「あの男は無謀だけでも・・・それなりの力を持っているわ」

カズマの力を見抜き笑みを浮かべていた。

向っているカズマの右腕が装甲で覆われ、背中には3本の赤い羽根が生え、人差し指を曲げてから中指を曲げと、順番に小指まで曲げ終えたら最後に音が軋むほど強く拳を握り始めた。

カズマ「衝撃の・・・ファーストブリットオオオオオ！！！！」

背中の赤い羽根を推進剤にし強烈な一撃をデストロイ兵士に放った後、次のデストロイ兵士に狙いを定め・・・

カズマ「撃滅の・・・セカンドブリットオオオオオ！！！！」

背中にある3枚のフィンの真ん中を分解しジェットブースター状に変化させて飛び込み、体を横に一回転させて拳を打ち込みデストロイのアーマーを粉々にして吹き飛ばした。

カズマ「抹殺の・・・ラストブリットオオオオ！！！！！！」

ラストとして残った1枚のフィンを分解しジェットブースター状に変化させて飛び込み、体を横に一回転させて拳を打ち込み次のデストロイに直撃させ倒した。

スバル「す、凄い・・・魔法無しで・・・」

華琳「（今の・・・シャルやレオン、ユウカと同じく転生者かしら？）」

カズマの戦い方を見ていたフォワードと華琳は驚いていた。

カズマ「ふっ・・・さて・・・次は・・・つとと・・・戻らねえと・・・」

華琳「待ちなさい」

戦いを続けようとしたが銀色のオーロラへ移動しようとしていたが華琳に呼び止められた。

カズマ「何だ？お嬢ちゃん」

華琳「貴方・・・どうやってここへ来たのかしら？」

カズマ「ある人物から頼まれたんだよ。赤い帽子に青いオーバーオールの人に。そんじゃあな!!」

赤い帽子に青いオーバーオールの男に頼まれた事だけを言い残し銀色のオーロラに飛び込むと同時にオーロラも消滅した。

華琳「まあいいわ・・・数も減って来た事だし・・・行くわよ!!」

ティアナ「ええ!!」

キャラ「はい！竜魂召喚！」

ティアナはクロスミラージユの銃身に魔力を収束し、キャラはフリ

ードを本来の姿である翼長10メートル以上の堂々たる大きさの竜に変化させ焔を収束させていた。

ティアナ「スターライト・・・ブレイカー!!」
キャロ「ブラスト・・・レイ!!」

ティアナの収束砲撃とフリードから放たれた炎熱砲撃が一つになりデストロイ兵士達は陽電子リフレクターを展開し防いだ。
二人はニヤリと笑みを浮かべていた。

防いでいた後スバルとエリオが移動しておりほぼ零距离まで迫り・

スバル「振動拳!!」

先天固有技能である振動破碎によって放出される振動エネルギーをマツハキャリバーと協力して拳周辺に圧縮しナックルスピナーの回転で螺旋動作を加えて対象に打ち込みデストロイの装甲及び武装を破壊して倒した。

エリオ「サンダーレイジ!!」

ストラーダの先端部に電撃を発生させ、デストロイ兵士に電撃を走らせスタンさせデバイスを待機状態に戻し、一突きをして倒した。
デストロイを倒したスバル達フォワードはデストロイ兵士達を倒したのか座り込んでしまった。

スバル「こういうのを相手にしていたんだね・・・」

ティアナ「だけど・・・性能に頼り過ぎていたようね・・・」

エリオ「これで終わりだといいですね・・・」

キャロ「うん・・・」

剣達サイド

兵士「……………」

アストラルドラグーンを射出し剣とミカーサ、ヴィヴィアンにオーレンジ攻撃を仕掛けたが素早い動きをする三人にかわされた。

剣「はっ！」

手裏剣をアストラルドラグーンのスラスタ部分に目掛けて投げ落した後

ミカーサ「はあ！」

剣が落としたアストラルドラグーンに拳で破壊していた。

兵士は右手にアストラルライフル、左手にアストラルオクスタンを構えて二人を狙い撃とうとしたがヴィヴィアンが持つケルベロスで相殺された。

ヴィヴィアン「そうはさせないよ」

剣「助かったよ」

ヴィヴィアンはケルベロスを連射しながら弾幕を張り、剣とミカーサは兵士に向い始めた。

アストラル兵士は胸部にある拡散構造相転移砲と両脇に抱えたアムフォルタスの一斉発射を移動している二人に放ったが避けられた。

剣「威力と性能は凄いけど……」

ミカーサ「当たらなければ意味は無いわよ!!」

アストラル兵士も動き出し、剣とミカーサとぶつかり合い始めた。

統夜サイド

パーシヴァルを纏った兵士は統夜に向って攻撃を仕掛けたが全く通用せず、押されていた。

残りのデストロイ軍はドライバー達に任せ、援護しながら倒していた。

統夜「そんなものかよ？俺が知ってるパーシヴァルの使い手には及ばないぜ」

白いリボルバー式のアドヴァンスフューラーでホーリーカリバーの斬撃を受け止め、両腿にあるハドラシユーターの発射口をもう片方のアドヴァンスフューラーの連射で破壊して妖力を纏った蹴りで吹き飛ばした。

その後、ファルコンとライノスが突撃を仕掛け直撃させ、イーグルとドラゴンは遠距離砲撃を放った。

統夜「さて・・・エクシードドライブコンビネーション・・・見せてやるとするか」

バックルに装着されているアドヴァンスフォンの画面にあるEアイコンを押した。

『Exceed Drive』

DIESS?からの魔力エネルギーを圧縮させ、ドライバー達にも圧縮されたエネルギーが回り始めた。

統夜「行くぜ・・・」

エネルギーを纏ったファルコンが光の翼でパーシヴァル兵士を切り裂いた後、前方にイーグル、背後にドラゴンが圧縮された魔力を三角錐状のポインターに変化させて放ち捕捉した。

統夜は上に飛翔し圧縮された魔力の他に気力と霊力、妖力、覇気を右脚に収束し、パーシヴァル兵士との間に重なったレイヴ式の魔法陣が現れ、ライノスは右の後脚を土を後ろへ払いながら力を溜め始め、圧縮された魔力は角に収束された。

収束された瞬間統夜はレイヴ式の魔法陣を通過して跳び蹴り、ライノスは強力な突進を同時に放ち、大爆発が起き、パーシヴァルは大破し兵士は倒れた。

統夜「これがお前の絶望だ」

片付け終えた後、他の所へ援護へ向かった。

はやて、sサイド

はやて(H)「凄いな」

はやて(A)「余所見してええんか?!わあっ!?!」

ジャツジナイト兵士はジャツジブラスターを二人に向けて放たれたが回避した。

その後ジャツジナイトを纏った兵士はセントオーシャンシステムを起動させ金が混ざった白いアーマーから白く輝いた白いアーマー

に変化した。

セイントオーシャンシステムを起動させた後、アストラルフリーダムを纏った兵士とクリムゾンフレイムを纏った兵士もそれぞれオーシャンシステムを起動させていた。

はやて（A）「色が変わった途端、速くなった!？」

ジャツジナイトの機動性に驚きつつも猛攻を防いでいた。

はやて（H）「せやけど・・・猿真似・・・使いこなせるのは無理な話や・・・援護お願いします」

はやて（A）「しゃあないなあ・・・弾幕張る事しか出来んけど・・・大丈夫？」

はやて（H）「大丈夫です」

ジャツジナイトがはやて達の所へ来た瞬間、両手に持ったナイトカリバーで斬りかかろうとしたが

はやて（H）「っそおい!!」

蹴りでジャツジナイト兵士の両手を上の方へ蹴りナイトカリバーを叩き落とし、兵士が落とした一振りのナイトカリバーを手にし一閃した後、一旦離れた。

はやて（A）「（もう一人の私って凄いなあ・・・）ブラッディダガー!」

離れたはやて（H）を確認した後、ブラッディダガーを放ち、今の攻撃で怯んだジャツジナイト兵士に直撃させた。

兵士「……………」

今の攻撃を受けても大したダメージにはなっておらずアーマーに破損している程度だった。

はやて（H）「見よう見真似やけど……行くで……」

ナイトカリバーの刀身に魔力を収束し始めた。

はやて（H）「夜月天衝！！」

刀身から超高密度の魔力を放出し斬撃そのものを巨大化させてジャツジナイト兵士を斬りジャツジナイトが大破し、そのまま倒れてしまった。

これを見たはやて（A）は啞然としていた。

はやて（A）「す、凄いなあ……今の……」

はやて（H）「これ……統夜の剣技を見て参照にしましたから……」

これを聞いたはやて（A）は「もしシグナムがいたら戦ってくれっ
て言いそつやな」と内心思ったそつな……

統夜サイド

剣「ぐつ……動きが」

ヴィヴィアン「攻撃力と機動性が上がるって……どんだけ……」

ミカーサ「速くて見えん……」

ジャッジオーシャンシステムを起動させたアストラル兵士の猛攻に三人は苦戦し、少々ボロボロになっていた。そんな時統夜が駆けつけた。

統夜「こいつは厄介だな・・・グラビティバインドショット！」

黒いマガジン式のアドヴァンスフューラーから重力弾を速く動き回るアストラル兵士に狙いを定めて狙い撃ち、超重力が掛ったバインドで動きを封じた。

増援として出て来たデストロイ兵が現れ、アストラル兵を守るように固めた。

統夜「うぜえな・・・ウエポンドライバーモード・・・起動！！」

セイクリッドファンクに搭載されたウエポンドライバーシステムを起動させた。

アドヴァンスファルコンからアドヴァンスセブンがAMソードを中心に合体し巨大な刀身になりファルコンウイングが鰐、残りのパーツは柄になる巨大剣に変形合体する「ファルコンブレードブレイカー」に、アドヴァンスライノスからライノススパイラルがサイの頭がコネクトされた巨大ドリルに変形合体する「ライノススパイラルドリル」に、アドヴァンシーグルからイーグルウイングと残りの武装とパーツが弓の形に変化させAMバスタードラゴンとAMランチャー、AMバスター、AMヴァリスを変形合体し精密射撃に特化した巨大ボーガンランチャーになる「イーグルバスターボーガン」に、銃身がドラグバスターキャノンとドラグスナイパーが三つの砲身として、残りのパーツと武装が巨大バスターキャノンに変形合体する「ドラグバスターキャノン」にそれぞれ変形した。

統夜はドラグバスターキャノン、剣はファルコンブレードブレイカ

ー、ミカーサはライノススパイラルドリル、ヴィヴィアンはイーグルバスターボーガンをそれぞれ構え、束縛されているアストラル兵士に狙いを定めた。

剣とミカーサ、ヴィヴィアンの三人は驚いていたが直ぐに表情を切り替えた。

アドヴァンスフォンの画面にあるEアイコンを押した。

『Exceed Drive』

ウエポンドライバー達にエネルギーが集まり出し、統夜とヴィヴィアンはドラグバスターキャノン、イーグルバスターボーガンを発射し周りのデストロイ軍団を一掃し、剣はファルコンブレードブレイカーを大きく振るいアストラル兵士に一閃し、ミカーサはライノススパイラルドリルの突きでフィニッシュし、大爆発が起きた。その後ドライバーは元の形に戻った。

遊輔サイド

遊輔「性能に踊らされては俺には勝てん!!!」

バーニングオーシャンシステムを起動しているクリムゾンフレイムを使っている兵士にオーシャンシステムを起動させていない状態で戦っていた。

兵士「フレイムファング・・・」

両腰にあるバインダーからフレイムファングを射出した後、両肩にある近距離用炸裂鉄鋼弾であるバーニンググレイモアを発射した。

遊輔「甘い！」

左腕にあるフレイムハンドで自身に迫って来るフレイムファンクを全て撃ち落とし、バーニンググレイモアを右手にあるペンドラゴブレイドで全て切り燃やした。

兵士「……………」

フレイムザンバーを両手で構え遊輔に斬り掛ったが、ペンドラゴブレイドで防がれた。

遊輔「同じクリムゾンフレイムを使っても……その力を引き出せないようじゃ……俺には勝てない！！！」

ペンドラゴブレイドとの鏖闘り合いでフレイムザンバーを破壊し、胸部に斜めの切り傷を入れて、両脚と爪先にエネルギー状の刃が発生する隠し腕が装備された武装のソードマニピュレーターで蹴りと連動して一部の武装を破壊した後、間合いを取る為後ろへ下がった。その後ペンドラゴブレイドを待機状態に戻した。

遊輔「見せてやるぜ……オーシャンシステムの使い方を……」

上へ飛翔し右手にあるフレイムザンバーで降下するように切り裂いた後、

遊輔「はああああ！！！」

右腕にある大型杭打ち機のクリムゾンブレイカーでアストラル兵士の腹部に六発撃ちこんだ後、軽く上へ上げた。

遊輔「まだまだだー!!」

両肩にあるバーニングクレイモアを全身に浴びせ怯んだ後、バーニングオーシャンシステムを起動し、金と銀が混ざった真紅のアーマーから赤く輝いた真紅のアーマーに変化させた。

遊輔「これが・・・俺の熱き一撃だー!!」

HCSを装填し終えた右腕のクリムゾンブレイカーを前へ突き出すように刺し六発撃ちこませ、兵士のクリムゾンブレイムが破壊され、ダメージを受け倒れた。

遊輔「悪いけど・・・クリムゾンブレイムはただの魔導師じゃ荷が重い・・・」

オーシャンシステムを解除し元の色になった。

エリーサイド

エリー達はヨーデルに苦戦していた。

ネオドラグーンとエターナルフェザーの連携攻撃、拡散構造相転移砲、高機動を用いた白兵戦等に四人は翻弄されつつあった。

エリー「あゝっ!!!何てもんを撃つのよ!!!」

ブルース「一つ一つがうっとおしい!!」

リーフ「オールレンジ攻撃に・・・高機動戦闘・・・」

キララ「これがアーマードの力・・・」

様々な武装に翻弄され、所々ダメージを負っていた。

ヨーデル「諦めたらどうだ？フォーチュンエターナルとエターナル
ブラスターがコネクトされたドライブアーマードデバイス・・・エ
ターナルブラスターNの圧倒的性能では無力」

勝ち誇っているかのようにエリー達を見下していた。

エリー「だから・・・それが・・・どうしたってのよ・・・」

ヨーデル「デバイス性能で決まるのだよ・・・我ら管理局が絶対に
正しいかのように・・・」

ブルース「くだらねえな・・・全く下らねえぜ！！テメエの言葉に
虫唾が走る！！」

ヨーデルの勝ち誇った態度にブルースは怒りを露わにし睨みつけて
いた。

ヨーデル「負け犬の遠吠えは見つともないぞ」

ブルース「テメエはただエターナルブラスターNの性能に頼ってい
るだけじゃねえか・・・」

エリー「だけど・・・私達は諦めない！」

状況が不利でも瞳には戦意を失っていないくエンシエントプレイヤー
を構えたエリー。

戦意を失っていないのはエリーだけでなく、ブルースとリーフ、キ
ララも同じだった。

ヨーデル「今の状況で何が出来ると・・・」

フォーチュンウイングを展開し、エリー達と戦いの続きを始めた。

リーフ「……………」

その中リーフは旅館で遊輔が言っていた事を思い出していた。
アーマードとドライバーはそれなりの訓練をしないと使えないとい
う事を……

もしヨーデルが訓練をしていなかったらどうなるか予想がついてい
た。

ブルース「どうした？」

リーフ「いや……性能に助けられている哀れな奴の事を考えてい
た」

キララ「それは……どういう……」

リーフ「あのエターナルブラスターンはよく見れば高機動タイプじ
ゃ……あの動きをするには余程のじゃないと扱えん代物……」
ブルース「Gが掛るって言ってたな……自分にあつたデバイスを
選べばいいものをよ……」

ネオドラグーンのオールレンジ攻撃が迫って来たが……

エリー「このパターンはもう飽きたのよ……」

破滅の雷で全てのネオドラグーンを破壊した。

ヨーデル「な、何っ!？」

ブルース「余所見すんなやあ……」

ヨーデルの胸部を両手にある回転刃で切り裂き拡散構造相転移砲と
スーパーカリドウスの切り替えが可能なプリズムカリドウスを使用
不可に破損させ、最後に前方へ蹴っ飛ばした。

その先に真っ白な筈を構えていたキララが待ち構えていた。

キララ「フィンプル!!」

冷気でヨーデルの両脚を氷漬けにし動きを封じた。

その後エリーとリーフがヨーデルの方へ駆け抜け抜けた瞬間、ヨーデルは切り札を出した。

ヨーデル「フォーチュンオーシャンシステム・・・起動!!」

赤と金が混ざったの白いアーマーから蒼く輝いた蒼いアーマーに変化し、封じていた氷を砕き、右手にブラスターソード、左手にフォーチュンザンバーを手にし、エリーとリーフの二人に真っ向からぶつかり始めた。

エリー「反則でしょ・・・」

リーフ「じゃが・・・不似合いな力は破滅を招くぞ？」

ヨーデル「負け惜しみはみっともないな・・・」

フォーチュンウイングのブラスターを噴射させ二人を前に押す形で吹き飛ばし、追撃としてブラスターソードでエリー、フォーチュンザンバーでリーフを切り裂いた。

エリー「ぐっ・・・」

リーフ「何て奴だ・・・以前とは比べ物にならないぞい・・・エリー・・・ここは防御に徹するぞ」

エリー「ええ・・・ここは一旦・・・上へ上がるわ」

背中に生えてある赤い翼を羽ばたかせ上空へ飛翔した。

エリーを追うようにヨーデルは上空へ飛翔した。

ヨードル「逃がさんぞ」

エリー「何て・・・奴なのよ！」

今受けたダメージもあるのかスピードを上げる事も出来ずにヨードルに追い付かれ、捕まれる前に蒼いビームがヨードルの背後に直撃した。

ヨードル「誰だ！」

統夜「俺だ！この偽者野郎！」

アドヴァンスファルコンとコネクトした統夜がライフルモードのAMソードで狙い撃ったのだ。

エリー「もう終わったの？」

統夜「ああ。後はそいつだけだ！」

片付け終えた遊輔達も援護に駆けつけた。

ヨードル「貴様は・・・そんなにあの王女を守りたいか！」

統夜「俺は単に王女様が安心して旅が出来るようにするだけだ。でなきや・・・安心して帰れないんでね！！」

遊輔「ああ」

はやて（H）「アンタにエリーさんの旅を邪魔させる訳にはいかへんのや！！」

華琳「貴方の愚かな行為を見逃す訳にはいかないのよ」

別の世界から来た統夜達の想いだった。

統夜「エリー・・・いけるか？」

エリー「ええ」

統夜「行くぜ・・・」

背後のファルコンウイングの大型パーツの内部にある小型ウイングを展開し合計10枚のウイングにした後、光の翼を発生させた。

エリー「よろしくね」

統夜「ああ。弾幕よろしく！」

遠距離系統が出来るはやて達とティアナ、ヴィヴィアンが弾幕を張り、ヨードルはオーシャンシステムの恩恵で得た機動性で避け始めた。すると・・・

ヨードル「ぐ・・・（何だ・・・急に・・・）」

眩暈がしたが直ぐに治った。

統夜は右手にファルコンウイングを鞘代りにしていた二振りのAMザンバーを両手で持ち、一斉にエリーと一緒に駆け抜けた。

エリー「何があったのか知らないけど・・・そのデバイスは貴方には合わなかったよう・・・ね!!！」

動きを止めていたヨードルにエンシェントブレイバーで右から左へという感じに横に薙ぎ払い飛ばした。

左横へ吹き飛ばされた先に統夜が待ち構えており、AMザンバーでの二刀流を用いた連続斬り、二振りのAMザンバーの柄の部分を含体させた両刃剣のAMロングザンバーで回転斬り、AMロングザンバーから二振りのAMザンバーに戻し、並列接続させ巨大剣のAMメガザンバーにし、下へ叩きつけるように一閃した。

ヨーデル「ぐ……オーシャンシステムを起動させたというのに何故だ……」

統夜「それはアンタがそのエターナルブラスターNを甘く見てるからだ。ただ扱えるだけじゃ……完全に使いこなしたとは言えないぜ！」

AMザンバーをファルコンウイングに戻した後、左腕にあるファルコンシエルの先に連結剣状のヒートロッドでヨーデルを引っ張りエリーの所へ送り飛ばした。

エリー「サンダーインパクト!!」

脱着可能な鉄球が取り付けられたクラツシャーマードにし、自分の雷を纏わせた一撃でエターナルブラスターNの装甲全体に罅を入れ、前方へ吹き飛ばした。

統夜とエリーの二人の攻撃を受けた血を流しているヨーデルはフォーチュンウイングの左側からフォーチュンランチャー、エターナルシューターで狙い撃とうとしたが……

統夜「無駄だ」

フォーチュンランチャーを左手に持ったブラスターロングを改良・発展させた長剣のAMロングブレイドで使えないように切断し、ブラスターショットを改良・発展させたAMショットソードでエターナルシューターを破壊した。

その後AMロングブレイドとAMショットブレイドの二刀乱舞し、AMロングブレイドの刀身を軸回転させグリップの角度を変えライフルモードにしヨーデルを狙い撃ち、ヒットした瞬間超重力バインドが掛り動けなくなった。

その後、右手にブラスターソードを改良した小型シールド、折畳式

刀剣、銃口が3連式の魔力ライフルを組み合わせた複合装備のAMソードを手にしソードモードに切り替え五気を収束させ始めた。

ヨードル「何故だ・・・何故・・・絶対正義である我らが・・・」

統夜「自分から痛い人発言は止めとけ・・・エリー！」

エリー「決めるわよ！」

二人はヨードルの方へ駆け抜けた。

間合いが近くなり、エリーはエンシエントブレイバーをソードモードにし、刀身に雷を纏わせた。

二人はそれぞれの武器をヨードルに振りかざした。

統夜「霸牙天閃！」

エリー「招雷閃!!」

ヨードル「ぐわあああああ!!」

統夜は上から下への縦一閃、エリーは左から右への横一閃の順にヨードルに浴びせた後、通り過ぎるかのように二人は離れた。

その後エターナルブラスターNの装甲は完全に破壊され、ヨードルは倒れてしまった。

統夜「終わったか・・・」

全ての敵が倒された事により一同は喜び始めたが、一人の男が突然現れ始めた。

創造主「つたく・・・こいつらがいるなんて聞いてねえぞ・・・」

ヨードルに力を貸し、デストロイや統夜達が使っているアーマードデバイスやドライバーデバイスを創造した創造主と呼ばれる人物だ

った。

創造主は統夜と遊輔、はやて（H）、華琳を忌々しいかのように睨みつけていた。

統夜「何だ？お前は？」

創造主「俺は創造主^{クリエイター}・・・お前達と同じ世界から来た者だ」

一同にそう自己紹介した後、統夜と遊輔、はやて（H）、華琳の四人は自分達の世界から来た事に驚いていた。

統夜「どうりでアーマードやドライバーを纏った連中がいた訳だ・・・」

創造主「俺は知っているものはデバイスだろうと全て創造できる・・・命もな」

統夜「デストロイを纏った兵士をお前が造り出したのか！！」

創造主「ああ・・・中々いい出来だろ？俺が造った人形達は・・・」

これを聞いた統夜達は命を物と同じように考えている創造主に対し怒りを覚えた。

ヨーデル「た、助け・・・てくれ・・・」

ヨーデルが創造主に助けを求めたが顔面に蹴りを入れて遠くへ吹き飛ばし気絶させた。

創造主「テメエのような役立たずは消えてる・・・さて・・・遊んでやるぜ」

右手にダイチが使う五星刀、左手にたけしが使うスターライザーを創造した。

統夜「創造主とは単なる物真似しか能が無い男か……」

侮蔑を含んだ言葉を創造主に放った。

創造主「ほざいてる……ゼロはいないようだが……貴様らを葬れば問題ない!!」

統夜「(ゼロ……マリオ……という事はこいつも転生者か……)」

回想

第五十五話にて地下訓練施設で統夜とメアリの戦いを終え、メアリの話や様々な事を話し終え、帰ろうとした統夜はシャルとレオン、ユウカの三人に呼び止められた。

統夜「何すか？」

レオン「お前に言っておきたい事があつてな。いいか？」

統夜「構わないっすけど」

レオン「お前に教えておく……私とユウカは転生者と呼ばれる存在だ」

これを聞いた統夜はやや驚いていたが冷静になった。

統夜「シャルさんと同じか……」

ユウカ「蒼炎の事を聞いて驚いたわ……精神を崩壊させ……魂を飲み込む能力は聞いた事も無い……それは元から？」

統夜「ええ……」

シャル「統夜は蒼炎を悪用する事はしないわ」

レオン「それは分かっているが・・・蒼炎はゼロと同じく恐れられるのは確かだな」

ゼロと聞いた統夜は気になり始めた。

統夜「なあ・・・ゼロって・・・」

レオン「教えておく必要があるか・・・転生者殺しゼロ・・・はぐれ転生者・・・悪事を働く転生者を輪廻の輪に戻す役割を持つ存在だ」

ユウカ「ゼロの本当の名前はマリオ・・・」

統夜「!?!」

マリオという単語に目を見開いていた。

鳴神 ソラさんの作品である『大乱闘スマッシュヒーローズブラザーズ出張版』の『HERO'S EPISODE』ヒーローズエピソード 番外編第1話「別世界の存在との出会い」にてマリオと出会っているのだから・・・

統夜「マリオがそうだったのか・・・」

レオン「ああ。彼にはチートやバグに値する能力や神様の力や神様が作り出した力を無効化する能力を備えている」

統夜「はあ!?!」

マリオの能力に口をパツクリと開いて驚いていた。

そりゃ誰だって驚くわな・・・

シャル「貴方の蒼炎も無効化されるでしょうね」

統夜「それは分かるけど・・・マリオがねえ・・・蒼炎無しでも今の俺じゃ勝てないのは分かっている・・・一緒に戦って僅かだけど・・・大きな存在って感じたから」

レオン「お前はまだまだ伸びる……この予測不能な世界で……自分の可能性を信じる」

手を統夜の右肩にポンと置き励ました。

それから日が過ぎ、『大乱闘スマッシュユースブラザーズ出張版』の『HERO'S EPISODE』ヒーローズエピソード』番外編第2話『それぞれの悩み』にて悩んでいた統夜にマリオと出会い激励を貰った。

現在

統夜「ほう……だけどなあ!!」

AMソードとファルコンシエルで受け止め、気力の衝撃波で吹き飛ばした。

創造主「力だけは認めてやるが……こいつはどうかかな？」

五星刀とスターライザーに魔力と気力を膨大に放出させ……

創造主「双星斬!!」

巨大な斬撃を二つ統夜に向けて放った。

攻撃範囲が広がったのかエリー達も喰らい吹き飛ばされてしまった。

エリー「ぐっ……何なの……あいつは……」

スバル「強い……」

ブルース「ヨードルより強いぞ……」

リーフ「名だけでは無いようじゃな……」

先程の攻撃を受けダメージを負ってしまった。

統夜「チィ・・・」

創造主「よく持つな」

近くにいた統夜も少なからずダメージを受け装甲が一部欠けていた。

統夜「猿真似は猿真似という事を教えてやる」

創造主に蹴りで前へ飛ばし間合いをとった後、ファルコンをドライブに変え、全てのドライバーをドライブカードに戻した。

統夜「さて・・・お前で色々試すとするか・・・」

セイヴァー・ロード・サーディオンを起動させ右手に持ち構えた。

創造主「そいつは・・・不味いな・・・と思うか？」

ガーディアンを知らないのか二刀で統夜に襲い掛かったが

統夜「ロード格闘！」

真紅の宝珠のグラップラーを鏢の穴の中に嵌め込み、ブースター付の足甲に変化させ蹴りで二刀を受け止めた。

創造主「蹴りだけで押そうってか・・・無駄な事を・・・うおっ！
!？」

踝の部分に周りの大気を吸収し始めた。

統夜「そんな偽物で倒そうとか・・・頭が高けえ!!」

創造主を上へ蹴り飛ばした後、爆発的な速さで追い付き、踝に大気を吸収させ、五気を纏わせた。

統夜「覇刃弦月!!」

五気と風を纏った蹴りから五気と風で形成された刃を創造主に向けて飛ばした。

創造主「こいつは・・・ぐおっ!!」

二刀で防ごうとしたが軽々と柄の先から消えてしまい直撃を受けてしまったがまだ立っていた。

統夜「まだまだあ!!」

瞬速で移動しながら創造主を蹴りを用いた風の斬撃を周辺の所々から放ちダメージを与えていた。

創造主「チィ!!あんなデバイス見た事も無い!!」

統夜「そりゃそうさ・・・こいつはロードガーディアンデバイス・・・セイヴァー・ロード・サーディオン・・・お前のような下種は知らんだらうよ」

姿が見えない程の速さで移動しながら創造主にそう答えた。

統夜「覇月乱刃!!」

創造主の周囲に覇刃弦月の五気と風の刃を無数に飛ばして、襲い掛からせ直撃させた。

創造主「ぐはっ！」

今の攻撃で全身に傷を負い、口から血を吐いた。

統夜と創造主の戦いを見ていた一同は驚愕していた。

セイヴァー・ロード・サーディオンの規格外な力と統夜の戦闘技術に対して……

エリー「す、凄い……」

リーフ「あの男も凄まじいが……あやつも凄いのお……遊輔「物真似にも限界はある……」

はやて（H）「なあ……おかしいと思わへん？」

はやて（H）が二人の戦いを見て疑問に思ったのかエリー達に聞いてみた。

エリー「何が？」

はやて（H）「統夜はそうやけど……創造主って人も……全然本気出してへん」

これを聞いた一同は啞然としていた。

リーフ「つまり……あの男には何かあると……？」

はやて（H）「はい……」

統夜と創造主の戦いの場面に戻る。

創造主「こいつは・・・効いたぜ・・・創造するのはデバイスや武器を創るだけじゃねえ・・・こういうのも出来る」

今まで受けた傷が無くなり再生された。

統夜「創造を用いたって訳か・・・」

創造主「そういう事だ。リミット外すぜ・・・」

今まで掛っていた魔力リミッターを解除し本気になった。

統夜は顔を顰めていた。

もし戦いを長引かせれば、自分や遊輔、はやて、華琳はともかくエリー一行やフォワード陣、765プロメンバーが危うくなるからだ。

創造主「第二ラウンド始めようぜ・・・」

日本刀を創造し統夜に向って駆け抜けた。

統夜「ああ・・・ロード剣聖！」

真紅の宝珠を外した後、今度は桜色の宝珠であるソードマスターを鐔の部分にある穴に嵌め込み鞘付の日本刀に変化させ真つ向からの鐔競り合いが始まった。

以前より動きが変わっていた。

統夜「これがお前の真の力か！」

創造主「ああ・・・」

統夜「だが命を物扱いしてる時点でマリオ・・・転生者ゼロの逆鱗に触れるとは・・・哀れで仕方が無い・・・俺もリミッターを解除

するか」

創造主「何？」

統夜も五気のリミッターを解除し創造主を柄の部分で腹部を殴った後瞬速の抜刀術で切り裂いた。

創造主「（こいつ・・・油断してたぜ・・・）創造・・・」

創造主は金色のフルプレートアーマーを創造し纏い、その後右手に魔力と光で形成された黄金の剣を創造して構えた。

統夜「・・・」

創造主「行くぜ！エクスカリバー！！」

剣を統夜に目掛けて唐竹割りで振るい、避ける訳にはいかないと思つたのか刀身に五気を込め防いだ。

意外にもエクスカリバーの力が強いのか統夜を押しだして前へ吹き飛ばし砂が舞った。

統夜「悪党にエクスカリバーなんて・・・世の末だな・・・」

創造主「ふっ・・・お前の相手は本気にならんと勝てないものでな・・・

・ゼロとお前がいなけりゃいいんでね。一つ聞くが転生者って・・・人間限定に転生すると思うか？」

それを聞いた統夜は眉を寄せていた。

創造主「そのまさかだ・・・神から得た能力を得た後は種族は人間以外つてのもあるんだよ」

統夜「物真似以外にもあるって訳か・・・」

創造主「俺にとってはいい事だったが・・・ゼロとお前いう規格外

によって台無しになった!!」

統夜とゼロに対し怒りを露わにしながら統夜を睨みつけた。

統夜「お前のような常識の無い転生者はいない方がいいと判断したんだろう……」

創造主「…………お前相手にはあの男のような能力は無い……ここで討たせてもらう!!」

創造主は力を入れ始め地響きが起きた。

統夜「マジかよ……」

創造主の変化に意外と思いつながら驚いていた。

背中から一対二翼の黒い翼が生え、髪の色が銀髪、瞳が金色に変化し、瞳孔が縦に変化し、今まで感じなかった妖力が解放された。

創造主「悪魔と吸血鬼の同時解放を見て驚いているようだな!」

統夜「悪魔ねえ……俺はお前と似たような事も出来る事をお忘れなく」

封印魔法陣から自在と書かれたイヤリングを取り出しエリーの方へ歩き出した。

創造主「偉そうな事を言った割には逃げるのか」

エリー「えっ?どうかしたの?」

突然自分の方へやって来た統夜に対して不思議そうな顔をしていた。すると統夜は封印魔法陣から取り出したイヤリングの片方をエリーに差し出した。

統夜「エリー……アンタはこのアナザー・アースが大好きだよな？」

エリー「ええ。そうよ」

統夜「そうか……これを付けてくれ」

統夜の問いに肯定し、差し出されたイヤリングを付けるように言われた。

エリー「何これ？」

統夜「これはマイティイヤリング……試作型だ」

エリー「これで倒せるの？」

統夜「ああ」

統夜がこの世界に来る前の事だった。

零斗の部屋に呼ばれた統夜は突然イヤリングを渡された。

統夜「これは？」

零斗「俺のマイティ真拳の奥義であるマイティフュージョンが出来るアイテムだ。要は融合が出来るって事だ」

これを聞いた統夜は驚いていた。

零斗以外でもフュージョンが出来るのだから……

零斗「試作段階だからお前に預ける。一回だけだから注意して使えよ。一人が右耳、もう一人が左耳につけると出来るから」

統夜「一回だけしか使えない……まさかと思うけど分離出来ないとかは無いよね？」

零斗「んなもん無い。一定時間経てば元に戻る」

一番思っていた事を統夜は零斗に聞き、元に戻ると聞いてホッとしていた。

統夜「合体すると強いものになれるのか？」

零斗「まあ・・・人によるな・・・お前の場合は遊輔やはやて、雪蓮、か・・・メアリ、レオンさん、ユウカさんと融合したらお前以上の強さになるのは間違いない」

統夜「今・・・メアリの事・・・閣下って言おうとしなかったか？
気持ちは分からんでも無いが・・・どうせならグラマラスメアリがいいと思うぞ」

零斗「気のせいだ。そういうのもありだな」

メアリに対して閣下と言おうとした事にツッコミを入れた後、グラマラスメアリがいいと零斗に薦め、納得していた。

零斗「もし使ったら俺に報告してくれよ」

統夜「ああ」

現在に至る。

イヤリングをエリーに片方渡していた。

エリー「これをどうするの？」

統夜「一人が右耳、もう一人が左耳につけると出来る。そうすればお前と融合でき・・・一人の戦士が誕生する」

これを聞いたエリーは勿論、他のメンバーも驚愕していた。

驚いている間に創造主は魔力と妖力で形成された斬撃を無数に放った。

創造主の攻撃を一同は避け始めた。

ブルース「チツ……ここは反論している場合じゃねえ……」
エリー「そうね……統夜！私に力を貸して！！私の……私達の
世界を守る為に！！」

統夜「構わないぜ！エリー！お前は左耳、俺は右耳につける！いい
な？」

エリーの想いを聞いた統夜は笑みを浮かべそう返した。

エリー「ええ」

統夜「行くぜ！」

エリーは左耳、統夜は右耳に付け始めた。

イヤリングを付け始めた瞬間、エリーは真紅の光、統夜は蒼の光に
包まれ始め、上空へ飛翔した。

統夜「これが俺とエリーの力だ！！」

蒼と紅の光が交差した後、二つの光は一つになり、そして地面へ降
り立ち煙が発生した。

キララ「エリー様……」

ブルース「どんなものになるやら……」

リーフ「そうじゃな……」

遊輔「あいつとエリーさんだったら大丈夫だろ」

二人の安否を気にしつつ、創造主の攻撃を防いでいた。

創造主「何をやってもこの俺には勝てねえよ！！」

創造主が勝ち誇ったかのように叫んだ後、煙が晴れると背中まである紅い髪に右部分に金のメッシュが掛っており、右が蒼、左が真紅のオッドアイでエリーに似た顔立ち、背中に赤い翼が生えた女性が立っていた。

統夜のアドヴァンスメサイアのアドヴァンスバツクルとアドヴァンスフォン、エナジークリスタルは変わっていないがバリアジャケット姿が変わっていた。

彼女のバリアジャケット姿が上に蒼のノースリーブ状の上着、その下にノースリーブのハイネックシャツを着ておりその上から真紅のマントを羽織り、下に黒のミニスカート、両腕に肩が露出した状態で独立した黒い小袖の袖部分、両手に蒼い生地フィンガーレスグローブを嵌め、両足には黒のハイソックスを履き、ブーツを履いた姿に変化していた。

「ほう・・・何をやっても俺には勝てない・・・か・・・愚かな小物が大きく出たな」

女性は創造主を侮蔑を含んだ言葉を呟いた。

創造主「誰だ・・・テメエは・・・」

エリヤ「俺はエリーと統夜が融合した存在・・・エリヤ・・・とても言っておこうか・・・」

エリヤと名乗った女性は左手にソードモードのエンシエントブレイバー、右手にロード剣聖のサーディオンを鞘から抜き構えた。

キララ「あ、あれが・・・エリー様と統夜さんが融合した・・・」
ブルース「雰囲気全然違うぜ・・・」

リーフ「冷徹さと鋭さを感じる……」

ミカーサ「次元が違うわね……」

ヴィヴィアン「凄いとかじゃ表現出来ないね……」

アナザーアースの皆さんはエリヤに驚いていた。

エリヤ「見せてやろう……お前に力を……ヴァンパイアルシフ
アー・Lライトニングをな!!!」

力を入れ五気、雷がバチバチと身体から溢れ始めた。

背中にある赤い翼とは別に五対十翼の漆黒の翼が生え、髪の色が前の部分が右が蒼、左が真紅のメツシユが掛った金髪に変化し、瞳が両方とも真紅になり、瞳孔が縦に変化し、周りに雷を纏った姿に変化した。

創造主「なめんじゃねえ!!!」

エクスカリバーをエリヤに向けて振るうが左手に持ったエンシェントブレイバーの刀身の先だけで受け止めていた。

エリヤ「ただ振るうだけなら猿でも出来る……技量が足りん貴様では俺に当てる事は不可能だ」

エンシェントブレイバーを瞬速で振るいエクスカリバーを斬り払った後、右手にあるロード剣聖を数回振るった後鞘に納めた後、時間が僅か経った後、無数の傷が創造主の全身に出て来た。

創造主「グハッ！（こ、こいつ……速い!!!）」

エリヤ「どうした？クリエイター……お前の実力はそんなものか

創造主「おおおおお!!!」

収束が終わった瞬間エリヤに目掛けて強力な一閃をしようとした瞬間

エリヤ「はあ!!!」

刀身に妖力を纏わせた二刀を力と速さのタイミングを合わせて振る
い、エクスカリバーの刀身を砕いた。

エクスカリバーを折られた事に驚いたのか動きが止まった瞬間、二
刀によるクロス斬りを見舞った。

創造主「き、貴様ぁ・・・」

エリヤ「お前如きが約束された勝利の剣など似合わん・・・どのよ
うな武器やデバイスを創造して使おうともな・・・ド三流のお前じ
や到底扱えん」

創造主「お、己・・・おのれ・・・おのれえええええ!!!!!!」

今のエリヤが放った言葉に完全にキレてしまい魔力と妖力がそれ以
上になり始めた。

創造主「貴様だけは絶対に許さん・・・絶対に殺してやるウウウウ
!!!!!!グオオオオオオオ!!!」

怒りのせいなのか制御が出来なくなり、皮膚の色が黒めの紫色に変
化し、眼球が真紅になり、身体がやや大きくなり始めた。

エリヤ「哀れだな・・・」

創造主「行けえ!!!」

創造主「グオワガガガガ！！！！」
エリヤ「・・・・・・・・」

刀を抜き感電を止めた後上空へ吹き飛ばした後、蒼炎で形成された無数の剣を創造し創造主の全身に串刺しにし燃やし始めた。

創造主「や、やめ・・・俺が・・・悪かった・・・この世界で悪い事は・・・しないから・・・やめ・・・」
エリヤ「ああ・・・止めてやろう・・・」
創造主「ほ、本当か？」

エリヤの言葉に創造主は涙を流していた。
蒼炎で精神を攻撃されているのか徐々におかしくなりつつある。

エリヤ「この一撃でな・・・」

巨大な蒼と紅が混ざった色の雷が創造主に落ちた。

創造主「グギヤアアアアアアアア！！！！！！」

巨大な雷のせいでフルプレートアーマーが破壊され全身が黒焦げになり顔は分からないが恐らく絶望に満ちているだろう。

創造主を倒したのかエリヤから統夜とエリーの二人に分離された。
因みに二人の耳に付けられたイヤリングは自然に壊れてしまっている。

統夜「こいつに相応しい末路ってか・・・」
エリー「死んでるのかしら？」

統夜「あれは精神崩壊してるし・・・立ち直れないだろう・・・俺としては一生そのままだと嬉しいがね」

エリー「それは・・・残酷過ぎるんじゃない・・・」
統夜「命を物としか考えない下種にこれぐらいやっても罰は当たらんよ」

デバイスを待機状態に戻した統夜とエリーが話している時、二人の前に銀色のオーロラが現れ、その中から赤い服に蒼いオーバーオールの男が現れた。

統夜だけはあの存在を見て自然に微笑んでいた。

統夜「遅いぜ・・・マリオ」

マリオ「はは・・・お前の世界に創造主と呼ばれる存在に関与していた神族や魔族のようなタイプのはぐれ転生者を相手していて・・・遅れてすまん」

統夜に挨拶をした後、創造主を見ていた。

マリオ「随分と派手にやったな・・・お前一人でやったのか？」

統夜「俺とエリー・・・赤いお姫様と融合した力だ」

マリオ「フュージョンみたいなものか・・・仕事するか」

エリーを見て納得した後、創造主の所へ寄り黒いカードを取り出し

マリオ「輪廻ではなく永遠の牢獄がお前のゴールだ・・・と言ったものの・・・絶望を味わった後だが・・・」

創造主の額に張った後、地面に消えるように吸いこまれる。

エリー「それは・・・やり過ぎじゃ・・・」

マリオ「奴はやってはいけない事を・・・越えてはいけない所を越えてしまった・・・」

統夜「要するに自業自得ってやつだ。気に病む必要は無い。で・・・ただ転生者を牢獄に送りに来たって訳じゃないだろ？」

統夜の問いを聞いたマリオは真剣な表情になった。

マリオ「ああ。統夜に遊輔、はやて、華琳を元の世界へ帰す目的もある」

それを聞いた統夜達異世界から来た人達は驚いていた。元いた世界に戻るのだから

はやて（H）「本当にお世話になって・・・ありがとうございます」
マリオ「気にするな」

華琳「あのカズマって男を差し向けたのは貴方かしら？」

マリオ「ああ。あいつなら力になるだろうと思ってな・・・」

華琳「そう・・・」

華琳の問いに力になるという理由でカズマを送った事を答えた。しばらくして統夜達と別れの時が来た。

エリー「ここでお別れね」

統夜「ああ。エリー・・・アンタ達と一緒にいた時間は楽しかったぜ」

遊輔「君ならアナザー・アースの人達を笑顔に出来ると信じてるよ」
はやて（H）「一人で抱えず悩まないで・・・ブルースさんやリーフさんにも頼った方がええよ」

華琳「貴方ならきつといい王女になれると信じてるわ」

エリー「統夜・・・遊輔・・・はやて・・・華琳・・・本当にありがとう」

四人の言葉にエリーは笑顔で感謝していた。

ブルース「元の世界でも頑張れよ！」

リーフ「お前達の事は忘れんぞ」

キララ「お元気で」

剣「君達のように頑張るよ」

ミカーサ「そつちでも頑張りなさいよ」

ヴィヴィアン「またね。異世界の英雄さん達」

はやて(A)「統夜君・・・そつちの私を悲しませたら許さへんよ」

スバル「寂しいですけど・・・これから頑張つてね」

ティアナ「無茶をしないように気をつけなさいよ」

エリオ「今までありがとうございました」

キャロ「これからも頑張ってくださいね」

ブルース達アナザー・アース組が統夜達に激励を贈っていた。

統夜「ああ。頑張るよ。皆、本当にありがとう！」

アナザー・アースの人達にお礼を言った後統夜達は銀色のオーロラの中へ入った。

統夜達が入ると銀色のオーロラが消えてしまった。

エリー「さ、皆・・・これからも頑張るわよ！」

一同「おーっ!!」

エリーの言葉に大声を上げて腕を上げていた。

それから765プロメンバーの撮影は中止になったが次の日に再開された。

気を失ったヨードルは再び逮捕され、デストロイやクリムゾンフレイムを纏った兵士達は創造主が倒されたのかデバイスと一緒に消滅

していた。

エリー「（統夜・・・皆・・・私・・・一人で背負わずに・・・『絆』を大事にするよ）」

撮影の護衛をしながら青空を見つめていた。

『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇』イメージED『The Next Decade』

元の世界に戻った統夜達ははやと華琳以外のラバーズに心配掛けられ、遊輔はなのはと蓮華に心配掛けられていた。

その後統夜達四人はお説教をされたのは言うまでも無かった。隣にいたマリオは仲がいいなと思ったのか微笑んでいた。翌日魔王の家に統夜は呼び出された。

統夜「次元転移装置は解体され計画は破棄される？」

魔王「うん・・・君達の事だね・・・何とかここへ戻れたけど・・・」

統夜「そうか・・・」

統夜達がアナザー・アースへ跳ばされた事が原因なのか次元転移装置は解体され計画は破棄される事が決定したのを聞いてしぶしぶ納得していた。

もしマリオがいなければ一生アナザー・アースにいたままだったのだから・・・

魔王「しかし・・・よく戻れたね」

統夜「あいつのお陰だよ」

魔王「あいつ？」

統夜「ゼロ……」

ゼロと聞いた魔王はなるほど納得していたようだ。

魔王「今度依頼する時はネリネちゃんと稟ちゃんを結ばせようというものを……」

魔王がそう考えていると後ろから……

ネリネ「統夜様と稟様に迷惑を掛ける様な真似はしないでくださいね。ま・お・う・さ・ま？」

ネリネの言葉を聞いて魔王は石化してしまった。

統夜「あらら……この様子じゃ立ち直れないから帰るわ」

ネリネ「もうお帰りになるのですか？」

統夜「ああ」

石化した魔王を見て元に戻るのには時間掛ると思ったのか魔王家を後にした。

外に出た後太陽が照っている青空を見上げ右手を上にかざし平手にしていた。

統夜「アナザー・アース……この世界にあるといいな……」

アナザー・アースにいるエリー達を思い浮かべていた。

アナザー・アースの沖繩

エリー達が泊まっている旅館の外にエリーが一人で空を見上げていた。

エリー「大切な事を教えてくれてありがとう・・・統夜、遊輔、はやて、華琳・・・まだ私の物語は終わっていない・・・始まったばかり・・・」

統夜達に感謝しながら、自分の物語はまだ始まったばかりと呟いていた。

自分だけで解決しようと思わず仲間頼る事を大切にしていた。

とある喫茶店にて

カズマ「この世界は異常だな・・・能力・・・貰っておいて正解だったかも」

カズマが新聞を読みながらそう呟いていた。

デストロイ兵を倒し元の世界へ戻った後、旅を続けており、休憩する為に喫茶店の中に入っており現在に至る。

カズマ「月と地球の絆の再生を導いた天川統夜・・・また会いたいものだな」

月と地球を救った統夜に興味があり、笑みを浮かべながら珈琲を飲んでいた。

彼と統夜はどう関わっていくのかは誰も分からない。

英都の魔王家の前にまだいた統夜は歩きだした瞬間、アドヴァンス

フォンから着信音が鳴り始めた。

統夜「はい？もしもし？」

遊輔「お前だけだぞ！速く本拠地寮へ来い！レオンさんとユウカさんが待つているぞ！」

統夜「げっ！？まずっ！？今すぐそっちへ行く！！！」

遊輔からの電話で本拠地にて修行する事を聞いた統夜はすぐさま本拠地寮へ走って向かった。

彼の戦いはまだまだ続く・・・自分の真実を見つける為に・・・

英都にある駅に電車が到着し、ドアから茶髪のさわやかショートヘアに、青のジャケットを着ており、ジーパンとスニーカーを履いている少年が降りて来た。

「ここが・・・英都・・・僕は・・・あの人に頼まなくちゃいけない事があるんだ・・・」

右拳を握り締め決意を固めていた。

この少年の目的は一体何なのかやがて分かるであろう。

『死神と姫君の舞踏劇（完）！！』

番外編『蒼き死神と紅の姫君の舞踏劇（後編）』（後書き）

ここでエリヤの詳細を発表します。

名前：エリヤ

性別：女

容姿：背中まである紅い髪に右部分に金のメッシュが掛っており、右が蒼、左が真紅のオツドアイでエリーに似た顔立ち
背中に赤い翼が生えている

身長：171cm

スリーサイズ：B94/W58/H89

魔力光：真紅と蒼の混合色

魔力：EX

気力：EX

霊力：EX

妖力：EX

覇気：EX

魔術式：レイヴ式とルシファー式、ヴァンパイア式、アナザー・アース式

性格：冷静沈着で自分にも他人にも厳しい性格

イメージCV：坂本真綾

詳細：統夜とエリーが零斗が試作で作ったマイティフュージョンイヤリングで融合した姿。

五気は勿論、二人が持つ戦闘技術、蒼炎、破滅の雷、解放形態等が全て使用可能である。

破滅の雷に統夜の持つ蒼炎と同じく精神を絶望の淵に追いやり崩壊させ魂を奪う能力が付加されている。

ヴァンパイアルシファーは勿論、華琳とのユニゾンも可能になっている。

アドヴァンスメサイアのバリアジャケット姿が変更されており、上
が蒼のノースリーブ状の上着、その下にノースリーブのハイネック
シャツを着ておりその上から真紅のマントを羽織り、下に黒のミニ
スカート、両腕に肩が露出した状態で独立した黒い小袖の袖部分、
両手に蒼い生地フィンガーレスグローブを嵌め、両足には黒のハ
イソックスを履き、ブーツを履いた姿に変化する。

エリヤ「ふっ……コラボならではのものだな」

遊輔「凄いな……」

カズマ「全くだ」

遊輔とカズマはエリヤを見て驚いていた。

カズマ「ライトニングと式が混ざったようなもんだな。俺の活躍あ
つて良かった」

遊輔「インパクトあったからな。本編に出れるといいな」

カズマ「ああ」

遊輔「いつか出れる事を楽しみにしているよ」

エリヤ「これからも応援頼むぞ」

第五十七話『黒騎士の一日』（前書き）

え〜・・・今回の話から影闇 澁さんが投稿した統夜に匹敵するキ
ヤラと真王さんのキャラである転生者一家が来ます。

統夜「えっ？誰よ」

ん〜・・・黒騎士さんと夢魔姫、コスプレイヤー、最強神父。言っ
ておくが黒騎士は黒い仮面を被ってる奴や時の呪いを受けた黒い姫
君を守る剣士とは違っぞ〜

レオン「黒騎士とは是非とも戦ってみたいものだ。HERO・S
EPISODE第五十七話始まるぞ」

第五十七話 『黒騎士の一日』

第五十七話 『黒騎士の一日』

誰かの夢の中・・・

大きな白い建物の一室で病院の患者が着るような服を着ている黒髪と右が琥珀、左が紫色のオッドアイの少年と背中まで伸びている白い髪に緑色の瞳をした少女の二人がいた。

二人がいる一室は何らかの機械や薬品で一杯でとても安心できる場所ではなかった。

実験を忌み嫌う少年は少女に声を掛けられた。

少女「大丈夫だよ・・・きつと・・・辛い事があっても・・・僕がしーちゃんを守ってあげるから・・・」

少年「・・・・・・・・・・」

少年は実験された影響なのか人間不信だったが少女だけは信じられるのだ。

そんなある日・・・

助手「博士！！被検体に異常が・・・このままでは！！」

科学者「構わん！！やれ！！」『ソルジャー』の天川統夜と英雄イグニスを凌駕した存在が完成するのだぞ！！」

反論できず機材を動かしていた。

鉄のベッドで苦しみながらジタバタしているしーちゃんと呼ばれる少年に声を掛けた少女が口に猿轡、拘束具を着けられたまま横になっていた。

統夜「あと少しで修学旅行だ！！思いつきり楽しむぞお前らああ
！！！！！！」

はやて、千世、カナ「おおー！！！！」
忍「・・・・・・・・」

統夜達のはっちゃけっぷりに呆れ自分の席へ着いた。修学旅行なの
かテンションが上がっていた。

忍自身は統夜をユルゲンとの戦いで月と地球の絆を再生させた英雄
として有名なのは知っている。

そんな統夜を睨んでいたのは言うまでも無かった。夢の中で科学者
が口にしていた統夜の存在が自分を狂わせているのではないかと・
・

そこに・・・

秀吉「紅神・・・ちょっといいかの？」

秀吉が声を掛けた。

忍「何だ？」

秀吉「お主だけ・・・修学旅行の班に入っておらぬのじゃが・・・
どうするつもりじゃ？」

秀吉の問いに・・・

忍「そんなのお前らが勝手に決めればいい・・・」

秀吉に対し冷たい態度で返答し教室から出た。

カナ「感じ悪いわね！」

優子「全くね．．．いつもあんな感じなの？」

文乃「そうよ。何故か統夜に対して鋭い目で睨んでた事があったわね」

忍の態度にカナと優子、文乃は怒りを覚えていた。

エステル「何か．．．彼に悪い事をしたのですか？」

統夜「いんや．．．知らんよ」

メアリ「アンタがやってきた中で．．．恨んでる人なんじゃないの？身内を蒼炎で燃やし魂を奪ったり．．．」

統夜「んな訳あるか．．．こつちも分からないだし」

エステルとメアリの問いに憶えが無い事を話し、蒼炎で燃やしたりしていない事も答えた。

遊輔「（紅神忍．．．か）」

明久「（本当に知らないのかな？ムツツリー二．．．）」

康太「（．．．．．念の為調べてみる価値はあるかもしれない．．．）」

忍が気になるのか遊輔達三人は念話で話し、調べてみる価値はあると康太は答えた。

はやて「本当に何も知らんの？」

統夜「本当に知らん」

希「にゃあ．．．統夜は嘘はつかない．．．」

はやて「そつやな．．．」

統夜を知っているはやては希の言葉を聞いて納得していた。

校舎の屋上に忍が立って街を見つめていた。

忍「……………」

夢であり過去の事を思い出していた。

大切な人を失わせた原因が統夜とイグニスの二人である事を……かつての自分は優しく人の気持ちになつて涙を流せる程の性格だったが、ある悲劇が起きた。

自分が霊狼族と呼ばれる霊力を持って生まれた狼の種族と雪女と呼ばれる妖怪のハーフである事を目を付けたセイラの息が掛つた部隊に拉致されとある研究の実験台を受けてしまった。

月日が経ち、一緒に受けていたとある少女を失い、実験で得た強大な力を利用し、研究所に保管されていた複数のデバイスを奪取してその場から逃亡した。

逃亡はしたものの、何処かもわからない場所を歩いていた途中で剣と出会い、彼の導きによつて佐助に一時期保護された。

佐助から自分のように人体実験の被害に遭っている存在のことを教わり、実験で得た力を制御する為に修行を行った。

だが、実験や少女を失つた影響か統夜とイグニス、セイラ、セントクルセイダーズへの憎しみは消えていなかった。

忍「俺は黒騎士ネクサスとなり……セントクルセイダーズの研究所を破壊活動を始めた……」

左腕に装着されてあるリストウォッチ型PDAを見つめていた。

忍「奴がセントクルセイダーズを崩壊させても……奴らがいる

限り実験の被害者は減らない・・・」

統夜の存在が実験の被害者が減らないと思ったのか拳を強く握り始めた。

忍「桐葉・・・俺は・・・あいつらを絶対に許さない・・・お前を死に追いやった原因である統夜とイグニスは生きてはいけない・・・」

「

銀色、瑠璃、真紅、紅蓮、黄金、漆黒の六色の宝石を手にしてその口にした。

その後授業をサボったが、担任の高橋女史と鉄人に見つかり厳しく注意されたのは言うまでも無かった。

放課後になり忍は一人で帰っていた。

帰宅部であり、他人とは関わらないようにしている為、孤立している。

途中で公園に寄りベンチに座り始めた。

忍「修学旅行・・・サボるか・・・一生そこに行けない訳じゃないからな」

教室で話題になっていた修学旅行の事を思い出していた。

忍本人は興味が無いらしく、人と関わるのが嫌なのか全く参加していなかった。

「勿体無いなと思わないか。少年」

忍「あ？」

突然声を掛けられた方へ向くと蒼寄りの銀髪にサングラスを掛け、ニードレスのアダム・ブレイドの服を着た青年が隣のベンチに座っていた。

忍「聞いていたのか……」

「偶然聞こえたんで……修学旅行をサボるのはあまり関心しないぞ」

忍「大きなお世話だ……アンタは……」

「俺か？ただのしがない神父だ」

忍「しがない神父が俺に説教でもする気か？」

神父と名乗った男に忍は警戒するように眼をジト目で見つめていた。

「お前にアドバイスだ。仲間や友達と一緒に思い出を作ってみたらどうだ？」

忍「断る。俺にそんなものは必要ない」

忍の言葉を聞いた神父は呆れた感じのため息をついていた。

「嘘が下手だな……顔に書いてあるぞ」

忍「何……？」

神父に指摘されたのか睨みつけた。

「そのまんまの意味だ」

忍「俺は本当の事を言っただけ……」

「まあ……そういう事しておくか……」

忍「それだけか？なら立ち去ってくれ」

神父と一緒にいるのが嫌なのか表情を崩さずに言った。

それを見た神父はやれやれとした感じで呆れながらも二回目の溜息を吐いた。

「分かった分かった・・・これだけは言わせてもらおう・・・自分自身を大事にしないと碌な事が起きないぜ」

それだけを忍に言った後ベンチから立ち上がり去って行った。

忍「分かったような口を言いやがって・・・俺の何が分かるんだよ・・・」

神父が立ち去った方向を見つめながら呟いていた。

神父サイド

「ふゝ・・・我ながら柄じゃ無い事を言ってしまったな・・・」

忍に言葉を贈った神父は公園から出て、適当に散歩を始めていた。

「どんな世界でもああいうのっているのかねえ・・・」

そう考えていると

「ギルシア」

膝までのピンクのロングヘアに藍色の瞳をし、tolloverのララの服を黒くした感じの服を着た女性がベビーカーを押しながら神父の名前であるギルシアを呼んでいた。

ギルシア「レーティアにリル。買い物の帰りか？」
レーティア「ええ」

レーティアと呼ばれた女性とベビーカーに乗っている赤ちゃんに話しかけた。

レーティア「英都って街は賑やかな」

リル「あう」

ギルシア「ああ・・・神族や魔族、月人問わず・・・様々な種族もいるしな」

レーティア「レオンとユウカもここに来て『蒼穹の騎士団』の教官をやってるらしいわ」

三人は歩きながら通り過ぎる神族や魔族、月人を見て話していた。

ギルシア「蒼穹の騎士団って・・・あれだろ？セイントクルセイダーズを崩壊させた勢力っていう・・・」

レーティア「そうよ。何でも・・・大将であるセイラを倒したのが月と地球を救った英雄・・・天川統夜よ」

ギルシア「ほう・・・」

リル「あう」

レーティア「レオンとユウカからのメールでは彼以外に、紅蓮の猛虎や瑠璃の軍神、マイティ真拳継承者、気力使い、超力戦士、疾風の流星も所属していると書かれてあったわ」

レオン達と知り合いなのか遊輔達が入っている事を教え、ギルシアは興味を示していた。

蒼穹の騎士団に興味を持っているギルシアにレーティアは微笑んでいた。

レーティア「明日一緒に行ってみない？住所も教えて貰ったし」
ギルシア「行ってみるか。ここに引越してきた事への挨拶も兼ねて」

レーティアは統夜達に興味津々なギルシアに行く事を聞いてみた結果、即答で行く事が決まった。

忍はギルシアが去ってから、公園を後にし、スーパーで買い物を買って、住んでいるマンションへ帰っていた。

忍「……………」

テーブルに座り公園で出会ったギルシアの言葉を思い出していた。

忍「確かに…………あの男の言う通りだな…………」

普段は自分に関わろうとする者には容赦のない言葉を投げつけて自ら孤立する態度を取っているが、本心は自分のせいで周囲の人間に危険が及ばないようにするための忍なりに考えた事である。それをギルシアは見抜いていた事に驚異を感じていた。

忍「だが…………俺はこのまま貫き通す…………周りの人が被害に遭わないように…………」

ギルシアに論されても今まで通りやっている事を貫こうと心に決めていた。

彼の行動が正しいのかは分からないが…………

翌日ギルシアとリルを抱いているレーティア、銀髪のロングヘアに赤い瞳をし、セーラー服姿の少女の四人が本拠地寮の前に来ていた。

レオンとユウカから教えて貰った住所を頼りに歩き迷わずに着いた。

ギルシア「大きいな」

レーティア「ここで修行させてるんだから当然じゃない？」

ギルシア「それもそうだな。俺らより楽しみなのはもう一人いるが・・・」

レーティア「ジャンヌね。あそこには賑やかな人がいるから大丈夫でしょ」

楽しみにしていたのか笑顔であるジャンヌと呼ばれた少女を見た後、中へ入った。

ギルシア「あれ・・・誰もいない・・・」

中に入ると見回すと誰もいなかった。

見回した後、大きな揺れと音が聞こえてきた。

リル「うゝ・・・」

ギルシア「何だ!？」

レーティア「レオンの修行じゃないの?派手にやってるわね」

ジャンヌ「あゝ・・・それなら納得かも」

ギルシア「それもそうだな。誰と戦ってるやら・・・」

最初は何なのかと驚いたが、レーティアの言葉で一同は納得し落ち着いた。

すると・・・

はやて「あの・・・何か御用ですか？」

はやてがギルシアの前に現れた。

ギルシアとレーティア、リルは普通にはやてを見ていたが、ジャンヌだけは違っていた。

手を顎に置き、考え始めた。

ジャンヌ「あれええええ!!!？魔法少女リリカルなのはのはやてちゃんって髪・・・膝裏まで伸びてるううう!!!しかも・・・身長が伸び、ややグラマーになってるううう!!!」

レーティア「大丈夫よ」

内心はやてに対しツッコミを入れていたジャンヌを見たはやてはレーティアから気にしないよう言われた。

実際のこちらのはやてを見た事が無いのか衝撃を与えていた。

はやて「はぁ・・・自己紹介しておきます。私は八神はやてと申します」

レーティア「私はレーティア・デビリアス。よろしくね。ちなみに抱いている赤ん坊はリルよ」

ジャンヌ「ま、いつか・・・私はレーティアお姉ちゃんの妹のジャンヌ・デビリアスだよ。よろしくね」

ギルシア「俺はギルシア・アダマントだ。見ての通り神父だ」

はやて達は自己紹介をし終えた後、レーティア達は何が起きているのかはやてに聞いてみた。

リルを見たはやては癒されたのか笑顔になったのは言うまでも無い。

レーティア「ここで何が行われているの？」

はやて「統夜とレオンさんのバトルです。良かったら地下へ行つて見ます?」

ギルシア「構わないぜ。レーティアとジャンヌもいいだろ?」

レーティア「いいわよ」

ジャンヌ「いいよ」

リル「あう」

統夜とレオンの戦いに興味があるのかギルシアは即答し、レーティア達も賛同した。

その後地下訓練施設へ移動した。

レーティア「貴方は蒼穹の騎士団の一員?」

はやて「はい。貴方達は・・・」

レーティア「レオンとユウカの知り合いよ」

はやて「レオンさんとユウカさんの知り合いでしたか・・・道理で蒼穹の騎士団を知っていたと・・・」

ジャンヌ「まあね。いや・・・あの偽りの秩序を掲げた 세인트クルセイダーズを倒した事に感動した」

ギルシア「俺達もレオン達から聞いて・・・それなりに調べてみたんだが・・・よくやったな」

レーティア「私達に掛ればあれは瞬殺ものよ。倒した貴方達は素晴らしいわ。弱き者を食い物にし、絶対正義を騙る存在を・・・」

はやて「あ、あはは・・・あれは汚い手を使ったり・・・ロストロギア使つて不死身の悪魔になって圧倒したんですけど・・・最後は覚醒して勝ちました」

移動中に 세인트クルセイダーズとの戦いを話し、ギルシア達は蒼穹の騎士団に対して称賛していた。

はやては話をしている内にレーティア達の凄さが理解出来ていた。何故ならレオンとユウカの知り合いで実力も高いと思っただからだ。

ジャンヌ「はやての髪は長いね。その・・・統夜つて人の影響？」
はやて「せやな・・・私の大好きな幼馴染やから・・・」

ギルシア「これはもしや・・・」

レーティア「恋してるわね」

リル「うゝ」

顔を赤くしてジャンヌの問いに答えているはやてをレーティアとギルシアは笑みを浮かべていた。

ギルシア「ここか」

話している内に地下訓練施設の前に着いた。

はやて「あそこから直に観戦出来ます」

はやてはギルシア達に観戦できる場所まで案内した。

案内し終えた後、はやて達が見たものはメサイアを纏い、右手にサーディオンを持つている統夜がヴァンパイアルシファーになり、レオンと戦っていた。

ギルシア「噂に聞く天川統夜が・・・レオンと戦っている・・・か」

レオン「私は嬉しい限りだ・・・吸血鬼と墮天使の同時解放形態ヴァンパイアルシファーのお前と戦える事に」

統夜「そうすか・・・」

レオンはヴァンパイアルシファー状態の統夜に対し笑みを浮かべていた。

バトルマニア故なのだろう・・・

レオン「属性魔法に剣術、天神拳、五気を用いた戦術は見事だが・・・まだまだ甘い！」

手に持った剣の刀身に魔力と覇気を纏わせ統夜に一閃を放とうとしたが

統夜「覇牙天衝！！」

五気を纏わせた月牙天衝の強化版でレオンの斬撃に対抗した。

レオン「ふふ・・・確かに・・・お前は覇気が扱えるようだが・・・まだ本当の使い方を知らんようだな・・・素質はあるようだが・・・」

レオンが押し出し統夜を勢いよく吹き飛ばした。

統夜「がっ・・・」

ユウカ「ヴァンパイアルシファーは確かに強力無比だけど・・・彼の場合は不安定さを感じられる」

観戦室に来ていたユウカが紅茶を飲みながら呟いていた。

レーティア「ユウカ」

ユウカ「あら・・・レーティアにジャンヌ、ロ・・・ギルシアじゃない。元気にしてたかしら？」

レーティア「見ての通り元気よ」

ジャンヌ「元気だよ」

ギルシア「ああ。って・・・俺の事ロリコンって言おうとしなかったか？」

ユウカ「気のせいですわ」

レーティア達はユウカと久し振りの再会をしていた。

ギルシアは自分をロリコンと呼び掛けたユウカに対しジト目で見ていたのは言うまでも無かった。

はやて「レオンさんは喜んでますね」

ユウカ「彼女はバトルマニアだから・・・強い人と戦ってみたいというのはレオンの生き甲斐のようなものよ」

レーティア「そこだけは変わらないね」

レーティア達は統夜とレオンの戦いを観戦していた。

ジャンヌ「あの人とレオンが戦っているのって統夜って人から？それともレオン？」

ユウカ「どっちも違うわよ。あそこにいるシャルの提案で統夜とレオンの戦いが始まったわ」

たい焼きを食べながら観戦しているシャルを指して言った。

キツカケは統夜達がレオンの修行の後の事だった。

レオン「天川統夜と戦ってほしい？」

シャル「ええ・・・彼の持つ力を貴方と戦ったらあの形態に目覚める筈だから」

レオン「あの形態？」

修行を終え、シャワーを浴び終えたレオンにシャルが話を持ちかけて来たのだ。

あの形態という言葉にレオンは気になり始めた。

シャル「あの形態・・・ヴァンパイアルシファアの真の形態を目覚めさせる為に・・・」

レオン「ふむ・・・何があつたのか詳しい事を教えてくれないか？」
シャル「ええ」

シャルはメサイアのテストとして統夜と戦った事を話し始めた。最初は統夜は双銃であるアドヴァンスフューラーやドライバーであるアドヴァンスイーグルとアドヴァンスファルコンを用いて戦っていた。

後にアドヴァンスライザーとドッキングし、エクストリームオーシヤンシステムを起動させた後、人々の意識を感応させるという異常な現象が起き始めた。

エクストリームオーシヤンシステムを起動させたのが影響なのか、背中から羽の形が機動ウイング状の五対十翼の翼が生え、紅のマントを羽織り、髪の色が蒼が掛った金髪、瞳が瞳が真紅、瞳孔が縦になっているヴァンパイアルシファアと異なっている形態に変化した。

シャル「私が統夜と戦いあの姿を見た・・・これが全てよ」

この話を聞いてレオンは統夜とメアリと戦いにて解放したヴァンパイアルシファアの不安定さが頷けた。

あれこそがヴァンパイアルシファアの真の力ではないかと・・・

レオン「あの時のヴァンパイアルシファアが不安定なのは分かっていたが・・・シャルが見たのは恐らく真のヴァンパイアルシファア

なのだろう。私達ですらあいつと鮮華の詳細は分かっていない」
シャル「統夜と鮮華の本当の種族・・・知っていきうなの約一名
いるわよね」

レオン「北郷か・・・だが奴はそう簡単に口は割らんだろう・・・」
シャル「そうよね。で・・・どうするの？」

レオン「この話・・・乗ろう」
シャル「成立ね」

話を終え、真のヴァンパイアルシファーに興味があるのかシャルの
誘いに乗った。

ユウカ「と言う訳よ」

話を聞いたはやて達は啞然としていた。

統夜の解放形態が不安定でまだ力が隠されていた事に対して・・・

ギルシア「真のヴァンパイアルシファーな・・・」

レーティア「この世界に興味がありそうなので一杯ね」

ジャンヌ「それってスキル？」

ユウカ「解放形態と呼ばれるものよ。動物系統妖怪や墮天使、吸血
鬼、死神のような種族が所有しているわ」

ジャンヌ「妖怪に墮天使、吸血鬼、死神・・・本当にこの
世界は不思議だね」

ギルシア一家とジャンヌはこの世界により興味を持ったようだ。

はやて「あの・・・ギルシアさん達はもしかして・・・シャルさん
と同じ転生者ですか？」

ギルシア「ああ。俺以外にレーティアとジャンヌ、レオン、ユウカ

も転生者だ」

はやて「なるほど・・・」

ジャンヌ「知ってると思うけど・・・転生者というのは神様から能力を得て転生した存在だけど・・・前世からの生まれ変わりの人もいるよ」

はやてはギルシア達が転生者と聞いてみた結果、肯定していた。

その後ジャンヌはやてに転生者に関する事を簡潔に教えていた。

ギルシア「天川統夜とレオンの対決はどうなるやら・・・」

統夜とレオンの戦いを観戦を始めた。

統夜「ここは・・・こいつでいくか。ロード八種・・・出陣！」

虹色の宝珠を鐔の部分にある穴に嵌め込み、長剣から背中に装着される六つの腕の先端は左右対称に銃、爪、刀の形を模しているバツクパツクに変化させた。

レオン「阿修羅か・・・」

統夜「サーディオンのフォーム変化はまだまだあるぜ」

爪の形をしている腕と刀の形をしている腕を動かしレオンに攻撃を仕掛けた。

レオン「ふんっ！」

剣で打ち合いを始めた。

統夜「くっ！？・・・こっちまで伝わるな。阿修羅の腕だけが取り柄じゃない」

レオンのパワーに驚きつつ何らかの策を考え始めた。打ち合いの最中に六つの腕に雷を帯びさせ始めた。

統夜「六雷覇！！」

六本の腕から同時に雷を放った。

レオン「いい攻撃だ・・・だが・・・まだ甘い！！」

雷を先読みしているかのように瞳を閉じ横に避け、剣で一閃を放ったが、爪の部分の腕により防がれた。

統夜「（心を読んだ？咲夜同じく心が読めるのか？）雷銃！」

銃の腕から雷の砲撃を放ちながらバックステップし始めた。

統夜「おまけだ！デスペアレッテゼ！！」

バックステップした後、予め所々の空間に設置していた大小の蒼炎の爆弾を一齐に大爆発させ周りが見えないうにした。

レオン「用意がいいものだ・・・だが目暗ましにはならんぞ」

剣の一振りですペアレッテゼを消し飛ばした。

その後、統夜はロード八種からロード剣聖に変化させ、刹那でレオンの所へ刹那で移動し速い抜刀術で斬り掛ったが防がれた。

レオン「確かに強いが・・・まだまだだ!!」

強烈な一閃で統夜を上を切り上げた後

レオン「バンデットナツクル!!」

上へ跳び魔力を纏わせた拳で統夜の腹部を殴り、地面に勢いよく落ち空中に再び上がった。

統夜「ぐっ・・・速く重い・・・」

レオン「ソウルサヴァイバー!!」

受け身を取らせる暇を与えず、地面に魔力と気力を収束した剣を刺し、暴発させ複数の竜の牙が突き出るかのように、気の刃が何度も隆起させ直撃させた。

先程の攻撃を受け、ボロボロになり地面に倒れた。

はやて「す、凄い・・・」

ユウカ「相変わらず派手にやるわね」

レーティア「そうね。あの英雄君も中々やるわね」

ギルシア「力だけでなく戦術も高い」

ジャンヌ「でもこれは分からないんじゃない？真のヴァンパイアルシファアが目覚める事に・・・」

統夜とレオンの戦いを見ていたはやて達は真剣な表情で見つめていた。

はやてはレオンが統夜の切り札であるヴァンパイアルシファアに勝る力を持っている事に驚いていた。

シャル「……………」

倒れている統夜をじっと見つめていた。

シャル「（貴方なら目覚めてくれると信じているわ）」

レオン「ふむ……そろそろ目覚めてもいい頃だと思ったが……私の思い過ごしか」

倒れている統夜を見て残念そうな表情で見つめていた。
すると、統夜は辛うじて立ち上がり始め、力が上がり始めた。

統夜「……………」

ドクンツ！と鼓動が鳴り、身体に変化が起き始めた。

レオン「起きた……にしては少し様子を変だな」
統夜「……………」

鼓動が再び鳴り始め、妖気が溢れ出し、背中にある翼が光り始めた。

レオン「（力が増え始めている……目覚めつつあるという事が……）」

真のヴァンパイアルシファアになるのではないかと笑みを浮かべていた。

レオン「見せて見る！！真のヴァンパイアルシファアの力を！！」
統夜「ガアアアア！！！！」

レオンの言葉に反応したかのように統夜は雄叫びを上げ、姿が光り始めた。

レオン「（無意識だろう・・・しかし・・・）」

統夜を見つめ・・・

レオン「（こいつの本当の種族とは一体何なんだ？謎が多過ぎて分からん故か・・・潜在能力が高く底が見えん！！）」

光が収まるとヴァンパイアルシファーと異なつた背中から羽の形が機動ウイング状の五対十翼の翼が生え、紅のマントを羽織り、髪の色が蒼が掛つた金髪に変化した。

レオン「（何だ・・・吸血鬼とは思えん力を感じる・・・）」

統夜「・・・・・・・・」

瞳を開けると真紅で瞳孔が縦になっている瞳を見せた後、レオンを睨み威圧していた。

統夜の威圧はレオンだけでなく、観戦していたはやて達にも巻き込まれてしまった。

レーティア「な、何・・・今の・・・」

ギルシア「何だ・・・今は・・・まさか!？」

ユウカ「無意識に使用していたに過ぎないわ・・・それより・・・あの姿がそうなの？」

シャル「ええ・・・以前より力が高くなっているわ・・・でも・・・完全に制御しているとは言い難いわね」

はやて「い、今は・・・」

統夜の威圧で観戦していた一同は冷や汗を流していた。
ギルシアとユウカは先程の威圧の正体が解っていたが、統夜の形態に目を奪われていた。

ジャンヌ「前のより姿が変わってるね・・・羽の形が変わり、マントが追加されてる・・・」

レーティア「妖力が漆黒の闇より美しく感じるわ・・・」

デビリアス姉妹は統夜から発する力を冷静に感じ、そう呟いていた。
ユウカは統夜が先程の威圧の正体は何なのか分かっているのか笑みを浮かべて見つめていた。

はやて「（統夜・・・つくづく思うんやけど・・・本当に何者なんでしょう？）」

先程の威圧を受け、恐怖で足がすくみ、ヴァンパイアルシファアとは異なる姿を見てそう感じてしまった。

昔からは異常と思える身体能力を持ち、吸血鬼と真ルシファアという解放形態に目覚め、天神拳と呼ばれる拳法を扱う統夜に僅かだが恐怖を抱いてしまっていた。

すると、シャルがはやての肩に手を置いた。

はやて「シャルさん・・・」

シャル「大丈夫よ。統夜なら・・・信じなさい。貴方の幼馴染を信じないでどうするの？」

はやて「そ、そうですね。でも・・・本当に何者なのかだけは感じてしまうんです」

シャル「それは一理あるわ・・・本当の種族が判明しても全て受け

入れなさい」

はやてとシャルの二人は統夜とレオンの戦いに視線を再び向けた。

レオン「ふ、ふふふふ・・・はははははは！！真のヴァンパイアルシ
ファーだけでなく『王の素質』を持っているとは面白い！！」

統夜の持つ力と先程の威圧なのだろう王の素質に対し、嬉しそうに
大笑いした。

レオン「だが・・・まだ甘い！！」

笑いを止め、目を見開き一喝し、剣を構え駆け抜けた。

それと同時に統夜も駆け抜けた。

二人の剣を振る腕が見えず、大きな衝撃が発生し始めた。

レオン「（以前より速く力も上がっているが・・・まだまだだな）」
統夜「・・・・・・・・」

統夜は妖力を刀身に纏わせ、強烈な一閃を放ち、レオンは真っ向か
ら受け止めようとしたが、予想外にも力が大きかったのか押され後
ろへ飛ばされてしまった。

レオン「（これは・・・桁違いだ・・・だが倒せない相手では無い）」

統夜の真紅のマントが伸び、刀を握っていない左腕に纏わせドリル
状の腕に変化させ、レオンに突撃を仕掛けた。

突進を避けたレオンは剣をもう一つ形成し、二刀流で対抗した。

レオン「あのマントは身体変化を補助する力か……」
纏われたマントの使い方を把握しながら二刀で軌道を逸らした後、蹴りで距離を取ろうとしたが、統夜は攻撃を中断し、光より速い動きでレオンの蹴りを回避した。

レオン「ルシファーと言うより天使だな……私も使わせてもらおう……」

レオンの身体が蒼い光に包まれた。

レオン「……天翔ける白銀の獣王・銀白虎!!」

銀色の白虎を半人半獣にさせたような姿へと変身した。

レオン「見せてやろう……銀白虎・ヴァルガードの力を!!」

一瞬で消えたかのように統夜の方へ駆け抜け、二刀を瞬速で振るった。

統夜「……」

鞘から刀を抜き、刃のみで二刀を防いでいた。

レオン「確かに強いが……制御出来なければ意味が無い!!」

二刀で押し出し、統夜を吹き飛ばした後、二刀を消し、瞬速で動き、拳と蹴りの連打を叩きこんだ。

レオンの攻撃をマトモに受けた統夜は、立ち上がり、攻撃を仕掛け

たが、避けられた。

レオン「効いたようだな・・・私の技を見せてやろう・・・はああああ・・・はあ！！！！」

身体に蒼いオーラを纏い魔力と気力を高めた後、両手から獅子の顔をしたエネルギーを出し、統夜に当てた後、距離を縮め、拳と蹴りの乱打の嵐を見舞った。

一つ一つの攻撃が速く強力である為、統夜は避けられず、ただ受けるだけだった。

レオン「氷獅子破！！」

冷気のある獅子の顔をした砲撃を放ち、氷漬けにした後、半人半獣の姿から完全なる獣化に変化し魔力と気力を纏わせた。

レオン「奥義・・・獅子王烈覇！！」

魔力と気力を纏った状態で瞬速の突撃をし統夜を吹き飛ばし、フィニッシュを決めた。

直撃を受けた統夜は気を失い、姿が元の姿へ戻り、起動されたデバイス達も待機状態に戻った。

レオン「いいものを見させてもらった・・・感謝する」

気を失った統夜を担ぎ、上へ上った。

戦いを終えた後、統夜は自分の家のリビングにて意識を取り戻した。

レオン「気が付いたようだな」

はやてとレオン、ユウカ、シャル、ギルシア、レーティア、ジャン
又が座っていた。

統夜「ここは・・・俺の家か・・・」

はやて「無理はあかんよ・・・」

レオン「お前に聞きたい事があるがいいか？」

統夜「まあ・・・構わないっすけど・・・」

レオン「『覇気』の使い方を知っているか？」

統夜「まあ・・・気力の上位種であり、攻撃力や防御力の増強等に
使うかな」

統夜の答えを聞いたレオンは少々呆れていた。

レオン「覇気をそんな風に使っていたとは・・・間違いでは無いが・
・・・」

統夜「????」

レオン「覇気には三つの使い方がある・・・一つ目は防御の覇気だ
が攻撃に応用する事により、攻撃力を上げる事ができレアスキルに
よる特殊防御等を無効にする武装色、二つ目は周りの声を聞く事が
出来る見聞色、三つ目は人の上に立つ王の資質を持った者だけにし
か無く半端な気持ちの者を覇気で気絶させる事が出来る霸王色の覇
気だ・・・」

統夜「まさかと思うけど・・・見聞色って・・・」

レオン「ああ。心を読んだみたいに避けた事をしただろ？それが見
聞色だ」

統夜「咲夜みたいな心を読むレアスキルかと思ったよ・・・」

レオンとの戦いを思い出しながら話していた。

レオン「武装色と見聞色は一般的だが・・・霸王色だけは一部の存在しか知られていない」

統夜「意外と便利なんだな・・・と言いたいけど難しそうだな」

レオン「まあな。だが霸王色は修行で強化する事は出来ず、本人の成長でしか出来ないからだ」

統夜「何故・・・霸王色の事を詳しく教えてくれるの？」

ギルシア「それは・・・お前が霸王色の覇気を持つてるからだ」

統夜が何故霸王色の覇気のことを詳しく教えてくれるのか、恐る恐る聞いてみたが、レオンの代わりにギルシアが答えた。

統夜「俺に・・・霸王色の覇気・・・が・・・？」

ユウカ「無意識の段階だけど・・・完全に開花されてないわ」

統夜は霸王色の覇気が自分にある事に戸惑っていた所、ユウカは付け加えるように言った。

統夜「遅いんだが・・・あんたら誰？」

ギルシア達四人を見て言った。

レーティア「遅いけど自己紹介するわね。私はレーティア・デビリアスよ。この赤ちゃんはリルよ」

リル「バブ」

ジャンヌ「私はジャンヌ・デビリアスだよ」

ギルシア「俺はギルシア・アダマント」

レーティア一家は統夜に自己紹介をしていた。

統夜「どうも。はじめまして。天川統夜と言います」

レーティア一家に簡潔に返した。

ギルシア「俺達はレオンやユウカと同じ転生者だ」

統夜「そ、そうなんだ・・・この世界はどう思う?」

ギルシア「月に国があり、神界や魔界と呼ばれる世界と開門している事に驚いた」

ジャンヌ「様々な種族がいる事に驚きだよ」

統夜達の世界が気に入ったのか笑顔でハキハキと答えていた。

すると、玄関から音がし、誰かが帰って来た。

プリムラ「ただいま」

ギルシア「……………」

帰って来たプリムラがリビングに来た瞬間、ギルシアの様子が変わり始めた。

ギルシアの目が、赤、黄、青の順に点滅し、口と鼻、耳から煙が噴射し始めた。

統夜「な、何が起きたアアアアーーーーっ!!!!!!」

ギルシアの変わりように驚愕しながら叫んでいた。

レーティア「気にしないで。あれはいつもの事よ」

ギルシア「激萌少女発け~~~~ん!!!!!!」

レーティアは統夜にいつもの発作のような感じで答えた。

ギルシアは瞬速でプリムラを抱きかかえようとするが、避けられ、

壁とキスする形で激突してしまった。

プリムラ「ねえ・・・お兄ちゃん・・・あの人何なの？」

統夜「それは俺が聞きたい・・・」

ギルシアに対し警戒しながら統夜にしがみ付いて、聞いてみたが、統夜は右手を額に乗せて、頭が痛いかのような感じで答えた。

ギルシア「痛てて・・・壁とキスしちまうとは・・・」

壁から抜け、服等に付いていた垢を払い始めた。

ギルシア「統夜・・・お前の妹か？」

統夜「いえ・・・ラバーズの一員です」

ギルシア「・・・俺と同じ少女愛好家だったとは驚きだ!!」

統夜「や・・・俺をアンタのようなロリコンと一緒にすな!!」

統夜はギルシアと同じ趣味だという事を否定した。

ギルシア「俺はロリコンでは無い!!少女を愛でる神父だ!!同志よ!!」

統夜「それがロリコンだつての!!てか俺を勝手に同志にすな!!ロリコンならうってつけの奴がいる!!」

ギルシアの叫びに統夜は同志という単語を否定しながらツッコミを入れていた。

ギルシア「ほう・・・誰だ？」

統夜「明久という奴だ」

はやて「えっ・・・明久君ってロリコンなん？」

明久がロリコンという言葉に疑問を感じたはやては統夜に聞いてみた。

統夜「あいつは成田に小蓮という小さい娘がいる事を忘れた？」

はやて「あゝ・・・納得や。ギルシアさん、統夜ラブーズの中にもう一人幼女がいます」

ギルシア「何い！！どんな奴だ！！」

はやて「梅ノ森千世という娘です。リムちゃんと千世ちゃん、華琳ちゃんの三人ぐらいですが・・・」

はやての言葉を聞いたギルシアは統夜の肩に手をポンと置いた。

ギルシア「否定は出来んぞ？同志」

統夜「だから同志って言うな！！」

はやて「（ミルクィホームズや桂花ちゃん、メイメイちゃん達を見たら・・・ギルシアさん・・・暴走しそうやな・・・）」

統夜とギルシアのやり取りを見ていたはやてはギルシアをロリ系の人物と接触させるのは不味いと心の中で判断していた。

二人のやり取りを見ていたレーティアとジャンヌは笑い、シャルとレオンは呆れ、ユウカは笑みを浮かべ何かを企み、プリムラは苦笑いしていた。

レオン「そんな訳だ・・・覇気に関する事は霸王色の覇気を自分で開花させたら教えてくれ」

統夜「分かった」

それだけと言ってシャルを除くギルシア達を連れて天川家から出ようとしていた。

ギルシア「次会う時は幼女について語り合おうじゃないか！」

ジャンヌ「あはは・・・友達が出来たみたいだね・・・」

レーティア「これからもよろしくね」

リル「あう」

ユウカ「またいじ・・・修行の時に会いましょう」

統夜「そうだね・・・幼女趣味は無いから同志じゃないし・・・はは・・・これからもよろしくお願いします。もう突っ込まないです」

ジャンヌの言葉に同意し、ギルシアの言葉を否定しながらレーティアに挨拶をし、ユウカに対しては疲れたかのような口調で答えた。その後レオン達は家から出た。

はやて「今日もご飯食べてくんですよね？」

シャル「ええ。はやてのご飯はおいしいから」

統夜「今日も賑やかになるな」

はやての作ったご飯が気に入ったのか笑顔で答えるシャルでした。

天川家を後にしたレオン達はギルシア一家と話していた。

ギルシア「レオンは同志統夜の正体は知っているのか？」

レオン「（同志は譲れないのか・・・）今・・・吸血鬼と墮天使の混血しか判明されていない。あいつと妹だけは全く分らん」

ギルシア「マジかよ・・・大丈夫なのか？」

レオン「心配するな。ああいう奴だからこそ戦い甲斐がある」

レーティア「生粋なバトルマニア故かしらね。先程の戦いで勝ったのに喜ばなかったわね？」

レオン「制御出来ない真のヴァンパイアルシフアーと霸王色の

覇気を持つ天川を倒しても意味が無いからだ・・・あの力を制御した天川と戦い・・・倒し勝った事に意味がある」

目を閉じ、レーティアの問いに答えたレオンだった。

レーティア「もし私だったら納得してなかったかもね」

苦笑しながらレオンの言葉に賛同していた。

ギルシア「ま、この世界は未知的な所が多い・・・」

ジャンヌ「アーマードにドライバー、ガーディアンと言ったデバイスの種類に・・・IES・・・」

ユウカ「技術系統が異常な上・・・二世界の開門、トイズと呼ばれる能力・・・地球は異常な星と疑ってしまうわ」

ギルシア「だが・・・面白くていい」

ギルシアが笑みを浮かべるとレーティア達もつられて笑みを浮かべ、笑い始めた。

レーティア「またね」

レオン「ああ。いつかお前達の家遊びに行こう」

ジャンヌ「最近英都に引っ越したから遊びに来てね」

ユウカ「ええ」

本拠地寮でレオン達と別れたギルシア一家は家へ帰って行った。

その頃とある次元世界にある崖の上に忍が立っていた。

忍「・・・・・・・・」

目に映る研究所らしき建物を見据えた。
そして、漆黒のカラーリングのバックルの『ブラックドライバー』
を腰に当てた後、ベルトが出て来て巻き付き、左腕に漆黒のカラー
リングのリストウォッチ型PDA『ネクサス』、右手首に特殊ブレ
スレット『ナイトブレス』、両腰に漆黒のカラーリングの大型特殊
拳銃ブラックフューラーをセットした。

忍「ブラックナイト・ネクサス・・・セットアップ！」

上に紅いシャツを着て、下に漆黒の長ズボンを穿き、その上から背
中に白銀の狼のエンブレムが刻まれた半袖ロングコートを羽織り、
首から銀の十字架のネックレスを下げ、両手に黒い生地フィンガ
ーレスグローブを着け、両足にコンバットブーツを履いた姿のバリ
アジャケットに変化した。

忍「・・・・・・・・」

両手にブラックフューラーを手にし、統夜が使う刹那並みの速さで
駆け抜けた。

目の前に警備員がいたが、五気を右手の指先から極細の糸状にして
放出し、捕縛した。

忍「ハウリング・バスター!!!」

両手にある特殊大型拳銃であるブラックフューラーから魔力砲撃を
放ちゲートを破壊し中へ入り研究所を破壊し始めた。

研究員「くっ・・・お前は・・・黒騎士!!!何故我らの邪魔をする
!!!」

忍「お前達の研究は・・・人々を苦しめる・・・実験を止める・・・」
研究員に対し冷たい視線で見つめ、威圧した。
忍の威圧により、研究員は泡を吹いて倒れ、研究所の中にいる人達全てを外へ転送し、全ての施設を破壊した。

研究員「わ、我々の・・・」

忍「自業自得だ・・・お前達は生きて罪を償え・・・」

破壊された研究施設を呆然と見ていた研究員に対しそう言って後ろへ向け帰り始めた。

忍が帰り始めた瞬間、研究員に何か直撃し、燃えカスになってしまった。

異変に気が付いた忍は後ろへ振り向くと、十数名の男女が立っていた。

忍「お前達は・・・何者だ？普通の人間にしては・・・異様なものを臭い・・・気配を感じる・・・」

男「鼻が効き・・・俺たちのことが解るのか・・・まあいい・・・やれ!!」

忍を興味深そうに見た後、他のメンバーに命令を出した。

それぞれ四時方向と八時方向に移動し焰や雷、氷、水の魔力弾を忍に向けて放った。

彼らの攻撃に対して忍は何も動じずに、ただ静かな感じで動き回避した。

忍「・・・貴様らは噛み砕く価値もない。痛い目を見る前にさっさと失せろ・・・」

忍の冷たい言葉を聞いた男達は怒りで力を解放した。
ドラゴンやタイガー、恐竜に変身したり、魔力のリミッターを解除した。

それを見た忍は呆れていた。

忍「貴様ら・・・馬鹿か？」

両手をポケットに入れた。

男「何のつもりだ？」

忍「貴様ら如きに力を出すつもりは無い・・・何故なら・・・」

瞬速の歩法である神速を使い、左足を軸にした後回し蹴りで右足の踵を男の側頭部を強打して吹き飛ばした。

忍「貴様らが弱過ぎるからだ・・・」

次々と襲い掛かって来る集団を回し蹴りや踵落とし、連続蹴りなどをして次々と倒していた。

忍「まだやるのか・・・」

男「お、おのれ!!」

最後に残っていたリーダー格である男は魔力を解放し、身体が鬼のような異形になり巨大化した。

忍「見掛け倒しか・・・」

男「舐めるなアアアア!!!!」

忍に目掛けて魔力の籠った拳を振るうが、かわされた。拳を当てた所にはクレーターが出来ており、威力はSSSランクくらいあるのかクレーターの深さが1〜2メートルくらいあった。

忍「そんな単純な攻撃で当たると思うか？」

男「これならどうだアアアアア！！！」

両手から威力が高ランクはある魔力砲を忍に向けて放った。

忍「リフレクトミラージュ！」

氷の鏡をいくつか展開し、男の魔力砲を反射し、軌道を読ませないようにして返し、男は直撃を受けて気絶した。

忍「所詮は力を持って余した屑か……」

気を失ったのを確認すると、帰る準備を始めた。すると、気配を感じたのかした方向へ身体を振り向いた。

そこにはマリオと緑色の帽子がトレードマークの男、ルイージの二人がいた。

マリオ「ここに逃げていた訳か……」

忍によって倒された連中を青いカードを貼り付けると消えてしまった。

忍「何をした？」

マリオ「輪廻へ送ったのさ」

忍「輪廻だと？」

ルイージ「うん」

忍「その前に・・・聞かせる・・・奴等は何者だ？」

マリオ「奴等は前世の記憶を持ち生まれ変わった存在・・・俗に言う転生者だ。先程の連中のような神から力を貰い生まれ変わる存在もいる」

忍の問いにマリオは簡潔に答えた。

ルイージ「君は彼らを倒したの？」

忍「それが何だ？」

マリオ「つれないな・・・転生者を倒した事には感謝する」

忍「お前らの為じゃ無い」

ルイージ「強さは・・・あの統夜君に匹敵する強さだね」

ルイージの言葉にあつた統夜を聞いた忍は怒りの表情になった。

ルイージ「ど、どうかしたの？」

忍「奴の名前を口にするな!!」

マリオ「訳ありのようだな・・・まあ・・・あいつはいい奴だ。そして幾つかの哀しみを背負っている・・・」

忍「・・・」

ルイージ「君に何があつたのか知らないけど・・・他の人を拒絶するのは良く無いよ？」

マリオ「そうだぞ。仲間はいいものだ。拒絶し一人で強くなるうとしてもなれないぞ」

忍「お前達に何が分かる!!奴の・・・天川統夜のせいで・・・俺の人生は狂わされ・・・大切な者を失つた!!」

マリオとルイージの言葉に統夜を憎んでいるかのように言葉を吐きだした。

忍「俺は強くなる・・・奴と俺を実験した奴らへの復讐の為に・・・」
「
マリオ「それがお前の強くなる理由か・・・俺は統夜に匹敵する強さと見ていたが俺の勘違いだったようだ」

忍の強くなる理由を聞いたマリオは目を閉じて、呆れた口調で言った。

忍「何・・・？」

ルイージ「復讐の為に強くなる事は出来ないよ。例え出来たとしても限界があり・・・心を失う」

忍「奴等に復讐を果たせば、俺自身はどうなろうとも構わない!!」
ルイージ「統夜君に復讐を果たしたとしても・・・憎しみの連鎖は止まらないよ・・・彼を慕う人達から憎まれ続ける・・・憎しみの連鎖は広がってしまうんだよ。それを考えた事があるの？」

復讐に拘る忍にルイージは憎しみの連鎖について教えた。

例え、忍が統夜を殺しても、彼を慕うはやて達統夜ラバーズ、遊輔達のような仲間や友人、知り合いから憎まれ、憎しみの連鎖は広がるだろう。

忍「言った筈だ・・・果たせばどうでもいいと・・・」

マリオ「憎しみは憎しみを呼ぶ・・・もう一つ教えておく・・・自分自身を大事にしる・・・お前は自分自身を大事にして無いから友人や仲間を作ろうとしないのは良く無い事だ」
ルイージ「よく考えてね」

それだけを言った後、二人は去って行った。

忍「憎しみは憎しみを呼ぶ・・・か・・・」

彼らが去った後、転移して帰った。

翌朝、英都港にあるスペースバンガードが入っている倉庫へ統夜と華琳の二人は向っていた。

華琳「何故セントクルセイダーズの本拠地へ？」

統夜「メアリの両親が殺された事を聞いて・・・奴が何をしていたのか気になつてね」

華琳「そう言えば気になるわね・・・奴一人と普通の魔導師じゃ太刀打ち出来ないでしょうし・・・」

統夜「そこが気になるんだよ」

目的はセントクルセイダーズの本拠地がある世界へ行く為だった。メアリの両親が殺された事が気になったのか調査する事である。

それに加えて何の研究していた事も含めてだが・・・

倉庫に着くとギルシアとレーティア、リル、ジャンヌの四人が待っていた。

統夜「あれ・・・何故ここに？」

ギルシア「ユウカから面白い戦艦があると聞いてここに来た」

レーティア「私達も蒼穹の騎士団に入る事に決めたわ」

ジャンヌ「戦艦で何処かへ行くなら連れてって」

統夜「構わないっすよ。友人なら文句は無い・・・（あの人・・・情報通だな・・・）」

そう言つて倉庫の中へ入った。

ギルシア「海賊船だな」

レーティア「性能良さそうね」

リル「あう」

ジャンヌ「大砲とかあるのかな」

ギルシア達はスペースバンガードを興味深そうに見ていた。

統夜と華琳は乗り、スペースバンガードのシステムを起動させて発進準備をしていた。

眺めていたギルシア達は中へ入った。

ギルシア「中は機械だらけなんだな」

統夜「ああ」

ギルシア「ここでレーティアとタイタニックの真似ごとしてみたいものだ」

レーティア「ギルシア・・・それもいいわね。私達のラブストーリーを作りましょう!!」

レーティアはギルシアに抱きつく。

ギルシア「レーティア・・・」

レーティア「ギルシア・・・」

お互い繰り返し返すように呼びあっていた。

ピンク色のオーラが発生し、これを見ていた統夜と華琳の二人は苦しみ出した。

統夜「な、何だこれはアアアア!!!もしや・・・俺の罪が暴かれるのか!!!?」

華琳「あ、ああああ!!!む、胸が苦しい!!!」

ジャンヌ「あの二人の超愛フィールドで邪念が追い払う特殊なパワーにやられたのね」

統夜「何それ・・・確かに愛を感じるけど・・・あの二人が眩し過ぎる・・・」

華琳「正しく最強夫婦・・・」

超愛ワールドにやられながらも作業をし、発進準備が完了し、発進させた。

ギルシア「可愛い幼女（華琳）と何処へ行く気だったんだ？同志よ
統夜「だから同志言うな！」

ギルシア「何を言うう！！こんな可愛い幼女を連れて・・・同志として仲を深める為に・・・俺と一緒に幼女を愛でようじゃないか！！」
統夜「それって嫌がられ・・・断られるのがオチだ」

ギルシアに同志と言われ、誘われたが直ぐに断り、ツッコミを入れていた。

ジャンヌ「何処へ行くの？」

華琳「セイントクルセイダーズの本拠地よ」

レーティア「物資の強奪？」

華琳「調べ物よ。自己紹介が遅れたわ・・・私の名は華琳・・・よろしく頼むわね」

レーティア「私はレーティア・デビリアス。統夜と口論しているのは私の夫であるギルシア・アダマントよ」

ジャンヌ「私はレーティアお姉ちゃんの妹のジャンヌ・デビリアスだよ。よろしくね」

デビリアス姉妹に目的を教えた後、お互いは自己紹介をしていた。

統夜「話は終えたか？」

華琳「ええ」

ギルシア「君・・・名前は？」
華琳「華琳よ」

華琳の名前を聞いたギルシアは手をわきわきとさせていた。

ギルシア「華琳たん！これでもかというぐらいに抱きしめてもいいか？」

華琳「嫌よ」

統夜「その前に断固阻止するがな・・・」
ギルシア「チツ・・・」

華琳に抱きつこうとしたが即答で断られ、統夜に阻まれた。

統夜「ナビィ」時空転移を始めてくれ」
ナビィ「了解。時空転移を始めます」

発進したスペースバンガードは時空転移を始め、セントクルセイダーズの本拠地へ転移した。
転移した後は本拠地の近くまで移動し、着地させた。
統夜達はすぐさま基地の中へ入り、調査を始めた。

その頃明久が住んでいるマンションの中に明久と遊輔、康太の三人が明久の部屋に座っていた。

明久「紅神君に関する情報は分かったの？」
康太「・・・ああ」

康太はノートパソコンを取り出した後、開き、起動させた。

遊輔「統夜を憎む理由も分かる筈だ……」

統夜達は様々な部屋を分散して調べた後、何も無く、まだ調べていないコンピュータールームと研究室、デバイスルームの三つが一つになっている部屋に入った。

統夜「ここに何も無かったら怒るぞ……」

それぞれ棚や引き出しの中を漁るように証拠になるものを探っていた。

すると、ジャンヌが何かを発見した。

ジャンヌ「これ……何かな？」

発見したものは大きな隠し金庫だった。

統夜「ふくむ……これは……干渉……破碎せよ……」

右手に魔力を出し、扉の部分だけを破壊した。

ギルシア「こいつはビンゴだぜ」

金庫の中には何らかのファイルと数枚のデータディスクが入っていた。

書類を手にした統夜はページを捲るところ書かれていた。

『絶滅種復元計画』と……

統夜「絶滅種……復元計画……？」

ギルシア「あいつら……恐竜や原始人みたいなものでも復活させ

るつもりだったのか？」

レーティア「それか・・・既に滅んだ動物を使つての実験か・・・」
ジャンヌ「滅びた異種族かもしれないよ」

統夜「ジャンヌの言う通り・・・滅びた異種族を復元させるというものだ」

明久サイド

明久「読んで見るよ・・・何々・・・」
『絶滅種復元計画・・・それはある世界に生息していた・・・太古の種族である冥族と魔獣族、龍神族と呼ばれる存在の血を被検体に注入する実験である』
ねえ・・・
ムツツリー「・・・冥族と魔獣族って・・・」

康太「・・・ああ・・・冥界に生息し滅んだ種族の名前だ・・・
龍神族も冥界と同じく生息されたが・・・絶滅している」

パソコンの中にある画面にあるレポートらしきものを読んで明久は冷や汗を掻いていた。

遊輔「ある世界は冥界で間違いないな・・・」

統夜サイド

統夜「『冥族とは太古の昔に存在していた稀少戦闘種族であり、それぞれが冥王の名を冠した能力を持つと言われていた種族である』
これはメアリから教えて貰ったが・・・二回目でも驚いてしまう・・・」

メアリから一通り聞いた事はあるが、驚きを隠せずにいた。

ギルシア「冥王・・・か・・・」

統夜「これらは冥界に生息し、絶滅した種族だ」

レーティア「冥界って・・・化け物の巣窟なのかしら？」

ジャンヌ「そんな研究をしてたなんて・・・」

レポートの内容を聞いていたギルシア達は真剣に聞きながらも、セイラ達がやっていた実験に怒りを覚えた。

ギルシア「奴等が何故これを続けなかつたんだろっな？」

統夜「それは俺も気になったが・・・答えは最後ら辺にあるだろう」

引き続きレポートの内容を読み始めた。

明久サイド

康太「・・・」 『龍騎士・・・それは龍神族とも呼ばれていた太古の種族。先天属性を利用した独自の魔法体系とドラゴニック式と呼ばれる術式が特徴的だったと伝えられている。冥族と同じく絶滅した種族である』 「・・・人のやる実験では無いな」
遊輔「ああ・・・最後は・・・魔獣族・・・俺やメアリのような死神と敵対していた種族の魔獣族か・・・」

次のページにある魔獣族の詳細を見て呟いていた。

統夜サイド

統夜「『魔獣族とは太古の昔に存在していたと言われる冥族と同じ

稀少戦闘種族であり、力を求めるばかりに滅んでいった種族。魔獣族の力は個々の持つ長所を最大限に活かす形で具現化することであり、個体によつてその力はかなり違つていたとされている』これで最後だな」

冥族と龍神族、魔獣族の詳細を読み終えた後、次のページを捲つていた。

統夜「やはりそういう事だったのか・・・」

魔獣族のレポートにあつた写真を見て、何かを思い出したようだ。

ギルシア「何がだ？」

統夜「いや・・・あの時・・・セイラが何故自分から出て来た理由が分かつたんだよ」

レーティア「どんな理由？」

統夜「奴等は闇の書事件の時からこの研究を始め、魔獣族の血を注入した被検体を連れて・・・幼馴染の両親を殺したんだよ」

ジャンヌ「それは・・・絶滅した種族の力を利用して私兵にしたつて訳？」

統夜「ああ・・・奴等がマトモな事をする筈が無いからな。冥族や魔獣族、龍神族の誇りを汚している行為だ・・・」

魔獣族のサンプルなのだろう。顔に砕けた仮面と一体化し眼球が黒く一対二翼の蝙蝠状の翼が生えた異形の画像を見せた。

危険のある実験を繰り返し自分達のものにしたセイラ達に統夜達は怒りを覚えた。

統夜「次のページを読むぞ」先程の詳細を述べた種族の血を『紅神忍』と『如月桐葉』の二人を中心に実験を繰り返し、冥族と魔獣族、

龍神族の血は危険であるが故、血液の拒絶反応を中和し且つ結び付けるために吸血鬼の血を注入し、過度な実験を繰り返した。途中で如月桐葉は耐え切れず死亡し、結局絶滅種の血液は拒絶反応が大きという理由で研究は中止が決まり、紅神忍を廃棄処分が決定されたが・・・研究所に保管されていた複数のデバイスを奪取して逃げられた」・・・」

レーティア「その実験って拒絶反応が大きかったのを分かかって長くやっていたの？」

統夜「そのようだな・・・」

ギルシア「人を簡単に捨てやがる考えだけは許せないぜ！！」

過度な実験を繰り返し、分かりきっている結果なのに人を物みたいに廃棄処分という傲慢な考えに静かに怒っていた。次のページを見た統夜は驚愕していた。

ギルシア「どうした？」

統夜「いや・・・次のページにある写真を見てな・・・」

華琳「写真？」

統夜「ああ」

黒髪と右が琥珀、左が紫色のオッドアイの少年が写っている写真が付いているページを見せた。

写真を見たギルシアは神妙な顔つきになって見ていた。

ギルシア「こいつは・・・」

レーティア「知ってるの？」

ギルシア「ああ。こいつに似た奴を前に会ってアドバイスをな・・・」

統夜「こいつにねえ・・・一匹狼になった理由が傾けるかもな・・・同一人物だぜ。オッドアイなんて珍しいからな」

写真を見ながら忍と思つたのかそう呟いていた。

ジャンヌ「彼は・・・セイラ達に復讐を考えてたのかな？」

統夜「実験されて・・・廃棄処分しようとしたんだ・・・その線はあるが・・・もうセイラ達・・・セントクルセイダースは滅びた」

忍が絶滅種復元計画の実験を受けた事を知つた統夜は感慨に浸りながら、ジャンヌにそう答えた。

レーティア「異常な技術はセントクルセイダースが持つべきものじゃないだけは分かるわ」

ギルシア「そうだな」

統夜「最後のようだ。『絶滅種復元計画の真の目的は時空管理局特殊部隊『ソルジャー』に所属している統夜とイグニスに匹敵する存在を作り上げる事であり、セイラの兵として活躍させる為のものでもある。研究中止を決定したと同時にセイラは自分が恐れ、邪魔になり、自分に異を唱えるものは必要無いという理由で特殊部隊ソルジャーをウータイごと崩壊させた』こんな事であるのかよ!!!ふざけるな!!!!!!」

最後のページを捲り、読み上げた後、憤慨し拳で机を強く殴つた。

ギルシア「イカれてやがるな・・・」

レーティア「本当に最低ね・・・人を捨て駒みたいに扱・・・消して良い訳が無いわ!!!」

ジャンヌ「酷過ぎるよ・・・自分の意のままの兵隊を作り上げる事が真の目的だったなんて・・・」

リル「うゝ!!!」

華琳「本当の屑ね・・・セイラは・・・もう活動出来ないけど」

ギルシア達一家も自分勝手な目的がある事に怒りを覚えていた。
その後レポートと数枚のデータディスクを回収し、基地から出た。

明久サイド

明久「そんな・・・この実験が中止になったから僕達はウータイごと壊滅された・・・」

遊輔「それがソルジャー壊滅の真相の一つとは・・・あいつらはふざけてるな・・・」

康太「・・・もう過ぎた事・・・明久・・・遊輔、今やるべき事をやらないと・・・」

遊輔「ああ。冥界や修羅が残っている・・・」

明久「イグニスもね」

康太に言われた後、二人は落ち込むのを止め、やるべき事を思い出していた。

明久「違う世界の僕やムツツリーニだって頑張ってるんだ・・・」

大乱闘スマッシュユーパーブラザーズ出張版に出て来た明久と康太の二人を思い出しながら窓から空を見上げていた。

康太「・・・そうだな」

基地から出た統夜達はスペースバンガードの艦内に戻り、入手したデータディスクの中身を調べ始めた。

ギルシア「何か入っていたか？」

統夜「殆ど絶滅種復元計画や奴等の研究データばかりだ・・・なあ・・・ギルシア」

ギルシア「何だ？」

統夜「俺やイグニスのような強過ぎる力を持つ存在は生きてちゃ駄目だったのかな？あいつらが俺達に嫉妬し絶滅種復元計画というものを考えだし・・・紅神が実験を受けてしまった」

ギルシア「そんな訳無いぜ。お前は誰かを守りたいから吸血鬼や堕天使の力を出すんだろ？あいつらは被害妄想が強く、我が強過ぎたんだと思うぜ。お前はお前の道を進めばいい・・・俺やレーティア、ジャンヌみたいに誰かを守る為に振るうようにな」

ギルシアに自分が原因でセイラは歪み、忍のような人物が実験を受けた事を言うと、ギルシアは当たり前かのように否定し、自分の道を進むべき道を進むように言った。

ギルシアの言葉を聞いた統夜の心は少し軽くなっていた。

統夜「ありがとう」

ギルシア「気にするな。それが最後のやつか？」

統夜「ああ。今から調べてみる所だ」

最後のデータディスクを挿入し、データを閲覧していた。

映像にはデバイス関連の事が書かれていた。

ギルシア「デバイスの事だな。『ブラックナイト・ネクサス』に『セイバーファイリス』、『ガルヴィオン』、『ファイガーズ』、『ランドガードナー』、『ファルゼン』か・・・」

統夜「ブラックナイト・ネクサスはダークナイトデバイスでファルゼンはインテリジェントデバイス・・・それ以外はドライバール

イスだ」

ジャンヌ「アーマードデバイスとドライバーデバイスって……この世界では主流になってるの？」

統夜「俺達の間では主流になってるな。だが……普通の魔導師じゃ扱えん代物だけは言えるぜ」

ジャンヌ「魔力あるだけじゃ扱えないんだね」

統夜「下手して身体壊す可能性があるし」

デバイスのデータを閲覧していた時にジャンヌからの質問に対して、自分達蒼穹の騎士団等が主流になっている事と普通の魔導師じゃ扱えない事を教えた。

これを聞いたジャンヌは意外そうな顔をしていた。

ギルシア「強いデバイスはそこの魔導師じゃ扱えないって訳か」

統夜「そういうこった。ん……これは……」

ギルシア「何か見つけたのか？」

統夜「ああ。『メサイア』のデータがあつたんだ」

ディスプレイにはこう表示されていた。

『メサイアは、ブラックナイト・ネクサスと同時期に開発されたが、紅神忍の脱走により、メサイアの開発は中断された。』

これにより、開発されたブラッドファイアと連携は幻となり、設計図はデータとして残された』

ギルシア「お前のアーマードのメサイアと関連があるっばいな……」

統夜「武装面やシステム面がな……（ビリーさんはメサイアの事を知って……フォーチュンエターナルやフォーチュンブラスター

等を改造して蘇らせたのか？」
レーティア「続きがあるみたいね」

レーティアが気付き、統夜は次のページへ移すところ書かれていた。
『ネクサスとメサイアはある目的の為に開発された。それは試作段階であった二つのIESを二基同調させたDIESを研究用として搭載し、二基同調によるオーシャンシステムによる対話の研究。』

元々IESはアルハザードと古代ベルカ時代から存在していたロス
トテクノロジーであり、オーシャンシステムはスペックを上げるI
ES系統のリミッター解除システムとして設計された。

だが、セイラが戦う道具として対話の研究とDIESの設計は破棄
され、ネクサスはブラックナイト・ネクサス、メサイアは設計段階
であり、紅神忍の脱走により幻となった。

DIESとオーシャンシステムによる対話はアルハザード時代から
の悲願であり、近い未来・・・誰かが悲願を達成してくれると信じ
ている』

ギルシア「対話って何だよ・・・デバイスでそんな事が出来るのか
よ？」

統夜「いや・・・俺のメサイアなら出来るかもしれん・・・DIE
S?を用いたオーシャンシステムなら・・・」
レーティア「ユウカが聞いた話に出て来た不思議な現象ね。貴方と
シャルが精神共鳴したものみたいな」

ギルシア「アルハザード人から託されたって感じがするよな。で・・・
そのまま帰るのか？」

統夜「いや・・・紅神が実験を受けた研究所へ行く。あ、そこに行

くのは俺と華琳の二人だけだから。ギルシア達はスペースバンガードを守っててくれ」

レーティア「まあ・・・廃棄されてると思うから二人でも大丈夫ね。戦艦は守るわ。何故華琳ちゃんも一緒に？」

統夜「えっ・・・？何故かって？それはギルシアに抱かれるのを防ぐ為だ」

ギルシア「な、何故だ！統夜！華琳さんに抱きつかせない為に連れていくのか！？華琳さんはどうなんだ？」

華琳「（うざ・・・）私は統夜に付いていくつもりよ」

忍が受けた研究施設へ行く事と行くメンバーは統夜と華琳の二人が決まった。

何故華琳を連れていくのかレーティアは統夜に聞いた後、抱かれる事を防ぐ為と聞いて納得した。

ギルシアが声を荒げて反論し、華琳に聞いてみた所、即答で拒否するような感じで答えた。

統夜「あんたは何故レーティアという奥さんがいるのに・・・幼女に抱きつく事とかを考えるんだ？」

ギルシア「前世からの趣味だ」

統夜「あ、そ・・・レーティアさんはギルシアに満足ですか？」

レーティア「満足よ」何せ・・・ギルシアは激しい事してくれるから」

ギルシア「おう！」

レーティアとギルシアは互いに抱き合い超愛フィールドを発生させ、統夜と華琳の二人は苦しみ始めた。

華琳「な、ナビィ・・・紅神忍が実験を受けた研究施設へ転移してちょうだい・・・」

ナビィ』了解です』

スペースバンガードは時空転移して消えた。

統夜「このようだな。んじゃ・・・留守番頼んだよ。リルちゃんもいい子で待ってるんだよ」

リル「う」

ギルシア達に留守を頼んだ後、リルに笑顔で手を振って、華琳と共にブリッジから出て行った。

ギルシア「あいつも悩む所があるんだな。いくら強い力を秘めてても・・・」

レーティア「ええ・・・身体と力は強くても・・・心は・・・まだ弱いかな」

統夜と華琳が去った後のブリッジにて、二人はそう言葉にしていた。

統夜「こいつはあ・・・酷いな」

研究施設の中に入ると、部屋の中はボロボロで、機材等が殆ど壊されていた。

一つ一つ部屋を訪れて何か目ぼしい物が無いか華琳と別れて探し始めた。

統夜「血とか着いてやがるな・・・ん？」

血が壁に着いてる何も無く瓦礫が一部埋まっている部屋に入った後、何か違和感があったのか埋まっている瓦礫の方へ移動した。

統夜「（空間と時間の魔法が掛けられてるな）」

瓦礫をどかし、封筒に掛けられた空間と時間の魔法を解除した後、アドヴァンスバツクルから発生した封印魔法陣の中へ収納した。

統夜「さて・・・あそこだけだな」

次の部屋へ移動し、中へ入ると、コンピュータ類が壊れており、電気が付かないのか暗かった。

暗かったのか統夜は蒼炎を人差し指に灯し搜索を始めた。

統夜「ここが恐らくデバイスルームだな。それにしても・・・派手にやりやがったものだ・・・」

腕を周りを照らすように振るい、周りを見てそう呟いた。

搜索している内に壁の部分に不自然な形をした箇所を見つけた。

統夜「何か・・・ここだけ不自然だな」

アドヴァンスバツクルを介してマガジンタイプのアドヴァンスフューラーを封印魔法陣から取り出し箇所を狙い打ち破壊すると、嚴重に保管されていた蒼い指輪を見つけた。

統夜「（これはもしや・・・）開発したのは良いが・・・奪われるのを恐れてたって事だろうな」

蒼い指輪を手にした瞬間、アドヴァンスバツクルとエナジークリスタル、アドヴァンスフォン、アドヴァンスフューラーが反応し、光り始めた。

(メサイアと確認しました。よろしくお願いします。マイマスター)
統夜「お前は……」

バビロニア(私の名はバビロニア……インテリジエントデバイス
でメサイアとの連携で開発され封印されていたものでございます)

統夜「メサイアとの連携……ネクススとファルゼンか……」

バビロニア(はい……目覚めたばかりですので……基本形態し
か使えませんが……大丈夫ですか?)

統夜「問題無い……行くぞ」

バビロニア(了解しました)

指輪を手にした後、何か無いかと探してみたが何も無く、部屋を後
にした。

その後、華琳と合流し、研究施設から出ようとしていた。

華琳「何かあった?」

統夜「ああ。ここにはお宝があった……そっちは?」

華琳「いくつか死体とかあったわね……実験体らしき人物だった
けど……ねえ……」

統夜「分かってる……」

気配を感じたのか研究所から出た瞬間、忍がいた。

忍「……」

統夜「紅神……忍……」

忍は統夜を見ると忌々しげに睨んでいた。

自分の運命を狂わされた存在の一人を……

第五十七話『黒騎士の一日』（後書き）

今回のHERO'S EPISODEは

レーティア「彼にあんな過去があつたなんてね・・・だけど・・・
それだけで復讐するのはお門違いよ」

レーティア「復讐対象であるセントクルセイダーズが減びても・・・
彼の憎しみは消えず、統夜に戦いを挑んだ」

レーティア「絶滅種復元計画で使われた血の力を解放し、統夜に戦いを挑んだ」

レーティア「今回は『絶滅種のカ』テイクオフよ」

第五十八話 『絶滅種のカ』 (前書き)

・ 紅神忍の実力はどれ程のものなのか・・・この話を見れば分かる・・・

ジャンヌ「HERO'S EPISODE 第五十八話始まるよ」

第五十八話 『絶滅種の力』

研究所から出た統夜と華琳は忍と会ってしまった。

忍「何故・・・貴様らがここに・・・」

統夜「お前の過去・・・調べさせてもらったぜ・・・絶滅種復元計画の事を・・・」

統夜が言った絶滅種復元計画という言葉に忍は怒りを露にした。

忍「貴様・・・」

統夜「過酷で辛く・・・酷い実験だった事は分かった。お前を実験したセイントクルセイダーズが滅んでも尚・・・憎しみという名の黒い獣を飼っているのか」

忍「それは・・・お前が・・・俺の大切な存在を奪ったからだ！！お前とイグニスという強大な力を持つ存在が・・・」

統夜「・・・」

忍の言葉に統夜は黙ってしまった。

ソルジャー時代は異常な身体能力や魔力があるという理由で管理局からイグニス同様畏怖されていた。

それは異常と思えるほどのハードなトレーニングをこなしていたからこそ、統夜はイグニスに追い付きたいがために必死で努力していた。

活躍しだしてからか、統夜とイグニスに匹敵する力を得る研究・・・絶滅種復元計画というものが行われていた事は予想外であった。

統夜「確かに・・・強大な力は恐れられるだろう・・・それと共に嫉妬を抱かれ・・・狂わされる・・・自分が自分じゃなくなる程に・・・」

「お前とイグニスがいなければ・・・こんな事にはならなかった・・・」

統夜「だが・・・力は人の心・・・使い次第で変わる筈だ！」

忍「それを狂わされ・・・過酷な実験を受け・・・死んだ者や・・・お前達が倒して来た者達に言えるのか?!」

統夜「言えないさ・・・俺はただ大切な者を守る為に力を振るう」

アドヴァンスバツクルを腰に当て、ベルトが巻かれ、両手にエナジークリスタルを嵌め、両腰のハードポイントにアドヴァンスフューラーをセットし、アドヴァンスフォンで起動コード『000』と入力した。

『STANDING BY』

統夜「ウェイクアップ！アドヴァンスメサイア！」

アドヴァンスバツクルのバツクル部にアドヴァンスフォンをセットした。

『COMPLETE』

音声が響き、上には蒼いパーカーを着て下は黒い長ズボンを穿き、七ヶ所（胸部、両肩、両腕、両足）に真紅のプロテクターを装備したバリアジャケットが展開された。その後華琳とユニゾンした。

忍「同じタイプか・・・俺は貴様を許しはしない・・・どんな言葉を並べても・・・」

左腕にリストウォッチ型PDAネクサスと右手首に特殊ブレスレッツ

トのナイトブレス、黒いバックルであるブラックドライバーを装着し、漆黒のカラーリングで、端子の部分は白銀色のUSBメモリ型をブラックドライバーの右側中央に装填させた。

忍「起動しろ・・・ブラックナイト・ネクサス！」

上に紅いシャツを着て、下に漆黒の長ズボンを穿き、その上から背中に白銀の狼のエンブレムが刻まれた半袖ロングコートを羽織り、首から銀の十字架のネックレスを下げ、両手に黒い生地フィンガーレスグローブを着け、両足にコンバットブーツを履いた姿のバリアジャケットを展開した。

互いは拳を握り、五気を纏わせ、駆け抜け、拳と拳のぶつかり合いから始まった。

本拠地寮の食堂でレオンとユウカ、シャルの三人は話し合っていた。

レオン「今日は天川と一緒にじゃないのか？」

シャル「何か用があると言って家にはいないわ」

ユウカ「それにしても・・・よく食べるわね。統夜の家に居候したら面白い事になりそう・・・食費関係で・・・ふふふ・・・」

シャルの食べっぷりを見ていたユウカは天川家の財政が大赤字になり統夜が困る姿を見て黒い笑みを浮かべていた。

レオン「はあ・・・」

シャル「統夜・・・あれからどうなってるの？」

レオン「力と身体能力は上がって来ているが・・・心だけはどうしようもない・・・いくら身体と力が強くなっても・・・心も強くならんと意味が無い」

お茶を一口含んだ後、一言追加した。

レオン「月と地球の戦いで吸血鬼化、セイラとの戦いで真ルシファ
ーという解放形態・・・人からかけ離れた強大な力に目覚めた・・・
自分の事を知っている桜木や人族である北郷らとは明らかに違う故
に・・・」

ユウカ「元々素質が高く・・・覚醒で急激に力を身に付けたのはい
いけど・・・まだ17歳・・・」

レオン「若く・・・覚醒した力を持ったが・・・私達のような規格
外が突破しなくてはいけない『壁』がある・・・いくら力と身体が
強くても完璧とは言えない」
シャル「完璧と思っているから慢心が生まれ・・・思ったものより
力が出せなくなる」

バームクーヘンを食べ始めたシャルだった。

レオン「私はこう思う・・・真のヴァンパイアルシファアはあいつ
の心が望んでいないから不完全なものになってるんじゃないかと・・・
」

レオンは真のヴァンパイアルシファアになれない原因は統夜の心が
望んでいないものだ と推測していた。

レオン「強過ぎる力は他人だけじゃなく・・・自分の心に及ぶ・・・
自分の知りたい真実を知った時は素直に受け入れるか受け入れない
かは・・・それは本人にしか分からん」

目を閉じながらそう言った。

シャル「素直に受け入れてほしいわね・・・私としては」
ユウカ「こればかりは弄る気にもなれせんわ」

統夜「天神拳と同じか・・・」

忍「違うな・・・俺のは覇神拳だ・・・同じ事が出来る・・・」

統夜「復讐の黒騎士殿には勿体無いもんだな！！」

瞬速の動きで拳の連打と蹴りの打ち合いが行われていた。

忍「（真狼になる必要があるかもしれんな）」

両手にブラックフューラーを手にして魔力や覇気でコーティングした弾丸を至近距離で統夜に撃ち込み始めた。

咄嗟の事だったのかアドヴァンスフューラーで蒼炎弾で当てた後爆発させ、間合いを取ろうとしたが貫通され、メサイアのバリアアジャケットの内部に弾丸の衝撃によるダメージを与えた。

統夜「な、に・・・」

忍「中々しぶといな・・・」

統夜「生憎・・・これが俺の取り柄でもあり・・・努力の成果だ・・・」

口から出た血を手で拭いながらそう答えた。

忍「これくらいで終わるとは思っていない・・・桐葉の怨みを全て貴様に贈る！！」

統夜「それが・・・あいつが喜ぶんでも思っているのか？確かに実験で失った気持ちは分かるが・・・」

忍「分かったような口を聞くな！！俺は許さない・・・このような

世界を・・・貴様を許しはしない!!」

統夜「紅神・・・憎しみは歪みを生む・・・お前の力はその為に振るうのか!!」

忍「そうだ!!俺は貴様を屠る為に力を振るう!!」

統夜「なら・・・俺は貴様の歪みを破壊する!!ダンシングバレット!!」

刹那で駆け抜けながら腕を瞬速に振るい右、左の順に突きを放つように妖力と覇気をコーティングした弾丸を連射し始めた。

その後刹那でいつの間にか、上へ移動した後、空中で逆さまになって、回転しながら2丁拳銃を乱射、その次に、銃を前に突き出しながら前に移動して妖力のある弾丸を2発放ち、間合いを取るかのようにならへ移動させた。

忍「チツ・・・(こいつ・・・)」

統夜「バレットゼバレル!!」

隙の無い銃術に忍は防ぎきれなかったのか、殆ど直撃を受けてしまった。

その後忍のいる所にマーキングみたいなものが現れ、蒼炎の爆焰が忍を襲った。

忍「ぐうう・・・うおわあああああ!!!!」

統夜「銃が扱えるのはお前だけじゃ無いって事だ・・・」

忍「流石蒼穹の死神だな・・・そうでなければ貴様を屠る意味が無い!!!!」

ブラックフューラーの下部にエナジーメモリを装填し、上部のリボルバー部分に六発の弾丸を装填していた。

統夜「（あれがエナジーメモリ・・・IES系統で開発されたものだが）」

忍は氷の鏡を作り出す氷結系防御魔法のリフレクト・ミラージユを仕掛けた後、自ら砕いて塵状にして周囲に散布した。

忍「ヴァリアブル・バスター！！」

ブラックフューラーからハウリングバスターで砕いたりリフレクト・ミラージユによる乱反射を起こし、軌道の読めない砲撃を放った。

忍「（これなら・・・逃げられない・・・予測不可能な砲撃をどう交わす・・・）」

統夜「蒼幻剣！」

自分の周りに蒼炎で形成された剣を形成し、回転させ、ヴァリアブル・バスターの砲撃を防いだ。

爆発し煙が発生した瞬間、お互い視界が見えなくなった瞬間、銃声の音が聞こえて来た。

お互い見えていない状況で、銃撃戦を繰り広げていた。

自分達の直感を頼りに・・・

煙が晴れると、統夜と忍はお互い双銃を前へ向けて静止していた。

統夜「外れか・・・」

忍「それはこちらの台詞だ・・・」

統夜「まあいいけどさ・・・月牙天衝弾！霊妖天衝弾！！」

月牙天衝を弾丸にしたものをリボルバーのアドヴァンスフューラーから放ち、霊力と妖力で応用した月牙天衝の弾をマガジン式のアドヴァンスフューラーから放った。

忍「チッ！」

横へスライドするように回避したが、統夜が刹那で駆け抜け、魔力と雷を付加させた手刀で斬り捨てた。

その後、月牙天衝弾と霊妖天衝弾を忍は直撃を受けてしまった。

統夜「雷瞬間に月牙天衝弾、霊妖天衝弾・・・ただ一つずつやるものじゃない・・・」

忍「ああ・・・学んだぜ・・・テメエ相手じゃ人間形態じゃ倒せない事がな・・・」

狼の文字が刻まれた銀色の宝石を取り出すと・・・

忍「真狼解放！！」

髪は黒の混ざった銀髪、瞳は左側が紫から真紅に変化し、両目の瞳孔が縦になり、黒の混ざった白銀の毛並みの狼の耳と尻尾が生えた姿に変化した。

統夜「やっぱ・・・あったのか・・・妖怪の狼か？」

忍「絶滅種の霊狼族だ・・・」

そう言った後、消え、いつの間にか統夜が宙に浮かんでいた。

統夜「（速い・・・）サイドワインダー！」

忍を捕えたのか蒼炎の掌底を放とうとしたが避けられ、拳と蹴りの連打の攻撃を受け地面に落とされた。

地面にぶつかる寸前、手を着き、衝突は免れた。

統夜「（俺や雪蓮並の速さじゃねーか・・・ここは・・・なるしか無いか・・・）真ルシファー解放！」

真ルシファーを解放し、髪の色と瞳の色が白く輝く銀髪に翡翠色の瞳に変化し、背中から五対十翼の黒い翼ではなく五対十翼の白い翼が生えていた。

統夜「（何か・・・違う・・・）」

今の真ルシファーに違和感を感じながら、アドヴァンスフューラーを両腰に納め、蒼い指輪を手にしていた。

忍「何のつもりだ？」

統夜「なに・・・メサイアと同時に開発されたバビロニアの初陣と思ってな・・・ネクサスとファルゼンの連携みたいにな」

忍「（メサイアはネクサスの兄弟機で・・・バビロニアはファルゼンの兄弟機か！？）」

統夜「知らないようだな。バビロニア、起動しろ！！」

蒼い指輪から刀身が白く鍔が真紅、柄が金色の長剣に変化した。

忍「剣勝負か・・・いいだろう・・・ファルゼン！！」

ブラックフューラーを両腰に納め、漆黒の指輪を取り出し、刃渡り3尺、刀身は白銀、鍔は紅、柄は漆黒の日本刀に変化させた。

そして、二人は駆け抜け、常人の目では捉えきれない速さで振るい剣劇が行われていた。

忍「速さには自信があるようだな・・・」

統夜「狼だけじゃないって事だ・・・速さは・・・」

バビロニアを居合の構えにした後、瞬速の無数の斬撃を放った。忍は無数の斬撃に瞬速にファルゼンを振るい相殺した後、ファルゼンを上に乗らせた。

その後、忍の身体に変化が起きた。人型から獣形態と呼ばれる黒の混ざった白銀色の毛並みが特徴的で右が琥珀、左が真紅の瞳を持つ狼の姿に変化し、妖力を手足に収束させて、統夜に機動性が向上された速さの体当たりを何度も仕掛け直撃させた。

獣形態から人型へ戻り、ファルゼンを空中でキャッチした。

統夜「チツ・・・（妖力を収束した瞬間・・・速くなったとも言えるのか）」

華琳「（何て奴なの・・・）」

直撃を受けながらも背中中の翼を羽ばたかせ、忍を翻弄するかのよう移動し、バビロニアを振るったが、統夜と同じ速さで動く忍に見切られ相殺された。

忍「瞬狼斬！」

統夜「ぐわっ！！」

手足に妖力を収束させながら歩法である神速を用いて八方から無数の斬撃を食らわし、統夜は複数同時に斬られた感覚に陥らせた。

忍「俺が受けた痛みはこんなものじゃねえぞ・・・雪女・・・解放！！」

『雪』の文字が刻まれている瑠璃の宝石を取り出し、髪が冷気を帯びた白に近い薄い水色、瞳が瑠璃色に変化した姿に変化した。

忍「アイス・エイジ!!」

周囲の地形を氷結させて即席の凍土にし、自分の戦える環境にした後、ファルゼンの刀身に冷気を纏わせた。

忍「絶対零度・・・」

空気中の水分を凝結させて即席の氷柱を作り、それらを統夜に向けて打ち出した。

統夜「ダークカオス!!」

灼熱の蒼炎で氷柱と凍土を溶かし、水蒸気を発生させ視界を悪くさせた。

忍「チツ・・・」

人型から瑠璃と白の体に蒼い瞳を持つ鯨の姿に変化させて、移動し始めた。

忍「（奴は・・・何故か解放形態を躊躇っていたな・・・フェイクか・・・それとも・・・まあいい・・・どんな状況になろうが殺すのみだ・・・）」

匂いだけを頼りに統夜を見つけたのか、体当たりしようとしたが何かに止められた。

統夜「・・・」

髪が銀色で、瞳の瞳孔が縦になり、色が真紅に変化した吸血鬼に変化させて受け止めていた。

その後に顔面に妖力を収束した蹴りを入れて吹き飛ばした。

忍「ぐおわっ!!!」

吹き飛ばされ元の人型に戻った。

忍「解放形態に躊躇っていた割には随分と高いな・・・効いたぜ・・・ククク」

統夜「・・・・・・・・」

忍「お前・・・解放形態に恐怖を抱いているだろ？お互い人からかけ離れた存在だ・・・今更解放形態に恐怖を抱いて罪が消えると思ふなよ・・・俺の解放陣全てを使って貴様を噛み砕く！！必ず！！」

『血』の文字が刻まれている真紅の宝石を取り出し、雪女から髪と瞳が銀髪紅眼に変化し、両方の瞳孔が縦に変化した。

忍「吸血鬼になれるのはお前だけじゃ無い・・・そりゃあ・・・恐ろしい力を秘めてるからな・・・だが・・・俺は復讐の為なら躊躇いも無いがな!!!人を捨てようがな!!!」

統夜はバビロニアの刀身に妖力を纏わせ、忍はファルゼンの刀身に妖力を纏わせたと同時に剣をぶつけ合った瞬間、大きな衝撃波が発生した。

スペースバングードのブリッジ

ギルシア「あの坊主・・・統夜を殺す為なら解放形態は躊躇いも無

く使う・・・か・・・」

レーティア「それに比べて統夜は恐れているのか迷っているのか躊躇っている・・・力の強い統夜やイグニスのような存在が絶滅種復元計画が行われてしまった」

ジャンヌ「自分の存在が狂わせ、あの人を復讐の道に走らせた・・・」

レーティア「援護はどうするの？」

ギルシア「必要無い。一対一の決闘に俺達が行く事はあっちゃいけないもんだぜ？」

レーティア「それもそうね。ここでどう乗り切るか楽しみね」

ブリッジから統夜と忍の戦いを見ており、ギルシアは統夜に援護は必要ないと言った。

ギルシア「人を超えた者達が必ず通る宿命だ・・・迷いを・・・恐怖を乗り越えろ。解放形態はお前にとっては『力』の一部なんだ・・・」

統夜と忍の戦いを見守っていたギルシア一家であった。

お互いは避ける事も、防ぐ事もせず、ただ剣を見えない速さで振るっていた。

剣劇の勝負の行方は・・・

統夜「妖牙天連！！」

妖力を高密度させたものを纏わせ、無数の連続斬りを忍に浴びせた。

忍「ぐおっ！！」

全て防ぐ事が出来なかったのか、大半の斬撃を受けてしまい後ろへ下がった。

忍「(剣での勝負はあいつの方が上か・・・だが・・・解放形態では勝っている!!)」

人型から紅の混ざった黒い体に紅い蝙蝠のような翼と真紅の瞳を持つ飛竜の姿に変化させて上へ飛翔した。

統夜「(あいつとの戦いで分かった事があった・・・復讐と執念があいつを強くしている事が・・・)」
忍「喰らえ!」

口から火炎弾を放ったが、統夜はバビロニアを横に振るい、切り裂いた後、異変が起き始めた。

吸血鬼化から元の人族形態に突然戻ってしまったのだ。

統夜「(なんで・・・?) 真ルシファー・・・解放!」

華琳「(どういう事なの!? 何故・・・解放できないの?)」

真ルシファーになろうとしたが、変化が何も起きなかった。

忍「(何が起こったのか知らんがいい機会だな)」

統夜の異変を見て表情を崩さずに、五気を収束し始めていた。

統夜「(出来ないとしても・・・やるしか無い・・・)」

バビロニアを握っていない左手から魔力を収束させた後、無数のス

ファイアを忍の周りに設置し始めた。
そして、バビロニアを居合の構えにした後、高速の抜刀術で、離れている忍に斬撃を入れた。
その後、高速の抜刀術を繰り返して、斬撃で吹き飛ばす忍を切り裂いていた。

統夜「デスペアバレッテーズ！」

忍の周りに置いた無数のスファイアが爆発し、蒼炎による爆発が起き、忍に追加ダメージを与えた。

忍「ぐおおおおお！！！」

蒼炎で燃やされた忍は叫びながら人型形態に戻り、霊力を収束し始めた。

忍「はあ！」

高密度の霊力を収束し、浄化能力を劇的に上げ、蒼炎にある精神攻撃を相殺した。

尚、蒼炎で受けた火傷は回復していない。

統夜「解放形態が出来ないなら・・・戦術と技量で補うしかない・・・」
忍「剣術と魔法で補うか・・・真狼、雪女、吸血鬼を見せた・・・」
次の奴は貴様が調べた絶滅種復元計画で得た力を見せてやる！」

吸血鬼を解除した後、『龍』の文字が刻まれている黄金の宝石を指で弾き、髪が銀の混ざった黒髪、瞳が金色に変化し、瞳孔が縦になり、背中から龍翼を生やし、八重歯が牙のように鋭くなった姿に変

化した。

忍「龍騎士解放……」

サークルの中に西洋龍の絵が描かれた魔法陣を展開した。

統夜「龍騎士……か……」

忍「レイジング・ハンマー！」

巨大な魔力球を焔に変換した後、それを無数の弾幕として放った。無数の弾幕を統夜は蒼炎の籠った斬撃で相殺しながらも避け始めていた。

忍「ブリザード・ファンゲ！」

龍翼を羽ばたかせ、上に飛翔した後、ブラックフューラーを取り出し、無数の魔力レーザー発射し、拡散させた。

統夜「ブルーブレイズウォール!!」

蒼炎の防壁を張り、冷気のある魔力レーザーを防いだ後、地面を蹴って、忍の所まで跳び、バビロニアを振るった。

統夜の斬撃を二丁のフューラーで受け止め、弾いた後、ファルゼンを取り出した。

忍「（こいつ……解放形態無しでやるとは……）」

忍は知らないだろうが、レオンとユウカの指導（という名の地獄の修行）により、統夜達の身体能力は格段に上がっているのだ。

それに加えて、日頃の鍛錬もあってか、解放形態無しでもそれなり

の力が発揮される。

空中での剣劇を忍は統夜を前へ飛ばすように吹き飛ばし、人型から銀の混ざった黒い体と鱗に1対2枚の黒い龍翼と金色の瞳を持つ西洋龍の姿に変化させた。

忍「エクспロード・ブラスター！」

腕に環状魔力を3本展開した後、先端の環状魔力に等間隔で魔力球を形成し、魔力球を回転させながら焰に変換しつつ砲撃を落している統夜に向けて放った。

統夜はバビロニアを前にして防いだ瞬間、エクспロード・ブラスターの魔力がバビロニアの禍々しい真紅の光を放っている刀身に吸収された。

統夜「これは・・・」

バビロニア（これは私の力です。刀身には五気を吸収する力があります。先程吸収したものはどう致しますか？）

統夜「回復用として回してくれ」

バビロニア（分かりました）

バビロニアから蒼い光が出て来て、治療を行った。
その後地面に着地した。

忍「それがバビロニアの力か・・・厄介なものを使うものだ・・・」
統夜「解放形態をバンバン使えるお前よりはマシだと思いがねえ・・・」

刹那を使い上空へ消えたかのように飛翔した。

忍「またか・・・空も飛べない貴様では俺を・・・ぐおがっ！！」

統夜「俺を・・・が何だつて？言つただろ？解放形態が使えないなら・・・技量で補うと・・・」

忍は上の部分に氷を利用した防壁を張ろうとしたが、強烈な手刀を見舞い、地面へ強制的に降ろさせた。

忍「ぐぐ・・・こいつでは殺せんな・・・」

龍騎士から人間形態へ戻り、『焰』の文字が刻まれている紅蓮の宝石を取り出した。

忍「冥王の力に平伏せ！！」

紅蓮の宝石を指で弾くと髪と瞳が焰髪灼眼に変化し、背中から4対8枚の紅蓮の翼を生やした姿に変化した。

統夜「それが絶滅種復元計画のメインの一つであり・・・かつて冥界に生息していた種族か・・・冥王だが・・・哀れな存在だ」

忍「解放形態出来なく・・・妬んでいるのか？」

統夜「憎しみに囚われた馬鹿犬野郎が冥王と呼ぶに相応しくないからだよ！言葉になのと言つてる奴の方がまだマシだ」

統夜は蒼炎、忍は紅蓮の炎をそれぞれの剣に纏わせ、斬撃を放ち、互角だったのか爆発が起きた。

統夜「遊輔の焰の方がまだマシだぜ・・・」

忍「俺は貴様らのような存在が気に食わん・・・強過ぎる力を持っているから関係ない奴らが実験に巻き込まれ悲劇が起こる！！」

統夜「んじゃあ・・・お前だけは特別つてか？笑わせるな！！」

右手だけでバビロニアを持ち、左手に刀身と柄が蒼く輝く星のような七つの宝玉が埋め込まれた美しい長剣である星凰剣を具現化させた。

バビロニアと星凰剣の二刀流で押し出した。

忍「違うな・・・俺は俺自身どうなろうと構わん・・・貴様とイグニスを葬ればな!!」

統夜「俺からして見れば・・・後先を考えて無い野郎だな!!」

二刀に蒼炎と紅蓮の焔を収束し始めた瞬間、忍は笑みを浮かべた。

忍「冥皇スキル・・・バーニングフラッシュ!!」

二刀に収束された蒼炎と紅蓮の焔、周囲の熱エネルギーが全て忍に吸収された。

統夜「焔系の力、熱を吸収するスキルか・・・」

冥王スキルはメアリから聞いた事がある為、驚いてはいなかった。

忍「随分と冷静だな」

統夜「一々驚く必要があるか・・・焔が駄目なら対策はある・・・」
忍「解放形態も出来ず・・・力が出せない貴様に何が出来る?」

統夜「それは上から目線から言ってるな・・・こつちにも出来ないのは事情があるんだよ」

二刀を居合の構えにした後、刹那で駆け抜け、すれ違い様に二刀で瞬時に忍を両断しようとしたが、ギリギリの所でファルゼンで防がれ止められた。

忍「悪いが・・・解放形態無しでは俺には勝てん・・・なのに・・・諦めようとしなない？」

統夜「復讐に走っているお前には分からんよ・・・俺が何故諦めないか・・・」

忍「ふん・・・貴様自身が躊躇い・・・迷っているから解放形態が使えない？違うか？」

統夜「・・・」

忍「凶星か・・・この俺を解放形態無しで倒そうとか・・・嘗めるんじゃねえぞ・・・？」

統夜「っ!？」

統夜を一睨みした後、威圧のある霸気を出し戦慄させた。霸気を受けた統夜は冷や汗を掻き、たじろいでしまった。

統夜「（これが・・・霸気・・・何という威圧だ・・・俺が持っていると言われている霸王色の霸気だとも言うのか!？）」

レオンから自分にある霸王色の霸気を実感した瞬間であった。

忍「貴様がどのような状態だろうと・・・全力で叩き潰す!! 焰帝招来!!」

ファルゼンの刀身に紅蓮の焰を纏わせた後、神速で駆け抜けながら両手と両足に妖力を収束させてより素早い動きで、統夜を素早い拳と蹴りの連打を繰り返した後、複数の斬撃を繰り返した。

統夜「ぐっ・・・」

速い攻撃に全て防ぐ事は出来なかったが、急所は免れた。

忍「焰覇鳳翼翔！！」

神速で統夜の懐へ移動し、焰を鳳凰の形に練り上げて打ち出し吹き飛ばした。

統夜「ぐわああああ！！！！」

華琳「きゃああああ！！！！」

直撃を受け、火傷を負ってしまった。

統夜「こいつ・・・何て強さだ・・・」

忍「冥土の土産に教えてやろう・・・バーニングフラッシュは周囲の熱エネルギーや炎熱系の魔法を吸収し、炎熱系の攻撃を吸収して倍返しにすることも出来る能力だ。如何なる焰系統の力を出そうが俺には無力も同然・・・」

統夜「俺の攻撃を吸収し・・・今の攻撃に使ったという・・・訳か・・・」

今の攻撃を受けて、辛うじて立ち上がった。

統夜の瞳にはまだ闘志が宿っていた。

忍「何故・・・そこまで立つのか知らんが・・・まあいい・・・モード・斬艦刀！！」

日本刀から柄が少し伸び、鍔が開くと元の刀身を軸に形状記憶液体金属を纏わり付かせて身の丈以上の巨大な剣状の刀身を形成したものに变化した。

斬艦刀に変形させた後、刀身に五気を収束し始めた。

統夜「とんでもないものになりやがって・・・華琳・・・大丈夫か・

・・・？」

華琳「大丈夫よ。貴方こそ大丈夫？解放形態無しじゃ・・・勝ち目無いわよ?!」

統夜「いつかなれるだろ・・・俺はそう信じる・・・」

忍は神速で駆け抜け、統夜に一閃しようとしたが、二刀を瞬時に出し防ぎ、バビロニアの刀身が禍々しい真紅の光を放ち、ファルゼンに纏われた五気を喰らい尽くした。

統夜「せいらいてんじょう星雷天衝!!」

なのはのスターライトブレイカーとフェイトのプラズマザンバーを応用し、先程吸収した五気も含んだ五気と雷を収束した巨大な斬撃を忍に放った。

忍「こんなもの!!」

神速で避けようとしたが、星雷天衝は忍を追いかけるように動き始めた。

忍「チツ・・・厄介なものだ!!」

避ける事を止め、複数展開した魔力球を展開し始めた。

忍「ファイヤー・ウォール!!」

先程展開した魔力球を基点にして焰の面を作り出し、防御壁を発生させたが、星雷天衝の斬撃は軽々と防御壁を破壊し、忍は直撃を受け吹き飛ばされた。

統夜「今は・・・奴をどうにかせんとな・・・」

忍が飛ばされた所を見た後、星凰剣を解除し、バビロニアだけの刀流に切り替えた。

すると、忍が立ち上がっていた。先程の攻撃を喰らったせいかな所々血が出ていた。

忍「・・・・・・・・最後の解放形態を見せてやろう・・・・・・・・魔獣解放！」

冥王を解除した後、『獣』と刻まれた漆黒の宝石を弾いた。

すると、髪は灰色、瞳は翠色に変化し、顔に傷痕（額の右側から右目を通して顎に掛けて一本、目元の下に上から中・大・小の順に横三本）、体中に紅い刻印が浮かび上がった姿に変化した。

統夜「あれが魔獣・・・（奴の六つの宝石に解放形態の力が宿っている・・・・・・・・同時解放は出来ないと見た・・・・・・・・）」

忍「・・・・・・・・」

気力を掌に数秒で収束を終わらせ、見えないものを統夜にぶつけた。ぶつけた瞬間、統夜は身体が弾け飛ぶような激痛が走り、口から血を出してしまった。

統夜「（身体が・・・弾け飛ぶような衝撃だ・・・それに・・・何をしたんだ？）」

忍「収束術・・・俺が魔獣化で得た力であり・・・貴様を殺す為の・・・桐葉が与えてくれた力だ！！貴様への復讐を果たせとな！！」

統夜「・・・・・・・・どれだけ・・・憎んでるのやら・・・」

今のダメージを受けても諦めようとはせず、居合の構えをとった。

統夜の目を忍は忌々しげに見つめていた。

統夜「冥皇スキルや収束術があるうと・・・完璧では無い・・・」
忍「その身体でどう太刀打ちするつもりだ？打つ手が無いに等しい貴様が！！」

統夜「これだ！！」

刹那で忍の方へ駆け抜け・・・

統夜「九頭龍閃！！」

唐竹、袈裟斬り、右薙ぎ、右斬上げ、逆風、左斬上げ、左薙ぎ、逆袈裟、刺突の9方向同時の斬撃を忍に入れようとしたが、見切られたかのようにファルゼンで全ての斬撃を防がれてしまった。

忍「剣術か・・・確かに貴様は剣術と天神拳がある・・・それだけは認めてやる・・・その程度の速さでは俺に勝つ事は不可だ！」

ファルゼンを腰に収めた後、拳を構え覇気を収束させた。

統夜は迎え討つ為、剣を振るい、拳とぶつかり合った。

統夜「(何だ・・・こいつの拳の硬さは・・・)」

忍「ふんっ！」

拳で弾き、左拳に覇気を収束させ、両拳の突きを放ち直撃させた。

統夜「ガハッ・・・」

忍「武装色の覇気をさらに向上させた・・・武装色強化『激戦』を甘く見るな・・・」

統夜「お前・・・覇気の使い方を・・・」

忍「ああ・・・貴様よりは使えるぜ・・・」

両手に五気を収束させた後、統夜に振りかざした。

忍「覇神拳奥義・・・獣牙天衝！！」

3本の爪状に五気を収束して放ち、切り裂いた。切り裂かれた統夜は研究施設の壁まで吹き飛ばされてしまった。魔獣化で行った為、威力は桁違いである。

忍「立て・・・貴様の罪はあながえん！！立て！！」

統夜が吹き飛ばされた場所まで移動した。跪いている統夜を憎しみの目で睨みつけていた。

忍「チツ・・・」

ファルゼンを統夜の前の地面に刺した。

忍「そうだな。今の貴様を殺すのは容易い。解放形態も出来ない貴様の結末は見えている・・・自害しろ・・・」

ファルゼンで自害するよう統夜に言った。

その頃、天川家でははやと鮮華、メアリ、プリムラ、カナ、エステル、咲夜、雪蓮、シャル、ヴォルケンリッターが分厚い書物を見て何かを調べていた。

雪蓮「冥界の種族や文献だけで統夜の本当の種族が分かるの？」

はやて「剣咲剣という人物が・・・大きなヒントをくれたんや・・・」
シャル「大きなヒント？」
はやて「せや・・・」『三大冥王』のうち二人の血を受け継いでいる『ってな・・・」

はやての言葉を聞いた一同は驚いていた。
強大な力を持つ存在の内、二人の力を受け継いでいる事に・・・

鮮華「ですが・・・メアリさんから言われたじゃないですか・・・
三大冥王に関する事は・・・名称しか分からないって・・・」
シャル「冥界に関する文献なら大丈夫じゃない？全ての文献を調べれば・・・ね？」

鮮華が意見を言おうとしたが、シャルはやってみる価値があるという感じで説得し、渋々従った。

エステル「主に生息していた種族ぐらいですね」
咲夜「三大冥王は秘密なのかしらね・・・」

しばらくして、一同はお手上げ状態になった頃、チャイムが鳴った。

はやて「リムちゃん。出て来てくれへん？」
プリムラ「うん」

プリムラが出ると乙女と文乃、千世、希、優子、秀吉の六人がいた。

プリムラ「何か用事？」

乙女「ええ。統夜ちゃんと鮮華ちゃんはいる？」

プリムラ「お兄ちゃんは華琳と一緒に何処かへ調査して、鮮華お姉

ちゃんはいるよ」

乙女「そう・・・今日は統夜ちゃんと鮮華ちゃんに関する事で来たの」

真剣な表情をした乙女がそう言った。

その後、六人を上げさせた。

はやて「それで・・・話と言うのは・・・」

乙女「統夜ちゃんと鮮華ちゃんの真実を教えようと思ってね・・・」

これから乙女が話す統夜と鮮華の真実とは一体・・・

話される真実をどう受け入れるかは本人次第。

統夜「何を言う・・・」

忍「貴様では俺に勝てないからだ・・・貴様は自分という存在を自らの意思で捨て・・・罪を償い・・・死ぬ・・・さあ・・・死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！死ぬ！！！！」

怒りと憎しみで駆られているかのように言った。

そして、統夜は立ち上がり、ファルゼンをその手で握り始めた。

忍「そうだ・・・それでいい・・・」

忍の予想外が起きた。統夜が握られたファルゼンを忍の手に返した事だった。

忍「・・・何のつもりだ？」

統夜「俺は・・・まだ死ぬ訳にはいかない・・・」

忍「貴様・・・貴様の存在自体が・・・全てを狂わせ、命を奪って

おきながら・・・自分自身で死ぬのが恐ろしいのか!！」

自害しようとしないうちに統夜に憤慨し、ファルゼンを振るい斬ろうとしたが、防がれ、弾き飛ばされた。

統夜「『死』は恐ろしく無い・・・だがそれで罪が償えるとは思えない。まして自害という命の投げ捨てなどで償えるとは思えない。

俺は・・・お前と同じく実験を受け・・・『蒼いイレギュラー事件』を起こし、数えきれないほどの命を奪って来た・・・空白の一年間を思い出し・・・俺自身の弱さが悲劇を生んだ」

瞳を閉じ、過去の事を思い出しながら、バビロニアを強く握り始めた。

統夜「俺は・・・悲しみや歪みを破壊し、この目に映る人々と人々の笑顔を守りたい・・・だから・・・苦しんでいる人、悲しんでいる人の力になりたい・・・罪を償いながら生きてより一人でも悲しみや苦しみから救うため・・・俺はこれまで通り悲しみや歪みを破壊し、大切な者達の為に闘いを続けて行く!! その果てに待つ罰がお前の言う『死』かそれとも『別の形』の何か分からないが・・・俺は力尽きるまで必ず闘い抜く!!！」

目を見開き、バビロニアを横に構え、遊輔を始めとした仲間達、はやてを始めとした統夜ラバーズ、別の世界から来たマリオ達、自分を鍛えてくれたレオンとユウカの面々を思い出していた。

統夜「今持つ全ての力と剣を賭して・・・待っている人達と仲間を・・・大切な者達を守る・・・それがお前との戦いで俺が見出した答えだ!!！」

華琳「統夜・・・」

スペースバングアのブリッジにて

ギルシア「見つけたか・・・お前の『答』を・・・」

レーティア「生きて罪を償う・・・それは『心』があり、罪の意識が残っている者にしか出来ない事・・・」

ジャンヌ「統夜君・・・」
リル「うゝ」

統夜が見出した答えにふつと笑い笑顔になっていた。

忍「それで・・・桐葉を始めとした実験で死んだ者達が許すとも思うのか？」

統夜「それは分からない・・・だが・・・紅神・・・お前にしか見えない桐葉と呼ばれる人物は・・・過去に囚われ、現在いまを受け入れずに今も笑ってくれているのか？」

統夜の言葉をキツカケに忍の五気が大きくなり始め、解放形態が出来る宝石の解放陣が浮かび始めた。

忍「殺す！！殺してやる！！貴様が・・・天に行けないように殺して地獄に叩き落としてやる！！はああああ！！！！」

浮かび上がった解放陣の宝石は光り始め、忍に変化が起き始めた。黒の混ざった白銀の毛並みの狼の耳と尻尾、背中から4対8枚の紅蓮の翼、龍翼が生え、顔に傷痕（額の右側から右目を通過して顎に掛けて一本、目元の下に上から中・大・小の順に横三本）、体中に紅い刻印が浮かび上がり、髪は冷気を纏った黒の混ざった銀髪、瞳は真紅で瞳孔が縦になり、八重歯が牙のように鋭くなった姿に変化

した。

統夜「真狼に雪女、吸血鬼、龍騎士、冥王、魔獣・・・六つの解放形態を憎しみと怒りで同時解放形態になったのか・・・」

怒りと憎しみに駆られ、六つの解放形態を一つにした忍にどう対処すればいいのか冷や汗が止まらなかった。

第五十八話 『絶滅種のカ』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

ジャンヌ「統夜君が忍君との戦いで答えを見出した……」

ジャンヌ「だけど……答えを見出しても解放形態……強過ぎる力を未だ躊躇し……受け入れずにいた……」

ジャンヌ「深層意識の中に……人を超えた者の『宿命』である壁を壊すキツカケを作る人物が現れ、吸血鬼を司る真紅と真ルシファールを司るルシファールが本来の力と統夜君だけの真ルシファールに進化させるキツカケを作り覚醒した」

ジャンヌ「吸血鬼の始祖である真祖と光を司る煌きの天使の煌天使の力で彼を憎しみという鎖を断ち切る事が出来るのか？」

ジャンヌ「今回は『目覚めろ！！煌きの天使と真祖、霸王の素質！！』 テイクオフだよ」

投稿キャラ設定6 + (前書き)

レーティアとジャンヌ、ギルシア、忍の詳細を説明します。

投稿キャラ設定6+

名前：レーティア・デビリアス

容姿：膝までのピンクのロングヘアに藍色の瞳をした顔立ち

服：t o l o v e r のララの服を黒くした感じ、グレネーダーの天道琉朱菜の赤い部分を黒くしたイメージ（帽子はない）（ハートロ
ーズセットアップ時）

年齢：21歳

3サイズ：B105/W55/H83

性別：女

種族：夢魔姫（転生者）

魔力光：淡いピンク

好き：素敵な男、甘い物、静かな時間、ムフフなこと

嫌い：面倒なこと、気持ち悪い奴、悪い権力者

性格：普段はのんびりな感じ。いざというときはやる気になる

得意武器：ファスシニム（鞭orバトン）、ハートローズ（銃）

スキル：魅了のオーラ（男女問わず惚れこむオーラ。そのおかげで
変態から襲われるのはしばしば）

夢魔変化（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が
通常よりも上になる。飛行も可能）

夢魔の性欲（快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手
を襲わない）

夢魔吸引（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を
変える）

詳細：この世界に転生した女性。生前は大人気アイドルのようにみ
んなから親しまれていたが、妹と交通事故にあい死亡。その後神と
対面して「俺のせいでミスって殺しちゃった、ごめんね」などと腹
立つ顔で言ったので逆上して半殺しにした。その後チート能力を貰
い、世間の男達を手に入れようとしている。

ちなみに彼女曰く「能力使うなど外道がする事」らしい。生前の名前は『ませいでるな魔星照奈』らしい。
レオンとユウカの知り合いで、ギルシアとの間に出来た子供である
リルを設けている。

所持能力

魔導の心得（ランクEXクラス）

アンリミテッドエネルギー

武術の心得

名前：ジャンヌ・デビリアス

容姿：長い銀髪に赤い瞳をした顔立ち

服：いろんなコスプレをするから不明

年齢：15歳

3 サイズ：B87 / W51 / H80

性別：女

種族：コスプレマスター（転生者）

魔力光：白金

好き：コスプレ、レーティアお姉ちゃん、可愛い子

嫌い：?????

性格：コスプレ大好き、甘えん坊な感じ

得意武器：シャマツシュ（形状は決まっていがないが来ているコスプレで違うらしい）

スキル：コスプレイヤー（来ている服によって能力を変える）

リリース・フォーム 妖魔変化（背中から羽を生やしてサキュバスとなる。その時能力が

通常よりも上になる。飛行も可能）

妖魔の性欲（サキュバスハート快感を求めようとする欲。その気にならなければ相手

を襲わない）

リリース・アブソルバー 妖魔吸引（相手の力を奪い取る。自分の意志によって吸収する物を変える）

詳細：姉のレーティアと同じく転生した一人。生前は姉と同じく人氣者だったが、神のミスによって死んでしまった。

だが彼女はコスプレが大好きだとの事。彼女は生前母親と姉から着せ替え人形のようにされていたが、そのせいか自分から着せ替えにはまり、更にはアニメや漫画のコスプレを楽しむ始末という末期な感じになっている（その時姉のレーティアは後悔したらしい）。

転生後なのは達とラブブランデーな生活（というよりコスプレさせようと思っている）をしようと考えている。

余談ではあるがDMな性格をしているとかそうでないのか。生前の名前は『ませいすいか魔星水華』らしい。

名前：ギルシア・アダマント

容姿：蒼よりの銀髪で赤い瞳をした顔立ち

ニードレスのアダム・ブレイドの服

年齢：25歳

性別：男

種族：最強神父（転生者）

魔力光：銀

好き：女の子（特に妹系）、戦い、金

嫌い：おせっかいな女、面倒事

性格：ロリコンな性格（本人は否定）、そしてバトルマニアック

得意武器：なし

スキル：ゼロ（相手の能力を覚える。フラグメントだけでなく魔法も可能）

詳細：神様のミスで死んでしまった転生者。転生前から小さな女の子を愛でる癖があるため周囲からロリコンと呼ばれている。

容体はニードレスのアダム・ブレイドそのもの。

レオンとユウカの知り合いで、共に戦った事がある。

レーティアとは夫婦で、ラブラブな生活を送っている。

名前：紅神べにがみ 忍しのぶ

容姿：背中まで伸ばした黒髪と右が琥珀、左が紫色のオッドアイを持ち、凛々しさを含んだ端正な顔立ちをしている
普段は伊達眼鏡を掛けて過ごしている

種族：人族、霊狼族、雪女、吸血鬼、冥族、龍神族、魔獣族の混血

性別：男

身長：180cm

年齢：17歳

魔力光：白銀、漆黒、紅蓮

魔術式：古代ベルカ式、ヴァンパイア式、ドラゴニック式、ファン
グ式

デバイス：ブラックナイト・ネクサス（ダークナイトデバイス）、
ファルゼン（インテリジェントデバイス）、セイバーファイリス、
ガルヴィオン、ファイガーズ、ランドガードナー（ドライバーデバ
イス）

魔力：B（EX）

気力：SS（EX）

霊力：C（EX）

妖力：C（EX）

覇気：D（EX）

（ ）内はリミッター解除時のランク

趣味：昼寝、料理、ハーモ二力を吹くこと

好きなもの（事）：月、風、誇り

嫌いなもの（事）：自分自身、人体実験

性格：普段は寡黙で冷静沈着な性格だが、裏では冷徹且つクールで静かに燃える熱血漢的な性格である

また、本来は心優しく頑固な一面もあり、人の気持ちになつて涙を流せる程の人柄だった

備考：文月バーベナ学園2年A組に所属する男子生徒。

普段は成績優秀、スポーツ万能、容姿端麗と非の打ち所のない好青年なのだが、独りでいることが多く授業もサボりがちという問題児である。

自分に関わろうとする者には容赦のない言葉を投げつけて自ら孤立する態度を取るが、それは自分のせいで周囲の人間に危険が及ばないようにするための裏返しである。

英都のマンションで一人暮らしをしており、一通りの家事は熟せている。

裏の世界では『黒騎士ネクサス』として活動しており、セントクルセイダーズに加担していた研究所を破壊し、その職員を殺さず『生きて自分の罪を見つめて償え』と言い残して去るということを繰り返している。

戦闘スタイルは双銃を用いた近接銃術、刀をベースにした剣術や抜刀術、天神拳と起源を同じくする流派『霸神拳』、魔法や霊術、結界術などを状況に合わせて使い分け、戦術眼にも長けている。

また、統夜と同じく五気使いであり、魔力変換資質『凍結』や稀少技能『超学習能力』を保有している他、霸王色の覇気にも目覚めて

いる。

独自の魔法体系『ファンゲ式』も開発しており、自身の異常な力を制御するためと中距離から遠距離に対応するべく開発している。

ちなみに術式はサークルの中に狼の頭部が口を開いている絵が描かれたものである。

元々は霊狼族と雪女のハーフであったが、その稀少技能に目を付けた 세인트クルセイダース（セイラ）の息が掛かった研究所の人間に誘拐され、絶滅種復元研究の実験台になった過去を持つ。

その体には霊狼族（今では絶滅種の遺伝子）と雪女（魔力変換資質『凍結』を持つ一族）に加え、実験のために冥族、龍神族、魔獣族という絶滅種の血液を体に注入され、その血液の拒絶反応を中和し且つ結び付けるために吸血鬼の血を注入されており、重度なる実験を重ねられた上に結局絶滅種の血液は拒絶反応が大きいという理由で研究は中止、忍自身は廃棄処分にされそうになったが、手に入れた強大な力を利用し、研究所に保管されていた複数のデバイスを奪取してその場から逃亡。

ちなみにこの実験中に霸王色の覇気に目覚めている。

絶滅種復元研究の裏には時空管理局特殊部隊『ソルジャー』に所属している統夜とイグニスに匹敵する存在を作り上げセイラの私兵として利用するという考えがあった。

その後、衰弱する体を引きずりながら何処かもわからない場所を歩いていた途中、剣咲 剣と出会い、彼の導きによって斉藤 佐助に一時期保護されていた。

保護されていた間は人間を拒絶していたが、佐助から自分のように人体実験の被害に遭っている存在のを知ると、実験台として手に入れた力を制御するための修行を行った。

結果、忍は普通の人間とは掛け離れた存在となってしまうが、自分を実験台にした奴らへの復讐、実験の被害者のために力を振るうことを決心した。

そして、バーベナ学園に入学した後もひっそりと自己鍛練を続け、

自分のせいで周りの人が被害に遭わせないよう人を寄せつけないように振る舞っていた。

これは文月バーベナ学園に統合された後も続けている。

『解放陣』と呼称する忍が独自に編み出した解放技を取得しており、普段はその力を丸い宝石に封印している状態で、運動神経が良い学生として生活出来るのもこの技能のおかげである。

この解放陣は真狼、雪女、吸血鬼、冥王、龍騎士、魔獣の6つが存在しており、特殊形態『獣形態』にもなれる。

『真狼』

絶滅種である霊狼族の力を持つ解放陣。

霊狼族は霊力を持って生まれた狼の種族であり、中でも飛び抜けて能力が高い種を『真狼』と呼称していた。

真狼の持ち味は虎の妖怪と同等のスピード（単純な速度、反射神経、瞬発力など）に長けている他、嗅覚が異常発達した索敵能力、狼への変身能力を有している。

また、この変身能力は突然変異によって他の解放陣にも影響を及ぼしている。

真狼解放時は髪は黒の混ざった銀髪、瞳は左側が紫から真紅に変化し、両目の瞳孔が縦になり、黒の混ざった白銀の毛並みの狼の耳と尻尾が生えた姿となる。

獣形態時は黒の混ざった白銀色の毛並みが特徴的で右が琥珀、左が真紅の瞳を持つ狼の姿となる。

宝石は銀色に『狼』の文字が刻まれている。

『雪女』

魔力変換資質『凍結』を持つ女一族の力を得た解放陣。

基本的に魔法戦を主体にしたり回復系の魔法や霊術を行使する際に

使用する。

雪女解放時は髪が冷気を帯びた白に近い薄い水色、瞳が瑠璃色に変化した姿となる。

獣形態時は瑠璃と白の体に蒼い瞳を持つ鯨の姿となる。

宝石は瑠璃に『雪』の文字が刻まれている。

『吸血鬼』

力の大妖であり、妖力を用いた戦法を得意とする。

吸血鬼解放時は髪と瞳が銀髪紅眼に変化し、両方の瞳孔が縦になり、獣形態時は紅の混ざった黒い体に紅い蝙蝠のような翼と真紅の瞳を持つ飛竜の姿となる。

宝石は真紅に『血』の文字が刻まれている。

『冥王』

太古の昔に存在していた稀少戦闘種族であり、それぞれが冥王の名を冠した能力を持つと言われていた。

冥王解放時は髪と瞳が焰髪灼眼に変化し、背中から4対8枚の紅蓮の翼を生やした姿となり、冥王スキル『バーニングフラッシュ』を保有している。

『バーニングフラッシュ』とは、周囲の熱エネルギーや炎熱系の魔法を吸収する能力で、上手く利用すれば炎熱系の攻撃を吸収して倍返しにすることも出来る。

獣形態時は4対8枚の紅蓮に輝く翼と羽、灼眼を持つ鳳凰の姿となる。

宝石は紅蓮に『焰』の文字が刻まれている。

『龍騎士』

龍神族とも呼ばれていた太古の種族。

先天的属性を利用した独自の魔法体系とドラゴニック式と呼ばれる術式（サークルの中に西洋龍の絵が描かれた）が特徴的だったと伝え

られている。

忍の場合、焰や氷属性を主体にした龍神魔法を使用する。

龍騎士解放時は髪が銀の混ざった黒髪、瞳が金色に変化し、瞳孔が縦になり、背中から龍翼を生やし、八重歯が牙のように鋭くなった姿となる。

獣形態時は銀の混ざった黒い体と鱗に1対2枚の黒い龍翼と金色の瞳を持つ西洋龍の姿となる。

宝石は黄金に『龍』の文字が刻まれている。

『魔獣』

太古の昔に存在していたと言われる冥族と同じ稀少戦闘種族であり、力を求めるばかりに滅んでいった種族。

魔獣族の力は個々の持つ長所を最大限に活かす形で具現化することであり、個体によってその力はかなり違っていたとされている。

魔獣解放時は髪は灰色、瞳は翠色に変化し、顔に傷痕（額の右側から右目を通して顎に掛けて一本、目元の下に上から中・大・小の順に横三本）、体中に紅い刻印が浮かび上がった姿となる。

顔の傷痕は実験中に受けた後遺症で、普段は簡易魔法で隠しているが、魔獣形態時になると浮かび上がってしまう。

忍の場合は五気と特性を利用した収束術であり、それらを効果的に組み合わせることで様々な戦術を可能にする。

獣形態時は漆黒の体毛に白い縞模様が入り、翠色の瞳を持つ虎の姿となる。

宝石は漆黒に『獣』の文字が刻まれている。

投稿キヤラ設定6 + (後書き)

真王さん、影闇 湊さん。ありがとうございます。

投稿デバイス設定（前書き）

ブラックナイト・ネクサスとファルゼン、セイバーファイリス、ガ
ルヴィオン、ファイガーズ、ランドガードナーの詳細を説明します。

投稿デバイス設定

デバイス：ブラックナイト・ネクサス

形状：リストウオッチ型PDA、特殊ブレスレット、バックル装備
大型特殊拳銃（×2）、専用メダルケース、USBメモリ型端末（
×4）

待機状態：存在しない

搭載システム：エナジーメモリステム、フォースメダルシステム、
エクシードドライブシステム、コマンドアクションシステムを搭載
管制人格は男性で忍に忠実な性格

備考：忍が逃亡の際に研究所から奪取したダークナイトデバイス。

このデバイスはバリアジャケットの展開を主眼に置かれており、使
用者の技能がそのまま反映されるようになってい

これを使用するにはDNA登録が必要となり、そのDNA情報を基
にバリアジャケットの最適化が行われる。

但し、一度登録したDNAは書き換えが不可能であり、実質的に登
録した人物専用のデバイスとなる。

バリアジャケットは上に紅いシャツを着て、下に漆黒の長ズボン
を穿き、その上から背中
中に白銀の狼のエンブレムが刻まれた半袖ロン
グコートを羽織り、首から銀の十字架のネックレスを下げ、両手に
黒い生地のフィンガーレスグローブを着け、両足にコンバットブー
ツを履いた姿となる。

標準装備は以下の通りである。

左腕に装着するリストウォッチ型PDA「ネクサス」

これは表面にタッチパネル式のディスプレイ、右側上部にメダル挿入口、下部に開閉式のエナジーメモリ装填用スロットを備えており、上部からは最大で6枚の投影ディスプレイを出現させることができる。

その他にもネットワークへのアクセスや通信機能などの補助機能が備わっている。

また、右側上部のメダル挿入口は専用のドライバーを召喚する際に使用される他、フォースメダルを装填してエクシードドライブを起動させることに使用する。

カラーリングは漆黒。

右手首に装着する特殊ブレスレット「ナイトブレス」

これは表面にテンキーとその下に「EXCEEDキー」が設けられており、その上にはスライド式の保護カバーで覆われており、本体後部にはエナジーメモリ装填用スロットが備わっている。

このEXCEEDキーはエクシードドライブを使用する時に押すことでエクシードドライブを発動させるが、エクシードドライブは状況に応じて複数存在するため、テンキーを利用して予め登録する必要がある。

本来は登録した番号を押した後にEXCEEDキーを押すことで番号に対応したエクシードドライブを発動させる仕組みとなっている。

カラーリングは漆黒。

腰に装着するバツクル装備「ブラックドライバー」

これは右側中央にエナジーメモリ装填用スロットが設けられており、普段はバツクル状態で持ち運び、必要に応じて装着する手法を採用

している。

装着時は腰に当てることで収納されていたベルト部が腰に巻き付く仕様になっている。

カラーリングは漆黑。

大型特殊拳銃『ブラックフューラー（x2）』[『]

これは2つの銃身を大型且つ重厚なフレームが包み、上部の銃身には確実性と威力を重視したりボルバー式、下部の銃身には連射性と汎用性を重視したオートマチック式をそれぞれ採用し、対五気コーティングを施した異質な機構仕様となっている。

上部のリボルバーマガジンは弾倉振出式で6発の弾丸を装填することが可能な上、可能な限り小型化しているため下部のオートマチックに影響しないようになっている。

下部のオートマチックマガジンは脱着式のグリップ部に装填する仕様で通常弾丸を装填したマガジンの他にも特殊弾を装填したマガジンやエナジーメモリを装填することも可能である。

銃身の切り替えはトリガー下にあるスイッチを中指で押すことでオートマチック、リボルバー、オートマチックとリボルバーの同時使用の順で3種類の機能切り替えが可能となる。

オートマチックマガジンの排出は銃身切替用スイッチの下にあり、薬指で押すことで即座に排出して別のマガジンに取り替えることが出来る。

対五気コーティングを施しているので防御にも利用出来る。

これらの機能を効率良く使用することで戦術の幅がかなり広がるが、作ったはいいもののその扱いは非常に難しく反動や癖も強いいため、誰にも使えないと思われるが、超学習能力を有する忍の実質的な専用武器となっている。

カラーリングはどちらも漆黑。

専用メダルケース『メダライズケース』[『]

これはフォースメダルを生成するための特殊装備。

使用する際は右端のスロットにエナジーメモリを装填するか魔力を流し込む必要があり、そうすることでケース内で特殊魔力装備『フォースメダル』を生成出来る。

ケース内の最大メダル保管可能数は30枚である。

装着箇所はブラックドライバーのベルト部の右側下部である。

カラーリングはダークグレー。

USBメモリ型端末『エナジーメモリ(x4)』

これは魔力を予め充填した状態で使用する特殊装備であり、基本的に武器を持たないネクサスのバリアジャケット維持や使用者の肉体強化、自動防衛魔法の使用などに使用されている。

充填方法は自身の魔力を直接送り込む方法と、大気中の魔力素を収集する方法の2種類である。

前者は戦闘中でも行えるが、結局のところ自身の魔力を消費するため、あまり有効な手段とは考えられない。

後者は時間が掛かる上に戦闘中やバリアジャケット起動中には使用出来ない欠点を持つ。

カラーリングはどれも漆黑で、端子の部分は白銀色になっている。

システムは以下の通りである。

『エナジーメモリシステム』

これはIEESを参考にカートリッジシステムを応用・発展して開発されたエナジーメモリ専用のシステムで、エナジーメモリに内包する魔力を各種装備へ伝達することを主眼に置いている。

この機構によって使用者は自らの魔力を極力使わずにバリアジャケットを展開して戦闘を行えるようにしている。

しかし、上記の理由によって実用化までには至らず、試作実験機で

あるネクサスに積み重ねていた。

『フォースメダルシステム』

これはメダライズケース専用システムであり、エネルギーメモリ内や自身の魔力をメダル状に変換して生成するシステムである。

『エクシードドライブシステム』

これはエネルギーメモリシステムとフォースメダルシステムと連動して機能するシステムで、エネルギーメモリに内包する魔力やフォースメダルを利用して強力な技を繰り出すことが出来る。

また、エクシードドライブ発動時に使用するエネルギーメモリ内の魔力量は基本的に30%、フォースメダルは3枚が必要であり、エクシードドライブの連発はバリアジャケットの展開率にも影響を及ぼすため、注意が必要である。

但し、エネルギーメモリ側の魔力は出力を任意で変更出来る。

『コマンドアクションシステム』

これはエクシードドライブシステムと連動して機能するシステムで、ナイトブレスのテンキーに各エクシードドライブを登録するのはこのシステムの役割である。

デバイス：ファルゼン

形状：刃渡り3尺、刀身は白銀、鍔は紅、柄は漆黒の日本刀

待機状態：漆黒の指輪

搭載システム：エクシードリンクシステムを搭載

管制人格は男性で忍に忠実な性格

備考：忍が逃亡の際に研究所から奪取したインテジェントデバイス。これはネクサスとの連携を想定して開発されており、ネクサスには不足している近接格闘能力を補助する役割を持っている。

フォーム変化は以下の通りである。

基本形態である日本刀『モード・サムライソード』

ファルゼンの基本形態であり、起動時は必ずこの状態である。

刀身には特殊合金、柄と鍔の部分にはかなりの硬度を誇る特殊フレームを使用しており、かなり頑丈且つ壊れにくい仕様になっている。

特殊形態『モード・斬艦刀』

これは日本刀形態から柄が少し伸び、鍔が開くと元の刀身を軸に形状記憶液体金属を纏わり付かせて身の丈以上の巨大な剣状の刀身を形成した特殊な形態である。

元々はドライバーの設計思想にあった変形機構を参考にしており、これを武器に転用したのがこの特殊形態である。その巨大さからある程度の技量が必要となる。

システムは以下の通りである。

『エクシードリンクシステム』

これはネクサスのエクシードドライブシステムをファルゼン自体にも反映出来るようにするシステムで、これによってエクシードドライブの使用法もかなり広がっている。

デバイス：セイバーフィリス

形状：真紅の朱雀

待機状態：表面に朱雀の絵が刻まれた真紅のメダル

搭載システム：DCS、FLS、エクシードリンクシステムを搭載
管制人格は女性で礼儀正しく生真面目な性格

備考：忍が研究所から奪取したドライバーデバイス。

これはブラックナイト・ネクサスの補助として開発されており、近接特化及び砲戦仕様の調整が施されている。

ドライバーコネクト時は上半身に装着される。

装備・武装は以下の通りである。

胸部には朱雀の頭部に内蔵した多目的型砲戦装備『セントブラスタ
ー』

これは多種多様な射撃手段として撃ち出すことが可能である。

背部には胴体と足が変形した魔力スラストー1基と補助用魔力ブ
ラストー2基を内蔵し、左右に朱雀の翼を模した1対2枚の大型機械
翼を備えたバックパック装備『フェニックスウイング』

これは機械翼を広げることで補助用魔力ブラストーから魔力粒子を
放出し、光の翼を形成することで更なる高機動性能を獲得している。

機械翼部から放つ無数の極細の魔力レーザー『フェザーティア』

これは直線射撃型と自動追尾型の2種類への切替が可能で、切替の
タイミングや軌道計算をしてから撃てば発射後に魔力レーザーは軌
道を曲げて変則的な射撃が可能となる。

機械部を鞘代わりに収納した1対の片手剣型装備『フェニックスソ
ード(x2)』

これは細身でクリアグリーンの半透明の刀身を持ち、その硬度はかなり硬く、取り回しの良さも相俟ってセイバーフィードリスの主兵装となっており、柄の部分を曲げることでライフルモードへの移行も可能で、刀身の切っ先から魔力弾や魔力レーザーを発射し、柄同士の連結機構も存在する。

フェニックスソードと同素材の刃を持つ近接格闘用フライヤー装備『セイバービット』

これは形状と大きさの異なるA、B、C、Dの4種のフライヤーを各2基ずつ計8基装備し、各フライヤーには手持ち用のグリップが格納されており、各フライヤーをそれぞれ連結させることで新たな刀剣型装備としての使用を可能にしている。

また、全フライヤーは円環状に配置することで、任意の範囲にエネルギーフィールドを展開する他、魔力を刃に上乗せして斬撃能力を強化したり刀身状に形成して延長したり、フェニックスソードに合体させることで強化させることも出来る。

ちなみにドライバー時は機械翼部にセットされる。

AとBのセイバービットが連結した長剣型装備『SFロングブレイド』

AとCのセイバービットが連結した大型ブーメランと実体剣を両立した装備『SFブーメラン』

AとDのセイバービットが連結したトンファー型装備『SFブレードトンファー』

BとCのセイバービットが連結した十字手裏剣型投擲装備『SFクロスブレイド』

BとDのセイバービットが連結した短剣型装備『SFショートブレイド』

CとDのセイバービットが連結した小型ブーメランと魔力エネルギーサーベルを両立した装備『SFサーベル』

A～Dのセイバービットがフェニックスソード（ソードモード）と合体した片刃の大剣型装備『SFバスターソード』
A～Dのセイバービットがフェニックスソード（ライフルモード）と合体した高出力ライフル型装備『PFバスターライフル』
2本のSFバスターソードを並列に繋げた大剣型装備『SFザンバーソード』
SFザンバーソード時にそのまま柄を曲げてライフルモードへ移行した大型砲撃装備『SFザンバーライフル』
2本のSFバスターソードの柄同士を繋げた両剣型装備『SFダブルバスターソード』
SFバスターソード、SFバスターライフル、SFザンバーソード、SFザンバーライフル？、SFダブルバスターソードの5形態時に五気を刀身状に圧縮した巨大な刃を形成して発動する『ライザーソード？（ビクトリー）』
ちなみに2本のフェニックスソードと8基のセイバービットの総称を『デナリウスソード』と呼ぶ。

デバイス：ガルヴィオン

形状：瑠璃の西洋龍

待機状態：表面に西洋龍の絵が刻まれた瑠璃のメダル

搭載システム：DCS、FLS、エクシードリンクシステムを搭載
管制人格は男性で冷静沈着な性格

備考：忍が研究所から奪取したドライバーデバイス。
これはブラックナイト・ネクサスの補助として開発されており、銃撃戦及び多数目標砲戦仕様の調整が施されている。
ドライバーコネクト時は両肩から両腕に装着される。

内側8基のホルスターフェザーに格納された銃器型フライヤー装備『プラスチックビット』

これはガンビットの先端に増設される下部パーツで、普段はホルスターフェザーの下部に格納されており、引き出す際にガンビット単体が接続状態のどちらかを選択する。

このプラスチックビットの特徴は複数の銃口を持ち、ガンビットのエネルギーを増幅して広範囲への攻撃を可能にしているが、こちらはガンモードへの移行は出来ない。

両肩から両腕には西洋龍の大部分が変形した籠手型装備『ドラゴニックアームズ』

これは本体が縦に真つ二つに分離し、肩から手首までを覆う重装甲型の籠手となる。

足のパーツは前腕部に装着されま魔力ワイヤー式のアンカー装備となり、腕のパーツは後腕部に装着して魔力ビームトンファアとして使用が可能。

この際、ネクサスとナイトブレスは内側に向けられる。

臀部に装着した特殊装備『ドラゴニックテイル』

これは脳から発する特殊な電気信号を尻尾へと伝達することで自由に操作が可能であり、背後から来る敵に対して迎撃、防御、拘束などの動作も可能にしている。

また、ある程度の伸縮性も有しており、中距離までカバー出来る。

装備・武装は以下の通りである。

龍の頭部が変形したバイザー付きヘルメット装備『ガルダアイズ』

これはネクサスとガルヴィオンの管制人格による高速演算処理能力を惜しみ無く発揮して通常射撃から狙撃まで様々な射撃攻撃のサポ

ートを行うことが出来る。

巨大な羽を模した16基の大型フライヤー装備『ホルスターフェザー』
これはその名の通り銃器型フライヤーの格納スペースが設けられており、待機状態はコアバツクルのベルトに片方8基ずつに並列接続して魔力エネルギーをチャージしている。

また、ドライバー時は片方8基ずつが並列接続することでガルヴィオンの龍翼を形成している他、2基を連結したシールド形態にしたり、格納している銃器型フライヤーと組み合わせで展開することによって高出力の魔力ビームを発射したり、フライヤー自体に魔力ビームを反射させて一度に複数の目標を迎撃することも可能。

全基のホルスターフェザーに格納された銃器型フライヤー装備『ガンビット』

これはホルスターフェザーから引き出される際の上部分であり、ネオファンクが超次元進化した合計16基の小型フライヤーである。また、格納されたセンサーとグリップを展開することで手持ち火器としても使用可能で、ガンモード時の銃身下端には近接用のブレードが設置されている。

外側8基のホルスターフェザーに格納された銃器型フライヤー装備『ライフルビット』

これはガンビットの先端に増設される下部パーツで、普段はホルスターフェザーの下部に格納されており、引き出す際にガンビット単体が接続状態のどちらかを選択する。

このライフルビットの特徴は長距離用の銃身をガンビットに接続することで射程と威力を強化し、ガンモードの強化版であるライフルモードへの移行も出来る。

デバイス：ファイガーズ

形状：純白の虎

待機状態：表面に虎の絵が描かれた純白のメダル

搭載システム：DCS、エクシードリンクシステムを搭載

管制人格は女性で短気且つ喧嘩っ早い性格

備考：忍が研究所から奪取したドライバーデバイス。

これはブラックナイト・ネクサスの補助として開発されており、主に機動力及び蹴撃仕様の調整が施されている。
ドライバーコネクト時は下半身に装着される。

装備・武装は以下の通りである。

頭部が変形した右手を覆う専用籠手型装備『ファンゲブレイカー』
これは五気を収束することで、凄まじい破壊力を得ることが出来る。
また、目標を掴まえての直接照射する他、高密度に圧縮した魔力弾の発射、収束砲撃を放つことも出来る。

両足を覆う蹴撃装備『ファイガーズスラッシュ』

これは本体が縦に真つ二つに分離し、前足と後ろ足が変形した重装甲型足具となる。

前足のパーツは膝から足首までに装着してプラズマゼットブレイドとなり、後ろ足のパーツはふくらはぎ部に装着してブースターとして機能する。

尻尾が変形したロッド状の刀身を持つ短剣型装備『スラッシュブレ

「ダー」

これは刀身が伸縮自在になっており、刀身を伸ばして長剣や鞭として利用可能な上、五気を使って攻撃力を増すことも出来る。

また、不使用時はブラスクドライバーのベルト部の左側に携えるようにする。

デバイス：ランドガードナー

形状：漆黒の亀

待機状態：表面に亀の絵が描かれた漆黒のメダル

搭載システム：DCS、FLS、エクシードリンクシステムを搭載
管制人格は男性で寡黙な性格

備考：忍が研究所から奪取したドライバーデバイス。

これはブラスクナイト・ネクサスの補助として開発されており、主に防御力及び砲戦仕様の調整が施されている。

ドライバーコネクト時は各種武装となって装着する。

装備・武装は以下の通りである。

左腕には甲羅が変形した大型シールド装備『ランドシールド』

これは表面に対五気コーティング処置を施しており、その防御力は忍の持つドライバー中、最高の硬度を誇る。

ランドシールドの内側に備わった防御専門ファイヤー装備『ガードナービット』

これは全20基の小型ビットであり、ビットを支点にして広域防御

を可能にしたり、足場にしたりなどと汎用性もかなり高い。

両足側面に装着する魔力レーザーミサイルポッド『ガードナースピリット』[『]

これは本体が縦に真っ二つに分離して変形したミサイルポッド装備であり、片方10門ずつの魔力レーザーミサイルを撃つことが出来る。

また、足のパーツが足首に装着することでホバーユニットとしても機能する。

両肩上部に装着する多目的ユニット装備『ランドアグリッサ（×2）』[『]

これは前部に魔力キャノン、上部と外側面に8門ずつの魔力レーザーミサイル砲、後部に魔力スラスト1基を搭載した多目的兵装であり、大型フライヤーとしても機能する。

ドライバー時は甲羅の上部に装着している。

投稿デバイス設定（後書き）

影間 滂さん。ありがとうございます。

第五十九話 『目覚める！！煌きの天使と真祖、霸王の素質！！』 (前書き)

遂に統夜と忍の決着が着く。

天川家では乙女から天川兄妹の真実が明かされる！！

マリオ「HERO・S EPISODE 第五十九話始まるぞ」

第五十九話 『目覚める！！煌きの天使と真祖、霸王の素質！！』

第五十九話 『目覚める！！煌きの天使と真祖、霸王の素質！！』

忍「うおおおお！！！！」

華琳『何・・・あれ・・・』

統夜「紅神・・・？」

憎しみと怒りで六つの同時解放をした忍を見て、驚愕していた。自分の予測ではそれぞれの解放陣は宝石に封じ込まれたもので、統夜のようなヴァンパイアルシファーみたいな事が出来ないと思ったからだ。

だが、現に忍は六つの解放形態全てを同時解放をしていた。

忍「うおおおお！！！！」

両脚に妖力を収束した後、真狼に匹敵する速度で駆け抜け、後ろに回り、ファルゼンで斬ろうとしたが、統夜は寸前まできたファルゼンの刀身をバビロニアの柄だけで受け止めていた。

統夜「こいつは・・・」

忍「これは・・・桐葉が俺に力を与えてくれたものだ・・・貴様への復讐の力だ。あの時から・・・ずっと貴様とイグニスを恨み続けた・・・今までずっとだ！！」

剣を振ろうとした瞬間、忍は突然、ファルゼンだけを残し、消え始め、瞬速の乱舞を見舞い始めた。

忍「無駄だ！！いくら貴様が速かろうと・・・真狼と雪女、吸血鬼、

龍騎士、冥王、魔獣の力が全て発揮できる!!」

統夜「ぐ……お……」

忍「答えを見出しても……解放形態が出来なければ……俺を倒す事等……不可能!!」

妖力と覇気を収束した拳で統夜の全身を殴り続け、ボロボロにした後、右手で顔面を鷲掴みにした後、勢いよく投げ飛ばした。

忍「はあ……はあ……はあ……」

スペースバンガードのブリッジで忍の解放形態を見ていたギルシア達は驚いていた。

統夜への憎しみと怨みで六つの解放形態を同時解放するとは思えなかったからだ。

ギルシア「まさか……ここまで憎しみが大きいとは……」

レーティア「真狼に雪女、吸血鬼、龍騎士、冥王、魔獣が一つになった形態ってハイリスクよね？」

ギルシア「そうだな……六つの解放形態の同時解放は負担が大き過ぎる。統夜のヴァンパイアルシファーより強力だが……」

ジャンヌ「答えを見出したのはいいけど……状況はこれ以上に不利になったよね？」

ジャンヌの言葉にギルシアとレーティアは否定せず同意するかのようにならぬ首を縦に振った。

ギルシア「逆恨みもいいとこだよな」

レーティア「全くね。統夜が不憫よ」

ジャンヌ「普通に考えればそうだよな。で……どうするの？」

レーティア「どうするって？」

これからの行動に対してレーティアに聞いてみた。

ジャンヌ「統夜君を助けに行くかどうかを・・・解放形態無しでポロボロになつてるから・・・」

ギルシア「俺は行かんぞ」

レーティア「私も」

ギルシアとレーティアの二人は即答で行くのを拒否した。

ジャンヌ「何で？これじゃやられるよ？」

ギルシア「同志である統夜がここでくたばる様なタマか？解放形態を取り戻してあの逆恨み坊主の憎しみをぶっ壊してくれるさ」

ジャンヌはギルシアに抗議しようとしたが、ギルシアは統夜を信頼しているかのようにそう言った。

ジャンヌ「憎しみを？」

ギルシア「ああ。統夜とあの坊主の戦いに俺達は介入せず・・・見守る。それだけさ」

それだけ言つとモニターに目を向けた。

天川家のリビングでは周りがシンとしたものになっていた。

はやて「乙女さん・・・統夜と鮮華ちゃんの真実って言つのは何です？」

乙女「貴方達は統夜ちゃんと鮮華ちゃんをどれぐらい知ってる？」

乙女からの質問にはやて達はこう答えた。

はやて「種族が吸血鬼で、異常な力を持つてるぐらい・・・かな・・・」

メアリ「兄の統夜は桁違いの力を持ち、鮮華は真面目な優等生で努力家」

文乃「絶望へ誘う蒼炎を持っている事ぐらいね」

優子「人間からかけ離れた力を持つぐらいしか・・・」

秀吉「ワシもじゃ・・・」

乙女「はやてちゃんの言った吸血鬼が普通の吸血鬼ならいいけどね・・・」

はやて達幼馴染の答えを聞いた乙女は瞳を閉じて、そう呟いていた。

シグナム「普通の吸血鬼ならいいとはどういう意味ですか？」

シグナムは普通の吸血鬼という言葉に疑問を持ち、乙女に聞いてみた。

乙女「それは・・・統夜ちゃんと鮮華ちゃんの母親について教えるわね」

シヤマル「父親の事は知らないのですか？」

乙女「母親だけしか知らないわ。会った事も無いもん」

ヴィータ「統夜と鮮華の母親なあ・・・」

リン「統夜さんの家族って謎だらけですう・・・」

乙女「それには事情があるのよ。リンちゃん」

千世「事情って・・・統夜と鮮華を置いて行った理由はあるの？」

千世の言葉に乙女は首を縦に振った。

乙女「統夜ちゃんと鮮華ちゃんの母親は三大冥王と呼ばれる存在の一人……『真祖の吸血姫』と呼ばれた天川彩華よ」

乙女が放った言葉に統夜ラバーズとヴォルケンリッターに衝撃が走った。

滅茶苦茶強い三大冥王の一人と聞けば誰でも驚くものなのだから・

一番衝撃が走った鮮華は放心寸前となっていた。

シャル「(霸王色の覇気を持っている理由が傾けたわ……)」

雪蓮「それなら統夜と鮮華を置いて消えた理由も肯けるわ」

文乃「それだけで……無責任にも……」

雪蓮「文乃……もし母親がずつと一緒に暮らせば、彼女を狙う存在が幼かった統夜と鮮華を狙う可能性は高い……だから消えた……そうでしょ？」

乙女「ええ。私には大き過ぎた事だったけど……それを聞いたのは月と地球の絆が再生された後だったから……」

雪蓮の言葉にそう答えた。

エステル「それは……統夜が吸血鬼化になった時に会ったのですか？」

乙女「そうよ。統夜ちゃんの覚醒がキツカケで来たわ」

統夜の覚醒で来た事を肯定した。

統夜が吸血鬼化に目覚め、ユルゲンを倒した日から一週間が経ったある日の事だった。

乙女「統夜ちゃんは有名になったわね・・・」

弟のように可愛がっている統夜を思い浮かべながら、お茶を飲んでみると、ストレイキャッツのドアが開く音がした。

様子を見て見ると、膝裏まである金髪に蒼い瞳をした綺麗な顔立ちをし、上は白い長袖のハイネックシャツに下は真紅のロングスカートを穿いた女性が中に入って来たのだ。

「ここだったわね」

乙女「彩華さん？」

ドアが開く音が聞こえたので来てみると、彩華と呼ばれた女性は手を振っていた。

彩華「やつほ〜乙女。久し振り」

乙女「お久し振りです。彩華さん。今日は・・・」

彩華「ええ・・・統夜の覚醒の件についてよ。私としては戦いに関与させたく無かったけど・・・運命なのかしらね」

乙女「あれは驚きましたけど・・・覚醒とは・・・」

彩華「そのまんまの意味。私の事を教えるから奥で話しましょう」

覚醒に戸惑っている乙女に奥で話すように言った後、移動した。

彩華「保護者をしている乙女は知る権利はあるわね」

乙女「統夜ちゃんや鮮華ちゃんには会わなくていいんですか？二人は母親の事を知りたい筈ですし・・・」

彩華「そうしたいけど・・・事情が事情だから・・・」

統夜と鮮華に対して、悲しそうな目をしながらそう答えた。

乙女「そう・・・ですか・・・」

彩華「ええ・・・」

乙女「いつか再会出来るといいですね」

彩華「ええ。本題に入るわ・・・私の種族は吸血鬼でも普通の吸血鬼ではない・・・」

乙女「普通の吸血鬼ではない・・・？」

彩華の言う普通の吸血鬼じゃないという言葉に？を出していた。

吸血鬼に種類なんて存在しないのが普通なのだが分からなかった。

彩華「真祖・・・それは吸血鬼の祖先もしくはその力を直接受け継ぐ存在・・・強さは普通の吸血鬼より遥かに凌ぐ種族よ。ちなみに私は吸血鬼の祖先だから真祖だけど」

乙女「じゃあ・・・統夜ちゃんと鮮華ちゃんは真祖の力を・・・？」

彩華「そうなるわね。もし二人が完全に真祖として目覚めれば・・・ユルゲンだったっけ？彼・・・一撃で死んでるわ・・・肉体が塵になるレベルで・・・」

これを聞いた乙女は驚きと共に顔を青ざめた。

吸血鬼でも強い存在なのにそれを遥かに凌ぐ強さを持つ真祖ということんでもない存在がいるのだから。

乙女「・・・」

彩華「私としても・・・統夜の覚醒には予想外よ。何も知らず・・・普通の生活をして・・・幸せになってほしかったのに・・・」

乙女「今でも統夜ちゃんと鮮華ちゃんは幸せで充実な生活を送っていますよ。色々な人に囲まれて・・・恵まれて」

悲しそうな感じで話していた彩華に乙女は笑顔になって天川兄妹は

幸せに暮らしている事を教えた。
それを聞いた彩華は笑顔になっていた。

彩華「運命なのかしらね・・・あの子達の・・・」

乙女「それは分かりませんね」

彩華「強大な力は人を惹きつけると同時に・・・畏怖の対象にもなりうる・・・」

乙女「天川家に・・・統夜ちゃんと鮮華ちゃんが住んでる家には戻る気はありませんか？」

彩華「んっ・・・あるかもしれないね。お茶、おいしかったよ」

用意されたお茶を飲んで立ち上がり、部屋から出る前に乙女に一言こう言った。

彩華「私の本名はリーシャ・アーカード・・・三大冥王の一人にして・・・『真祖の吸血姫』と呼ばれた存在・・・覚えておいてね」

乙女「リーシャ・アーカード・・・三大冥王・・・真祖の吸血姫・・・少し聞きたい事が・・・」

彩華「何かしら？」

乙女「あの二人の父親について・・・教えてほしいのだけど・・・」

彩華「あの人の事・・・か・・・一つ言えるのは種族が規格外な闇の眷族としか言えないわ・・・詳しい事は・・・いくら乙女でも教えられないわ。また連絡をこちらから入れるわ」

そう言ってドアまで行き、店から出て行った。

乙女「これが私が彩華さんから聞いた話よ」

鮮華「・・・」

これを聞いて、統夜ラバーズと鮮華、ヴォルケンリッターの一同は
啞然としていた。

真祖の詳細と彩華の本名があつた事に・・・

カナ「吸血鬼を遙かに凌ぐ・・・真祖・・・」

優子「闇の眷族・・・死神か魔人、堕天使のようなものかしら？」

ヴィータ「あいつが規格外でも私は普通に接するぜ？な、はやて」

はやて「うん。統夜がどんな種族でも・・・受け入れる・・・真祖
でも闇の眷族やろうと・・・」

瞳を閉じ、手を合わせてそう言った。

乙女「はやてちゃん達はそうだとしても・・・統夜ちゃんと鮮華ち
ゃん自身はどうかかな？ごめんなさいね・・・鮮華ちゃん・・・今ま
で黙ってて・・・」

鮮華「いえ・・・事情が事情でしたし・・・正直な事を言
います・・・自分自身が怖くなりそうですね・・・」

涙目になっている鮮華がそう言い終えると、ピンポイント！とチャ
イムが鳴った。

はやて「はいはい」

はやてが出て、ドアを開けると、遊輔と明久、康太の三人がいた。

遊輔「統夜いる？」

はやて「華琳ちゃんと一緒に何らかの事を調査に行くってないけ
ど・・・」

遊輔「俺達と同じ事を調査しているのか・・・？」

はやて「同じ事を調査しているって・・・どういう事や？」

遊輔が言った言葉にはやては眉を顰め聞いてみた。

明久「ここじゃなんだから・・・リビングで・・・ね？ムツツリー
二」

康太「・・・・・・・・」

首を傾けて肯定した。

玄関で話すには大きい為、リビングへ向かった。

明久「秀吉に木下さんも来てたんだ」

秀吉「うむ。明久達は何故ここへ？」

明久「統夜達に教えておきたい情報があつて・・・つて・・・鮮華
さん、どうかしたの？」

自分の母親の事を知ったのか涙目になっている鮮華を見て聞いてみ
た。

秀吉「統夜と鮮華の母親の真実を乙女さんから聞いた所だったのじ
や」

遊輔「真実？統夜が求めてたやつか？」

優子「そんな所よ。アンタ達は何故ここへ？」

統夜が求めている真実と理解した遊輔に、優子が聞いてみた。

遊輔「紅神が受けていた実験をね。康太。説明始めていいか？」

康太「・・・・・・・・問題無い・・・」

遊輔達は康太が調べた絶滅種復元計画の事を話し始めた。

絶滅した冥族と龍騎士、魔獣族の血を利用した実験、目的が統夜や

イグニスに匹敵する力を得る為、忍が実験を受けていた事等を説明していた。

この事を聞いたはやて達は啞然とし、セイラ達の非道な実験に対し、静かに怒っていた。

はやて「それで・・・統夜も同じ事を調べてる最中なんか？」

遊輔「恐らくね・・・紅神は統夜とイグニスを憎んでいると踏んでいる・・・」

明久「僕からして見えば逆恨みにしか見えないよ。実験やったのはあいつらだし・・・馬鹿だよな」

明久の言葉に一同は黙ってしまった。

何故なら明久に馬鹿と言われれば忍は終わりだと考えてしまったのだから。

明久「酷いな・・・僕は正論を言ったまでだよ」

はやて「なあ・・・何で統夜は関係ないのに・・・憎まれなきゃあかんの？強過ぎたのがあかんのか・・・」

遊輔「あいつは関係ない・・・あいつの逆恨みだ。あいつの・・・紅神の心が憎しみに負け・・・逆恨みと恨みの区別が分からなくなってしまうんだ」

はやて「憎しみに・・・負けた・・・か・・・」

遊輔の言葉に悲しみに満ちた表情になっていた。

遊輔「あいつ自身も分かってくれるさ」

リビングが見える所へ移動し、窓から空を見上げていた。

忍「何故・・・立てる・・・解放形態も出来ず・・・太刀打ち出来ない貴様が!!」

吹き飛ばされ、ボロボロになった統夜が起き上がり、こちらに向っている事に対し叫んでいた。

統夜「お前の憎しみを・・・苦しみ、悲しみを壊すまで・・・諦めはしないよ・・・」

口から出た血を拭いながら小さく呟いた。

忍「憎しみと怒り、悲しみを与えた貴様が言えた事か!!」

統夜「紅神・・・お前は分かっているんじゃないのか？逆恨みで俺を殺しても意味は無いと・・・お前がファルゼンを俺に渡した時から薄々と感じていた」

忍「黙れ・・・」

統夜「実験を受けたお前は・・・桐葉という存在を失った事で心を摩耗し・・・仲間を作ろうとせず・・・ただただ自分の運命を変えたセイラ達・・・セイントクルセイダースへの怒りと憎しみが募った。摩耗した心に憎しみと怒りで補えば補うほど恨みと逆恨みの区別がつかなくなってしまった・・・違うか？」

忍「黙れ・・・黙れ黙れ黙れエエエエエエ!!!」

統夜の言葉を否定するかのようになり怒りを露わにし叫び始めた。

統夜「人は辛い事や悲しい事を抱え・・・受け入れなくてはいけないんだ!!」

忍「ふざけるな!!俺をこうさせた貴様に言えた義理か？」

統夜はバビロニアを握り、忍に斬り掛ったが、ファルゼンで防がれ、

激しい打ち合いが行われた。

忍「現実を見る・・・解放形態も出来ない今の貴様に何が出来る・・・弱い貴様に!!」

統夜「それはお前自身だ。確かにお前は力は強いが・・・心の方は弱い・・・憎しみに負けているお前の心が!!」

忍「黙れ!!」

刀身に妖力を収束させ、統夜を衝撃波で吹き飛ばした。

統夜「仲間を作らないのは失う事を恐れてるんじゃないのか？学園生活を見れば一目瞭然・・・仲間との絆を否定すればするほど・・・憎しみと怒りは癒されず・・・闇に堕ちる」

学園生活で忍の行動を偶に見ていた事を思い出していた。

統夜「本当は・・・仲間を作り・・・絆を結びたかつたんじゃないのか？絆から大切に掛け替えの無いものが生まれる」

忍「黙れ!!」

統夜「憎しみと怒りに堕ちるな!!でなければ・・・桐葉は笑顔にならない・・・お前の心の中にいる桐葉が!!」

忍「黙れえ!!」

統夜に真意を言われる事に憤慨したのか速い神速で移動し、ファルゼンで切り裂いたが、感触が全く無かった。斬ったのは統夜の幻であった。

忍「幻影か・・・くっ!!」

幻が消えたと思ったら蒼炎の爆弾であった為、氷の鏡を出すリフレ

クトミラージユで防いだ。

統夜「死んでも・・・掛け替えの無い人は生きている・・・それぞれの心の中に！！」

ソルジャーにいた頃の仲間達の事を思い出し忍に叫んだ。

バビロニアで連続斬りを行ったが全て防がれ、吹き飛ばされた。

統夜を吹き飛ばした忍は周りが真っ黒になり、背中まで伸びている白い髪に緑色の瞳をした少女である如月桐葉の姿があった。

忍「桐葉・・・」

桐葉『しーちゃん・・・』

忍にそう語りかけると首を横に振った。

怒りと憎しみに駆られた逆恨みの復讐を止めてほしいという願いが籠っていたいたかのようだった。

統夜は忍に吹き飛ばされた後、光に包まれた。

光が治まると、そこは暗く粒子に包まれた世界だった。

統夜「ここは・・・」

「天川統夜・・・」

女性の声が聞こえたので、後ろを振り返ると、驚愕の表情になった。何故なら・・・

リインフォース「・・・」

闇の書事件で消滅した銀髪に赤い瞳、黒いバリアジャケットを纏った女性であるリインフォースだったのだから・・・

統夜「リインフォース・・・なのか？」

リインフォース「天川統夜よ・・・お前は解放形態を持つ存在なのに・・・何故だ？何故・・・お前の力の一部である解放形態を受け入れようとしなない・・・？」

統夜「それは・・・」

リインフォース「甘えるな！！脅えるな！！お前は答えを見出したのだろうか？何故迷う必要がある！！」

解放形態を受け入れようとしなない理由を言おうとしなない統夜にリインフォースは喝を入れ始めた。

統夜「リインフォース・・・」

リインフォース「吸血鬼だろうか墮天使だろうか・・・お前は人の心を持っている・・・迷うな・・・」

統夜「・・・」

リインフォース「仲間や主達・・・お前を想う者達を思い浮かべてみる・・・」

リインフォースに言われ、統夜は目を閉じ始め、思い出していた。

遊輔「お前なら大切な人々を笑顔に出来そうだな」

達哉「お前がいたから・・・地球と月が分かり合えた」

零斗「お前の力とマイティ真拳があれば大切なもの・・・全て守れそうだな」

ダイチ「一緒に頑張ろうぜ！統夜！」

たけし「統夜さんは異種族でも・・・俺達・・・仲間だろ？」

明久「どんな種族でも君は君だよ」

マリオ『頑張れよ！統夜！！お前なら出来る！！そう俺は信じている！！』

仲間達の言葉が頭の中に響いた後・・・

はやて『統夜がどんな種族でも私は受け入れたる・・・吸血鬼やろうが・・・堕天使やろうが・・・』

文乃『アンタは吸血鬼でも・・・心は人間でしょ？シャキツっとしなさいよ！！』

千世『規格外でもアンタはアンタよ。私の執事でしょ？』

希『にやあ・・・統夜は統夜・・・自分の進む道を歩いて・・・』

プリムラ『お兄ちゃんがいたから私は変わった・・・だから好きになっただ』

カナ『憎しみを壊し・・・認めてくれた統夜に感謝してるよ』

エステル『統夜は統夜のやりたいようにやればいいと私は思います。信じていますから』

優子『統夜・・・貴方がいるから幸せよ』

秀吉『お主は光と闇の二つを持っている・・・そう信じているのじや』

咲夜『統夜がいなかったら・・・どうなっていたか分からなかった・・・ありがとう』

華琳『貴方って本当に興味深い人物ね。そして・・・惹かれた・・・』

雪蓮『大切なものがあるから強くなれる・・・でしょ？』

シャル『貴方の行く絶望は力の無い人からは希望になる・・・堂々としてなさい』

メアリ『アンタはアンタの道がある・・・そうでしょ？』

自分を想ってくれている統夜ラブの言葉が響いた後、解放形態に対する迷いが完全に消えていた。

統夜「解放形態は俺の力の一部で共にある・・・心が人間・・・仲間が・・・想ってくれる人達がいる・・・」
リインフォース「今のお前なら大丈夫だろう・・・」

自分には仲間や想い人達との絆がある事を再認識した統夜にリインフォースは瞳を閉じ身体が消えようとしていた。

統夜「お、おい・・・」

リインフォース「力と身体が強くて心も弱ければ真の力は生まれ
ない・・・さらばだ・・・」

リインフォースが消えた後、景色が白銀の光に照らされた草原に変わった。

統夜「行っちゃったな・・・あいつ・・・にしても・・・ここは・・・」

「あ・・・ここにやっとなりましたね」

背中から羽の形が機動ウイング状の五対十翼の翼が生え髪の色が白銀に輝いた銀髪、瞳の色が銀色で、白い騎士服を着た青年が上から降って来た。

その後青年は光り出し、白いパーカーに黒のハーフパンツ姿の肩まである金髪に蒼い瞳をし幼さを残した少年に変わった。

「ふ・・・お兄さんの姿を借りるのって結構きついですよ」

統夜「誰？」

煌天使「僕ですか？煌天使です。お兄さんだけの真ルシファアの・・・」

統夜「俺だけ・・・の？」

煌天使「はい。そうです。ルシファーを取り込んだお兄さんの想いと『使われてない力』が融合され・・・生まれたのが僕です」

煌天使と名乗った少年は陽気に答えていた。

煌天使「前に・・・お兄さんが来るかなと思つたら・・・お姉さんが来て驚いたけど無視しちゃった」

統夜「（シャルさんだな・・・）俺が解放形態に迷いを無くしたから会えたって訳か？」

煌天使「そうですね。そうだ・・・真祖の所へ行きましょう」

統夜「おい・・・真祖つて・・・」

煌天使「吸血鬼の始祖ですよ。こっちから見えるでしょ？あそこにある真紅の洋館・・・ほら・・・早く行きましょうよ」

統夜「あ、ああ・・・つて引つ張るな！！」

煌天使に引つ張られ、真紅の洋館へ向つた。

洋館の前に着くと血を抜かれ死んだ人間や竜等の生物が横たわっており、何かに挑んだのか無残な姿になった人や異形の死体が転がっていたという異様な光景があつた。

統夜「これは・・・」

煌天使「真紅の本来の姿・・・真祖が殺つたんですよ。ここへ来る欲望に駆られた者達を・・・ずっとお兄さんを待っていたんだよ」

統夜「真祖・・・入るぞ」

煌天使「わっ・・・ちよつと！真祖は逃げませんよ！！」

洋館の中へさつさと入った。

所々歩き回っていると、大きな広間に辿り着くと紅のマントを羽織り髪が銀髪、瞳が真紅、瞳孔が縦になっている紳士服を着た男性が王座に座っていた。

統夜は一目でかつて自分と戦ってくれた真紅だと分かった。

統夜「真紅だろ？」

真祖「真紅では無い・・・私の本来の名前は真祖・・・いわばお前の持つ本来の力を司る存在だ。使われていない力と融合してるが・・・」

統夜「本来の力？」

真祖「そうだ・・・真祖は吸血鬼の祖先・・・またはその力を受け継ぐものの種族だ・・・強さは普通の吸血鬼より遥かに凌ぐ・・・」

統夜「その力が俺に・・・」

真祖の力を聞いた統夜は驚いていた。

自分が使っていた吸血鬼化より遥かに強いからだから・・・

真祖「ああ。今のお前には相応しいと思ったのだが・・・解放形態に迷いがあつたが為に不安定だった・・・」

統夜「俺は答を見出し・・・大切な仲間達や想い人達との絆を再認識した」

真祖「その答えを見出し・・・大切な事を心に刻んでいるお前なら安心して授けられる。煌天使・・・」

統夜「ちよつと待て・・・」

煌天使を呼ぼうとした真祖に待ったをかけた。

真祖「何だ？」

統夜「ここから見える漆黒の洋風の城には誰がいるのか？」

統夜の問いに真祖と煌天使は顔を顰め始めた。

煌天使「お兄さん・・・あそこには・・・僕達とは違う道を進んで

いる魔王がいるから」

真祖「奴の力は未知数だ・・・私やお前の言葉に耳は貸さないだろう・・・」

統夜「魔王・・・」

真祖「では・・・始めるぞ」

煌天使「この力をお兄さんが使いこなせると信じてるよ」

真祖と煌天使の二人は統夜に手を置き、煌天使は白銀色、真祖は真紅の光に変わり、統夜の中へ吸い込まれ、光に包まれた。

統夜「ここは・・・現実世界へ戻ったのか」

華琳『大丈夫なの？』

統夜「ああ・・・」

忍「・・・」

統夜「紅神・・・お前の憎しみを・・・悲しみを破壊出来るなら・・・俺は・・・解放形態を使う・・・真祖！煌天使！！解放！！」

突然ヴァンパイアルシファアに変わったのかと思いきや銀色の光に包まれた。

忍「何が起きようとしている！！」

統夜「はあああああ！！！！」

華琳『何が起きようとしているの！？』

光の中で背中に生えてある翼が羽の形が機動ウイング状の五対十翼の白く輝く銀色の翼に変化し、両肩に紅のマントを羽織り、髪の色が蒼が掛った金髪、瞳は瞳孔が縦、色は真紅に変化し、体中に銀色の刻印が浮かび上がった姿へと変化した。

忍「何だ！その形態は！！」

光の柱が硝子のように砕け散ると同時に、統夜が目に入力始めた瞬間、忍にとつともない威圧感を与えた。これを見た忍は驚きを隠せずにいた。

忍「ま、まさか・・・霸王色の覇気にまで目覚めさせるとは・・・」

統夜「ああ・・・吸血鬼の始祖と煌きの天使の力でお前の憎しみを破壊する！！」

忍「戯言を！！」

忍は両脚に妖力を収束させ、速さに変換させ移動し攻撃を仕掛けたが、統夜は忍の速さを上回る機動性で回避し・・・

統夜「せいおうは星凰破！！」

なのはのスターライトブレイカーを応用したのか、右手に魔力を収束させ、忍が立っている所の地面に叩きつけ無数の光の砲撃を降らせ直撃させた。

忍「ぐっ・・・俺が速さで劣っているだ・・・何故だ・・・何故・・・」

統夜「まだ分からないのか！！お前の心が弱く・・・迷っているからだ！！」

お互い妖力を右拳に収束させ、拳のぶつかり合いを始めたが、忍の拳が負け、前へ吹き飛ばされた。

吸血鬼より遥かに強い力を持つ真祖では吸血鬼の力を持つ忍には厳しいものだった。

忍「何故こうも違う・・・」

統夜「実験で得た力は強大だが・・・吸血鬼にもランクがあるって事だ・・・」

追撃として高速抜刀術を用いた次元斬で忍を何度も切り裂いた。

その後、アドヴァンスフューラーを取り出し、レイヴ式の魔法陣を前方へ展開し、魔力を収束し始めた。

統夜「響け・・・終焉の笛・・・ラグナロク・ブラスト！」

幼馴染であるはやての十八番であるラグナロクを放った後、無数の砲撃へ拡散し、忍に連続で当たるように直撃させた。

忍は高速抜刀術や魔法を受けてボロボロになっていた。

忍「ぐ・・・クソオオオオ！！」

統夜「お前は仲間を作らないと同時に絆を否定し・・・憎悪が暴走しているお前では勝てん・・・そして・・・」

バビロニアの切っ先を忍に向け・・・

統夜「憎しみと過去に囚われているお前に・・・解放形態を扱う資格は無い」

忍「それは貴様が決める事じゃ無い！！」

ファルゼンで斬り掛るが、統夜は下から上へ振るうように切り上げ弾き飛ばした後・・・

統夜「真覇九頭龍！！」

唐竹、袈裟斬り、右薙ぎ、右斬上げ、逆風、左斬上げ、左薙ぎ、逆

袈裟、刺突の9方向同時の超高速の斬撃を浴びせた。

忍「俺は・・・負けて・・・たまるか・・・お前を殺すまでは・・・」

統夜の剣技を受けてもまだ立っていた。

それを見た統夜は、バビロニアを腰に納め、戦闘機が描かれたカードであるアドヴァンスライザーを取り出し、アドヴァンスバツクルの挿入口の中に入れ召喚した。

統夜「紅神・・・メサイアの可能性を見せてやる・・・アドヴァンスライザー・・・ドッキング！」
アドヴァンスライザー（了解）

本体、ライトウイング、レフトウイングの三つのパーツに分離され、両肩にライトウイングとレフトウイング、背中に翼が邪魔にならないうように本体とドッキングした。

統夜「人と人が分かり合う・・・エクストリームオーシャンシステム起動！！」

バリアジャケットが淡い翠色の光に包まれた蒼に変化し、周りから粒子が出ていた。

忍「そんな世迷言・・・俺は聞かん！！」

居合の構えをした後神速で駆け抜け始めた。

統夜「なら俺が分からせてやる！！」

刹那で駆け抜け、忍とぶつかり合い、光に包まれた。
光のせいか真つ白な空間になった。

統夜「あそこにいるのは・・・小さい紅神か？」

白い空間に忍を幼くした少年が一人で体操座りしていた。

誰とも関わりたくないような感じだった。

それを見た統夜は近づき、しゃがみ込んで少年に話しかけた。

統夜「どうしたんだ？」

「桐葉ちゃんかが死んだ・・・悪いのは・・・統夜とイグニスという人じゃなく・・・僕達を拉致し実験した奴ら・・・」

統夜「分かっても・・・実験を始めた理由である二人も許せなかった・・・強大な力があつた故に・・・だけどね・・・」

穏やかな口調で少年に言い聞かせていた。

統夜「それが原因で閉じこもっちゃ駄目だよ。仲間を作り・・・絆を結び・・・分かり合える事を考えなきゃ・・・」

「でも・・・」

統夜「一人で背負い過ぎると・・・自分が自分でいられなくなっちゃうよ・・・俺の仲間も辛い事を味わい・・・絆と想いを知ったから乗り越えた・・・」

「・・・」

統夜「自分の足で立ち上がり・・・乗り越え・・・変えて見せなくちゃ」

統夜の言葉が響いたのか少年は体操座りを止めて、涙が流れている顔を上げた。

「僕に・・・出来るの？」

統夜「出来るさ。やりたいという言葉があれば充分さ」

優しく微笑んで答えた。

「ありがとう・・・お兄さん・・・僕・・・大切な事を忘れてた・・・
・本当にありがとう」

少年は礼を言った後、真っ白な空間が解除され、現実世界へ戻った。

一方忍は白い空間で統夜の今までの人生を垣間見ていた。

ソルジャー時代や地球と月の戦い、セントクルセイダーズとの戦い等を・・・

忍「あいつは・・・仲間や大切なものの為に強くなっていたのか・・・
・それなのに・・・俺は・・・」

怒りと憎しみに負けた自分を悔んでいたのか涙を流していた。

忍「あいつを一方的に恨み・・・憎んだ・・・ただの逆恨みだ・・・
だが・・・今からでも変わっていける筈だ・・・俺なりのやり方で」

心の中で本当に大切なものを徐々に思い出しながら現実世界へ戻った。

忍「今の現象は・・・」

統夜「精神を共鳴させる力を持つ・・・エクストリームオーシャン
システムの力だ・・・」

忍「俺は逃げていたのかもしいないな・・・お前かイグニスに憎しみをぶつけたかった・・・俺はお前の事を知った・・・大切なものを守る為に力を振るい・・・力の暴走で生んだ悲劇も・・・俺じゃ背負いきれないぐらいのものを背負っているんだな」

二人は鏝競り合いの状態で話し合っていた。

その後、二人はバツクして離れた。

統夜「ん・・・バビロニアが光っている・・・」

バビロニア（モード形態がリリースされました。新たな形態を呼んでください。モード・エアと・・・）

統夜「・・・モード・エア!!!」

長剣から形状が円柱状の刀身を持つ突撃槍のような形状の剣に変化した。

統夜「槍？いや・・・剣か？」

バビロニア（この形態は世界を切り裂く剣です。今のマスターに相応しい剣・・・）

統夜「エア・・・」

エアの刀身が回転し始めていた。

忍「それが真の姿か・・・」

統夜「そのようだな・・・」

忍「・・・俺から戦いを仕掛けて来たんだ・・・最後までやり通すのが流儀・・・最後の一撃で決着を着けようぜ・・・」

統夜もそれを考えて、決闘は最後までやり遂げる事に同意した。

二人はそれぞれ自分の持つ五気の力を解放し始めた。力と力がぶつ

かり合っているのか大地が揺れていた。

統夜はアドヴァンスフォンのEアイコンを押し、忍はブラックドライバーのベルト部の右側下部にある特殊装備のメダライズケースから特殊なメダルであるフォースメダルを取り出し、ネクサスの右側上部にメダル挿入口にフォースメダルを挿入し、ファルゼンを斬艦刀に変えた。

『Exceed Drive』

二つのデバイスから声が聞こえ始め、バビロニアとファルゼンの刀身に五気が収束された。

バビロニアの刀身は超高速回転し、ファルゼンの刀身は光っていた。

統夜「エヌマエリシユ・シャイニングブラスト!!!」

忍「星薙の太刀!!!」

二人の斬撃が一斉に放たれ、ぶつかり合い始めた。

統夜「はあああああ!!!」

忍「うおおおお!!!」

最初は互角だったが、統夜が押し始めた。

統夜「紅神・・・強さは身体能力や五気、特殊能力だけではない・・・想いと心の強さも必要だ」

忍「想いと心の強さ・・・」

統夜「・・・何の為に力を振るうのか考える・・・受け入れる事は弱さじゃ無い・・・そうすれば・・・桐葉は笑顔になると思っぜ」

統夜の斬撃が段々と押し始め、忍を飲み込んだ。

統夜の攻撃に飲み込まれた忍は何かを思い出したのか笑みを浮かべた後、意識が途切れてしまった。

青と白の空間に忍は横になっていた。

気が付いた忍は周りを見回すと、目の前に桐葉がいた。

桐葉「しーちゃん……」

忍「桐葉……」

桐葉「やっと僕の声が聞こえたんだね」

忍「ああ……何処かの馬鹿ソルジャーのお陰でな」

やっと届いたかのように言う桐葉に対し、ため息混じりで言った。
忍の内心は変わって複雑な感じだった。

桐葉「これなら……しーちゃんは大丈夫だね」

忍「桐葉？どういう事だ？」

桐葉「今のしーちゃんなら……仲間と一緒に『明日』が掴めそう
だなんて」

忍「仲間と一緒に……明日が掴めそう……か……」

桐葉「もう……しーちゃんは怒りや憎しみで戦わなくていいの……
分かってたんでしょ？そんな事しても意味が無い事に……」

桐葉の言葉に忍は黙ってしまった。

憎しみや怒りのままに統夜やイグニスを逆恨みの復讐を望んでいた
から……

そして、桐葉は忍から離れようとしていた。

忍「ま、待ってくれ！！桐葉！！」

忍が離れないでくれと言っているかのように呼び掛けていた。

桐葉「またね・・・しーちゃん・・・また『明日』・・・」

そう言い終えた後、桐葉の姿は消えた後、忍は現実世界へ引き戻された。

忍が目が覚めるとベッドの中だった。
上半身起き上がると、統夜がいた。

忍「ここは・・・」

統夜「スペースバンガードの一室だ」

忍「スペース・・・バンガード・・・？」

統夜「戦艦の中って事だ」

忍にスペースバンガードの中と答えた後、封印魔法陣の中から一通の手紙を忍に渡した。

忍「これは・・・？」

統夜「研究施設にあったやつだ。中は何も見て無い。そんじゃ・・・」

忍「待て・・・」

そう言つて部屋から出ようとしたが、忍に呼び止められた。

統夜「何だ？」

忍「万が一・・・貴様の力が暴走した時は・・・噛み砕く・・・覚えておけ・・・」

統夜「逆恨み狼から卒業してそれか・・・覚えておくぜ・・・」

部屋から出て行くと華琳とギルシア、レーティア、ジャンヌの三人がいた。

ギルシア「お前とあいつ・・・吹っ切れたな・・・」

統夜「そうか？」

レーティア「怒りと憎しみを壊したみたいね」

リル「あう〜」

ジャンヌ「これからどうなるのかな？」

統夜「さあな・・・」

華琳「こっちは冷や冷やしたわ・・・でも・・・生きてて良かったわ」

統夜「ここじゃなんだから・・・ブリッジへ行くぞ」

華琳達にブリッジへ行くように促し、移動した。

忍は手紙を見ると桐葉が自分宛に書いたものだとは確信していた。封を開けるとこう書かれていた。

『しーちゃんへ・・・これを読んでいるという事は僕はこの世にいないかもしれません。訳の分からない研究で実験を受けて辛かったけど、しーちゃんがいたから僕は頑張つて来れた事だけは言えます。実験と研究を考えた人や天川統夜、イグニスを憎んだら駄目だよ。憎しみは憎しみを呼ぶ・・・そして、悲しみが広がるから・・・僕の願いは一つだけ・・・しーちゃんが怒りや憎しみに囚われず明日を・・・未来をこれから出来る仲間と一緒に過ごしてほしい事だけです。さようなら・・・僕が好きだったしーちゃん・・・』

これを読み終えた忍は涙を流していた。

桐葉が望んでいた事が自分を仲間と一緒に、明日と未来を過ごすという事と知らず、ただ怒りと憎しみで仲間との絆を否定し、統夜やイグニス、セントクルセイダースを倒す為に力を入れた事に恥じていた。

忍「う、うう・・・ああ・・・うわあああああ！！！！！」

自分の過ちに対し、泣き叫んでいた。

忍「桐葉・・・本当にゴメン・・・ごめん・・・なさい・・・」

大切にしてくれた桐葉に対して謝罪をしていた。

その頃、研究施設が建っている崖の上に彩華と髪が銀色で見た目がISに出てくる織斑千冬にそのもので、神主が着ているような服を着た女性が見つめていた。

彩華「覚醒しちゃったね・・・真祖・・・」

「・・・」

彩華「で、これからどうするの？シルク」

シルクと呼ばれた女性は目を閉じて、こう答えた。

シルク「あの小僧を見届けるしか無いだろ・・・お前と同じ強い心を持つ小僧を・・・」

それだけ言い終わると二人は立ち去ってしまった。
彩華と一緒にいるシルクは一体何者だろうか・・・

地球へ戻り、スペースバンガードを倉庫の中へ収納し終わると、統夜達は降りた。

統夜「これからどうするんだ？」

忍「今の俺は・・・お前達とは進めない・・・だが・・・」

統夜「だが？」

忍「お前と同じように大切なものを守る為に戦うつもりだ・・・」

統夜「そうか・・・またな・・・」忍

忍「ああ・・・」統夜

第五十九話イメージED『サムライハート』

統夜と華琳、ギルシア、レーティア、ジャンヌの五人と忍は逆方向の道を進んで別れた。

ギルシア「見つかるといいな」

統夜「見つかるさ・・・今の忍なら・・・」

帰りながらそう言った。

翌日になった本拠地寮にて、統夜はレオンから覇気の修行を受けていた。

レオン「覇気を使っていたから少しずつ様になって来ている・・・

休憩しよう」

統夜「はい」

休憩時間に入り、地下訓練施設から上がり、外に出て太陽が照っている青空を眺め始めた。

統夜「昨日は衝撃的だったな・・・」

家に帰るとラバーズや乙女、遊輔、明久、康太から統夜と鮮華の二人が真祖を受け継いでいる事と母親が三大冥王の一人である事を聞いてしまった。

真祖は何とも無かったが、母親に関しては衝撃が大きかった。

統夜「忍・・・お前も頑張れよ・・・これから先・・・辛いかもしれないけど・・・」

とある田舎の村に黒いスーツを着た一人の人物が歩いていた。

一人の人物とは紅神忍で、ある目的の為に赴いていた。

忍「ここか・・・」

無残に窓が割られ、ボロボロの一軒家の前に来て、花束を置き、手を合わせていた。

表札には如月と書かれていた。そう、桐葉が住んでいた場所なのだ。何故ここが桐葉が住んでいた家というのは、手紙に住所が記されていたからだった。

忍「桐葉・・・俺は憎しみと怒りを捨て・・・『黒騎士ネクサス』として戦い続ける・・・苦しみや悲しみを抱えている人達の力になる筈だと俺は信じている・・・」

六つの解放陣とネクサスを手にしてそう口にした。

忍「・・・俺はかなり不器用になったから何を守りたいのかまだ分

からない。でも、君のような悲劇だけは繰り返させたりはしない。時間はまだあるんだ・・・これからゆっくり探していくつもりだ。だから、もしもその時が来たら・・・必ずまたここに来て誓うよ・・・ありがとう・・・そして、いつまでも君のことを忘れない・・・」

今まで忘れていた表情を取り戻したかのように微笑んでいた。

忍「だから・・・天から見守ってくれ・・・」

呟いた後、忍は去って行った。

忍が去った後、桐葉の幻影が現れ、こう告げた。

桐葉『ありがとう。しーちゃん。これからも頑張ってるね』

そう告げた後、風が花束から散った花弁と共に上へ舞った。

忍の新たな道を祝福するかのように・・・

第五十九話 『目覚める！！煌きの天使と真祖、霸王の素質！！』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

ダイチ「やつと終わったな・・・統夜と忍の戦い・・・」

ダイチ「いよいよ待ちに待った修学旅行！！どんなものがあるのかはお楽しみに！！」

ダイチ「次回は『旅行の始まりはカットビングだぜ！！』 テイクオフ」

デバイス設定9（前書き）

バビロニアの詳細です。

デバイス設定9

デバイス：バビロニア（インテリジェントデバイス）

形状：刀身が白く鍔が真紅、柄が金色の長剣

待機状態：蒼い指輪

搭載システム：マナドレインシステム、アブソリュートホーミングシステム、エクシードリンクシステム搭載。フォーム変化あり

備考：忍が実験を受けていた研究所に封印されていたインテリジェントデバイス。

ファルゼンと同時期に開発され、未完成であったメサイアとの連携として想定されたものであったが、忍の脱走時にメサイアの開発は中断され、バビロニアのみが残された。

研究所は壊滅し、そのまま放置されたが、統夜が偶然発見し、入手した。

メサイアを持つ者にしか起動できないようにプロテクトが掛っている。

「マナドレインシステム」とはバビロニアの刀身に相手の五気を吸収し、強烈な一撃にして返すか自分の力に蓄えるシステム。吸収時の刀身は、禍々しい真紅の光を放つ。

「アブソリュートホーミングシステム」とはマナドレインシステムで吸収した相手の五気を自分用の五気に変化させ、その攻撃は空間をねじ曲げて相手に当たるまで追跡し続けるシステム。

「エクシードリンクシステム」とはメサイアのエクシードドライブシステムをバビロニア自体に反映できるようにするシステム。

管制人格は女性で統夜に忠実な性格

フォーム変化は以下の通りである。

基本形態である長剣『ナイトソード』

の基本形態であり、起動時は必ずこの状態である。
ファルゼンと同じく刀身には特殊合金、柄と鐔の部分にはかなりの
硬度を誇る特殊フレームを使用しており、かなり頑丈且つ壊れにく
い仕様になっている。

特殊形態「エア」

形状が円柱状の刀身を持つ突撃槍のような形状の剣に変化する。
刀身を回転させ空間切断する「エヌマエリシユ」を放つ事が出来る。
使用するには技量が必要で、扱える人物は少ない。

第六十話『旅行の始まりはカットニングだぜ!』(前書き)

統夜「明かされちゃったな・・・」

鮮華「ですね」

ふっふっふっふ・・・貴方達の真実はまだありますよ〜兄妹さん。

ギルシア「気になるな。HERO・S EPISODE第六十話始まるぞ」

第六十話 『旅行の始まりはカットピングだぜ!!』

第六十話 『旅行の始まりはカットピングだぜ!!』

芹沢教会にある部屋のベッドで統夜の幼馴染の一人である文乃が眠っていた。

すると・・・

ドクンッ!

謎の鼓動が聞こえたのか突然起き始めた。

文乃「最近・・・身体がおかしくなってるわね・・・うぐっ!!・・・
はあ・・・はあ・・・」

鼓動のせいかわ胸を手で押さえ、額から汗が出て来た。

一瞬だが、文乃の瞳が真紅に染まり、瞳孔が縦になっていた。

文乃「んくっ・・・ん・・・はあ・・・はあ・・・」

瞳が元の色に戻り、症状が収まった後、シャワーを浴びる為、浴室へ移動した。

寝巻を脱ぎ、シャワーを浴び汗を流し始めた。

文乃「（私の身体・・・どうなっているの?）」

両腕で自分を抱きしめるように、両肩を掴んでいた。
自分が人間じゃなくなるみたい・・・

文乃「（まだ・・・私は人間・・・大丈夫・・・）」

シャワーを浴び終えた後、制服に着替え、朝食を済ませて、旅行用のバッグを手にして出掛けた。

文乃「真実を聞いた統夜と鮮華は・・・これからどうするのかしら・・・」

自分の幼馴染の事を思い浮かべながら道を歩いていると、袖なしの胸元と背中が開いた黒いドレスを着て、地面へ引きずる程の黒く輝く2mあるぐらいある長さの髪をした女性が突然近づいてきた。

「ふむ・・・吸血鬼の反応がしたが・・・気のせいか・・・」

文乃を見た女性は手を顎に当ててそう呟いていた。

文乃「アンタは・・・？」

「通りすがりの吸血鬼だ・・・気にするな」

文乃「今のはどういう意味・・・？」

「言葉通り・・・お前から吸血鬼の力が反応があったからだ。だが今は治まっている」

瞳を閉じながら淡々と答えていた。

それを聞いた文乃は少し戸惑った表情で混乱していた。

文乃「わ、私は・・・人間よ！」

アーカード「今は・・・な・・・だが・・・いずれ変質する・・・」

女性はそれだけ言って去って行った。

文乃「何なのよ！！あの人・・・私に吸血鬼の力なんてある訳ないじゃない！！何かの間違いよ！！」

女性が去った後、何かの間違いと思い憤慨しながら集合場所へ移動した。

この後に何処からかある青年の叫び声が聞こえたのは言うまでも無かった。

その頃、集合場所である月人居住区の空港には文月バーベナ学園の生徒が集まっていた。

今回の修学旅行は、神界と魔界、月のスフィア王国の三つに分担され、それぞれのクラスは行く場所が違う。

統夜達Aクラスは月のスフィア王国である為、月人居住区の空港が集合場所なのだ。神界と魔界に行くクラスは学園に集合している。二泊三日でそれぞれの世界に留まり、様々な観光地や街を見回ったりしてエンジョイするのだ。

達哉「あいつとはやて、カナはまだ来てないか・・・」

遊輔「何をやってるんだか・・・鮮華ちゃんは何か知らない？」

鮮華「兄さんとはやてさん、カナさんですか？兄さんのベッドに侵入してまだ眠ってましたから・・・邪魔したら悪いので、起こさずに先に行きました」

これを聞いた遊輔と達哉は「ああ・・・いつもの事か・・・」と思いき、呆れていた。

千世「何か・・・同居している人って有利に感じるわね・・・」

希「にゃあ・・・ずるい・・・」

エステル「羨まし・・・いやいや・・・不純です！！」

優子「許すまじ……」

秀吉「じゃな……」

メアリ「一回燃やしてみようかしら……」

統夜「ラバーズの皆さんは黒いオーラを纏っていた。

すると、文乃が走ってこちらへ来た。

文乃「おはよう。皆」

千世「おはよう。文乃。聞いて……はやてとカナが……」

またベッドの中に寝ていた事を文乃に教えたら、黒いオーラを纏ったのは言うまでも無かった。

ダイチ「怖いな……」

エリー「うん……」

フィーナ「これは……それほど好きという事で解釈すればいいのかしら？」

達哉「それがいいと思うよ」

遊輔「本当に凄いな」

黒いオーラを纏った統夜「ラバーズを見ていた遊輔達は苦笑いするしかなかった。

天川家では統夜とはやて、カナの三人は起きた後、大慌てして朝食を済ませ、荷物を持って三人一斉に家から飛び出した。

統夜「つーか何で今日も二人揃って俺のベッドの中にいた訳!？」

はやて「一人で寝るのは寂しいし……」

カナ「凄く休めるから」

はやて「これは日常になつてるんやから慣れないとあかんよ？」
統夜「一人で寝させないつもりかよ……」

はやてとカナの二人の言葉に「はぁ……」とため息をついてしまった。

統夜「鍵掛けても入ってくるだろ？」

はやて「当たり前やん」

カナ「当たり前だよ」

二人は「何を言ってるの？」的な事を言つて答えた。

それを聞いた統夜は一人で寝かせてくれないんだろうなという事に嘆いていた。

はやて「今日は修学旅行や。テンション上げていかな……」

統夜「テンションを下げた本人が言う事かね……」

何も言つまいと歩いていると……

マリオ「よう。統夜」

マリオが統夜に声を掛けた。

マリオの側にかつて共に戦つたりユウケンドーとソロ、マリオ達の世界の明久、マリオ達の世界のムツリーニ、始めて見る髪が膝まで伸びていて色は青色、目も青色で服装は上は東方の文の服をベースにアレンジした感じで腋や肩が露出しており、東方の霊夢の様に白い袖を虹色の紐で括り付け、下はミニスカートで青い生地の上に雪の結晶が描かれて、首に白いマフラーが巻いている女性がいた。

統夜「あの時以来だな」

ソロ「そうだな」

リュウケンドー「お前ら仲がいいな」

統夜「(ツツコミしたいが・・・いっか・・・)で・・・始めて見る彼女は？」

マリオ「彼女はチルノだ。氷の妖精だ」

チルノ「宜しくね」

チルノと呼ばれた女性は統夜達に挨拶をした。

その後、統夜とはやて、カナの三人はチルノに簡単な自己紹介を終え、歩き始めた。

統夜「マリオ達も月へ？」

マリオ「ああ。異世界などに行った事はあるが月・・・スフィア王国ははじめてだからな」

はやて「明久君とムツツリーニ君は変わってるな・・・」

はやてが明久とムツツリーニを見ると二人の髪型が全て逆立っており、黒いバイザーを掛けた格好になっていた。

マリオ「こっちの明久と康太と間違っ可能性があるからな・・・」

統夜「それは確かに・・・呼び方も変えよう・・・明久はアッキー、康太はムツで・・・」

即考えた呼び方をマリオは採用した。

アッキー「まあ・・・悪く無いね・・・」

ムツ「・・・同じく・・・」

本人も反対はせず普通に受け入れた。

マリオ「お前は・・・あれから・・・変わったか？」

統夜「ああ・・・真実を知り・・・答えを見出した・・・」

目を閉じて答えるとマリオは笑みを浮かべた。

マリオ「お前なら・・・強くなれる・・・そう信じている」

信じているかのようにそう答えた。
すると・・・

「月人居住区にある空港は知らないか？」

男の声が聞こえ、統夜が振り向くと黒髪に空色の瞳をした青年と青年の右腕にくっ付いている緑髪の長髪の美女、青年の左腕にくっ付いている金髪でリインに似ている少女の三人がいた。
これを見た統夜とマリオ、リュウケンドー、ソロは・・・

統夜、マリオ、リュウケンドー、ソロ「仲いいな」

統夜は恋人関係だと分かっていたながらそう言い、統夜以外の三人は素でそれぞれ答えていた。

「一人だけ分かりきっているが・・・他は鈍感と来たな。そう思わないか？蒼穹の死神？」

緑髪の女性が笑みを浮かべ統夜にそう答えた。

統夜の通り名を知っている事に対して、本人は普通に対応していた。

統夜「まあ・・・そうですね・・・」

はやて「有名になったな・・・」

統夜「裏の仕事関連をしている人限定だけどね・・・」

ヒソヒソと話していた。

「アリス・・・話が進まん。知ってるなら教えてくれないか？」

統夜「あ、ああ・・・アンタらは・・・裏の人間か？」

ソラ「ああ。何かの縁だ。俺は天道ソラだ」

アリス「私は天道アリスだ。よろしく頼むぞ」

リリス「まだ結婚してないんですから・・・アリスさん・・・あ、私はリリスです。よろしく願います」

ソラ達は統夜達に自己紹介をした後はやて達も自己紹介していた。

ソラ「悪いな。俺達はここら辺ははじめてでな」

統夜「困った事はお互い様って言うじゃない？おっ・・・ここです」

しばらくして月人の居住区の空港へ着いた。

ソラ「俺達はこれで」

リリス「ありがとうございます」

マリオ「またな」

ソラ達三人とマリオ一行は統夜とはやて、カナと別れた。

その後、統夜達は集合場所へ移動し、着くとラバーズからお話（制裁無し）をされたのは言うまでも無かった。

遊輔「ギリギリだ・・・統夜」

達哉「俺達がどんな思いで待ったか・・・」

ダイチ「恐怖だったぞ・・・」

明久「生きた心地がしなかった・・・」

雄二「全くだ……」
康太「……………そうだな……」

男性陣は統夜ラブズの黒いオーラに参っていたようだ。

西村「これで揃ったな。天川に八神、カナ……お前達が最後だ」

統夜「おはようございます。ガトー先生」

はやて「おはようございます。黒ひげ先生」

カナ「おはようございます。幻魔王先生」

統夜達はやって来た鉄人に挨拶をしたが、額に青筋を浮かべていた。

西村「天川、八神、カナ！お前達は俺を怒らせないと気が済まんのか！！」

文乃、優子、メアリ「すみません。すみません。すみません」

中の人ネタを入れた呼び方が不味かったのか鉄人は怒鳴った。

鉄人に文乃と優子、メアリの三人は頭を下げて謝っていた。

瑞希「私なら……スネーク先生と言いますが……」

美波「それは不味いわよ……本当に……」

中の人ネタで挨拶をしようとしている人物がいたのは言うまでも無かった。

そして点呼を取り、注意事項等を言い終えた後、クラス一同はシャトルの中へ乗り始めた。

しばらくするとシャトルは発進した。

統夜「楽しみだな……って俺と遊輔、達哉、ダイチ、明久、康太ははじめてじゃないんだっただな」

フィーナ「統夜と達哉、遊輔、ダイチ、零斗先輩は自由に行き来出来て、明久と康太は三人の付き添いが無ければ無理だけど・・・」

統夜と遊輔、達哉、零斗、ダイチ、たけしの六人はユルゲンを倒した功績によって地球と月を行き来する権利があるのだ。

転移魔法を使っても特殊な許可証を見せれば、普通にスフィア王国を見回る事が出来るのだ。

明久と康太の二人は活躍してないので、統夜達の付き添いが必要になる。

メアリ「アンタが・・・本当に羨ましいわ」

メアリが統夜の活躍を羨ましがっていた。

エステル「統夜は地球と月からは英雄と見られていますからね」

シャトルの中で話し合ったり、寝るなどの行動をとっていた。

瑞希「本当に楽しみです」

美波「月へ行けるって滅多にしか無いからね」

早苗「未知的な所ですからね」

明久ラバーズはスフィア王国に対してワクワクしていた。

シャロ「楽しみだね」

ネロ「実際に行くから緊張しちゃうな」

エリー「はい」

コーデリア「月にはどんなものがあるのか楽しみだわ」

ミルキィホームズもワクワクしていた。

ソラサイド

アリス「ソラ・・・スファイア王国へ着いたらどうする？」

ソラ「とりあえず宿泊先のホテルに荷物を置いてから考える」

リリス「置いたら街へショッピングしませんか？」

シャトルに乗り、ジャンプを読んでいるソラにアリスとリリスは引
つ付き状態だった。

ソラ「そうだな。はじめて来る国だ。それもいいかもしれんな」

リリス「宇宙空間に入りましたよ」

アリス「月へ行くんだから当然だろ」

窓から宇宙を見てはしゃぐリリスにアリスは当たり前のように答え
た。

ソラ「楽しい旅行になるといいな」

アリス「私とソラの新婚旅行がな」

リリス「私を忘れてますよ！！てかいつからアリスさんとソラ様の
新婚旅行になってるんですか！？」

アリス「ああ・・・お前という『おまけ』がいたのを忘れてた・・・
それは旅行が始まった時からだ」

涙目になっているリリスのツッコミの叫びにアリスが黒い笑みを浮
かべ勝ち誇ったかのように答えた。

ソラは我関せずという感じでジャンプを読む事に集中していた。

マリオサイド

マリオ「楽しみだな」

アッキー「そうですね」

ムツ「……………」

リュウケンドー「月の王国って楽しみだ」

ソロ「だな」

チルノ「どんな世界なのか楽しみ」

マリオ達はスフィア王国がどんなのか楽しみにしていた。

「マー君も楽しみにしてるの？」

「はじめてになるかもしれんな……月の王国へ行く事が……」

金髪の青年と文乃に会った女性が話し掛けて来た。

マリオ「はい。銀次先輩とアーカードさんもそうなんですか？」

銀次と呼ばれた青年とアーカードと呼ばれた女性に聞いてみた。

アーカードはふっと笑みを浮かべ当然のようにこう答えた。

アーカード「ああ。銀次との新婚旅行の予行演習を兼ねてな……」

銀次「僕は結婚してないってばああああ！！！！」

アーカードに引っ付かれた状態の銀次君は叫びながらツッコミをいれていた。

マリオ「大変ですね……」

苦笑しながら珈琲を飲んで外を見ていた。

リュウケンドー「地球と月を行き来するシャトルっていいよね」
アッキー「先生。料金っていくらぐらい掛りました？」
マリオ「一人につき・・・九万ぐらいだったかな」

マリオの言葉にマリオ達の世界の明久もといアッキーはブツと吹き出してしまった。

アッキー以外は当然の額だなと呟いていた。

ソロ「地球と月って結構距離あるからな」

マリオ「母なる地球から旅立ち月に住む・・・中々いいものだな」
リュウケンドー「家族みたいだな。地球が母、月が息子という感じ
で・・・」

テンションが上がっているのか嬉しそうにリュウケンドーは言った。
マリオ達も嬉しそうに微笑んでいた。

その中でアーカードは手に顎を当てて何かを考えていた。

アーカード「(朝・・・あの娘(文乃)から発した吸血鬼に近い気
配は気のせいだったのか・・・?)」

銀次「アーカード?どうかした?」

文乃について何かを考えていると銀次が声を掛けて来た。

アーカード「何でも無いぞ。銀次。月へ着いたらどうする?」

銀次「ん・・・まだ決めて無いや・・・」

普段通りに答え、月で何をするかを話していた。

チルノ「月って鈴仙や永琳、輝夜のような人とかいるのかな?」

アッキー「それは無いと思うよ……」
ムツ「……無いな……」

チルノの発言にアッキーとムツはツッコんだ。

知り合いなのか分からないけど、月に住んでいる普通の人間です。

統夜サイド

明久「シャトルで見る宇宙もいいよね」

統夜「スペースバンガードからでも見た事があるだろ……」

外を眺めている明久に冷ややかなツッコミを入れていた。

ダイチ「月と言ったら兎……」

遊輔「バニーちゃんとか言うなよ……分かりきってるから……」

統夜「バニー……な……エルキュールにさせりゃいいじゃん……」

ダイチ「エリーにしたいが……はやてや文乃、メアリ、秀吉、なのは、フェイト、瑞希のような胸の大きい人に着せたいな」

ダイチの発言に統夜と遊輔は呆れていた。

スケベなのは分かっていたが、ここまでレベルアップしている事も予想はしていた。

ダイチの発言を聞いていたエリーは黒いオーラを纏っていた。

エリー「……」

シャロ「え、エリーちゃん……落ち着いて……」

シャロが落ち着かせていた。

統夜「まあ……見て見たいとは思うが……手を出す気は無いんだろ？」

ダイチ「エリー以外の人には出さないよ。お前や遊輔、明久のようにフラグを立てない限り……」

統夜「……」

ダイチの言葉で統夜と遊輔、明久の心にグサつときたようだ。本当の事である為、統夜達三人は反論が出来なかった。

達哉「色々な事があつたな……」

統夜「ああ……」

明久「そうだね」

ソルジャー時代での因縁であるセイラを倒して、終わらせたがまだ敵は残っている。

デューク率いる修羅や未知なる世界である冥界の使者であるマガキ達混沌、イグニスが控えている。

統夜「今はよ……修学旅行を楽しもうぜ」

達哉「そうだな」

明久「だね」

ふっと笑みを浮かべそう答えた。

文乃「……」

話している統夜をじっと見つめ、アーカードが口にしてた事を思い出していた。

メアリ「文乃。どうかした？」

文乃「別に……」

メアリ「統夜と鮮華が真祖で三大冥王の力を受け継いでいるって事なら……受け入れなさい……聞いた私でさえ驚いたもの……真祖は伝説な存在としか知らなかったから……」

文乃に対しメアリはそう言った。

文乃「そんなんじゃないわよ。それはもう受け入れたわ……」

メアリ「ならいいけど……これだけは言っておくわ」

文乃「何？」

メアリ「一人で悩み続けず……私達を頼りなさい。私達……幼馴染であり……仲間でしょ？」

文乃「ええ……」

一人で悩んでいるであろう文乃に対し、メアリが優しく言うと、安心したのか表情が少し柔らかくなった。

鮮華「……」

はやて「母親の事が一番堪えたんか？」

ポーっとしていた鮮華に声を掛けていた。

鮮華「い、いえ……」

はやて「無理せんでええよ。私だって驚いたもん……普通の吸血鬼じゃなく……普通より凌駕された強さを誇る真祖の吸血鬼はな
あ……」

鮮華がポーっとしている理由が母親の真実と真祖の血を引いている事を指摘していた。

無理も無い。真祖は強大な力を秘めており、鍛えれば鍛えるほど強さ徐々に伸びて行く。死神や墮天使、妖怪のような異種族にも同じ事が言える。

はやて「私もな・・・光の眷属である天使の力に目覚めた時は驚いた・・・何で自分にこんな力があつたんやと・・・でもな・・・受け入れ・・・大切な人を守る為に振るうと決めた・・・」

鮮華「はやてさん・・・」

はやて「鮮華ちゃんも・・・統夜みたいな答えと『信念』・・・見つかるとええな」

鮮華「はい」

はやては微笑んでアドバイスし、鮮華は笑顔で答えた。

はやて「統夜・・・変わったなあ・・・」

千世「それは私達のお陰かもしれないわね」

はやて「大切なものが出来たから・・・やる？」

統夜が変わった理由を千世は自分達統夜ラブズのお陰である事を言い、はやては大切なものがあると聞いてみた。

希「うん・・・悲劇で仲間を失った統夜は・・・憎しみがあり、一人で背負っていたけど・・・私達と出会って変わり始め・・・」
絆「というものを知った」

千世の代わりに希が答えた。

はやて「絆が出来たから大切なものを守る・・・か・・・」

千世「普通なら人と拒絶してるけどね・・・悲惨な形で裏切られたんだし・・・」

希「けど・・・統夜は立ち直れた・・・一人では限界がある事に・・・」

二人の言葉を聞いてはやてはその通りやなと頷いていた。確かに統夜一人だけではセイントクルセイダーズを崩壊させる事は無く、ここまで来ていないのは確かだろう。

忍との戦いで、全ての力と剣を賭して遊輔や達哉達という仲間とはやて達統夜ラバーズという大切なものを守る為、世界の歪みや憎しみを破壊する為に戦うという答を見出し、解放形態を受け入れた。

はやて「エステルちゃん。スフィア王国の案内頼むわ」

エステル「ええ。任せてください。フィーナ様も一緒に行きます？」
フィーナ「構わないわよ」

後ろの席にいたエステルとフィーナに問い掛けた所、笑顔で了承した。

しばらく時間が経ち、シャトルはスフィア王国にある港へ着艦した。

シャトルから出た後、港の前へ移動し、それぞれのクラスは集合して西村と高橋女史の諸注意を言い終えた後解散となった。

統夜「さあ・・・って・・・何処から行く？」

エステル「そうですね・・・街を見回るのはどうですか？」

統夜「そうするか・・・見回って気になった所を行けばいいし」

統夜と統夜ラバーズ、鮮華、フェイト、遊輔、遊輔ラバーズ、達哉、達哉ラバーズ、明久、明久ラバーズが集まっていた。

フィーナ「そうね・・・その方がいいね」

フェイト「誰かがこっちに来てるよ」

フェイトが見た先の視線にはマリオ達が映っていた。

マリオ達が統夜達の方へ近寄ると、一緒に行動して良いかと聞かれ、即答でOKを出した。

はじめて見る銀次とアーカードに対し、統夜達は自己紹介し街へ歩き出した。

マリオ「人工的で街は変わらないんだな」

統夜「確かに・・・コロニーの月版って感じがするな。よく考えれば」

フェイト「そこでガンダムネタ出すんだ・・・」

はやて「スフィア王国に世話なりっぱなしやもんな？統夜」

統夜「まあな・・・セイクリッドファンクにスペースバンガード、マウンテンサイクル・・・」

リュウケンドー「未知的な所っぽいな」

ソロ「スフィア王国って意外と暖かいね」

統夜「地球とは違い・・・温度や重力、太陽光を調整する施設があるんだ。重力は1Gに設定されている」

ソロ「なるほど・・・人工的か・・・」

スフィア王国がどのような所なのか、環境をどのようにしているのかをソロに簡潔に答えた。

遊輔「そこら辺は詳しくて街は詳しく無いのはな・・・」

なのは「にはは・・・」

蓮華「そこら辺は基本的な事で大事な事なのは分かるけど・・・」

遊輔と遊輔ラバーズから呆れられていた。

統夜「お前だつて知らないじゃん」

遊輔と遊輔ラバースにジト目で返した。

達哉「俺は少々知ってるけどさ・・・」

統夜「お前は次期月王なんだから・・・知らなくちゃいかなだろ・・・」

銀次「少し複雑だね」

スフィア王国は大変だなと銀次はそう思っていた。

達哉「水はスフィア王国では非常に高価なもので・・・銀の百分の一で取引きされ、食用の魚介類は地球より高価なものとして取引されてるんだ」

チルノ「地球より厳しいんだね」

マリオ「水や食用の魚介類は当たり前のようにある地球とは違い・・・

・月は作りださなくちゃいけないから・・・大変だな」

月の事を知らないマリオ達は厳しい環境の中で頑張ってるんだなと思ひ、納得していた。

統夜「農業および畜産プラントによって米や小麦のような食料の生産が行われている施設はあるが・・・このドームとは違う王都ドームに再現されている小さな川を除けば地球に存在する自然な海や川が無いため、水産資源の確保は非常に困難なんだよね」

アッキー「ドームによってそれぞれある所は違うんだね」

鮮華「そうですね。これは私達地球人は学校で習っていますから・・・」

アッキーの問いに鮮華は冷静に答えた。

鮮華達地球人？（中には真祖の血を引いている者や死神、妖怪の血を引く人達はあるが気にしないように）にとっては当たり前前の知識である。

マリオ達異世界から来た人達にとっては驚愕なものになる。

アーカード「様々な努力をしたものだ・・・」

フィーナ「だけど・・・戦争という悲劇が起きました・・・数百年前に地球と月の間に起きたオイディプス戦争が・・・」

マリオ「戦争か・・・」

エステル「戦争の結果は両国ともに相当の損害を被り・・・以降・・・

・地球と月は冷え切った状態が続きました・・・」

ムツ「・・・壮絶なものだな・・・」

リュウケンドー「そうだな・・・」

オイディプス戦争の悲惨さにマリオ達は悲しそうな表情になっていた。

フィーナ「ですが・・・統夜と達哉を始めとした人達のお陰で月と地球の絆が再生されました」

フィーナの言葉で統夜と遊輔、達哉、ダイチの四人は照れくさそうに手で後頭部を掻いていた。

マリオ「流石統夜だな」

リュウケンドー「遊輔も達哉、ダイチも凄いぜ」

統夜「ああ。ここにはいない零斗とたけしも頑張ったがな・・・」

マリオとリュウケンドーは統夜達の行動に称賛していた。

時間が経ち、街を回り終えていた頃……

フィーナ「どうだったかしら？」

統夜「ああ。大体把握できた」

アドヴァンスフォンを手にしながら何処へ行くのかを入力していた。

はやて「几帳面やな。ありがとな。フィーナちゃん」

フィーナ「気にしなくていいわ。はやて」

街が分かったのかはやてはフィーナに礼を言っていた。

その中、文乃はアーカードを見つめていた。

統夜「どうかしたか？」

文乃「何でも無いわよ」

素っ気ない態度で答え終えた瞬間……

ドクンッ！

文乃「うぐ……あ……うぐっ……あ……」

突然の鼓動で、胸を手で押さえて、倒れてしまった。

統夜「文乃！？おいっ!!」

はやて「文乃ちゃん!!」

アーカード「……」

倒れた文乃に呼び掛けている所をアーカードはジッと静かに見つめていた。

銀次「アーカード？」

アーカード「いや・・・何でも無い・・・（吸血鬼の血を引く兄妹と一緒にいる影響で『吸血鬼』の力が反応したのか・・・）」

それから、文乃を背負い、近くにある公園へ移動し休ませた。

統夜と文乃以外のメンバーは集合場所、マリオ達は集合場所の近くへ移動していた。

しばらくすると文乃が意識を取り戻した。

文乃「ここ・・・は・・・」

統夜「公園だ・・・」

文乃「そう・・・私は・・・」

統夜「胸を押さえて倒れてしまった・・・」

自分が倒れた原因を統夜はそう答えた。

統夜「立てるか？」

文乃「大丈夫よ。一つ聞いていい？」

統夜「何だ？」

文乃「アンタは・・・もし・・・私が人間じゃ無くなったらどうする？」

震えた口調で言う文乃に対し統夜は笑みを浮かべ、手を文乃の頭に置きながらこう言った。

統夜「普通に受け入れ接するさ・・・文乃に人間の心が・・・魂がある」と信じてるから

文乃「統夜・・・」

統夜「立てるか？」

文乃「立てるわよ。馬鹿にしないで」

いつもの文乃に戻った事により統夜は微笑んでいた。

文乃「何微笑んでるのよ！二回死ね！！」

統夜「ははは・・・んじゃ・・・ホテルへ直行するぞ。遊輔から地図が添付されたメールが送られてきたから」

文乃「集合場所へ行かなくていいの？」

統夜「事情は鉄人と高橋女史に話しておいたって書いてあるから大丈夫だ」

統夜と文乃は公園を後にして歩きだした。

文乃「（本当に強いわね・・・だから・・・私はこいつの事が好きになった・・・）」

明久サイド

統夜と文乃を公園に残した一同は集合場所へ戻り、宿泊先のホテルへ向かっていた。

明久「一体何だったのかな・・・」

明久は一人で文乃の異変について考えていた。

発作にしては不明な点があるのは分かっていたが、一瞬だが、何らかの力を感知したのだ。

考えている明久に早苗は声を掛けた。

早苗「恐らく・・・芹沢さんは何らかの手段で吸血鬼のような妖怪

の力があるんだと思います」

瑞希「何故分かるんです……あっ……」

美波「早苗には妖力を持つてるから……感知出来たの？」

早苗「はい。一瞬だけですが……」

早苗が感知出来た理由を把握した瑞希と美波は聞いてみたが、即答で早苗は答えた。

早苗「何か……知りませんか？」

鮮華「……………」

優子「……………」

秀吉「……………」

早苗の問いに鮮華と優子、秀吉の三人は黙ってしまった。

その時、雄二が問い掛ける事を止めさせた。

雄二「成田……その辺にしておけ……楽しい修学旅行で話す事じゃないだろ？」

早苗「す、すみません……」

明久「雄二の言う通りだね。早苗ちゃん。今は楽しくやろう。統夜から連絡があつて芹沢さんと一緒にホテルへ向かつてるってさ」

これを聞いた統夜ラバーズは安堵していた。

メアリ「……………」

はやて「(メアリちゃんも気になるんか?)」

メアリ「(ええ……一瞬だけど文乃から妖力を感知したわ……)

鮮華と優子、秀吉から詳しく教えてもらうしかないわね)」

はやてとメアリの二人は念話で文乃から妖力が感じられた事と何か

を知っている三人について話していた。

明久「本当に意識が戻って良かった……」
雄二「人騒がせにも程があるだろ……鉄人を説得するには苦勞したぞ」

明久「あはは……ごめんごめん」

ジト目で言う雄二に対し明久は苦笑いするしかなかった。
時間が経ち、宿泊先のホテルの前に着き、統夜と文乃の二人と合流した。

文乃「心配掛けたわね……」

合流した文乃は一同に対し謝罪していた。

遊輔「何とかなったな」

統夜「ああ……」

達哉「冷や冷やしたぞ」

その後でマリオ達も合流して来た。

マリオ「災難だったな」

統夜「ああ……だが……発作の原因が分かった」

マリオ「原因？」

統夜「これは推測だが……妖力を一瞬感じた事に関係しているんだと思う……」

文乃の様子について話し合っていた。

統夜自身も何かを感じ取っていたのは言うまでも無かった。

マリオ「まあ・・・いずれ分かるだろ」

リュウケンドー「そうだな」

ソロ「だな。俺達は先に入ってるぜ」

統夜「ああ。ってここに泊まるのか？」

アッキー「そうだよ」

統夜「仲間がいれば何とかなるだろ」

マリオ達は先にホテルの中へ入った。

その後に、ソラとアリス、リリスの三人がやって来た。

統夜「ぐ、偶然だ・・・俺らもここに泊まるんだ」

ソラ「そのようだな。俺達もここに泊まる事になった」

統夜「そ、そうなんだ・・・ハハハハ・・・」

アリス「ソラ。早くチェックインした方がいいぞ」

ソラ「そうだな。じゃあな」

ソラとソララバーズの皆さんは中へ入った。

その後統夜達文月バーベナ学園の生徒達も中へ入り、それぞれの部屋へ移動した。

統夜「ふつかふかだな」

部屋には統夜と遊輔、明久の三人が堪能していた。

明久「もう一人の僕とまた会えるなんて思わなかった・・・」

統夜「あいつ自身も驚いている事だろう」

アッキーと再会した事に驚いていた明久に対し、統夜はアッキーも同じ事を考えていたと答えた。

すると、ドアからコンコンと音がしたので遊輔がドアを開けると統夜ラバーズと鮮華がいた。

遊輔「えっと・・・どうする?」

統夜「ロビーへ移動しようか」

統夜ははやて達を連れロビーへ行くこととしたが、遊輔と明久の二人は出て行くこととしていた。

遊輔「ここで話した方がいいぜ?」

明久「僕達はちょっと出ているよ」

気を利かせたのか二人して部屋から出て行った。

メアリ「・・・鮮華に文乃、優子、秀吉・・・本当の事を教えてくれない?何か知ってるんでしょう?」

文乃「ここは私が言うわ・・・今から三年前の頃だったかしら・・・アンタが行方不明になった時の・・・」

三年前、セイラの策略によってソルジャー壊滅と共に統夜が行方不明になってから数日後の事だった。

鮮華と文乃、優子、秀吉の四人が街へショッピングする為に出掛けていた。

文乃「統夜とはやて・・・この所・・・学校に来ていなかったわね」

鮮華「・・・兄さんの事は私でも分かりませんから・・・」

優子「統夜は一体何をやって学校を休んでるのかしらね?何も聞いていないから・・・」

当時、管理局の魔導師をやっている事を統夜は幼馴染と妹に教えていなかった。

心配を掛けさせたく無かったという理由で……

秀吉「ひよつこりと現れて戻って来るじゃろ」

文乃「そうね……」

秀吉の言葉で文乃と鮮華は一応元気を取り戻した。

その後、四人は洋服屋やショッピングモール等を回り始めた。

時間が経ちショッピングを終え、帰り道を歩いていた。

文乃「楽しかったわね」

鮮華「色々なものが買えましたし……」

四人が楽しそうに歩いていると、背中まであるボサボサした黒い髪に紅い瞳をし整った顔立ちをした青年とすれ違った。

そして、文乃は先に帰ると言い、三人と別れた。

鮮華「これからどうします?」

優子「もう少しブラブラしてから帰りましょうか」

三人は適当にブラブラして帰ろうと決めた瞬間、ドオンッ!という大きな爆発音が三人に聞こえた。

鮮華「な、何ですか?!」

優子「あそこからしたわ!」

煙がたっている方を指で指した瞬間、秀吉の顔は青ざめた。

秀吉「あの方向は・・・文乃が帰った方向ではないか!？」

秀吉の言葉を聞いた二人はハッとさせ顔を青ざめ始めた。

鮮華「ま、まさか・・・」

優子「とりあえず行くわよ!!」

確認の為に文乃が帰った方向へ三人は向った。

三人は煙がたつてる所へ駆けつけた瞬間、三人は顔を蒼白させて、目を見開いて惨劇を目撃してしまった。

煙が出ているバスを見て、大きな爆発したと思われ、歩いていた人達は爆発の巻き添えで火傷や出血で倒れている人が大勢いた。

三人は所々出血しており、火傷を負い倒れた文乃を見つけた。

優子「文乃!？」

鮮華「しっかりしてください!!」

秀吉「しっかりするのじゃ!!」

しばらく時間が経ち、消防車や救急車が駆けつけ、病院へ搬送した。事件を三人から知った乙女は急いで病院へ駆けつけていた。

乙女「ええっ!?!・・・手術・・・ですか？」

医者「はい・・・出血が多く・・・火傷を負い・・・爆発で吹き飛ばされたのか幾つかの打撲の跡がありました・・・」

大勢の人が運び込まれた病院の中で医者から説明を受けた乙女と鮮華、優子、秀吉の四人は驚愕していた。

ただの怪我と思っていたからだ。すると看護師がやって来た。

看護師「先生大変です！前の患者に手術の時に使ってしまった・・・彼女と同じ血液型の保存血の在庫がほとんどありません！！」
医者「こりゃ不味いな・・・彼女の手術をする時に・・・今から血液センターに発注しても間に合わないぞ・・・」

もしこのまま時間を置けば、益々状態が悪化する可能性がある為、何とかしようと考えた時・・・

鮮華「あの・・・もし良かったら・・・私の血を・・・血液型は同じかもしれないですし・・・文乃さんに・・・」

文乃を助けたいという一心で医者にそう言った。

医者と看護師に検査と採血する為、採血室へ連れられた。

採血が行われ、検査の結果拒絶反応も無く適合した為、輸血用として約600ccの血を抜かれた。

その後、手術が行われ、終了すると結果は成功した。

手術を終えて、しばらく時間が経った後、鮮華の血を入られた文乃の身体は徐々に傷や火傷を無い状態になった。

これを見た医者と看護師は驚き、精密検査した所、何も異常が見当たらなかった。

文乃が巻き込まれたバスの爆破事件はテレビやラジオで流れ、死亡したのは運転手を含む乗客全員だった。原因は不明で、テロがやったのかいまだ不明である為、今でも未解決のままになっている。

文乃「これが・・・真実よ・・・本当に鮮華の血でおかしくなるなんて・・・思いもしなかったから・・・」

悲しそうな表情で話し終えた。

これを聞いた統夜とはやてを含む知らないラバーズは驚愕していた。統夜は自分が行方不明になっていた時だった為、起きた事にそれ以上の衝撃が走っていた。

統夜「(バスの爆破は恐らく・・・四人が出会った男がやったという可能性が高い・・・)」

鮮華「ごめんなさい・・・兄さん・・・言おうとしたのですが・・・言い出せなくて・・・」

統夜「誰にだって・・・言いたくない事は誰だってある・・・が・・・これつきりにしてほしい」

怒られるのかと思いきや、注意された。

エステル「鮮華さんの血を入れられた事によって・・・短時間で回復したのかもしれないね・・・」

統夜「当時は真祖の吸血鬼とか知らなかったしな・・・」

メアリ「吸血鬼の血を与えられれば、治癒能力が働く・・・適合していたからいいけど・・・」

文乃が何故このような事になったのか、統夜とエステル、メアリの三人は理解し始めた。

千世「何故・・・今になって・・・」

統夜「恐らく・・・俺が真祖として完全に覚醒したからだと思う・・・俺と鮮華は血の繋がった兄妹だ・・・」
希「・・・このままだとどうなるの？」

メアリ「分からないわ・・・だけど・・・文乃は統夜や鮮華のような真祖になるかもしれないわね・・・入れられた血の副作用として・・・」

鮮華「そ、そんな・・・」

文乃「……………」

文乃の発作は自分が真祖として完全に目覚めた事が原因で統夜は悔んだ顔をし、メアリは文乃は統夜同様の事が起きるかもしれない事を話した。

話を聞いた鮮華は涙を流し、文乃は黙ったままだった。

統夜「鮮華……お前は何の為に……文乃に血を与えた？」

鮮華「助ける為です……ですが……このような事になるとは思いもありませんでした……」

統夜「助ける為に血を与えたのなら……気にするな。お前のお陰で文乃は救われた……礼を言う……」

鮮華に頭を下げた。

例え、副作用が起きたとしても……

はやて「助かったのはええけど……これから……どうするつもりや？」

統夜「こうするしか無いな……文乃、ちょっと来てくれ」

文乃「何をするの？」

統夜に言われ、渋々前に来た。

その後、統夜は右手に魔力と妖力を込めた手で文乃に触れ……

統夜「干渉……封印！」

文乃に眠る真祖の力が出来ないよう封印した。

万が一同じ事が繰り返され、覚醒間近の場合、封印は直ぐに緩んでしまうのだ。

これはあくまでも応急処置の為、いつ封印が解かれるかは分からない

い。

カナ「これで・・・安心？」

優子「じゃないかな・・・」

秀吉「統夜を信じるしかあるまい・・・」

エステル「ですネ・・・」

封印が成功した事により、安堵した表情になった統夜ラバース。

統夜「鮮華に文乃、優子、秀吉・・・大きな内緒はこれつきりにしてくれ・・・あんまり・・・一人で背負い込もうとするな・・・」

鮮華達四人は黙って首を傾けた。

文乃「アンタは・・・私が人間じゃ無くなったら・・・」

統夜「さっき言ったじゃねえか・・・受け入れるって・・・手の平返すような事はしないぞ・・・俺だけじゃねえ・・・はやてや皆もそうだ・・・」

統夜に言われて、統夜ラバースも笑顔になり、首を縦に振っていた。これを見た文乃は大粒の涙を浮かべて、統夜に泣き付いた。

文乃「ありがとう・・・本当にありがとう」

統夜はただ黙って文乃を優しく抱きしめた。

これらを見た鮮華とラバースはただ見守っていた。

第六十話 『旅行の始まりはカットピングだぜ！』 (後書き)

次回のHERO's EPISODEは

アリス「やっと出て来れたな。私とソラ・・・一人オマケがいたが気にしないでおう」

アリス「芹沢文乃の様子がおかしかったのは天川鮮華の血の影響だったとは・・・」

アリス「だが私には関係無い話だが・・・修学旅行の二日目に数名の知り合いが来てカオスになる」

アリス「私とソラの愛に溢れたストーリー・・・おほんっ！次回は『知り合いがいるとカオスになる』テイクオフだ」

第六十一話 『知り合いがいるとカオスになる』 (前書き)

ソラ「出て来れたな」

アリス「ああ。主人公である天川統夜とメインヒロインである八神はやてを主役とメインヒロインの座から引きずり降ろし、私とソラが中心となって・・・」

リリス「そんな事したら作者さんから怒られますよ!」

それと支配者さんの小説であるリリカル剣魂スペシャルに出て来たラスボスの名前が出てきます。

アリス「許可は貰ったのか？」

はい。勿論です。詳細も貰いましたし。出てきますよ〜さあ・・・先に起こる地獄を楽しみな・・・

リリス「怖いですね・・・」

ソラ「何とかなるだろ。HERO'S EPISODE第六十一話 始まるぞ」

第六十一話 『知り合いがいるとカオスになる』

翌朝、ホテルのとある一室にソラとアリス、リリスの三人がグッスリと眠っていた。

眠っているのはいいが、ソラが眠っているベッドにアリスとリリスが抱きつくようにくっついて寝ていた。

因みにソラの右隣がアリス、左隣がリリスとなっている。

ソラ「……ん……朝か……」

瞳を開け、上半身を起こして、両隣で眠っているアリスとリリスを見て溜息をついた。

ソラ自身も満更でもなさそうな表情をしていた。

ソラ「地球とはあまり変わらないな」

ホテルの窓から景色を眺めてそう呟いていた。

ソラ「アリスとリリスは寝ているから……散歩でもするか」

二人を起こさないようにそっとベッドから抜け、部屋から出た。散歩の途中で散歩している統夜と偶然出会った。

ソラ「奇遇だな」

統夜「ですね」

ソラ「普通に喋ってもいいぞ。呼び方はソラで構わない」

統夜「ありがとう。話しながら歩かないか？」

ソラ「構わない」

二人は話しながら散歩を続けた。

統夜「何故・・・ソラは散歩へ？」

ソラ「気分転換だ。お前は？」

統夜「俺も気分転換かな・・・」

苦笑しながらソラに答えた。

ソラ「俺達・・・何処か似てると思わないか？」

統夜「何処が？」

ソラ「何気に女性から貞操狙われたり・・・積極的に迫られたり・・・」

ソラの言葉を聞いた統夜は大汗を掻きながら苦笑した。
全てが当て嵌まるからだ。

ソラ「当て嵌まるようだな」

統夜「ああ。全くその通りだ・・・俺が夜・・・部屋で寝てると朝起きたら幼馴染や同居人が一緒に寝てたり・・・慣れたけど・・・」

ソラ「こればかりは受け入れる他無いしな」

統夜「だな・・・ソラは何故俺達の事を知っているんだ？」

ソラ「お前達がセントクルセイダーズという管理局の閻組織を壊滅させたからだ。ま、これで何とかなるんじゃないか？」

統夜「そうだな・・・」

統夜の問いにソラは素っ気無い感じに答えた。

ソラ「何かあるようだな」

統夜「修羅と冥界の混沌・・・聞いた事あるだろ？」

ソラ「修羅は戦いを吹っかけてくる集団で、冥界は異なる種族の集

まりと聞いた事がある」

普通にそう答えた。

統夜「知ってるんだな・・・」

ソラ「ああ。嫌でも聞くからな」

統夜「だろうな。ソラは剣を使うのか？」

ソラ「ああ。お前もか？」

統夜「剣以外に銃と拳・・・色々さ・・・」

ソラ「オールラウンダーか。まあ・・・いい方じゃないか？」

お互い自分の戦闘スタイルを話し合っていた。

統夜「まあ・・・使いこなす為に鍛錬は怠っていないかな」

ソラ「努力家だな」

統夜「そう言うソラは？」

ソラ「さあな」

統夜「これだけは言っておく・・・力を持つ者は鍛錬を怠るべからず・・・慢心という毒が己自身を蝕み・・・大切なもの失いを後悔する」

ソラ「覚えておこう。年下なのにしっかりしているな」

顔に出していないが統夜に対して僅かだが感心していた。

統夜「負けを・・・仲間を失うという・・・本当の敗北・・・過ちを繰り返したくないから・・・」

ソラ「・・・・・・・・」

悲しそうな顔をして言う統夜の言葉をソラは黙って聞いていた。

ソラ「(本当の負けに過ちか・・・こいつに一体何があつたのだからな)」

統夜「どうかしたか？」

ソラ「いや・・・吸血鬼なのに人間みたいだなと思ってな」

統夜「生憎・・・俺は人の心を捨てていない」

ソラ「そうか」

統夜の言葉にソラは普通にそう答えた。

統夜「何となくだが・・・俺達・・・似てるな」

ソラ「ああ。大切なものを守る所と・・・」

統夜「己の信念って所かな。俺の場合は一つだけ違うかな・・・世界の歪みを破壊する事・・・」

ソラ「(世界の歪みか・・・)」

統夜とソラは拳を何度か合わせて握手をしていた。

その後、散歩を終え、それぞれの部屋へ戻る為別れた。

ソラサイド

アリス「ソラ。散歩なら何故私だけを起こさなかった」

ソラ「気持ちよく寝ている所を邪魔したら悪いだろ」

部屋に戻ったソラは胸の谷間が見える黒が基調で紫のラインがあるネグリジエを着たアリスが問い掛けた。

アリスの問いにソラは何も反応していないかのように答えた。

アリス「散歩で何かあつたのか？」

ソラ「まあな」

冷蔵庫の中から母乳を取り出し飲んでいた。

アリス「そうか。これからどうする？」

ソラ「今日は適当に回るか。大体は把握できたからな」

アリス「そうか」

ソラ「リリス。起きろ」

ユサユサとリリスを起こし始める。

その後、リリスが起き始めた。

リリス「ふわあゝ．．．おはようございましゅ．．．ソラしゃまゝ．．．ありしゅしゃん．．．」

アリス「寝ぼすけめ．．．顔を洗って来い」

リリス「ふあゝいゝ．．．」

アリスに言われ、洗面所へ行き、顔を洗い始めた。

ソラ「不思議な所だな」

アリス「スフィア王国の事か？ああ．．．地球から独立し国を立ち上げている所は素晴らしいな」

ソラ「そうだな」

アリス「地球と月の絆を再生させた英雄．．．天川統夜．．．あいつのお陰で私達のような存在は自由に旅行が出来た」

ソラ「そうだな。その他に管理局の闇であるセントクルセイダーズを壊滅させた功績がある。世界の歪みを破壊するというあいつの信念が成せたものなかもしれんな」

アリス「世界の歪みか．．．」

スフィア王国と統夜について話していた。

顔を洗い終えたりリスが来たので朝食を食べる為に食堂へ向かった。

統夜サイド

はやて「統夜あゝ・・・何処行つてたん？」

白の寝巻姿で顔をムスっとしたはやてが統夜に問い掛けて来た。

統夜「散歩だよ。一体どうやって入ったんだよ・・・」

はやて「簡潔な転移魔法や」

統夜「今度から空間結界を張っておくか・・・」

はやて「統夜の鬼・・・」

統夜「鬼で結構」

遊輔や明久が寝ている中、小さい声で言い争っていた。

はやて「何か嬉しそうやな」

統夜「あ、分かる？」

はやて「当たり前や・・・伊達に幼馴染している訳やないよ・・・」

統夜「一つだけ言えるのは・・・似た者同士を見つけた事だ」

目を閉じながらはやてにそう言った。

はやて「似た者同士・・・なあ・・・」

統夜「そう。似た者同士」

はやて「似た者同士で考えたんやけど・・・統夜に似てるのおるな・

・遊輔君にギルシアさん、紅神君の三人・・・」

ぐーすか寝ている遊輔を見た後、ギルシア、忍の顔を思い浮かべた。

統夜「遊輔と忍は俺と同じ異端で・・・ギルシアは違うんじゃない？」
はやて「先日にも同志って言われてたやん・・・統夜は違うって言っ
てるけど・・・」

統夜「俺はロリコンじゃないぞ・・・」

ロリコンである事を否定していた。

まあ・・・統夜ラバーズの中に千世とプリムラ、華琳の三人ぐらい
しかないが・・・

もしギルシアがいたら何故否定するんだ！同志よ！！って言いそう
だなと統夜は想像していた。

はやて「それは分かってるんやけど・・・ごめん・・・忘れてな」

統夜「あ、ああ・・・」

はやて「統夜、アドヴァンスメサイアの調子はどうや？」

似た者同士に関する話を強制終了させ、メサイアについて話を始め
た。

統夜「順調だな。DIE Sの出力はライザー無しでは不安定だが使
いこなせている。ドライバー達もな」

はやて「そっか・・・頑張ってるんやな」

統夜「ああ。メサイアの・・・DIE Sのオーシャンシステムの真
の力が見てみたいものだ」

はやて「DIE Sのオーシャンシステムの真の力？」

統夜「アルハザード時代から成し遂げられなかった人と人が分かり合
う為の対話を・・・な・・・」

はやて「アルハザード・・・かあ・・・本当に実際にたかもしれ
へんな」

DIESSのオーシャンシステムの真の力である人と人が分かり合う対話にはやては驚きつつ、アルハザードは実際していたと呟いていた。

IESSの二基同調の技術はビリーというデバイスマスターが再びこの世に蘇らせ、徐々に安定しつつあるが、完全同調は少し時間が掛る。

統夜「そうだな・・・はやて・・・さつさと部屋へ戻りなさい」
はやて「はい」

はやては転移で自分の部屋へ戻った。

なのは「はやてちゃん・・・統夜君の部屋に行ってたでしょ？」

はやて「な、何の事かな？なのはちゃん」

フェイト「起きたら・・・はやていなかったよ」

はやて「あ、あはは・・・」

なのは、フェイト「笑って誤魔化さない！」

はやて「はい・・・」

同じ部屋に泊まっているなのはとフェイトの二人からお説教を喰らったのは言うまでも無かった。

朝食の時間になり、クラス一同はレストランへ移動した。

明久「統夜・・・ご愁傷さまだったね」

統夜「お前にもいつか来るよ・・・乃莉に宮子、ゆのが・・・」

明久「ちよつと待って・・・何でひだまりの人の名前が出てくる訳！？中の人ネタだよな?!」

朝食を食べながら中の人ネタを言う統夜に明久は冷や汗を掻きながらツツコミを入れていた。

統夜「うるさい奴だな・・・お前の場合は・・・特殊だよな？姫路以外は絶壁だし」

明久「美波と早苗ちゃんの二人に殺されるよ？」

統夜「んなもん大丈夫だろ・・・多分」

美波「・・・・・・・・」

早苗「・・・・・・・・」

愛子「あ、あの・・・二人とも何で天川君を睨んでるの・・・？」

胸に関する事を聞いてたのか美波と早苗の二人は統夜に対し殺意を込めて睨んでいる所を愛子は苦笑いするしか無かった。

遊輔「明久の趣味に口出しはしないが・・・程々にな」

雄二「明久からロリ久に改名されちまうぞ」

達哉「そうだぞ」

ダイチ「幼女大好きな明久は引くよ・・・」

明久「ちよつと！？僕、ロリコン趣味になってるの！？ロリ久って何！？もう訳分らないよ！！」

遊輔と雄二、達哉、ダイチの明久がロリコン疑惑がある言葉に対し、顔を少々青褪め叫んでツツコミを入れた。

統夜「静かにしろ。明久。飯の時間は静かにするものだぞ」

明久「や、統夜が原因でしょ！」

最初に言い出し、原因を作った統夜にツツコミを入れていた。

統夜「言い出したのは俺だが、お前のラバーズ構成が姫路と島田以外幼女じゃん」

雄二「確かにな」

遊輔「成田さんと小蓮ちゃんの二人だけ・・・もし幼女とフラグを立てたら・・・」

達哉「間違い無くロリコンという烙印が押されるな。フラグを立てなければの話だけど」

お茶を静かに飲んでそう明久に言った。

明久ラバーズに幼女系の人に傾いてしまえばロリコン疑惑は更に深まっていくのは間違いないだろう。

統夜「これから気を付ける事だな」

飯を食い終え、統夜達Aクラスは鉄人達の指示に従い、目的地へ移動を始めた。

先生達の許可を貰っているマリオ達も同行している。

統夜「意外と許可取れたな」

マリオ「ああ。いつぞやの礼もしたいと言われた」

大乱闘スマッシュヒーローズブラザーズ出張版にて現れたカオスルシフアーを倒してくれた事に対してお礼である。

統夜「あゝ・・・あれね・・・そういや・・・」

マリオ「何だ？」

統夜「ルイージとギルはどうしたんだ？」

マリオ「来ていない。ルイージにお土産を貰うから安心しろ」

笑みを浮かべてどんなお土産を買うか悩んでいたマリオでした。
するとヒップホップ風の音楽が流れ始め、見知った人物の歌声が聞
こえてきた。

桂花「巨乳DETH 何故なら我らは存在そのものが憎いから」
メイメイ「今の男共は巨乳が一番と何故ほざく〜 そんなにビッグ
が いい の？ 私達のようなスモールにも魅力はある」

桂花「胸の脂肪の塊共に無い魂と知恵がある我らは今日も挑むぜ」
「

桂花、メイメイ「巨乳MUST DIE！巨乳MUST DIE！
巨乳MUST DIE！」

ラッパー風の格好をした桂花とメイメイがラップを歌い、小蓮はダ
ンスパフォーマンスをしていた。
これを見た一同は啞然としていた。

桂花「よし・・・もう一回」

ラジカセの再生ボタンを押して歌い始めた。

桂花「巨乳・・・」

統夜「デエーース！！」

桂花「ぶへぼっ！！」

ウザかったのか統夜は歌っている桂花を蹴っ飛ばした。

桂花「あ・・・」

立ち上がって統夜達を見て、声を出した。

統夜「あ……じゃねーよ……お前……何やってるんだよ……
こんなところで……」

桂花「我ら貧乳党によるスフィア王国出張ライブ活動を……」

統夜「何だそりゃー！！全然分かんねーよ！！大体お前らの歌の内容
は殆ど巨乳への妬みじゃねーか！！」

桂花達の訳の分からない行動に対し、統夜は額に青筋を浮かばせて
ツツコミを入れていた。

メイメイ「私達の欲望と言ってほしいね！！」

小蓮「そーよそーよ！シャオ達の自由じゃない！！」

零斗「そうだぞ。彼女達の欲望は素晴らしい……」
たけし「全くですね」

サングラスを掛けプロデューサー風の格好をした零斗と眼鏡を掛け
たマネージャー風の格好をしたたけし、秘書の格好をしたアリス（
チエンバース）の三人が現れた。

統夜「何でお前らがいる訳！？てかアンタら貧乳党の敵が近くに
いるぞ！！秘書が！！」

蓮華「我が妹ながら恥ずかしい……」

統夜は零斗とたけし、アリス（チエンバース）の三人に対しツツ
コミを入れ、蓮華は妹である小蓮の行動に対し右手で頭を押さえて
いた。

今の小蓮はカオス過ぎるからだ。

桂花「何処に？」

メイメイ「アリス秘書に限ってそれは無いね」

小蓮「嘔吐くのは駄目よ」
達哉「近くにいろだろ!!」

ボケている三人に対し達哉は近くにいろよう教えたが分からなかった。

マリオ「あいつらは何をやってるんだかな・・・」

リュウケンドー「何をやってるんだか・・・」

ソロ「だな・・・」

銀次「あはは・・・」

アーカード「妬みだけは伝わったぞ」

チルノ「カオスだね」

アッキー「あはは・・・」

ムツ「・・・」

マリオ達もいきなりのラップ活動に対し苦笑するしか無かった。

桂花達の活動はカオスを起こしてるにしか過ぎないから・・・

統夜「零斗にたけし・・・何でお前らも来たんだよ」

零斗「俺は零斗ではない・・・プロデューサーREIだ!それ以上でもそれ以下でも無い!!」

たけし「俺はたけしではない。マネージャーのタケだ!」

統夜「そんなんで誤魔化せるとでも思ってるのか!!おいアリス!
!アンタも何か言ったらどうだ!!」

アリス(チェンバース)「誰がアリスですか?私はセクレテリアリ
スよ!!」

統夜「ただ秘書を英語に直して付け加えただけだろうがぁぁー!!
!!」

零斗とたけし、アリス（チエンバース）の訳の分からない行動にツッコミを入れて叫んでいた。

他の方々も呆れていた。すると・・・

瑞希「本当に貧乳の皆さんは哀れですね〜考え方も小さいから・・・あつ・・・小さいは失言でしたね」

黒い笑みを浮かべた瑞希が桂花を始めとした胸の小さい方々が椅子やカッター等の武器を手にして瑞希に襲い掛かった。

桂花を統夜、メイメイを遊輔、小蓮を明久、美波を達哉が抑え始めた。

桂花「離せエエエエエ！あの女を亡き者に出来ないじゃない！！」

メイメイ「離すねエエエエ！！」

小蓮「あの女は許すまじイイイ！！」

美波「あれは私達に対する侮辱だアアアア！！！！」

瑞希の言葉が不味かったのか、嫉妬で怒り狂い始めた。

統夜「落ち着けエエエエ！！！！」

遊輔「ここで殺したら不味いつて！？」

明久「だから落ち着いてエエエエ！！！！」

達哉「自分を見失ったら駄目だよ！！！！」

四人は顔を青ざめて止めていた。

ゴタゴタが起きている最中にソラとアリス、リリスが偶然見掛けていた。

アリス「嫉妬に駆られている奴は哀れにしか見えないな」

黒い笑みを浮かべて桂花達にそう言った瞬間、抑えられた四人の怒りは上がり始めた。

統夜「ちよつとおー！！何で火に酸素ボンベを置くような事を言うの！！アリスさん！！」

アリスの黒い言葉に冷や汗を流しながらツツコミを入れていた。

アリス「その方が面白いからだ リリス。お前の仲間がいるぞ」

リリス「それは私の胸を見て言ってますよね！？いくらなんでも酷いですよ！？何でニヤついているんですか！？」

アリス「お前の反応が面白いからだ」

遊輔「ちよつとおおおお！！貴方はなに悪化させようとしてんだよおおお！！！！」

アリスのドS発言でリリスが泣き叫んでいる事に対し遊輔は冷や汗を流しツツコミを入れていた。

しばらくして、桂花達の怒りは治まり、零斗とたけし、アリス（チェンバース）の三人は普段の服装に変えて同行した。

事情を聞いた先生達は頭を抱えてしまったのは言うまでも無かった。

統夜「ソラも俺達と同じ目的地？」

ソラ「ああ。スフィア王国の資料博物館にな」

零斗「知り合いか？」

統夜「ああ・・・と言っても知り合ったばっかだ」

零斗「そうか。俺は北郷零斗。よろしくな」

たけし「俺は竜崎たけし。よろしく」

アリス（チェンバース）「私はアリス・チェンバース。よろしくね」

ソラ「俺は天道ソラ。こちらこそよろしく」

アリス「私はアリスだ」

リリス「リリスと言います。よろしく願います」

歩きながら零斗とたけしはソラ達三人に自己紹介をしていた。

アリス（チェンバース）「アリス・・・同じ名前だね」

アリス「奇遇だな。こちらこそよろしく頼むぞ」

偶然同じ名前だったのか握手をしていた。

桂花「その貴方・・・貧乳党に入って巨乳を滅ぼさない？」

リリス「あ・・・あの・・・」

はやて「なに知らん人を勧誘してるんや・・・」

桂花がリリスを貧乳党に入るよう勧誘している所をはやては呆れながらツッコミを入れていた。

ソラ「お前の仲間は個性的だな」

統夜「ああ・・・」

目的地である資料博物館へ着いた瞬間、とある人物達と目が合ってしまった。

とある人物とは・・・

ギルシア「我が同志統夜と仲間達じゃないか！」

レーティア「偶然ね」

リル「う〜」

ジャンヌ「は〜い」

ギルシア達四人と出会った統夜達でした。

統夜「だから同志じゃねえって言うてるだろうが!!」
ギルシア「照れるな。同志よ」

ツツコミを入れた統夜に対し、ギルシアは涼しい顔をしていた。

零斗「(なあ・・・同志ってどういう事だ?)」

遊輔「(さあ?)」

達哉「(分からん・・・)」

三人はヒソヒソと話し合っていた。

ギルシア「統夜よ・・・明久という新たな同志は何処にいるんだ？」

統夜「あ・・・あそこだ」

明久がいる方向へ指差した。

明久を見たギルシアは近づき、手を握り始めた。

明久「な、何？」

ギルシア「よろしく頼むぞ!!同志明久よ!!」

明久「はああああ!!?同志って何!？」

いきなり同志と言われた明久は叫ぶしか出来なかった。

ギルシア「何・・・お前が俺と同じ幼女を愛でるからだ!!統夜から聞いたぞ!!」

明久「統夜アアアア!!」

統夜「今の状況を教えたらこうなった・・・それだけだ」

余計な事を教えた統夜に対し叫んだ。

ロリコン疑惑が皆の前で露見されてしまったからだ。

瑞希「明久君・・・小さい娘が・・・」

美波「迂闊だったわ・・・早苗のような娘が・・・」

早苗「・・・」

小蓮「これならいける・・・」

文乃「同志と言われた統夜は・・・小さい娘が・・・」

千世「よし・・・」

希「にやあ・・・」

エステル「統夜が・・・そんな・・・」

カナ「これは・・・ちよつと・・・ねえ・・・」

優子「少しシヨックよ・・・」

秀吉「ワシもじゃ・・・」

明久ラバーズと事情を知っているはやて以外の統夜ラバーズは悲しい表情になって呟いていた。

中にロリ系の早苗と小蓮、千世の三人は小さくガッツポーズをしていたのは言うまでも無かった。

はやて「皆々・・・統夜と明久君はロリコンやないで。よお考えて
みい？」

はやてに言われた統夜ラバーズと明久ラバーズは思い出し、それも
そうだなという事でロリコン疑惑が晴れた。

だが幼女系の人がいる事には変わりはないが・・・

レーティア「大変ね・・・」

統夜「そのようです・・・今朝着いたばかり？」

レーティア「ええ。家族旅行でスフィア王国へ行こうと決めて・・・
今、貴方達と偶然出会った。統夜の恋人達も来てるわよ？」

統夜「来てるわよって・・・まさか・・・」

レーティアの背後を見ると手を振っている統夜ラバーズである咲夜と雪蓮、シャル、華琳の四人と手で頭を抑えている冥琳がいた。

マリオ「知り合いが増えたな〜」

リュウケンドー「しかも仲いいな〜」

ソロ「だな」

アッキー「あはは・・・」

ムツ「・・・」

銀次「これはどう言えばいいのかな・・・」

アーカード「あいつは巻き込まれ吸血鬼か？」

チルノ「より賑やかになるね」

鈍感なマリオとリュウケンドー、ソロの三人は微笑み、アッキーとムツ、銀次は苦笑し、アーカードは呆れ、チルノは笑っていた。その後、咲夜と雪蓮、シャル、華琳、冥琳の五人が統夜達の所へ来た。

統夜「来てたんだ・・・」

咲夜「いや〜・・・一度は来てみたくて」

雪蓮「スフィア王国のお酒を求めて来た」

シャル「おいしい食べ物を探しに」

華琳「良さそうな場所を求めて」

冥琳「私はこの四人の引率役だ・・・本当に疲れる・・・」

咲夜達四人は満面な笑みで答え、冥琳は疲れた表情をして答えた。するとルイスとアイリの二人がやって来て、ルイスはたけし、アイリは零斗に駆け寄った。

たけし「ルイス。迷わなかった？」

ルイス「うん・・・迷わなかった」

零斗「大丈夫だったか？」

アイリ「大丈夫だよ」

保護者であるたけしと零斗が二人に聞いた所大丈夫と返ってきた。

ギルシアは千世、シャロ、ネロ、エリー、桂花、メイメイ、アイリ、小蓮、早苗、リリスの順に見つめた瞬間・・・

両目がスロツトの様に回転し、両目にハートが出ては口から大量のコインが滝のように流れ、肌が薄い赤に変化し、煙を出していた。

ギルシア「激萌少女発け~~~~ん!!!!」

瞬間移動で彼女らに抱き抱えようとしたが逃げ出された。

千世「な、何・・・この人・・・」

桂花「変態？」

千世達は当然、ギルシアを警戒してしまっていた。

その後、知らないメンバーは自己紹介をギルシア達にしていた。

ギルシア「トイズを使う有名なミルクィホームズか」

ジャンヌ「生で見たのははじめてだよ」

レーティア「凄いわね。小さいのに探偵をしているって」

ギルシア「そうだな。千世たん！シャロたん！ネロたん！エリーたん！桂花たん！メイメイたん！アイリたん！小蓮たん！早苗たん！リリスたん！これでもかというぐらいに抱きしめてもいいか？」

手をワキワキさせて抱きつこうとしているギルシアに

統夜、零斗、ダイチ、たけし、明久、雪蓮、蓮華、コーデリア「断

固阻止！！」

ギルシア「チツ・・・」

統夜、零斗、ダイチ、たけし、明久、雪蓮、蓮華、コーデリアの八人に制止され舌打ちして、手を引いた。

これを見た一同は呆れながらため息をついたのは言うまでも無い。

何とか事態が収拾したのかスフィア王国の資料博物館の中へ入った。ギルシア達も追加されたが・・・

統夜「色んなものがあるんだな」

遊輔「そうだな」

達哉「だな」

零斗「歴史ばかりだな」

ダイチ「戦争の話しか無いな」

たけし「凄いな・・・」

明久「月に関する歴史は知ってるけど・・・益々興味を持ち始めたよ」

ギルシア「すげえな」

マリオ「月ならではって感じがするな」

ソラ「よく見ると凄いな」

統夜達主要男性陣は様々な資料や物等を見回りながら、感想をそれぞれ述べていた。

時間が経ち、石板や絵が展示品されているコーナーへ移動した。

最初に展示されていた石板を見た統夜達は驚愕していた。

統夜「あれは・・・サーディオンにセイクリッドファング・・・」

遊輔「ペンドラゴブレイド・・・」

雪蓮「ライガーファング・・・」

石板にはサーディオオンとペンドラゴブレイド、ライガーファンクと
いったガーディアンデバイスにアーマードデバイスウエポンドライ
バータイプであるセイクリッドファンクが書かれていたのだから・
・
持ち主である統夜と遊輔、雪蓮以外のメンバー（ソラとアリスを除
く）も驚いていた。

達哉「これは・・・フィーナ？」

フィーナ「最近遺跡で掘り起こされたものよ・・・統夜達のデバ
イがあるって事は・・・」

統夜「ガーディアンデバイスも『禁忌の遺産』って事になるんだろ
うな。サーディオオンとペンドラゴブレイド、ライガーファンク以外
に大鎌や日本刀、薙刀を模したものがあるぞ」

サーディオオンとペンドラゴブレイド、ライガーファンク以外に大鎌
と日本刀、薙刀が描かれていた。

三つの武器は残りのガーディアンデバイスと見て間違いないだろう。

遊輔「偶然・・・ガーディアンがどれくらいあるか分かったな」

統夜「ああ」

ソラ「ガーディアンデバイスとはどんなもの何だ？」

統夜「アルハザードや古代ベルカ時代に存在されたデバイスで・・・
MIE Sという規格外なシステムが搭載されて使い手を選ぶものだ
よ」

ガーディアンデバイスが気になったのかソラは統夜に聞いてみた。

アリス「ほう・・・お前のサーディオオンはどんなものなのだ？」

統夜「セイヴァー・ロード・サーディオオンに進化して・・・長剣に
変化してるけど・・・九つの宝珠を鏝の部分に嵌め込む事によって

形状変化する。俺以外では使いこなせないのが現状だ」
リリス「規格外から超規格外になったんですね」

アリスはサーデイオンに興味を持ったのか統夜に聞いた所、進化して自分以外は扱えない事を教えた。
話を聞いていたリリスは驚愕していた。

ソラ「アーマードやドライバーはそこそこ聞いた事はあるが・・・
ガードイアンはそれ以上に凄い事だけは分かった」

冷静にそう言っていた。

統夜「まあな」

石板を見終えた後、次の石版に描かれた大きな絵を見始めた。
内容は膝裏まである金髪に蒼い瞳をした綺麗な顔立ちをし、純白の騎士甲冑を着た女性と髪が銀色でそれ以外はISに出てくる織斑千冬に似ており、神主が着ているような服を着た女性、背中まであるボサボサの黒い髪に金色の瞳を持ち、整った顔立ちをし、蒼と黒の騎士甲冑を着た青年、中国の仙人が着る白と黒が混ざった装束を纏った男の四人が魔獣の髑髏の様な顔に黒と白の肉体をした異形が率いる全身が黒いマントで覆われており白い仮面を着けた人物と凶暴な獣をした異形、左半分が氷、右半分が溶岩で出来ている異形、鬼のような角を生やし髪は茶色く逆立っており強面な顔立ちをし、右目には刺青を入れており、髭を生やしており、茶色の鎧を身に付けており赤色のズボンを着ている人物と戦っている絵が写っていた。

統夜「これは・・・」

フィーナ「スフィア王国から伝えられている英雄譚みたいね」
はやて「これ・・・純白の騎士服を着た金髪の女性・・・鮮華ちゃ

ん・・・蒼と黒の騎士甲冑を着た男の人の顔・・・統夜に似てへんか？」

はやてに言われて一同は天川兄妹の顔と石版と見比べながら見ていた。

ギルシア「似てるは似てるが・・・少し大人っぽくなってるな」

フィーナ「あの異形・・・『魔人王ゾーグ』と『鬼神皇』、『三魔帝』と呼ばれた存在は恐ろしいわね」

統夜「魔人王ゾーグ・・・」

詳細に書かれていた異形達は魔人王ゾーグと鬼神皇、三魔帝と呼ばれていたそうなの。

これらの怪物が現代にいたらどうなるか誰も想像したくないだろう。規格外な人達以外は・・・

エステル「少しだけ聞いたことはありますが・・・私たち月人からは悪魔としか分かりませんでした」

フィーナ「『真祖の吸血姫』と『魔帝剣聖』、『最強の妖魔術師』の三人からなる三大冥王と真祖の剣士がスフィア王国のために立ち向かい戦った・・・その後は解らないわ・・・」

石板に書かれている絵の詳細を読みながらそう答えた。

これを聞いた統夜と遊輔、統夜ラバーズ、遊輔ラバーズ、達哉、零斗、ダイチ、たけし、鮮華、明久、明久ラバーズ、康太は目を見開いて衝撃が走るほど驚いていた。

特に事実を知った天川兄妹と遊輔、統夜ラバーズ、明久、康太はそれ以上に驚いていた。

明久「統夜のお母さん・・・凄いなだね」

雄二「おい・・・ちよつと待て・・・明久・・・俺の聞き間違いじゃなければ・・・統夜の母親と言わなかったか？」

明久「そうだよ」

ダイチ「統夜の母親・・・もしかして凄いのか？」

シャル「もしかしてじゃなく・・・本当に凄いのよ」

驚いているダイチにシャルは本当の事だと言った。

鮮華「名前は天川彩華・・・本名はリーシャ・アーカード・・・真祖の吸血姫と呼ばれた存在です・・・」

鮮華がそう言うのと知らないメンバーは驚く事しか出来なかった。

統夜「エステル・・・この英雄譚を知ってるなら三大冥王の事は・・・」

エステル「これを見てはじめて知りましたから・・・すみません・・・」

統夜「そうか・・・すまない」

零斗「（堕天使に真祖は分かっているが・・・恐らく蒼と黒の騎士甲冑を着た奴が統夜の父親だろう）」

統夜とエステルが話している所を零斗は見つめながら心の中で考えていた。

零斗「（いづれ分かるだろう）」

ソラ「どうかしたか？」

零斗「いや・・・何でも無い」

ソラ「そうか。あいつの母親はとんでもない存在だな」

零斗「全くだ」

考え込んでいる零斗に対しソラが話しかけ、統夜の母親がとんでもない存在という事だけ一致した。

ギルシア「流石我が同志……」

レーティア「英雄の息子に娘……不思議よね」

ジャンヌ「そうだね」

リル「ばぶ」

ギルシア一家は純粹に驚いていた。

マリオ「(三大冥王……そう言えば……師匠から聞いた事があったな)」

回想……

マリオが幼い頃の時に遡る。

ジルバと呼ばれる燃える様な赤のツンツンした髪に緑色の瞳、ボロボロのマントを付け、青い半そでと黒いジーンズを纏っている男が弟子であるマリオに修行をさせ、一段落し休憩をとっていた時だった。

ジルバ「マリオ。三大冥王って知ってるか？」

マリオ「いえ……知りません。何ですか？それは……」

ジルバ「異世界で会った俺の親友達であり憧れの存在だ」

嬉しそうにジルバはマリオに話していた。

マリオ「師匠が嬉しくなるといふ事は凄い存在なのですか？」

ジルバ「ああ。魔帝剣聖と真祖の吸血姫、最強の妖魔術師は災いを

呼ぶ魔人王と戦い・・・勝利した・・・と言っても真祖の吸血姫が真祖の剣聖との連携して封印した」

マリオ「魔帝剣聖に真祖の吸血姫、最強の妖魔術師・・・」

ジルバ「おっと・・・休憩時間が延びてしまったな。修行再開するぞ」

マリオ「はい！」

マリオとジルバは話し終え、修行を再開した。

現在・・・

マリオ「(三大冥王の一人・・・真祖の吸血姫・・・リーシャ・アーカードの息子と娘が統夜と鮮華の兄妹とは・・・運命か・・・)」

師匠であるジルバの言葉を思い出したマリオは統夜と鮮華の二人を見ていた。

リュウケンドー「マリオ、どうかしたか？」

マリオ「いや・・・何でも無い」

リュウケンドー「そうか・・・にしても・・・」

ソロ「あいつら兄妹が三大冥王の一人の子供とは・・・ビックリしたぜ」

マリオ「それでも俺は普通に接するぜ」

リュウケンドー「だな」

マリオ達は今まで通りに接する事を決めていた。

達哉「本当に凄いな・・・」

フィーナ「ええ・・・」

菜月「ビツクリだよね……」
翠「凄いと言えない……」

達哉と朝霧ラバーズは彩華に対して驚きを隠せずにした。
それは遊輔ラバーズを始めとした仲間達（知っている人物達を除く）も同じ反応だった。

なのは「遊輔君は知ってたの？」

遊輔「ああ……真祖なんて伝説的な存在は夢物語と思っていたが……」

蓮華「だが現実存在していた……受け入れるしかないわ」

なのは「そうだね……」

なのはと蓮華の二人は驚きつつも受け入れる事にした。

しばらく時間が経ち、資料博物館から出た後、それぞれは自由に探索する時間になった。

所謂自由時間というやつだ。統夜と鮮華は一緒にある場所へ向かおうとしていた。

マリオ「何処へ行くんだ？二人して」

統夜「ある人物と会う為だ。来たいなら別にいいけどさ……」

鮮華「それでは……」

それだけ言うと統夜と鮮華は去って行った。

遊輔「どうする？」

明久「気になるっちゃ気になるね」

達哉「そうだな……」

零斗「んじゃ・・・行くか」

しばらく話し合って一同は天川兄妹の後をつけ始めた。彼らも知る事になるだろう。天川兄妹の真実を・・・

第六十一話 『知り合いがいるとカオスになる』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

リリス「今回はカオスでしたね・・・貧乳党に入ってアリスさんをぎゃふんと言わせたいです・・・」

リリス「あの絵を見ると現代に出てきそうな予感で怖いです。ガーディアンはあと三種類・・・です」

リリス「天川兄妹がある人物・・・それは母親である彩華さんと接触し・・・真実を知る事になり・・・二人の本当の種族が明かされます」

リリス「次回は『母からの真実』 テイクオフ」

第六十二話『母からの真実』（前書き）

いよいよ天川兄妹の真実が明かされまゝす。

そして・・・本当の種族が明らかになる。

アリス「HERO'S EPISODE第六十二話始まるぞ」

第六十二話 『母からの真実』

統夜と鮮華はある人物から指定された場所へ赴いていた。
ある人物とは・・・

統夜「本当に『母さん』が来るのかねえ・・・」

歩きながらも手紙らしきものをヒラヒラさせて呟っていた。

鮮華「それは確かに・・・ですけど・・・乙女さんは嘘をつきませんよ。もし嘘だったらこの手紙を渡してませんよ」

今から修学旅行へ行く前日の事だった。

ストレイキャッツに天川兄妹は乙女から呼び出され奥の部屋に座っていた。

統夜「何の用？乙女姉さん」

乙女「明日から修学旅行が始まるのよね？」

鮮華「はい。そうですね・・・」

鮮華が答えた後、乙女は封筒を統夜に渡した。

統夜「これは？」

乙女「貴方達のお母さん・・・天川彩華さんからの手紙よ。今・・・スフィア王国にしばらく滞在しているから・・・」

話を聞きながら統夜は封を開け、手紙を取り出した。
内容はこう書かれていた。

『統夜と鮮華へ・・・今、私はスフィア王国に滞在しています。貴方達が知りたがっている真実を知りたければ指定された場所へ来て欲しい・・・天川彩華』

統夜「知りたがっている真実か・・・こっちも色々な事が聞きたいしな」

乙女「親子の再会で甘えていきなさい」

鮮華「そうですね・・・と言いたいですが・・・戸惑っています」

乙女「それもそうよね・・・」

統夜「日時は二日目の自由時間だから都合がいいかもしれないな」

手紙に記された日時を見てそう呟いていた。

乙女「でも・・・会えるんだからいいんじゃない？」

統夜「ああ。こんな機会・・・滅多に無いからな」

冷静にそう言っているが、内心は嬉しいかったようだ。

現在に至る。

統夜「ここでいいのか？」

指定された場所である公園に着いた。

公園を見渡すと人っ子が見当たらなかった。

鮮華「誰もいませんね・・・」

統夜「だな・・・」

その頃統夜達が知りたがっている真実が気になる遊輔達は天川兄妹の後をつけていた。

遊輔「何で・・・アンタらも来てるの？」

ギルシア「我が同志の動きが気になるからだ」

遊輔「統夜はアンタのようなロリコンじゃないし」

ギルシア「俺はロリコンでは無い！！幼女を愛でる神父だ！！」

優子「それがロリコンでしょうが・・・」

ギルシアがロリコンを否定している言葉に優子は呆れながらツッコミを入れた。

マリオ「公園が指定場所らしいな・・・」

天川兄妹がいる公園から離れた場所に着いた。

するとメアリと雪蓮、早苗のような妖力を持つ面々は大きな妖力を感知し、真剣な眼差しで天川兄妹の方へ顔を向けた。

はやて「どうしたんや？」

メアリ「大きな妖力を感じたのよ」

早苗「異常過ぎるほどのものを・・・」

はやて達もつられて見ると膝裏まである金髪に蒼い瞳をした綺麗な顔立ちをし、上に白いハイネックのシャツに下は青紫のロングスカートを穿いた女性、統夜と鮮華の実の母親である彩華が天川兄妹の前に現れた。

遠くから見た一同は・・・

遊輔「（伊達に三大冥王の一人じゃないな・・・）」

達哉「……………」

零斗「（こいつは……桁違いに強い……）」

ダイチ「（今まで戦ってきた奴らとは比べ物にならない……）」

たけし「（俺が幾ら強くても勝てないのは確かだ……）」

明久「（僕達が戦ったら勝ち目が無いのは目に見えている……）」

マリオ「（あれが三大冥王の一人……『真祖の吸血姫』か……）」

「

ギルシア「（何だ……今までの奴等と大きく違う……）」

ソラ「（俺でも……平然とはいられないかもな……）」

男性陣は彩華を一目見た後、目を見開き驚愕していた。

彩華「二人とも……久し振り……元気にしてた？」

彩華が二人に挨拶をしていたが、鮮華は戸惑い、統夜だけは違っていた。

彩華「統夜？」

統夜「会いたかったが……何で……何で俺達二人を……置いた!?!」

鮮華「兄さん……」

理由を分かっても彩華が自分達兄妹を置いて去った事に対して怒りをぶつけた。

彩華「今の私には……謝るしか出来ない……本当にごめんなさい……」

鮮華「母さん……」

統夜「……………」

悲し表情でただ二人に謝るしか出来なかった。
彩華が落ち着いた後、統夜は聞いてみた。

統夜「俺達を知りたがっている真実とは何なんだ？」

彩華「統夜・・・鮮華・・・貴方達は自分がどんな種族と思う？」

統夜「真祖の力を持つ吸血鬼・・・だろ？」

自分が何者なのかを聞かれたところ、真祖の力を持つ吸血鬼という事だけを答えた。

彩華「それならまだいい方かもしれないわね・・・教えるわ・・・
貴方達の知らない秘密を・・・」

はやてサイド

遠くから見ていたはやては統夜の怒りを感じていた。
自分達兄妹を置いた理由は乙女から聞いてはいるが、幼かった二人は捨てられたと思いこんでしまっただろう。

はやて「統夜・・・」

メアリ「分かってても・・・怒ってしまうものね・・・」

はやて「せやな・・・」

メアリ「ここからが・・・大事な話になるわ」

メアリがはやてに同意するように答えながら見つめていた。

雪蓮「零斗、アンタはマイティ真拳で統夜の真の種族知ってるんでしょ？」

零斗「あ、分かる？知ってるぜ」

直感で雪蓮は零斗に聞いてみたが、知っていると即答で答えた。

遊輔「知っていないがら・・・何故早く教えなかった！！」

零斗「それはあいつら兄妹を傷つけず自分の手で探した方がいいと思つた・・・それだけだ。それに・・・教えたからと言って真祖や煌天使が覚醒するのか？違つたる・・・？」

遊輔「それは・・・確かに・・・すまなかつた」

知っていた零斗に対し、胸倉を掴み、怒鳴つたが、零斗は冷静になつて二人を混乱させず、真実を言つても覚醒しない事を遊輔にそう告げた後、遊輔は零斗の胸倉を掴むのを止めた。

ギルシア「自分で探す方が正しいかもしれないな」

ソラ「そうだな。教えた所で覚醒は出来ん」

零斗の考えに賛同したのかギルシアとソラの二人はそう口にした。

マリオ「ここからだな・・・」

統夜サイド

統夜「秘密・・・だと？」

自分達兄妹に明かされる驚愕の真実・・・

彩華「ええ。統夜と鮮華・・・貴方達は人族の血を引いていない・・・」

統夜「俺達は人族の血を引いていない・・・一体俺達は一体何者なんだよ・・・」

自分が人族の血を引いていない事に頭を抱え涙を流していた。側にいた鮮華は涙を流し、両手で顔を隠していた。

彩華「念の為・・・私達の出身世界を教えるわ・・・私と貴方達の父親・・・天川覇琉は人間じゃ無い・・・純血なの・・・私とお父さんの正体は・・・」

先を言おうとした瞬間、その場に緊張が走った。聞いている遊輔達にも緊張が走っていた。

彩華「お父さんは冥界に生息する稀少戦闘種族の一つで悪魔の上位種と呼ばれる魔人族で・・・私は吸血鬼の祖先の真祖の力を持つ吸血鬼・・・」

統夜「俺達は・・・魔人族と・・・」

鮮華「真祖のハーフ・・・」

彩華「種族の話の他に・・・私は三大冥王の一人にして真祖の吸血姫と呼ばれ・・・覇琉は三大冥王の一人『魔帝剣聖』と呼ばれるほど強大な力を持った存在・・・私達は出会い・・・色々な事があったけど・・・貴方達二人を授かった・・・けど・・・」

統夜「けど・・・？」

彩華「冥界の追手が迫って来た・・・だから巻き込まれないように貴方達を英都に置いて消えた・・・」

これを聞いた二人は啞然としていた。無理も無い。自分達の本当の種族に両親が三大冥王の内二人という事は大き過ぎたからだ。

統夜「冥界の追手が迫って来たから俺達を巻き込まないように消

えた理由か……」

彩華「本当にごめんなさい……」

統夜「理由が理由だからな……俺は責めたりはしない」

鮮華「そう……ですね……」

彩華「乙女から貴方達の事はよく聞いているわ。色々な友達や恋人に囲まれて幸せに暮らしてるって……」

微笑しながら二人を見つめていた。

統夜「母さん……」

彩華「義理の娘が出来る母親は辛いかもしれないわね」

三大冥王の一人でも母であり親馬鹿なんだと二人は思い知った瞬間であった。

統夜「ま、まあ……確かに……一つ聞きたい事があるんだけどいい？」

彩華「何かしら？」

統夜「万が一……俺か鮮華の血を誰かに輸血したら変質とかするの？」

統夜の言葉を聞いた彩華は真剣な表情になり手を顎に置き始めた。

統夜「ど、どうかしたのか？」

彩華「単刀直入に言うわね……変質するわ……そして……真祖の力は……血でも受け継がれるの……輸血であっても……」
鮮華「……」

彩華の言葉を聞いた鮮華は顔を顔面蒼白になって黙っていた。

彩華「どうかしたの？」

統夜「実は・・・」

彩華に文乃が事件で大怪我を負い、鮮華の血で輸血した事を話した。

彩華「確実に受け継がれるわね・・・人間から真祖の吸血鬼になるって事もありえるから・・・でも彼女は受け継いでいるのは真祖だけじゃない・・・『蒼炎』も・・・」

統夜「何で文乃に蒼炎も受け継がれるんだよ！！」

彩華「蒼炎は霸琉の家系で代々受け継いでいるの・・・統夜と鮮華にもあるの・・・」

それを聞いた二人は真祖の他に蒼炎も受け継がれている事を聞いて顔を青ざめてしまった。

真祖だけ受け継がれるかと思いきや、精神を崩壊させ、魂を喰らう力を持つ蒼炎も受け継がれる事は予想外だったのだから。

統夜達が本当の種族を知った事を見ていた遊輔達は固まっていた。魔族と真祖のハーフは勿論驚いていたが、問題は両親の事である。彩華だけと思っていたが、父親である天川霸琉が三大冥王の一人の魔帝剣聖である事に対しそれ以上の衝撃が来て驚いていた。

遊輔「マジか・・・」

はやて「真祖と魔族のハーフ・・・」

シャル「（統夜の深層世界にいた蒼と黒の甲冑の男が魔人を司る解放形態なら・・・話が早いわね）」

深層世界にある漆黒の城の中で出会った男の事を思い浮かべて、そう納得していた。

ソラ「とんでもない事を聞いたな」

アリス「ああ・・・奴の強さの秘密を聞いた気がするな・・・まあ・・・私らも似たようなものだが・・・あの二人はそれ以上に違うな」

顔には出していない二人だが、内心驚いていた。

ギルシア「魔族と真祖のハーフか・・・だが同志統夜は違う」

レーティア「魔族と真祖、堕天使の混血ね」

ギルシア「悪魔の上位種・・・か・・・」

ジャンヌ「訳ありの世界に転生しちゃったね・・・」

ギリシアは手を顎に当て、神妙な顔付きになり、レーティアとジャンヌは腕を組んで話を聞いていた。

文乃「・・・・・・・・」

千世「真祖以外に魔族の力と蒼炎の力が宿っていると聞いたら・・・ねえ？」

優子「そうね・・・混乱し・・・どうすればいいか分からなくなるわね」

真祖以外に魔族と蒼炎の力がある事に両手で頭を抱えている文乃に対し、千世と優子はどうすればいいのかわからなくなっていた。

それは三人以外の統夜ラバーズも同じ事が言えているのだ。

遊輔「あんまり・・・いいとは言えないけど・・・起きてしまった事は・・・受け入れた方がいいよ」

今真実を聞いてしまったという現実を受け入れるよう言った。

はやて「せやけど・・・あまりにも大き過ぎるで・・・」
遊輔「それをあいつら兄妹の前で言えるか？」

遊輔達以上に堪えている天川兄妹を見て統夜ラバーズに問い掛けた。

遊輔「あいつらにはあいつらなりに受け入れている・・・受け入れる事は決して恥じゃ無い・・・」

はやて「せやな・・・しつかりせんと・・・」

咲夜「それもそうよね」

雪蓮「統夜は統夜だしね」

シャル「どんな種族でも受け入れるわ」

はやてと統夜ラバーズ年上組は直ぐに受け入れ、他の方々も受け入れ始めた。

よく考えれば分かる事なのだが、どんな種族でも統夜と鮮華なのだから・・・

遊輔「これなら安心だな」

マリオ「そうだな」

受け入れる様子を見た遊輔とマリオは良かったと思いきり微笑んでいた。

達哉「お前は統夜の種族を解析してどう思った？」

零斗「俺？俺は種族面で手の平返すような大馬鹿じゃないんでね・・・

・人族だろうがなんだろうが・・・受け入れる」

達哉「そうか・・・最初は驚くが・・・本当の事でも普通に接するのが一番だ」

明久「それもそうだよね」

ダイチ「だな」

たけし「統夜さんは統夜さんですしね」

今まで一緒に戦ってきた仲間も納得し受け入れていた。

魔人と蒼炎が受け継がれている事を知った統夜と鮮華は啞然としていたが……

統夜「まあ……これは受け入れるしか無いわな……」
鮮華「それも……そうですね……」

二人は徐々に受け入れつつあった。

彩華「蒼炎の力はどれぐらい知っている？」

統夜「相手の精神を絶望の淵へ追いやり崩壊させ……魂を奪い……己の力として取り込む……だろう？」

彩華「それならいいけどね……」

彩華がそう言うと鍔は白銀、刃渡り4尺あり、柄は真紅の鞘付の日本刀を取り出した。

統夜「何だ？それは……」

彩華「断蒼刀^{だんそうとう}……蒼き炎で全てを断罪する刀……貴方達の父親である覇琉が使った武器よ」

統夜「親父が……何故俺に……」

彩華「今の貴方に託せると思ったからよ……」

目をつぶりそう語ると統夜に渡した。

彩華「説明を続けるわね。蒼炎は確かにその力はあるけど……神や転生者の場合取り込んだ場合、転生を二度とさせる事だけでなく、

その魂を破壊する事も可能になるの」

統夜「神や転生者をねえ……」

彩華「蒼炎は一種の転生者殺しと神殺しの力が備わっている力なよ。蒼炎で精神崩壊させ、能力全てを破壊し、普通の人間レベルにする事も出来るわ。普通に生まれた存在には出来ないけど」

統夜「普通に生まれた存在……死神や悪魔のような存在もか？」

彩華「そうよ。転生者と神に対して特化した武器だから……」

蒼炎の真の力と断蒼刀の能力を聞いた統夜は驚愕するしか無かった。転生者や神に対抗できる力も備わっているとは予想もしていなかったのだから……

彩華「まあ……蒼炎の真の力は断蒼刀が無ければ意味無いから……試しに抜いてみたら」

統夜「ああ……」

彩華に言われ刀を鞘から抜くと異変が起きた。

統夜の全身から蒼炎を発してしまったからだ。

統夜「な、何じゃこりゃああアアア!!!」

鮮華「な、何ですか!?!あれは!!!」

彩華「あれは蒼炎を持つ者にしか発現できないもので……断蒼刀の力でもある。いわば蒼炎の真のリミッター解除の役割を持つわ」

突然統夜の全身から蒼炎を発している事に驚愕した鮮華は彩華に問い掛けたが、冷静にそう答えた。

彩華「鞘に納めなさい」

統夜「あ、ああ……」

断蒼刀を鞘に納めると全身に発した蒼炎は消えた。

彩華「これが蒼炎の真の力よ……」

統夜「こいつは恐ろしいもので……」

彩華「一つ聞いていい？」

統夜「何だ？」

彩華「統夜はこれを聞いてもまだ戦うの？」

統夜「ああ……大切なものを守る為と歪みを破壊する為……そして……」

彩華の問いに答え、遊輔達がいるであろう場所を見て……

統夜「熱き焰と死神の力を持つ虎という好敵手が出来た……」

彩華「貴方に好敵手が出来たのね……」

統夜「悪いかよ……」

彩華「その答なら……大丈夫ね」

遊輔という好敵手が出来た事に喜びを感じている統夜と鮮華に抱き付いた。

統夜「な、何だよ……突然」

彩華「本当に大きくなって……」

鮮華「母さん……」

自分の子供達が成長していた事に涙を流し始めていた。

彩華「最後に一つだけやっておきたい事があるわ」

しばらく抱きしめ終えた後、統夜と鮮華に右手を置き、ヴァンパイア式の魔法陣を二人の額に展開し始めた。

統夜「こ、これは・・・」
彩華「貴方達に封印していた力を解き放つ為の術よ」

点滅していた魔法陣は消えた後、統夜と鮮華から蒼と真紅の光が光り始め、公園一帯を覆った。
光が収まると統夜と鮮華、統夜ラバースが漆黒の城の前に集まっていた。

はやて「ここは・・・」

「お兄さんの深層世界ですよ」

はやてが後ろを振り向くと白いパーカーに黒のハーフパンツ姿の肩まである金髪に蒼い瞳をし幼さを残した少年である煌天使と紅のマントを羽織り髪が銀髪、瞳が真紅、瞳孔が縦になっている紳士服を着た男性である真祖の二人がいた。

統夜「お前ら・・・何で・・・」

煌天使「だって僕達はお兄さんに取り込まれるイコール常に一緒にいるという事にもなるんですから」

真祖「そういう事だ・・・」

はやて「なるほど・・・」

煌天使と真祖はシャルの方へ顔を向けた。

シャル「何かしら？」

煌天使「お兄さん以外で君がはじめてというのはビックリしたよ」

真祖「ああ・・・私も内心驚いたがな・・・」

シャル「貴方達は二つの解放形態を司っていたのね」

煌天使「そういう事」

シャルは煌天使と真祖を見て解放形態を司っていた事を聞いて、煌天使は肯定した。

千世「で・・・アンタ達は誰？」

煌天使「僕はお兄さんの解放形態である煌天使。よろしく千世お姉ちゃん」

千世「何で私達の・・・統夜の解放形態だから・・・か・・・」

真祖「その通りだ・・・私の名は真祖・・・統夜の解放形態である真祖を司る・・・」

煌天使と真祖は統夜ラバーズと鮮華に自己紹介をしていた。

統夜「地球にいたプリムラまでいるとは・・・」

プリムラ「学校で授業を受けていたら・・・突然蒼と真紅の光が光り出して・・・」

何故自分がここにいるのかを統夜達に説明し、なるほどと納得していた。

シャル「ここは相変わらず恐ろしい所ね」

周りが無残な形をした幾つもの戦士や異形等の死体が横たわっているのを見渡すと、戦いに参加していないラバーズは吐き気を催した。

はやて「やり過ぎやる・・・」

真祖「それがこの城にいる魔人化を司る・・・魔王のやり方だ・・・
・全てを焦土と化させんが為にな・・・」

はやてがやり過ぎと思っていたが、真祖が魔人化を司る存在のやり

方だと教えた。

その後、鮮華と文乃を見つめた。

文乃「な、何よ？」

真祖「いや・・・君達に紹介しておきたい人物がいるんだ・・・直に来る」

煌天使「噂をすれば・・・こっちだよ」

煌天使が右手で招きながらこっちこっちと言って、こっちへ来る二人の人物を呼んでいた。

二人の人物がこちらへ着いた瞬間、天川兄妹と統夜ラブーズは驚愕な表情になった。

髪が銀髪で瞳の瞳孔が縦になり、色が真紅に、背中から一對二翼の蝙蝠状の真紅の翼を生やし、胸元を開けた真紅のドレス姿の鮮華と髪が真紅の髪に瞳の瞳孔が縦になり、色が真紅で背中から一對二翼の漆黒の翼を生やし、漆黒のドレスを着た文乃の二人が来たのだから・・・

統夜「まさか・・・二人は・・・」

真祖「お前の言う通り・・・鮮華と文乃の解放形態を司る存在だ・・・

・お前達・・・挨拶をしろ」

真月「鮮華の真祖の解放形態を司る真月よ。よろしく」

鮮華の真祖の解放形態である真月がスカートの裾を指で持ち上げて、挨拶をした。

真乃「文乃の真祖の解放形態を司る真乃・・・よろしく・・・」

ただ喋るだけの挨拶をして終わらせた。

すると、二人は挨拶を終えると消えてしまった。

統夜「消えた……」

真祖「まだ二人を認めていないって所だろうな……いずれ会えると思うから気を落とすな……」

鮮華「はい……」

文乃「いずれねえ……」

二人はただ真祖の言葉を傾けるしか出来なかった。

統夜「中に入るか……」

統夜の言葉で一同は城の中へ入った。

中へ入ると、先程と同じく無残な死体が横たわっていたが、慣れて無い人達は見ないように目を背けて歩いていった。

王室へ辿り着くと背中から真紅の蝙蝠状の五対十翼の翼を生やし、髪の色と瞳の色が漆黒の髪に血のような赤い瞳、蒼と黒の混合色の鎧を着た褐色肌の男と背中から漆黒の蝙蝠状の四対八翼の翼を生やし、髪と瞳の色が真紅の髪に金色の瞳、真紅と黒の混合色の鎧を着た褐色肌の女性、背中から蒼い蝙蝠状の三対六翼を生やし、髪と瞳の色が金髪に翡翠色の瞳をし、翠と黒の混合色の鎧を着た褐色肌の女性が待っていたかのように立っていた。

三人を見た統夜達（シャルと煌天使、真祖を除く）は驚き始めた。

三人の容姿が背中から翼が生えている所と髪と瞳の色、褐色肌以外は統夜と鮮華、文乃の三人に似ているのだから。

「はじめて出会うな……」

統夜「そうだな……」

「お前は知っているだろう……俺が魔人化を司っている事に……」

統夜「ああ……お前が魔王と呼ばれている事もよおしく分かった

よ・・・」

男から発する尋常でない覇気とオーラを感じて魔王と呼ばれている事に納得していた。

統夜とはやて、メアリ、咲夜、華琳、雪蓮、シャル、煌天使、真祖は何か持ちこたえていたが、彼ら以外は顔を青ざめ何とか保っている状態だった。

「ふん・・・まあいい・・・我を真祖と煌天使みたいに上手く使えろと思うな・・・」

煌天使「僕達を甘く見ていると・・・後悔するよ？」

真祖「確かにお前の力は強大だ・・・いずれ・・・お前も知るだろう・・・『絆』の力を・・・そしてお前の力を扱える日が来る」

「ほざけ・・・」

煌天使と真祖は男を睨みつけながらそう忠告したが、男は聞く耳持たずだった。

「我が求めるのは愚かな存在を滅し・・・世界を焦土に変える・・・それだけだ・・・」

はやて「そんな事したら・・・あかん！！統夜の一部なのに・・・何でそんな考えを持つんや！！」

男のやり方にはやては怒鳴って抗議した。

「貴様には分かるまい・・・こいつ（統夜）が人間や患者共から受けた仕打ちを・・・魔法以外のものは邪道だと虐げ・・・愚かな存在が放った滅びの光で仲間を失った・・・違法実験や魔法主義を掲げる患者など・・・全次元世界に居場所は無く・・・魂ごと滅する事こそ我の心理だ・・・欠陥品など存在する価値は無い」

男の言葉に統夜達は黙ったと同時に怒りを覚えた。

秀吉「お主は魔人を司る存在と同時に負の感情でもあるのか？」

「無論だ・・・統夜が受けた仕打ちは煌天使と真祖も知っている・・・」

煌天使「でもやったのは一部だけだね・・・」

秀吉の言葉に男は否定せず、統夜が受けた仕打ちを自分以外に煌天使と真祖も知っていると答えた。

真祖「だが・・・過去に囚われたままでは何も意味が無いぞ？」

「ふん・・・分かりきった事を言うな・・・我は貴様らとは違う・・・」

そう言った後、男は背を向け、二人の女性も続いて背を向けた。

統夜「おい・・・何処へ・・・」

「我らはいずれ・・・貴様らが魔人化を扱える領域へ辿り着いた時こそ我らと・・・相見える時だ・・・」

それだけを言い残した後、三人は消えた。

その後、真祖と煌天使を除く一同は光に包まれ、場面が英都に変わり、統夜と遊輔の二人が資料博物館で見た魔獣の髑髏の様な顔に黒と白の肉体をした異形である魔人王ゾーグと戦う所が映っていた。

統夜「これは・・・」

はやて「統夜と遊輔君が魔人王ゾーグと戦っているのが映つとる・・・」

シャル「一種の予言なのかしら？」

それぞれの感想を口にした後、光り始め、ボロボロになっている英都にて統夜とイグニスとの激闘が映された。

文乃「統夜と……」

メアリ「イグニスの戦いね……」

希「にやあ……ボロボロになってる……」

華琳「運命なのかしらね……統夜とイグニスの戦いは……」

統夜のイグニスの激闘の後、光り始め、統夜と遊輔の蒼紅一騎討ちが行われる所が映されていた。

エステル「この二人の戦いも免れないものになっていますね……」

優子「蒼と紅の戦い……」

秀吉「好敵手と聞いていたが……互角に戦っておるようじゃの……」

雪蓮「遊輔もそれなりの戦闘能力を持っているから当然じゃない？」

咲夜「これは近い未来に起こるかもしれないわね」

統夜とイグニス、統夜と遊輔の戦いは免れないものだと感じた一同は三つの場面を見終えた瞬間光に包まれた。

光に包まれた後、かつて統夜が夢で見た白い空間だった。

「天川統夜よ……」

華琳「誰？」

「お前達とは初対面だったな……ワシは……イグニスコピーの考案者であり……実行した者じゃ」

統夜達の前に現れた白衣を着た老人がそう言うと鮮華と統夜ラバーズは驚愕な表情になり驚いていた。

はやて「アンタが・・・統夜に・・・」

統夜にイグニスコピーを施し、蒼いイレギュラー事件の発端を作った老人を睨みつけていた。

「そうじゃ・・・」

メアリ「で・・・イグニスコピーを統夜に施した人物が一体何の用？」

「・・・イグニス・・・ルシファアの新たな道を進んだ力に覚醒した天川統夜を見に來ただけじゃ。流石イグニスコピーの最高傑作じゃ！！実に素晴らしい！！」

統夜を見て狂ったかのように笑いだし歓喜していた。

イグニスコピーの最高傑作という言葉に鮮華と統夜ラバーズは怒りを覚え、睨みつけた。

統夜「煌天使か・・・俺はアンタとは違うやり方で狂った世界・・・歪んだ世界を破壊する・・・」

「ほう・・・最高傑作にしてはいい答えだ・・・見届けさせてもらおうか・・・」

雪蓮「アンタのような奴に言われたくないわよ・・・統夜はそのお陰で助かったけど・・・それとこれとは話が別よ」

老人を睨みつけながらそう言った。

「お前は憎まないのか？」

統夜「何を？」

「イグニスコピーを施した事に対してだ」

統夜「博士・・・アンタを憎んで何のメリットがある？もしアンタ

が生存し憎しみのまま殺してしまえば哀れな末路しか来ない・・・
そう感じるからだ」

博士の言葉に対して統夜は憎んでも意味が無いとそう答えた。

博士「魔族と真祖、墮天使の混血にしては人間らしい心を持つているな」

統夜「人間らしい心・・・か・・・それはどうだろうな・・・」

博士「ワシは腐敗した世界を・・・狂った世界を憎んだ故か・・・
イグニスコピーを考案し・・・お前という存在を被検体として施した・・・」

統夜「それが本心か・・・アンタの・・・」

博士の本心である言葉を静かに聞いていた。

博士「統夜・・・ワシの願い・・・お前なりに腐敗した世界・・・
狂った世界・・・世界の歪みを破壊してくれ」

統夜「世界の歪み・・・狂った世界・・・腐敗した世界を破壊する
事は俺自身の意思で行っている・・・そして・・・もう一つある・・・」

博士「もう一つ？」

統夜「全ての力を賭して大切な者達を守る事だ」

博士「そうか・・・」

はやて達統夜ラバーズを一人ずつ見つめると身体が透け始めた。

統夜「お、おい・・・最後に聞きたい事がある」

博士「何だ？」

統夜「星の力を何故俺に浴びせた？」

博士「星の力か・・・身体能力を飛躍的に向上させる為として入れ

た力だ・・・精神力が高かったお前以外は全て失敗に終わった・・・
統夜「・・・星の大きさや死んだ者の数によるが蓄えられた知識や力は膨大になり時空を操る事が可能で・・・癒す力と聞いたが・・・
とんでもないものを浴びせたな」

エアリスから聞いた星の力にそのような力があると知った統夜は真剣な表情になつて考え始めた。

博士「それは間違つて無いが・・・それは被検体が人族の場合なら飛躍的に向上させるものだが・・・お前の場合は未知数だ・・・お前は煌天使に真祖、魔人という概念を超えた時・・・全てを超えた存在・・・純粹種の『超越者』として変革するだろう・・・」
統夜「超越者エラシーダー・・・何だそれは・・・？」

博士「全次元世界に伝わるものだ・・・力と心と身体の三つが自身という存在そのものを超え変革した存在を指す・・・どんな力を齎すのかは知らんが・・・」

はやて「超越者・・・か・・・アンタは統夜がそうなるかもしれへんと？」

博士「ああ・・・彼を想う者達よ・・・彼を・・・天川統夜を支えてやつてほしい」

それだけを統夜ラバーズに言い残し消えた。

はやて「アンタに言われんでも支える・・・そう・・・決めたんやから・・・私自身の心に・・・」

消えた博士に対しそう呟いた。

その後、現実世界へ戻り、プリムラは地球、統夜達は月のスフィア王国に戻った。

統夜「一体……」

彩華「大丈夫？」

鮮華「はい……今見たのは……」

統夜「近い内に起こるかもしれないって事だな」

深層世界とこれから近い内に起こる戦いの場面を見た統夜は冷静にそう言った。

彩華「まあいいけど……統夜……貴方の大切なものと歪みを破壊するという自分の信念に基づいて力を振るいなさい……母親として言えるのはそれだけ……」

統夜「母さん……一つ聞いていい？」

彩華「何？」

統夜「親父は何処かで生きてるのか？」

彩華「ええ。生きているわ。いずれ会えると思うわ」

父親である覇琉は生きているのかと彩華に聞いた所、いずれ会えると答えた。

彩華「これを貴方に託すわ」

右手から瑠璃色、紅蓮、白、赤、深紅、翠の計六個の宝珠を取り出した。

統夜「これは？」

彩華「紅蓮色は桜木遊輔、瑠璃色は朝霧達哉、白は北郷零斗、赤はリュウ・ダイチ、深紅は竜崎たけし、翠は吉井明久に渡してほしいの」

統夜「渡して何をやる気だ？」

彩華「彼らにはまだ眠っている力がある・・・眠っている力を呼び起こす為のものよ」

七個の宝珠をマジマジと見ている統夜に対し言った。

統夜「これでどう使うんだよ・・・」

彩華「貴方の持つ魔法陣を展開し・・・六色の宝珠を落とす・・・その後はその色に適応した者が魔法陣の中に入れば問題無いわ」

簡潔な説明を聞いた統夜は納得していた。

彩華「また会えるといいわね」

統夜「ああ。例え遠く離れても・・・俺達は親子だ」

彩華「ありがとう。統夜」

彩華は静かに去って行った。

すると、残された天川兄妹は遊輔達がいる方向へ歩き出した。

遊輔達を見つけるとやっぱりと思ったのか「はあ」と溜息をついた。

統夜「早速で悪いが遊輔に達哉、零斗、ダイチ、たけし、明久・・・お前らの眠っている力を呼び起こすから」

レイヴ式の魔法陣六つを展開して、瑠璃色、紅蓮、白、赤、深紅、翠の宝珠を一つずつ落とし、魔法陣がそれぞれ違う色に変化した。

達哉「これは・・・」

統夜「瑠璃色は達哉、遊輔は紅蓮、零斗は白、ダイチは赤、たけしは深紅、明久は翠の光の魔法陣へ入れ」

統夜に言われ、瑠璃色に輝いた魔法陣に達哉、紅蓮に輝いた魔法陣

に遊輔、白く輝いた魔法陣に零斗、赤く輝いた魔法陣にダイチ、深紅に輝いた魔法陣にたけし、翠に輝いた魔法陣に明久がそれぞれ入った。

入って何も変化がなかった。

ギルシア「全然変化が起きないぞ」

統夜「速攻で変化したらおかしいだろ……」

マリオ「眠っている力を呼び起こす……か……」

しばらく時間が経ち、それぞれ変化が起き始め、六色の光が光り六人の身体に変化が起き始めた。

遊輔「身体が熱い……」

達哉「これが俺の眠っている力……」

零斗「こいつは……」

ダイチ「凄い力を感じる……」

たけし「おお……」

明久「これが僕の……眠っている力……」

遊輔は髪と瞳が紅蓮に変化し、達哉は背中から三対六翼の瑠璃色の翼が生え、髪と瞳の色が瑠璃色に変化し、零斗の髪の色が白く輝いた銀髪に変化し、マイティコートに書かれている赤字で書かれている自在が銀色で書かれた『真説自在』に変化し、オーラが以前より強く感じたものに变化し、ダイチは髪と瞳が赤くなり、たけしは髪と瞳の色が深紅に変化し、明久の髪と瞳の色が翠に変化した。

なのは「あれが……」

蓮華「死神とは別の力か……いや……遊輔だけにしか無い眠っている力か……」

遊輔の姿に驚いている遊輔ラバーズ。

フィーナ「あれが達哉の眠っている……力」

菜月「背中から翼が生えてるよ……」

翠「でも綺麗……」

達哉ラバーズの姿をマジマジと見て驚いていた。

アリス（チエンバース）「零斗の髪の色とマイティコートに変化が起きてる……」

零斗の力とマイティコートが変化した事に驚き……

エリー「あれが……眠っているダイチ君の力……」

ダイチの姿を驚いているエリー

メイメイ「あれがたけしの眠ってる力ね」

桂花「だけど……完全じゃないわね」

ルイス「確かに……」

眠っている力を見た桂花達は冷静になって見つめていた。

瑞希「凄いですね……」

美波「うん……」

早苗「そうですね」

明久ラバーズの面々は純粹に驚いていた。

しばらくすると六人は元の姿に戻り、力も元に戻った。

遊輔「今は・・・」

統夜「お前達の眠っている力が解放されたんだ・・・だが・・・いつ目覚めるかは分からん」

零斗「そうか・・・それはお前も同じだろ？」

統夜「ああ・・・そうだな・・・」

零斗の問いに統夜はふっと笑いながら答えた。

マリオ「しかし・・・お前の蒼炎に一種の転生者殺しの力が備わっていたとは・・・」

統夜「まあ・・・断蒼刀が無ければ発揮出来ないがな」

断蒼刀をマリオに見せながらそう言った。

ソラ「その刀は蒼炎が出せるお前らにしか扱えない訳か」

統夜「そうだな。だが使い道は選ぶつもりさ・・・」

統夜がそう言うのと公園を後にした。

その後、一同は解散し統夜と統夜ラバーズ、遊輔、遊輔ラバーズ、マリオ一行、ギルシア一家だけが残った。

統夜「あれ？ギルシア達は一家で楽しむんじゃないのか？」

ギルシア「大勢の方が楽しめると思ってたな」

統夜「そうか・・・一つ聞きたい」

ギルシア「何だ？」

統夜「ギルシア達・・・転生者は・・・断蒼刀・・・蒼炎についてどう思う？」

統夜の問いにギルシア達はふっと笑みを浮かべこう答えた。

ギルシア「普通なら恐れると答えるが・・・怖くは無いな。お前が使うんだろ？なら問題ない」

レーティア「確かにね」

ジャンヌ「統夜君なら大丈夫と信じてるよ」

蒼炎と断蒼刀を使う統夜なら信頼出来るかのように答えた。

シャル「この場にレオンとユウカもいたら三人と同じように答えると思うわね」

統夜「そうだな・・・」

あの二人ならそう答えるだろうなと思ったのかそう答えた。

千世「文乃に施した封印は大丈夫なの？」

統夜「一応はな・・・真祖と魔人、蒼炎を抑えているから・・・何らかの事が起きなければの話だがな・・・」

千世「そう・・・アンタを信じるしか無いわね」

統夜が冷静に答えた後、千世は統夜の目を見てそう返した。
その後、黙っている文乃を見た。

統夜「お前は・・・大丈夫なのか？」

文乃「何が？」

統夜「真祖以外に魔人と蒼炎の力が宿っている事を聞いて・・・」

文乃「何とも無いわよ・・・」

統夜「素直じゃねえなあ・・・」

文乃「これが・・・素直・・・よ・・・」

声が震えている文乃に対し、統夜は手をポンと文乃の頭に置いた。

統夜「無理しなくていい……俺や鮮華はそれ以上の衝撃が走った……」
文乃「そうよね……アンタ達が一番驚いているのに……ごめん……」
統夜「気にするな」

謝る文乃に対し、統夜は気にしていないような素振りで答えた。
そして遊輔の方へ顔を向けた。

統夜「遊輔……お前とはいずれゴタゴタが終われば……」
遊輔「それは俺も考えていた……混沌……修羅……イグニス
という存在を倒した時こそ……」
統夜「俺とお前の戦いで締めだ……」

それを聞いた統夜ラバースと遊輔ラバースは戦慄が走った。
全ての存在が倒れた瞬間、蒼と紅の戦いが始まるのだから……

マリオ「免れない戦い……か……」
リュウケンドー「そうだな」
ソロ「あの二人の運命ってやつかな？」
アッキー「蒼と紅の一騎打ちか……」
ムツ「……いざれ激しいものとなるな……」
チルノ「二人の決着が終着なのかな」
銀次「二人はいずれ決着を着けなくちゃいけないだね……」
アーカード「そのようだな……」

マリオ達はただ静かに見守っていた。
それと同時に統夜と遊輔は好敵手なのだと感じていた。

ギルシア「いずれあいつらは決着を着けなくてはいけない運命か……」

」

レーティア「蒼紅の戦いか・・・」

ジャンヌ「味方だけど・・・決着は免れないってやつかな・・・」

ギルシア達もマリオ達と同じく静かに見守っていた。

統夜「だが・・・今は楽しもうぜ」

遊輔「ああ」

二人は笑い合い始めた。

今は共闘し合う仲間ではあるが、二人はいずれ決着を着けなくてはならない時が迫っているのだから・・・

第六十二話『母からの真実』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

ソラ「天川兄妹にああいう真実があつた事には驚いたな。三大冥王のうち二人の間から生まれたとはな」

ソラ「あそこまで人間らしい魔族と真祖のハーフはあの兄妹以外はいないな」

ソラ「真実を聞き終えた後、各自自由行動を取り、大浴場で疲れを癒やし・・・修学旅行最終日を満喫する」

ソラ「今回は『罰当たりになるから嫉妬で巨乳と肉を憎んではない』テイクオフだ」

統夜の真のプロフ及び断蒼刀の詳細（前書き）

統夜の真のプロフ+ と断蒼刀の詳細です。

統夜の真のプロフ及び断蒼刀の詳細

名前：天川 てんかわ 統夜 とじや

性別：男

種族：魔人と吸血鬼（真祖）、墮天使の混血

容姿：背中まで伸ばした金髪に蒼い瞳をし女性みtainな顔立ち

身長：186cm

年齢：18歳

魔力光：蒼

魔力：SS（EX）

気力：SSS（EX）

霊力：S（EX）

妖力：S（EX）

覇気：AAA（EX）

（ ）内はリミッター解除時

魔術式：レイヴ式とヴァンパイア式、ルシファー式

デバイス：アドヴァンスメサイア（ネオアーマードデバイス）、セ

イヴァー・ロード・サーディオオン（ロードガーディアンデバイス）、

セイクリッドファンング（アーマードデバイスウエポンドライバータ

イプ）

心装：蒼雷六爪

武器：合体剣、断蒼刀

性格：少々熱い所がある冷静な性格をしているが冷酷な一面を持つ。

ドSな所もある

趣味：ギャンブル、旅

好きなもの（事）：パチンコ、ピザ、牛丼、甘いもの、辛いもの

嫌いなもの（事）：狂った世界、世界の歪み、理不尽な事

詳細：様々な事を経験し、霸王色の覇気に覚醒し霸王として目覚めた統夜。

自分の種族が純血の魔人族であり三大冥王の一人『魔帝剣聖』と呼ばれた父親と純血の真祖の吸血鬼であり三大冥王の一人『真祖の吸血姫』の間に生まれた魔人と真祖のハーフという事が分かった。強大な力を秘めている事を知り、制御する為、蒼穹の騎士団の教官として赴任したレオンとユウカの元で修行を始める。

剣術と天神拳をベースに独学だが銃術、霊術、妖術、魔法、結界術を駆使した万能な戦闘スタイルを持つ。

現在解放できる形態は吸血鬼の祖先の力である真祖とイグニスコピーで得た真ルシファーを自分だけの真ルシファーである光の力を持つ煌きの天使の煌天使の二つしか出来ず、魔人化は未だ解放は出来ない。

エアリスに言われた事である一人で背負わない事を思い出し、一人で全てを背負わず仲間に頼り絆を大事にするようになった。

力に目覚めてもはや達統夜ラバーズには頭が上がらないの言うまでも無かった。

魔力変換資質『雷』と『光』、『闇』の三つと特異魔力変換資質『蒼炎』を持つ。

魔人族 ましんぞく

詳細：冥界に生息する稀少戦闘種族の一つで悪魔の上位種にあたる。珍しく純血は少なくなっており、現在の冥界を統べる冥王になれる資格を持つ種族でもある。

強さは悪魔等の魔の種族を超えた力を持つ。

完全に覚醒した場合は背中から真紅の蝙蝠状の五対十翼の翼を生やし、髪の色と瞳の色が漆黒の髪に血のような赤い瞳に変化し、肌が褐色肌に変化する。

真祖 しんそ

詳細：吸血鬼の祖先もしくはその力を直接受け継ぐ存在のこと。

統夜の母親が吸血鬼の祖先であった為息子である統夜と鮮華は真祖の力を受け継いでいる。

その強さは普通の吸血鬼を遙かに凌ぎ、強大な妖力は漆黒の闇よりも深く美しいとされる。

統夜の場合は両肩に紅のマントを羽織り髪が銀髪、瞳が真紅、瞳孔が縦になった姿になる。

尚紅のマントは翼や様々なものに变化出来る。

煌天使^{こうてんし}

詳細：真ルシファーを進化させた光の力を持つ統夜だけの真ルシファー。

速さが真ルシファーを超えており、光に匹敵する速さで動ける。

この時に使えるレアスキル『シャイニングアクセル』が使用可能になる。

『シャイニングアクセル』とは光を自由自在に操るだけではなく、周囲に散布した五気を光に変換させたり、光属性魔法を吸収し相手に倍返ししたり自分の力に変換する事が出来る。

この時の形態は背中から羽の形が機動ウイング状の五対十翼の翼が生え髪の色が白銀に輝いた銀髪、瞳の色が銀色に変化し全身に白銀の刻印が浮かび上がる。

武器：断蒼刀^{だんそうとう}

形状：刃渡り4尺、刀身は黒が混ざった蒼、鍔は白銀、柄は真紅の鞘付の日本刀

備考：統夜と鮮華の父親である天川霸琉がかつて使用していた魔妖

刀。

魔妖刀とは魔剣でもあり妖刀として扱われる武器の名称である。

この武器は父親である覇琉と統夜、鮮華のような蒼炎を扱える存在にしか扱う事が出来ず真の力が発揮されない。

鞘を抜くと使用者は全身から蒼炎を発することが出来る。

蒼炎の真の力はあるとあらゆる生き物の精神を絶望の淵に追いやり崩壊させ、魂を奪い、己の力として取り込み、転生が出来ないようにする力だけではなく、転生者及び神ならば魂を完全破壊する力を持つ。

蒼炎を介して転生者や神の能力を無効にし、破壊し普通の存在にする力も備わっている。

尚転生者及び神の魂を完全破壊する力は断蒼刀が無ければ意味を為さない。

第六十三話『罰当たりになるから嫉妬で巨乳と肉を憎んではいけない』(前書き)

マリオ「いや〜あいつらは」

リュウケンドー「本当に〜」

マリオ、リュウケンドー、ソロ「仲いいな〜」

銀次「あはは・・・HERO'S EPISODE第六十三話始まるよ」

第六十三話 『罰当たりになるから嫉妬で巨乳と肉を憎んではいけない』

第六十三話 『罰当たりになるから嫉妬で巨乳と肉を憎んではいけない』
い』

彩華からの真実を聞いた統夜達はそれぞれ自由行動を取り始めた。

統夜「んじゃ・・・今から俺達はマウンテンサイクルへ行くぞ」
文乃、優子、メアリ「ちよつと待てえーっ！！！」

統夜の言葉に文乃と優子、メアリの三人が待ったを掛けた。

統夜「何だ？」

優子「何だじゃないでしょ！！貴重な時間でなに訳の分からない所へ行くのよ！」

文乃「アンタの考えが解らなくなってきてるんだけど！！」

メアリ「そこで何をやる気よ！！！」

三人の言葉に統夜は

統夜「やる事は一つ・・・面白いものを発掘する事だ。未だ眠っているお宝が眠っているマウンテンサイクル・・・」
メリオ「面白そうだな」
ギルシア「俺も賛成だ。発掘し甲斐がありそうな場所かもしれんしな」

リュウケンドー「面白そうな場所っぽいな」

ソロ「お宝見つかるといいな」

アッキー「そうだね」

ムツ「・・・やってみる価値がある」

銀次「いいね。お宝探しは」

マリオ達も統夜の意見に賛成していた。
未知なる世界でお宝探しは滅多に出来ないからだ。

咲夜「面白そうでいいんじゃない？」

華琳「早速案内しなさい」

雪蓮「どんなお宝が眠っているのかしらね」

シャル「面白くなりそうね」

はやて「是非行ってみたいわ〜」

カナ「だね〜」

千世「面白そうね」

統夜ラバーズの年上組とノリのいい人達が賛成した。

メアリ「お宝探して・・・碌なものが無いと思うけど・・・」

エステル「メアリさん・・・マウンテンサイクルにはスペースバン
ガードやセイクリッドファンクといったものが発掘されたのです」

マウンテンサイクルから発掘された事を呆れた表情をしたメアリに
言った。

統夜「そうだぞ。 姫御前」

はやて「そうやで。 姫御前」

千世「ここは受け入れなさい。 姫御前」

カナ「滅多には入れないのよ？ 姫御前」

咲夜「ここは気合いを入れなさい。 姫御前」

華琳「気を引き締めなさい。 姫御前」

雪蓮「ここは楽しくしなさい。 姫御前」

シャル「今の内に楽しまないと損するわよ。 姫御前」

メアリ「余計なお世話よ……って誰が姫御前じゃゴラアアアアアアア！！！！！」

統夜達のボケた発言にメアリは額に青筋を浮かべ、叫んだ。

この光景を見た文乃と優子の二人は右手を額に置いて「はあ……」
とため息をついて呆れ始めた。

統夜「さ、行くか」

メアリ「そうだな」

リュウケンドー「楽しみだぜ」

メア리를落ち着かせた後、統夜達はマウンテンサイクルへ移動した。
着いた後、一同はどんなお宝が眠っているのか楽しみにしていた。

メアリ「楽しみだな」

統夜「そうだな。宇宙服を着なければ無理だが」

マウンテンサイクル発掘場にいるメンバーは統夜と遊輔、はやて、カナ、咲夜、華琳、雪蓮、シャル、メアリ、ギルシア、メアリ、リュウケンドー、ソロ、アッキー、ムツ、チルノ、銀次がいた。
その内メアリは統夜とはやてに無理矢理連れて来られたのか、ムスっとしていた。

発掘場にいないメンバーはマウンテンサイクルにある施設の中で待機している。尚スフィア王国の兵士達に許可を貰っている。

メアリ「何でこんな事を……現実に確率は少ないのに……まだまだ子供ね……」

はしゃいでいる統夜とはやて、千世、カナを見てそう呟いた。

統夜「んじゃ・・・各自発掘開始」

それぞれ発掘作業を始めた。

尚統夜と遊輔、はやて、ギルシアの四人、華琳とカナ、メアリの三人、咲夜と雪蓮、シャルの三人、マリオとアッキー、ムツの三人、リュウケンドーとソロ、チルノ、銀次の四人のチームで分かれている。

統夜チーム

統夜「何が出てくるか楽しみだな」

遊輔「そうだな」

はやて「せやな」

力任せに発掘していた。

はやて「力仕事ってええな、身体動かした方が気持ちがあええ」

嬉しそうに発掘していたはやてだった。

ギルシア「何が出てくるか楽しみだな」

統夜「だな。大吉が出ると嬉しいぜ」

勢いよく掘っていた統夜とギルシアの二人だった。

華琳チーム

華琳「さあ・・・やるわよ。カナーチャにメアリ姫」

カナとメアリにそう言うと、二人して額に青筋を浮かばせていた。

カナ「誰がカナリーチャよ！」

メアリ「誰がメアリ姫よ！！」

当然二人は華琳に叫んでツツコミを入れた。

華琳は笑みを浮かべて軽く流していた。

華琳「カナ・・・貴方は奴隷はどうしたの？メアリ・・・貴方は伊予河野の巫女の仕事は大丈夫なの？」

カナ「いないわよ・・・」

メアリ「そんな仕事無いわよ！」

華琳のドSな問いにカナは集中しているのか静かに答え、メアリは怒鳴ってツツコミを入れた。

因みに華琳も作業をしている。

華琳「今度は野井原のメアリと名乗ったらどうかしら？」

メアリ「名乗らないわよ！！」

カナ「ちよつとメアリ、さぼってないでちゃんとやりなさいよ！」

華琳「そうよ。閣下」

メアリ「それは華琳が邪魔をして・・・誰が閣下よ！！」

華琳の話で集中していないのかカナと華琳に怒られ、閣下と呼んだ華琳をジト目で睨んでツツコミを入れていた。

咲夜チーム

咲夜「便利ね。シャルの腕って」
シャル「そう?」

腕をドリル状にして発掘しているシャルに驚きつつも咲夜は作業を続けていた。

雪蓮「そうね」

咲夜「お宝を手に入れるわよ」

咲夜、雪蓮、シャル「おゝ!!!」

三人は気合いを入れ、発掘を続けていた。

マリオチーム

マリオ「何かいいのがあるといいな」

アッキー「そうですね」

ムツ「……………貴重なものを欲する……………」

マリオ達も順調に発掘作業が進んでいた。

リュウケンドーチーム

リュウケンドー「何が入っているのかは……………掘ってからのお楽しみに」

ソロ「そうだね」

チルノ「アタイ達の掘った場所から最高のお宝が出るといいな」

銀次「宝石とかあったら嬉しいね」

楽しそうに発掘を進めていた。
しばらく時間が経ち、発掘作業を完了させ、残りのメンバーが待っている施設へ戻った。

千世「何かいいものが手に入った？」

統夜「俺らのは・・・これとロボットだな」

丸いカプセル状の物体と人型ロボット、虹色の宝石が付けられたネツクレスを見せた。

文乃「何それ？」

統夜「ちよつと解析してみよう。バビロニア。フォローを頼む」

バビロニア（了解）

アドヴァンスフォンとバビロニアを繋げ、人型ロボットの解析を始め、直ぐに結果が分かった。

統夜「こいつは・・・フライヤードールだな。ドライバーでもなく
アーマードでもない・・・」

希「・・・フライヤードールって何？」

統夜「要するにビット・・・無線で自律行動されるビーム砲の人型版って感じかな」

何らかの武装がされた人型ロボットを見ながらそう説明した。

ギルシア「コストが高そうだな」

統夜「高そうだなじゃなくて高いの。もしフォーチュンエンターナルにあのようなフライヤードールがあったら全武装をフライヤードールと呼ばれた兵器に統一させなくちゃいけないんだから」

ジャンヌ「同じ武装で統一しなくちゃいけないって・・・武装が多

いほどコストは高くなるよね」

統夜「ドラグリーンやファングといった武器より高いからな・・・さて・・・次は」

カプセルの中を開けるとそこには一通のラブレターが入っていた。

一通のラブレターに親愛なる天野銀次へと書かれていたため、統夜は銀次に読む許可を貰う為、聞いてみた。

統夜「これ読んでいい？」

銀次「別に構わないよ」

統夜「じゃあ読もう」『親愛なる天野銀次君へ・・・この手紙を読んでいるという事は私は愛されているという事ですね。私は貴方と会いたい・・・そして・・・会って本気の殺し合いをした後・・・生きていたらホテルのベッドと一緒に語り合いましょう・・・貴方が愛している赤屍』おいしいiiiiiiii!!!!これは明らかにラブレターじゃ無くてホモヤンレターじゃねえか!!!!しかも血で書かれてるし!?!」

とんでもない内容に統夜は少し顔を青ざめ、ツツコミを入れて叫んだ。

ホモヤンレターの内容を知った銀次は顔面蒼白でガタガタと震えて泣き叫んでいた。

銀次「いやああああああ!!!!!!ここでも赤屍さんがアアアアアアアア!!!!!!」

アーカード「落ち着け!銀次!!」

統夜「あれ・・・どうしたの？」

マリオ「銀次先輩は赤屍つて人が苦手なんだ」

統夜「しつかし・・・何でこんなBLに近い手紙を血で書くのかね・・・銀次さんや・・・某大晦日にある番組で某プロレスラーにピン

タされる前の人みたいなりアクションをするとは意外だ」

アーカードに慰められている銀次を見ながら手紙を蒼炎で燃やした。

統夜「次は・・・これだな・・・」

虹色の宝石が付けられたネックレスを見せた。

ギルシア「綺麗なのは分かるが・・・何の効果があるのか分からんな」

レーティア「そうね。売ったらどれぐらいの額になるのかしらね？」

統夜「ま、そうだな・・・俺が試しに着けるから・・・何も無かつたら売るといふ方針で・・・」

統夜の方針に一同は従った。

華琳「私達はこれね」

華琳が見せたものはマリオシリーズに出てくるトゲ甲羅型モンスターであるトゲゾーの瑠璃色のカラーリング版と瑠璃色のシンバルを見せた。

マリオ「何でトゲゾーがいるんだ？」

華琳「知らないわよ。知らない内にここで眠ってたんじゃない？」

カナ「まあ・・・生きている事だし・・・統夜飼っていい？」

統夜「いいんじゃない？名前はとうするんだよ？」

統夜に聞いてみた所、即答でOKを出したが名前に悩んでしまった。

カナ「月にいるトゲゾーだからツキゾーはどう？」

統夜「月のトゲゾーを略したか・・・悪く無いな」

眠っている瑠璃色のトゲゾー改めツキゾーが天川家のペットになった瞬間であった。

他の人達も了承した為、正式なペットになったとさ。

メアリ「このシンバル・・・滅茶苦茶硬いわ」

華琳「そうね・・・持ってもいらぬから・・・マリオ・・・いる？」

マリオ「貰うか。俺の仲間にシンバル使う奴いるからな」

受け取ったマリオはシンバルを使う人物を思い浮かばせていた。

マリオ「こいつはルナティックシンバルでいいな。月のシンバルという事で」

咲夜「私達はこれを見つけてきたわ」

瑠璃色のカラーリングをしたとても大きなトゲトゲが付いている甲羅と瑠璃色のカラーリングをした棘付の鉄球を見せた。

二つのアイテムを見たマリオ達は驚いた。

マリオ「それ・・・クッパの甲羅とトゲワンワンじゃないか？」

統夜「そうなの？」

マリオ「ああ・・・」

シャル「・・・あげるわ」

マリオ「悪いな。クッパへのお土産が出来たな」

統夜「これらって完全ルナチタニウムで出来てるよな？ツキゾーも月の鉱石並に硬いし・・・」

今まで見た品物を見て、そう思ったそうな。

遊輔「昔の人達が作ったものだからな・・・」
統夜「生物もいるがな・・・」

カナの腕で眠っているツキゾーを見てそう言った。

ギルシア「何でも眠ってる所だな」

レーティア「指輪とかあったら嬉しいな」

ギルシア「見つけたらレーティアの薬指に俺が着けてやるさ」

レーティア「ギルシア・・・」

ギルシア「レーティア・・・」

二人の超愛フィールドが展開された事により、鈍感メンバー以外は
苦しみ出した。

統夜「慣れたとは言え・・・慣れないもんだアアアアア！！」

華琳「これは・・・慣れないものね・・・」

遊輔「うおおおおお！！胸に痛みがあああああ！！！！！！」

はやて「あ、あかん・・・眩しすぎる・・・」

文乃「二人が見えないわ・・・」

メアリ「こ、これは・・・胸が苦しい・・・」

咲夜「汚れたものが浄化されるウウウウ！！！！」

雪蓮「浄化されてしまう気分になりそうね・・・」

統夜と華琳は受けた事があるが未だ慣れなかった。
二人の愛は超越したものだから・・・

マリオ「今度は俺達だな」

アッキー「僕達はこれを見つけたよ」

二枚のカードと指の部分がドリル状の爪になっている黒い手袋、瑠璃色のフライパンを見せた。

統夜「何でフライパンがある訳？」

マリオ「さあ？クツパとピーチ姫にいいお土産が出来た・・・」

アッキー「これは・・・CNO・39希望皇ホープ・レイに銀河眼キャラクターアイズ・フォントドラゴンの光子竜だね」

黒と金の鎧を着て、両腰に二振りの長剣、背中に巨大な大剣を背負った戦士が描かれたカードと群青色の装甲を纏った輝くクリアブル色の皮膚をした竜が描かれたカードを見せた。

統夜「デュエルやるのか？」

アッキー「うん」

統夜「そのカードはお前のものにするといい・・・」
アッキー「ありがとう」

二枚のモンスターカードはアッキーのものになった。

統夜「そのグローブ・・・」

マリオ「ドリルクローだな」

統夜「痛そうだな」

リュウケンドー「だな。次は俺達だ」

リュウケンドーチームが見せたものは先端がドリル状の大人の大人が持てない程の大きな槍とベルが付いた銀色の腕輪、羽が付いた巨大な瑠璃色の甲羅を見せた。

統夜「とてつもないお宝を手に入れたな」

チルノ「この大きな槍を持つとアタイはサイキョーになれそうな気

がするよ」

統夜「そうとは限らんかもしれんぞ？」

槍を持っているチルノを見てツツコミを入れていた。

銀次「これは……」

ベルが付いた銀色の腕輪をお宝に近づけるとリーンという音が鳴り始めた。

ソロ「これは宝に反応するからお知らせベルだな」

銀次「そうだね。これはマー君が使っているひまんパタこうらだよね？」

マリオ「そうですね……ですが瑠璃色ではありません」

統夜「違う色のやつを持っているのか？」

マリオ「ああ。こいつはかなり頑丈でどんな攻撃も防ぎ、武器にもなる」

統夜「確かに両立しているな。攻撃に転用されたら痛そうだし」

触りながらそう思った。

千世「個性的なお宝ばっかね……」

エステル「それがマウンテンサイクルですから……ロストテクノロジーが使われているものとかも眠っていますし……それに……一部ですから」

優子「広いのね……」

マウンテンサイクルの広さに優子は啞然としていた。

統夜「んじゃ……そろそろ帰るか」

マリオ「そうだな」

それぞれお宝を持ち帰り、集合場所へ戻り、ホテルへ直行した。

統夜「ギルシア達も一緒か？」

ギルシア「偶然だな」

統夜「そうか・・・」

ギルシア「幼女達を愛でる時間が出るな・・・」

統夜「んな事したらミルクィホームズのファン達を敵に回すぞ？」

ギルシア「それは大丈夫だろう」

ギルシアの自信に満ちた言葉に統夜は「はあ・・・」とため息をついていた。

レーティア「貴方達も一緒に？」

シャル「ええ。明日には帰るけど」

咲夜「今日はゆっくり休むわよ」

それぞれ部屋へ戻り始めた。

統夜「・・・」

部屋に戻った統夜はベッドに寝転んだ。

統夜「俺達兄妹が魔人族と真祖のハーフ・・・か・・・」

アドヴァンスバツクルから封印魔法陣を展開し、断蒼刀を出し、自分の手と一緒に見始めた。

統夜「転生者と神殺しの刀・・・断蒼刀・・・大事に使わせてもら

うぜ・・・」

再び断蒼刀を封印魔法陣の中へ収納した。

統夜「（六人の覚醒で一番気になったのが達哉だ・・・あいつから・・・忍の冥王化に近いものを感じたが・・・まあ・・・いずれ分かるからいいか・・・）」

明久「統夜、そろそろ晩御飯だから行こうよ」

統夜「ああ。分かった」

考え事をしている統夜に明久が声を掛け、部屋から出て食堂へ移動した。

食事が終わり、しばらく時間が経ち、大浴場へ移動した。

統夜「作業した後の風呂は最高になるかもしれんな」

遊輔「だな」

統夜「ダイチ、お前は風呂を覗くなよ？」

ダイチ「何でそれを言うの！？そんな事したら俺は死ぬよ」

統夜「だろうな・・・極悪な人達がいるんだからな・・・念の為だ」

統夜の言葉を聞いたダイチは顔を真っ青にしてしまった。

はやてやメアリ、シャルといったチートな人達の裸体を拝もうとすれば命はいくつあっても足りないからだ。

遊輔「止めておけよ」

ダイチ「くそっ!？」

統夜「さっ・・・入るぞ」

脱衣所に入り、衣類などを脱ぎ、男湯の中に入ると零斗とたけし、ギルシア、ソラ、マリオ、リュウケンドー、ソロ、アッキー、ムツ、

銀次がいた。

ギルシア「奇遇だな」

統夜「ああ」

ギルシア「一つ聞いていいか？」

統夜「何だ？」

何時にも珍しく真剣な表情をしたギルシアが統夜に問い掛けていた。

ギルシア「お前は巨乳と貧乳・・・どっちが好きだ？」

統夜「そっちかい!？」

ギルシアの質問にソラと鈍感メンバーを覗くメンバーが転んでしまった。

ギルシア「どっちなんだ？」

統夜「どっちでも無い」

ギルシア「そうか」

もしこの場に統夜ラバーズの貧乳の人達がいたらガッツポーズをしていたであろう。

統夜「そういうことだ」

明久「僕達以外はいないね」

統夜「あいつら覗きしてるんだろっよ・・・懲りない馬鹿達だ・・・
おゝい・・・何処へ行くこうとしている？ダイチくゝん」

気力を使って透明になっているダイチがいる方向へ顔を向けた。

ソラ「よく分かったな」

統夜「レオンさんから『見聞色の覇気』を学んでいるからな」

ダイチ「反則だな・・・覇気使いつて・・・」

統夜「まあ・・・止めはしないぞ・・・せいぜい『楽しんで』こい」
ダイチ「じゃあ・・・お言葉に甘えて・・・」

透明になり女風呂へ覗きに行った。

ギルシア「いいのか？」

統夜「あいつは絶対後悔するから」

明久「そうだね」

統夜と明久の二人は黒い笑みを浮かべてダイチが出て行ったドアを見ている。

女湯では巨乳がシンボルの東軍と貧乳がシンボルの西軍の天下分け目の決戦が始まろうとしていた。

優子「ちよつと待てえー！！何で天下分け目の決戦！？全然分からないんだけど！？」

はやて「優子ちゃん。どないしたん？」

優子「何でも無いわ」

地文にツッコミを入れていた優子にはやては心配している顔で聞いていた。

メイメイ「たけし・・・この世にいる巨乳共を斬滅する許可を私に・・・」

桂花「巨乳共に不幸を・・・」

瞳を閉じ、刀を握り、巨乳を滅ぼす事を考えていたメイメイと桂花がいた。

リリス「何を考えているんですかアアアア！てか本当に殺る気なんですか?!」

二人に対しツッコミを入れていた。

桂花「何をしているの・・・リリス・・・共に巨乳に不幸を降り注ぐ準備をしないと未来は無いわよ」

リリス「それはオーバーですよ！！てか手伝うつもりはありません！」

桂花「あれを見ても思わないの？」

桂花が指を指している方向にはリリスを見て勝ち誇っている目をしたアリスがいた。

これを見たリリスは少しずつ怒りが出て来た。

桂花「許せないでしょう？あんな心が汚れた存在は不吉を呼ぶ風よ・・・」

桂花の誘惑のある言葉にリリスは乗ってしまった。

リリス「許せません！アリスさんにギャフンと言わせたいです!!」
アリス「ふっ・・・無理だ・・・貧乳リリスに貧乳軍師桂花が私を不幸にする事は出来んと知れ」

桂花「ムキーンッ!!」

リリス「絶対ギャフンと言わせて見せます!!」

桂花とリリス、アリスの三人が言い争いが始まった。

早苗「止めなくていいんですか？」

雪蓮「大丈夫でしょ？」

シャル「私達には関係ないし」

湯船の中で酒を飲んでいる雪蓮とシャルの二人がいた。

因みに早苗とチルノは冷水の湯船の中に入っている。

優子「ちよつと待てエエエエエ！！！何でここで酒を飲んでるの！

？冥琳さんも止めるよう言ってください！！！」

酒を飲んでいる雪蓮にツツコミを入れ、冥琳に止めるように言ったが

冥琳「何度も言ってるんだが・・・止めなくてな・・・」

諦めたのか静かそう答えた。

雪蓮「文乃と優子も一緒に飲む？」

文乃、優子「結構です！！！」

二人揃って額に青筋を浮かべて拒否した。

雪蓮「つれないわね」

冥琳「未成年に酒を飲まそうとするな・・・」

残念がる雪蓮に冥琳は黙ってツツコミを入れた。

なのは「統夜君のラバーズって個性的だよね・・・」

蓮華「全くだ・・・個性的なのが多過ぎるがな・・・」

姉の行動に頭を抱えながらそう言った。

レーティア「賑やかね〜」

ジャンヌ「そうだね」

デビリアス姉妹は微笑みながら湯船に浸かっていた。

二人のたわわな胸が浮かんでいたのは言うまでも無かった。まあ、豊満な胸を持っている人にも言える事だが・・・

アリス（チェンバース）「落ち着くよね〜」

カナ「確かに」

起きているツキゾーを湯船の中に浸からせていた。

湯船の中に浸かっているのか嬉しがつていた。

レーティア「ツキゾーは元気ね」

カナ「元気ですよ」

フェイト「棘が痛そうだね」

カナ「堅いからね〜」

ツキゾーに興味があるのかフェイトはマジマジと見ていた。

すると、はやてはメアリのたわわな胸をじっと見ていた。

メアリ「な、何よ?」

はやて「幼馴染やのに・・・な〜んか納得できへんのや・・・」

メアリ「そうかしら?」

文乃「確かにはやての言う通りね」

優子「どうしてこつも差があるのかしらね? 鮮華もだけど・・・」

自分の胸とメアリの胸を見比べていた。

鮮華「そうですか？肩が凝りますよ」

鮮華の言葉に貧乳党の皆さんは怒りゲージが限界突破してしまった。
ほほ胸の大きな人がいれば当然だが・・・

メイメイ「巨乳斬滅！！」

小蓮「今こそ滅する時！！」

リリス「もう許しません！」

美波「なんでこうも不平等なのよ！！」

憎しみと嫉妬が混ざったオーラを出した貧乳人達が巨乳人達の方へ襲い掛かって来た。

桂花「巨乳マストダイ！！不幸を降り注がん！！」

メイメイ「この世の巨乳を私は許しはしない！！」

二人の言葉と共に攻撃を始めようとした瞬間

カナ「ツキゾー・・・GO！！」

ツキゾーが甲羅モードになり、カナは勢いよく桂花達貧乳党に向けて投げ、直撃させ豪快に吹き飛ばした。

貧乳の人達「ぎゃあああああ！！！！」

直撃を受け吹き飛ばされた人達は叫び声をあげた後、気を失ってしまった。

これをやらかしたカナは笑みを浮かべていた。

華琳「よくそんな事が出来るわね・・・」

貧乳であるが、攻撃に参加しなかった華琳が、惨状を起こしたカナに聞いてみた。

カナ「そう？ツキゾー。ごめんね」

ツキゾーに謝った後、直ぐに許してくれたそうなの。

文乃「カナ・・・本当に恐ろしい娘・・・」

希「にやあ・・・凄い・・・」

フィーナ「統夜ラバーズって殆ど統夜の影響で変わってるのかしら？」

殆どが統夜の影響で変わりつつあるんじゃないかと思ったフィーナだった。

瑞希「嗚呼・・・可哀想な美波ちゃん・・・ふふふ」

アリス「ふふふ・・・カナという娘は面白い事をしてくれるな」

優子「ちよつと待てええええええ！！何でアンタらはそう黒い笑みが浮かべれるのよ！！」

今の惨劇を黒い笑みを浮かべて見ている二人にツッコミを入れた。

アリス「面白いからだ」

優子「周りにこんなのかしいのかしら・・・」

DSやはっちゃけた人達が自分の周りにいる事に対し頭を抱え、再び湯船の中へ浸かった。

チルノ「あの人たちが暴走するのも分かる気がするね」
アーカード「そうだな。だが受け入れなければ何も始まらないぞ」

二人して身体を洗いながら倒れている貧乳党の人たちを見て呟いていた。

はやて「メアリちゃん・・・今日からグラマラス姫閣下と名乗ったらどうや？」

メアリ「何その名称！？絶対グラマラスと姫御前と閣下を組み合わせてるでしょ!？」

はやて「当たり前や。メアリちゃんの大きなおっぱいを見て考えた訳やないよ？」

メアリの大きな胸を真剣な眼差しで見ている時点で説得力は無く、メア리를怒らせているだけだった。

メアリ「・・・いい加減にしないとガブツじゃ済まない痛みを味合わせようかしら?」

はやて「白獅子は流石に勘弁やな・・・」

流石のはやてもメアリの白獅子の恐ろしさを知っている為、これ以上怒らせるのを止めた。

はやて「(メアリちゃんみたいな大きな人って統夜は好みなんかなあ・・・)」

自分の胸を持ち上げるように触りながらそう考えていた。

とある場所にて

ダイチ「よし！今の内に桃源郷を覗かんが為に！」

須川「ああ。行こうぜ！」

ダイチと須川が覗きを決行しようとした瞬間、顔を真っ青にしていた。

何故なら……

アドヴァンスファルコン「……………」

アドヴァンスライノス「……………」

アドヴァンスイーグル「……………」

アドヴァンスドラゴン「……………」

統夜のドライバーズが待機していたのだから……

ダイチ「それでも……俺は見たいた女達がいるんだぁーっ！！」

無駄な抵抗だと分かってもドライバー達に立ち向かうダイチ達だったが、すぐさま大きな音を立てて返り討ちにあった。

文乃「何の音？」

はやて「あ……覗こうとしている人達をやっつけている音やろうな」

メアリ「何をしたの？」

はやて「統夜に借りて……アドヴァンスメサイアにあるドライブカード4枚を魔力のみで召喚させ、待機させたんや」

黒い笑みを浮かべてそう答え、メアリを始めとした常識人達は顔を青くさせた。

よく恐ろしい事を考えたなと思ったそうな・・・

フィーナ「よく思ったのだけれど・・・統夜と鮮華は凄いわね・・・

「
はやて「三大冥王のうち真祖の吸血姫と魔帝剣聖の血を受け継いでるからなあ・・・私も衝撃が走ったわ・・・」

エステル「完全な人間じゃないとしても私達は手の平を返すような事はしません。その人の魂（こゝろ）で判断していますから」

エステルの言葉にフィーナは黙って耳を傾けていた。

はやて「メアリちゃんや早苗ちゃんもそうやしな」

雪蓮「そうね。種族面で文句言う奴らは時代遅れよね」

酒飲んでいるのか既に出来上がりつつあった。

優子「ちよつとおおおおおお！！！？本当に大丈夫なの！？」

雪蓮「大丈夫よほれ」

そう言うと優子の胸を触り揉み始めた。

優子「ちよつ・・・あん・・・だ、駄目・・・そこは・・・」

雪蓮「あゝ・・・大きさは肉まんね」

大きさを食べ物に例えたせいか優子は感じながらも怒りを覚え、揉まれている手を掴み、立ち上がり

優子「どっせええええい！！」

雪蓮「ああああ〜れえええ〜!!!」

一本背負いで雪蓮を投げ飛ばした。

雪蓮「よく出来たわね」

酔ってても空中で受け身を取り、着地した。

雪蓮「これな〜んだ？」

タオルを見せた瞬間、優子ははっとして身体を見ると顔を真っ赤にして叫んだ。

優子「いやああああ!!!か、返しなさいよ!!!」

雪蓮「油断大敵はいけないよ・・・優子君・・・」

ニヤニヤしながらタオルを振りまわしていた。

その後、雪蓮と優子のおいかけっこが始まった。

咲夜「頑張れ〜」

シャル「応援してるわよ」

咲夜「これはどういう結果になる？」

シャル「雪蓮が有利になると思うけど・・・」

咲夜「お酒を飲んでるから難しいわね」

二人して湯船から実況していた。

メアリ「いやいやいや・・・何冷静に実況してる訳!?!そこは止めなさいよ!!!」

咲夜「あれはね〜・・・脱がされキャラの第一号の誕生は止めては

いけないという決まりがあるの」
メアリ「そんな決まりがあるかアアアア!!!!!!」

咲夜がつくった変な決まりに叫びツツコミを入れていた。

優子「待ちなさい!!」

雪蓮「待ちなさいと言われて待つ人はいないわよ」

まだ追いかけてっここが続いていた。

雪蓮「アクセルシューターならぬ石鹼シューター!!」

優子「ひゃああああ!!!!」

石鹼を地面に滑らせて優子を転ばせたのはいいが脚を開きっぱなしの状態で自分の方へやって来て激突してしまった。

そして、雪蓮は気が付くと顔が優子の股に間近で見れる状態になってしまった。

雪蓮「一応は生えてるんだ・・・べぶほっ!?!」

油断したのか蹴りを見舞われてしまった。

そして、優子はタオルを取り返し、すぐさま身体に巻いた。

これを見た冥琳は呆れ、雪蓮の自業自得と思ったそうなの。

華琳「甘いわよ。咲夜!二号と三号が誕生するわ!!」

黒い笑みを浮かべた華琳が文乃とメアリの身体に巻かれているタオルを一瞬で奪った。

何も纏っていない彼女達は当然・・・

文乃、メアリ「キャアアアアアア！！！」

豊富な裸体を晒し、顔を真っ赤にして叫び出した。

咲夜「あ、なるほど」

文乃、メアリ「『あ、なるほど』じゃねエエエエエ！！！」

咲夜の納得した表情に文乃とメアリの二人は怒鳴りツツコミを入れていた。

華琳「良い身体ね」

二人の身体をマジマジと見ていた。

華琳以外にもはやてや瑞希、早苗も見始めた。

はやて「くっ……二人とも成長してからに……ジュルリ……見事な果実が……」

瑞希「悔しいです……（華琳ちゃん、グツジョブですよ……）」

早苗「羨ましいです……」

カナ「ほうほう……」

エステル「ま、負けません！」

それほど羨ましいものだったのだろうかマジマジと見ていた。

美波「確かに羨ましいけど……華琳……それはやり過ぎじゃ無い？二人にとっては羞恥な拷問よ？」

華琳「何を言うの？貴方だって内心喜んでる癖に……」

美波「最初はそうだったけど……時間が経つと変わって行くものよ」

華琳「そうかもしれないわね。てか……はやては同性愛でも行け

る口なのかしら？」

美波「もしそうだったら天川と女の子・・・両立した両性愛確定ね。てか・・・瑞希・・・貴方は黒い笑みを浮かべて華琳に感謝してるよねえ！！」

先程復活した美波がはやてが両性愛である事を推測し、華琳に感謝している瑞希にツツコミを入れていた。

華琳「さ、逃げよう」

文乃「逃がすか！！」

メアリ「逃がさないわよ！！」

ツンデレコンビが華琳を追いかけ始めた。

文乃「当たりなさい！！」

メアリ「そしてタオル返しなさい！！」

洗面器を華琳に目掛けて投げたが、空中とんぼ返りをされ避けられた。

華琳「チツチツチ・・・当たらないわよ」

人差し指だけ出した右手を横に振り挑発していた。

文乃「これが終わったら統夜に訴えましょう・・・」

メアリ「ええ・・・」

華琳のマスターである統夜が制裁される事が決定した瞬間であった。

レーティア「統夜が可哀想になってきたのは気のせいかしら？」

ジャンヌ「気のせいじゃないと思うけど・・・」
リル「あう」

面倒なのか文乃とメアリの二人を自分の能力であるサイコキネシスで華琳の方へ飛ばした。

華琳「予想外な事にいいいい！！！」

文乃「返してもらおうよ？」

メアリ「文句は無いわよね？」

華琳「ふっ・・・このまま渡す訳にはいかないわ・・・」

右手で文乃の胸を、左手でメアリの胸を触り揉み始めていた。
直なのか二人は胸から何かを感じ始めた。

文乃「だ、駄目・・・触らないで・・・」

メアリ「そこは・・・駄目え・・・」

華琳「ふふっ・・・本当に柔らかいわね。そしておいしそう・・・」

ムニユムニユと二人の胸を揉んでいた華琳はドSな笑みを浮かべていた。

はやて「私もやりたかったなあ・・・」

秀吉「凄いのお・・・」

フェイト「す、凄い・・・」

カナ「出来ない事を平然とやれる華琳は凄い・・・」

シャル「そうね」

雪蓮「頑張れ」

冥琳「応援するな！！雪蓮！！」

レーティア「あら・・・」

ジャンヌ「これはまずった？」

アリス「ほほう・・・随分と面白い事をしているな」
リリス「これは大丈夫なんですかね・・・？」

二人が責められているところをニヤニヤとしている、顔を赤くする、黒い笑みを浮かべる等をして見ている人達がいた。

華琳「ふふふ・・・さあ・・・胸だけで・・・」

楽しんでいる華琳に

エステル「天罰っ！！」

華琳「ごべっ！！」

何時の間にか右手に聖書を持ち、華琳の頭を殴って黙らせた。
その後、二人のタオルを身体に巻かせた。

エステル「大丈夫ですか？」

文乃「え、ええ・・・」

メアリ「だ、大丈夫よ」

胸を触られ揉まれた二人は大丈夫と答えていた。
その後、何事もなく湯船に浸かってリフレッシュしていた。

男湯では・・・

康太「・・・・・・・・」

ムツ「・・・・・・・・」

二人は鼻血を出して気を失っていた。

明久、アキ「ムツツリーニイイイイイ！！！！」

統夜「おいしいおいしい！！！！女湯から騒がしい声とか聞こえたけどそこまでなるかああああ！！！！」

ソラ「確かに統夜の言う通りだな」

統夜と一緒に湯船に浸かっているソラが静かにそう言った。

ソラ「お前はこれからどうする気だ？」

統夜「何が？」

ソラ「魔人と真祖のハーフという真実を知った後の事だ」

統夜「あいつらを守り・・・ゾーグ・・・イグニス・・・そいつらを倒す事だな」

大切なものを守り、近い内に戦うゾーグやイグニスを倒す事を語った。

零斗「ゾーグって・・・スフィア王国に描かれた魔人王ゾーグの事か？」

統夜「ああ・・・母さんや親父、最強の妖魔術師・・・三大冥王と真祖の剣聖相手なら封印という手段をとったと踏んでいる・・・」

ソラ「魔人王一人を完全に倒せる事は不可能だろうな。描かれていた部下みたいな連中もいる事も考えてだろうな・・・」

統夜「ああ。今の俺達じゃあいつらには勝てない・・・母さんは俺達の力を解放させ賭けに出た・・・」

零斗「俺達が倒せるという可能性に賭けたという訳か？」

統夜「そういう事もしれんな・・・」

零斗の言葉に統夜は肯定した。

零斗「俺達は眠っている力を目覚めさせなきゃいけないしな」

ソラ「メンドーな事は好かんが・・・俺も協力する。奴らが復活するならば他人事じゃすまなくなるからな」

統夜「だな・・・頼りにしてるぜ」

ソラ「お前も頑張れよ」

ギルシア「その時は俺たちも力を貸すぜ」

ソラだけでなくギルシアやマリオ達も力を貸してくれるのであった。

はやて「私とアリスさん・・・何処か似てますよね？」

アリス「お前と・・・ああ・・・私がソラを溺愛しているようにお前は天川統夜に溺愛している所か」

はやて「ですね・・・」

アリス「あいつの真実を聞いてどうだった？」

はやて「まあ・・・正直言えば驚きましたね・・・魔人と真祖のハーフに蒼炎の秘密、両親が三大冥王のうち二人である事に・・・」

アリスの質問にははやては正直に答え始めた。

はやての返答を聞いていたアリスはやはりなという感じで目をつぶっていた。

アリス「それでもお前はあの男と共に進むのか？」

はやて「はい・・・種族が魔人と真祖の血を引いていても・・・」

アリス「そうか。私には関係ない事だが・・・頑張る事だな」

はやて「はい」

素っ気無い態度ではやてにそう言って湯船から上がり浴室から出て行った。

華琳「はやてもう一つあるわ・・・王の素質である霸王色の覇気に目覚めているわ」

復活した華琳が真剣な表情になつてはやてに言った。

はやて「霸王色の覇気・・・レオンさんが言つてた覇気やな・・・」
華琳「知つてるのね」

はやて「それを・・・統夜は目覚めてるんか？」

華琳「ええ。完全に・・・統夜の場合・・・魔帝剣聖に真祖の吸血姫の血を受け継ぐ者・・・素質はあるの・・・だけど・・・」

はやて「だけど・・・どうかしたんか？」

華琳「統夜の場合・・・霸王と魔王の二つを備えた存在ね・・・」

深層世界にて魔人のオーラを感じたはやてはありえると思つたそう
な。

華琳「ま、頑張りなさい。貴方だけでなく私達も一緒よ」

はやては他の統夜ラバーズの顔を見た後、笑みを浮かべていた。

はやて「せやな・・・皆がいるから大丈夫やな」

湯船から上がつて、他の皆と一緒に浴室から出て行つた。

しばらく時間が経ち、男子も風呂から上がり、統夜達と出くわした。
文乃とメアリの二人は忘れてはいなかった。そう、華琳の主である
統夜の制裁を・・・

二人は統夜を見つけ、目が笑っていない笑顔で統夜の肩を掴み始め
た。

文乃「統夜」

統夜「はい・・・何でございましょうか？」

メアリ「華琳のお陰で恥ずかしい目に遭ったから・・・殴られて？」

統夜「なにその八つ当たりの感じは！？てか華琳！！お前は浴室で何をした！！」

口笛を吹いている華琳に怒鳴り始めた。

華琳「ん？なに・・・女の子同士のお・あ・そ・び」

統夜「何が『女の子同士のお・あ・そ・び』じゃ！！」

華琳「柔らかかったわ・・・ん？それ付けてるのね」

虹色の宝石が付けられたネックレスをしているのに目を付けた。

統夜「まあな。これで何が起こるのやら・・・」

二人を落ち着かせようと両手を二人の肩に触れようとしたが、柔らかい感触のあるものに触れてしまった。

自分の手で触っているのは二人の胸だった。

文乃「主もスケベのようね」

メアリ「そのようね」

黒いオーラを出して統夜を睨みつけた。

二人の黒いオーラに当たった統夜は胸に置いた手をどかそうとしたが

華琳「そっちは問屋が卸さない」

文乃とメアリの二人を押し倒すように統夜を突き飛ばした。

統夜「お前何をしやる！？」

華琳「あら・・・メアリの胸が顔に当たってるわね。こうしてやるわ」

メアリ「ちよつ！？そこは・・・駄目え！！」

統夜「ちよつと待てえ！？」

華琳は統夜の顔をグリグリとメアリの胸を押し出し始めた。

文乃「ちよつと?!いつまでその手をどか・・・あん・・・」

まだ手を放していなかったのか、押しだされたせいなのか統夜の手は文乃の胸を握るように揉んでいた。

華琳「ほらほらくどう?」

メアリ「この・・・変態っ!!」

華琳「あらま・・・酷いわ・・・でも貴方達は感じてるんじゃないの?好きな人にこんな事されて・・・」

メアリ「そんな・・・んあ・・・事・・・は・・・」

グリグリと押しながらそう答えた。

遊輔「可哀想な統夜・・・」

ダイチ「羨ましいぜコンチキショウ!!」

ギルシア「羨ましいぞ同志よ!!幼女だったらもつと許せんがな!!」

遊輔は哀れと悲しみ、ダイチとギルシアは羨ましがっていた。

統夜「んな事言ってる場合か!？」

メアリ「んあ・・・あん・・・暴れたら・・・駄目え・・・」

文乃「はや・・・く・・・手を・・・どかせ・・・なさいよ!!」

華琳に押しつけられ抵抗したが、文乃とメアリは顔を赤くし悶え始めた。

これを見た康太とムツは鼻血を出し倒れてしまった。

明久、アッキー「ムツツリーニイイイイ！！！」

雄二「ぐおおおお！！！目が・・・目がアアアアア！！！」

翔子「・・・雄二は見ちゃ駄目」

明久とアッキーは倒れてしまった康太'sを介抱し、雄二は翔子に目潰しされ、両手で目を抑え痙攣し始めた。

華琳と統夜の肩にポンと置いた人物がいた。それは

はやて「なあ・・・いい加減にしょか？なあ・・・」

黒いオーラを纏い、笑顔だが目が笑っていないはやてが二人の肩に手を置いたのだ。

はやてを見た統夜と華琳は顔を青くし、冷や汗を掻き始めた。

これらを見た残りの統夜ラバースも良い気分じゃ無かったのか黒いオーラを出していた。

統夜「落ち着こうはやて。てか俺は被害者だし」

華琳「（ん？待てよ・・・）えいつ！」

何かを考え、はやての胸が統夜の顔に当たるようにはやての背中を押し、下にはメアリ、上にははやての胸に挟まれたサンドイッチ状態になった。

ダイチ「ああ！！お前！！おっぱいサンドイッチを！？」

ギルシア「我が同志はここまでとは・・・見事だ」

遊輔「あれってラッキースケベアイテムじゃないのか？」

ダイチ「それだったら俺にくれ」

ソラ「お前に渡したらとんでもない事になりそうだな」

男性陣（例外を除く）は統夜がおっぱいサンドイッチをされている事に羨ましがっていた。

華琳「どう？貴方の胸が役に立ったわね」

はやて「せ、せやけど・・・んう・・・」

黒いオーラは消え、顔を赤くし積極的になり、胸で統夜を押し出し始めた。

統夜「むぐぐむぐぐ（おい！！華琳！！どういつつもりだ？）」

華琳「（ふふ・・・素敵な思い出を作る為に・・・私からのささやかな贈り物よ）」

統夜「（こんな贈り物いらねえよ！！いつかお仕置きしてやるからな！！）」

華琳「（来るのが楽しみね）」

念話で話し、華琳は口笛を吹いて、売店へ移動した。

達哉「おいしいいい！！やるだけやって行っちゃったよ！？しかもはやては積極的で統夜は窒息寸前だし！？」

アリス「流石だな。どうせなら胸を晒してサンドイッチにして去るというのもありだぞ」

リリス「それは本当に不味いですって！？」

華琳のやるだけやって逃走に近い行動に達哉は顔を青ざめてツッコミ、アリスは笑みを浮かべて華琳のやり方に賛否し、それ以上の事

を望んでいたが、リリスがツツコミを入れていた。

はやて「なんか・・・気持ちさええなあ・・・」

優子「それははやてだけ!!」

ツツコミを入れた優子を筆頭にすぐさまはやてを放し、その後統夜を文乃とメアリ離れさせた。

統夜「死ぬかと思った・・・すまん・・・」

文乃「べ、別にいいわよ。次やったらただじゃおかないんだからね」
メアリ「気をつけなさいよ。もう少しで変な気分になりそうだったわ・・・」

はやて「私は統夜に何をされても平気やけどな・・・」

優子「そこは自重!!」

はやての言葉にツツコミを入れていた。

シャル「優子・・・貴方ならツツコミ使いになれるわよ」

優子ならツツコミ使いになれると思ったそうな。

統夜「そんじゃ・・・部屋へ戻るか」

マリオ「災難だったな・・・統夜。また明日な」

リュウケンドー「じゃあな」

統夜達はそれぞれ部屋へ戻り、テレビを見たり、様々な事をして過ごしていた。

時間が経ち、修学旅行の最終日の翌朝になった。

統夜「・・・今度はメアりにシャルさんの二人か・・・」

上半身を起こすと赤のパジャマ姿のメアリと白いワイシャツ姿のシヤルが統夜の両隣でスヤスヤと寝ていた。しかもたわわな胸の谷間が見えている。

遊輔と明久を見渡すと自分と同じ事が起きていた。

遊輔の両隣になのはと蓮華、明久の両隣に小蓮と早苗が寝ていた。

統夜「（明久よ・・・永遠に眠れ・・・）」

明久に対し縁起でもない事を内心で言いながら二度寝した。

その後、遊輔と明久の二人が起きて、自分に起きている現状に声を荒げて叫び、統夜は二人の叫び声で再び起き、メアリとシヤルの二人も起き始めた。

時間が経ち、最後の一日が始まった。

統夜「災難だったな。明久」

ギルシア「流石だぞ。同志明久よ」

明久「だね・・・って何で同志になってるの！？僕はロリコンじゃないって!？」

統夜の言葉に同意し、ギルシアの言葉にツツコミを入れた。

雄二「両隣に小さい娘二人となあ・・・」

明久「瑞希と美波からO H A N A S H Iされたけどね・・・」

統夜「俺もされた・・・はやて達からO H A N A S H Iを・・・メアリとシヤルさんの二人と一緒に寝ていた事がバレてな・・・」

統夜と明久の二人は遠い目をしてそう語った。

はやて「自業自得や」

統夜「案外ビツクリしたよ」

シャル「統夜と一緒に寝たくなつたから」

メアリ「わ、私は仕方なく一緒に寝ただけよ。シャルさんがいた事は予想外だったけど……」

シャルは興味がある理由で、メアリは素直になれない理由でそれぞれ答えた。

統夜「最終日は完全自由行動だからどうする？」

はやて「ショッピングへ行くで」

はやて達統夜ラバーズが予め決めていたショッピングをする事になった。

因みにいるメンバーは統夜と鮮華、統夜ラバーズ、遊輔、遊輔ラバーズ、フェイト、達哉、達哉ラバーズ、明久、明久ラバーズ、雄二、翔子、康太、マリオ達一行、ギルシア一家、ソラ、アリス、リリスがいる。

統夜「さ、行くぞ」

はやて「量が多くなつたら統夜のメサイアに搭載されてあるウエポンサモンシステムを使えばええ事やし」

統夜「まあ……そこは仕方が無いよな。てか便利になつたよな」

はやて「まあなあ……それ……断蒼刀？」

統夜が右手に持っている竹刀袋を見ていた。

統夜「ああ。何かあつたら何とかなるだろ？公の場で晒す訳にはいかないから袋の中に入れてるけど」

メアリ「なるほど……」

統夜「こいつは封印魔法陣の中に入れるより自分の手で持っておい

の方がいい・・・」

自分の手にあつた方がいいと考えたのか断蒼刀を見ていた。

ソラ「使う事は無いだろうがな」

マリオ「転生者が来た時に使うといいぞ」

統夜「そう来ない事を祈るのみだがな」

面倒事が嫌いなのか転生者が来ないよう祈った。

一同はお土産をかう為にスフィア王国にあるお店がある場所へ移動を始めた。

統夜「色んなものがあるんだな」

店に着き、中に入ると様々なものが売られていた。

ツキゾーはカナの持っているリュックの中にスヤスヤと眠っている。

遊輔「スフィアクッキーにスフィア饅頭、ムーンサブレット殆ど月の形と色をしてるんだな」

マリオ「よく出来ているな」

マジマジとマリオ達はスフィアクッキーとスフィア饅頭等を見ていた。

達哉「名物になり売上ランク一位だからな」

統夜「そうなんだ・・・」

ソラ「珍しい物が沢山あるな」

かう物は買った統夜達は残りのメンバーを待っていた。

しばらくして、残りのメンバーがやって来た。

はやて「お待たせ」

統夜「あの……はやてさん達に質問……何ですかそれは？」

統夜は恐る恐る買った物に対して統夜ラバーズに聞いてみた。

はやて「統夜人形や」

統夜ラバーズの手には統夜を模した人形があった。

文乃「べ、別にアンタが好きだから人形を買った訳じゃないからね
!!!」

メアリ「そ、そうよ!!!」

雪蓮「新鮮ね」

文乃とメアリの素直になれない発言に雪蓮は微笑んでいた。

遊輔「何で統夜人形が売られてるんだ？」

フィーナ「統夜は月と地球を救った英雄でもあるからね……」

統夜「なるほど……って俺の許可取れよ!? 明らかにおかしいだ
ろうが!!!」

エステル「まあまあ……」

自分の許可が無い事に怒鳴った統夜をエステルは宥めていた。

統夜「まあ……いいけどさ……」

ソラ「大変だな」

リリス「お金取れてたのかもしれないね」

フィーナ「今でも大人気だから売り上げの一部を統夜に提供するよ
う伝えるけど」

統夜「それ頼むわ」

フィーナ「近い内に伝えておくわ」

フィーナの提案に統夜は同意し、成立した瞬間であった。

ソラ「いつまでもタダじゃ駄目だろ」

統夜「まあな。で、いくらぐらいしたんだ？」

はやて「七千円やけど」

統夜「俺の人形ってそれぐらいするのか・・・」

自分の人形の値段に統夜は驚くしか無かった。

マリオ「英雄の人形は高いんだな」

ソロ「そうだな」

リュウケンドー「次はどうする？」

メアリ「服屋へ行くわよ。何でも揃ってるって店へ」

統夜「了解」

すぐさまお土産店から洋服店へ移動を始めた。

洋服店へ着いた後女性陣は中へ入り、男性陣は外で待機していた。

待機している統夜はアドヴァンスフォンを片手に何らかの情報を探っていた。

マリオ「何をしてるんだ？」

統夜「あのババア・・・セイラの処刑が決まったらしいから探ってるの」

明久「処刑される事になったんだ・・・精神崩壊して魂無いのに・・・」

統夜「あいつの罪状は殺人、強奪、偽証罪、収賄、違法実験・・・それらを幾度もして今の地位に上り詰めたし」

マリオ「そうだったのか」

セイラの悪さにマリオはそう受け取っていた。

統夜「今回の処刑は管理局に関わっている次元世界の住人の署名でセイラは処刑すべしっという答えが出た。世界を騙した奴に余生なんてある訳無いと思うしね」

ソラ「確かにお前の言う通りだな。人を欺き・・・管理局を腐敗させた原因だからな。ケジメぐらいはつけるべきだと思う」

ギルシア「で・・・分かった事は？」

統夜「ちよつと待ってっ・・・マジか・・・」

リュウケンドー「どうかしたのか？」

少し驚いた表情をした統夜にリュウケンドーが問い掛けていた。

統夜「セイラは数日前に処刑されてるっさ」

達哉「本当か？」

統夜「ああ」

康太「・・・因果応報」

ソラ「随分とあっけないものだったな」

統夜「そんなもんだろ。あのババアを失って悲しむ奴はいないね。てかいる方がおかしい。奴は肉体的に死んだ・・・俺の蒼炎により魂を奪われている為転生・・・生まれ変わる事は一切無いから大丈夫だ」

ソラの言葉にそう答えていた。

セイントクルセイダーズの最終決戦に参加していた人は「それもそうだな」と内心思ったそうな。

女性陣サイド

中へ入るとそれぞれ服を選んでいた。

はやて「アリスさんもこの服を？」

アリス「そういうお前もか？」

はやてとアリスの視線にはスカートの丈が短くセクシーなメイド服が映っていた。

はやて「私の場合は統夜の奥さん兼メイドみたいなものやし・・・」
アリス「私はソラの妻でありソラのメイドだからな」
はやて「じゃあ・・・買いましょう」

二人は愛する人物を喜ばす為に買う決意を固め、試着し購入したのであった。

似た者同士なのか仲良くなっていたとか・・・

鮮華「カナさんは何を買っているのですか？」

カナ「プリムラにお土産として新しいパジャマを買ってあげようと思っただけ。姉らしい事を・・・ね」

プリムラのプロトタイプとして造られ姉のような存在であるカナは姉らしい事としてパジャマ選びをしていた。

千世「これはいいわね」

コスプレ衣装を選んでいた。

文乃「ちよっと待って?!何でそういうのがある訳え!!」

希「にゃあ・・・何でも揃っているからあるのは当然・・・」

巫女服を選んでいた希がツッコミを入れている文乃にそう答えていた。

しばらくして買い物済ませた女性陣は店から出て来た。

女性陣が出て来た事により統夜はアドヴァンスフォンをしまった。

はやて「おまたせ」

統夜「長かったな」

メアリ「色々あったから選ぶのに時間が掛ったわ。どうかしたの？」
遊輔「実はね・・・」

遊輔は女性陣にセイラが処刑されていた事を教えていた。

これを聞いたセイラが存在を知っている女性陣はやっぱりねと思っ
たそうな・・・

はやて「自業自得やな」

カナ「これで平和になるね」

咲夜「スッキリしたわね」

雪蓮「いなくなつて清々したわ」

メアリ「やつと死んでくれたわね」

なのは「これで落ち着けるよね」

フェイト「管理局も正常に戻るね」

アリス「愚者の末路だな」

セイラの事を知っているメンバーにとって評判は悪かったようだ。

統夜「んじゃそんな事はどうでもいいとして・・・はやての持って

る服ってメイド服？」

はやて「ふっふっふ・・・只のメイド服やないで・・・スカート丈が短く、露出が多いセクシーなメイド服や!!!」

統夜「とんでもないものを購入しちゃったよ!?!?てかよくそんなのあつたな!?!」

はやての購入したメイド服にツッコミを入れていた。

アリス「私も購入したぞ。ソラのメイドというのも悪くは無いと思つてな」

ソラ「そうか」

アリスも購入していた事にソラは冷静に返した。

隣でリリスが羨ましそうに見ていたのは言つまでも無かつた。

カナ「私はコスプレ衣装にプリムラへのお土産を購入したよ」

統夜「あつたんだ・・・俺はお土産コーナーでお月見猫のぬいぐるみを購入したが」

三日月模様が入っている猫のヌイグルミを袋の中から取り出した。

カナ「新しいパジャマだよ。上にワイシャツや鮮華のお古つて訳にはいかないでしょ?」

カナの発言によりはやてや鮮華、カナ、咲夜を除く一同は統夜を見始めた。

統夜「ちよつと待てエエエエエ!!!何で俺を見る訳?!!」

ギルシア「流石だ同志・・・リムさんに裸ワイシャツをさせているとは・・・素直じゃない奴め・・・」

統夜「させてないし！！てかプリムラをリムたんと呼ぶな！！」
遊輔「じゃあ・・・プリムラちゃん自らやっているのか？」

ギルシアにツッコミを入れた統夜に遊輔は聞いてみた。

統夜「時々な・・・」

アリス「もしお前がやらせていたらロリコンになっていたな。月と地球を救った英雄がロリコン・・・洒落にならないな」

黒い笑みを浮かべていたアリスだった。

統夜「で・・・どんなのだ？」

カナ「これだよ」

袋から出し、白い猫を模した着ぐるみ状のパジャマを見せた。

統夜「猫好きだからな・・・中々いいんじゃないか？」

カナ「私のもあるけど、色違いで黒を買ったよ」

統夜「姉妹お揃いって感じだな」

達哉「そろそろ行かないと昼飯食わないと」

達哉の言葉で時計を見ると統夜達はそれぞれ別れ違うレストランへ移動した。

尚統夜は統夜ラバース、明久、明久ラバース、マリオ達一行、ギルシア一家、ソラ達と一緒に行動している。

統夜「俺は・・・月見井の大盛に満月ソバ大盛、月見ハンバーグを頼むか」

シャル「私も統夜と同じのを頼むわ」

一同（統夜とシャル、ソラを除く）「ちょっと待てえーっ！っ！

「!!」

二人は一人では食えない量のメニューを頼もうとした瞬間、明久達はツツコミを入れ始めた。

統夜「どうした?」

明久「おかいしいよね?! どう見たって!! 明らかに人が食える量じゃ無いよね!?!」

瑞希「シャルさん・・・太ってしまいますよ?」

シャル「そこはご安心・・・大量に食べても太らないから」

シャルの言葉を聞いた女性陣は悔しがっていた。

瑞希「こ、こんな事って・・・美波ちゃん・・・ティロ・ファイナー

しでやつちやつてください!!」

美波「おう! って出来るかアアアアア!!!」

瑞希の言葉にノリツツコミをして叫んでいた。

メアリ「私の場合は肉が食べたいわね」

はやて「あ、獅子やかからか・・・大丈夫なん?」

メアリ「大丈夫だけど・・・胸の辺りが大きくなるのよね」

これを聞いた千世と優子、美波、リリスは恨めしそうに睨みつけた。貧乳の人にとっては羨ましい事なのだろう・・・

はやて「喧嘩売っているんか? 私ら普通の大きさに對しても・・・」

ジト目でメア리를睨んでいた。

はやてにとってメアリや咲夜のようなたわわな胸は憧れである。

メアリ「そ、そんな事は無いわよ……
はやて「そういう事にしておく……」

それぞれ注文し、料理を待っていた。

統夜「そっぴや……明久よ……お前大丈夫か？」

明久「何が？」

統夜「健康ドリンクである『ザ・ヘルシー』に月見ハンバーグ定食のソースに『ザ・ソース』を付けると聞いた店員は勇気あるなという感じだったぞ？」

明久「大丈夫だよ」

美波「シンプルな名前だけど……怖いよね……」

しばらくして店員が注文した料理がそれぞれ来た。

店員「お待たせしました。ザ・ヘルシーにザ・ソース付けの月見ハンバーグ定食です」

濃い深緑色で爽やかに見える飲み物であるザ・ヘルシーとハンバーグの上に目玉焼きが乗っかっており、濃い真紅のソースが付けられているものが明久の前に置かれた。

濃い真紅のソースから強い刺激臭が漂った。

明久「な、何これ……？」

店員「ザ・ソースの香りです。ではごゆっくり……」

店員はそれだけを言って去ってしまった。

明久「まあ……辛いものだと思っただきます」

統夜「昨日の仕返しとして閃いたからな。俺も食ってみるか・・・あれ・・・ちよつと刺激のある辛さだな」

ザ・ソースがかかったハンバーグを少しだけ食べてみると何とも無かった。

文乃「アンタ本当に大丈夫なの!？」

優子「おかしいよね!? 絶対に!!」

メアリ「異常になっているわよね?!」

統夜の反応に文乃と優子、メアリの三人はツツコミを入れていた。

アリス「異常過ぎるな」

ソラ「魔人と真祖のハーフは伊達じゃ無いって所か」

リリス「ですかね・・・」

ゆっくりと食べ始めているソラ達であった。

ギルシア「流石の俺でも食えないな・・・」

レーティア「シンプルな名前に油断したわね」

ジャンヌ「材料ってどんなものなんだろう?」

ザ・ソースとザ・ヘルシーの恐ろしさに冷や汗を掻きながら食べていた。

ザ・ヘルシーがマリオの所に来て、一気に飲み干した。

マリオ「中々いけるぞ」

統夜「マジかよ・・・」

マリオ「ああ。こんなおいしいものは飲めないな」

マリオの発言を聞いた店員と客は驚愕な表情してマリオを見ていた。この店でマリオの伝説が刻まれたのは言うまでも無かった。

統夜「ふゝ中々上手かったな」
シャル「そうね」

大量の料理を平らげた統夜とシャルは満足していた。

はやて「制限入れた方がええんかな・・・」

天川家の料理担当のはやてはそう考えたそうな。何やかんやで全員食べ終え、会計し店から出た。

統夜「おゝい・・・明久ゝ駄目だ・・・姫路。やれ」

瑞希「何をですか？」

統夜「お前の胸を明久の顔面にぶつける」

統夜の発言に顔を赤らめ始めた。

瑞希「そ、それは・・・心の準備が・・・」

統夜「そうしたら明久は目覚める。いいアピールになると思うぞ」

統夜の言葉に瑞希は

瑞希「はい！やってみます！えいっ！」

乗ってしまった。

そして、自分の胸に明久の顔をくっつけた。

これを見ていた美波と小蓮、早苗はジーっと見つめていた。しばらくすると、明久は目を覚まし、顔を赤らめ、離れた。

チエンバース」とアイリ、ダイチの側にエリー、たけしの両隣にメイメイと桂花、ルイス、明久の周りに明久ラバース、雄二は翔子に無理矢理腕を組まされ、マリオ達はやや中心に集まり、ギルシア一家は腕を繋いでおり、ソラの右隣にアリス、左隣にリリスが身体を寄せて抱きついていた。

エリーを除くミルクィホームズは中心である統夜達の前でしゃがみ、鮮華とフェイトはミルクィホームズの隣に少ししゃがんでいた。

康太「……………」

デジカメを弄り、準備を終えるとやや端の方へ移動した。

康太が移動した瞬間、統夜達だけの記念写真が写った瞬間であった。記念撮影を終えると集合場所へ移動し、点呼を終えると空港へ移動し、地球へ戻るシャトルへ乗り始めた。

統夜「面白かったな」

はやて「うん……………」

統夜「そして…………俺達兄妹の真実が聞けて良かった……………」

メアリ「そうね。アンタには私達がついているわ……………」

統夜「ありがとう」

シャトルの乗り込み、座り始めた瞬間、地球へ出発し始めた。

自分が求めた真実と思い出と共に…………

修学旅行から数日後…………

統夜「あんたらもここに？」

ソラ「ああ。俺達も蒼穹の騎士団に入る。いつまでものらりくらりする訳にはいかないからな」

アリス「よろしく頼むぞ」

リリス「よろしく願います」

統夜「そうか」

蒼穹の騎士団の寮の前にソラとアリス、リリスが修行の休憩をしている統夜に蒼穹の騎士団に入る事を言い、即承認した。

ソラ「修行していたのか？」

統夜「ああ・・・強大な力を制御出来なきゃ・・・意味は無いからな」

ソラ「そこは見習うべきかもしれないな。俺も手伝おう」

統夜の修行にソラが手伝い始めた。

これを見ていたアリスとリリスは嬉しそうに笑っていた。

ソラとアリス、リリスが蒼穹の騎士団に入った瞬間であった。

第六十三話『罰当たりになるから嫉妬で巨乳と肉を憎んではいけない』

(後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

ギルシア「真実や色々な事が起こった修学旅行は楽しかったな」

ギルシア「次は夏休み前で明久が鉄人にプール掃除をさせられるが、その後は自由に遊べるものだった」

ギルシア「これはおいしそうなイベントだから見逃すなよ?」

ギルシア「次回は『プール掃除って面白いイベントだね』テイクオフだ」

第六十四話『プール掃除って面白いイベントだよね』（前書き）

今回はエツチな要素があるかも・・・そしてある人物が冥界と手を組む

統夜「えっ・・・またかい！？まさか・・・イグニスか？」

それは見てからの楽しみだ〜

統夜「聞けエエエエ！！！」

チルノ「HERO'S EPISODE第六十四話を見るとアタイみたいなサイキョーになれるかもよ！」

第六十四話『プール掃除って面白いイベントだよね』

第六十四話『プール掃除って面白いイベントだよね』

修学旅行から月日が過ぎ、夏が近くなりつつある日の夜だった。

学園のプール場にて明久と雄二がトランクスー丁で懐中電灯を顔に当てた西村と笑顔だが目が笑っていない紅女史の前で正座していた。

西村「なるほど・・・それで勝手に忍び込んでシャワーを浴びて・・・
ついでにパンツ一丁で泳いでいたという訳だな？」

紅女史「大馬鹿にも程があるだろ・・・」

理由は夕飯の事で喧嘩をし、雄二が買ってきたコーラやラーメンのスープのせいで身体中がベトベトになった。

ベトベトになってしまった身体を明久の家でシャワーを浴びて汚れを落とすのが手っ取り早いのだが、家主である明久がガス代を払っていない為冷水しか出ない状態だった。

温水のあるシャワーのある文月バーベナ学園へ赴き、温水シャワーを浴び汚れを落とした後、ついでとしてひと泳ぎして帰ろうと思っただが、学園の中にいた西村と紅女史の恐怖のツートップに見つかり現在に至る。

西村「何か言い訳はあるか？」

西村の言葉に

明久、雄二「こいつが悪いんです!!」

お互いの顔に人差し指でさし、責任の擦り付け合いを始めていた。

明久「雄二がマトモな差し入れを持って来なかったのが悪いんだろ？！」

雄二「ガス代払って無いのが悪いんだろぅが！！」

明久「水が出るだけマシじゃないか！！」

雄二「水すら出ない事があるのか？！」

二人の醜い言い争いに西村と紅女史は怒りのオーラを出し始めた。

紅女史「いい加減にしろ！！」

西村「もういい・・・分かった」

明久「でしょ？僕は悪くないでしょ？」

明久が言い終えると、明久の顔面を西村が、雄二の顔面を紅女史がそれぞれ掴み始めた。

紅女史「お前達が予想以上で底抜けの馬鹿だったとは思わなかった！！」

西村「罰として今週の日曜にプール掃除をするように！！」

明久、雄二「はい・・・」

翌朝の学園の教室にて明久が夜に起きた事とプール掃除の事を統夜達に話した。

話を聞いた統夜は明久と雄二の馬鹿な行動に呆れていた。

統夜「お前ら馬鹿だろ？」

明久「こいつが悪いんだ！！」

雄二「お前が悪い！！」

統夜「お前らいい加減にしろ！！」

喧嘩を始めた明久と雄二を話が進まなくなる為、一喝して黙らせた。

明久「手伝ってくれる?」

統夜「俺は構わないぜ。やる事無いし」

遊輔「俺も」

統夜「達哉はどうする?」

達哉「悪い・・・今度の日曜はバイトだ」

達哉を誘おうとしたが、達哉の家の近所にあるトラットリアと呼ばれるレストランのバイトがある為断った。

ダイチ「俺もいいか?」

統夜「別に構わんぞ」

ダイチ「よっしゃ!」

プールのコール女性の水着姿が見れるという理由で参加したダイチだった。

統夜「康太もどうだ?」

康太「パス・・・」

統夜「残念だ・・・はやてやメアリにも声を掛けるつもりだが・・・」

康太「・・・ブラシと洗剤を用意しておく」

女性陣が来ると聞いた康太も参加した。

統夜「で・・・次は女性陣だな。はやて達は大丈夫か?」

はやて「プール掃除やる?大丈夫や」

文乃「日曜は休みだし構わないわよ」

千世「私も混ぜなさい」

希「にやあ・・・大丈夫」

カナ「私も大丈夫」

エステル「私は無理ですね・・・礼拝堂の仕事がありますし・・・」

優子「私も大丈夫」

秀吉「ワシもじゃ」

メアリ「私も大丈夫よ」

エステルは仕事がある為参加出来なく、統夜ラバーズはほぼ参加が決定した。

遊輔「なのはと蓮華も大丈夫だね？」

なのは「うん。大丈夫」

蓮華「私もだ」

なのは達遊輔ラバーズも参加が決定した。

ダイチ「エリーも参加するか？」

エリー「うん」

シャロ「私たちも参加するよ」

ネロ「スケベを監視するためだ」

コーデリア「私たちも参加するわ」

明久「瑞希と美波、早苗ちゃんは大丈夫？」

瑞希「一人より多いほうが速く済みますし」

美波「ぱっぱと終わらせて楽しみましょ」

早苗「プールは水風呂みたいで気持ちがいいですし」

ミルキイホームズと明久ラバーズも参加した。

雄二「後は翔子と天川妹、ハラオウンに声を掛けるだけだな」

この場に居ない翔子と鮮華、フェイトも参加しようと考えていた。

明久「霧島さんに？雄二も大人になったね」

明久が笑顔でそう言うと、雄二が黙ってポンと明久の肩に置いた。

雄二「後で翔子にバレたら俺の人生はどうなると思う？」

明久「ごめん・・・」

雄二「いいんだ・・・」

遠い目をして明久にそう問いかけ、何となく分かったのか謝った。
もし翔子にバレたら凶王三成ならぬ凶妃翔子が降臨し、雄二は終焉
を迎えると感じたからだ。

ダイチ「水着ってどうする？」

統夜「そうだな・・・女性限定でくじ引いて、そのくじの番号と同
じものに着替えるというのはどうだ？」

はやて「それはええな」

零斗「それは俺に任せておけ！！」

はやて「ひゃあっ!?!」

いきなり零斗とアリス（チェンバース）の二人が床から現れた。

二人の登場にはやては驚いてしまった。

優子「何の用よ？」

零斗「俺達もプール掃除に参加するぜ。女性陣は水着を持ってこな
くてもいいからな。あばよ!?!」

二人は一瞬で消えてしまった。

統夜「零斗を信用するしか無いな。はやて達・・・今度の日曜は水着持参無しの方で・・・」

統夜の言葉に女性陣は首を縦に振った。

日が過ぎ日曜の翌朝、文月バーベナ学園の前に統夜と統夜ラバーズ、明久、明久ラバーズが集まっていた。

明久「何でギルシアさん達も？」

統夜「面白いからだ」

統夜の側にギルシアとレーティア、ジャンヌ、リル、シャルがいた。

シャル「楽しい事には参加した方がいいと思ってね」

統夜「くじは大丈夫？」

シャル「大丈夫よ」

ギルシア「今日についている・・・小蓮さんに早苗たん、リムたんが参加している事に・・・俺は神に感謝している!!!!」

右腕を天に翳し、そう叫んでいた。

ギルシアの言葉にプリムラと小蓮、早苗の三人は悪寒がしたのかそれぞれ好きな人の後ろに隠れた。

レーティア「あらあら・・・」

ジャンヌ「無料で楽しめるプールってそうそう無いからね」

誘われたデビリアス姉妹も嬉しそうにしていた。

ギルシア「時に明久・・・そこにいる幼女は誰だ？」

美波の側にいる茶髪のツインテールの女の子に顔を向けた。

明久「あの子は美波の妹の葉月ちゃんだよ」

葉月「よろしくです。神父のお兄ちゃん」

葉月と呼ばれた少女の言葉にギルシアの目が光り、耳と口からも光が溢れ出した。

これを見た葉月は「わあ」と声を上げ、美波はジト目で見て引いていた。

ギルシア「純粹無垢な幼女から・・・お兄ちゃん・・・何ていいものなんだ!!」

統夜「で・・・明久・・・何で知ってるんだよ？」

明久「高校一年の時に・・・欲しかったぬいぐるみを買ってあげたんだよ。鉄人の私物を売ってお金に変換して」

ギルシアの奇妙な行動をスルーし、明久に話し掛けた。

これを聞いた統夜は笑いだした。

明久「な、何も笑わなくてもいいだろ!!」

統夜「悪い悪い・・・鉄人ガトーの私物を売るとは中々天晴れな行動じゃないか」

明久「それがバレて観察処分者になったんだけどね・・・」

統夜「そこから島田妹が嬉しくなったという訳か・・・」

葉月「よろしくです。英雄のお兄ちゃん。テレビで見た事あります。月と地球を救ったお兄ちゃん」

統夜「あ、ああ・・・よろしくな」

英雄のお兄ちゃんといきなり呼ばれて戸惑ってしまった統夜だった。

統夜「で・・・明久には何て呼んでるんだ？」

葉月「バカなお兄ちゃんです」

統夜「それは間違っている・・・明久は口・・・」

明久、瑞希、美波、小蓮、早苗「シヤラアーツプ！！！」

バカなお兄ちゃんから違うものに訂正しようとした瞬間、明久と明久ラバーズが止めた。

美波「アンタ！葉月に余計な事を教えないで！！」

統夜「それは悪かった」

すると遊輔と遊輔ラバーズ、鮮華、フェイト、ダイチ、ミルキイホームズ、雄二、翔子、ソラ、アリス、リリス、別世界の明久、別世界の康太、チルノ、ギル、首まで来る黒髪に黒色の瞳をし灰色の赤と青の炎の模様が描かれた半そでに青いジーンズを履いている少年、赤い服を着た金髪の青年、黒髪のオールバックに翠のジャンパーを着た青年、金髪に帽子を被った今の若者風の格好をした青年、黒の短髪にシルバーの服を着た少年、黒髪で母親的なオーラを出している女性、赤のセミロングで金色の瞳、鷲を模した髪飾りを付けた少女が集まった。

統夜「お前らとチルノ、明久、康太、ギルは分かるが・・・」

「かつ！かつ！」

統夜「何々・・・私の名前はシヨカ。よろしくね」

かつ！かつ！しか喋っていないのに統夜は理解していた。

「ちよつと待てええええええええ！！！！！」

赤い服を着た金髪の青年、黒髪のオールバックに翠のジャンパーを着た青年、金髪に帽子を被った今の若者風の格好をした青年の三人がツツコミを入れた。

統夜「何だ？」

「何だ？じゃねえ！！お前！グリードじゃねえのにショカの言葉が分かるんだよ?!」

統夜「見聞色の覇気を用いて何を言っているのかを聞いただけだ」

赤い服を着た金髪の青年の問いに見聞色の覇気を用いた事を答えた。

「見聞色だあ？」

統夜「全ての生き物は常に声を発している・・・グリードも例外ではない。アンタらは？」

アंक「俺は鳥系グリードのアंकだ」

ウヴァ「俺は昆虫系グリードのウヴァだ。見聞色の覇気で分かるのはな・・・」

カザリ「確かにね・・・僕は猫系グリードのカザリ。よろしくね」

メズール「私は水棲系グリードのメズールよ。よろしくね」

ガメル「俺、ガメル〜よろしく〜」

グリード達は自己紹介をし、統夜達も自己紹介していた。

統夜「マリオ達の仲間とはな・・・」

黒狼「僕は時野 黒狼。よろしくお願いします。統夜さん」

統夜「よろしくな」

黒狼「グリードに見聞色の覇気・・・でしたっけ？よく分かりましたね」

統夜「ああ・・・レオンさんの指導と日頃の修行でな」

チルノ「その覇気を使えばアタイはサイキョーになれる」
統夜「慢心は毒を孕むぞ？出せる力も出せなくなる」

チルノの言葉に統夜は重い一言を放った。

チルノ「その覇気つてもものがあれば便利じゃん」

統夜「あのね・・・覇気つてもものは誰もが扱えるという訳じゃ無いからね」

やれやれとした感じで答えた。

アंक「だろうな・・・覇気だけじゃ戦いは楽には勝てないだろうよ」

覇気だけじゃ勝てるとは思っていないのか呟いていた。

雄二「さっさと行くぞ」

統夜「その前に零斗とアリス（チェンバース）がいないぞ」

二人が来ていない事を雄二に伝えたが

雄二「後から来るだろ？俺はその間に鍵を貰いに行ってくる」

雄二は翔子と一緒に鍵を貰いに行く為職員室へ向かった。

その後に零斗とアリス（チェンバース）の二人がやって来た。

二人の手には水着が入っている袋をたくさん持っていた

零斗「待たせちまったな」

アリス（チェンバース）「皆さんお待ちかねのくじ引きで決まる貴方の水着が・・・」

零斗「さあ……くじを引け!!」

くじが入った箱を出した。

はやて「私が行くで……」

最初にはやてが箱の中に手を入れくじを引き始め、その中から一枚を出した。

くじの中身を見ると『統夜』と書かれていたものを零斗に見せた。

零斗「はい。これ」

くじに書かれた『統夜 1』という紙が貼られた袋をはやてに差し出した。

アリス(チェンバース)「はいはい引いた引いた」

各女性陣(水着持参のレーティアとジャンヌ、アリス、リリス、チルノ、メズール、ギル、シヨカを除く)もくじを引き始め、それぞれ、引いた番号のとおりの水着が入った袋を手渡し、後から戻って来た翔子もくじを引き終了した。

このくじは 1、 2、 3といった感じで分けられており、それぞれ男の名前が書かれている。

因みに女性陣が引いたくじの番号はこうである。

1・・・はやて(統夜1回目)、文乃(統夜2回目)、優子(雄二1回目)、秀吉(明久1回目)、メアリ(統夜3回目)、シャル(遊輔1回目)、蓮華(ダイチ1回目)、瑞希(明久2回目)、アリス(チェンバース)(零斗1回目)

2・・・希（雄二2回目）、カナ（統夜4回目）、鮮華（ダイチ2回目）、なのは（遊輔2回目）、フェイト（零斗2回目）、シャロ（ダイチ3回目）、ネロ（明久3回目）、コーデリア（雄二3回目）、早苗（明久4回目）

3・・・千世（遊輔3回目）、プリムラ（統夜5回目）、美波（明久5回目）、小蓮（雄二4回目）、エリー（ダイチ4回目）、翔子（雄二5回目）

となった。中身は着替えるまでのお楽しみである。

統夜「んじゃ・・・行くぞ」

統夜達は更衣室へ移動した。

ふと後ろを振り向いた明久がついて来た葉月にこう言った。

明久「コラコラダメだよ？葉月ちゃんは向こう」

葉月「えへへ、冗談です」

明久「冗談じゃ無く僕らと一緒に着替えたら某神父が抱きつこうとしたり・・・ムツツリーニが鼻血を出して死ぬから」

ギルシア「おい！それはどういう意味だ！！某神父って明らかに俺の事だろ！？」

ギルシアの言葉を見殺した明久は葉月に遠い目をして語りかけた。

葉月「分かりましたです」

美波「何やってるの葉月。早く行くわよ」

葉月「はい」

美波がいそいそと葉月を連れて、女子更衣室へ移動した。

葉月をギルシアに変な事されないようにという事もあって・・・
女子更衣室で袋から出したはやて達は顔を真っ赤にし叫んでいた。
一体どんな水着が入っていたのか気になるが・・・

統夜「イッチニ・・・サンシ」

遊輔「一に熱血！！二に熱血！！」

明久「明らかに準備運動を超えた体操をしているううう！！！！」

プールサイドにて着替え終えた統夜は普通に準備体操をしていたが、
遊輔は超高速スクワットしたり、腹筋、腕立て伏せ等をしていたの
を明久は大声で叫んでツッコミを入れた。

零斗「これで男子全員だな」

ダイチ「どんなものを渡したんだ？凄く楽しみにしているのと同時に
恐怖も感じてしまう」

零斗「それは見てからのお楽しみだ」

ソラ「苦情が来ても知らないからな」

男性陣全員が集まり話しながら準備体操をしていると、紺色のスク
ール水着を着た葉月が最初にやって来た。

葉月「お兄ちゃん達お待たせです！」

統夜「最初は島田妹か」

ギルシア「中々いいものだな！同志よ！」

統夜「だから同志じゃねえつつてんだろ！」

葉月をマジマジと見ているギルシアにツッコミを入れていた。

その後、千世とプリムラ、小蓮、早苗、リリスの五人がやって来た。

早苗は顔を真つ赤にし下を俯いていたが・・・
五人の水着姿を見ると、康太・sは一斉に鼻血を出し倒れてしまっ
た。

明久「s「ムツツリーニイイイイイ！！！！」」

統夜「零斗オオオオオ！！お前・・・どんな水着を選んだアア
アアア！！！」

零斗「企業秘密だ」

統夜は零斗に怒鳴り始めたが、当の本人は清ました表情で返した。
千世は赤を基調としフリルが付いたワンピース水着、プリムラは紺
色のスクール水着、小蓮はピンクのビキニにショートパンツの組み
合わせの水着、早苗は水色のVスリング、リリスは黄色いワンピース
水着である。

早苗「恥ずかしいです・・・」

統夜「これはまた・・・待てよ・・・零斗・・・Vスリングはっ
て事になるよな？」

零斗「御名答・・・は見れば分かる・・・」

雄二「・・・・・・・・」

これを聞いた雄二は顔を真つ青にしてしまった。

自分の名前が書かれた袋の中にVスリングがある事が翔子にバレた
らタダじゃ済まないからだ。

統夜「わあ・・・雄二は見事に顔を真つ青にしてるね」

アंक「際どい水着がこいつの名前が書かれた袋の中に入ったのを
あの女が知ったらなあ・・・」

カザリ「間違い無く紅い雨が降るね」

雄二の先が分かったのか人外三人は話し合っていた。

ギルシア「早苗たん！大丈夫だ！俺に抱きつけば恥ずかしい気持ちなんて直ぐに吹き飛ばさ！」

手をワキワキさせながら恥ずかしさで涙目になっている早苗に対し
そう言い近付こうとした瞬間

早苗「いやあああああ！！！」

恐怖でギルシアを氷漬けにし氷像にしてしまった。

統夜「おいしいiiiiii！！？」

ソラ「自業自得だな」

早苗「あの・・・明久様・・・私・・・変・・・ですか？」

涙目になって明久に近づいていく早苗。

明久「変じゃないよ。似合ってるよ」

早苗の頭を撫でながら優しく答えた。

早苗「本当・・・ですか？」

明久「うん」

小蓮「むっ・・・シャオの事も褒めてよっ！！！」

いい雰囲気になりかけたのに、小蓮が後ろから明久に抱きついて褒めるように言った。

明久「似合ってるよ。小蓮ちゃん」

アッキー「あつちの僕・・・ロリコンだね・・・」

康太を介抱しながらそう呟いていた。

雄二「ロリコンだな」

統夜「だな」

ソラ「お前も人の事言えないぞ？」

統夜「だな・・・」

千世「似合ってますよ？」

プリムラ「お兄ちゃん。似合う」

千世とプリムラの二人は統夜に似合うかどうか聞いてみた。

統夜「似合ってますぞ」

二人にそう優しく答えると二人は嬉しさのあまり抱きついた。

ダイチ「ロリコンだな」

統夜「そういうお前は制裁されなきゃいいけどな」

統夜の言葉を聞いたダイチは顔を真っ青になり始めた。

リリス「ソラ様。似合ってますか？」

ソラ「ああ。似合っているんじゃないか？」

冷静にそう答え、リリスはソラに抱き付いた。

その後、黄色のタンキニの水着を着た美波が絶望に満ちた表情でやって来た。

明久「ど、どうしたの？美波」

美波「全員敵よ！！梅ノ森や早苗のような人以外は！！あれは人間の域を超えているわ！！胸の抵抗が無くて、あっさりビキニを着れるウチの気持ちなんて！！」

明久「大丈夫だよ。そんな事無いよ美波。水着姿似合ってるよ」

美波「本当？」

明久「うん。似合ってるよ。胸も、バストも、ボインもほっそりしていて足の親指がああああ！！！！」

褒めようとしたが、あまり気分が宜しくないのか明久の足の親指を踏みつけた。

美波「胸の事を三回言わなかった？」

雄二「まあ・・・そんなに怒るな。明久は島田の水着姿に見とれてたぞ」

美波「もうアキつたら・・・素直に言えばいいのに」

両手で赤くなった頬を隠し嬉しそうにしていた。

明久「誰かが来たね。おおっ・・・」

黒寄りの紫のビキニを着た翔子が出て来た事により、明久は思わず声を出してしまった。

雄二の所まで来た翔子は躊躇なく目潰しを行い、目潰しをされた雄二はのた打ち回った。

雄二「ぐわああああ！！！！目が・・・目がああああ！！！！」

翔子「・・・雄二・・・他の子は見ないように」

明久「（ねえ・・・美波・・・雄二・・・霧島さんにバレたらどうなるかな？）」

美波「（何が・・・・・・非常に不味い事だけは分かるわ・・・）」

明久と美波は雄二と翔子の二人に聞こえないようにヒソヒソと話していた。

明久「霧島さん。水着に合ってるね？」

翔子「・・・ありがとう」

美波「ほら・・・坂本。霧島さんに言う事があるでしょう？」

雄二「翔子・・・」

翔子「・・・うん？」

雄二「ティッシュをくれ・・・涙が止まらん・・・」

明久「水着の感想を言えよ・・・」

雄二「視界を奪われて何を言えと!？」

乙女心が分かっている雄二に対し明久は呆れ溜息を吐いてしまった。

文乃「・・・」

希「にやあ・・・お待ち・・・」

恥ずかしいのか顔を赤らめ、薄い桃色のマイクロービキニTバックといった際どい水着姿の文乃と何も羞恥心もなく普通な表情をし、白いVスリングの水着姿の希の二人が来た。

これを見た統夜と千世、プリムラは驚き、明久とアッキー、美波、早苗、リリスは顔を赤らめ、小蓮はムツとし、零斗とダイチは笑顔でハイタッチし喜び、ソラは無表情で見っていた。

文乃「な、なにジロジロ見てるのよ!!アンタに見られると・・・他の男に見られるより恥ずかしいんだからね!!」

統夜「まあまあ・・・落ち着けて」

希「似合う？」

統夜「ま、まあな・・・挑戦し・・・よく頑張ったなって言いたい・・・（見てる俺でも恥ずかしくてしまう・・・）」

続いて白を基調としたマイクロビキニとＴバックの水着姿のはやてを先頭にピンク色のＶスリング姿のなのはと黒のＶスリング姿のフエイトの三人が来た。

際どい水着なのか三人は顔を赤らめていた。当然と言えば当然かもしれない。

統夜「・・・・・・・・」

はやての水着姿にボーっとし

ダイチ「ありがとございましたあああああ！！！」

三人の際どい水着姿が見れたのかお礼を言っていた。

ダイチがお礼を言い終えた瞬間、統夜と遊輔はタイミング良く拳を振るい鳩尾にクリティカルヒットして吹き飛ばした。

ダイチ「グハッ！？な、なんで・・・」

統夜「何となくだ」

遊輔「気にするな」

殴った二人は何事も無いかのように答えた。

雄二「一体何があつたんだ？」

徐々に目が見えようとした瞬間、翔子に再び目潰しされた。

雄二「うがああああ！！！！目がああああ！！！！」

翔子「・・・雄二は見ちゃ駄目・・・」

ソラ「哀れだな」

カザリ「可哀想だね・・・彼・・・」

雄二の悲惨さにソラは冷静に呟き、カザリは苦笑していた。

統夜「雄二には生温いものさ・・・更なる地獄が待っているからなカザリ」さり気無く酷い言葉を聞いたんだけど!？」

統夜のとんでもない発言にカザリは顔を青ざめツツコミを入れた。

はやて「に、似合う?」

統夜「新鮮さが伝わる程似合ってるぞ」

はやて「そ、そうか・・・統夜の為なら全裸でも・・・」

統夜「ここでやるのは止めてくれ・・・」

はやての危険な発言にツツコミを入れた。

なのは「ど、どうかな?」

遊輔「う、うん・・・似合ってるよ(何か・・・直に見てしまつと・

・・・こつちが持たない気がするが・・・)」

なのは「ありがとう」

なのはが抱き付いた瞬間

遊輔「・・・」

赤くなり倒れてしまった。

刺激が強過ぎたのだろう。

統夜「ええええええーっ！！！！？お前ってそんなだっけ？！」

露出過ぎる水着姿のなのはを見て倒れた遊輔に叫んでいた。

この時、統夜を始めとした一同は遊輔の弱点が分かった瞬間であった。

はやて「意外な事になったな〜」

統夜「全くだ・・・」

そう言っつて統夜と明久は倒れた遊輔を担いでプールの中へ放り投げた。

なのは「何をやってるのぉーっ！！」

統夜、明久「ごもみっ!？」

遊輔をプールの中に放り投げた二人になのははとび蹴りを入れて吹き飛ばした。

フエイト「これは二人が悪い」

統夜「いや〜・・・あいつのラバーズ構成に腹が立ってさ」

明久「遊輔だけ幼女がない事で放り投げたとかじゃないから大丈夫だよ」

明久の発言でなのはは無言で右手をグーにして、二人の頭に数発拳骨を喰らわせた。

なのは「今度したら拳骨だけじゃ済まないから」

統夜、明久「は〜い」

レーティア「お待たせ〜ギルシア。何で氷漬けになってるの?!」

統夜「雪女の幼女さんに抱きつこうとしたら氷漬けされたんだよ」

氷像になっているギルシアを見て驚いているレーティアにそう説明をしていた。

来たのはリルを抱えたレーティア一人だけでなくジャンヌと木下姉妹、シャル、蓮華、アリス（チエンバース）がいた。

レーティアは黒いビキニ、ジャンヌは白のビキニ、優子は真紅のマイクロビキニとTバックの組み合わせの水着、秀吉はライトグリーンのマイクロビキニとTバックの組み合わせの水着、シャルは紫色のマイクロビキニとTバックの組み合わせの水着、蓮華は桜色のマイクロビキニとTバックの組み合わせの水着、アリス（チエンバース）は黒のマイクロビキニとTバックの組み合わせの水着である。マイクロビキニとTバックの組み合わせの水着組の人達（アリス（チエンバース）を除く）は顔を真っ赤にしていたのは言うまでもない。

刺激のある水着姿の彼女を見た康太、sは鼻血を大量に出し血の池を作り再び倒れてしまった。

明久「s「ムツツリーニイイイイイ！！！」

統夜「これは・・・何という光景だ・・・」

ギルシア「これは中々いいぞ。幼女でマイクロビキニとTバックの組み合わせの水着なら俺は満点を与えたい」

氷像にされていたギルシアは何とか脱出し彼女達の水着姿を統夜と一緒に見つめていた。

木下姉妹は明久と雄二を見つけた瞬間、目をキラんと光らせ、二人に目掛けてドロップキックを放ちプールに落とした。

明久「な、何をするんだ！？秀吉」

雄二「俺達が一体な・・・に・・・を・・・」

目潰しから普通に見えるようになった二人の水着姿を見た雄二は顔を真っ青になった。

優子「アンタの名前が入った袋の中に入ってた水着よ！」

秀吉「明久よ・・・流石のワシでものお・・・」

明久「ちよつと待って!? あれは零斗の策略で・・・」

統夜「霧島くこいつの制裁お願いしま〜す」

翔子「分かった・・・」

雄二「おい!? なに勝手に決めてるんだ!? ちよつ!? おい!? 翔子!? 離せええええ!!!」

翔子に連れて行かれた雄二を黒い笑みを浮かべて手を振っていた。

統夜「マイクロピキ二組の増加か・・・」

美波「Worauf für ein Standard hat Gott jene unterschieden, die haben, und jene, die nicht haben! ? Was war für mich ungenugend! ?」

シャル「彼女はどうしたの?」

美波の様子が気になったのか葉月に聞いてみた。

葉月「お姉ちゃんはショックが起きるとドイツ語に戻ってしまうんです」

統夜「まあ・・・レーティア達の大きなメロンを見ればな・・・ぐげっ?!」

大きなメロンを見ながら納得をしていたが、はやてのジャーマンス

「プレックスを受けてしまった。
理由は普通の胸の大きさのはやてより大きいものを持っている存在
を統夜が見ていたからである。要するに嫉妬です。」

零斗「災難だな」

シャル「統夜。大丈夫」

統夜「まあ・・・何とか・・・ね」

シャル「目をそらさずこっち向く」

シャルのメロンを最初に見た後逸らしてしまった為、無理矢理起こされた。

シャル「似合うかしら？」

統夜「刺激があるけど・・・セクシーさが伝わってます」

シャル「これは刺激があり過ぎるわね。感想ありがとう」

統夜「あ、ああ・・・優子と秀吉も似合ってるぞ」

優子「あ、ああああ・・・ありがとう」

秀吉「ありがとう・・・なのじゃ・・・」

統夜に見られた事と笑顔で褒められた事により二人の顔はボンツと
いう音と共に真っ赤になって緩んだ表情になっていた。

統夜「次は誰が来るやら・・・康太の命が掛っている・・・」

明久「うん・・・ムッツリーニが死んじゃうからね・・・下手する
と・・・」

次にやって来たのはツキゾーを抱えているカナと蓮華、シャロ、ネ
ロ、エリー、コーデリアの五人が来た。

カナは黒いVスリング、蓮華は桜色のマイクロビキニとTバック、
シャロはピンクのVスリング、ネロはオレンジのVスリング、エリ

ーはフリルが付いた翠のビキニ、コーデリアは水色のVスリングの水着である。

お陰で皆は顔を真っ赤にして恥じらっており、康太・sは再び鼻血を出し気を失っており、明久達に介抱されていた。

ギルシア「零斗・・・ありがとう!!俺・・・一生忘れない!!シヤロさんとネロたん、エリーさんの・・・事・・・を・・・」

零斗にお礼を言いながら鼻血を大量に流しながら倒れてしまった。

レーティア「ギルシアアーーーーっ!!!!!!」

ジャンヌ「ええええええええーっ!!!!出し過ぎだよおおおお!!!!!!」

統夜「あゝあ・・・シヤロとネロの際どい水着姿を見たらああなるわ・・・ギルシアよ・・・暁に死す・・・」
ジャンヌ「や、ただ気を失ってるだけだから」

統夜のボケに冷静にツッコミを入れていた。

ダイチ「に、似合うよ。エリー」

エリー「あ、ありがとう・・・ダイチ君」

シヤロ「うう・・・恥ずかしいよ・・・」

ネロ「コラ!スケベ!こつちを見るなよ!」

コーデリア「一種の罰ゲームね・・・」

エリーは頬を赤く染め、嬉しがり、残りのミルクィホームズは恥ずかしさで顔を真っ赤にしていた。

カナ「セクシーで似合ってるでしょ?」

一緒に連れて来たツキゾーを両手で抱きしめながら言った。

統夜「持って来たんだ・・・似合ってるぞ」

優しく言いながら頭を撫でていた。

カナ「あ、ありがとう」

プリムラ「似合ってるよ。カナお姉ちゃん」
カナ「ありがとう。プリムラ」

嬉しそうにプリムラの頭を撫でていた。

蓮華「ゆ、遊輔・・・どう・・・かな？」

あまりの恥ずかしさに顔を真っ赤にした蓮華は遊輔に自分の水着姿を見せていた。

その遊輔は刺激が強過ぎたのか、顔を真っ赤にして煙が出始め動かなくなった。

なのは「遊輔君!?!」

蓮華「大丈夫か!?!遊輔!?!」

動かなくなった遊輔をペシペシと頬を叩いて起こそうとしていた。

統夜「（遊輔にああいうんは強過ぎたのか・・・ビキニは大丈夫だったのに・・・）」

アリス（チェンバース）「似合っ?零斗」

零斗「似合っているぞ」

元凶である零斗は嬉しそうにしているアリス（チェンバース）の水

着姿を褒めていた。

そんなやり取りをしている二人を一部を除く女性陣は睨んだのは言うまでも無い。

最後であるメアリと瑞希、鮮華、アリス、チルノ、ギル、シヨカ、メズールがプールサイドにやって来た。

メアリは朱色のマイクロビキニとTバック、瑞希は濃いピンクのマイクロビキニとTバック、鮮華は真紅のVスリング、アリスは漆黒のマイクロビキニとTバック、チルノは水色と白が混ざったフリルが付いた可愛いビキニ、ギルは紫色のビキニ、シヨカは紅いワンピース水着、メズールは青いビキニにパレオを巻いている姿で来ている。

彼女達が来た瞬間、康太は今まで以上の鼻血を噴出し倒れ、統夜と明久の二人はメアリと瑞希、鮮華、アリス、ギルの五人の規格外の大きさの胸を見て鼻血を出してしまい膝をついてしまった。

統夜が鼻血を出した瞬間、はやと文乃、優子のトリプルチョップが炸裂し、プールの中へ入ってしまった。

雄二「これは確かに……うがああああ……目がアアアアアア！
！！！」

お仕置きを耐えた雄二が四人の胸を見ようとした瞬間、翔子に目潰しされ、悶え始めた。

翔子「ここには……雄二に見せられないものが多過ぎる」

雄二「チキシヨウ……理不尽な……」

統夜「目潰しだけで済んでるお前はまだ優しい方だ……」

プールに沈んだ統夜が浮かび上がってそう言った。

チルノ「似合う？」

ギル「ぷっ？」

シヨカ「かつ？」

黒狼「似合いますよ」

アッキー「そうだね」

アंक「まあまあだね」

カザリ「かね・・・」

ウヴァ「そうだな」

チルノとギル、シヨカの水着姿をそれぞれ褒めたりしていた。

メズール「似合うかしら？」

ガメル「メズール。似合う」

母親を褒めるように褒めていたガメルであった。

明久「こ、これは・・・なんという・・・は、破壊力・・・」

瑞希の水着姿を見て、康太が倒れている所に倒れてしまった。

瑞希「あ、明久君?!」

たゆんたゆんと胸を揺らしながら明久の方へ駆けつけ介抱を始めた。これを見ていた美波と小蓮、早苗の三人はそれぞれ小さな胸を触りながら瑞希に対し妬みオーラを出していた。

アリス「ふっ・・・貧乳の哀れな姿が見れるな。どうだ？ソラ。中々のものだろう？」

ソラ「そうだな。似合ってるんじゃないか」

素っ気ない態度でアリスの水着姿を見てそう言った。

そして、アリスは豊満な胸をソラの腕に触れるように抱きついた。

リリス「悔しいです!! 所詮はお色気と胸ですか!!」

アリス「その通りだ。リリス。お前の幼児体型ではこの私には勝てんと知れ!」

アリスの胸に嫉妬していたリリスでした。

まあ・・・きつといい事があるさ。

メアリ「ど、どうなのよ?」

統夜「何が? 閣下よ」

そう普通に装っていると、メアリは豊満な胸を活かし、統夜の顔を埋めるように抱き締めた。

やった本人は恥ずかしそうにしていたが、嬉しそうな感じもあった。

メアリ「名前を呼んで・・・でなきゃ・・・こうするから・・・恥ずかしいけど・・・アンタが悪いんだからね!!」

統夜「むぐ・・・むぐぐ・・・(訳: や、訳分からないし)」

統夜ラバース「あ~~~~っ!!!」

メアリの積極的な行動にはやてをはじめとした統夜ラバースは大声を上げて叫んでいた。

鮮華「あ・・・そろそろ・・・」

メアリ「そ、それもそうね。べ、別に統夜の為にしたんじゃないからね!」

はやて「ここでツンデレ発言してもチャラにはならへんよ・・・」

自分もやりたかったのか少々落ち込んでいたはやてだった。

メアリ「で・・・私の水着姿似合うの？どうなの？」
統夜「似合ってるよ。可愛らしさとセクシーさが大きく伝わってるよ」

統夜の褒め言葉に顔を真っ赤にし、嬉しかったのか抱き締め始め、揉め事が起き始めたのは言うまでもなかった。

恥ずかしい水着ショーを終え、それぞれ準備体操を終え泳ぎ始めた。

瑞希「あの・・・明久君に天川君、桜木君」

梯子を使って水に入って来た瑞希が近くに来た。

明久「何かな？瑞希」

瑞希「三人は水泳は得意ですか？」

統夜「そりゃ勿論」

明久「うん。遊輔・・・気持ちは分かるけど倒れないように・・・」

遊輔「あ、ああ・・・今は大丈夫だ」

瑞希の姿が刺激的なのか遊輔はクラクラとし始めた。

瑞希「大丈夫ですか？」

遊輔「あ、ああ・・・水泳は得意だ」

美波とはやて、優子、メアリの四人が気になったのか近くまで来た。

美波「瑞希って泳ぐのが苦手？」

瑞希「はい・・・恥ずかしいんですけど・・・水に浮く位しか出来なくて・・・」

美波「そう言う事なら、いつも勉強を教えてもらっているお礼に、

ウチが瑞希に泳ぎを教えてあげよつか？」

瑞希「えっ？いいんですか？」

はやて「私も教えてあげるで」

優子「私達に任せなさい。ツツコミだけじゃないんだから！！」

メアリ「何を言ってるの？運動神経がある人に教われれば泳ぎは上達すると思っわ」

瑞希「ありがとうございます。よろしくお願いします」

五人のやり取りを三人は微笑んだ。決して彼女達の水着姿を見て微笑んだ訳じゃない。

勉強が出来る瑞希が勉強とティロ・フィナーレが出来ない美波にいつも教えてあげている立場。

優子「ちよつと待てえーっ！一つ余計なものが混じってるんですけど!？」

地の文にツツコミを入れていた優子であった。

明久「こうしてみると、美波がAで瑞希がFみたいだね」

統夜「優子もAで、はやてはDとE、メアリはGとHぐらいはあるだろう」

優子、美波「私^{ウチ}だつて寄せてあげればB位あるわよ!!」

目を光らせた二人の蹴りを喰らった統夜と明久の二人はプールに沈んでしまった。

翔子「・・・雄二、ちなみに私はCクラス」

雄二「何を言ってるんだ？お前は・・・」

泳いでいる翔子と何故か目隠しされ縛られている雄二の二人が秘密の会話をしていた。

瑞希が泳げるようになるレッスンが始まり、しばらく時間が経った。

美波「泳げない理由はたった一つ！瑞希！！その浮き輪よ！！」

美波が指差したのは瑞希の大きな胸だった。

瑞希「え？ええっ！？な、何でそうなるんですか？！てかはやてちやんやメアリちゃんといった胸の大きい人だつてあるじゃないですか！？」

美波「ぐっ・・・その浮き輪をウチに寄越しなさい！！自立つ為に！！」

はやて「うわっ！？とんでもない下らない理由や！？」

美波の妬みにはやてはツツコミを入れていた。

統夜「さ、俺達は他の方へ行こうか」

遊輔「そうだな」

明久「うん。小蓮ちゃんと早苗ちゃんも向こうへ行こうか」

明久を見つけた小蓮と早苗の二人と一緒に離れようとしていた。

瑞希「あ、明久君！？なんだか美波ちゃんが怖いです！？ていうか・・・美波ちゃん・・・胸の無いんじゃ・・・ティロ・ファイナーが出来ないマミですね」

美波「よし・・・その胸の脂肪を鉄板レベルまで燃焼してやらあああああ！！！！！！」

優子「暑さと巨乳への嫉妬で暴走しちゃったよこの人オオオオオオ！！！！！！」

美波の暴走に優子は顔を青ざめ叫び始めた。

はやて「ほな・・・撤収や」

メアリ「そうね」

優子「待たんかいイイイイイ！！！」

はやて「何や？」

優子「何や？じゃないでしょう！？なに自然に撤収しようとしてんの！？」

メアリ「あれをどうしろと？私達が止めようとしても無理よ」

優子「ええ・・・そうね・・・無理でしょうよ・・・」

はやてとメアリの胸を見て納得していた。

三人が話し合いが終わっても瑞希と美波の揉め事はまだ続いていた。

葉月「お兄ちゃん達！」

明久「わぷっ！？あつ、葉月ちゃん」

そこへ明久の背に葉月が乗ってきて、明久はこらえきれず沈んでしまふ。

明久「どうしたの？一緒に遊ぶ？」

葉月「はい！『水中鬼』をします」

聞いたことない遊びに、三人は首を傾げる。

名称から推測した考えに、面白さを感じる三人だった。

葉月「違ってますっ。水中鬼は、鬼になった人がそうでない人を追い掛けるです。それで鬼が他の人を水の中に引きずり込んで、溺れさ

せたら勝ちです」

明久「鬼だ！それは確かに鬼だ！・・・というか、溺れさせちゃダメだよ。危ないから」

葉月「あう・・・ダメですか？」

ちよつと不満そうに、葉月が頬を膨らませる。

どれだけ危険かを教えてあげる必要があるなと伝え合う。

統夜「おい・・・これは結構面白いかもな・・・霧島」

黒い笑みを浮かべ、翔子を呼んだ瞬間、水中から顔を出した。

翔子「何？」

明久「雄二と水中鬼って遊びをやって見せてほしいんだ。ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れさせた後で人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

これを聞いた翔子は小さく頷き、再び水中へ潜った。

統夜「いやあ・・・中々楽しめそうだな」

明久「そうだねえ」

統夜「とりゃ！」

雄二「ぐおおおっ！！わっぷ！一体・・・何があ！！」

プールからあがった統夜は雄二をプールに放り投げ、上がるうとしたが何かに引き摺りこまれ沈んでしまった。

統夜「な、危ないだろ？」

葉月「あう・・・水中鬼は諦めるです・・・」

早苗「いいのですかね・・・本当に・・・」

統夜「いいんだよ」

明久「あっ・・・出て来た」

泡がブクブクと吹き出し、雄二が水中から脱出し、目隠しをしていた布をとり、犯人である統夜と明久の方へ向かった。

雄二「テメエらか！？こんな事をしやがったのは！！ごはっ！？」

翔子「雄二・・・しぶとい」

雄二「一体何の恨みがあるんだああああ！！！！？」

雄二の背後から水中から上がった翔子が再び雄二を溺れさす作業を始めた。

すると、プールサイドに愛子がやって来た。

愛子「あれ・・・霧島さんに天川君達・・・どうしてここに？」

統夜「プール掃除だよ。工藤は？」

愛子「ああ、ボク、水泳部だから。練習休みなのを忘れてて、ここまで来ちゃったんだ。で、プールで声が聞こえたから、何かな？って思っで・・・ボク以外に天川君の知り合い二人と島田さんの友達が出来てるよ。水着姿で」

愛子が指差した方向に愛子の言葉に納得した統夜と先程まで暴走していた美波を見ると・・・

美春「お姉様あああああ！！！！どうして美春に声を掛けてくれな
いのですかあ！？」

美波「み、美春う！？ 何でアンタがここにいるのよ！？」

美春「美春には、お姉さまをがい・・・『ゴオンッ！！』・・・」

美波「えっ……一体何が起こったの?!」

美春が倒れた事に驚いたが、美波は血の付いた大きな氷の塊を見て犯人は確定したのであった。

早苗「チツ……急所が狙えませんでした」

瑞希「でもナイスショットでしたよ。今度はクリティカルを目指しましょう」

小蓮「次シャオがやりたい」

明久「駄目だつて!!」

美波「おiiiiiiii!!!!何やってんのよオオオオオ!!!!アンタ達は!?!」

舌打ちをしていた早苗とやりたがっている瑞希と小蓮に怒鳴っていた。

統夜「咲夜に雪蓮……来てたんだ」

咲夜「はぁい。統夜」

雪蓮「来たわよ」

赤のビキニの水着を着た咲夜と黒のビキニの水着を着た雪蓮の二人だった。

二人はプールの中に飛び込み、統夜の方へ移動し、右腕に咲夜が組み、左腕に雪蓮が組んでいた。

しかも二人の豊満な胸が統夜の両腕に当たっている。

愛子「あらら……じゃあ、ボクも着替えてくるね」

康太「……………」

愛子「おっと……覗くならバレない様にね」

康太「……………舐めるな……………ガクツ……………」

愛子が更衣室に行こうとした瞬間、康太にそう言って更衣室へ消えた。

愛子が消えた後、康太は血が足りないのか再び気を失ってしまった。

明久「もう駄目だ・・・色々・・・ムツツリーニ・・・」
遊輔「そうだな」

水着に着替え終えた愛子も合流し、一通りの事を終え、一同はプールから出た。

瑞希「あ、あの・・・私。ワツフルを作って来たので食べますか？」

バスケットの中からワツフルを取り出したのを見た明久と雄二、康太、美波、秀吉は顔を青ざめた。

何故なら瑞希の料理は兵器に匹敵する威力を持つからだ。

明久はある作戦を実行した。

明久「零斗。君はワツフルが好物だね。もの欲しそうな顔をしているし」

零斗「はあ？」

雄二「何を言ってるんだ？あき・・・ああ・・・そういう事か」

明久の作戦を理解した雄二も協力し始めた。

雄二「ハジケリストである零斗には世話になってるからな。俺のワツフルもやるよ」

零斗「いやあ・・・照れるな」

雄二は零斗を褒める事から始めた。

ワッフルを手にし食べると、顔を少し歪ませた後完食した。

統夜「刺激のある味だったけど食べない事も無い」

シャル「あら・・・クリームが付いてるわよ。大人しくしてなさい」

統夜のほっぺにクリームが付いていたので、シャルは舌を使ってクリームをとった。

いきなりの行動に統夜を始め、シャルを除く統夜ラバーズは硬直していた。

明久「何でこうなる訳？」

雄二「分からん・・・」

二人がそう呟いた瞬間、零斗が目覚めた。

明久「不味いね・・・」

雄二「だな・・・」

目覚めた零斗は明久と雄二を見た瞬間、怒りを露わにし追いかけて始めた。

零斗「待てゴラァァァァァァァァ！！！！」

明久「これはやばい!？」

雄二「逃げるオオオオオオオオ！！！！」

プールサイドを走って逃げ始めた。

三人の逃亡劇が始まった後、統夜はシャルをお姫様だっこしてはやて達から逃げ始めた。

はやて「待たんかいいいいいい！！！！」

文乃「待ちなさい！統夜！！」

優子「関節技のフルコースをお見舞いしてあげるわ！」

メアリ「燃やしてやるから待ちなさい！」

統夜「んなもん願い下げだアアアア！！！！」

シャル「頑張つて〜」

嫉妬による制裁は全然来なかったが、改めて思うと恐ろしいものだなと感じながら走っていた。

統夜が抱えているシャルやはやて、文乃、メアリといった胸のある人は走っている時に揺れていたの言うまでも無かった。

ソラ「哀れだな」

鮮華「そうですね・・・兄さんも自重するべきです」

ソラ「統夜の妹だったな・・・確か・・・」

鮮華「天川鮮華と言います」

ソラ「俺は天道ソラだ」

それぞれ自己紹介すると追いかけている統夜を見ていた。

鮮華「兄さんを見てると・・・嫉妬してしまうんです。私に無いものを持つて・・・」

ソラ「・・・」

鮮華「勉強も運動もでき・・・色々な事をのみこみ・・・デバイスや様々な技術を持っている事に対して・・・すみません・・・」

ソラ「気にするな。統夜も統夜なりに努力しているから出来た・・・それだけの事だ。最初から完璧な存在なんていないからな」

冷静にソラはそう論じた。

鮮華「天道さん……」

ソラ「ソラで構わない。お前の事は鮮華と呼ぶから」

鮮華「分かりました。ソラさんは蒼穹の騎士団をどう思いますか？」

ソラ「個性がありまくりの集団だな。様々な力を持った連中の集まりでもあるがな」

蒼穹の騎士団をそう評価していた。

鮮華「そう思いますよね。はぁ……」

個性的すぎる統夜達にため息をついていた。

ソラ「お前はお前の道を見つければいい」

鮮華「は、はい……」

統夜「何でお前らも一緒にプールの中に入ってるんだよ!？」

明久「逃げ道には丁度いいかなってね。てか君は凄いな。シャルさんをお姫様だっこして逃げてるなんて」

プールの中に逃げ始めた明久と雄二は零斗の魔の手から逃れようとして泳いで逃げた。

零斗「逃がすかアアアアアア!!喰らえ!マイティ真拳奥義!!!レイトサイクロン!!」

プールの中に入った零斗は身体を回転し超巨大なハリケーンを巻き起こし、プールサイドにまで巻き込まれた。

泳いでいた他の人達やプールサイドにいた人達も巻き添えを喰らっ

てしまったのは言うまでもなかった。

統夜「あの馬鹿絶対に・・・あれ・・・何か身体中に軟らかいものを感じるんだけど？」

軟らかい感触を気にしながらも起き上がり、空から何かがゆっくりと降って来た。

降って来たものを見ると統夜は吹いてしまった。何故なら白や朱色・・・自分達のラバーズが身に付けていたマイクロビキニとTバック、ビキニだったのだから。

恐る恐る起き上がり、見てみるとはやて達統夜ラバーズがあり、サイクロンのせいかマイクロビキニとTバック、ビキニの水着を着てる人だけ着てない状態になっていた。

これを見た統夜は顔を真っ青にしてしまった。

統夜「おいおいおい！?!?!あの馬鹿とんでもない災害をまき散らしやがったよおおおお!!!!」

はやて「ん・・・って何で纏ってないん?!」

統夜「あの馬鹿のせいだ・・・早く隠してくれ・・・」

胸と下を手で隠したはやてに対し、目を手で隠しながらそう言った。その後にはやては統夜の後ろへ移動し、胸を背中に当て、統夜は顔を真っ赤にしてしまった。

統夜「おいおいおい!?!?!それは不味いつて!?!」

はやて「大丈夫や。胸が気持ちいい・・・」

自信に満ちた表情で答えていたはやてだったが、何故か顔を赤くし気持ち良さそうな声を出し始めた。

遊輔はというとなのはと蓮華の胸のサンドイッチ状態で目を覚まし、

気を失っていた。

ギルシア「ここは・・・幼女天国か?!」

シャロとネロが自分の腕に抱かれた形で目を覚ましたギルシアだった。

すると二人は目を覚まし悲鳴を上げていた。

シャロ「キヤアアアアアア!!!」

ネロ「触るな変態ロリコン!!!」

目を覚ました瞬間、ギルシアから離れた。

ギルシア「な、何故逃げるんだ?さては照れてるんだな?それとネロたん!俺は少女を愛でる神父だ!!!」

レーティア「ギルシア」

ギルシア「どうした?レーティア・・・何も纏ってないんだけど?」

レーティア「水着がさっきので流されちゃって・・・困ってるのよ」

豊満な胸を手で押さえて歩いているレーティアが歩いて来た。

ギルシア「ならばこうしよう」

両手でレーティアの胸を隠し始めた。

レーティア「あん・・・ギルシアったら・・・」

ギルシア「こうした方がレーティア自身もいいものだろう?」

レーティア「それもそうね」

気持ち良さそうな顔をしながら、そう答えていた。

ソラ「なあ・・・そろそろどいてくれないか？」

鮮華「す、すみ・・・あん・・・あ、貴方も・・・む、胸を・・・」
ソラ「悪いな」

鮮華がソラを押し倒している態勢になりながらやり取りしていた。ちなみにソラは直接鮮華の露になっている胸を手で揉むように抑えていた。

すると、ソラは手を胸から離すと鮮華は水着を直しながらどいた。

鮮華「（な、何でしょうか・・・心が熱い・・・）」

水着を直し終えた後、胸に熱いものを感じていた。

ソラ「大丈夫か？」

鮮華「は、はい。大丈夫です・・・」

ソラのの目と合った瞬間、心臓の鼓動が激しくなっていた。

ソラ「気を付けるよ」

鮮華「はい」

この後、全て見ていたアリスとリリスに問い詰められたのは言うまでも無かった。

女性のあられも無い姿を見て鼻血を大量に出した康太二人は死ぬ寸前だった。

アッキー「ムツツリーニイイイイ！！そっちの僕ウウウウウ
！！！！」

康太・sと瑞希の生の胸が顔で埋められ、美波と小蓮、早苗の三人が身体に乗っており、気を失っている明久を見て叫んでいた。

愛子「これはプール掃除どころじゃ無いね・・・」

カザリ「カオスだね・・・」

アंक「だな・・・」

様々な惨状を見て苦笑いしている愛子とカオスだなと思いき苦笑しているアंकとカザリだった。

復活するまで時間が掛った為、復活した人達は一気にプール掃除を取りかかった。

夕方の四時になっていた。

明久「色々と疲れたよ」

統夜「ああ・・・零斗のあれのせいだな」

零斗「元はと言えば明久と雄二のせいじゃねえか!!」

統夜「あゝ・・・止める。余計疲れるから」

疲れが堪るのが嫌なのか二人を止めた。

ギルシア「俺的には幸せだ・・・幼女天国を味わい・・・幼女達のセクシーな水着姿が見れたからな」

統夜「それはアンタだけだ」

ギルシア「何て事を言うんだ!?同志よ!お前も千世たんやリムたんの水着姿が見れて良かっただろ!」

統夜「まあな・・・だがお前ほどじゃないがな」

ギルシアのロリコンぶりに呆れながらそう返した。

統夜の言葉を聞いた千世とプリムラは顔を緩ませ嬉しそうにしていた。

雄二「皆でひとつ風呂浴びて行くうぜ」

統夜「それいいね。お前の奢りか？」

雄二「割り勘だ」

統夜「チツ……」

雄二「おい……そこで舌打ちするな」

疲れを癒す為、一同は銭湯へ向った。

その頃

時空世界『FORTUNE』と呼ばれる世界にて異変が起き壊滅寸前まで近づいていた。

その名の通り幸福に包まれ、高度な技術や文化のある世界で人々は平和に暮らしていたがある男一人によって全てが変わった。

イグニス「……………」

イグニスというたった一人の男によって……

隊長「き、貴様ア……」

イグニス「ふん……その程度か……貴様ら人間は……」

隊長「な、舐めるな!!」

魔力を収束しイグニスに目掛けて放とうとしたが、いつの間にか消え、隊長の身体が上半身と下半身に分かれるように真っ二つに斬られ絶命した。

イグニス「貴様のような雑魚では暇つぶしにもならん。惨めな死くらいくれてやるう」

「その通りでしょうね・・・何せ貴方は天川統夜を凌駕する程の『異端』な力を持つのですから」

イグニス「たった一人でこの世界を壊滅させる男が言う事か？マガキ」

マガキ「ふふふ・・・こここの世界の技術は興味深く・・・いいモルモットがいますからねえ」

イグニスの隣で笑うマガキにそう言っていた。

イグニス「悪趣味な奴だ・・・」

マガキ「僕としては君と同盟を組むというのはいい事です。確かに君は強いが・・・強大な存在一つあっても数ある存在は強大になりうるかもしれませんからねえ・・・」

イグニス「お前の言う通りだな・・・奴らは力をつけ始めているからな」

マガキ「ふふふ・・・ここを僕達の混沌の拠点としましょうか」

デュオ「マガキ様。こっちの作業は終わりましたぜ」

マガキとイグニスの前に混沌六天王とタイガが集まっていた。

イグニスはタイガを忌まわしそうに見ていた。

マガキ「ふふふ・・・そう言えば・・・『C計画』で最初に誕生した人造魔導師第一号体は？」

「ここにいますよ」

マガキの背後から腰まである金髪に蒼い瞳をしばやてに似た顔立ちをし蒼を基調とした和服を着た女性が現れた。

デュオ「『龍華』・・・君は誰かの背後に忍び寄るのが趣味かい？」

先程現れた龍華と呼ばれた女性にデュオは軽く注意した。

龍華「別にそうするなどは言われてませんし」

デュオ「ま、いいけどさ。残った民はモルモットにするのは決定で
．．．」

マガキ「君達のデバイスをそろそろ作っておいた方がいいと思いま
すね．．．幸いこの世界の技術とセントクルセイダースが遺し
た技術でね．．．ふふふふ．．．」

イグニス「マガキ．．．あの娘は何者だ？」

龍華「私自身から話しておきましょう．．．私の名は蒼咲龍華あおざき りゅうか．．．
統夜お父様とはやてお母様達の細胞を基に造られたクローンです」

マガキが説明する前に龍華がイグニスに淡々と説明をしていた。

イグニス「道理である娘に似て．．．力も奴と似ていたのか」

マガキ「ですが彼女一人だけではありませんよ．．．紅蓮の猛虎に
瑠璃の軍神、マイティ真拳継承者等のクローン達も誕生しますから
イグニス「C計画．．．クローン研究か．．．」

マガキ「ええ．．．それと．．．例のは？」

スレッドに顔を向けると報告を始めた。

スレッド「まだ調査中だ．．．かの『封印されし禁忌の存在』がい
る場所は難しい」

マガキ「そうですね．．．『アレ』が解かれれば混沌もより大きな
ものになるでしょう」

これから先が楽しみなのかマガキは笑い始めた。

彼が言う『封印されし禁忌の存在』とは一体．．．？

男湯では統夜達はゆっくり湯船の中へ浸かり、疲れを癒していた。

統夜「はあゝ・・・気持ちがいい」

雄二「お前に聞きたい事があるんだがいいか？」

気持ち良さそうにしている統夜に雄二が話し掛けた。

統夜「別にいいけど」

雄二「お前ら蒼穹の騎士団は反管理局組織だったろ？」

統夜「ああ。今は冥界と修羅と戦う存在だがな」

雄二「まだ敵はいるってか・・・セイントクルセイダーズを倒したら終わりだと思ったがな」

統夜「ははは・・・俺はそれ以外にイグニスを追う・・・奴を放っておく訳にはいかない」

雄二「イグニス・・・か・・・まあ・・・俺から言える事は頑張れしか無いな」

雄二はそう言いながら湯船から上がり身体を洗い始めた。

ソラ「イグニス・・・確か英雄と呼ばれていた存在だったな」

ギルシア「俺はあまり詳しくないが・・・どんな奴なんだ？」

統夜「世界を・・・人類全てを憎み始めた大馬鹿野郎だよ」

ギルシアの問いに統夜は天井を遠い目をしてそう答えた。

ギルシア「世界と人類全てを憎み始めた大馬鹿野郎・・・か」

統夜「ああ・・・仲間をセイラの策略で失ったキツカケで人類全てを憎み始めた・・・」

ギルシア「最強の英雄と呼ばれた存在が変貌してしまうってのは嫌

なもんだな・・・それをさせたセイラはとんでもない置き土産を置いてあの世へ逝ったな」

セイラのやった事が原因と分かったギルシアは呆れていた。己の勝手な理由でイグニスを狂わせたのだから・・・

黒狼「イグニスって人・・・いつか報われるといいですね」
統夜「だな・・・その為にもあそこまで強くならんな・・・」

女風呂にて

はやて「エアリスちゃんも一緒に入ってたなんてな」

エアリス「ちょっとはやて！？いきなり抱きつかないですよ！！」

エアリスが入浴しており、彼女を見たはやては抱きついていていた。

なのは「にやはは・・・はやてちゃんのお友達かな？」

フェイト「レオンさんとユウカさんもいるとは思いませんでした」
レオン「偶にはいいと思ってな」

ユウカ「寮の大浴場は捨てがたいけどこの銭湯もいけるわね」

エアリス以外にレオンとユウカの二人も来ていたのであった。

アリス「ほほう・・・はやては両性愛が出来る口か？」

笑みを浮かべながらはやてとエアリスのやり取りを見ていた。貧乳の人達は自分と比べものにならないものを持っている人たちを見て羨ましがっていたのは言うまでもなかった。

シャロ「あの・・・はやてさん。一つ聞いていいですか？」
はやて「何や？」

シャロ達ミルキイホームズがエアリスとコミュニケーションをしているはやてに話しかけていた。

ネロ「蒼穹の騎士団って元々管理局・・・セントクルセイダースを倒す組織として結成されたんだよな？」

はやて「せやな・・・けど・・・」

コーデリア「けど？」

はやて「修羅と冥界という存在が驚異やからな」

シャロ「また驚異になる存在が来ましたね・・・」

ネロ「大変だな・・・もしセイラのババアが私たちを始末していたら全ての世界は地獄になつてたね」

はやて「その通りや」

ネロの言葉に肯定していたはやてだった。

エアリス「はやてはどうするの？そのセントクルセイダースを倒した後は」

はやて「統夜と一緒にイグニスを追うかな。冥界と修羅も大事やけど（星の力もあるけどな・・・）」

今後の事をエアリスに優しい口調で語りかけた。

アリス（チェンバース）「そう言えば・・・イグニスってどんな人なの？全然分からないけど・・・」

イグニス知らないアリス（チェンバース）を始め、チルノ達も気になり始めた。

はやて「セイラが起こした悲劇によって人類を・・・全ての世界を憎む馬鹿な人や・・・」

セイラ関連でイグニスが変わり始めた事に知っている人達は驚いてしまった。

リリス「またセイラですか・・・本当に酷い人ですね」

アリス「あのような存在に狂わされるとはな・・・あのババアの行動に流石の私も怒りを感じてしまうな」

優子「全くね・・・」

秀吉「あやつはこの世におらんくなったというのにのう・・・」

リリス達はセイラの行動に怒りを覚えていた。

レーティア「シャルも統夜と同じくイグニスを追うの？」

シャル「そうなるわね。イグニスという存在は放つてはおけないから・・・」

ジャンヌ「冥界と修羅・・・だっけ？私達も一緒に戦うよ」

シャルも統夜と同じくイグニスを追う事を決めていた。

直感なのかイグニスを放つてはおけない気がしたからだ。

レオン「それは頼もしいな。お前達姉妹も何らかの歩法を覚えたほうがいいんじゃないか？」

レーティア「歩法ねえ・・・」

ユウカ「統夜が使う瞬速の歩法である『刹那』とかね。レーティアは確か銃使いだっただわよね？」

レーティア「ええ。それがどうかした？」

ユウカ「月牙天衝の弾丸版である月牙天衝弾を習得すればいいんじ

やないかしら？」

レオン「銃限定の技だからな。やってみる価値はあるぞ」
レーティア「月牙天衝弾・・・かぁ・・・」

是非習得してみようかなと思ったレーティアだった。

アリス「しかし・・・鮮華が私のソラに意識するとは・・・流石、
天川統夜の妹というだけはあるな」

鮮華「あう・・・すみません・・・」

リリス「まあ・・・私達は構いませんが・・・」

アリス「まあ・・・ソラの事を理解した暁にはソラの三番目という
称号を与えよう」

リリス「ちよつとお！？何でそうなるんですか？！てかそんな事し
たらあの人達本当に怒りますよ！？」

アリス「ふっ・・・私自身も鮮華の成長に興味があるからな。あい
つらがどんな顔をするか楽しみた」

アリスの発言にリリスは涙目で叫びながらツツコミを入れていた。

アリス「その時は作者が制裁されるがな」

リリス「制裁され死んだらこの小説はどうなるんですか！？」

アリス「作者なら直ぐに復活するだろう。私とソラのラブストーリ
ーが出来ないではないか」

メタ発言を連発しながら二人で話し合っていた。

リリス「という訳でよろしくお願ひしますね。鮮華さん」

鮮華「はい」

リリス、アリスの順に握手していた。

シャル「そう言えば・・・統夜の修行はどう？」
レオン「ああ・・・覇気・・・武装色と見聞色を会得し、のみこむ速度が速い。霸王色の覇気も制御され成長している。素質が見事に受け継がれているかのように・・・」
シャル「三大冥王の血を引いてるからね・・・」
ユウカ「霸王と魔王の二面性を持つ存在は滅多にお目に掛れないわね」

統夜の中にある魔王と霸王の素質と成長速度に脅威を感じたのかそう呟いていた。

レオン「魔人と真祖のハーフと初めて聞いた日は驚いたな。三大冥王の子供ということに衝撃が走ったのと同時に胸の内から熱いものを感じた。あいつらを鍛え・・・魔人と真祖の力を完全に覚醒し制御した時戦ってみたいものだ」

ユウカ「程々にしなさいよ。というか何処でやるの？地下は完全に壊れてしまうからNGよ」

レオン「むう・・・難しいものだな・・・」

ユウカに指摘され、レオンは難しそうな顔をして考え始めた。

文乃「今日は酷い目にあつたわね・・・」

メアリ「全くよ・・・でも悪くは無かつたわよ」

恥ずかしい水着を着せられたり流されたりされたのか文乃は不機嫌オーラを出していた。

秀吉「ワシは統夜に褒められたからチャラじゃ」

優子「まあ・・・そうね」

メアリ「それはそうと文乃・・・話があるんだけどいいかしら？」

文乃「何よ？」

メアリ「貴方・・・どうするつもりなの？いくら統夜が真祖と魔人、蒼炎の力を封じているとはいえ・・・一時凌ぎにしか無い・・・」

真剣で鋭い目で文乃を見つめるメアリ。

文乃「そ、それは・・・」

千世「統夜の封印でも抑えられなくなったらどうするつもりなの？」

希「にやあ・・・暴走した力は悲しみを生む・・・」

文乃「そ、それは・・・」

メアリ「一つだけ方法はあるわ。妖力を持つ私が教えてあげるわ・・・妖力の制御方法を・・・封印されているとはいえ微量だけど感じるわ」

文乃「本気で言ってるの？」

メアリ「ええ。私だけじゃなく雪蓮さんや統夜も一緒よ」

自分の為に妖力制御に協力してくれるメアリ達に文乃は感動を覚えた。

はやて「幸い文乃ちゃんはリンカーコアもあつたから魔力制御も教えたるわ」

修学旅行から帰った後、シャマルに頼んで文乃の精密検査をした結果、リンカーコアがあつた事が分かったのだ。

文乃「はやて・・・」

はやて「魔力は私達が責任持つて・・・なあ？」

カナ「そうよ。私達を頼りなさい」

プリムラ「そうそう。文乃は一人じゃない。皆がいる」

咲夜「一緒に頑張れば何とかなるわよ」

魔力を持つ人々の激励に文乃は涙を流し始めた。
自分の周りに支えてくれる人がいた事に・・・

エアリス「統夜も賑やかな人達に囲まれてるね」

はやて「うん」

エアリス「意外な事を聞いたわね。魔人と真祖のハーフという事が・・・」

はやて「あゝ・・・種族がそうでも心は人間のままや。私は天使の力に目覚めたけどな・・・」

エアリス「それもそうね・・・はやてが天使に目覚めたって・・・
凄いわね」

膝裏まで伸びているはやての髪を洗いながら話し合っていた。
洗い終え、流し終えるとはやてがエアリスの頭を洗い始めた。

エアリス「統夜は元気にしてる？」

はやて「元気にやつとるよ。会う？」

エアリス「会ってみようかな。無茶して一人で背負いこんでる所とかやってないか心配だな」

はやて「色々あったからな・・・それはどうやるな」

二人のやり取りを見ているチルノとギル、シヨカ、メズールはゆっくりと湯船の中に浸かっていた。

チルノ「気持ちがいい〜」

ギル「ぷ〜」

シヨカ「かつ」

メズール「そうね」

四人は気持ち良さそうにしていたのは言いつまでも無かった。

第六十四話『プール掃除って面白いイベントだよね』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

愛子「いや〜今回のプール掃除は楽しかったね」

愛子「天川君達の活躍が期待出来そうな予感・・・かな？」

愛子「吉井君の家にある人物が帰って来た事がメインなお話だよ」

愛子「吉井君のラバーズ構成を見たらどう思うのかが楽しみだね」

愛子「次回『実の弟にラヴというのは人としてどうよ？』テイクオフ」

番外編『六兄弟は後輩でも変な道に走っちゃ駄目』（前書き）

龍の骨さんのリクエストで真拳六兄弟が出ます。

番外編『六兄弟は後輩でも変な道に走っちゃ駄目』

番外編『六兄弟は後輩でも変な道に走っちゃ駄目』

統夜「で・・・作者も一緒か」

ケン「おうよ」

この場にいるのは統夜とはやて、作者ケンの三人だけで話合っていた。

今のケンの容姿は肩まである銀髪に紫色の瞳をしたバールジルに似た顔立ちで蒼いロングコートを羽織り、その下に黒いシャツ、下は黒いズボンを穿き、黄土色のブーツを履いている姿である。

背中に大剣、左腰に鞘付の日本刀を装備していた。

統夜「完全バールジルじゃん!？」

ケン「うるさい!別にいいだろ!」

はやて「で・・・今回は何や?」

ケン「今回は龍の骨さんの作品の『三学年だよっ!BSAA学園!』から真拳六兄弟がやって来る。そしてトークをする」

統夜「おお」

ケン「君達カモン」

ケンが指を鳴らすと、赤髪のみディアムショートをした少年と、黒髪のスパイクショートをした少年と、アシメバングショートにアイストラッカー状のアホ毛をし、真ん中にエメラルド色の石が付いているバンドを巻いている少年と、クールショートをし左手首にブレスレットをした少年と、ナチュラルショートをした少年と、ラフカールショートをし左手首にブレスレットをした少年達が歩いてこちらへ来た。

はやての黒いオーラに当てられた六兄弟はただはやての言葉に従うしか無かった。

ケン「統夜が絡むと怖く感じるな・・・」

統夜「痛かった・・・」

自力で脱出した統夜を見て、ケンはため息をついた。

統夜「次元転移が出来るクイーンズゲイトで零斗達の世界に来たという訳か・・・暗黒流星団ねえ・・・世界を闇に包む。君達は闇と言ったらどんなものを想像する？」

七八「そうですね・・・凶悪ですかね・・・」

新堂「絶望です」

拓海「暗黒かな」

ハジメ「混沌です」

誠一郎「破滅と悲劇」

太郎「不吉ですね」

六兄弟の答えに統夜は「なるほど」と頷いていた。

統夜「あながち間違いでも無いが・・・属性も教えておこう。闇は勿論、焰、雷、氷も含まれる」

七八「雷は暗雲から落ちてきて災いを起こし、焰は火事などを引き起こし、氷は街や人を凍て尽くす・・・」

統夜「そうだ。奴等の目的は分らんが・・・零斗と一緒に頑張れよ」

六兄弟「はいっ！」

統夜の言葉に六兄弟は元気よく返事をした。

ケン「君達に面白いゲームを考えてみた」

七八「どんなのですか？」

ケン「『三学年だよっ！BSAA学園！』に出てくるウヴァに出会い、戦いが始まったらどうするかというものだ」

統夜「それは面白そうだな」

ケン「早速書いてみるか」

ボードを配り、それぞれ黒いマジックで思いついた事を書き始めた。しばらくすると、一同は書き終えた。

ケン「さて・・・まずは七八君から」

ケンに言われ七八はボードを見せた。

『命より大事な角を折って完膚なきまで叩きのめす』と書かれていた。

ケン「それがいいものだろ。次」

新堂「僕も同じです」

『角を折ってポコポコにする』と書かれたボードを見せた。

拓海「僕もです」

残りの拓海達も『角を折ってポコポコにする』と書いたボードを見せた。

ケンは普通の反応をしていた。

ケン「次、統夜」

統夜「こうだ」

「角を根っこから折り、蒼炎で角を燃やした後、コアメダルを全て奪い、残りの身体を蒼炎で燃やす」と書かれたボードを見せた。これを見た六兄弟は顔を真っ青にしてしまった。

七八「ここに最悪なやり方をする人がいたあ！！？」

ハジメ「凄いな」

ケン「素晴らしい答えだ。絶望を与える番人に相応しい答えだ」

七八は叫び、ハジメ達は感激し、ケンは褒めていた。

統夜「イメージはこうだ・・・」

統夜のイメージ

ウヴアを圧倒し、両手で角を掴んでいた。

ウヴア「や、止めるおーーーー！！！！コアメダルより大事な角を折らないでくれええええー！！！！」

統夜「そうかそうかあー面白い事を聞いた」

聞いていた統夜は黒い笑みを浮かべていた。

ウヴアの言葉は空しく、角は根っこから折ってしまった。

ウヴア「ギャアアアアア！！！！俺の角がアアアアアア！！！！」

角が折られた事により、悲鳴を上げていた。

これを見ていた統夜は笑い、折った角を蒼炎で燃やし完全に無にした。

ウヴァ「うわああああああ！！俺の角が燃やされたアアアアアア！！！！！！」

絶望したかのようにウヴァはひざまついてしまった。

そんなウヴァに統夜は満面の笑みをして近づき、アドヴァンスフューラーと合体剣、バビロニアを使いボコし始めた。

統夜「コアメダル全て戴くぜ」

コアメダルを全て奪った統夜は立ち去って行った。

統夜「という感じが思いついた」

ハジメ「相手をとことん追い詰める事が大事なんですね」

統夜「そうだ。相手に余生なんてものを与えないレベルまで仕掛ける事に精進しろよ」

ハジメ「はい！」

統夜の危険なやり方をやってみようと考えたハジメであった。

ケン「次、はやて」

はやて「これや」

『角を根っこから折り、折った角をミキサーで粉状にして風に舞わせ、ラグナロクをとことん放って全てのコアメダルを奪い、奪ったコアメダルを質屋に売って統夜との結婚資金にする』と書かれたポードを見せた。

七八「似た者同士ですね」

ケン「それがはやてだ。統夜の為なら全裸にでもなる人だから」
ハジメ「わあ・・・」

誠一郎「ケンさんはどんなの書いたんですか？」
ケン「ん？俺？これさ」

『顔面を足蹴にしながら角を先から根こそぎまで所々切り落とした後、全てのコアメダルを奪い斬滅し、フィニッシュとして爆破すると書かれたボードを見せた。』

誠一郎「ここに外道がいました！？松永がいる！？」

ケン「はははは・・・そう褒めないでくれたまえ・・・照れるじゃないか」

右手で髪を触れながら嬉しそうな顔をしていた。

七八「何か・・・恐ろしいですね」

ケン「はははは・・・夢魔姫さんが書いたボードを読むぜ。『角を折って、精を限界まで搾り取る』何て欲望に忠実なんでっしゃろ」

統夜「あの人だな」

ケン「うん。あの人」

統夜「ウヴァなら喜びの中で終わるだろうな。気持ち良過ぎて」

統夜の言葉にケンとはやては納得していた。

知らない六兄弟は？を幾つも出していた。

ケン「次はPKDコーナーだな。アシスタントとしてギルシアと本編に出る予定の百華とホーリアスと呼んだ」

誠一郎「おおっ！！遂に来た！！」

ギルシアと腰まである黒い髪に真紅の瞳をした顔立ちをし百代Ve

rの川神学園制服を着た女性と銀髪に青い瞳をしホライゾンの服を着た女性が出て来た。

ギルシア「よう皆！幼女を愛でる神父ギルシアだ」

百華「私は美少女を愛する川神百華だ。よろしく頼むぞ」

ホーリアス「ホーリアスです」

三人は六兄弟に挨拶をする。

ギルシア「パーフェクトノックダウンPKDの素晴らしさについて話し合おうじゃないか！」

統夜「クイーンズゲイトかい！？やっぱ」

何となく分かったのか叫んでいた。

ギルシア「さ、皆は誰をPKDしたいか答えてくれ。俺は幼女だ。

勿論同志統夜もそうだ！」

統夜「なに俺が幼女のPKDをしたいと言ったあ！？言っただけ無いからね！？」

ロリコン疑惑が掛けられそうな発言に対し、驚愕した表情でツッコミを入れた。

ギルシア「冗談だ。同志よ。六兄弟・・・答えてくれ」

七八「僕は・・・そうですね・・・なのはさんやフェイトさんにPKDをやってみたいですね」

新堂「蓮華さんと小蓮ちゃんにしてみたいです」

拓海「僕は雪蓮さんとメアリさんに」

ハジメ「胸の小さい人からやっていきたいですね」

誠一郎「アリス（チエンバース）さんを始めとした巨乳の皆さんにやってみたいです」

太郎「リリカルなのはの皆にやってみたいです」

とそれぞれ六人は答えた。

ギルシア「中々欲のある答え方をしたな。百華がやってくれたから見るように」

超巨大モニターを用意され、百華がニヤンダフルパティシエのアリユッタ「カトウスと呼ばれる少女と対峙している所が映された。

ギルシア「アリユたんをPKDやりたかったが・・・却下されちまった・・・」

統夜「どんまい。男のアンタがPKDやって泣かしたりしたら変態という烙印が押されるからな」

百華「まあ・・・私の活躍を見ておけ」

百華「いくぞ！そしてお持ち帰りして可愛がってやるぞ」

アリユッタ「アンタには負けないわよ！てかお持ち帰りされたくないわよ！」

ニヤンダーウィップと呼ばれる鞭で百華を捕えようとしたが先読みされているかのように回避された。

百華「甘いぞ」

右拳を振るいアリユッタのリボンとニヤントレットを破壊し、続いて両拳の瞬速連打で胸と腰と腕と足の鎧を破壊した。

全てを破壊され、アリユッタは顔を赤くして恥ずかしさに腰を落とすしてしまう。

アリユツタ「何て事するのよ!! 恥ずかしいじゃない!!」
百華「作者であるケンからの頼みだからな。ハグをしよう」
アリユツタ「うにゃああああー!!!!」

何も纏っていないアリユツタをハグし始め、悲鳴が響いていた。
その後、負けたアリユツタは百華にお持ち帰りされてしまった。

百華「勝負は速かったが、中々可愛かったぞ」

統夜「いやいやいやいや!!? PKDはしたのはいいけどさ!! その後って全く必要ないよね?!」

一瞬でPKDをやったのはいいがハグ行為やお持ち帰り行為に対し
統夜は驚愕した表情で抗議した。

百華「これが私だ。受け入れろ」

統夜「・・・アンタなら暗黒流星団に一人で勝てそうな気がするよ」
百華「褒め言葉として受け取っておこう」

統夜「百華さんなら大丈夫だろう・・・ギルシアだったら・・・うん・・・終わってたね」

ギルシア「俺がアリユツタにPKDさせたら問題でもあるのか?!」
統夜「大の男が女の子の服を切り裂き、最後の一枚にし泣かせたら・・・なあ?」

ギルシア「俺のイメージダウンに繋がるな」

統夜の言葉にギルシアは渋々納得していた。

この映像を見ていた六兄弟は驚愕し、百華を見ていた。

誠一郎「凄いです・・・」

統夜「で・・・これで終わりか？」

ホーリアス「ジャツジ、まだあります。統夜様に見て貰いたいものと贈り物があります」

統夜「何だよ」

ホーリアス「ジャツジ、モニターをご覧になつてください」

モニターを見るとホーリアスと心装を装備したメアリが対峙していた。

ホーリアス「ジャツジ、始めます」

メアリ「よろしく頼むわね」

二人は礼をして、二人は戦い始めた。

メアリ「はあああああ！！！！」

轟焰轟雷を纏った二刀でホーリアスと激しい剣劇を繰り広げていた。

ホーリアス「ジャツジ、威力と速さは申し分ありません」

メアリ「そうかしら？」

ホーリアス「ジャツジ、純血の死神と純血の獅子妖怪のハーフというべきですね」

メアリはホーリアスから離れ、二刀を鞘の中に戻し、黒い柄を右手で握り、白い鞘を左手で持ち、居合の構えをとり、妖力と覇気を収束し始めた。

ホーリアス「抜刀術ですか・・・パワードーム起動」

何とかする為パワードアームを起動させた。

ホーリアスが行動をしている間、メアリは独自で修得した刹那に匹敵する速さの歩法である獅風しふうを使いホーリアスの前まで移動し、鞘から刀を抜こうとしていた。

ホーリアス「今の歩法は予想外です・・・」

メアリ「それもそうよね・・・これで終わりよ。雷牙天瞬！」

抜刀術を利用した轟雷が纏われた一閃を放った瞬間、大きな爆発音が聞こえた。

爆発の煙が晴れると、一閃を両腕で受け止めていたホーリアスがいた。

ホーリアス「痺れましたが・・・これはPKD形式・・・」

轟雷で痺れてはいるが、動きに支障は無く、右手でメアリの胸部を触り

ホーリアス「胸部を破壊します」

メアリ「キャアツ!?!」

クスツと笑った後、ビリツと胸部を破り、メアリのたわわな胸がたゆんたゆんと揺れ、露になった。

ホーリアス「見事な胸です。ですが攻撃を緩めません」

メアリは胸を隠しながらホーリアスに攻撃を仕掛けたが全て避けられた。

ホーリアスは左手でメアリの腰部分であるスカートをビリツと破り

破壊した。

メアリ「いやあ・・・止めなさいよ」

ホーリアス「止めません。統夜様にとって面白い事になりますから」

クスツと笑い、メアリの両手に持たれた刀を弾いて、両脚を手で持ち上げ、脚を広げ、身に付けている黒いショーツが丸見えの状態で撮影されているカメラに見せた。

カメラに気付いたメアリは顔を真っ赤にしていた。

ホーリアス「この映像はゲストの為に見られるのですから安心してください」

ポーンとメア리를空中に上げ、クスクスと笑いながらメアリが纏っているものをショーツを除く全て破壊した。

メアリ「いやあああああ!!!?!?」

全てを破壊され、心装が解除され、メアリは膝を着き、ホーリアスを睨んだ。

メアリ「覚えて・・・おきなさいよ・・・」

ホーリアス「その涙目は統夜様に見せるべきです。そのいやらしい身体も。さて・・・これでフィナーレです」

クスクスと笑い、メアリの言葉を聞き流しながら、何らかの液体が入ったペットボトルを取り出し、メアリに無理矢理飲ませた。

メアリ「ごびばばばばべべべ!?!?!?!?!?」

マトモじゃない悲鳴を上げ、気を失ってしまった。

ホーリアス「これはザ・ヘルシーとシャマルドリンクを融合させたドリンクです」

この映像を見た統夜達は啞然としていた。

統夜「おいしいいいい!?!?!?なにメアリのライフまでPKDを目指してるんだよ!?!?てかあいつら倒れてしまったぞ?!?刺激が強過ぎて」

六兄弟は刺激が強過ぎたのか鼻血を出して倒れていた。しかも幸せそうな顔をして・・・

ホーリアス「ジャツジ、統夜様が幸せになると思ったのですが・・・おかしいですね」

統夜のツツコミを聞き流し、人が入りそうな大きな箱を運んでいた。

ケン「何だ?それは・・・」

ホーリアス「ジャツジ、統夜様が喜びそうなものです」
はやて「喜びそうなもの?」

ホーリアスの言葉に?をたくさん出していたケンとはやてだった。箱を開けると、そこにはショーツだけのメアリが眠っていた。これを見た統夜とはやて、ケンの三人は吹いてしまった。

ケン「目覚めると凄く怖いのは気のせいですか?」

ホーリアス「ジャツジ、気のせいです。目覚めました。はい」

目が覚めたメアリを見た瞬間、統夜をメアリの前まで移動するように突き飛ばした。

統夜「何をす……る!?!」

メアリ「んにゃ〜」

猫の鳴き真似をしたメアリはキャラが変わったかのように統夜に抱き付いた。

統夜「おいおいいいい!?!?!?!? 明らかに違うよねえええええ!?!?!?!?!」

キャラがおかしくなったメアリに対し、統夜は顔を青ざめホーリアスに怒鳴った。

ホーリアス「これが幸せというものです」

そう言いながら携帯電話で何らかの操作をして、しまった。

統夜「あ、あの〜何を……?」

ホーリアス「統夜様の恋人達統夜ラバーズにこの事を全て教えました。他の人も知るべきと思います。はやくメールしました。はやく様。貴方も」

ホーリアスの言葉にはやても統夜に抱き付いた。

はやく「ん〜……」

統夜「收拾が全くつかないんですけどおおお!?!?!?!?!」

ギルシア「統夜……このまま逃げた方がいいぞ? 地響きが徐々に大きくなっている……恐らくお前のラバーズだ」

統夜「ちつきしよおおおおお！！！！」

二人を抱えたまま逃走した。

百華「これが正解かもしれないな」

ケン「流石の俺でもこれは難しい。頑張れ・・・統夜」

逃げた統夜の無事を祈ったケンであった。
しばらくし、六兄弟は起き始めた。

七八「あれ・・・統夜さんとはやてさんは？」

ケン「ああ・・・あいつらならちよつとな」

ギルシア「大丈夫だと思うからな」

ケン「ホーリアス・・・本当に恐ろしい・・・」

誠一郎「ケンさん？」

ケン「いや・・・大丈夫だ」

ホーリアスの恐ろしさを目の当たりにしたケンはそう呟いていた。

ケン「シャマルドリンクとザ・ヘルシーの融合ドリンクはツンデレを壊す成分でもあるのかねえ・・・」

メアリのキャラ崩壊を見たケンは二つの激マズドリンクを融合させたものに顔を真っ青にしていた。

しばらくして、統夜とはやて、メアリの三人が戻って来た。

統夜「な、何とか撒いて戻って来た・・・」

ケン「お疲れ様」

ホーリアス「束の間の幸せはどうでしたか？」

統夜「幸せを感じる訳無いだろ・・・今ので分かるだろ・・・」

ホーリアスの問いに統夜は疲れた感じでツツコム。

ケン「メアリの格好をどうにかせんとな」

ケンは紙袋をホーリアスに渡した。

ホーリアス「これは？」

ケン「メアリの服だよ。君が着替えさせてくれ」

百華「ちよつと待て。何故私じゃないんだ？」

はやて「せやせや。何でや?!」

ケン「お前らだとハグしたり、色々な事をして時間を喰うからだ」

文句を言う二人にキツパリと言った。

ケン「ここで着替えさせよう」

ホーリアス「ジャッジ、着替えましょう」

メアリ「ん〜」

ホーリアスはメアりに服を着せ始めた。

尚、見ている統夜をはやてが目潰しをしたのは言うまでも無かった。着替え終わるとメアリの格好は頭にウサミミを付け、上に緑のシャツに、下に元々穿いていた黒の下着姿、ストパンのシャーリーを思わせるものになっていた。

ホーリアス「似合いますね」

百華「正にグラマラスシャーリーならぬグラマラスメアリだな」

ケン「だな」

ギルシア「似合ってるじゃねえか」

はやて「似合ってるな〜」

七八「声も同じですから凄いですね」

新堂「本当のグラマラスです」

拓海「大きなおっぱいですね」

ハジメ「PKDは見てましたから」

誠一郎「似合ってますね」

太郎「ストライカーユニットを装着させたらよりいいかも・・・」

統夜「似合ってるな」

メアリのコスプレ姿に一同はそう評していた。

着替え終えたメアリはすぐさま統夜に甘えるように抱きついた。

統夜「何か・・・こういうメアリも悪くないかも・・・てか視線が怖い」

はやて「・・・」

はやての嫉妬がこもった視線に顔を少し青ざめていた。

ホーリアス「はやて様。こういうのに着替えたらどうですか？」

紙袋をはやてに渡した。

はやて「何や？」

ホーリアス「中にコスプレ衣装が入っていますので統夜様にいいことをしてあげてください。あちらで着替えましょう」

ホーリアスとはやての二人は更衣室へ移動した。

ケン「どんな衣装で来るのやら・・・」

百華「私はどんな衣装を着てもハグはするぞ」

ケン「アリユツタだけじゃ満足出来ないのか？」

百華「その通りだ」

楽しみにしている百華にケンは「この人、大物だな」と内心思ったそうな。

時間が経ち、はやてとホーリアスは戻って来た。着替え終えたはやては何故か顔を赤らめていた。

何故なら黒を基調とした露出が激しい服、クイーンズゲイトに出てくるアリスの衣装を着ていたのだから。

因みに膝裏まで伸びている髪をツインテールにしている。

ホーリアス「どうでしょうか？」

統夜「中の人繋がりじゃねえか!!どう見ても・・・幼児体型のアリスなら大丈夫だけどはやてが着るとこれ以上にならない破壊力のあるものになっている」

はやて「と、統夜・・・似合う?」

統夜「あ、ああ・・・可愛く似合ってるぞ」

ホーリアス「いい事をするっていい気分ですね」

統夜とはやての二人のやり取りを見て、満面な笑みを浮かべたホーリアスだった。

ケン「(ここにあいつらがやって来るのも時間の問題か・・・)そういうや七八は回復とか出来るか?」

七八「いえ・・・出来ません」

ケン「じゃあ・・・スケベなところも無しと」

七八「ありません!ってクイーンズゲイトのジャンじゃありませんよ!!!僕は!!!」

ケンの質問に七八はツツコム。

ギルシア「それじゃあ・・・お前はセラヴィーやラファエルには乗っていないのか？」

七八「万死に値する!!!」

統夜「似てるわ・・・ジャンのコスプレしたらヘタレヒーラーになるかどうかを確認したいものだ」

七八「あ、温かい布団の中で眠りたい・・・」

ケン「ここは青の被魔師に出てくるメフィストの方がしっくりくるぞ?」

七八「正十字学園の理事長ですか・・・やってみたいですね」

声優ネタを真似しながら楽しんでいた。

ギルシア「そういやキュートたんはどうしたんだ？」

七八「彼女とははぐれてしまっただけ・・・」

ギルシア「それはいかんぞ・・・これが終わったらすぐに探す旅に出るよ?」

七八「はい」

ギルシアに言われ旅に出ようと思った七八であった。

百華「そこはやらなくていいだろ」

ホーリアス「いくら声が似てると言っても無理ですよ」

ギルシアの行動にツッコミをいれた二人であった。

統夜「そういや・・・新堂は委員長キャラか？」

新堂「日本刀を持って戦う事は無いですね。スハラ神を信仰してません」

統夜の問いにクイーンズゲイトに出てくる服部 絢子のコスプレを

して答えた。

ギルシア「いつの間に着替えたんだ？」

百華「さあ？」

新堂のコスプレにただ冷静な態度で見ていた。

統夜「だよな・・・紅椿は持つてる？」

新堂「欲しいですね。それがあれば僕は強くなれます。第四世代のISがあれば！」

統夜「お〜い・・・いくら声と同じでも無理があるだろ〜」

新堂のボケにツツコム統夜。

新堂「いずれ手に入れて見せます！」

統夜「勝手にやってる。拓海は不知火舞に似ていると思わないか？」

拓海「声が似ていると言われます」

ケン「小清水さんが舞の声をやったのはKOFX？からだよ」

拓海「そうだったんですか・・・」

ケンの豆情報を聞いて拓海は驚いていた。

統夜「んじゃ一回やって見て」

拓海「はい。花蝶扇！龍炎舞！超必殺・・・忍蜂イイイ！！！」

ケン「おお〜見事なり。DJハジメ」

ハジメ「僕はDJハジメじゃありません」

ケン「ええっ！？お前は・・・DJ HAZIMEじゃねえのかよ！？」

ハジメ「僕はそんなんじゃありません！」

ギルシア「それ・・・作者が知ってるDJの名前じゃねえか！？お

前以外は知らんと思うぞ?」

ケンのマイナー過ぎる名前にギルシアは呆れながらツツコム。

ケン「そうか・・・君のお姉さんが見つかった・・・」

ハジメ「僕のお姉ちゃんが・・・?」

ケン「そうだ!君達へ出番ですよ」

白い煙が噴出し、出て来たのは黒龍さんの作品である『リリカル銀魂ライダー』異世界鎮魂歌』に出てくるアリアとセイバー、ヤミの三人だった。

ケン「青い騎士服を着た女性セイバーがそうだよ」

ハジメ「お姉ちゃあああ~~~~ん!!!」

セイバー「な、何ですか!?いきなり抱きつかないでください!!」

ハジメにいきなり抱きしめられ、セイバーは叫びながら離れようとしていた。

ケン「おいおい・・・姉がそんな事したらいかんぞ・・・」

セイバー「私は彼の姉じゃありません!!」

ケン「嘘を吐くな!流浪のセイバーよ」

セイバー「何ですか!?その流浪のセイバーって!?明らかにクイーンズブレイドの中の人ですよね?!」

ケンのポケにセイバーは額に青筋を浮かばせツツコミを入れた。

ケン「ヤミよ・・・そのコスプレはどうかね?」

ヤミ「正直恥ずかしいです・・・中の人ネタとは言いませんよね?」

ケン「ふっ・・・当然だ。ストパンの芳佳のコスプレとヤミ・・・」

いいものじゃないか！」

今のヤミの服装はいつもの黒い服ではなく、セーラー服の上衣と、その下にスクール水着に似たボディースーツを着用した姿であるストパンの芳佳のコスプレ衣装を着ていた。

そのお陰で顔を真っ赤にしているのは言うまでも無かった。

ヤミ「許しません！」

髪の毛を鉄拳に変え、ケンに襲い掛かろうとするが

ケン「甘いぞ！」

背中に納めていた大剣を取り出し、全て切り払った。

ケン「落ち着きたまえ……これを見ているソラは君の姿を見たらイチコロだと思つのに……」

これを聞いたヤミは攻撃を止めた。

セイバーは何とかハジメを引き剥がす事に成功した。

セイバー「はあ……はあ……」

アリア「にや〜大丈夫？」

セイバー「一応大丈夫です……」

ハジメ「ああ……お姉ちゃんが……」

セイバー「まだ言いますか……」

しつこく言うハジメに溜息をついて呟いた。

統夜「ご愁傷さま……次は誠一郎はブレイブルーに出てくるノエ

ルと一緒に声をしているな」

誠一郎「よく言われます」

統夜「ベルヴェルクは無いよな」

誠一郎「ありますよ。レプリカですけど」

ノエルのコスプレをした誠一郎がベルヴェルクのレプリカを構えて答えた。

セイバー「ちょっと待ってください！？いつの間に着替えたんですか！？」

誠一郎の行動に驚いたセイバーはツツコミを入れていた。

ケン「彼は零斗の後輩だからね・・・諦めなさい」

統夜「まあ・・・μ-12のコスプレをした瞬間ぶっ飛ばしてたね」

ギルシア「俺も手伝っぞ」

もし誠一郎がμ-12のコスプレをしていたら命は無かったであろう。

そして、命の重さを改めて知った誠一郎でした。

統夜「格闘令嬢太郎は可愛い女の子に目が無いか？」

太郎「いや・・・何ですか！？格闘令嬢太郎って！？明らかに格闘令嬢リリじゃないですか！？」

格闘令嬢太郎と言われた太郎はすぐさま統夜に抗議をした。

統夜「声と一緒になんだから当然だろ？そして超電磁砲レールガンも出来るんだろ？ブルデュエルに乗ってた事もあったんだろ？」

太郎「声と一緒にだからってそこまで言いますか！？てか何ですか！

？とある科学やスターゲイザーネタも入れてるじゃないですか！？」
統夜「零斗がお前の事をいぶきさんとか言ってるそうだな・・・」
太郎「止めてくださいよ！てか明日のよいちじゃないですか！？」
統夜「そして胸元に八俣遠呂と彫られた刺青から魔剣を取り出すんだろ？」

太郎「青の被魔師じゃないですか！？」

統夜の弄りに太郎は叫んでガンガンツッコミを入れていた。

統夜「七八と一緒に青の被魔師に出れるぞ」

太郎「や、出れませんから」

統夜「リンボックスの女神にもなれそうだよ！」

太郎「守護女神にもなれませんから！いくら声と同じでも無理です」

まだ太郎弄りをやっていた。

セイバー「そう言えば作者・・・『三学年だよっ！BSAA学園！』に出てくるウヴァに会い、戦いが始まったらどうするかというものでアリスが書いたものを見たいですか？」

ケン「まあ・・・分かり切ったものを考えてしまっが・・・念の為見せなさい」

セイバーはボードをケン達に見せた瞬間、顔を青ざめた。

内容はこう書かれていた。『まず最初に罵声を浴びせ、命より大事な角を折るのではなくギヤリギヤリと削り、角が無いウヴァに再び罵声を浴びせ、コアメダルを全て奪いボロ雑巾にして捨てる』

これを見たケンと統夜、セイバー、ヤミ、アリアを除く一同は顔を青ざめた。

ケン「容赦無いな」

ヤミ「それがアリスですから」

ケン「だな。ユウカもそれに似たような事を書いてたし・・・次行くか」

統夜「だな。これで最後か？」

ケン「伝説の人物とその弟子の登場だ。お二方どうぞ」

白い煙が噴出すると髪が銀髪以外は容姿がISの織村千冬にそっくりの女性と腰まで届く青色の髪に黄色い瞳をした美しい顔立ちにFAIRY TAILのエルザの鎧を着た女性がやって来た。

ケン「支配者さんが考えてくれたキャラクターで・・・三大冥王に匹敵し伝説級の実力を持つシルク・Vヴァーミリオン・獅子堂にその弟子であるユーリ・アシユタロスの二人です」

シルク「私はその真祖の小僧（統夜）と狼のガキ（忍）との決着で少し出たぐらいだが・・・」

ユーリ「マスター・・・彼が三大冥王である真祖の吸血姫と魔帝剣聖の間に生まれた存在ですか？」

シルク「ああ。だがまだまだ甘い。そのガキ八人（はやてとメアリ、ギルシア、百華、ホーリアス、セイバー、ヤミ、アリア）と六兄弟のガキ共もまだまだひよっ子だな」

統夜達をひよっ子扱いしていた。

はやて「（な、何や・・・滅茶苦茶やないか！？）」

ギルシア「（この俺が・・・震えているだと・・・）」

百華「（私やレオンでも勝つ事は出来ない強さを持っているのか！？）」

ホーリアス「（測定不能の強さを感じます・・・）」

セイバー「（とても私が太刀打ち出来るものじゃない・・・）」

ヤミ「（最強とは彼女のような存在を言うのですかね・・・）」

アリア「（にや〜・・・強い・・・）」

シルクの強さを内心でそう感じていた。

ケン「ひよっ子でも成長できると期待はしてますよね？」

シルク「そうだ。特に彩華・・・リーシャの息子と娘がな」

ケン「なるへそ・・・三大冥王の子だから？」

シルク「ふっ・・・どうだろうな。時に作者・・・」

ケン「はい？」

シルク「あの小僧（統夜）は何故ああいう状態なんだ？」

ケン「あいつはああいう奴なんですよ。無意識にフラグを立てると
いうか・・・その・・・」

シルク「そうか・・・本題に入ろうか」

ケン「ですね」

はやてとメアリに抱きつかれた状態の統夜を見て呆れたが、時間が
勿体無いので進めた。

シルク「お前達六兄弟はマイティ真拳を使うガキ（零斗）の後輩だ
ったな？実力を見せて貰おうか」

七八「は、はい」

六兄弟はシルクに言われ訓練場へ移動し、ケン達はモニターで六兄
弟の様子を見る形となった。

七八「相手が・・・あれか・・・」

訓練場に着くと六兄弟の前に、セイラの顔の形をした機械軍団が立
っていた。

ケン「ルールは簡単だ〜・・・こいつらを派手に壊せ。んじゃ開始」

始まりを告げるベルが鳴り始めると一同は一斉に動き出した。

七八「M87光線!!!」

右手を前方に伸ばし、光線を出して、集まっていたメカセイラヘッド10体を粉々に破壊した。

新堂「てやつ!ダア!!!」

拓海「デュワ!ヤア!!!」

新堂はメカセイラヘッドを掴み背負い投げをして破壊し、拓海は二段蹴りをして倒し、後ろから襲い掛かってくるメカセイラヘッドの気配を感じて振り向いて頭部を掴み、左フックを二発入れ、肘打ちで破壊した。

七八達六兄弟はセイラでも容赦が無かった。

セイラに対し容赦が無い事は正常な人間の証拠である。

拓海「エメリウム光線!!!」

左手を胸に当て、エメラルド色の石から緑色の光線が放たれ、メカセイラヘッドを薙ぎ払うように顔を動かし破壊し・・・

ハジメ「はぁー!!!デヤア!!!」

横から来るメカセイラヘッドをソバットキックをかまし、跳び膝蹴りで破壊した。

ハジメ「ウルトラスパーク!!!」

左腕に付けているブレスレットから小型戦闘機型の武器を飛ばし、メカセイラヘッド達を破壊していく。

七八達はそれぞれの必殺技を使い、メカセイラヘッド軍団を粉々に破壊しケン達がいる場所へ戻った。

因みに六兄弟はメカセイラヘッドを壊した事によりスッキリした表情になっていた。

ケン「お疲れさん」

七八「スッキリしました」

シルク「まだまだだな。これからも油断せずに頑張れよ」

七八「は、はい。ありがとうございます!!!」

ケン「さて・・・この物語にはキーワードがある・・・」

ユーリ「何だ？それは」

ケン「ガーディアンデバイスと星の力、古代種、超越者・・・四つ

のキーワードがこの物語の重要なものになるからだ」

統夜「ガーディアンと星の力、古代種、超越者か・・・」

ケンの言葉に統夜は「重要なものだなあ」と再認識したそうな。

ギルシア「何だ？その星の力や古代種、超越者って・・・」

ケン「星の力と古代種だけは教えておこう・・・はじめて読む方々の為にもなるしな」

星の力・・・惑星の源と呼ばれている力で地球以外に火星や木星等にも存在している謎の力。

星の大きさや死んだ者の数によるが蓄えられた知識や力は膨大になり時空を操る事が可能な力でもある。

古代種・・・現在の人間とは異なり古の地球に生息し、セトラと呼ばれている種族。遙か昔はたくさん存在していたが、現在はほとんど絶滅したとされている。
とある究極魔法が使える種族でもある。

ケン「以上だ。何か質問は」

ユーリ「作者」

ケン「何だ？」

ユーリ「とある究極魔法とは一体何だ？」

ケン「大体は考えてるけど教えません」

シルク「作者。質問だ。星の力を取り込んだ存在はどうなるんだ？」

ケン「下手すると中毒を起こします。濃度に浴びるとね・・・重度の中毒を・・・」

シルク「そうか・・・」

ユーリとシルクの問いに淡々と答えた。

セイバー「恐ろしいものですね・・・」

統夜「て事は・・・俺・・・大丈夫だよな？」

ケン「んなもん大丈夫だ・・・多分」

統夜「多分って何!？」

自信の無い答えに統夜は叫んでツツコム。

ギルシア「未知な世界に転生してしまったと感じてしまうな」

百華「そうだな・・・」

ホーリアス「未知的で一杯ですね」

ギルシア達はただ受け入れるしか無かったそうなの。

七八「暗黒流星団より恐ろしい存在とかいるんですよね？」
統夜「ああ……いるぞ。冥界の混沌にイグニス、修羅がな……」
新堂「お互い……頑張っていきましよう」
統夜「だな……」

お互い自分達が倒すべき勢力を倒す事を考えていた。

ケン「物語のキーであるガーディアンは統夜が所有するセイヴァー・ロード・サーディオオンと遊輔が所有するペンドラゴブレイド、雪蓮が持つライガーファングのみ……残りの刀と薙刀、大鎌のガーディアンは眠っている」

新堂「凄いですね……」

七八「見つかると思いますね……残り三つ……」

ケン「見つかると思うさ」

自信に満ちた表情でそう言った。

ケン「んじゃ……君達……六兄弟は宣伝しなさい」

六兄弟「はいっ！」

ケンに言われ、六兄弟は前へ移動し宣伝を始めた。

七八「僕達真拳六兄弟も参加し……」

新堂「マイティ真拳を使う零斗先輩と共に」

拓海「ハジケを極め……」

ハジメ「女性達が相手なら最後の一枚まで切り刻み……」

誠一郎「暗黒流星団の野望を……」

太郎「叩き潰す」

六兄弟『『二学年だよっ！BSAA学園！』を宜しくお願いします

「!!」

統夜「ちよつと待てーっ!!!」

六兄弟の宣伝に統夜はツツコミを入れた。

七八「何ですか?」

統夜「ハジメの台詞は何なんだよ!!!明らかにクイーンズゲイトス
パイラルカオスネタじゃねえか!?下手すると女の敵になりかねん
ぞ!?!」

誠一郎「いえ大丈夫です。何とかしますから・・・巨乳の女の子な
ら必ずやりますが」

統夜「やりたい気持ちは分かるけど・・・実際にやろうとするなよ
?!」

ハジメ「分かってますよ」

零斗から教わったPKDに染まりつつある六兄弟に頭を抱えてしま
った。

ギルシア「俺達も宣伝するか」

百華「そうだな」

ホーリアス「私達の生みの親である真王様の作品である銀魂と超次
元ゲームネプテューヌ、リリカルなのはクロスオーバー作品『リ
リカル銀魂 Strikers』銀女神鎮魂歌』と様々なアニ
メや他の作者様のキャラクター達のコラボの学園ストーリー『超次
元学園へようこそ!!!』をよろしくお願いします」

統夜「因みに俺と遊輔、達哉、咲夜、メアリが出てるぜ」

ケン「(敵である龍華もね・・・)」

統夜も混じって真王さんの作品を宣伝していた。

セイバー「私達も・・・黒龍の作品である『リリカル銀魂ライダー』
『異世界鎮魂歌』を宜しく願います。私とソラの恋物語を期待してください」

ヤミ「いえ・・・違います。私とソラの恋物語です」
アリア「にゃ・・・それは私とソラの恋物語・・・」

最初はマトモだったが徐々に変な方向になった宣伝になっていた。
自分がソラの隣に相応しいという理由で恋物語と言っている時点で
おかしくなったが・・・

統夜「滅茶苦茶だな・・・」

百華「で・・・作者よ・・・私とホーリアスの出番はいつになるんだ？」

ケン「シルクの再登場と一緒に出そうと考えてます。ユーリも一緒にね」

シルク「ほう・・・私の出番は近いのか？」

ケン「近いですよ」

セイバー「本編ではどれぐらいですか？」

ケン「君達はまだまだ先かな・・・我慢してください」

統夜「大変だな」

ケン「大変だよ。んじゃ・・・ここで開きかな。お疲れ様」

ケンの号令で終わりにしようとした瞬間、セイバーとヤミ、アリアはケンに襲い掛かったが、直ぐに避けた。

ケン「何をやる!?」

セイバー「決まっています・・・ソラに鮮華とのフラグを立たせた貴方に天罰を!!!」

ヤミ「覚悟してください!」

アリア「にゃ・・・覚悟」

ケン「ふっざけんなああああ!!!」

阿修羅を凌駕した存在になった三人娘からケンは逃亡を図った。

統夜「大変だな。メアリ」

メアリに声を掛けると、掛けられた本人は顔を真っ赤にし本来のメアリに戻った。

メアリ「あ、あああ・・・アンタがこれを着せたの？」

ホーリアス「その通りです。統夜様とはやて様が着せました」

統夜「おいしいiiiiiiii!?!?何で俺えええええ!?!?!?」

はやて「明らかにとばっちりなんやけどオオオオオ!!!」

メアリ「さあ・・・轟焰轟雷で綺麗さっぱりしてあげるわ」

目が笑って無い笑顔で両手に轟焰轟雷を纏い、白獅子化になったメアリは逃げる統夜とはやてを追いかけ始めた。

メアリ「待てゴラアアアア!!!」

統夜「待てと言われて待つ馬鹿はいない!!!」

はやて「獅子に追われるのは嫌アアアアア!!!」

文乃「あっ!見つけたわよ!!!」

咲夜「待ちなさい!!!」

華琳「逃がさないわよ!!!」

統夜ラバーズに見つかり、激しい追いかけてこが始まったのは言うまでも無かった。

この様子を見ていたホーリアスはクスツと笑って見守っていた。

シルク「ここは私が何とかしよう。これからもHERO'S EP

ISODEをよろしく頼むぞ。これからこの小説を読む者は直ぐに理解しろ。分からないならとことん読みなおせ。私の言う事を聞け！いいな？いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

ISの千冬さんがいるような感じでシルクがしめて終わった。

第六十五話 『実の弟にラヴというのは人としてどうよ?』 (前書き)

今回はある人物が帰ってきます。

統夜「えっ?誰よ?」

んじゃ始めるぞ〜

統夜「聞けやアアアアア!!!」

明久「HERO'S EPISODE第六十五話始まるよ」

第六十五話 『実の弟にラヴというのは人としてどうよ？』

第六十五話 『実の弟にラヴというのは人としてどうよ？』

午前中に少しだけ雨が降った日曜の午後。明久は家でゲームをやっていた。

ゲームの内容は格闘ゲームは『BLAZBLUE COMTINU MSHIFT』である。

統夜に勧められ買ったが、中々面白かったので毎日するようになった。

明久「やっぱりこれは楽しめるね。ウロボロスを用いたトリッキーなドライブはね」

使用しているキャラはハザマである。

練習の最中、甲高い呼び鈴の音がリビングに響く。

明久「ん？宅配便かな？まあ・・・大抵は覚えたからいいけどさ」

画面には終わったのかオープニングが流れていた。

やる事はないので電源を切って、片付けした後玄関に出る事にした。

明久「はい。どちらさまですかー？」

返事をしながら鍵を外し、扉を押し開け、熱気と湿気を孕んだ夏の空気が流れ込んできた。

一瞬その不快な風に顔をしかめながらも、更にドアを押し開ける。すると鉄扉の向こうに見えたのは、雨上がりの晴れ渡った青空と、それに溶け込みかけている淡い虹の残滓。そして大きな旅行鞆を携

えた黒髪のショートカットの女の人。

明久「・・・え？あれ・・・？」

思わず自分の目を疑うかのように、まじまじと相手の姿を観察してしまふ。

大きな瞳に、涼やかな表情といい、明久はこう思った。

この人、ぼくの知っている人に似ている気がする・・・

明久「・・・ね、姉・・・さん」

嫌な予感し、本来なら海外にいるべき人の呼称で問いかける。するとその相手は

「はい。お久しぶりですね。アキくん」

そう言つて、短めに揃えられた髪をわずかに揺らしながら静かに微笑んだ。

・・・何故かバスローブ姿で。

明久「ちよつと待てえーっ！！！！なんでバスローブ姿なのさーっ！っ！？」

一年ぶりに会う姉の姿に度肝を抜かれた。

何故ここに居るのか、帰ってくるのならどうして連絡をくれなかったのか、なんていう当たり前の疑問を一瞬ですべて吹き飛ばしてくれるシユールな姿に明久は眩暈がする。

外にいる姉が部屋から出てきてこの状況なら分かるが、日本ではあまり一般的ではないかもしれないけど、お風呂上がりにバスローブを身につける人だって少しいるはずのだから。でも・・・

明久「外から訪問してくる人がソレを身につけているのは明らかにおかしいよね!？」

バスローブ姿の姉に大声で叫びツツコミを入れていた。

アストラルフリーダム（明久様・・・彼女は本当に貴方の姉なので
すか？）

待機状態のアストラルフリーダムが明久に念話で話し始めた。

明久「（そうだけど・・・疑いたくなるよね・・・）」

「日本は暑いですね、アキくん」

明久「何で僕の突っ込みが聞こえなかったかのように天候の話を進めているの!?きちんと一年ぶりに会う弟とコミュニケーションを取ろうよ!」

「アキくん。玄関先でそんな大声を出すなんて・・・姉さんは貴方をそんな常識知らずな子に育てた覚えはありませんよ?」

明久「くうう・・・っ!まさかバスローブで公衆の面前を歩いてくるような人に常識の有無を問われる日がこようとは・・・っ!」

埒が明かないのでさっさと姉を中へ入れた。

「人の話はきちんと聞きなさい、とも言っているはずですよ?姉さんのこの格好にはきちんと理由があるんですからね」

ソファアに座りそう明久に言った。

読者の皆さんに紹介しておこう。彼女の名は吉井玲。明久の姉である。

明久「え？ああ、そうだったんだ」

玲の言葉に少しホツとする。

理由無しにバスローブで外を歩き回る人はいない。そう明久は納得し、玲は「勿論です」と大きく頷いてからゆつくりと説明を始めた。

玲「今日はあまりにも暑かったので、重い荷物を持って歩いた事もあって、姉さんはたくさん汗を掻いてしまいました」

明久「うん」

玲「途中までは気にしなかったのですが、電車の窓に映る自分の姿を見て姉さんは思いました。一年振りに会う弟に、最初に見せるのが汗だくの姿と言うのは、正直姉としてどうでしょうかと」と

明久「うんうん」

玲「いくら会うのが肉親とは言え、姉さんだって女です。身だしなみには気を遣うべきでしょう」

明久「そうだね。気を遣うべきだね」

玲「そこで、全身の汗を何とかする為に姉さんはバスローブに着替えました」

明久「はいそこおかしいよ」

玲「持つてる荷物の中でも最も吸汗性に優れている服であって、姉さんの汗はみるみるうちに引いていきます」

明久「どうしてそこで『タオルで汗を拭く』っていう選択肢が出てこなかったのかな・・・」

玲の行動に頭を右手で抑えながら呟いた。

玲「そして今、姉さんは無事に姉としての尊厳を保つことのできる清潔な姿で弟と再会できたのです」

明久「あのさ・・・さも自分が偉業を達成したかのように胸を張っ

ているけど、姉さんの意図した事はものすごい勢いで失敗しているからね」

明久の中では玲の尊厳は完全に失墜していると思った。

玲「何を言うのですか。塩化ナトリウム他にマグネシウムやカリウム、カルシウムなどの不純物を多少は含むものの、汗の主成分は水です。このバスローブの素材である麺は通気性や吸水性に優れているのですから、姉さんの意図したとおり汗を吸収しているはず」

明久「いや・・・確かに汗は引いてるかもしれないけどさ・・・」

汗が引けばどんな格好でもまともに見えるって訳じゃない事は明久のような馬鹿な人でも分かっているようだ。

玲「分かってもらえたのなら、いいです。姉さんはアキくんがどんな生活を送っているかをチェックして母さんに報告する義務がありますから」

明久「あ、そうなの？」

玲「はい」

明久「そっか」。生活チェックか」

玲「そうなのです」

明久「そっかそっか・・・お疲れさまでした」

玲は満面な笑顔で自分の部屋へ戻ろうとしている明久の肩をがっしりと掴んでいた。

明久「な、何かな？姉さん？」

玲「逃げるのは無しですよ。でない・・・アプサラス？のメガ粒子砲を放ちます」

明久「ちよつとおーっ！！なに声優ネタ使って危険な事を考えてるの?!」

玲のボケに明久は顔を青ざめツツコム。

玲「姉さんだつてもう良い大人なんですから。アキくんが2000冊以上のHな本でリビングを埋め尽くしていたとしても、全然驚きませんよ」

明久のツツコミを一蹴し、冷静に語っていた。

明久「そんな本を2000冊なんて買うお金はどこにもないよ・・・」

日々の生活で苦しむ明久にそこまでの余裕はない。というか瑞希や美波、小蓮、早苗といったラバーズがいるのにそこまでやる必要ないし。

2000冊のエロ本を欲しがる奴といえばダイチだけしか思いつかないであろう。

玲「若い男性の腎臓は高く売れそうですね」

明久「エロ本の為に僕は内臓を売るの!? 姉さんは自分の弟がどれだけスケベだと思ってるのさ!？」

そこまでしてまでエロ本を求めてはいないのに、玲の発言に顔を青ざめた。

玲「そうですね・・・幼女とのフラグを立てたり・・・プールの授業なら幼女の水着姿に萌えたりする程度には幼女と性に関心のある弟だと思っています」

明久「何を言ってるの！？明らかに僕がロリコンみたいな発言じゃないか！？」

玲の鋭い勘に冷や汗を掻きながら、ツツコミを入れていた。

玲「とにかく、きちんとした生活を送っているのか確認させてもらいますからね」

明久「はい・・・」

玲「リビングは意外と綺麗にしていますね」

明久「ゲームはいい所までやって区切りが良いから切って・・・まだ片付けてないけど」

玲「そうですね・・・ところでアキくん・・・姉さんはアキくんが一人暮らしをする時に、三つの条件を出しましたよね。まさかそれを忘れてた、なんて言うつもりじゃないですよね？」

明久「すっかり忘れてた・・・って言ったら、姉さんは怒る？」

忘れてたと言った瞬間に玲の眉が動いた気がしたので、慌てて後半を付け加える。

玲「いいえ怒りませんよ」

明久「え？そうなの？」

玲「はい。怒りません」

明久「良かった〜実は僕、約束の事なんてすっかり忘れ・・・」

安堵したのか自己申告しようとしたが

玲「ですが、代わりにチユウをします」

明久「れる訳ないよねっ！勿論覚えていたよ！」

玲「しかも、お嫁に行けなくなるほど凄いのをします」

明久「何する気！？アンタ実の弟に何する気！？後、ぼくは弟だか

からお嫁に行ったりはしないからね!？」

玲「大丈夫です。お嫁に行けなくなるのは姉さんです」

明久「ちつとも大丈夫じゃ無い!明らかにおかし過ぎるよ!！」

玲の危ない発言に顔を青ざめツツコム明久。

玲「アキくんはお嫁に行けなくなった姉さんに罪の意識を背負いながら今後の人生を背負いながら今後の人生を送っていくのです」

明久「なんて陰湿なやり方なんだ!」

元々貰い手の無い上に、人のせいにする玲に対し明久は叫んでいた。

明久「お姉さま。きちんと覚えているから、どうかその罰だけは勘弁してください」

玲「そうですね。覚えていますか。それなら言ってみてください」

明久「うん。えーっと・・・」

覚えてはいるが、約束は母親とのものもあつたので、それと混ぜて少し言いよんどんでしまう。

玲「アキくん・・・目を閉じて・・・」

明久「覚えている!覚えているから!だから妙な雰囲気を作りながらこつちに近づいてこないで!」

玲は冗談を言わないので、やると言ったことは躊躇いなくやってのける。

玲のとつた脅迫には耐えられない明久である。

明久「姉さんとの約束は、?『ゲームは一日三十分』?『不純異性交遊の全面禁止』は覚えているけど・・・」

玲「三つ目は・・・？」

玲の表情が徐々に真剣な表情に変化し始めた。

明久「？『管理局に関わらず戦いをやらない事』だったね」

玲「その通りです。私は・・・あの事を忘れてはいません・・・アキくんを裏切り捨て駒にした管理局は許しません」

明久「姉さん！」

徐々に怒りを露わにしている玲に明久は呼び掛け、落ち着かせた。

玲「アキくん・・・すみません・・・話は戻しますが・・・これらを守れなかった場合は減点の対象になります」

明久「別にいいよ・・・減点？何それ？」

玲「アキくんの一人暮らし続行の可否を決定する評価の為の点数です。生活態度や勉学の結果から評価を下し、点数を加えたり減らしたりしていきます。最終的にその点数が一定値に満たなかった場合は、アキくんに一人暮らしは不適であるという結論を母さんに報告します」

明久「ええっ！？何それ！？てか何点でアウトなの？」

玲「期末テストの点数が明確になった時点での総計が0点であった場合です」

期末テストの結果が出た時に点数の総計がプラスになっていないと明久の一人暮らしは終了になる。

明久「ちなみに、点数をプラスにするにはどうしたらいいの？」

玲「規則正しい生活や良好な学習成績などを掲示して下さい。それによって判断します」

当たり前のように話す玲に対し、明久は困惑的な顔になっていた。食事は水と塩が殆どで、成績は統夜達から教えてもらっている為、何とかなっている。

玲「そこまで絶望的な顔をしなくても大丈夫です。アキくんの学力が一般基準に対して著しく劣っているという事は、姉さんも母さんもよく知っています。要は、それがどの程度改善されているのか、という事です」

明久「え？それじゃ、頑張っていたら許してくれるの？」

玲「はい。前回の定期テスト・・・」

明久「今は文月学園とバーベナが統合されて文月バーベナ学園になつてるよ」

玲に念の為、統合されている文月バーベナ学園に通っている事を教えた。

玲「そうでしたか・・・文月学園に受けた定期試験の成績と、今度の期末試験の成績、その差をそのまま評価の対象として考慮します」

玲の話を聞いた明久はガッツポーズをしていた。

明久の成績は仲間やラバーズのお陰で徐々に上がっている事に玲は知らない。

玲「さて。それで、次の約束の方はどうですか？きちんと守れていますか？」

明久「不純異性交遊と管理局に関わらず戦いをやらない事・・・だつたよね？」

玲「はい。不純異性交遊については・・・貴方のように情けない上に生活力もなく、頭も悪くて不細工な男の子を相手にしてくれるよな女の人は姉さんや母さんくらいしかいないと思います」

さらりと告げられる明久の悪口の嵐。

自分の悪口の嵐を聞いていた明久は疑問に思っていたことが一つあった。

あのような悪口は本心で語っていないことに・・・

玲「ですが、念のために確認をしておきます。不純異性交遊と管理局に関わって戦っている事はしていませんよね？」

じろり、と鋭い視線が突き刺さる。

明久自身は、いやらしいことと考え、瑞希をはじめとするラバーズとは過激はあるものの普通に接している事はつながるのかと考え始めた。

明久「姉さん。不純異性交遊って何をするとどのくらいの減点なの？」

玲「異性と手を繋いだ場合、減点100にします。幼女の場合は200です」

明久「ちよつと待って・・・なんで幼女の場合だけ高いの!？」

玲「何故かアキくんはロリコン疑惑がありそうでしたから入れてみました。顔色が悪いですよ？」

明久「僕はロリコンじゃないのに・・・気のせいだよ」

玲「怪しいですね。何か隠し事をしていませんか？」

流石は明久の姉というべきか何か不審な気配を感じ取ったようだ。

明久「も、勿論だよ・・・キスなんて管理局の間を崩壊させるなんてした事も無いよ？」

玲「そうですね。何かあったようですね。詳しく話してください」

明久「だから何も無いってば!」

必死に否定する明久に対し、玲は疑いの眼差しを向け続けている。

玲「アキくん。きちんと答えてくれないと・・・酷いことをしますよ？」

明久を脅すように、何処からか翠のカラーリングのエレキギターを取り出し、服がバスローブから露出のある赤い服に変わり、赤いとんがり帽子を被ったものになっていた。そうギルティギアに出てくる紅の女楽師を思わせるような・・・

明久「つて・・・姉さん！？明らかにおかしいよ！？中の人ネタじゃないか!？」

玲「これはメガロマニアというものが放てますよ」

明久「そんなの聞いてないよ!!それやったらより酷い事になるじゃないか!？」

玲の行動に明久はツツコミを入れていた。

玲「白状出来ませんかね・・・どうしましょう?ではこれで・・・

突然エレキギターで明久の全身を連続で殴りつけた。

玲「やってみました」

明久「酷いっ!本当に酷いよ!!」

普段から鍛えている為、魔力と気力を放出し、見えない鎧にしてダメージを軽減させた。

玲「いいですか、アキくん。以前から言っている事ですが、貴方は決して異性の目に魅力的に映る事はありません。女である姉さんが言うのだから間違いありません。そんな貴方に近づいてくる子がいるとしたら、それはきつと貴方を騙そうとしている悪い人だけです。姉さんはあの日から・・・弟がまた騙されて悲しい思いをしないように、と心配して不純異性交遊を禁止にしたのです」

明久「・・・・・・・・」

玲の言葉を黙って聞いて、自分の運命を狂わせた事件を思い出していた。

玲「まだ続きますよ。アキくんは魔力もあり、管理局の魔導師として戦っていました・・・ですが・・・自分の味方である管理局に裏切られ・・・悲劇を味わい傷つきました・・・戦いをすればするほど・・・悲しみが大きくなりますから・・・管理局と関わらずに戦う事を禁止したのです・・・これが姉さんの出来る精一杯守れる手段として・・・」

明久「姉さん・・・僕は大丈夫だから・・・心配してくれてありがとう」

次の話が本当の事を話している事が分かっていたのか、素直に礼を言った。

明久「でも、ちょっと心配しすぎじゃないかな。手を繋ぐのも駄目なんて・・・それだったらフォークダンスに参加も出来ないよ」

玲「ええ。確かにアキくんもう十六歳の立派な男の子ですし、色々な感情や若い肉体を持って余すという気持ちも分かります」

明久「や、そこまで言っただけ」

玲「なので、姉さんとしても最大の譲歩をするつもりです」

明久「え？譲歩？」

玲「はい。確かに不純異性交遊は全面的に禁止にしていますが」
明久「うん」

玲「代わりに不純な同性との交遊は認めてもいいと思っています」
明久「何があったの!? 海外生活で姉さんの価値観に何が起こったの!? てか今までのシリアス感は一切何だったの?!」

玲のとんでもない発言に明久は顔を真っ青にして叫び始めた。

明久が叫んでいた頃、夕焼けの光が射している天川家では夕食を食べていた。

統夜「やつと俺の出番だ・・・」

はやて「それは言わないお約束や・・・」

鮮華「そうですね。兄さん」

プリムラ「そうだよ」

カナ「遅いのは確かだけどね」

咲夜「そうよ」

シャル「ご飯。おかわり」

ソラ「おいしいな」

アリス「ああ。だが、ソラのが上手い」

ヴィータ「んだと!? はやての飯の方がギガうまだ!!」

シグナム「止める・・・ヴィータ」

シャマル「久しぶりの出番ですね」

リリス「そうですね」

統夜達にご飯をわいわい楽しく食べていた。

はやて「って・・・シャルさんはともかく・・・何でソラさん達がいるんや!?!」

ソラ「材料が無くなってな・・・統夜に呼ばれた」
アリス「私もだ」
リリス「私もです」

統夜に呼ばれた事をはやてに答えた。

アリスとリリスも同じ理由だったが、本音としてはソラ一人が天川家に行くイコール鮮華といい関係になってしまう可能性があるからだ。

ソラが来た事により鮮華は機嫌がよく、嬉しい様子だった。

統夜「まあまあ・・・いいじゃないか。はやて」

はやて「統夜が言うなら・・・ええけど・・・」

シャルのどんぶりの中にごはん大盛りにして答えていた。

はやてからどんぶりを受け取ったシャルはおしそうに食べ始めた。

シャル「食べ物を食べる時が一番幸せね」

翌日の朝、バーベナ文月学園の教室にて、雄二と翔子が話し合っていた。

翔子「・・・雄二」

雄二「なんだ翔子？」

翔子「・・・携帯電話を見せて欲しい」

雄二「どうした？何でいきなりそんな事を言い出すんだ？」

突然そんな事を言っている翔子に雄二は聞いてみた。

翔子「・・・昨日、TVで言ってたから」

雄二「TVで？何を？」

翔子「……浮気の痕跡は携帯電話に残っていることが多いって」

雄二「ほほう」

TVで学んだ翔子に対し、少し感心していた。

翔子「……だから見せて」

雄二「断る」

翔子「……歯を食い縛って欲しい」

雄二「待て！今途中経過が色々飛んだぞ！？いきなりグーか！？それか十字架トンファーか！？それとも両方で来る気か！？」

翔子の飛んだ発言に雄二は顔を青ざめ絶叫していた。

実際にやりそうで怖いからだ。

翔子「……見せてくれる？」

雄二「あー……。いや、それがだな、今日はたまたま家に忘れてぎゃああつ！目が目がああつ！」

翔子「……最初からこうするべきだった」

目潰しされ、痛みに悶えている雄二を見てそう呟いた。

雄二「結局いつもの目突きじゃねえか！歯を食い縛れっつのは何だったんだ！フェイクだったのか畜生！」

翔子「……雄二。手をどけて。携帯電話が取れない」

雄二「わ、渡さねえぞ！やっと直って返ってきたばかりだったのに、お前なんかに奪われてたまるか！」

携帯電話を奪おうとする翔子に雄二は抵抗をしていた。

翔子「…………抵抗するのなら、ズボンとトランクスを持っていく」
雄二「トラ…………百歩譲ってズボンはまだしも、トランクスは関係ないだろ！？お前は俺に下半身裸の状態で学園生活を過ごせと言っのか！？」

自分が変態になりかねない事に雄二は顔を真っ青にし、抗議した。もし、それが成立したら、ドSな統夜は勿論、遊輔やダイチ、明久から変態ゴリラと罵られ、女性陣から変態と罵られ、坂本雄二は変態であるというレッテルが貼られるからだ。

翔子「…………男の子は裸にYシャツ一枚だけの格好が大好きってお義母さんから聞いた」

雄二「違う！好きだからって自分がなりたい訳じゃねえ！そこはかなり大事なところだから間違えんな！」

翔子「…………それに私も雄二のその姿を見たい」

雄二「お前は変態か！？」

翔子「…………変態じゃない。幼馴染の私には、雄二の成長を認める義務があるというだけ」

変態発言をしている翔子にツツコム雄二に対し、変態を否定し、義務があることを淡々と答えた。

雄二「ええい、ベルトに手を伸ばすな！ズボンのホックを外そうとするな！分かった！渡す！携帯電話を渡すから！」

翔子「…………そう」

雄二「翔子。なぜそこで露骨にっかりした顔をするんだ」

観念した雄二に翔子はがっかりしていた事に対しツツコム。

翔子「……………それじゃあ、携帯電話を見せて」

雄二「やれやれ……………頼むから壊してくれるなよ、機械音痴」

翔子「……………努力する」

雄二「そうしてくれ」

携帯電話を渡し、翔子は操作を始めた。

翔子「……………」

雄二「どうだ？何も面白いものはないだろ？分かったから大人しく携帯を返し……………だから待て！何故俺のズボンに手を掛ける！？携帯はもう渡してあるだろ！？」

ズボンに手を掛けている翔子に対し、冷や汗を掻いていた。

翔子「……………私より、吉井の方がメールも着信も多い」

雄二「あん？それがどうかしたのか？」

翔子「……………つまり、雄二の浮気相手は吉井ということになる」

雄二「いや、ならないだろ。てか……………んな事したら成田に氷漬けにされちまうよ」

明久ラバーズの中に明久命の幼女の雪女の顔が思い浮かんだのか顔を青ざめた。

翔子「……………だからお仕置き」

雄二「どうして俺の周りには性別の違いを些細な事と考える連中が多いんだ……………？いいか翔子、メールの内容をよく見てみる。ただの遊びの連絡だろ？」

翔子「……………でも」

二人がそういうやりとりをしていると、雄二の携帯からピピピピと着信音が鳴り始めた。

雄二「っと、メールか。今のは俺の携帯だよな？確認するから携帯を．．．いや、違うな。携帯よりも先に、スリもビックリの手際で抜き取った俺のベルトを返すんだ」

翔子「．．．ダメ。返さない」

雄二「は？何で．．．ってうおいつ！？今度は更にズボンも取る気なのか！？ここは天下の往来だと．．．いやいや、分かった！俺も大人だ。干歩譲ってズボンは渡してやってもいい。だからせめて、トランクスだけは！！」

翔子「．．．ダメ」

雄二「お前正気か！？自分が何をしているのか分かっているのか！？」

翔子「．．．浮気は、絶対に許さない．．．！」

肩をワナワナと震わせ、髪の毛が逆立ち、右手にスタンガンを構えた翔子が雄二を睨んでいた。

これを見た雄二は顔を真っ青にし

雄二「畜生！さっきのメールには何が書いてあったんだ！？グギャアアアア！！！」

叫び声と共にスタンガンを喰らってしまった。

メールの内容はこう書かれていた。

『雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと．．．帰らないんだ。』

明久「送信完了つと」

雄二にメールを送った元凶が携帯をポケットの中に入れて学校を指していた。

昨日は玲に何とか言い訳をして誤魔化したか、ラバーズが出来た事と今でも戦っている事がいざれば。そんな明久は、玲が不純異性交遊や管理局に関わらず戦う事を止める事に拘る理由を考えていた。

今朝、雄二にメールを送りながら考え、ある推論が浮かび上がった。そう、ウータイでセイラの策略で自分の運命が狂わされた事件のせいじゃないかと・・・

当時は玲も知っており、明久を裏切った管理局に対し激しい怒りを覚えていた。

明久「（姉さん・・・あの事件で・・・）」

その時に心に大きな傷は出来ていたが、雄二や康太といった仲間達、瑞希や美波といったラバーズに支えられ、心の傷は癒えていた。考えている明久の背中の方から驚きの混じった声が聞こえてきた。

「んむ？明久？」

明久「あ。おはよう秀吉」

秀吉「おはようじゃ・・・やつと出番じゃ・・・」

小走りで女子の制服を着た秀吉がこちらにやって来た。

するとたわわな胸を揺らし、秀吉が明久を観察するように見つめている。

明久「出番って・・・どうしたの秀吉？僕の顔をじっと見て」

秀吉「いや、なんとというか・・・明久よ。今朝のお主はいつも何か

が違つような気がするのじやが……?」
明久「うえ! ?き、気のせいじやないかな? 何も変わった事なんてないよ?」

秀吉の探るような視線から目を逸らす。

そんな秀吉を明久は、統夜のフラグ立てスキル等で鍛えられたんじゃないかという失礼な事を考えていた。

秀吉「普段と違って、今日は朝から血色が良いように見えるのう。
何か臨時収入でもあつて朝食が摂れたのかの?」

秀吉の言葉に明久はドキツとし、冷や汗を大量に流し始めた。
姉である玲の監視があるのか、心配かけさせたくない為、ゲームや本を処分して生活費を捻出し、健康的な日常を偽装していた。

明久「ま、まあちょっと……たまには僕だつて、ね?」

咄嗟に上手い言い訳が思いつかなかつたので言葉を濁して誤魔化す。

秀吉「シャツもズボンもアイロンがかかっておるようじやし」

明久「そ、それはホラ。今日は週の初めなんだから、そのくらいは」
秀吉「……怪しいのう」

明久「ほ、ホントに何も無いんだよっ」

ジト目で見ている秀吉に明久は隠しごとを見透かされてしまいそう
で耐え切れず、秀吉の視線から逃れるように体ごと向きを変えた。

秀吉「まあ……お主の事じゃ……新しい女が出来たのじやる?」
明久「ち、違つよ! ? 統夜じやあるまいし! ? いつもいつもフラグ
を立てて……えっちいハプニングを起こす変態口リエロ死神のよ

う……に……ひい!?ひ、秀吉……こ、怖いよ!？」

秀吉「誰が変態ロリエロ死神じゃて?言うてみい……明久」

目が笑っていない笑顔で見つめて来た秀吉の殺気に対し、後ろへ下がった瞬間、ガチャリと不吉な音が聞こえ、後ろへ振り向くと顔を青ざめた。

統夜「よう。誰が変態ロリエロ死神だ?」

笑顔だが目が笑っていない統夜がアドヴァンスフューラーの片割れである黒のマガジン式の拳銃の銃身を明久の額に当てていた。

統夜の隣にいたはやてとプリムラ、カナにも聞こえてしまったのか、殺気を込めた視線で睨まれていた。

はやて「明久君……ええ度胸やな。殺してもええよな?」

プリムラ「魔力球で蒸発させちゃおうよ」

カナ「いたぶって……誰に喧嘩売ったのか思い知った後でね」

物騒な事を言っている三人に明久は絶望に満ちた表情になって跪いた。

明久「ご、ごめんなさい!?言葉のあやでつい!？」

統夜「ふむ……寝ぼけて言ったという事にしておくか」

アドヴァンスフューラーを封印魔法陣の中へしまった。

はやてとプリムラ、カナ、秀吉の四人も殺気を消し、普段の雰囲気に戻った。

統夜「そっいや……お前……いつもより感じが変わってるな?」

明久「と、統夜までも疑うの?」

統夜「お前ねえ．．．いつものとは違うとさ．．．皆、疑ってしま
うものなのよ」

秀吉「統夜も分かっておったのか？」

統夜「まあな．．．」

明久「．．．．．」

統夜が気付いた事に明久は黙ってしまった。

統夜「言いたくないなら別に構わない．．．お前の口から言つのを
待つ。秀吉もそれでいいな？」

秀吉「分かったのじゃ．．．」

これ以上追及するのを秀吉にも止めるように言った。

明久「ありがとう．．．」

統夜「（この様子だと身内か何かあったのかもしれんな）」

明久と合流した統夜達は学校へ着き、校舎内に入り、2・Aの教室
の扉を開けると、雄二が所々黒焦げになっており下半身クールビズ
の状態で椅子に座っていた。

統夜「おいおい．．．夏だからといって．．．その格好は無いだろ
？」

明久「クールビズ？」

はやて「変態や．．．」

カナ「変態な豚ね」

秀吉「これは．．．のう？」

統夜は呆れ、明久は呆然とし、はやてとカナ、秀吉の三人は冷やや
かな視線を向けて軽蔑していた。

雄二「おいしいいい!?!?!?誰が好き好んで夏にんなもんをやるかあ!?そして統夜ラブーズのテメエら!!俺をそんな目で見るんじゃねえ!!テメエのせいだ!明久!テメエのせいで俺は、下半身クールビズ仕様になる羽目になったんだ!死んで償えこのクソ野郎!」

統夜とはやて達三人に対しツッコミを入れた後、明久に殴りかかった。

明久「ええええっ!?いきなりどうしたの!?一体何があつたのさ!?!」

雄二「黙れ!死ね!制服を寄越せ!」

全く分からない雄二の台詞に明久は理解不能だった。

「おい。知ってるか?坂本の話」

「ああ。何でも夏を乗り切るために裸Yシャツになったとか」

「全く流石としか言いようが無いな・・・アレには度肝を抜かれたぜ・・・」

聞こえてきたのはクラスメイトの話し声。

明久「・・・・・・・・・・」

雄二「・・・・・・・・・・」

クラスメイトの話し声に耳を傾けた明久は無言になってしまった。

統夜「俺はこうだと思った・・・霧島が雄二を求めてたんじゃないかと・・・アナログステイックを下の口に入れてほしいと・・・」

はやて「あゝ．．．ありえるかもしれへんな」

カナ「翔子は大胆だね」

秀吉「流石じゃの．．．」

雄二「んな訳無いだろオオオオオオ！！てか朝っぱらからんな事言つてんじゃねえええええ！！！！寒気がしたわ！？俺の人生が終わる！？」

統夜の推測に雄二は顔面蒼白になり、叫んでいた。

明久「夏に負けちゃ駄目だよ」

雄二「ち、違う！俺は自分から進んでそんな格好になった訳じゃない！あと、トランクスは死守したからギリギリでセーフな筈だ！」
明久「うんうん。そうだね。夏の暑さで、雄二の精神はギリギリのところまでいっちゃったんだよね．．．」

雄二「だから違うと言ってるだろうが！お前が送ってきたメールを翔子に見られたせいでズボンを奪われたんだボケ！」

統夜「あ、そっちな．．．」

雄二が興奮状態なのか、言っている事が滅茶苦茶になっている。

雄二の理由を聞いた統夜は残念そうな顔をしていた。もし自分の推測が本当だったら弄りネタになるからだ。

明久「何を言ってるのさ雄二。いくら霧島さんでも、男からのメールくらいでそんな事をする訳ないじゃないか」

自分が送ったメールで翔子が怒るなんてありえないと思った明久は苦笑いしていた。

雄二「いや。正直、お前の文章はかなり際どい感じだったと思うぞ．．．」

瑞希「際どいって、どんなメールだったんですか？」

扉から教室に瑞希と美波、早苗の三人が入り、明久のところへやって来た。

明久「別にただのメールの筈だけど？」

雄二「ほほう。そう思うのなら、俺に送った文面を大きな声で読み上げてみる」

明久「？別にいいけど？」

雄二がメールの内容にこだわるので、携帯を取り出して履歴を開く。

明久「えっと、それじゃ・・・コホンっ」

咳払いをしてから大きな声で読み上げる。

明久「雄二の家に泊めてもらえないかな。今夜はちょっと・・・帰りたくないんだ！」

明久がそう言った瞬間、瑞希と美波、早苗が明久に近づいた。

美波「アキ・・・ウチらが構ってあげられないばかりに・・・」

瑞希「男同士はいけませんよ・・・私が・・・その・・・気持ちいい事を・・・」

早苗「そうですね・・・あ、明久様が望むものなら・・・私・・・頑張りますから！」

明久を慰めているラバーズでした。

統夜「で・・・雄二・・・答えは？」

雄二「ノーに決まってるだろ！」

統夜「だろうな」

誤解のあるメールでトラブルに巻き込まれた雄二は拒否した。

明久「そう・・・」

統夜「何か理由でもあるのかよ？」

明久「言えないけど・・・統夜・・・君の家はどうかかな？」

統夜「無理だと思うよ。後ろを見てみなさい」

統夜に言われ、後ろを見ると、明久は顔を青ざめた。

はやくとカナ、秀吉は勿論、後から来た文乃と千世、希、エステル、優子、メアリが殺気を込めて明久を睨んでいるからだ。

明久「だ、だよね・・・達哉や遊輔、ダイチも同じだろうね」

統夜「ああ。一つだけいい方法がある・・・」

明久「なに？」

統夜「成田んとこに泊まればいい。あいつは雪女だ。涼しい夜が過ごせるぞ」

明久「絶対嫌な予感しか生まないんですけど!？」

統夜のアイデアに明久はツツコンだ。

統夜「で、どうなんだ？」

早苗「わ、私は・・・一人暮らしですから・・・大丈夫ですけど・・・理由を教えてくださいませんか？」

明久「期末試験が近いというのは・・・駄目かな？」

理由を聞かれた明久はそう答え、自分の席に着いて授業の準備を始めていた。

雄二「あいつ・・・様子が変だな。何か心当たりは無いか？」

瑞希「明久君の様子、ですか？そう言われてみれば、今朝はいつもより顔色がいいですね。制服も糊まで利いてパリッとしてますし、寝癖も無いですし」

統夜「何かあったという事だろうな」

明久の様子が怪しいとにらんだ統夜達は授業の準備をしている明久に視線を向けていた。

授業の時間が始まり、真面目に取り組んでいる明久に紅女史をはじめとした教師陣は啞然としていた。

西村の授業の時間にて

西村「吉井。保健室へ行つてきなさい」

午前中に四つの授業で七回言われた。

いきなり真面目に取り組んでいたら誰でも驚くだろう。

昼休みになり、昼食をとるため弁当箱を鞆から取り出した。

美波「え！？アキ、お弁当を持っているなんて一体どうしたの！？」

明久が弁当を持っている事に美波は驚愕な表情になっていた。

瑞希「ええっ！？明久君がお弁当を！？」

早苗「本当ですか？！」

いつの間にかやって来たのか、隣で瑞希と早苗も驚いていた。

明久「そこまで驚かなくても・・・僕だって人間なんだから、たまには栄養を摂らないと死んじゃうし」

これを聞いた統夜達戦うメンバーは呆れた表情で見つめていた。常に栄養を摂らないと力が発揮出来ない可能性があるからだ。

瑞希「それはそうでしょうけど・・・でも、今日はいつもと違いませんか？」

美波「そうね。アキが食べるとしたら大抵は買ってきたお弁当なのに、今日は手作りみたいに見えるわね」

早苗「しかもおいしそうですし・・・」

三人はじろじろと机に置かれた明久の弁当を見ている。

瑞希「明久君。どうして今日は手作りのお弁当なんですか？」

首を傾げて訊いてくる。

手作り弁当にした理由は簡単。健康的な生活をする為である。

美波「まさか、誰かに作ってもらったのかしら？」

美波の目がスツと細くなるのを見た明久は正直に答え始めた。

明久「自分で作ったんだけど・・・僕、料理出来る方だから・・・」
美波「本当？」

瑞希「意外です・・・」

早苗「凄いですね」

右手の人差し指で頬を掻きながら答えると、三人から信用されていた。

それから四人で昼食を摂り始めた。

統夜「ちよつと気になるな」

遊輔「そうか？」

統夜「ああ」

明久の様子を見ていた統夜と遊輔は話し合っていた。しばらくして、昼食を食い終え、片づけを終えた明久に統夜がやって来た。

明久「ん？なに統夜？」

統夜「三人とも・・・こいつを借りてくぞ」

それだけを言つて明久を屋上へ連れだした。

屋上にて統夜と明久の二人が話を始めた。

明久「一体なんの用？」

統夜「今朝からお前、様子がおかしいぞ？」

明久「それは・・・」

統夜「大方・・・お前の家に家族が帰つて来たんだな？」

統夜の言葉に明久はドキツとし冷や汗を掻いていた。

明久「・・・・・・・・・・」

統夜「凶星・・・だな。正直に言つてほしい・・・」

これ以上統夜に隠し事は出来ないと分かった明久は統夜に話し始めた。

明久「実は・・・姉さんが帰って来たんだ」

統夜「お前の姉がか？」

明久「うん・・・」

明久は玲が帰って来た事と不純異性交遊の禁止、管理局に関わらず戦いをやらない事等を統夜に話し始めた。

これを聞いた統夜は右手に顎を置いて、何かを考えていた。

明久「と、統夜？」

統夜「・・・・・・・・」

何かが分かったのか、目を見開いていた。

統夜「お前の姉さんが不純異性交遊と管理局に関わらず戦いをやらない事の二つに拘るのか・・・それは俺達が管理局に裏切られた事件に関する事だ」

明久「やつぱり・・・」

統夜「管理局に関わらず戦いをやらない事を考えたのは戦い再び誰かから裏切られる恐れと傷つけられるのを恐れ、不純異性交遊は女性に裏切られ、明久が傷付かないように考え、もう一つは姉の独占欲かな。二つの共通点はお前の姉さん一人だけでも明久を守りたいという理由だろうな」

明久「姉さん・・・」

統夜「お前を悪く言おうとも・・・それは嘘だ。実の弟を本気で悪く言う奴はゼロに等しいからだ」

玲が二つの事に拘る理由を統夜が推測し、明久に教えていた。これを聞いた明久はある決意を決めていた。

放課後になり、統夜と明久、秀吉、瑞希、美波、早苗、雄二、康太の八人は明久の家へ向かっていた。理由は簡単、不審に思った雄二達が明久の家に興味を持ち出したからだ。明久自身も望んでいた為、反対はしなかった。因みに勉強会も兼ねている。

統夜「俺らはいいとして姫路達ははじめてになるよな？」

瑞希「はい。どんな所か楽しみです」

美波「そうね」

早苗「楽しみです」

明久ラバーズの三人は嬉しそうだった。

後日、この事を知った小蓮は拗ねてしまったのは言うまでも無かった。

秀吉「で・・・何故統夜もいるのじゃ？」

統夜「こいつが何故ああいう事をしたのか気になってな」

秀吉「なるほど・・・」

明久を見ながら秀吉に理由を話していた。

明久「（統夜、大丈夫かな？）」

統夜「（俺も協力すつから大丈夫だ）」

不安な明久に対し、統夜はフォローすると念話で話していた。そして、明久のマンションに到着した。

明久「それじゃ中に入るよ」

家の鍵を開け始めた。

明久「それじゃ、あがってよ」

皆を招き入れて、リビングへ続くドアを開け放つ。

そして、その直後、一同の視界に飛び込んできた物が。

一同「・・・・・・・・」

それは室内に干されたブラジャーだったからだ。

明久「いきなりフロアー出来ない証拠があーっ！」

統夜「おいおいおい！！？お前はいやらしいのが趣味かあ！？」

統夜が叫んでいるのをよそに、明久は慌てて洗濯物を別室に放り込む。

美波「アキは・・・胸の大きいのがいいのかあああああ！！！！
ゴラアアアアア！！！！」

秀吉「島田が暴走しよった！？」

康太「・・・・・・・・誰かと住んでいる？」

大きいブラだったのか美波は暴走し、秀吉が背後から抑えていた。

これらを見て、康太は静かに自分なりに推測していた。

瑞希「これって・・・誰のですか？もしかして・・・私が泊まる時のブラ・・・ですか？」

明久「違うって！？」

雄二「俺はてつきり貧乳用のブラで成田や小蓮を誘って変な事をするのかと思っただぜ」

明久「雄二・・・僕をそんなにロリコンにしたい訳？」

雄二「ああ。これは事実じゃねーか。姫路と島田は大丈夫として・・・成田と小蓮は幼児体型・・・そして島田妹が入れば・・・お前はロリコンじゃないか」

明久「よし！雄二！表に出ろ！」

ロリコン疑惑を掛けられた明久は雄二に食って掛った。

これを見ていた統夜と康太は呆れていた。

暴れている美波を抑えた後、リビングへ移動すると化粧用のコットンパフをリビングの卓上で見つけた。

秀吉「コットンパフじゃな」

統夜「明久・・・これはどう考えてもなあ・・・」

瑞希「誰かと・・・住んでいるのですかね？」

早苗「これは・・・その・・・」

否定したいけど否定しきれない明久ラバーズであった。

所々を探していると、食卓の上に弁当があった。

統夜「これは・・・女性向けヘルシー弁当か？」

秀吉「みたいじゃな・・・明久よ・・・正直に話してくれんかの？」

明久「はあ・・・もうこうなったら仕方が無いよね・・・正直に言うよ。実は今、姉さんが帰って来ているんだ」

秀吉に言われ観念したのか、正直に白状した。

美波「これで疑いが晴れたわね」

瑞希「明久君にお姉さんがいた事に驚きです」

早苗「会ってみたいです」

明久ラバーズが玲に会いたがっているのに対し、明久は緊張してしまつた。

その時、玄関のドアの開く音が聞こえて来た。

玲「あら・・・？姉さんが買い物に行っている間に帰って来ていたのですね、アキくん」

玲の声が出たのか明久と明久ラバーズは緊張を始めた。

すると扉を開かれ、買い物袋を手にし、七分丈のパンツに半袖のカッターシャツ、その上に薄手のベストを着た格好の玲が入って来た。そんな中、統夜はここから勝負という感じで真剣な表情になっていた。

玲「あら・・・お客様ですか。ようこそいらっしゃいました。狭い家ですがゆつくりして下さいね」

統夜達に普通の挨拶をし

一同「お、お邪魔します」

普通の挨拶で返した。

玲「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。皆さん、こんな出来の悪い弟と仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」

深々とお辞儀をしていた。

雄二「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久のクラスメイトです」

我に返った雄二は慌てて頭を下げる。

康太「……土屋康太、です」

統夜「天川統夜です」

続いて康太と統夜も挨拶をした。

玲「はじめまして。雄二さんに康太くん、そして有名人の統夜くん」

統夜「知ってるんですか？」

玲「はい。月と地球を救った英雄さんでしょ？」

統夜「は、はい……そうです……」

笑顔で返したが、統夜の名前を聞いた玲は問い掛け、統夜は肯定していた。

秀吉「ワシは木下秀吉じゃ」

玲「ようこそいらっしやいました。秀吉さん」

笑顔で秀吉に返した瞬間、明久が玲に話し掛けた。

明久「姉さん……今から大事な話があるんだけど……いいかな？」

玲「大事な……話……ですか？」

明久「うん」

真剣な表情をしている明久に対し、玲は聞く態勢に入った。

玲「お友達にも関係のあるお話ですか？」

明久「うん。これだけは言わせて……瑞希と美波、早苗ちゃん、ここにはいない小蓮ちゃんという僕のラバーズが出来た」

玲「は？ラバーズ？」

雄二「明久ラバーズ・・・所謂恋人達って事ですよ」

雄二の言葉を聞いた玲は冷たい目で見つめて来た。

玲の視線に明久は怯まず、統夜は軽く流していた。

玲「アキくん・・・貴方は姉さんがいない間にラバーズを作っていたのですか？」

自分が考えたルールを破っていた明久に対し冷やかな視線で見つめていた。

明久「うん。裏切るような形をしてごめん・・・だけど・・・」

玲「不純異性交遊として減点ですね。貴方は言う事を聞かない馬鹿な弟だったとは姉さんは悲しいです」

統夜「馬鹿なのはアンタじゃないのか？」

明久を罵声を浴びせている玲に統夜は小馬鹿にしたかのように言った。

玲「何ですって？」

統夜「確かにこいつはアンタにこの事を言わなかった馬鹿だけどさ・
・恋人達を作ったから減点っておかしいんじゃないのか？おかし
いよな？おかし過ぎて笑っちゃうよ」

雄二「お、おい！統夜！？」

秀吉「し、失礼じゃろうが！！」

笑みを浮かべている統夜に雄二と秀吉は止めるよう注意した。

玲「よくもそんな好き勝手に言うてくれますね・・・貴方に何が分

かるんですか？」

統夜「あゝ．．．分かりたくも無いね。そんな下らない理不尽なルールを．．．俺ならすぐ破るよ。そんなもん」

怒りを露わにしている玲に対し、統夜はへつと笑って軽く流していた。

そして、瑞希と美波、早苗を見始め、

玲「私は貴方達をアキくんに対応しくありませんので手を引いても
らえますか？」

そう冷たく言い放った。

統夜「そうやって．．．一人で明久を守りたいのか？明久本人や姫
路達の意思を無視してまで」

玲「そうです。アキくんが裏切られ．．．傷つくのを見たくありま
せん．．．例えどんな手を使ってでも．．．」

統夜「アンタ．．．あの事件．．．俺や明久が管理局に裏切られた
事件の影響で過剰に守る事に専念した．．．そうだな？」

統夜の言葉に的中したのか玲は黙ってしまった。

統夜「確かに．．．裏切られるのは誰だって怖い．．．けどな．．
．全ての生物は一人では生きられない」

玲「．．．．．」

統夜「明久はその時は誰も信じられなくなったが．．．仲間や恋人
達の支えにより今を生きている」

統夜の言葉を静かに聞いていた瑞希達は明久を見始めた。

瑞希「確かに・・・認められないかもしれませんが・・・」

美波「可能性を見ないで・・・相応しくないとっていうのはちょっと・・・」

早苗「私達は騙すとかじゃなく・・・自分達の意味で明久様が好きになっただんです」

雄二「最初会った時は氷のように冷たかったが・・・俺達のお陰でその面影は消えた」

康太「・・・明久と姫路達の絆を否定する事は姉である玲さんでも許されない」

秀吉「人は支え合ってこそ可能性を持つんじゃないじゃろうかの？」

明久を知っている仲間や恋人達は本心を玲に語った。
彼を大事に思っているかのように

統夜「明久と姫路達を認めない理由はもう一つあるんだろ？それは・・・」

玲「言わないでください・・・」

統夜「そこのお姉さんは異性として明久が好きという事だからさ」

凶星だったのか玲は顔を真っ赤にしていた。

明久「ね、姉さん・・・本当？」

玲「・・・」

統夜「不純異性交遊の禁止の裏にこういうの隠されているのはよく考えれば誰だって分かるものさ。で・・・どうなんです？」

玲「貴方の・・・言うとおり・・・です」

統夜の言葉が正しかったのか玲は明久が好きと白状した。

これを見た統夜はやっぱりなと思ったのか溜息をついていた。

瑞希「意外です・・・」

美波「実の弟なのに・・・」

早苗「ですね」

秀吉「しかし・・・よく分かったのお・・・二つのルールの裏が・・・」

明久「ラバーズは意外そうな顔をして、玲を見て、秀吉は統夜の推理に感心していた。

明久「姉さん・・・今の僕がいるのは・・・雄二達仲間達・・・瑞希達・・・恋人達のお陰なんだ・・・」

玲「アキくん・・・」
明久「姉さん。不純異性交遊を撤回して彼女達との仲を認めてください」

玲に明久は頭を下げた。

これを統夜達は黙って見守っていた。

明久の行動に玲は

玲「本当に・・・見ない内に成長して・・・構いませんよ。貴方・・・統夜くんもアキくんと同じ所に？」

統夜「ええ。俺や明久、貴方の運命を狂わせたセイラ「シュトラウ」トはもういない・・・俺達のような存在は生まれる事も無いだろう」

玲「そうですね・・・アキくん・・・貴方は・・・戦ってたの？」

明久「うん・・・前は戦うのを拒んでたけど・・・瑞希や美波・・・大切なものを守る為に戦う決意をした。黙っててゴメン・・・」

玲「そして・・・昨日言ってた管理局の闇を倒したと？」

明久「そうなるね。これから・・・大切なものを守る為に戦ってもいい？」

玲「アキくんは・・・これからも頑張ってくださいね」

明久「ありがとう・・・姉さん」

二つを許してくれた玲に明久は感謝していた。

統夜「こうなるの分かってたんじゃないのか？」

玲「そうかもしれませんね・・・心のどこかで一人だけでアキくんをどんな手段使っても守ろうとした・・・それは間違いだったのでしょうか？」

統夜「間違いだな。アンタのやり方は明久の意思を無視している。それがアンタの『歪み』だ。その歪みが消えたのなら大丈夫だ」

玲の問いに統夜はズバツと答え、フツと笑みをこぼした。

明久「ありがとう。統夜」

玲「統夜くん・・・大切な事を教えてくれてありがとうございます。アキちゃんと仲良くしてあげて下さい」

統夜「気にするな。言われずとも仲良くするさね」

大事な話が終わり、一同は統夜と明久、雄二が夕食を作る為、キッチンへ移動した。

玲「不思議な人ですね」

瑞希「誰がですか？私は姫路瑞希と言います。よろしく願いします」

美波「天川の事じゃ無いですか？うちは島田美波と言います」

早苗「魔人と真祖の吸血鬼の混血ですけどね・・・私は成田早苗と言います」

遅れながらも瑞希達三人は玲に自己紹介をしていた。

玲「ええ。アキさんと同僚で英雄とは・・・世界は広いのか狭いのか分かりませんね」

瑞希「そうですね」

秀吉「統夜は歪みを嫌い・・・絆や想いを大切にしているからの・・・否定している者・・・明久の姉上に喝を入れたかったのじゃろ」

玲「そうだったのですか・・・瑞希さん、美波さん、早苗さん」

瑞希、美波、早苗「はい？」

玲に突然呼ばれた三人は一斉に顔を玲の方へ向けた。

玲「一緒にアキくんを支えましょうね」

瑞希、美波、早苗「はい」

玲が瑞希達三人と同盟を組み、一緒に明久を支える誓いを立てた瞬間であった。

これを見た秀吉と康太は笑顔で見守っていた。

康太「・・・変われたな・・・」

秀吉「統夜は凄い存在じゃな」

時間が過ぎ、夕食であるパエリアが出来た為、瑞希達を呼んで食べ始めた。

統夜と明久、雄二の作ったパエリアの評判はよく、おいしそうに食べてくれた。

夕食を食べ終え、後片付けを終えて、全員がリビングに集まり、瑞希が本題を切り出した。

瑞希「そろそろお勉強会を始めましょうか？」

美波「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

夕飯が早かったせいか、まだ七時。今からでもたっぷりと勉強は出来る。

一同は真面目な姿勢で勉強を始めた。

玲「皆さんでお勉強ですか。それなら良いものがありますよ?」

明久「良いもの?」

玲「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきますね」

トタトタとリビングを出て、その後何かを取り出す音がして、再び部屋に戻ってきた。

玲「参考書というものなんですが、役に立つかもしれないので」

テーブルの上に玲が持って来た本が置かれた。

タイトルは『女子高生 魅惑の大胆写真集』と書かれていた。

玲「アキくんの部屋で見つけました」

明久「僕のトップシークレットがぁー!!」

統夜「お前・・・ウエポンサモンシステムを応用した封印魔法陣の中に収納しまえば良かったのに・・・俺なんかそうしているぞ」

統夜が自慢げに言うと、秀吉が黒いオーラを出して睨んでいた。

秀吉「ほほう・・・統夜は如何わしい本を封印魔法陣の中に入れておったのか・・・良い事を聞いたぞい」

統夜「玲さん・・・貴方はグッジョブです」

玲「何がですか?」

統夜「最近、明久にロリコン疑惑があって・・・読者からいつか口

リコンなんて言われそうなんですよ」

玲「そうだったのですか・・・この参考書は胸の大きい人ばかりで・・・年代ですから読者さんから疑いは晴れますね」

明久「そういう問題じゃ無いよおおおおお！！！！」

統夜と玲が話している所に明久は叫んでツツコム。

ロリコン疑惑が掛けられた事に玲は悲しみに満ちた表情をしたが、参考書を見た途端、疑いが晴れたのか笑顔に戻った。

瑞希「・・・・・・・・」

美波「・・・・・・・・」

早苗「・・・・・・・・」

明久のロリコン疑惑が晴れても明久ラバーズ三人はあまりいい気分じゃなかった。

その後、参考書を見て顔を真っ赤にしたのは言うまでも無かった。

雄二「明久のロリコン疑惑は置いといて、勉強するならさっさと始めようぜ」

呆れたように雄二が言う。

玲「お勉強なら宜しければ私が見て差し上げましょうか？」

瑞希「え？お姉さんが、ですか？」

玲の提案に瑞希が目を丸くしていた。

玲「はい。日本ではなくアメリカのボストンにある学校ではありませんが、大学の教育課程を修了しました。多少はお力になれるかと」
統夜「ボストンの大学って・・・まさかハーバード？」

玲「よくご存じですね。その通りです」
一同「えええ!?!」

玲が修了した大学の名前に驚きの声を上げていた。

康太「……………頼もしい」

一同「宜しくお願いします」

玲に頭を下げ、勉強を教えてくださいよう頼んだ。

明久「僕はてつきり……某異星人がホームステイするアニメの主人公が通う高校の英語教師の真似かと思ったよ」
雄二「何なんだよ……それは……」

明久の中の人ネタに雄二は呆れながらツッコム。
それから十時前くらいまで統夜達は玲の講義を聞いて、解散となった。

それから土曜日になり明久と雄二、康太、瑞希、美波、早苗、翔子の七人は天川家の前に来ていた。
はやて達に声を掛け、皆で天川家にて勉強会をしようという瑞希の提案でここに来ていた。

明久「入ろうか」

雄二「そうだな」

インターホンのボタンに触れようとした瞬間、統夜とはやて達統夜ラバーズの声が聞こえて来た。

瑞希「何でしょうか？」
美波「さあ？」

何が起こっているのか気になり首を傾げていた。
天川家の中では

はやて「さあ・・・大人しく封印魔法陣の中から大人の参考書を出
さんかい!!！」

統夜「秀吉の仕業だな！」

秀吉「そうじゃ！大人しく渡すのじゃ！」

文乃「さつさとよこしなさい！」

優子「さあ早く！」

メアリ「でないと燃やすわよ？」

統夜「ふざけんな！」

エロ本を封印魔法陣の中に入れていた事を秀吉から聞いたはやて達
統夜ラバーズは統夜を追いかけ回していた。

咲夜「今日も元気ね〜」

プリムラ「うん・・・」

カナ「元気があっていい事じゃない」

シャル「そうね」

希「にやあ・・・」

華琳「元気あるのはいいものよ」

追いかけてここに参加していない咲夜達はのほほんと冷たい麦茶を飲
んでいた。

統夜と統夜ラバーズの声聞いた明久達は・・・

明久「こりゃ・・・大変だね」

雄二「秀吉にバシたんだな」

統夜の事は自業自得と思い、雄二はインターホンを押し、チャイムが鳴り始めた。

すると、ドアが開き、カナが出てきてくれた。

カナ「入っていいよ。統夜の事は気にしないでいいから」

カナに言われ、明久達は中へ入った。

シャル「埒が明かないわね」

右腕を触手に変化させ、統夜と追いかっこしているはやて達を捕まえ、大人しくさせた。

シャル「統夜、素直に出して」

統夜「大人の参考書を？」

シャル「ええ。あつたらの話だけだね」

統夜「分かった・・・出すよ・・・」

そう答えた統夜だけ解放し、アドヴァンスバツクルにある封印魔法陣を展開し様々なものを出し始めた。

雄二「武器や色々なものがあるな」

翔子「・・・武器庫？」

封印魔法陣を知らない雄二達は啞然として見ていた。

本らしきものを見つけたシャルはなるほどと思ったのか統夜をチラッと見ていた。

シャル「『爆乳レースクイーンと危険なレース』に『大きなメロンをいただきます』か・・・」

統夜「ちよつとおおおおお！！？何で言うのかなああああ！！！」

冷静にタイトルを読み上げているシャルに統夜は叫びツツコム。

明久「君も胸の大きな娘の本を持ってたんだね・・・」

康太「・・・これだけか？」

統夜「そうだが？」

康太「・・・明久以上に4000冊以上のエロ本があると思つてたが・・・」

統夜「お前・・・俺がそれぐらいのエロ本があると思つてたのか？」

康太「・・・エロ本なんかに興味はない」

台詞とは裏腹に、しよんぼりと肩を落としていた。

まるで散歩をおねだりしたのに連れて行って貰えなかった子犬のようだった。

シャル「その他に・・・『巨乳メイドのセクシーなご奉仕』・・・

『幼馴染の彼女の料理』貴方に全部食べられたい』」

統夜「おいしいいいいい！！？本当に止めてください・・・」

ギルシア「同志よおおおお！！！！俺は悲しいぞおおおお！！！！」

突然現れた滝のように涙を流したギルシアが統夜の胸倉を掴んでいた。

一緒にいたレーティアは「はあ・・・」とため息をついていた。

ギルシア「お前の事だ・・・俺みたいに幼女のエロ本があると信じ

ていたのに・・・」

統夜「んなもんあつたら俺は終わるわああああ!!!」
はやて「やっぱ・・・胸の大きいのがええんかな・・・」

千世「くっ・・・」

優子「・・・」

統夜とギルシアが言い争っている間、触手から解放されたはやて達はエロ本やDVDを見つけ、自分の胸に手を当てていた。

シャル「統夜・・・気持ちは分かるけど・・・エロ本は買わないように・・・」

統夜「はい・・・」

シャルに軽く注意されてしまった。

レーティア「本やDVDより実物を見て楽しみなさい」

統夜「連続でラッキースケベを発動させちまつたら・・・読者から軽蔑されるぞ？」

レーティア「ラッキースケベ・・・それは主人公の特権なのよ？何回もやつても許されるわよ」

ラッキースケベに関してレーティアは統夜に大丈夫と語りかけて来た。
た。

二人の話を聞いていた統夜ラバーズは虜にさせればいいじゃないか
と思つたそうなの。

シャル「それにしても・・・エロ本とDVDの数は少なかったわね」

統夜「俺を何処かのムツリと一緒にするな」

康太「・・・俺はムツリではない」

翔子「・・・早く勉強する・・・」

翔子の言葉で統夜達学生組は勉強を始めた。

統夜「……………」

希「……………」

優子「……………」

瑞希「……………」

早苗「……………」

翔子「……………」

成績優秀組は静かに勉強をしていた。

ギルシア達大人組は静かに見守っていた。

統夜「期末の試験は一夜漬けしてでも出来るだろう……と言いた
いが……俺の寝首を掻こうとしている二名がいるから油断できな
い」

瑞希「あの時の勝負の借りは返したいですからね」

翔子「……………天川には負けない」

統夜「は、言つてな」

瑞希と翔子は統夜に対抗意識があるのか燃えていた。

優子「ゲームかなにかと思ってるのかしらね……統夜は……………」

早苗「そう思いますよね」

三人のやりとりを見て優子は呆れていた。

明久「そういえば……鮮華は？」

統夜「寮でやっている。静かな所でやりたいと言つてな……………」

明久「そうなんだ……………」

寮のリビングにて鮮華は一人で勉強をしていた。理由は一つだけ・・・兄の統夜と未来の義姉になるであろう統夜ラバーズの邪魔をしたくないからだ。すると勉強をしている鮮華の前にソラが通り掛った。

ソラ「家で勉強は・・・統夜達がいるから無理か・・・」

鮮華「はい」

ソラ「頑張れよ」

鮮華「ありがとうございます」

去って行くソラに礼を言っ、勉強を再開した。

しばらく時間が経ち、休憩をしていた。

統夜と明久は『BLAZBLUE COMTINUMSHIFT』で対戦をし、二人の対戦を雄二と康太は黙って見ていた。

瑞希「天川君って不思議な人ですよね」

はやて「そう？」

美波「アキのお姉さんに説教して変わらせるなんて・・・凄いよ」

文乃「確か・・・吉井の家に行った時？」

早苗「はい。玲さんは明久様に不純異性交遊の禁止と管理局に関わらず戦うのを止める事を言っていましたか・・・」

優子「それらを統夜が吉井君のお姉さんに何か言った訳ね・・・」

先が読めたのか優子は瑞希達明久ラバーズにそう言った。

カナ「私は最初・・・プリムラや神王、魔王を憎み・・・殺そうと

したけど・・・統夜が止めてくれた事に感謝しているよ」
咲夜「そうね・・・統夜がいなかったら・・・はやてを憎しみで殺していたかもしれなかったわね」

かつて憎しみに囚われていたカナと咲夜は統夜のお陰で今の自分達がいる事に感謝していた。

これを聞いた統夜ラバーズ以外の女性陣は驚いていた。

瑞希「玲さんの歪み・・・自分一人だけで明久君を守り、私達を見ようとせず仲を認めない理不尽さに怒りを感じていました」

文乃「統夜は昔から歪みや理不尽さを嫌い・・・絆を否定する人や絆を利用して道具として使う人に対しては怒りを覚えるのよ」

はやて「憎しみは憎しみでしか生まない事を・・・過去の事件で学び・・・カナちゃんや咲夜さん、紅神君の憎しみを破壊した」

統夜の幼馴染である文乃とはやては統夜を見ながら語っていた。

ギルシア「もしかしたら・・・統夜はDIEESを用いたオーシャンシステムに適合するかもしれんな」

レーティア「どうして？」

ギルシア「絆を大事にし・・・想いを大切にしている統夜ならメサイアのオーシャンシステムで対話が可能だと思ったからだ」

忍について調べた時の事を思い出したギルシアは統夜ならDIEESのオーシャンシステムによる対話が可能だと感じていた。

ギルシアの話にレーティアは同意していた。

メアリ「不思議なものね・・・真祖と魔人のハーフなのに・・・」
エステル「そうですね・・・人の心無しじゃ・・・今の統夜はいま
せんでしたね」

希「……統夜の両親が人間の味方をした理由が分かったような気がする……」

統夜を改めて凄いと思ったメアリとエステルと希の三人だった。休憩も終わり、再び勉強を始めた。

統夜「あ、俺思った事が一つだけ……」

明久「何だよ？」

統夜「もし……シアが追試になったら文月バーベナ学園は消滅しそっちなって……」

統夜の言葉に学生一同は顔を青ざめ、冷や汗を大量に流していた。シアの父親である神界を統べる神王は超が付く程の親馬鹿であるため、娘であるシアが追試になったら学園消滅をしそっちな勢いがあるからだ。

雄二「いくらなんでもやり過ぎだろ!？」

美波「絶対にありえないよね!?!?てかよく神王なんてやれるよねえ!?!？」

統夜「それをやるのが親馬鹿神王なんだよ」

神王のやり方に対し顔を青ざめツツコム雄二と美波に対し統夜はキツパリと言った。

その頃、神王の家では

神王「シア……頑張れよ!もし追試になったら俺が何とかしてやる!?!？」

両手にダンベルを持ってトレーニングしながら稟や楓達と一緒に勉強しているシアを見ていた。
瞳に炎を灯しながらやっている時点で、やりかねない。

稟「久々の出番だな・・・」

シア「稟くん・・・それ言っちゃ駄目だよ」

ネリネ「そうですよ」

楓「いつか多く出れますよ」

自分達の出番が来た事に嬉しく思いながら勉強に励んでいる稟と稟ラバースであった。

プリムラ「ねえ、お兄ちゃん」

統夜「何だ？」

プリムラ「この問題だけど・・・」

問題である計算の解き方が分からないのかプリムラが統夜に聞いていた。

統夜「これは・・・この数式を応用して・・・問題である数に当てはめれば・・・」

プリムラ「ふむふむ・・・あつ分かった！」

統夜「分かってくれて何よりだ」

プリムラ「お兄ちゃんの教え方が上手いからだよ」

統夜「おっ！正解だ」

解き方が分かったプリムラは答えを書き始め、統夜に見せると、頭を撫でられた。

統夜に撫でられたプリムラは少々顔を赤くし、気持ち良さそうな表

情になっていた。

ギルシア「流石同志・・・幼女を落とす技術を持っているとは・・・俺も勉強教えて同志みたいにやってみたいものだ・・・」

レーティア「あれは好きな人に褒められたからよ」

少々落ち込んでいるギルシアに対し、レーティアは冷静に見て断言していた。

レーティア「私達も何か力になれるかもしれないから教えてあげましょうか」

ギルシア「そうだな」

レーティアとギルシアは談笑している咲夜とシャルを誘い、一緒に統夜達の手助けを始めた。

四人の手助けもあつてか明久や美波といった人達は何とか理解出来たようだ。

時間が過ぎ、はやてが作った夕ご飯を食べ、しばらくして解散となった。

テスト当日になり、統夜達は勿論、明久は教科書を広げて最後の仕上げをしていた。

美波「おはよ、アキ」

明久「おはよう。美波」

明久の席に来た美波に挨拶をすると一緒に今日行われる科目についてやり取りを始めた。

明久「何か・・・不安だなあ・・・」

美波「うちだつて不安よ。あれを見なさい」

明久「何つて・・・ああ・・・そうだね」

美波が指差した先になのはと蓮華の二人に見守られながら教科書を見ている遊輔がいた。

それを見た明久は苦笑してしまった。

明久「そうだね」

美波「瑞希や早苗が教えてくれた事・・・お互い無駄にしないようにね」

明久「そうだね」

しばらくして西村が簡単な連絡事項を告げ、大した話も無かつた為に五分もせずに朝のHRが終了した。

本日の科目は全部で六つ。現代国語、リーディング英語、世界史、数学？、化学、保健体育であり、残りの科目は明日の二日目となっている。

「はい、勉強道具をしまつて下さい。一時間目のテストを始めますよ」

明久が夢中になつて勉強をしていると、いつの間にか監督の先生がやって来ていた。

言われた通りに勉強道具をしまつてテストの用紙が回されてくるのを待つ。

「毎度の事ですが、注意事項です。机の上には筆記用具以外は置かない事。また、机に何か書かれている場合はカンニングとみなされる事がありますので、自分が書いた覚えが無くても確認するようにして下さい。それと、途中退室は無得点扱いとなりますので、余

程の事が無い限りは・・・」

お決まりの常套句を聞き流し、前の席から回ってきたテスト用紙を受け取り、裏面にしたまま後ろの席に回す。
いよいよ期末テストが始まった。

それから時間が過ぎいくつかの教科が消化され、休み時間になった。

統夜「どうだった？」

明久「バツチリだよ。無記名でもなく名前も間違えていない」

統夜「それなら大丈夫だ・・・ここが存在し続ける事が大事だな」

雄二「縁起でもない事を言うな!？」

シアが追試になったら親馬鹿神王の怒りで学園が消滅する危機が迫っている事を忘れてはいない。

統夜「稟んどこへ行くぞ」

明久「うん」

上手く出来たのか気になるのか統夜と明久、雄二の三人は稟達がいるクラスへ移動した。

統夜「よう。稟に稟ラバース・・・調子はどうかね？」

稟「俺と楓、ネリネは大丈夫だが・・・シアはギリギリだな」

シア「英語は難しいっす」

統夜「この様子だと何とかかなりそうだな」

それから稟達のクラスを後にした。

家に帰って玲にテストの成果を報告していた。
順調だった事を話すと玲は笑みを浮かべていた。

玲「これなら良い結果が出るかもしれませぬね」

明久「うん。皆のお陰で……」

玲「絆……私は彼……統夜くんのお陰で忘れ……取り返しのつかない事をしそうでした」

自分にとって大切な事を思い出した玲は悲しそうな表情で語った。

明久「でも……姉さんが僕を守ってくれたのは本物という事だけは分かったよ。ありがとう……姉さん……あの時……あの事件で重傷だった僕を助けてくれて」

玲「私の大切な弟を死なせる訳にはいきませんからね。その頃からでしょうか……女性関係や戦いに関するさくなったのは」

自分の過ちを振り返っていた。

玲「彼のお陰で目が覚めました……アキくんは良いお友達……仲間に出会えましたね」

明久「うん」

玲「これからも瑞希さんや美波さん、早苗さん、まだ会っていない小蓮ちゃんとの絆を大切にね」

明久「分かってるよ」

玲「そろそろ夕飯の時間ですね。今日は外で済ませましょう」

話し終え、時計を見て椅子から立ち上がった。

明久「え？僕が夕飯を……」

玲「偶にはいいじゃないですか」

玲に言われ、一緒に外へ出た。

明久「ねえ・・・姉さん」

玲「何ですか？」

明久「今度は・・・僕が姉さんを守る番だよ・・・今まで守って貰えたから」

明久の言葉を聞いた玲は顔を真っ赤にってしまった。

明久「姉さん？」

玲「は、はい・・・頼りにしてますよ。アキくん」

満面な笑顔でそう返した。

これを見た明久も自然に笑っていた。

第六十五話 『実の弟にラヴというのは人としてどうよ?』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

玲「今回は絆とテストものでしたね」

玲「アキさんと雄二くん、康太くんの三人がアルバイト探しをしていた時、統夜くんを紹介されたのは何とカブト虫を捕まえる事でした」

玲「ただ簡単に捕まえられるものではありませんでしたが・・・アキくん達は果たして上手く出来るのでしょうか?」

玲「今回は『上り坂でカブト虫キャッチャーは案外難しい』テイクオフです」

第六十六話 『上り坂でカフト虫キャッチャーは案外難しい』 (前書き)

玲「アキくんが第08小隊の隊長みたいな声だったらテンションが
上がりますのに・・・」

明久「や、無理だからねっ!?!」

雄二「いきなり声優ネタだな!?!おい?!」

康太「……………HERO'S EPISODE第六十六話始
まる……………」

第六十六話 『上り坂でカプト虫キャッチャーは案外難しい』

第六十六話 『上り坂でカプト虫キャッチャーは案外難しい』

とある日、明久と雄二、康太の三人で教室で話し合っていた。内容はどんなアルバイトをしてお金を稼ぐかだった。

雄二「夏限定のものを探すしかないな」

明久「例えば海の家とか？」

雄二「んなところをお前やムツツリー二はともかく・・・俺がそこで働けば命に関わる」

明久「お金儲けは命がけだよ。雄二。霧島さんが怖くてアルバイトなんて出来ないよ？」

翔子に脅えている雄二にそう論していた。

雄二「お前だけはいいいよ・・・俺やムツツリー二は命に関わる」

明久「夏限定・・・ちよつと統夜に聞いてみよう」

自分達三人では限界があつた為、統夜に聞くことにした。

統夜「アルバイト？」

明久「うん。何かいいの無いかな？」

統夜「あるっちゃあるよ。海の家でもなくプール監視員のバイトでもない」

自分達に合うアルバイトがある事に明久達三人は喜びに満ちた笑顔になった。

明久「どんなところ？」

統夜「アルバイトに似てるが・・・魔界にある森にてカブト虫を捕まえてくればいい」

統夜の言葉に明久達は困惑な表情になっていた。

カブト虫を捕まえればいいだけってどんなアルバイトだよって言いたくもあるだろう。

雄二「で・・・そのカブト虫を捕まえたらどれぐらいの金が入るんだ？」

統夜「んなもん捕まえた数によって変わる。ヒントはオスだけを集めて捕まえる」

康太「・・・高価になる可能性が高いからか？」

統夜「ああ。その中に・・・金色のコーカサスのゴールデンコーカサオオカブトや角がルビーで三本角のルビートライデントカブトなどがあるが・・・超レアだから滅多にしかない・・・」

明久「で・・・かごとか用意した方がいいの？」

統夜「いや・・・いらん。英都にある『カブト虫買い取りセンター』でメンバー登録して・・・指定された虫かごを手に入れて魔界へ赴くというシステムだ」

統夜の説明を聞いた三人はやる気になっていた。

超レアであるゴールデンコーカサスカブトを捕まえたいという欲望からであるが・・・

雄二「そのカブト虫買い取りセンターは何処にあるんだ？」

統夜「それはこの近くにあるよ。お前ら厳しいよ？カブト虫を捕まえるのは厳しいぞ」

雄二「それでも俺達はいく」

統夜「じゃあねえな・・・どうなっても知らんぞ」

雄二の根性に免じて統夜はカブト虫買い取りセンターの場所を教え
た。

家に帰り、明久は日曜にカブト虫を捕まえる事を玲に報告をしてい
た。

玲「カブト虫ですか・・・まあ・・・お金にはなりますが・・・ク
ワガタの方がレアですよ」

明久「あれ・・・反対しないんだ」

玲「成績は徐々に伸びているようですし・・・」

明久「姉さんはクワガタ派なの？」

玲「はい。いくつか種類があり、貴重ですからね。コクワガタにオ
クワガタとか・・・外国のクワガタも人気ですよ」

クワガタに関する事を明久に教えていた。

玲の話聞いていた明久は待機状態のアストラルフリーダムを見て
いた。

明久「（確か・・・クワガタの缺を模した武装があったよね）」

玲「ですがカブト虫も甘く見てはいけません。カブトと言ってもク
ロツクアップを使う仮面ライダーではありませんよ」

明久「何で仮面ライダーネタ？」

玲「気にしないでください。カブト虫は一番の頑張り屋というイメ
ージがあり・・・人気ですから」

明久「統夜にも言われたよ・・・しかも魔界の森で捕まえなくちゃ
いけないんだ」

玲「ここは経験ですよ。アキくん。いい勉強にもなります」

明久のプラスに思ったのか励ましていた。

それから日曜になり、統夜から場所を教わった明久と雄二、康太の三人は目的地へ歩いていった。

明久「雄二は何でお金が必要になったの？」

雄二「より頑丈な扉と鍵の為だ。確かお前のデバイスに使われているルナチタニウムは頑丈だったよな？」

明久「（霧島さんだね・・・雄二は素直になればいいのに・・・）うん。だけど原石を発掘しないと手に入らないよ」

雄二「そうか・・・何か失礼な事を言わなかったか？」

明久「気のせいだよ」

翔子の事を思い浮かべた雄二に明久は何となく理解し、知らないふりをして誤魔化した。

明久「ムツツリー二は？」

康太「・・・新しいカメラ購入と・・・身体を鍛える」

明久「珍しいね」

康太「・・・明久だけにやらせる訳にはいかないから・・・俺も力になりたい」

フツと笑んで明久の問いに答えていた。

雄二「ここじゃね？」

『カブト虫買い取りセンター』と書かれた看板がある小屋を指さしていた。

明久「ここだね」

康太「大きいと期待していたが・・・」

雄二「受付と買い取りだけしか無いんだろっな」

カブト虫買い取りセンターに関する感想を述べた後、中へ入った。中に入るとスーパーマリオRPGに出てくる黒い布で覆われたモニターであるブックカーが受付をしていた。

これを見た三人は吹いてしまった。

明久「ちよつとおおおお！！！！明らかにおかしいでしょう!？」

雄二「マリオネタかよ!？」

康太「・・・驚くな・・・」

店員「いらっしやいませ。カブト虫買い取りセンターでございます」

明久「あ、普通だ」

ブックカーもとい店員に普通と思い、登録の説明を受けていた。

店員「以上で説明を終わりますが、大丈夫ですか？」

雄二「ちよつと質問があるんですけど」

店員「何でしょうか？」

雄二「カブト虫のオスが5000円で、メスが2500円って・・・差が激しいですね」

店員「オスの方が社長は気に入ってますからね。どこぞの女尊男卑の世界で女性にしか扱えない兵器を使い、ハイスピードラブコメのように優しくありませんよ」

雄二「なるほど・・・」

オスが人気だからという理由で納得をしていた。

店員「登録しますか？」

明久「はい」

雄二「ああ」

康太「……………ああ」

三人は登録の手続きを終わらせ、虫かごを受け取っていた。

店員「魔界にあるこの森で頑張ってください」

映像を見せて、座標を教えた後、明久が転移魔法の準備をしていた。

店員「検討を祈ります」

明久「はい。行ってきます！」

明久と雄二、康太の三人は魔界にある森へ転移して消えた。

天川家で剣と覇気の鍛錬をしていた統夜はリビングで休憩していた。

はやて「精が出るな」

統夜「そっちはどうよ？」

はやて「文乃ちゃんの事か？術式や魔力、妖力の制御に集中やな」

咲夜やメアリに教わっている文乃が右手にバチバチと力を集中していた。

文乃「案外……難しいわね」

メアリ「これは文乃の力だからね……完全に制御させないとね」

咲夜「最初は誰だつて苦労するのよ」

文乃「はあああああ……！！！！」

汗を流しながら魔力と妖力を放出させ、一瞬だが蒼炎が集中している手からあふれ出ていた。
しばらくすると、倒れ込み休んでいた。

文乃「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

メアリ「僅かだけど・・・制御は出来てるわね。完全じゃないけど」
咲夜「そうね。一瞬蒼炎が出てきたけど・・・」

三人の様子を見ていた統夜は微笑んでいた。

統夜「まだ油断はできないな」

はやて「やな。で・・・明久君達に教えた場所はどんな所なん？」

統夜「魔界にある重力が地球・・・人界の五倍ある森さ・・・何故かあそこだけ重力が五倍あるのかは知らないけど・・・厳しい環境のせいかカブト虫や他の生物はこことは違い強い部類になってる」
はやて「それ・・・教えてへんの？」

統夜「そこまで教える必要は無いだろう。てかいい訓練になるだろう」

明久達にとつていい修行が出来ると思ったのか敢えて言わなかった
統夜にはやては苦笑していた。

最初に教えても良かったが、面白くないという理由で言わなかったのだ。

そして、二人は休憩している文乃の所まで駆け寄った。

統夜「・・・大丈夫か？」

文乃「何とか・・・ね・・・魔力と妖力だけ？意外と難しいわね」
統夜「俺だって最初は大変だったんだ・・・真祖と魔人の力を封印しても・・・溢れ出る魔力と妖力はどうしようもないからな」

はやて「術式無しでも魔力と気力、妖力を制御し、簡単な魔法もい

くつかあるしなあ……」

統夜「ただ制御するだけじゃ駄目だ……身体も鍛えないとな……」

上半身を起こした文乃に対し、そう言った。

文乃「そう……よね」

立ち上がると千世と希の二人が買い物袋を両手に持って帰ってきた。千世と希の二人以外に、腰まである黒い髪に真紅の瞳の顔立ちをし百代Verの川学園制服を着た女性と銀髪に青い瞳をしホライゾンの服を着た女性の二人が後ろにいた。

千世「差し入れ持って来たわよ」

希「にやあ……頑張ってる？」

文乃「頑張ってるわよ」

希からミネラルウォーターを受け取り飲み始めた。見知らぬ二人を見た統夜は千世に聞いてみた。

統夜「千世、あの二人は誰だ？」

千世「買い物を終えた後に行くわして……レオンさんの知り合いみたいだったから寮に案内している途中だったのよ」

統夜「なるほど……レオンさんの……」

レオンの知り合いである二人を見ると、側にあった断蒼刀が反応したのか蒼く点滅していた。

「なんだ？」

「分かりません」

統夜「（断蒼刀が・・・反応している）貴方・・・転生者かなにかですか？」

点滅している断蒼刀に驚きつつ駆使まである黒い髪に真紅の瞳の顔立ちをした女性に尋ねてみた。

百華「ああ。自己紹介をしよう・・・私は川神百華だ」

ホーリアス「私はアンドロイドのホーリアスと申します」

二人が自己紹介をし、統夜達も自己紹介を始めた。

百華「で・・・その刀はお前の持つ蒼炎を媒介に転生者及び神を普通の存在にするだけでなく魂を砕く能力もあると・・・」

レオンの知り合いなら信用できると思ったのか統夜は蒼炎と断蒼刀の事を簡潔に教えていた。

この話を聞いていた百華は何も反応はしなかった。

統夜「驚かないんですね」

百華「お前の場合・・・無闇にその刀を抜いて斬り掛る事はしないのだろうか？なら恐れる事は無い」

統夜の本質を見抜いたのか安心したのか瞳を閉じて答えた。

百華「所で・・・その娘（文乃）から違和感があるのだが・・・」

統夜「真祖と魔人の力を抑える為に封印・・・といっても応急処置ですから・・・」

ホーリアス「いずれ解かれてしまうと？」

統夜「そうなるね・・・」

訓練を再開した文乃を見ながら話していた。

百華「そうなってしまえば一人の美少女を失ってしまう」

統夜「何だよ・・・それ・・・」

百華「気にするな。悪いが案内してくれないか？」

統夜「分かった。はやて。少し出掛けてくる」

はやて「気いつけてな」

百華とホーリアスの二人を寮へ案内する為、はやてに声を掛けて家を出た。

はやて「(闇の力・・・蒼炎に断蒼刀、魔人、真祖を持ったとしても私は・・・私達は受け入れる・・・)」

統夜の背中を見つめながら心の中で呟いていた。

魔界の森へ着いた明久達は理不尽な重力が掛っている森の中へ入った。

明久と康太は辛そうだったが、雄二はそれ以上に辛かった。

雄二「何だ！？この重さは！？あの野郎・・・これを言うのを忘れてたな！？」

明久「ここ一帯は重力が人界より高いのね！？」

康太「・・・参加している人物がゼロに等しいのも傾ける・・・」

五倍の重力に耐えながら明久達はカブト虫探索を始めた。

すぐにオスのカブトを見つけたが、人界でビュンビュン飛び回り、捕まえようとしたが重力のせいか動きが遅く失敗した。

雄二「こいつは重労働過ぎるだろ・・・」

明久「ここの生物は強くなってるね」

康太「・・・重力の環境で変化したと考えられる」

人界の五倍の重力で生息し強くなっているというだけで納得していた。

度々カブト虫を発見したのはいいが、重力に慣れていない明久達は全く触れる事すら出来なかった。

しばらく時間が経ち、収穫も無しで休憩していた。

雄二「俺達には分が悪いな」

明久「そう？僕・・・以前・・・人界の10倍の重力で修行してたから・・・何とか慣れてきそうだよ」

康太「・・・忘れがちだったかな・・・」

頬を指で搔きながら苦笑いしている明久に対し、康太はやらやれといった感じで呆れていた。

明久「行こうか。ムツツリー」

康太「・・・ああ」

明久は両脚を気力で強化させて早い動きでカブト虫を探しに行った。康太は魔力で変換した闇の中に潜り消えた。

雄二「あいつらばっかにいい思いはさせねえ・・・俺も頑張るか」

二人に遅れて行動を開始した。

雄二「にしても・・・ここは予め持って来ておいたものを塗るか」

策として様々な木に蜂蜜を刷毛に付着させ、塗り始めた。
転々と木に蜂蜜を塗っていた雄二だが、後ろからポトっという音が
聞こえ、振り向くと血がサーと引いて顔を青ざめた。
何故なら落ちたものが八チの巣だったのだから。
そして蜂達が雄二に襲いかかった。

雄二「畜生！！こんな重力で人界並に動けるなんて理不尽過ぎる！
！？」

必死に蜂から走って逃げていた。

雄二「ぎゃああああ！！！」

結局逃げられず、蜂に数カ所刺されてしまった。
哀れなり雄二……

明久「よつと……三匹……四匹めつと……」

雄二が蜂に追われ、刺されている間、重力に慣れた明久はカブト虫
を捕まえていた。

明久「オスばかりだから嬉しいね」

籠の中にオスばかりなのか自然と笑んでいた。

明久「あ、あれは……」

目の前に金色のコーカサスのゴールデンコーカサスオオカブトが飛
んでいたのを見て

明久「絶対に捕まえる！」

目の色を変えて、追いかけ始めた。

康太「……………慣れればどうという事もない……………」

闇の引力を利用した設置型トラップでカブト虫を捕まえながら、身体を魔力と気力で強化させて追いかけていた。

康太「……………二人は順調に進んでいるか心配だ……………」

二人の心配をしながらカブト虫採集をし続けていた。

すると、康太の前に角がルビーで三本角のルビートライデントカブトが堂々と飛んでいた。

これを見た康太は目を光らせ

康太「捕まえる！」

ルビートライデントカブトを捕まえる為に追いかけ始めた。

明久「よつと！」

ゴールデンコーカサスオオカブトが逃げる場所は危険地帯なのか障害物を避けながら追いかけていた。

ゴールデンコーカサスオオカブトを追いかけている明久はある疑問が浮かんだ。

明久「（何か……………ここ一帯を熟知している……………まさか……………こ

の森の主かな？虫の中で……」

そんな事を考えるとゴールデンコーカサスオオカブトはスピードを下げた。

これを見た明久は絶好の機会と思ったのが、スピードを上げて捕まえようとした瞬間、ゴールデンコーカサスオオカブトは急にスピードを上げて逃げてしまった。

明久「油断しちゃったよ……僕の馬鹿！」

悔しがりながら逃げた方向へ向かい再び追いかけ始めた。

康太「……………今までのカブトより手強い……………」

自分が追っているルビートライデントカブトは今までのカブト虫と違うと感じていた。

距離は全然縮まらない状態だった。

康太「……………それでも捕まえ甲斐があるというもの……………」

無表情だが、静かに燃え始めた。

康太「……………何事も挑戦……………」

自分の持てるスピードを限界まで上げ、距離が徐々に縮まり始めた。抵抗するかのようルビートライデントカブトはスピードを出し始めた。

康太「……………逃がさない！」

両脚を魔力と気力で強化してスピードを上げて追いかけた。

その頃・・・

全ての空が赤く、荒れ果てた大地に無数にある岩山がある所にとてつもなく巨大な城塞が建っていた。

城内の中には王座に座っているデューク、側にルアフ、ルアフから離れた場所にはレイヴンとミリア、イリアの計五人が集まっていた。そう、ここはデューク達修羅の拠点である修羅界なのだ。

ミリア「デューク様・・・一体どのような事で集めたのですか？」
デューク「それは・・・『あるお方』と修羅神獣を復活させるかどうかの意見をな」

デュークが放った言葉にミリアに戦慄が走った。

ミリア「ま、まさか・・・あの方を・・・『修羅皇帝』を・・・？」
ルアフ「そうだよ。僕達でも厳しくなったからね・・・修羅を絶対的なる存在にする為にデュークは修羅皇帝・・・ネビュロスの復活させる決意をね」
イリア「修羅皇帝ネビュロスって凄い人なの？」

修羅皇帝を知らないイリアはルアフに聞いてみた。

ルアフ「凄いじゃ言い表せないよ。歴代修羅王の中で最強と謳われ・・・全次元世界を支配できる絶対的な霸王・・・拳は一撃で島を割り、蹴りの風圧は天を裂くと言われているんだよ」
イリア「失礼だけど・・・修羅王デュークより強いのか？」
デューク「ああ・・・我自身ですらあのお方には及ばん」

修羅王直々の言葉を聞いたイリアは啞然としていた。
デュークが認めるほどの存在なのだから

ルアフ「修羅皇帝は神や悪魔すら超越した存在でもあるからね」
レイヴン「修羅神獣と言うのは一体でも次元世界を崩壊させる程の力を持つ伝説の獣を意味する。現在確認されているのは・・・『雷獅子皇』と『炎鳳』、『黒竜王』、『天覇皇』の四つだ」

修羅神獣を知らないであろうイリアにレイヴンは冷静に教えていた。
ルアフ「修羅皇帝以外にも『雷帝のメルア』と『デュオン』も復活させる・・・修羅皇帝の側近にして修羅王級の強さを誇り・・・デユオンは修羅皇帝に次ぐ強さを誇る」

デューク「奴ら・・・天川統夜達も徐々に力を上げつつある・・・我らも本格的に動かねばならぬ・・・」

ミリア「そうですね」

イリア「修羅神獣も一緒に眠ってるの？」
ルアフ「そうだね・・・『雷獅子皇』と『炎鳳』、『黒竜王』は修羅皇帝と共に封印され・・・『天覇皇』だけは特殊なんだ。羅刹修羅神・・・人型で行動する種族であり・・・天川統夜が使う天神拳とデュークが使う覇皇拳を使う」

冷静にイリアにそう答えた。

ミリア「イリア、拳を強くするのは構わんが・・・知識と情報も得ておけ」

イリア「はい」

デューク「お前達に問おう・・・我が『修羅皇帝』を復活させる事に異議を唱える者はいないか？」

ルアフ達を順々に見回した。

ルアフ「反対はしないよ」

レイヴン「ああ・・・」

ミリア「従います」

イリア「私も異議無しだよ」

四人もデュークに同意した後、解散しそれぞれ課せられた任務を始めていた。

歴代最強の修羅王の復活は世界にどんな影響を与えるのか誰も分からない。

魔界の森でゴールデンコーカサスオオカブトを追っていた明久はある手段を使い始めた。

そう、両脚に魔力を収束させ始め、魔力が風へ変換され、突発的な速さを得た明久は捕まえる事に成功したかのように思ったがゴールデンコーカサスオオカブトは避け、追いかけていた康太と激突してしまった。

明久「ご、ごめん・・・ムツツリーニ」

康太「・・・不覚・・・」

二匹のレアカブト虫は一斉に何処かへ逃げてしまい行方が分からなくなかった。

二人は休憩した後、カブト虫採集に悪戦苦闘していた雄二を見つけ、合流した。

雄二「で・・・どうだった？俺はオス一匹とメス二匹の計三匹だ」

明久「僕はオス四匹だね」

康太「……俺はメス三匹にオス一匹……四匹」

二人が捕まえた数に雄二は膝を付いてしまった。

康太なら分かるが、明久に負けた事がよっぽど堪えたのだろう。

明久「雄二……その顔……蜂に刺されたの？」

雄二「ああ……治療費になっちまうがな。お前らも災難だな……折角いいのがな……」

明久「うん……僕の行動で水の泡になったけどね」

雄二「突発的な速さで追うのは良いけどよ……お前より知性はあるんだ……そこを理解しないと駄目だろ……過ぎてしまった事は仕方が無い。明久、転移を頼む」

明久の行動に雄二は呆れながら買取センターへ帰るよう促した。

その後、明久達はカブト虫買取センターへ戻り、捕まえたカブト虫を店員に渡し、明久は二万、康太は一万二千五百、雄二は一万のお金を手に入れた。

因みにレアなカブト虫であるゴールデンコーカサスオオカブトとルビートライデントカブトは数十万と換金出来る事を知った三人は悔しがっていた。

雄二「こいつは……いててて!!?」

シャマル「大人しくしなさい」

雄二はシャマルの治療を受けていた。

このまま放っておくと危険という理由で統夜の家に来ていた。

明久「あれ？統夜は？」

シャマル「蒼穹の騎士団寮にいるわよ」

明久「そうですか・・・（チツ・・・統夜を傷めつけようと思ったのに）」

心の中で統夜に復讐しようと思った瞬間、後ろからポンと誰かの手が置かれたので、後ろを振り返ると明久は顔を青ざめてしまった。黒いオーラを纏い笑顔だが、目が笑っていない咲夜だったからだ。

明久「あ、あの・・・咲夜さん？」

咲夜「言い忘れてたわね。私・・・心を読む事が出来るのよ」

咲夜の言葉に明久は固まってしまった。

自分が心の中で思っていた事が咲夜に読まれたからだ。

咲夜「統夜を傷めつけようと思った・・・いい度胸ね」

明久「あ、あはは・・・あの・・・すみませんでしたあー!!!」

咲夜「少し・・・O H A N A S H Iしようか」

明久「字が違ううううう!!!」

咲夜に引き摺られた明久はO H A N A S H Iされ悲鳴を上げたのは言うまでも無かった。

本拠地寮改め蒼穹の騎士団寮にて

レオン「久し振りだな。百華」

百華「本当に久し振りだ。腕も上がっているようだな」

百華はレオンと親友だったのかりビングで語り合っていた。

一緒にいたホーリアスはギルシアと一緒に地下訓練施設にいた。

ホーリアス「……………」

統夜「これは……………」

レーティア「意外と難しいわね」

ハートローズと呼ばれる銃の銃身に魔力と気力を放出し、巨大な弾丸を放っていた。

レーティア「月牙天衝弾って案外難しいわね」

統夜「誰だって難しいと思うのさ……………元々剣技で……………それを俺が射撃用として応用した」

レーティア「そうなんだ……………」

統夜「こういう技もある……………月牙天衝弾・雨嵐!!」

白のリボルバー式のアドヴァンスフューラーのから魔力と気力を放出した巨大な弾丸である月牙天衝弾を放った後、黒のマガジン式から針状の魔力弾を放ち月牙天衝弾を拡散させ雨のようになり降り注ぐように的を粉々にした。

的に直撃させた後、蒼炎が発生し燃え始めた。

レーティア「えっ……………蒼炎を出してないのに……………どうして？」

統夜「変換術さ……………魔力変換資質及び特異魔力変換資質を持つ者にしか出来ないものだ。例えば……………魔力の弾丸を相手に当てた瞬間、自分の意思で焰や雷、氷、光、闇などを変換させ追加ダメージを与える戦法だよ。魔力で創った幻影と組み合わせる事も可能だ」

今を見て驚いたレーティアに対し、統夜は変換術の説明をしていた。

この説明を聞いていたレーティアはふむふむと理解していた。

レーティア「という事は……………斬撃を相手に当てれば魔力変換資質

の焔だつたら魔力の斬撃で出来た傷口に大火傷が出来る訳ね」
統夜「そういう事だ。で・・・出来そうか？」

レーティア「練習すれば出来るわね。変換術って難しいの？」

統夜「素直に言えば難しい」

レーティア「あはは・・・そうだよね」

統夜の一言にレーティアは苦笑いしていた。

ホーリアス「意外と難しいものなのですね。変換術・・・刹那・・・
月牙天衝弾・・・天川統夜・・・侮れない人ですね」

統夜とレーティアの訓練を見てそう呟いていた。

ギルシア「いきなり焔を灯して攻撃とはいかないだろう。流石同志・・・
様々な戦術を持っているとは俺も勉強になったぞ」

こうしてレーティアは月牙天衝弾と歩法である刹那を修得したのであった。

レオン「不思議なものだな・・・」

百華「魔帝剣聖と真祖の吸血姫の間に出来た統夜がか？」

レオン「ああ。いずれ私やお前を超える可能性を秘めている」

百華「その日を楽しみにしている顔だな」

レオン「ああ。私も負けてはいられん・・・」

百華「私も頑張るとするか。ここには美少女達が沢山いるしな」

嬉しそうに言う百華に対しレオンははあ・・・とため息をついて呆れていた。

デバイスルームにビリーがパソコンなどの機材を弄っていた。

ビリー「統夜君のメサイアとセイクリッドファンクをベースに彼女達・・・カナちゃんや咲夜さん、かつ・・・メアリちゃん、はやくちゃんの四人のデバイスをパワーアップ案及び設計案は一通り終わった」

作業で疲れたのか、うっんと背伸びをしていた。

ビリー「特にはやくちゃんは今のシュベルトクロイツじゃ追い付かない・・・」

そう呟いていた。

今のはやては天使の力に目覚め、基本的身体能力も以前より上がっている為、ビリーは改造した方がいいんじゃないかと考え設計を始めた。

画面には『フェアリークロイツ』、『ノワールシルフェル』、『ヴアルキリアファンク』、『サンライトプロヴィデンス』という名前が表示され、設計図も表示されていた。

その頃、とある次元世界では

「行くぞ。ユーリ」

髪が銀髪以外は容姿がISの織村千冬にそっくりで女性が腰まで届く青色の髪に黄色い瞳をした美しい顔立ちにFAIRY TAILのエルザの鎧を着た女性に声を掛けた。

ユーリ「何処へですか？マスター」

「彩華・・・リーシャのガキ共がいる英都だ」
ユーリ「リーシャとは・・・三大冥王の一人ですよ？子供がいた
のですか？」

ユーリと呼ばれた女性は訪ねてみた。

「ああ。二人いる。蒼穹の騎士団が管理局の闇である『セイントクルセイダーズ』の馬鹿者どもを倒して浮かれていなければいいがな」
ユーリ「それはないと信じたいですね」

「兄妹纏めて鍛える・・・真祖と魔人の力を引き出す為に」
ユーリ「分かりました。マスターシルク」

シルクと呼ばれた長身の女性と共に英都を目指したのであった。

第六十六話『上り坂でカフト虫キャラクターは案外難しい』（後書き）

次回のHERO'S EPISODEは

ユーリ「五倍の重力がある森で修行をすれば強くなれるかもしれんな・・・だが五倍の重力では私は満足しない」

ユーリ「私達はマスターと共に英都へやってきて・・・天川兄妹に修行を行う為にある場所へ向かう」

ユーリ「天川兄妹だけでなく他の連中も修行を始めるのであった」

ユーリ「次回『暑い時に修行すれば余計暑くなる』テイクオフだ」

番外編 『リリス、グラマラスに超変身!!』 (前書き)

リリスが願望のグラマラススタイルに変身!!

リリス「私の変身を見て下さい!!」

番外編 『リリス、グラマラスに超変身!!』

番外編 『リリス、グラマラスに超変身!!』

玲さんが明久ラバーズに加入し、文月バーベナ学園の期末テストが終わった頃の話である。

その夜、リリスとアリスの二人は蒼穹の騎士団寮の大浴場の湯船に浸かっていた事だった。

アリス「いつもいつもリリスは幼児体型だなぁ〜私や鮮華くらいのスタイルじゃないとソラ満足しない。お前ではソラに相応しくないんじゃないか？」

リリス「いつもいつも人が気にしている事を言わないでください！」

リリスが気にしている事をアリスが弄り倒していた。

アリスに弄られ、証拠としてリリスは涙目になっていた。

それから入浴時間を終えたリリスは一人悩んでいた。

リリス「私も・・・アリスさんや鮮華さんみたいになりたいです・・・」

毎日アリスにリリスが幼児体型である事を弄られ、胸が大きくグラマラスな人が羨ましくなり始めた。

アリス以外にメアリやレーティア、瑞希といった胸の大きい人達がこの物語を占めている事もあるのか焦り始めている。

リリス「御都合よくスタイルがよくなれる方法ってありませんかねえ・・・」

そんな馬鹿な事はありえないと思って自分の真っ平らな胸を触っていた。

すると、リリスの前に白い煙が噴き出し、リリスは驚き始めた。

リリス「な、何ですか?!」

「諦めるでないぞ!! スタイルに悩む子羊よ!!」

白い煙が晴れると仮面のメイドガイに出てくるコガラシが身に付けている仮面を被り、背中に赤字で『自在』、両肩の側面に白い字で『魂』と書いてある黒いコートを着た人物が現れた。

この人物を見たリリスは誰だか分かっていた。

リリス「零斗・・・さん?」

マイティ仮面「私は零斗ではない!! マイティ仮面だ!! マイティ真拳の遣いだ!!」

リリス「絶対零斗さんですよね?!」

マイティ仮面「違うと言ってるだろうがぁー!!」

リリス「きゃふっ!!」

ツッコムリリスに対しマイティ仮面は手加減したピンタで制裁した。痛くは無かったのでマイティ仮面に質問を始めた。

正体に関してツッコミするのを止めた。時間の無駄だからだ。

リリス「あ・・・マイティ仮面さんは一体私に何の用ですか?」

マイティ仮面に対し警戒していた。

怪しさ100%にはねえ・・・

マイティ仮面「クハハハハ!!! スタイルに悩む貴様をグラマラス

スタイルに変革させる為に来たのだ!!」

腕を組んで高笑いしながら答えた。

リリス「ほ、本当ですか?!」

マイティ仮面「そうだ!!この俺が叶えてしんぜよう!!少し大人しくしろ!!」

リリス「は、はい!!」

マイティ仮面「いくぞ!!マイティ真拳奥義!!グラマラスチエンジ!!」

ものは試しとして承諾したリリスにマイティ仮面は白い光を浴びせた。

リリス「ま、眩しいです!!」

眩しかったのか目を瞑ってしまった。

すると白い光は収まると変化が無いリリスの体型だった。

リリス「だ、騙しましたね!!」

マイティ仮面「まだ効果は表れただけだ!!」

リリス「そこはじ・・・あん・・・んくう・・・んはあ・・・あ、熱い・・・ですう・・・」

マイティ仮面に抗議しようと思った瞬間、効果が表れたのかリリスの身体が170cmの長身に成長し、胸もアリスやレーティア並の大きさまで成長した姿に変化した。

リリス「お、大人になったですう!!あ、ありがとうございます!!
!マイティ仮面さん!!」

マイティ仮面にお礼を言おうとした瞬間、誰もいなく服が入ったトランクケースと手紙、ソラの部屋の合鍵が置かれていた。
手紙の内容は

『お前が成長した褒美として置いておく。これで愛する人と一緒に過ごすがいい!!』

「リス「ありがとうございます。マイティ仮面さん・・・本当に・・・」

トランクケースを自分の部屋へ持ち帰り、真夜中にて自分の身体が成長した嬉しさなのかソラの部屋の合鍵で鍵を開け、ソラのベッドの中に忍び込んで一緒に寝たとさ。

翌朝になりソラは目を開け起き始めると自分の右腕にマシユマロのように柔らかい感触を感じ、右を見ると表情には出さなかったが少し驚いていた。

「リス「すう・・・すう・・・すう・・・」

成長したリスがスヤスヤと眠っていた。

これを見たソラは面影からして誰か理解した。

ソラ「リス・・・か？」

リス「おはようございます・・・ソラ様」

ソラ「おはよう。リス」

目覚めたリスに挨拶をしていた。

ソラ「悪いが・・・説明をしてくれないか？」
リリス「実はですね・・・」

リリスがマイティ仮面と呼ばれる人物によってグラマラスな身体に成長した事をソラに説明した。

そんな中、ソラはリリスの話を聞いて、マイティ仮面の正体は零斗と理解し、内心零斗の行動に呆れていた。

リリス「一緒にデートでもしませんか？ソラ様」

ソラ「別に構わんぞ」

あっさりと承諾したソラと一緒にデートが始まった。

ソラ「随分気合いが入ってるな」

リリス「そうですか？」

『マトリックス』の『ネロ』のような黒い長ズボンに黒い半袖のシャツの上に黒いコートを着ているソラに対し、リリスは上に黄色の胸の大きさが分かるノースリーブ状のへそ出しハイネックシャツに下は、蒼いミニスカートを穿き、両脚に黒のガーターベルト、真紅のブーツという服装であった。

リリス「好きな人の為なら頑張れるんですよ」

ソラ「そうか。行くか」

リリス「はい」

嬉しそうにソラの右腕を自分の成長した豊満な胸に当てて歩き始めた。

しばらく時間が経ち、アリスが目覚め、ソラの所へ行こうとした

がいなく、もしやと思いリリスの部屋へ行くと誰もいなかった。
ソラとリリスの二人がいないイコールデートと瞬時に理解したアリスは行動を開始した。

その頃、ソラとリリスの二人はデパートで生活用品を買いついでにショッピングしていた。

ソラ「随分と多いな」

リリス「そういうものですよ」

笑顔で満喫していた。

リリス「次は・・・下着ですね」

顔を真っ赤にしてソラと一緒に下着コーナーへ移動した。

天川家のリビングにてアリスが鮮華と話していた。

アリス「許せると思うか？」

鮮華「まあ・・・いいじゃないんですか？貴方の日頃の行いが悪いからこうなるのです」

バツサリとアリスにそう言った。

アリス「リリスの幼児体型ではソラが摩くとは思えんしな」

鮮華「それじゃあ・・・ソラさんが身体目当てだと思われるじゃないですか」

ソラはそんな人じゃないと思っている鮮華は反論した。

アリス「どうするか楽しみだな」

鮮華「まあ・・・これからどうするんですか？」

アリス「探す。お前も手伝え」

鮮華「私ですか？まあ・・・ソラさんが変な行動をしない為に・・・やりましょう」

鮮華も一緒に参加し、ソラとアリスのデート尾行を始めるのであった。

下着類の買い物も終わり、デパートから出ると商店街でウィンドウショッピングをしていた。

ソラとアリスを見た周囲の人からいいカップルと評判されていた。これを聞いたアリスは嬉しそうだった。

何せ幼児体型だった自分が成長し、一人の女性として見られているのだから

アリス「嬉しいです・・・ソラ様はどう思いますか？」

ソラ「お前が望んだ事だろ？ならいい・・・お前が満足しているのならな」

素っ気ない態度で答えていた。

アリス「あれか・・・」

鮮華「ですね・・・ってあれはアリスちゃん？」

アリス「ああ・・・あれは・・・成長したアリスだと？」

鮮華「みたいですね」

ソラとリリスを見つけた鮮華とアリスは本格的な尾行を始めた。

アリス「時に思うのだが何故お前は落ち着いているんだ？」

鮮華「いいじゃないですか。リリスちゃんも喜んでますし」

アリス「よくそれで蒼穹の死神の妹でいられるな」

落ち着いている鮮華にアリスは半ば呆れていた。

鮮華「（ソラさんの一番になりたいのはアリスさんだけじゃ無い事を忘れてはいけませんよ。私も・・・何とかしなきゃ・・・）」

心の中でそう誓っていた。

ウィンドウショッピングを終えたソラとリリスのカップルは小腹が空いたため、喫茶店の中へ入った。

ソラ「悪いな。リリスが奢ってくれるなんてな」

リリス「マイティ仮面さんのお陰ですよ」

リリスが奢るようであり、トランクケースの中にお金が入っていたのでデート費用に使うと決めていたのだ。

甘い物が好きなソラにとっては喜ばしい事だった。

ソラはリリスが注文したメニューを待つと、店員がそれを二人のテーブルに置く。

店員「お待たせしました。『カップル・ラブ・ストロベリーラブワールド・パフェ』でございます」

来たメニューは、約二人分の大きいビッグパフェであった。

一番上にさくらんぼが二つあり、ストロベリーソフトクリームがあり、円を描くようにイチゴが綺麗が綺麗に並んで、カップ内には大量のストロベリー味のアイスクリームとストロベリーソースがついているなど、正に甘い恋人同士が食べるパフェをイメージしたパフェである。

店員「どんなカップルも永遠の愛を築けるといいうパフェです」

ソラ「おい。それは・・・」

店員「では、ごゆっくり」

ソラがどういう事なのかを聞こうとしたが店員はそそくさと去って行く。

リリス「実は雑誌でこのカップル専用パフェを食べると永遠の愛が築けるとありましたから・・・それに・・・カップル割引があり四割安くなるんです」

顔を真っ赤にし嬉しそうに言うリリスに対し、ソラはため息をついていた。

尾行していた鮮華とアリスは握っているグラスコップを握り潰し黒いオーラを出していた。

鮮華「いい気分じゃありませんね・・・」

アリス「そうだな。いくら成長したからと言って調子に乗るなよ？」

二人の怒りはとてつもなく他のお客さんは脅えていた。

怒り狂っている二人の存在を知らないソラとリリスは二人仲良く『カップル・ラブ・ストロベリーラブワールド・パフェ』を食べていた。

食べ終える寸前、ソラの頬にストロベリーソフトクリームが付いていたので、リリスが自分の舌で舐めとった。

リリス「クリームが付いてましたよ」
ソラ「そうか」

この行動にもソラは冷静だった。

アリス「ほほう・・・いい度胸をしているな・・・リリス・・・どんなお仕置きをしようか・・・楽しみだ」

鮮華「少しO H A N A S H Iした方がいいですかね・・・」

リリスの行動に嫉妬で形成された黒いオーラを出して睨んでいた。そんな二人を知らないソラとリリスは、喫茶店から出て行った。それから、街道を腕を組んで歩いたり、一緒にクレープを食べたりしていた。

それはもうカップルのようでした。
しばらく時間が経ち、物見の丘公園のベンチで一緒に座っていた。

リリス「この身体になってソラ様と一緒にいられて嬉しいです」
ソラ「喜んでるな」

リリス「はい。それはもう・・・ん・・・」

不意打ちとしてリリスはソラの唇にキスし、自分の豊かな胸をソラの胸板に当てながら抱きしめていた。

偶然にアリスと鮮華は見てしまい、リリスは顔を青ざめてしまった。

アリス「ふむ・・・リリスに負けてしまったな。『今日』は大目に見ておくか」

鮮華「悔しいですが・・・」

何かされるかと思いきや鮮華とアリスの二人は帰ってしまった。

ソラ「何をしに来たんだ？」

リリス「さあ？上の丘に登りませんか？」

ソラ「いいぞ」

物見の丘公園にある高い丘へ登り始めた。

丘へ辿り着くと、綺麗な景色が映っていた。

ソラ「いい所だな」

リリス「はい」

リリスはソラの方へ寄り添って景色を眺めた。

リリス「不思議な所ですね。英都は」

ソラ「そうだな。蒼穹の死神や紅蓮の猛虎、瑠璃の軍神などがおり、神族や魔族、月人が住み、それぞれの文化が交差しているな」

顔には出していないが、英都をそう評価していた。

リリス「私・・・ソラ様に出会えて嬉しいです。ソラ様がいなかったら・・・幸せになっていません」

ソラ「そうだな。あいつら・・・元気にしているか心配だ」

リリス「セイバーさんにアリアさん、ヤミちゃんの三人ですね」

ソラ「ああ。お前とアリスが俺を引っ張った事に怒っているだろうな」

リリス「そうですね」

苦笑してソラにそう答えていた。
しばらくすると丘から出て蒼穹の騎士団寮へ二人は帰った。
腕を組みながら

翌朝、成長したままのリリスが寮の外で準備体操をしていた。

リリス「やっぱり・・・この身体は最高です」

アリス「ソラから聞いた話によると何らかの術で大きくなったようだな」

リリス「は、はい・・・」

アリス「なに・・・これで私と対等になったと思ったら大間違いだぞ。そうだ・・・お前にお客さんが来ているぞ・・・団体でな」

途中から黒い笑みになったアリスにリリスは顔を青ざめ、足音が聞こえてきた。

アリスの隣にドス黒いオーラを出している桂花とメイメイ、ヴィータ、美波の四人がいた。

桂花はチェーンソー二刀流、メイメイは刀、ヴィータはグラブファイゼン、美波はマスケット銃とワイヤー付きの槍をそれぞれ装備していた。

桂花「皆の者ーっ！裏切り者を制裁せよー！」

メイメイ「おおーっ！！」

ヴィータ「なんでお前だけ大きくなってんだよおーっ！！

！くたばれエエエエ！！」

美波「仲間と違ってたのに・・・酷い・・・許さない」

一斉に襲い掛かり、リリスは寮の外へ逃げ始めた。

大きな胸をポヨンポヨンと揺らしながら

リリス「何ですかあああ！！！！何でこうなるんですかあああああ
！！！！！！」

四人の攻撃を避けながら英都を逃げ回ったとき。

アリス「この私を出し抜いてデートをしキスをした罰だ・・・ふふ
ふ」

貧乳の人を呼んだ張本人であるアリスは黒い笑みを浮かべて微笑んでいた。

番外編『リリース、グラムラスに超変身!!』（後書き）

セイバー「待ちなさい!」

ヤミ「逃がしません!」

アリア「・・・成敗・・・」

本編に出ていない三人は作者ケンを追いかけていた。
理由はリリースを成長させ、ラブストーリーを作ったからである。

ケン「フハハハハ!!!!無駄無駄ア!!」

攻撃を支配者さんから貰ったミサイルブレードを瞬速居合で斬り、
爆発を起こした。

セイバー「くっ・・・」

ケン「最後の一枚まで破壊・・・やああああってやるぜえ!!」

支配者さんから貰った珍獣イロガーマを呼び、セイバー達三人の服
を溶かし、何も纏っていない状態にした。

セイバー「な、何をするんですか!?!」

ヤミ「えっちいのは・・・嫌いです!」

セイバーとヤミは顔を真っ赤にしてケンに抗議をした。

ケン「俺はね・・・君達を傷つけずにどうすればいいかを考えた結果が・・・PKDという結果になった・・・それだけだ！！さらばだ！！」

ケンは背中の中部分から漆黒の片翼を広げ空を飛んで去って行った。

セイバー「これで打倒ケンという野望が出来ました・・・野望を遂げた暁には・・・私とソラのラブストーリー・・・いいえウェディングストーリーを・・・お詫びとして書かせましょう！！」

ヤミ「そうですね・・・それは私もです。一度ぐらいアリスが悔しがる所を見てみたいです」

アリア「・・・そうだね・・・」

三人はケンを打倒する事を誓ったそうなの・・・

HERO'S EPISODEのノクターン版を作りましたので是非見に来てください。

統夜「ノクターン版の宣伝もするんかい!？」

主人公である統夜のツッコミで終わってしまった。

第六十七話『暑い時に修行すれば余計暑くなる』（前書き）

今回は支配者さんが投稿してくれたキャラクター二人が参加します。

統夜「えっ？誰よ？」

それは本編にて！！

鮮華「HERO'S EPISODE第六十七話始まります」

第六十七話 『暑い時に修行すれば余計暑くなる』

第六十七話 『暑い時に修行すれば余計暑くなる』

天川家の庭にて身体中に常人が着けない重さの重しを身に付け、逆立ちしながら腕立て伏せの要領で曲げた後、元に戻すの繰り返しをしていた。

普通なら無理だが、統夜のような人外だからこそ出来る過酷なトレーニングなのだ。

今から三十分は経過しており、汗が大量に流れていた。

統夜「9997・・・9998・・・9999・・・10000・・・
ふう・・・」

倒立腕立てを終えた統夜は置いてあったタオルで汗を拭っていた。

統夜「まだ・・・真祖と煌天使、魔人は扱えない」

強大な力である真祖と魔人、煌天使の事を思い浮かばせていた。

そんな考えを抱え、汗を流す為シャワーを浴びた。

統夜「あのような事が起こらないように・・・しないとな」

蒼いイレギュラー事件や浩次と千秋を殺した事を思い出していた。

それからシャワーを浴び終え、リビングで鮮華と一緒に寛いでいた。いつもならはやて達はいるのだが、今回は蒼穹の騎士団寮にて行われている文乃の力の制御の訓練でいない。

現在家の中にいるのは統夜と鮮華の二人だけだった。

統夜「昔に戻ったって気分だな」

鮮華「そうですね。今は・・・はやてさんやリムちゃん、カナさん、咲夜さん、華琳ちゃん、ヴォルケンリッターの皆さんがいますからね」

統夜「賑やかになったな」

昔を懐かしんでいるとピンポンとチャイムが鳴り始めた。

チャイムの音を聞いた鮮華はとたとと玄関へ出てドアを開けると髪が銀髪以外は容姿がISの織村千冬にそっくりで神主が着ているような服を着た女性と腰まで届く青色の髪に黄色い瞳をした美しい顔立ちにFAIRY TAILのエルザの鎧を着た女性の二人がいた。

鮮華「あ、あの・・・どちら様でしょうか？」

「シルク・V・獅子堂^{ヴァーミリオン}だ。魔帝剣聖と真祖の吸血姫の間に来た小娘」

「ユーリ・アシュタロスだ」

鮮華「!?!ど、どうぞ・・・」

シルクとユーリを家の中へ入れた。

シルク「お前がリーシャの息子で『蒼穹の死神』と呼ばれているガキか」

統夜「ええ・・・そう呼ばれています」

シルク「その刀・・・断蒼刀があるという事はリーシャに会ったな？」

統夜「はい。親父が魔帝剣聖である事も聞きましたし」

シルク「天川覇琉か・・・」

統夜の父親の名前を懐かしむように呟いた。

統夜「シルクさんがいるユーリさんは転生者ですか？」

シルク「ああ。そして私の自慢できる弟子だ」

統夜「常識の無い転生者にお灸を据えてあげればいいじゃないですか」

シルク「私は力に溺れ調子に乗っているガキ共の相手はしたくない」

統夜の言葉を一蹴したシルクであった。

統夜「昔話をしに来た訳じゃ無いでしょう？本題に入りませんか」

シルク「ああ。お前達兄妹にある真祖と魔人の力を完全に扱えるように鍛えてやろうと思ってここへ来た」

そう統夜と鮮華にここへ来た目的を教えた。

すると、ユーリがシルクに異議を唱えた。

ユーリ「マスター・・・彼と戦ってもよろしいでしょうか？疑っている訳じゃないですが・・・」

シルク「いいだろう。ユーリとの戦いで見て見るのも悪くは無いな。何処でなら戦える？」

統夜「騎士団寮の地下訓練施設なら大丈夫ですよ」

戦いが決まったのか四人は蒼穹の騎士団寮の地下訓練施設へ移動した。

地下訓練施設に着いた統夜は合体剣を取り出し構え、ユーリは長剣を構えた。

統夜「同じ剣使いか・・・」

やや刀身が短い片刃の長剣だけを分離させ、片刃の大剣の二刀流に

構えを変えた。

ユーリ「兵装術式のある武器か・・・」

統夜「知ってるのか？」

ユーリ「名前ぐらいしか知らないがな」

二人は語り終えた後、同時に瞬速で駆け抜け、二刀と一刀のぶつかり合いから始まった。

統夜「・・・」

ユーリ「先ず先ずか・・・」

観客席から見ていたシルクと鮮華の他に試合が気になったはやて達統夜ラバースと遊輔達も来ていた。

シルク「見せて貰おうか・・・小僧・・・お前の力を」

ユーリと戦う統夜を見定めるように見ていた。

ぶつかり合いの後、二刀と一刀の剣劇にシフトされた。

二人の剣劇は激しく、手の動きが見えず金属がぶつかる音と共に衝撃波が走っていた。

ユーリ「はあああああ！！！！」

そんな中ユーリは次の一閃で決める為に光と炎の魔力を刀身に込め

ユーリ「星凰斬！！」

剣閃を放ち大きな煙が発生し統夜の周りが見えなくなった。
そして、すぐに煙が晴れると二刀をクロス状に構え、ユーリの剣閃を受け止めていた。

ユーリ「強力な斬撃を・・・やるな」

統夜「流石は転生者・・・そこら辺とは大違いだ」

ユーリ「私をそこら辺の常識の無い転生者と一緒にされては困る」
統夜「そうか・・・」

ユーリの剣を右手に持った片刃の大剣部分の合体剣で弾いた後、二刀の刀身に妖力と覇気を収束し、統夜は自身を回転させ超高速回転斬りを行った。

ユーリ「くっ・・・（何て硬さとパワーだ・・・）」

統夜「でりゃああ!!」

超高速回転斬りを一旦止め、繋げるように二刀連続斬りに移った。

ユーリ「（繋ぎが上手い・・・それ故に隙が見当たらない）」

次の攻撃にシフトし隙を窺おうとしたが、見当たらなかった為、ただ防ぐ事しか出来なかった。

統夜「妖覇双衝!!」

右手に持った片刃の大剣の刀身に妖力を放出した巨大な斬撃、左手に持った片刃の長剣の刀身に武装色の覇気を放出した巨大な斬撃を同時に放った。

ユーリ「チツ！サークルソードガード回転剣盾！！」

数十本の剣を呼び出し、円の状態に剣を並べ超高速回転させて妖覇双衝を防いだ。

統夜「転生者つて案外怖い所もあるんだな」

ユーリ「能力には頼らずに努力をしている事も忘れるな」

統夜「アンタみたいなものだったら転生者は変われるのにな」

ユーリ「だが心の弱い者は墮落し、力に呑み込まれ、はぐれ転生者が生まれる・・・」

突き、上から振り上げる斬撃、下から振り上げる斬撃の三つを順に繰り返しながら打ち合いが再び始まった。

これらを腕を組んで見ていたシルクは感心していた。

シルク「覇琉よ・・・血は争えないな。魔帝剣聖の腕はあの小僧に受け継がれている・・・」

好敵手であり仲間である統夜の父親、覇琉を思い浮かべていた。

はやて「あの・・・どちら様でしょうか？」

シルク「私はシルク・Vウァーミリオン・獅子堂だ。覚えておけ蒼穹の騎士団のガキと小娘共」

そう自己紹介すると、レオンとユウカ、百華は驚愕な表情になっていた。

レオン「ま、まさか・・・次元最強の剣聖・・・か？」

ユウカ「ここでお会いするとは・・・驚きましたわ・・・」
百華「凄い大物が来たな」

三人はシルクを知っているのかそう述べていた。

シルク「私を知っているか・・・まあいい。ところで蒼穹の騎士団の教官に当たるのは誰だ？」

レオン「私とユウカだが？」

シルク「悪いがユーリと戦っている小僧と天川の小娘を私が鍛えさせるぞ小娘^{レオン}。真祖の力を完全に制御出来る為にな」

レオン「それは・・・構わないが・・・まさか・・・お前は・・・」

レオンは何か分かったのかシルクに何かを言おうとした瞬間、シルクの拳骨がとんできた。

少々不機嫌なシルクが鋭い視線をレオンに送っていた。

シルク「今思ったが年上には敬語と言われ無かったか？小娘」

レオン「申し・・・訳ありませんっ・・・！」

痛かったのか拳骨を受けた箇所を右手で抑えていた。

シルク「小娘^{レオン}の言う通り・・・私は真祖の吸血鬼の力を持っている。経験のある私が指導するのは当たり前だろう？」

シルクが真祖の吸血鬼という事に驚いたが、真祖の力を持つシルクなら妥当じゃないかと思っていた。

はやて「あの・・・シルクさん・・・」

シルク「何だ？」

はやて「文乃ちゃんも真祖と魔人の力を受け継いでるんですけど・・・」

・指導はしないのですか？」
シルク「しないな」

きつぱりと断っていた。

はやて「何ですか!？」

シルク「肝心な魔力と気力、妖力を制御が第一だからだ。力の制御から真祖等の解放形態はまだまだ先だ」

断った理由を反論していたはやてもシルクの言葉を理解し納得した。

はやて「そうですね・・・」

カナ「そうですね」

咲夜「基礎を固めてからじゃないと・・・ね・・・」

雪蓮「あの人の言う通りね」

メアリ「悔しいけどね・・・」

戦闘が出来る統夜ラバーズもシルクの意見に納得していた。

シルク「小娘（文乃）・・・お前は教官のレオンとユウカ小娘共から教えてもらえ

・・・そして・・・仲間を頼れ・・・そうすればお前の眠る真祖と魔人も目覚め制御できるだろう」

文乃「あ、ありがとうございます」

シルクの言葉に文乃は感謝して頭を下げていた。

リリス「貴方は何故天川兄妹の事を知っているのですか？」

一番疑問に思った事をリリスはシルクに問い掛けた。

番外編である『リリス超変身!』にてグラマーな体つきになって

いる。

シルク「三大冥王とは盟友だからだ。あいつ・・・リーシャから色々聞いているからな」

一同「ええええええー！！！！！！」

これを聞いた一同（例外は除く）は大声を出して驚いていた。

シルク「喧しいぞ馬鹿者共が。それ故にあいつらが真祖と魔人の力を持っている事も知っている」

騒いでいる連中を一喝して黙らせ、天川兄妹が真祖と魔人の力を持っている事を知っている事を話した後、統夜とユーリの試合に集中していた。

剣劇を繰り広げている統夜はユーリの斬撃を左手に持つ片刃の長剣で弾き、バックステップをとり二刀を居合の構えにし

統夜「羅生門！！」

瞬速の歩法である刹那で駆け抜け、二刀の抜刀術でユーリを両断しようとしたが、受け止められた。

受け止めたのはいいが、先程の技でユーリの剣はボロボロになってしまった。

ユーリ「様々な技を持つな・・・純粋な剣術と身体能力もだが・・・

統夜「五気を持つけど・・・万が一という事もあるから」

ユーリ「お前の言葉は間違っていない」

統夜は二刀を上から勢いよく降り下ろし、ユーリとの距離をとり、やや刀身が短い片刃の長剣を右手に持っていた片刃の大剣と合体させ刀身に超高密度の魔力と気力を放出させ

統夜「月牙天衝！！」

超高密度の魔力と気力で形成された巨大な斬撃をユーリに向けて放った。

ユーリは魔力があると分かった瞬間、月牙天衝を食べ始めた。

これを見た統夜は驚いていた。普通なら食べるという事はしないと思ったからだ。

統夜「魔力を食う体質が能力つて訳か・・・」

ユーリ「そうだ・・・魔導師にとっては天敵のようなものだ」

統夜「だろうな・・・」

ユーリ「七つの光に裁かれん・・・七星剣！！」
グラン・シャリオ

上から七つの巨大な光の玉が降り注ぎ始めた。

統夜「いきなり大きな魔法かよ！？」

威力がSSSを超えるであろう七星剣を統夜は刹那を連続で使い避け、無数の大小自在の魔力球型爆弾を幾つかユーリの周囲に設置した。

ユーリ「魔力のものは無駄だと分らないか？」

統夜「デスペア・バレッテーズ！！」

大小自在の魔力球型爆弾が一斉に爆発し、蒼炎で形成された爆焰が

発生し、ユーリの姿が見えなくなっていた。

統夜「生憎……俺も……七星剣が使える……天から七つの光に裁かれよ……グラン・シャリオ七星剣!!!」

上から七つの巨大な光の玉がユーリがやったように降り注ぎ始めた。この攻撃で煙が発生し二人が見えなくなってしまった。

シルク「魔法、妖力、覇気もそれなりに使えるか……」

観戦室で二人の戦いを見ていたシルクは統夜をそう評価し始めていた。

はやて「てか……二人の技はオーバースばっかやなあ……」
なのは「凄い戦いだね……」
遊輔「だな……」

二人の対決を真剣な眼差しで見続けていた。

すると、大きな煙で視界が悪く二人が見えない中、ドオンっ!という大きな音が聞こえた。

煙が晴れると、両肩に真紅のマントを羽織り、髪が銀髪、瞳の瞳孔が縦になり、色が真紅になった真祖形態になった統夜と全長8mある龍人に変化したユーリの二人が真っ向からぶつかっていた。

ユーリ「それが……お前の真祖形態か……」
統夜「ああ……」

剣を持っていない左手に妖力を収束させ、ユーリを持ち上げ始めた。

ユーリ「なにつ!?!」

統夜「真祖・・・吸血鬼はパワータイプ・・・力の大妖である吸血鬼の力はそれなりには・・・あるっ!」

持ち上げた状態で上へ高く飛び上がり、そのままユーリを叩きつけるように投げ始めた。

このまま落ちる訳にはいかないとユーリは翼を羽ばたかせ、落ちるのは免れたが、自分を投げ飛ばした統夜がいなかった。

ユーリ「一体何処へ・・・」

統夜の気配を探ろうとした瞬間、斬撃がユーリに直撃し、超速の斬撃が所々からも発生し、避けようとしたが斬撃を度々受けてしまった。

しばらくすると、訓練施設全体で起きた超速の斬撃の嵐は止み、統夜が現れた。

ユーリ「超速で動きながら・・・超速の斬撃を一定範囲で無数に繰り出す技・・・か」

統夜「ああ・・・本来は抜刀術なんだけどね。大剣でも出来ないって事は無いよ」

ユーリ「そうか・・・」

統夜「卑怯に近い技を出して悪かったな・・・」

ユーリ「今の技が卑怯?違うな・・・立派な技だ・・・瞬速の歩法と剣術の組み合わせの技は特にな・・・卑怯というのは何らかの不正をする事だ」

説教に近い事を統夜に言った。

ユーリ「提案があるがいいか?」

統夜「何だよ」

ユーリ「お互い・・・一撃で勝負を決めるといっのはどつだ？」

ユーリの誘いに統夜は無言で首を下に頷いた。

ユーリ「・・・・・・・・」

両腕を大剣に変えて、魔力と気力を収束し始めた。

統夜「・・・・・・・・」

刀身に五気を収束させ、大剣を前方へ構え始めた。
お互い収束が完了したのか一斉に駆け抜けた。

統夜「霸牙天閃！！」

刀身に超高密度の五気を放出させた合体剣の一閃を放ち

ユーリ「デュアルクロスエッジ！！」

両腕を大剣に変えた技である双竜王剣から十字の巨大剣閃を放ち、
英都に地震が起こる程の大爆発が起き、二人の勝負の行方が分から
なくなった。

シルク「ふむ・・・真祖の使い方はまだまだだな・・・漆黑より美
しい妖力は出てはいるが・・・」

統夜の真祖化を見て、ますますという感じで評価していた。

シルク「勝敗は別として……私も興味が湧いてきた……扱いてやるとするか」

戦うのか準備運動を始めていた。

爆発が収まった後、統夜とユーリの二人はボロボロの状態で立っていた。

二人の技の威力は桁違いでSSSランク以上いくかという威力である為、地震が起こる程の大爆発が起きても立っていた事に二人の試合を見ていたはやて達は言葉に出ない程驚いていた。

ユーリ「引き分けだな」

統夜「ああ……お互い手の内を見せていないがな……」

ユーリ「それもそうだな……いずれ……本気で戦いたいものだ」

龍人化を解き、元の姿に戻った。

シルク「ユーリ。お前は下がっている。今度は私だ小僧……戦いに増援はつきものだ。真祖の力……見せてみる」

ユーリ「分かりました。マスター」

訓練施設へ来たシルクはユーリに下がるよう指示し、柄は蒼で鏢の部分が無く水色の宝玉が埋まっている鞘付の日本刀である月龍を左手で持った状態で構えた。

統夜「（隙がねえ……この人は今までの奴らより遙かに違う）」

シルク「どうした？来い」

統夜「はあ！」

上段からシルクに目掛けて大剣を振るったが、何もしていないのに軽々と弾かれてしまった。

シルク「遅いな……」

統夜「（今は……何を……したんだ？）月牙天衝・五月雨！
！」

一旦距離を置き、刀身から放出した超高密度の魔力と気力の斬撃である月牙天衝を放った後、途中から分散していくつか小さい斬撃に変化しシルクに向かって放たれた。

だが……

シルク「……」

ただ左手に刀を持った状態で小さい斬撃が消えてしまった。

統夜「（特殊なスキルか？いや……違う）はぁ……」

合体剣の刀身から片刃の長剣だけを分離し二刀流にし、瞳を閉じ集中した。

そして目を見開き、二刀を構え、シルクの方へ向かった。

統夜「（何も考えるな……感じる……）」

左手に持った片刃の長剣を振った後、僅かな間を開けて片刃の大剣を振るった瞬間、自分の腹部が刺される寸前で四尺あり、蒼く輝いた刀身の日本刀を二刀で受け止めていた。

統夜「目にも見えない抜刀術です……か……」

シルク「誰も気づかず終わるが……ユーリ以外に見切る者がい

るとは・・・見込みがあるな・・・だが・・・」

二刀を上へ弾かせ、統夜の手元から離れてしまった。

シルク「まだまだひよっ子だ・・・氷魔神風流・・・千音」

統夜「うぐおわっ！」

光速の速さで剣を抜刀し、統夜を連続で斬り刻み

シルク「氷魔神風流・・・斬風衝！」

統夜の足元から風と斬撃が混ざった衝撃波で斬り刻み上へ吹き飛ばした後、

シルク「氷魔神風流・・・絶風牙！」

煌天使を使用した統夜の速度で移動する歩法である真・縮地で移動し、上に打ち上げられた統夜を超速を超えた速さで風と妖力が混ざった斬撃の嵐が訓練施設の所々から発生し、統夜を切り刻んだ後、追うように再び切り刻まれた。

統夜は真祖が解除され、全身血だらけになって地面に落ちた瞬間、シルクは瞳を閉じ月龍を鞘の中へ納めていた。

シルク「貴様の行った剣術はまだまだ改良する余地がある・・・真祖の力もな」

倒れている統夜を担ぎ上へ上った。

今の試合を見た一同は驚いていた。

目では見えない速さでの剣捌きで、常人では見えない速さで統夜を
圧倒したからだ。

レオン「……………」

シルクの剣技、速さにレオンはただ一人冷や汗を流し驚いていた。
今の自分では勝てるかどうか分からないからだ。

ギルシア「上には上がいるってのは分かるが……高過ぎだろ……」

レーティア「そうね……勝てる自信は無いわ……」

ユーリ「マスターに太刀打ち出来るのは三大冥王しか存在しない」

シルクに太刀打ち出来るのは彩華や覇琉のような三大冥王と言い残
し上へ上がった。

はやて「統夜の両親……か……」

遊輔「あの人の本気は……想像するだけでゾツとしてみまうな」

それぞれシルクの強さを心に刻んだ後、上へ上がった。

シルク「目覚めたか……これでも飲んでおけ」

輸血パックを渡されると統夜はストローを挿し飲んでいた。

シルク「解放形態とお前の剣術はまだまだ原石……剣を交えて……
分かった事が一つだけある……人一倍努力し……強い心を持
っている事だ」

目を閉じて統夜に語った。

統夜「……………」

シルク「評価はこれぐらいにして……行くぞ。その小娘（鮮華）……貴様は家に戻ってこの小僧の分の荷物を纏めておけ」

鮮華「は、はいっ！」

シルクの命令に逆らえず、鮮華は天川家へ戻り統夜と自分の分の荷物を纏め始めた。

レオン「シルク殿……二人の事……よろしくお願いします」

シルク「安心しろ……この二人が生きているかは保証はするなよ」

これを聞いたはやては激昂し、シルクに食いかかった。

はやて「何でそんな事を言うんですか！！」

シルク「私のは常人では出来ないものだからだ。小娘……貴様はあの小僧が大切なのだろうか？なら……信じる……奴が生きて戻って来る事を」

はやて「わ、分かりました……」

シルク「いきなり怒鳴るな……馬鹿者が……」
はやて「す、すみません……」

激昂し怒鳴った事に頭を下げて謝罪した。

しばらくして、鮮華が統夜の荷物を持って戻って来た。

シルク「さて……そろそろ行くぞ」

統夜「分かりました」

鮮華「はい」

歩ける所まで回復し立ち上がった。

統夜「レオンさん・・・ユウカさん・・・はやて達の事をよろしく
お願いします」

レオン「任せろ」

ユウカ「任せておきなさい」

レオンとユウカにはやて達統夜ラバーズの事をお願いしていた。

ソラ「辛いかもしいないが・・・戻って来いよ」

鮮華「はい」

アリス「こればかりは頑張れとしか言えないな」

リリス「頑張ってくださいね」

鮮華「頑張ります」

ソラとアリス、リリスの三人から言葉を貰った鮮華は自然と笑んでいた。

シルク「早くしろ！」

統夜「んじゃ！またな！」

はやて「頑張つてや」

文乃「私も頑張るから・・・アンタも頑張りなさいよ」

統夜ラバーズに声を掛けた後、シルクの所へ行った。

シルク「修行の地へ行くぞ」

天川兄妹とユーリを連れて次元転移をして消えた。

レオン「行ったな・・・」

ギルシア「そうだな。同志よ・・・お前が戻って来る事を信じているぞ！！戻った暁には共に幼女について語り合おうじゃないか！！」
ジャンヌ「あの二人は戻って来るよ。多分」

ギルシアとジャンヌは戻って来る事に期待していた。

レオン「私達も修行をするぞ」

ユウカ「そうね・・・貴方達は夏休み寸前だからいいんじゃないかしら？」

遊輔「俺は別に構わないですよ」

はやて「私も・・・天使の力を制御するいい機会ですし・・・」

ユウカの言葉を聞いた遊輔達学生は即答で承認した。

レオン「お前達も参加だ。拒否権は無い」

ギルシア「俺も最初からやるがな」

レーティア「私もやるわ」

ジャンヌ「私も」

ソラ「メンドーごとは嫌いだがな・・・」

アリス「そう言うな・・・ソラ」

リリス「そうですよ。修行をしないと腕は鈍っちゃいますよ」

ギルシア達は承諾し、ソラは渋々と承諾した。

翌日から天川兄妹を除く蒼穹の騎士団の修行が始まった。

次元世界『ハードストロング』へ着いた鮮華は人界の三十倍ある重力に顔を顰めていた。

鮮華「お、重い・・・ですね」

統夜「俺は何とかなってるが・・・」

二人はこの重力下で修行するかと思いきやシルクが何かを用意していた。

ここから彼女の地獄のスパルタ修行が始まるのであった。

シルク「お前達はこれを着けて『二年間』修行をする。内容は私やユーリとの模擬戦、ランクがオーバースは当たり前前の生物達と戦い、覇気の使い方を教えておく」

シルクに渡された数百キロ単位の錘を手にした統夜は何とか持ち上げていた。

統夜「これを着て・・・ですか？」

シルク「そうだ。それから・・・二年間の意味だが・・・『ハードストロング』は他と違い時間の流れが違う。人界の場合なら五日ぐらいしか経っていないから安心しろ」

鮮華「これは・・・厳しい・・・ですね」

統夜「身体能力向上になっていいじゃないか。ソラだって頑張ってるんだ。お前も頑張るんだ」

鮮華「はい！頑張ります」

ソラという単語に鮮華は気合いを入れ始めた。

シルク「相変わらず・・・猛々しさを感じるな」

鮮華「え、分かるんですか？」

シルク「他人事ではない・・・お前も学んだ・・・覇気の使い方を・・・」

統夜「確かに感じますね」

シルク「分かるのか？」

統夜「はい。『見聞色の覇気』で分かりましたから」
シルク「そうか・・・」

シルクの背後から巨大なマンモスみたいな生物が鼻の部分で攻撃を仕掛けたが、シルクは先が分かったかのように下にしゃがんで避けた。

鮮華「う、嘘・・・」

シルク「視界に入らない敵の位置・数、そして敵が次の瞬間に何をするか先読みすることが出来る『見聞色の覇気』・・・次が・・・」
『パオオオオオ!!!』

避けられた事によって怒り狂い前脚で踏み潰そうとした瞬間、右手を開いて、弾き飛ばし、先程の攻撃でマンモスは受けた個所がヒリヒリしたのか悶え始めた。

シルク「体の周囲に見えない鎧のようなものを作り出し、より硬い鎧は防御だけでなく攻撃にも転用出来る『武装色の覇気』・・・これは武器に纏わせて使用する事も出来る」

鮮華「覇気かどうかは分かりませんが・・・先程の戦いで兄がやった事ですか？」

シルク「そう思えばいい・・・これは王の素質を持つ者にしか無い・・・」

痛みで完全に怒り狂ったマンモスが全力で突進しようとした瞬間、シルクが一睨みした瞬間、マンモスの足が恐怖ですくみ、威圧感に襲われ、白目になって倒れてしまった。
これを見た鮮華は啞然としてしまった。

シルク「一睨みや威圧で一定の実力者を気絶させる覇気『霸王色の

覇気』・・・お前の兄や両親も持っている」

鮮華「す、凄いですね・・・お父さんやお母さんと共に戦った人はああいう怪物を軽々と倒せるなんて」

シルク「こんなものは序の口だ。お前も持っているかは分らんが・・・武装色と見聞色はキツチリ教え込んでやるから覚悟しろよ。小僧、お前もだ」

統夜、鮮華「分かりました」

それから二人は錘を着け、準備体操をしていた。

統夜は普通の人みたいに動き、鮮華はぎこちない動きでやっていた。

シルク「どうなるか楽しみだな」

ユーリ「楽しそうですね。マスター」

シルク「そう見えるか？」

ユーリ「はい」

ユーリも統夜達に混じって準備体操を始めた。

それから時間が経ち、錘を着けたままマラソンを始めた。

距離は40キロあり、重力が三十倍である為、地獄とも思えるほどであった。

統夜「動きが慣れるにはいいかもな・・・」

ユーリ「お前は前向きだな」

統夜「や、そうじゃないと努力は実らないものですよ」

走りながら喋っていた二人に対し・・・

鮮華「はあ・・・はあ・・・こ、これは・・・きついですが・・・
頑張らないと・・・」

ペースを調整しながらゆつくりと走っていた。しばらく時間が経ち、統夜とユーリは完走し、鮮華は遅れて走り終えた。

シルク「これは優しいものだ・・・徐々に走る距離を増やす。基礎体力と身体能力を鍛えてこそだ」

天川兄妹はシルクの超スパルタ地獄を日々進化し続ける事に文句を言わずやり始めたとき。

その頃、翌日、魔界では

蒼穹の騎士団はレオンとユウカ、百華が考えた特訓メニューを予め二十倍の重力下の山奥でやらされていた。

因みに遊輔とはやて、雪蓮、メアリといった異種族が主である。

遊輔「1000キロの錘を身体に着けた後でさらに3000キロの鉄球を引き摺って走る・・・いいんじゃないか？」

はやて「それはアンタだけや・・・」

雪蓮「まあいいじゃないの。慣れれば何とかなるわよ」

メアリ「そうよ。というか・・・熱血馬鹿な遊輔だけよ」

遊輔「おい！それはどういう意味だ！！」

勢いよく走りながら反論していた。

これを見ていたレオンとユウカ、百華は苦笑していた。

レオン「あいつは大丈夫のようだな」

ユウカ「パワーだけなら大丈夫でしょう」

百華「熱き魂を感じるがな・・・」

三人も自分達が考えた修行を課していた。

稟「はあー!!」

ギルシア「まだまだあー!!」

稟はギルシアと模擬戦をしていたが、ボロボロで勝負は既に決まっていた。

稟「剛気割り!!」

気力を右拳に集中させ、地面を叩き衝撃波をギルシアに浴びせようとしたが・・・

ギルシア「甘いぞ！リトルボーイ!!」

上に飛んで避けた後、拳に炎を纏わせた拳で稟の腹部を捕え吹き飛ばした。

稟「ぐはっ!!」

ギルシア「次期神魔王候補がこれじゃあ・・・二世界はおろか・・・大切なものを守れやしないぞ」

ギルシアは倒れた稟を起こしながら言った。

稟「す、すみません・・・」

ギルシア「まあ・・・まだ始めたばかりなんだろう？焦らず・・・鍛える。焦っても碌な結果しか生まれず悲劇しか生まない」

稟「は、はい」

ギルシア「少し休憩したら再開するぞ。お前は素質がある」

そう稟に言いながら休憩に入った。

その後、休憩は終わり、稟とギルシアの修行が始まった。

零斗とアリス（チェンバース）、レーティア、ジャンヌの四人はなのはとフェイト、カナ、咲夜に魔力制御を教わっている文乃を見ていた。

レーティア「で・・・本当にやるの？」

零斗「ああ。ハイリスクになるけどな」

ジャンヌ「私は知らないよ・・・どうなっても」

アリス（チェンバース）「真祖と魔人の力を解き放つのはいいけど・・・暴走したら・・・」

零斗「なるだろうな・・・確実に・・・そうしなきゃ・・・本当の制御は出来ない。後は頼んだぞ」

ジャンヌ「ちよ、ちよっと！」

声を掛けようとしたが、零斗は文乃がいる所へ移動しており、いなかった。

零斗「順調か？」

カナ「順調っちゃ順調だけど・・・」

零斗「ここから・・・俺の出番だから・・・お前らは下がった下がった・・・」

なのは達は下がらせた。

なのは「何をするつもり？」

零斗「なについて・・・そりゃあ・・・」

右拳に白いオーラを纏わせ

零斗「封印を解く為さ！！マイティ真拳奥義！セーフティリリース
！！」

文乃「うぐっ!?!」

文乃の鳩尾に掌底を打った瞬間、すると、両膝をつき、倒れてしま
った。

フェイト「何をして……っ……!?!」

零斗に抗議しようとした瞬間、文乃からとてつもない魔力と妖力が
溢れ始めた。

そして、立ち上がると、髪の色がアッシュブロンド、瞳の瞳孔が縦
になり、色が真紅、背中から一対二翼の漆黒の翼、蒼い蝙蝠状の三
対六翼をそれぞれ生やした姿に変化した。

文乃「……………」

両手に蒼炎を纏わせ、鋭い目つきになり威嚇し始めた。
これを見た零斗は冷や汗を流し始めた。

零斗「こいつは……大仕事になりそうだな」

レーティア「それもそうね……」

ジャンヌ「ここからが問題だね」

零斗は拳を構え、レーティアは銃であるハートローズ、ジャンヌは
剣を手にして、暴走している文乃と対峙していた。

一体どうなるのか誰も分からない。

ハードストロングで数ヶ月が経ったある日、重力と錘に慣れた統夜はジャングル地帯で武術や剣術を使いこなし、身体能力が異常になり、魔力と気力を持つ戦士と化したヒヒと戦っていた。

統夜「チツ・・・こっちは構ってられないってのによ・・・」

ジャングルの木をチラッと見ると重傷を負っている背中まで伸ばした白い髪に金色の瞳をした幼さを残した顔立ちの少女が座っていた。

「（再生能力でも・・・時間は掛りそう・・・あのお兄ちゃん・・・何で私を見捨てずにあの動物と戦ってるのかな）」

統夜「助けたのいいが・・・十数匹は勘弁だぜ・・・」

ヒヒ「キキーツ!!」

その内五匹のヒヒが統夜に目掛けて襲い掛かったが、合体剣を回転させ、妖力を刀身に纏わせ

統夜「画竜点睛!!」

妖力の力のある斬撃と化した竜巻をヒヒに目掛けて放ち、五匹を血祭りに上げた。

その後、剣を持ったヒヒ達が襲い掛かり、激しい剣劇を繰り広げ始めた。

統夜「（こいつらは・・・ユルゲンやセイラ、浩次らより遥かに強い・・・）」
ヒヒ「キツ!!」

剣の刀身に超高密度の魔力と気力を放出させた。
これを見た統夜は驚愕し始めた。

統夜「ま、まさか……」

ヒヒ「キキツ!!!」

剣を統夜に目掛けて月牙天衝を放った。
この攻撃を辛うじて防いだが、その内の一匹のヒヒが統夜が使う瞬速の歩法である刹那を使い統夜を斬った。

統夜「俺の……刹那までも……」

「ねえ……何で……逃げないの？」

少女が統夜に問い掛ける。

統夜「俺は……赤の他人でも……怪我を負っているのを見過ぐす訳にはいかないんだよ。何もされてないのに襲われてさ……理不尽に殺されるってのは誰だって嫌だろ？今は俺を信じる」

笑みを浮かべると少女は顔を赤くし、統夜をジッと見ていた。

「（な、なんだろう……この人……私の為に……身体を張って）」

限界だったのか気を失ってしまった。

統夜「さて……どうなるやら」

刀身に超高密度の五気を纏わせ始めた。
ヒヒは警戒し、襲い掛かろうとした瞬間

「マリオファイナル!!」

残りのヒビ達がぶっ飛び

「約束された《エクス》勝利の剣^{カリバー}!!」

上へ吹き飛んだヒビを光の弾丸が音速で貫いた。

残りのヒビが倒されたのか、マリオとソニック、忍、ピンクのメツシユが入った白い髪に水色のボーダーが入った半そでに水色のズボンを履いてピンクの靴を履いた少年、青色の長袖と白の長ズボンを履き、その上に青いマントを羽織っている青年、トゲトゲの甲羅を付けた亀型モンスターが統夜の横から現れた。
マリオ達だったのか五気を解除した。

統夜「マリオにソニック、忍・・・他は・・・?」

マロ「僕はマロと言います。シンバルありがとうございます」

ジーノ「僕はジーノ。マリオの仲間だ」

クツパ「我輩はクツパ。よろしくなのだ」

マロとジーノ、クツパと呼ばれる人物が統夜に自己紹介をした。

統夜「よろしくな。マロにジーノ、クツパ。俺の事は知ってるんだろ?」

マロ「はい」

ソニック「HEY! 統夜! 見ていたが随分スピードが落ちていたな
マリオ「この重力でソニック・・・お前も遅かったじゃないか。随分と怪我をしているな」

統夜「ヒビ相手にな・・・」

忍「ヒビか・・・」

倒れているヒヒを見てそう呟いていた。

クツパ「このヒヒを甘く見てるところがちが痛い目に遭いそうなのだ」

統夜「ああ・・・こいつらは異常な学習能力を持ち、魔力と気力を使い、この環境で異常な身体能力を得ている」

マリオ「ここは恐竜とかいそうだな」

統夜「いるよ。オーバーSは当たり前前の生物がウヨウヨいっから・・・さて・・・この娘を連れていくか」

怪我をしている少女を抱え、マリオ達を連れてシルク達がいる所へ戻った。

シルク「そこにいるのが・・・小僧の知り合いか？」

統夜「は、はい・・・」

マリオ「俺はマリオと言います」

ソニック「俺はソニック」

マロ「僕はマロと言います」

ジーノ「僕はジーノと言います」

クツパ「我輩はクツパ。よろしくなのだ」

忍「俺は紅神忍だ・・・」

マリオ達はシルクに自己紹介したが、ソニックとクツパ、忍にシルクの拳骨がヒットし、受けた三人は頭を抑えた。

ソニック、クツパ、忍「~~~~っ!!!?」

シルク「年上に敬語で話せ。馬鹿者どもが・・・私はシルク・V・獅子堂だ。この小僧を鍛えている者だ。ん？」

統夜が抱えている少女に目を向け質問をした。

シルク「小僧、そいつは何処で見つけた？」

統夜「ジャングルでヒヒに襲われた所を助けました」

「う、ん・・・」

すると、少女が瞼を開け目を覚ました。

ユリ「目覚めたな」

シルク「小娘。お前は誰だ？」

天照「私は・・・天照。七星龍の天龍。よろしくね。お兄ちゃん」

天照と名乗った少女の言葉を聞いたシルクは目を細めた。

マリオ「何か知っていますか？」

シルク「ああ。『七星龍』しちせいりゅう・・・焰、雷、水、氷、光、風、天・・・

七つの属性をそれぞれ司っている龍から呼ばれている。伝説上の生き物と認定されている」

統夜「とんでもない娘を助けてしまった？」

シルク「天龍は七星龍の中で最強の部類に当たる。天以外六つの属性が扱える事と再生能力しか判明されておらず・・・真の力は流石の私でも分からん」

統夜「こんな・・・小さな娘が・・・ですか？」

統夜を見ている天照を見ていた。

シルク「ああ。こいつはまだ成長していない・・・『成龍』してからでないと分からん」

統夜「そうですか。成龍って？」

シルク「成長した龍を意味する。天龍にしか無いものだ。強大過ぎる力故なのかは分からんがな」

統夜「不安定という感じがしますね」

シルク「ああ。その通りだ」

やれやれという感じで答えた。

忍「龍騎士みたいな存在ですね・・・」

シルク「龍騎士・・・懐かしいな・・・数百年前までは存在していた・・・」

統夜「知ってるんですね・・・」

シルク「これぐらい常識の範囲内だ馬鹿者。その他にも魔獣族や冥族も存在していた」

シルクの言葉を聞いたユーリを除くメンバーは「この人どれぐらい生きているのだろう」と心の中で思ったそうな。

シルク「話は以上だ。お前は修行の続きをやれ。その娘と一緒に連れて行け」

統夜「は、はい」

すぐに返事をした。

シルクに逆らえばどうなるか分からないからだ。それからシルクは何処かへ消えた。

天照「ね・・・お兄ちゃん。契約して」

統夜「え、何？契約って・・・」

天照「私達七星龍は契約する事が出来るの」

統夜「ふむふむ・・・契約しなきゃ駄目？」

天照「うん。駄目・・・というかこっちからする。んむっ！」

いきなり統夜の唇にキスをし、光り始めた。
光が収まると統夜は固まってしまった。

統夜「……………」

天照「はい。契約完了。どうしたの？お兄ちゃん」

？を出して固まっている統夜を見ていた。

これを見ていた鮮華とユーリは呆れ、マリオとソニックは仲がいいな〜と和み、クッパはやれやれといった感じで見つめ、忍は我関せずで見ている。

統夜「何をするのかな〜……………てか契約ってキスだけで何か意味があるのか？」

天照「私達が強くなるんだよ。成龍はまだただけど」

統夜「ま、魔力補給が出来るとかじゃないのか？」

天照「そうなるね〜」

どうでもいいという感じで受け答えをしていた。

鮮華「兄さん……………増えましたね……………」

統夜「何も言うな……………」

鮮華「ギルシアさんが見たらどうなるでしょうね」

統夜はギルシアが天照と契約した事を教えた事を想像してみた。

ギルシア「流石我が同志！！こんな少女と契約しキスをするとは……………素晴らしい！！俺と共に少女を愛でようじゃないか！！」

そして統夜はギルシアと一緒に幼女を求めるようになりましたとさ。

統夜「いやああああああ!!!!!!」

天照「ど、どうしたの!? お兄ちゃん?!」

想像した事により統夜が叫び声を上げていた事に天照は驚いてしまった。

天照が驚いた事により統夜は落ち着きを取り戻した。

統夜「す、過ぎた事だから・・・大丈夫だ。これからもよろしくな・・・俺は天川統夜・・・よろしくな」

天照「よろしくね。統夜お兄ちゃん」

元気にそう答えていた。

統夜「で・・・忍は何故マリオ達と?」

マリオ「それはクレイジーと幻想郷と呼ばれる世界にいる河城にとりがこいつを作り上げたからさ」

忍の側にあるツアラータイプの大型バイクと右側用のサイドカーを見て答えた。

忍「俺は転生者と呼ばれる存在と戦い終えた最中にこいつらと出会い・・・幻想郷と呼ばれる世界に連れて行かれ、ネクススやドライバーを解析されるわ・・・黒白の魔法使いや氷の妖精と勝負する羽目になるわ・・・大変だった」

忍が遠い目をしてそう答えた。

統夜「ご苦労様・・・」

忍「そして・・・ネクサスの補助として・・・日常生活でも扱えるようなドライバードバイス・ライドタイプ・・・アステリア・ファングを受け取った」

統夜「うんうん」

マリオ「受け取る代わりに俺達と一緒に修行する事が決まり現在に至るって訳さ」

統夜「そうだったのか・・・お前・・・変わったな」

忍「ああ・・・あつちで結構苦労した・・・」

げんなりとした表情になっていた。

幻想郷で一体何をされたのか大方の想像はつくが・・・

マリオ「俺達も一緒にいいか？」

統夜「いいぜ」

マリオ「よし！手加減はしないぞ？」

統夜「望む所だ」

天川兄妹にマリオ達が加わり、より厳しい修行になり始めた。果たして天川兄妹は何処まで強くなれるのか誰も分からない。

第六十七話 『暑い時に修行すれば余計暑くなる』 (後書き)

次回のHERO'S EPISODEは

シルク「真祖と魔人の力を完全制御する為に修行を始めた小僧と小娘」

シルク「私の修行に弱音を吐かない事は珍しい」

シルク「修行をしてから時が過ぎ・・・魔人の力を目覚めさせる私は天川兄妹に戦いを始めた」

シルク「次回は『魔王の力と天覇を翔ける六龍』 テイクオフだ」

投稿キャラ設定7（前書き）

支配者さんと真王さんが投稿したキャラ設定です。どうぞ

投稿キャラ設定7

名前シルク・V・獅子堂 ヴァーミリオン

容姿：髪が銀髪以外はISの織村千冬にそっくりである

身長：176cm

年齢：不明

魔力光：青

魔力：測定不能

気力：測定不能

妖力：測定不能

霊力：測定不能

覇気：測定不能

趣味：剣の稽古、スパルタ訓練

好きな物 真面目なやつ、仲間、心の強い奴

嫌いな物、慢心、調子に乗ってるガキ

詳細、次元世界の剣聖と呼ばれる伝説の人物

CV / 豊口めぐみ

次元世界の剣聖と呼ばれるとんでもない剣の達人でスターライトブレイカー級の砲撃もダイヤモンドも簡単に斬り裂いてしまう。統夜の父親『魔帝剣聖』と唯一剣で互角に戦った人物でもある。見た目は20歳ぐらいの女性だが実は真祖の吸血鬼で1000才を軽く越える年である。自分以外の年下のものはすべて「ガキ」「小僧」「小娘」と呼んでいる。

自らが作り上げた蒼く輝いている刀身が刃渡り4尺の刀身に柄は蒼で鍔の部分が無く水色の宝玉が埋まっている日本刀型のアームドデバイス『月籠』をいつも腰に挿している。

そして自らが修行の末に作り上げた抜刀流剣術 氷魔神風流を使い

こなす。

姿を見せていても全く気配を感じさせないほど気配の調整がうまい。達人級の剣士でも彼女の気配を読むことは不可能であり、彼女の気配を瞬時に理解した剣士は『魔帝剣聖』と『獣帝』のみである。

統夜に真祖の力の扱い方を教えるためにきた。蒼穹の騎士団全員を完全にひよつ子扱いしている。魔王化したなのはの百倍くらい恐い。超絶級のスパルタ主義者で彼女に鍛えられたものは全員『いつそ殺してくれ』。なんて当たり前のように言っている。崖から突き落とす、雪山に裸で放り込む、碇をつけて海に沈めるなんて事も平気でやる。

氷と風系の魔法を使い、霸王色の覇気を持つ。

なぜ、彼女が日本流の剣術を使うのかは実は昔は人間でありある剣術道場の娘だったからである。ある理由で吸血鬼になってしまったらしいが詳しいことは不明。しかし、吸血目的で人と戦った事も傷つけた事もない。そもそも吸血など必要ない。

真祖だけにその魔力も気も絶大である。見た目はISの織村千冬そのもの。性格はエヴァンジェリンと千冬を合わせたような感じである。

服装は神主が着ているような服をいつも身につけている。

名前：ユーリ・アシユタロス

容姿：腰まで届く青色の髪に黄色い瞳をした美しい顔立ち

服：FAIRY TAILのエルザの鎧

年齢：21歳

スリーサイズ：B90/W55/H86

体重：燃やされた…

性別：女

種族：転生者（龍魔騎士王&滅龍魔導師）

魔力光：黄と赤

好きなもの：戦い、可愛いもの、強い奴、修行、風紀

嫌いなもの：卑怯者、馬鹿者、軟弱者

性格：真面目で仕事を率なくこなす、意外と戦い好き、ちょっと傍若無人、真面目すぎる所あり、FAIRY TAILのエルザっぽい得意武器・いろいろ（特に剣）

スキル・龍変化（全長8M位の龍人に変化する。20トンくらいの物でも平気で持ち上げられるらしい）

完全龍変化（全長20mの完全な龍に変化する）

鎧装（武器や鎧を次々と呼び出し装着する）

魔力食い（魔力のある物なら大抵食べられる）

詳細：生前は女軍人として活躍していた転生者。少々男勝りだが女としての気品も大切にしている。死んだ原因は誤って毒キノコを食べてしまったらしい。

転生後、シルクと出会い彼女の剣の腕に惚れ込んで弟子入りしたらしい。

シルク自己見の相当な剣術の持ち主でそこいらの転生者では全く相手にならない。

シルクの超絶地獄修行に唯一文句の一つも言わずにこなしまくっている。そのため、シルクにとっては唯一自慢できる弟子でもあるのか年下であるにも拘らず名前と呼ばれている。

シルクと共に蒼穹の騎士団にやってくる。

シルクをマスターと呼んで尊敬している。

使える魔法 金色のガッシュとFAIRY TAIL、RAVEの魔法全般

滅龍魔法 覇皇龍 魔力のあるものは大抵食べられる。魔力なしで食えるのは光

因みに普段から数百キロ単位の錘をつけて歩いているらしい。

無論シルクもらしいが・・・

かわかみももか
川神百華

髪：腰までの黒

目：真紅

服：川神学園制服（百代Ver）

年齢：24歳

スリーサイズ：110 / 57 / 84

体重：壊されています

性別：

種族：超武神（転生者）

魔力光：なし

好き：戦い、美少女、いじり

嫌い：弱い奴、根性無し

性格：ほぼ川神百代と同じ

レベル：8500

得意武器：拳

スキル：武神の魂（戦えば戦うほど能力上昇）

詳細：レオン戦友。女性でありながら美少女が大好きな変人だがそれとは裏腹にレオンとほぼ同じ戦闘能力を持っている。

（ホーリアス）

髪：銀

目：青

服：ホライゾンの服

年齢：7000歳ぐらい・・・

スリーサイズ：103 / 56 / 84（F）

体重：600キロ

性別：

種族：アンドロイド

魔力光：なし

好き：ホーリアス「ジャツジ、お答えできません」
嫌い：ホーリアス「ジャツジ、お答えできません」
性格：物静か

レベル：9200？

得意武器：拳

スキル：パワードアーム（どんな重たいものでも軽々ともてる）
バーストシステム（俗に言う覚醒能力。詳細不明）

詳細：百華と一緒に付いて来たアンドロイド。

眠っていたが百華が研究施設に訪れた時に起動し、百華についていく形になった。

なお返答や了解の口癖に「ジャツジ」や「テス」など言う。モデルスタイルはホライゾン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2504s/>

HERO's EPISODE ~ ヒーローズエピソード ~

2011年12月31日01時47分発行